上野国分僧寺・尼寺中間地域

前橋市元総社町小見地区，群馬郡群馬町大字東国分村前・薬師道南・中道南・上野道南(植野道南)・高井道東地区に所在する遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書　8分冊中の第3分冊

—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第24集—

1988

群馬県教育委員会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

上野国分僧寺・尼寺中間地域

前橋市元総社町小見地区，群馬郡群馬町大字東国分村前・薬師道南・中道南・上野道南(植野道南)・高井道東地区に所在する遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書　8分冊中の第3分冊

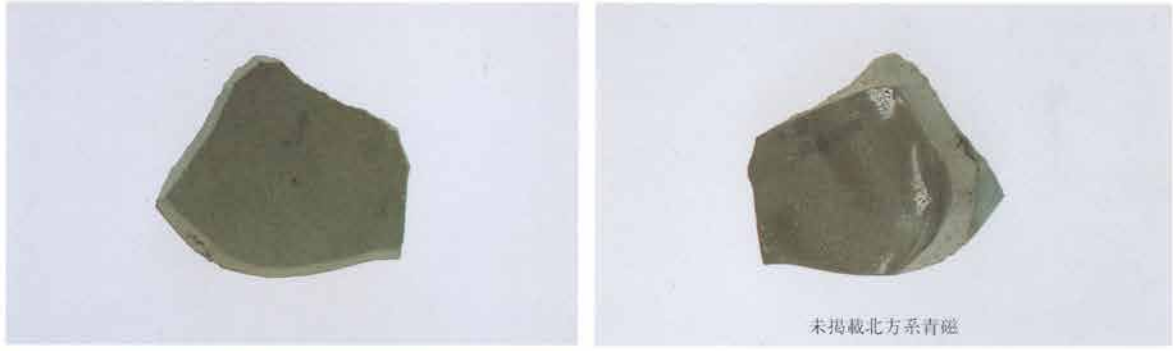
—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第24集—

1988

群馬県教育委員会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

第398図　金銅製男神立像

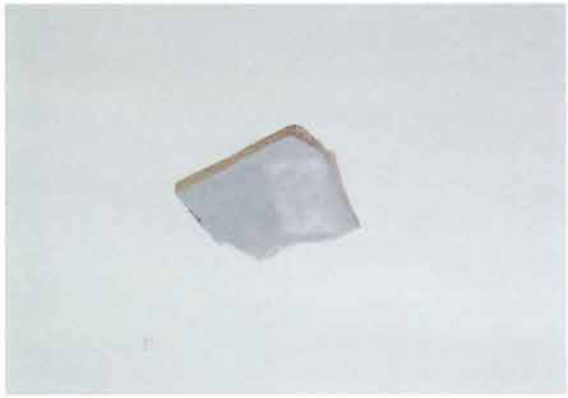
第399図　金銅製品



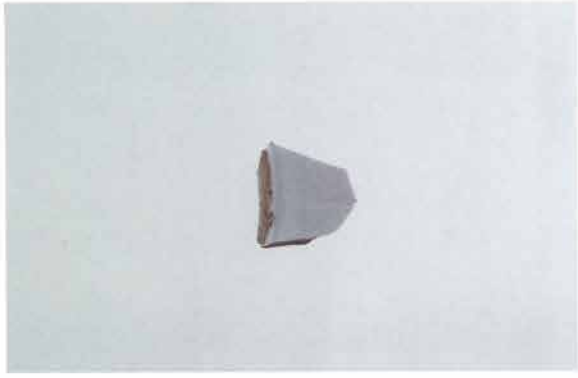
未掲載北方系青磁

第141図　木器椀

1．H区第157号住居跡出土灰釉陶器



2．追 補 白 磁



3．追 補 白 磁

4．H区第72号住居跡出土台石付着物

序

高度経済成長に伴う高速自動車道路網の整備・拡充は、ここ群馬県では関越自動車道新潟線がまず計画され、昭和52年には前橋まで完成・共用されました。これ以後新潟県に向け工事が進められ、昭和60年に全線開通の運びとなりました。

この高速自動車道路の建設により、首都東京との距離は短縮され、新たなる政治・経済・文化の波が到来しました。

一方この路線は、上野国分僧寺と上野国分尼寺の中間を通過することが決定され、路線域の埋蔵文化財の記録保存がはかられました。そして、これと同時に国分僧寺・国分尼寺の中間部分を高架橋として、国分二寺をめぐる環境保全にも努力が尽くされました。

発掘調査の成果としましては、縄文時代から現代に至るおびただしい量の遺構・遺物が検出され、国分二寺の堂宇の屋根に葺かれた瓦も大量に出土しました。そして、群馬県の古代社会の解明に欠くことの出来ない総社古墳群・山王廃寺・国府・国分二寺が近接し、この遺跡の重要性が着目されています。特に、奈良・平安時代は、国分二寺の存続と深く関係していたことが次第に明らかにされつつあります。

調査の実施に当たりまして種々ご配慮・ご指導を賜りました県教育委員会、日本道路公団東京第二建設局をはじめとする関係各位に感謝すると共に、厳しい自然条件の中で直接事業に携わった関係者の労を多とするものであります。

終わりに本報告書が古代東国文化の解明に寄与し、県民皆様の生涯学習の教材として活用されることがありますれば幸いです。

平成元年１月25日

財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長　　清　水　一　郎

例　　言

1．本書は関越自動車道（新潟線）建設工事に伴い、記録保存のため事前調査された前橋市元総社町小字小見・群馬郡群馬町大字東国分小字村前・薬師道南・中道南・上野道南（植野道南）・高井道東地区に所在する〝上野国分僧寺・国分尼寺中間地域〟（小見・村前・薬師道南・中道南・上野道南（植野道南）高井道東地区）の埋蔵文化財発掘調査報告書８冊の内の第３分冊である。

2．委　託　者　日本道路公団東京第２建設局　群馬県教育委員会

3．発掘調査主体　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

4．調 査 期 間　昭和55年４月～昭和59年３月31日

5．調査担当者　佐藤明人・石井克己（現・北群馬郡子持村教育委員会）・徳江秀夫・桜岡正信
木津博明・石北直樹・麻生敏隆・関根慎二（詳細は第１・２分冊を参照されたい。）

6．調査嘱託員　間庭　稔（現・高崎市立西部小学校教諭）・黒沢はるみ（旧姓田辺）

7．事務担当者　小林起久治（故人）・白石保三郎・沢井良之助・梅沢重昭・井上唯雄（現・勢多郡東村立杲小学校々長）・松本浩一・上原啓巳・近藤平志・大沢秋良（現・群馬交響楽団常務理事）・田口紀雄・平野進一・定方隆史・住谷　進・國定　均・笠原秀樹・小林昌嗣・須田朋子（旧姓山本）・吉田有光・柳岡良宏
昭和62・63年度　白石保三郎・松本浩一
田口紀雄・上原啓巳・定方隆史・住谷　進・國定　均・笠原秀樹・小林昌嗣・須田朋子・吉田有光・柳岡良宏
※　昭和61年度以前の事担当者に就いては第１分冊を参照されたい。

8．整理事業は財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
整理事業は昭和59年４月～平成４年３月までの８ケ年にわたり実施する。
本報告書は昭和62年10月～昭和63年10月までの１年間に整理を実施した調査報告書であり、後年にわたり実施・発刊する８冊中の３冊目の調査報告書である。また、本報告書では、C・D・H区（一部）の古墳時代（中期）～奈良・平安時代の検出された遺構・遺物を掲載した。

9．整理事業担当者　木津博明・桜岡正信

10．整理事業作業員　黒沢はるみ・福島恵理子（嘱託員）
阿部和子・安藤三枝子・石井弘子・飯塚妙子・岡田美知枝・小野寺仁子・金子吉江・川原嘉久治・金子ミツ子・小池洋子・小林泰子・斎藤明子（旧姓丸山）・桜井繁美・嶋崎しづ子・柴田敏子・新谷さかえ・杉本万里子・須田育美・鈴木紀子・高橋順子・高橋優子・田村栄子・武永いち・土田三代子・角田桂子・中野秀子・中野和子・生巣由美子・蜂巣綾子・蜂巣滋美・原島弘子・萩原優子・茂木順子（50音順）を中心に以下の方々の協力を得た。吉田恵子・吉田笑子・野島のぶ江・並木綾子・今井もと子・石田智子・今井あや子・松井美智子・大沢美佐保・大島敬子・小野沢春美

11．遺物保存処理　関　邦一（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団技師）
北爪健二（　〃　嘱託員）
小材浩一（　〃　補助員）

12. 写 真 撮 影　遺構　発掘調査担当者
遺物　佐藤元彦（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団技師）・木津博明
一部の遺物についてはシン航空写真株式会社による。

13. 現場コンサルタント　並木英行（三洋測量株式会社）

14. 出土遺物の化学分析・鑑定について以下の方々に依頼した。（敬称略）
獣骨鑑定　大江正直（前　群馬県家畜登録協会常任理事）
石材鑑定　飯島静雄（群馬地質研究会）

15. 発掘調査及び本書を作製するにあたっては、群馬県教育委員会及び同関係機関・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団・前橋市教育委員会・群馬町教育委員会・同町都市計画課及び以下の方々の御指導・御教示を頂いた。記して感謝の意を表したい。（敬称略）
大川　清（國士舘大学文学部教授）・大塚初重（明治大学文学部教授）・新井房夫（群馬大学教育学部学部長）・池上　悟（立正大学文学部講師）・斉藤孝正（名古屋大学）・吉岡康暢・平川　南（国立歴史民俗博物館助教授）・矢部良明（東京国立博物館）・上原真人（国立奈良文化財研究所）・須田　勉（文化庁）・林辺　均（奈良県教育委員会）・前園実知男（奈良県立橿原考古学研究所）・進藤秋輝・白鳥良一（宮城県立多賀城調査研究所）・笠原信男（宮城県東北歴史資料館）・本沢慎輔（宮城県平泉町教育委員会）・大金宣亮（栃木県教育委員会）・橋本澄朗（栃木県博物館）・田熊清彦（財団法人栃木県文化振興事業団）・柿沼賢治（福島県郡山市教育委員会）・梁木　誠（宇都宮市教育委員会）・阿久津　久（茨城県立歴史館）・瀬谷昌良（茨城県協和町教育委員会）・堤　　隆（御代田町教育委員会）・原　明芳（長野県埋蔵文化財センター）・花岡　弘（小諸市教育委員会）・安田　稔（福島県文化センター）・渡辺博人（各務原市教育委員会）・後藤健一（湖西市教育委員会）・井口　崇・光江　章（財団法人君津郡市文化財センター）・高橋一夫（埼玉県教育委員会）・井上尚明（埼玉県立歴史博物館）・有吉重蔵（東京都国分寺市教育委員会）・遠藤政孝・田崎通雄（尾鷲市教育委員会）・種定淳助・岡崎正雄（兵庫県教育委員会）・松尾宣方（鎌倉市教育委員会）・斉木秀雄・原　廣志・　小林康幸（鎌倉市文化財研究所）・井澤洋一（福岡県教育委員会）・増田　修（桐生市教育委員会）・前原　豊（前橋市教育委員会）・大塚昌彦（渋川市教育委員会）・羽鳥政彦（富士見村教育委員会）・大江正直（前　群馬県家畜登録協会常任理事）

16. 発掘調査及び整理事業に関する業務委託は以下のとおりである。
遺構実測、遺構・遺物トレース　株式会社測研
遺物実測・トレース　　シン航空写真株式会社
井戸跡の調査　　株式会社原沢ボーリング（調査所見は同社有賀正明による）

17. 調査に至る経緯については、上野国分僧寺・国分尼寺中間地域報告書第１分冊に詳述されているので、同報告書を参照願いたい。

18. 本書の執筆は以下のとおりで、文責は別記した。
麻生敏隆・石北直樹・黒沢はるみ・桜岡正信・木津博明

19. 発掘調査においては群馬町、吉岡村、榛東村、榛名町、渋川市、赤城村、前橋市、高崎市の多くの方々ならびに、ふるさとを知る会の方々の御協力を頂いた。また、群馬町立中央中学校、南中学校の社会科クラブの生徒諸君の参加を得た。

20. 本遺跡の図面・写真・遺物は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が管理し、現在群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

凡　　例

1．本書中に掲載した地形図は、国土地理院、１：25,000、群馬町・前橋市都市計画図、１：2,500を縮小し使用した。

2．本書中の方位記号の方向は真北を指す。

3．本書中の遺構実測図の縮尺は以下のとおりである。

竪穴住居跡　１：60　　掘立柱建物跡　１：60　　埋設土器遺構　１：60　　土坑　１：60

井戸跡　１：60　　溝　１：80　　遺構分布図　１：250を基準としたが、全てがこの限りではない。

4．遺構挿図中の等高線・断面基準線は海抜で表示し、断面基準線高値はＬ＝で示した。

5．土層断面図中のⅠ～Ⅶ…は、基準層序のⅠ～Ⅶ層…に準じ、覆土の層序は１～ｎとした。

6．本書中にある火山灰は以下のとおり略記した。

浅間山噴出Ｂ軽石層→Ｂ軽石・ＢＴ・Ｂ、　浅間山噴出Ｃ軽石層→Ｃ軽石・ＣＰ・Ｃ

榛名山二ツ岳噴出火山灰層→ＦＡ、ＦＰ

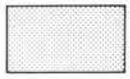
7．遺構挿図中に使用した遺物の記号は以下のとおりである。

● 土師器・須恵器・土師質土器　○ 灰釉陶器・緑釉陶器・白磁　▲ 石器　△ 金属製品

△ 紡錘車　◎ 臼玉　◙ 土錘　■ 瓦　★ 鞴の羽口　□ 炭化物　☼ 骨

8．押図中に使用したスクリントーンは以下のとおりである。

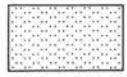
遺構実測図

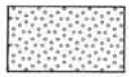

焼土・焼土層

灰・灰層

粘土

礫の断面


Ｂ軽石

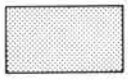

Ｃ軽石

ＦＡ

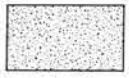
砂礫

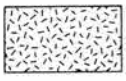
掘り方

遺物実測図


灰釉陶器

緑釉陶器


白磁


黒色処理・炭化物

羽口の鉄分付着

赤色塗彩

摩滅部分

9．遺構実測図中の遺物番号は出土遺物実測図の番号と一致し、挿図番号―遺物番号の順で記載した。

10．遺物実測に当たっては、当事業団拡大整理委員会歴史部会で編集した「仕様書―遺物編」に準拠したが、全てがこの限りではない。

11．本書中の遺物実測図の縮尺は以下のとおりである。

土器・土製品　1：3（大形1：6、瓦1：5）　　石器・石製品　1：3（臼玉1：2）

金属製品　1：3（古銭1：1　鎌倉時代以降の遺構内出土古銭1：2）

上記以外の縮尺のものについては、個別に明記した。

12. 遺物観察表中の「度目」「度・量目」は、度は長さを、量は重量を示す。また、（　）は完形品以外の推定値・復原値を表わし、量目では残存量を計測した。金属製品については、錆等の除去後の数値である。
13. 遺物観察表中の「色調」は、「標準土色帖」農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色表監修、1976年9月発行を使用し記載したが、細部では観察者の個人差がみられる部分もある。
14. 遺物計測位置は、上野国分僧寺・尼寺中間地域(2)　図表編参照。
15. 土器の種別については、原則として轆轤使用・還元焔焼成のものを須恵器、非轆轤使用・酸化焔焼成のものを土師器として扱ったが、中間的なものについては判断をさけたものがある。
16. 土器の器種については、原則として高台を付すものを埦、付さないものを坏、口径に比較して器高の著しく低いものを皿とし、その他、甕、壺等使用したが、文献にあたって使用したものではなく、また、特に概念規定を明らかにした上で使用したわけではなく、あくまでも整理上便宜的に使用した。
17. 本遺跡出土遺物の注記は、「ＫＫ17」を冠し区名・遺構名称を記入した。初めのＫは「関越自動車道」のKanetu のＫで、次のＫは Kousokuclou のＫで、17は群馬県内で南から17番目の遺跡であることを示す。

目　　次

序
例　　言
凡　　例
目　　次
対照目次

第1章　調　査　経　過
第1節　調　査　経　過 …… （木津博明） …… 1
第2章　基　本　層　序
第1節　基　本　層　序 …… （　〃　） …… 2
第3章　周　辺　遺　跡
第1節　周　辺　遺　跡 …… （　〃　） …… 3
第2節　周辺遺跡からみた中間地域 …… （　〃　） …… 37
第4章　検出された遺構・遺物
第1節　南 側 調 査 区
第1項　南側調査区の概況 …… （　〃　） …… 39
第2項　C・D区の遺構・遺物に就いて …… （石北直樹・麻生敏隆・　〃　） …… 41
第2節　北 側 調 査 区
第1項　H区で検出した遺構遺物について …… （桜岡正信） ……206
第5章　ま　　と　　め
第1節　遺　　構
第1項　構築基準辺に就いて …… （木津博明） ……382
第2項　C・D区検出の住居跡とその出土遺物 …… （　〃　） ……387
第2節　遺　　物
第1項　C・D区内の特殊遺物 …… （　〃　） ……404
第2項　いわゆる「模倣坏」の胎土について …… （桜岡正信） ……406
第3項　住居出土の礫について …… （黒沢はるみ） ……409

遺構・遺物観察表
C・D区土坑一覧表 ……419
C・D区出土遺物観察表 ……424
H区出土遺物観察表 ……459

対　照　目　次

名　称	本文編					観察表	写真図版	
	総　頁	遺構表	所　見	遺構挿図（番号）	遺物挿図（番　号）	遺物	遺構	遺物
経過	1		1	1				
基本層序	2		2	2				
周辺遺跡	3～36		3・5 7～36	3～7・9 ～11・14	8・12・13			
周辺遺跡から見た中間地域	37・38		37	15				
南側調査区の概況	39・40		39・40					
C・D区の遺構・遺物に就いて	41～44		41・42	16・18	17			
畑跡（FA埋没サク状遺構）	45～47		47	19				
構状遺構に就いて	48		48	20				
D区第1号住居跡	49・50・190・200・205	49	49・50	21	22・174・184・189	424	12	61・101・107
D区第2号住居跡	50～52・190・203	50	51	23	23・24・174・187 188	424	12	61・101
D区第3号住居跡	53・54・190	53	53	25	26・174	425	13	62・101
D区第4号住居跡	53・54	53	54	25	27	425	13	62
D区第5号住居跡	54・55	54	55	28	28	425	13	62
D区第6号住居跡	55～57・191	55	55	30	29～31・175	426	13・14	62・102・107
D区第7号住居跡	58・59	58	58・59	32	33	426	14・15	62・63
D区第8号住居跡	60・61・205	60	60・61	34	35・189	427	15・16	63
D区第9号住居跡	61～64・203	61	62・63	37	36・38・39・187	427	15～17	63・64
D区第10号住居跡	64～70・191・201 204	64	64～66	40	41～45・175・185 188	427	17・18	64～66・102
D区第11号住居跡	70～73・191	70	70・71	47	46～49・175	429	18・19	66・67・102
D区第12号住居跡	73～76	73	74・75	51	50・52・53	430	18～20	67・68
D区第13号住居跡	77	77	77	54	54	430		68
D区第14号住居跡	77～79	77	78	55	55・56	431	19	68
D区第15号住居跡	79～85・191・192 201	79	80	57・58	57～62・175・176 185	431	19・20	68～70・102
D区第16号住居跡	86～88	86	86	64	63～65	432	20・21	70
D区第17号住居跡	88～90・192	88	88・89	67	66～68・176	433		70・71・102
D区第18号住居跡	91	91	91	69			21	
D区第19号住居跡	91・92	91	92	70	71	433		71
D区第20号住居跡	92・93・192	92	92・93	72	72・176	434	21・22	71・102
D区第21号住居跡	94	94	94	73	73	434	15・16・22	71
D区第22号住居跡	95・96・205	95	95	74	75・189	434	22	71・72
D区第23号住居跡	97～101・192	97	97・98	77	76・78～80・176	434	23	72・73・102・103
D区第24号住居跡	101・102	101	102	81	82	436	23	73
D区第25号住居跡	102・103・192	102	103	83	84・176	436	23・24	73・103
D区第26号住居跡	104・105・193	104	105	85	86・177	437	24	74・103・107
D区第27号住居跡	106～108	106	106・107	87	88・89	438	24	74・75
D区第28号住居跡	109・110・193・199・205	109	110	90	91・177・183・189	438	25	75・103・107
D区第29号住居跡	111～113	111	111・112	93	92～94	439	25	75・76
D区第30号住居跡	113・114・193	113	113・114	95	95・177	439		76・103
D区第31号住居跡	115～117・193・199 200	115	115	97	96～98・177・183 184	440	26	76・77・103・107
D区第36号住居跡	118～120・193・201 205	118	118	99	100・101・177・185 189	440	26	77・78・103
D区第37号住居跡	120・121	120	120・121	103	102・103	441	27・28	78
D区第38号住居跡	122～124・193・194	122	122・123	104	105・106・177・178	441	28	78・79・103
D区第39号住居跡	125	125	125	107			28	
D区第40号住居跡	125～131・194	125	125・126	108	108～113・178	442	29	79～81・103・104
D区第41号住居跡	132	132	132	114	114	443	29	81
D区第42号住居跡	132～134	133	132	115			29	
D区第43号住居跡	132～134	133	132・133	115	115	443	29	81

名称	本文編					観察表	写真図版	
	総頁	遺構表	所見	遺構挿図(番号)	遺物挿図(番号)	遺物	遺構	遺物
D区第44号住居跡	133～135	133	134	116	116	444	30	81
D区第46号住居跡	135～137	135	136	117	117・118	444	30・31	81・82
D区第47号住居跡	137・138	137	137	119	119	445		82
D区第48号住居跡	138		138	120				
C区第1号住居跡	139～142・194	139	139・140	122	121・123・124・178	445	31	82・83・103・104
C区第2号住居跡	142～144・204	142	142・143	125	125・126・188	445	32	83・84
C区第3号住居跡	145～148・195・205	145	145	128	127～130・179・189	446	32	84・85・104
C区第4号住居跡	149	149	149	131	131	447	32	85
C区第5号住居跡	150	150	150・151	132	133	447	32・33	85
C区第6号住居跡	151～154・195	151	152	134	135・136・179	447	33	85・104
C区第7号住居跡	154～157・201	154	154・155	137・138	138～140・185	448	33	86
D区第1号井戸跡	158～178・195～198	158	158	141	142～162・179～182	449		87～98・104～108
	200～202・204・205				184～186・188・189			
D区第3号井戸跡	179～181	179	179	163	164・165	454		97
D区土坑	181～187・198・199		181・182	166～169	169～171・182・183	454		99・100・106
C区土坑	181・182・185・187・188		181・182	169	171・172	456		100・101
D区遺構外	188・189・198～200		188		173・182～184・186	457		101・106・107
	202・203・205				187・189			
北側調査区	206		206	190				
H区で検出した遺構・遺物	206		206	190				
H区第1号住居跡	207～209	207	209	191・192	193	459	34	109
H区第2号住居跡	210・211	210	211	194	195	459	35	109
H区第3号住居跡	211・212	211		196			35	
H区第4号住居跡	212・213	212	213	197	197	459	35・36	109
H区第5号住居跡	213・214	213		198	198	460	36	
H区第6号住居跡	214～218	214	218	199	199～201	460	36	109
H区第7号住居跡	215～218	215	218	199	199～201		36	109
H区第8号住居跡	218・219	218	219	202	203	461	37	110
H区第9号住居跡	220～222	220	221	204・205	206・207	461	37	110
H区第12号住居跡	223	223		208	208	462	37・38	110
H区第35号住居跡	223・224	223		209	209	463	38	110
H区第36号住居跡	224・225	224		210	210	463	38	110
H区第38号住居跡	218・219	218	219	202	203	461	38	110
H区第39号住居跡	225・227	225	227	211	211・212	463	38	110・111
H区第41号址	227	227		213	213	464	39	111
H区第42号址	228	228		214	214	464	39	
H区第43号住居跡	228・229	228		215・216	216	464	39	111
H区第44号住居跡	230・231	230		217	217・218	465	39・40	111
H区第45号住居跡	231	231		219	219	465	40	
H区第46号住居跡	232～234	232		220	220～222	465	40・41	111
H区第47号住居跡	234・235	234		223	224	466	41	111
H区第53号住居跡	235～237	235	237	225・226	226・227	466	41	111・112
H区第54号住居跡	237～239	237	237・239	228	229	467	41	112
H区第57号住居跡	239・240	239		230			41・42	
H区第61号住居跡	240・242	240	242	231・232	232・233	468	42	112・113
H区第62号住居跡	243	243		234	234・235	468	42・43	113
H区第63号住居跡	245	245	245	236	236	469	43	113
H区第64号住居跡	246	246		237	237	469	43	
H区第65号住居跡	246	246		237	237	469	43	113
H区第66号住居跡	247・248	247	248	238	238・239	469	43・44	113
H区第67号住居跡	248・249	248		240	240	470	44	113
H区第68号住居跡	249～251	249	251	241	242・243	471	44	113・114
H区第69号住居跡	251・252	251		244	244	471	45	114
H区第71号住居跡	253・254	253		245	245・246	472	45	114
H区第72号住居跡	254～256	254	254	247	247・248	472	45	114・115
H区第73号住居跡	257	257		249	249	472	46	114
H区第76号住居跡	257・258	257		250			46	

名称	本文編					観察表	写真図版	
	総頁	遺構表	所見	遺構挿図(番号)	遺物挿図(番号)	遺物	遺構	遺物
H区第77号住居跡	257・258	257		250			46	
H区第83号住居跡	258	258	258	251			46	
H区第87号址	259	259		252			46	
H区第89号住居跡	259	259	259	253			46	
H区第92号住居跡	259	259		254	254	473	47	114
H区第97号住居跡	260・261	260	261	255	255・256	473	47	115・141
H区第98号住居跡	261・262	261	262	257	258	473	48	115
H区第99号住居跡	262・263	262	262	259	259	474	48	
H区第100号住居跡	263～265	263		260	260・261	474	48	115
H区第101号住居跡	265・266	265		262	263	475	49	115
H区第102号住居跡	266・267・269	266	269	264	264	475	49	116
H区第103号住居跡	267～269	267	269	264	265・266	475	49	115・116
H区第104号住居跡	269～271	269	269	267	267・268	476	49	116
H区第105号住居跡	271・272	271	272	269	269	477	50	116
H区第106号住居跡	272・273	272	273	270	270	477	50	116
H区第107号住居跡	273・274	273		271	271	477	50	116
H区第108号住居跡	274・275	274	275	272	272	478	50	116
H区第109号住居跡	275・276	275	275	273	273	478	51	116
H区第112号住居跡	276・277	276		274	275	478	51	116・117
H区第116号住居跡	277～279	277	277	276	277・278	478	51	117
H区第117号住居跡	279・280	279	279	279	280	479	51	117
H区第118号住居跡	280～282	280	282	281	281・282	480	51	117・118
H区第119号住居跡	283	282		283	283	481	52	
H区第120号住居跡	283・284	283		284	284	481	52	118
H区第121号住居跡	285	285		285	285	481	52	118
H区第122号址	286	286	286	286			52	
H区第123号住居跡	286～291	286	286・291	287	287～290	482	52	119・120
H区第124号住居跡	291～293	291	291	291	291・292	485	52	121
H区第125号住居跡	293・294	293		293	293・294	485	53	121
H区第126号住居跡	294・295	294	294	295	295	485	53	
H区第127号住居跡	295・296	295	295	296	296	486	53	120・121
H区第128号住居跡	297～299	297	299	297・298	298・299	486	53	121
H区第129号住居跡	299	299		300	300	487	54	
H区第130号住居跡	300	300	300	301	301	487	54	121
H区第131号住居跡	301	301	301	302	302	487	54	
H区第132号住居跡	301～303	301		303	303・304	488	54	121・122
H区第133号住居跡	304	304		305	305	489	53	122
H区第134号住居跡	304	304		305	305	489	53	
H区第135号住居跡	305～307	305	307	306	306・307	489	54	122
H区第136号住居跡	307	307		308			54	
H区第137号住居跡	307～311	307	311	309	309～312	490	55	122～124
H区第138号住居跡	311～313	311	311	313	313・314	492	55	122～124
H区第140号住居跡	313～316	313	313・316	315	316・317	493	55	124
H区第141号住居跡	316・317	316	317	318	318	494	55	125
H区第142号住居跡	317・318	317		319	319	494	55	125
H区第143号住居跡	319	319		320	320	495	55	125
H区第144号住居跡	320	320		321	321	495	55	125
H区第145号住居跡	321	321		322	322	495	56	125
H区第146号住居跡	322～324	322	324	323	323・324	496	56	125・126
H区第147号住居跡	324～326	324		325	326・327	497	56	126
H区第148号址	271・272	271	272	269				
H区第149号住居跡	291・292	291	291	291				120・121
H区第154号住居跡	326	326		328	328	497	56	
H区第156号住居跡	327	327		329	329	498	57	127
H区第157号住居跡	328	328	328	330	330	498	57	127
H区第158号住居跡	328～331	328	333	331	331・332	498	57	127
H区第159号住居跡	331	331		333	333	499	57	127

名称	本文編					観察表	写真図版	
	総頁	遺構表	所見	遺構挿図(番号)	遺物挿図(番号)	遺物	遺構	遺物
H区第160号住居跡	286・287・290・291	286	286・291	287	290	484		121
H区第4号掘立柱建物跡	332・333		332・333	334	334	500	58	
H区第48号土坑	333			335				
H区第56号土坑	333			335	335	500	58	
H区第57号土坑	333			335	335	500	58	
H区第58号土坑	334			336			58	
H区第59号土坑	334			336			58	
H区第67号土坑	334			336	336			
H区第68号土坑	334			336				
H区第70～77号土坑							58	
H区第86号土坑	334			336			58	
H区第87号土坑	334			336			58	
H区第91号土坑	335			337				
H区第95号土坑	335			337			58	
H区第97号土坑	335		335	337			58	
H区第112号土坑							58	
H区第113号土坑	338		338	338			59	
H区第117号土坑	335		335	337			59	
H区第119号土坑							59	
H区第132号土坑	336			338	338	500		127
H区第133号土坑	337			339	339	500		
H区第135号土坑	337			339	339	500		
H区第139号土坑							59	
H区第140号土坑	337			339	339	500		127
H区第143号土坑	338			340	340	500		
H区第144号土坑	338			340				
H区第145号土坑	338			340				
H区第146号土坑	338		338	340	340	500		
H区第147号土坑	338			340				
H区第152号土坑	339			341				
H区第153号土坑	339			341	341	501		127
H区第154号土坑	339			341				
H区第155号土坑	339			341				
H区第158号土坑	339			341				
H区第159号土坑	339			341	341	501		127
H区第164号土坑	340			342	342	501	59	
H区第166号土坑	340			342			59	
H区第167号土坑	340			342	342	501		
H区第4号井戸跡	341～344	341	344	343	343～346	501	59	127・128
H区第5号井戸跡	345～364	345	345	347	348～366	503	59	128～133
H区第2号溝状遺構	364～366		364	367	368	512	60	
H区第3号溝状遺構	364・367		364	369	369	513	60	
H区第13号溝状遺構	364～366		364	367	368	513	60	133・134
H区第14号溝状遺構	364・365・367		364・367	367			60	
H区第17号溝状遺構	367		367	369				
H区第23号溝状遺構	367		367	369				
H区遺構外	368～371		371		370～373	513		134・135
追補	372～380		382～374	374～378	375～382	516		135・141
H区文字及び刻印集成	381				383			

第5章 まとめ

項目	総項	挿図(番号)	挿図(番号)
構築基準辺について	382～387	384～387	
C・D区検出の住居跡とその出土遺物	387～406	388～397	3～5
C・D区の特殊遺物	406・407	398～400	6
いわゆる「模倣坏」の胎土について	408～410	401～403	
住居内出土の礫について	411～415		別表1～5

第1章　経　　過

当該報告区の調査経緯の概要に就いて

上野国分僧寺・尼寺中間地域の発掘調査は、1979年（昭和54年）12月に群馬県教育委員会により試掘調査実施が着手され、翌年3月迄実施された。この試掘調査はトレンチ調査で、染谷川河川敷から牛池川河川敷に至る間が対象となり、調査対象は一応全体に及んだ。この試掘時に設定したトレンチは第1分冊（1987年刊行）中の第2図に示したとおりであり、詳細も同書中で記述したので参照して戴きたい。

今次の報告対象とした調査区は、C・D・H区である。この調査区の内、D区以外は呼称する調査の一部であり、H区は第2分冊中に記載したH区の残部に相当する。また、このH区の北端に当たるI区との界は、現有の舗装道路であって調査は不可能な部分であった。この舗装道路部分自体、一部工事に伴い幅80cm程で長さ10m程の掘削が実施された。この掘削に着手される前段階に、工事施工業者と調整し、遺構の存在が明らかであった為、必要に応じ工事を止め調査実施することを約した。そして、調査は立ち会い調査として実施した。その結果、古墳時代後期～平安時代に至る間の遺物が検出されたが、遺構は平面検出に無理があった為図化実施は行わなかった。

このH区の部分はボックスが設置された為、遺構は掘削され完全に破壊されている。

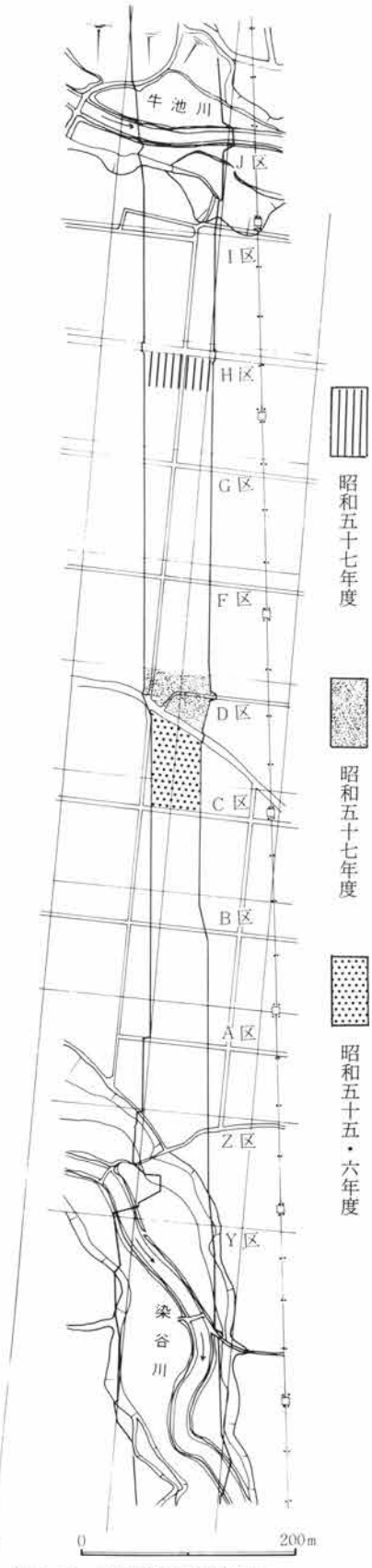
D区は橋脚が設置された部分で、第1分冊に経緯等は詳述されている。

調査は、北側の部分が後年に実施されたが、橋脚設置の部分C・D区は一連の調査の中で調査実施した。

C区は、全体面積の約4分の1程度の北側部分が報告対象となっている。この部分は14世紀後半に造営された仮称〝小見廃寺〟の北限、C1号溝（堀）より以北の部分である。また、この溝の位置する部分は、僧寺・尼寺の各々の東門・西門の延長線上に相当しており、C・D区の報告対象区は、この延長線上より以北で、僧寺・尼寺の北限延長線部分より若干北側に当たっている。

上述の報告対象区は、第1図中に図示したが、各々の調査年度は、図中に示したとおりである。

また、試掘調査の結果・全体を通じての経過・保存問題とこれに係わる橋脚設置に至る経緯・橋脚設置部位とその選定に係わる経過等に就いての詳細は第1分冊中に記述したので、第1分冊中の〝経過〟を参照していたたければ幸いに思う。（木津）



第1図　調査経過概念図

第2章　基　本　層　序

当遺跡は榛名山東南麓・浅間山東方に位置し、両山の火山活動の痕跡は土層中において顕著に認められた。基本層序は上述の火山活動時に噴出された「火山灰・軽石」を含有するもので、その種類の含有等により分層できる。

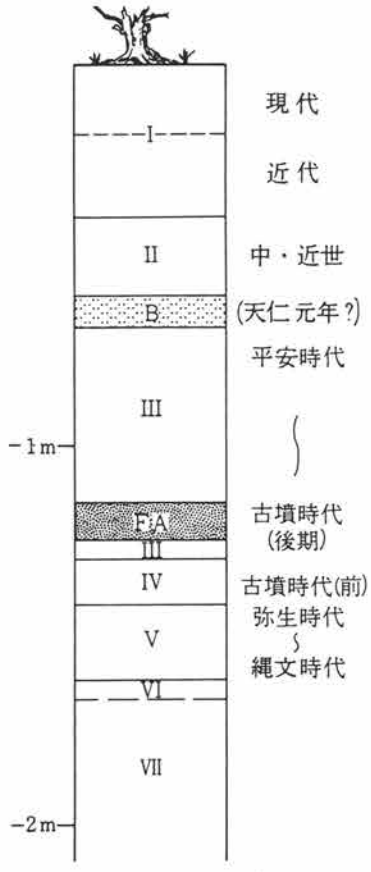
基本層序は第3図に示したとおりであるが、各調査区の地点により層厚等差異が認められるが、おおよそ図示した状況であり、図はD区での状況を模式図化したものである。

上層は7層に分層できる。地山はローム土層であり、同層下位は火山系のシルト層でその粒子・色調によって分層できるが、ここではローム土層を地山と呼称し、ローム土層下位の土層については井戸跡の断面図を参照されたい。ローム土層は堆積時の状況により2分される。これは黄褐色を呈する部分と濁橙褐色を呈する部分である。前者は比較的乾燥状態での堆積で、後者は水性ないし水の流路部であった可能性が指摘されている。[註1] さらに前者は砂質味を帯びる部分等も認められ、後者は粘性に富んでいる。これらの状況は、両者が調査区内を横断する様に認められる点で、地形の傾斜方向に沿うと考えられる。また、この両者のあり方は上位の層にも影響を及ぼしており、前者の上位層のIV・Vは粗粒質土であるのに対し、後者の上位層のIV・V層は比較的微粒質で粘性に富んでいる。

このローム土層の堆積した段階では地山の起伏が著しく、上位層はこの起伏を埋める様な状態で堆積しており、おおよそ平坦になったのは奈良時代に至っての頃と考えられる。また、調査区の部分によってはV層土の層厚の変化が著しいが、倒木痕の調査によりV層土は調査区全体に均一的に堆積していたことが判明した。

基　本　層　序

I層－表土層	濁暗褐色を呈する。昭和35年に実施された耕地基盤整備事業以降の土壌、全体的に発色が濁る。また、上述の昭和35年以前の土壌の存在も認められる。この土層は調査内の地点により存在し発色もやや暗い。両者は砂質味が強く、下位のII層土を主体に耕作された土壌である。
II層－黒色土層	浅間山供給のB軽石を多量に混入する。砂質味もB軽石により非常に強い。発色はIV層土に次いで暗い。本土層はB軽石降下以降（天仁元年とすれば1108年以降）から近世ないし近代に至る間の土壌と考えられるが、おおよそ12世紀から17世紀頃の年代が考えられる。これは文化層として出土した遺物の年代観からであり、中世遺構の覆土の主体をなす土壌である。
B　－浅間山給源B軽石	基本層序の中では土壌としての層とは把握しなかった。B軽石は前述した粘性を帯びるVII層土上位に遺存する傾向が認められた。降下時期は天仁元年（1108年）・天永3年（1112年）・弘安4年（1281年）等が考えられるが、現状では天仁元年（1108年）説が有力視されている。
III層－黒褐色土層	浅間山給源のC軽石を多量に混入する。砂質味はほとんどなく、粘性も際立ったほどでもない。C軽石の降下年代は4世紀頃であるが、本土層とIV層土に主体的に混入する。本土層は古墳時代中期以降B軽石降下直前までの間の土層で、上述した間の遺構の覆土の主体を成す土壌である。また、本土層下位では古墳時代後期に降下した榛名山二ツ岳供給のFAが埋没する畠状の遺構が検出されており、IV層土との間隙は5cm前後である。
IV層－黒色土層	浅間山給源のC軽石を多量に混入する。III層土より粘性があるが顕著なものではない。本土層は層として確認されたものは比較的薄いが、古墳時代前期の住居跡の覆土は本土層を主体として埋没している。この点から古墳時代前期以降の何らかの作用を想起せざるを得ない。FAが存在する部分の畠のサク内だけであり、他の部分に降下したFAは土と共に攪拌され、IV層・V層の色調の差に現われたものと考えられる。
V層－暗褐色土層	本土層は比較的さらさらした感の土層であり、明定できる軽石は認められないが、細粒の白色粒子（鉱物質）・黄褐色粒子を含有している。また、本層中には特に南側調査区で縄文時代の遺物を多量に包有している。さらに北側調査区の弥生時代の住居には、上述のIV層と本層の中庸的な土壌により埋没している。縄文時代の遺構は本土層と褐色味の強い土壌により埋没している。
VI層－濁橙褐色VII層　土層	VI層土はソフトロームに相当する層である。VII層土は前述したローム層であり、D区では粘性の強いローム土であった。



第2図　基本層序

註1　新井房夫先生の御教示による。

第3章　歴史的環境

第1節　周辺遺跡

上野国分僧寺・尼寺中間地域は、その名称から8世紀中頃に造営された上野国分二寺のみに係わる遺跡と思われる観が有るが、第1・2分冊に掲載[註1]した如く、単に国分寺に伴なう段階のみでは無く、それ以前・以後の確実な生活の痕跡が明らかになった。すなわち、〝上野国分僧寺・尼寺中間地域〟の名称は、正確には遺跡名称としての存在ではない。

一方、上野国分僧寺・尼寺中間地域の名称は、昭和44年6月に関越自動車道新潟線（以下関越新潟線と略称）路線発表直後、その路線の一部が、比較的遺存状態の良好な国分二寺が全国的にも希有に並列して立地する中間を走破することが明らかになり、この希有な状態を破脚する如くの開発行為に鑑み考古学的検討が行なわれた[註2]。この段階をもって〝中間地域〟と称される様になった。しかし、一部では、保存運動も起き、国分寺中間地域の試掘所見をもって路線変更等の具申も行なわれたが、結果として僧寺軸長2町で東側部分のみを高架とし、関越新潟線の路線は決定された（この間の継移に就いては、第1分冊第1章調査に至る継移に詳述してある）。

上野国分僧寺・尼寺中間地域の名称は、上述の継移を踏まえ一般的となった。しかし、上述の如く正確な遺跡名称でない点で、末尾に〝遺跡〟を付していない。この点は、発掘調査・整理業務担当としては〝業務名称〟として考えている。

上述してきた如く、国分二寺のみに係わる遺跡でない点は、後述する周辺遺跡の具体的な記述により明らかにしたい。また、周辺地域に於ける遺跡は第1・2分冊で位置・概要に就いては記述したが、周辺遺跡からの当遺跡の意義付けが未分析であったので本章ではこの点に重点を置き記述したい。

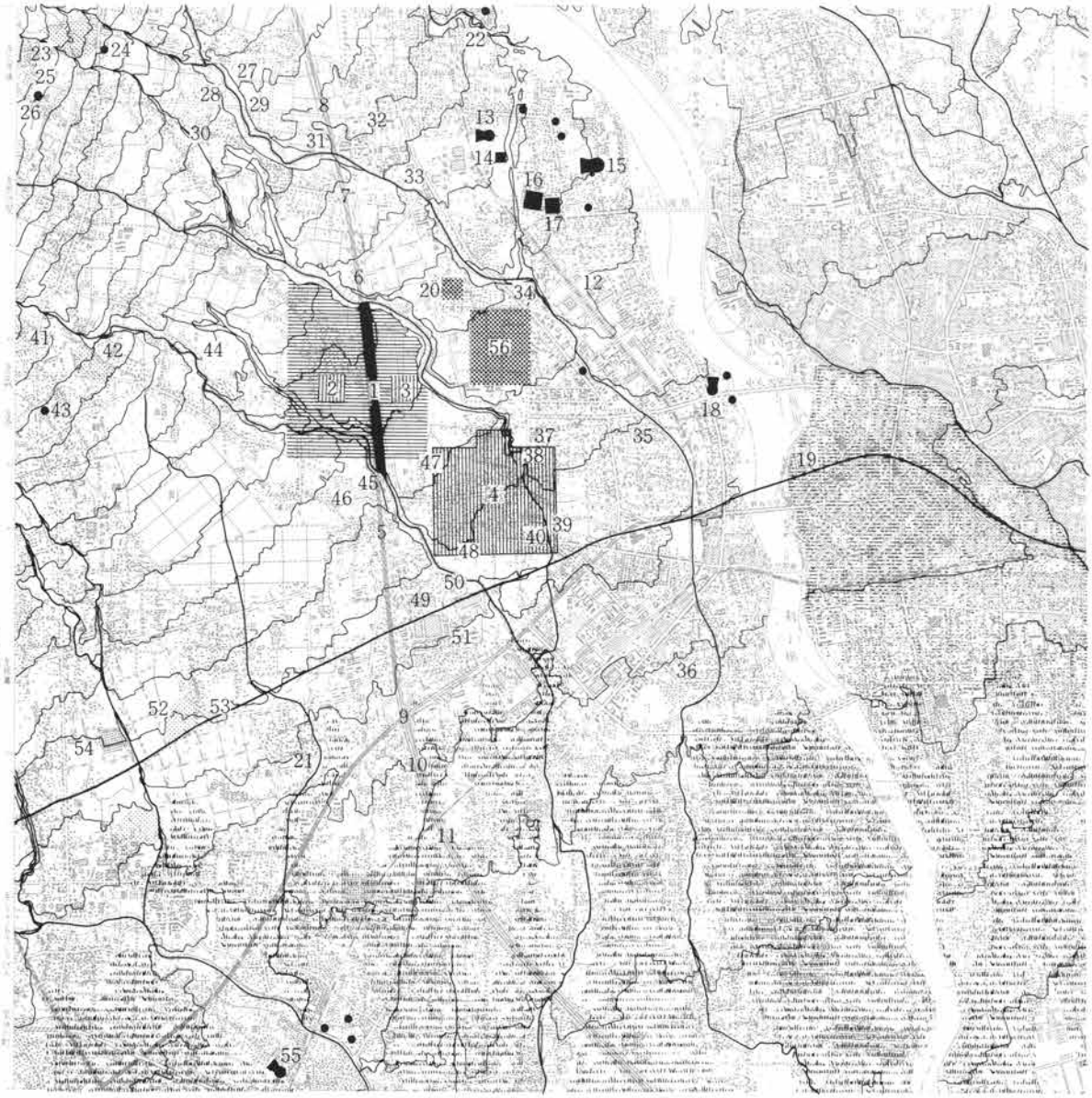
上野国分僧寺・尼寺中間地域（以下中間地域と略称）の名称が示す如く、律令制下の二大モニュメントが近接し、さらに国府も同一台地上で至近の位置に在り、この三者の前代に造営のあった山王廃寺・総社古墳群等、県下での著名な遺跡が隣接しており、必然的に、これらとの係わりは明確であって、この係わりが何如にあったかが、当遺跡の性格付けにとって重要な観点の一つである。

一方、周辺地域を地形の状態で該括すると、遺跡の分布は榛名山東南麓に広く分布するが、各遺跡の立地は現利根川支流にあたる河川及び鏑川の支流に流入する多くの河川流域に分布している。これらの河川は、榛名山東南麓を網状に流走し、遺跡地周辺の河川は、全て井野川の支流である。しかし、この井野川の支流には流走方向に二つの方向性があり、染谷川の如くにほぼ東南方向に流走し途中で方向を変換し南走する流路をとる河川と、唐沢川の如く南南東方向に流走し直接井野川に流入する河川の二者である。前者の一群は、全てが一旦染谷川に合流し、その染谷川のみが井野川に合流する状態である。

ただし、現状の地形は榛名山二ツ岳の爆発などの自然的要因や、近世以降の開発に伴なう人工的要因により、旧地形は著しく変化している部分がある。遺跡の立地は、本来的に各時期での旧地形を復原した状態で述べなければならないが、今次は、このことをある程度加味するものの今後の課題としておきたい[註3]。

上述の如く、周辺地域に位置する遺跡は、立地の点でも大きく二者に分別される。

本書で周辺遺跡として摘出するものは、既報告分で扱った古墳時代前期以前と、鎌倉時代以降に就いては割愛する。本章で扱う周辺遺跡は古墳時代中期（土器型式上和泉期）以降を主眼に置き、国分寺の創建段階



1．上野国分僧寺・尼寺中間地域
2．上野国分僧寺跡
3．上野国分尼寺跡
4．上野国府推定域
5．鳥羽遺跡
6．国分境遺跡
7．北原遺跡
8．下東西遺跡（北原B遺跡）
9．中尾遺跡
10．吹屋遺跡
11．日高遺跡
12．総社古墳群
13．総社二子山古墳
14．愛宕山古墳
15．遠見山古墳
16．宝塔山古墳
17．蛇穴山古墳
18．王山古墳
19．群馬駅家推定地
20．山王廃寺（放光寺）
21．正観寺遺跡群
22．総社桜ケ丘遺跡
23．橋向古墳群
24．諏訪山古墳
25．愛宕遺跡
26．金古愛宕様古墳
27．清里南部遺跡群（薬師前遺跡）
28．清里南部遺跡群（松ノ木遺跡）
29．中島遺跡
31．北原遺跡
32．柿木遺跡
34．昌楽寺廻村東遺跡
35．長尾氏遺跡
37．閑泉樋遺跡
38．閑泉樋南遺跡
40．元総社小学校校庭遺跡
41．鶴巻古墳群
42．北寝保窪古墳群
43．観音寺古墳
44．後疋間遺跡
45．塚田村東遺跡
46．国分寺参道遺跡
47．草作遺跡
48．染谷川遺跡
49．弥勒遺跡
50．弥勒山遺跡
51．早道A・B遺跡
52．管谷古墳群
53．管谷遺跡
54．中泉遺跡
55．天王山古墳
56．上毛野君居館推定域

第3図　周辺遺跡図

迄を周辺遺跡の在り方から当遺跡の在り方上の必然性に就いて記述してみたい。そして、記述にあたっては下記の項目に従い記述する。

1．古墳・古墳群の動態　2．古墳時代中期～後期の集落と生産地

3．飛鳥・白鳳・奈良時代（国分二寺造営以前）　4．奈良・平安時代（国分二寺造営以後）

以上であるが、必要に応じ、これ以前・以後の状況に就いても若干触れたい。

また、個々の遺跡を有機的に関連・意義付けを行なう場合、考古資料のみならず文献資料を加味して記述する。これは、歴史学の中での考古資料と同等に一資料として扱う考えではあるが、元来は文献史学は門外である点からの曲解が含まれると思うが、今後の課題の中で考えたい。

1．古墳時代の動態

古墳・古墳群は、5世紀代の古墳を〝中期古墳〟とすれば、6～7世紀代での〝後期古墳〟の概二者に大別されよう。5世紀代は竪穴式の系譜上にその主体部がある。後者は新たな横穴式石室という主体部を主要に用いており、そして群構成が多く認められるが如く、群馬県下では多出した段階である。

当該地域では、5世紀代を代表する存在に〝保渡田3古墳〟（以下3墳と略称する）の二子山・薬師塚・八幡塚古墳が著名である。この3墳に係わる調査報告書・論文は多いが、昨今ではこの3墳と三ツ寺Ⅰ遺跡で検出された居館跡（以下便宜上三ツ寺居館と略称する）を含め、3墳の存在意義が再び考察されるに至っている。事実として、3墳と居館はほぼ同時存続している。

この三ツ寺居館の報文中では、右島和夫[註4]・前沢和之[註5]両氏による両者（3墳と三ツ寺居館）の論述があり、また大江正行[註6]氏、これ以前では梅沢重昭[註7]氏の3墳に係わる論述が見られる。この4氏の論述を要約すると、梅沢氏は、綿貫古墳群を築造した〝物部氏〟との係わりを想定され、前沢氏は文献等の視点から〝車持氏〟との係わりを想定し、大江氏は3墳の位置する榛名山東南麓の地勢等から、3墳の被葬者が掌握した地域、石棺・遺物等多角的視点から鑑み、〝上毛野君氏〟での築造を論述されている。だが、右島氏は、特定氏族の指摘はなされていない。この4氏に代表される如く、3墳の意義には非常に重要であり群馬県の古代史解明ひいては日本の古代史解明上非常に重要な位置付けがなされる点は明らかである。

この3墳の築造された時期に就いては、右島氏は二子山古墳を5世紀第3四半期に当て、八幡塚古墳を5世紀第4四半期に、薬師塚古墳を八幡塚古墳に後続する5世紀末でＦＡ降下直前の年代観を得、示しておられる。本稿では、この3墳の構築年代は右島氏の説に従う。

この5世紀後半代に位置付けられる周辺の古墳は明らかになっていないが、推定国府の政庁北側に、地脹れ状の高まりがあり、この部分から刀子の石製模造品[註8]が採集されている。

また、総社古墳群の遠見山古墳・大小路山古墳[註9]及び同周辺からは〝横刷毛〟を施こす円筒埴輪片が採集[註10]されており、この頃とも推定される。同様に判然としない古墳に菅谷古墳群中の天王山古墳（前方後円墳）が在る程度であり、未だ実態不明か消滅した古墳等にその存在が考えられるものの、大型古墳としては遠見山古墳がその可能性があるのみである。そして、後述する古墳群中に含まれる形で数基の存在が考えられるのみである。

6世紀以降の古墳・古墳群は非常に多い。これらの中で唐突に前方後円墳を核として出現する総社古墳群の構成は、東国に於いても各国内でも一地域にしか認められない現象として注意されるものである。この総社古墳群の意義付けに就いては甘粕健氏が文献19で、右島和夫氏は文献34の中で詳述されており、両氏共にこの総社古墳群の築造主体者を〝上毛野君氏〟と想定されておられる。

この外、大型前方後円墳として、高塚古墳（榛東村新井所在）があげられる。この高塚古墳周辺には「群馬県古墳総覧」（以下総覧と略称する）によると、139基が登載されており、一大古墳群の形成がある。換言すれば、高塚古墳を中心とする一地域勢力の存在が示唆される。この地域勢力は、小丘陵上にその墓域を形成するものの、周辺の南下古墳群・橋向古墳群等との関連も本貫の地域を考える上では重要と考えられる。さらに当該地域周辺の古墳群は、前述の古墳群を含め、占地に二つの様相が認められる。この二つの様相は河川沿岸で平坦部に築造する一群と、丘陵上（河川沿岸でも丘陵上に位置する一群も含める）に築造する一群の二者である。

群馬町足門・観音寺には、上流域から金井沢古墳群・寺屋敷古墳群・鶴巻古墳群・東久保古墳群・寝保窪古墳群が連接する如くに位置し、この対岸にあたる左岸では、金井古墳群・王塚古墳群・庚申古墳群・如来古墳群が右岸の古墳群に相対する位置に連接する如くに位置している。

牛池川右岸には現在認められる古墳は無い。しかし、牛池川の湧水点周辺には、染谷川の流路があり、この染谷川の流路と牛池川が近接する周辺には王塚古墳群が位置している。この王塚古墳群が両河川を共有する如くの状態であるものの、染谷川左岸に添って分布する前述の古墳群の状態から王塚古墳群は染谷川左岸の立地と考えた。

牛池川左岸では。湧水点周辺に〝金井古墳群〟が位置している。しかし、この古墳群に就いて文献36では「泥流丘の可能性大」としている。しかし、泥流丘を利用した古墳の存在もある点から[註11]、一応未調査段階であることから古墳として扱っておきたい。また、周辺には、愛宕山古墳・諏訪古墳の既調査例の古墳が位置し、北方へ500m程には、橋向古墳群の存在もある。これらの周辺状況を勘案すれば〝金井古墳群〟も古墳の可能性もあると考えられる。

八幡川流域では前述の橋向古墳群が右岸に位置している。またこの対岸の丘陵上には高塚古墳が位置しており、高塚古墳群を形成している。この高塚古墳群周辺には、柿木坂古墳群・立畦古墳群・北原古墳群・長久保古墳群・清里長久保遺跡内の古墳群[註12]が位置する。

前述の保渡田３古墳の周辺では、井野川・唐沢川に挟まれた台地上（３墳を擁する台地）では、３墳を上下で挟む如くに、上流側に屋舗古墳群が位置し、下流域では、群馬町大字井出字下布留・中原・村内地内に古墳の分布が認められる。ただ、この地区・周辺地区には、室町時代の城跡・居舘跡も多く、これらの築城に伴なって破壊された古墳も多いと考えられ、現状で残存する古墳以外にも多くの古墳が存在した可能性が大きい。

この両者の古墳群は、３墳と同様に占地をとる点では、３墳との有縁関係も示唆されるものの、実態が明らかでない現状では明確な論述も成し得ず、推定の域は脱し得ない。

天王川周辺には、諸口古墳群・菅谷古墳群が位置している。この両者の古墳群周辺は、前述してきた古墳群とは占地に大きな違いが認められる。これは、前述した様に、標高160m以上に立地する古墳群は、丘陵上から平坦部に変換する部分がその占地位置であるが、この両古墳群は標高110m程の平坦地に位置し、高崎市正観寺遺跡群が南側に控えている。

これらの古墳群は、榛名山東南麓で標高160m以上で、ほぼ帯状に分布しており、各河川の湧水点に近い部分を占めている。

また、これらの古墳群は、「総覧」登載の上郊村30基・金古町111基・桃井村140基・明治村330基等の一大集中地域として把握され、保渡田３古墳築造以後の６・７世紀の約150～200年間に構築された古墳であって、この地域の優位性を物語っている。

上述してきた古墳・古墳群は、当遺跡の西側で榛名山寄りの古墳・古墳群である。しかし、当遺跡東側では著名な総社古墳群が位置している。

この総社古墳群は、6～7世紀代に唐突に出現構築された古墳群であって、県下に於いては当該期の古墳の在り方から、最有力氏族による築造と考えられ、〝上毛野君氏〟との係わりが論ぜられている[註13]。しかし、古墳群は現在、王山・遠見山・二子山古墳の三基の前方後円墳と、愛宕山・宝塔山・蛇穴山古墳の三基の方墳と数基の円墳が残存している。そして、小河原古墳の如き前方後円墳も現在では消滅している。また、当該地域は、室町時代から戦国期をへて安土・桃山時代にかけて、多数の城館が築造されており、これに伴ない消滅した古墳も多いと考えられる。事実、総社城の築城に伴ない、遠見山古墳・稲荷山古墳の両墳は後円部と前方部北半分が削平されたと考えられる。

この総社古墳群の東方至近の位置に現利根川がほぼ南北に流走している。この利根川の流路は、16世紀以降に現広瀬川流路が変流したものであって、当時は、小河川としての流路があったことが知られている。この点から、現利根川に変流する折に、台地を著しく崩壊させたことは確実で、これに伴ない流出した古墳も考慮されるものである。現在は、八幡川と午王頭川に挟まれた台地上に点在し、占地状況は前代の保渡田3墳と同様であるが、標高160m以上に群在する古墳群が河川沿岸に占地する点とは異なっている。これは、土地利用上大きな差異があり、大型古墳を主体とする古墳群は、土地自体も平坦地を広大に占める点で当該地域を統率する権力の大きさを如実に物語っている。

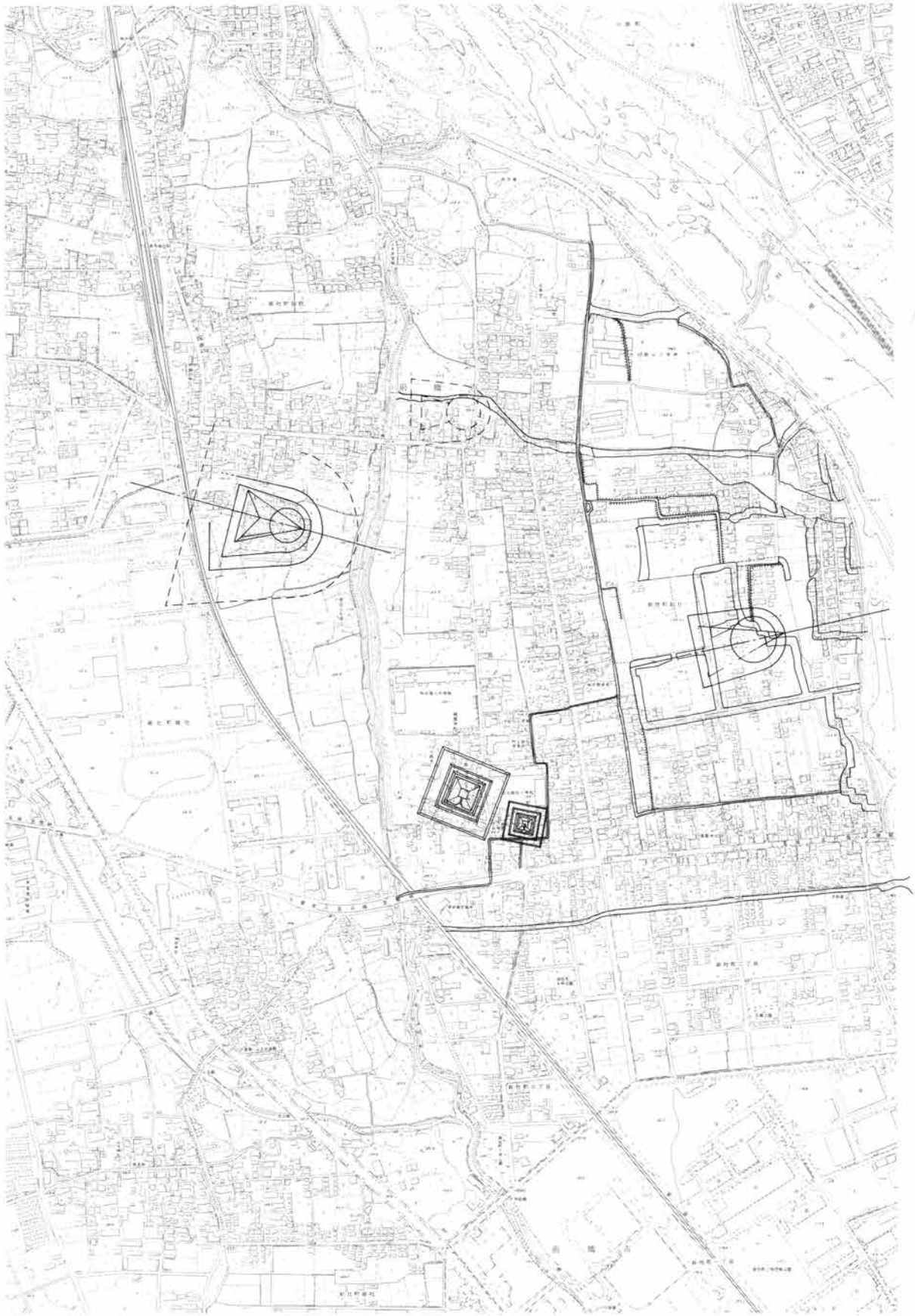
総社古墳群を構成する各古墳の規模・詳細な墳丘形状は、現在不明瞭と言わざるを得ない。一部の宝塔山・蛇穴山古墳の石室・前庭部の部分精査が成されているのみである。

筆者は、本書の編集にあたり、当該の古墳群の踏査を試み墳丘規模・石室形態等を検証した[註14]。その結果、第1表に示した墳丘規模を備えることを確認した。また、従前より周知の事実として認識されていたことも非常に疑問として感ぜられた。そして、数度に亘り、踏査・資料検証を行なった結果、新たな事実を確信した。この新事実として、①遠見山古墳の墳丘規模の確認。　②二子山古墳の墳丘規模の確認。　③蛇穴山古墳石室の形態。　④宝塔山・蛇穴山古墳の墳丘規模の確認等を認めることが出来た。

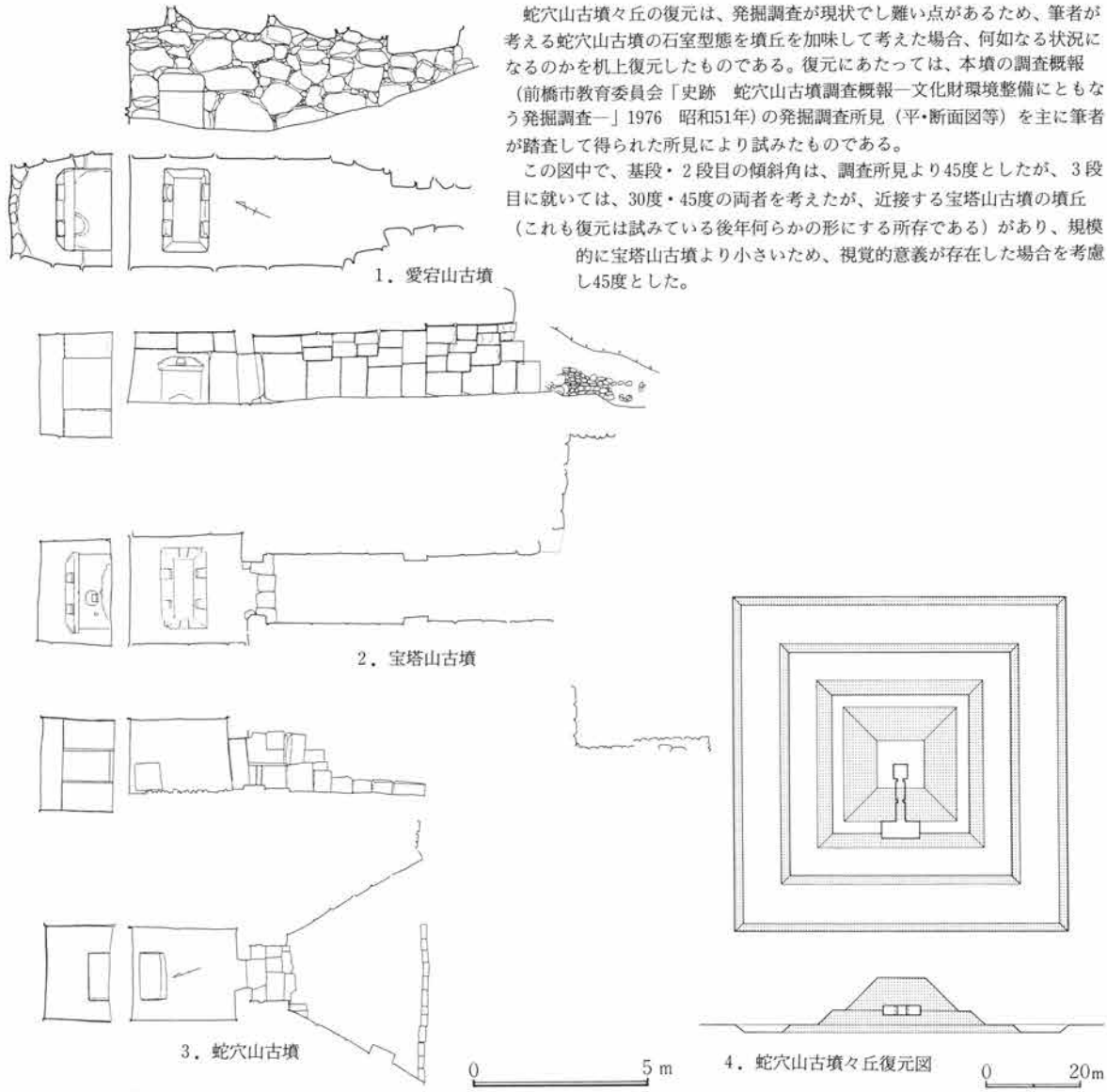
第1表　総社古墳群の確認事項一覧表

古墳名称	墳丘形態	主体部	外部施設	摘　要
遠見山古墳 総社町第6号	前方後円墳 全長135m	不祥。横穴式石室か。	周溝は二重か(総長260mに達するか)	現存する部分は、前方部3分の2及び南側くびれ部周辺。後円部は、総社城築城乃至それ以前に破壊されている。後円部は現在宅地。主体部は横穴式石室と考えられるが、竪穴系の可能性もある。中島状の施設を備える可能性有り。
二子山古墳 総社町第10号	前方後円墳 全長120m	横穴式石室2基	周溝は二重 総長200～240m	後円部先端が破壊されている(近世以前)。前方部石室構築時に、前方部が改修された可能性が大きく、前方部が不均整な状態である。
宝塔山古墳 総社町第9号	方墳　一辺80m	横穴式石室(複室)	周溝は一重以上幅20m	墳丘規模は、基段裾部での数値。現在の墳丘は大半が二段目より上位の部分。
蛇穴山古墳 総社町第8号	方墳　一辺50m	横穴式石室(複室)	周溝は一重以上幅12m	〝前庭部〟と称する部分は、近世弁財天信仰に伴ない改築された前室部。元来の石室は複室構造と推定される。

これらの各古墳自体、基本的問題が多く山積していることが明らかとなり、従前より周知されていること自体疑問があると思われる。そして、総社古墳群の歴史的意義を考えた場合、先ず、各古墳を確実に把握することが第一歩と考える。このことは、当中間地域と直接係わる国分二寺が、国府を含めその成立背景に〝上毛野君氏〟が係わったことが考えられ、且、この上毛野君氏の墳墓として総社古墳群が疑せられる点から、



第4図　総社古墳群主要古墳分布図（前橋市現形図1／10,000）



蛇穴山古墳々丘の復元は、発掘調査が現状でし難い点があるため、筆者が考える蛇穴山古墳の石室型態を墳丘を加味して考えた場合、何如なる状況になるのかを机上復元したものである。復元にあたっては、本墳の調査概報（前橋市教育委員会「史跡　蛇穴山古墳調査概報―文化財環境整備にともなう発掘調査―」1976　昭和51年）の発掘調査所見（平・断面図等）を主に筆者が踏査して得られた所見により試みたものである。

この図中で、基段・2段目の傾斜角は、調査所見より45度としたが、3段目に就いては、30度・45度の両者を考えたが、近接する宝塔山古墳の墳丘（これも復元は試みている後年何らかの形にする所存である）があり、規模的に宝塔山古墳より小さいため、視覚的意義が存在した場合を考慮し45度とした。

第5図　総社愛宕山・宝塔山・蛇穴山古墳石室実測図

その古墳群の実態を明らかにすることが、当遺跡・周辺遺跡を理解する上で非常に重要な点と考え、現状で出来るだけ正確に各古墳を把握したいと考える。本書では、筆者が確認した上述の①～④に就いてのみ記述し、総社古墳群を構成するとされている王山古墳等との係わり等に就いては別の折に論述したいと考えている。以下、上述の新事実に就いて記述し、総社古墳群の意義付けを行ないたい。

遠見山古墳は、総社城の物見台に転用されたことにその名称を由来する。この総社城は、慶長年間に秋元長朝による築城であるが、天狗岩用水の開削でも知られる人物である。この遠見山古墳は、現在墳丘は前方後円墳の名残り的形状を呈しているものの、従前より前方後円墳として周知されている。現存する墳丘は、前方部を3分の2程残存し、後円部は南側くびれ部周辺のみが残存するものである。すなわち、後円部の大半は、恐らく総社城築城の折乃至それ以前に破壊されていたものと考えられる。

墳丘は、主軸の中間部位上にくびれを有しており、前方部は主軸規離の2分の1程である。前方部幅は、後円部径を凌いでおり後期の特徴を備えている。また、南側くびれ部周辺には〝中島〟状の施設を備える可能性が有る。周溝は一重が確認出来たが、二重の可能性は非常に大であり、後述する二子山古墳でも認めら

れた。出土遺物は伝世品等のものが皆無であるが、広域に埴輪片の散布が認められる。埴輪片は円筒埴輪が大半と思われるが、形象埴輪の存在も考慮される。円筒埴輪片はかつて、橋本博文・相川英之氏・加部二生により５世紀末～６世紀前半代の年代観が与えられており、当該古墳の年代観の一指標となっているが、右島和夫氏は、総社古墳群の成立過程の中で、王山古墳―小河原古墳―二子山古墳―愛宕山古墳―宝塔山古墳→蛇穴山古墳の構築順位を想定され、その中で二子山古墳後円部石室を６世紀第３四半世紀に位置付け、愛宕山古墳を７世紀中頃に位置付けられた。そして、この両者の中間に遠見山古墳を想定し、総社古墳群最後の前方後円墳として７世紀初頭頃から前半として位置付けられている。

しかし、第１表中にも示したとおり、墳丘長135m程が想定される大型前方後円墳である点と、墳丘形状が県内の後期前方後円墳の特徴をよく著しており[註15]、５世紀後半代（第３四半期）の井出二子山古墳の前方部長と後円部長の比率に近い点、５世紀末～６世紀前半代に推定される埴輪の存在、中島状施設の想定等を勘案すれば右島氏の推定とは異なり、ＦＡ降下直後の６世紀を前後する頃の構築と推定される。この段階での構築とした場合王山古墳との係わりが注意されるが、墳丘規模を考慮し、二子山・愛宕山古墳等の近接する状況から王山古墳に先考する存在で、場合によれば竪穴系の主体部を蔵したかもしれない。

二子山古墳は、現在比較的良好な墳丘がみられるものの、後円部側が宅地化されている。この宅地は、旧耕地の地割を踏襲し建てられたもので、昭和23年頃に撮影された航空写真により確認出来、現状の墳丘は恐らく近世以前になるものと考えられる。また、南側の地割も旧耕地の地割をそのまま利用している。

墳丘長は第１表を参照していただきたいが、30m程が削平されている。また、当該の古墳の特徴として南側から前方部前面にかけて、基段状の平坦面を備えている。これは、前方部の石室構築時の排土乃至残土を利用したものか、地形状から生ずるものか明らかにし難いが、前方部石室の造作に伴なう墳丘の形状変更が考慮される。事実前方部幅の中心と後円部の中心を結ぶ中軸線と前方部頂部からの稜線と前方部前面により生ずる三角形の頂点は、中軸線とは一致しない。この不一致は、前方部石室構築時に修築されたことに起因すると考えられるが、周溝も同様である。しかし、周溝は墳丘に伴なう正面観が大きな要因と考えられ、南側は非常に幅が広いのに対して、北側は狭く、外濠は北側くびれの部分付近から前方部にかけては未構築であったことが考えられる。この南側は視覚的効果を考慮していると考えられる。

この両古墳のうち、前述した遠見山古墳の墳丘長135mは、ほぼ同時期の築造と考えられる七輿山古墳144mに次ぐ規模を有するが、両古墳の築造方法には相違が認められ、遠見山古墳は、平坦地に墳丘を構築し、推定される総長が200～260mであるが、七輿山古墳は、丘陵の緩斜面を削出し、盛土量を軽減している。総長は250m程と思われる。この両者の違いで、前者は旧地表面からの盛土であって、後者は丘陵の削り出しによる盛土量は３分の２（地形を復原しての試算）程であると思われる。また、土地利用上も大きな差があり、前者は耕作可能地であり、後者は耕作地可能地の利用を最小限に留める様に築造している。ここに遠見山古墳の優位性が示唆される。

蛇穴山古墳は、従前より玄室前面に「ハ」字状に開く前庭部を備える横穴式石室と考えられている。しかし、前庭部と称する壁の石材の加工痕を詳細に調査した結果、同部の加工痕は、平鑿状の幅３～４cm程の整形痕であり、玄室内の整形は敲打整形後磨き整形を施す状態であることが判明した。この両者の仕上がり状態での質差には著しいものがある。この整形痕のうち前者は、近世の石造物に多く認められるものである。後者の整形痕は、宝塔山古墳石室・放光寺（山王廃寺）の根巻石・心礎等に認められる整形痕と同一技法のものであり、従前に於いて尾崎喜左雄[註16]氏・津金沢吉茂[註17]氏の指摘するところでもある。この蛇穴山古墳の「前庭部」と称する石材整形痕を見る限りに於いては、築造当時のものとは思われない。そして、玄門前面の敷

石も、調査報告書に図示[註18]されている部分には、割れ口状態が認められ、さらに石室前方に延びると判断される。さらに、第1表でも示したとおり、墳丘規模が一辺50mを測り、玄室位置が対角線の交点部に相当する（第5図参照）など、墳丘中心より直前部に前庭部を設けるなど不整合な点が多い。上述したことを勘案した結果。蛇穴山古墳の前庭部は、後世（近世）に改造されている可能性が非常に大きい点が指摘される。

この点を証左する史料がある。この史料は「山吹日記」であり、本墳の名称由来が記された史料として調査報告書中にも紹介[註19]されている。しかし、報文中に割愛されている部々に非常に重要な部分が有り、これを以下に示しておきたい。

「（前略）11日（5月）。きのえとら。朝ほらけの空またくもりたれと、（中略）高井なと過て惣社町にいつ。よきいへゐおほかり。光岩寺①と云める禅りんは山形候の氏寺として、境内の小山の上に世々のはかならへり。うしろのかたにめくりて見れは、是も南にむきて石室あり。けふ大窪なるをこといかめしと思ひ給へし②に猶まさりてなん。石のさまたくひなし。此東の方1町あり隔③てまた高き所のうへに観世音の御堂あり。其下に是も南に向て同しやうなる有。口の方をつくろひかへて弁才天を安置せり。④この観世音の御堂はつれにやすらふ。すさかいふ、むかひの⑤小堂のうへ御らんせよ、いみしきへみのいて⑥候というに、あふき見れは、けにむねのほとにまとひつきてかしらもたけて下の方を臨みつゝあるを見て、いや、玉をこそふくみつらめといふに、そはいつのむくひするらんとかたみに云。（後略）」

この記載の中で、下線①は現在も所在する〝秋元山光巌寺〟である。②は宝塔山古墳の墳頂部の秋元氏の墓所。③は宝塔山古墳の石室で既に開口していることが判明する。④は〝東の方1町〟の位置関係から現在の蛇穴山古墳であることが判断される。⑤は蛇穴山古墳の石室で既に開口していることが判明する。⑥が重要な部分で、「口の方」は石室の前方をさすと考えられる。「つくろひかへて」は、改修したことが判断され、〝つくろひ〟から再改築に近い状態と判断される。

また、調査報告書の記載では、表土層直下で玄門前面の敷石上面に達する底面が検出され、この玄室前面の敷石直上面に二基の庚申塔が検出されたことが記されており、この玄室前面の空間（前庭部と称した部分）の底面は、近世の段階で〝観世音〟〝弁才天〟を祀った頃からの生活面と判断される。

さらに前述した如く、墳丘内に於ける玄室の位置である。調査報告書の記載では、墳丘の先端は未確認であるが、葺き石の状態から方墳であって、玄室位置は対角線の交点部にあたっている。このことは、前庭としている部分は、墳丘の中央寄りの部分であって、墳丘の南半分程が築成されなければ、〝前庭部〟機能は果たせない。仮に前庭部を現状の位置とした場合には墳丘の半分は築成されなかったことになる。ただ、玄室の構造を見た場合、奥壁と左右両側壁の構築技法は、奥壁下端部の刳り込みを重要視すれば、奈良県明日香地方で顕著な横口式石槨の構造と同一のものである。この点は、宝塔山古墳の同部でも認め得るが、蛇穴山古墳のそれとはやや異なり、それ程しっかりした状態ではない。この点で、横口式石槨の場合は全体を盛土で被覆する古墳も存在する。しかし、蛇穴山古墳の場合はこの種の築造とは考え難く、玄室前面の敷石を考慮せねばならない。

上述してきたことを結論付ければ、蛇穴山古墳の前庭部と称する部分は、近世の所産にして、「山吹日記」記載のとおり、弁才天信仰により改修された状態である。弁才天を玄室に安置し、旧状の石室構築材を用い、前面石材を〝観音扉〟状に成し、多数の人間が拝観しうる広場的空間〝拝観施設〟として設置改築したものであることを明らかにしておきたい。

また、蛇穴山古墳石室の旧状を想定すれば、玄室は現状形態として把握されるが、底面の構造が不分明である。これは、奥・側壁下の状況を示唆するものであるが、通有の横口式石槨の場合、〝敷石〟に相当する基

盤底面は、四壁の石材を設置する刳込を有している。蛇穴山古墳の如く巨石を用いていることからも裾方がよほど堅固でなければ現状の石組状態を保持出来得ず、ここに底面部分の造作が何如なるものかが重要である。調査報告書では、玄室中央敷石下が礫層とも思われる状況が報告されている。しかし、壁下乃至壁際周辺下が未調査である点から不明であるが、西壁下まで礫とは考え難く、少なくとも寺院の四天柱の礎石の据方に近い状態（飛鳥・白鳳寺院の堂宇基壇と礎石の据方に見られる状態）でなければならない。あたかも放光寺（山王廃寺）の造営も当古墳の築造時期と重複しており、寺院建築の技法も導入された筈である。また、一つの憶測として基盤に相当する巨石の存在も考えられるところである。

当古墳の最も重大な視点とし玄室前方の構造である。この状態を示唆する古墳は近接する宝塔山古墳石室・安楽寺古墳石室（藤岡市）が上げられる。他の古墳の場合は、被葬者の質差が大と思われ、これに係わる石室形態も質差が想定され、同一視での対称はかえって疑問を生じさせると思われることより、二例をもって考えたい。

先ず、安楽寺古墳石室（以下安楽寺例と略称）は、横口式石槨式石室の型態であり、玄室（奥室）は一枚石で各壁を構成し、前室部に截石切組積による技法が見られる。この安楽寺例は小規模ながら県内に於ける畿内の石室形態と直接的に対比し得る好例である。この石室の玄室（奥室）は、長軸と石室主軸に対し直行方向にとる点は、総社古墳群中の愛宕山・宝塔山古墳石室に安置された家形石棺の方向と同じものであり、県内に於いては、この様な葬法を用いる少数例として認識される。ただ、羨道（前室）前方が現存する寺により削平されている点で、羨道（前室）前方がどの様な状態であったか明らかでない。しかし、墳丘に於ける石室位置から推察すれば、石室全体は複室構造であった可能性は非常に大きい。

宝塔山古墳石室は截石切組造の複室構造であり、石室全長約12.04m程で長大な規模を備えている。

玄室は矩形状を呈し、奥壁部・天井が一枚石を用いている。石室の主要部を平面構成比に置き換えると、40（石室全長）：11（玄室長）：10（玄室幅）：7（玄室高）：5（玄室門口幅）：4.5（玄門高）：13（前室長）：6.5（前室幅）：6.5（前室高）：5（前門間口）：12（羨道長）：6（羨道幅）：6.5～7（羨道高）である。この数値[註20]は、公約数を30cmとした場合である。この宝塔山古墳石室同様に蛇穴山古墳の玄室・玄室前面の部分を同様に平面構成比に置き換えたい。蛇穴山古墳の場合も公約数を30cmとする。10（玄室長）：8.5（玄室幅）：6（玄室高）：5（玄室前面施設幅）である。この蛇穴山古墳石室の平面構成比と宝塔山古墳石室平面構成比の関係は、宝塔山古墳石室の数値に0.9を乗ずるとほぼ蛇穴山古墳石室の数値となる。すなわち、宝塔山古墳石室（少なくとも玄室だけ）の9割に縮小したものが蛇穴山古墳の石室平面形状と考えられる。このことと、安楽寺例を加味して蛇穴山古墳の石室を復原してみたい。

蛇穴山古墳の「前庭部」としている部分は、前述した様に、江戸時代頃に改築されていることが明らかであるが、この改築がどの様になされたかが本蛇穴山古墳石室を復原するに必須条件となる。現状の蛇穴山古墳の「前庭部」と称する部分を構成する壁体は、宝塔山古墳石室・安楽寺古墳石室の前室同様に截石切組積によるものである。この蛇穴山古墳の「前庭部」と称している部分の切組は、古墳構築当時のものと思われる部分が多く、一部に改築時のものと判断されるものがあるものの、旧状をある程度は留めているものと考えられる。このことは玄室前面側の構造が截石切組造であったと考える。この点は安楽寺例と同様の構造として理解される。

石室の平面形態は、玄室前面での状況を勘案し、宝塔山古墳石室を9割に縮小した平面図等を加味し、蛇穴山古墳石室（玄室）の墳丘内での位置など、前述したことを総合的に分析すると、蛇穴山古墳の石室形態は複室構造であって、玄室が一枚石による横口式石槨と同様な造りであり、前室・羨道が截石切組積みの構

造であったことが推定される。そして、宝塔山古墳の構築時期より若干降る位での構築時期を判断させる一根拠でもある。

ここで愛宕山古墳に就いて若干記述しておきたい。愛宕山古墳は、右島氏が墳丘形状上方墳に疑せたのであるが[註21]、現状の地形を詳細に分析すると二者の状況が窺われる。

現状の地形図（第4図—前橋市都市計画図1：2500）では、本墳を北側に置き、南北300m・東西では天狗岩用水による破壊により不明であるが、現存で150mの巨大な方形区画が認められる。この区画域の縁辺部分には10〜18m程の溝状の落ち込みが認められる。ただ天狗岩用水以東で見られないのは、総社城の縄張が天狗岩用水までとしたことにより、縄張内の整備に伴ない消滅したものと考えられる。このことからすれば、この方形区画域の下限を慶長年間に設定出来る。

この巨大な方形区画域は、縁辺部分の落ち込みが完全埋没していない点から、その深度は非常に深いことが考えられ、さらに内郭では溝状落ち込みに添って地脹れ状になっていることが認められる。この両特徴から、この方形区画が、溝（堀）の縁辺に土塁を廻らせた状態であったことが判断出来る。ただ、北側の部分が二子山古墳の外堤の規制を受け、緩やかな曲線を備え走行している点が注意される。この形態上の特徴からすれば室町時代の居舘跡として考えられるものである。しかし、二子山古墳外堤の規制を受けている点では、その必然的要因に二子山古墳と愛宕山古墳との相互間の係わりによる所産とも思われる。さらに、両者の位置関係が非常に近接しているという実態・愛宕山古墳石室と当該の区画域の主軸方位が同様な点等から、愛宕山古墳に係わる施設とも思われるのであるが、この場合は兆域的な施設として考えられる。

しかし、上述二者での状況が想定される訳であるが、後者に就いては甚だなる疑義が生じるのであり、当該地域に於ける通有状況からすれば室町時代(〝折〟等の施設が認められない点からすれば、15世紀後半以前)の居舘跡と判断されるものである[註22]。このことから、愛宕山古墳に認められる直線面の構成は、この居舘に係わるものとも思われることにより、即断出来かね、右島氏が考慮した〝一辺90m〟は、室町時代の居舘跡廃絶後、内郭の耕地化段階での所産と考えられる。ただ、墳丘には葺石が整然と葺かれていたことから、方墳は確実視し得るものの、中世と重複する部分が大きいことから、明らかにし難い。いずれにしても、発掘調査による所見が待たれる。

上述してきたとおり、総社古墳群には、後期古墳（主体部に横穴式石室を蔵する段階）では、県内の2・3位を占める遠見山・二子山古墳を備えている点、宝塔山・蛇穴山古墳の如く巨大石室を備える方墳の存在、愛宕山・宝塔山古墳の如く家形石棺を備える古墳の存在等、県内では傑出した存在であることは従前の認識同様であって、古代上毛野国の〝盟主〟としての墳墓群であることは明らかであり、古墳築造の終焉後の国府・国分二寺造営に係わる社会背景を考える上で非常に重要な存在である。

すなわち、史料上にほぼ同時期に見られる〝上毛野君（公）氏〟〝上毛野朝臣氏〟は、正に当該古墳の被葬者乃至その同族の墳墓として構築されたものであることが推察されるのである。

前述してきた如く、当遺跡周辺地域の古墳・古墳群の在り方は、大きく二者での様相が看取され、通有の横穴式石室を蔵する古墳群は各河川の上流域で広く数多く分布している。そして、これらの古墳群は、総社古墳群を中心として北側から西側にかけある程度の古墳群の空白地帯を置き構築され、特に東側から南側にかけて、古墳群の空白地帯が広範囲にわたり存在している。

また、同時期構築された〝総社古墳群〟は、県下に於いても平坦地に巨大古墳を核として希有な内部構造を具備する点では、同時期の綿貫古墳群以外では認め得ぬ状態であることが明らかで、ここに、総社古墳群の意義が古代史上重要な存在であることが認識される筈である。

２．古墳時代中期～後期の集落と生産跡

前述した古墳・古墳群は当該時代の象徴であるが、少なくとも、古墳に葬られた被葬者の生活の場は、〝集落〟形成か〝居舘〟と呼ばれる生活の場を占有した筈である。ここで周辺地域に於ける当該期の集落を望見し、且、当該地域に於ける当該期の存続基盤を考えてみたい。

和泉期では、〝集落〟として確実に把握されるものは皆無であるが、遺物の散布状況ではその存在が示唆される。当遺跡では、第２分冊中で報告したＦ区第21号土坑のみの存在である。この土坑は、平面形状が舟形を呈し、覆土内からは赤色顔料と共に高坏９個体（脚部欠損）が出土している。性格は不明であるが考えられる範囲として墓か祭祀に伴なうものと思われる。この土坑以外では皆無であった。

当遺跡の東方牛池川左岸上の縁辺部で当該期の遺物が散布しており、ここに〝集落〟の存在が想定されものの実態は未だ不分明である。ただ、前項中で記した国府政庁北側の古墳と推定される存在もあり、その可能性は大きいと思われる。

「群馬町の遺跡」（文献36）では、５世紀代の集落跡を３遺跡上げ、確実視し得る存在は、同書中№28遺跡のみであろうとされ、当該期の遺跡の少なさを提示されている。

５世紀後半代にその存続の知られる〝三ツ寺居舘〟は、その構築に際し、和泉期の住居跡を埋めて盛土層の構築がある。当該期の住居は６軒検出されている。この中で特筆されるのは13号住居跡のカマドである。当該期の住居（県内に於いて）は、カマドを備える住居と備えない住居の二者での存在が知られる。カマドを備える住居で、確実にカマドの形状が判断されるものは皆無であったが、この住居例では煙道部先端に近い部分までが遺存していた点である。しかし、現状下ではこの13号住居跡例のみであるので、１例をもって全てに対比させるのは疑義が多いが、一つの標式にはなると考えられる。

この三ツ寺Ⅰ遺跡例は、少数ながらも当該期の数少ない類例として上げられる。

前述した諸口古墳群前面の正観寺遺跡群中に於いても、小数例であるが住居跡が検出されている

この様に周辺地域の和泉期の集落は非常に少い、また、土器形式上の〝五領（石田川）〟〝和泉〟〝鬼高〟の中で周辺地域に於ける和泉期の遺跡を１とすれば、前者が３、後者が10以上の比率で対比される。この点では、前述した古墳の分布と同様な状態が窺われる。

鬼高期の〝集落〟は、和泉期に比較して爆発的量をもって検出されており、前代が単体の住居単位で扱ったものが〝集落〟として認識される状態に至っている。

当遺跡でも南北両河川沿岸に添って検出されており、南側染谷川沿岸では国分僧寺内での検出も在り、その分布も広域に亘る様である。また、遺物の散布状況でも、染谷川沿岸乃至牛池・染谷川に挟まれる台地内部でも広く分布し、前橋市元総社町[註23]から群馬町西国府にかけての集落展開が予想されるが、この中を区切る状態での最小単位の集落に就いては把握し難い。また、当遺跡では、榛名山二ツ岳給源のＦＡブロックの埋没する細い溝状遺構が、80～100cmの間隔を置き平行して走行する所謂〝サク状遺構〟が台地中央部で検出されている。この遺構群が、ＦＡ埋没以前の〝畑〟と考えられるもので、住居域から直ぐ広範囲に耕作地を備える集落であったことが判断される。

さらに、染谷川とその支流になる風呂川により開析された台地上（群馬町後疋間）にも遺物の散布が認められている（文献36№４遺跡）。この遺跡の様に、旧小河川の流域にも遺跡が認められることは、古墳時代頃には、谷地水田等としての土地利用があったことを示唆される。そして、現在では認められない旧小河川の図上復原は、当該期の集落を把握する部分に於いて重要な作業と認識される[註24]。

染谷川沿岸に於ける集落の分布は、上流域に群在する古墳群の分布域がその上限と考えられる。また、こ

の逆に、古墳・集落遺跡の空白部に就いては、古墳の存在を示唆するものと思われる。

牛池川沿岸では、当遺跡の対岸にあたる国分境遺跡には当該期の集落は認められない。しかし、放光寺(山王廃寺) 西方から南方の牛池川左岸沿岸に和泉期と重複して遺物の散布が認められ、国分境遺跡より上流側で、牛池川旧支流の河川左岸沿岸に遺物の散布が認められる(文献36№5遺跡)。この旧河川の痕跡は、前橋市北原地区に鎮座する熊野神社の東側に達しており、この旧河道部の字名を〝熊野谷〟と呼んでいる。恐らく、この旧河道は、現在同部北側を流走する八幡川の旧河道と考えられる。この№5遺跡の立地は、国分境遺跡で検出された旧河道と八幡川旧河道に挟まれた台地上にあたる。

このNo5遺跡の対岸にはNo7遺跡が在る。この遺跡は、当遺跡の北側で展開する集落の上流方向にあたっており、立地の状況から同一の遺跡とも思われる。そして、この牛池川右岸沿岸ではNo4遺跡以外は認められていない様である。

染谷川以南では、井野川に直接流入する支流域の両岸に分布している。この井野川に直接流入する支流のうち、現在旧陸軍菅谷飛行場跡地の部分には、飛行場が造られる以前に釜口川(重平川?)の流路が在った。この流路に就いては第1分冊中付図16に復原を試みた。〝群馬町の遺跡〟(文献36)では、この流域にNo17・21が右岸に、No18・22が左岸に分布しているが、このNo17・18とNo21・22の間には空白部がある。この空白部は、現在右岸が宅地・工場が在り、左岸では飛行場跡地は水田となっている。この現況下では、遺物の採集も不可能に近いが、釜口川の流路とこの4遺跡の状況からこの空白部も遺跡地として確実視されると考える。さらにこの釜口川下流域には正観寺遺跡群が存在している。

この釜口川西方を流れる天王川流域に於いても遺跡の分布は同様であるが、上流域と下流域には前述の古墳群(毘沙門・諸口古墳群)が占地している。

井野川支流中染谷川と共に双肩の存在としての唐沢川流域では、前述の古墳群(屋舗・毘沙門古墳群)が中流域に分布し、これ以南に於ける両岸に広大な遺物散布地域が認められている。この分布域が〝群馬町の遺跡〟(文献36)記載のNo14・27・28であり、調査例も多い。この遺跡地は、前述した〝保渡田3古墳〟に至近の地であり、3墳築造段階の住居跡が検出されている。また、3墳築造以降・三ツ寺居館廃絶後の住居は非常に多い。このうち3墳築造段階(5世紀後半代)では、唐沢川左岸と東谷中流域右岸の如く、3墳を挟む様に分布が認められるが、想定される遺構数は6世紀代より少ないと考えられ、3墳築造以後の集落展開が大きな特色である。

生産跡としては、先ず井野川流域に於いて多く検出された水田跡が上げられる。水田跡は、榛名山二ツ岳給源FA・FPにより埋没せるものである(便宜上FAによる埋没水田を〝FA田〟、FPによる埋没の水田跡を〝FP田〟としたい。)

井野川左岸では、同道遺跡でFA田・FP田が検出されている。この同道遺跡の下流域でもFP田が検出されており、熊野堂遺跡ではFA田が、井野川に接する部分で検出されている。この井野川左岸の小河川域でも水田跡が検出されており、正観寺遺跡群・小八木遺跡内でも一部検出されている。また、上流域で流入する西谷川の湧水点西側部でもFP田が確認されている。

一方台地内部では、北原遺跡の如く、畑とFA田が検出されている。畑は台地内側で検出され、FA田は旧河川と想定される流路に添って検出されている。しかし、旧河川の流路は判明していない。

この北原遺跡で検出された畑・FA田は、さらに東南東方向に分布域が広がると考えられ、この広がりは、旧河道に沿って分布するものと思われる。また、総社古墳群中を東西に分断する天狗岩用水は現八幡川の支流の小河川を一部利用しており、この旧河川沿いの部分でも畑などの生産跡の存在が想定されるところであ

る。これらのことは、総社古墳群が占地する部分もＦＡ降下以前は生産跡（畑）であった可能性も想定し得るのであって、ここに古墳群成形上特異な状態が示唆される。ただ、古墳群の形成が、ＦＡ降下以降である点では、ＦＡ降下により一時荒廃した地であった可能性は大きく、ここに古墳群を形成させる一要因が内在するものと思われる。

このＦＡの降下は、榛名山二ツ岳の爆発による降灰であり、後述する三ツ寺居舘は、これが為に〝移動〟に追い込まれる程の重大事であった筈である。この三ツ寺居舘の移動後、井野川流域の水田は復旧され、さらに水田としての耕地の拡大がなされ、ＦＰ田として検出されることが明らかである。このＦＡ降下の二ツ岳の爆発は、祭祀への影響は大であって、これ程までに重大事下に於いて、新たな古墳造営を行なう場合に於いて、ＦＡ降下により壊滅した耕地に及んでもその矛盾は無いと考えられるものの、逆にこの総社古墳群が形成された地が耕地ではなく、被耕作地（ただし、馬等の牧場的存在であった等のその地での土地利用は考慮される）であった場合は、従来の古墳群の占地とほぼ同じであって、矛盾は生じなくなると考える。

この様に、井野川支流流域での水田耕作は北原遺跡の如く、旧河川の河道沿岸で水田等の検出がある。しかし、井野川支流流域の如くの顕著な存在でないことから両者間には遺跡の本来の性格に大きな差違が推定される。

この様にＦＡの埋没する〝畑〟の検出が数ケ所で認められている点と、当中間地域での状況から、保渡田３墳を蔵する墓域以外の多くの土地は、畑作による生産が行なわれていた可能性が大きいと考えられる。この場合、各河川流域に展開した集落の空間地や、集落を認め得ない台地内部・旧河道の安定した部分など、土地の有効活用があったことが推察される。このことは、農耕の主体は水田ではなく畑の耕作（陸田も考慮する）にあったことが示唆される。

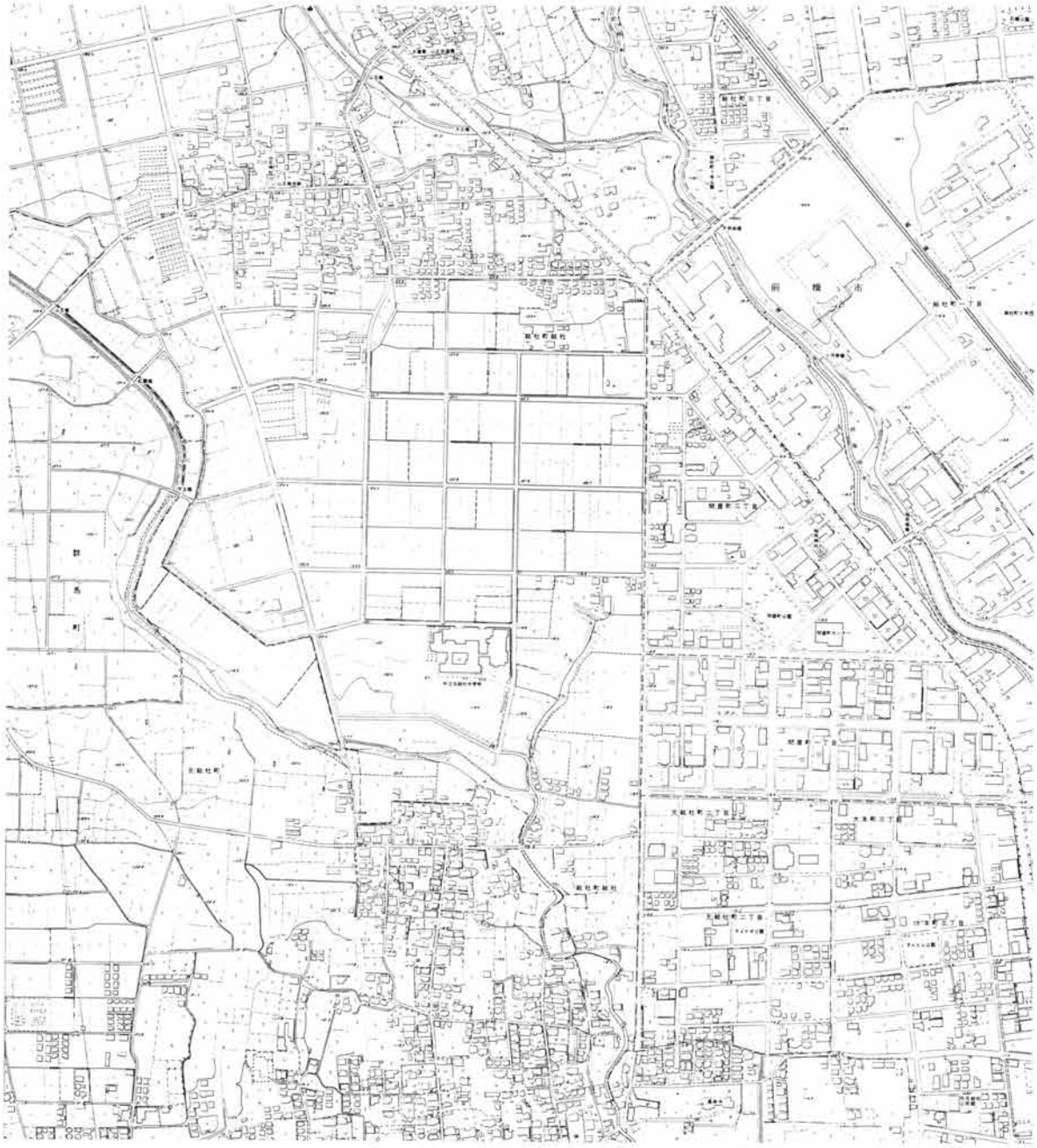
井野川右岸の高崎市では、著名な御布呂・芦田貝戸遺跡の水田跡群が在り、概して、井野川流域に於ける沿岸部では、当該地区に於ける主要な水田耕作地帯であったことが窺われる。

当該期の周辺遺跡で最も重要な三ツ寺居舘がある。

三ツ寺居舘は、〝水〟に係わる祭祀行為を居舘の内に備える〝祭政一致〟の場として存続した。しかし、この〝居舘〟は、榛名山二ツ岳の爆発により、その機能を停止し、廃絶しているのであるが、この地は、後代も連綿として〝水〟に対する祭祀行為が行われているものの、居舘を構築する如きの地域盟主としての立場の人間でなく、居舘廃絶後も周辺に展開した〝集落〟の構成員乃至〝集落〟内の〝長〟により行われている。ここに、〝水〟に対する大きな祭祀上の転機がある。

この三ツ寺居舘は、廃絶に伴ない建物の柱材を抜去している。この抜去は、二次的に転用するか、廃棄するのかが考えられるものの、〝祭政一致〟の場としての遺跡の性格上、二次転用の意識をしてのことと理解される。この場合、住居等の単なる柱材としてではなく、やはり、同様な構造の建物を〝移築〟という範囲で捉えるのが妥当であろう。このことは、〝居舘〟を別の地に構築するのであるが、規離的に遠地とは考え難く、三ツ寺居舘主体者の直接的な領域内にその地を求める可きと考える。

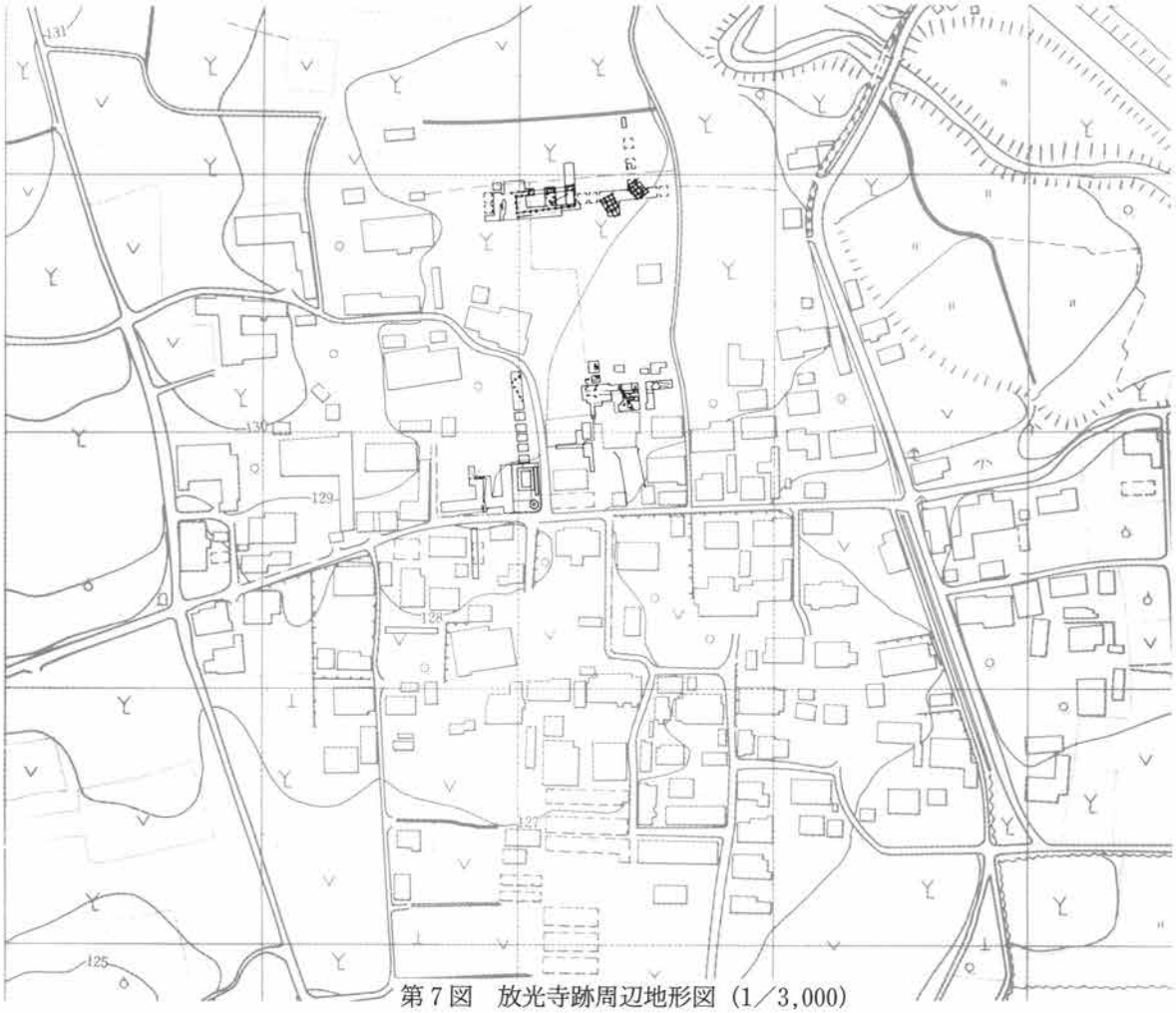
ＦＡ降下による水田の壊滅は、それまで三ツ寺居舘の〝祭政一致〟を覆すものであり、〝水〟に対する祭祀を破局に追い込んだと推測される。また、榛名山東南麓の水源は、全て榛名山であって、榛名山自体が祭神であった筈であり、その一支峰の大爆発により、〝水〟の祭祀も変革が及んだ筈である。ここに、新たな〝祭政一致〟がもとめられたものと考えられ、本来的な三ツ寺居舘の廃絶はここにある。そして、主たる祭祀対象を〝水〟から〝榛名山（二ツ岳）〟へと変更したことに〝移動〟の意味があり、榛名山自体を祭祀の対象として、それを一望し得る地を求めることが本来的な移動の意味がある。この点では、三ツ寺遺跡の地からで



第6図　上毛野君（朝臣）氏居舘推定地（1／10,000）

は榛名山全望にはやや無理があり、榛名山を一望し得る領域内へ〝移動〟したと考えられ、前述の建物材での移築の意味付けが可能になってくる。

三ツ寺居舘が、〝移築〟を前提として廃絶があったことが考えられるが、この場合移築先が問題である。居舘を移築とすれば、この主宰者の掌握した領域であったことは判断される。この領域を考えれば、三ツ寺居舘の位置する榛名山東麓が考えられ、旧利根川以南で、朝倉古墳群の位置より以西で、綿貫古墳群以北と考えられる。しかし、前述したＦＡ降下直後に唐突に前方後円墳を核として築造の開始のある総社古墳群の存在は非常に重要で、後述する放光寺（山王廃寺）（主宰造営者は上毛野君氏）の存在からも総社古墳群周辺にその〝移動地〟が考えられる。この総社古墳群は、午王頭川と八幡川に挟まれた台地を墓域としている。また、三ツ寺居舘も3墳の如く、墓域と生活（祭祀）の場を河川を隔て確実な形で分別して占有していること



第７図　放光寺跡周辺地形図（1／3,000）

から判断すれば、総社古墳群の墓域から河川を隔てる場所が〝移動地〟（新拠点）と考えられ、私寺としての放光寺（山王廃寺）が７世紀末頃に唐突に現在の地に造営されることは、その地周辺に何らかの領域としての要素が造営以前から存在したことが考えられる。この要素こそが総社古墳群を形成した〝上毛野君氏〟の居舘の地と推定出来、これが〝移動地〟であったと考えられ、６世紀以降の居舘の地と推定される。

この点に就いて放光寺（山王廃寺）の調査で検出された遺構・周辺地形から考えてみると以下のことが考えられる。

放光寺（山王廃寺）の調査過去に於いて検出されている遺構の大きさを分類すると、①寺に係わる堂宇の遺構　②創建以降に構築された住居跡　③創建以前に存在したと考えられる住居跡　④堂宇と異なる主軸方向を指す掘立柱建物跡、の４者の存在が認められ、さらに、これらの遺構を主軸方位で分類すれば、①②と③④が対応関係に有る。この内後者は、後述する当中間地域で検出された住居で、７世紀第３四半世紀以前のものとほぼ同じであって、③④がこの７世紀第３四半世紀以前の年代観が考えられる。この点は、③の年代観と整合する。

④の掘立柱建物跡は６棟検出されており、３間×３間の総柱建物（倉庫）が４棟（１棟は不分明）、６間＋α×２間の長大な建物が２棟検出されている。これらの建物は〝私寺〟放光寺（山王廃寺）の創建に並行する存在であることから、官衙とは考え難く、〝私的施設〟であることは明白であり、これ程迄の建物を構築し

「群馬郡
小野郷参町玖段
井出郷貳拾参町伍段
八木郷肆町肆段
上郊郷捌町伍段」

この内容は次項定額寺項の〝法林寺〟の終りの部分に以下の記載があり、この内容から以下のことが推量される。

「（前略）
寺地拾陸町参段佰肆拾肆歩
田肆町玖段佰肆拾歩　在留国日記坪付
畠
（後略）　」

とあり、寺地と寺田について記してある。この点から、法華寺項の５行部分は、法華寺の寺田についての記載内容と考えられる。

法華寺の寺田は、天平13年の詔段階では水田10町で、同18年の督促の詔では水田40町となっている。さらに天平宝字７年には400町を墾田の上限として記している。しかし、後者の400町は、乱開された墾田に上限と示したものであって、元来の寺田とするには中者の「40町」であったと考えられる。上記の交替帳の数値は合計で40.3町になり、天平18年段階の40町に相当している。そして、交替帳の法華寺々田では〝群馬郡〟と記すところから、前文にも他の所での寺田が存在したことが類推される。しかし、群馬郡は、国分二寺の在郡する郡であって、前代の上毛野君氏の本拠とする領域郡と考えられ、たとえ前代に〝車評〟であったとしても[註26]、前述した総社古墳群の存在意義、三ツ寺居舘の移動から上毛野君氏の本拠域であったと考えられる。国府・国分二寺の地は群馬郡内であり、上毛野君（朝臣）氏の献進した地である。この三者の地の面積は約2000町を優に越えるものである。群馬郡内にあるこの法華寺々田は、上毛野君氏が天平18年の詔に対し献進したのが「交替帳」記載の四箇郷の寺田と考えられる。また、交替帳記載の四郷の中で井出郷の寺田面積は40町の半数に当たっている。この井出郷は、和名抄にも認められる郷名であって確実に存在した郷名と判断出来る。そして、保渡田３古墳・三ツ寺居舘は、この井出郷内に当たると考えられる（現状の大字名から）。この井出郷から23.5町は正に上毛野君氏の直轄地であったことによりその献進が可能であったと想定される点にある。このことは、祖霊の地を〝国分寺〟運営の為に供することが〝前拠点の地〟に対する最大の意義付けが可能となり、ここに上毛野君氏が寺田の内井出郷を選んだ最大の理由が内在すると考えられ、他の三郷も全て群馬郡内である点からも〝上毛野君氏〟の国分二寺に対する係わりが明らかになる。

上述してきた様に、当遺跡は古墳時代後期には、上毛野君氏の拠点に至近の地であることが明らかになった。ただ、この拠点の内側では、榛名山二ツ岳の爆発を契機として大きな変質を遂げる。この変質こそが、〝居舘〟の移築である。

三ツ寺居舘では、盛土を積み、舘の基盤を構築し、そして猿府川の流路を利用している。さらに環濠状態になる様に〝濠〟を構築している。そして、この居舘の濠には常時１m程の水位が保たれていたのである。また、居舘内では〝水〟に対する祭祀行為が行われており、〝水〟祀りを行なう場所であった。これは、井野川沿いに形成されたＦＡ田との係わりであるが、この〝水〟祀りを根底から覆す二ツ岳の爆発により水田は壊滅し、上毛野君氏は〝水〟から〝山〟へと祭祀対象を変更せざるを得なくなったのである。これにより、〝移

動〟が必然的条件となり、当中間地域の東方に拠点を移し、さらに、総社古墳群を形成し、上毛野国の一国の盟主としての存在として成長した。そして、この移動地が放光寺（山王廃寺）を創建させたのである。

3．飛鳥・白鳳・奈良時代（国分二寺建立以前）

この時代の遺跡は、前代と重複する様相が強い。古墳・集落も前代を踏襲している。ただ、古墳の築造も西暦650年以降頃になると、その数量は著しく減少し、多くの場合は追葬の時期を迎えている。この頃の集落は、前代からの継続と考えられ、遺物・遺構の分布からの集落の想定し得る遺跡は、6世紀以降ほぼ同様な状態である。しかし、一部では、前代とは異なり、下東西遺跡の様な特異な存在も認められる。この下東西遺跡は、当遺跡の北方にあたり、総社古墳群と同一の台地で、総社古墳群から西方約1.2kmに位置している。この遺跡は、調査所見から〝官衙〟を主とし〝舘〟を従として考えられているが、前述して来た周辺遺跡の状況から、7世紀末から8世紀前半代頃までの遺跡地が官衙としての存在は非常に考え難く、総社古墳群・放光寺（山王廃寺）等の存在から、上毛野君（朝臣）氏に係わる私的施設と考えるのが妥当性が有る。

この飛鳥・白鳳時代を代表する当該地域での遺跡に、前述の総社古墳群中の愛宕山・宝塔山・蛇穴山古墳と放光寺の存在があり、〝上野国府〟もこの頃にその造営の動きが有ると考えられる。本項では、この愛宕山・宝塔山・蛇穴山古墳・放光寺・国府に主眼を置き、同時期の造営になる上植木廃寺・金井廃寺・寺井廃寺を含め、上野国内から見た周辺地域の意義付けを行なってみたい。

先ず総社古墳群中の愛宕山・宝塔山・蛇穴山古墳（規模・形態等に就いては前述したが、その意義に就いては詳述しなかったのでここで試みる。）は、7世紀中頃から同末期頃にその年代観が右島氏により提示され、従前に於ける年代観の修正を行なった。この点に就いては筆者自身も、その相対年代を求める方法等、ほぼ違論のないところであるので、この提示された年代観を支持したい。

この7世紀中頃から末期の間には前述した上植木・金井・寺井・山王廃寺（放光寺）の四ケ寺が造営されている。ここで若干上植木・金井・寺井廃寺に就いて記述し、放光寺（山王廃寺）の意義付けを行ないたい。

これら四ケ寺の内、上植木廃寺は近年調査が実施され、7世紀後半に創建年代を相当させている[註27]。しかし、大江氏は、天智朝との係わりを推定され[註28]、7世紀中頃をその創建と論述されている。

筆者は塔・金堂と推定される二地点の基壇の調査を実見する機会を得た。この塔基壇の版築土は、2～8㎜の厚さであり、非常に薄いものであった。この技法を見る限りに於いては、創建瓦当意匠に類似のある山田寺創建から間も無い頃の基壇の構築技法と認識される。この点では、大江氏の年代観を支持したい。また松島栄治・須田　茂両氏は、創建の創意者として〝桧前部君氏〟を想定されており[註29]、大江氏は、〝上毛野君氏〟を想定されている[註30]。両者の根拠をみとると、松島氏は、創建後100年程降った段階での史料を駆使しておられる点では、壬申の乱以降の律令制下とそれ以前を混同している（壬申の乱との係わりは後述する）。一方大江氏は、前代と以後の状況に鑑みており、論拠としては、氏の論述が正統性が高く、やはり、乙巳の変（大化改新）以降の状況からすれば、大江氏の論述は正統性が高いと言い得る。

筆者は大江氏の論述を支持することから、上植木廃寺の創建年代を7世紀中頃（645年以降の640～650年代）と考えている。

金井廃寺は前述する註の中で触れたとおり大江氏による論述がある。詳細は大江氏の論述を参照されたい。ここでは、大江氏の論述を参照し、当該寺院に就いて若干略記しておく。

金井廃寺は創建瓦当意匠を上植木廃寺と同じくする。そして、創建に係わる造瓦組織も、上植木廃寺の供給終了後当該寺院の建立に向けられた。また、この造瓦組織は、寺井廃寺の創建瓦当意匠でない点は、これ

に先立つ段階での建立が考えられる点では、当該寺院の創建は7世紀第3四半世紀と考えて間違いはなく、壬申の乱以前には、その建立はほぼ完成したと考えていいものと思われ、寺域の整地・材木の切り出し等は、上植木廃寺の造営と重複する期間の推定も出来る。これは、天智政権下での上植木廃寺の創建から壬申の乱までの約30年足らずの間に、初めて同系寺院二ケ寺を完成させるには上述の状態でなければならなかったと仮定する点にある。

この上植木・金井廃寺造営の意義は、乙巳の変（大化改新）（645年）以降、中大兄皇子・中臣鎌足の打ち続く唐制指向の中、中央（大倭国）の有力氏族を、地方豪族からその傘下に組み込み、周辺から囲い込む状態にして従わせる時に、有力地方豪族に向け、新政権態制のモニュメントとして造営させ、新政権の東国・東北経営の為、国家的政策として建立があったと思われる。若し、この仮説に概然性が有るならば、建立の主たる援助者は、〝上毛野君氏〟をおいてほかならず、〝桧前部君氏〟ではあり得ない。

寺井廃寺は、太田市天良に所在する。しかし、詳細な調査はなく、工事等が堂宇の基壇に及んだこと[註31]など、木暮仁一氏等による表面採集[註32]等により寺院としての存在は確実視されている。

この寺井廃寺は、従前に於いては、上植木廃寺に近接し近い時期に何如にして造営されたか不分明であった。この点に就いて筆者の考えがあるので以下に記述しておきたい。

寺井廃寺の創建瓦当意匠は、面違鋸歯文複弁8葉蓮華文瓦である。この意匠は、奈良県河原寺に渕源があり、壬申の乱直後の天武朝が、壬申の乱に功労のあった者に配されたとされており[註33]、創建は天武朝の7世紀第4四半世紀と考えられる。

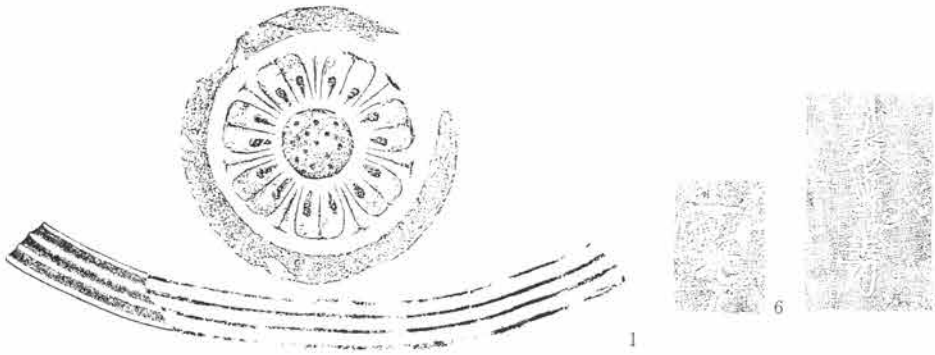
この寺井廃寺の地は、律令制下の新田郡驛家郷に比定しうる地である。

上野国内で壬申の乱に係わった氏族として先ず〝大野氏〟が考えられる。この大野氏では、壬申の乱の折、近江朝側に加担した〝大野君果安〟が上げられる。この大野君果安は、天武朝の将軍大伴吹負と乃楽山で戦いこれを破り、さらに追撃をかけたものの引き返している[註34]。また、子の大野朝臣東人は、陸奥鎮守府将軍・陸奥按察使兼鎮守府将軍・持節征夷大将軍等を歴任し、従三位で薨去しており、娘の仲仟は藤原永手の室であって正三位で薨去している。上野国に係わる氏族の中では上毛野朝臣三千の大錦下（従四位）をも抜きんじている。

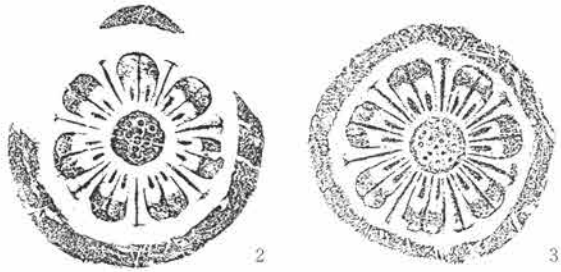
大野氏は、「新撰姓氏録」（以下姓氏録と略記）に見られ、「大野朝臣　同豊城入彦命四世孫　大荒田別命後也」とあり、上毛野君氏等と同祖である。佐伯有清氏は〝上野国山田郡大野郷（群馬県山田郡大間々町福岡一帯）の地名にもとづく〟としておられるが、既出の姓氏録の関係書を検討しても[註35]〝大野〟の地名と上毛野君氏等と同祖とすれば、「和名類聚抄」（以下和名抄と略記）の山田郡大野郷が本貫地として考えられ、佐伯氏の示すとおりと考えられる。

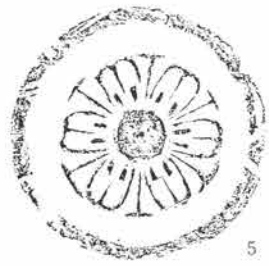
寺井廃寺の位置する驛家郷は、東山道の下野国・武蔵国への分岐点であり、重要な驛家の地である。当時東北経営は重要な政策であり、陸奥・出羽・奥羽国に軍団を送る場合、武蔵・上野・上野以西の軍隊の集結する地点であったことが考えられ、さらに北上し下野国に入った場合、下野薬師寺（この寺も河原寺系の面違鋸歯文複弁8葉蓮華文を意匠としている）周辺も軍団の集結地点であったと考えられる。

この様に壬申の乱以後台頭した大野氏を通して、〝官寺〟としての性格を具備し建立されたことが類推される。ただ、大野氏の本貫地が、山田郡大野郷に比定されるものの、この郷名自体承平年間（931～938）に編纂されたものであって、7世紀末から10世紀前半の間の大きな時間差があり、この間に〝大野氏〟の管掌した（具体的には〝郡司〟は大野氏のだれかであると類推される。）地は縮小した可能性も有る。そして、一時期には新田郡も管掌の範囲にあったものとも思われる。



1・6・7．放光寺
（山王廃寺出土）
2．でいせいじ窯跡
3．水窪遺跡
4．護国神社遺跡
5．雑木見遺跡





所謂「山王・秋間系複弁七葉鐙瓦」は大江正行氏が提唱され(後段の註56)、放光寺創建とこれに伴い焼造された単弁八葉蓮花文鐙瓦と、やや後出して焼造された複弁七葉蓮花文鐙瓦のうち、後者を祖形として乗附古窯跡群（観音山丘陵）・秋間古窯跡群（秋間丘陵）内で焼造され、主要供給先が群馬郡・片岡郡・碓井郡の三郡内の国分寺建立以前の寺院・官衙乃至官的施設に対しあったものとしておられる。

この内、放光寺（群馬郡）創建瓦は秋間古窯跡群（碓井郡）からの供給であり、放光寺が氏寺と考えられることからすれば、前代からの両者の係わりは非常に密接なものがあったと考えられる。又、「山の上碑」（片岡郡）に認められる「長利僧＝放光寺僧」からも、上述三者の係わりが非常に注意される。そして大江氏は、この三者を含め、上植木廃寺（勢多郡）・金井廃寺（吾妻郡）をも含め「佐野三家」＝〝佐野屯倉〟と考えられておられる。（註6前掲書）

第8図　山王・秋間系複弁七葉鐙瓦図

すなわち、寺井廃寺の創建は、「大野朝臣果安」乃至「大野朝臣東人」による創建で「官寺」としての性格が考えられるのである。創建時期は。壬申の乱直後の7世紀第4四半世紀で675年頃にはその着手が推定される。

また、大野朝臣東人は天平14年（742）に薨去していることから、少なくとも天平9年（737）・天平13年（741）の国分寺造営の太政官符・詔は知っていた筈である。後述する国分二寺の創建瓦を焼造した笠懸古窯跡群の山際・鹿の川窯跡開窯及び国分寺創建意匠決定の背景にはこの〝大野氏〟の係わりも想定されるが、詳細は後述したい。

放光寺（山王廃寺）は、国府推定地の北側で当遺跡と最も近い部分で約450mであり、その間に牛池川を挟むものの、国分二寺より規離的に近い箇所でも有る。この放光寺＝山王廃寺の証明は筆者自身も以前に記述したが、ここで若干触れておきたい。

放光寺（山王廃寺）（以下放光寺のみで記述する）は、牛池川・八幡川に挟まれた台地上に占地する。この台地と八幡川を隔てた台地上には、前述した総社古墳群が位置しており、牛池川を隔てた台地上には国府・国分二寺が位置している。

放光寺の創建瓦当意匠は、単弁8葉蓮華文・複弁7葉蓮華文であり、この内後者は県内はもとより全国的にみても、非常に希有な弁数を配する意匠であり、この類例を求めれば奈良県法隆寺・同葛城郡朝妻廃寺・和歌山県伊都郡佐野廃寺等（和歌山県にも数例ある）にある。この様に〝官寺〟の上植木・金井・寺井廃寺に対し、瓦当意匠上類例の希有な存在から〝官寺〟とは考え難い点から、〝私寺〟と考えられる。年代観としては面違鋸歯文複弁8葉蓮華文に後出し、従前より指摘のある7世紀第4四半世紀と考えられる。一方単弁八葉蓮華文は、金井廃寺の創建意匠に後出するのであるが、文様表出上複弁八葉と大きな時間差を想定する

ことは出来ず、単弁・複弁の関係上両者の境は壬申の乱の頃と想定される。そして、この頃八幡川対岸の宝塔山・蛇穴山古墳築造の頃に相当している。この放光寺・総社古墳群は、至近の位置関係から総社古墳群の被葬者が建立したことがほぼ断定出来ることと、上述の瓦当意匠上の問題を合わせて考えれは〝私寺〟としての存在であり、従前より通有化されているところである。

この〝放光寺〟の名称は、〝上野三碑〟の一つ、山の上碑銘文中にある「(前略) 長利僧母爲記定石文也放光寺僧」の放光寺。「上野交替実録帳[註36]」(上野国不与解由状案、以下「交替帳」と略称する) に「国分二寺諸定額寺 (後略)」項に以下の記載がある。

「定額寺

放光寺

件寺　依氏人申請不為定額寺　仍除放已了者」

この交替帳の放光寺が昭和54年までの史料であった。この段階では、尾崎喜左雄氏は、高崎市下佐野所在の「放光明神」の地周辺を想定されておられた[註37]。しかし、その後昭和54年「山王廃寺」の発掘調査で、「放光寺」と焼成前に篦描きされた女瓦片が出土し、着目されるに至った。そして、この女瓦の存在により、「放光寺」は山王廃寺ではないのかという疑念がもたれ、『山王廃寺 (放光寺)』という記述が定形した観がある。しかし、女瓦の篦描きが焼成後ならともかく、焼成以前である点で慎重を期する可きで、「放光寺」の三者の資・史料の分析が急務の筈である。

この三者の資・史料の「放光寺」は、同名寺院が複数存在するのか、また同一寺院なのかにより理解が異なる。この点では同一文字を用いる同名寺院が一国内に複数存在するとは考え難い点で、この三者は同一寺院を示していると判断され、ここで三者の資・史料上の「放光寺」は同一寺院としての前提に立ちたい。

前項で総社古墳群に就いて若干の論述を行ない、その被葬者に〝上毛野君氏〟が考えられることを述べた。ここで、この前提に立ち前述の放光寺に係わる三者の資・史料を個別に考えてみたい。

山の上碑銘文中の「放光寺」は、同碑銘文中にある「辛巳歳集月三日記 (後略)」から「辛巳歳」には存在した寺院である。この「辛巳歳」を何時に当てるかである。この点に就いては、尾崎喜左雄氏の詳述[註39]を拠所としたい。即、天武10年 (681) に存在したのが放光寺である。この天武朝期に存在する寺院ならば、白鳳寺院と呼称される。しかし、県下では飛鳥寺院は認められない (上植木廃寺の扱いは、飛鳥寺院の延長上の白鳳初期の寺院として扱う。) 将に放光寺は白鳳寺院であった訳である。

県下の白鳳寺院で、天武乃至持統朝段階の寺院とすれば、上植木・金井・寺井・山王廃寺が上げられる。ただ、この四ケ寺以外でもその存在が想定されるものの、定額寺として扱われる可き寺院は、七堂伽藍を備えた筈であり、県下ではこの条件を満たす当該期の寺院はこの四ケ寺とし判断される。即、この四ケ寺の中に放光寺が含まれている可能性が非常に強い。

山王廃寺の造営主体者は、総社古墳群を形成した中でも宝塔山・蛇穴山古墳の被葬者を仮定出来、氏名の名は別にしても〝上毛野君氏〟であり、総社古墳群自体上毛野国の盟主である。後代に造営される国府は、山王廃寺の前面で至近の位置である。この国府を含め、国分二寺の地を貢進している。このことは、物質的な面のみでなく、律令政府との政治的係わりにより成せるのである。このことを要約すれば、国内で初出の私寺を造営し、律令政治の三大モニュメントの造営に深く係わっていたのである。この点こそ、〝上毛野君氏〟は、上野筆頭勢力としての立場を備える証である。

交替帳に見られる定額寺項の寺院は、官寺として建立された上植木・金井・寺井廃寺は、その寺格も平安時代に至っても、その頃に存在したであろう多くの寺院の中でも筆頭的寺院であったことは、想定出来る。

そして、「依氏人申請」からは、定額寺たる放光寺が元来は氏寺であったことを意味することは推察出来ると共に〝官〟の援助が無くとも維持・運営が可能であったことが重要で、さらに、放光寺の扱いが筆頭に挙げられる点では、放光寺を定額寺として定めた段階で、上野国内でも筆頭を位置する寺院であった可能性がある。しかし、定額寺項の中で、「依氏人申請不為定額寺　仍除放巳了者」という特殊事情により筆頭に挙げられていたものかも知れないし、上野国府から近い位置乃至東山道沿いに近い位置関係の寺院として上げられたものかも知れない。

上述の点から、〝筆頭勢力〟の〝氏寺〟が山王廃寺で、山の上碑銘文の白鳳寺院・定額寺項の「筆頭寺院」が〝氏寺〟からも放光寺が山王廃寺である可能性が大きい。

山王廃寺出土篦描き〝放光寺〟銘文字瓦は、9世紀前半に比定出来る瓦で、内面（外面を布目側とした場合）は、転回体の絡状体縄目圧痕を有するもので、外面は布目を顕著に残している。作りは側部を見る範囲では一枚作りと考えられ、同様の瓦と対比させると（胎土が共通し、模骨痕を残し、側部に布目痕・側部の粘土のはみ出しが見られる瓦）一枚作りであると判断出来る。さらに胎土では秋間古窯跡群で焼造されたものと判断出来(肉眼観察)、秋間古窯跡群自体八重巻支群の如く山王廃寺の複弁七葉蓮華文鐙瓦を焼造し、供給寺院が〝山王廃寺〟と特定出来る点から、この文字瓦は、山王廃寺乃至山王廃寺系・国分二寺を主たる供給先にしたと推定される。ただ、この場合国分二寺は寺名の点で除外出来、前二者でのことと考えられ、敢えて〝放光寺〟を記入する点では、この瓦が、「放光寺」に向け焼造･供給されたと判断される。ただ、この瓦のみが他所（寺院）から搬入された可能性も無くはないが、積極的なことではなく、寧、前者にこそ出土地の意義があると考える。則、この「放光寺」銘文字瓦は〝山王廃寺〟に向け焼造供給が有ったと判断出来る。

上述した三者の資・史料の分析から、山王廃寺は「放光寺」としての該然性が非常に高く、現状でも山王廃寺＝放光寺と同定し得るものと考える。

上野国府（以下国府のみで略称する）は、前橋市元総社地区に所在し、当遺跡とは同一台地上で、至近の位置にあたる。そして、前述した放光寺の南側で牛池川を隔て位置している。国府は、現状でその痕跡を求めても無残な状態である。しかし、この現状下、国府域の推定は、近藤義雄[註40]・金坂清則[註41]・松島栄治[註42]・峰岸純夫[註43]・川原嘉久治[註44]氏の5氏によりその推定がなされている。一方、関口功一氏は、国府自体を構成する役所は、集中して設置されたのではなく、散在状態ではなかったのではないかと推定されている[註45]。また、近年の元総社地区の小開発により、国府域を区画すると考えられる溝状遺構の検出があり、一部報告されている。国府域に就いては、上述5氏による提示があるが、川原嘉久治氏は、表面採集による遺物の分布状態から方8町域を想定されておられる。従前に於いても方8町に就いては、近藤義郎・金坂清則氏により提示されている。川原氏の設定域は近藤氏の設定域と重複するものの政庁域の設定がある。また、方法論的にも共通するが、表面採集の結果を加えている点では、近藤氏の論を追証する有力な見解である。本稿ではこの川原氏の説を支持している。しかし、国府域を検証する調査方針による発掘調査がなければ正確な国府域の認定は行ない難いと考えるが、近藤・川原両氏の研究は、高く評価出来る。

ここで、国府の造営年代に就いて文献史料・考古資料毎に考えてみたい。

国府・国司に就いての史料上の初出は、日本書紀（以下、書紀と略記）大化2年（646）改新の詔に「（前略）初修京師置畿内国司郡司関塞斥候防人駅馬傳馬及造鈴契定山河（後略）」の記載が見られるが、畿内にのみ限っている。また、改新の詔自体、書紀編纂時の〝潤色〟等があり、特に〝郡司〟の記載は従前から多くの研究者に指摘されている部分でもある。直接的に内容をもっての論述も無理がある。

天智6年（667）には大津京遷都があるが、大津京遷都までの国内外の情勢・壬申の乱終焉までのわずか5年間という短期での状態から、条坊を有する都城としての存在については疑問視されている。

天智10年（671）に発布されたとする近江令もあるが、その存否をめぐる問題もある。しかし、同9年には庚午年籍が造られている。この戸籍は、上野国でも実在したことが交替帳により確認出来、時代の降った段階でも重要な扱いとなっている。

書紀では、壬申の乱（天武元年～同2年）（672～673）の折、大海人皇子が、吉野宮を脱し、美濃不破の関に至る間の記載に官衙乃至官衙に匹敵する施設の存在が記載されている。この点では、〝東国〟と呼ばれていた美濃国である点に注目される。しかし、美濃国より以東では明らかでない。

天武5年（676）・同11年（682）・同13年（685）には、藤原京占地・予定地の視察が行われている（書紀）。同10年（681）に飛鳥浄御原令の編纂が着手され、同年には上毛野君氏等に〝朝臣〟の姓が与えられているのも注目される。

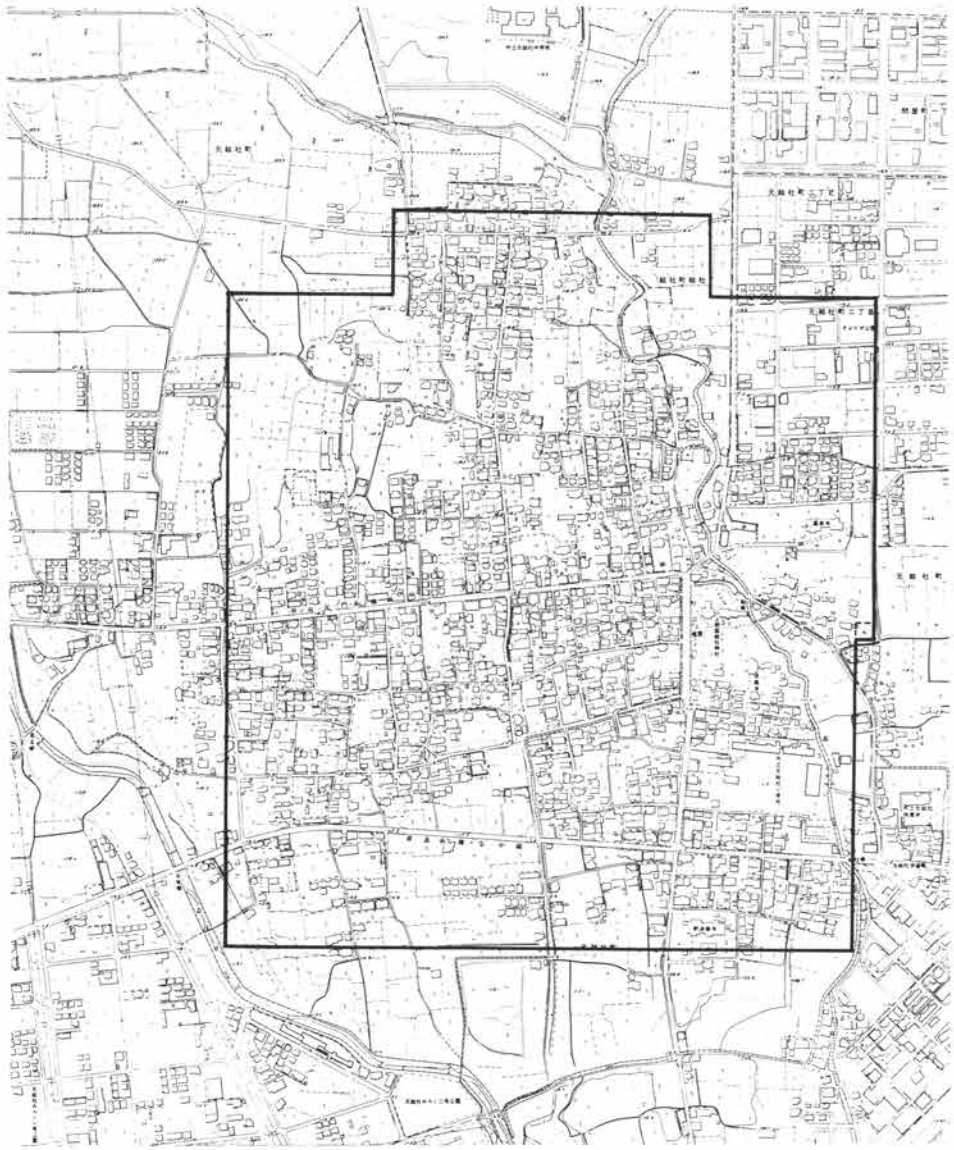
天武14年（686）には、諸国の家毎に〝佛舎〟を造るよう詔が出されている。この問題に就いては広く先学による論述が行なわれており[註46]、現在では、所謂〝府内寺院〟としており、国府内の諸施設としての斉一化を考えている。しかし、天武14年に国府内や舎を造営するように詔にて命ずることは、この段階で、多くの国府の成立がなければならない点がやや疑問視される。

持統朝では、持統2年（689）に飛鳥浄御原令が施行され、翌年には庚寅年籍が造られている。藤原宮は、天武朝では着工に至らなかったが、持統4年（691）に地鎮祭が行われ、同7年（694）に遷居している。本邦では、この藤原宮が都城としての初出であり、国府もこれを範として地方都城として造営があった点では、本格的な上野国府は、この藤原宮の造営と無縁ではないと考えられる。

藤原宮造営以降は平城宮が都城として造営されている。この平城宮への遷都は、和銅3年(710)であるが、大宝元年（701年）には大宝律令が発布され、律令体制が完成している。この大宝律令の発布は、平城遷都以前であって、大宝律令の発布の意義からも、この頃には少なくとも上野国府も着工が想定される。また、藤原宮出土木簡銘には〝上毛野國〟であるのに対し、平城宮出土の木簡は〝上野國〟であり、奈良時代以降は確実な形で〝上野國〟で表記されており、調・庸布でも同様である。この木簡は、律令政治下の負担形態の一部のものを都に輸送する時の荷札である。この点で、上毛野国から送り出す場合に、これを集約する郡の役所・さらにそれらを統括する国府の存在がなければならない筈であり、藤原宮出土の木簡は、国府が存在したことを示すと考えられ、少なくとも藤原宮の存続段階には国府は存在したと考えられる。

一方、当遺跡を含め、周辺地域の発掘調査の成果では、国府に係わる遺構の検出がある。ここで、この成果を鑑み、その造営時期を考えてみたい。

当遺跡周辺地域の国府に係わる調査では、先ず昭和36年（1941）尾崎喜左雄氏指導の元、群馬大学教育学部史学研究室により実施された、元総社小学校校庭西北部で掘立柱建物跡が2棟[註47]・住居跡7～8軒が検出され、昭和39年（1964）には同校校庭南東隅部が調査されたが遺構は未検出に終わる[註48]。同40年（1965）には大友町字村山の地が調査され、中世遺構を多く検出している。この三回に亘る調査を契機として、前橋市は学術調査の為の調査団を創設し、3ケ年3次に亘り発掘調査が実施されている。この調査では古墳時代前期・後期・奈良・平安時代の住居跡をはじめ中世舘跡及びこれに付随する諸遺構が検出されている。また、時期を明確に判断出来ないが、東西・南北方向に走行する溝状遺構の検出がある。しかし、調査体制・調査方法・検出遺構の詳述などは卓越したるものがあるが、出土遺物の図化がなく、ここに、便ならざる部分が残されている[註49]。



第9図　国府周辺地形図（1／10,000）

これ以後の発掘調査は、昭和52年（1982）以降多くの箇所が発掘調査実施されている。だが、従前の調査と異なり、全てが緊急発掘の範囲である。また、都市計画に基づく調査が大半を占め、道路となる可く部分の発掘調査が実施されている。この調査対象箇所は牛池川左岸上が主体であるが、一部では右岸・河川敷の部分が対象となっている。また、宅地造成等に伴なう調査も実施されており、多くの成果を納めている。

この元総社地区の当該の国府に係わる遺構を摘出すると以下のものがある。

閑泉樋遺跡で検出された大溝[註50]は、その南西方向で南北に走行するW－3（都市計画に係わる調査で検出されている溝で、同一と考えられる他所で検出されたものの総称）と、東方で直角に合致するものと考えられ、近藤・川原両氏の指摘する国府の北・西辺に当たるものである。しかし、従前に於いて一直線としての西辺が考えられていたが、寺田遺跡で検出された大溝[註51]の存在から、〝折れ〟状になる部分が生ずるのである。この部分は、地形上の制約により生ずるものであるが、東辺に就いては、今後の調査成果に託したい。また、地形上の制約という点では国分僧寺南東部の築地垣状況と同様である。

また、この南北走行する溝の東方で、Sトレンチ内から平行して南北走行するW－20・21が検出されてい

る。さらに、この両者はW－3に平行しており、形態上〝道〟と考えられる。これら以外でも多くの遺構が検出されている。しかし、上述した溝は、下限が9～10世紀代と判断されるものの、築造時期が限定されるものは皆無であって、これらの遺構からは、国府の範囲・軸方向が判明するだけで、造営時期は特定出来ない。

当中間地域では、国府と同一台地上で至近の位置に当たる。この点で、想定される時期（7世紀後半～8世紀初頭）の住居跡から検討してみたい。

この時期に比定し得る住居は、染谷・牛池川両河川沿岸とやや台地内部に分布している。このうち、河川沿岸に分布する住居の在り方は前代と同様であって、〝集落〟として前代から継続され当該期に至っている。この前代を含めると、住居の主軸方向が、東から北へ約30度前後である。これに対し、平安時代のそれでは大半がほぼ東へ約10度前後である。この違いは、全体図の中でも明確に認められ、隣接する遺跡に於いても同様な状態である。この主軸方位が変更する段階に何らかの画期が見出せる。この視点に立てば、住居の主軸が変向されることは、地割が係わることが想起され、周辺地域でも同様に認められる点は、地割の大規模な変更があったものと考えられる。この地割変更の要因こそが、国府の如くの大規模構築物が相当させられる。

当遺跡の住居では、7世紀第4四半世紀頃には確実に変向しており、この頃をもって国府の本格的な造営と考えられ、史料上の持統2年（689）頃が造営の着手と考えられる。

しかし、国府・国分二寺を擁する台地は、1000mで11mの勾配を有しており、国府の地を平坦に造営するには、相当量の削平が見込まれる。これは、後述する国分二寺でも同様であるが、国分二寺に就いては後述したい。国府造営に伴う削平は、8町四方の約640,000㎡の面積的に見ても、全体を一定に平坦にしたとは考え難い。現状でも、段形成をしたと思われる段が数箇所に残っている。ただ、室町時代には蒼海城が国府に重複して築成されており、この蒼海城に伴うものと思われるが、一部工事断面等で観察されている土層から、古代に伴う該然性が強い部分がある。この様に造営に伴う削平を段形成により最小限に留めたと考えられ、これによる工期等の短縮化を図ったものと推察される。これらのことより、大宝律令発布の段階には政庁等の主要な建物は完成していたことも想像される。

上述の様に国府は7世紀第4四半世紀頃には着工が有り、大宝律令発布の段階には主要な建物が完成していたと考えられる。

また、国府はこれ以後鎌倉幕府が創設されるまで、上野国の政治の中心となるが、弘仁2年（811）従来の上国としての格付けが大国に改められ、東国での上野国の位置付けが今迄以上に重要視され、天慶2年(939)には、平 将門による国府占領が有る。これらに代表される如く、東国で政治・経済上最も重要な国が上野国であったことが認識される。

この国府が造営される頃には、都との往還に最も重要な存在であった〝東山道〟は、確実な形で整備が行なわれていたと考えられる。

上野国には、この東山道の駅家が5ケ所設置されている。和名抄によれば、この駅は西から坂下・野後・群馬・佐位・新田が見られる。このうち、群馬駅家は律令制下の群馬郡に設置されたことが明らかであり、この駅家地は現在の前橋市大手町に近藤義雄[註52]・尾崎喜左雄氏により想定されている。筆者もこの意見に従うが、駅家の場合、馬を放牧する広い地が必要であり、1匹の馬に対して2ヘクタール程が必要であるとされ[註53]ている。この点からも、群馬駅家は、官舎と厩と牧場が合体して1つの駅家としての機能があったと考えられる。また、一駅家での馬の数は10匹であり、牧場は20ヘクタール程が最低必要であったと考えられる。こ

の20ヘクタールは、約20町に相当する。現在県庁の所在する背面には、利根川が流走しているが、当時はこの利根川も小河川として河路の存在であったことから、この河川より以東に20町分の土地とその他の官舎・厩が設置されたものと考えられる。恐らく、旧小河川の間と東山道の経路が山なり状の頂点状に達する以西で、東山道と、旧利根川の間に官舎等が設置され、それ以南と、官舎以東に牧場が設定されたものと想定される。

この時代は、前述して来た如く、前代に築造された古墳も一部を除きほぼ造営を終了し、上毛野国の雄族により寺院建築が開始される。この寺院のうち、上植木廃寺は、東国では龍角寺と並び、初出の寺院として中央の政治政策上の〝官寺〟として創建されている。この上植木廃寺ひいては、金井廃寺の造営の直接の援護者として〝上毛野君氏〟が係わるが、この〝上毛野君氏〟は、7世紀後半代に顕著な古墳の築造を停止している。そして、壬申の乱以後寺井廃寺・放光寺が造営されるものの、前者は、上毛野君氏の庶流の〝大野氏〟が係わり、やはり中央の政治政策上の〝官寺〟として造営される。そして、放光寺は、〝上毛野君氏〟の〝私寺〟として建立される。この〝上毛野君氏〟は上植木廃寺と係わった〝上毛野君氏〟とは、同一の〝上毛野君氏〟であったのかが大問題となるが、両寺の造営された地と、古墳の様相から、同名ではあるが異なる〝上毛野君氏〟と判断される。ここに東西二者の〝上毛野君氏〟の存在が想定される。

ここで、この〝上毛野君氏〟に就いて若干触れておきたい。

総社古墳群は、7世紀末期に至っても、大規模な宝塔山・蛇穴山古墳を築造し、〝私寺〟の放光寺（山王廃寺）の造営を含め、その主体者は〝上毛野君氏〟であることは前述した。また、国府はこの放光寺前面に占地しており、国府造営以前は、放光寺を造営した上毛野君氏の直属の従属民の地であったことから、国府の占地は、上毛野君氏で提供したことが明らかである。また後代の国分二寺も同様である。

この放光寺創建直前には寺井廃寺を壬申の乱直後に〝大野氏〟が係わる造営と考えられる。この大野氏は、大野朝臣果安の如く、壬申の乱の折には近江朝軍側にあって大海人軍と戦っている。この近江朝軍は、天智天皇と深く係わった氏族が参戦しており、この点では、上植木・金井廃寺の創建に係わった上毛野君氏も近江朝軍側に参戦した可能性は大きいと言える。事実、大野果安は、上毛野君氏の庶流であって、上植木廃寺に程近い山田郡大野郷が本貫地である。この上植木廃寺に係わった〝上毛野君氏〟に伴ない、近江朝軍の一将軍としての立場であったことも想像される。

上植木廃寺造営以後、周辺地域の顕著な古墳の存在は少なく、堀越古墳（大胡町）や築波山古墳（前橋市二の宮町）が認められるのであって6世紀代に築造の荒砥3墳に継続し、総社古墳群の如きの古墳群形成が認められないのである。このことは、荒砥3墳築造以降極度に勢力が弱体化したものと推察される。しかし、荒砥周辺地域には、丘陵上に展開する一大古墳群の形成があり、完全に弱体化したのではなく、首長に何らかの変化があったと推定され、〝上毛野君小熊〟の如くの状況も想定される。

また、赤城山南麓は石製骨蔵器が広く分布するという葬制面での変革があり、特に中塚古墳と武井古墓（武井廃寺）との関係の如く、8世紀以前乃至8世紀を前後する頃に墓制の変革が想定され、大胡町八ケ峰窯跡で焼造され〝薬壺〟はこの墓制に伴なう用途が想起される。

4．奈良・平安時代（国分二寺造営以降）

国分二寺は、当遺跡の両側に位置している。この二寺の創建は、聖武天皇の発願に拠る所は著名である。上野の場合も、建立着手の上限は、やはり、天平9年（737）・天平13年（741）の太政官符・詔に相当はされる。また、続日本紀（以下続紀と略記）の天平勝寶元年（749）条の記載には、石上部君諸弟・上毛野朝臣足

第10図　国分僧寺々域図

人（勢多郡小領）の両人は国分寺に知識物を献進したことにより、従五以下の官位を下されている。このことから国分寺が既に着工があることが確実視出来る史料である。ただ、〝知識物〟が何であったかが不明ではあるものの異例の特進である。

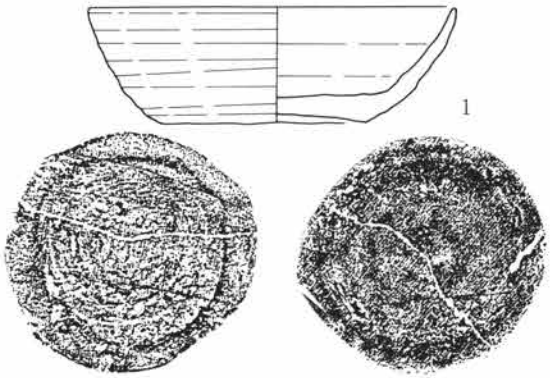
当遺跡では、この8世紀中頃に〝集落〟の変質がある。これは、国分二寺造営以前の住居は、5世紀末以降確実に集落として8世紀前半まで継続されているのであるが、国分寺造営以降8世紀代は、この集落が、無くなるかの如く縮小している。このことは、国分寺造営に伴なう〝寺地〟の整備に伴ない移動したと考えられる。しかし、9世紀以降は、また爆発的な量をもって住居が構築され、10世紀中頃には頂点に達し11世紀に至って著しく減少している。この傾向は、周辺遺跡に於いてもほぼ同じである。この時期は、周辺地域の台地・微高地・自然堤防に広く分布し、前代の集落の部分には確実に存在している。

しかし、国府に近接する地域の場合は、単に〝集落〟として把握せざる存在とは考え難く、今後に課する最重要な課題である。ただ、鳥羽遺跡で検出されている鍛治集団の地区は、前代に於ける〝品部〟的性格が内在するとも思われ、職能（種）集団として〝集落〟を形成していたものと考えられる。この点では、平城宮の様に条坊が完備されずとも、職能（種）集団単位毎の領域を設定し国府周辺に配備したと考えられる。特に、上野国の場合は、東北経営上、人的・物的に拠点的な意義も有れば、〝官〟としても大規模な工房が設定された可能性は大きい。

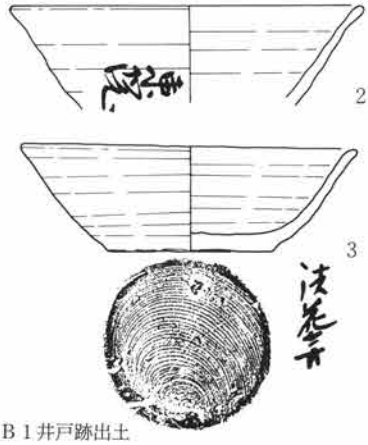
第11図　国分尼寺々域図

第12図　国分寺創建統一瓦当意匠

国分二寺も同様に、寺を維持・運営する組織も寺の周辺に設定された筈である。僧寺々地内には、塔・金堂・講堂・中門・回廊・経蔵・鍾楼・僧房などの主要な堂宇で、方二町の寺域の中は、これら堂宇でほぼ最低必要な空間を残すだけと考えられる。幸、上野国分僧寺の場合、〝上野交替実録帳〟「金光明寺」項に堂宇・諸雑（官）舎の種類と状態等が詳細に記載されている。しかし、この交替帳は長元３年（1030）に記載されていることから、創建期より約300年以後の状態であることから部分的な変更も考慮されるところである。



笠懸窯跡群山際瓦窯出土



Ｂ１井戸跡出土

第13図　国分寺関連土器図

また、発掘調査からは、昭和45年に実施された試掘調査の折に出土した〝東院〟墨書須恵器坏は、９世紀後半頃の年代観が考えられ、この頃に〝東院〟が存在したことが考えられる。そして、この土器の出土地点は、僧寺の東辺築垣想定線より東側であって、出土地点を重要視すれば、このあたりに東院の存在が推定される。

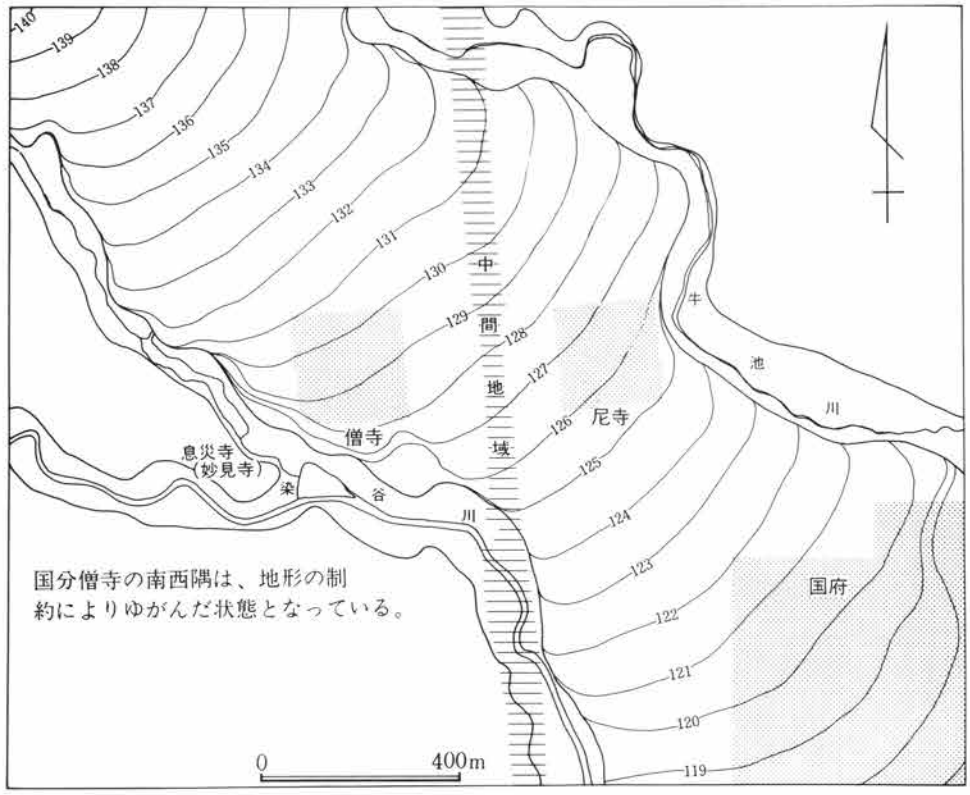
この国分寺の場合も、修理・営繕等の専業職種に従事する人間の居住区や大衆院の様な〝官舎〟も至近乃至・隣接して設置された筈で、僧寺の主要な官舎は現在の東国分の集落の部分に想定される[註54]。この二寺創建段階は、国分寺の存続期に於いて最も整備された状態であったと考えられる。

国分二寺の創建は、挙国一致をしての造寺体制が組まれた初めての寺院である。また、天平13年（748）の詔には、「（前略）限来三年以前造塔金堂僧坊悉皆令了　若能契　勅如理修造之子孫無絶任郡領司（後略）」（続紀）とあり、３年以内に国分寺を造営し、これに能く協力した者と子孫には郡領の司にするという内容であり、前述の石上部諸弟・上毛野朝臣足人等はこの詔により知識物を献進したとも推察される。この様に、挙国体制をして造営された国分寺は、釘１本から瓦一枚など、国内で供給したと考えられる点から、各郡郷毎の物的・人的動員が課せられた筈である。これらの中で考古学的には、堂宇の瓦に就いての研究が従前より行われている。特に、創建瓦当意匠に就いては、従来形の意匠とは非常に異なり、単弁五葉蓮華文としている。

国分寺造営に伴なう造瓦体制は、笠懸古窯跡群中の山際窯跡・鹿川窯跡で焼造されており、さらに笠懸古窯跡群開窯直後吉井古窯跡群でも多くの瓦を焼造している。笠懸古窯跡群は、国分寺創建瓦の焼造をもって開窯している。吉井古窯跡群は６世紀後半頃からその開窯がある[註55]。この頃、瓦を焼造していた秋間古窯跡群・乗附古窯跡群は瓦の供給を行なっておらず、何らかの背景が示唆される。

国分二寺の占地する台地は、それ以前に国府が造営されているが、元来は放光寺を造営した〝上毛野君（朝臣）氏〟の直属の地であって、秋間古窯跡群は、この上毛野君（朝臣）氏の私寺である放光寺に瓦を供給している。また、この秋間古窯跡群の開窯も乗附古窯跡群との係わりが想定される部分も有り、さらに、山の上碑銘文中の〝僧長利〟は、放光寺の僧であって、この乗附地域（観音山丘陵全体を指す）は上毛野君（朝臣）氏に深い係わりが考えられ、瓦当意匠の上からも、放光寺系の分布域に乗附地域に含まれている[註56]。

この国分二寺の地は、国府を含め、〝上毛野君氏〟が中央の政策に同調し、提供したのであって、ここに〝上毛野君（朝臣）氏〟の最大の係わりが認められ、個別のものを供給するのではない。ここに造瓦体制とか、各細部での供給体制の背景があり、笠懸古窯跡群で創建瓦を焼造する意義が認められる。恐らく笠懸古窯跡



第14図　7世紀後半～8世紀中頃の地形復原図（国府・国分二寺建立以前）

群は、寺井廃寺に係わりのある〝大野朝臣氏〟〝上毛野朝臣氏〟が瓦部門の供給を統括したものと想定される。事実として、この笠懸古窯跡群は現在の行政区分上では新田郡に含まれるが、この窯跡群からは〝勢多〟〝山田〟〝佐位〟郡の刻印文字が出土するものの、〝新田郡〟銘の刻印は未出であり、この窯跡群特異性が認められる。また、この創建瓦の一群に含まれる段階には、笠懸古窯跡群で開窯直後に吉井・藤岡古窯跡群からの供給も開始され、国分二寺の創建建物に葺かれている。

この吉井・藤岡古窯跡群からの供給もさることながら、各郡での造寺に係わる状況は、木材等の堂宇構築に必要な資材や人的な体制が組まれ、国分二寺の造営があったことが考えられている。

この様に、国府・国分二寺周辺の当該期の遺跡で、住居が主として検出される場合、その遺跡が本当に集落として把握されるのかという疑念がある。通常用いられる表現に、〝一般集落〟があるが、この場合、一般集落とはどの様な概念規定により表現されるのかが重要な点である。少なくとも、当該期は律令制下の社会体制であることからすれば、律令の諸規定による実態が伴なった筈であり、背景に耕作が主体と考えられる遺跡（検出遺構の主体が住居で数量も多く検出された場合）の場合であれば、律令制度下の負担大である。租・庸・調・諸役が課せられた筈である。これを全うし得れば、一般集落としての遺跡であることは考えられるものの、本来的にはこのことを証明・立証するのが目的の一つであって、短絡的に〝一般集落〟とは記述し得ない筈である。

当該期の周辺遺跡では、調査実施されている場合大半の場合多数の住居跡の検出がある。この様な遺跡がどの様な性格を備えていたのかが本来的に究明す可きことであって、土器編年にのみ固執し本来的な意義を忘却したかの如くの姿勢は粛正せねばならない。しかし、上述の点を明らかにすることは多大な労力を必要とするのであって軽々に論ぜられるものでもない。

上述の様に、周辺遺跡で国府・国分二寺・放光寺（山王廃寺）に隣接する遺跡の場合、〝集落〟として標記

し得ないのが実態であって、〝住居群〟としてのみ記述するしか未分析な状態である。

そして、当中間地域の場合は、筆者がこの考えに依り〝住居群〟と表記しているのは、集落として自立した存在でない点が明らかであって、国分二寺との係わりが明らかであるものの、この状況がどの時期迄降りえるのかが今後の整理に伴ない明らかにしていきたいと考えている。

引用・参考文献

1．群馬縣教育委員会『群馬縣史』第１巻　1927（昭和２年）
2．群馬縣『上毛古墳総覧』　1938（昭和13年）
3．元総社村誌編纂委員会『元總社村誌』　1955（昭和30年）
4．総社町誌編纂委員会『總社町誌』　1956（昭和31年）
5．金古町誌刊行会『金古町誌』　1963（昭和38年）
6．國府村誌編纂委員会『國府村誌』　1968（昭和43年）
7．前橋市史編さん委員会『前橋市史』第一巻　1971（昭和46年）
8．箕郷町誌編纂委員会『箕郷町誌』　1975（昭和50年）
9．上郊村誌編纂委員会『上郊村誌』　1976（昭和51年）
10．群馬県史編さん委員会『群馬県史　資料編３　原始古代３』　1981（昭和56年）
11．群馬県史編さん委員会『群馬県史　資料編４　原始古代４』　1985（昭和60年）
12．群馬県史編さん委員会『群馬県史　資料編２　原始古代２』　1986（昭和61年）
13．後藤守一『上野國愛宕塚』「考古学雑誌」第39巻　第１号　1953（昭和28年）
14．『日本III　古墳時代』「世界考古学大系」第３巻　1959（昭和34年）
15．斎藤長五郎『標準　群馬県史　原始・古墳時代』　1962（昭和37年）
16．群馬県教育委員会『上野八幡観音塚古墳調査報告書』「群馬県埋蔵文化財調査報告書」第一集　1963（昭和38年）
17．井上　薫『奈良朝仏教史の研究』　1966（昭和41年）
18．尾崎喜左雄『横穴式古墳の研究』　1966（昭和41年）
19．甘粕　健『武蔵国造の反乱』「古代の日本第７巻　関東」　1970（昭和45年）
20．梅沢重昭『古墳の終末』「古代の日本　第７巻　関東」　1970（昭和45年）
21．滝口　宏『氏寺の建立』「古代の日本　第７巻　関東」　1970（昭和45年）
22．奈良国立博物館『飛鳥白鳳の古瓦』　1970（昭和45年）
23．山田武麿『群馬県の歴史』「県史シリーズ」10　1974（昭和49年）
24．梅沢重昭『群馬県地域における初期古墳の成立（１）』「群馬県史研究」第２号　1975（昭和50年）
25．梅沢重昭『群馬県地域における初期古墳の成立（２）』「群馬県史研究」第３号　1976（昭和51年）
26．前沢和之『「上野国交替実録帳」国分寺項について―その作成過程と上野国分寺をめぐる二，三の問題―』「群馬県立歴史博物館紀要」第一号　1980（昭和55年）
27．奈良国立文化財研究所　飛鳥資料館『山田寺展』　1981（昭和56年）
28．関東古瓦研究会『第２回　関東古瓦研究会　研究資料』№１　1981（昭和56年）
29．関東古瓦研究会『第２回　関東古瓦研究会　研究資料』№２　1981（昭和56年）
30．群馬町教育委員会『昭和55年度埋蔵文化財調査略報　北原遺跡・八幡塚古墳範囲確認調査』「群馬町埋蔵文化財調査報告」第３集　1981（昭和56年）
31．白石太一郎『畿内における古墳の終末』「国立歴史民俗博物館研究報告」第１集　1982（昭和57年）
32．関東古瓦研究会『第３回　関東古瓦研究会　研究資料』№３　1982（昭和57年）
33．北垣聰一郎『いわゆる終末期石槨古墳の構造的変遷について―大和・河内を中心として―』「末永先生米壽記念獻呈論文集　乾」　1985（昭和60年）
34．右島和夫『前橋市総社古墳群の形成過程とその画期』「群馬県史研究」第22号　1985（昭和60）
35．角田文衛編『東大寺と法華寺』「新修国分寺の研究」第一巻　1986（昭和61年）
36．群馬町教育委員会『群馬町の遺跡―分布調査からみた地域のうつりかわり―』　1986（昭和61年）
37．渋川市教育委員会『有馬廃寺跡発掘調査報告書』「渋川市発掘調査報告書」第16集　1988（昭和63年）

註

註１　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団「上野国分僧寺・尼寺中間地域１」　1986（昭和61年）
　　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団「上野国分僧寺・尼寺中間地域２」　1987（昭和62年）

註２　群馬県教育委員会「上野国分寺周辺地域発掘調査報告書―僧寺尼寺中間地域の考古学的検討」　1971（昭和46年）。この調査上の最大の成果は、〝東院〟墨書の須恵器坏の検出であった。この〝東院〟墨書の坏は、僧院東側で出土しており、この僧寺東側に〝東院〟が存在したと推定され、この東院との係わりが中間地域の性格を示唆すると考えられた。

註３　今次の周辺遺跡を記述する折、2500分の１の都市計画図を参考にした。この地形図には都市化している部分は除外しても、多くの旧河道と考えられる地形が多く認められた。また、現在認められないものを、昭和23年頃に米軍により撮影された航空写真を参考にすると、地形の変化が著しい点が認められた。特に河川は著しく、上述の点が注意される。また、中間地域北側調査区の牛池川河川敷部では、ＦＰに伴なう泥流が著しく堆積しているものの、染谷川河川敷部では認められなかった。この点で、ＦＰに伴なう泥流により多くの河川の流路が変流した可能性がある。今後、この点については周辺遺跡に係わる重要な問題なので次号以降で明らかにしたい。

註４　右島和夫『保渡田３古墳』「三ツ寺Ｉ遺跡」発掘調査報告書所収　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団　1988（昭和63年）

註５　前沢和之『三ツ寺Ｉ遺跡の性格と意義』「三ツ寺Ｉ遺跡」発掘調査報告書　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団　1988（昭和63年）

註6　大江正行『上毛野連合から上毛野盟主政権の成立について』「群馬の考古学」（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　1988（昭和63年）
註7　梅沢重昭『井野川水系地域の古墳』「各地域の古墳」群馬県史資料編　3　原始古代3古墳　群馬県史編纂委員会　1981（昭和56年）
註8　川原嘉久治氏が採集されている。筆者実物を拝見させていただいた。
註9　大小路山古墳は現在低墳丘状にしか認められない。しかし、総社古墳群の前方後円墳の範囲を見る範囲に於いては、この大小路山古墳の位置する部分は空間地的な存在となっている。また、この部分周辺の地形を見ると、大きな盾状を呈する等高線の走行が認められる（第4図参照）。これは、総社城の築城の折に行なわれた整地とも考えられるところであるが、現在の様に機械化される以前の状況では、平均的に平坦にすることは考えられない。この点で、この盾形に等高線が走行する部分は古墳の痕跡と考えられる。この場合、盾形の丸味を帯びる中心にこの大小路山古墳が位置しており、この盾形に走行する古墳の跡と考えられる部分が、元来の大小路山古墳の外形と考えられ、周溝を考慮しても大小路山古墳が墳丘長100m程の前方後円墳であった可能性が高い点が指摘出来る。
註10　加部二生氏のご教示による。また、大小路山・遠見山古墳両古墳を橋本博文氏は、6世紀初頭頃に位置付けられている。
橋本博文『利根川流域の古墳と豪族』「多摩のあゆみ」　第20号　1980（昭和55年）
註11　関越自動車道（新潟線）の路線内のため昭和56年に発掘調査された青梨子古墳による。「年報―1―」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団　1982（昭和57年）
註12　この清里・長久保遺跡7号墳から出土した小刀は、畿内地方で鍛造されたと考えられ、その優質からは、所持していた被葬者の地位自体の優位も窮知される。
註13　甘粕　健氏は文献19の中で、右島和夫氏は文献34の中で、大江正行氏は註6前掲書中で論ぜられ、筆者も『上野国尼寺々地考』「群馬の考古学」（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　1988（昭和63年）の中で記述した。
註14　〝ダイジングロッド〟による方法である。この方法は、各行政体の水道局職員により、旧水道管探索に用いられている。筆者は、過去数年間にこの方法による溝・堀・溝状遺構の走行方向を検証する場合に用いているが、机上推定の走行方向と一致する成果が得られており、各地に於ける発掘調査の現場で、この方法による推定と調査による所見とが一致している。
註15　県内の後期前方後円の墳丘実測図を見る限りにおいては、墳丘長に対する後円部径の規模が、4～5割を占めている。一方武蔵国に該当する埼玉県内の同時期の前方後円墳の墳丘図と対比させると、埼玉県内の類例の多くは、くびれ部周辺が長くなっている。そして、群馬県内のものは寸づまりの様であって、埼玉県内のものは間延びした状態である。
前方後円墳の墳丘形態を研究されている飯塚卓二氏のご教示によると、上述点はやはり事実として認識されるところであるとのことであった。
註16　尾崎喜左雄「横穴式古墳の研究」　1966（昭和41年）の中で宝塔山古墳・蛇穴山古墳石室の整形技法と対比させている。
註17　津金沢氏は、尾崎氏の研究成果を追証している。「古代上野国における石造技術についての一試論」群馬県立歴史博物館紀要　第4号　1983（昭和58年）の中で、放光寺（山王廃寺）出土根巻石の実測を行ない、詳細な技法に就いての論述が行なわれており、石造品研究における指標になっている。
註18　前橋市教育委員会「史跡　蛇穴山古墳調査概報　文化財環境整備事業にともなう発掘調査」　1976（昭和51年）写真図版10～13・17図
註19　註18前掲書。同書の「Ⅰ　蛇穴山古墳について」の中で、『神道集』『伊香保記』の記載内容と共に紹介している。
註20　宝塔山・蛇穴山古墳石室の数値は、文献10による。
註21　文献34中に記述してある。また、筆者が地元での聞き取り調査を実施した折、愛宕山古墳の墳丘には〝きれいな石敷が廻っていた〟とのことを窺った。この状態は葺石と近世の土止めの石のことと考えられる。
註22　この区画域内では、加部二生氏により中世遺物が採集されている。この点で、やはり中世館跡の存在が濃厚であり、中世段階での地割が色濃く残っていると考えられる。
註23　前橋市元総社町周辺の発掘調査は前橋市埋蔵文化財発掘調査団「元総社明神Ⅴ」土地区画整理事業に先立つ埋蔵文化財発掘調査報告書　1986（昭和61年）により当該期の集落が認められる。これらの中には、大規模な溝（ＦＡ埋没）が調査されており、集落もＦＡ降下以前からの継続が認められる。また、この溝の性格は現在不分明であるが、規模からすればその構築の背後にはただならぬ様子が窺われる。また、王山古墳との関係も注意を要する集落とも思われる。
註24　本項執筆中、前橋市及び群馬町都市計画図（1：2500）を縮小したものを用い遺跡の分布図を作製した。この両都市計画図からは、旧河川流路の痕跡を考えられる。等高線の走行状態が看取され、昭和20～23年頃に撮影された米国空軍の航空写真でも同様に認められた。遺跡の分布は、これらの河川沿いに認められ、現状の河道のみでの分布状態では実態を把握し難い部分が有る。今後この旧河道流路の復原を含め具体的に考察してみたい。
註25　国分僧寺に伴なう諸雑舎の地は、拙著『上野国分尼寺々地考』「群馬の考古学」（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　1988（昭和63年）に記述した。
註26　前沢和之氏は、三ツ寺居館と車持氏との係わりを三ツ寺遺跡の調査報告書の中で〝車評〟〝伴造〟〝神社〟の観点から論ぜられた。しかし、〝車評〟は後の群馬郡であり、古代から現在に至る間は、〝上毛野国〟〝上野国〟〝群馬県〟の十三郡中の政治・文化・経済の中心であって、総社古墳群の被葬者を盟主とする前代は、上毛野君氏の〝領域〟としての地であったことが想定される。〝車評〟は車持氏の〝車〟を冠したと推定される点は良としても、なぜ〝上毛野君氏〟の拠点領域を〝車評〟としなければならなかったのかという点が問題である。また、〝群馬郡〟域を〝車評〟域とほぼ同一と考えるのであれば、総社古墳群の被葬者は〝車持氏〟となる。すると、史料上の七世紀後半代の上毛野国の盟主〝上毛野君氏〟の拠点を別の地に求めなければならないが、古墳・寺院・と両面で考えた場合、それに該当するものはなく、〝総社古墳群・放光寺（山王廃寺）〟は、やはり〝上毛野君氏〟により築造・造営されたとする点に妥当性が見いだせる。〝上毛野〟を冠する名称は国名とその筆頭氏族という二者であって〝上毛野国〟は、総社古墳群・放光寺（山王廃寺）の主体者の姓を冠している。これは、〝上毛野国〟一国を統治する旧法の〝国造〟と同じであって、十三郡中の単なる一郡に冠する名称ではない。ここに、〝上毛野郡〟としなかった最大理由が考えられる。このことから〝車評〟は車持氏の〝車〟を冠するものであるが〝上毛野君氏〟の領域内に本貫の地があると考えられることのみその名称の意義が見出せる。そして、豊城入彦命の後裔である。〝上毛野君氏〟〝車持君氏〟〝池田君氏〟〝有馬君氏〟〝垂水君氏〟〝大野君氏〟のうち車持君氏は早い頃（雄略朝段階）から〝伴部〟としての姓を冠した点に重要性があるものの、その勢力は大きくなかったものと判断せざるを得ず、やはり一国を代表する〝上毛野君氏〟が領有せしむるのが〝群馬郡〟で、車評を付する時点では、国名に筆頭の〝上毛野君氏〟の〝上毛野〟を冠し、その旧属領を第二勢力の車持君氏の〝車〟を国を構成する単なる〝評〟に冠したと判断される。神社の点では、氏の上げた〝車持明神〟・〝車若御子明神〟は、川原嘉久治氏の御教示によると、両者の現在の祭神は火産霊命・波迩夜麻比賣神であり、この祭神を祀る神社の分布は、

榛名山南麓でも現在の箕郷町に向かって帯状に分布しており、三ツ寺館跡周辺からそれ以東に分布する神社の祭神とは異なっており（氏はこの神社と祭神との係わりについて当事業団研究紀要第6号に発表される予定である）、三ツ寺居館跡周辺の神社の祭神は前橋市元総社町鎮座の神明宮と同じであるとのことである。これらのことは、三ツ寺館跡の主体者は少なくとも〝車持氏〟ではない点が指摘出来る。

註27　伊勢崎市教育委員会「上植木廃寺発掘調査報告書」1～3　1985～1987（昭和60～62年）
須田　茂『仏教文化の波及と上植木廃寺』「伊勢崎市史」通史編1　原始古代中世　伊勢崎市　1987（昭和62年）

註28　大江正行『金井廃寺の意義をめぐって』「金井廃寺遺跡」吾妻町教育委員会　1979（昭和54年）

註29　伊勢崎市教育委員会「上植木廃寺発掘調査報告書」2　1986（昭和61年）

註30　前掲註28

註31　須田　茂氏が実見し、その状況をご教示いただいた。また、この基壇と推定される位置は、関東古瓦研究会（第5回）の折に発表されている。

註32　昔より採集されている資料の一部は、現在も強戸小学校に保管されている。また、木暮仁一氏の採集資料は、大江正行・須田　茂により実測・採拓されており一部は文献28・29等に紹介されている。

註33　八賀　晋『地方寺院の成立と歴史的背景』「考古学研究」第20巻　第1号　1973（昭和48年）

註34　国史大系『日本書紀』巻廿八　天武天皇（壬申元年）の条
「壬辰將軍吹負屯于乃樂山上時荒田尾直赤麻呂啓將軍曰古京是本營處也宜固守將軍從之則赤麻呂忌部首子人令戍古京於是赤麻呂等詣古京而解取道路橋板作楯竪於京邊衢以守之　癸巳將軍吹負與近江將大野君果安戰于乃樂山爲果安所敗軍卒悉走將軍吹負僅得脱身於是果安追至八口而京毎街竪楯疑有伏兵乃稍引還之」

註35　神道大系　古典編六「新撰姓氏録」1981（昭和56年）

註36　前沢和之『上野交替実録帳について』「群馬県史」資料編4　原始古代4　群馬県・群馬県史編纂室　1985（昭和60年）

註37　尾崎喜左雄『山ノ上碑及び金井沢碑の研究』「群馬大学教育学部紀要」人文社会科学篇第17巻第6号　1967（昭和42年）

註38　前橋市教育委員会「山王廃寺第5次発掘調査報告書」1982（昭和57年）

註39　尾崎喜左雄『山ノ上碑及び金井沢碑の研究』「群馬大学教育学部紀要」人文社会科学篇第17巻第6号　1967（昭和42年）

註40　近藤義雄『上野国府の所在地について』「史学会報」第1輯　1947（昭和22年）
近藤義雄『上野国府について』「上毛史学」第5号　1954（昭和29年）
近藤義雄『上野国府をめぐる地名』「史学会報」
近藤義雄『上野国府をめぐる古代交通路』「信濃」第33巻第2号　1981（昭和56年）

註41　金阪清則『上野国府とその付近の東山道及び群馬、佐位駅家について』「交通の歴史地理」歴史地理学紀要16　1974（昭和49年）

註42　松島栄治『上野国府』「中央公論」10　1976（昭和51年）

註43　峰岸純夫『東道―東山道の復元―』「佐波郡東村誌」　1979（昭和54年）

註44　川原嘉久治『推定上野国府跡地覚え書き試みⅠ』鳥羽遺跡月報№16　1980（昭和55年）

註45　関口功一『平安中期上野国の一様相―群馬郡の分割をめぐる二つの史料―』「群馬県史研究」第25号　1987（昭和62年）

註46　代表的な論述に、石村亮司（喜英）「天武紀の『毎家作仏舎』について」日本歴史58　№28がある。

註47　上野国府跡発掘調査委員会・前橋市教育委員会「上野国府発掘調査概報―埋蔵文化財調査報告―」　1967（昭和42年）

註48　上野国府跡発掘調査委員会・前橋市教育委員会「上野国府発掘調査概報―埋蔵文化財調査報告―」　1968（昭和43年）
上野国府後発掘調査委員会・前橋市教育委員会「上野国府跡発掘調査概報　1967」1968（昭和43年）

註49　上野国府後発掘調査委員会・前橋市教育委員会「昭和41年度上野国府跡発掘調査概報」1967（昭和42年）
上野国府後発掘調査委員会・前橋市教育委員会「上野国府跡発掘調査概報　1967」1968（昭和43年）
上野国府後発掘調査委員会・前橋市教育委員会「上野国府跡発掘調査概報　1968」1969（昭和44年）

註50　前橋市教育委員会「閑泉樋遺跡」　昭和57年度文化財調査報告書　第13集　1983（昭和58年）

註51　前橋市埋蔵文化財発掘調査団・前橋市教育委員会「寺田遺跡」1987（昭和62）

註52　近藤義雄『上野国府をめぐる古代交通路』「信濃」第33巻第2号　1981（昭和56年）
尾崎喜左雄「群馬の地名」―上巻―　1976（昭和51年）

註53　大江正直氏のご教示による。氏は、現在当遺跡出土の馬骨を分析中である。

註54　木津博明『上野国分尼寺々地考』「群馬の考古学」（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　1988（昭和63年）

註55　6世紀後半には組織的な焼造体制が考えられる。これは、牛伏古墳群等の古墳出土の須恵器から判断されている。また、同様に、古墳出土の須恵器から、その生産地が在地と判断されるものが多い。また、三ツ寺Ⅰ遺跡出土のものの中にも吉井・乗附で生産されているものがある。ただ、現在では少数であって組織化された状態ではなかったと考えられ、一時的に生産された可能性がある。この三ツ寺Ⅰ遺跡出土須恵器から、この時期が5世紀後半代であると考えられる。

註56　大江正行『田端廃寺の推定―瓦類―』「上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書　第9集　田端遺跡」（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　1988（昭和63年）

註57　大江正行『金井廃寺の意義をめぐって』「金井廃寺遺跡」吾妻町教育委員会　1979（昭和54年）

第２節　周辺遺跡から見た上野国分僧寺・尼寺中間地域

前節で周辺遺跡に就いて述べたが、この中からも８世紀を前後する100年間は大きな転換期といえる。これは、前代７世紀前半頃迄の地域構成が私的な状態から、〝官〟へと変化し、これが確立さる段階として認識出来、古代日本の社会に於いてほぼ共通することである。

７世紀前半以前の段階

５世紀後半に三ツ寺居舘と保渡田３古墳の造営・築造がある頃には、当遺跡は〝畑〟を耕作する集落として展開され、この頃の元総社地区でも同様の状況であった。しかし、５世紀末頃の榛名山二ツ岳の爆発により、三ツ寺居舘は廃絶され、居舘内部の建物を移築する可く移動している。この移築地が、放光寺（山王廃寺）周辺と想定され、６世紀以降の居舘の地として居地したと考えられる。また、これに伴ない、墓域の移動があり、井出地区から総社地区へと遷居している。そして、遠見山乃至大小路山古墳を初出にして７世紀末迄の間に総社古墳群を形成した。この古墳群の被葬者が〝上毛野君（朝臣）氏〟であって、古墳群を形成する終焉頃に私寺〝放光寺〟を建立している。

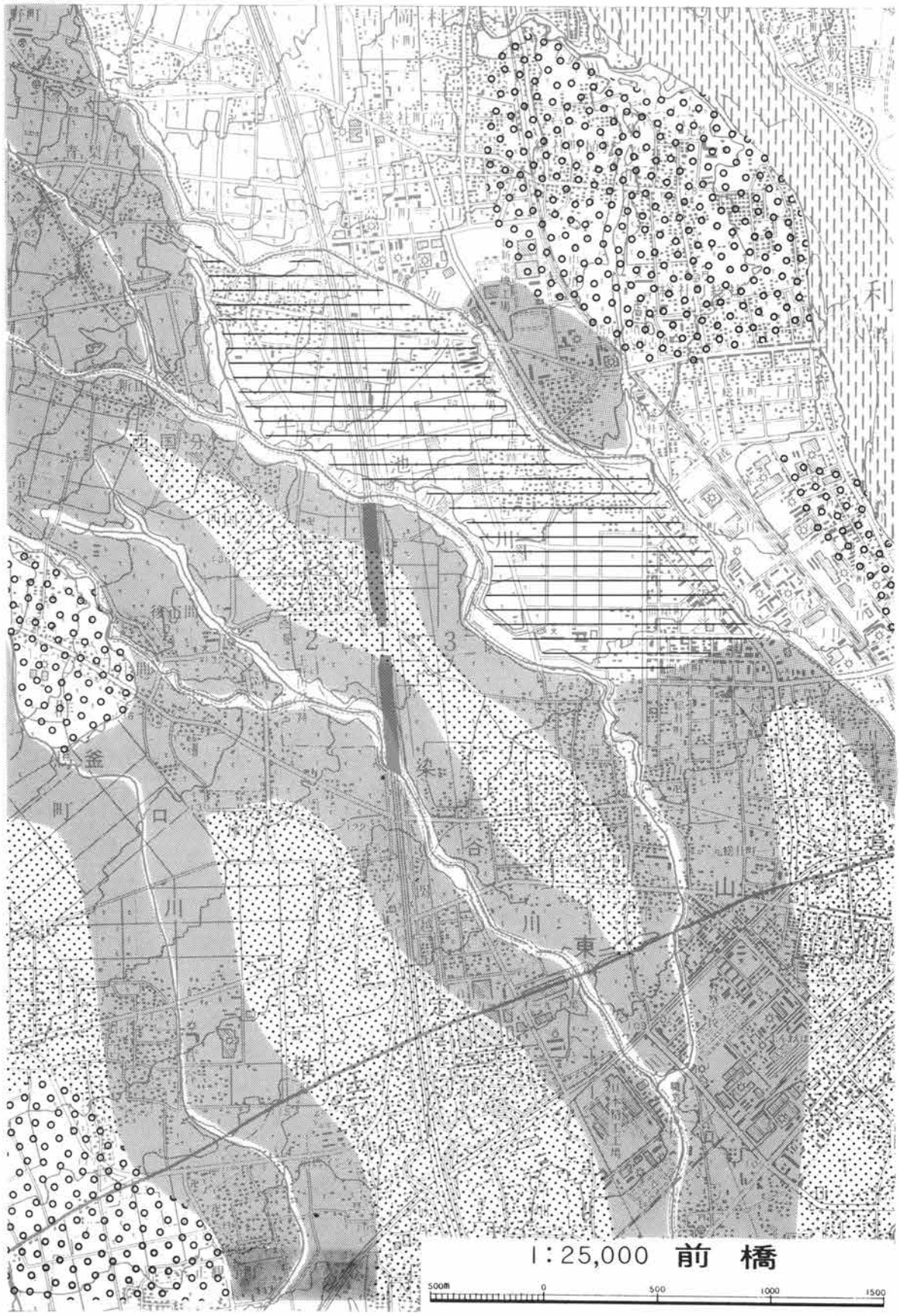
この間当遺跡では、ＦＡにより埋没した畑も耕地として直ぐ復旧しており、７世紀前半代迄〝集落〟として存続する。しかし、６世紀以降は、５世紀代に比較して増加傾向が認められる。これは、牛池川を挟んで対岸には、大首長たる〝上毛野君〟の本拠地が造営されることにより、当遺跡は、この〝居舘〟に最も隣接した台地に当たっていることに起因すると考えられるが、この頃の集落の拡大傾向は、周辺遺跡でも同様であり、何らかの画期を存在させると考えられる。

７世紀後半以降

７世紀後半頃には、上植木・金井・寺井廃寺が官寺として造営され、前代の小規模な〝屯倉〟的に建立される。この直後に、〝上毛野君氏〟の居舘の北西部に放光寺は建立される。さらに、この直後には国府がこの前面に造営される。この国府の地は、当遺跡と同一台地上で至近の位置にあたる場所で、〝上毛野君（朝臣）氏〟の直属の地であることから、後の国分二寺を含め、その地を中央に提供しているのである。この国府は、東西に染谷・牛池両河川が流走する〝好處〟の地であって、染谷川自体は旧来より非常に安定していた河川である。

この国府造営に伴ない、地割の改変があり、住居の主軸が大きく変化する。以後、住居の主軸はこの地割により決められており、11世紀代、住居跡がなくなる段階まで継続している。

８世紀中頃に建立された国分二寺は、当遺跡の性格を著しく変化させた。この二寺の寺域は、各々方２町と考えられ、この二寺に伴なう寺地は、恐らく、国府以西の、そのほとんどが該当すると考えられ、Ｂ区第１号井戸跡から検出されている〝法花寺〟墨書が示す如く、当遺跡は国分尼寺の寺地であったことが考えられる。そして、従前に於いて出土している〝東院〟墨書は、国分僧寺の東院が、当遺跡の東側に存在したことを示唆している。これにより、当遺跡は、８世紀中頃に大きな転換を迎え、前代の〝上毛野君（朝臣）氏〟の直属の〝私有地〟が〝官〟としての公の地へと変化している。このことに、乙巳の変（大化改新）以降、公地公民政策が、確実に、ほぼ完備されたことを示していることと考えられ、律令制下の上野国の変遷過程を如実に示していることと考えられ、当遺跡の全ての意義を認められるのである。



第15図　古墳時代土地利用図（1／25,000）

第４章　検出された遺構

第１節　南側調査区

第１項　南側調査区の概況

今次報告の南側調査区は、Ｃ区の一部とＤ区（以下Ｃ・Ｄ区と略称する）から検出された住居跡である。この区間はほぼ100m程の調査区内にあたり、西側延長は僧寺の東大門から北辺築垣の幅に相当する。また、この区間以南では、前項で記述したＣ区の住居集中地区である。この両者の間に多くの溝状遺構が集中している。また、この両者を分断する如くＣ区第１号溝状遺構（14世紀後半）が東西走行している。

このＣ・Ｄ区から検出された遺構は、ＦＡにより埋没する畑址1,600㎡・溝状遺構６条・住居跡５軒・井戸跡２基・土坑・ピット等である。このうち、溝状遺構は全体図の中で図示し、土坑・ピットに就いては、基本的なもので状態の良好なものを適時摘出し、本文中に図示した。また、この両者に就いては観察表編に規模等の事実記載を行なった。

住居・井戸は、各遺構毎に遺構図と共に遺構表を付し、所見を記述した。この所見は、調査担当が、発掘・整理の中で、特記される事項を記述したもので、各遺構毎に完結させてある。遺構表中の住居跡の主軸方位に就いては従来の方法と異なる方法を用い測定した。住居の主軸は、〝構築基準辺〟を検証し、これを主軸とした。

構築基準辺とは、住居のみを対象にするのではなく、人為による構築物全てに対し用いるものである。住居の場合は、当時の地表面から掘り込み、先ず〝掘り方〟の荒掘り段階があり、後に床面を造り、生活面としている。この住居の掘り方は時代毎に特色があり、平安時代の場合には一定した状態で見られないのが特色と言い得る。ただ、掘り方面を検出すると、ある部分乃至ある壁面側に、片寄った深目の掘り込みが認められる場合が多く、この片寄った掘り込みが、荒掘り段階での先行して掘削された部分と考えられ、ある程度掘り込んだ後に、ある程度の平坦面でもって構築する場合が多い。この片寄る部分が、壁面側にあった場合、構築着手時の意識の中には、指向する方向が認められ、東に対し、直行乃至平行する様になっている。（ただし、東側というのは、方位上の言葉ではなく、当時の漠然とした東という方向を指す。）これは、カマド自体を90数％以上の確立で東壁側に設ける点からも東に対する意識は認められる。この点から、当時の住居構築に際しては、この一つの面を基準にして〝四角い形〟の住居を構築したと考えられる点にあり、当該期の住居が、古墳時代の如く〝正方形〟〝長方形〟という均整のとれた形で住居を構築していない点からも、住居の外形に対する意識の変革があったことが窺われる（古墳時代の〝正方形〟〝長方形〟の均整のとれた住居の場合の掘り方は、大半の場合に於いてその掘り方は、住居掘り方中央部を平坦に台状に構築しており、掘削着手段階から、四面の外形を設定し、内側に向い構築していることが判断される）。

当該期の住居の場合、〝正方形〟〝矩形〟〝梯形〟〝長方形〟を基調としても均整のとれた形状でないが、いずれかの２面が平行であったり、直交状態に近い状態に構築されている。この場合、多々認められるのが、この２面の片側に沿って荒掘り時の片寄った深い掘り込みが認められる点である。これが、住居構築時に意識された面であって、その住居の〝向き〟を考えて設定されたと考えられるのである。これが構築基準辺である。また、これらの状況がない場合は、四面の壁で最も直線走行する面がある。この場合にはこの直線走行する面を主軸の計測に用い住居表中〝壁〟の項目中にゴチックで表わした。

出土遺物では、特に土器類断面中に粘土紐の継ぎ合わせ目（紐作りの場合）の状態と、紐作り後轆轤整形を行ない、水挽き状に引き伸ばした場合、この時に生ずる粘土の動き（走行）も同様にした。

覆土の層序説明は、埋没している覆土が殆どの場合、第III層土を主体としている。これは当時の文化層であり、住居の覆土は、この文化層が埋没している。このため、色調はこの第III層土の色調に従った。また、覆土の発色自体、混入しているローム土等により明暗があり、これにより生ずる明暗は無視した。

基本層序の第III層土は、6世紀以降B軽石が降下するまでの間約600年間の文化層である。このIII層土の発色は、基本土層の中で記述した如く、黒褐色乃至暗褐色を呈し、多量の粗～細粒のC軽石を含有している。このうち後者のC軽石は、第IV層上面に降下したと考えられるが、当遺跡での古墳時代前期には集落の展開があり、この頃の住居跡覆土の発色は黒色を呈する第IV層土が混入したものと考えられる。また、この住居跡の覆土は、C軽石を多量に混入している。このことは、IV層土の大半がC軽石降下以降に、C軽石降下以前に堆積していた黒色土を攪拌したことによる存在であって、自然な状態ではなく、ここに〝人為〟の形跡と見い出せる。この〝人為〟の形跡が〝畑〟耕作に伴なうものと考えられ、形成された時期は4世紀後半～5世紀初頭と考えられる。

III層土はこの直上に認められるが、直下のIV層土自体はC軽石の含有が非常に少ない。また、上述IV層土はFA降下直前は耕作土乃至旧表土であり、IV層土よりやや濁った状態の発色であった筈である。FAの降下年代は、5世紀末であり、当遺跡での該当する頃の集落はこれ以前より認められるところである。すなわち、FA降下後、FAを攪拌して形成されたのが第III層であり、発色がIV層土に比較して明るいのはFAを攪拌したことにその要因がありFA自体の降下も非常に厚く堆積したことが推定される。〝黒褐色〟の色調名は、このFAの混入を考慮し、FA降下以前の文化層としての表土層色調として使用している。このことから、正しくは「FAを混入する黒褐色土」である。時期的には5世紀末～6世紀初頭頃と考えられる。

住居の覆土には一つの特色が認められる。これは、調査時に覆土の観察用に設定したセクションベルトの土層堆積状態を観察すると（深さ20cm以上の場合）、大まかに上・中・下・壁際（下層）の四者での存在が見られる。この順位に従ってC軽石の混入に変化が見られ、上層では粗・細粒が多量に含まれており、中・下層に向うに従って混入量の減少と粒子が細かくなり、床面付近ではほとんど認められないぐらい少ない微粒子となっている。また、壁際でも下層と同様であり、やや発色が明るい。この明るい発色は、VI・VII層の混入と考えられる。この状況は、中間地域で検出された6世紀以降の住居跡の大半に同様な状況が認められている。

調査着手から間も無い頃には、この傾向を確実に把握出来ず、数量を調査するうちに着眼され、この共通点が認められる場合には多くの分層は行なわなかった。ただ、混入する夾雑物が顕著な場合には分層線により分層を行なった。ただ、前述した如く、発色の明暗が夾雑物により生ずる場合、土層の色調名称は利用せず、状況の可能な範囲を判断する中で文化層の発色名称に従った。

第２項　Ｃ・Ｄ区の遺構・遺物に就いて

南側調査区に該当する調査区名称は、南側からＹ・Ｚ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ区で全長約570m程である。この南側調査区のうち、Ｂ～Ｄ区（Ｂ区は一部）は、国分二寺の寺域南・北辺の東西への延長上にあたっている。そして、この間の存続問題に就いては、第１分冊中に記述されたとおりで、橋脚を設置することにより〝景観上〟の保存処置が講ぜられた。

昨年度、整理業務の一環として、上述の調査区内で検出された遺構出土遺物の数量（実測個体）点検を実施した。この折に、不分明であった各住居跡の年代も概判断され、遺跡の性格も明らかになってきた。また、前述した周辺遺跡からの意義付けからも明らかに出来るが、近後、さらに各住居の年代把握により、より実像に近づくのである。ここで、この南側調査区の概況を記し、本書報告内のＣ・Ｄ区の理解の一助にしたい。

南側調査は、既報告の縄文時代中期と古墳時代前期の集落が立地している。この両者は、重複した状態で占地しており、さらに古墳時代後期以降の集落・古墳時代の畑とも重複している。

古墳時代後期の集落は、前期と同様にＺ・Ａ区にその主体がある。また、この集落に伴なう祭祀が河川敷（染谷川）で検出されている。この祭祀は、所謂石組土坑（井戸状）のものを構築し、周辺からは臼玉・玉類、多量の土師器・須恵器・炭化材等が出土し、石組の上位では牛乃至馬と思われる。頭蓋の前半部を切除した部分を置いた状態で出土している。また、この石組土坑は、ＦＡ降下後２～５㎝程の間層をおき構築されている。

この祭祀遺構を含め、古墳時代後期の集落は畑作農耕を主体としたと考えられている。また、水田は未検出であった。７世紀後半から８世紀前半にかけては、集落の範囲が台地内部へと拡大し、Ｃ区中央部に達している。この間、７世紀第４四半世紀頃には、住居の主軸方位が30度程東側に変更し、以後、この方向に指向し住居の構築がある。この段階が集落構成上大きな画期として設定出来る。また、住居の内、Ｃ区内で検出された２軒（７世紀末～８世紀初頭）は、小規模の溝状に囲まれた状態であり、この部分は、僧寺の東大門と南辺延長部の幅の中に入り、地割もしっかりとした状態が僧寺創建以前にあったことが窮知し得る。この頃の遺物としては、須恵器の集落内への搬入が多く、大半が秋間・乗附古窯跡群で焼造された製品で80％程を占めており、放光寺（山王廃寺）創建瓦焼造後の須恵器生産の増加が窺われる。また、８世紀前半に比定されるＢ区第54・79号住居跡から須恵器硯が出土している。Ｂ54住の硯は口径11㎝・器高1.3㎝を測り、浅い皿状を呈する円面硯で、外面下半から底部は手持ちの篦撫でを施すもので、類例として、境町十三宝塚遺跡に１例ある。Ｂ79住のものは、袋状の円面硯に把手を有し、把手の部分は水が貯められる作りになっている。全長15.4㎝・面径10.7㎝・器高4.4㎝（いずれも復原値）。類例は、太宰府にある。

国分寺の創建が推定される８世紀中頃には、住居の数が減少し、９世紀に至って住居の増加が認められ、９世紀後半から10世紀後半まで顕著で、11世紀代に至り再び減少する。この間は、やはり地割による規制が認められ、東西走行する溝周辺は、住居の空白地帯となっている。この溝状遺構も、僧寺南辺築垣と平行し、概１町幅と考えられる状態になっている。

検出された遺構の時期的な特徴として、ある一時期迄は空白部であった所が認められる。この部分が当該の報告するＣ（一部）・Ｄ区で認められ、９世紀前半迄は住居の構築がなされていない。この地区に遺構の構築が開始されるのが、９世紀後半からであるが、量的には非常に少ない。この逆に、８世紀後半から連綿として構築される部分は、非常に多くの住居の切り合いがあり、特にＣ区の南半分側では、400～500㎡の中に60軒程が切り合っており、８世紀前半から11世紀前半迄の間にその構築がある。また、この部分は、幅の広

い方形区画を成す溝状遺構により区画される部分で、溝自体は、8世紀後半頃にその構築が考えられ、10世紀後半迄は、その機能があったことが考えられる。

また、C区内では、僧寺東大門の東方延長部分には溝状遺構が幅8m程の間に9条と集中しており、この中に上述の溝も含まれ、8世紀前半からのものが存在し、中でも、通水を目的とした第6号溝状遺構の存在は注目される。さらに、8号溝はB軽石により埋没しているものの、さらにこの第8号溝状遺構を切る溝状遺構があり、この溝状遺構もB軽石（青灰白色を呈する）により埋没している。このことは、従来より言われているB軽石の降下が2回あったことを追証するもので、遺構としては当遺跡で唯一のものである。

上述の如く、多くの住居が検出されることからも、9世紀以降に考えられる掘立柱建物の検出が無い点が特徴である。このことは、地割がしっかりとした状態が推定される点から、当遺跡で調査した部分は、居住域であって、倉庫等の建物は別の部分に推定される。

遺跡の性格としては、特にC区は、尼寺の賤院的な存在とも思われる。

遺物では、皇朝十二銭の承和昌宝が、A区第187号住居跡床面より出土し、饒益神宝がB区第83号住居跡床面から出土している。この他、瓦の出土は非常に多く、当該期の出土遺物総量の半分以上を占め、遺跡の立地上の特色が顕現している。

特筆し得るものとしては、B区第1号井戸跡があげられる。この井戸は、廃絶時に土師器甕を2個体底面に正位の状態で重ね、その上位に口縁部を欠損する須恵器壺を正位に置き、さらにその上位に須恵器坏を逆位に蓋をする状態に埋納している。このうち、須恵器坏には、〝法花寺〟墨書が、認められる。これらは、出土状況から、廃絶に伴なう祭祀と考えられ、〝法花寺〟墨書からは、国分尼寺に係わることが推定出来、この祭祀行為自体が、国分尼寺の尼僧乃至優婆夷により行なわれた可能性が非常に強い。このことから類推すれば、このB区1号井戸跡周辺迄が、尼寺に係わる地域であって、〝寺地〟として考えられる。また、このB区1号井戸跡の西方からは、かつて〝東院〟墨書の須恵器坏が出土しており、出土位置を重要視すれば、僧寺東院と理解される。そして、この両者から、僧寺と尼寺の寺地の境が、このB1号井戸跡の西方の部分にあったことが推察される。このB1号井戸跡から出土した須恵器坏の年代は、9世紀中頃に比定出来、これらの状況が9世紀代のこととも推定出来る。

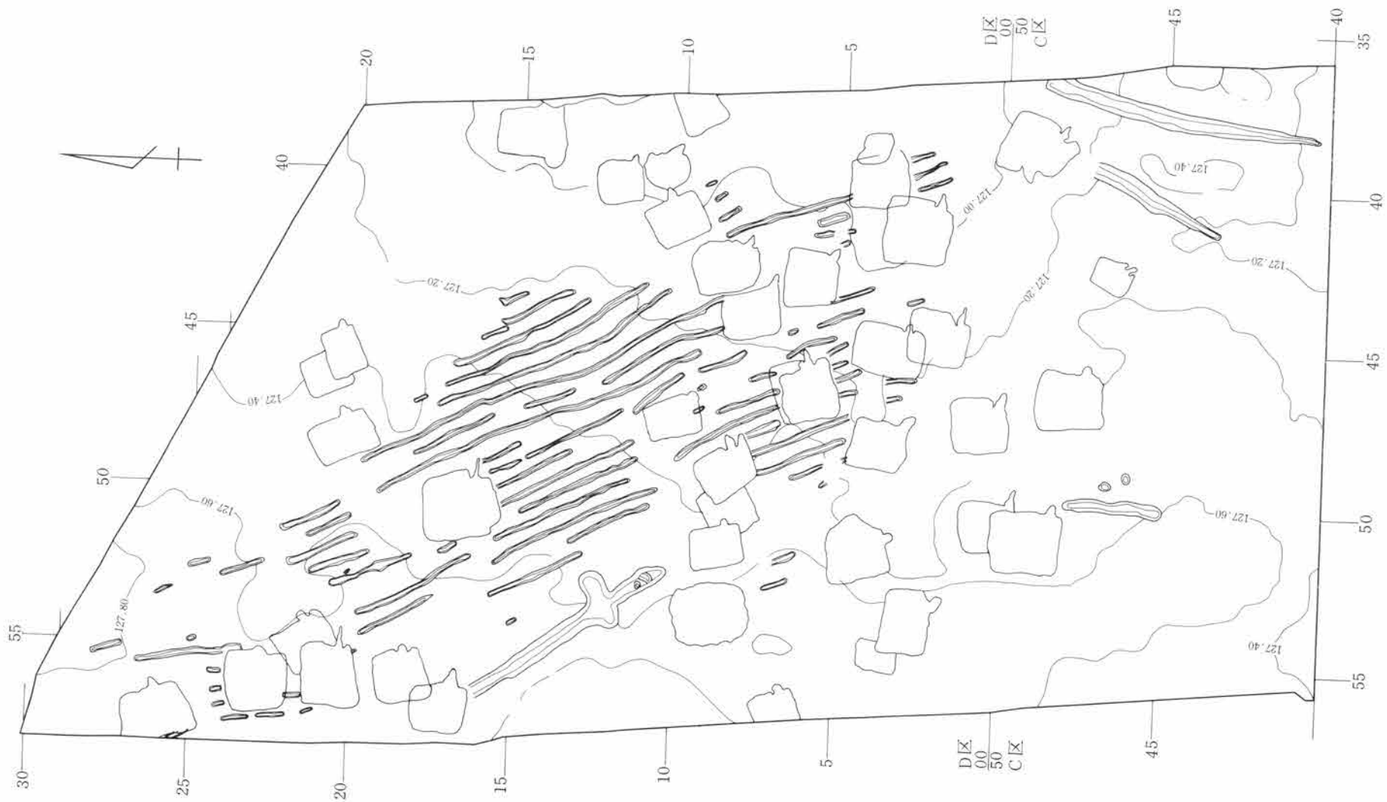
上述の他、D区内からは、〝金銅製男神立像〟が出土している。高さは5.35cmで、9世紀後半の年代が推定されている。この〝神像〟は、国分二寺に係わる遺物と考えられるが、僧寺は、仏教に専念させるための戒律が厳しく、〝神像〟は、僧寺での対像物ではなかったことが考えられ、この点では、尼寺に係わるものと思われる。

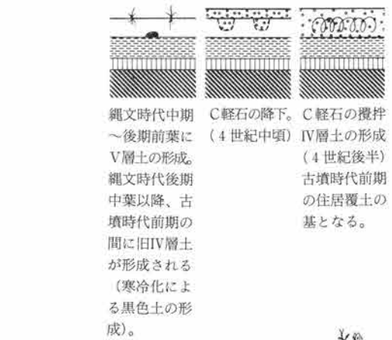
D区第12号住居跡からは、金堂等の天蓋から垂下する金具の一部と思われる金銅製の飾り金具が出土し、またC区第153号住居跡からは、やはり仏壇等の飾り金具と考えられる金銅製の金具の出土がある。

第16図　南側調査区全体図(1)

第17図　C区9号溝出土遺物実測図

第18図　南側調査区全体図(2)





仕上がり線

第19図　畑跡実測図

第３項　検出された遺構とその所見

畑跡（ＦＡ埋没サク状遺構）

今次の報告ではＤ区で検出された畑跡である。既刊の第１・２分冊中には他区での畑跡を図化掲載したが、部分的に検出された箇所のみであった。しかし、Ｄ区で検出された畑跡は、比較的広い範囲で検出された。

検出された〝サク〟は17条で約1400㎡の範囲に及んでいる。Ｄ区での確認面はIII層下面で、検出はほぼIII～IV層の面で行なったが、調査区内の北東側にのみ残存していた。これは、第19図に図示した等高線はVII層土面であるが、127.00m付近の高い部分は、表土層直下は直ぐVII層土であったことから、既に後世の攪乱により失なわれたものと考えられる。

Ｄ区内のVII層土は、基本土層中で記述した二者のローム土が認められている。乾燥状態で堆積したローム土は、等高線の走行が高まりを示す部分で、水成乃至水の影響を受けている部分は等高線が窪地状に走行する部分である。畑は、この水成乃至水の影響を受けたローム土の分布域で検出されており、この部分が当時も浅く湾入する状態の部分であって、低い部分に残存していることが判断される。

この状態の地形は、台地内部にほぼ河川に平行して水流が在ったことが想定され、乾燥したローム土の部分は高まりとして、自然堤防状的な地形であったことが推定される。畑は、この地形の高まりと低い部分に平行して耕作を展開している。

検出したサクの走行方向は、北―15度―西程で、相互のサク幅は、不一定であるが、凡そ、85cm～100cmの間が多い。覆土は、ブロック状のＦＡとIII層土の混土で、ＦＡは、サクの中に充満した状態ではなく、ブロックとしてサク底面直上乃至若干遊離して存在している。この状況は、調査区全体でも同様で、プライマリーな状態での埋没は認められなかった。この状況から、畑はＦＡの降下によって廃棄したとは考え難く、ＦＡ降下直後に、ＦＡを耕作土に攪拌し犂き込んだと考えられ、サクの底面周辺に残ったＦＡが、ブロックとして残存したことが考えられる。また、III層土下面で確認し得たのは、犂き込みがIV層に達し、ＦＡ自体ブロック状であることからであって、ＦＡ降下後も耕作は行なわれていたと判断される。

また、III層土の発色は比較的明るいが、これはＦＡを犂き込むことに起因すると考えられ、ＦＡ降下以前からの耕作土でない点は、ＦＡが確認出来る面がIV層上面であることからも推察される。ＦＡ降下以前の耕作土は、旧IV層土（Ｃ軽石降下以前）上にＣ軽石の降下があり、古墳時代前期の住居覆土には、Ｃ軽石を多量に含有する黒色土であって、IV層土たる文化層である。この古墳時代の住居覆土にＣ軽石を混入することは、この古墳時代にＣ軽石を旧IV層土に犂き込む要因があったことを示している。これが耕作であったことが推定出来、このことからＣ軽石を旧IV層土に犂き込む段階として、古墳時代前期を判断される。このIV層土（旧IV層土にＣ軽石を犂き込んだ土は、少なくともＦＡ降下直前までは存在したとえられるが、５世紀後半代の（ＦＡ降下直前まで）の耕作に伴ない純粋なIV層土ではなく、耕作される部分の土のみが、やや濁った状態が、やや明るい発色をしたと推定される。これらの状態を模式化したのか、第20図である。

この畑で耕作された作物に就いては、花粉分析を行なわなかった為不明である。花粉分析を行なわなかったのは、一端平面的に確認した為、現代の花粉の混入が想定された為による。今次の調査では、先ず畑の存在を明らかにすることに主眼を置き、化学的分析は近隣の調査が進行する過程の中で、予め念頭に置かれて戴ければ、と考える。

また、この畑跡は、昭和45年に実施された調査時には、〝ロームブロック〟が配列された状態で検出されたものが、畑跡と考えられ、国分僧寺側に向かい延びている。

溝状遺構（付図１）

Ｃ・Ｄ区内から検出された溝状遺構は５条である。以下各溝状遺構毎にその所見を記し、最後に溝状遺構の総括をしておきたい。

Ｄ区第１号溝状遺構（以下Ｄ１溝と略記）

Ｄ１溝は検出長8.25m・幅0.38～0.65m程を測り、断面形状は箱掘りである。走行方向は北－145度－南で南東方向に走行するが、全長自体非常に短かいものであり、溝としての機能を果たしたとは考え難い。出土遺物は周辺住居が存続する段階の土器類の細片と瓦片が数点あったのみである。

Ｄ区第２号溝状遺構（以下Ｄ２溝と略記）

Ｄ２溝は、Ｄ10住に切られている。検出長147.5m・幅0.65～1.3m程である。走行方向は北－125度－南で南東方向に走行する。この方位は、当溝の立ち上がる周辺に位置するＤ24住の指向方向に近似しており、両者の同時存続が想起される。また、当溝の南側には、長方形で土坑状の突出部が交叉する状態で検出されているが土層断面観察の結果、当溝が新しい。出土遺物は覆土上層よりＤ１溝と同様のものが出土している。

Ｄ区第４号溝状遺構（以下Ｄ４溝と略記）

Ｄ４溝は、Ｄ11・25・26・28・31・38住に切られ、走行方向から同一遺構と考えている。検出長49.3m・幅0.45～0.9m程を測る。断面は箱掘りである。走行方向は北―130度―南であり、Ｄ２溝に近似し、溝底面標高もほぼ同じである。この点で、Ｄ２溝との共存も考えられる。

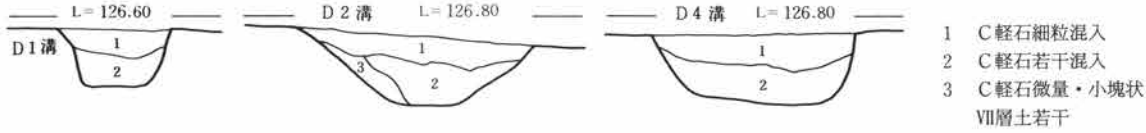
Ｃ区第２号溝状遺構（以下Ｃ２溝と略記）

Ｃ２溝はＣ３住に切られている。検出長10.6m・幅１m程で、断面は箱掘りである。

Ｃ区第３号溝状遺構（以下Ｃ３溝と略記）

Ｃ３溝は、検出長15m・幅1.3m程を測る。走行方向は北－13－西を測り、南南西方向に走行する。

これらの溝群は、その走行方向から二者に分別され、Ｄ１・２・４溝は、Ｄ24・37住の指向方向に類似性が認められる点から、９世紀後半頃に両者は共存していたか、溝が廃棄される頃に住居の構築があったとも考えられる。しかし、この溝の走行方向は地形の傾斜方向に向かっており、地形との関係が想定されるが、土層中には水流等を示す状況が一切認められなかった。一方、Ｃ２・３溝は南側に向い立ち上がっており、ここに何らかの存在意義が内在すると考えられるもののその要因は不明である。また、これらの溝が国分二寺の存在により想定される条里との関係も考えねばならないが、基本的に、国分二寺の寺軸とは異なっており、条里との係わりは否定される。これらの点から、Ｄ２・４溝は、地形との関係が大であることと、両者が平行して走行する点から勘案すれば、形態上道としての存在であった可能性が大であり、道であった場合は、その想定される調査区外部での延長方向から、南東側は国府に、北西側は僧寺北側に存在したと推定される国分僧寺大衆院に向かったものと類推される。すなわち、この両溝に挟まれた部分が道であって、その存在する目的は、国府と国分僧寺大衆院との往還用のものと考えられ、その存続はＤ24住等の存在から、８世紀中頃（国分寺創建頃）～９世紀後半での期間の存続と考えたい。



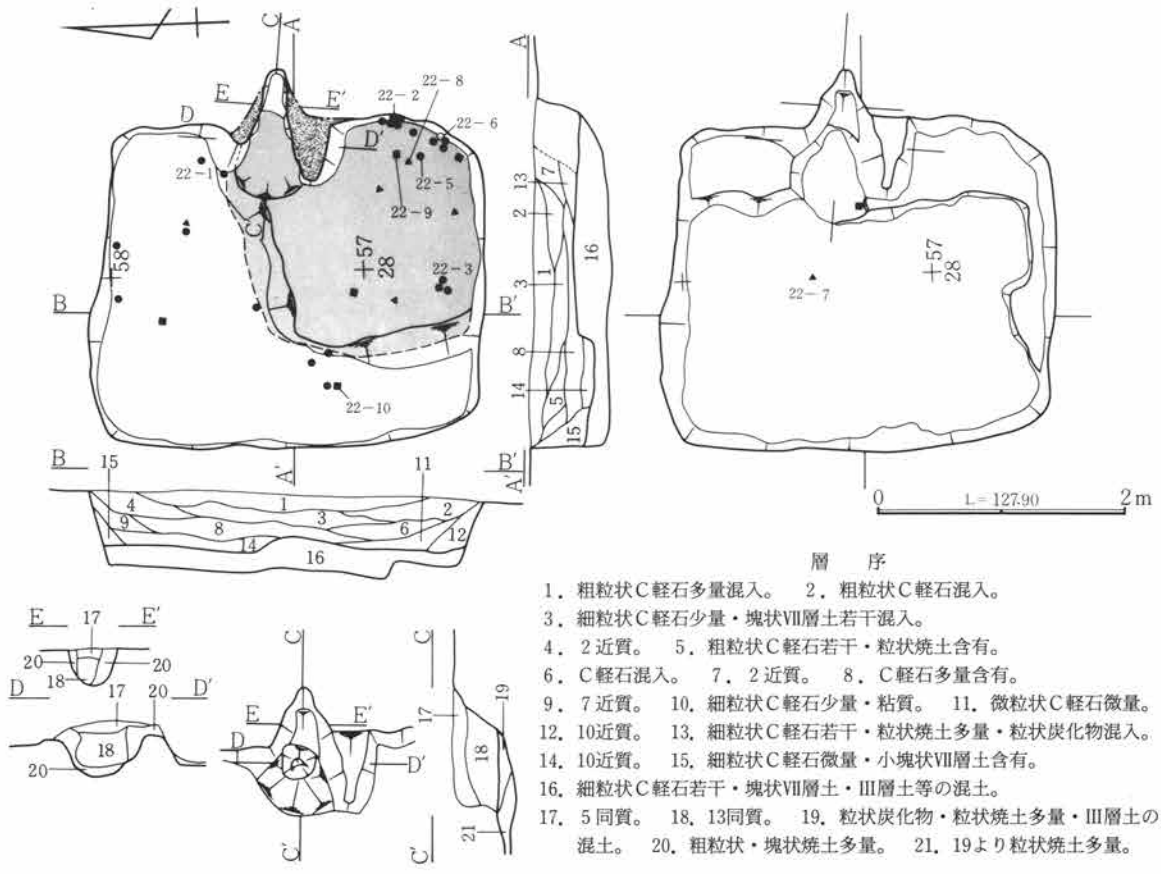
第20図　Ｄ区第１・２・４号溝状遺構土層断面図

住居跡

Ｃ・Ｄ区から検出された住居は50軒であり、以下住居毎に記述し、総合所見は後述する。

遺構名称	D区第１号住居跡	位置	27～29－D－56・57グリッド内				
平面形態	隅丸矩形	規模	3.03m×3.17m	主軸方位	北－93度－東	残存深度	約53cm程
壁	斜位気味に立ち上がる。	**北**	床面	改築以前は掘り方底面か？改築以後は大半が造床。			
壁溝	未検出。		貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。屋外の存在を考慮し周辺部を精査したが、やはり屋外でも未確認に終った。						
掘り方	改築以前・以後共に底面はほぼ平坦に掘削している。						
カマド	位置	西壁中央部。屋外に約40cm突出する。		主軸方位	北－96度－東		
形状	舌状を呈し、太い袖が住居内に「ハ」の字状に開く。			改築の有無	有。		
規模	全長100cm・屋外長40cm・屋内長60cm・袖間幅113cm・燃焼部幅50cm・煙道幅18cm						
焚口	両袖部より扇状を呈する。		袖	右袖は住居改築時以前の燃焼部壁を利用し削出し。			
燃焼部	袖部中央より煙道下端部の間で、全体規模に比較して狭い。顕著な被熱面は認められない。						
煙道	長さ33cm程で比較的良好。		掘り方	改築は旧状を完全に破壊していない。			
遺物出土状況	細片化した土・陶器・瓦類等覆土内全体に出土している。						

所　見　当住居跡は、カマドを含め住居全体が改築された状況が看取された。改築状況は、掘り方に於いて明確である。すなわち、廃棄時（改築時）での掘り方は、東壁下及び南壁下に段状に検出された底面が拡張部分である。改築以前は、長方形状に認められる一段低い面が基底面と判断される。これに伴うカマドは、女瓦片を袖乃至燃焼部に補強している。この女瓦の上端は、改築カマド掘り方面であり、カマド（住居）改

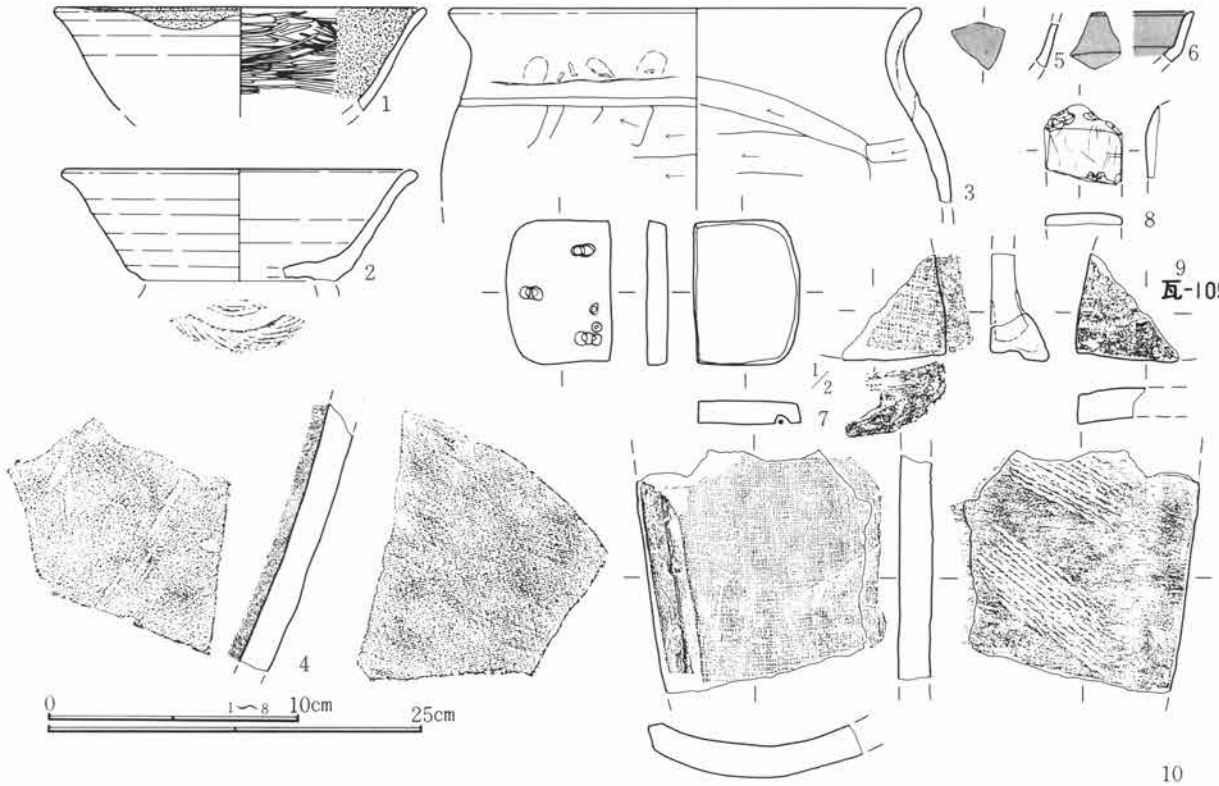


層　序

1．粗粒状Ｃ軽石多量混入。　2．粗粒状Ｃ軽石混入。
3．細粒状Ｃ軽石少量・塊状Ⅶ層土若干混入。
4．２近質。　5．粗粒状Ｃ軽石若干・粒状焼土含有。
6．Ｃ軽石混入。　7．２近質。　8．Ｃ軽石多量含有。
9．７近質。　10．細粒状Ｃ軽石少量・粘質。　11．微粒状Ｃ軽石微量。
12．10近質。　13．細粒状Ｃ軽石若干・粒状焼土多量・粒状炭化物混入。
14．10近質。　15．細粒状Ｃ軽石微量・小塊状Ⅶ層土含有。
16．細粒状Ｃ軽石若干・塊状Ⅶ層土・Ⅲ層土等の混土。
17．５同質。　18．13同質。　19．粒状炭化物・粒状焼土多量・Ⅲ層土の混土。　20．粗粒状・塊状焼土多量。　21．19より粒状焼土多量。

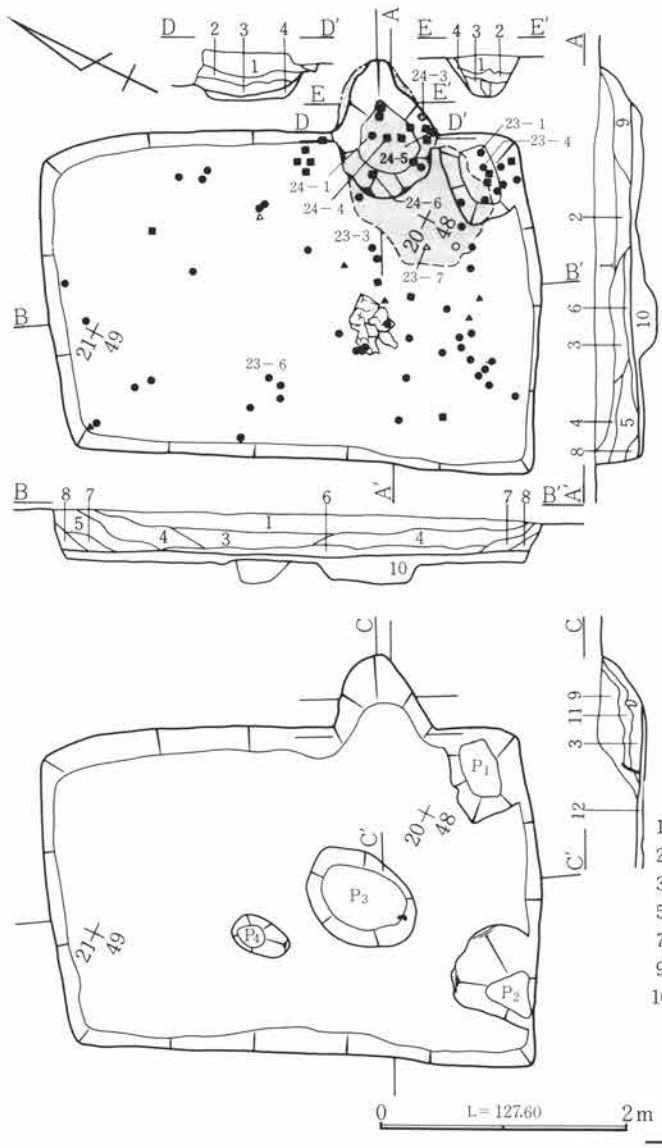
第21図　D区第１号住居跡実測図

築に伴い女瓦上半は逸しているものと考えられる。住居の改築後は形状を隅丸正方形状にし、改築以前の床を約15cm程埋設し床面を構築している。カマドはほぼ同位置であり、住居の東側拡張分に相当する移設は行っていない。また、この拡張時に右袖を造り出している。この袖は、旧状の燃焼部壁を利用する状態である。床面は、南東側部が高まっており、改築時の排土処理とも思われる。そして、この部分には、カマド使用に伴う炭化物・灰がほぼ同一に分布していた。出土遺物は、土・陶器類・瓦類等細片化したものが覆土内全体から多量に出土している。図示した遺物は破片が全てであるが、形状が判断される比較的良いものを扱った。そして、石帯は住居中央掘り方（床面構築土）内から出土した。廃棄時期は10世紀代と考えられる。（木津）



第22図　D区第1号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	D区第2号住居跡	位置	19〜21－D－47〜49グリッド内				
平面形態	長方形	規模	3.28m×4.06m	主軸方位	北－65度－東	残存深度	約35cm程
壁	斜位気味に立ち上がる。	**西**	床面	平坦で全体が造床。掘り方底面より平均的な厚さである。			
壁溝	未検出。		貯蔵穴	基調を長方形状にとる。70cm×50cm・深度15cm			
柱穴	未検出。屋外周辺を精査したが未確認に終った。						
掘り方	底面はほぼ平坦であるが、中央から南壁にかけて3ケ所に掘り込みが認められた。						
カマド	位置	北東壁やや南より。屋外に約58cm突出する。		主軸方位	北－62度－東		
形状	舌状を呈する。袖の崩壊に起因するのか？			改築の有無			
規模	全長110cm・屋外長58cm・屋内長42cm・袖間幅120cm・燃焼部幅70cm・煙道幅－cm						
焚口	扇状？袖の未確認による。		袖	未確認であるが、元来より付設が無かったのか不分明。			
燃焼部	断面からは広く感ぜられるが、上述の状況下では判断しかねる点がある。						
煙道	長さ40cm程か。		掘り方	底面は平坦で、住居掘り方と同一の面として構築される。			
遺物出土状況							



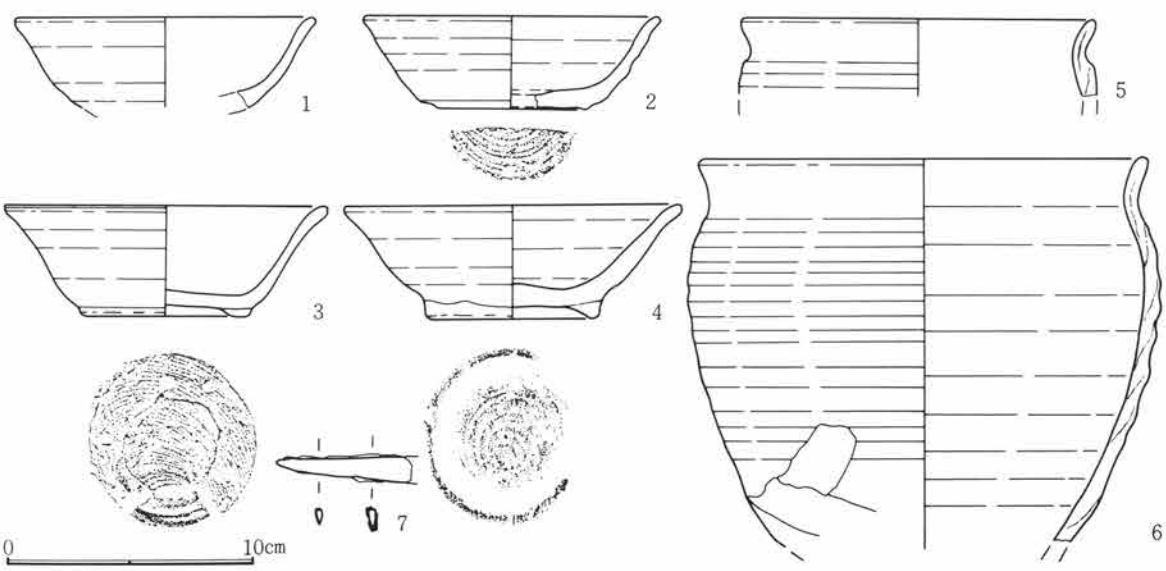
所　見　本住居跡は平面形態を長方形として、西壁が若干東壁に比べ北側へ開くが、全体的には整ったプランを呈する。床は貼り床であり、よく踏み固められ堅緻である。掘り方床面は一様に平坦面を造り出し、ほぼ中央に楕円形のピットを設けている。しかしこれは貼り床の段階で埋め戻されており、生活面からの使用は認められない。覆土中より使途不明な石材の小片が出土した。

カマド東壁中央からやや南側を舌状に掘り込み、さらに床面を浅くほぼ扇状に掘りくぼめて構築している。掘り方からの観察では、改築はなされていないと思われ、袖も未検出に終わった。

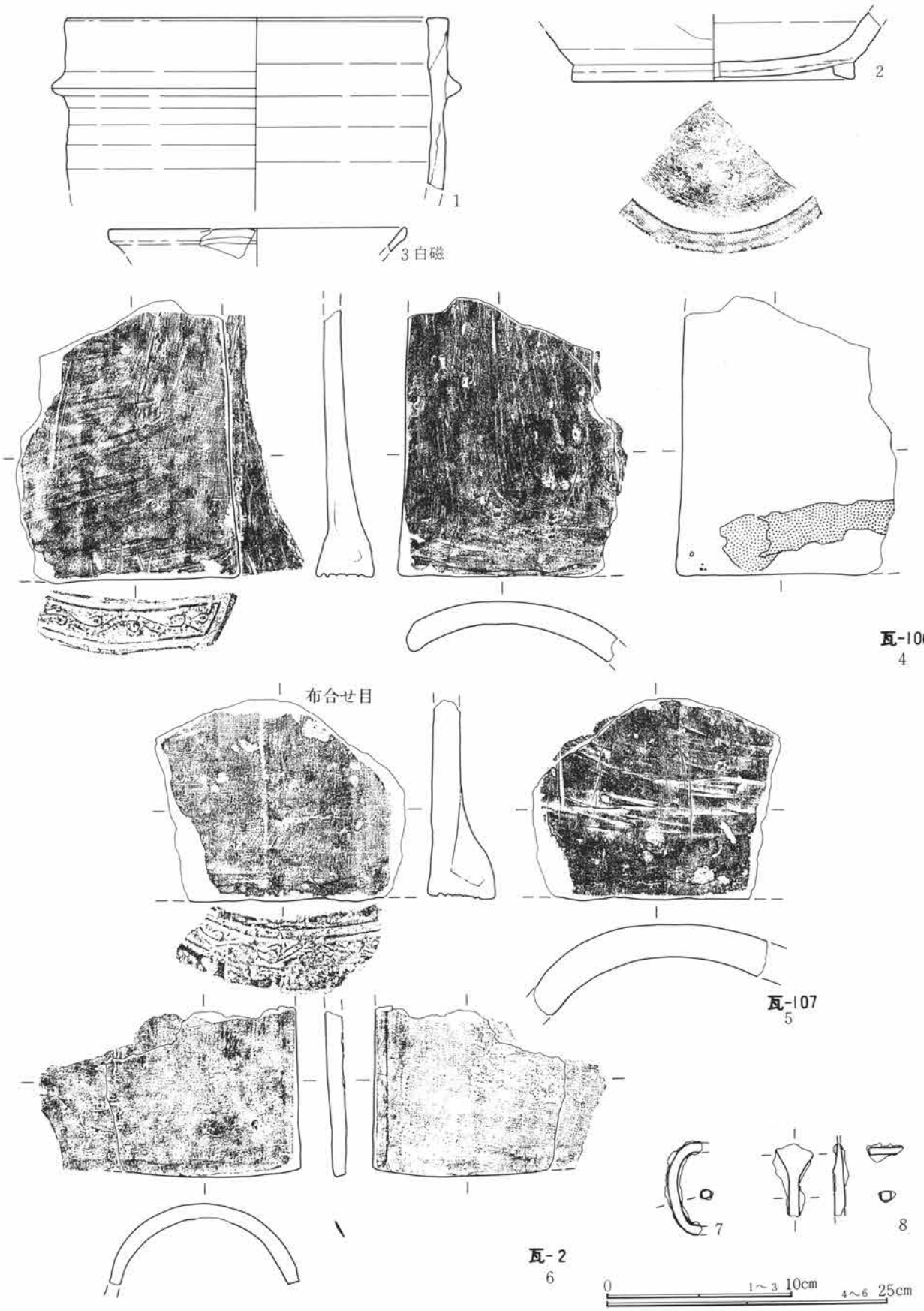
遺物は住居全体に散在していたが、床面上のものは少ない。廃棄時期は10世紀前半と考えたい。　（石北）

層　序

1．粗・細粒状Ｃ軽石多量混入・粒状炭化物若干。
2．粒状Ｃ軽石多量混入・微粒状焼土若干。
3．粒状Ｃ軽石多量混入。　4．細粒状Ｃ軽石少量。
5．細粒状Ｃ軽石微量。　6．微粒状Ｃ軽石微量・硬質土。
7．Ｃ軽石無含有・粒状Ⅶ層土含有。　8．７近質。
9．粗・細粒状Ｃ軽石混入・粒状焼土含有。
10．掘り方埋土。　11．粗・細粒状Ｃ軽石少量・粒状焼土・粒状炭化物混入。　12．細粒状Ｃ軽石微量・粗粒状焼土・粒状炭化物多量混入。



第23図　Ｄ区第２号住居跡・出土遺物実測図

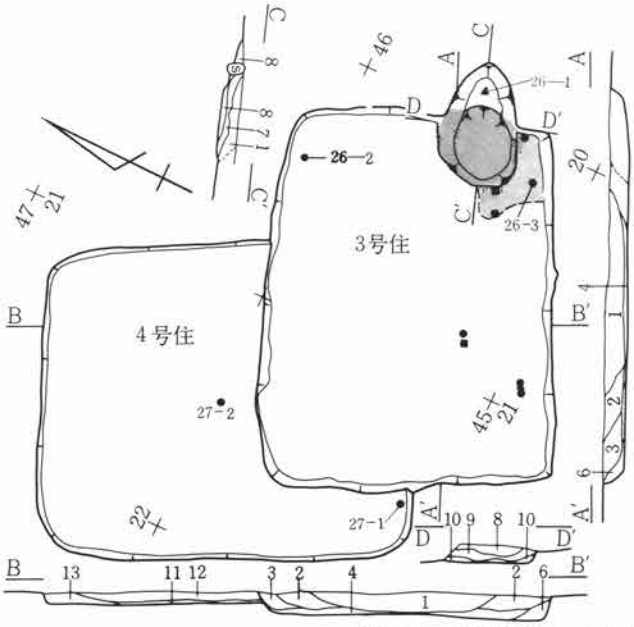


第24図　D区第2号住居跡出土遺物実測図

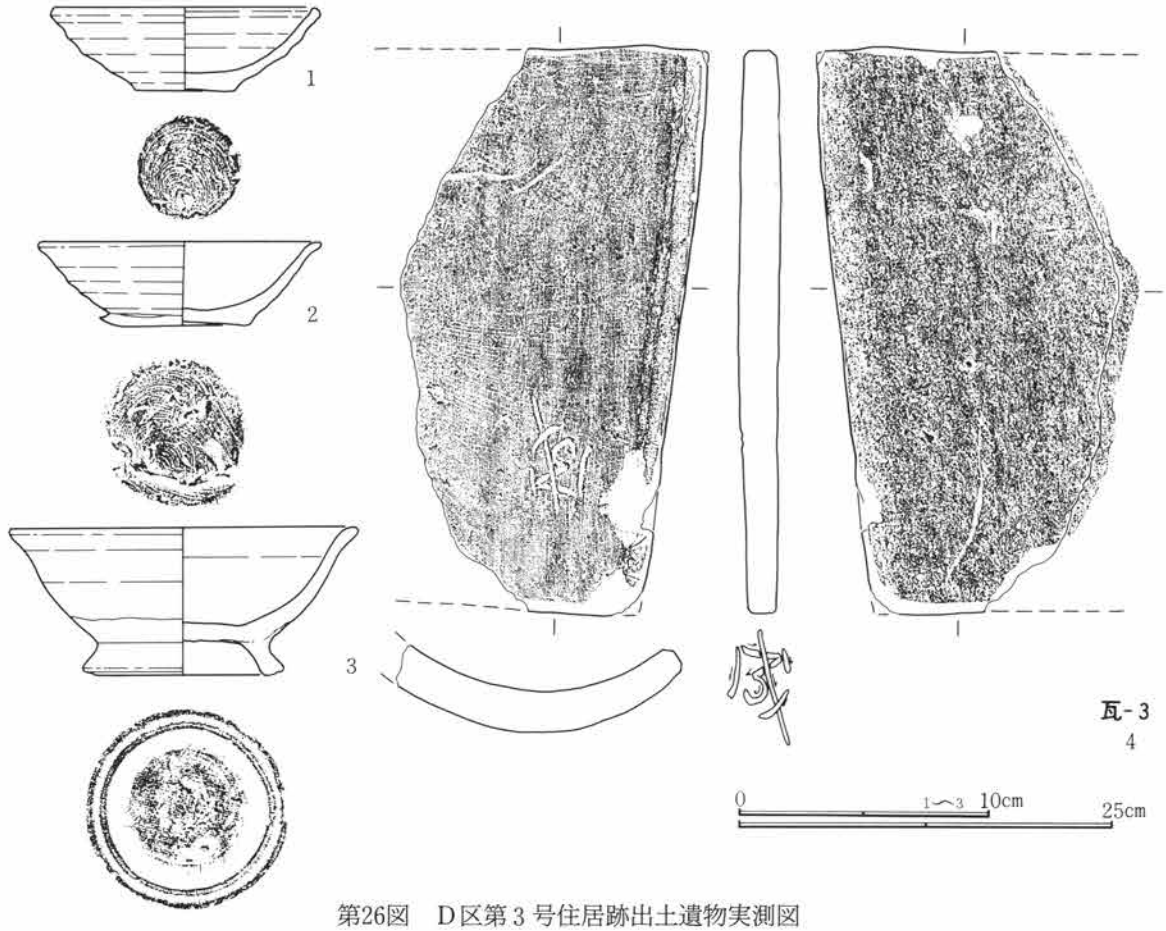
遺構名称	D区第3号住居跡	位置	19～21－D－44～46グリッド内				
平面形態	長方形	規模	3.42m×2.39m	主軸方位	北－65度－東	残存深度	約20cm程
壁	斜位気味に立ち上がる。	南	床面	平坦で掘り方底面と一致する。			
壁溝	未検出。		貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋外周辺・第4号住居跡底面を精査したが未確認に終る。						
掘り方	住居全体が掘り方にあたる。南・西を基準として精緻に掘削し底面を床面としている。						
カマド	位置	位置東壁南寄り。屋外に約45cm突出する。		主軸方位	北－70度－東		
形状	検出形状は鶏卵状を呈するが、支脚が検出部奥寄りのため即断しかねる。			改築の有無	不分明。		
規模	全長95cm・屋外長45cm・屋内長50cm・袖間幅－cm・燃焼部幅65cm・煙道幅－cm						
焚口	支脚前面までとすればほぼ円形状。		袖	未確認であるが、支脚・焚口の状況から無袖と考える。			
燃焼部	検出部奥側が相当する。全体は遺存不良なため詳細は判断しかねる。						
煙道	未確認。細長な状態か？		掘り方	掘り方は焚口部が平坦であったと考えられる。			
遺物出土状況	カマド右側で少量床面上で出土している。また同部には炭化物が多く検出されている。						

遺構名称	D区第4号住居跡	位置	20・21－D－45～47グリッド内				
平面形態	隅丸矩形	規模	3.00m×2.48m	主軸方位	北－66度－東	残存深度	約10cm程
壁	斜位気味に立ち上がる。	東	床面	平坦。掘り方底面をそのまま利用。			
壁溝	未検出。		貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋外周辺、第3号住居跡床面を精査したが未確認に終った。						
掘り方	底面をそのまま床面にしている。カマドはほぼ南東隅かこれに接近した位置と判断される。						

所　見　当住居跡は確認段階でD区4号住居跡と重複する事がわかっており、4号住居跡のカマドを壊している点から新しいと考えられたが、土層面での観察からも同様の結果が得られた。カマドの袖の存在は確認されず、燃焼部の掘り込みも極めて浅い。煙出し部分に大きめの石が存在し、掘り方にまで埋め込まれているが、カマドの構造との関係は不明である。遺物はカマド周辺と北壁の北東隅に出土している。住居跡の廃棄時期は遺物から10世紀前半と考えられる。　（麻生）

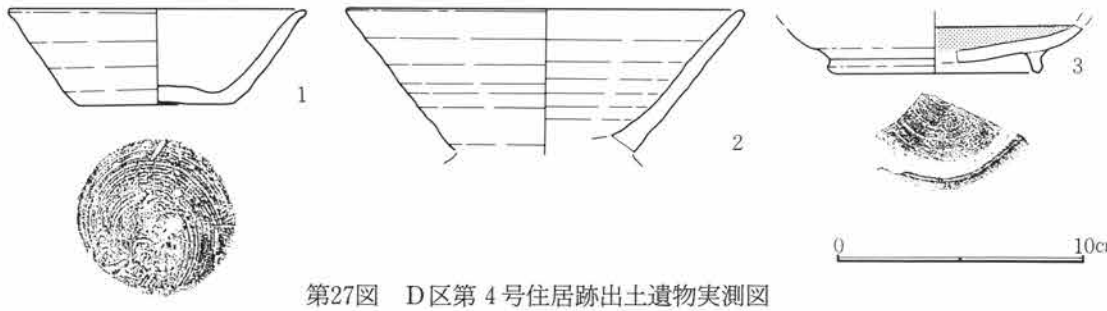


第25図　D区第3・4号住居跡実測図



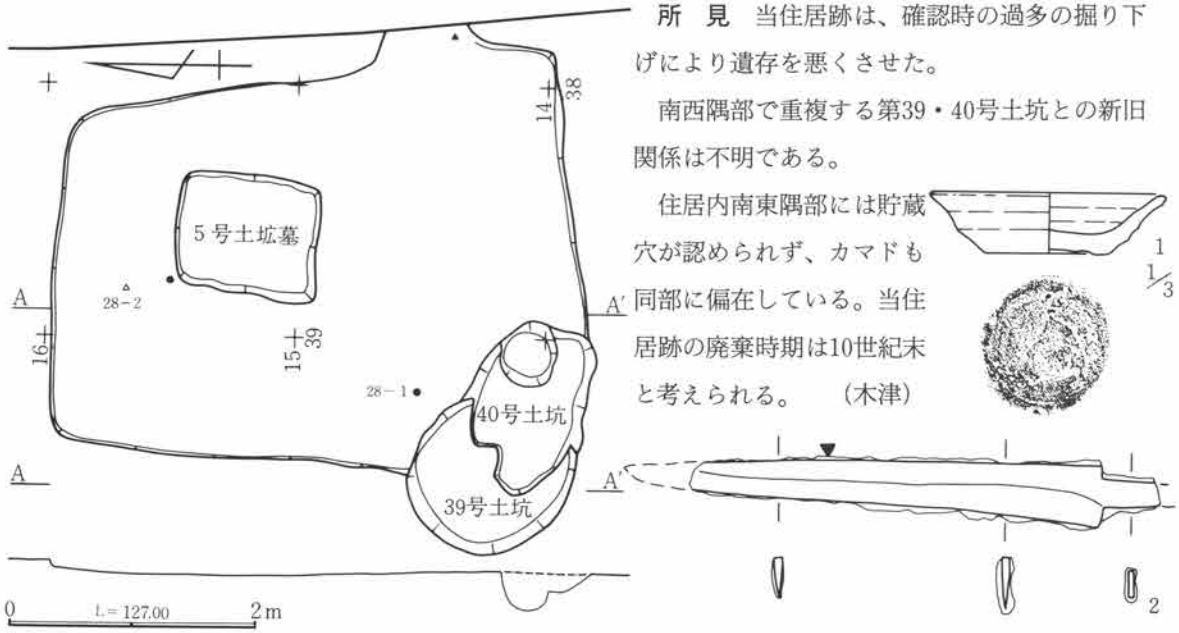
第26図　D区第3号住居跡出土遺物実測図

所　見　当住居跡は確認面検出時の過多の掘り下げにより、遺構覆土の残存深度が浅くなっており、そのために遺存状態は非常に悪い。また、カマドは3号住居跡に壊されているが、おそらく東壁南寄りに位置したものと考えられる。住居跡の廃棄時期は遺物から9世紀の末から10世紀初頭と考えられる。（麻生）



第27図　D区第4号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	D区第5号住居跡	位置	13～15－D－37～39グリッド内				
平面形態	不整長方形	規模	(3.80)m×4.37m	主軸方位	北－82度－東	残存深度	約5cm程
壁	斜位に立ち上がるか？ **西**	床面	床面としては不明であるが図示面は掘り方底面。				
壁溝	未検出。			貯蔵穴	未検出。		
柱穴	未検出。住居屋外を精査したが未確認に終った。						
掘り方	検出面はⅦ層土中の地山土である。これが床面かは判断しかねるが、掘り方底面とし認識される。						
カマド	位置	南東隅部に偏在する。遺存不良なため詳細不明。			主軸方位	不明	



第28図　D区第５号住居跡・出土遺物実測図

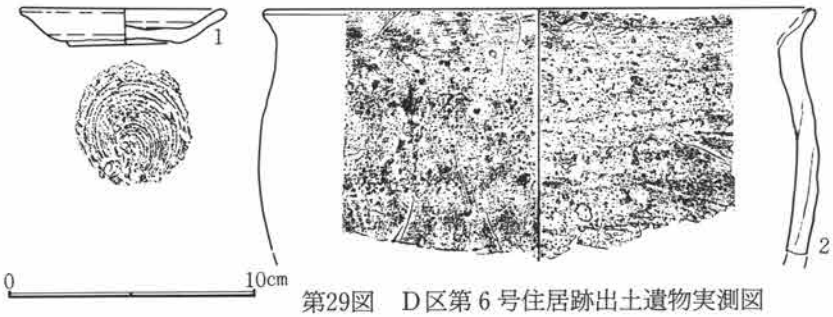
所　見　当住居跡は、確認時の過多の掘り下げにより遺存を悪くさせた。

南西隅部で重複する第39・40号土坑との新旧関係は不明である。

住居内南東隅部には貯蔵穴が認められず、カマドも同部に偏在している。当住居跡の廃棄時期は10世紀末と考えられる。　（木津）

遺構名称	D区第６号住居跡	位置	11・12－D－39・40グリッド内				
平面形態	隅丸正方形	規模	3.12m×3.03m	主軸方位	北－89度－東	残存深度	約12cm程
壁	斜位に立ち上がる。	南	床面	造床。掘り方面より薄い貼り床を成し床面とする。			
壁溝	未検出。		貯蔵穴	未検出（Ｐ５は位置的に可能性がある）。			
柱穴	未検出。住居屋外周辺部を精査したが、未確認に終る。						
掘り方	全体的にほぼ平坦であるが、Ｐ１～Ｐ７を検出した。このＰ１～Ｐ７は住居存続期での所産と思われる。						
カマド	位置	ほぼ南東隅部。		主軸方位	北－114度－東		
形状	遺存不良であるが、検出部は舌状を呈する。			改築の有無	有。		
規模	全長110cm・屋外長45cm・屋内長65cm・袖間幅－cm・燃焼部幅－cm・煙道幅－cm						
焚口	検出部全体が相当する可能性がある。	袖	未確認。右側は住居隅部を併用した可能性がある。				
燃焼部	検出部先端。顕著な灰層が同部まで達している点からさらに屋外へ延びた部分と考えられる。						
煙道	未検出（上述点による）。	掘り方	焚口前面に認められるが直接的なものではない。				
遺物出土状況	住居中央部で４層土中より多くの瓦片が出土している。						

所　見　本住居跡は北壁における両コーナーが大きくカーブを描き、南西コーナーとはやや形態を異にする。全体的には隅丸長方形を呈する。カマドは南東コーナーに構築され、改築が認められる。

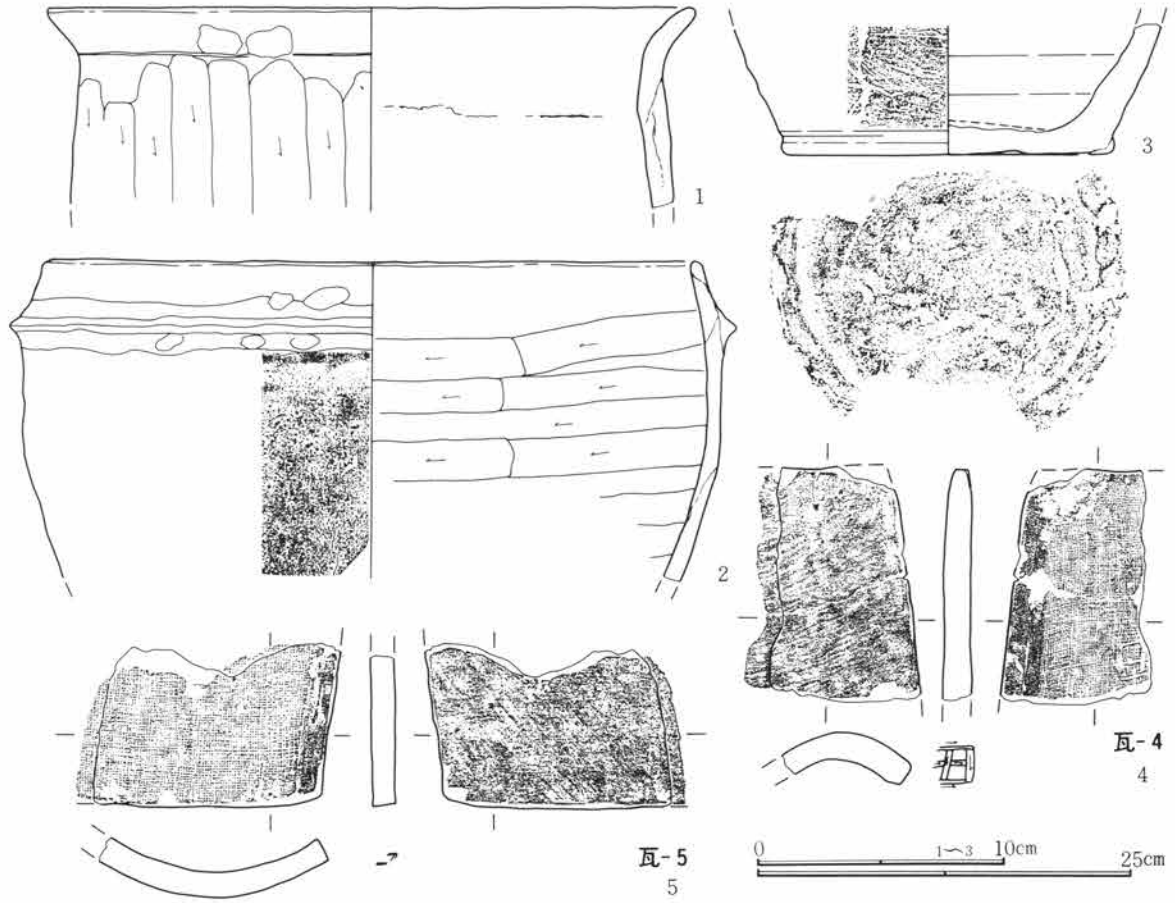


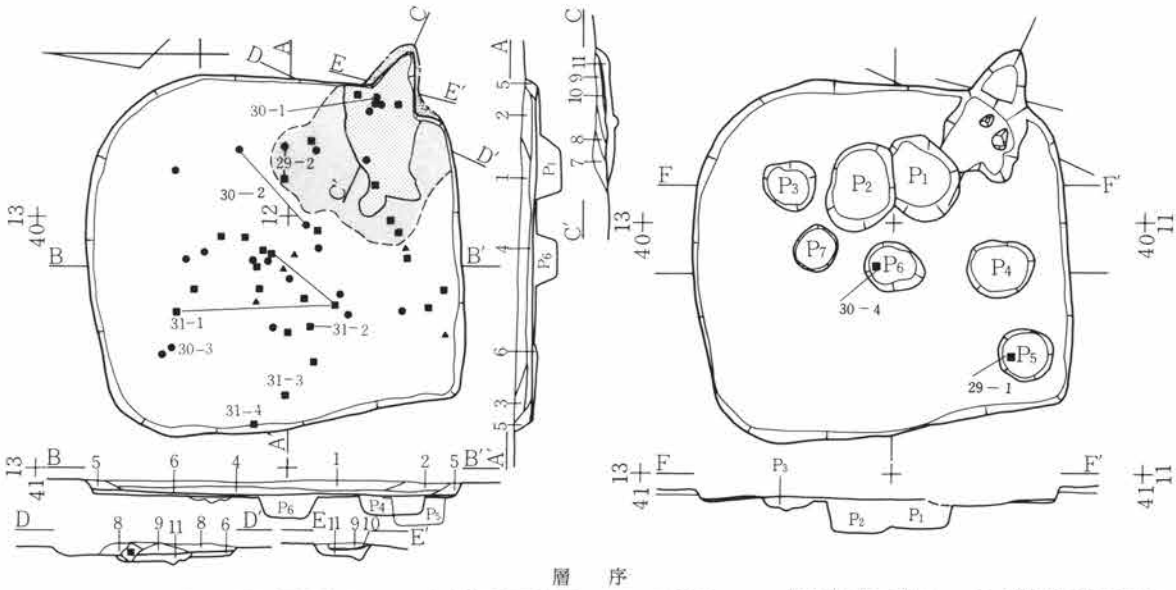
第29図　D区第６号住居跡出土遺物実測図

掘り方床面は平坦で一様に掘り込み、円形を呈したピットが７基検出された。

遺物は瓦片を主体として、床面下のピット中にも出土する。

廃棄時期は、11世紀初頭から中葉頃と思われる。　（石北）

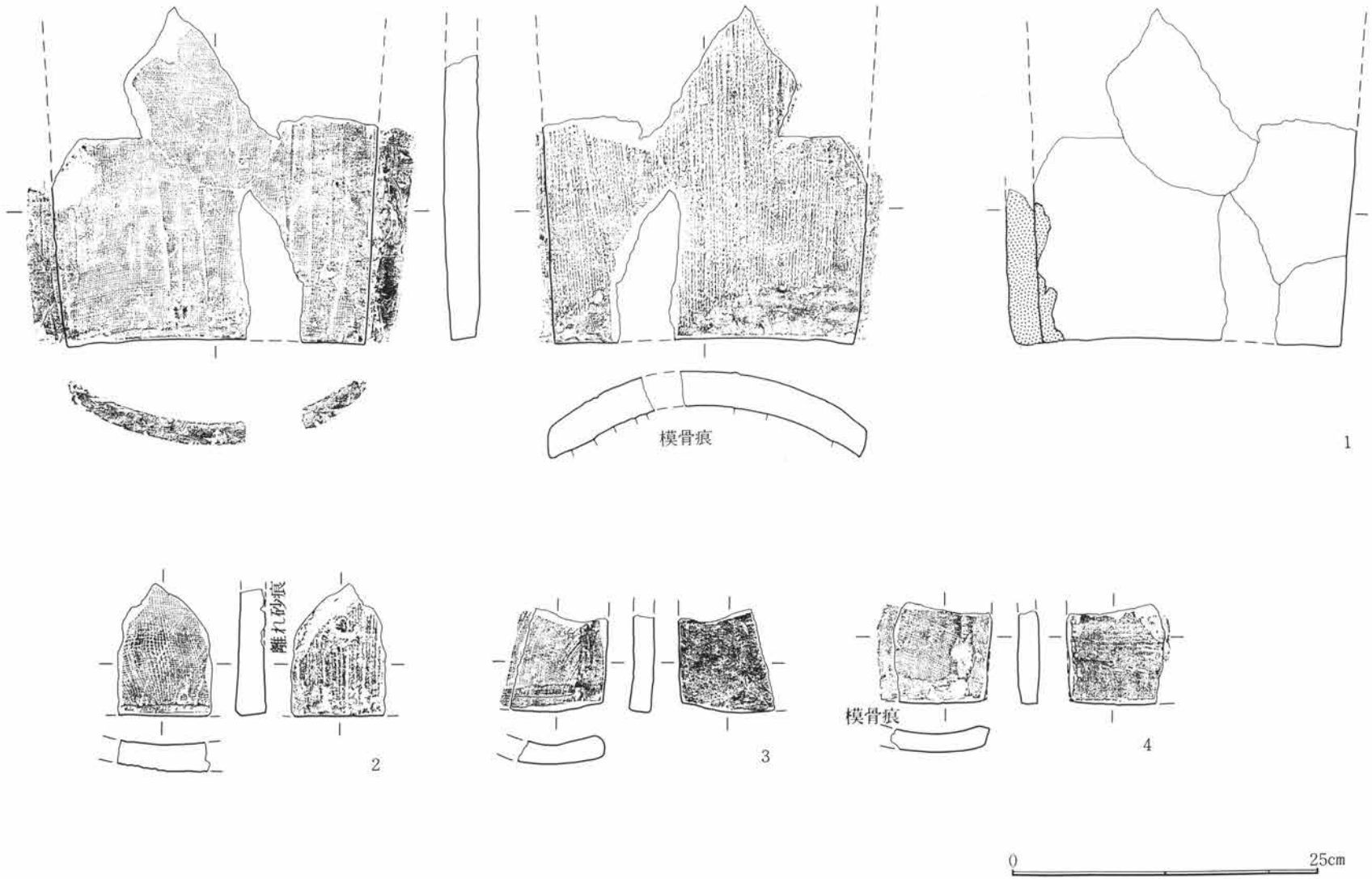




層　序

1．細粒状Ｃ軽石含有・小塊状Ⅶ層土若干。　2．細粒状Ｃ軽石若干。　3．２近質。　4．微粒状Ｃ軽石微量。　5．微粒状Ｃ軽石若干・小塊状Ⅶ層土若干。　6．掘り方土。　7．２同質。　8．細粒状Ｃ軽石若干・細粒状焼土若干。　9．細粒状Ｃ軽石含有・粒状焼土混入。　10．炭化物・灰。　11．掘り方土（粒状焼土・炭化物含有）。

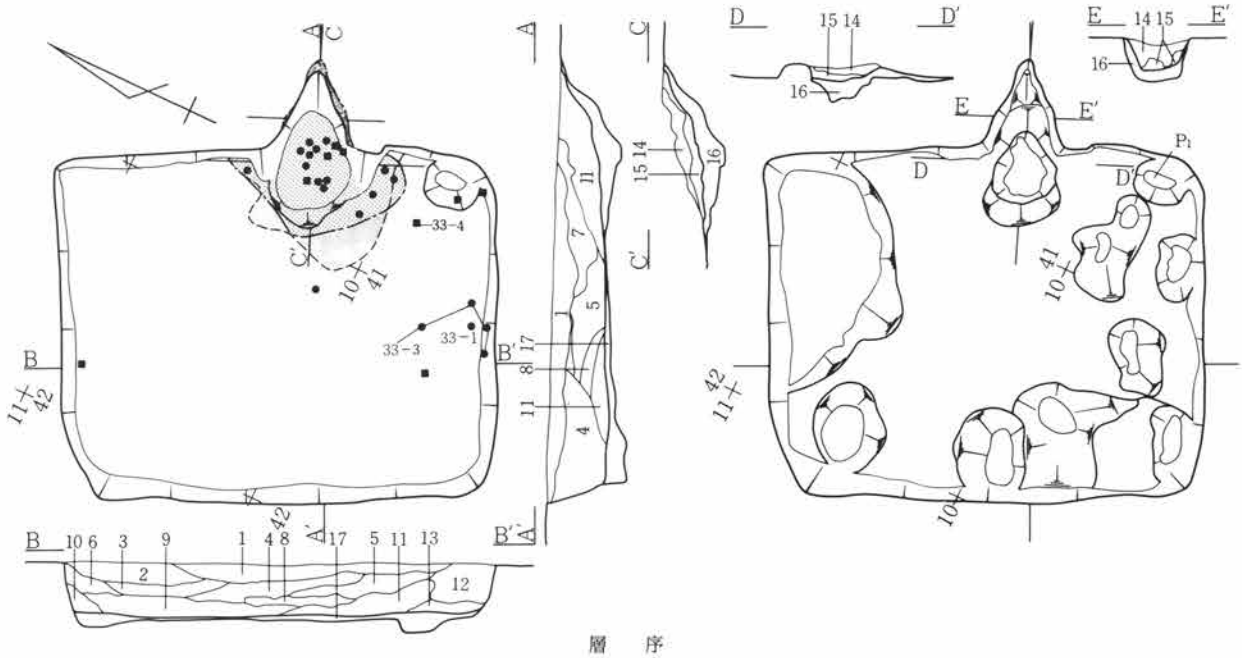
第30図　Ｄ区第６号住居跡・出土遺物実測図



第31図　D区第6号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	D区第７号住居跡	位置	９～11－D－40～42グリッド内				
平面形態	長方形	規模	3.50m×3.53m	主軸方位	北－64度－東	残存深度	約45cm程
壁	斜位気味に立ち上がる。	**北**	床面	造床。掘り方底面に薄く貼り床を施す。			
壁溝	未検出。		貯蔵穴	南東隅部に検出。楕円形。42cm×30cm・深度８cm			
柱穴	未検出。住居屋外周辺部を精査したが、未確認に終る。						
掘り方	壁際に土坑乃至柱穴状に凹凸が認められ、中央部は比較的平坦であった。						
カマド	位置	北東壁中央やや南東隅寄り。屋外に約70cm突出する。		主軸方位	北－68度－東		
形状	舌状を呈する。残存深度が深目のため比較的遺存が良好である。			改築の有無	有。		
規模	全長132cm・屋外長70cm・屋内長62cm・袖間幅170cm・燃焼部幅50cm・煙道幅20～30cm						
焚口	扇状を呈する。極浅い段差がある。	袖	両袖を備えるが、堅固な状態ではない。				
燃焼部	煙道立ち上がり周辺に求められ、極狭い部分である。						
煙道	細く舌状に突出している。	掘り方	焚口周辺に皿状の掘り込みが認められる。				
遺物出土状況	カマド内では焚口部に集中。15層土中に多い。貯蔵穴・南壁下で床面よりやや上位で出土。						

所　見　本住居跡はD区第20号住居跡の西壁をカマド煙道部によって、わずかに切って重複する。平面形態は隅丸長方形を呈し、各壁とも直線をなし、コーナーにおいてもほぼ直角を呈するため、非常に整然としている。床面は貼り床となっているが、掘り方床面の状況を見ると、掘り込みの際に住居中央部を平坦に残し、壁際を土坑やピット状にさらに掘り下げている。しかし、深さはさほどなく、貼り床も壁際には厚く、中央部では薄く貼り、水平面を整えている。全体的によく踏み固められ、特に中央からカマド前面にかけて



1．C軽石多量混入。　2．C軽石混入・小塊状Ⅶ層土少量混入。　3．C軽石少量・小塊状Ⅶ層土若干。　4．２近質。
5．C軽石若干・塊状Ⅶ層土多量（斑状混入）。　6．細粒状C軽石微量。　7．５近質。　8．細粒状C軽石若干・塊状Ⅶ層土若干。
9．細粒状C軽石微量・小塊状Ⅶ層土少量（斑状混入）。　10．６同質。　11．７近質。　12．５近質。　13．11・12近質。
14．細粒状C軽石含有・粒状焼土若干。　15．細粒状C軽石若干・粒状焼土・粒状炭化物多量。　16．細・微粒状C軽石若干・粒状焼土若干。
17．微粒状C軽石若干・小塊状Ⅶ層土含有。

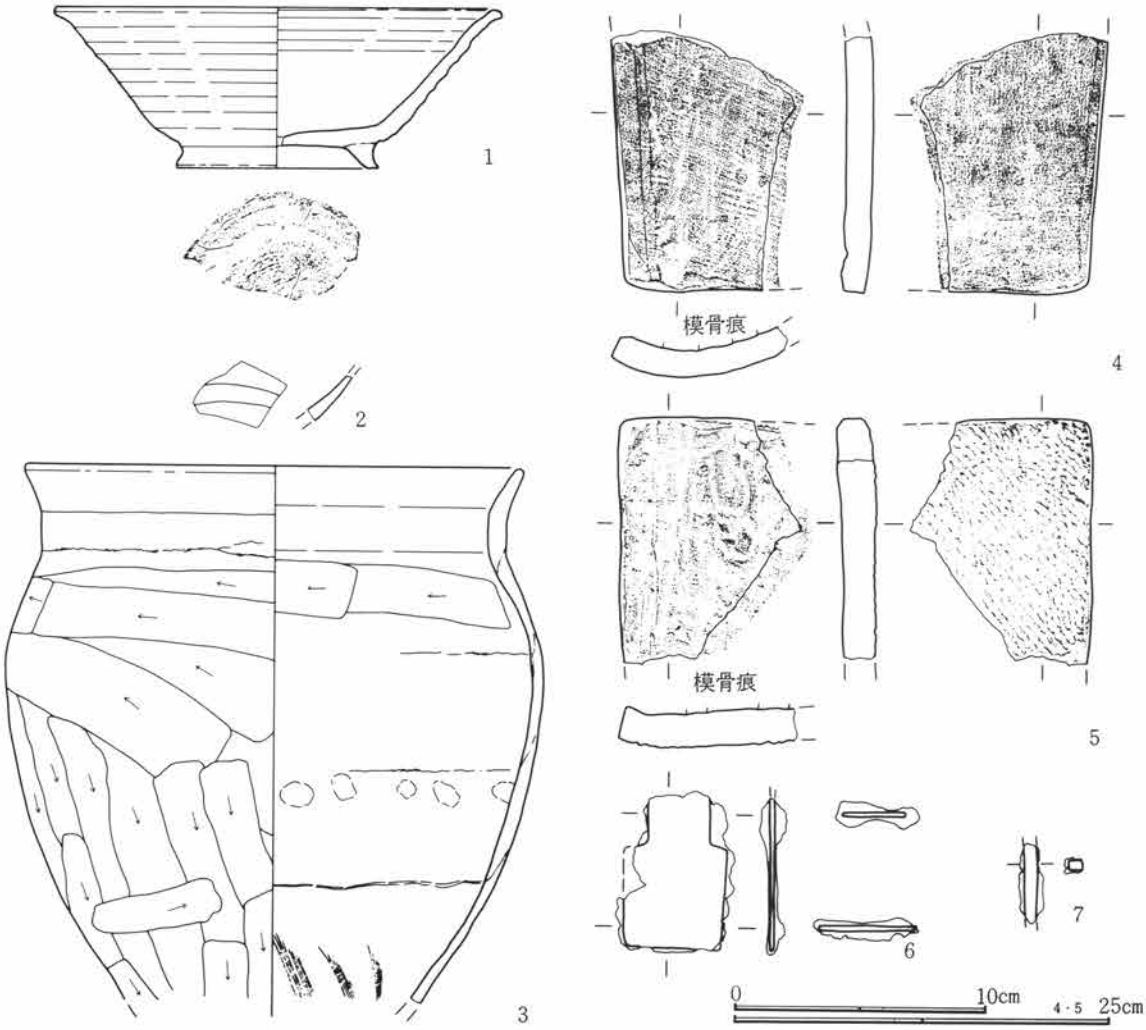
第32図　D区第７号住居跡実測図

は非常に堅緻であった。その他施設としては南東コーナーにおいて貯蔵穴が検出された。

覆土の状況は、浅間Ｃ軽石を混入する黒褐色土を主体とするが、土層観察から明らかに自然堆積の様相ではなく、人為的な埋没が看取された。ロームブロックが不自然に混入し、堆積面の不整合が認められた。土質もやや荒いため、締りが弱い。

カマドは東壁中央から若干南寄りに構築されている。形状は舌状で、掘り込みが深いためか遺存度は比較的良好であった。袖は地山を造り出し、褐色粘質土で整形を施していた。焚口から燃焼部にかけて皿状に浅く掘り込み、掘り方調査の際には支脚を埋設したであろうピットが検出された。さらに住居中央付近にかけては掻き出された灰・焼土・炭化物の散布が認められた。左側の壁体はオーバーハングしており、ドーム状に天井部があったであろう、その一部が残存していた。左右とも良く焼け込み、レンガ状に堅くなっていたため、使用頻度・使用期間を示していると言えよう。底面はＵ字状に細長く続く煙道へ続いていた。

遺物は量的には少ないが、南壁際中央付近および貯蔵穴周辺、カマド焚口部において出土した。坏・埦・甕類や瓦片が多い。特に南壁際は床面上ではなく、浮いた状態である。住居廃棄時期は、９世紀末葉から10世紀初頭と思われる。（石北）

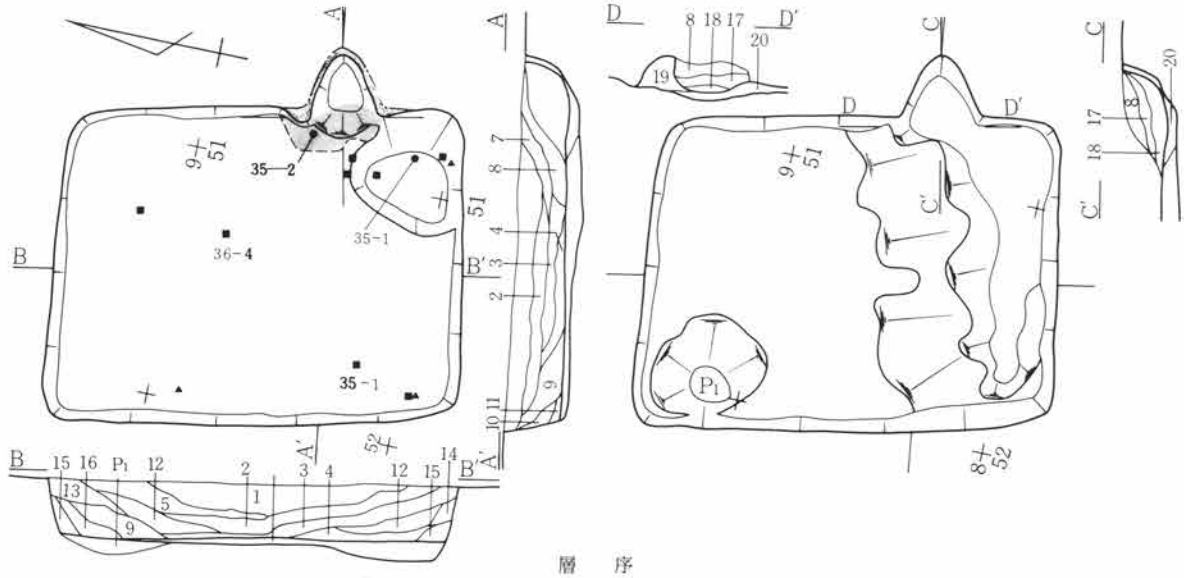


第33図　Ｄ区第７号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	D区第8号住居跡	位置	7～9－D－50～52グリッド内				
平面形態	不整長方形	規模	3.07m×3.36m	主軸方位	北－79度－東	残存深度	約45cm程
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	造床。平坦で貼り床を施す。南壁下の埋設が顕著。			
壁溝	未検出。	西	貯蔵穴	南東隅部で不整円形状。100cm×75cm・深度7cm			
柱穴	未検出。住居屋外周辺部を精査したが未確認に終る。						
掘り方	底面は南壁側に向い傾斜し、南半部の掘り込みが著しい。北西隅部に浅皿状の落ち込みを検出。						
カマド	位置	東壁中央よりやや南寄り。屋外に約48cm突出する。		主軸方位	北－78度－東		
形状	舌状を呈する。大半が屋外に延び、煙道部はさらに外側と考えられる。			改築の有無	有。		
規模	全長73cm・屋外長48cm・屋内長25cm・袖間幅90cm・燃焼部幅30cm。						
焚口	円形状か？		袖	小さく瘤状を呈する。			
燃焼部	奥壁寄りの狭い部分。支脚等の付随施設は認められていない。						
煙道	未検出。		掘り方	住居掘り方の底とほぼ一致する状態で底面設定がある。			
遺物出土状況	全体的に壁下周辺に認められたが、全体量が少ない。また、床面より遊離している。						

所　見　当住居跡は比較的整った長方形を呈する。南東隅部の貯蔵穴は、調査時の〝掘り過ぎ〟があると考えられる。これは、住居の掘り方が、南側に偏在し、特にカマド部分から南東隅部にかけて顕著で、調査時に、この掘り方埋土を貯蔵穴覆土と考え調査した可能性が濃厚な点にある。この場合、元来の貯蔵穴は、同部周辺で出土した遺物の分布域にほぼ等しい状態であったと考えられる。

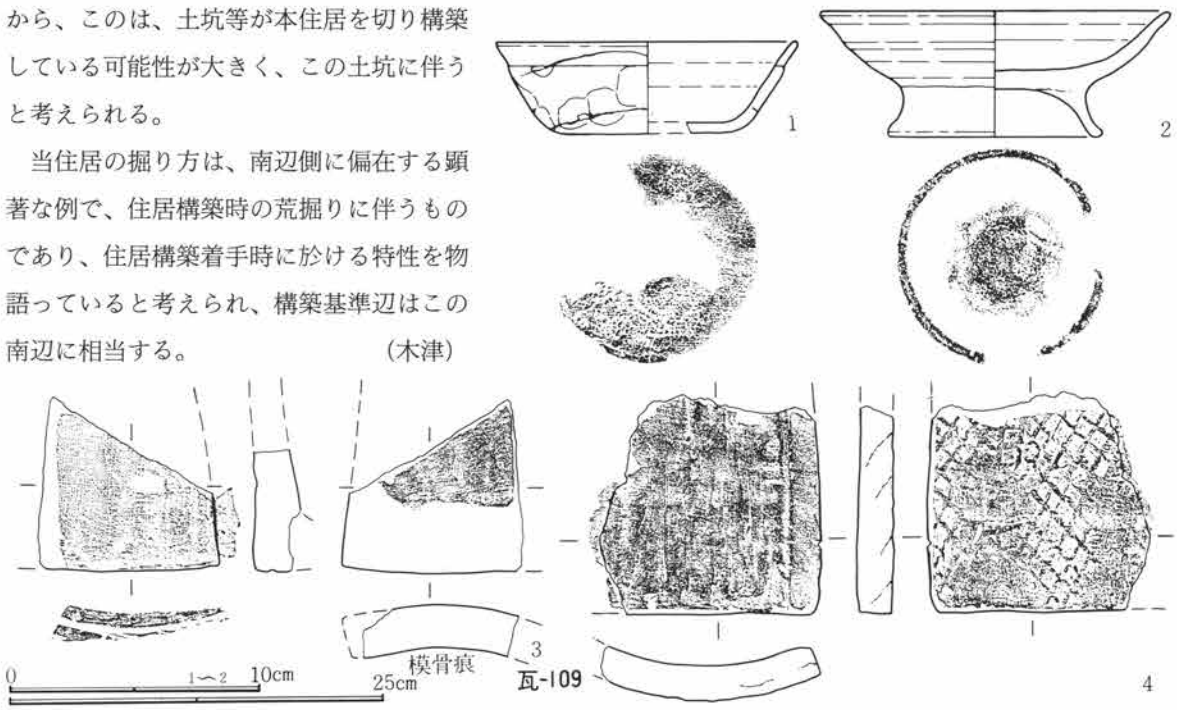
出土遺物は比較的少なく、図示した以外に土器類の破片、瓦片等がある。第35図－2は、11世紀代の所産と考えられ、当住居内より出土している。また、住居の形態からは9世紀末～10世紀前半が考えられる点



第34図　D区第8号住居跡実測図

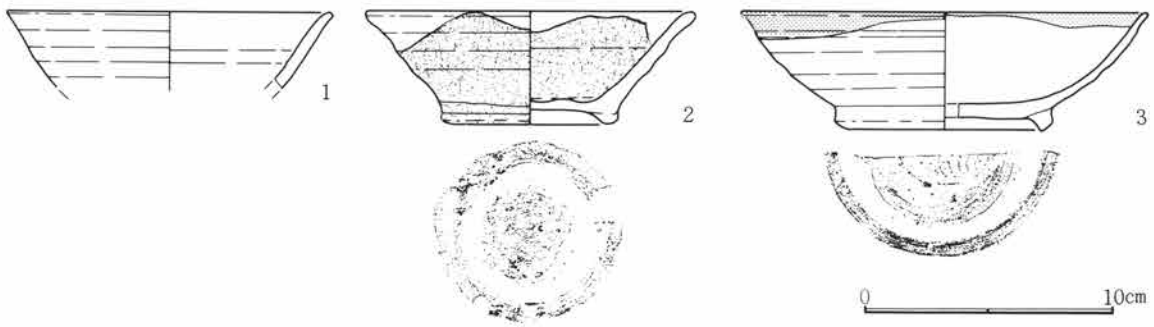
から、このは、土坑等が本住居を切り構築している可能性が大きく、この土坑に伴うと考えられる。

当住居の掘り方は、南辺側に偏在する顕著な例で、住居構築時の荒掘りに伴うものであり、住居構築着手時に於ける特性を物語っていると考えられ、構築基準辺はこの南辺に相当する。　（木津）



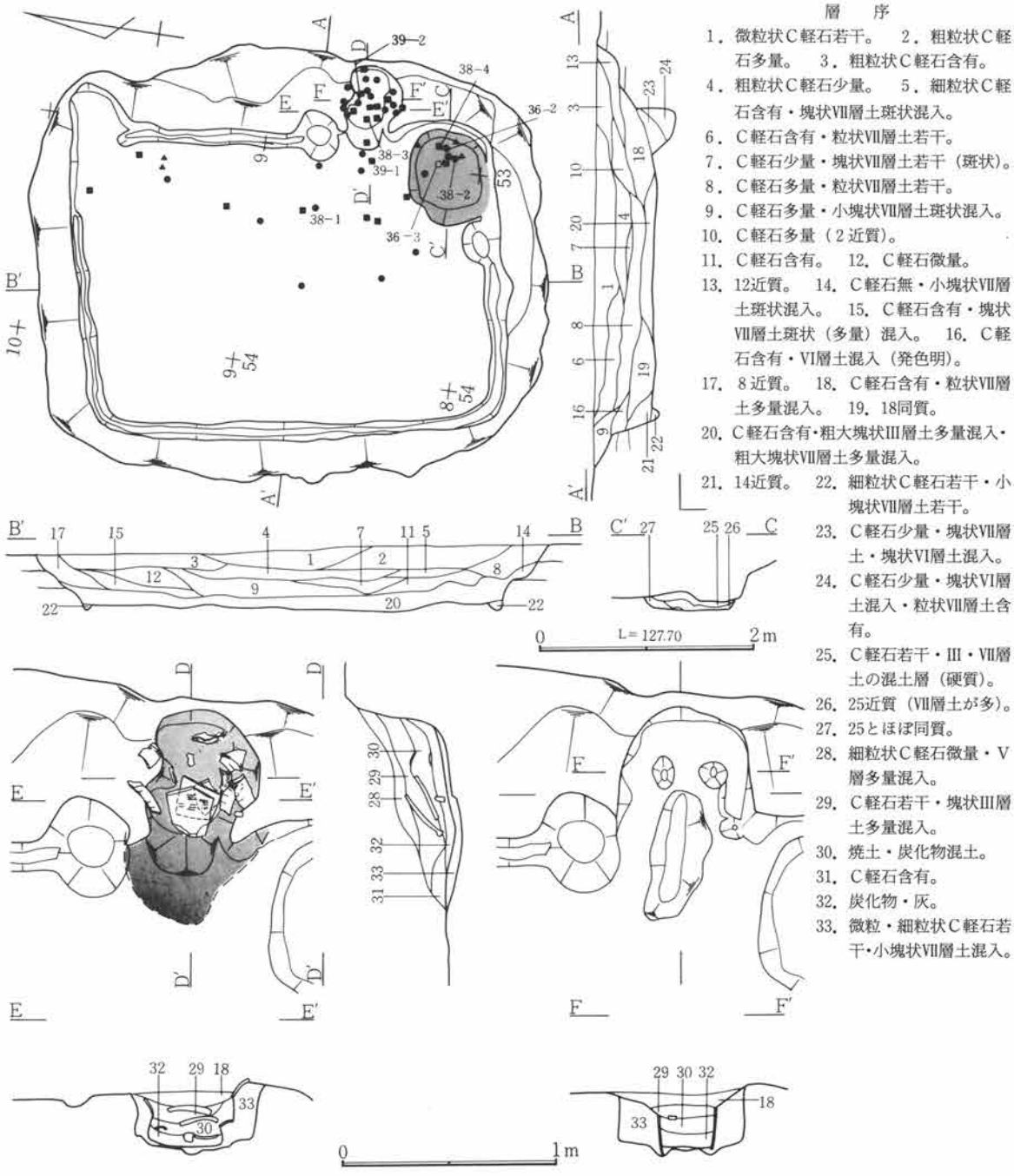
第35図　Ｄ区第８号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	Ｄ区第９号住居跡	位置	７～10－Ｄ－52～54グリッド内				
平面形態	不整長方形	規模	4.02m×4.80m	主軸方位	北－80度－東	残存深度	約60cm程
壁	緩やかに立ち上がる。	**西**	床面	Ⅶ層中に構築し、平坦で掘り方底面と一致している。			
壁溝	ほぼ全周（北東隅部未検出）幅８～28cm		貯蔵穴	南東隅部に検出。円形状。径85cm・深度12cm			
柱穴	未検出。住居周辺部・壁面を精査したが未確認に終った。						
掘り方	底面で認められなかったが、壁体が非常に傾斜する状態である。壁溝はこれに起因するのか？						
カマド	位置	東壁南寄り。現状で屋外に突出せず。		主軸方位	北－80度－東		
形状	全体的に瓢形状を呈する。焚口が大きく、燃焼部手前に瓦により区界を成す。			改築の有無	有。		
規模	全長102cm・屋外長－cm・屋内長102cm・袖間幅65cm・燃焼部幅80cm						
焚口	長楕円形状で燃焼空間より広い。	袖	右袖のみが検出される。瘤状で内側に向かっている。				
燃焼部	カマド主軸に直行する方向に長軸をとる長円形状を呈する。						
煙道	未検出。	掘り方	全体を箱状に掘削し、右袖も削り出しの状態である。				
遺物出土状況	13・16層土中に集中し、東側に出土傾向が多い。						



第36図　Ｄ区第９号住居跡出土遺物実測図

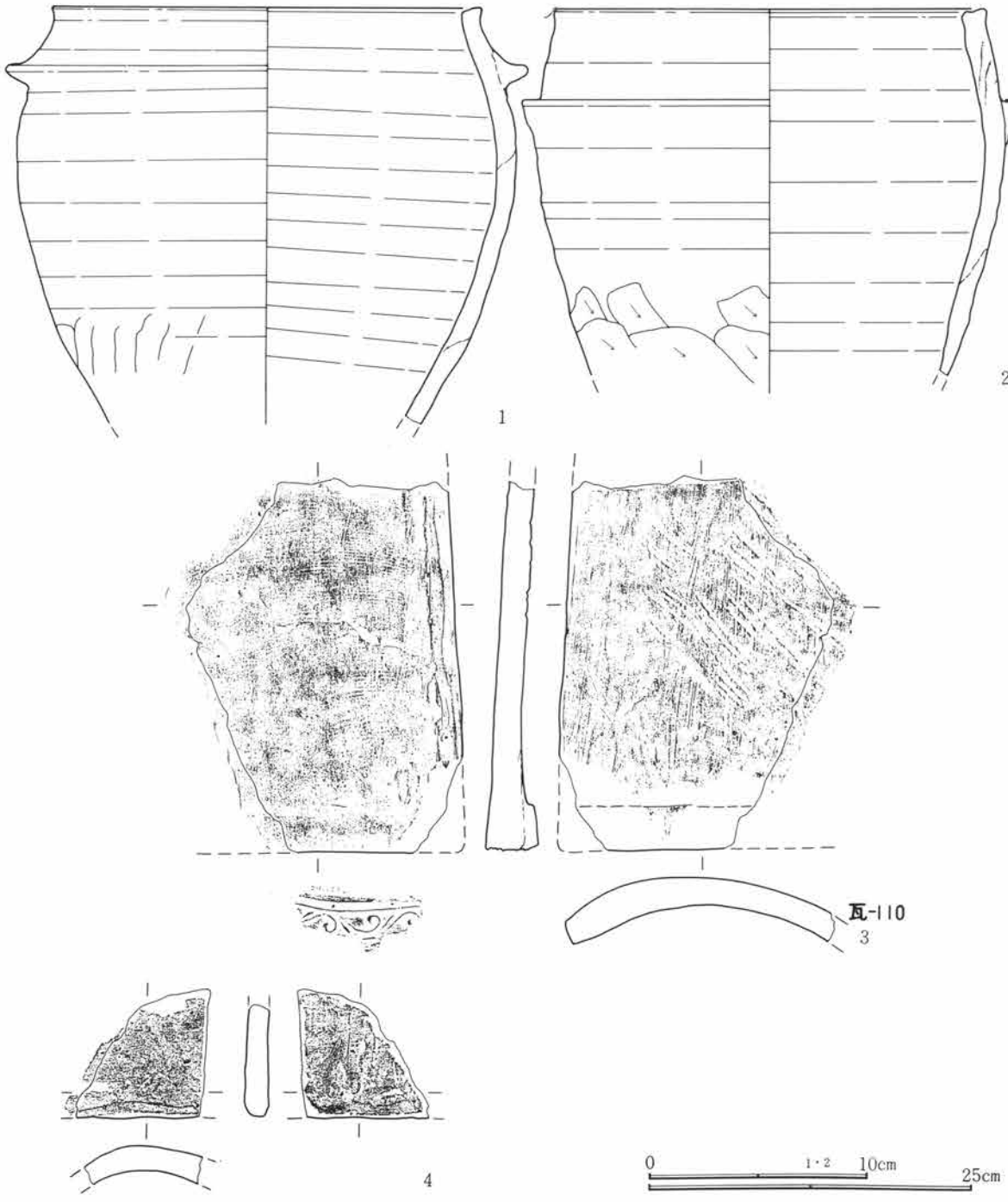
所　見　当住居平面形状は、検出された住居の中でも最も特異な形状を呈している。この形状は、住居の廃棄後に生じたものと考えられるが、カマド周辺の出土遺物では、斜面部出土の羽釜片数点がカマドに壁体補強財として設置された羽釜（第38図－１）と接合関係にある。この接合関係を示す出土状況からは、単に廃棄後に生じたものと考え難い面がある。また、この点に就いて相対する状況も認められている。これは、住居覆土内の内、床面直上の20層土より地山Ⅶ層土が多量に含有され、同様に４層直下の土層中にはこの状況が看取された。これらの状況は壁体の崩壊乃至破壊と考えられるが、上述の状況も見過し得ない。しかし、この地山土を含有するという状況はカマド内部では認められず、住居覆土内に於ける状況としか認識せざるを得ない。結論的には壁体が著しく傾斜する要因として特定のことは限定されず、判然としない。ただ、覆



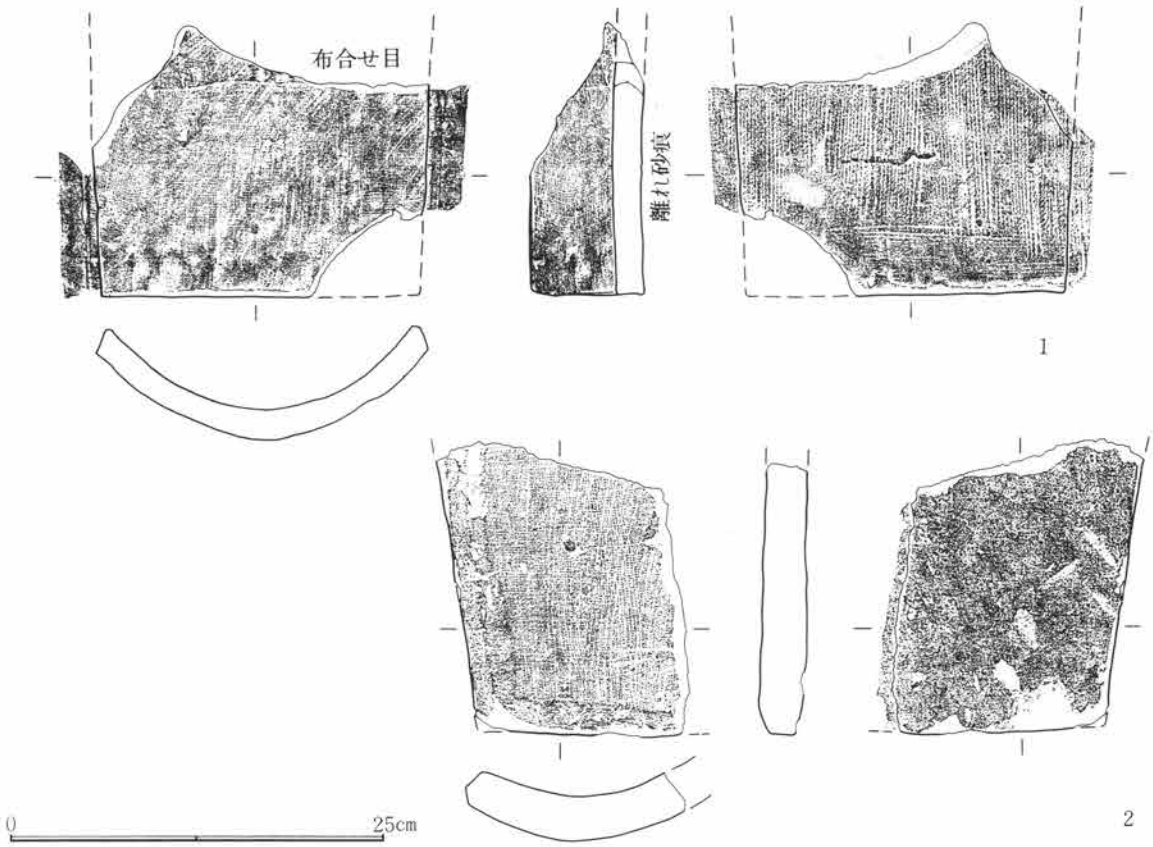
第37図　D区第９号住居跡実測図

土内での地山土の在り方は注意されるが、構築頭初からの状態であったことは否定し得ず判然としない。

本跡のカマドも比較的特徴がある。検出した形状から、燃焼空間は最奥部の楕円形状を呈する部分と判断され、通有の舌状とは異なり、新しい様相を備えている。そして、焚口も屋外方向に寄っている。しかし、煙道は燃焼部から立ち上がった後に屋外方向に付設されたと考えられる点で、古い様相を備えている。このカマド使用に伴い生じた灰は、住居南東隅部の貯蔵穴内に充満させた状態で出土している。また、この貯蔵穴の底面は二次期が認められている。住居の廃棄時期は10世紀中頃と判断される。　（木津）



第38図　D区第９号住居跡出土遺物実測図

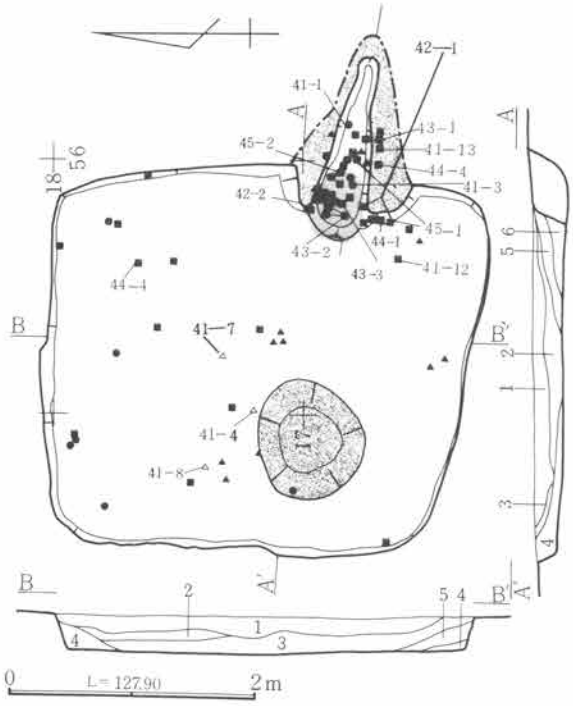


第39図　D区第９号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	D区第10号住居跡	位置	16～18－D－55～57グリッド内				
平面形態	隅丸方形	規模	4.11m×3.58m	主軸方位	北－90度－東	残存深度	約30cm程
壁	斜位気味に立ち上がる。	**西**	床面	平坦で掘り方底面をそのまま床面としている。			
壁溝	未検出。		貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋外周辺部を精査したが未確認に終った。						
掘り方	掘り方底面を床面としているが、中央南西隅寄りで土坑状の掘り込みを検出。						
カマド	位置	東壁南東隅にやや寄る。屋外に約110cm突出する。		主軸方位	北－99度－東		
形状	舌状を呈する。瓦・礫を多用している。器設部も明確な状態である。			改築の有無	有。		
規模	全長163cm・屋外長110cm・屋内長53cm・袖間幅112cm・燃焼部幅38cm・煙道幅28～30cm						
焚口	扇状を呈する。		袖	堅固な両袖を備え、瓦により補強する。			
燃焼部	壁体は礫を主体とし、瓦により部分的な補強を行なう。						
煙道	立ち上り部天井は宇瓦を用いる。		掘り方	改築が有り詳細は不分明。全体的に皿状に窪む。			
遺物出土状況	住居内に散在し、３・２層土内に多い。						

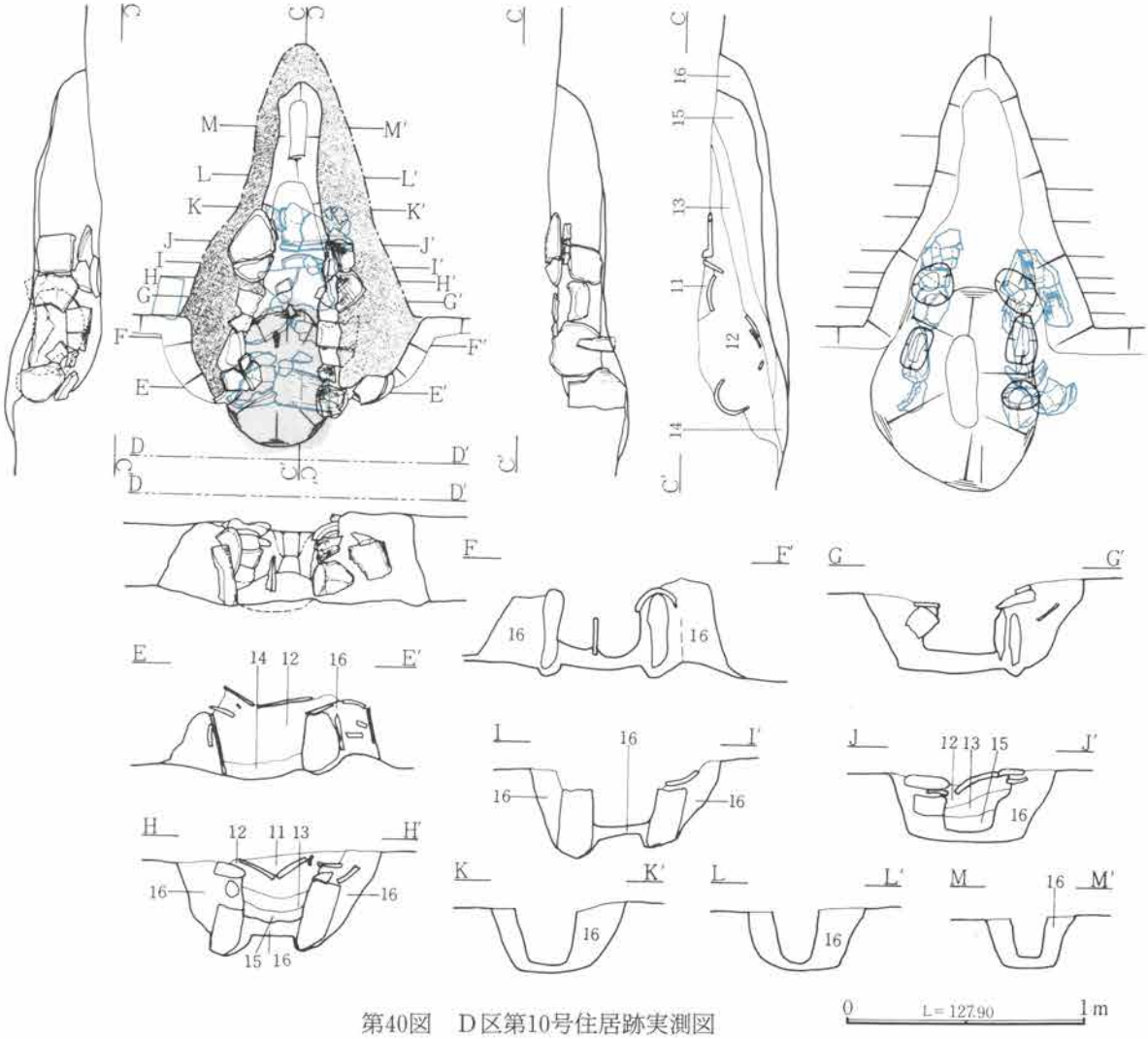
所　見　当住居跡は11号住居跡、３号井戸及び２号溝と重複しており、それぞれとの前後関係では、11号住居跡よりも新しく、３号井戸及び２号溝よりは古い段階に位置している。住居形態は隅丸方形を呈しているが、南東隅部分が僅かに張り出している。カマドの側壁部及び天井部に多数の瓦や石を構築材として用いており、その残存状態が極めて良好な事から詳細な調査・観察を実施した。その構造をみてみると、まず偏平な楕円形の自然礫をほぼ直線的に並べ、次に壁土内に多数の瓦及び土器の破片を充填させる事により、燃

焼部及び煙道部の側壁の基礎を作り出すと共に、その補強をも図っている。また天井部分に瓦を架け渡す事によって上壁を形成させると共に、煙道部分には瓦当面を住居内部に向ける形で宇瓦を表裏逆に配置している。さらに両袖間に完形の男瓦を渡す事により、焚口の構造の補強を図っている。燃焼部の天井部部分には正方形に近い穴が存在しており、その



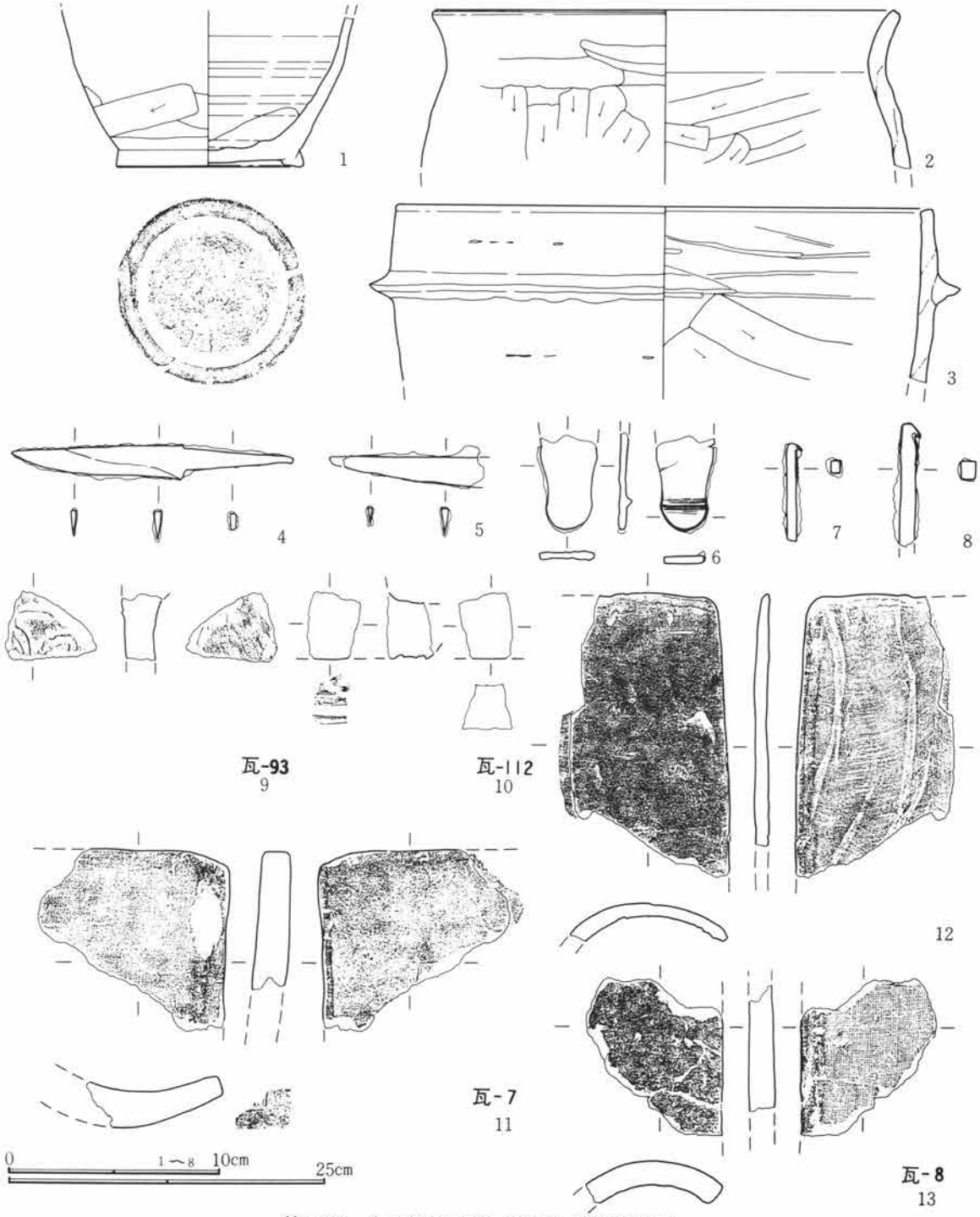
層　序

1．粗粒Ｃ軽石多量混入。　2．粗粒Ｃ軽石少量・粒状炭化物含有。
3．微粒状Ｃ軽石少量・粒状焼土含有。　4．粗粒状Ｃ軽石少量（2近質・発色暗）。　5．微粒状Ｃ軽石少量・微粒状炭化物・微粒状焼土微量含有。　6．微粒状Ｃ軽石若干・粒状焼土・粒状炭化物含有（5近質）。　7．細粒状Ｃ軽石少量・粒状Ⅶ層土若干。
8．灰多量・塊状焼土若干。　9．微粒状Ｃ軽石微量・粒状・塊状Ⅶ層土多量。　10．Ｃ軽石無・粒状Ⅶ層土若干。
11．焼土。　12．Ｃ軽石混入・小塊状焼土若干・粒状焼土混入。
13．微粒状Ｃ軽石微量・焼土主体。　14．灰層・塊状焼土含有。
15．細粒状Ｃ軽石若干・小塊状焼土斑状混入。　16．掘り方土（細粒・微粒状Ｃ軽石・粒状焼土混入）。

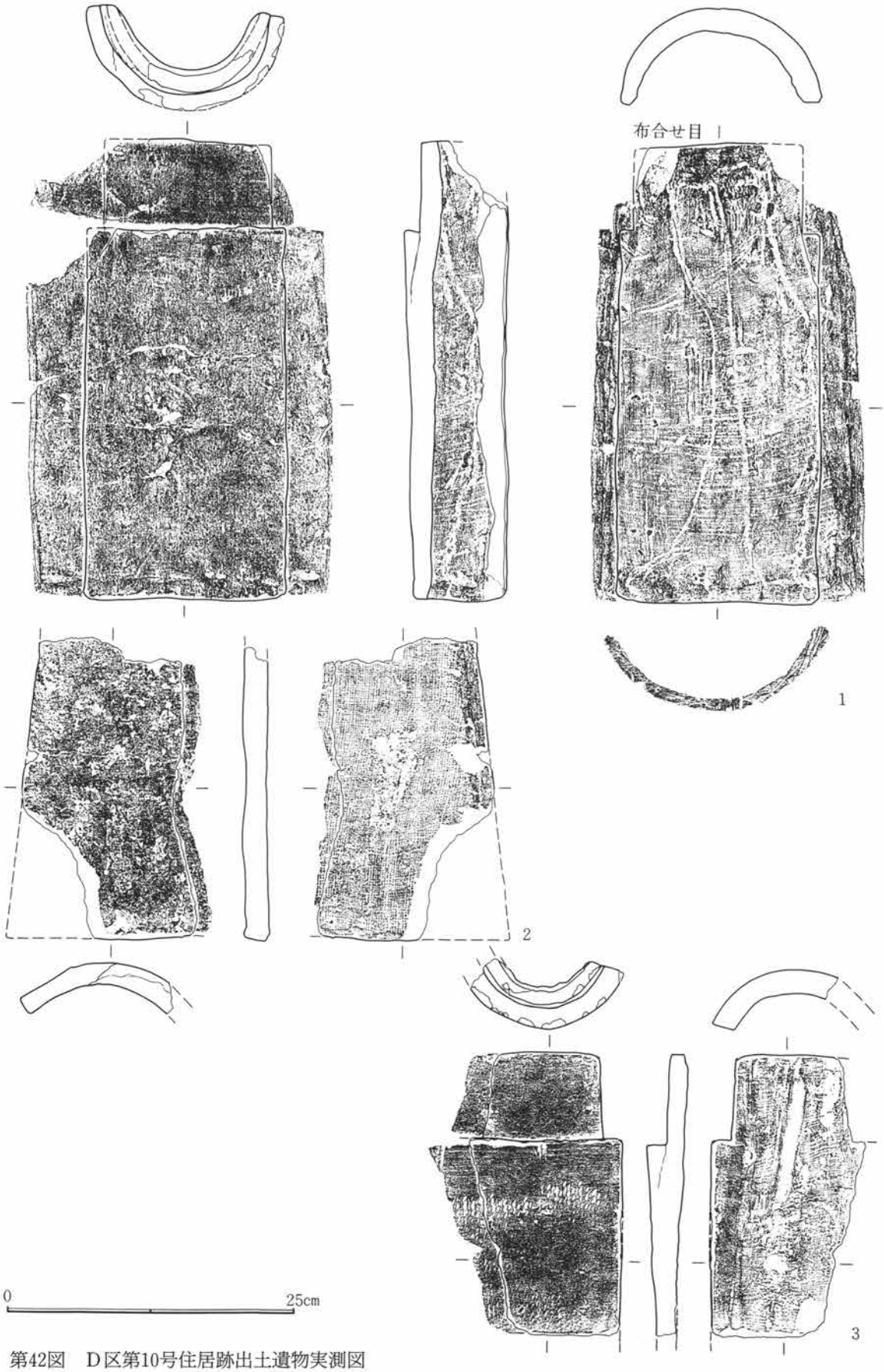


第40図　Ｄ区第10号住居跡実測図

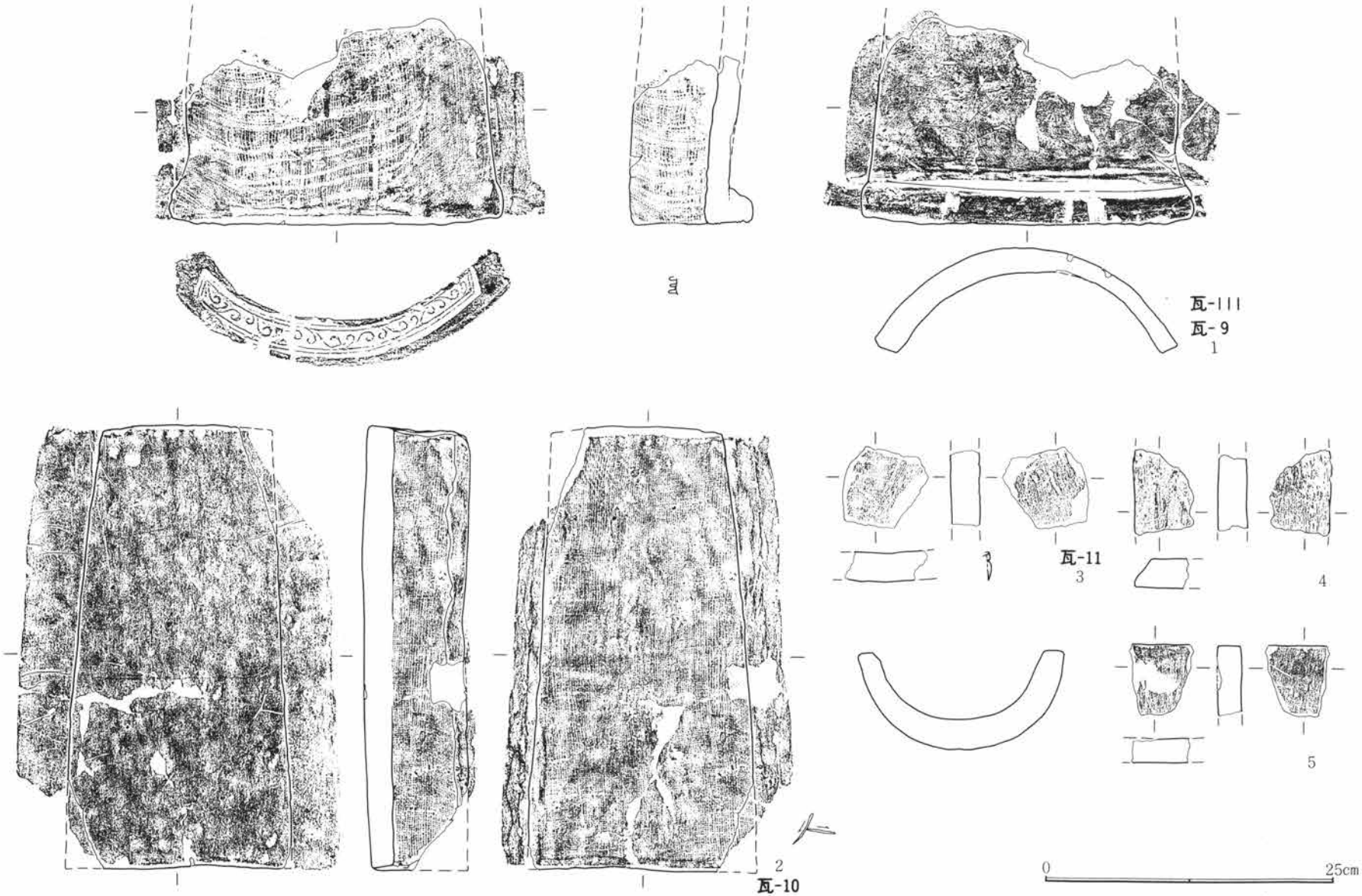
位置から器設部（釜口）と推定されるが、カマド使用時の形状をそのままの完全な形で留どめているかは不明である。その燃焼部床面のほぼ中央部分に瓦の破片を用いた支脚がほぼ直立する形で存在する。また改築の痕跡が掘り方調査時での袖部分に認められる事から、明らかにカマドの改築が少なくとも一度は行われた事が判明している。カマドの遺存状態が良好であるのに対して、柱穴などは認められない。ただ床面の中央部から南東隅寄りの部分に、床下土坑と考えられる直径約90cmの円形の掘り込みが検出されている。遺物は土器の出土が少ないものの、刀子などの鉄製品と、軒瓦や宇瓦を含めた多数の瓦が検出されており、住居跡の廃棄時期はそれらの遺物から11世紀にかけてと考えられる。（麻生）



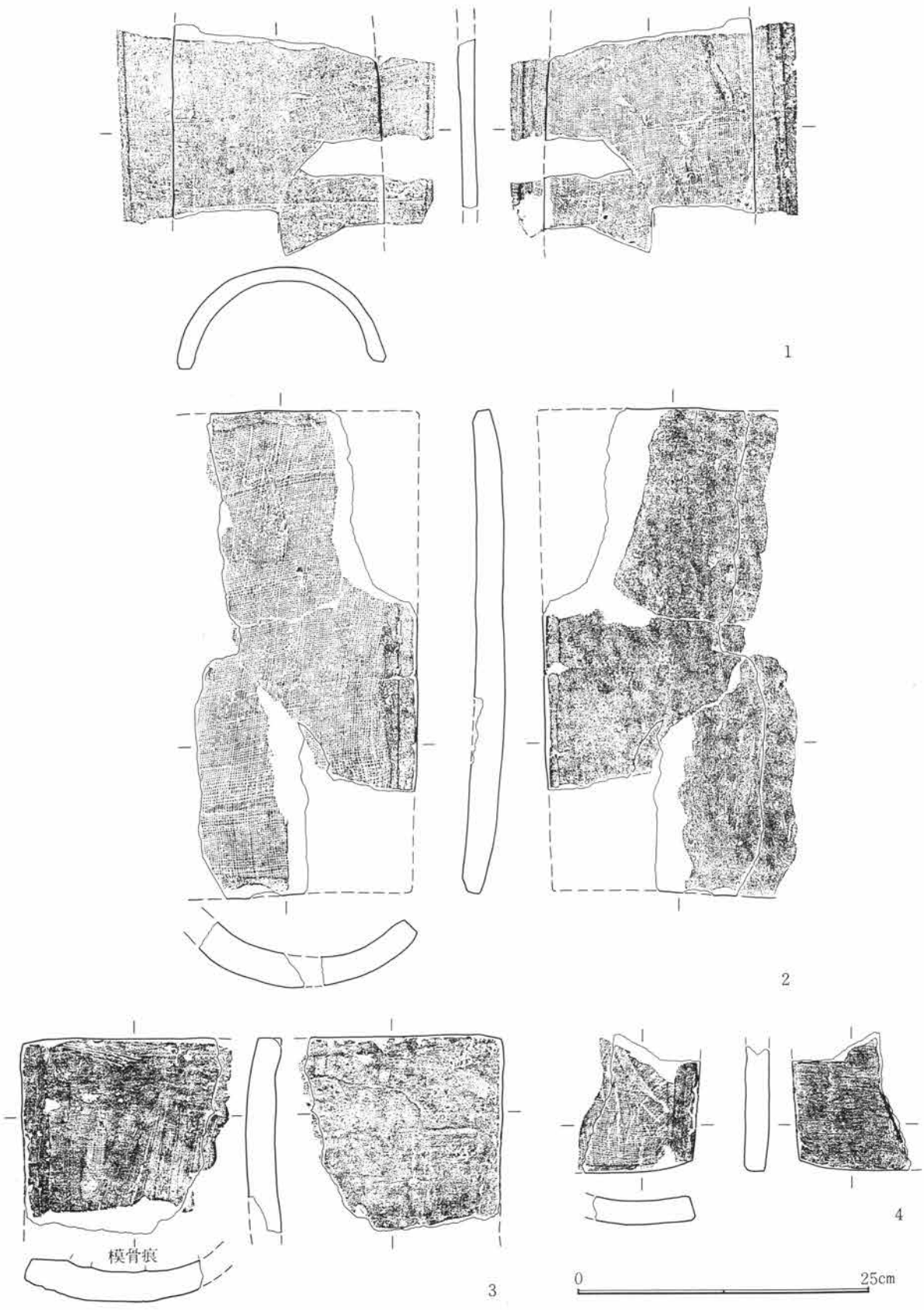
第41図　D区第10号住居跡出土遺物実測図



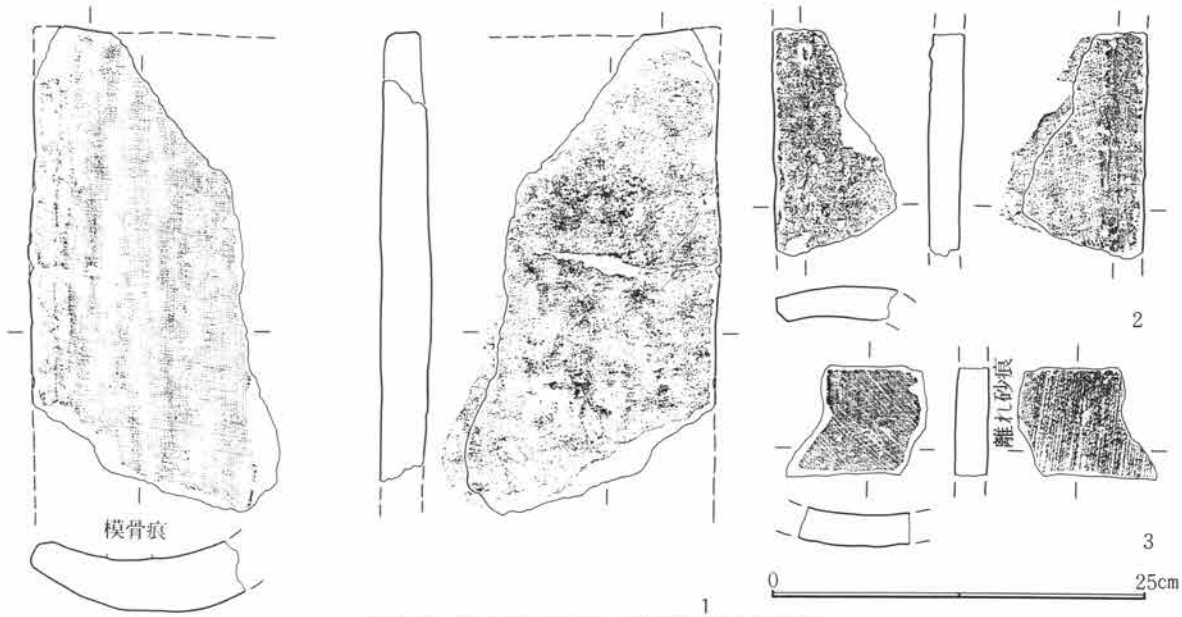
第42図　D区第10号住居跡出土遺物実測図



第43図　D区第10号住居跡出土遺物実測図



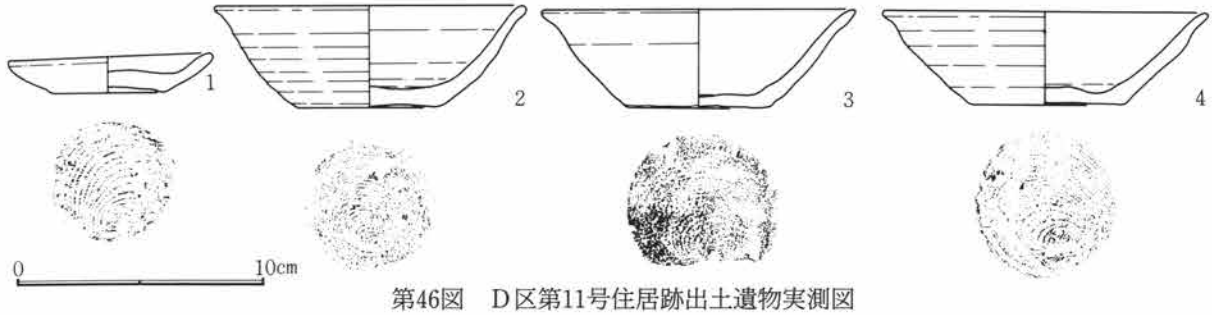
第44図　Ｄ区第10号住居跡出土遺物実測図



第45図　Ｄ区第10号住居跡出土遺物実測図

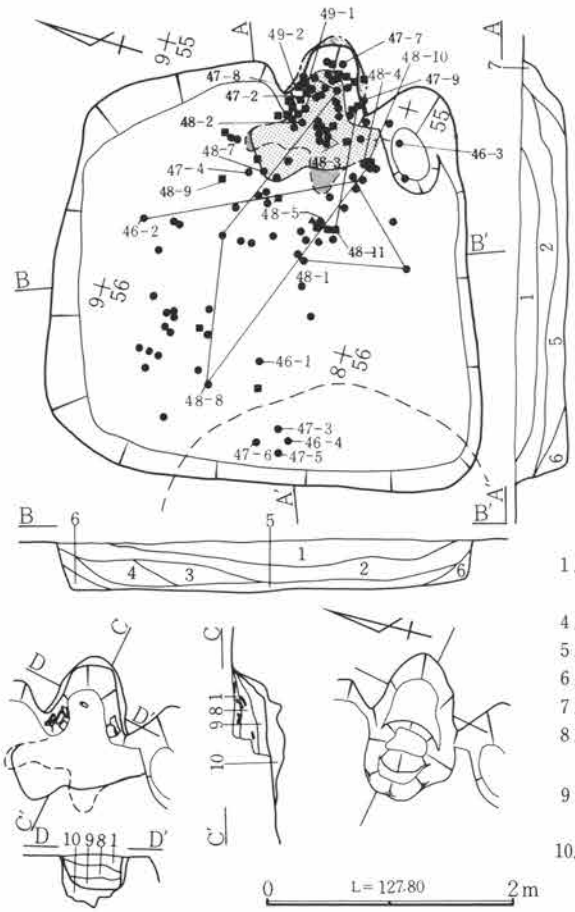
遺構名称	Ｄ区第11号住居跡	位置	17～19－Ｄ－54～56グリッド内				
平面形態	不整方形状	規模	3.62m×3.50m	主軸方位	北－68度－東	残存深度	約40cm程
壁	斜位気味に立ち上がる。	**南**	床面	平坦で掘り方底面をそのまま床面としている。			
壁溝	未検出。		貯蔵穴	南東隅部で検出。楕円形。78cm×40cm・深度７cm			
柱穴	未検出。住居屋外周辺部を精査したが未確認に終った。						
掘り方	掘り方底面全体をそのまま床面としており、顕著なものは認められなかった。						
カマド	位置	東壁南寄り。屋外に約50cm突出する。		主軸方位	北－90度－東		
形状	舌状を呈し、両袖を具備する。検出状態のものは煙道は認められない。			改築の有無	有。		
規模	全長73cm・屋外長43cm・屋内長30cm・袖間幅120cm・燃焼部幅30cm						
焚口	袖の瓦による補強部分位迄と考えられる。	袖	両袖を具備する。内側を瓦により補強する。				
燃焼部	検出部奥壁寄りの部分と考えられ、この部分に器設が存在した可能性が高い。						
煙道	未検出。		掘り方	全体を長楕円形状に掘削し、焚口周辺を皿状に窪める。			
遺物出土状況	２・３層土中で破片化した土・陶器、瓦類が多く出土している。						

所　見　当住居跡は３号井戸及び10号住居跡と重複しているが、特に10号住居跡とは南西隅部分が僅かに重複するだけの関係であり、しかも土層観察などは実施しなかったために、前後関係ははっきりと確認できなかったものの、出土遺物からみて両者に先行する段階に位置すると考えられる。住居形態は北壁部分を中



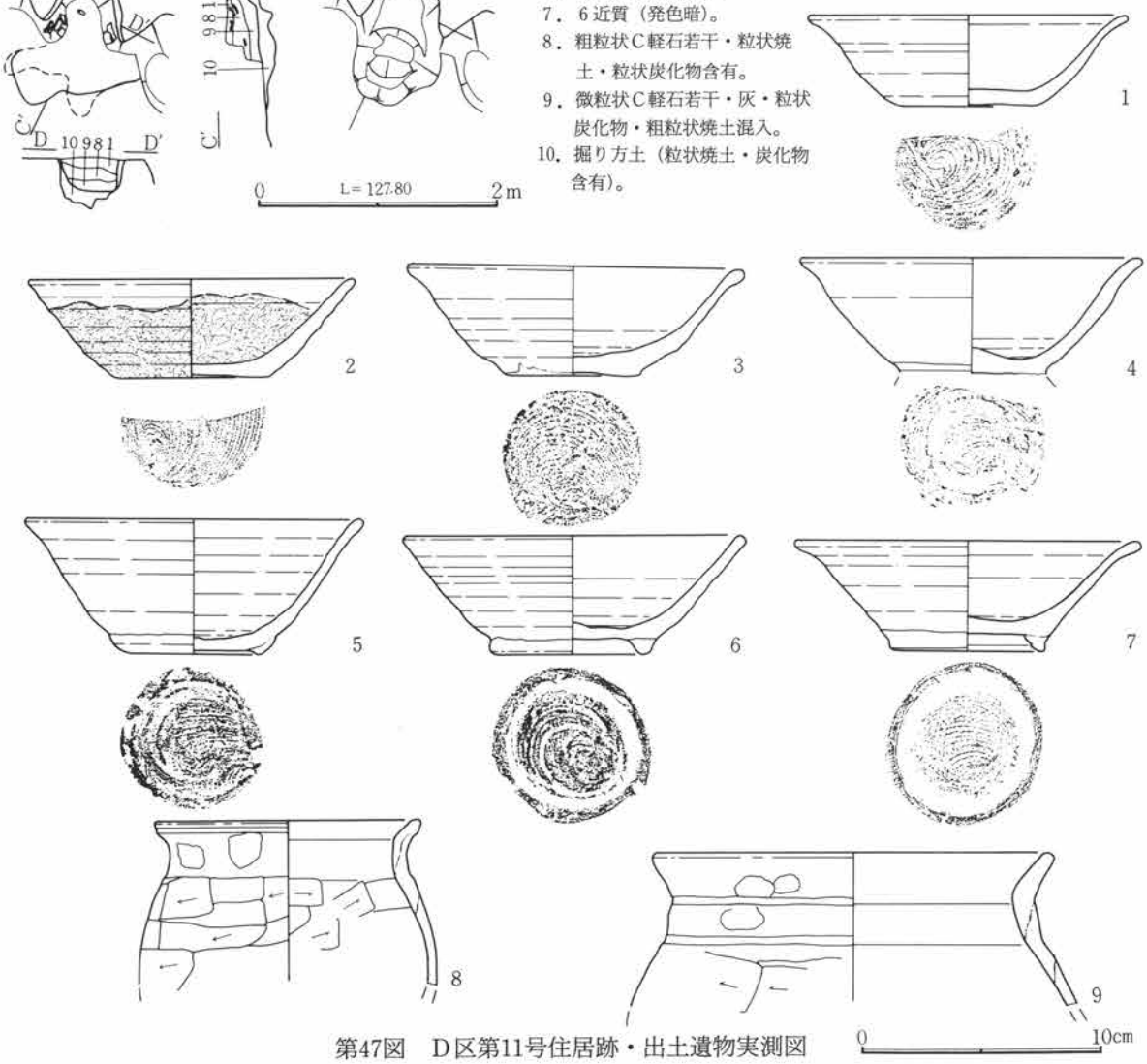
第46図　Ｄ区第11号住居跡出土遺物実測図

心に不整形であり、特に北東隅部分の壁がほぼ直角に廻る隅丸の形状でなく、カマドの左袖際部分から北壁にかけて「く」字状を呈している。床面はローム層中に設置され、堅く平坦であるが、貼床は認められない。壁高は約40cmを測り、ほぼ直線的に垂直に立ち上がる。カマドは東壁南寄りに位置し、掘り方に改築の痕跡が認められる。両側の袖部分に瓦の破片が数点ずつ補強用に入れられている。貯蔵穴が南東隅に検出されている。遺物はカマド内部及び周辺を中心に多量に出土している。住居跡の廃棄時期は遺物から10世紀後半と考えられる。　（麻生）

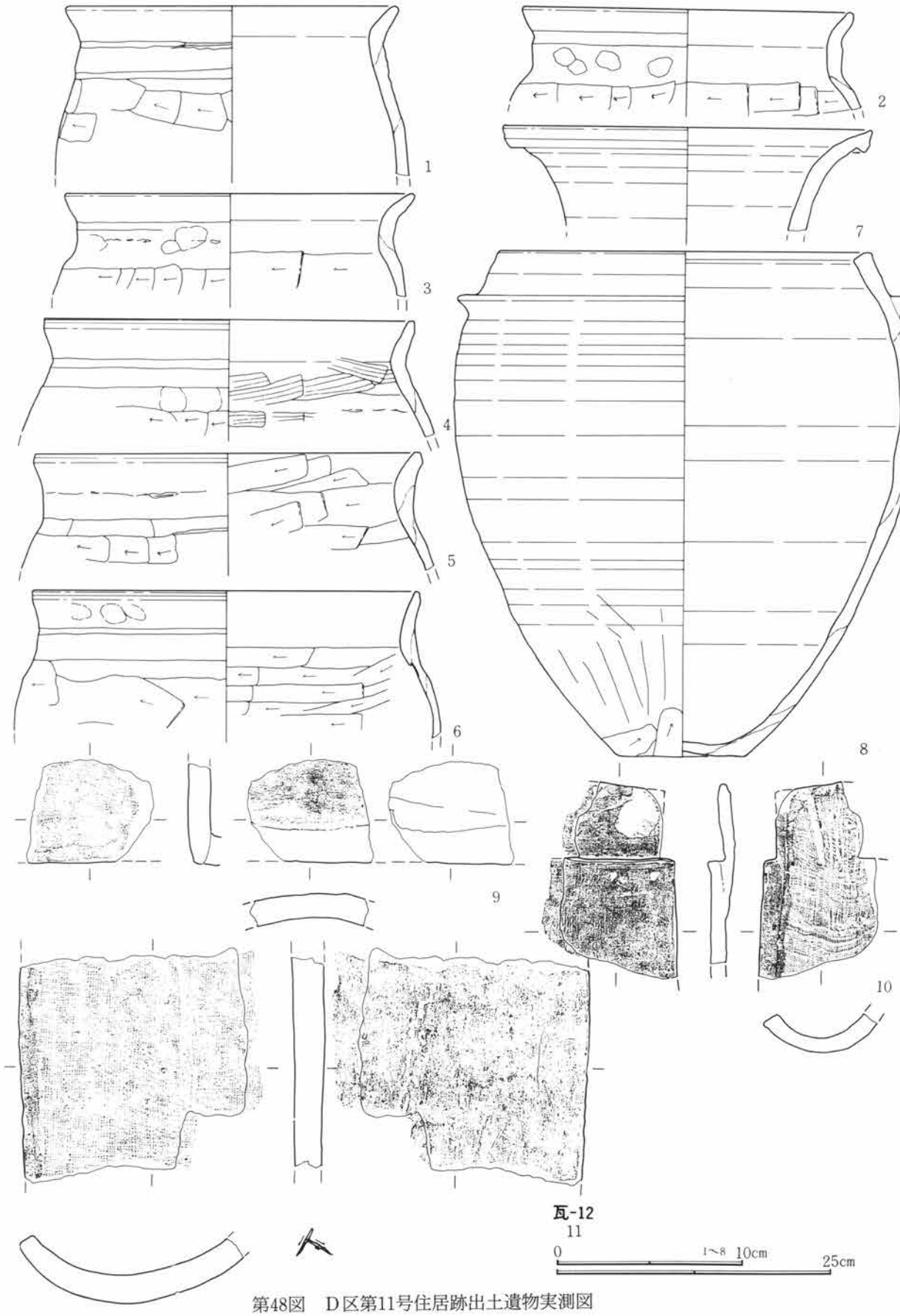


層　序

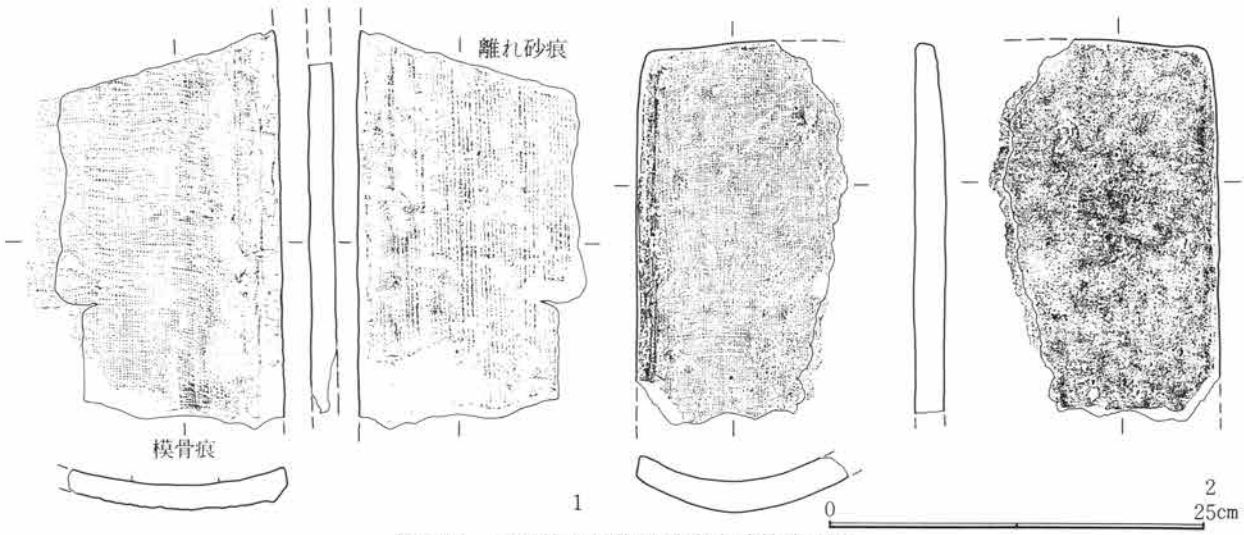
1．C軽石多量（粗粒若干含有）。　2．細粒状C軽石多量（1より多い）。　3．C軽石多量・粒状・小塊状Ⅶ層土若干含有。
4．C軽石含有・粒状Ⅶ層土若干含有。
5．細粒状C軽石若干・粒状Ⅶ層土・粒状炭化物若干含有。
6．微粒状C軽石微量。
7．6近質（発色暗）。
8．粗粒状C軽石若干・粒状焼土・粒状炭化物含有。
9．微粒状C軽石若干・灰・粒状炭化物・粗粒状焼土混入。
10．掘り方土（粒状焼土・炭化物含有）。



第47図　D区第11号住居跡・出土遺物実測図

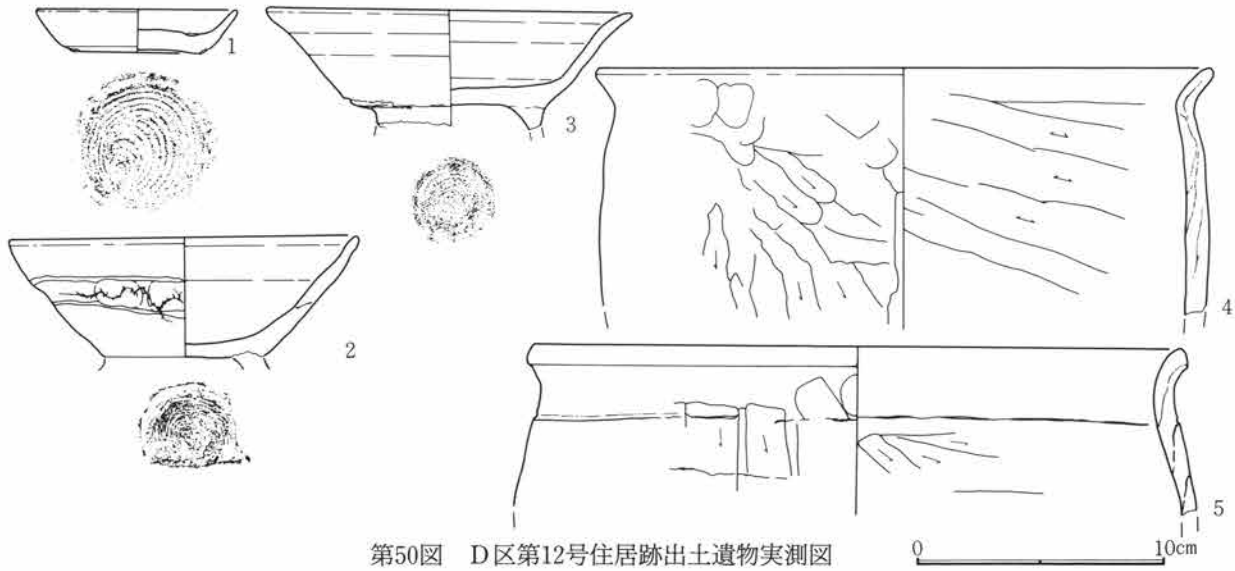


第48図　D区第11号住居跡出土遺物実測図



第49図　D区第11号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	D区第12号住居跡	位置	1～3－D－52～54グリッド内				
平面形態	隅丸長方形	規模	3.87m×4.16m	主軸方位	北－177度－東	残存深度	約22cm程
壁	斜位気味に立ち上がる。	**北**		床面	造床。掘り方を埋設し貼り床を構築し、平坦である。		
壁溝	未検出。			貯蔵穴	未検出。		
柱穴	未検出。住居屋外周辺部を精査したが未確認に終った。						
掘り方	住居中央部からカマド部分にかけて顕著であるが、全体的に浅い。中央のものは柱穴ではない。						
カマド	位置	南壁南東隅寄り。屋外に約70cm突出する。		主軸方位	北－165度－東		
形状	主体は屋外に位置する。焚口手前の皿状の窪みは灰の掻き出しによる状況。			改築の有無	有。		
規模	全長161cm・屋外長70cm・屋内長68cm・袖間幅－cm・燃焼部幅84cm						
焚口	屋外側に位置し、側壁は瓦で補強する。	袖	顕著でなく焚口左側の男瓦による補強部が相当する？				
燃焼部	検出部奥寄り。土器・瓦・礫により支脚をなす。平坦面は少ない。						
煙道	未検出。	掘り方	図示した状態は改築以前の状態と考えられる。				
遺物出土状況	カマド・カマド付近に多いが、他は散在する。２層土中に比較的多い。						



第50図　D区第12号住居跡出土遺物実測図

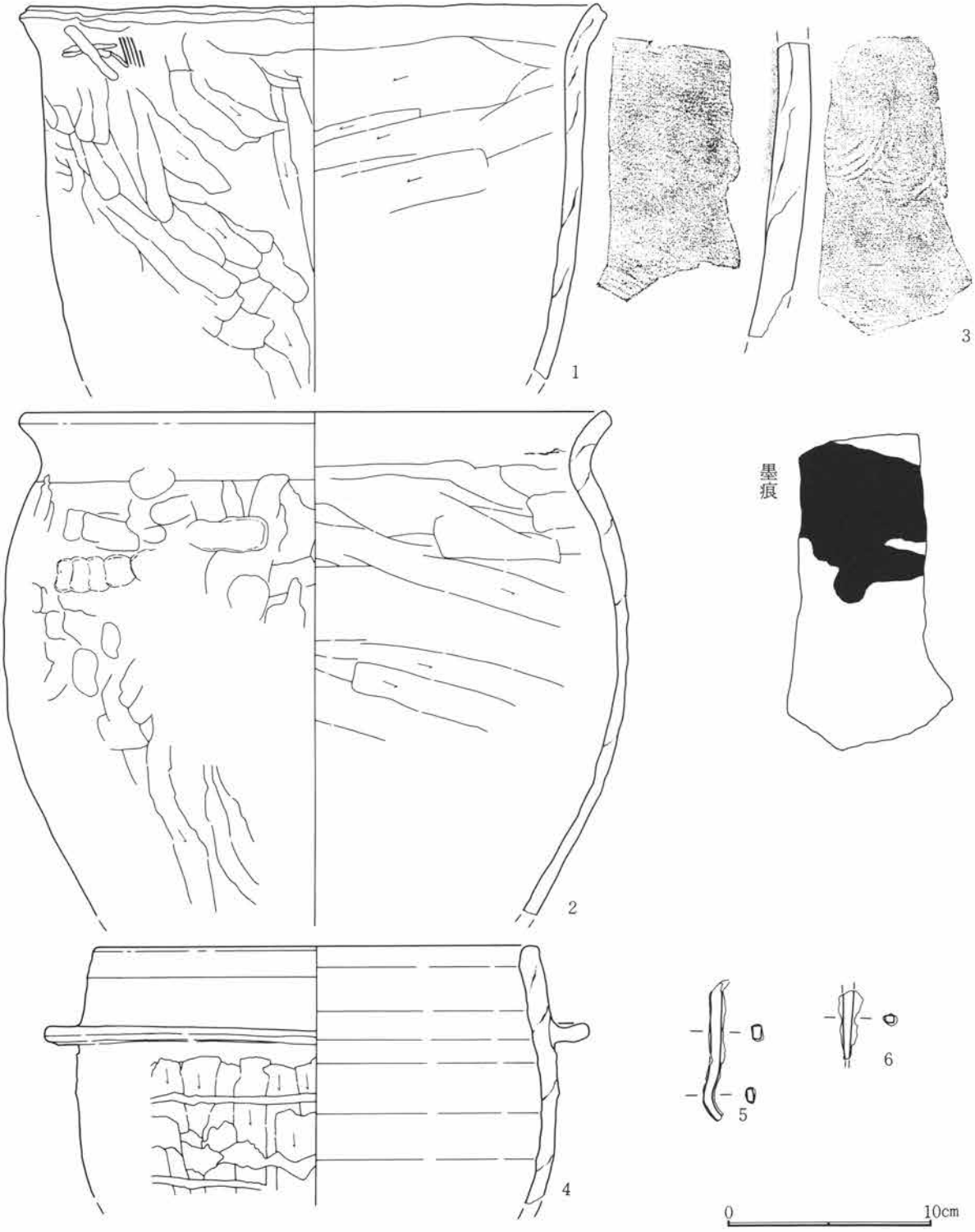
所　見　本住居跡はD区第13号住居跡を切って重複する。平面形態は東西に長軸を有する隅丸長方形を呈し、若干西側が広くなっている。住居の掘り込みは比較的浅い。床面はすべて貼り床となっており、ローム層中に掘り方床面を設定し、10cm内外の厚さで埋め戻して生活面を整えている。掘り方床面では小さな凹凸が目立ち、床下構造を示す施設は検出されない。また段掘り状に西側から南側へかけて緩やかに掘り込んでいる。生活面においても平坦に整えられているが堅徴ではなく、ピット・周溝等の施設は無いと思われる。カマドは南壁東寄りに構築され、掘り方の軸と使用時（廃棄時）の軸方向の相違から改築の様子が認められる。すなわち使用時（廃棄時）においては、カマドの方向を約20度南側へ変更しているのである。焚口は壁外に設け、焚口左側には内面を壁体に接した男瓦を縦に据えていた。また右壁では女瓦を壁体の補強に利用する構造が認められた。煙道は検出されなかったが、燃焼部には河原石の礫が支脚として据えられたまま出土し、さらに瓦・土器にて補佐する状況が見出された。焚口より内側にかけて床面を楕円形に掘り込んだ浅いピットが存在し、灰の掻き出し用と思われるが、焼土・灰・炭化物等

層　序

1．粗粒状C軽石少量・細粒状C軽石多量混入。　2．粗粒状C軽石多量。
3．微粒状C軽石若干含有。　4．粗粒状C軽石含有。　5．細粒状C軽石若干。
6．5近質。　7．微粒状C軽石若干・小塊状Ⅵ層土少量混入。
8．掘り方土（細粒状C軽石若干）。
9．微粒状C軽石多量。　10．2近質・粒状焼土含有。　11．細粒状C軽石若干・粒状焼土・粗粒状炭化物含有。　12．塊状焼土・　13．粒状焼土・炭化物若干混入。

第51図　D区第12号住居跡実測図

が埋塡されていた。掘り方状況を見ると、廃棄時期のカマドは改築前に比べて燃焼部を約25cm程内側に設定し、壁体も同時に内側へ整えて規模を小さく取っている。よって改築の際は壁体・底面を焼土・炭化物の混在する褐色土で貼り、補強用の瓦片、そして支脚用の礫を設置して整形を行い、使用したものと思われる。このように壁外に焚口を設置した形態は、本遺跡では新しい様相を示している。遺物はカマド付近に集中して出土している。以上の事から廃棄時期は11世紀中頃と考えたい。　（石北）

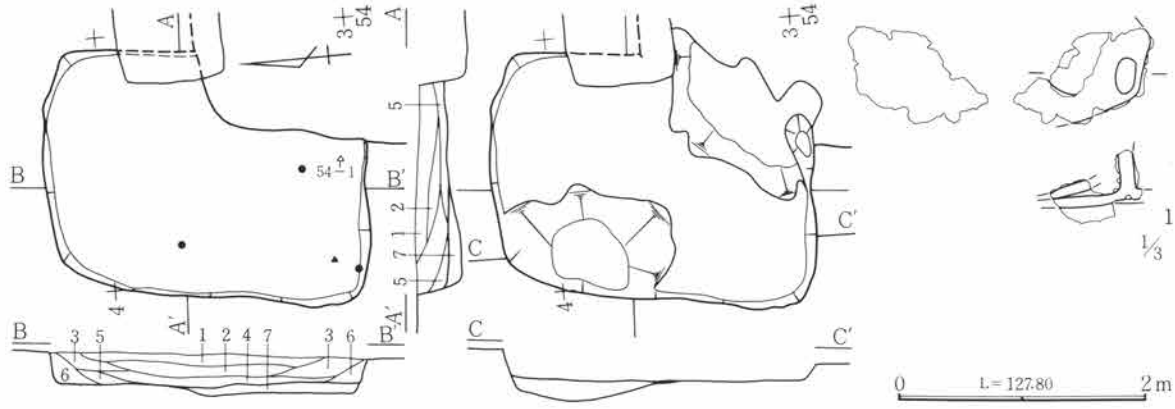


第52図　D区第12号住居跡出土遺物実測図

第53図　D区第12号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	D区第13号住居跡	位置	２～４－D－54・55グリッド内				
平面形態	隅丸長方形	規模	(2.00)m×2.58m	主軸方位	北－84度－東	残存深度	約27cm程
壁	斜位気味に立ち上がる。 南		床面	大半が掘り方底面を利用する。一部造床。			
壁溝	未検出。			貯蔵穴	未検出。		
柱穴	未検出。住居屋外周辺部を精査したが未確認に終った。						
掘り方	カマド周辺・北西隅部周辺が皿状に窪む。中央部は平坦。						
カマド	位置	東壁で南東隅寄りか、掘り方からすれば南東隅部か？			主軸方位	不明。	

所　見　本住居跡はD区第12号住居跡に南東部を切られて重複する。規模は小さく、隅丸長方形を呈すると推定される。床面は掘り方床面と同一にし、北西部において一部貼り床が認められた。カマドは破壊され検出できないが、掘り方の状況から東壁南寄りか南東コーナーに存在が推定できる。遺物は、鉄製品が１点出土したのみである。C区第７号住居跡と類似性が認められ、10世紀末～11世紀前半頃と思われる。（石北）



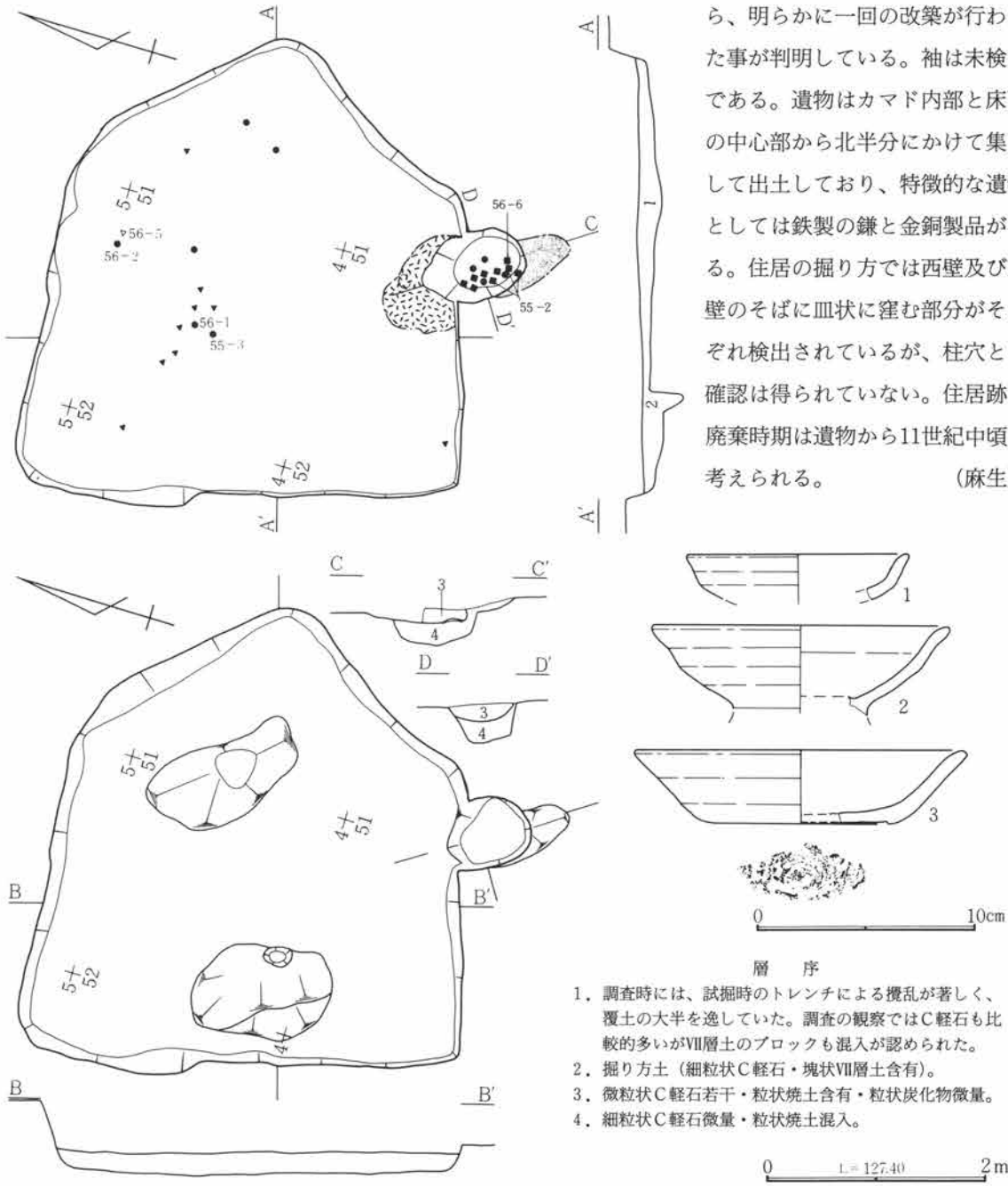
層　序

1．粗粒状C軽石多量混入。　2．粗・細粒状C軽石含有。　3．C軽石少量・小塊状Ⅶ層土混入。
4．微粒状C軽石微量・小塊状Ⅶ層土多量混入。　5．細粒状C軽石若干・小塊状Ⅶ層土若干。　6．微粒状C軽石若干・風化Ⅵ層土混入。
7．掘り方土（微粒状C軽石微量・塊状Ⅶ層土若干）。

第54図　D区第13号住居跡・出土遺物実測図

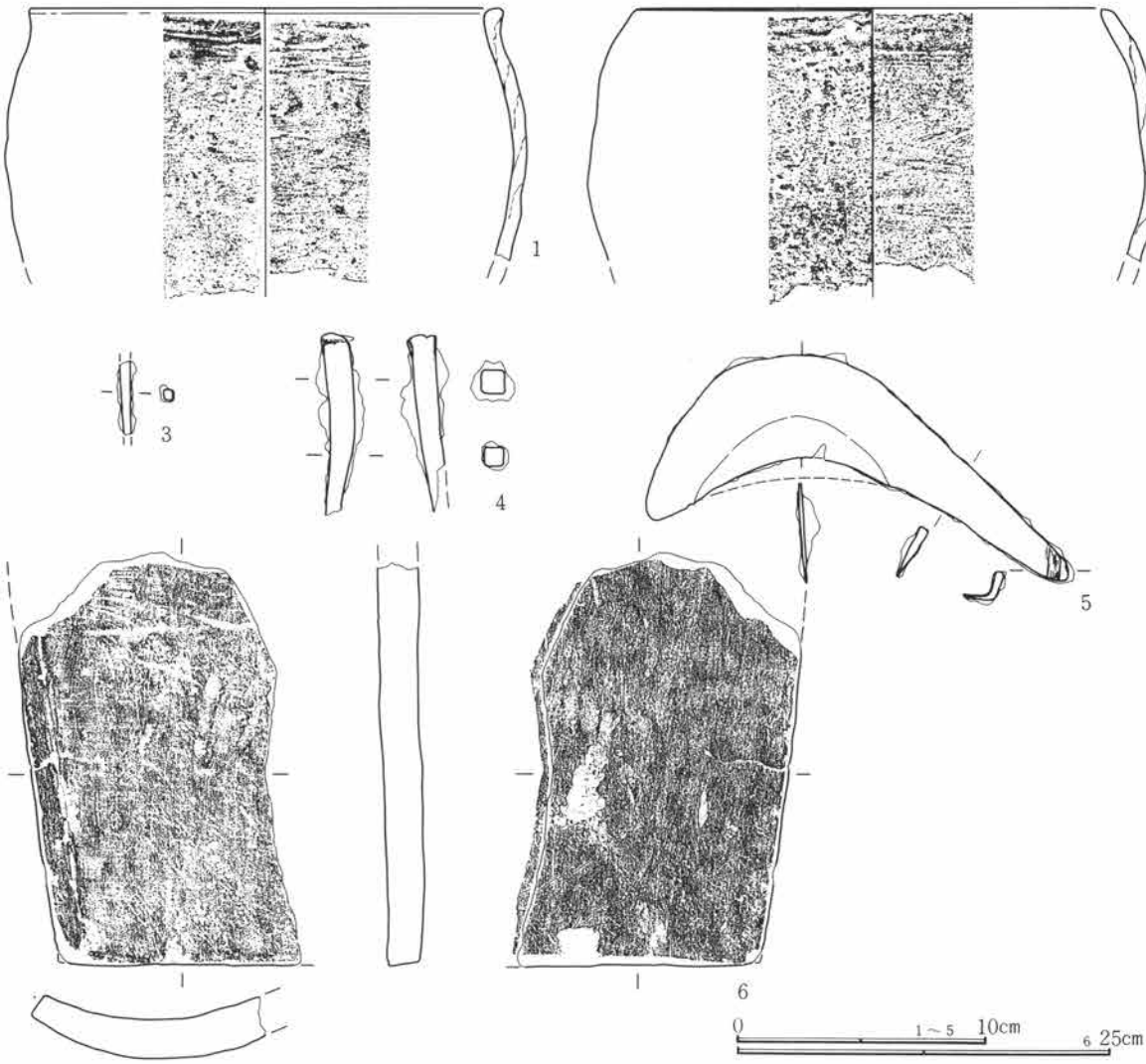
遺構名称	D区第14号住居跡	位置	３～５－D－50～52グリッド内				
平面形態	不整五角形	規模	5.51m×4.15m	主軸方位	北－164度－東	残存深度	約42cm程
壁	斜位気味に立ち上がる。 南		床面	造床。掘り方底面より＋20cm程を埋設している。			
壁溝	未検出。			貯蔵穴	未検出。		
柱穴	柱穴状のものが掘り方底面で検出したが、柱穴としては判断し難い周辺精査でも未確認。						
掘り方	全体的に平坦気味で、床面－20cm程で検出。また、皿状に窪む部分が２ケ所で検出された。						
カマド	位置	南壁南東隅寄り。屋外に約100cm突出する。			主軸方位	北－148度－東	
形状	舌状。試掘時のトレンチによる攪乱が著しく遺存不良にしている。					改築の有無	有。
規模	全長94cm・屋外長58cm・屋内長36cm・袖間幅－cm・燃焼部幅55cm						
焚口	扇状で浅い皿状を呈する。			袖	未検出。		
燃焼部	検出部奥壁寄りの部分。女瓦片（第56図－６）を付設している。						
煙道	掘り方では痕跡程度で検出。		掘り方	屋外部のみに認められる。			
遺物出土状況	壁際で金銅製品が出土している。他は、ほぼ床面直上層中より散在して出土している。						

所　見　当住居跡は昭和55年に実施された試掘調査時の試掘トレンチにより、南壁のカマド部分から北壁の北東隅にかけての部分を一部壊されている。当住居跡の特徴としては、その住居形態が特異な例に属しており、具体的には北・西・南の三方の壁が長方形の形態を呈しているのに対して、東壁がその中央部で「く」の字状に極端に張り出しており、そのために変形な五角形の形態を呈する点である。調査当初はこの点に気付かずに、ほぼ長方形の住居形態で調査していたが、東壁部分の再度の検証から調査不足が判明した訳である。またカマドの位置が南壁の東寄りの部分と、従来の住居跡とは異なる位置にある事や、その主軸方向も住居の主軸方向からやや東寄りにずれる事から、まさに特異な住居跡の例であると言える。カマドは先に述べたように、試掘トレンチにその上面部分を壊されているために、遺存状態が極めて良くない。だが、掘り方での煙道部分の痕跡の検出から、明らかに一回の改築が行われた事が判明している。袖は未検出である。遺物はカマド内部と床面の中心部から北半分にかけて集中して出土しており、特徴的な遺物としては鉄製の鎌と金銅製品がある。住居の掘り方では西壁及び東壁のそばに皿状に窪む部分がそれぞれ検出されているが、柱穴との確認は得られていない。住居跡の廃棄時期は遺物から11世紀中頃と考えられる。　（麻生）



層　序
1．調査時には、試掘時のトレンチによる攪乱が著しく、覆土の大半を逸していた。調査の観察ではC軽石も比較的多いがⅦ層土のブロックも混入が認められた。
2．掘り方土（細粒状C軽石・塊状Ⅶ層土含有）。
3．微粒状C軽石若干・粒状焼土含有・粒状炭化物微量。
4．細粒状C軽石微量・粒状焼土混入。

第55図　D区第14号住居跡・出土遺物実測図



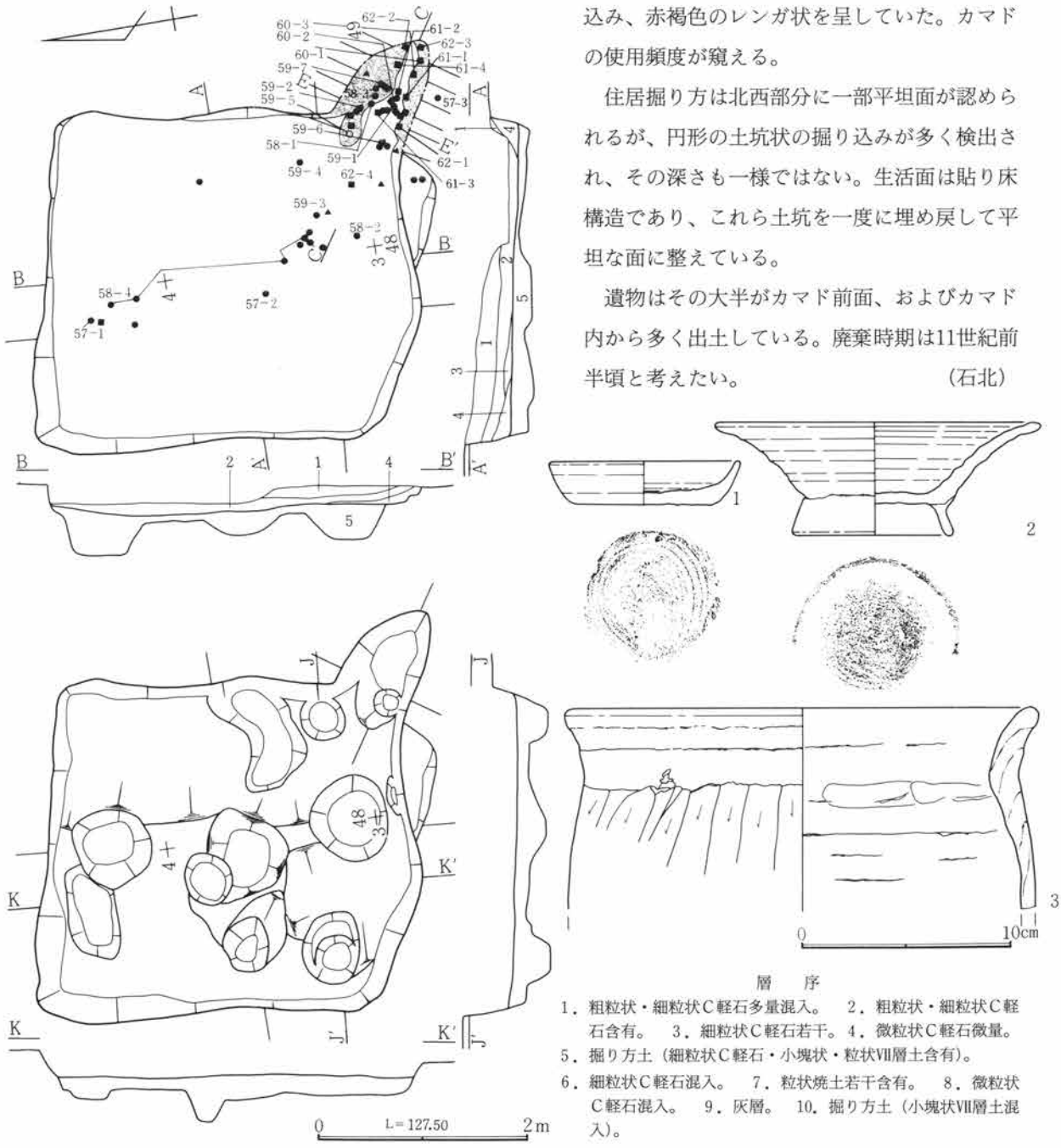
第56図　Ｄ区第14号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	Ｄ区第15号住居跡	位置	２～４－Ｄ－47・48グリッド内				
平面形態	不整方形	規模	3.88m×3.83m	主軸方位	北－99度－東	残存深度	約40cm程
壁	斜位気味に立ち上がる。	**西**	床面	造床。掘り方が著しく、埋設も顕著である。			
壁溝	未検出。		貯蔵穴	未確認。			
柱穴	未検出。住居屋外周辺を精査したが未確認に終った。						
掘り方	土坑状の掘り込みが多く、北西側に平坦気味な面が認められる。						
カマド	位置	南東隅部。屋外に約100cm突出する。		主軸方位	北－123度－東		
形状	大半が屋外に突出。燃焼空間までは舌状を呈する。			改築の有無	有。		
規模	全長120cm・屋外長100cm・屋内長20cm・袖間幅62cm・燃焼部幅40cm・煙道幅10～30cm						
焚口	平坦である。礫・瓦により補強する。	袖	左袖は独立するが、右袖は偏平な礫を壁に付設する。				
燃焼部	瓦の組方から器設部が判断される（断面Ｅ－Ｅ′部分）。						
煙道	細長く緩やかに立ち上がる。	掘り方	舌状を呈し非常に深い。改築の痕跡を認める。				
遺物出土状況	カマド全面・北壁寄りが多い。前者は２層土中より出土。						

所　見　本住居跡は南東コーナーにカマドを有するが、壁体に瓦を多用し、一部天井が残存するが同様に瓦の使用、煙道部に至るまでの構築状況・機能が把握できる遺存度良好なカマドである。使用時におけるカマドの軸方向は、北西コーナーを結ぶ対角線より南側にずれている。これは住居内の空間をより広く取るために意識的に採用されたものであろうか、焚口には偏平な河原石とやや細長い亜角礫を用いている。特に左方は袖を形成し、右方は南壁に押さえて立てている。住居掘り方からみると、歴然である。ゆえにカマド改築の様子が認識される。次に構造を見ると、壁体に瓦片を縦に並べ、煙出しと思われる先端部には女瓦の丸味を利用して筒形に形取っている様子が分かる。しかし燃焼部から煙道に至る天井瓦が乗る部分には壁体の瓦が存在せず、幅を狭めた煙道部には存在していないため興味深い。底面を見ると焚口部分が最も良く焼け込み、赤褐色のレンガ状を呈していた。カマドの使用頻度が窺える。

住居掘り方は北西部分に一部平坦面が認められるが、円形の土坑状の掘り込みが多く検出され、その深さも一様ではない。生活面は貼り床構造であり、これら土坑を一度に埋め戻して平坦な面に整えている。

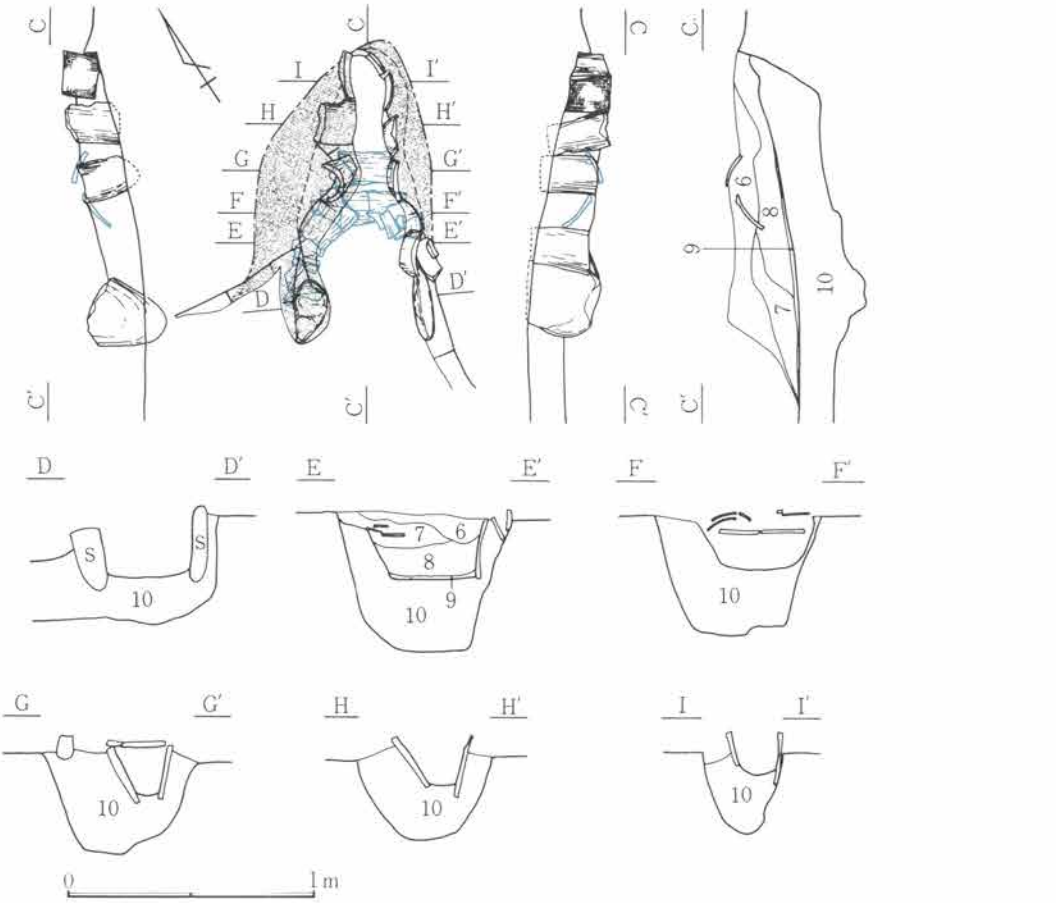
遺物はその大半がカマド前面、およびカマド内から多く出土している。廃棄時期は11世紀前半頃と考えたい。　（石北）

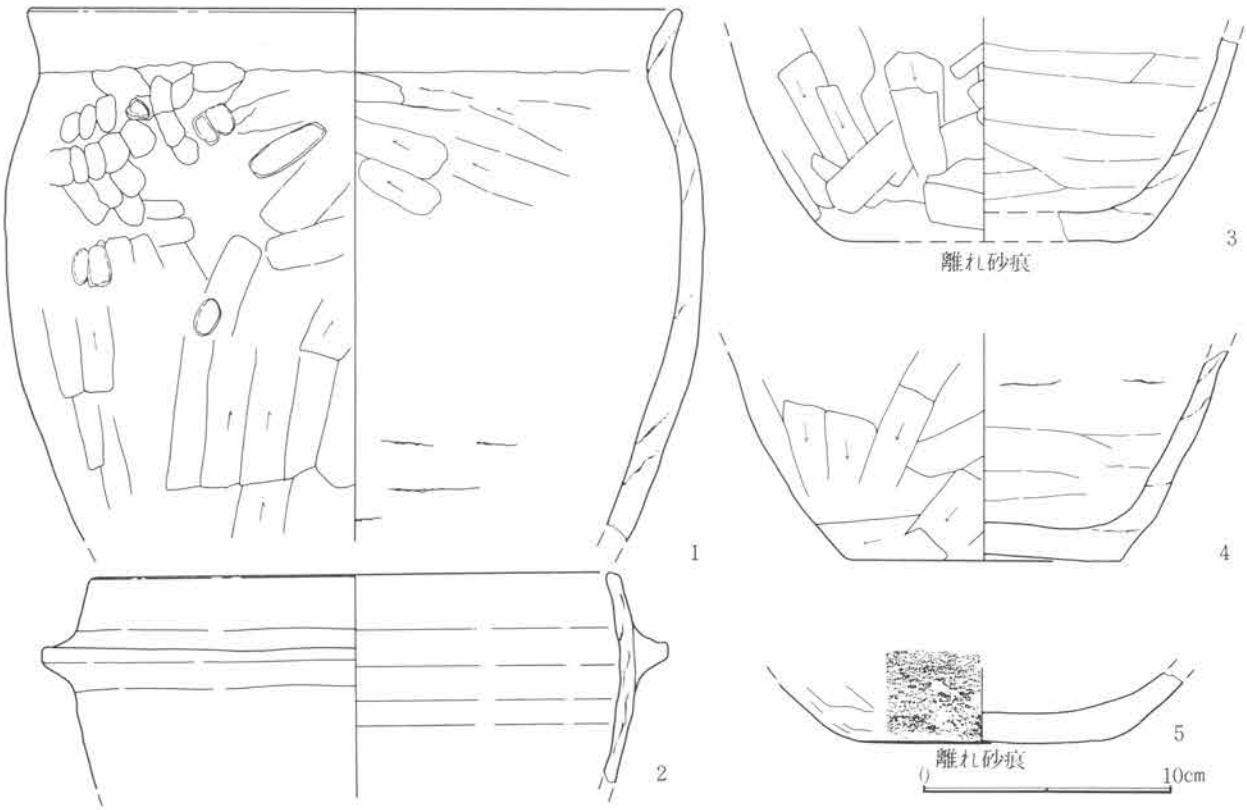


層　序

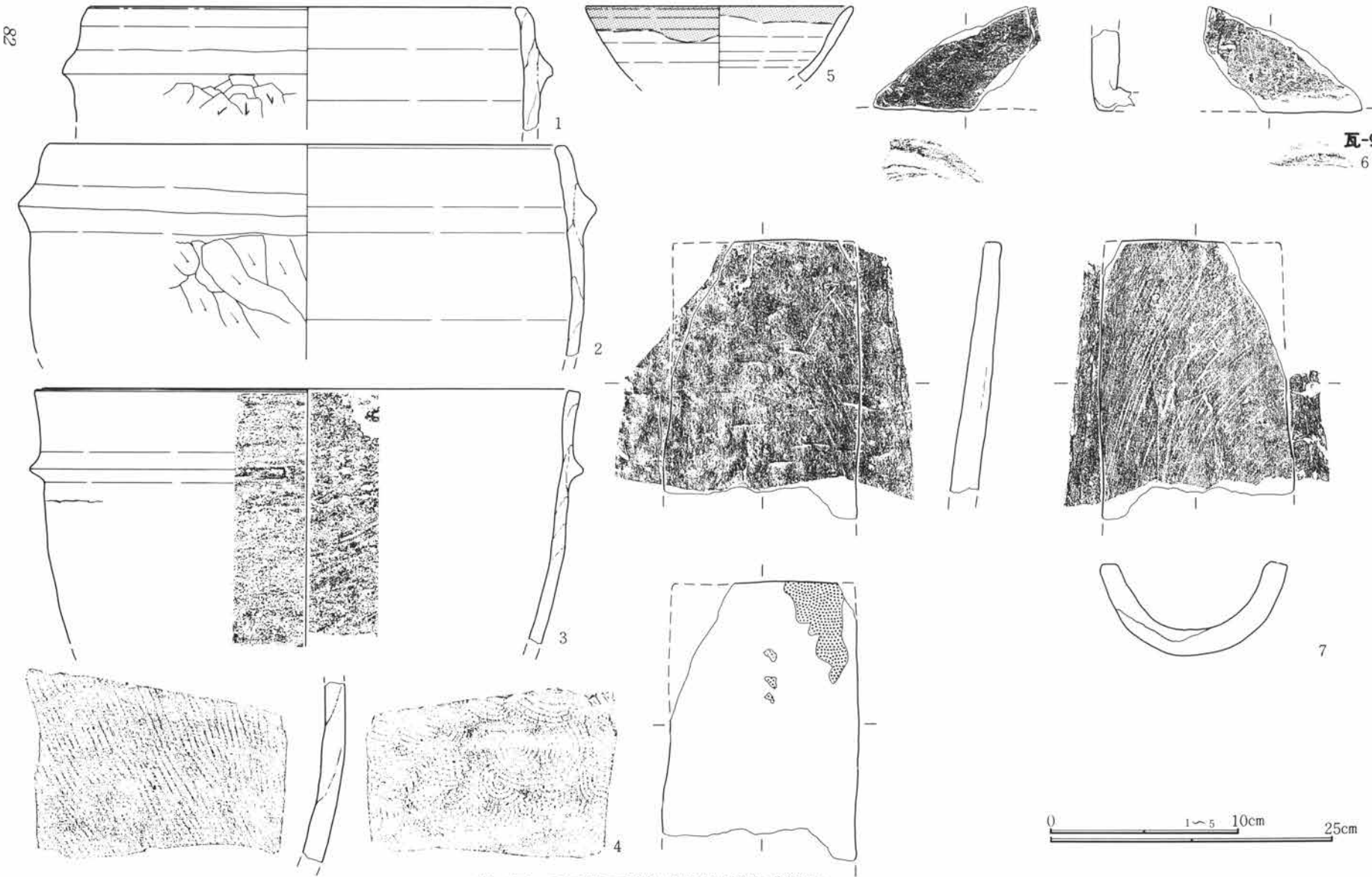
1．粗粒状・細粒状C軽石多量混入。　2．粗粒状・細粒状C軽石含有。　3．細粒状C軽石若干。　4．微粒状C軽石微量。
5．掘り方土（細粒状C軽石・小塊状・粒状Ⅶ層土含有）。
6．細粒状C軽石混入。　7．粒状焼土若干含有。　8．微粒状C軽石混入。　9．灰層。　10．掘り方土（小塊状Ⅶ層土混入）。

第57図　D区第15号住居跡・出土遺物実測図1

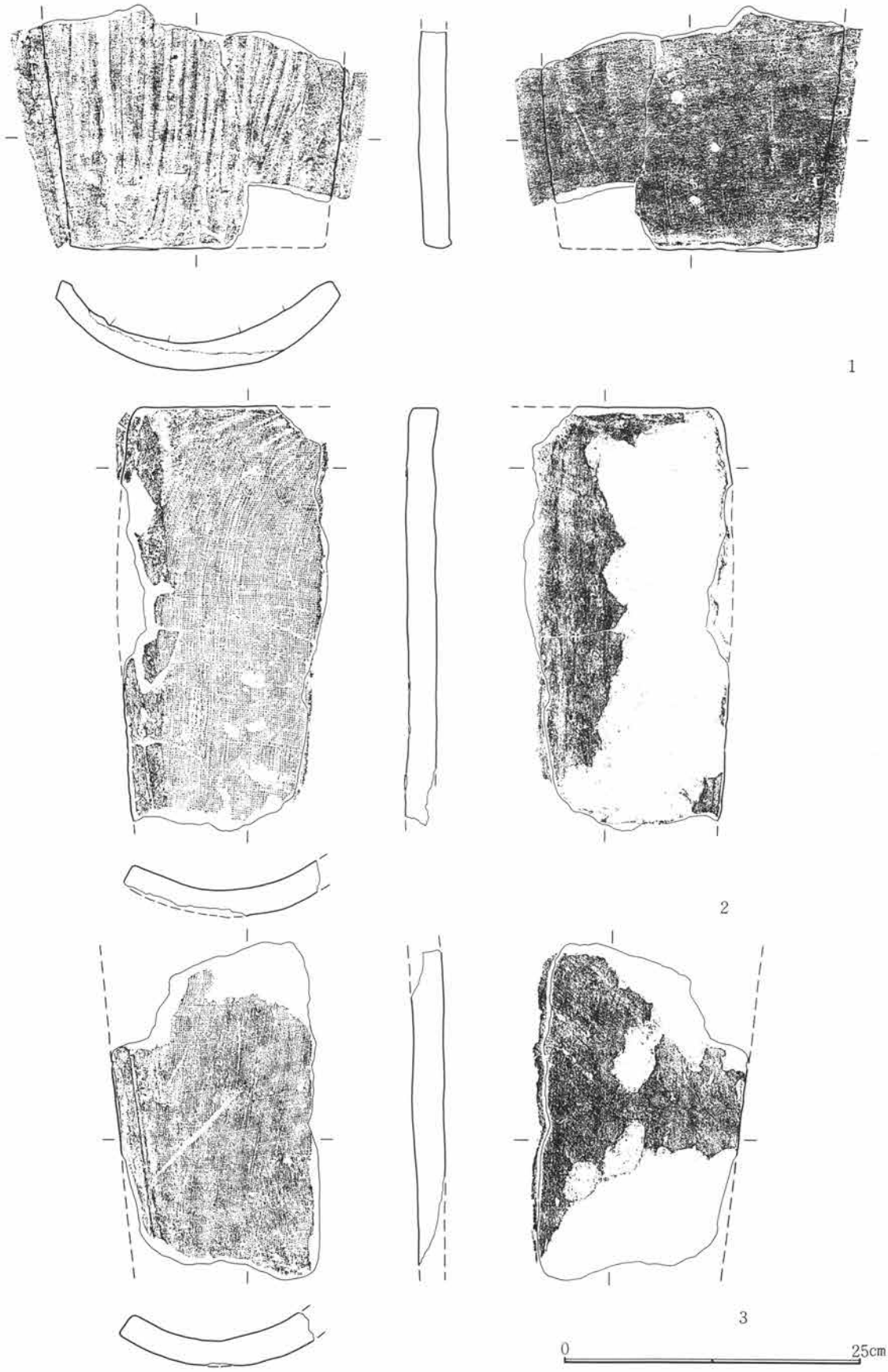




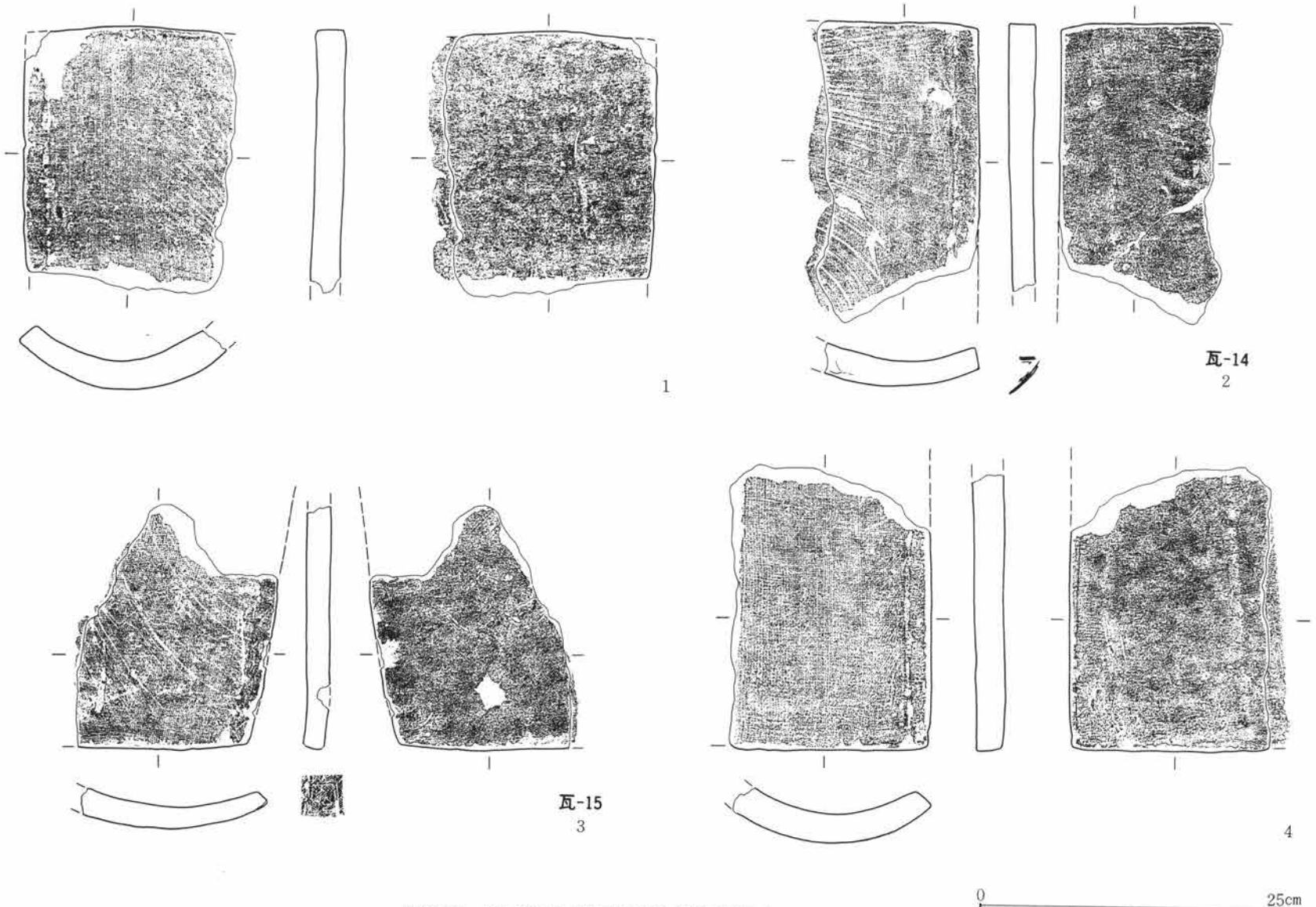
第58図　D区第15号住居跡・出土遺物実測図



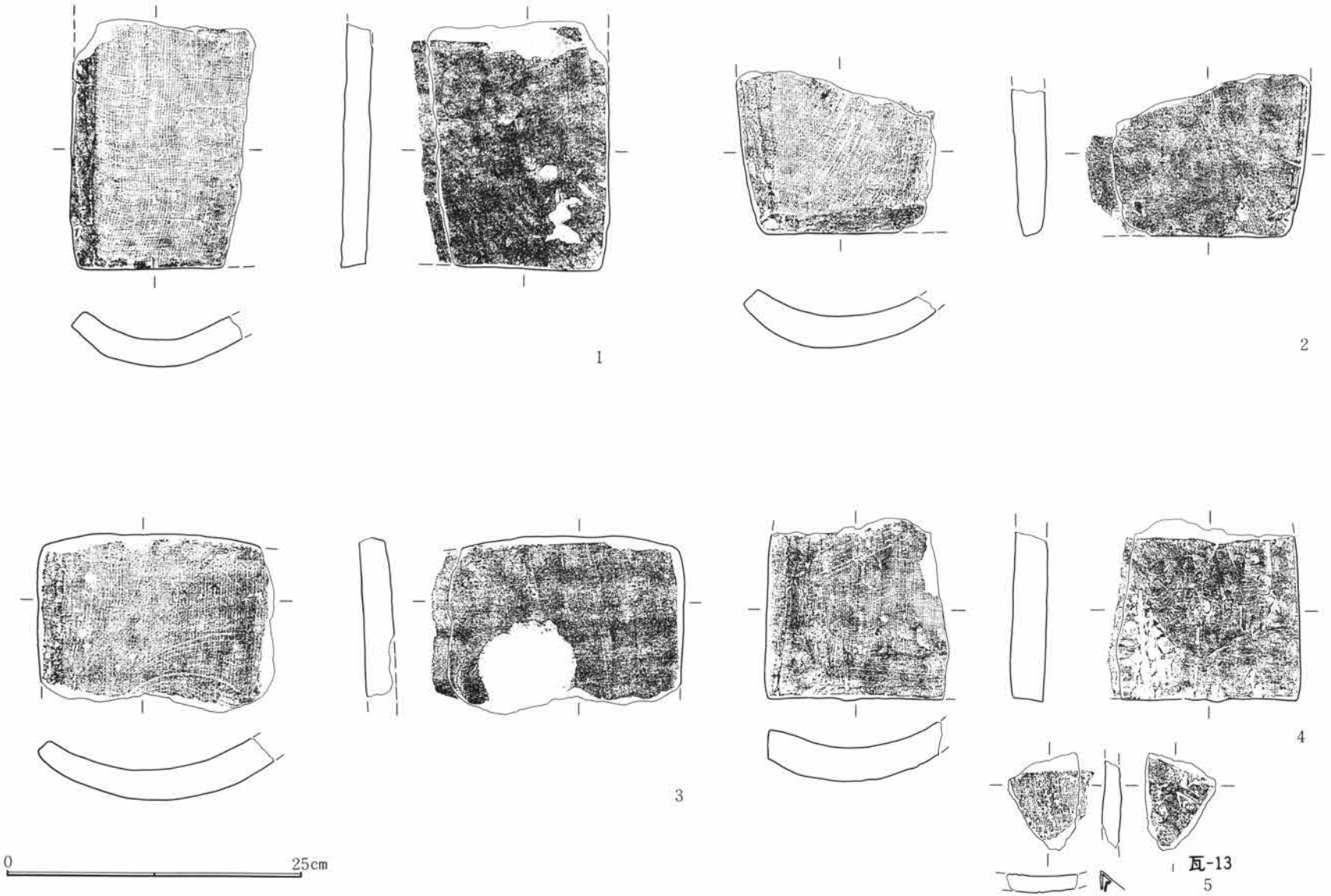
第59図　D区第15号住居跡出土遺物実測図



第60図　Ｄ区第15号住居跡出土遺物実測図



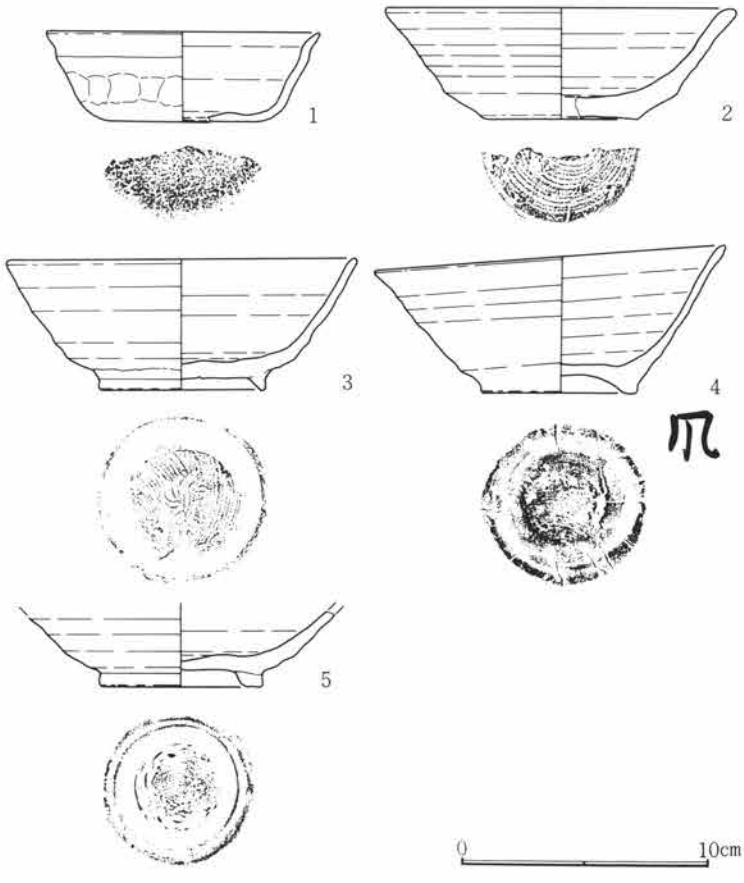
第61図　D区第15号住居跡出土遺物実測図



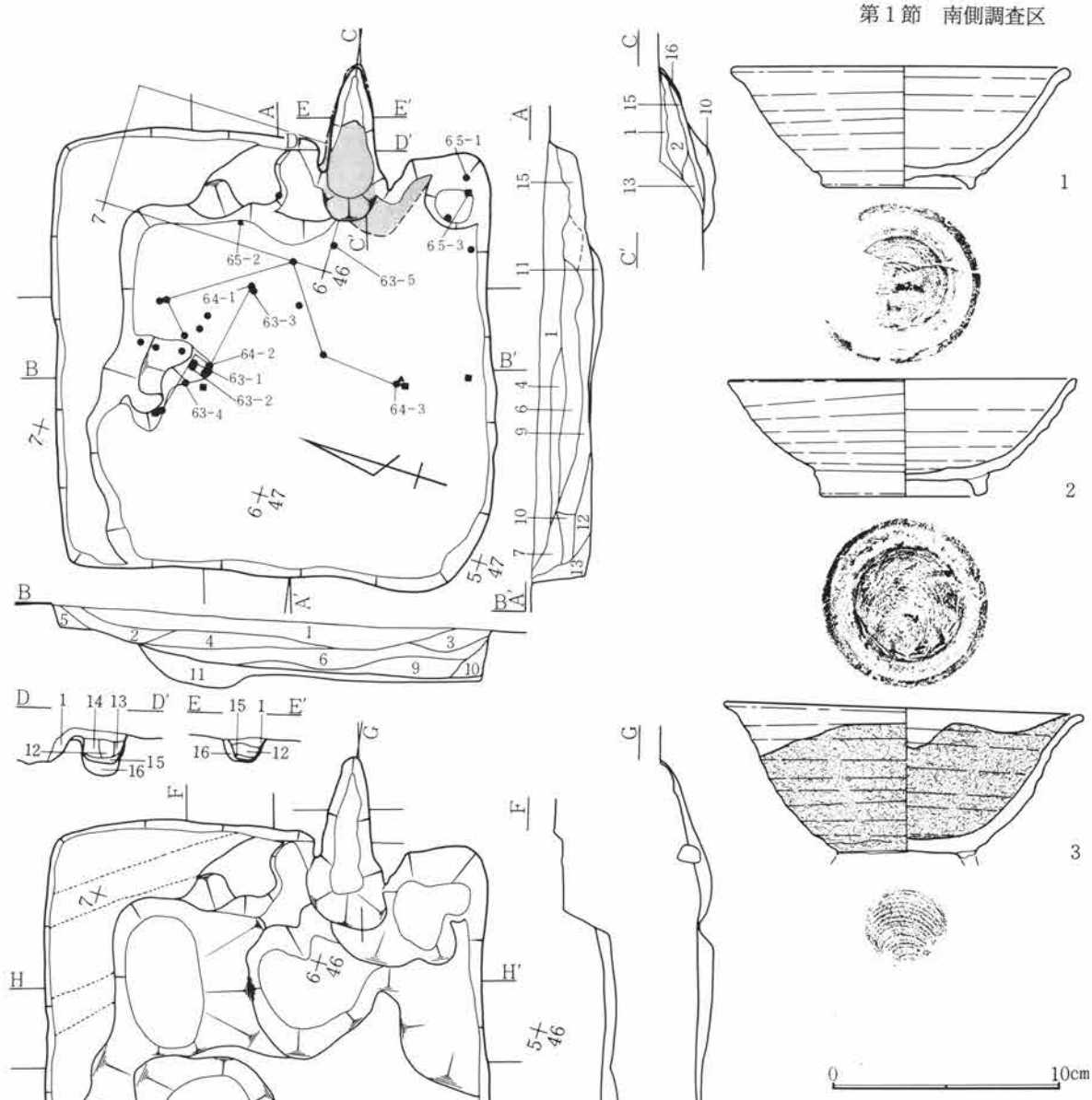
第62図　D区第15号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	D区第16号住居跡	位置	5～7－D－45～47グリッド内				
平面形態	不整方形	規模	4.58m×3.88m	主軸方位	北－73度－東	残存深度	約55cm程
壁	斜位気味に立ち上がる。	南	床面	造床。北側から南側に向かい緩やかに傾斜する。			
壁溝	未検出。		貯蔵穴	南東隅部で検出。不整形。60cm・深度13cm			
柱穴	未検出。住居屋外周辺部を精査したが未確認に終った。						
掘り方	大形の土坑状の掘り込みが目立つ。南西部に平坦面を構築する。						
カマド	位置	東壁南寄り。屋外に約72cm突出する。		主軸方位	北－75度－東		
形状	細い舌状を呈する。底面では燃焼部と煙道部の境にくびれが認められる。			改築の有無	無？		
規模	全長138cm・屋外長75cm・屋内長63cm・袖間幅115cm・燃焼部幅42cm・煙道幅20～33cm						
焚口	扇状を呈する。		袖	大半が削り出しの両袖を具備する。			
燃焼部	左袖でオーバーハングしている。この部分から煙道方向に極緩やかに立ち上がっている。						
煙道	先端は緩やかに立ち上がる。		掘り方	焚口・燃焼部で皿状で比較的深い。			
遺物出土状況	貯蔵穴部で第65図－１が出土。北壁下で６層土中からの出土が多く良好な個体を含む。						

所　見　本住居跡は北壁際から東壁中央付近まで一段高いテラス状の施設を有する点が特筆される。調査時において、北壁際ですぐに床面と思われる平坦な面が検出されたが、中央付近に進むにつれて覆土がさらに落ち込んで行くため、床面の検出を行ったところ、当初の平坦面より約30cm程下部に認められた。土層観察から他の遺構との重複は考えられず、同一住居の施設であることが判明した。平面形態は南西コーナーがやや大きくカーブするが、隅丸方形を呈する。しかし、テラス状の平坦面から床面に至るプランは統一的ではなく、不整な曲線に掘り込まれている。また等高線を描いてみると、南西方向に下る緩やかな斜面となっている。部分的にＦＡの畑地の痕跡も見受けられる。床面は、やはり北側から南側にかけて緩く傾斜しており、東西方向のほぼ水平であるのに比べて差が見られる。掘り方は南西部分に平坦面を残すほかは土坑状の掘り込みが約４ケ所あり、この平坦面に合わせて貼り床を行い生活面を構築している。その他の施設としては、南東コーナーに円形の貯蔵穴が検出され、周溝・ピット等は無かったと思われる。カマドは東壁南寄りに構築されていた。遺物は、東半部にその多くが出土しており、廃棄時期は10世紀中頃と思われる。　（石北）



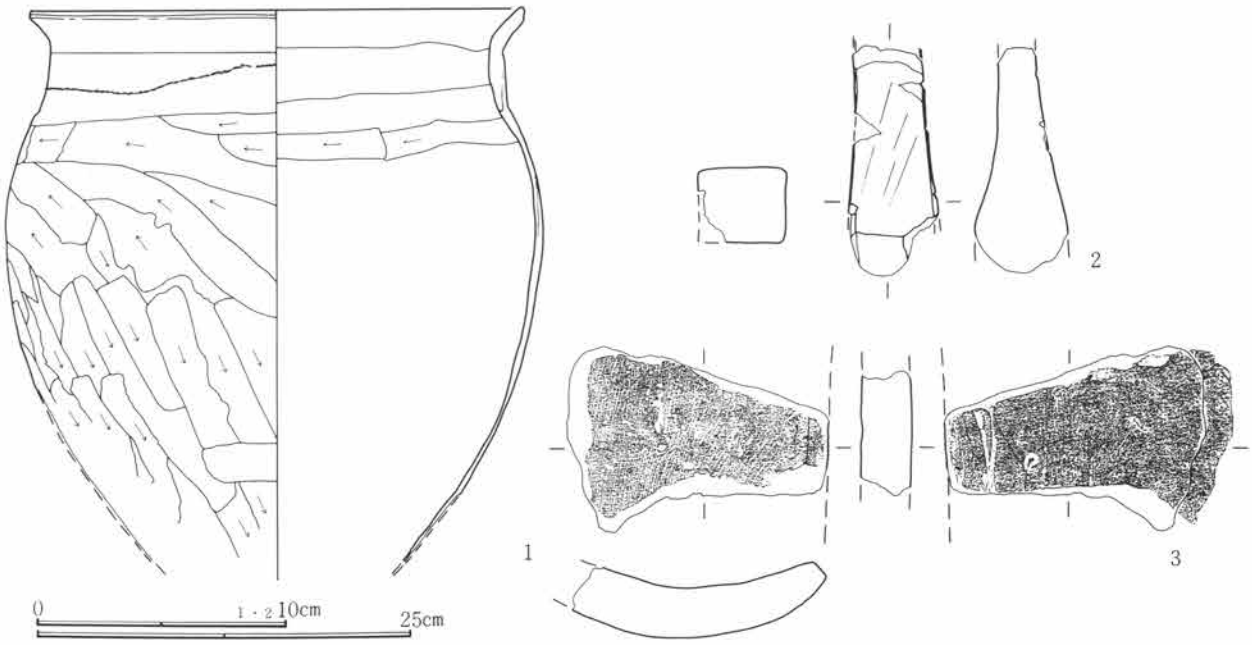
第63図　D区第16号住居跡出土遺物実測図



層　序

1．粗粒状Ｃ軽石多量混入。
2．細粒状Ｃ軽石微量含有。
3．粗・細粒状Ｃ軽石含有。　4．３同質。
5．Ｃ軽石無・底面直上に砂が堆積。
6．Ｃ軽石若干・塊状Ⅶ層土斑状・塊状ＦＡ含有・粒状炭化物若干混入。
7．細粒状Ｃ軽石若干。
8．細粒状Ｃ軽石微量・塊状Ⅶ層土微量混入。
9．細粒状Ｃ軽石若干・塊状Ⅶ層土斑状混入。
10．微粒状Ｃ軽石微量・Ⅶ層土混入。
11．塊状Ⅶ層土多量・Ｃ軽石若干混入。　12．粗粒状Ｃ軽石含有・塊状焼土混入。　13．塊状焼土・粒状炭化物含有。　14．12近質。
15．焼土・塊状焼土。　16．塊状Ⅲ層土主体・粒状焼土若干。

第64図　Ｄ区第16号住居跡・出土遺物実測図

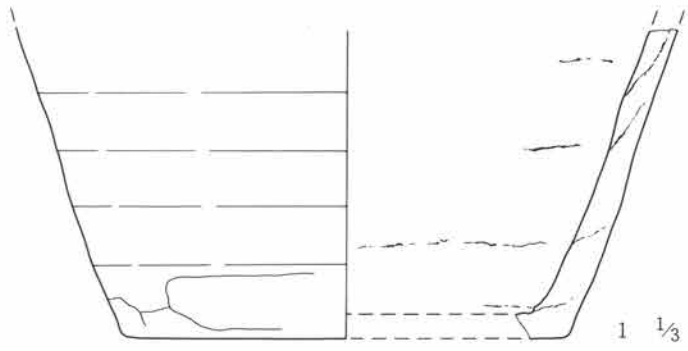


第65図　D区第16号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	D区第17号住居跡	位置	2～4－D－44・45グリッド内				
平面形態	隅丸長方形	規模	3.18m×4.48m	主軸方位	北－100度－東	残存深度	約45cm程
壁	斜位気味に立ち上がる。	**西**	床面	造床。大半が掘り方底面を埋設している。			
壁溝	未検出。		貯蔵穴	P1か？円形状。径75cm・深度32cm			
柱穴	未検出。住居屋外周辺部を精査したが未確認に終った。ただ、P7の存在は考慮される。						
掘り方	カマド前面に大きな皿状の窪みがあり、さらに包括する状態での掘り込みがある。						
カマド	位置	東壁南東隅寄り。大半が屋外に突出する。		主軸方位	北－106度－東		
形状	袖を備え（瓦により補強）、舌状を呈すると考えられる。			改築の有無	有。		
規模	全長66cm・屋外長38＋αcm・屋内長28cm・袖間幅不明・燃焼部幅不明						
焚口	屋内側に向かい傾斜する。		袖	左袖のみ検出。右袖は存在した可能性が大きい。			
燃焼部	判然としないが、残存部で内傾しており、円形状に近い状態と考えられる。						
煙道	不分明。		掘り方	削り出しの袖を有し、焚口周辺は平坦である。			
遺物出土状況	カマド前面部で、3・5層土内からの出土が多い。						

所　見　当住居は、11世紀前半に比定される第27号住居跡に切られている。

確認時は、カマドの部分で左側が顕著な被熱による酸化面が検出されていたが、右側は（第27号住覆土内）カマド部分に相当する部分に比較的多くの焼土粒子が集中していた。この点で、調査着手時に新旧関係を逆に調査したが、調査時に、右側の焼土粒子は第27号住居跡が埋没する間に当住居

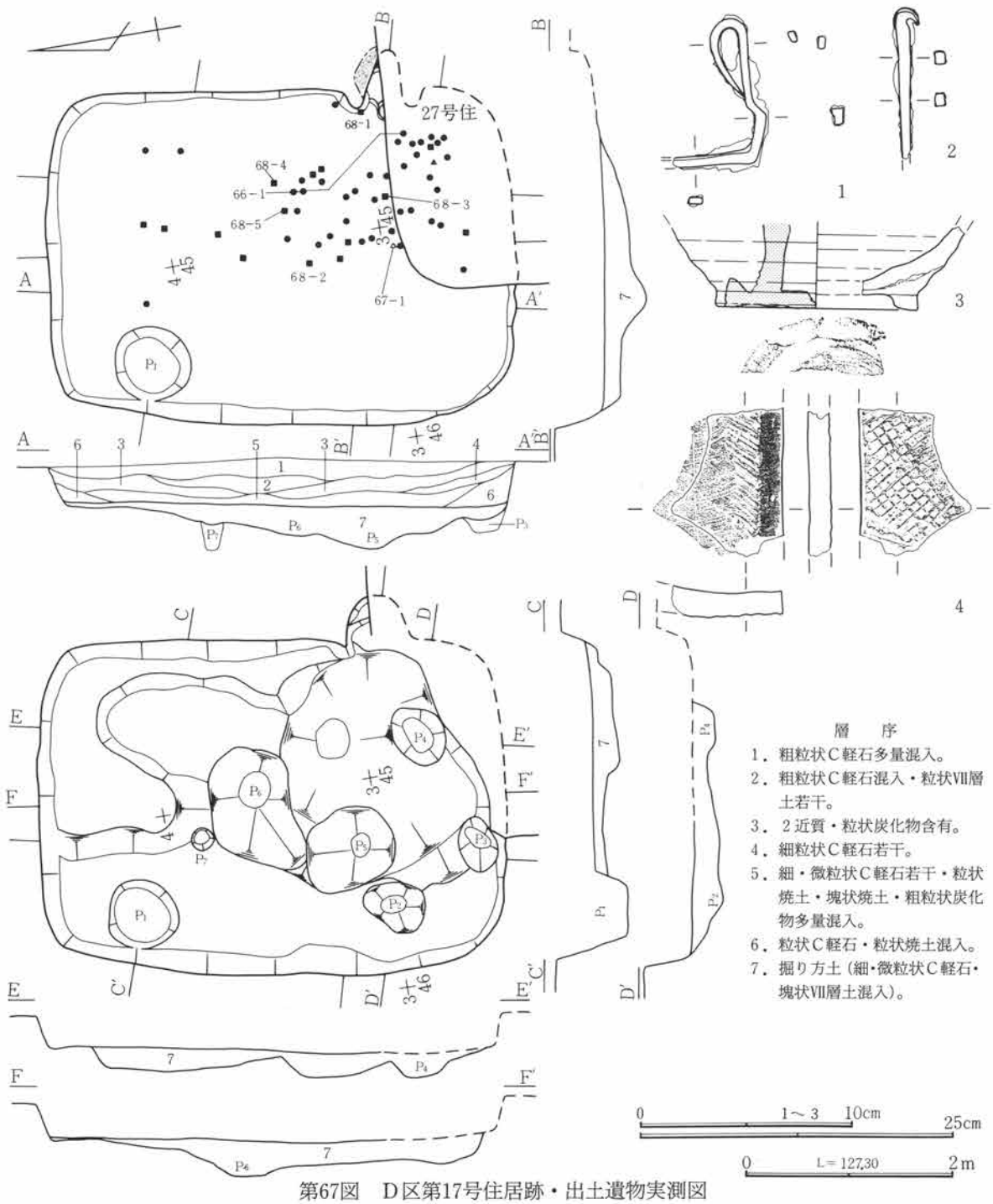


第66図　D区第17号住居跡出土遺物実測図

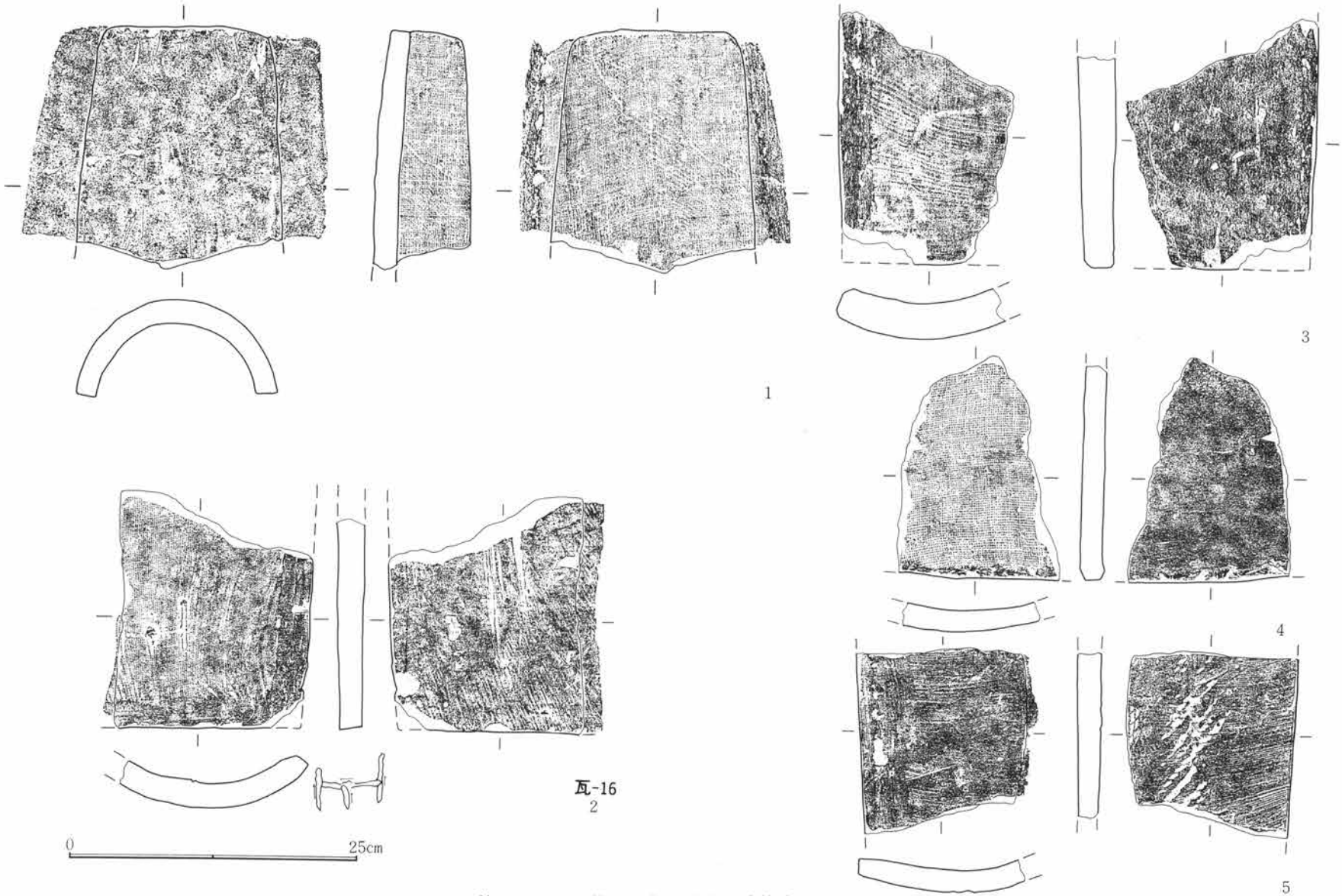
のカマドが崩壊し混入したものと判断した。しかし、確認時の新旧関係を否定し得る確実な状態ではない。

当住居で第27号住居跡と重複する部分は、それ程著しい状態ではなく、床より若干下がった位である。そして、南東隅部では貯蔵穴の落ち込みが認められないのは、第27号住居跡の破壊に伴うものではなく、構築頭初よりの状態である。また、掘り方は全体に顕著に認められ、特にカマド前面部分周辺が著しい。P_1は、床面検出段階で認められ、上述の南東隅部で認められなかった貯蔵穴に相当すると考えられる。この点は、カマド自体が、東壁に比較し南東隅部に偏在していることに起因するとも思われる。

住居の時期は10世紀代と考えられるものの、カマドの位置からは、10世紀後半代と想定される。（木津）



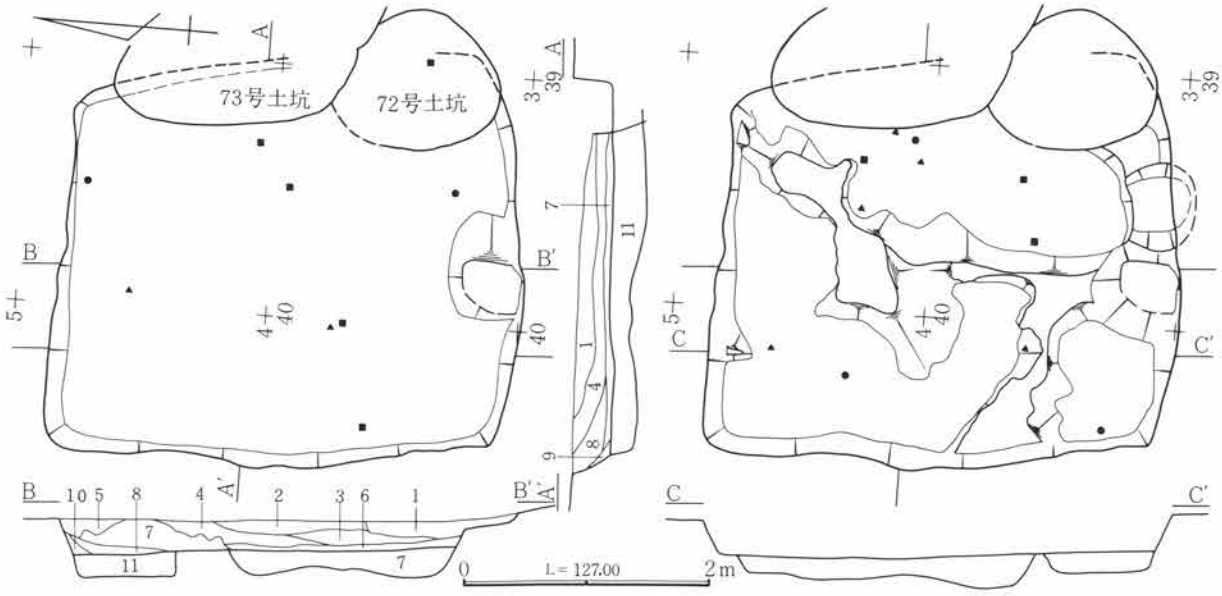
第67図　Ｄ区第17号住居跡・出土遺物実測図



第68図　D区第17号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	D区第18号住居跡	位置	2～4－D－38～40グリッド内				
平面形態	不整方形	規模	3.35m×3.79m	主軸方位	北－87度－東	残存深度	約30cm程
壁	斜位に立ち上がる。	北	床面	造床。掘り方底面を埋設し平坦な床面を構築する。			
壁溝	未検出。		貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋外を精査したが未確認に終った。						
掘り方	全体的に凹凸が認められ、島状の掘り残し部分の上面を床面として使用する。						
カマド	位置	東壁で南東隅寄りか？		主軸方位	不明		

所　見　当住居跡は31号住居跡及び72・73号土坑と重複しているが、遺物や住居形態から明らかに31号住居跡が新しいと言える事や、二つの土坑とも11世紀中頃の年代と考えられる事から、前後関係では当住居跡が最も古いと言える。南壁際のほぼ中央部にほぼ真四角な台状の掘り残し部分が存在するが、あるいは入り口部分に関係した構造物、つまり階段に相当するのかも知れない。カマドはおそらく東壁に存在したと考えられるが、72・73土坑によって東壁の大部分と一緒に壊されている。住居跡の廃棄時期については、遺物が無いために明確な判定が出しづらいものの、方形に近い住居形態から10世紀代でも中頃と考えられる。(麻生)

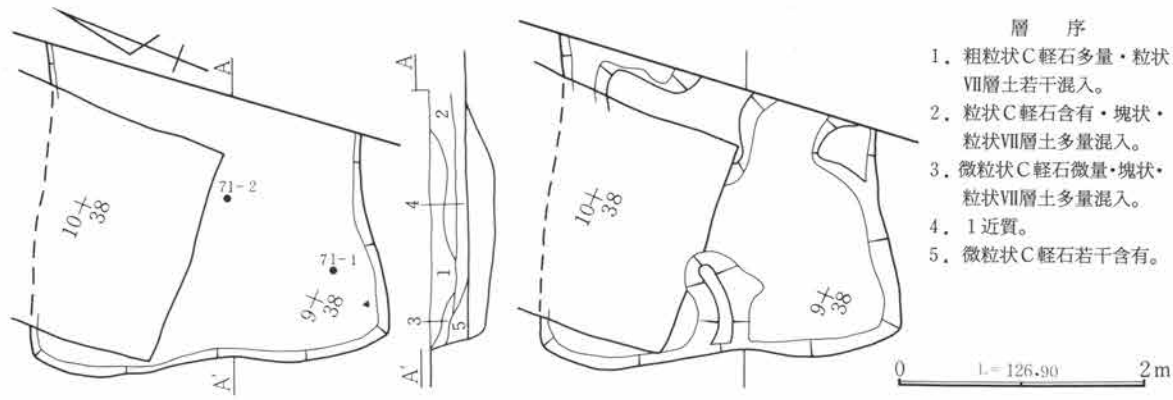


層　序

1．細粒状C軽石含有・Ⅶ層土混入。　2．細粒状C軽石含有。　3．粒状Ⅶ層土含有。　4．細粒状C軽石多量・Ⅶ乃至Ⅵ層土混入。
5．4近質。　6．微粒状C軽石若干・Ⅶ層土混入多。　7．微粒状C軽石微量・細粒状C軽石若干・粗大塊状・塊状Ⅶ層土混入。
8．Ⅶ層土多量混入・細粒状C軽石若干。　9．8近質。　10．塊状Ⅶ層土主体硬質。　11．掘り方土（微粒状C軽石若干含有）。

第69図　D区第18号住居跡実測図

遺構名称	D区第19号住居跡	位置	8～10－D－37・38グリッド内				
平面形態	不整方形	規模	(2.73m)×2.90m	主軸方位	北－62度－東	残存深度	約31cm程
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	造床。掘り方底面を埋設し床面を構築する。			
壁溝	未検出。		貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋外周辺部を精査したが未確認に終った。						
掘り方	島状の掘り残しが認められる。上面を床面として使用。						
カマド	位置	東壁で南東隅寄りか南東隅部。		主軸方位	不明		

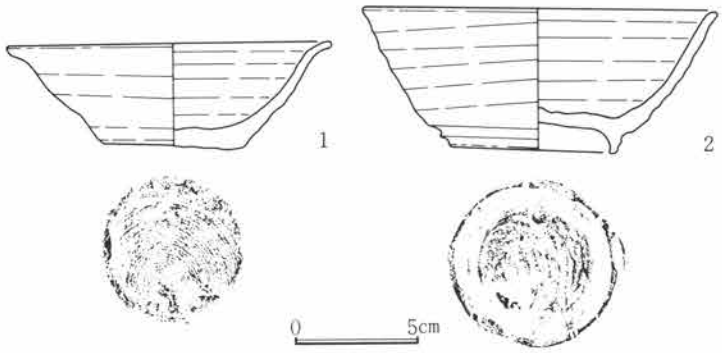


第70図　D区第19号住居跡実測図

所　見　本住居跡は東壁が調査区域外に延び、北壁を昭和46年度に行われた試掘トレンチにより破壊されているため、全体の様相は不明な点が多い。各壁とも形態では直線ではなく、不整な方形を呈する。掘り方は部分的に島状の平坦面を残すなど一様に掘り込んでおらず、この上面に合わせて他を埋め戻してからよく整え、生活面を設定している。

遺物の出土量は少なく、第71図－1が南壁際にて、同図－2が床面中央部にて出土している。

廃棄時期は、9世紀後半代と押さえておきたい。　（石北）

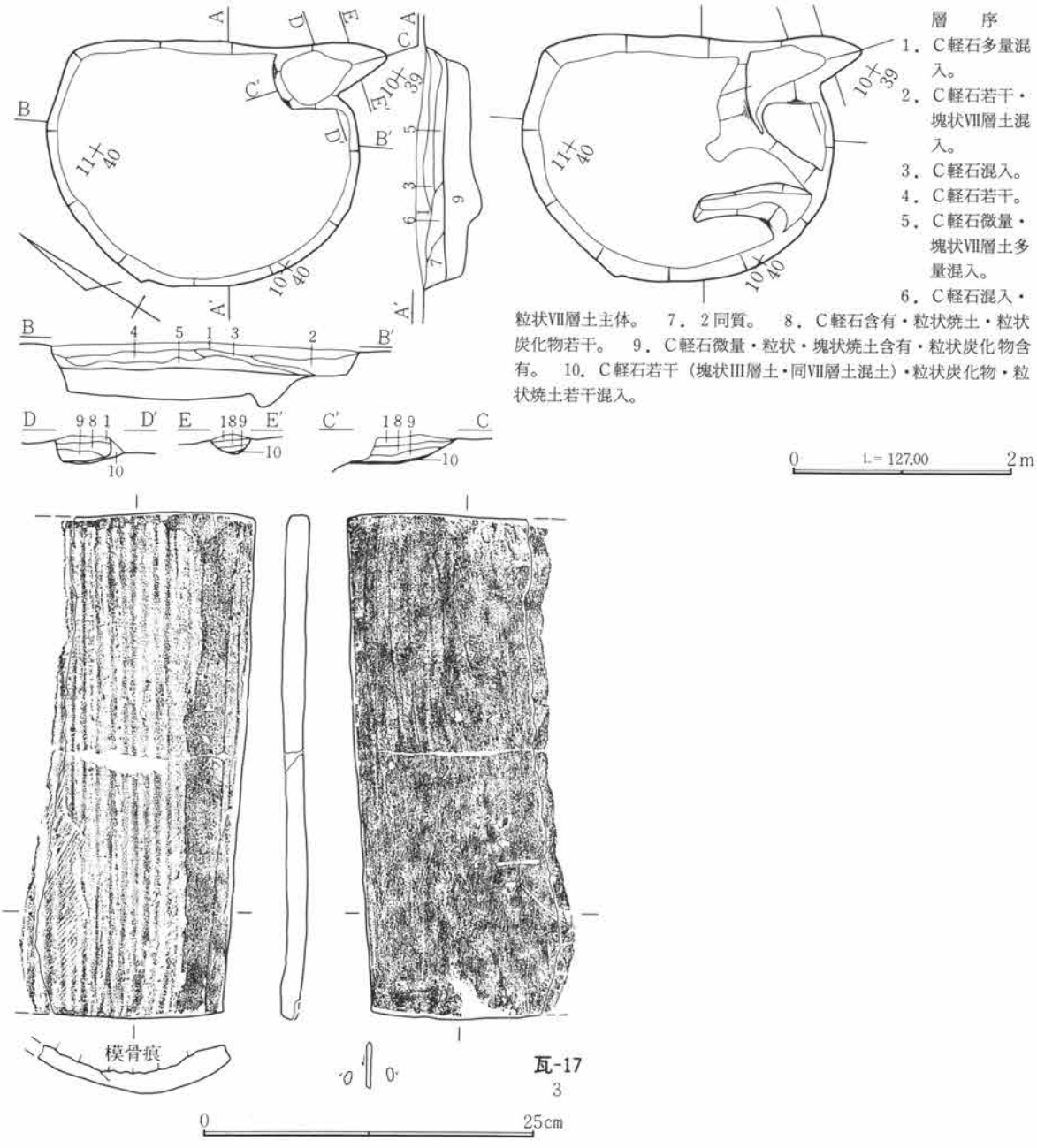


第71図　D区第19号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	D区第20号住居跡	位置	9～11－D－38～40グリッド内				
平面形態	不整形	規模	3.03m×2.28m	主軸方位	北－151度－東	残存深度	約25cm程
壁	斜位気味に立ち上がる。	**東**	床面	造床。掘り方底面を埋設し床面を構築する。			
壁溝	未検出。		貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋外周辺部を精査したが未確認。						
掘り方	カマド周辺部以外が深く、底面は比較的平坦である。						
カマド	位置	南東隅壁部。屋外に約58cm突出する。		主軸方位	北－130度－東		
形状	舌状を呈する。左側は住居東壁の延長としている。				改築の有無	不分明。	
規模	全長105cm・屋外長50cm・屋内長55cm・袖間幅－cm・燃焼部幅45cm・煙道幅－cm						
焚口	円形状か？浅い皿状に落ち込む。		袖	右袖は瘤状を呈し、左側は壁を利用する。			
燃焼部	奥壁寄り。右袖の位置から底面で先端が突出する状態の部分を中心とすると考えられる。						
煙道	細く延びるのか？		掘り方	使用面と大きな変化はないが、袖部の周辺が顕著。			
遺物出土状況	床面上での出土は皆無であった。						

所　見　本住居跡はD区第7号住居跡のカマド煙道部に一部西壁を切られて重複する。形態は東壁が直線であるのに対し、他壁は曲線的で、特に西壁は大きく張り出している。これは東壁が構築時に基準となった

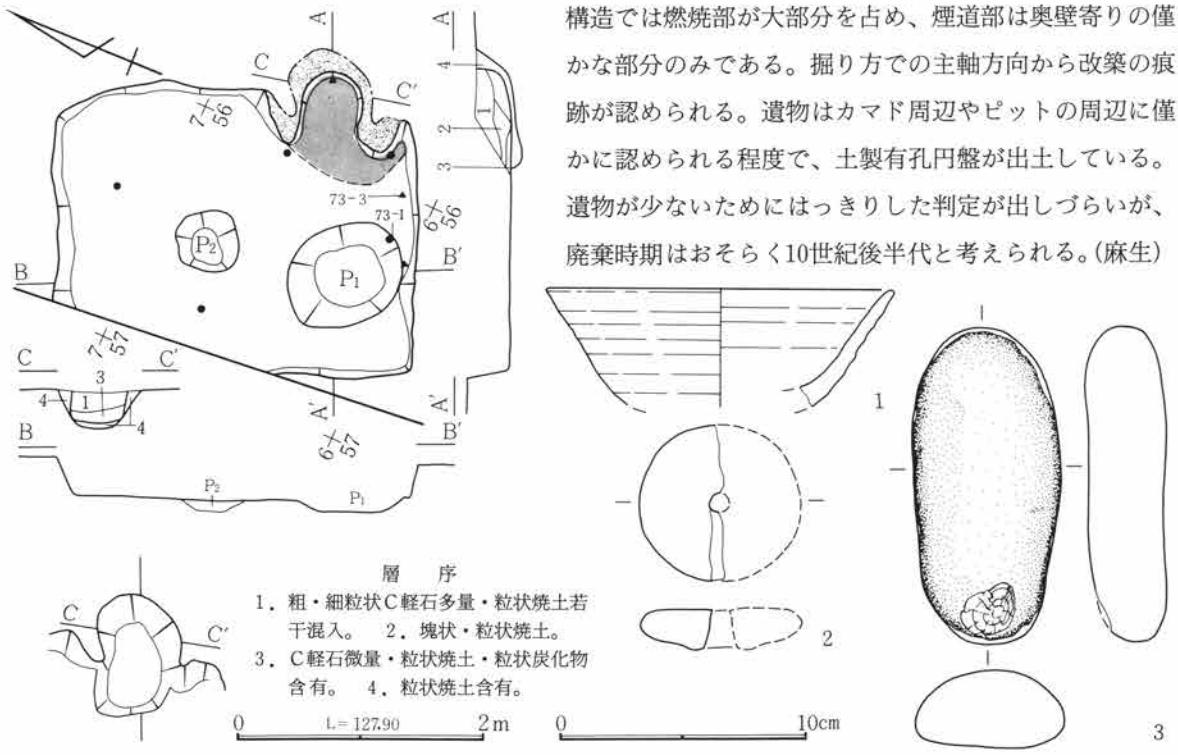
ものと推定される。カマドの左壁は東壁をそのまま延長して利用している。掘り方はカマド前面を浅い平坦面に残すが、床面においては深く掘り込んで面を整え、一度に埋め戻しを行い貼り床を構築している。遺物は少量でそのほとんどが破片であるが、「小」と篦描きされた女瓦が１点床面上から出土した。廃棄時期は11世紀前半頃と思われる。　（石北）



第72図　D区第20号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	D区第21号住居跡	位置	5～7－D－55・56グリッド内				
平面形態	隅丸長方形	規模	2.63m×2.94m	主軸方位	北－65度－東	残存深度	約32cm程
壁	斜位気味に立ち上がる。	**南**	床面	平坦。掘り方底面を床面とする。部分的に埋設か？			
壁溝	未検出。		貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋外周辺部を精査したが未確認に終った。						
掘り方	P1・P2を検出したのみで底面は床面としている。P1が本住居に伴なうかは判然としない。						
カマド	位置	南東隅部に右袖が接する。		主軸方位	北－75度－東		
形状	馬蹄形状を呈する。両袖を備えるが、皿状の焚口部は認められず平坦である。			改築の有無	有。		
規模	全長80cm・屋外長25cm・屋内長55cm・袖間幅135cm・燃焼部幅45cm						
焚口	平坦で幅が広い。		袖	堅固な両袖を備える。掘り方では瘤状に認められる。			
燃焼部	検出部奥壁寄りと考えられる。立ち上がりの部分が器設部と考えられる。						
煙道	未検出。		掘り方	不整形状を呈する。両袖の一部は地山削り出しである。			
遺物出土状況	少量出土している。覆土内中層・カマド内から出土している。						

所　見　当住居跡は調査区域の西際に位置し、そのために北西隅付近が調査区域外に延びるために調査できなかった。住居形態は長方形を呈すが、壁溝や貯蔵穴は検出されていない。床面の中央部に直径約50cm、西壁際に長軸約1mのほぼ円形、短軸約80cmの楕円形の二つのピットが検出されているが、後者が当住居跡に伴うのかは残念ながら確認されていない。土層観察に関しては残念ながら実施できなかった。住居構造では、柱穴と考えられるものの検出が少なく、またいずれも深度が浅いことから、はたして柱穴としての機能を果たせたかは不明である。床面は大部分が地山を掘り込んで固めた状態であるが、北壁付近には掘り方埋土が認められる。カマドは東壁の南東隅に存在し、一部に地山削り出しを利用した堅固な両袖が検出されている。構造では燃焼部が大部分を占め、煙道部は奥壁寄りの僅かな部分のみである。掘り方での主軸方向から改築の痕跡が認められる。遺物はカマド周辺やピットの周辺に僅かに認められる程度で、土製有孔円盤が出土している。遺物が少ないためにはっきりした判定が出しづらいが、廃棄時期はおそらく10世紀後半代と考えられる。(麻生)

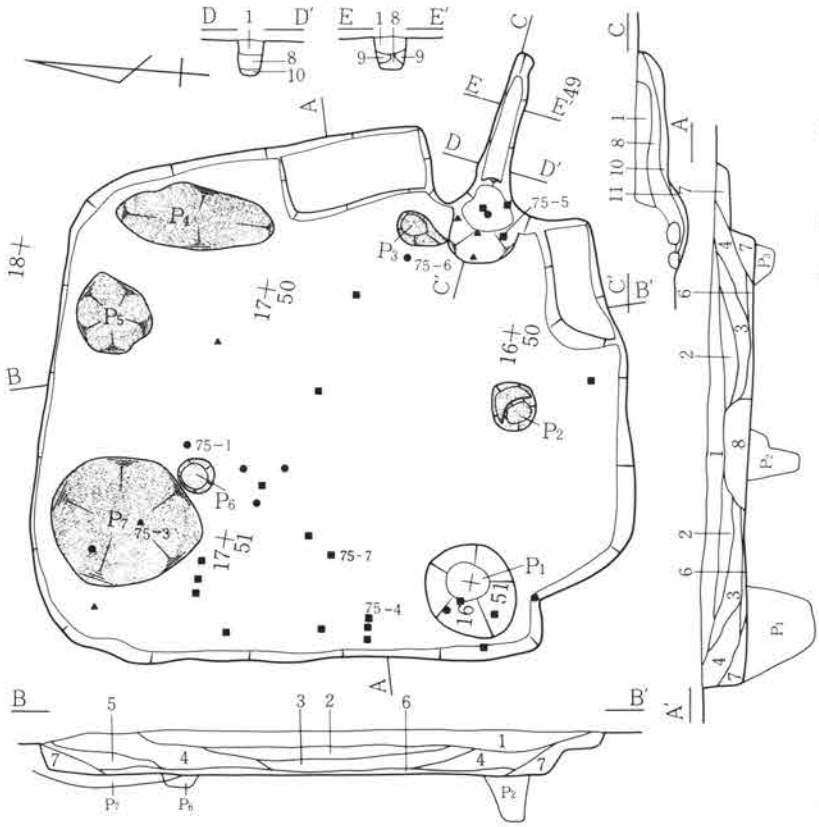


第73図　D区第21号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	D区第22号住居跡	位置	15～17－D－43～51グリッド内				
平面形態	不整方形	規模	4.80m×4.96m	主軸方位	北－78度－東	残存深度	約36cm程
壁	斜位気味に立ち上がる。	**西**	床面	平坦。掘り方底面を床面とする。			
壁溝	未検出。		貯蔵穴	Ｐ１。楕円形状。77cm×68cm・深度55cm			
柱穴	P2か？住居屋外周辺部を精査したが未確認に終った。						
掘り方	P2～P7が床面下で検出。掘り方底面を床面としている。						
カマド	位置	南東隅部。		主軸方位	北－93度－東		
形状	細い舌状を呈し、大半が屋外に延びる。			改築の有無	無？		
規模	全長174cm・屋外長127cm・屋内長47cm・袖間幅95cm・燃焼部幅42cm・煙道幅15～27cm						
焚口	浅い皿状を呈する。		袖	瘤状の削り出しで両袖を備える。			
燃焼部	極狭い範囲が考えられ、焚口底面の延長部で、立ち上がり部分。						
煙道	細長でトンネル状､102cmを測る。		掘り方	掘り方が丁寧であったのか掘り方状態で機能している。			
遺物出土状況	３層土中に主体がある。						

所　見　本住居跡は南西コーナー部が整合せず、さらにコーナーを有する不整方形を呈する。またカマド焚口の両脇にテラス状の平坦な面を造り出す施設が設けられている。形態は東壁部分が若干広くなっているものの、ほとんど対称的である。床面は掘り方上面をそのまま利用しているため、貼り床等はわずかに認められるにすぎない。本住居の不整形は、南・西壁の拡張によると考えられ、拡張以前は、Ｐ１の位置する部分をコーナーとし、カマド左右のテラス部で屋内側の部分を壁とする正方形状を呈していたと考えられる。

遺物は南西部に多く出土し、廃棄時期は11世紀中葉頃と思われる。　（石北）

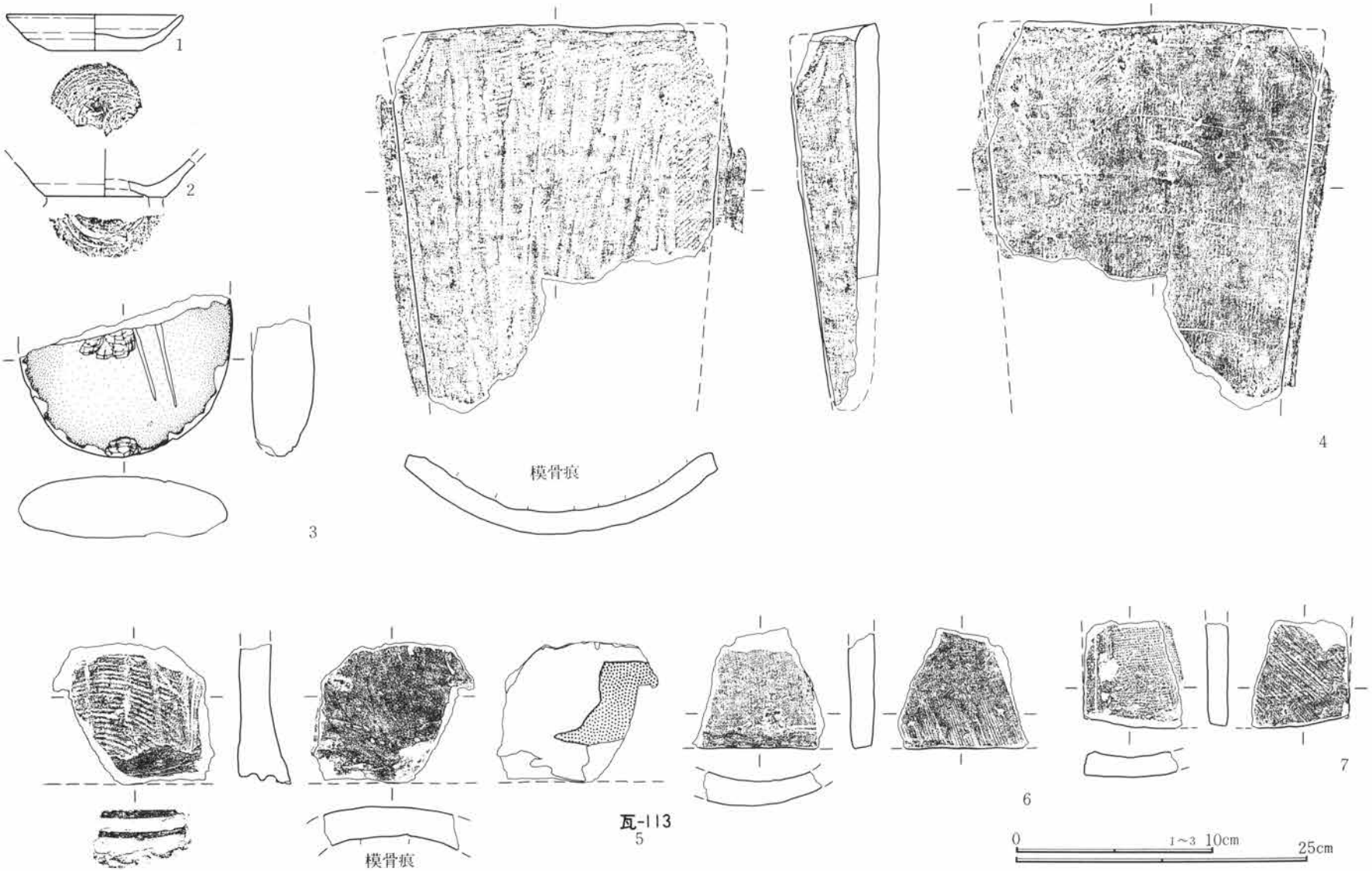


層　序

1．細・粗粒状Ｃ軽石多量・粒状焼土若干。　2．細粒状Ｃ軽石含有・粒状Ⅶ層土含有。　3．粗粒状Ｃ軽石含有・粒状Ⅶ層土・小塊状Ⅶ層土混入。
4．微粒状Ｃ軽石若干・小塊状Ⅶ層土微量・Ⅶ層土混入。　5．微粒状Ｃ軽石微量・Ⅶ層土混入。
6．微粒状Ｃ軽石微量・粒状炭化物若干・粒状焼土含有。　7．微粒状Ｃ軽石微量・塊状Ⅶ層土含有・塊状Ⅲ層土含有。　8．塊状Ⅶ層土。
9．細粒状Ｃ軽石若干・粒状焼土・粒状炭化物含有。　10．細粒状Ｃ軽石微量・粒状炭化物含有・粒状焼土混入。
11．粒状炭化物・粒状焼土混入。

0　L=127.70　2m

第74図　Ｄ区第22号住居跡実測図

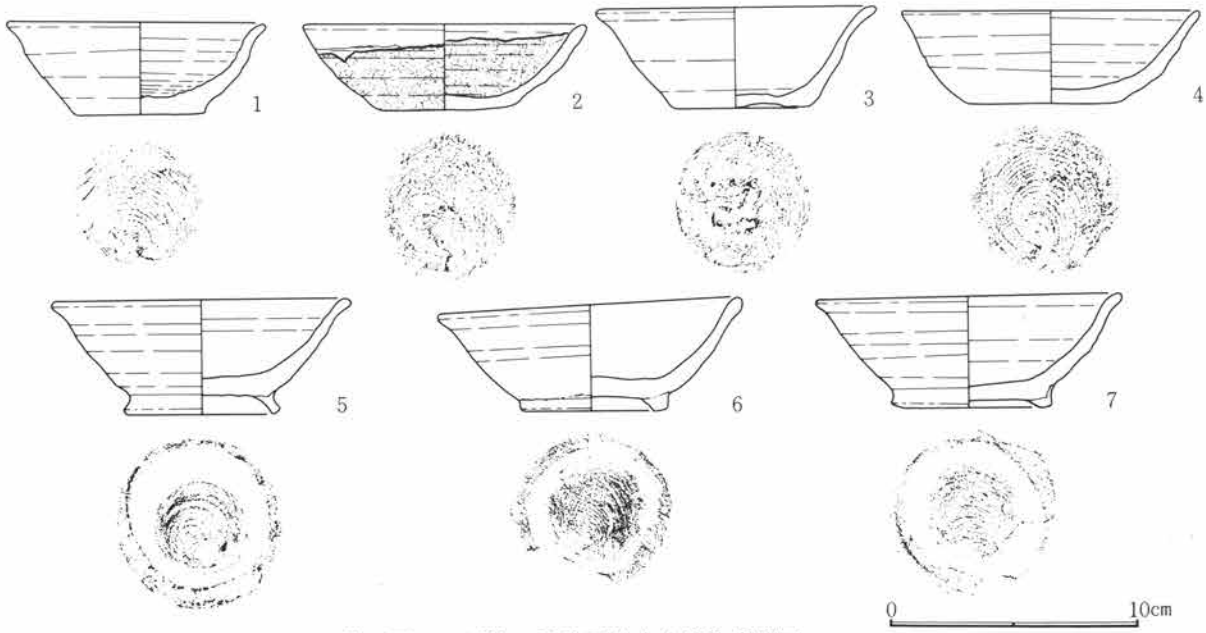


第75図　D区第22号住居跡出土遺物実測図

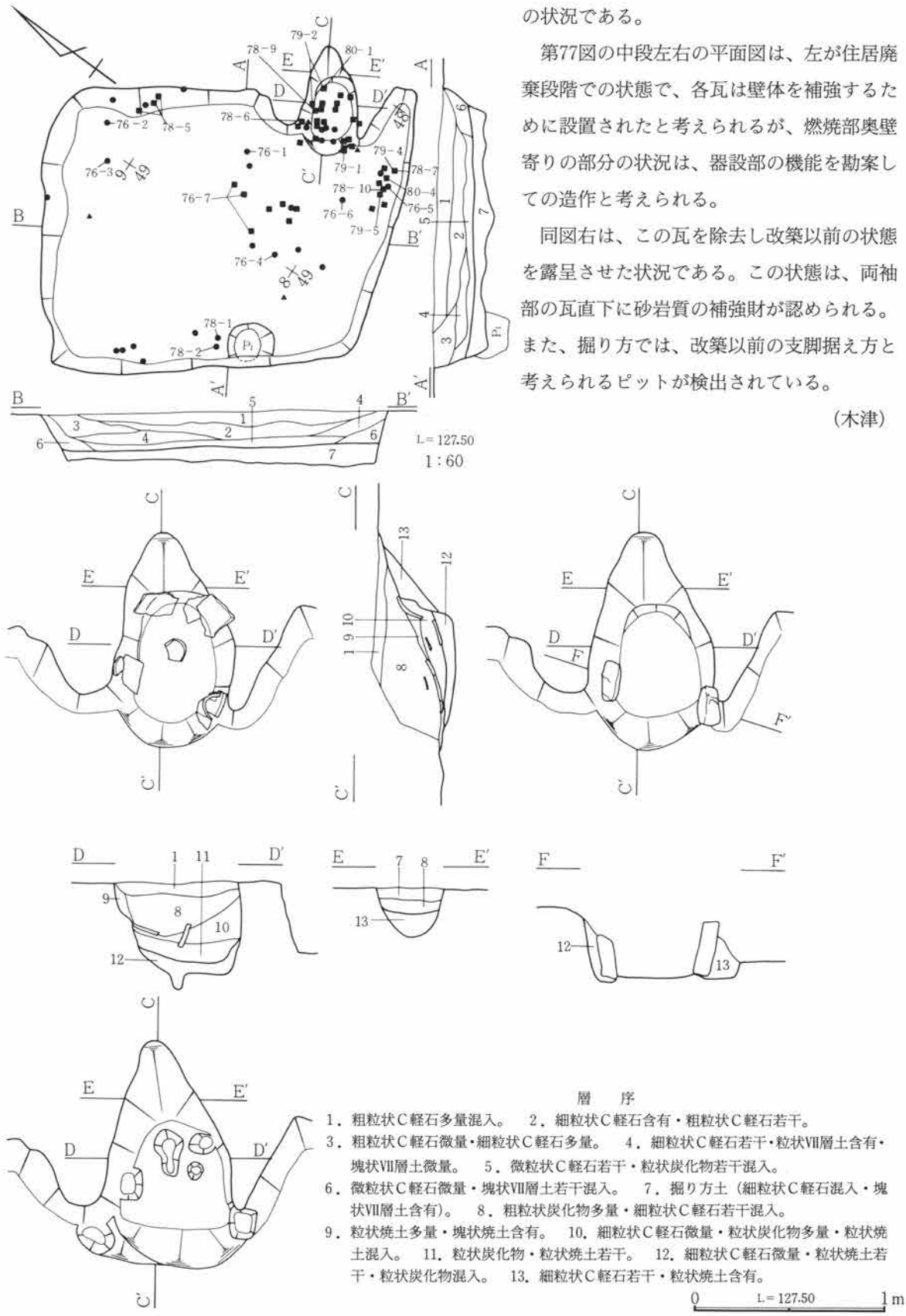
遺構名称	D区第23号住居跡	位置	7～9－D－47～50グリッド内				
平面形態	不整長方形	規模	3.43m×3.89m	主軸方位	北－58度－東	残存深度	約41cm程
壁	斜位に立ち上がる。	**西**	床面	造床。掘り方底面を埋設し平坦な床面を構築する。			
壁溝	未検出。		貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋外周辺部を精査したが未確認に終った。						
掘り方	若干の凹凸があるもののほぼ平坦に掘削している。						
カマド	位置	右袖が南東隅にほぼ接する。		主軸方位	北－60度－東		
形状	舌状を呈する。地山削り出しの堅固な両袖を有する。			改築の有無	有。		
規模	全長117cm・屋外長47cm・屋内長70cm・袖間幅150cm・燃焼部幅52cm・煙道幅－cm						
焚口	扇状を呈し、両壁を瓦で補強する。	袖	地山削り出しで両袖を有し、瓦・礫で補強する。				
燃焼部	男瓦片を利用した支脚を備える。奥壁には女瓦片を用い壁体を補強する。						
煙道	やや広めで緩やかに立ち上がる。	掘り方	改築が行なわれているが、改築以前の状態を図示した。				
遺物出土状況	床面直上層中が多い。カマド内・南壁下で集中して出土している。						

所　見　当住居跡は第24号住居跡を切り構築している。平面形状は梯形状を呈し、南壁のみ不均整な形状となっている。この点から住居全体の指向方向には著しい角差が認められる。そして、当住居を全体図の中で見れば比較的古い段階の住居の指向方向に類するのである。しかし、当住居は、南東隅部の貯蔵穴が認められない点と、カマド自体が南東隅部寄りに構築されている点から、当該報告の住居の中での様相としては比較的新しいものが認められる。だが、南壁の走行方向をカマド右袖に取り付く様にすれば、形状が矩形になり均整の取れた状態となるものの、カマド位置が南東隅部となるが出土遺物の様相が異なる。また、南壁の走行方向は、当該住居の時期とほぼ同時性の認められる住居の指向方向に類似が認められ、この点から、当住居は構築頭初南壁を基準にした可能性も考慮されるところである。

本住居のカマドは改築の痕跡が明確に看取された。改築は、位置を移動する程のものではなく、同位置で



第76図　D区第23号住居跡出土遺物実測図



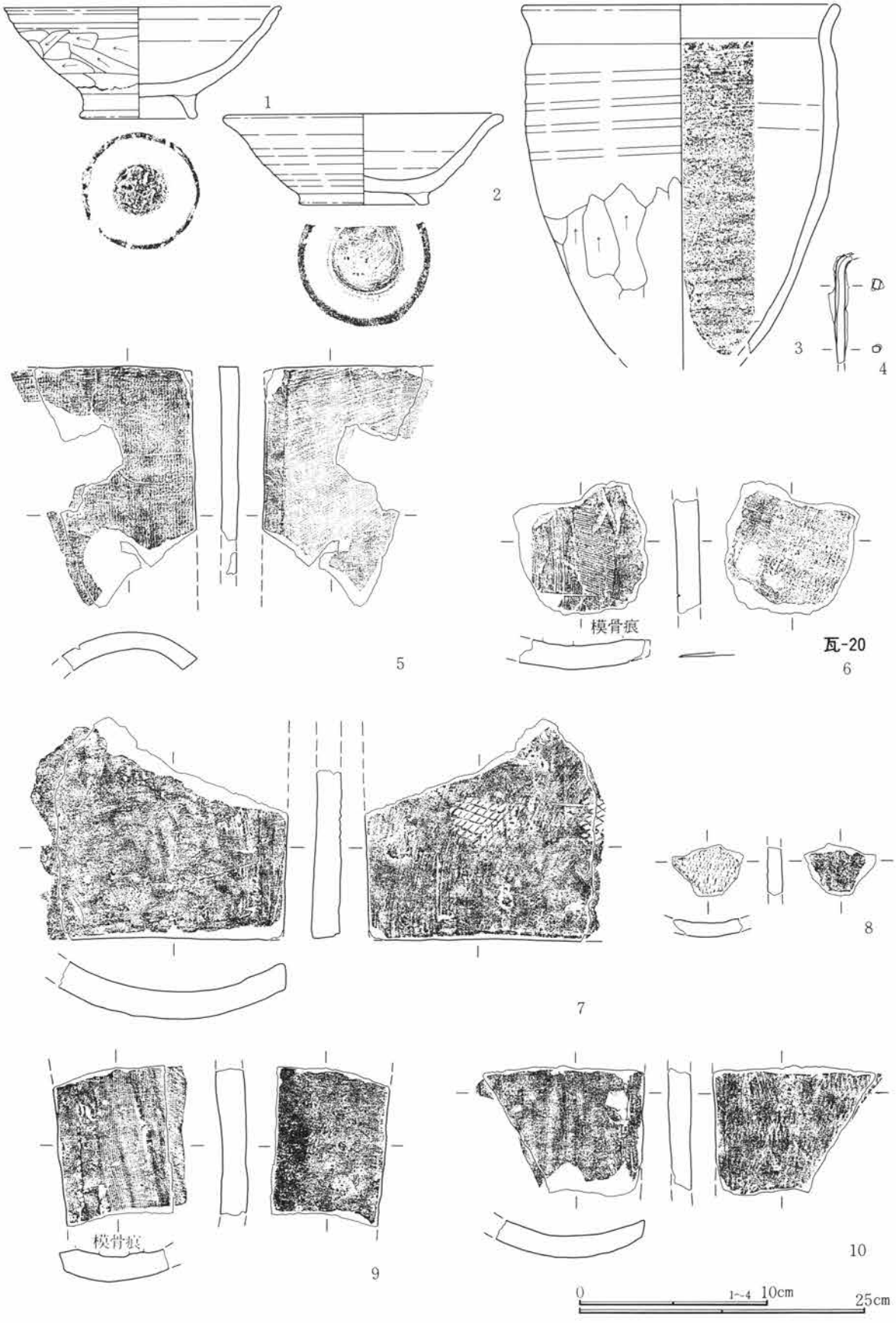
第77図　Ｄ区第23号住居跡実測図

の状況である。

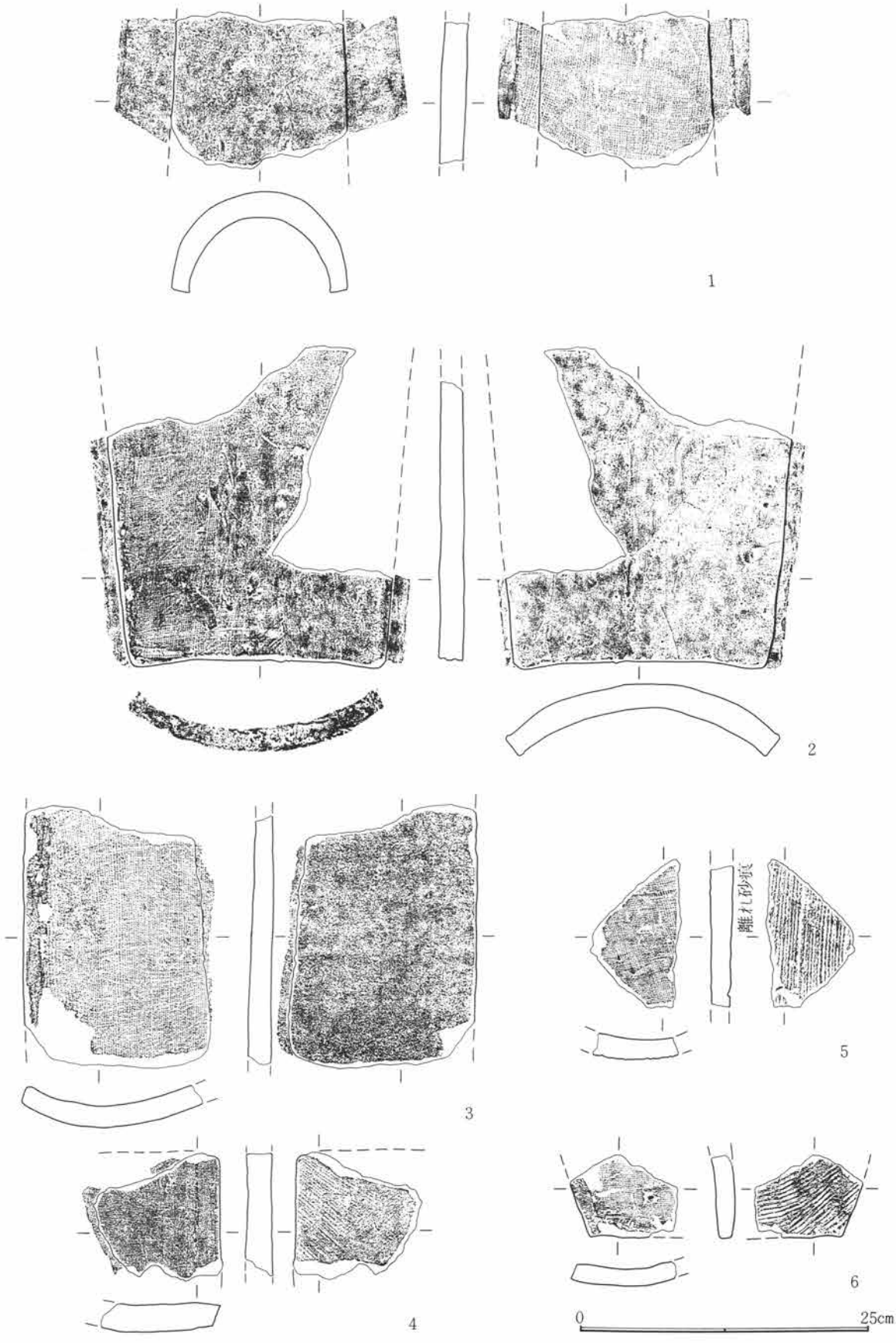
第77図の中段左右の平面図は、左が住居廃棄段階での状態で、各瓦は壁体を補強するために設置されたと考えられるが、燃焼部奥壁寄りの部分の状況は、器設部の機能を勘案しての造作と考えられる。

同図右は、この瓦を除去し改築以前の状態を露呈させた状況である。この状態は、両袖部の瓦直下に砂岩質の補強材が認められる。また、掘り方では、改築以前の支脚据え方と考えられるピットが検出されている。

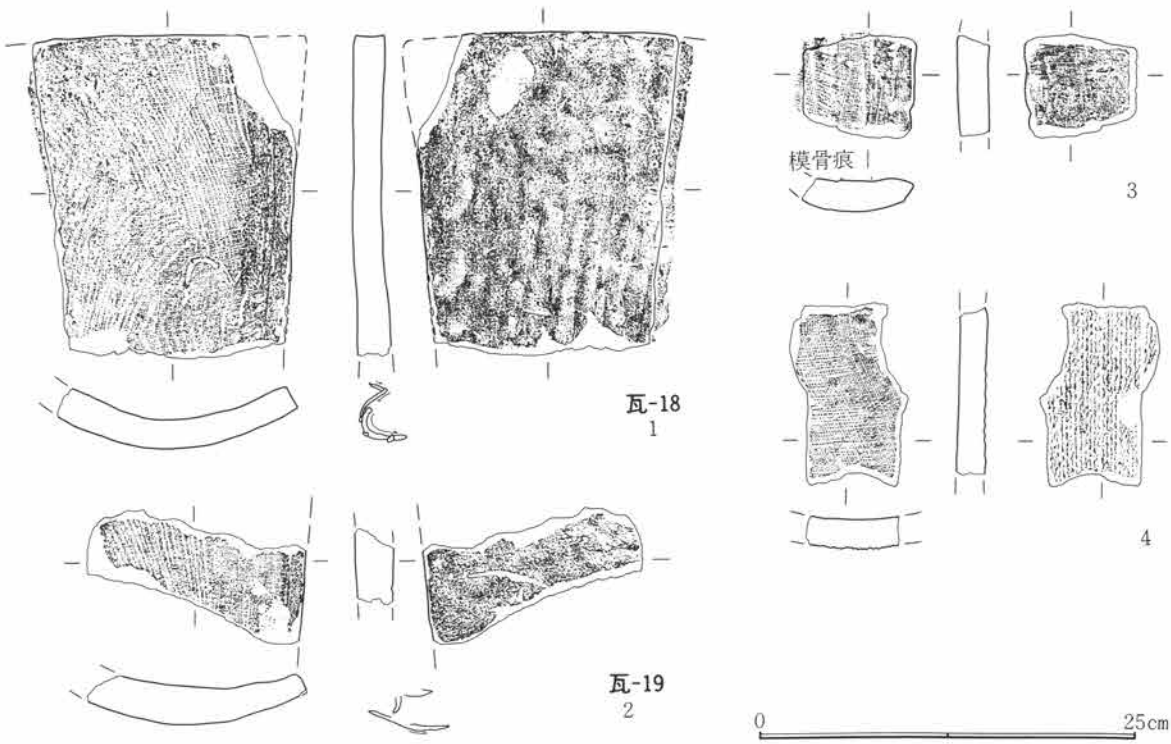
（木津）



第78図　D区第23号住居跡出土遺物実測図

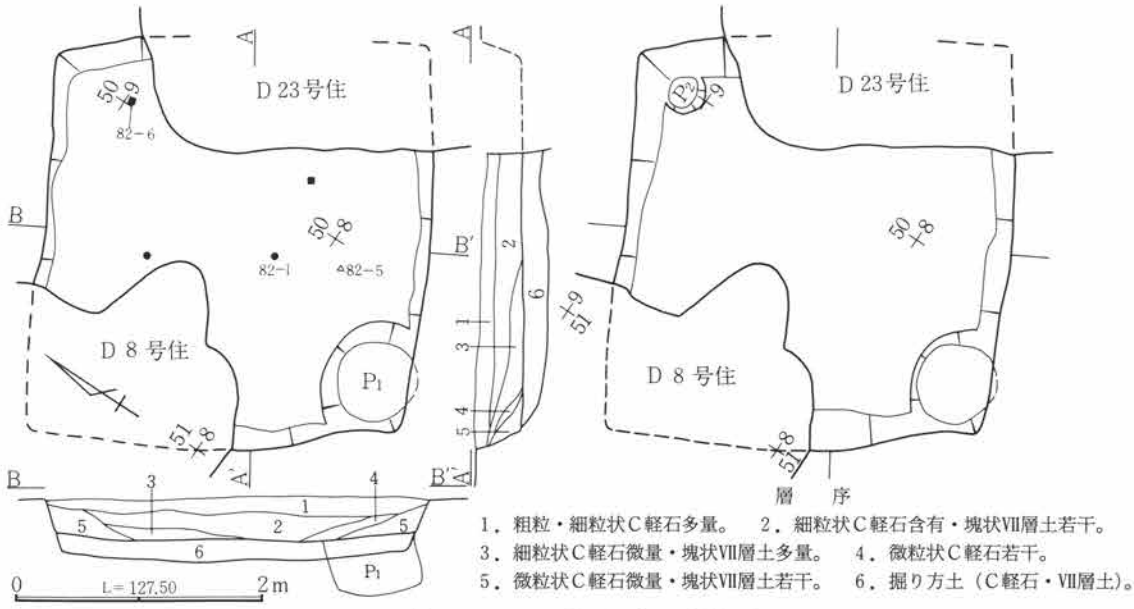


第79図　D区第23号住居跡出土遺物実測図



第80図　Ｄ区第23号住居跡出土遺物実測図

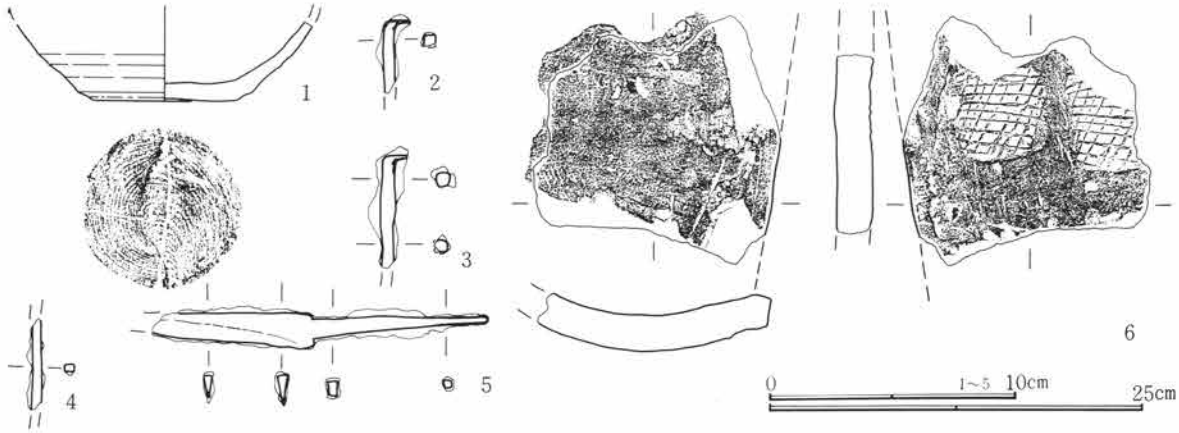
遺構名称	Ｄ区第24号住居跡	位置	7～9－Ｄ－49～51グリッド内				
平面形態	正方形	規模	3.35m×3.18m	主軸方位	北－61度－東	残存深度	約37cm程
壁	斜位に立ち上がる。南	床面	造床。掘り方底面を15～23cm埋設して平坦に構築。				
壁溝	未検出。	貯蔵穴	Ｐ１。南西隅下。楕円形。径100cm・深度32cm				
柱穴	未検出。住居屋外周辺部を精査したが未確認に終った。						
掘り方	全体的に平坦である。底面北東隅下でＰ２を検出したが、明確な柱穴ではない。						



第81図　Ｄ区第24号住居跡実測図

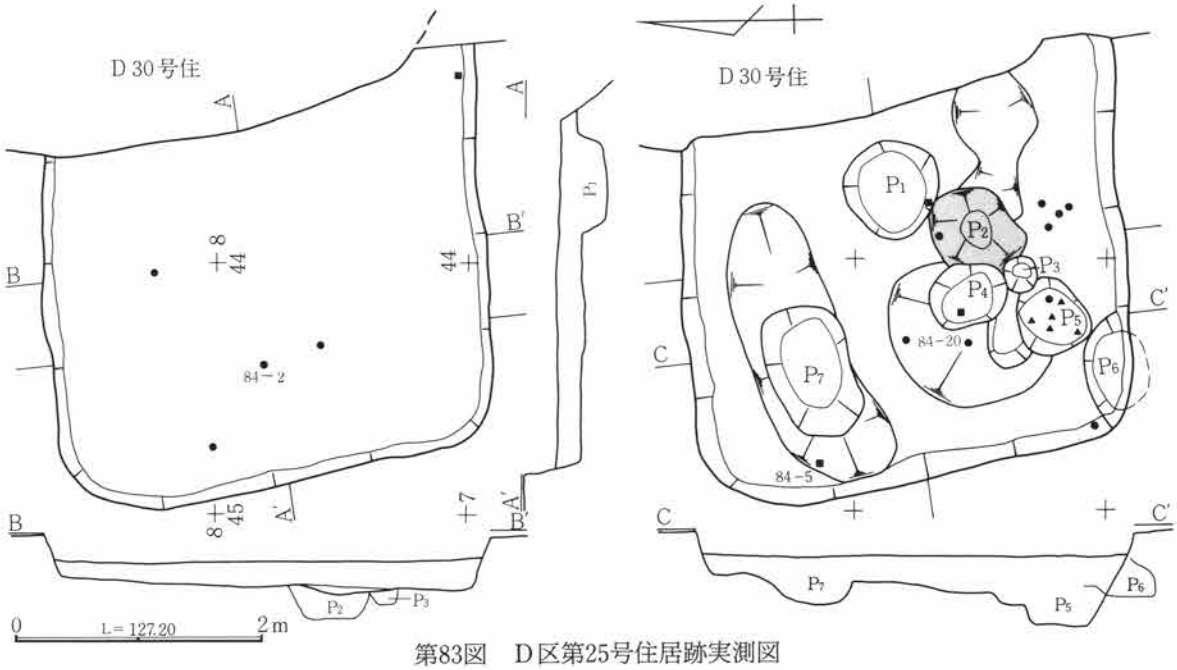
所　見　当住居跡は、9世紀末～10世紀前半代に比定される第8号住居跡と、10世紀前半代に比定される第23号住居跡に切られている。平面形状は正方形状を呈すると考えられ、主軸方位が第37号住居跡と同様に他の住居跡と比較すると30度程北側に向いている。カマドは、第23号住居跡に破壊され残存していない。

P_1は、南西隅部で南壁側がオーバーハングをする円形状のもので、貯蔵穴とも思われる。ただ、隅部に於けるオーバーハングを呈する〝穴〟は、第30号住の如くの単に貯蔵穴とは考え得ない状態もある。これは、住居の構築に係わる点もあると思われる（後述）。住居の時期は9世紀後半代と考えられる。　（木津）



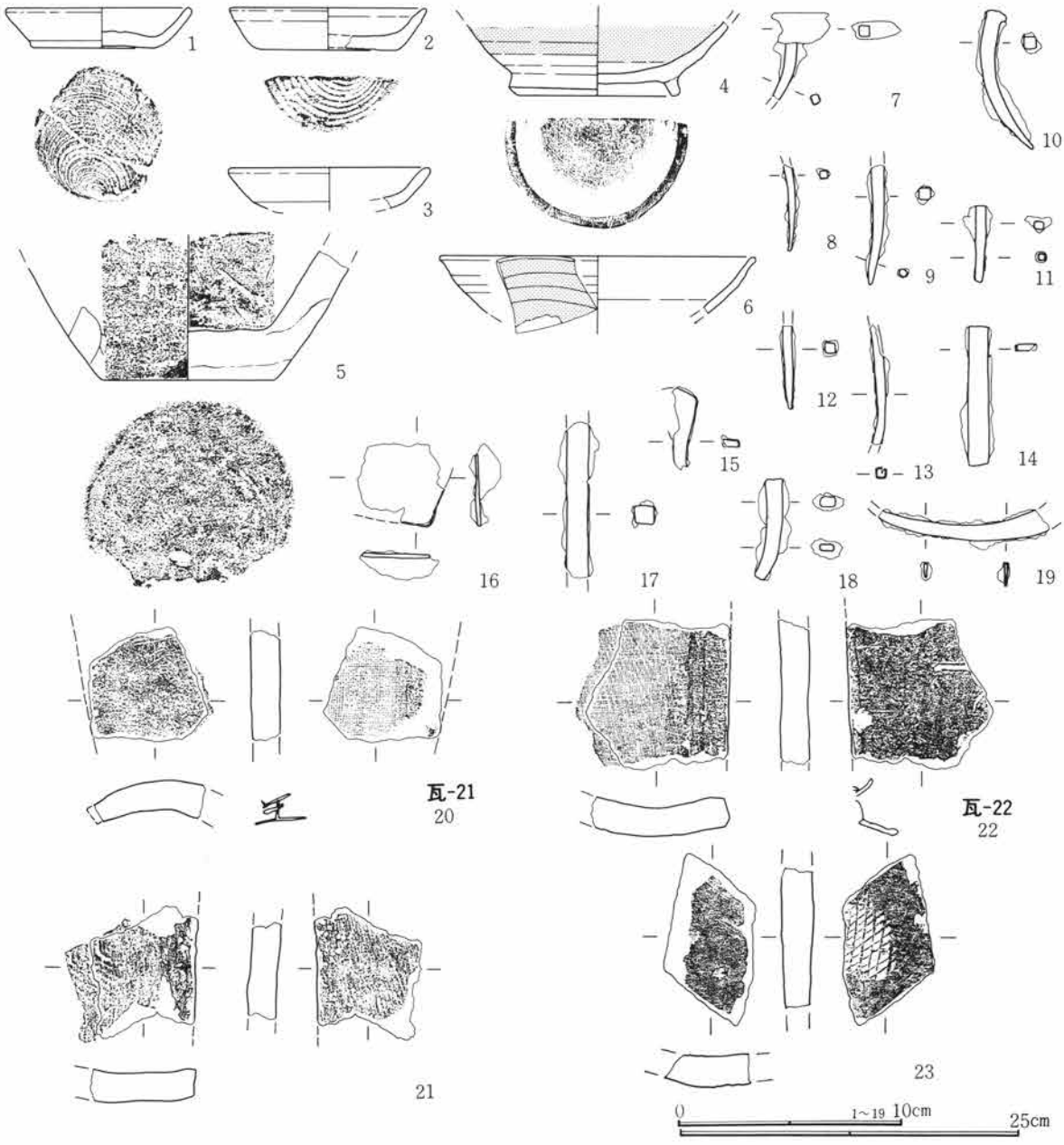
第82図　D区第24号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	D区第25号住居跡	位置	6～8－D－43・44グリッド内				
平面形態	不整方形	規模	(3.58)m×3.60m	主軸方位	北－87度－東	残存深度	約23cm程
壁	斜位気味に立ち上がる。南	床面	造床。掘り方底面を15～30cm程埋設し平坦な床面を構築。				
壁溝	未検出。	貯蔵穴	未検出。				
柱穴	未検出。住居屋外周辺部を精査したが未確認に終った。						
掘り方	土坑状のものが多く検出され、P２では底面に炭化物を混入する灰が充填していた。						



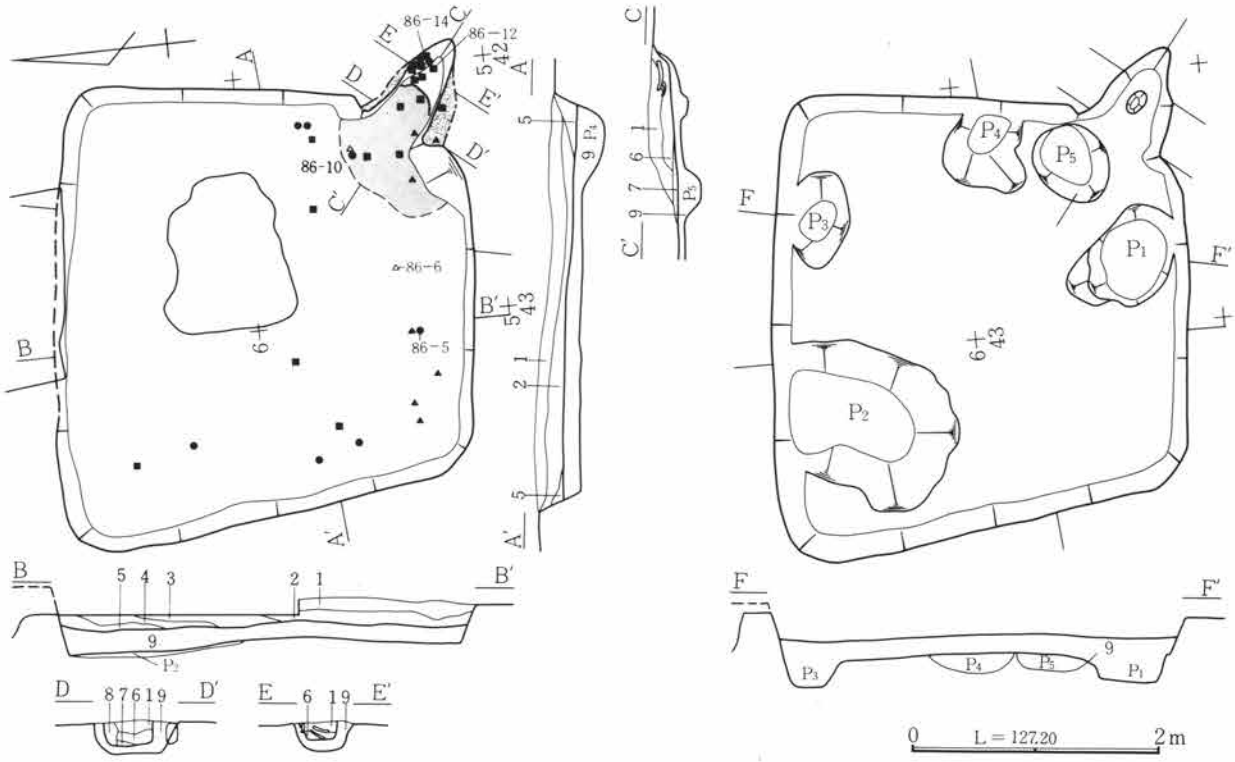
第83図　D区第25号住居跡実測図

所　見　当住居跡は30号住居跡及び７号溝と重複しているが、前後関係では両者に先行する段階に位置している。住居形態は正方形を呈していたと考えられるが、東壁部分が30号住居跡に壊されているために残念ながらはっきりとはしない。またその部分にカマドが存在していたと考えられる。土層の観察は重複関係の存在から残念ながら実施できなかった。床面は15～30cm程の掘り方覆土からなり、平坦な面で堅く締まっている。掘り方からは多数のピットが検出されているが、その構造からは柱穴と考えられるものが少なく、またいずれも深度が浅く、はたして実際に柱穴としての機能を果たせたかは疑問である。P_2には多量の灰が詰まっていたが、その性格は残念ながら不明である。床面からの遺物の出土は極めて少ないが、掘り方覆土やピット内から少量出土しており、特にP_5内の底面には大型の礫が６点検出されている。遺物では鉄製品が多く、文字瓦も２点出土している。住居跡の廃棄時期は遺物から11世紀前半と考えられ、その時期の特徴からおそらくは東南隅のコーナーカマドと考えられる。　（麻生）



第84図　D区第25号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	D区第26号住居跡	位置	5・6－D－41～43グリッド内				
平面形態	梯台状	規模	4.13m×3.39m	主軸方位	北－97度－東	残存深度	約33cm程
壁	斜位気味に立ち上がる。	**北**	床面	造床。掘り方底面を20cm程埋設して構築する。			
壁溝	未検出。		貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋外周辺部を精査したが未確認に終る。						
掘り方	全体的に平坦であるが、土坑状の掘り込みを５ケ所で検出する。						
カマド	位置	南東隅部。屋外に約79cm突出する。		主軸方位	北－128度－東		
形状	舌状を呈する。両袖とも瘤状を呈するが短かく、大半が屋外に突出する。			改築の有無	有。		
規模	全長114cm・屋外長76cm・屋内長38cm・袖間幅133cm・燃焼部幅38cm・煙道幅25cm						
焚口	平坦で幅が広い。		袖	瘤状の両袖を備える。掘り方では削り出し。			
燃焼部	掘り方で支脚の据方を検出。断面ＤＥ間に求められる。底面は煙道方向に極緩やかに立ち上がる。						
煙道	立ち上がり部周辺が検出された。		掘り方	全体を平坦に掘削している。			
遺物出土状況	カマド内で集中して出土し、大半が６層土中であった。						

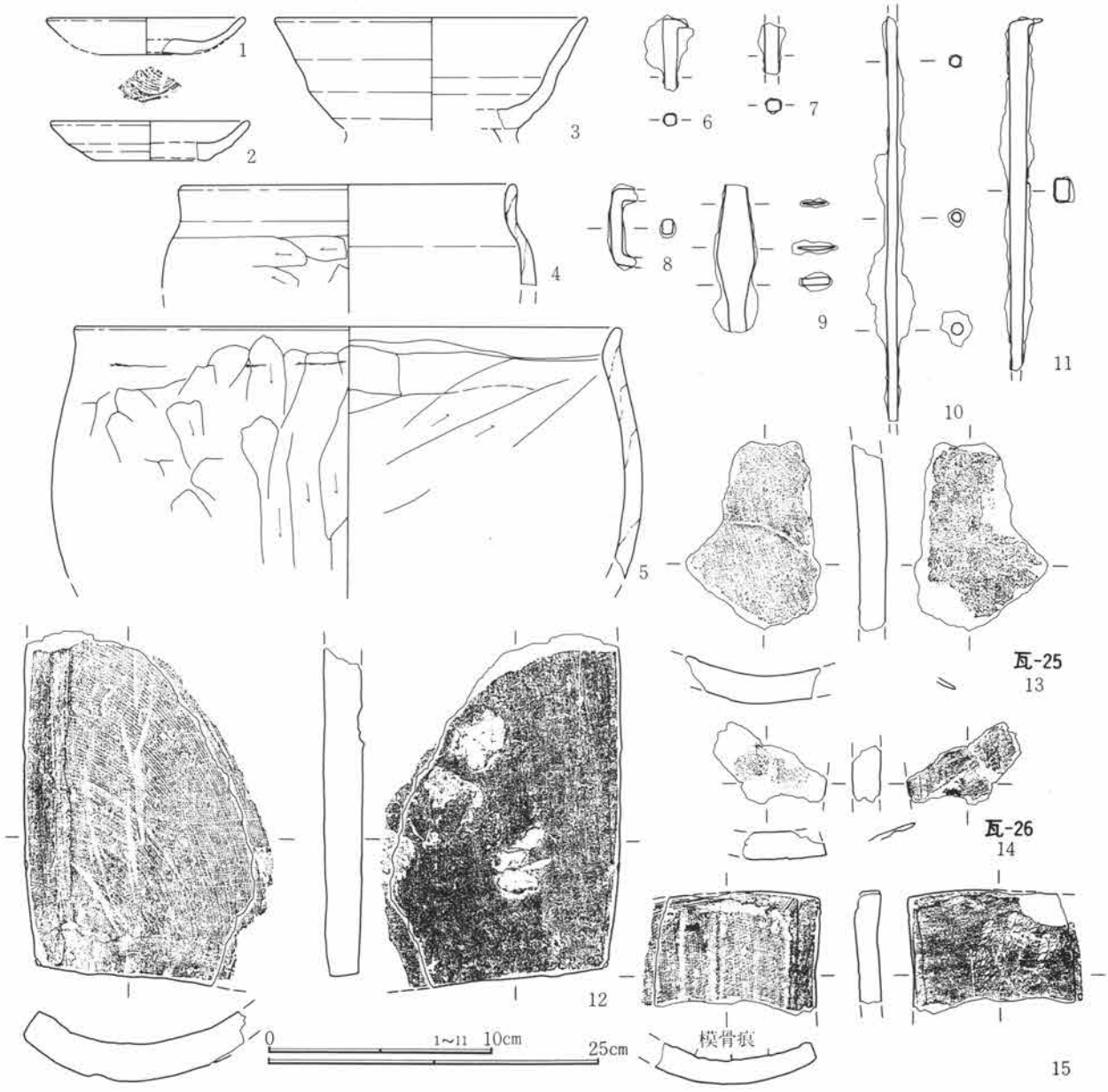


層　序

1．粗粒・細粒状Ｃ軽石多量。　2．細粒状Ｃ軽石含有・粒状焼土若干。　3．細粒状Ｃ軽石微量・塊状Ⅶ層土含有。4．微粒状Ｃ軽石若干・塊状Ⅶ層土・粒状Ⅶ層土含有。　5．微粒状Ｃ軽石微量・Ⅶ層土混入。　6．細粒状Ｃ軽石若干・粒状焼土多量・粒状炭化物含有。　7．Ｃ軽石無・炭化物・粒状焼土主体。　8．粒状焼土若干。　9．掘り方土（微粒状Ｃ軽石微量・粒状焼土含有）。

第85図　Ｄ区第26号住居跡実測図

所　見　当住居跡は７号溝と重複しており、その前後関係は土層観察から先行する段階に位置する。またカマドや北東隅部分でその存在が確認されているが、住居全体が榛名二ッ岳火山灰（Ｈｒ－ＦＡ）に埋もれた畠の畝を壊している。住居形態は北壁の延長線上で西壁が張り出しているために、北西隅が「く」の字状を呈しており、不整の正方形というよりは梯台状に近い。床面は約20cmの掘り方覆土からなり、北壁寄り部分が僅かに窪んでいるが、大部分はほぼ平坦な面で堅く締まっている。掘り方には大小五つのピットが認められるが、すべて壁際に存在するが、構造上での位置付けがはっきりしない。特にカマドの左右両袖の手前に存在するピットについては、貯蔵穴の可能性が高いと考えられるものの、残念ながら確証は得られなかった。カマドは東南隅のコーナーカマドで、主軸方向は住居の対角線の方向に等しい。両袖は東壁と南壁をそれぞれ利用した地山の削り出しから形成され、特に構造材は用いられていない。改築は掘り方での煙道部と燃焼部の状態から明らかに一度は行われたと認められる。遺物はカマド内部及び南西隅部分に集中して出土している。住居跡の廃棄時期は遺物から11世紀前半と考えられる。　（麻生）

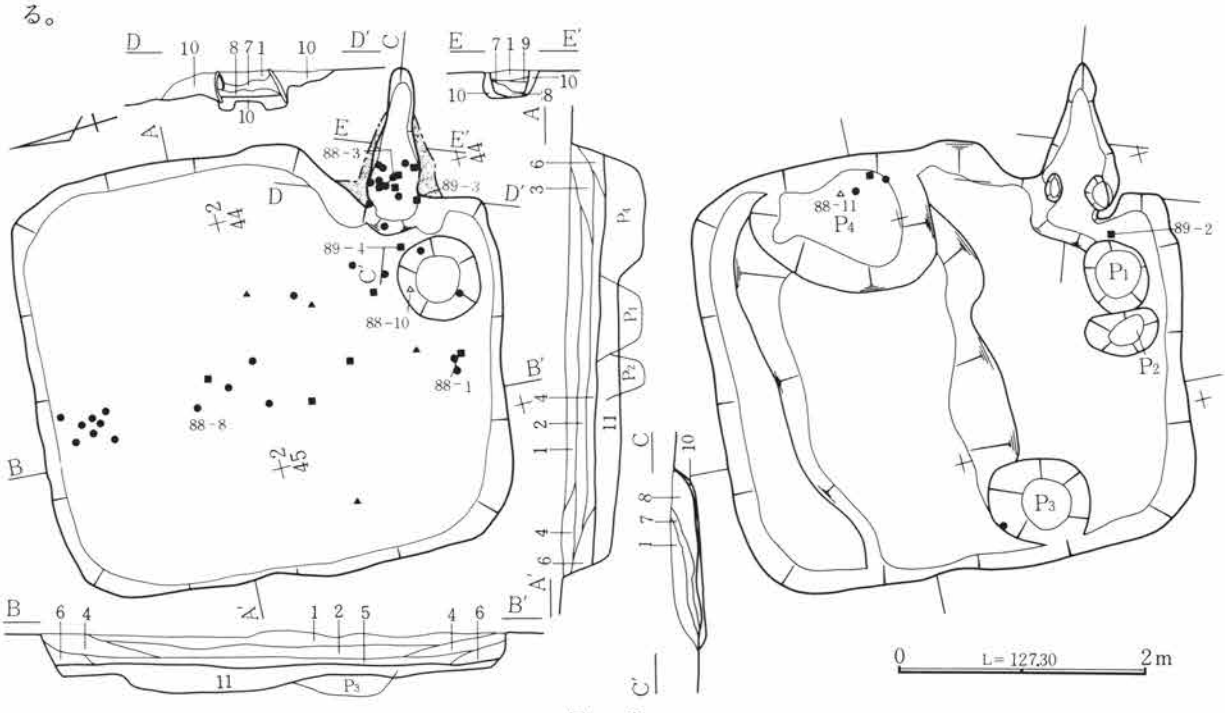


第86図　Ｄ区第26号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	D区第27号住居跡	位置	0～2－D－43～45グリッド内				
平面形態	隅丸方形	規模	3.83m×3.92m	主軸方位	北－86度－東	残存深度	約28cm程
壁	斜位気味に立ち上がる。	北	床面	造床。掘り方底面を埋設し平坦な床面を構築する。			
壁溝	未検出。		貯蔵穴	南東隅部で検出。円形。径69cm・深度17cm			
柱穴	未検出。住居屋外周辺部を精査したが未確認に終った。						
掘り方	北側がやや深く掘削、土坑状の掘削も3ケ所で検出した。						
カマド	位置	南東隅部。屋外に約85cm突出する。		主軸方位	北－110度－東		
形状	舌状を呈する。堅固な両袖を備え、煙道は屋外に長く延びる。			改築の有無	有。		
規模	全長132cm・屋外長86cm・屋内長46cm・袖間幅105cm・燃焼部幅40cm・煙道幅20cm						
焚口	浅く皿状に窪む。		袖	地山削り出しの両袖で、女瓦で燃焼部にかけて補強。			
燃焼部	壁体を女瓦で補強し、オーバーハングを呈する。						
煙道	細く屋外に延びる。	掘り方	両袖を削り出し、瓦の据方を具備する。				
遺物出土状況	住居内中央では2・5層土中で出土し、カマド内では覆土全体に散在する。						

所　見　当住居跡は、10世紀代に比定される第17号住居跡を切り構築している。

当住居跡のカマドは南東隅部に構築されている。同部にカマドを構築する住居は当住居の周辺に集中する傾向が認められる。そして、住居の平面形状も正方形状を呈する点も共通しており、同一形態の住居と判断される。また、出土遺物の傾向も、土師質の皿・埦・土釜が認められる点では、11世紀代に比定し得るもので、11世紀前半代に比定し得るものと考えられ、当地区での11世紀前半代の標準形態の住居として認識される。



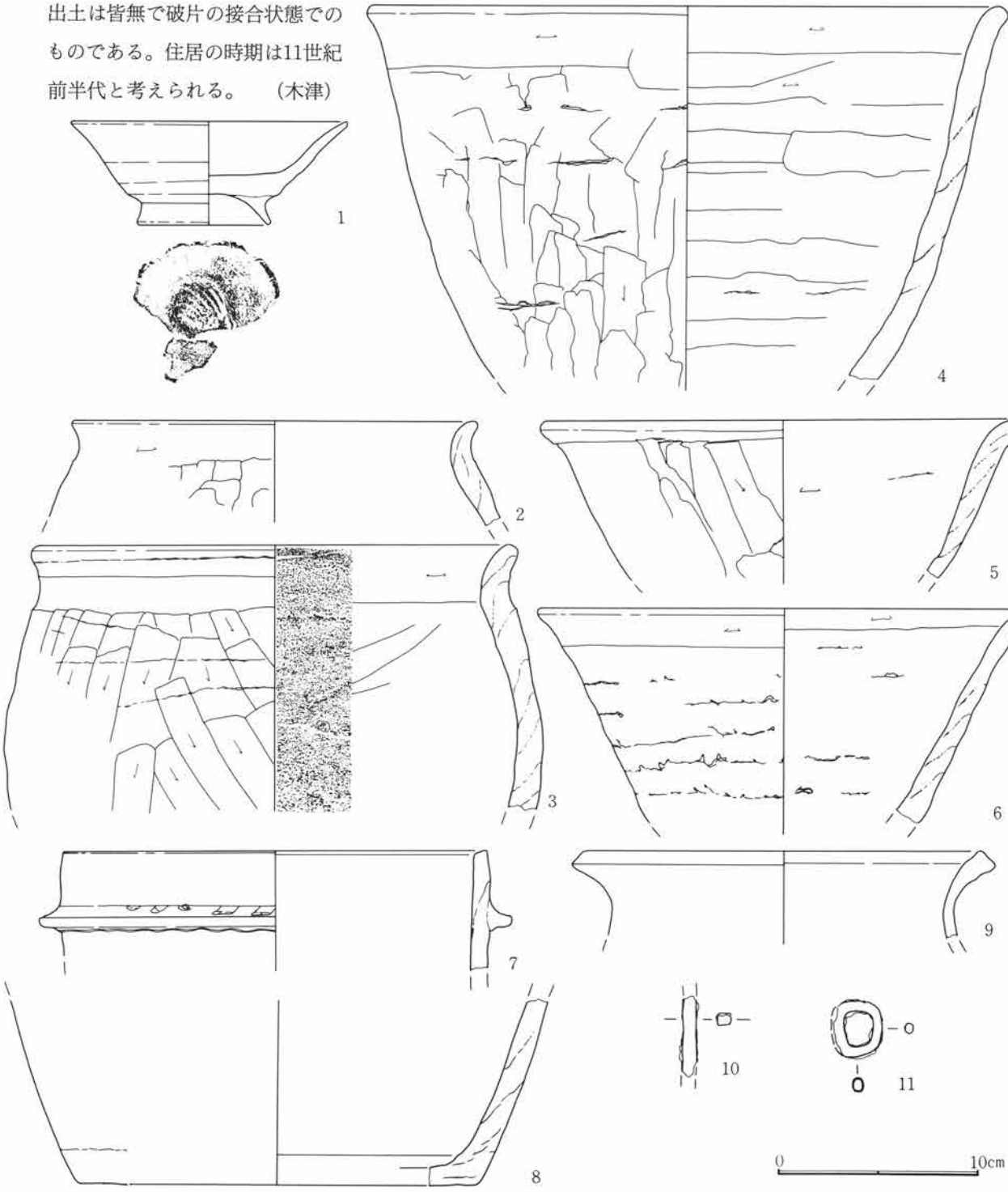
層　序

1．C軽石多量・微粒状炭化物・粒状焼土含有。　2．C軽石含有・微粒状炭化物・粒状焼土若干。　3．C軽石多量・微粒状炭化物・粒状焼土混入。　4．C軽石含有・小塊状FA含有。　5．細粒状C軽石若干。　6．細粒状C軽石微量・Ⅶ層土混入。
7．C軽石若干・粒状焼土若干。　8．微粒状C軽石微量・粒状焼土含有・粒状炭化物含有。　9．細粒状C軽石若干。
10．細粒状C軽石若干・粒状焼土多量・塊状Ⅶ層土含有。　11．掘り方土（微粒状C軽石微量）。

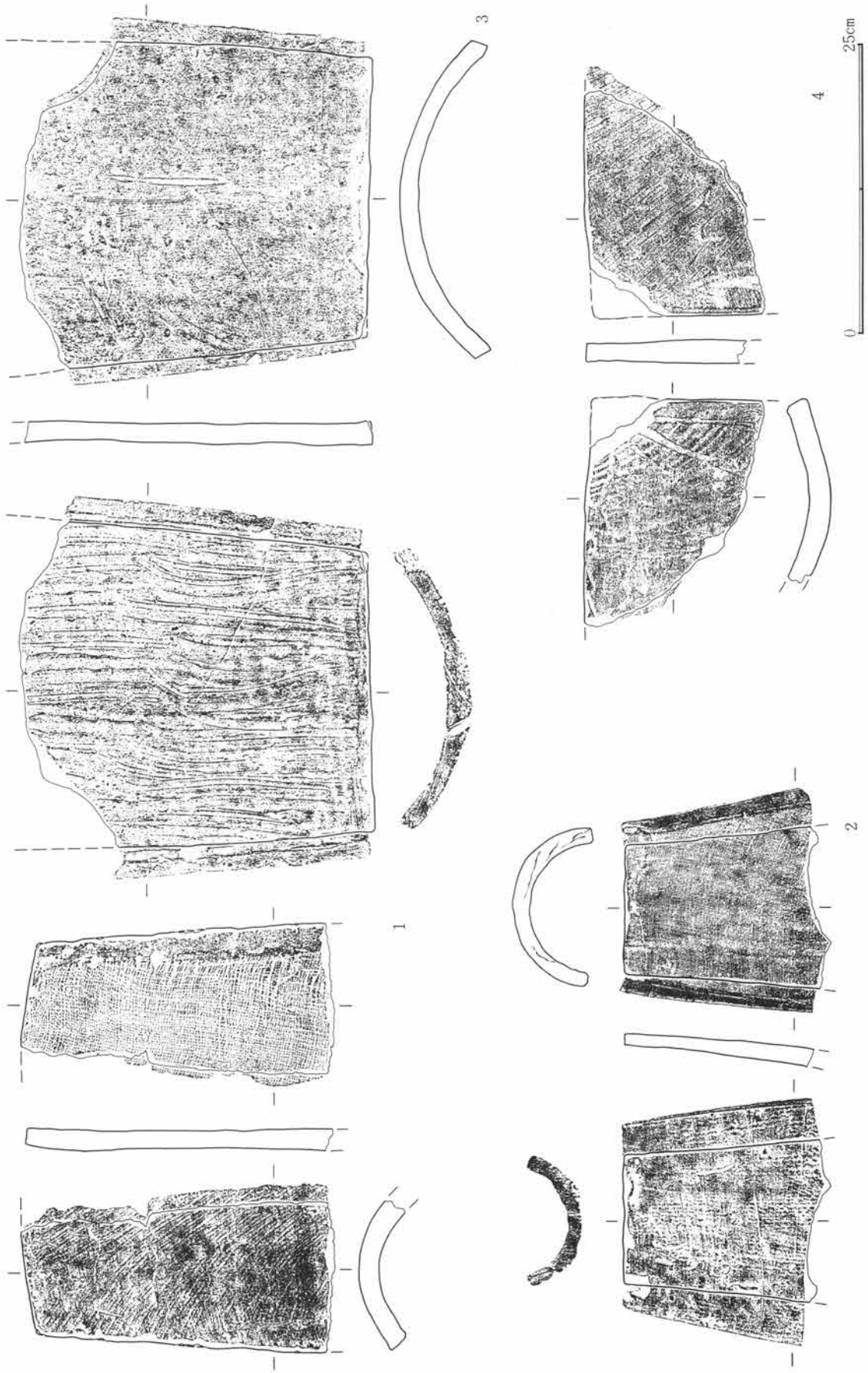
第87図　D区第27号住居跡実測図

カマドは、隅部に構築するが、東壁・南壁を結ぶ交点より比較的屋内側に偏在している。また、カマド前面のP_1は、床面上で落ち込みが確認出来る状態であったが、住居の存続時に併存し開口していた確証はない。この点で、確実な存在と言及し難い。

掘り方は、住居北側にやや偏在し顕著で、他に土坑状のP_2～P_4がある。これらは床面精査時に落ち込みとしては認められなかった。この点では掘り方段階での所産と考えられるものの、性格は不明である。可能性として荒掘り時の部分的な掘り込みと考えられる。出土遺物は比較的多いが、坏・類の数が少なく完形品の出土は皆無で破片の接合状態でのものである。住居の時期は11世紀前半代と考えられる。　（木津）

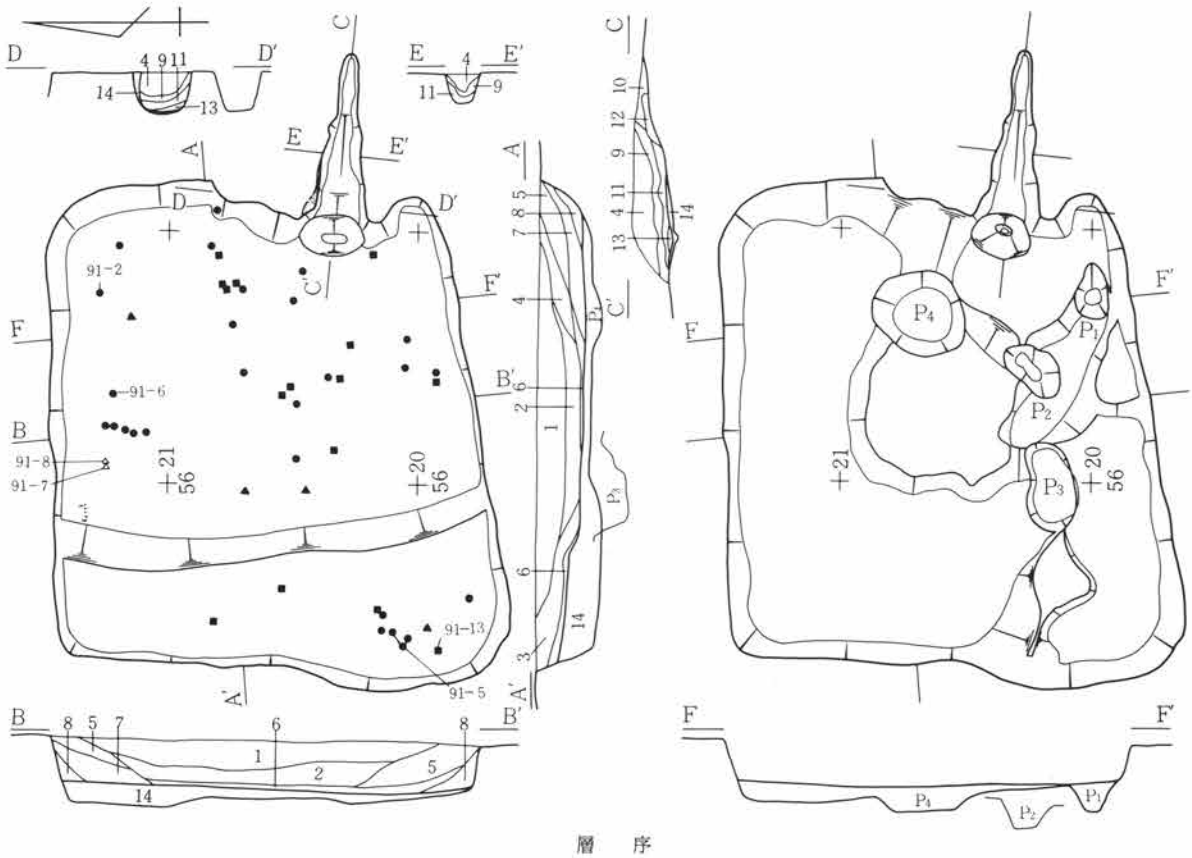


第88図　D区第27号住居跡出土遺物実測図



第89図　D区第27号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	D区第28号住居跡	位置	19～21－D－54～56グリッド内				
平面形態	不整長方形	規模	5.10m×3.68m	主軸方位	北－89度－東	残存深度	約42cm程
壁	斜位気味に立ち上がる。	**北**	床面	造床。西側で段状で一段高い面を備える。			
壁溝	未検出。		貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋外周辺部を精査したが未確認に終った。						
掘り方	底面は全体に大きな凹凸状を呈し、土坑状のものが認められた。						
カマド	位置	東壁南寄り。		主軸方位	北－96度－東		
形状	細い舌状を呈し、両袖を有する。長煙道が屋外に延びる。			改築の有無	有。		
規模	全長159cm・屋外長106cm・屋内長53cm・袖間幅153cm・燃焼部幅40cm。						
焚口	楕円形状の浅い窪みを検出。		袖	両袖を備える。両袖共に地山の削り出し。			
燃焼部	支脚等の施設は認められなかった。底面は平坦で、煙道に続く。						
煙道	細長く屋外に構築する。		掘り方	使用時の状態とほとんど変り無い。			
遺物出土状況	散在した状態で、２・７層土中からの出土が多い。						

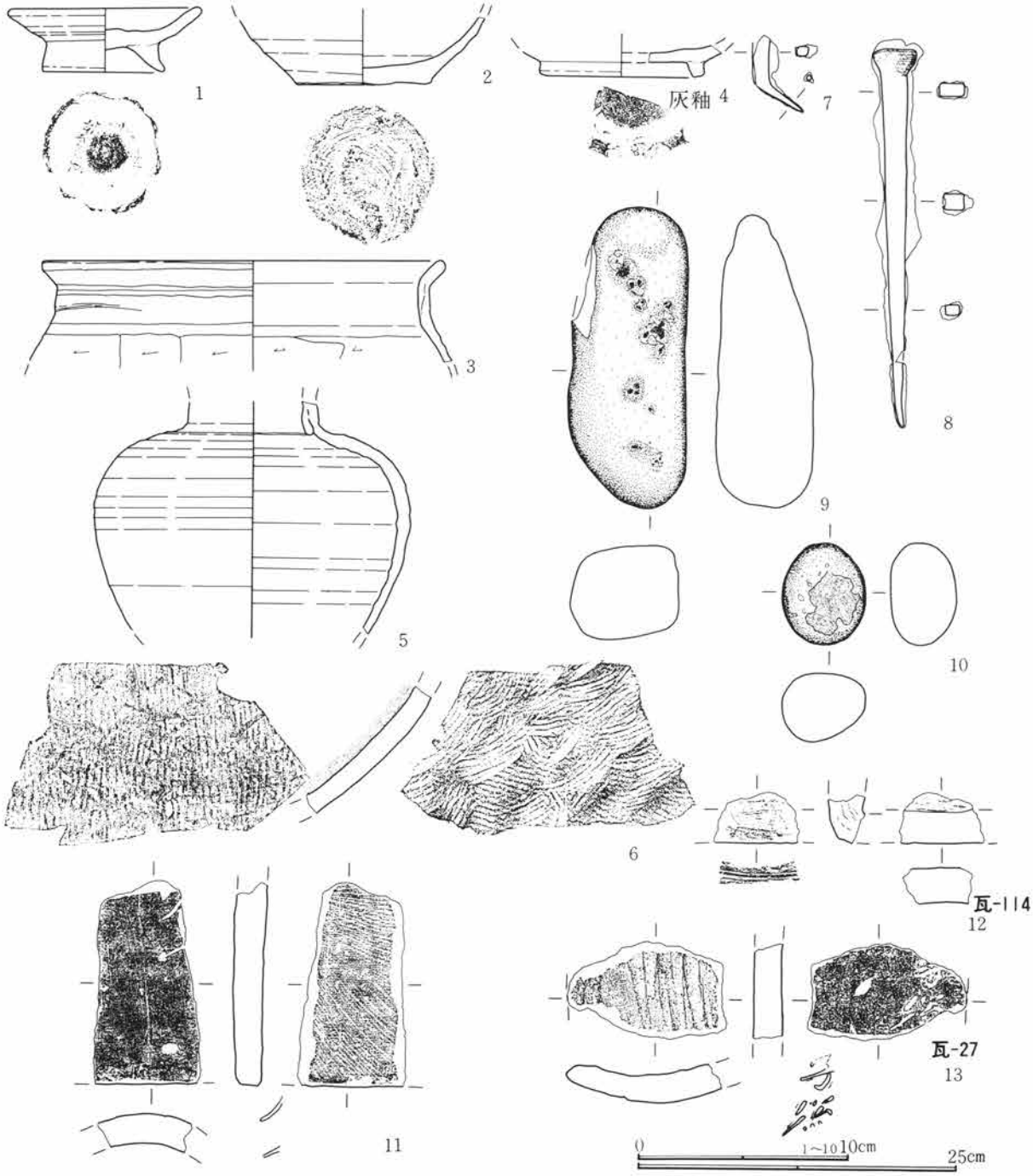


第90図　Ｄ区第28号住居跡実測図

所　見　本住居跡はＤ区第37号住居跡を切って重複する。平面形態は東西に長軸を取り、西壁が他壁に比べて直線的でなく、中央付近からやや張り出し気味に南西コーナー部に延びる不整長方形を呈する。床面は西側約３分の１程に一段高い平坦面を造り出し、緩やかな斜面でもって東側に移行する。当初この部分が拡張部と見られたが、土層断面の観察、掘り方の平面形態より、一次的意図により構築されていた。

カマドは東壁南寄りに構築され、袖を意識して地山を造り出している。底面は焚口を浅く掘り込み、緩やかに煙道部が立ち上がって行く。左壁中央部付近で壁面を二次的に整形して、若干煙道部を細める改築の様子がみとめられた。

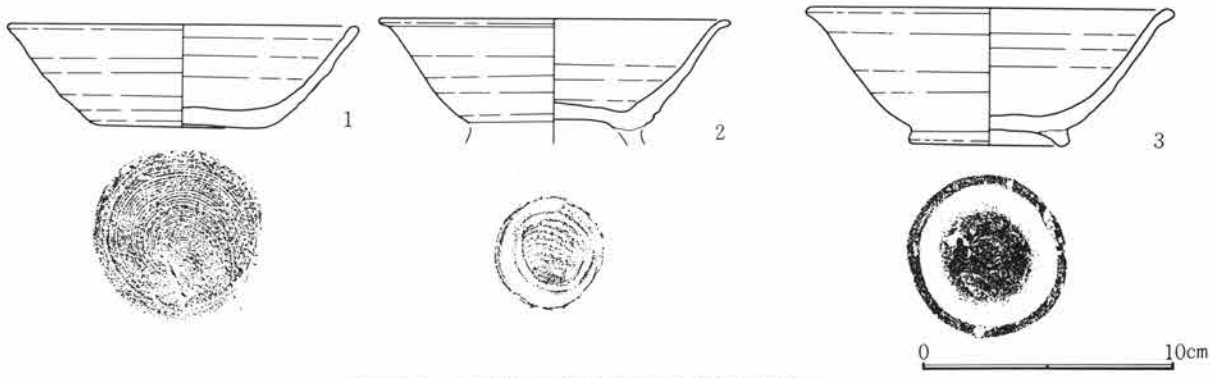
遺物の土器・瓦類はすべて破片であり、廃棄時期は11世紀前半頃と思われる。　（石北）



第91図　Ｄ区第28号住居跡出土遺物実測図

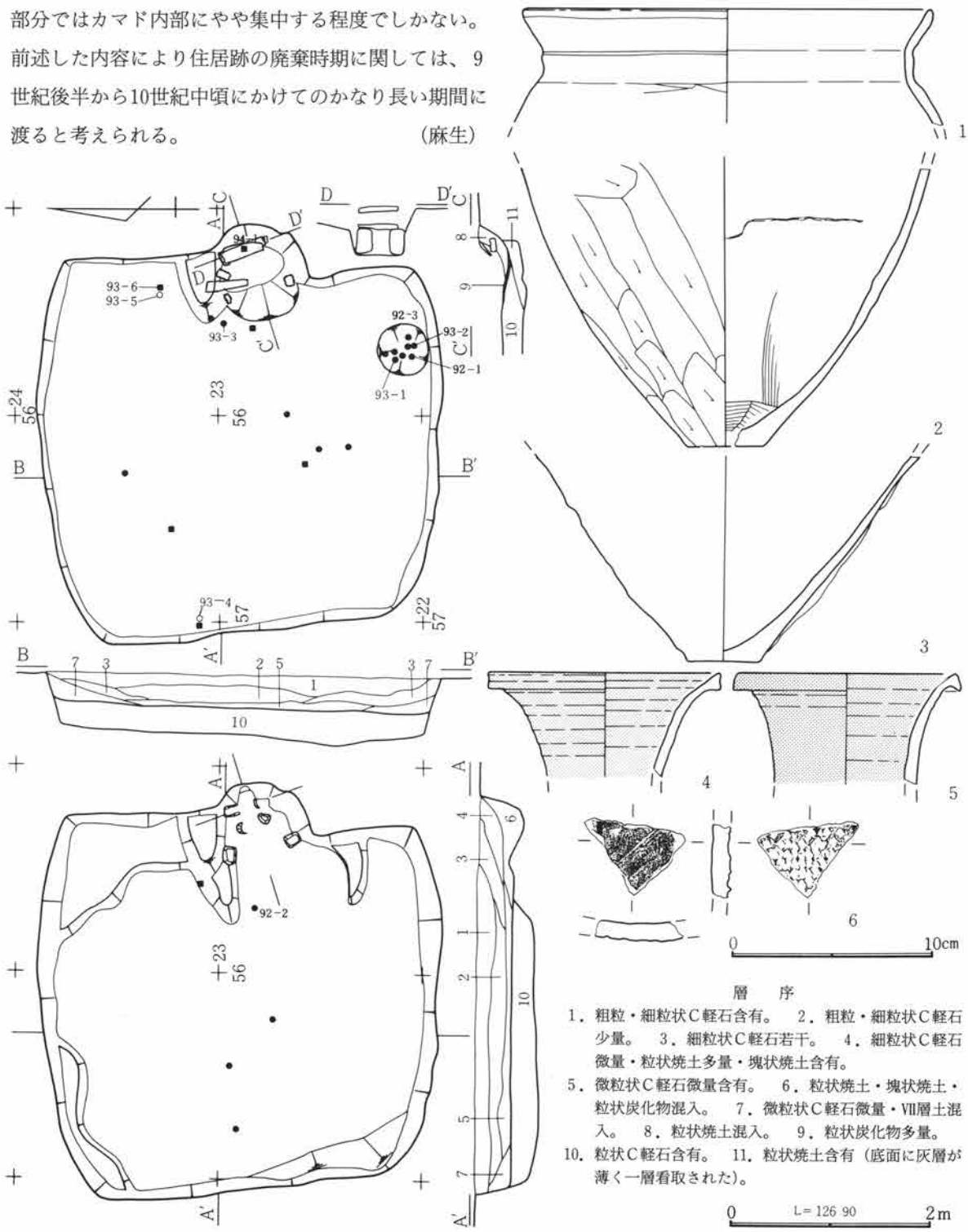
遺構名称	Ｄ区第29号住居跡	位置	21～23－Ｄ－55～57グリッド内				
平面形態	不整方形	規模	4.08m×4.00m	主軸方位	北－88度－東	残存深度	約35cm程
壁	斜位気味に立ち上がる。	南？	床面	造床。掘り方底面を25cm前後埋設し、床面を構築する。			
壁溝	未検出。		貯蔵穴	Ｐ１。南壁下で円形。径50cm・深度16cm			
柱穴	未検出。住居屋外周辺を精査したが未確認に終った。						
掘り方	全体に底面は平坦であるが、北東隅部のみが床面と一致する。						
カマド	位置	東壁中央。屋外に約35cm突出する。		主軸方位	北－75度－東		
形状	基調は馬蹄形状を呈する。右壁は調査段階での失敗により判然としない。			改築の有無	有。		
規模	全長96cm・屋外長37cm・屋内長59cm・袖間幅150cm・燃焼部幅85cm。						
焚口	皿状に窪み、比較的横幅が広い。	袖	左袖を検出。改築以前の左袖（地山削り出し）も検出。				
燃焼部	瓦・地山砂岩質の加工材で壁を補強している。奥壁は鳥居状に設置する。						
煙道	小さく舌状に認められる。	掘り方	加工材は全てに据方が認められ、改築も確認された。				
遺物出土状況	貯蔵穴で比較的まとまった状態で出土している。他は１・２層土中である。						

所　見　当住居跡はその南東隅部分が僅かに37号住居跡と重複しているが、土層観察などは実施しなかったために、その前後関係は残念ながら確認できなかった。しかし、遺物からみて当住居が先行する段階に位置すると考えられる。住居形態は不整の方形で、東壁がカマドを境にして北側部分が南側部分に比べて住居内から突出している。南壁際の南東隅寄りに直径約50cmの円形のピットが検出されており、覆土中に土器が含まれている事から貯蔵穴と考えられる。床面はローム層中に設置され、堅く平坦である。北東隅部分の様子から、貼床が施されていない事が分かっている。さらに、掘り方の調査から改築前の住居の床面は、南西隅に向かってやや緩やかな斜面をもって移行しており、最も深い部分が確認面から約60cmもの深さでほぼ地山を掘り込んだ面であった事が判明している。つまり、改築前と改築後では、床面の位置が約25cmも上がっている訳である。壁高は約35cmを測り、ほぼ直線状に急角度で斜め方向に立ち上がる。カマドは東壁のほぼ中央部分に位置し、形状は馬蹄形を呈している。袖に関しては、左袖が明瞭に確認されたのに対して、右袖は燃焼部の壁を利用しているためかはっきりしていない。残存する左袖には瓦や地山砂岩質の加工礫を構築材として用いて、壁部分を補強を図っている。また、掘り方部分から両袖部分の芯として用いられたと考えられる礫が検出されている。さらに、カマドの掘り方に遺されていた地山削り出しの両袖などの痕跡から明らかに一度は改築されているのが認められる。そのために、改築前に比べて改築後のカマドの主軸方向、及び右袖の位置がやや北寄りにずれると共に、燃焼部を含めた形で壁外に突出している。ただ左袖に関しては、

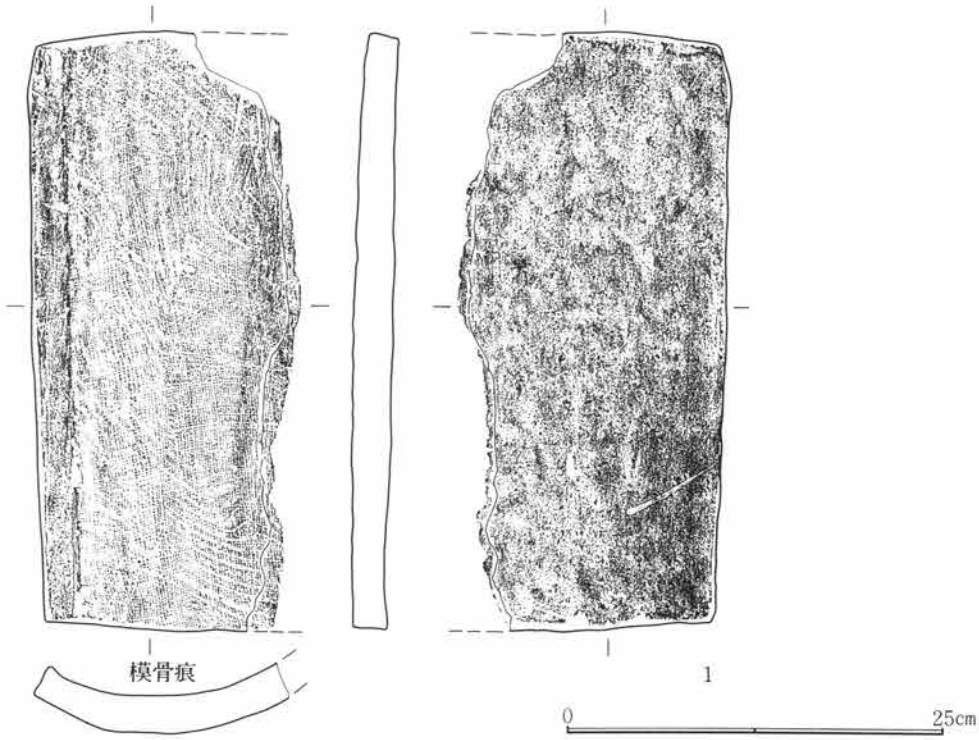


第92図　Ｄ区第29号住居跡出土遺物実測図

拡張された東壁に合わせた形で、その袖際の部分が僅かに東方向にずれるものの、位置そのものは変わらない。この拡張に伴う形で北東隅部分が張り出しており、その痕跡も掘り方からテラス状の形で確認されている。これらのことから、住居内のそれぞれの部分から検出された遺物に関して、時期差が認められる事が理解できる。特にカマド内部の遺物に関しては、改築前のものが残存している可能性が極めて高いと言える。出土遺物は貯蔵穴内に比較的集中しており、その他の部分ではカマド内部にやや集中する程度でしかない。前述した内容により住居跡の廃棄時期に関しては、9世紀後半から10世紀中頃にかけてのかなり長い期間に渡ると考えられる。　（麻生）



第93図　D区第29号住居跡・出土遺物実測図

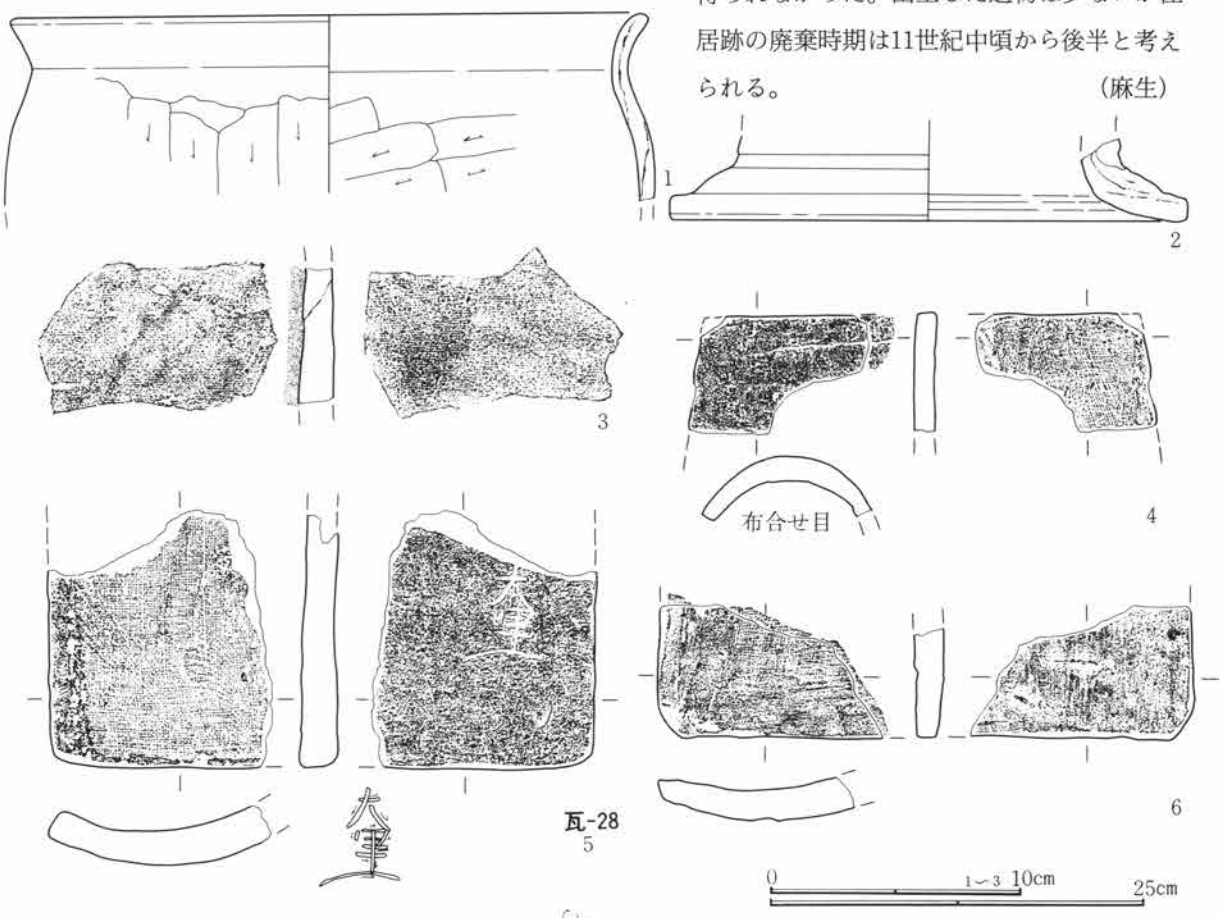


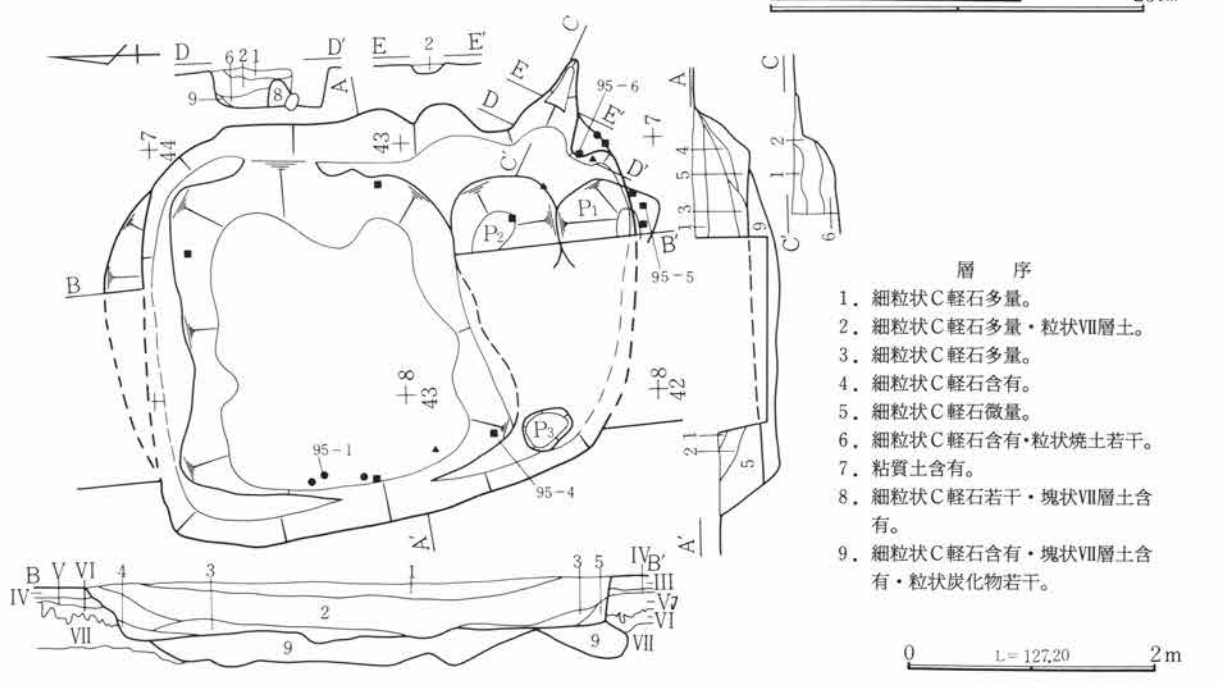
第94図　Ｄ区第29号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	Ｄ区第30号住居跡	位置	７～９－Ｄ－41～43グリッド内				
平面形態	隅丸長方形	規模	3.90m×4.19m	主軸方位	北－91度－東	残存深度	約43cm程
壁	緩やかに立ち上がる。	**北**	床面	造床。掘り方底面を埋設し平坦（？）な床面を構築する。			
壁溝	未検出。		貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋外周辺を精査したが未確認に終った。						
掘り方	中央やや北寄りが大きく皿状に掘削されている。南側は土坑状でありP1はオーバーハングする。						
カマド	位置	東壁南端。屋外に約62cm突出する。		主軸方位	北－116度－東		
形状	舌状を呈する。焚口周辺が判然としなかった。			改築の有無			
規模	全長－cm・屋外長65cm・屋内長－cm・袖間幅96cm・燃焼部幅38cm。						
焚口	不分明。		袖	右袖が検出されたが、全容ではないと考えられる。			
燃焼部	顕著な被熱面が認められなかった。図示した部分が燃焼部と考える。						
煙道	細く舌状を呈すが遺存は不良。		掘り方	掘り方は図示した状態に近いが、袖は削り出している。			
遺物出土状況	出土したものは、覆土内に散在する。						

所　見　当住居跡は昭和55年度の試掘調査時に実施した試掘トレンチで確認されたが、同時にその際の掘削により住居のほぼ中央部の大半が北壁及び南壁の大部分と共に壊されている。また当住居跡は25号住居跡と重複しているが、その前後関係はトレンチの影響があったものの、詳細な土層観察などから明らかに後出する段階に位置するとの確認が得られている。住居形態は隅丸長方形を呈していると考えられるが、前述したトレンチにより南西隅部分などがしっかり検出されていないために、不確定な部分が多いと言える。掘り方の調査でカマドの手前に二つの楕円形を呈するピットが検出され、特にP_1は南壁にオーバーハングする形態であるが、両者共に貯蔵穴との確証が得られなかった。また北側半分に浅い皿状の掘り込みが検出されて

いる。カマドは東壁の南東隅に位置するコーナーカマドであり、右袖は検出されているものの調査時の検出に失敗したために全容がすべて把握されているか疑問である。左袖は燃焼部の壁を利用しているためかはっきりしない。燃焼部自体の位置もカマドの土層観察から断定できる根拠が薄く、さらに改築の有無の確証が得られなかった。出土した遺物は少ないが住居跡の廃棄時期は11世紀中頃から後半と考えられる。（麻生）

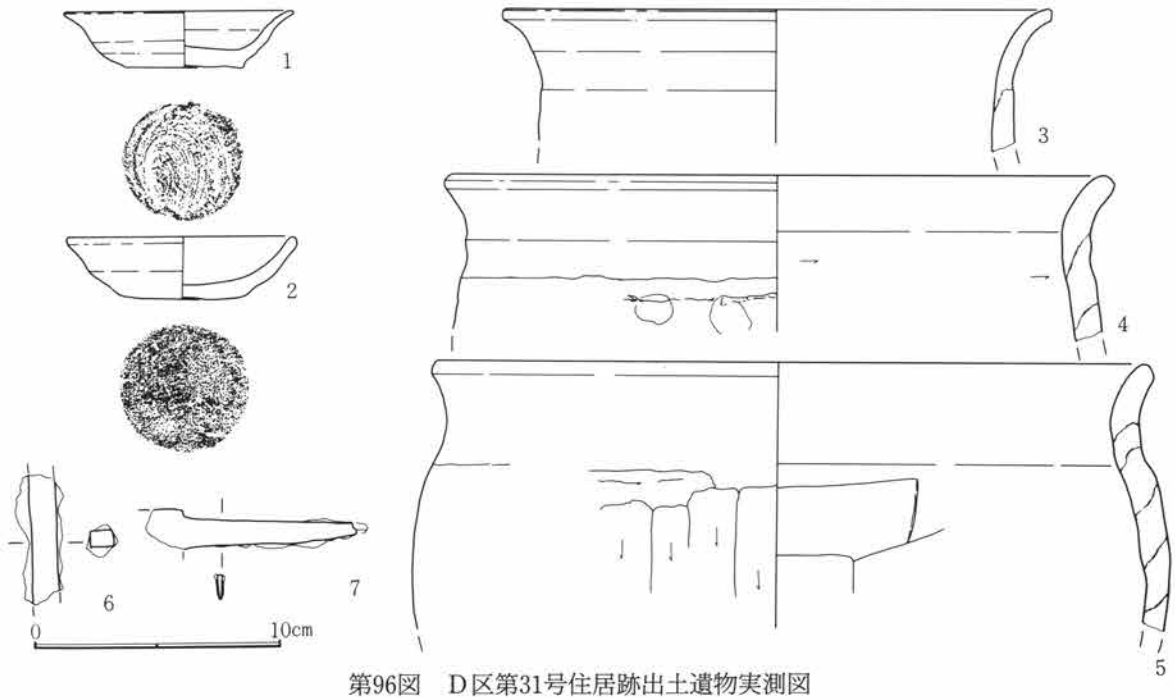




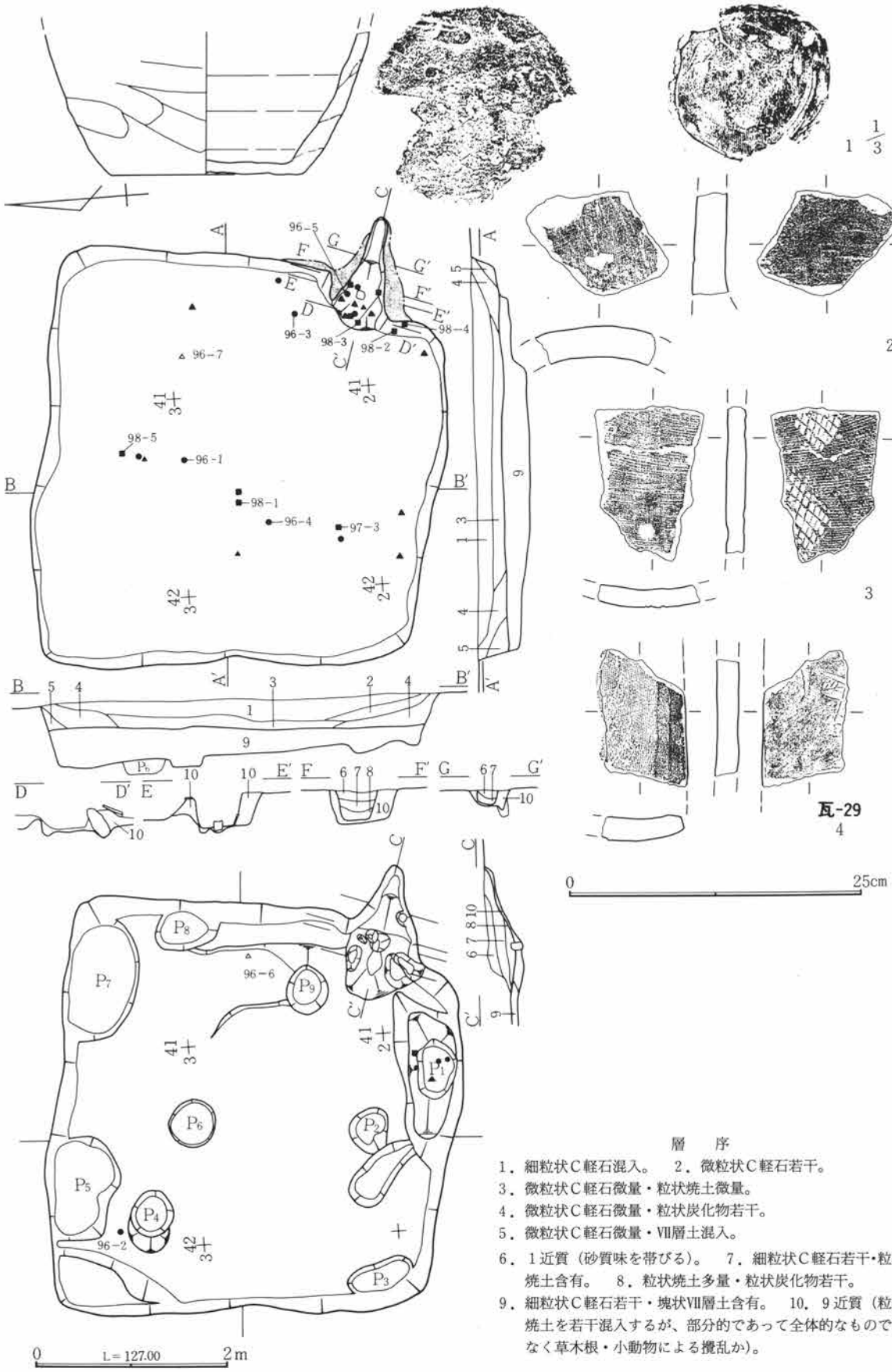
第95図　D区第30号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	D区第31号住居跡	位置	1～3－D－40～42グリッド内				
平面形態	不整長方形	規模	4.73m×4.27m	主軸方位	北－96度－東	残存深度	約32cm程
壁	斜位気味に立ち上がる。	**西**	床面	造床。掘り方底面を12～40cm程埋設して床面を構築する。			
壁溝	未検出。		貯蔵穴	南壁下で検出。不整形。125㎝×60cm・深度46cm			
柱穴	未検出。住居屋外周辺部を精査したが未確認に終った。						
掘り方	底面は全体的に平坦であるが、土坑・柱穴状の掘り込みが多い。						
カマド	位置	東壁南端。屋外に約75cm突出する。		主軸方位	北－108度－東		
形状	舌状を呈する。両袖を備えるが、大半は屋外に突出する。			改築の有無	有。		
規模	全長112cm・屋外長75cm・屋内長37cm・袖間幅127cm・燃焼部幅46cm。						
焚口	皿状に窪む。		袖	右袖は改築が認められ瓦・礫により補強している。			
燃焼部	底面の立ち上がり部分に支脚を備える。						
煙道	細く屋外に突出する。		掘り方	袖の補強材・支脚の据方等が検出された。			
遺物出土状況	覆土内に散在する。１層下層・３層土内からが主体で、貯蔵穴覆土内から出土する。						

所　見　本住居跡は北東コーナー部をD区第18号住居跡に切られて重複する。東壁が直線的に掘り込まれているのに対し、他はやや曲線的であり、全体的には不整長方形を呈する。カマドは東壁南寄りに構築されており、改築の状況が見出された。住居構築の段階で東壁を掘り込み、生活面を貼る段階でカマド底面も共に整え、支脚も同時に埋設しているのである。袖は造り出しであり、右袖を二段階に設定している。すなわち廃絶期の右袖は、前段階のそれより約20cm程住居内に延ばし、焚口幅も同規模に狭めている。その際に男瓦と礫で壁体を補強し、河原石を焚口に設置する。内部から補強材であろう瓦片が燃焼部より出土した。床面は貼り床構造で、すべて埋め戻されて平坦面に整えられていた。掘り方床面には多数のピットが検出され、北西コーナー部に一部平坦な面を残し、特に北壁際を深く掘り込んでいた。遺物の出土量は少なく、その大半が瓦片である。廃棄時期は11世紀前半と思われる。　（石北）



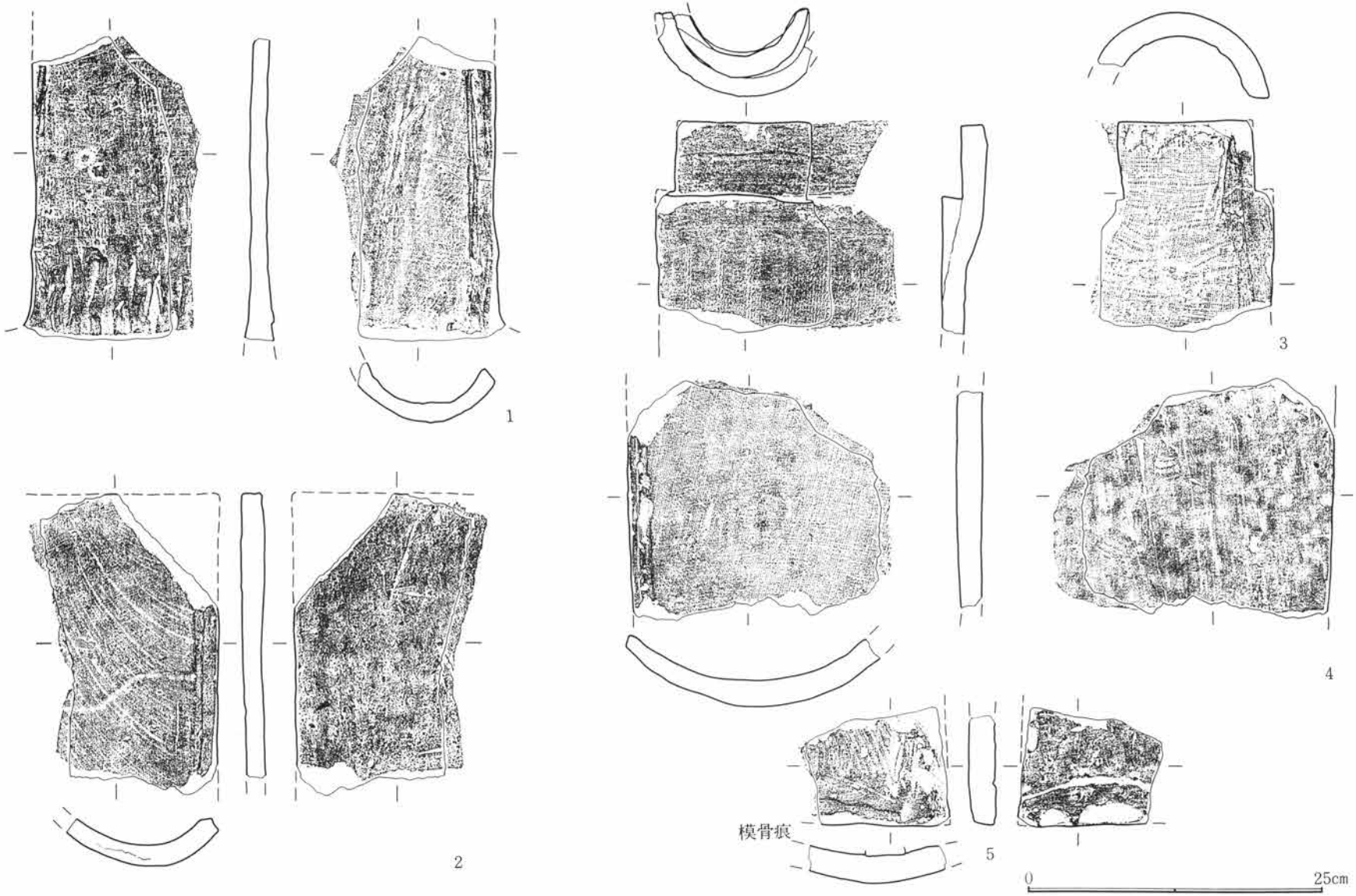
第96図　D区第31号住居跡出土遺物実測図



層　序

1．細粒状C軽石混入。　2．微粒状C軽石若干。
3．微粒状C軽石微量・粒状焼土微量。
4．微粒状C軽石微量・粒状炭化物若干。
5．微粒状C軽石微量・Ⅶ層土混入。
6．1近質（砂質味を帯びる）。　7．細粒状C軽石若干・粒状焼土含有。　8．粒状焼土多量・粒状炭化物若干。
9．細粒状C軽石若干・塊状Ⅶ層土含有。　10．9近質（粒状焼土を若干混入するが、部分的であって全体的なものではなく草木根・小動物による攪乱か）。

第97図　D区第31号住居跡・出土遺物実測図

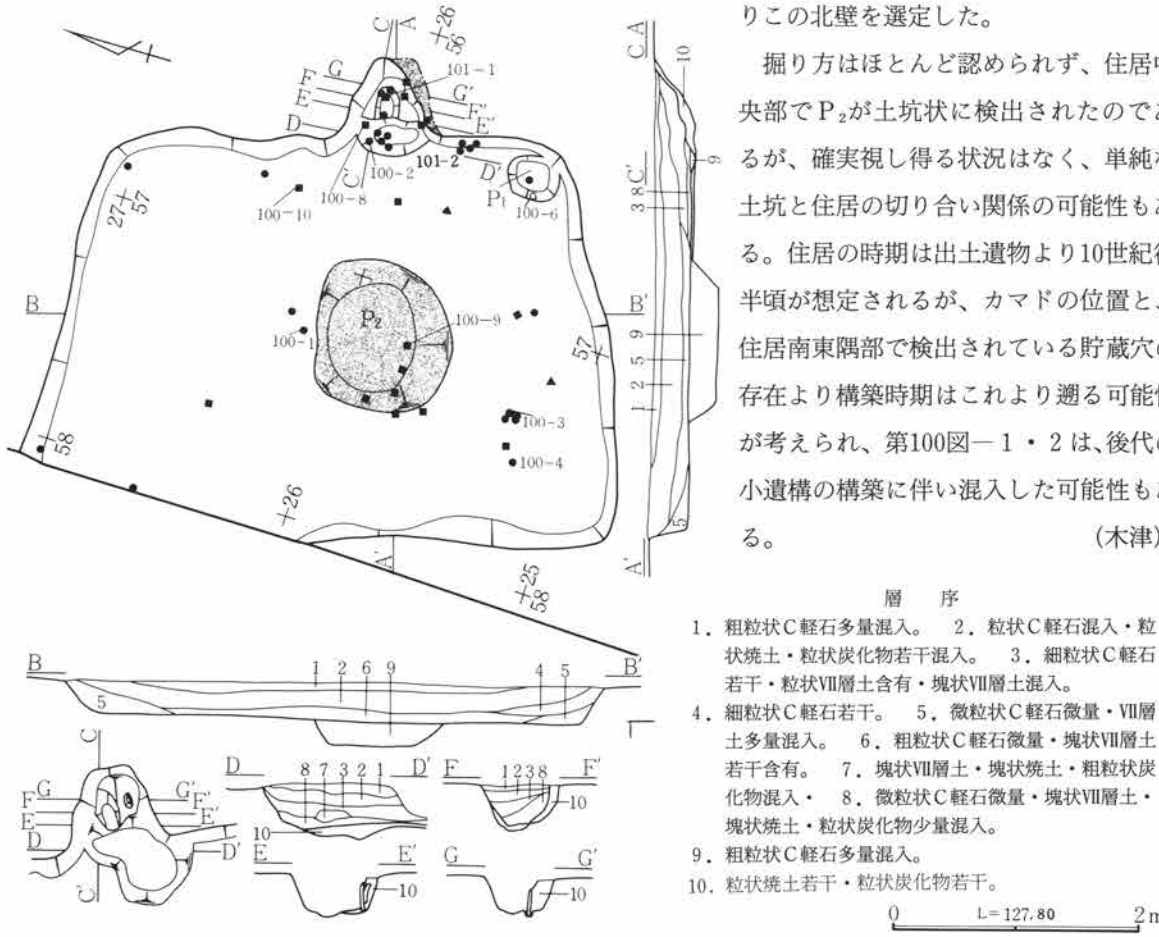


第98図　D区第31号住居跡出土遺物実測図

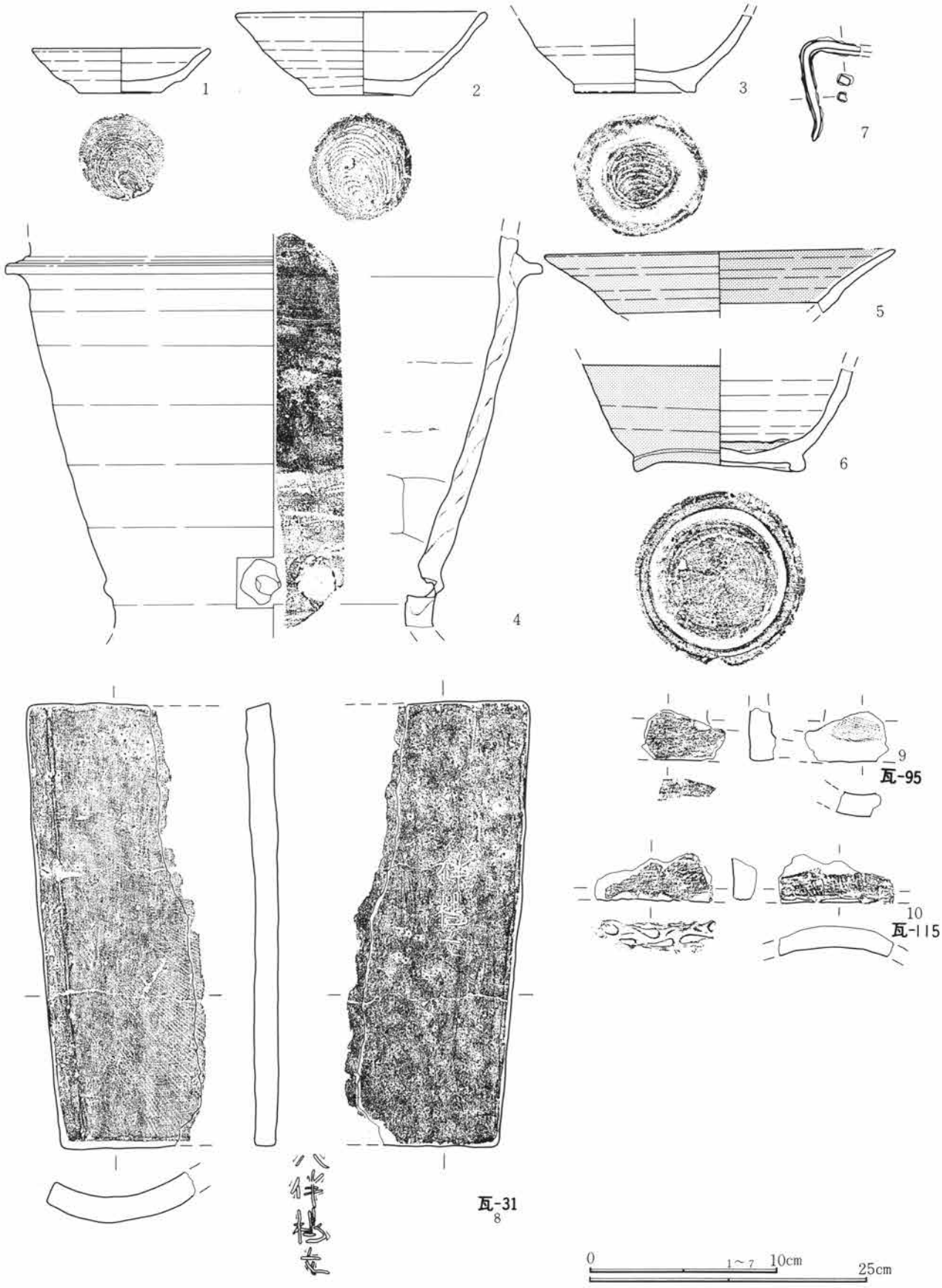
遺構名称	D区第36号住居跡	位置	24～27－D－55～58グリッド内				
平面形態	梯形状	規模	3.92m×(4.77)m	主軸方位	北－72度－東	残存深度	約30cm程
壁	斜位に立ち上がる。	北？	床面	掘り方底面を平坦に構築し床面として使用している。			
壁溝	未検出。		貯蔵穴	南東隅部で検出。円形。径42cm・深度10cm			
柱穴	未検出。住居屋外周辺部を精査したが未確認に終った。						
掘り方	中央部に浅い土坑状の掘り込みが検出されている。						
カマド	位置	東壁中央やや南東隅寄り。		主軸方位	北－72度－東		
形状	舌状を呈する。袖はほとんど認められない。			改築の有無	？		
規模	全長78cm・屋外長60cm・屋内長18cm・袖間幅120cm？・燃焼部幅60cm						
焚口	カマド内部に入る。	袖					
燃焼部	床面より高い位置に構築する。瓦による壁体の補強をしている。						
煙道	立ち上り部分が検出されている。	掘り方	右壁側に認められる。焚口周辺が皿状に掘り窪める。				
遺物出土状況	カマド内での出土が多く、3層土中が大半である。						

所　見　当住居の北西部は調査区域外にあり未調査の部分がある。住居の形状は梯形を呈する。基準構築辺は比較的整った北壁に求めた。この北壁はほぼ東に指向する方位を指し、住居のカマドを備える東壁及び、西壁は平行関係にあるものの、他の同時期頃の住居例と比較した場合特異な指向方向を指していることによりこの北壁を選定した。

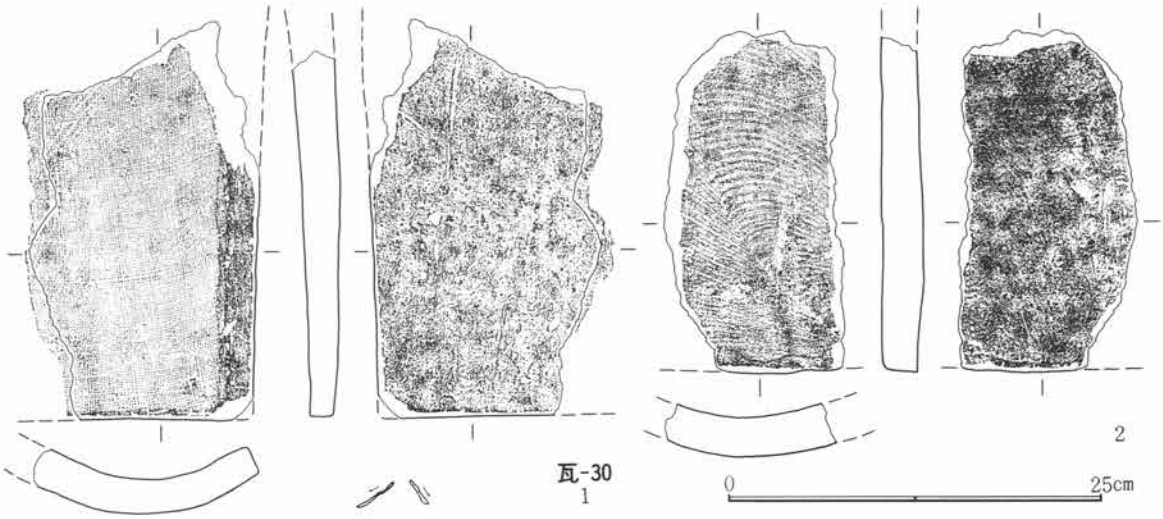
掘り方はほとんど認められず、住居中央部でP_2が土坑状に検出されたのであるが、確実視し得る状況はなく、単純な土坑と住居の切り合い関係の可能性もある。住居の時期は出土遺物より10世紀後半頃が想定されるが、カマドの位置と、住居南東隅部で検出されている貯蔵穴の存在より構築時期はこれより遡る可能性が考えられ、第100図－1・2は、後代の小遺構の構築に伴い混入した可能性もある。　（木津）



第99図　D区第36号住居跡実測図



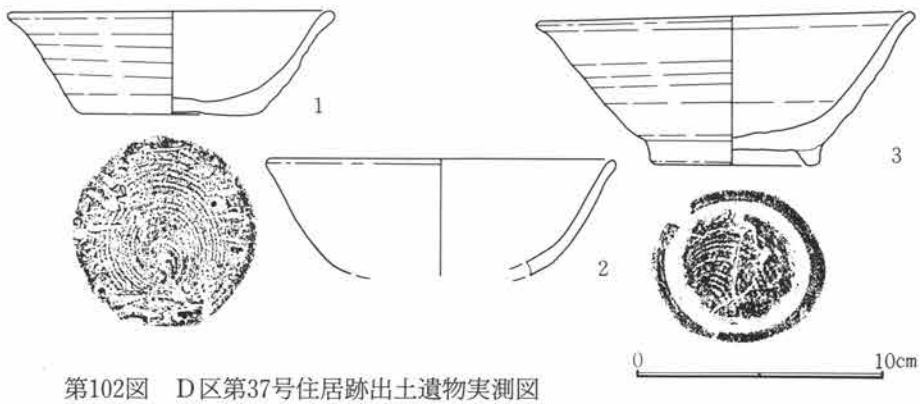
第100図　Ｄ区第36号住居跡出土遺物実測図



第101図　D区第36号住居跡出土遺物実測図

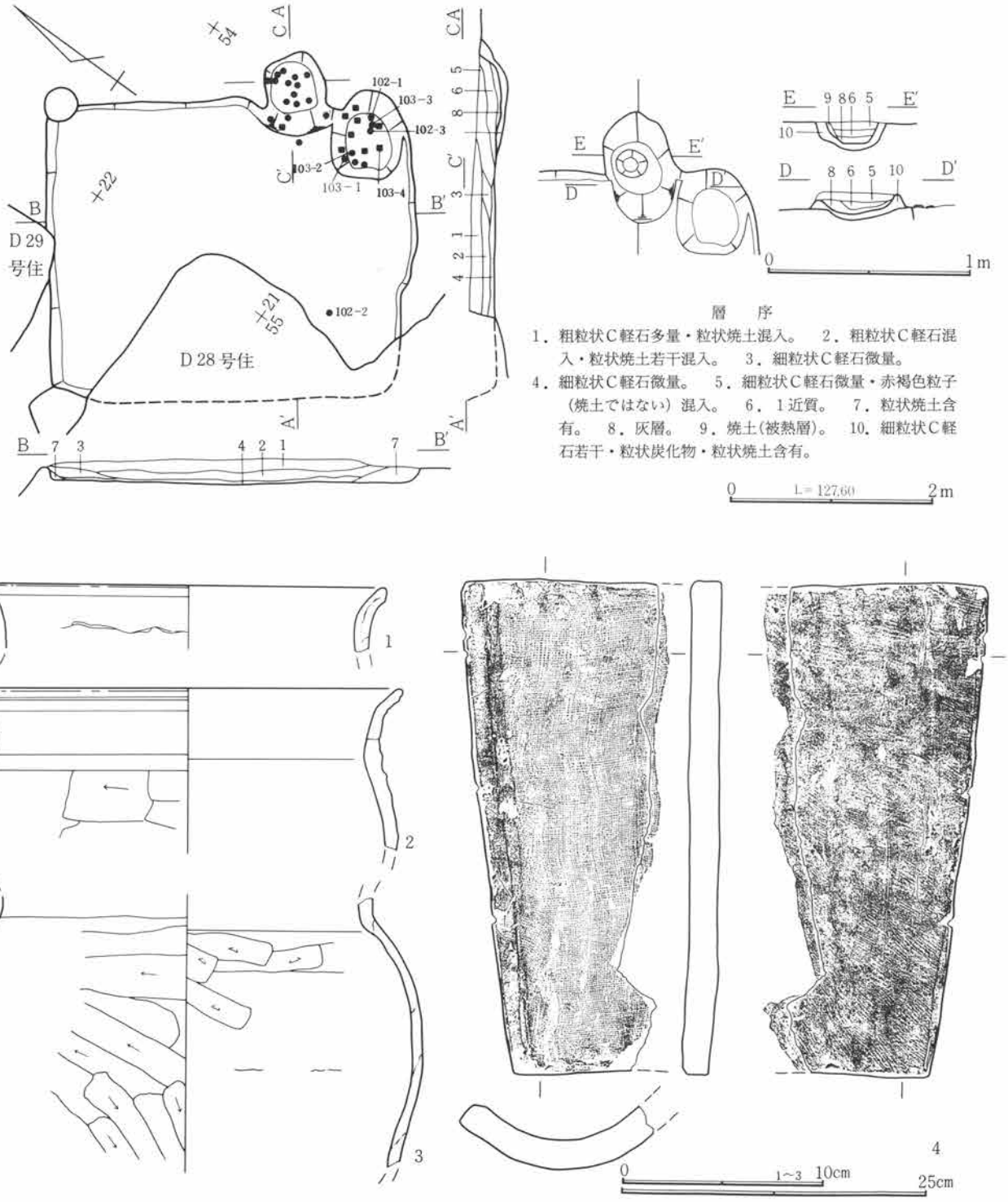
遺構名称	D区第37号住居跡	位置	20～22－D－53～55グリッド内				
平面形態	不整長方形	規模	3.40m×3.64m	主軸方位	北－53度－東	残存深度	約23cm程
壁	斜位気味に立ち上がる。	**北**	床面	掘り方底面を平坦に床面を構築している。			
壁溝	未検出。		貯蔵穴	南東隅部で検出。不整形。71cm×85cm・深度14cm			
柱穴	未検出。住居屋外周辺を精査したが未確認に終った。						
掘り方	底面を平坦にしている。						
カマド	位置	北東壁南寄り。屋外に約59cm突出する。		主軸方位	北－50度－東		
形状	馬蹄形状を呈し、両袖を具備する。			改築の有無	有。		
規模	全長85cm・屋外長43cm・屋内長42cm・袖間幅120cm・燃焼部幅57cm						
焚口	浅く皿状に窪み円形状を呈する。		袖	両袖を備える。袖は造り付け。			
燃焼部	支脚・壁体の補強等は認められなかった。						
煙道	未検出。		掘り方	楕円形を呈し、中央部が窪む。			
遺物出土状況	カマド・貯蔵穴からの出土が多く、貯蔵穴では、床面と同位面に瓦等を付設する。						

所　見　本住居跡はD区第28号住居跡に西半部を、第29号住居跡に北壁中央部を切られて重複する。南壁がやや曲線的に対し、東・北壁は直線的に整然とした平面形を呈する。床面は掘り方床面をそのまま採用しており、貼り床はなされていない。よって住居の掘り込み段階で生活面を意識し、平坦面を整えていったものと考えられる。よく踏み固められ、堅徴であった。カマドは東壁南寄りに馬蹄形に掘り込んで設置している。袖は左右に見られ、黒褐色の粘質土で短く造り出していた。煙道部は検出できず、燃焼部



第102図　D区第37号住居跡出土遺物実測図

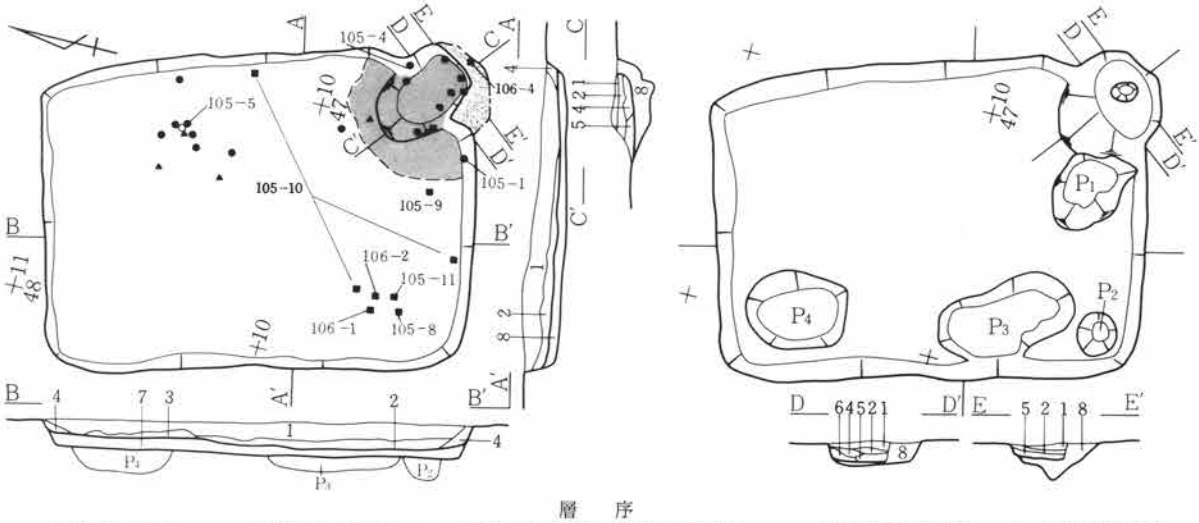
だけであったが、壁体はよく焼け込み、レンガ状を呈していた。また、掻き出された灰・焼土・微細な炭化物等が焚口前面から貯蔵穴にかけて散布し、断面観察により改築の状況が認められた。遺物は覆土・床面上からはほとんど出土せず、カマドおよび貯蔵穴内部からの出土が圧倒的で、坏・埦・甕・瓦等が主である。特に浅く掘り込まれた（約14cm）貯蔵穴においては、埦・瓦等が整然と設置された状態で出土したが、瓦の量の多さが注目される。廃棄時期は10世紀前半と思われる。　（石北）



第103図　Ｄ区第37号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	D区第38号住居跡	位置	9～11－D－46～48グリッド内				
平面形態	隅丸長方形	規模	2.63m×3.57m	主軸方位	北－75度－東	残存深度	約31cm程
壁	斜位気味に立ち上がる。	**西**	床面	造床。掘り方底面を10cm前後埋設し平坦な床面を構築。			
壁溝	未検出。		貯蔵穴	未検出（Ｐ３の南半部分）。			
柱穴	未検出。住居屋外周辺を精査したが未確認に終った。（Ｐ２？）						
掘り方	ほぼ平坦に掘削。土坑状の掘り込みが散見する。						
カマド	位置	南東隅部壁。屋外に約41cm突出する。		主軸方位	北－128度－東		
形状	逆「U」字状。煙道が未検出。				改築の有無	有？	
規模	全長84cm・屋外長32cm・屋内長52cm・袖間幅（108cm）・燃焼部幅50cm						
焚口	屋内側に広く円形状を呈する。		袖	未検出。			
燃焼部	奥壁が直線的でほぼ垂直に立ち上がる。部分的に瓦により壁体を補強する。						
煙道	未検出。		掘り方	楕円形状を呈し、支脚の据方を検出。			
遺物出土状況	P_3 直上、床面直上で比較的まとまった瓦が出土。カマド内は瓦が多く、他は１・３層中出土。						

所　見　当住居跡は４号溝と重複しており、その前後関係は土層観察から先行する段階に位置する。住居形態は隅丸長方形を呈すが、北壁が南壁に比べて僅かに短いためにやや変形しているようにみえる。床面は堅く平坦であり、厚さ約５～10cmの貼床を施している。壁高は最も深い部分で約20cmを測り、ほぼ直線状に斜め方向にやや急な角度で立ち上がる。北西隅に長軸約80cm、短軸約60cmの楕円形の土坑状の掘り込み、南寄りの西壁際に長軸約110cm、短軸約55cmと長軸方向が長めの楕円形の土坑状の掘り込み、南西隅には直径約30cmの円形のピットがそれぞれ検出されており、いずれも床面にではなく、掘り方に伴うものと考えられる。カマドは東壁の南東隅に位置するコーナーカマドであり、煙道部分は極端に短い。また燃焼部の掘り込みは浅いものの、掘り方では逆に深く、その部分のほぼ中央に小型のピットが認められるが、その用途に関して



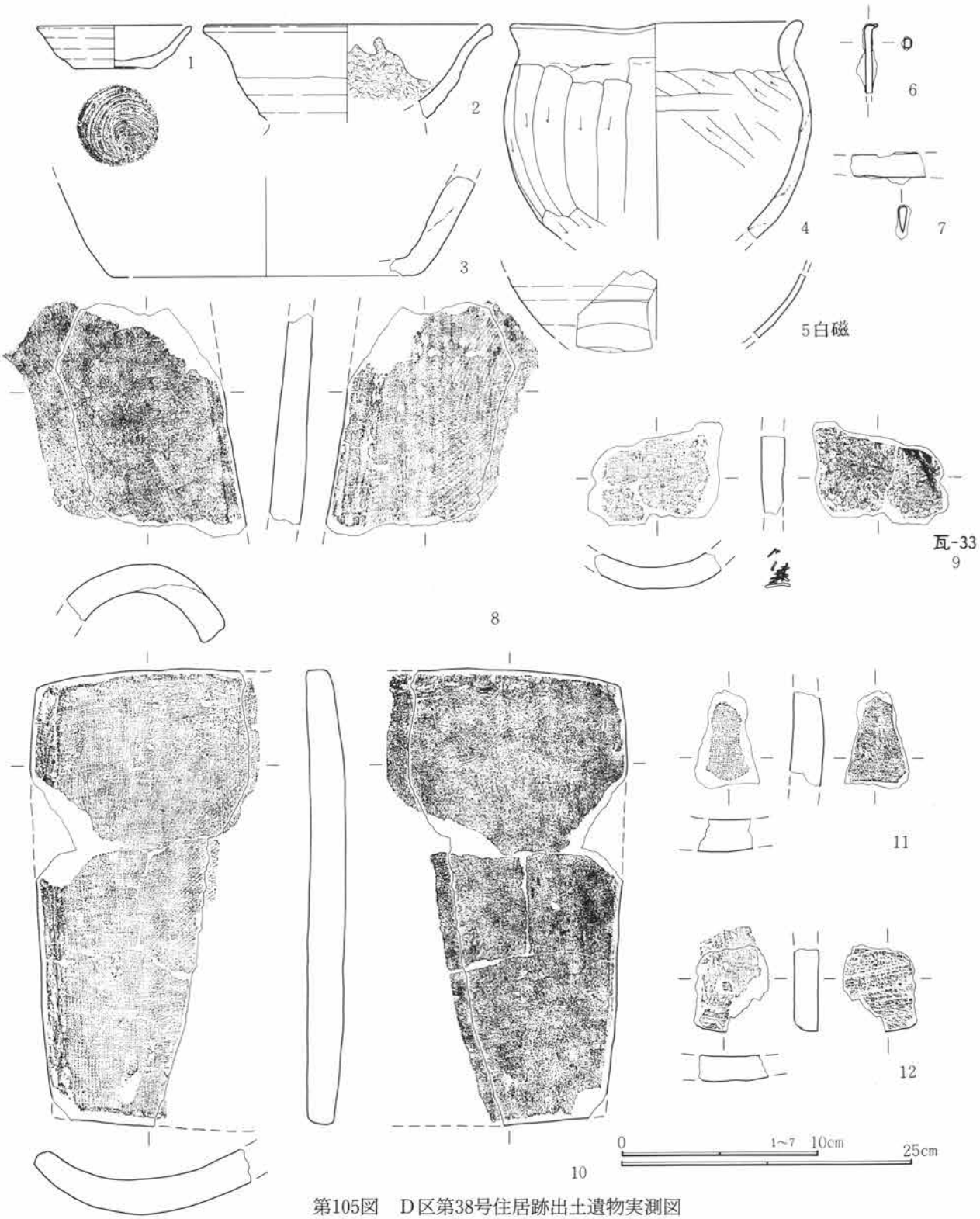
層　序

1．粒状Ｃ軽石混入。　2．粒状Ｃ軽石若干。　3．粒状Ｃ軽石微量・塊状Ⅶ層土含有。　4．微粒状Ｃ軽石微量。　5．細粒状Ｃ軽石・若干・塊状Ⅶ層土含有・粒状炭化物多量混入。　6．灰層。　7．塊状焼土。　8．粒状Ｃ軽石若干・粒状焼土含有。
9．細粒状Ｃ軽石混入・粒状炭化物微量。

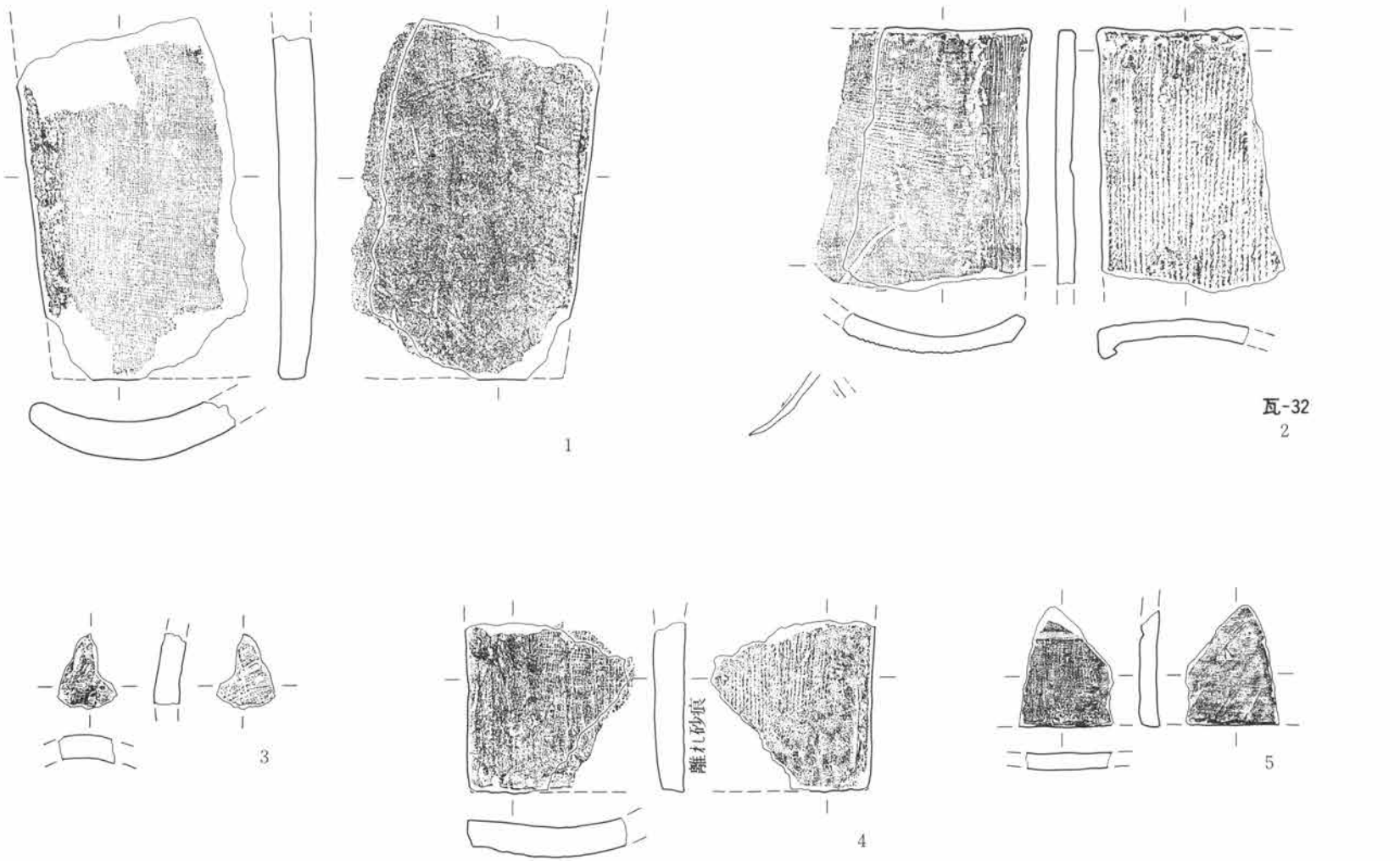
0　L＝12710　2m

第104図　Ｄ区第38号住居跡実測図

はまったく不明である。また掘り方の掘り込みの大きさから改築の可能性も考えられる。またカマド右脇の南壁際に長軸約70cm、短軸約50cmの楕円形がやや崩れたような形のピットが検出されており、貯蔵穴の可能性も考えられる。遺物はカマド内部、東壁際部分及び南西隅部分から多数出土しており、特にカマド内から多数の瓦が出土している。住居跡の廃棄時期は11世紀前半と考えられる。　（麻生）



第105図　Ｄ区第38号住居跡出土遺物実測図

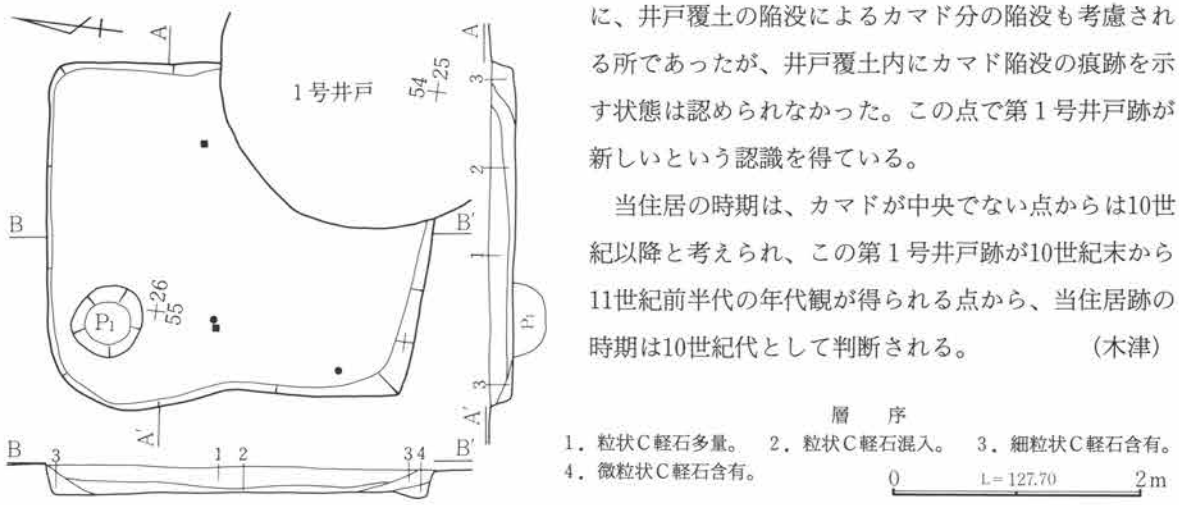


第106図　D区第38号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	D区第39号住居跡	位置	24～26－D－53～55グリッド内				
平面形態	不整方形	規模	2.79m×(3.10)m	主軸方位	北－82度－東	残存深度	約20cm程
壁	斜位気味に立ち上がる。	北	床面	掘り方が平坦に掘削されておりこの底面を床面とする。			
壁溝	未検出。		貯蔵穴	Ｐ１か？　径約60cm・深度23cm			
柱穴	未検出。住居屋外を精査したが未確認に終った。						
掘り方	底面を平坦に構築している。						

所　見　当住居は第１号井戸跡に切られている。カマドは、この井戸跡に切られ失われている。この井戸の位置からカマドは、中央より南西隅部に偏在していたと考えられる。また、新旧関係に就いて調査着手時に、井戸覆土の陥没によるカマド分の陥没も考慮される所であったが、井戸覆土内にカマド陥没の痕跡を示す状態は認められなかった。この点で第１号井戸跡が新しいという認識を得ている。

当住居の時期は、カマドが中央でない点からは10世紀以降と考えられ、この第１号井戸跡が10世紀末から11世紀前半代の年代観が得られる点から、当住居跡の時期は10世紀代として判断される。　（木津）

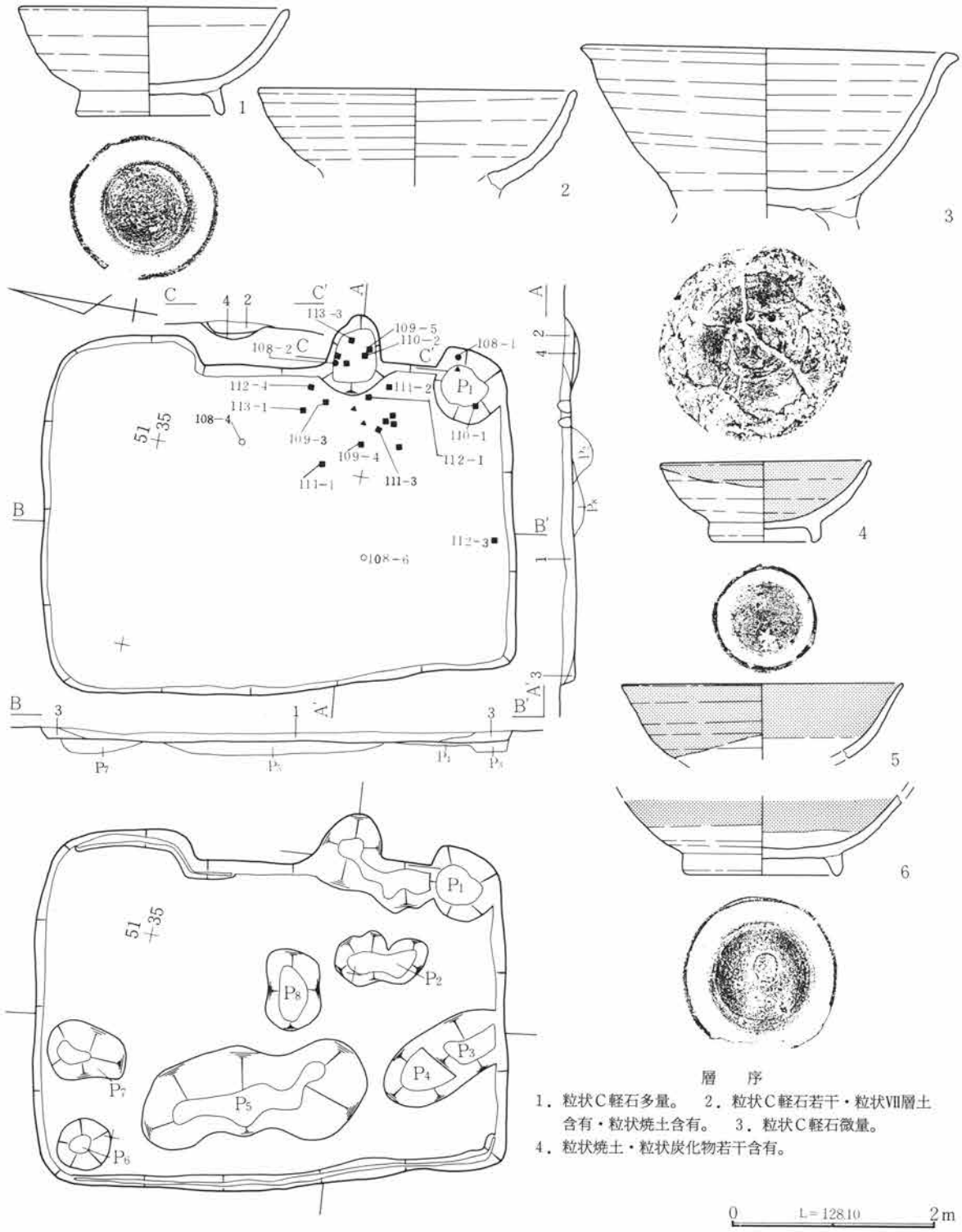


第107図　D区第39号住居跡実測図

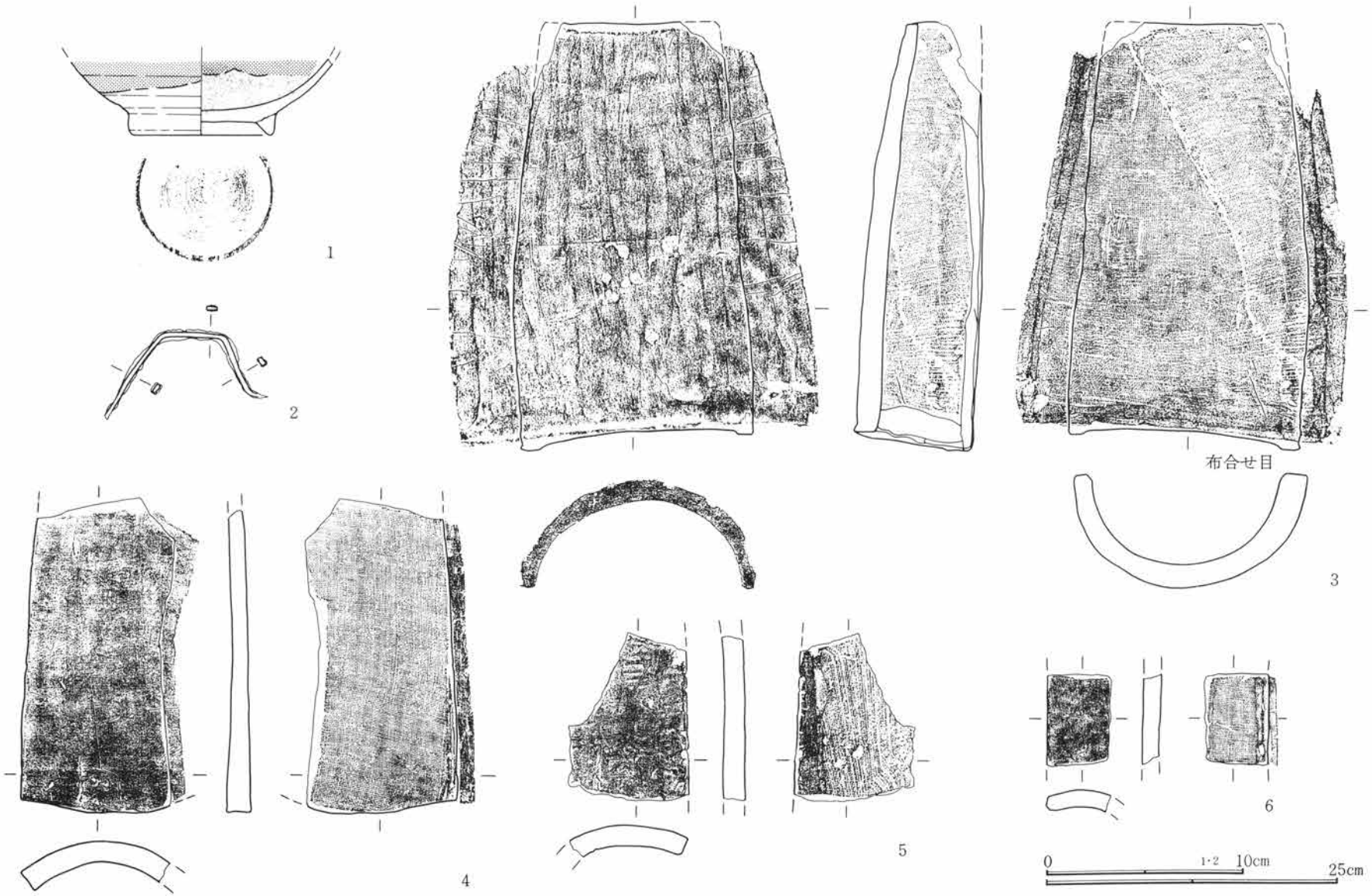
遺構名称	D区第40号住居跡	位置	33～35－D－40～42グリッド内				
平面形態	不整長方形	規模	3.68m×4.63m	主軸方位	北－79度－東	残存深度	約12cm程
壁	斜位に立ち上がる。	南	床面	造床。			
壁溝	東・西両壁下に検出。　幅10～18cm		貯蔵穴	南東隅部。円形状で屋外に突出。径78cm・深度８cm			
柱穴	未検出。住居屋外周辺を精査したが未確認に終った。						
掘り方	全体的に平坦であるが、土坑状の掘り込みが多い。						
カマド	位置	東壁南東隅寄り。屋外に約46cm突出する。			主軸方位	北－85度－東	
形状	舌状を呈する。大半が屋外に突出する。				改築の有無	有。	
規模	全長78cm・屋外長46cm・屋内長32cm・袖間幅100cm・燃焼部幅36cm。						
焚口	扇状を呈し、皿状に浅く窪む。		袖	未検出。			
燃焼部	奥壁は直線的である。カマド前面で出土した瓦は、カマドの補強材か？						
煙道	立ち上がり周辺部のみ検出。		掘り方	鶏卵状を呈し擂鉢状に窪む状態である。			
遺物出土状況	カマド前面に床面直上で遺存の良好な瓦が多数検出され、貯蔵穴内からも108図－１出土。						

所　見　当住居跡は、北東隅部が突出する所謂〝張り出し〟を備える住居跡である。この張り出し部分は、掘り方で見ると、壁溝が認められるが、この壁溝は通有に認識される〝壁板据え方〟とは考え難く、住居の構築に伴い、壁下を掘削した折に生じたものと推定され、(本書第５章第１節第１項〝構築基準辺に就いて〟

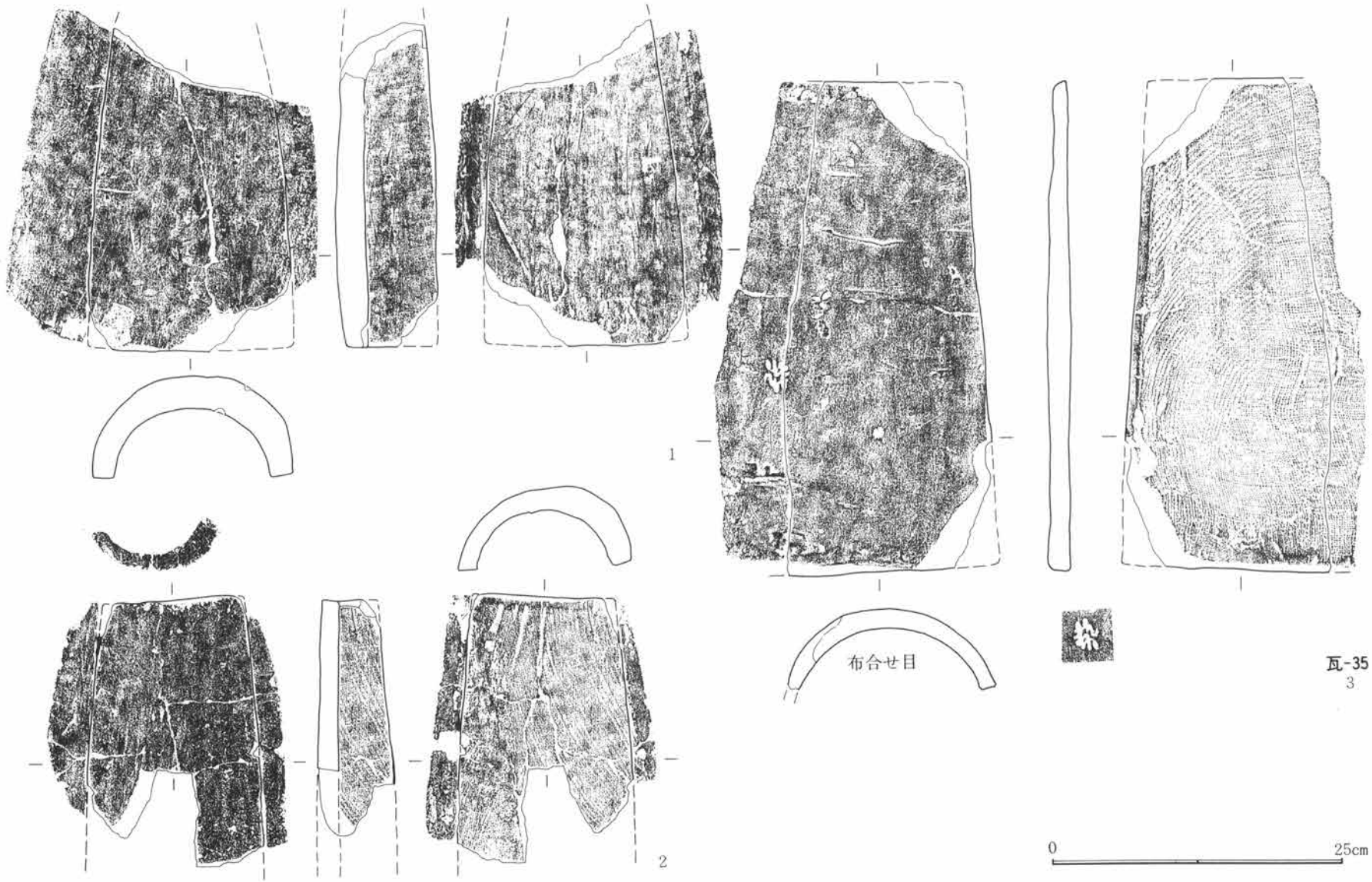
で記述）構築頭初より何らかの必要に伴い構築された部分と推定される。さらに、貯蔵穴も屋外に突出する状態である。この両者の状況は、住居に於ける壁と上屋との関係上重要視される存在である。また、住居の形態は、D区内に於いて比較的古い様相を呈しているが、出土遺物から想定する住居の時期は10世紀前半代と考えられる。　（木津）



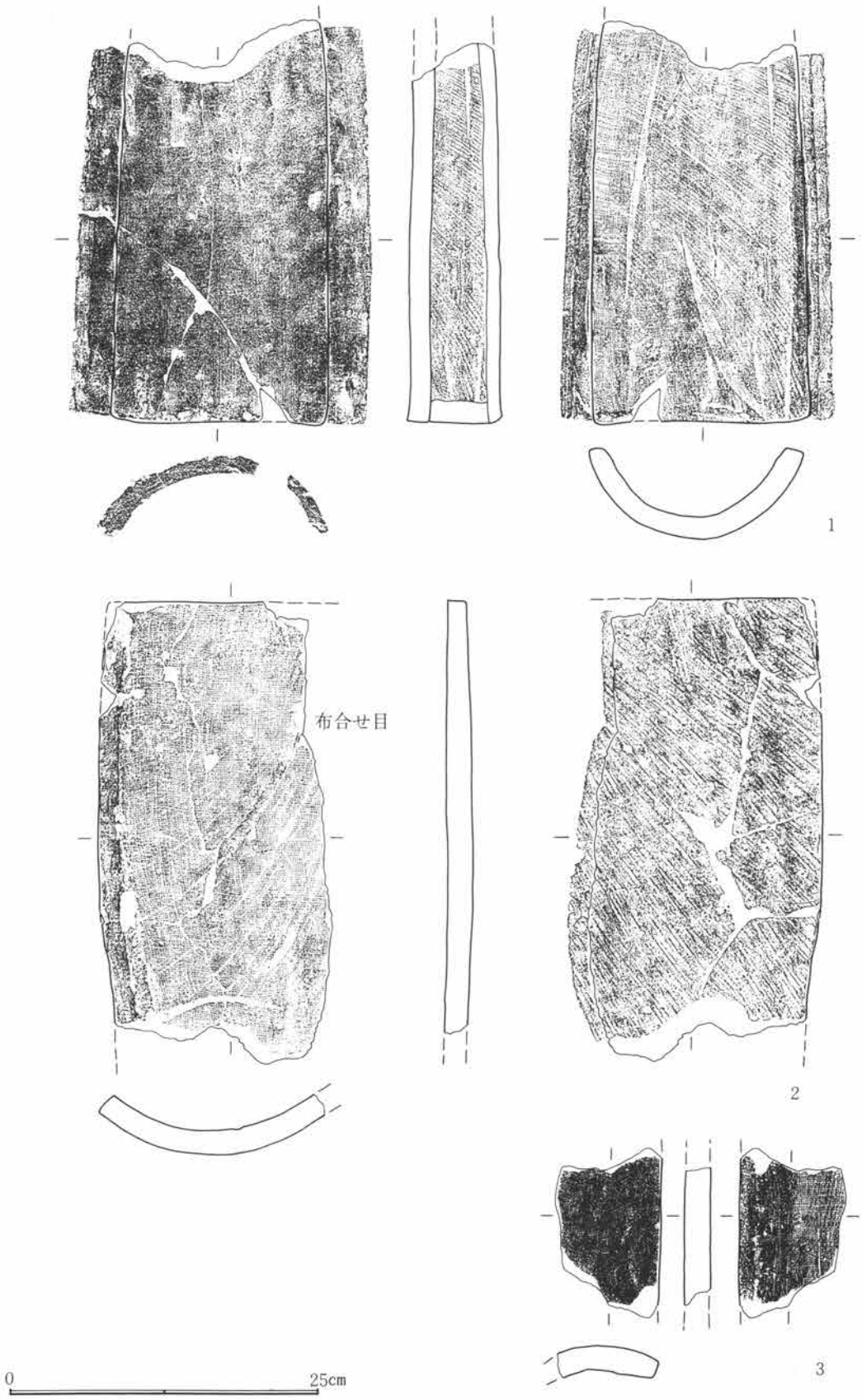
第108図　D区第40号住居跡・出土遺物実測図



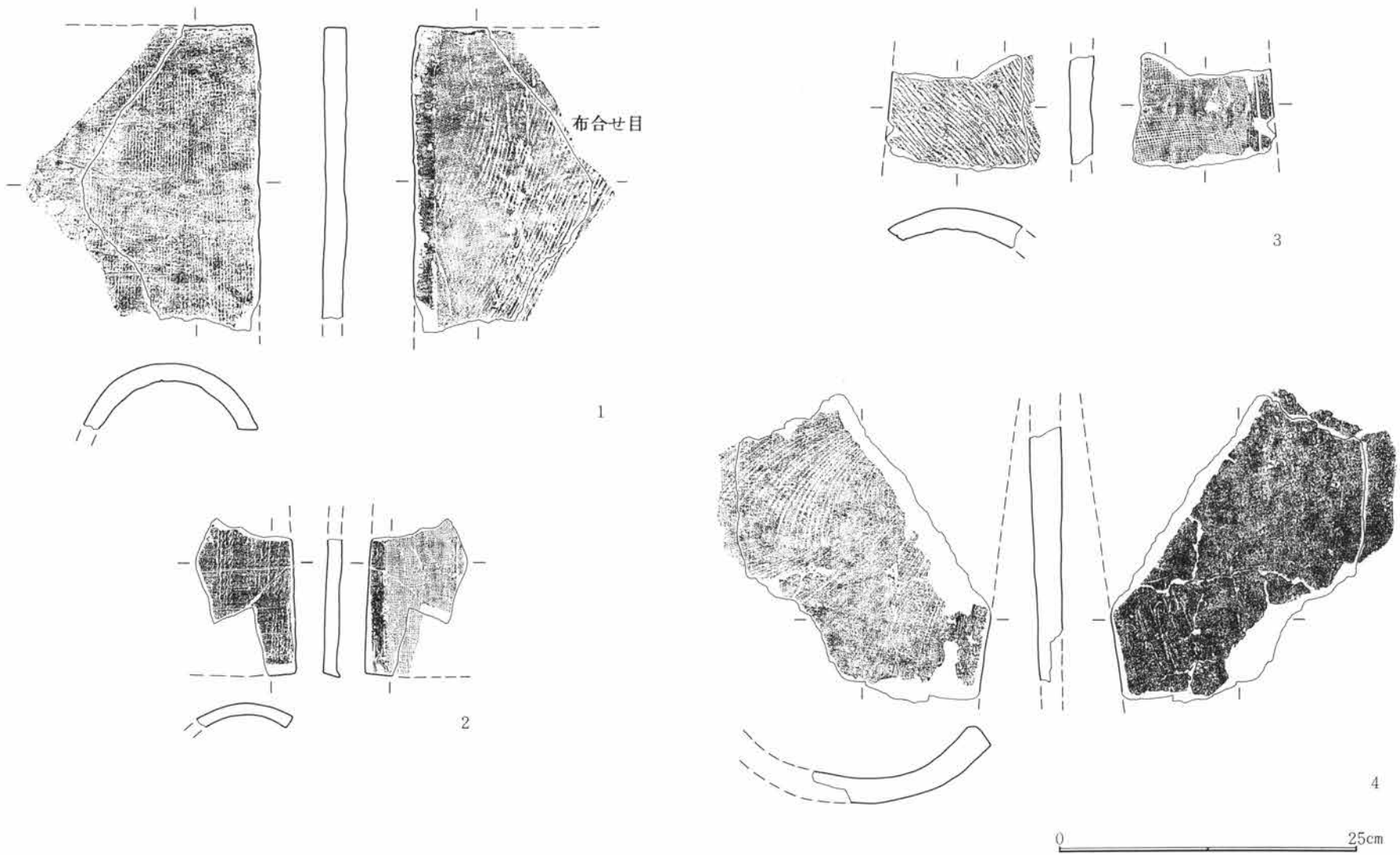
第109図　D区第40号住居跡出土遺物実測図



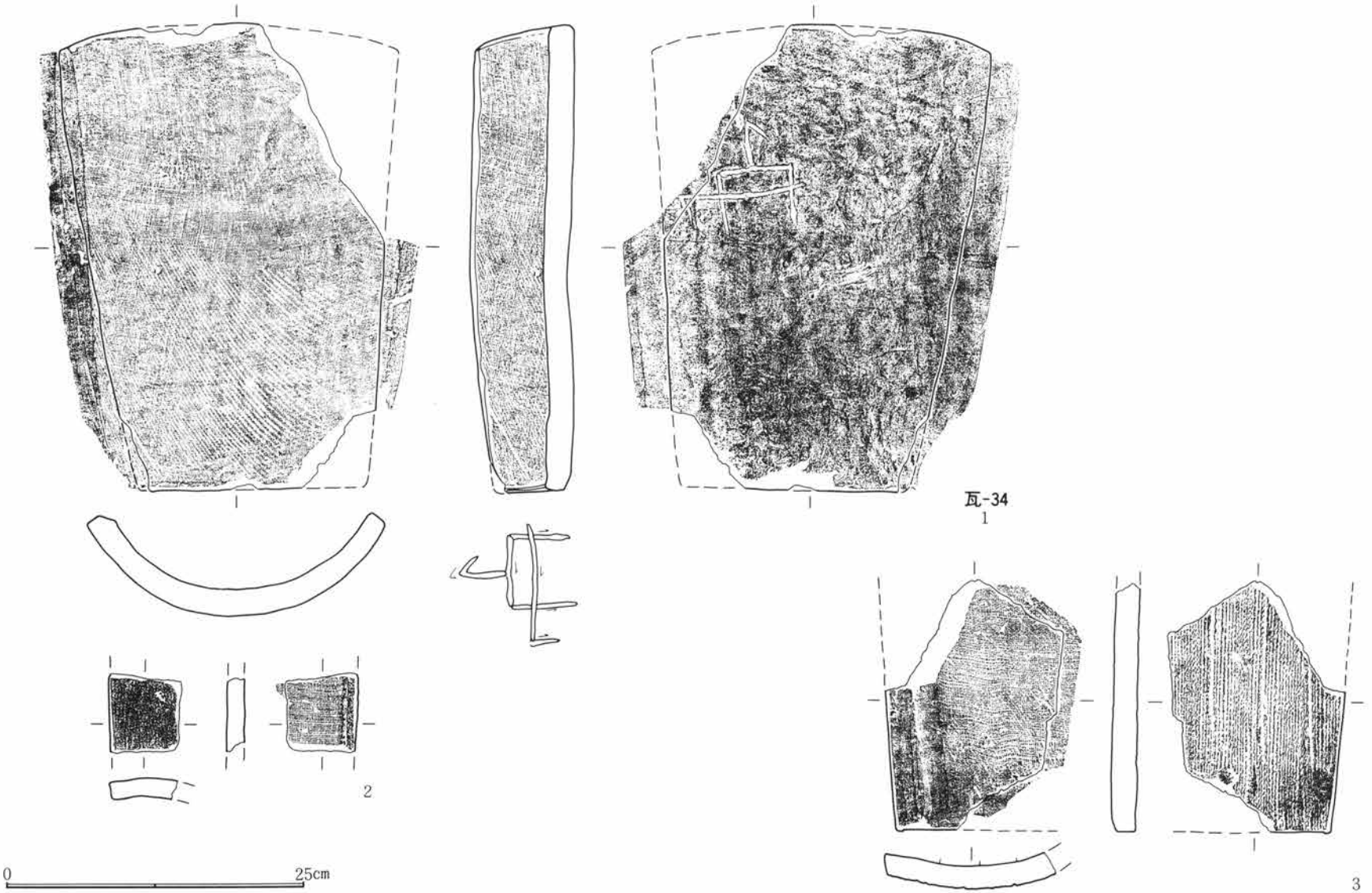
第110図　D区第40号住居跡出土遺物実測図



第111図　Ｄ区第40号住居跡出土遺物実測図

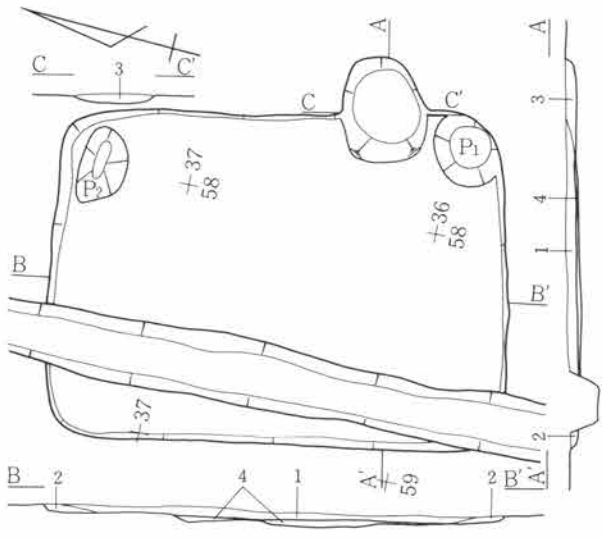


第112図　D区第40号住居跡出土遺物実測図



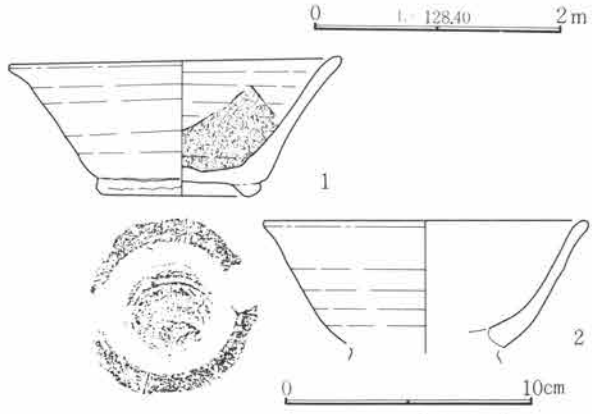
第113図　D区第40号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	D区第41号住居跡	位置	35～37－D－47～49グリッド内				
平面形態	隅丸長方形	規模	3.13m×3.70m	主軸方位	北－79度－東	残存深度	約10cm程
壁	緩やかに立ち上がる。	**西**	床面	掘り方底面を平坦に掘削し床面を構築する。			
壁溝	未検出。		貯蔵穴	南東隅部で検出。楕円形。長径61cm・深度25cm			
柱穴	未検出。住居屋外周辺を精査したが未確認に終った。						
掘り方	底面を平坦に掘削。北東隅部直下で皿状の掘り込みを検出。						
カマド	位置	東壁南寄り。屋外に約43cm突出する。		主軸方位	北－75度－東		
形状	遺存が不良であり、図示したものは掘り方である。			改築の有無	有。		
規模	全長84cm・屋外長43cm・屋内長41cm						
焚口	扇状を呈するか？		袖	詳細不分明。			
燃焼部	詳細不分明。						
煙道	未検出。		掘り方	図示した状態のもので、楕円形状を呈する。			
遺物出土状況	貯蔵穴より第114図－1が出土。						



層　序

1．粒状C軽石含有。　2．粒状C軽石微量。　3．粒状C軽石微量・粒状炭化物・粒状焼土混入。　4．粒状C軽石若干（硬質気味）。



第114図　D区第41号住居跡・出土遺物実測図

所　見（41号住）　当住居の西側は、耕作に伴う畝の攪乱（近世の所産）が及んでおり、確認面は表土層直下でⅦ層土面であった。この為、住居の残存が非常に悪い。掘り方はほとんど認められなかった。P_2が掘り方に伴うものと考えらる。

住居の時期は、9世紀末～10世紀前半頃と考えられる。　（木津）

所　見（42号住）　当住居も第41号住居跡と同様に遺存が悪い。住居は、梯形状を呈し不均整な形状であり、カマドは住居隅部に比較的偏在し、貯蔵穴も認められない。また、掘り方も認められなかった。出土遺物は非常に少ない。

住居の時期は、住居の形状等勘案して10世紀中頃と考えられる。　（木津）

所　見（43号住）　当住居も第41号住居跡同様に残存が非常に悪く、カマドは近代と考えられる攪乱により失われている。

住居の形状は南北方向に長く、構築基準辺はこの南北に長い西壁が直線走行する点からここに求めた。掘り方は、全体的に土坑状の掘り込みが多く、やや東側に偏在する観がある。この土坑状の掘り込みの中で、P_4は最大規模を有するが、明瞭

遺構名称	D区第42号住居跡	位置	32～34－D－47・48グリッド内				
平面形態	不整方形	規模	3.47m×3.68m	主軸方位	北－96度－東	残存深度	約8cm程
壁	斜位に立ち上がる。	**西**	床面	掘り方底面の掘削が平坦で、これを床面としている。			
壁溝	未検出。		貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋外周辺を精査したが未確認に終った。						
掘り方	底面を平坦に掘削している。						
カマド	位置	東壁南端。屋外に約44cm突出する。		主軸方位	北－104度－東		
形状	遺存不良なため、図示したものは掘り方である。			改築の有無	有。		
規模	全長65cm・屋外長44cm・屋内長21cm						
焚口	扇状を呈するか？		袖	詳細不分明。			
燃焼部	詳細不分明。						
煙道	未検出。		掘り方	鶏卵状を呈する。大半が屋外に突出する。			
遺物出土状況	出土遺物は土器類の細片のみであった。						

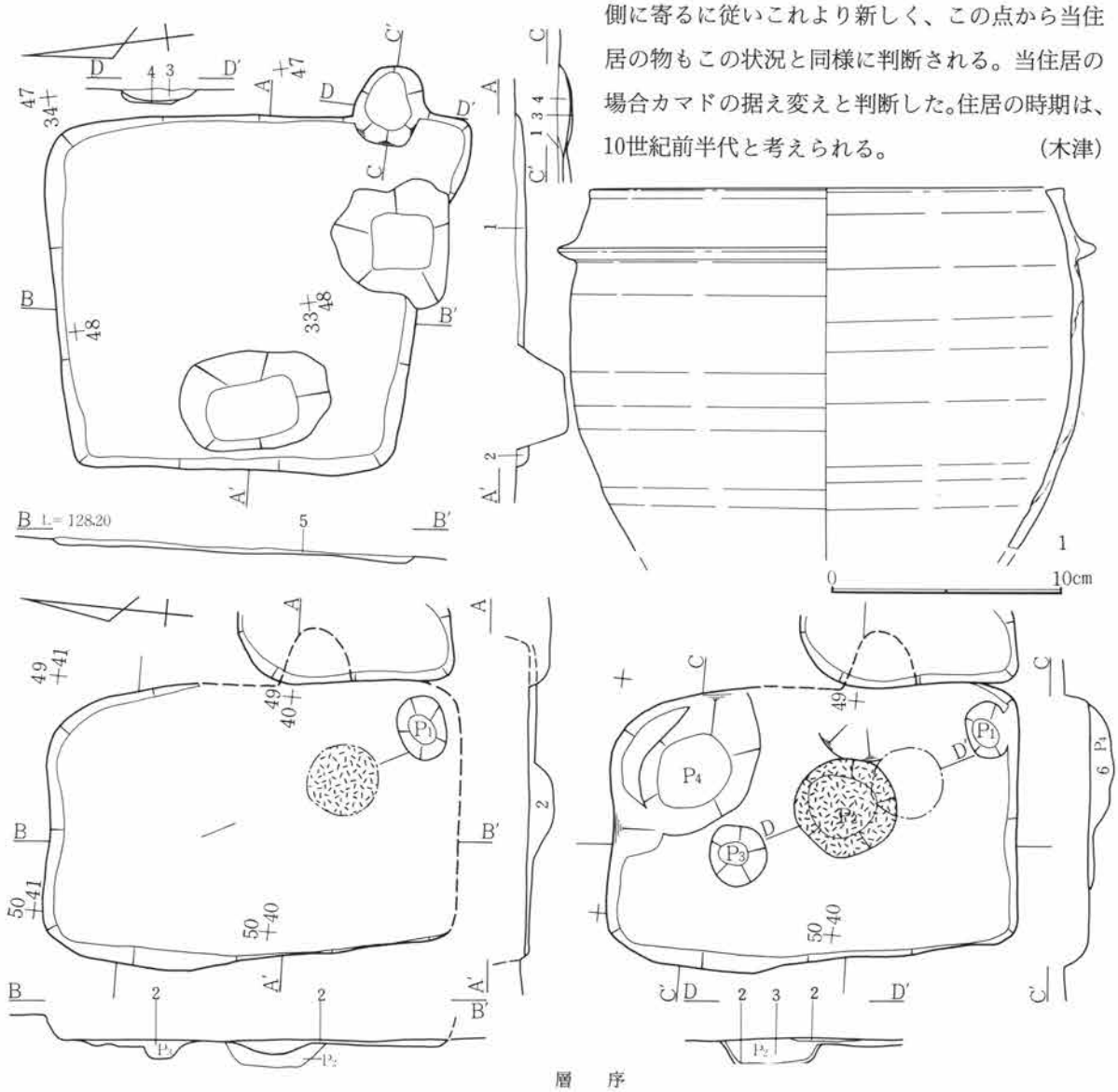
遺構名称	D区第43号住居跡	位置	39～41－D－48～50グリッド内				
平面形態	隅丸長方形	規模	2.95m×3.51m	主軸方位	北－85度－東	残存深度	約20cm程
壁	斜位に立ち上がる。	**西？**	床面	部分的な土坑状の部分を埋設し床面を構築している。			
壁溝	未検出。		貯蔵穴	南東隅部に検出。楕円形。55cm・深度8cm			
柱穴	未検出。住居屋外周辺を精査したが未確認に終った。						
掘り方	底面は平坦で床面としている。土坑状の掘り込みが多い。またP2底面より粘土を検出している。						

遺構名称	D区第44号住居跡	位置	35～37－D－50～52グリッド内				
平面形態	不整方形	規模	4.55m×4.55m	主軸方位	北－91度－東	残存深度	約20cm程
壁	斜位気味に立ち上がる。	**北？**	床面	掘り方底面を埋設し構築。			
壁溝	未検出。		貯蔵穴	南東隅部に検出。不整形。150cm・深度19cm			
柱穴	未検出。住居屋外周辺を精査したが未確認に終った。						
掘り方	土坑状の掘り込みを多く検出したが、遺存が不良のため詳細は不分明。						
カマド	位置	東壁に2基検出。右側が改築後のカマド。		主軸方位	北－83度－東		
形状	舌状を呈すると考えられる。詳細は不分明。			改築の有無	有。		
規模	全長140cm・屋外長66cm・屋内長74cm。						
焚口	平坦である。		袖	改築以前は屋内に長く延びる袖を有する。			
燃焼部	側壁体を瓦で補強し（改築以後）比較的広い空間を備える。						
煙道	立ち上がり部の一部を検出。		掘り方	両者共に楕円形状で皿状に窪む。			
遺物出土状況	改築カマド内より図示した遺物が出土している。						

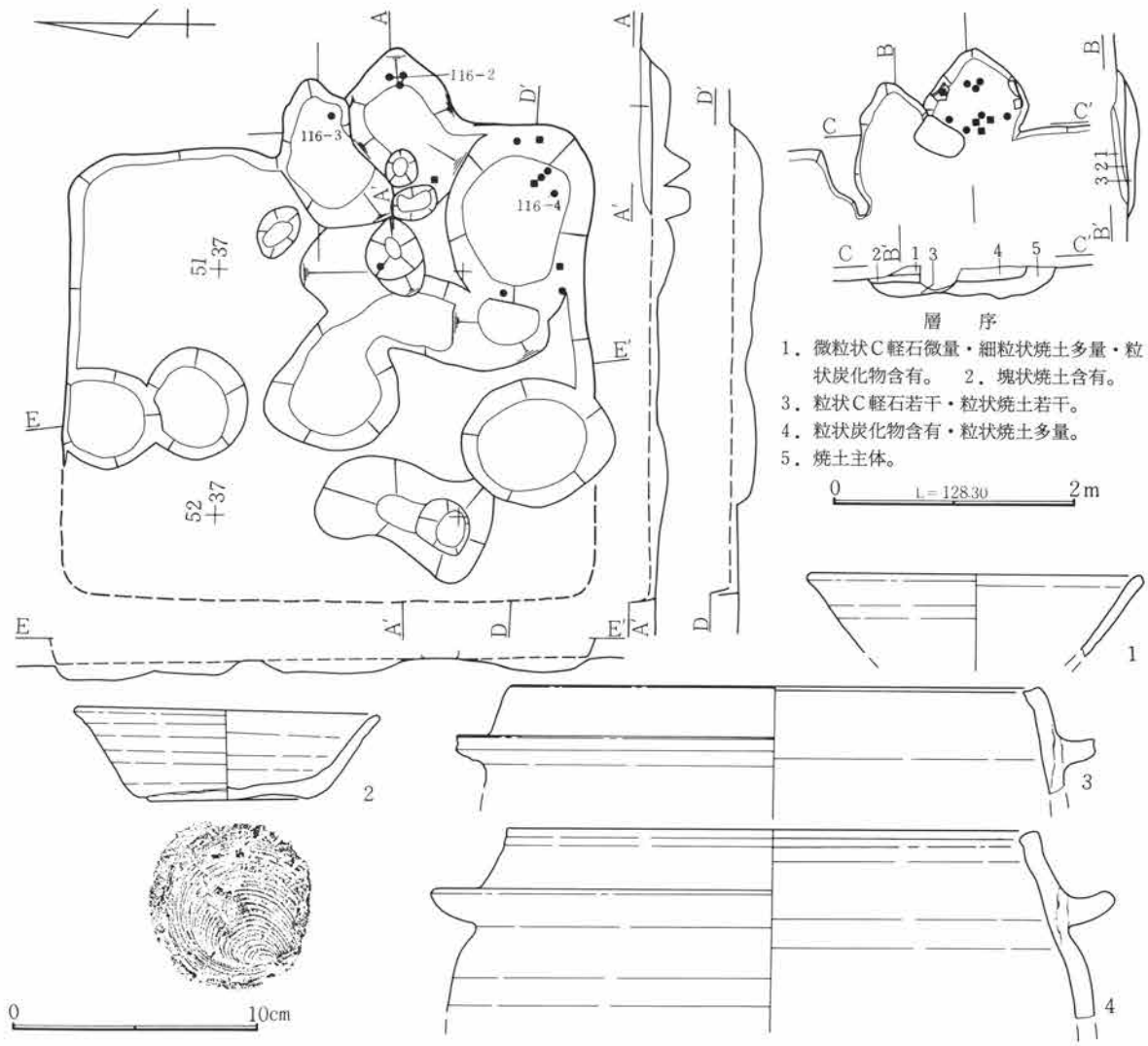
な形状ではない。また、P_2では、底面・壁面・掘り方底面にわたり、青紫灰色を呈する粘質土が厚さ2cm前後で全体に貼られた状態で検出された。この青紫灰色を呈する同質と判断される粘質土が床面上で検出されている。用途等に就いては不明である。住居の時期は10世紀代と考えられる。　（木津）

所　見　当住居跡は、前述の第41号住居跡と同様に遺存が非常に悪く、床面はその殆どが遺存せず、西壁は失われていた。この為、図示した平面図は掘り方の状態のみである。また、この残存状況の悪さの一要因に、昭和20年８月14日午後10時半頃の米国空軍による焼夷弾投下によることが挙げられ、当遺跡でも二ヶ所で確認され、１ケ所はＧ区内で、もう１ケ所は当住居周辺と考えられる。この弾片（先端部）がカマドの攪乱部から出土している。

住居の形状は復原で矩形を呈すると考えられる。カマドは２基検出され、調査時に住居自体が二軒の重複と考えられたが、明確な証左は無くカマドの据え変えと判断し、１軒扱いにした。このカマドは、東壁中央とこれに重複し南側に寄った部分から検出されている。実際の調査では、土層断面を設定した部分では攪乱の存在により明確には看守し得なかった。しかし、当調査区内の住居跡の在り方から、カマドが東壁中央に近い位置に設置するものが９世紀代に認められ、さらに南西隅部に貯蔵穴を具備するのであり、カマドが南側に寄るに従いこれより新しく、この点から当住居の物もこの状況と同様に判断される。当住居の場合カマドの据え変えと判断した。住居の時期は、10世紀前半代と考えられる。　（木津）



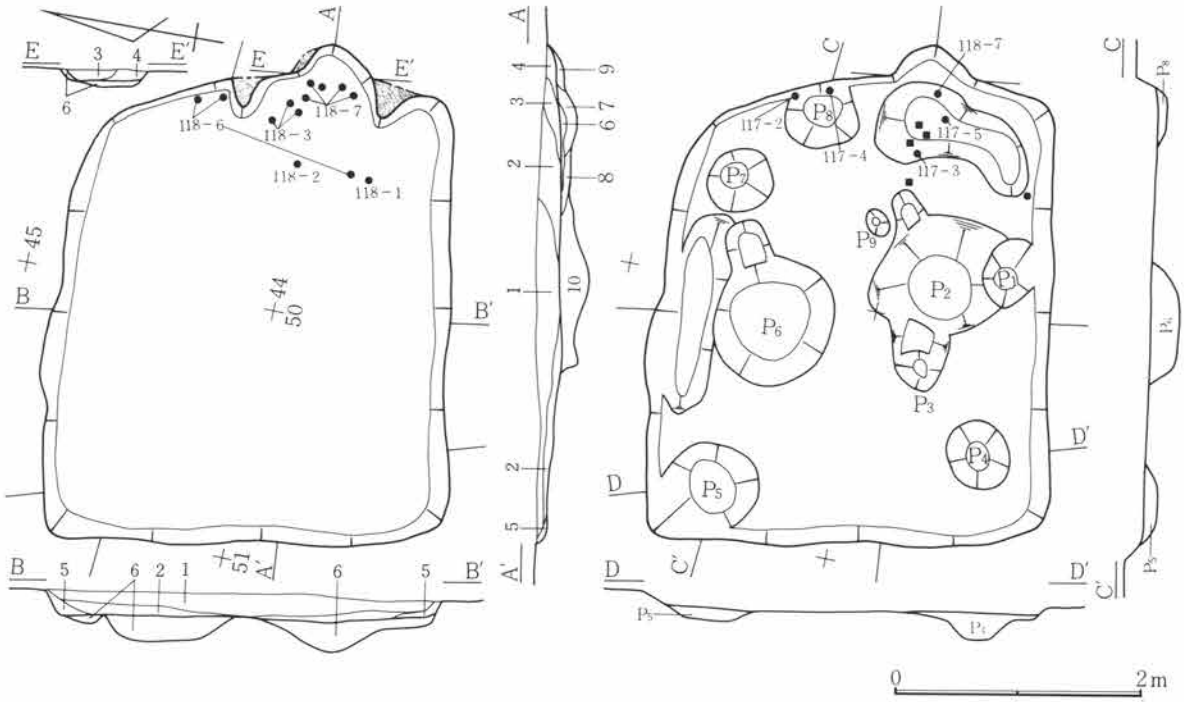
第115図　Ｄ区第42・43号住居跡・出土遺物実測図



第116図　Ｄ区第44号住居跡・出土遺物実測図

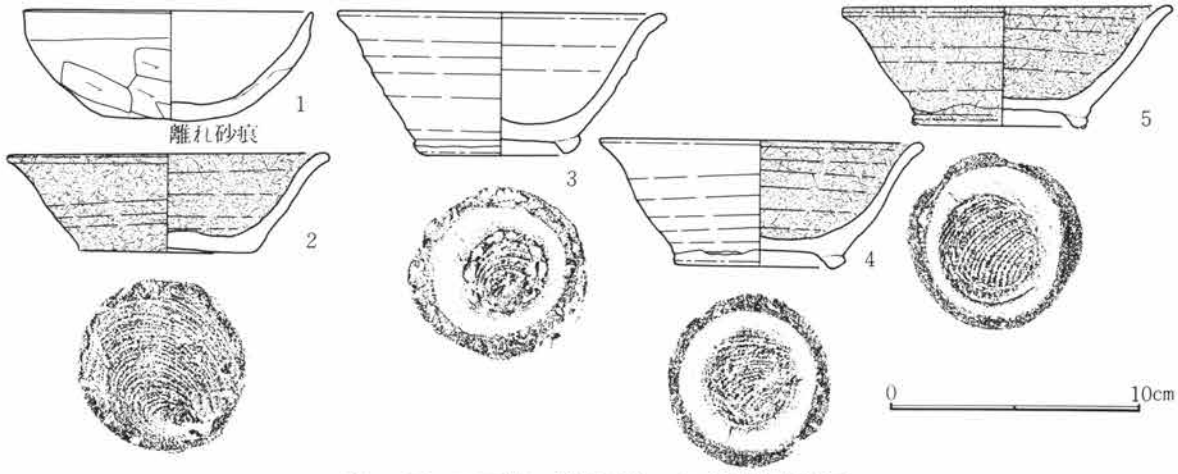
遺構名称	Ｄ区第46号住居跡	位置	43・44－Ｄ－38～41グリッド内				
平面形態	不整長方形	規模	4.00m×3.29m	主軸方位	北－79度－東	残存深度	約18cm程
壁	斜位に立ち上がる。	南	床面	平坦な掘り方底面を使用し土坑状部分は埋設している。			
壁溝	未検出。		貯蔵穴	未検出。			
柱穴	Ｐ１・Ｐ４・Ｐ５・Ｐ７が相当するのか。不分明の域は脱せない。						
掘り方	底面に多くの土坑状の掘り込みが検出されている。						
カマド	位置	東壁南より。屋外に約35cm突出する。		主軸方位	北－88度－東		
形状	屋内に短かい両袖を具備するが、屋外への掘り込みが少ない。			改築の有無	有。		
規模	全長95cm・屋外長35cm・屋内長60cm・袖間幅154cm・燃焼部幅79cm。						
焚口	平坦で非常に広い。		袖	両袖共に付設したもので短かい。			
燃焼部	通有のカマドとは異なり、炉的な状態であった可能性がある。						
煙道	立ち上がりの一部を検出。		掘り方	改築に伴う不整円形で皿状の掘り込みを検出。			
遺物出土状況	カマド内底面に集中している。また、掘り方内からも出土している。						

所　見　当住居跡には重複関係が認められず、周辺には土坑が多数存在するだけである。住居形態は北東隅部分がやや内側に入り込んでいるために、不整の長方形を呈している。床面は大部分が地山の掘り込み面をそのまま堅く締まらせて作り出している。掘り方には大小の円形や楕円形を呈するピットが多数検出されている。その中で柱穴に関するピットは明確には検出されていないが、おそらくは直径50～70cm程のほぼ円形のP_1・P_4・P_5・P_7がそれに該当すると考えられる。カマドは東壁の南寄りに位置し、両袖は作り付けで明らかに一度は改築が行われている。遺物はカマド内底面を中心に、その掘り方覆土内を含めて多数検出している。出土遺物は底部糸切りの土器を主体としており、墨書土器も1点認められる。住居跡の廃棄時期は10世紀前半から10世紀後半にかけてと考えられる。（麻生）

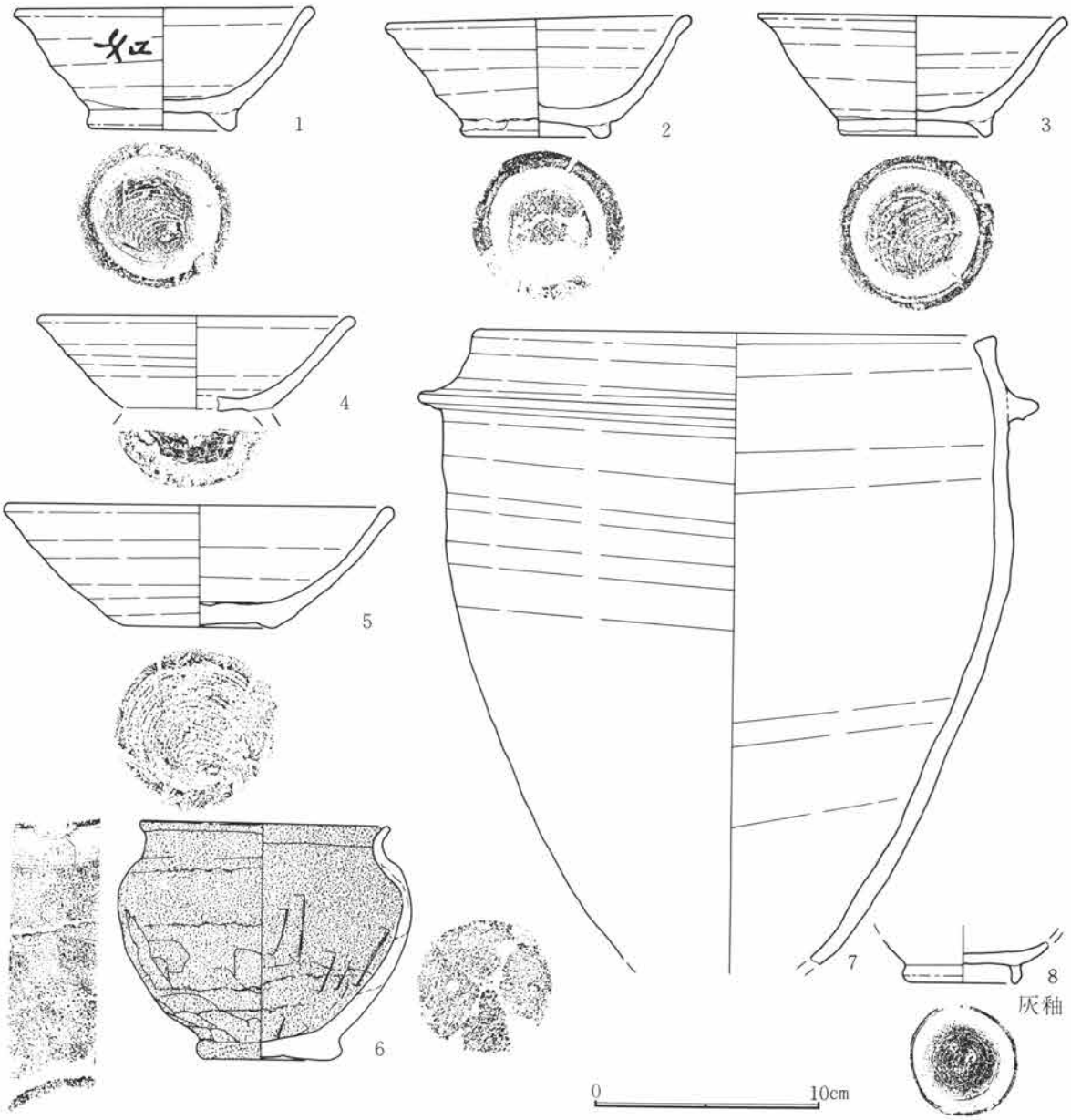


層　序

1．粒状C軽石多量。　2．粒状C軽石少量・粒状Ⅶ層土多量。　3．細粒状C軽石若干・粒状炭化物・粒状焼土若干。
4．細粒状C軽石微量・粒状炭化物・粒状焼土多量混入。　5．微粒状C軽石微量。　6．細粒状C軽石含有。　7．細粒状焼土若干。
8．粒状炭化物多量・粒状焼土含有。　9．粒状炭化物・粒状焼土含有・灰混入。　10．掘り方土（粒状C軽石混入・粗粒状Ⅶ層土含有）。



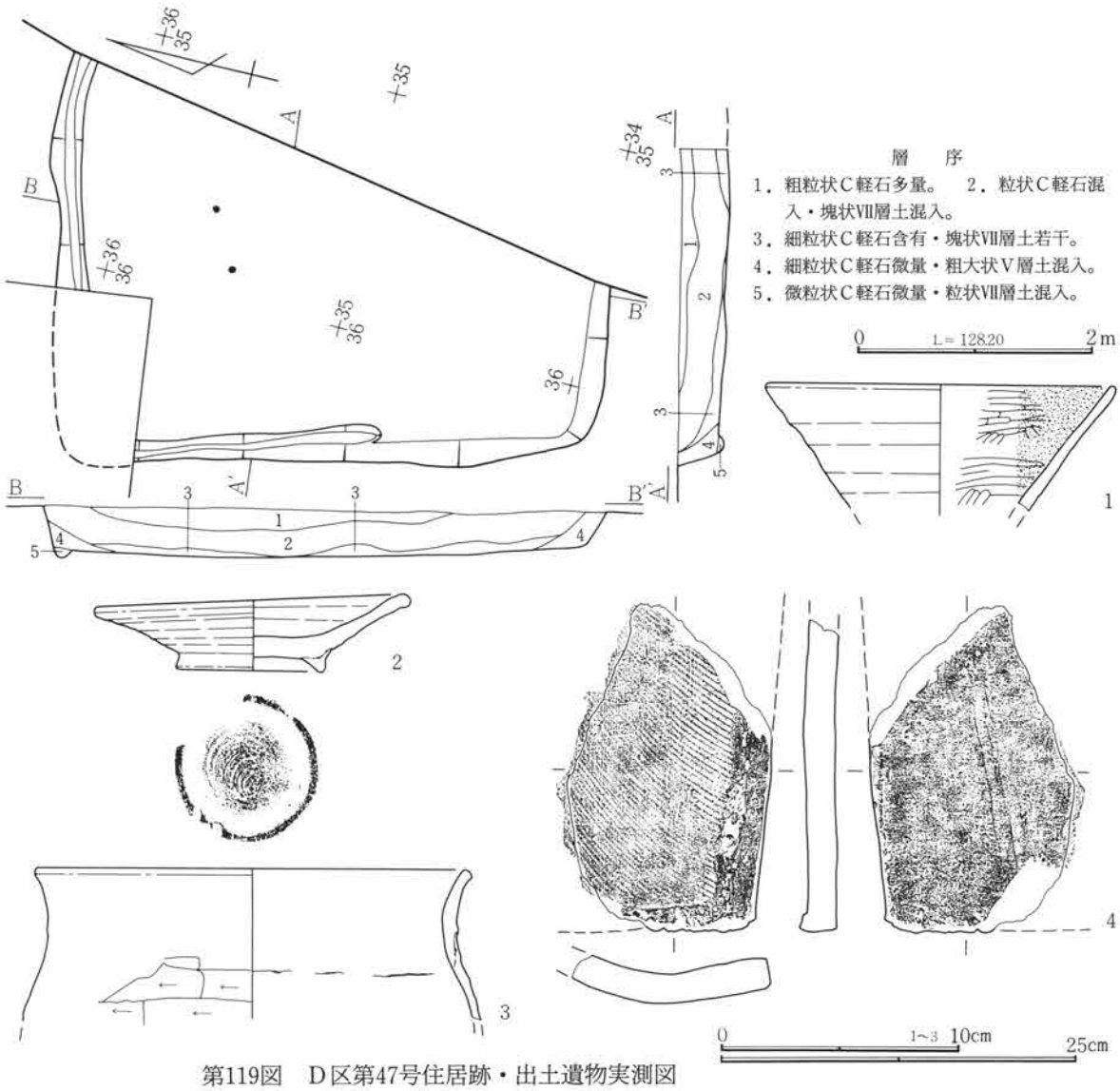
第117図　D区第46号住居跡・出土遺物実測図



第118図　Ｄ区第46号住居跡出土遺物実測図

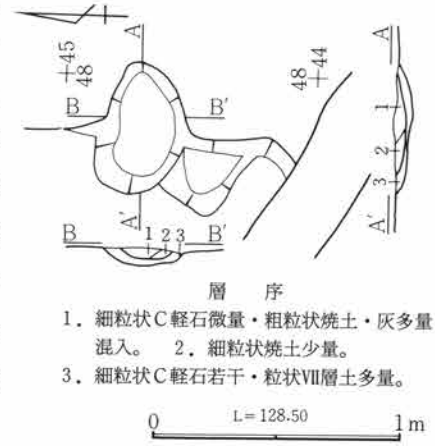
遺構名称	Ｄ区第47号住居跡	位置	33～36－Ｄ－35・36グリッド内				
平面形態	隅丸長方形	規模	(3.58)m×4.72m	主軸方位	北－74度－東	残存深度	約40cm程
壁	斜位に立ち上がる。	西	床面	平坦な掘り方底面を床面として使用。			
壁溝	北・西両壁下で検出。幅17～21cm		貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋外を精査したが未確認に終った。						
掘り方	底面は平坦であり、床面としている。北・西両壁下の壁溝は、掘り方の一部と思われる。						

所　見　当住居跡は調査区域内の東側際に位置するために、その東半分が調査区域外に延びており、住居跡全体の調査ができなかった。おそらくカマドもこの未調査部分の東壁に位置していると考えられる。また、北壁の北西隅部分が昭和55年度に実施された試掘調査時のテストピットによって壊されている。住居跡の廃棄時期は９世紀後半から10世紀初頭と考えられる。（麻生）



第119図　D区第47号住居跡・出土遺物実測図

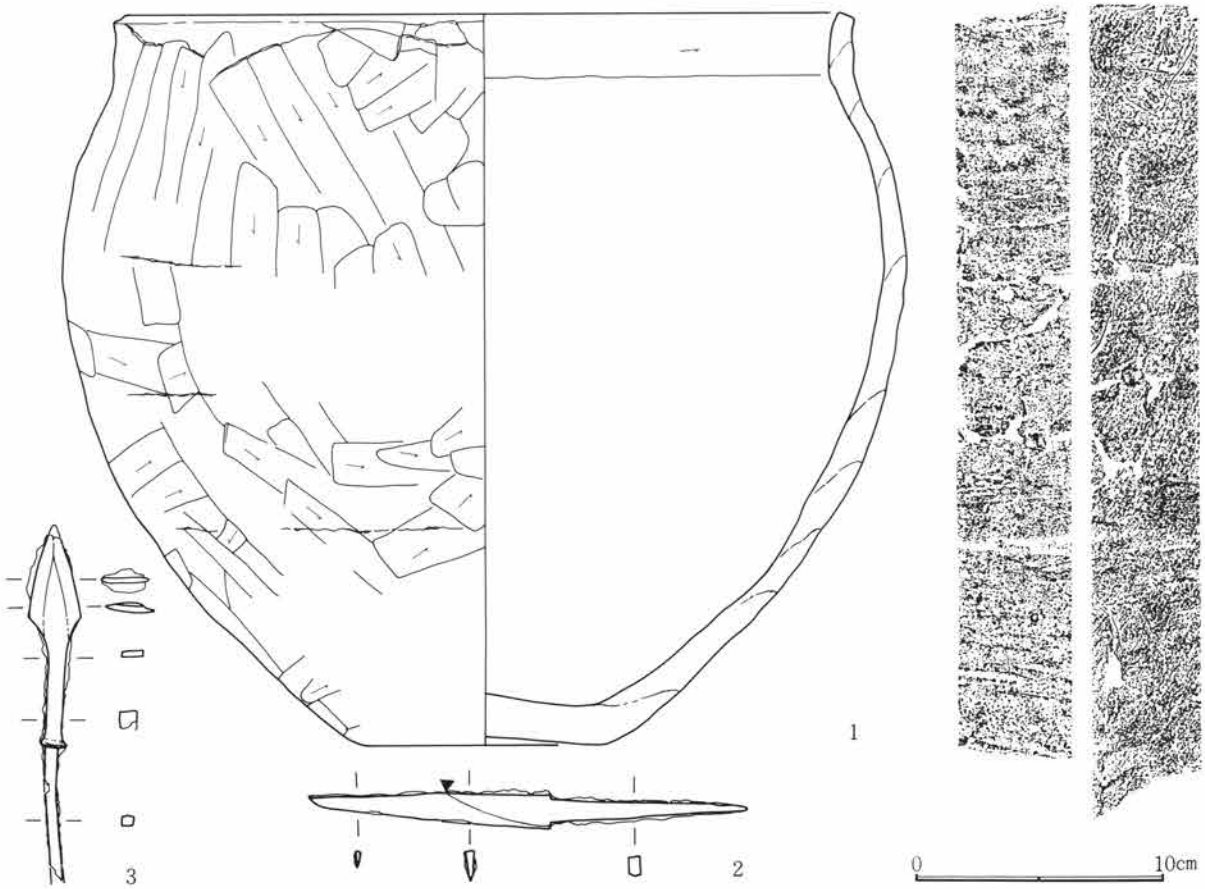
所　見　当住居跡に関しては、遺構確認時にはすでにカマド周辺のみが残存するという状態であったために、住居の形態が残念ながらまったく不明である。僅かに残存する住居跡の南東隅部分の様子から、カマドは東壁の中央から南寄りの部分に位置するが、焚口及び燃焼部はほとんど失われており、灰・焼土が僅かに残っている程度であり、すでに大部分が掘り方の状態である。カマド右側に右袖の痕跡と思われる高まりが存在する事から、その存在が想定される。掘り方の形状は舌状を呈し、奥壁は緩やかに上がっている。全長52cm、屋外長30cm、屋内長22cm、袖間幅50cm、燃焼部34cmを測るが、その遺存状態は極めて良くない。出土遺物もほとんど認められず、そのために住居跡の存続年代に関しても不明である。ただ、周辺の住居跡と比較してみると、カマドの位置からみて41号住居跡や44号住居跡に類似している事から、おそらく10世紀頃と考えてよいと思われる。



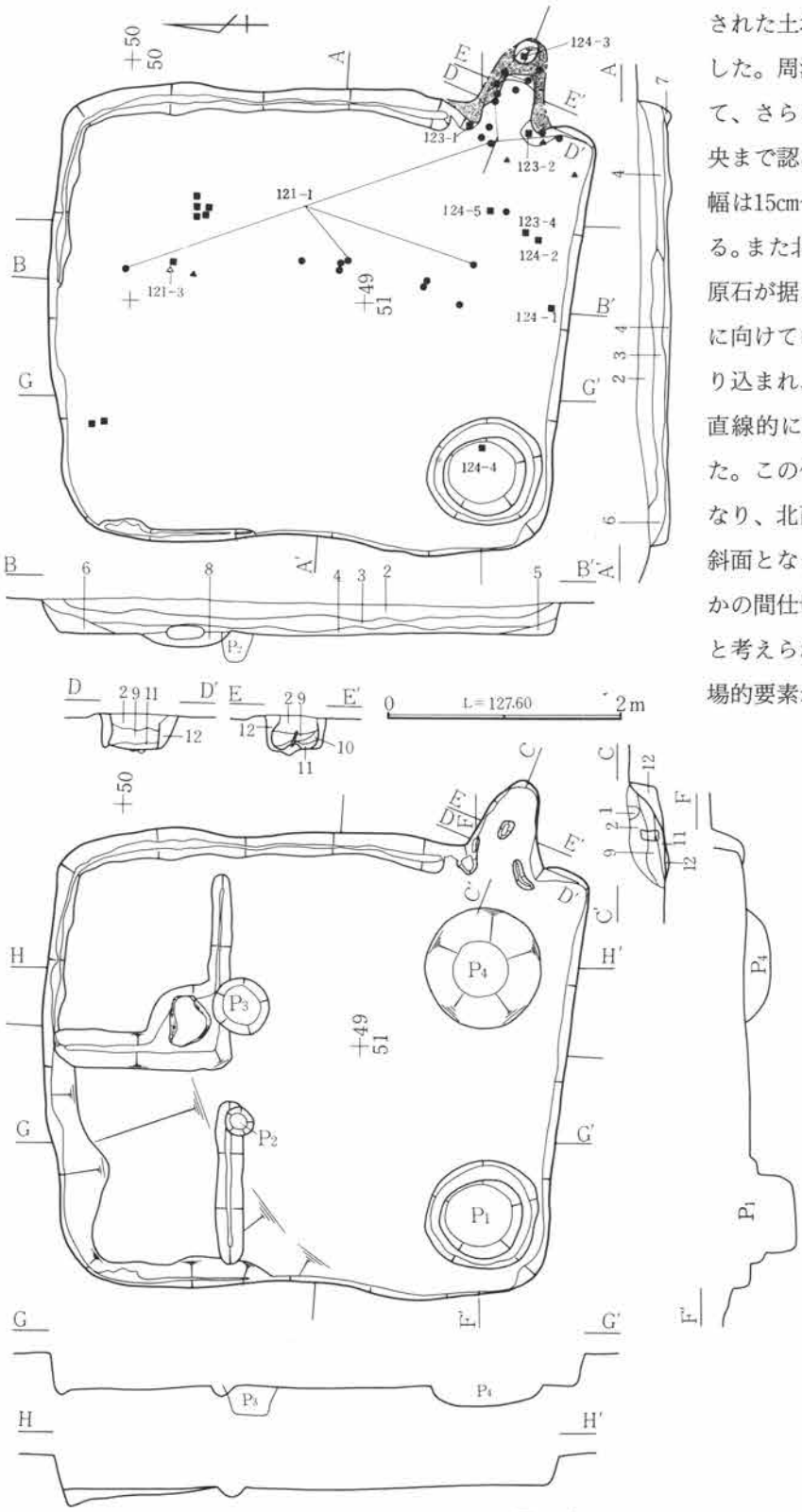
（麻生）　第120図　D区第48号住居跡実測図

遺構名称	Ｃ区第１号住居跡	位置	48～50－Ｃ－49～51グリッド内				
平面形態	長方形(矩形)	規模	4.39m×4.59m	主軸方位	北－93度－東	残存深度	約28cm程
壁	斜位気味に立ち上がる。	**南**	床面	平坦であるが、北西隅部周辺は貼床。			
壁溝	西・北・東壁下で検出。幅10～27cm		貯蔵穴	南西隅部で検出。円形。径96cm・深度42cm			
柱穴	Ｐ２・Ｐ３が相当するのか？住居屋外周辺を精査したが未確認に終った。						
掘り方	北側で間仕切り状の溝状施設を検出し、北西隅部周辺で浅く認められる。P4は貼床されている。						
カマド	位置	東壁で南西隅部寄り。屋外に68cm突出する。			主軸方位	北－110度－東	
形状	舌状を呈する。瘤状の両袖を具備する。				改築の有無	無？	
規模	全長95cm・屋外長68cm・屋内長27cm・袖間幅88cm・燃焼部幅30cm						
焚口	扇状を呈し、浅く皿状に窪む。		袖	瓦で補強された瘤状の両袖を検出。			
燃焼部	奥壁寄りの部分に中心が考えられる。瓦片を使用する支脚が検出されている。						
煙道	奥壁から立ち上がる。		掘り方	舌状を呈し、奥壁は垂直に立ち上がる。			
遺物出土状況	カマド周辺にやや集中する。他のものも含め、３層中の出土が多い。						

所　見　本住居跡はＣ区第２号住居跡の南半部を切って重複する。床面はローム層中に設置し、住居掘り込みの時点にて二次的な貼り床の構築をせず、わずかな凹地を埋め戻しているにすぎない。床面全体はやや荒れており、壁の周辺において顕著であったが、中央からカマド前面にかけては平坦によく踏み固められていた。またカマドの周囲では、焚口前面から南壁にかけて一部貼り床が認められ、掘り方調査の段階で検出



第121図　Ｃ区第１号住居跡出土遺物実測図



された土坑状の落ち込み（P_4）が存在した。周溝は東壁から北壁中央にかけて、さらに北西コーナー部から西壁中央まで認められ、全周はしていない。幅は15cm～18cmで、深さ６cm内外を測る。また北壁から約1.2m程に偏平な河原石が据えられ、ここより東壁と北壁に向けてほぼ直角に延びる浅い溝が掘り込まれ、さらにP_2から西壁に向けて直線的に延びる同様の溝が検出された。この付近は床面がやや荒れ気味になり、北西コーナー部にかけて緩い傾斜面となっている。溝の性格上、何らかの間仕切りか、区画を意図する施設と考えられ、河原石との関係から作業場的要素が示唆できる。P_1は貯蔵穴と思われ、床面から２段に掘り込まれている。内部から角礫が１個出土している。

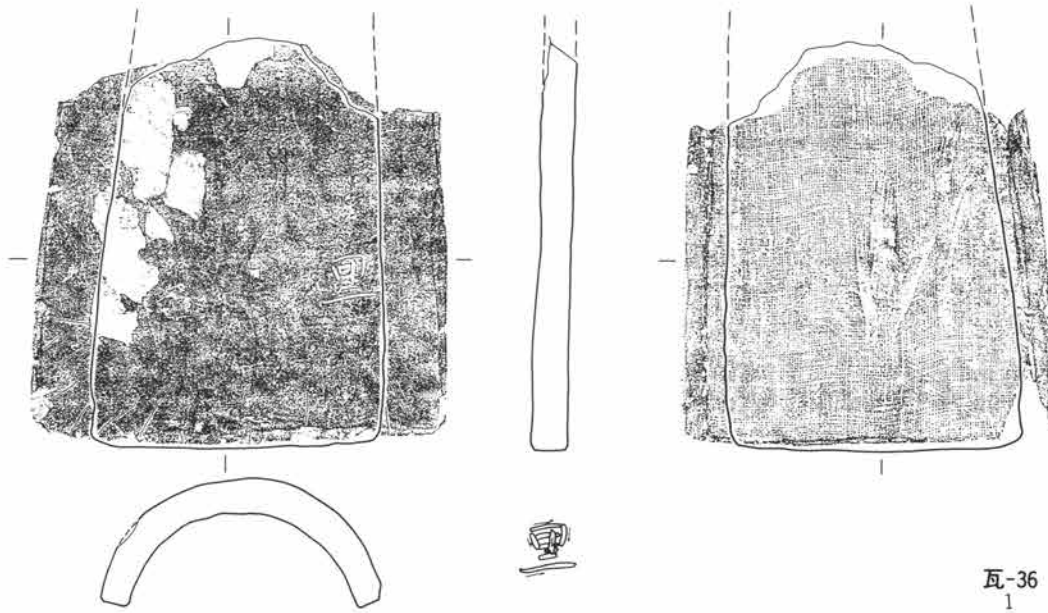
カマドは東壁南寄りに構築しており、天井部分が一部残存していた。燃焼部は床面から連続しており、焚口付近の凹地は認められない。袖は造り出しで、焚口の左右には補強のため瓦片を縦に押えていた。遺物は住居東側においてその多くが出土しており、廃棄時期は11世紀後半と思われる。

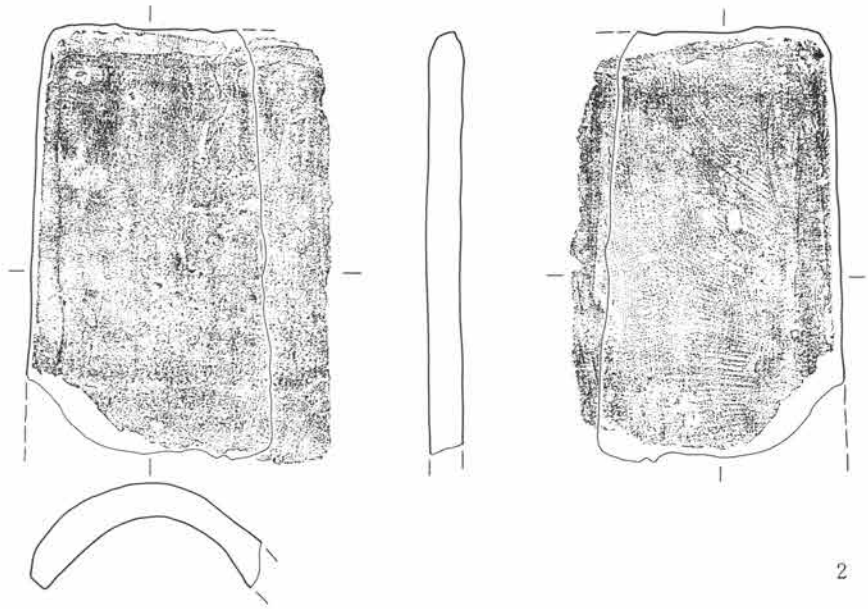
（石北）

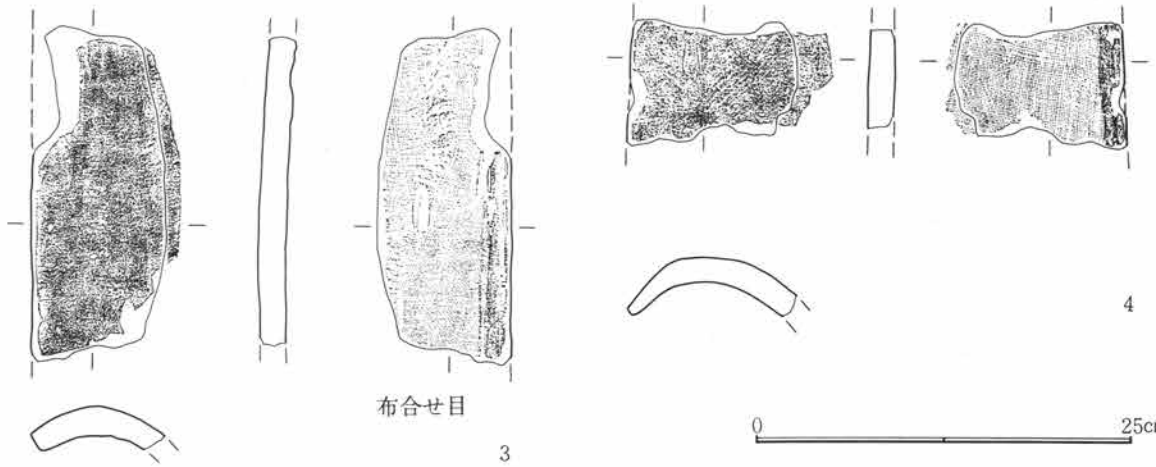
層　序

1．塊状Ⅶ層土。　2．粗粒状Ｃ軽石多量・塊状Ⅶ層土含有。　3．粗粒状Ｃ軽石含有・塊状Ⅶ層土・粒状Ⅶ層土多量混入。
4．粒状Ｃ軽石微量・粒状Ⅶ層土・塊状Ⅶ層土含有。　5．微粒状Ｃ軽石微量。　6．５近質。　7．微粒状Ｃ軽石微量・粒状Ⅶ層土含有。
8．粒状Ｃ軽石含有・粒状Ⅶ層土・小塊状Ⅶ層土含有（硬質気味）。　9．粗粒状Ｃ軽石若干・粒状焼土多量。　10．塊状焼土。
11．粒状焼土・小塊状焼土・粒状炭化物多量含有。　12．塊状焼土・粒状焼土含有。

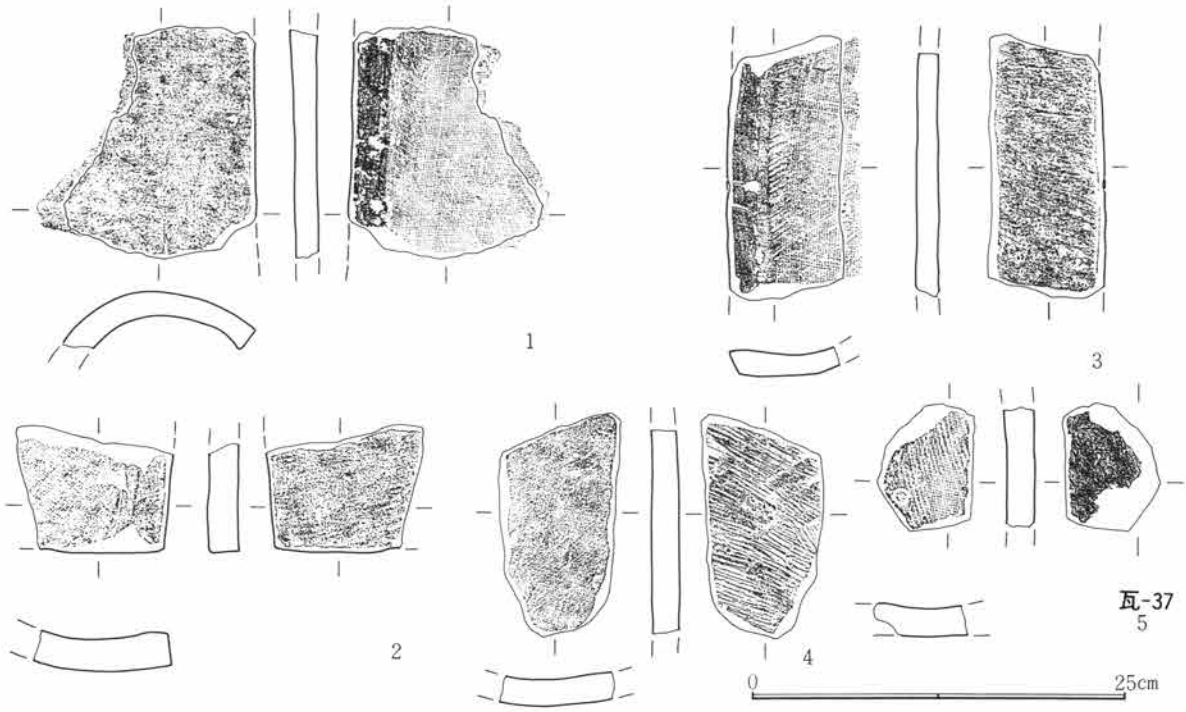
第122図　Ｃ区第１号住居跡実測図







第123図　Ｃ区第１号住居跡出土遺物実測図



第124図　Ｃ区第１号住居跡出土遺物実測図

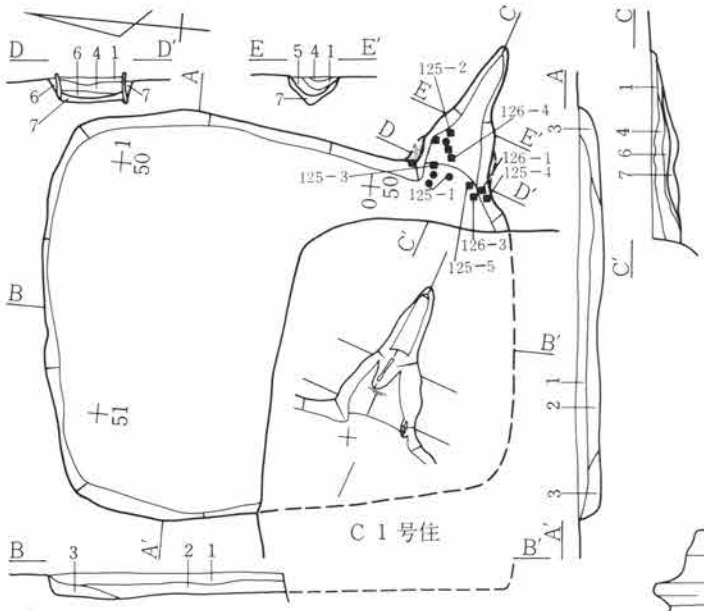
遺構名称	Ｃ区第２号住居跡	位置	49・50－Ｃ－49～51，１－Ｄ－49～51グリッド内				
平面形態	不整長方形	規模	3.77m×3.78m	主軸方位	北－95度－東	残存深度	約20cm程
壁	斜位気味に立ち上がる。	**北？**	床面	平坦。掘り方底面を平坦に掘削。			
壁溝	未検出。		貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋外周辺を精査したが未確認に終った。						
掘り方	底面を平坦に掘削し、床面として使用している。						
カマド	位置	東壁南端。屋外に約110cm突出する。		主軸方位	北－108度－東		
形状	細い舌状を呈する。燃焼部（焚口周辺）は、左右側壁を瓦で補強する。			改築の有無	無？		
規模	全長－cm・屋外長110cm・屋内長０cm・袖間幅78cm・燃焼部幅55cm・煙道幅22cm						
焚口	床より一段上がった屋外部に位置する。	袖	左袖が、やや瘤状気味に認められる。				
燃焼部	機能的には、焚口を共有する状態で若干窪んだ状態である。左右両壁を瓦で補強する。						
煙道	細く溝状に延びる。	掘り方	右壁側の瓦の据方の掘り込みを検出。				
遺物出土状況	カマド内から集中して検出されており、覆土内では極少量しか出土していない。						

所　見　本住居跡はＣ区第１号住居跡により南半部を切られて重複するため、全体の形態は明確にはしがたいが、残存する西・南壁のプランから復原すると、南壁に対し北壁側が広がる不整な隅丸長方形を呈すると思われる。掘り方床面はローム層まで達しておらず、上層のローム漸移層を掘り込み、そのまま床面を整えて生活面としている。そのため、やや軟弱で凹凸が目立った。その他床面上の施設は検出されなかった。

カマドは東壁南寄り、南東コーナー部付近に隣接させて構築していた。平面形態は燃焼部を馬蹄形に掘り込み、さらに幅をせばめて煙道を設定している。焚口には内面を壁体に接した瓦片が縦形に設置され、その状況は袖を意識してかやや奥にその位置を取っている。遺物の出土も瓦の数量が数多く認められ、壁体の補強に使用されていたものと思われる。また底面は床面からそのまま続き、掘り込み等は検出されなかった。

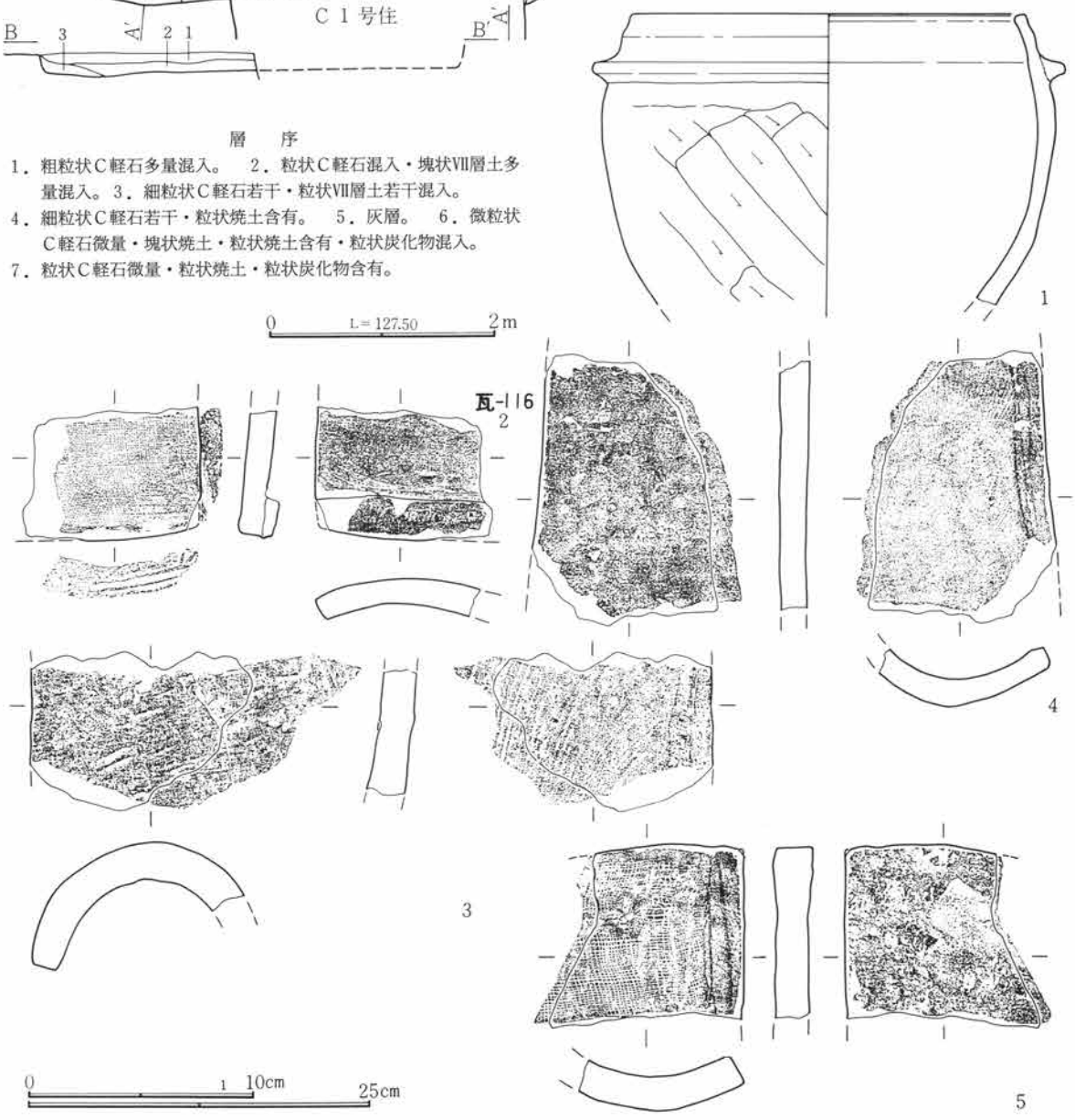
燃焼部は焚口から約60cm程あり、前述のように煙道が細長く連続している。底面は中央が若干掘り込まれ、断面ではＶ字形を呈している。

遺物は出土量が少なく、瓦・羽釜が主体となり、そのほとんどがカマド内に集中しており、瓦は壁体の補強や焚口部分に使用されたものである。羽釜は、１個体分出土し、第125図－２は宇瓦で、同様に焚口より出土した。廃棄時期は11世紀中頃と思われる。　（石北）

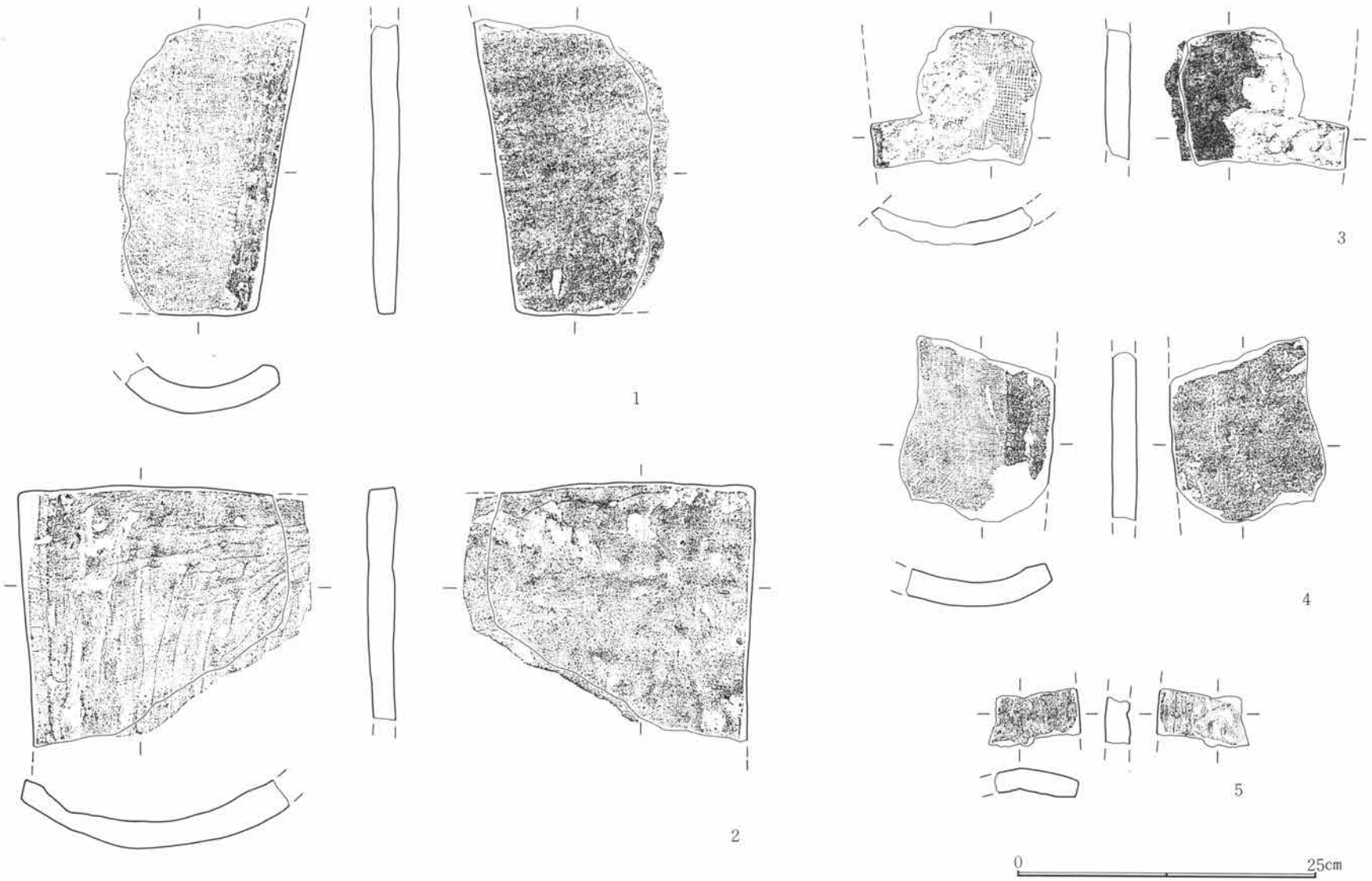


層　序

1．粗粒状Ｃ軽石多量混入。　2．粒状Ｃ軽石混入・塊状Ⅶ層土多量混入。3．細粒状Ｃ軽石若干・粒状Ⅶ層土若干混入。
4．細粒状Ｃ軽石若干・粒状焼土含有。　5．灰層。　6．微粒状Ｃ軽石微量・塊状焼土・粒状焼土含有・粒状炭化物混入。
7．粒状Ｃ軽石微量・粒状焼土・粒状炭化物含有。



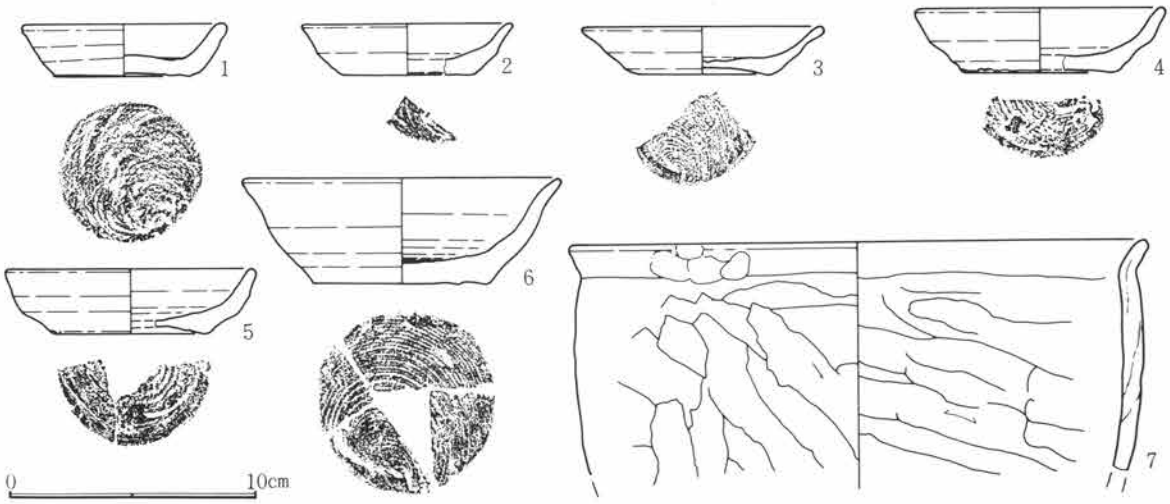
第125図　Ｃ区第２号住居跡・出土遺物実測図



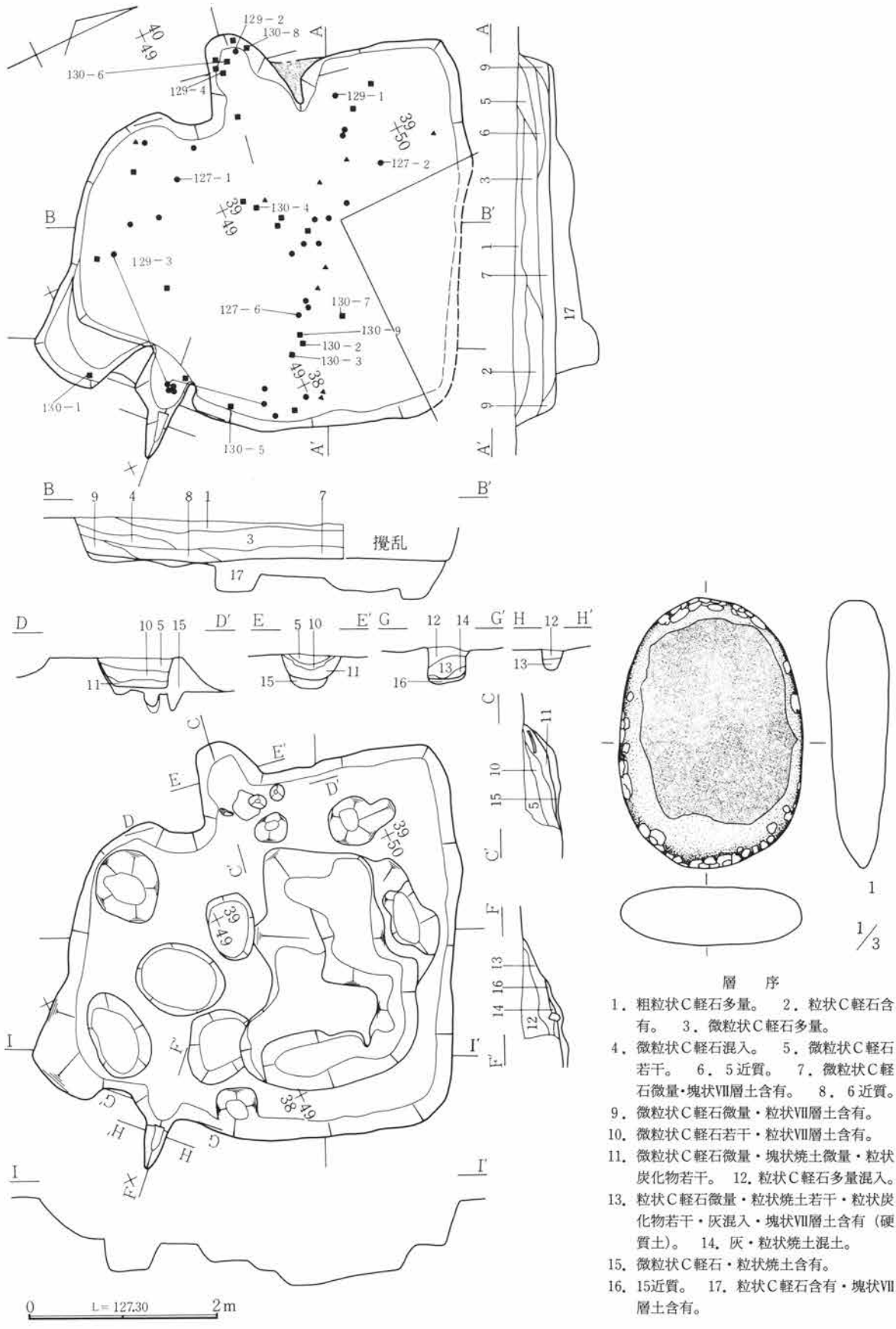
第126図　C区第2号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	Ｃ区第３号住居跡	位置	47～50－Ｃ－37～39グリッド内				
平面形態	不整形	規模	4.38m×4.58m	主軸方位	北－115度－東	残存深度	約35cm程
壁	斜位に立ち上がる。	**北**	床面	造床。掘り方底面の一部を使用し他は貼床により構築。			
壁溝	未検出。		貯蔵穴	南東隅部で検出。楕円形。82cm・深度31cm			
柱穴	未検出。住居屋外周辺を精査したが未確認に終った。						
掘り方	土坑状の掘り込みが多く、凹凸が激しい。						
カマド	位置	東西両壁に各々一基を検出。西壁側が新しい。		主軸方位	北－86度－西		
形状	西壁カマドは舌状を呈する。東側カマドは細い舌状を呈する。			改築の有無	有。		
規模	全長97cm・屋外長53cm・屋内長44cm・袖間幅185cm・燃焼部幅70cm（西壁カマド）						
焚口	広い扇状乃至円形を呈する。	袖	堅固な両袖を備え、左袖は地山の削り出しである。				
燃焼部	奥壁に寄った部分で、煙道の一部（瓦の補強部分）を器設として使用した可能性がある。						
煙道	瓦により壁・天井を構築する。	掘り方	左袖が地山削り出しであり、底面に顕著な被熱面がある。				
遺物出土状況	覆土内で散漫な状態で出土し、３層中にやや多い。						

所　見　本住居跡はカマドの付け替え、およびこれに伴う住居の拡幅が見出された。すなわち、本遺跡における住居跡群において東壁にカマドを構築する例がほとんどであり、希に南壁や南東コーナー部に構築しているものも認められる。よって本住居跡の例は他に類例が見られず、何らかの必要性により東壁から西壁に移したものと考える。さらに平面形態で見ると、全体的に北壁を長辺とする不整な台形状を呈するが、東カマドに伴う西壁は、掘り方床面の観察から西カマド左側袖部と、ほぼ長方形に掘り込んだ凹地の西辺を結ぶ線上に存在したと思われ、当初の形態を復原すると約４ｍ×３ｍ程の長方形を呈していたと推定できる。よって現状での北西コーナー部は拡張後のものであり、北壁も当初のプランを延長したと考えられる。生活面は、掘り方床面を一部そのまま利用しているが、ほとんどは貼り床構造となり、平坦によく踏み固められていた。また床面には多くのピットや土坑が検出された。カマドは前述の通り付け替えられており、東カマドは細長く三角形に掘り込まれ、袖を左右に造り出している。西カマドにおいては、平面形は馬蹄形を呈し、袖も同様に造り出して構築している。遺物はこれらカマド内部および住居内に散在して出土したが、その大半が瓦であった。廃棄時期は、11世紀中葉から後半にかけてと思われる。　（石北）



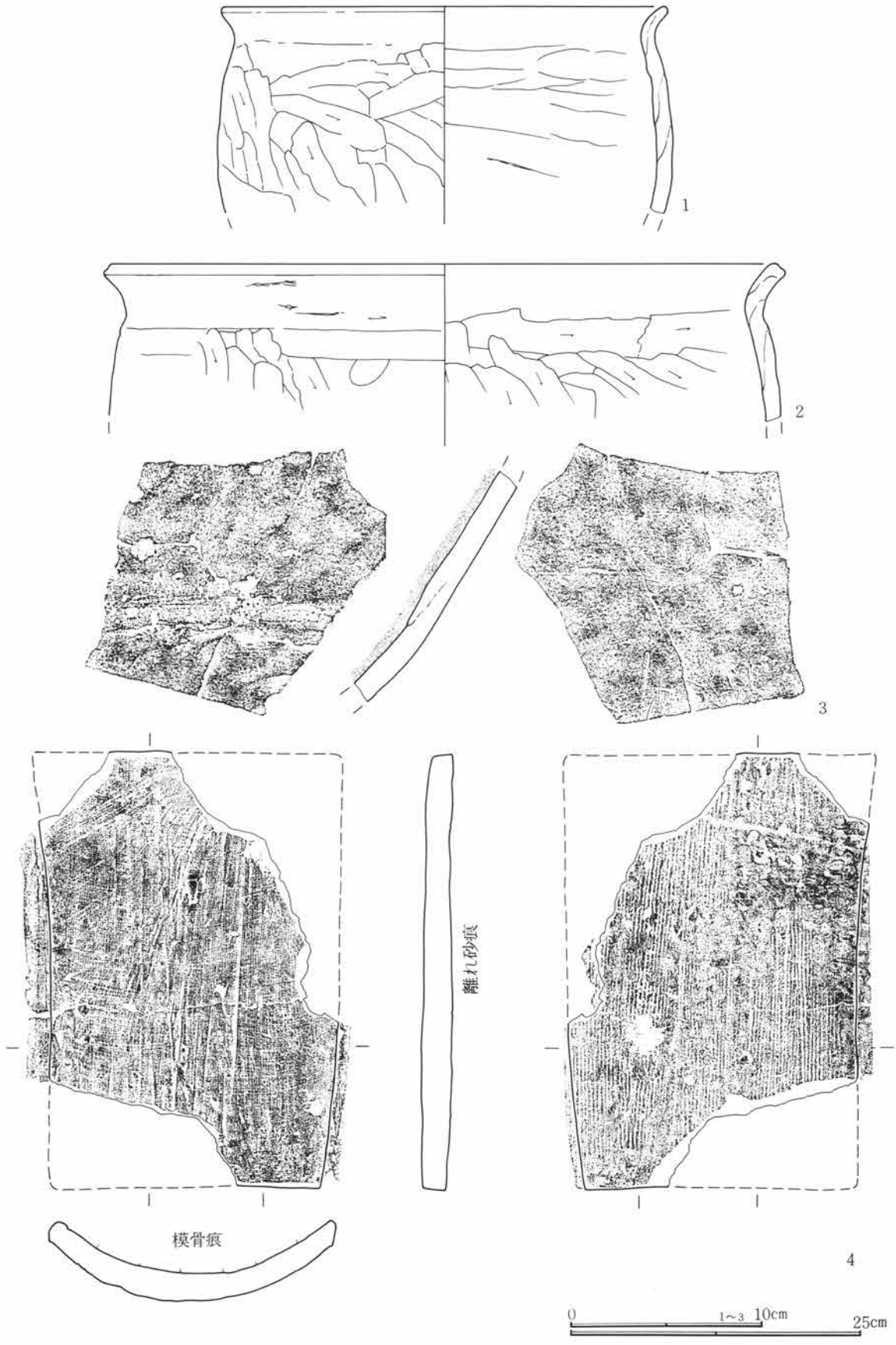
第127図　Ｃ区第３号住居跡出土遺物実測図



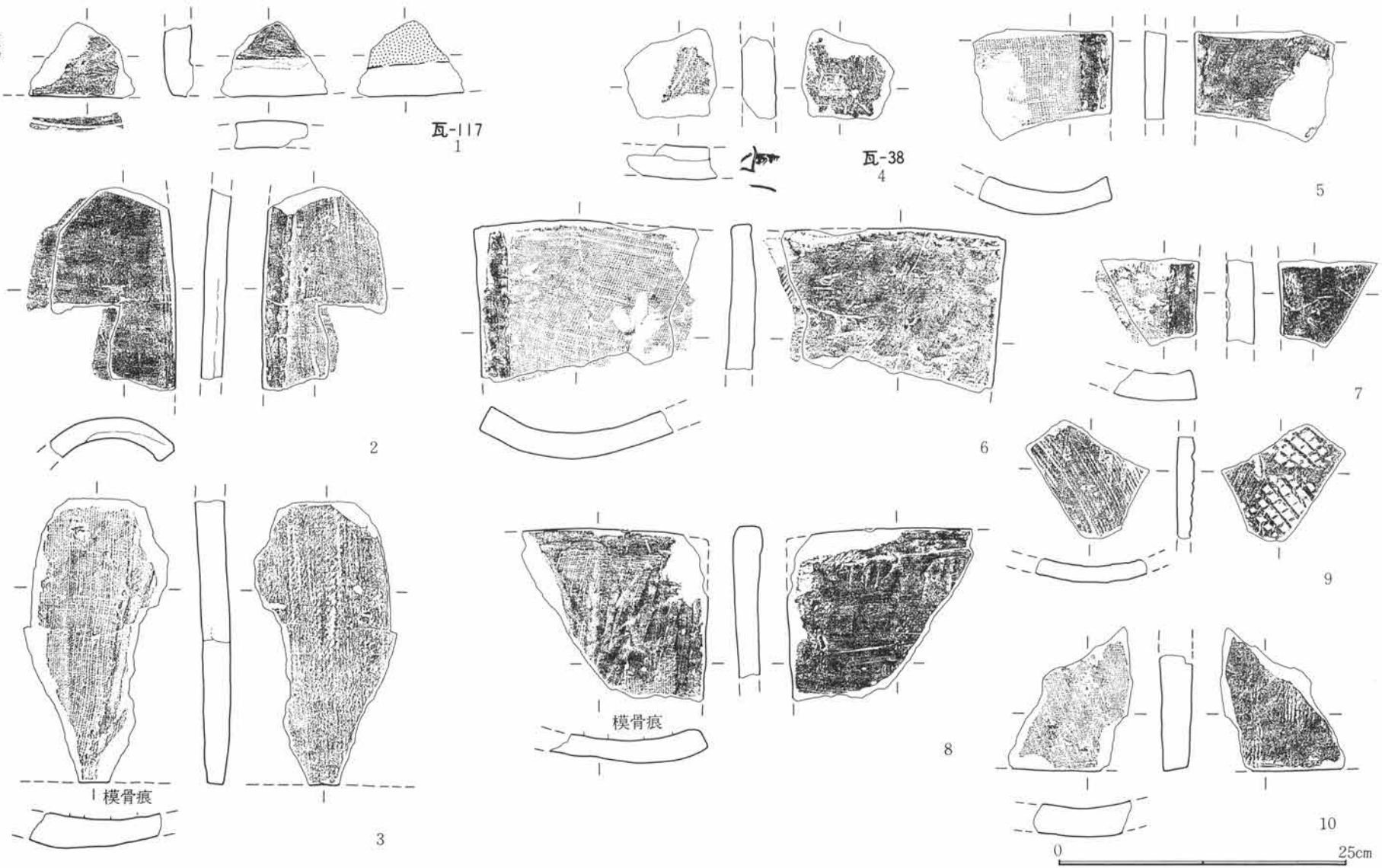
層　序

1．粗粒状Ｃ軽石多量。　2．粒状Ｃ軽石含有。　3．微粒状Ｃ軽石多量。
4．微粒状Ｃ軽石混入。　5．微粒状Ｃ軽石若干。　6．5近質。　7．微粒状Ｃ軽石微量・塊状Ⅶ層土含有。　8．6近質。
9．微粒状Ｃ軽石微量・粒状Ⅶ層土含有。
10．微粒状Ｃ軽石若干・粒状Ⅶ層土含有。
11．微粒状Ｃ軽石微量・塊状焼土微量・粒状炭化物若干。　12．粒状Ｃ軽石多量混入。
13．粒状Ｃ軽石微量・粒状焼土若干・粒状炭化物若干・灰混入・塊状Ⅶ層土含有（硬質土）。　14．灰・粒状焼土混土。
15．微粒状Ｃ軽石・粒状焼土含有。
16．15近質。　17．粒状Ｃ軽石含有・塊状Ⅶ層土含有。

第128図　Ｃ区第３号住居跡実測図



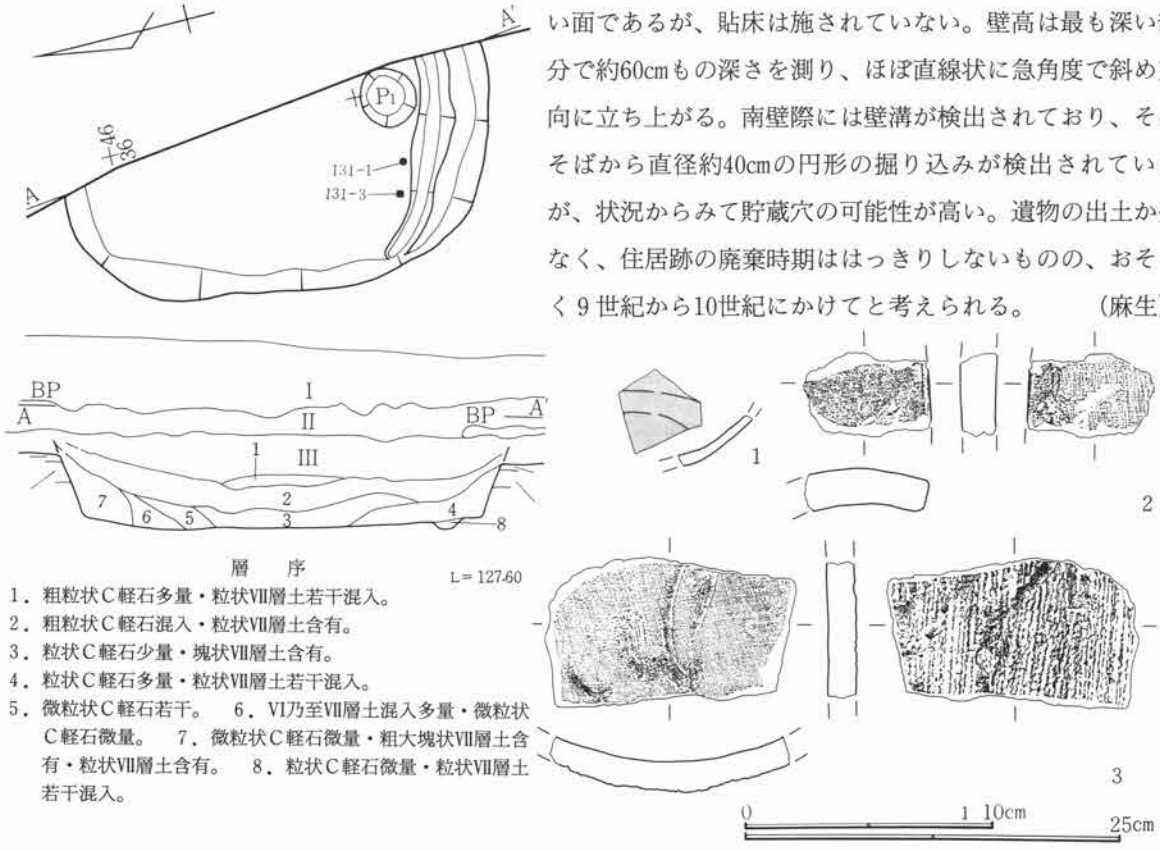
第129図　Ｃ区第３号住居跡出土遺物実測図



第130図　C区第3号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	Ｃ区第４号住居跡	位置	43～45－Ｃ－36グリッド内				
平面形態	隅丸方形	規模	(2.08m)m×3.37m	主軸方位	北－105度－東	残存深度	約58cm程
壁	斜位に立ち上がる。			床面	平坦で掘り方底面を床面として構築。		
壁溝	南壁下に検出。幅15～29cm			貯蔵穴	Ｐ１か？		
柱穴	未検出。住居屋外（調査内で検出した部分）周辺を精査したが未確認に終った。						
掘り方	底面を平坦に掘削し、床面を構築する。壁溝は掘り方の一部と思われる。						

所　見　当住居跡は調査区域の東側際に位置するために、その東半分が調査区域外に延びており、残念ながら住居跡全体の調査は実施できなかった。おそらくカマドもこの未調査部分の東壁の南寄り部分に位置していると考えられる。しかし逆に調査区域ぎりぎりの場所に位置する事から、現在の地表面から土層の観察が実施できる事が利点としてあげられる。その結果として、本遺跡での基本層序との対比を実施する事により、住居跡の構築時期や廃棄時期に関する年代的な資料が得られる可能性も考えられる。そこで、実際の土層を観察してみると、まず現在の地表面で、耕作土でもあるⅠ層（年代的には近・現代に属する）が最も厚い部分で約60cm、Ⅱ層（年代的には中・近世に属する）が約25～30cm、そのⅡ層とⅢ層との境には、降下時期が天仁元年（1108年）と考えられている、浅間山給源の浅間Ｂ軽石（Ａｓ－ＢＰ）が部分的にレンズ状の堆積をしており、次にⅢ層（年代的には古墳時代後期～平安時代に属する）の順序で堆積している。最も注目される壁の掘り込み上面の確認は、覆土の観察からも立ち上がり部分がⅢ層の途中で不明瞭になっており、残念ながら年代的な検証はできなかった。住居形態は不明確であるが、残存する部分からみて隅丸長方形に近いと考えられる。床面はローム層中に設置され、壁際から中央部に向かって緩やかな斜面で移行する。堅い面であるが、貼床は施されていない。壁高は最も深い部分で約60cmもの深さを測り、ほぼ直線状に急角度で斜め方向に立ち上がる。南壁際には壁溝が検出されており、そのそばから直径約40cmの円形の掘り込みが検出されているが、状況からみて貯蔵穴の可能性が高い。遺物の出土か少なく、住居跡の廃棄時期ははっきりしないものの、おそらく９世紀から10世紀にかけてと考えられる。　（麻生）

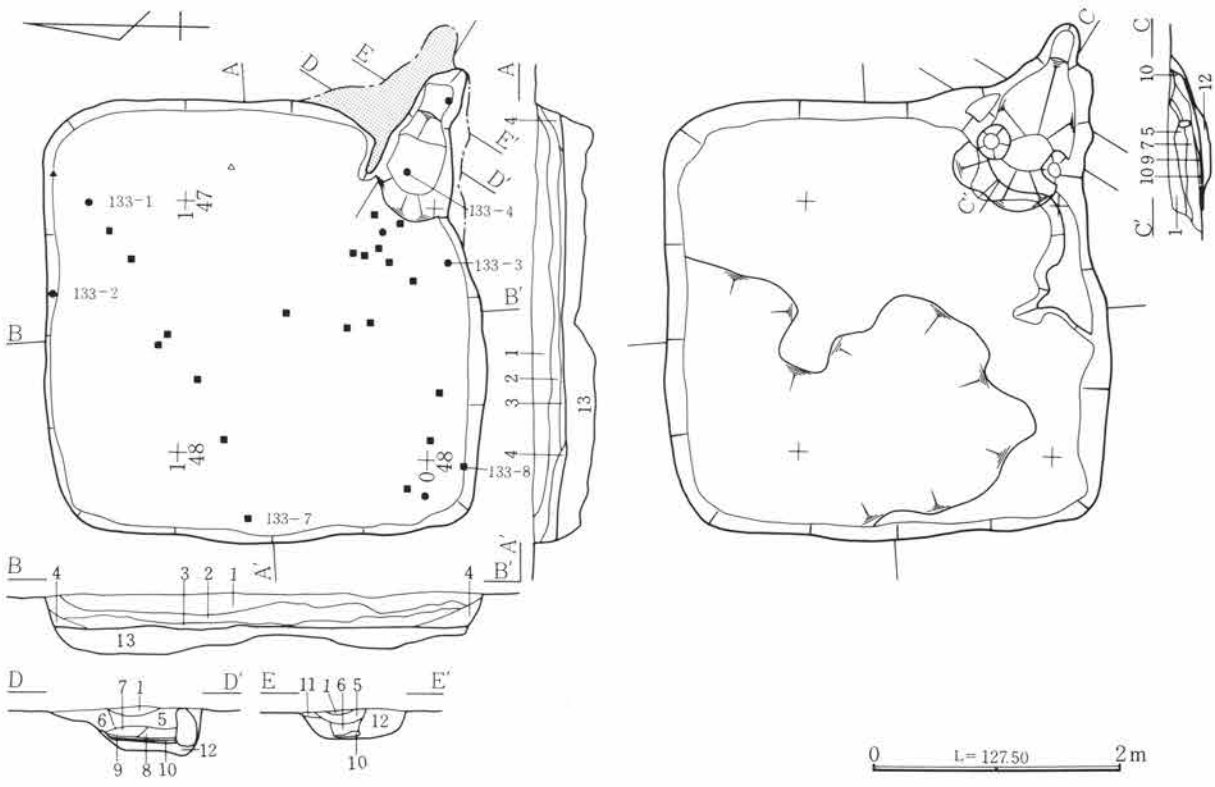


層　序
1．粗粒状Ｃ軽石多量・粒状Ⅶ層土若干混入。
2．粗粒状Ｃ軽石混入・粒状Ⅶ層土含有。
3．粒状Ｃ軽石少量・塊状Ⅶ層土含有。
4．粒状Ｃ軽石多量・粒状Ⅶ層土若干混入。
5．微粒状Ｃ軽石若干。　6．Ⅵ乃至Ⅶ層土混入多量・微粒状Ｃ軽石微量。　7．微粒状Ｃ軽石微量・粗大塊状Ⅶ層土含有・粒状Ⅶ層土含有。　8．粒状Ｃ軽石微量・粒状Ⅶ層土若干混入。

第131図　Ｃ区第４号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	C区第5号住居跡	位置	49・50－C－46～48，1－D－46～48グリッド内				
平面形態	隅丸方形	規模	4.08m×3.59m	主軸方位	北－86度－東	残存深度	約26cm程
壁	斜位に立ち上がる。	北	床面	造床。掘り方底面より比較的高い位置に構築する。			
壁溝	未検出。		貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋外周辺を精査したが未確認に終った。						
掘り方	北西隅部周辺が全体的に窪んだ状態となる。						
カマド	位置	南東隅部壁。屋外に約115cm突出する。			主軸方位	北－108度－東	
形状	舌状を呈する。左袖を備え、燃焼部・焚口は長方形気味の形状を呈する。				改築の有無	有。	
規模	全長155cm・屋外長95cm・屋内長60cm・袖間幅98cm・燃焼部幅45cm・煙道幅45cm						
焚口	燃焼部側に入り込むと考えられる。		袖	左袖明瞭で、右袖は不明瞭で瓦により壁を補強する。			
燃焼部	器設と考えられる部分に数点瓦により支脚を備える。右壁は角材状の砂岩(地山土)で補強する。						
煙道	右壁に瓦による補強が認められる。		掘り方	掘り方埋没土を切っている。			
遺物出土状況	カマド前面に若干多いが、他は散漫な状態で、2・4層中に多い。						

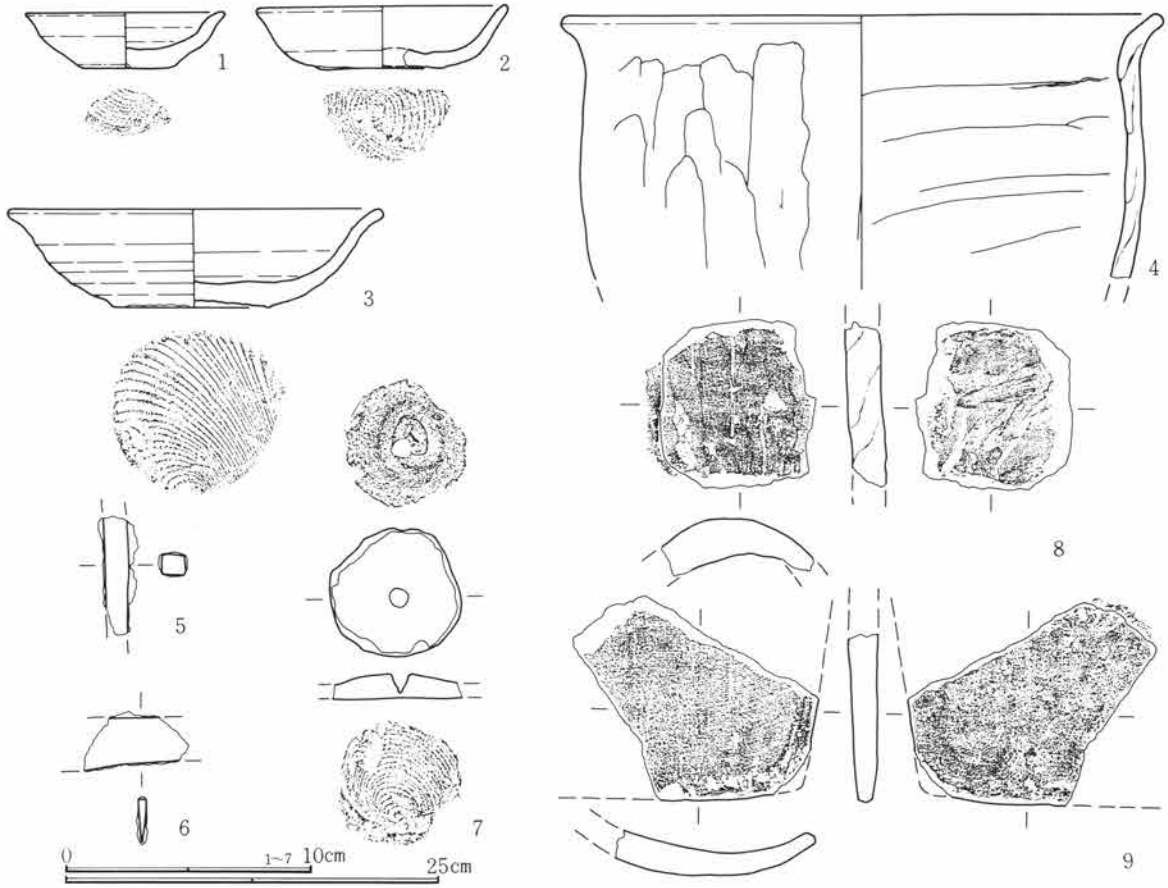
所　見　当住居跡はカマドが南東隅に位置するコーナーカマドであり、明らかに一度は改築されている。また、掘り方の検出状況から住居跡廃絶時に使用されていたカマドの北側に、僅かなずれがあるもののほぼ



層　序

1．粗粒状C軽石多量・塊状Ⅶ層土含有。　2．粗粒状C軽石含有・塊状Ⅶ層土若干混入。　3．粒状C軽石微量・粒状Ⅶ層土混入。
4．微粒状C軽石若干。　5．微粒状C軽石若干・粒状Ⅶ層土少量混入。　6．細粒状C軽石若干。　7．塊状Ⅶ層土。　8．塊状焼土主体・粒状炭化物含有。　9．灰層。　10．塊状Ⅶ層土多量・粒状炭化物含有。　11．焼土。　12．微粒状C軽石・粒状Ⅶ層土・粒状Ⅶ層土含有。

第132図　C区第5号住居跡実測図



第133図　Ｃ区第５号住居跡出土遺物実測図

同一と考えてよい主軸方向で改築前のカマドの痕跡の存在が確認されている。この改築により、当初の正方形の住居形態での南東隅に位置していたカマドが、改築後は主軸方向自体が南壁寄りに僅かに角度がずれると共に、カマド全体が住居の内側寄りに移動して燃焼部が完全に壁の内側に位置する事となり、南壁を袖に利用しているためか左袖が不明瞭である。住居跡の廃棄時期は遺物から11世紀前半と考えられる。（麻生）

遺構名称	Ｃ区第６号住居跡	位置	46～48－Ｃ－45～47グリッド内				
平面形態	不整方形	規模	4.27m×4.38m	主軸方位	北－88度－東	残存深度	約32cm程
壁	斜位気味に立ち上がる。	**西**	床面	造床。掘り方底面の極一部を床面とし、他は貼床を施す。			
壁溝	未検出。		貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋外周辺を精査したが未確認に終った。						
掘り方	中央部分の極一部に平坦面を成し、全体的に壁側に窪んでいる。また土坑状の掘り込みも多い。						
カマド	位置	東壁南寄り。屋外に約94cm突出する。		主軸方位	北－94度－東		
形状	舌状を呈する。数次に亙る改築が認められ不分明な部分がある。			改築の有無	有。		
規模	全長－cm・屋外長94cm・屋内長０cm・燃焼部幅50cm						
焚口	平坦で、床面・燃焼部底面と同位。	袖	未検出。				
燃焼部	底面は床面とほぼ同位で平坦である。改築直後の状態か？特徴がない点が特徴とも言い得る。						
煙道	未検出。	掘り方	図示した状態は少なくとも３次に亙る改築全体のものである。				
遺物出土状況	比較的少なく、☆層中にやや多い。						

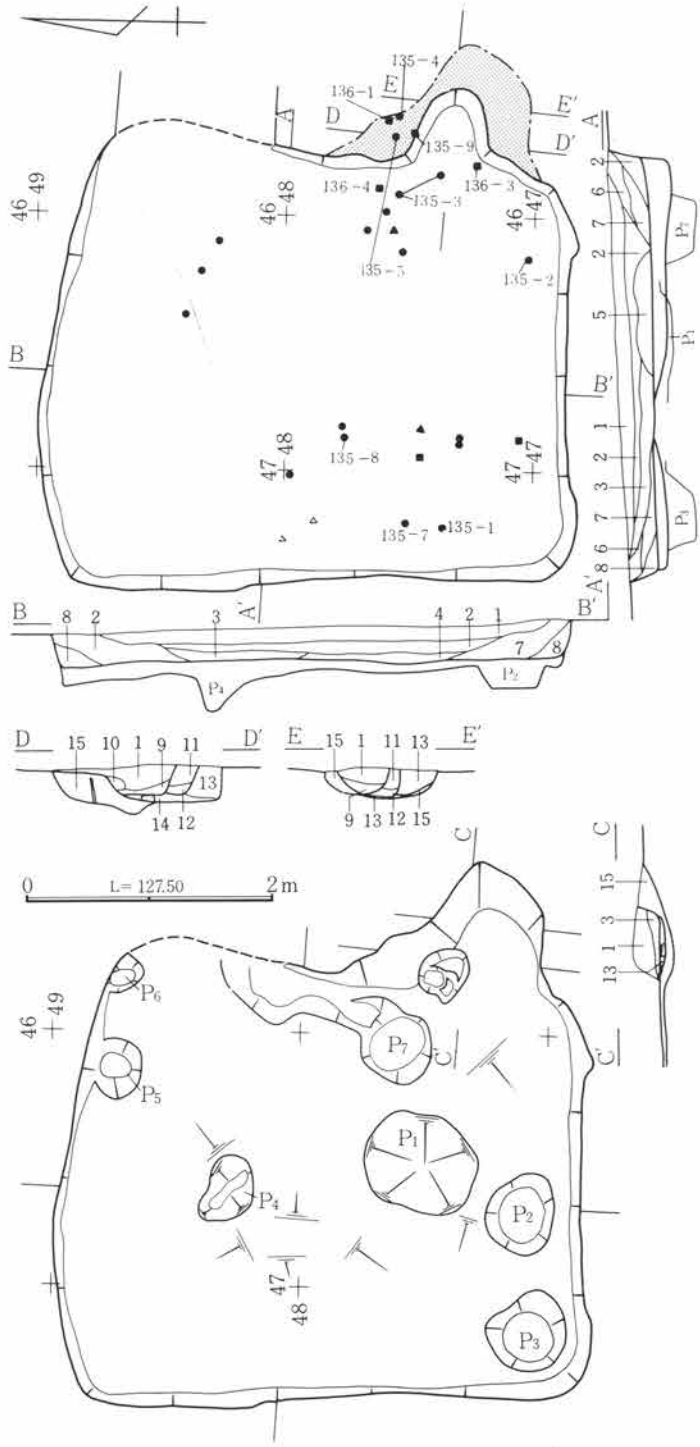
所　見　当住居跡はC区の北端に位置するが、住居の分布傾向上D区内で検出された住居群と同一である。又、周辺には南東隅部にカマドを備える住居が集中し、これらとの係わりが想定される住居跡と考えられる。

平面形状は不整方形を呈するものの、基調は梯形乃至正方形を指向したと考えられる。構築基準辺は西壁が考えられ、直線走行する壁が看取される。

掘り方は、住居全体の中央が高まる状態に認められ、7ケ所に土坑乃至柱穴状の掘り込みが認められた。この土坑乃至柱穴状の掘り込みの内 P_3 は貯蔵穴に相当するものと考えられるが、他のものは判断しうる用途・状況は想起されず不明瞭なものである。

カマドは、少なくとも2回に亘る大改修が行われている。この改修は、構築頭初に住居南東隅部に構築されたものを埋め、第1回目の改築が有り、さらにこの改築されたものを埋設し再構築している。

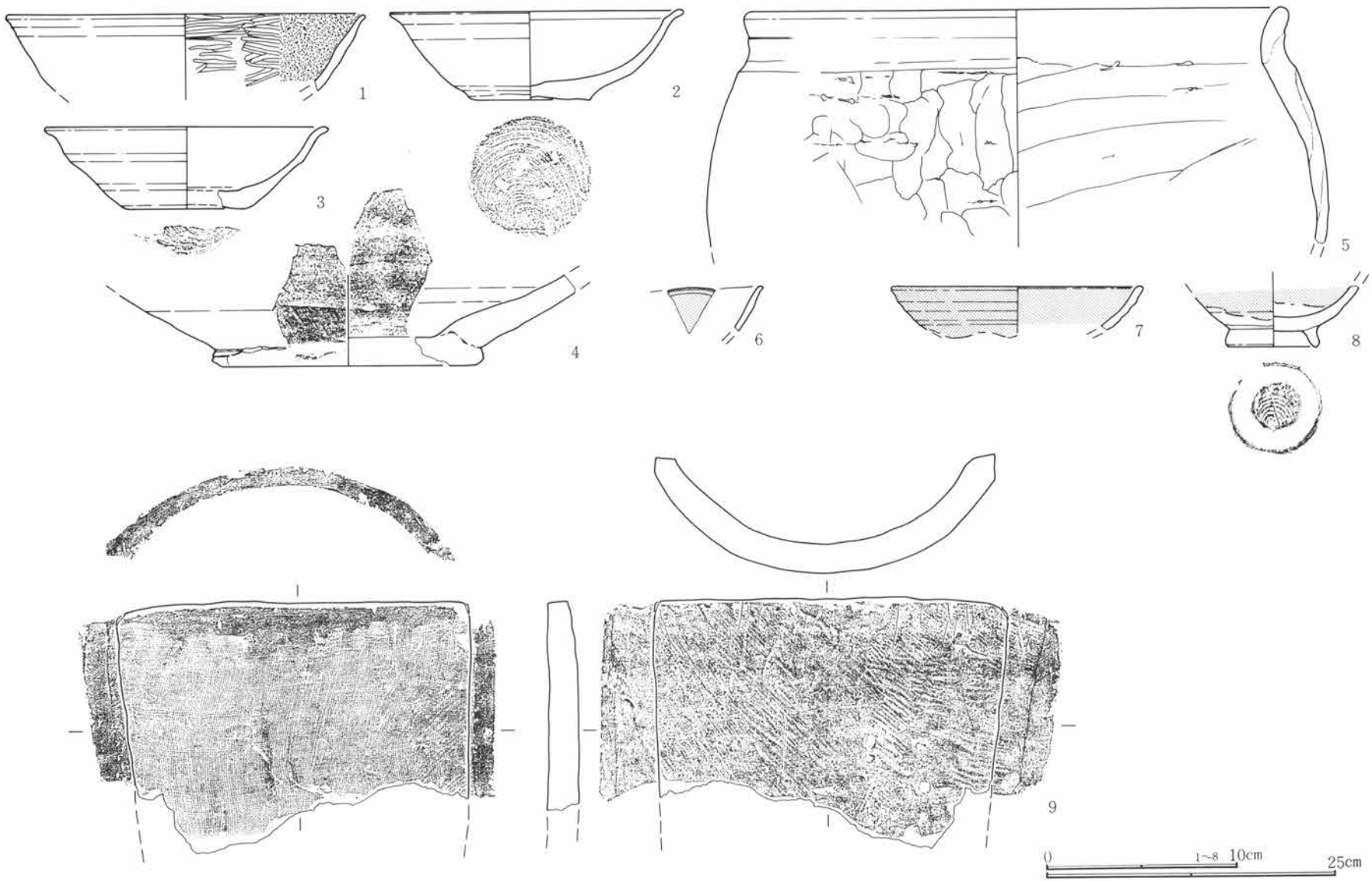
この一連の改築は、住居隅方向から中央部へと移動している。この現象は、当該調査の他の住居のカマドの在り方からすれば逆の現象と認識される。ただ当住居の場合、頭初の構築位置が隅部に偏在していた点で、改築時に中央側へと移設したと判断される。そして、確実な状態で隅部への構築がなされていない点では、当住居構築頃には、未だ隅部への設置ということは技法が存在しなかった点が考えられる。改築という状況から、使用は比較的長期に亘ったと考えられ、この期間中にも隅部への移設がなかった点は、当住居の廃棄頃を契機とし〝隅カマド〟が新たな形として導入されたと考えられる。住居の時期は、10世紀後半から11世紀初頭と考えられる。　　（木津）



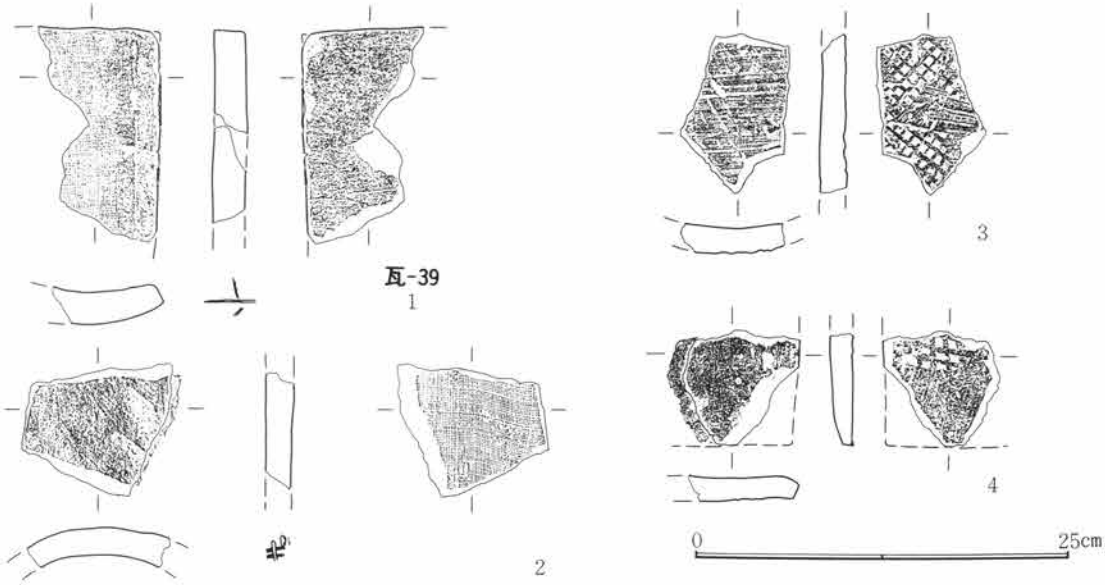
層　序

1．粗粒状C軽石多量・粒状炭化物若干。　2．粒状C軽石含有・粒状焼土・粒状炭化物含有。　3．粒状C軽石若干・粒状焼土若干混入。
4．塊状Ⅶ層土。　5．4とほぼ同質。　6．粒状C軽石含有。　7．粒状C軽石若干・粒状焼土若干混入。　8．微粒状C軽石微量。
9．灰層。　10．粘質土（粒状焼土含有）。　11．細粒状C軽石若干。　12．粒状焼土・粒状炭化物含有。　13．粒状C軽石含有・粒状焼土若干混入。　14．灰層。　15．Ⅶ層土。　16．細粒状C軽石微量・粒状焼土・粒状炭化物含有・粒状Ⅶ層土含有。

第134図　C区第6号住居跡実測図

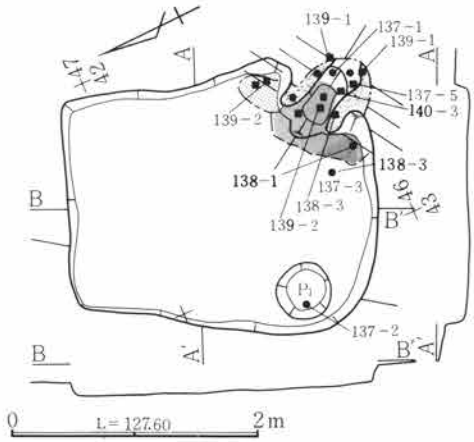


第135図　C区第6号住居跡出土遺物実測図



第136図　Ｃ区第６号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	Ｃ区第７号住居跡	位置	46・47－Ｃ－42・43グリッド内				
平面形態	隅丸長方形	規模	2.19m×2.53m	主軸方位	北－113度－東	残存深度	約15cm程
壁	斜位に立ち上がる。	**北**	床面	平坦。平坦に構築した掘り方底面を使用する。			
壁溝	未検出。		貯蔵穴	Ｐ１か？（円形　径45cm・深度21cm）			
柱穴	未検出。住居屋外周辺を精査したが未確認に終った。						
掘り方	底面は平坦に掘削し、そのまま床面としている。						
カマド	位置	南東隅部壁。屋外に約33cm突出する。		主軸方位	北－146度－東		
形状	舌状に長く屋外に延びると考えられる。			改築の有無	不分明		
規模	全長77cm・屋外長33cm・屋内長44cm・袖間幅73cm・燃焼部幅27cm						
焚口	狭い扇状を呈すると考えられる。	袖	両袖が認められ、左袖は半ば削り出しの状態である。				
燃焼部	細長で、断面Ｄ－Ｄ′ぐらいに器設が考えられる。壁体は瓦で補強したと考えられる。						
煙道	細長いと考えられ、瓦により補強される。	掘り方	検出部は隅丸長方形気味である。				
遺物出土状況	カマド内で遺存の良好な瓦が出土している。						



第137図　Ｃ区第７号住居跡実測図

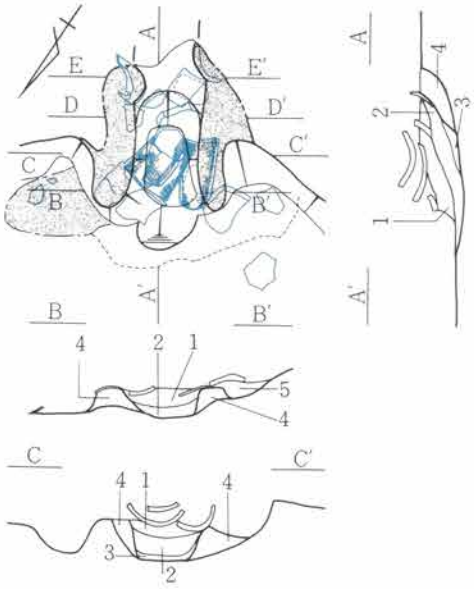
所　見　当住居今次の報告対象区の中で最も小規模な住居である。小規模な住居としては第13・20号住居跡があげられ、本跡を含めカマドが南東隅部に付設する点も共通する。

カマドはII層土撤去の折、重機を用いたことにより、過多の掘り下げとなり、残存を悪くしてしまった。そして、この折第139図―１の瓦当部を失ってしまった。カマドは、全体的に瓦を多く用い構築しており、燃焼部周辺では遺存状態の良好な瓦を用いている。

構築基準辺は北壁と考えられ、北壁に接する東・西両壁の状態は比較的整っている。

掘り方は認められなかった。P_1からは第138図－２が出土しており、この出土状態（写真図版参照）と覆土の堆積状態から掘り方のものとは考え難く、貯蔵穴としての存在と考えられる。この位置での在り方は、Ｃ区第１号住居跡と同様であるが、カマドが南東隅部に偏在している点から、Ｃ１住より先行して構築されたと考えられる。

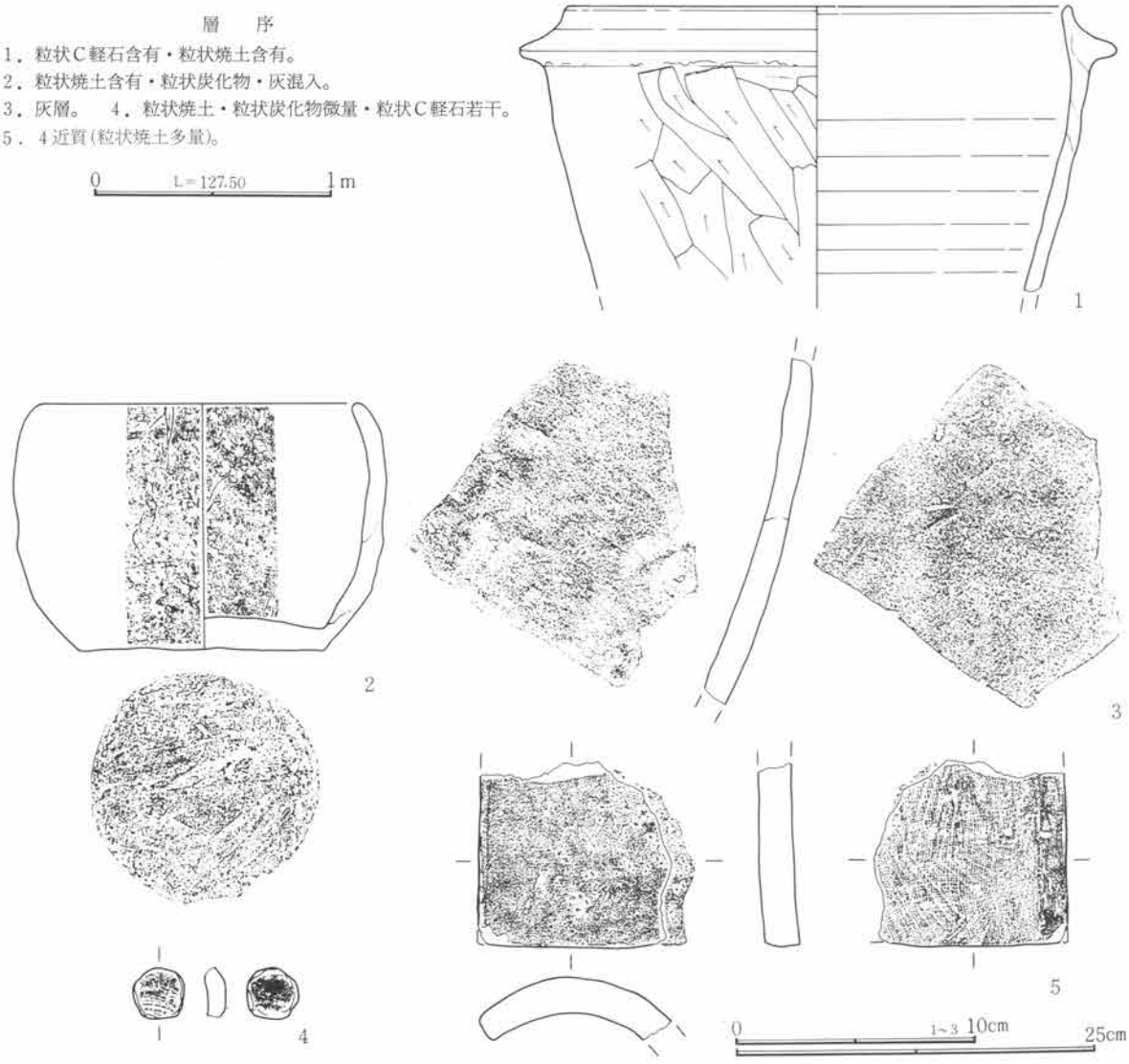
時期は、11世紀前半と考えられる。　（木津）



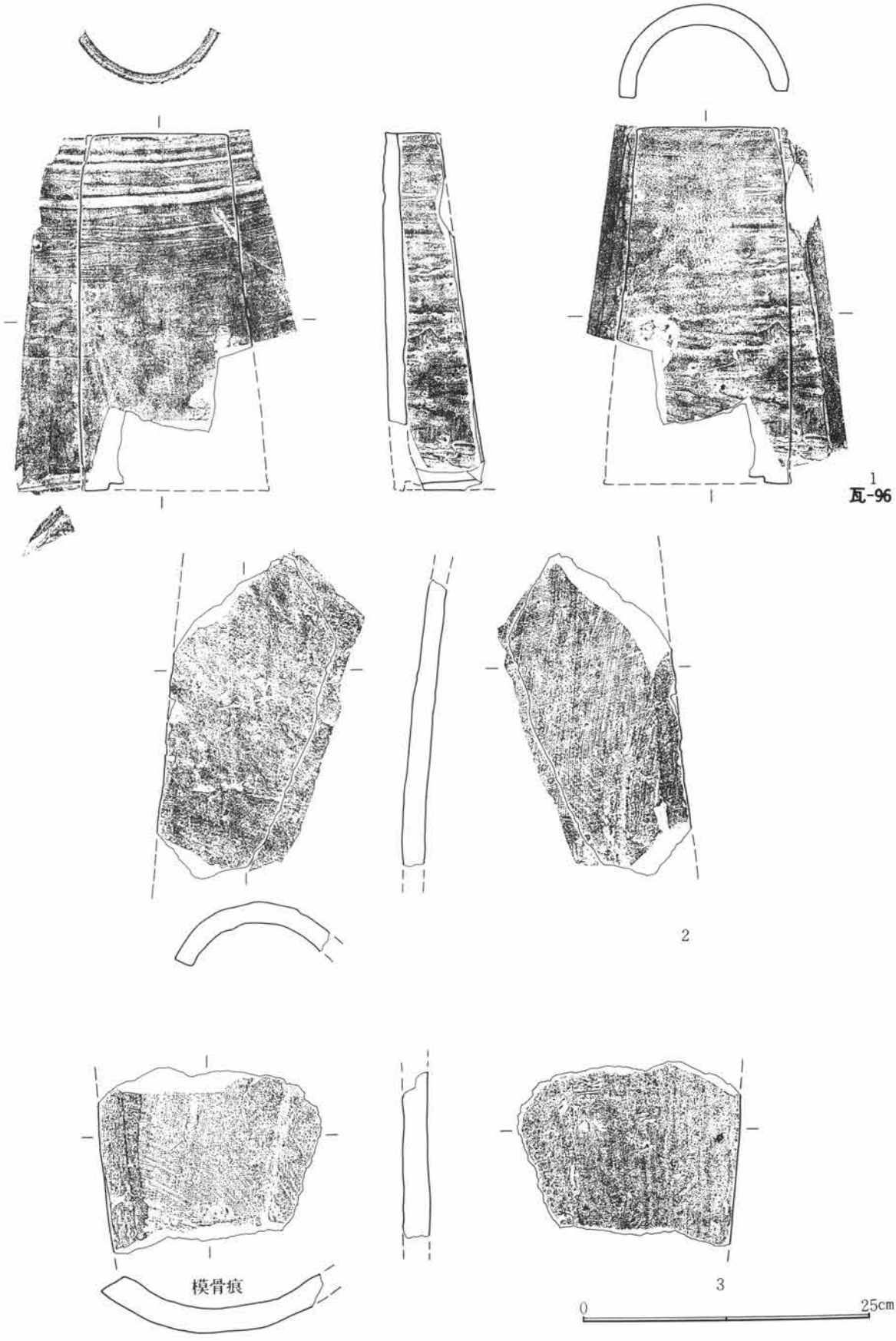
層　序

1．粒状Ｃ軽石含有・粒状焼土含有。
2．粒状焼土含有・粒状炭化物・灰混入。
3．灰層。　4．粒状焼土・粒状炭化物微量・粒状Ｃ軽石若干。
5．４近質（粒状焼土多量）。

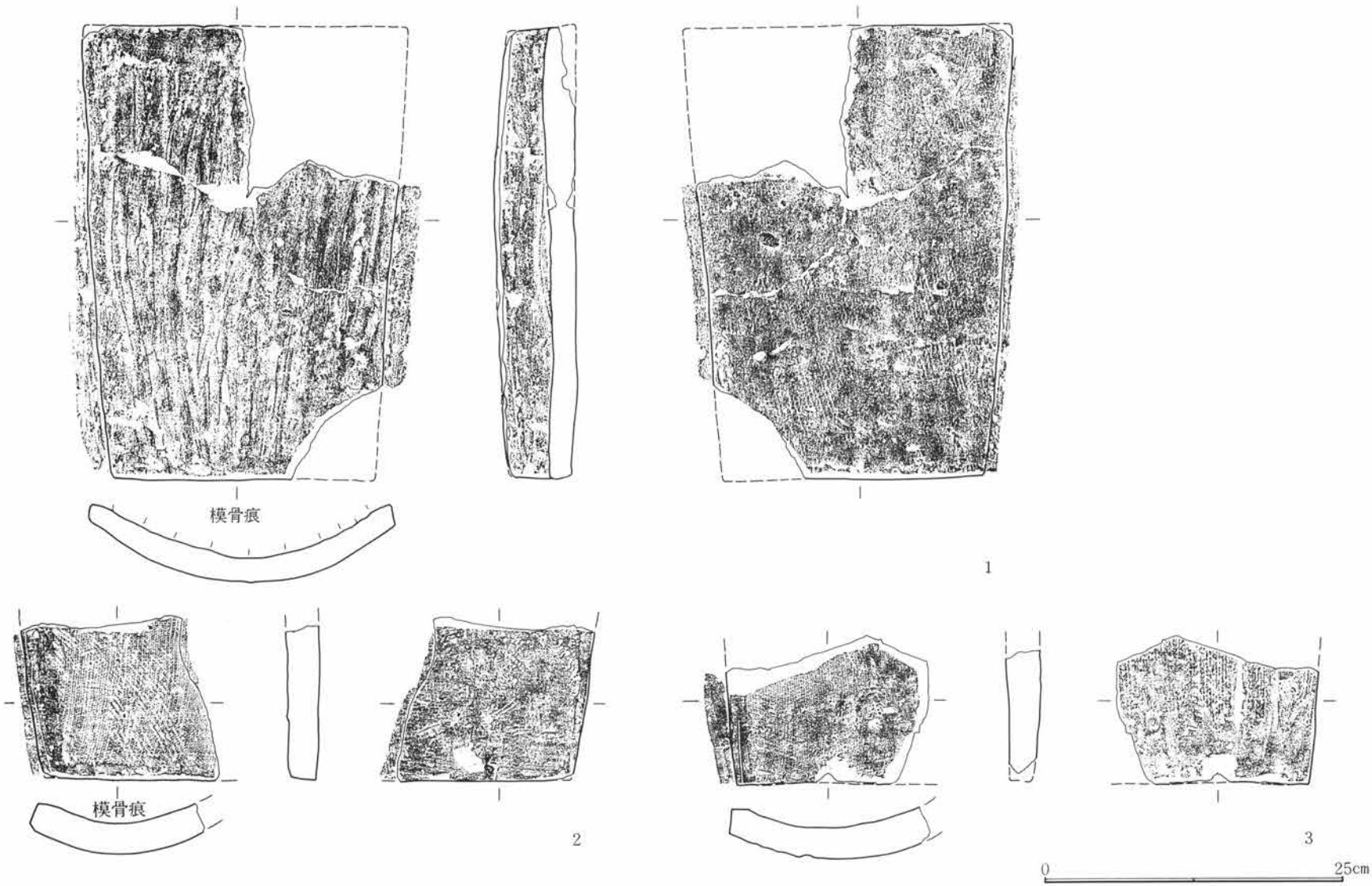
0　L＝127.50　1m



第138図　Ｃ区第７号住居跡・出土遺物実測図

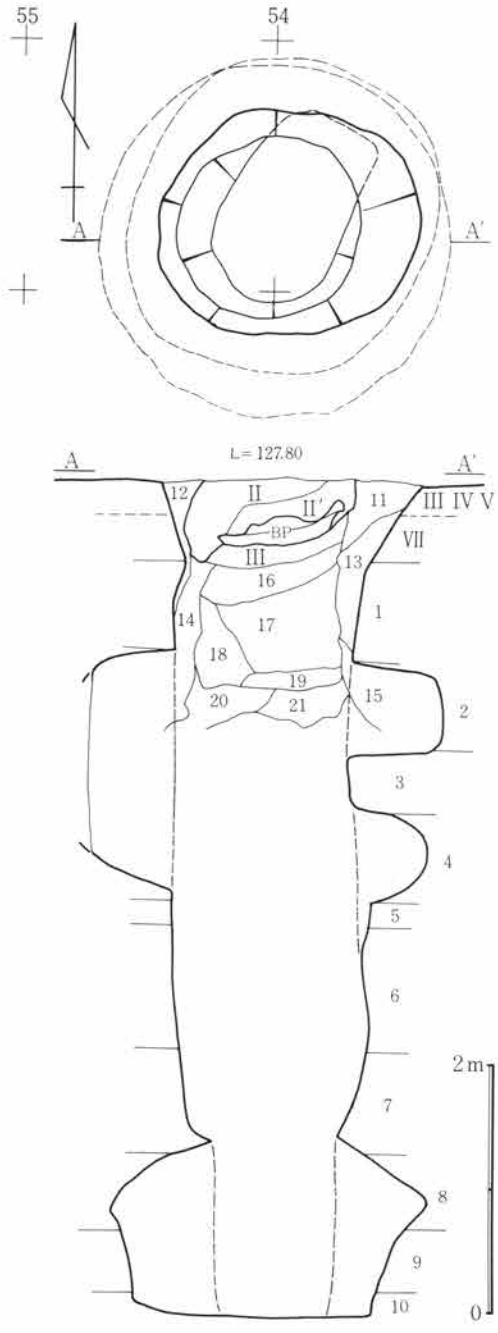


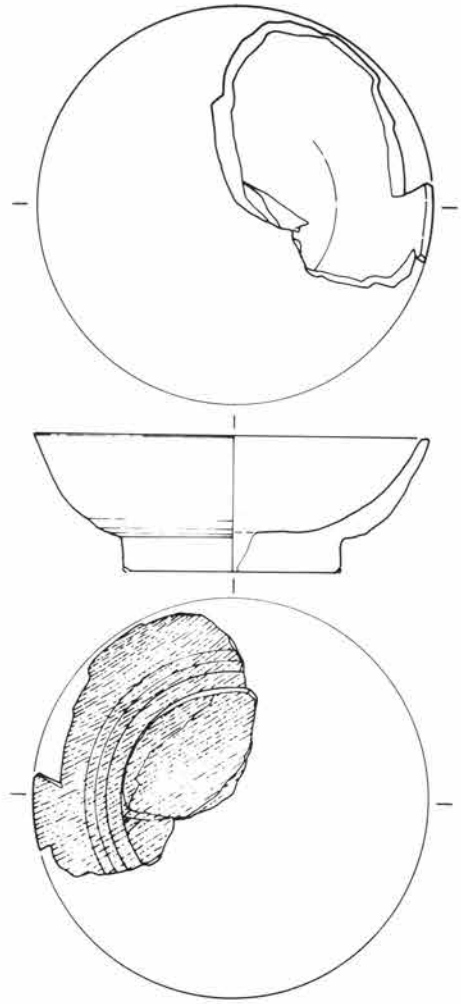
第139図　C区第7号住居跡出土遺物実測図



第140図　C区第7号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	D区第1号井戸	位置	24・25—D—53・54グリッド内		平面形態	円形
規模(m)	地上径2.12	最細径1.45	最大径3.0？	深度6.57	湧水位深度	夏期—2.5　・冬期—5.9
アグリ部最大径	夏期3.0？・冬期2.5	湧水層	2・8・9層	耐水層	3・10層	





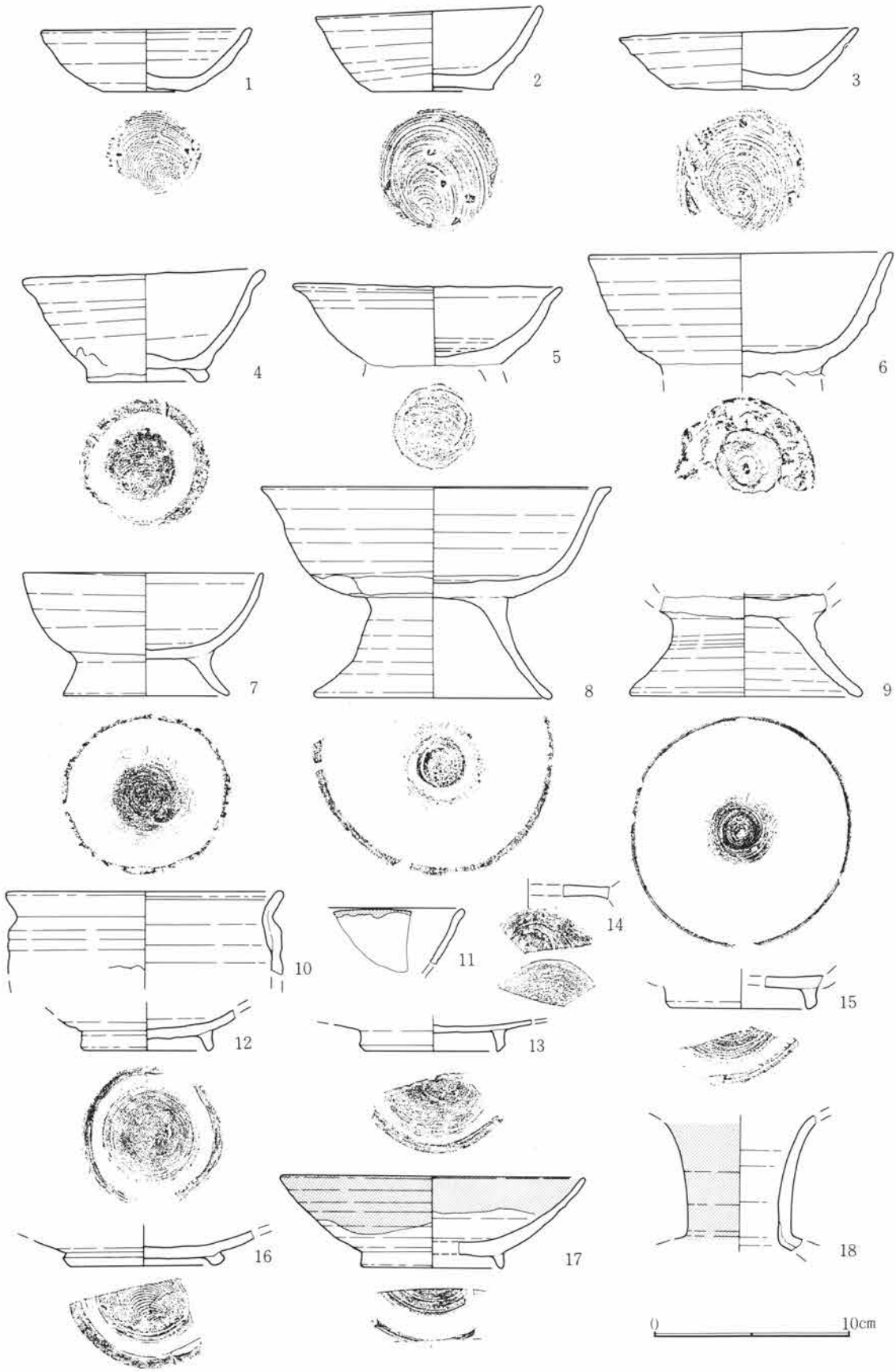
所　見　土層断面では、確認面下50cm程にB軽石のユニットが認められており、上位にはII層土も認められている。この状況は、井戸自体が埋没した段階以降に覆土自体が土圧により沈下し、これに伴ないB軽石・II層土が井戸内に〝陥没〟したと考えられるものである。出土遺物は多量の瓦が中層より出土し、上位アグリ内に入れ込んだ状態で出土した。この直上で鬼瓦（尼寺金堂のものか）が逆位で出土している。土器類はこの瓦より下層で出土しているが、底面より50～60cm遊離した状態であった。また、土器より下位の直上層では、木器椀が出土している。時期は10世紀後半と考える。

（木津）

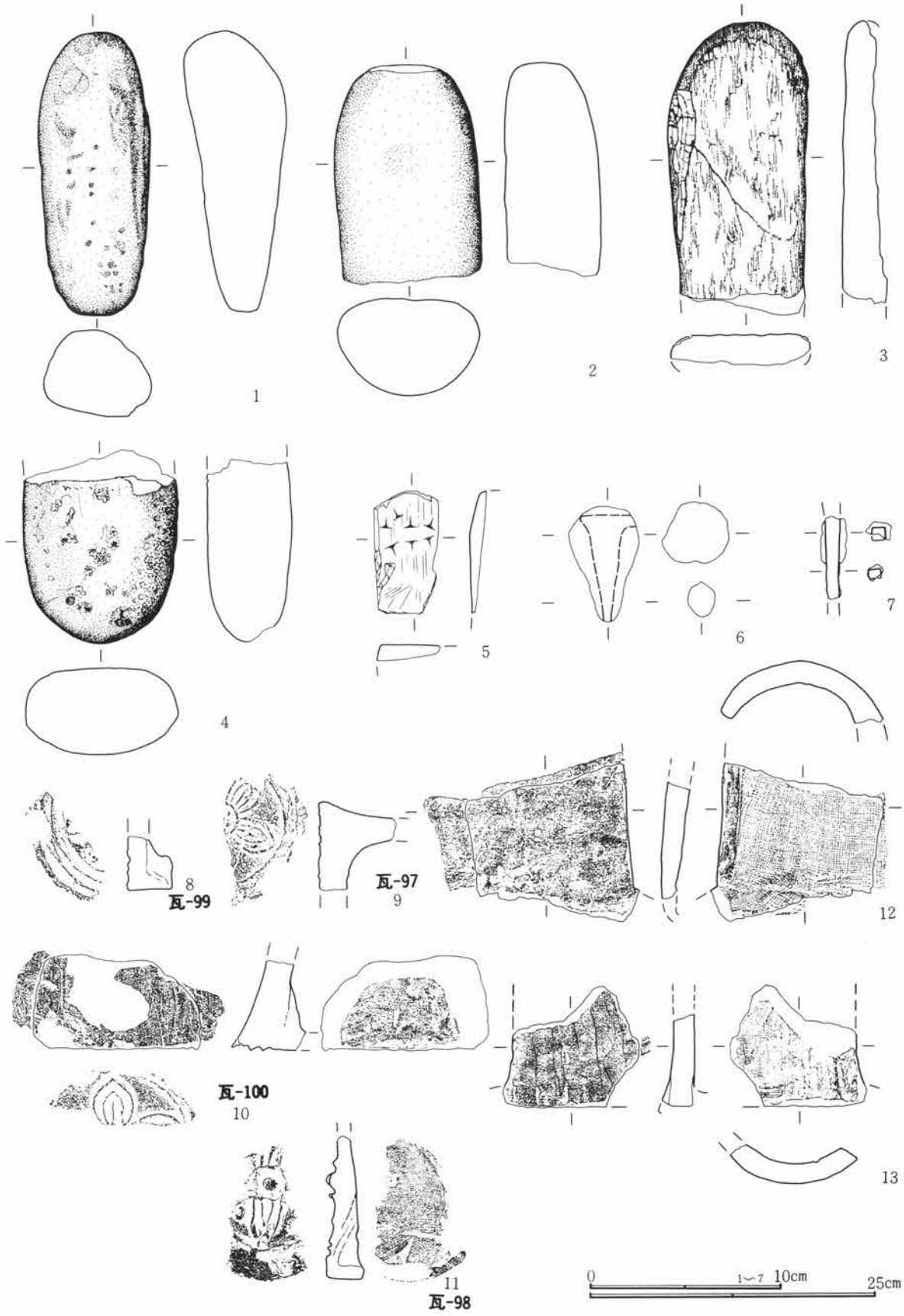
層　序

1．火山灰。　2．シルト。　3．火山灰（砂質）。　4．シルト。　5．黒色帯（前橋泥炭層）。　6．火山灰（軽石混入）。
7．火山灰（砂質）（鉄分含有）。　8．シルト（砂質）。　9．火山灰（小礫・鉄分含有）。　10．細砂・シルト。
11・12．II層土主体（III層土混入）。　13．粒状C軽石含有・粒状炭化物含有。　14．粒状C軽石含有・粒状炭化物・粒状VII層土混入。
15．粒状C軽石含有・塊状2層土多量混入。　16．粒状C軽石含有・粒状炭化物混入（III層と思われる）。　17．粒状C軽石若干・粒状炭化物微量・塊状VII層土含有。　18．粒状C軽石含有・粒状焼土混入。　19．粒状C軽石若干・塊状濁暗橙褐色主体。
20．粒状C軽石含有・粒状炭化物含有・粒状VII層土混入。21．粒状C軽石含有・塊状FA含有。

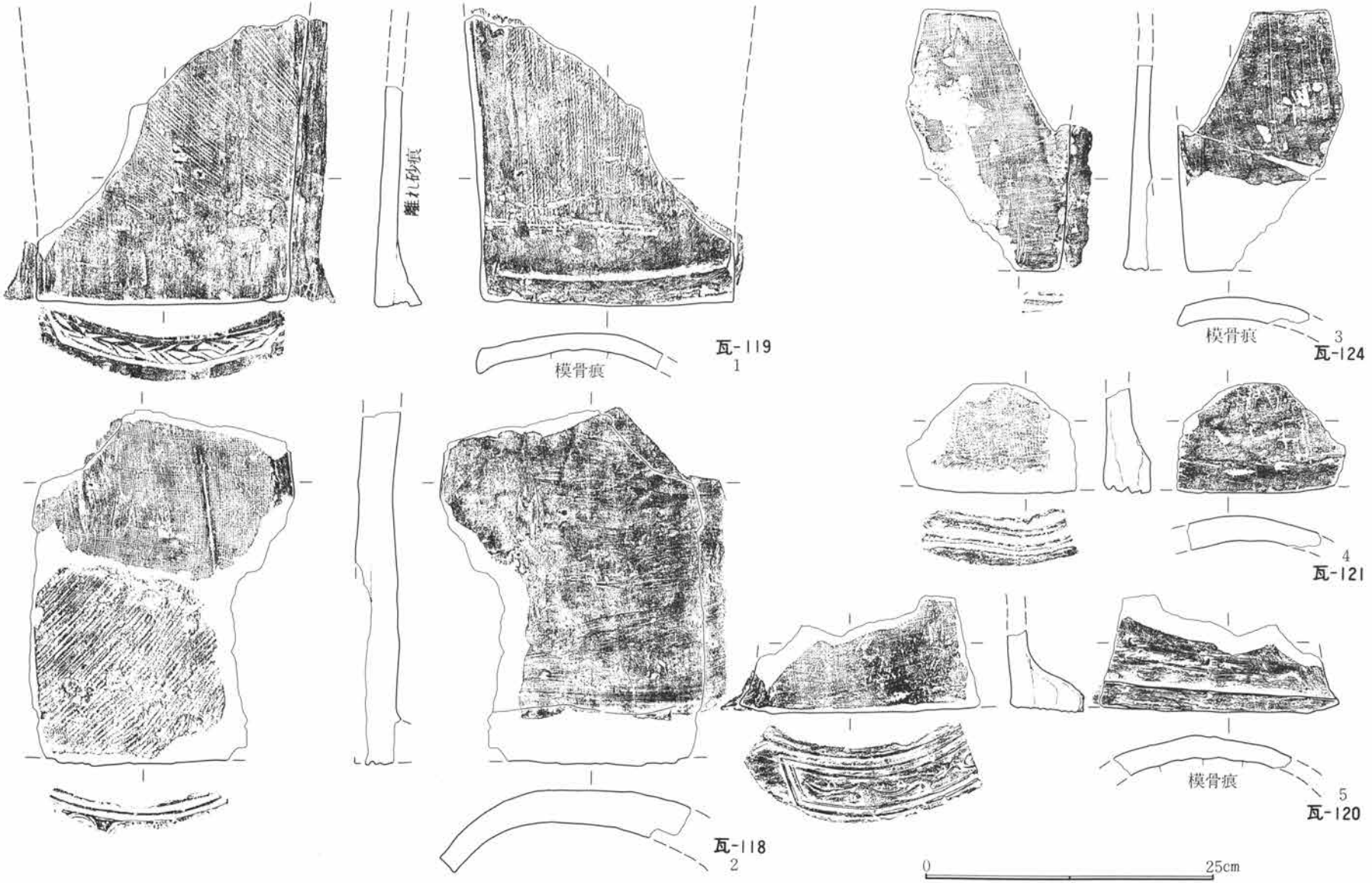
第141図　D区第1号井戸跡実測図



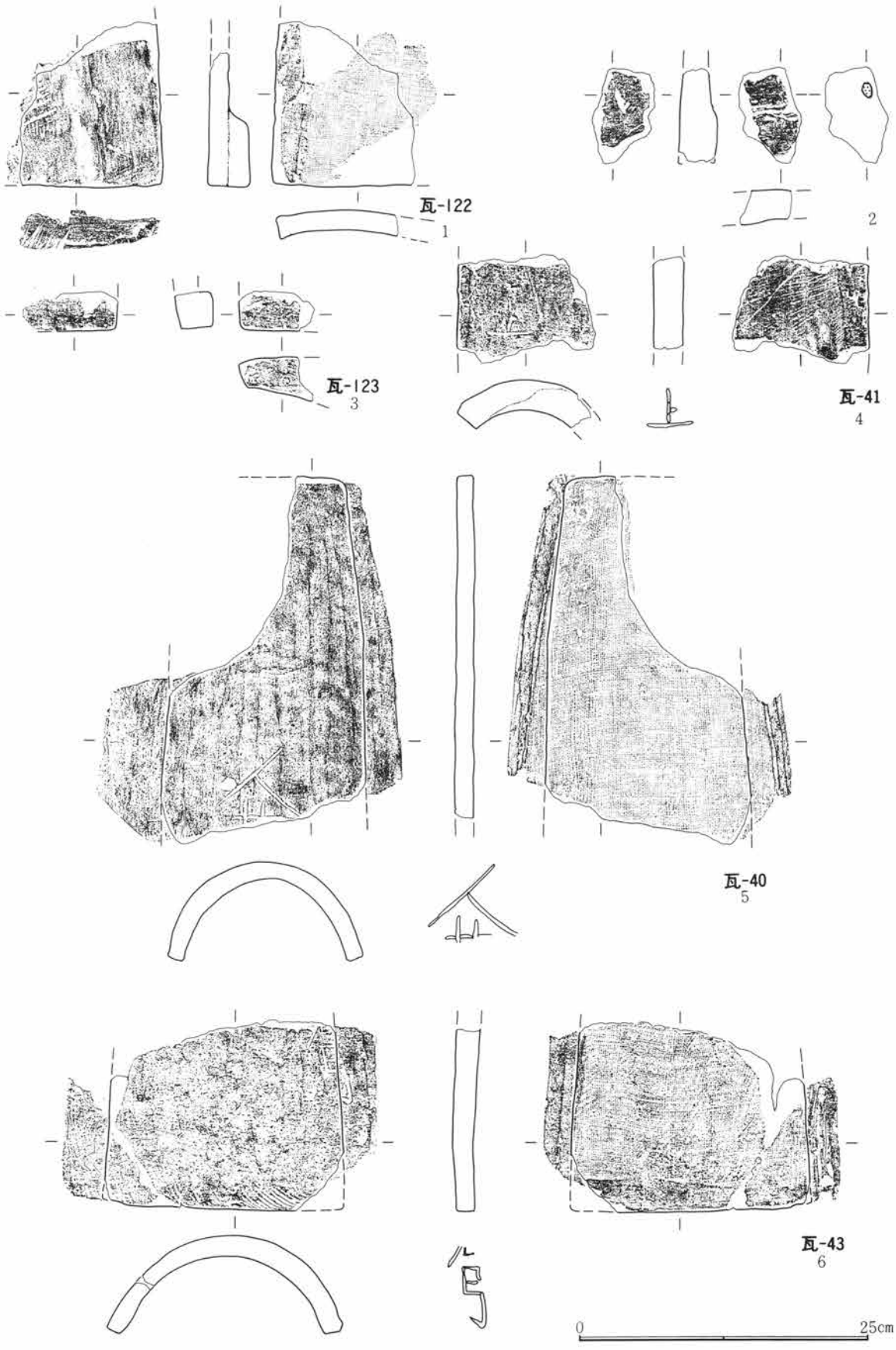
第142図　D区第１号井戸跡出土遺物実測図



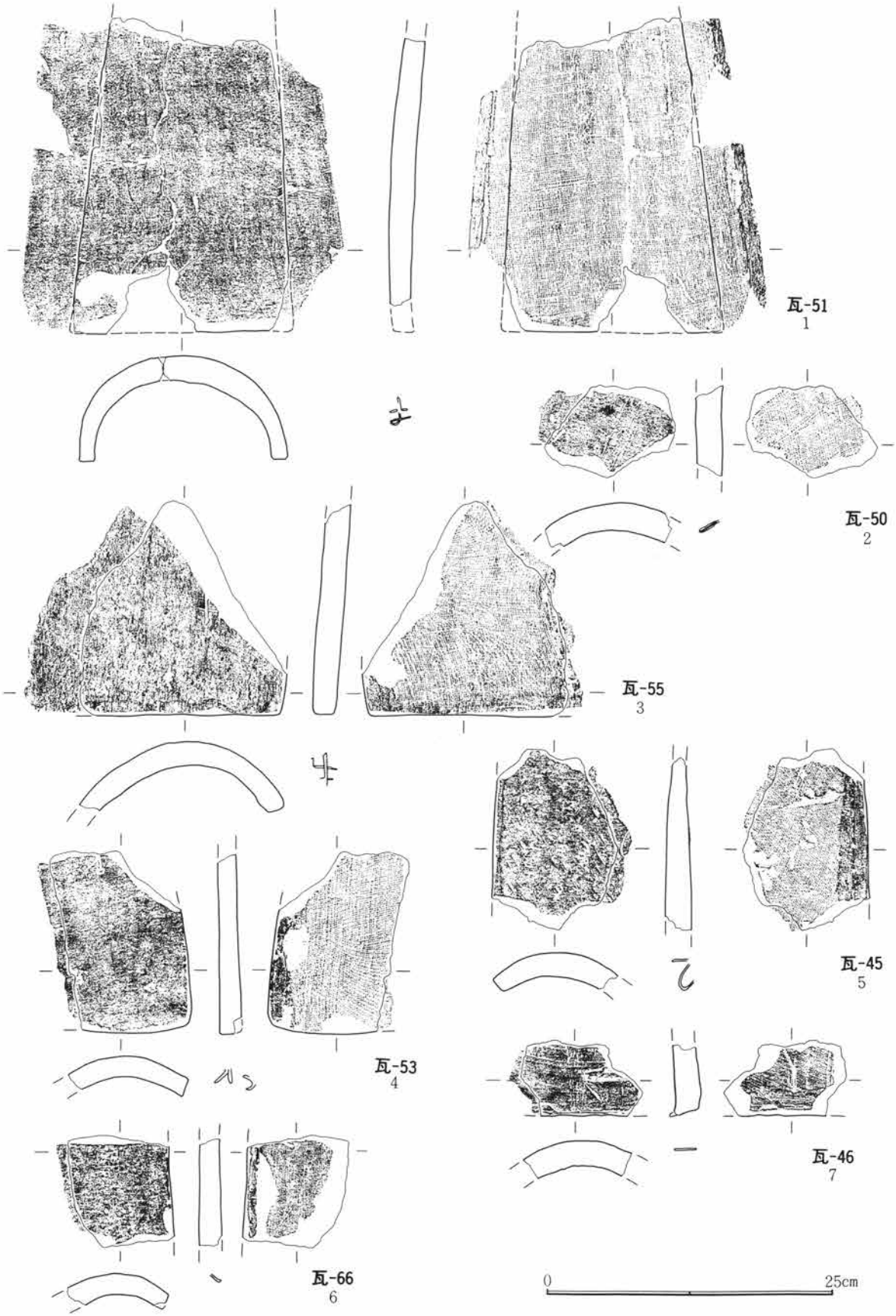
第143図　D区第１号井戸跡出土遺物実測図



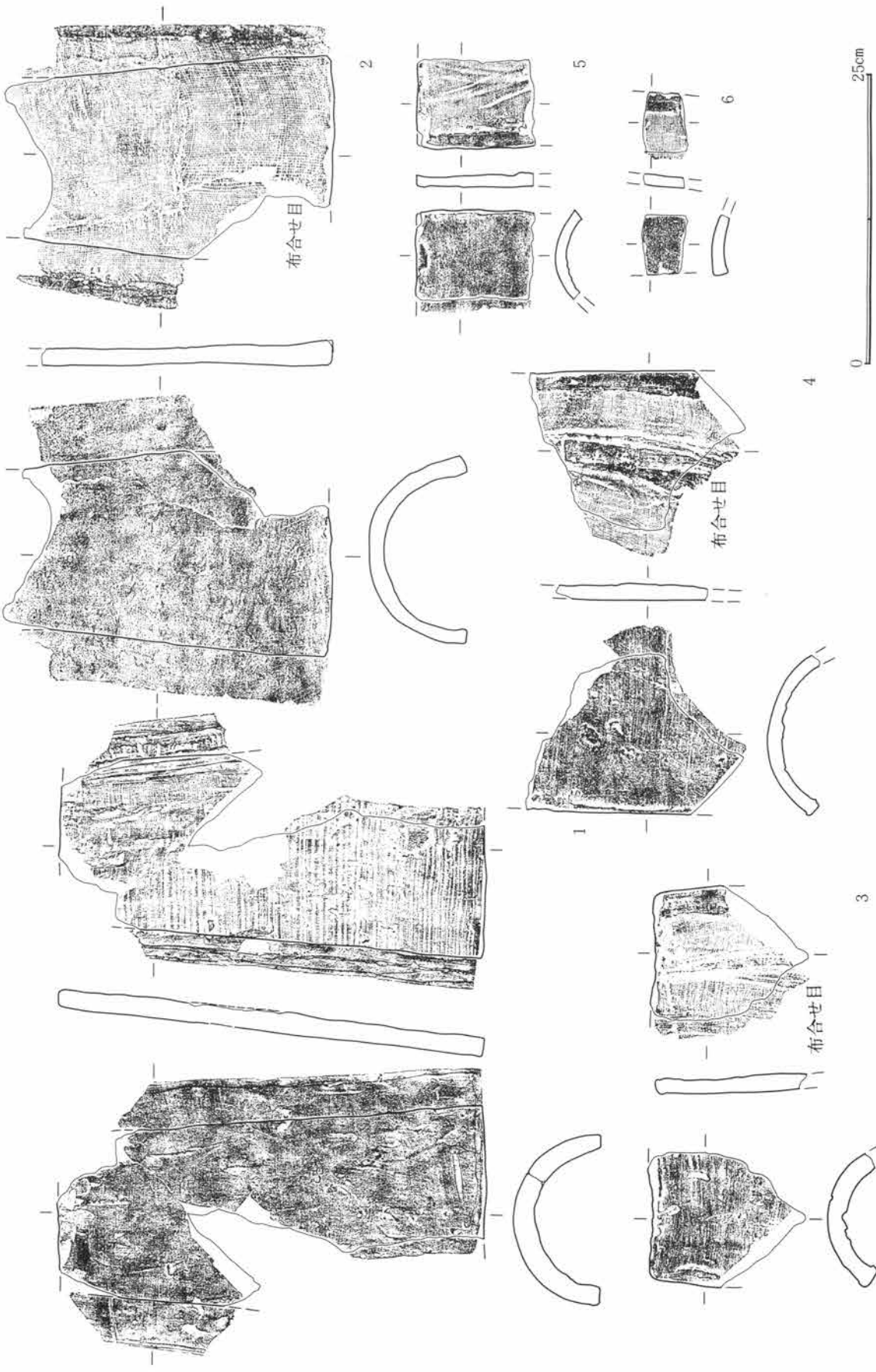
第144図　D区第１号井戸跡出土遺物実測図



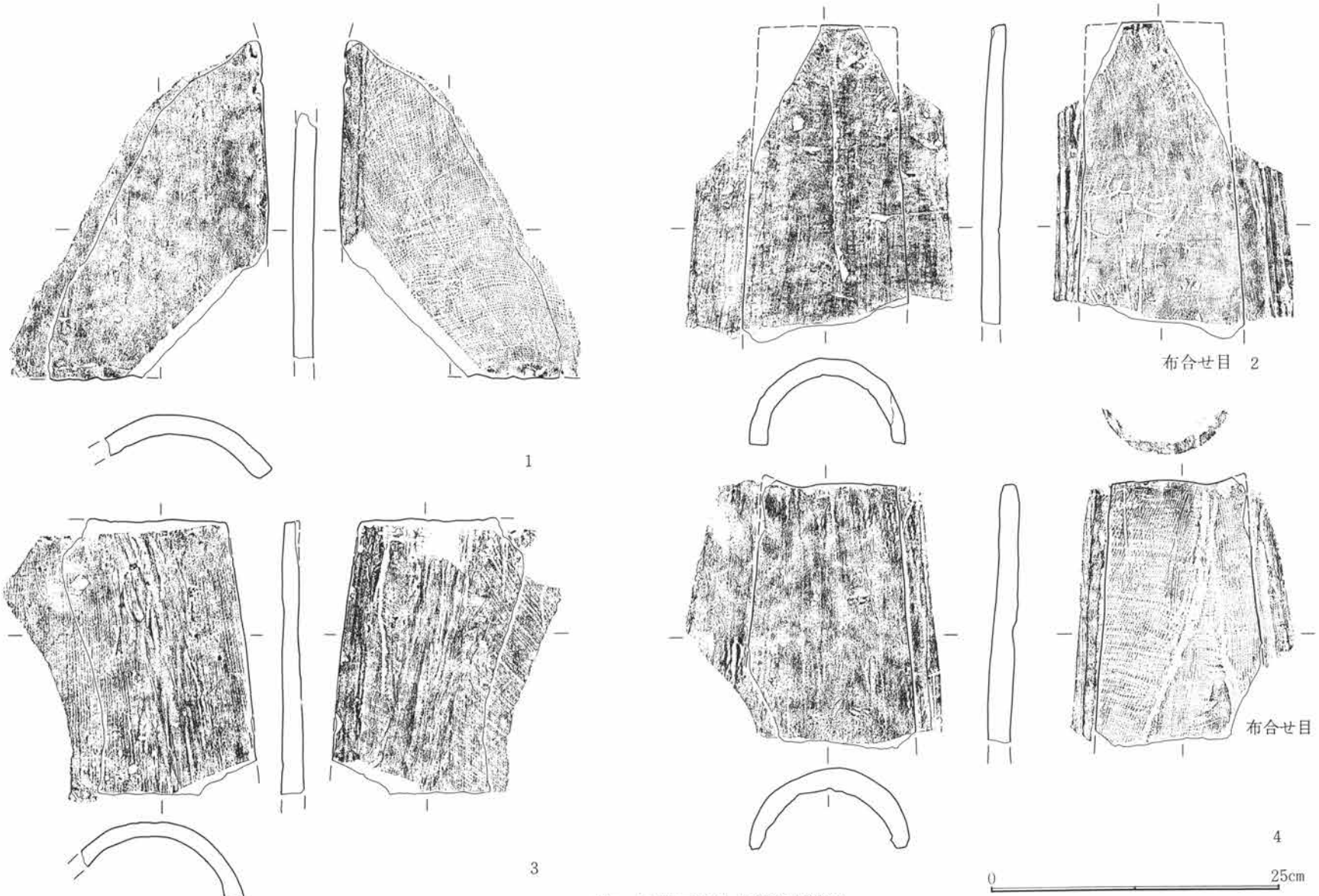
第145図　Ｄ区第１号井戸跡出土遺物実測図



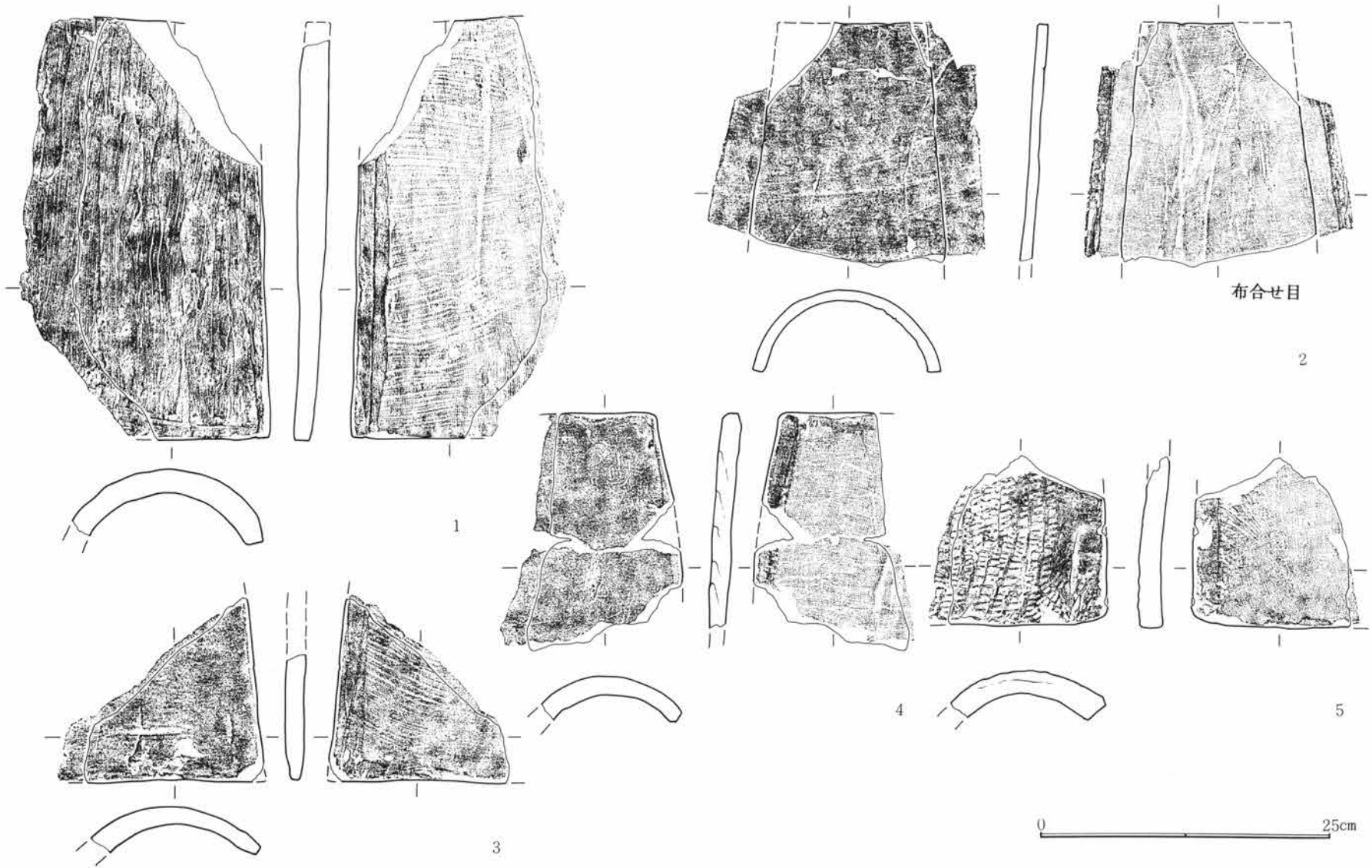
第146図　D区第１号井戸跡出土遺物実測図



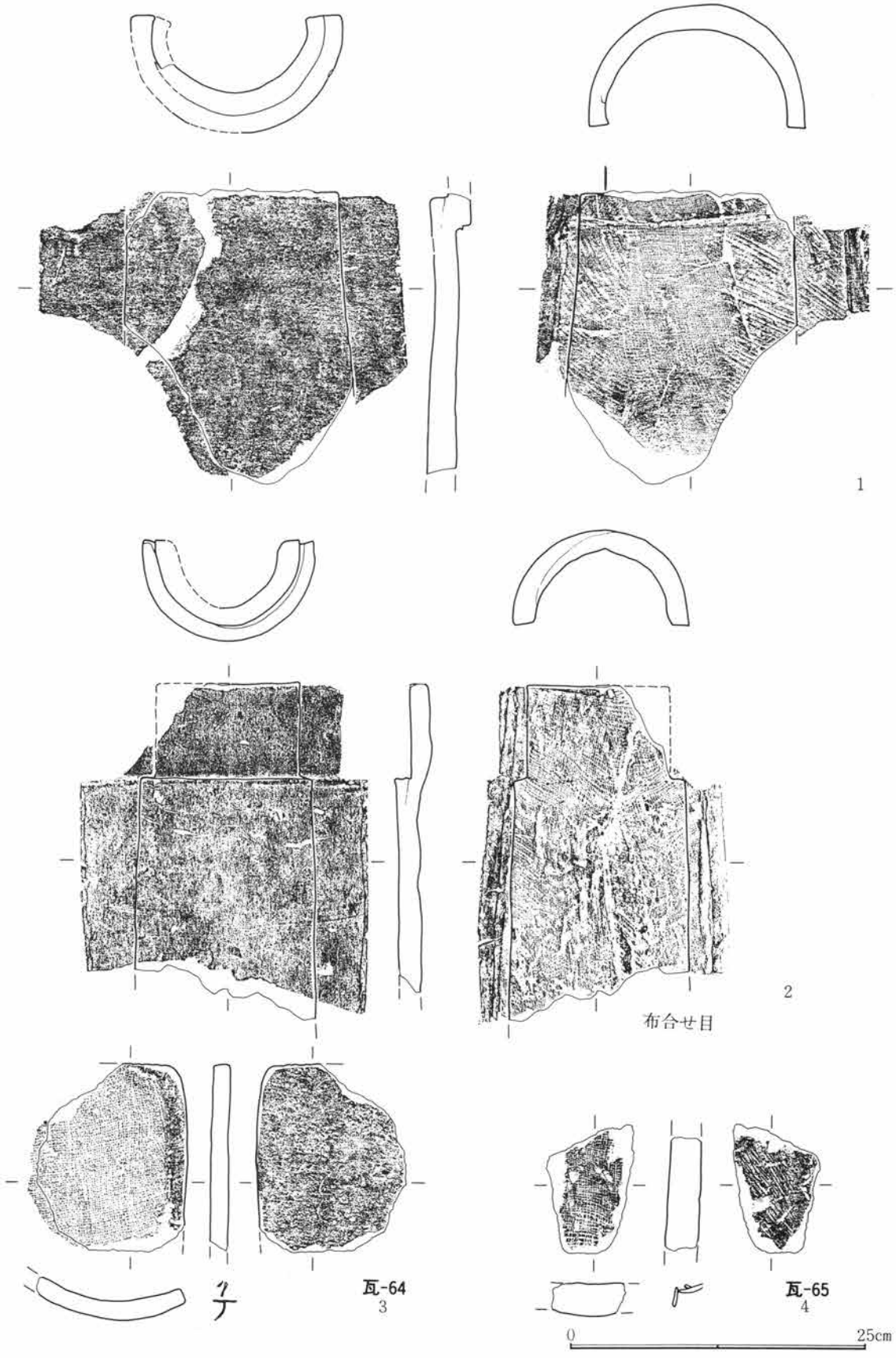
第147図　D区第1号井戸跡出土遺物実測図



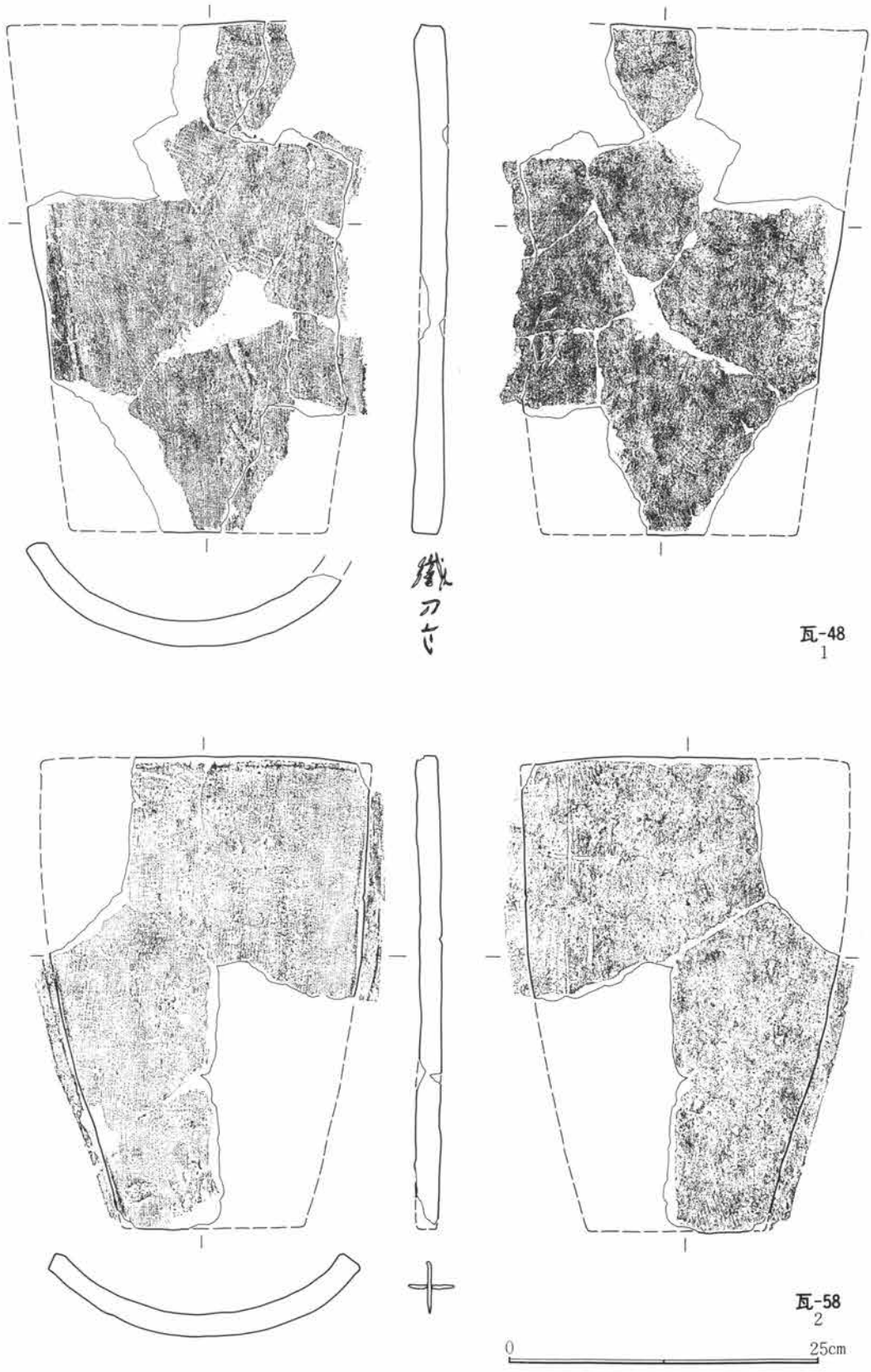
第148図　D区第1号井戸跡出土遺物実測図



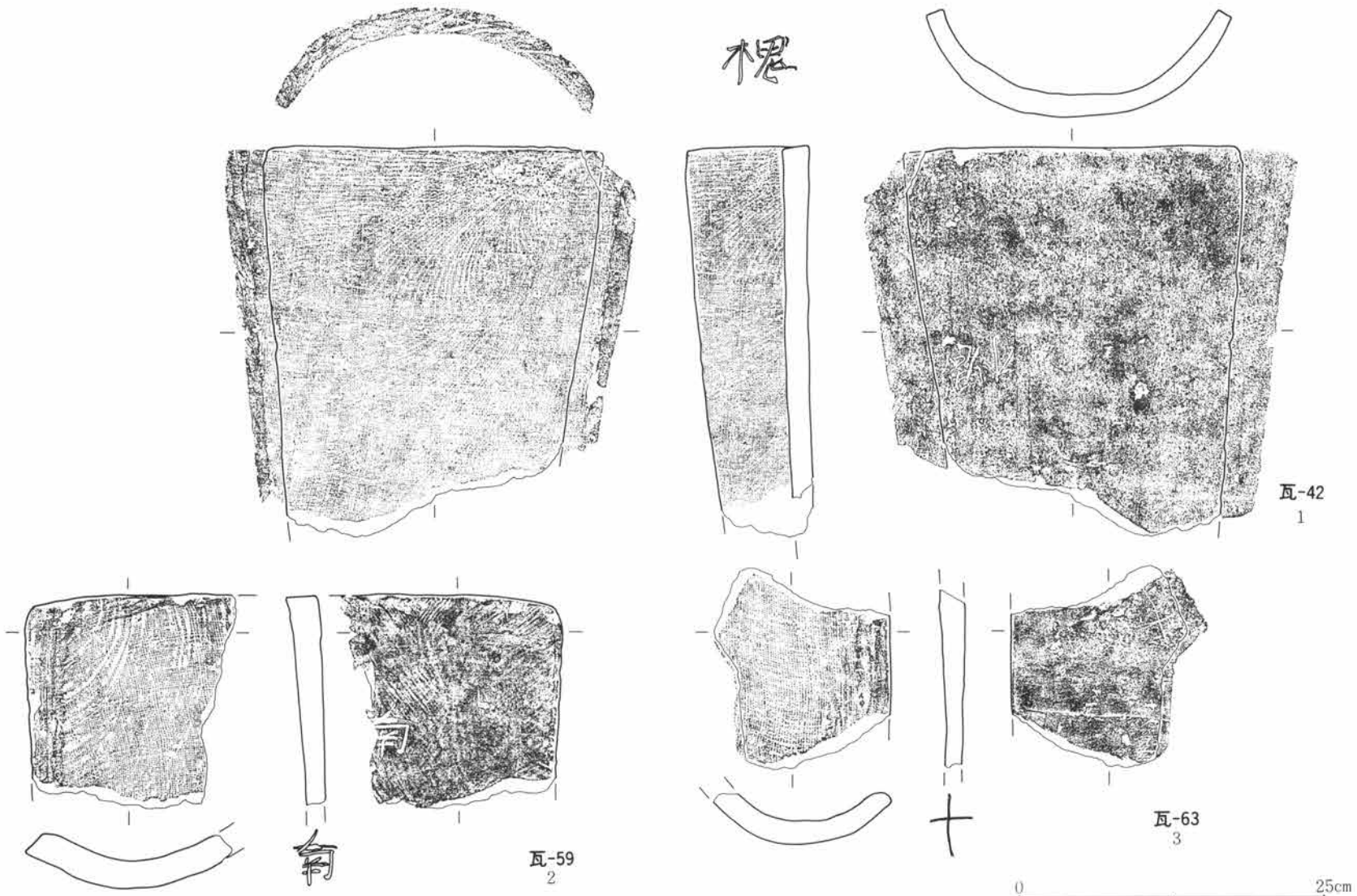
第149図　D区第1号井戸跡出土遺物実測図



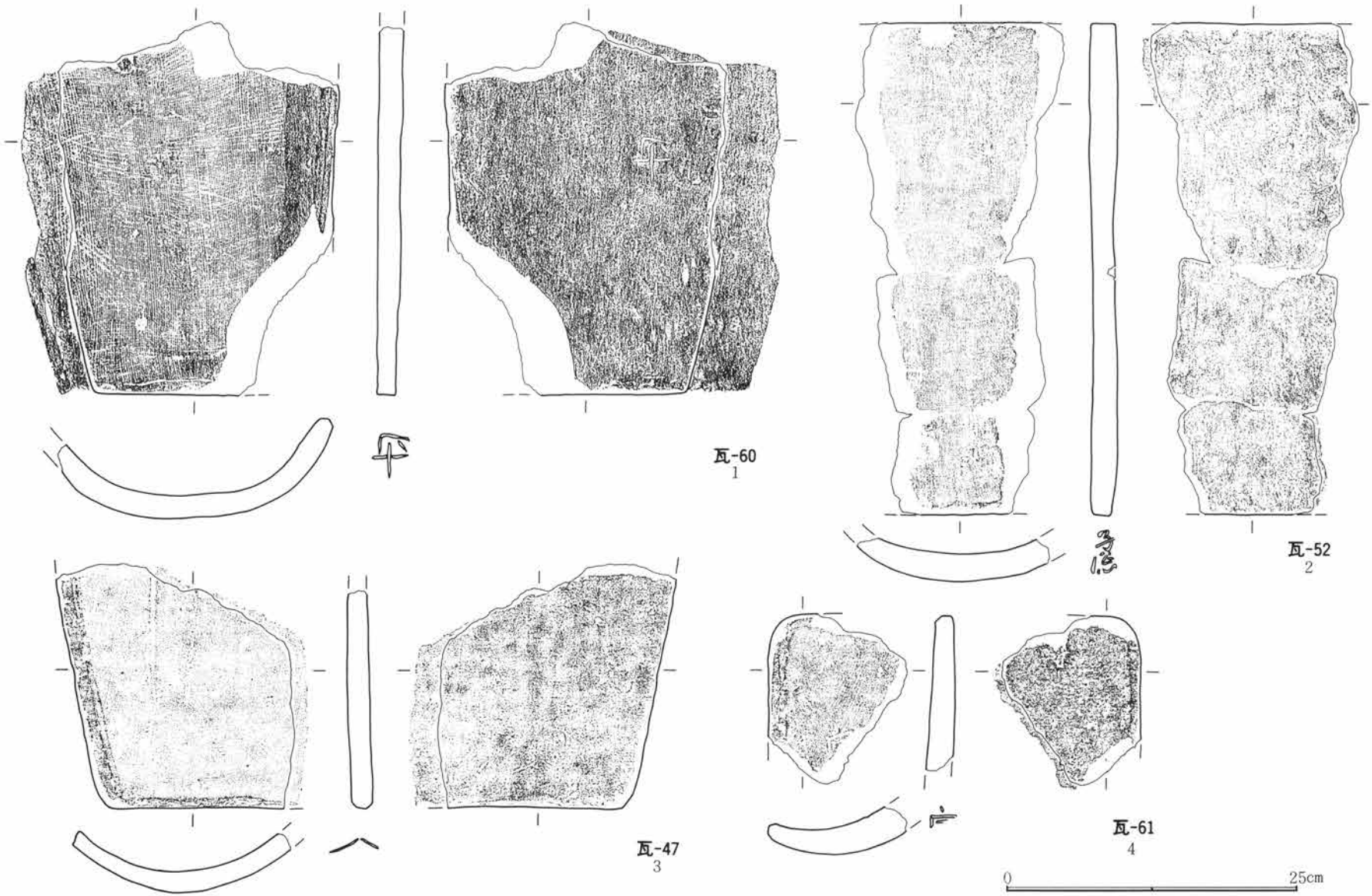
第150図　Ｄ区第１号井戸跡出土遺物実測図



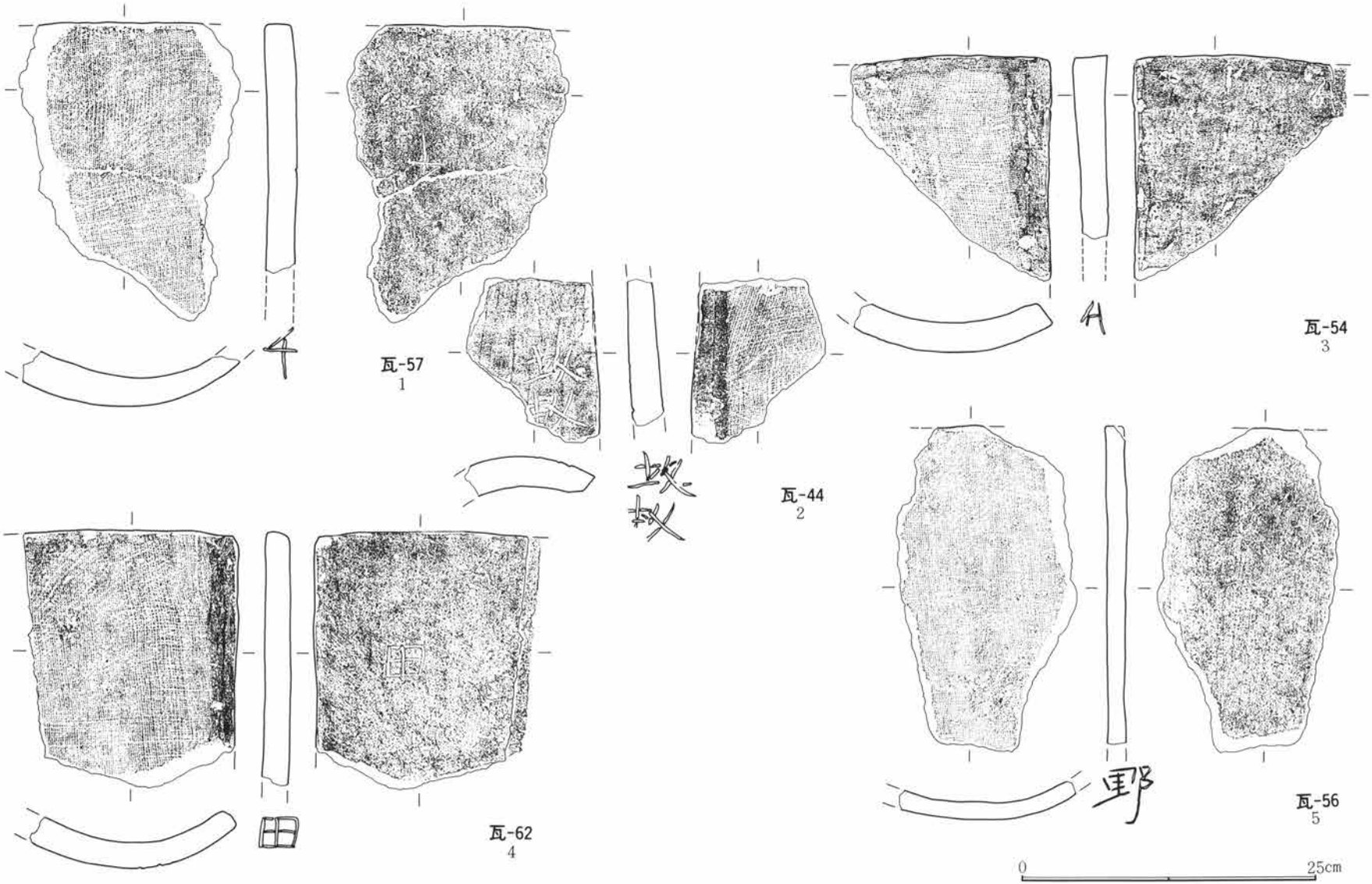
第151図　Ｄ区第１号井戸跡出土遺物実測図



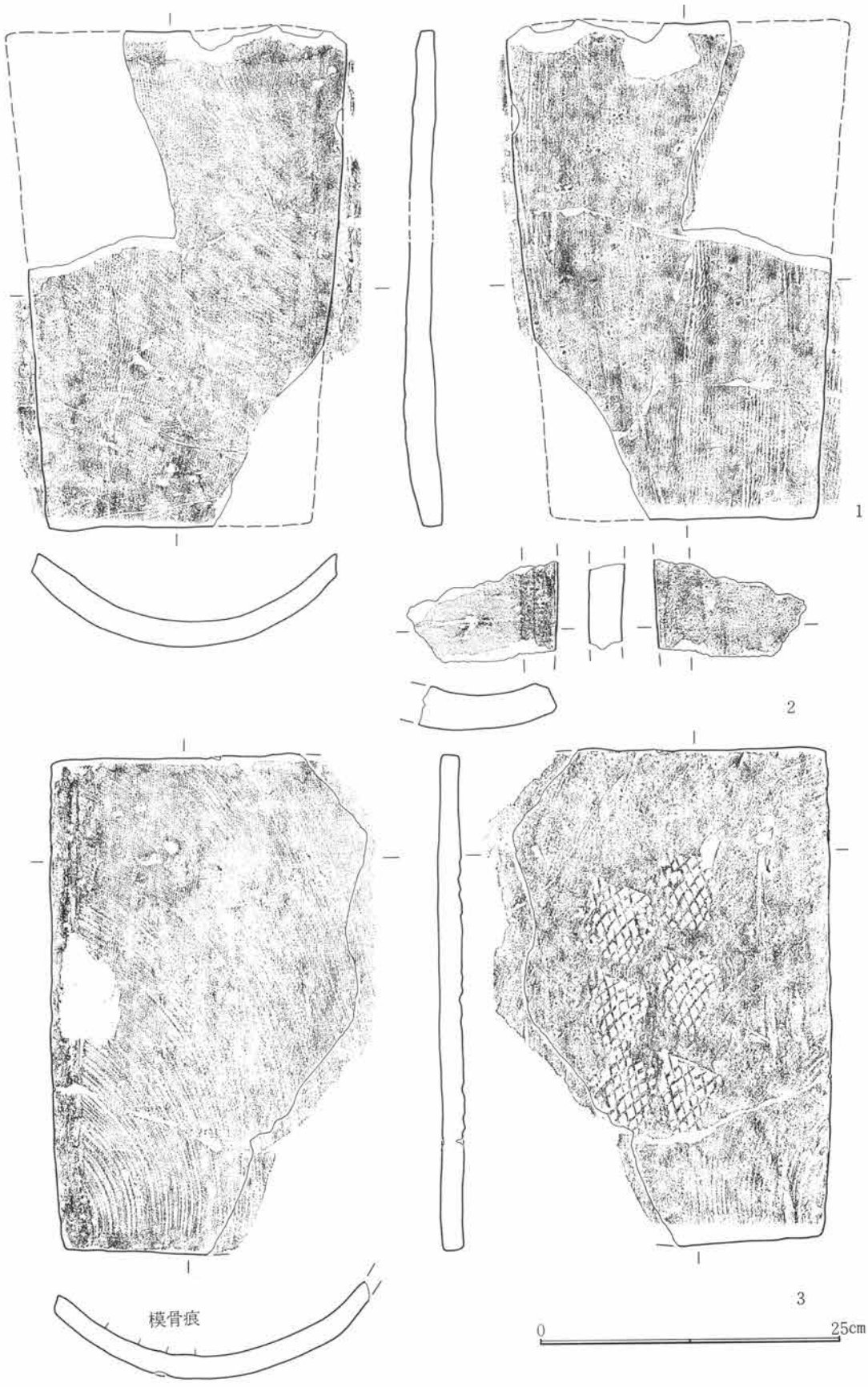
第152図　D区第１号井戸跡出土遺物実測図



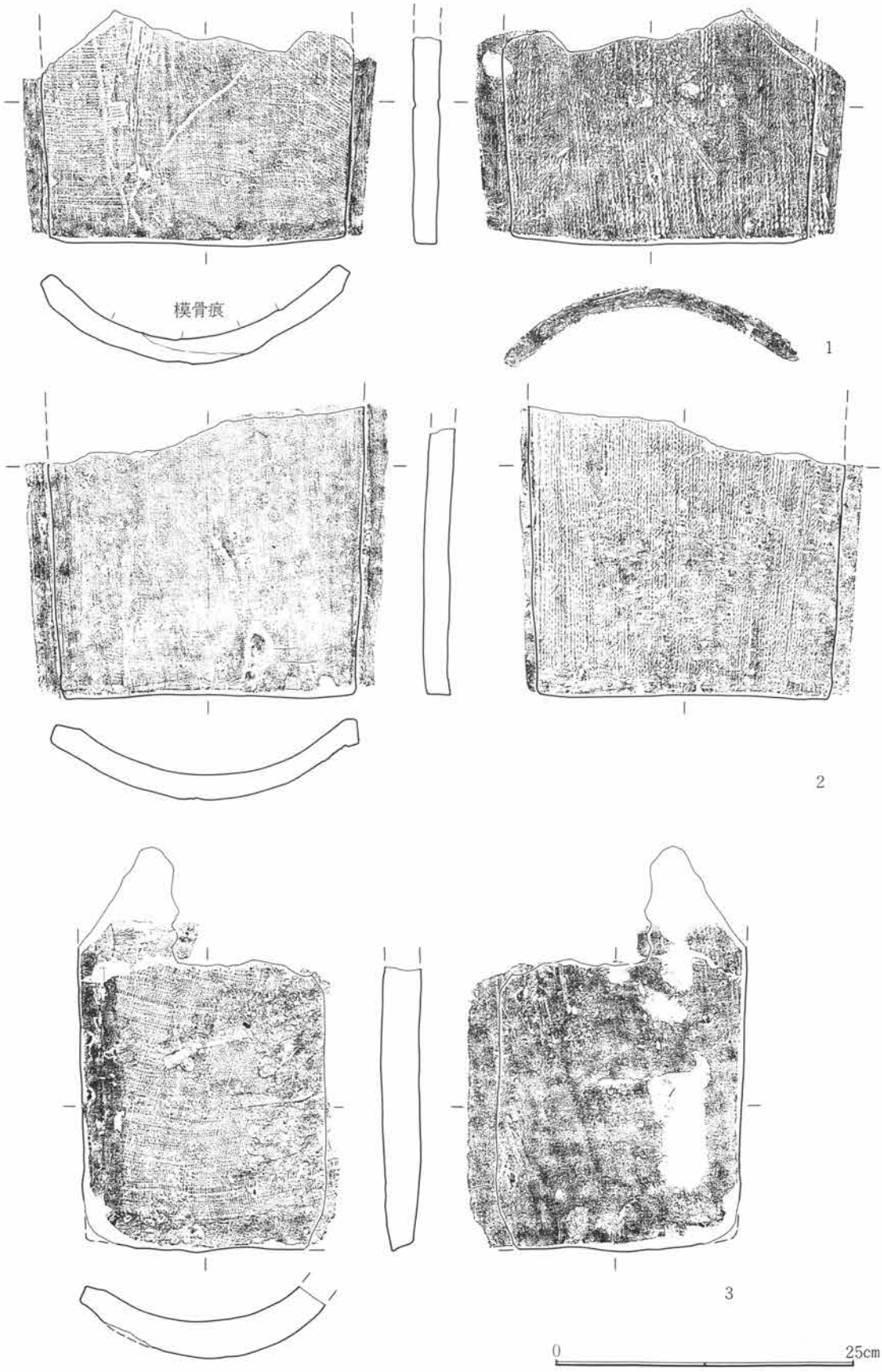
第153図　D区第1号井戸跡出土遺物実測図



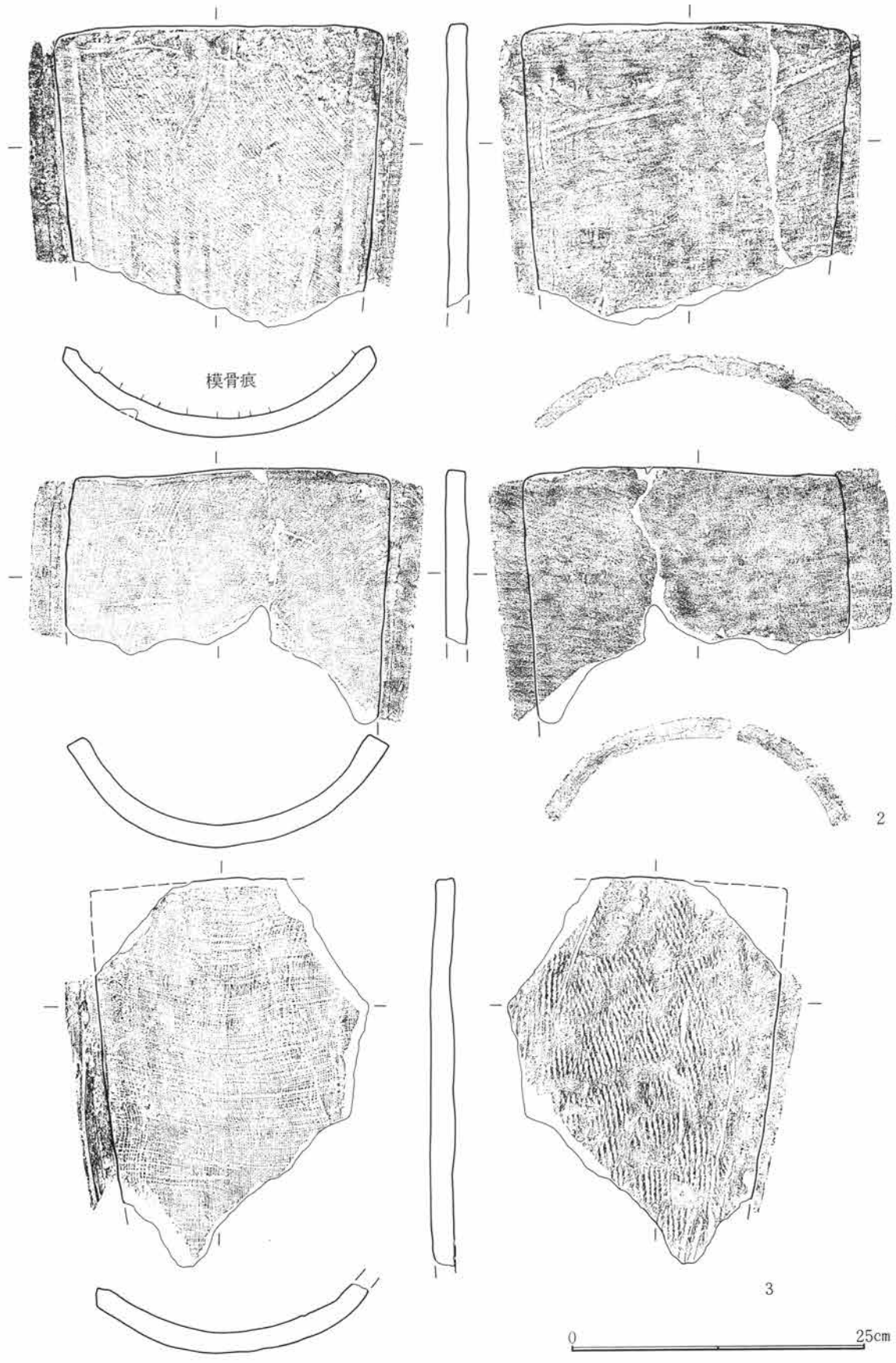
第154図　D区第１号井戸跡出土遺物実測図



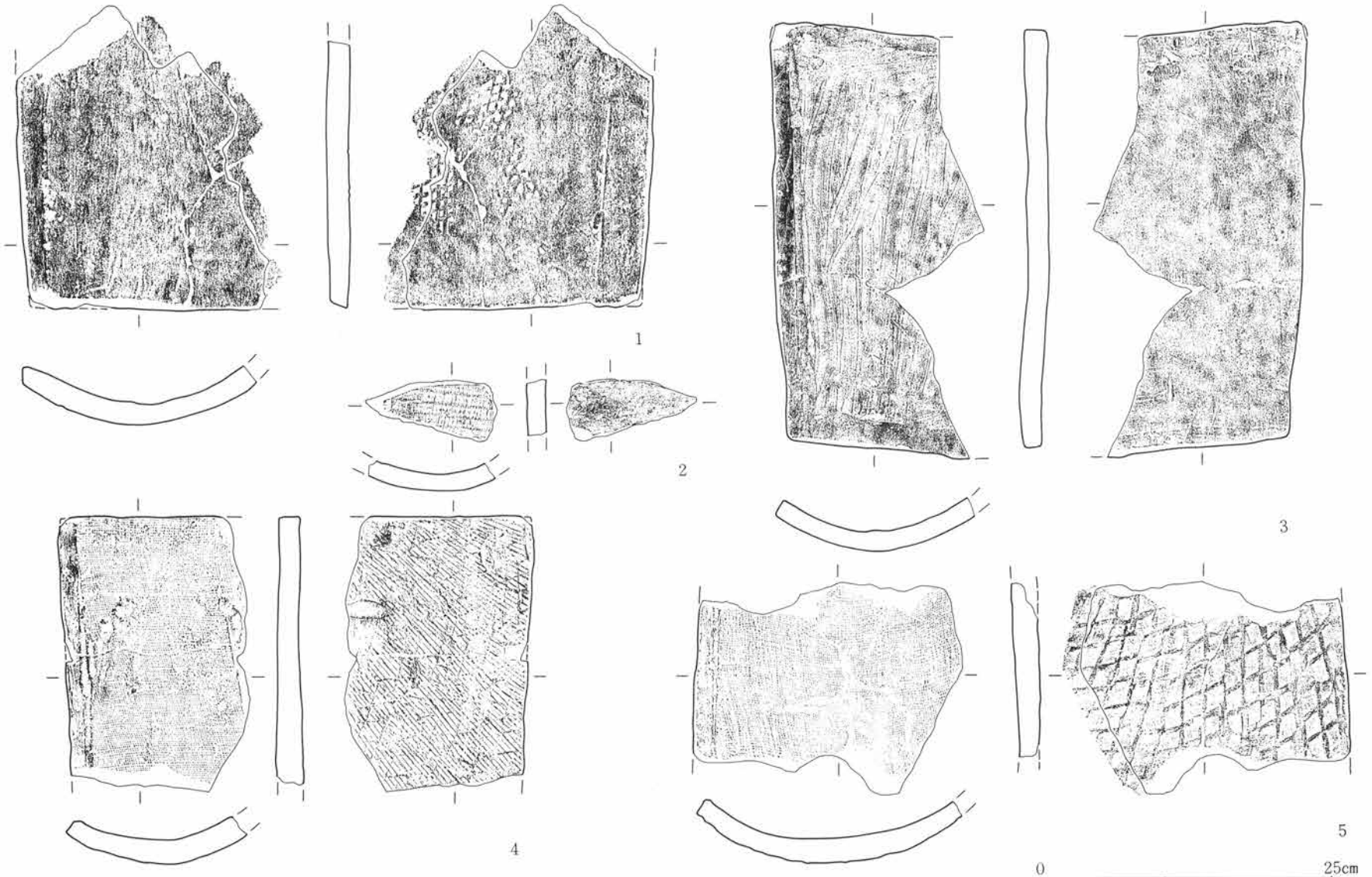
第155図　D区第1号井戸跡出土遺物実測図



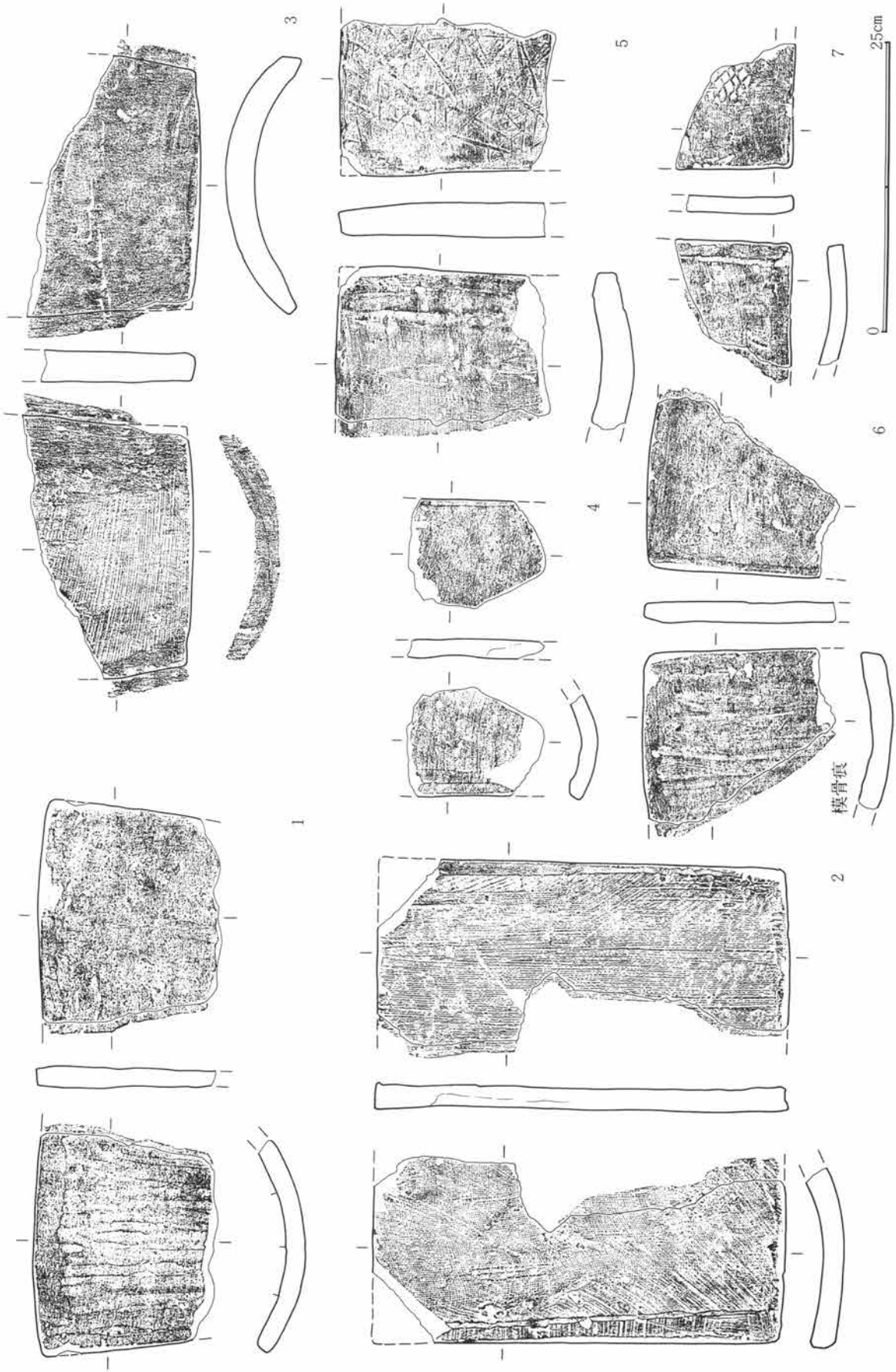
第156図　Ｄ区第１号井戸跡出土遺物実測図



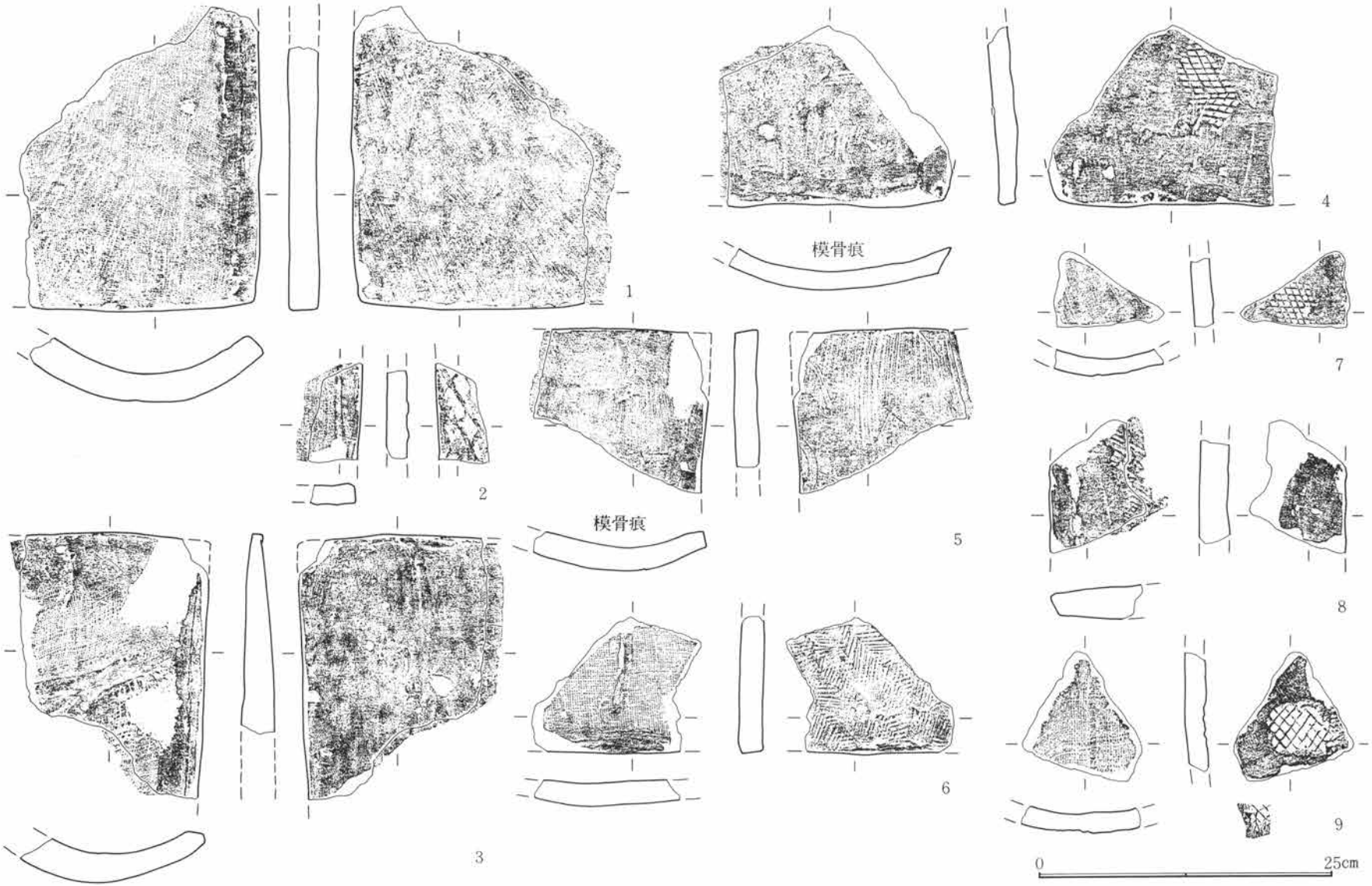
第157図　Ｄ区第１号井戸跡出土遺物実測図



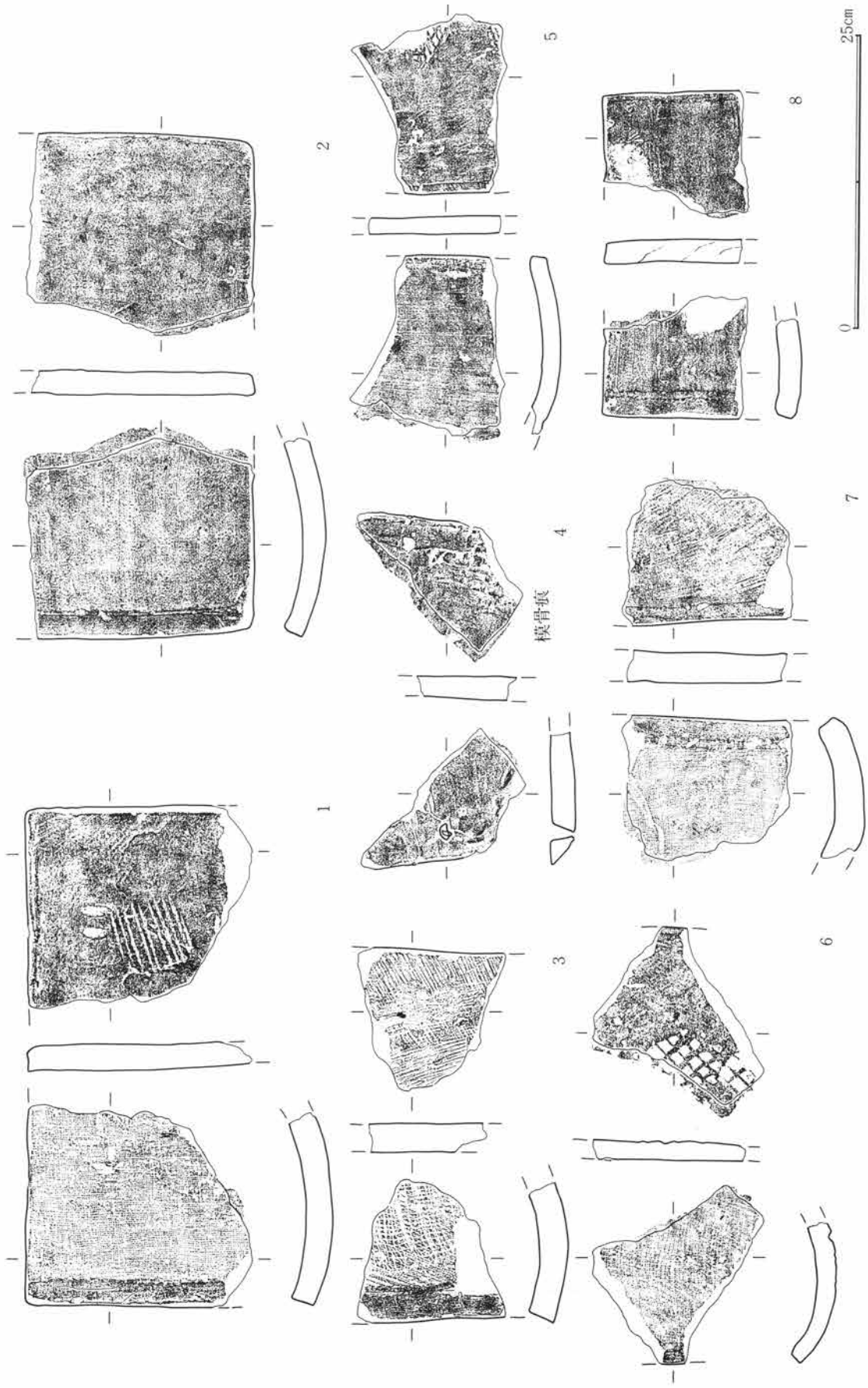
第158図　D区第1号井戸跡出土遺物実測図



第159図　D区第1号井戸跡出土遺物実測図

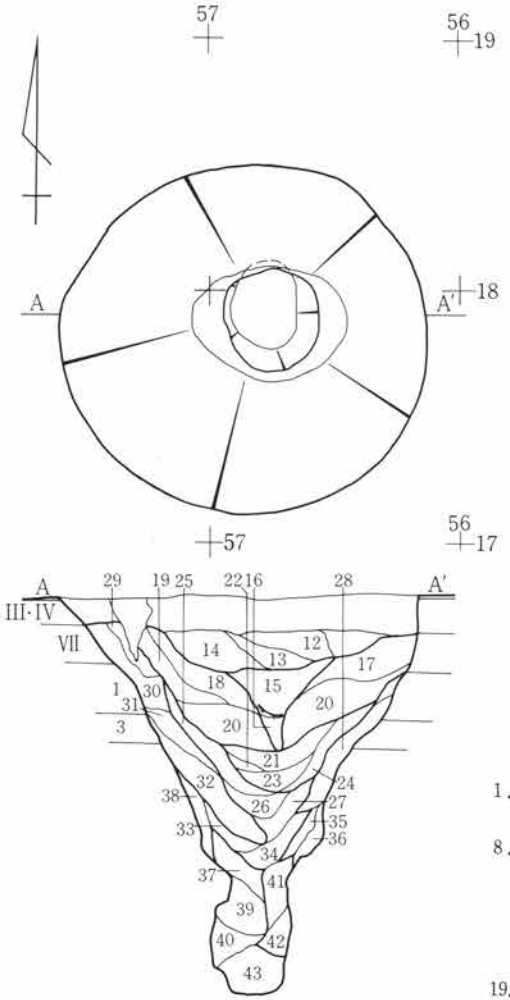


第160図　D区第1号井戸跡出土遺物実測図



第161図　D区第1号井戸跡出土遺物実測図

遺構名称	D区第３号井戸	位置	17・18—D—56・57 グリット内			平面形態	円形
規模(m)	地上径2.93	最細径0.75	最大径2.93	深度3.18	湧水位深度	夏期 —	・冬期 —
アグリ部最大径	夏期 —	・冬期 —	湧水層	？	耐水層		



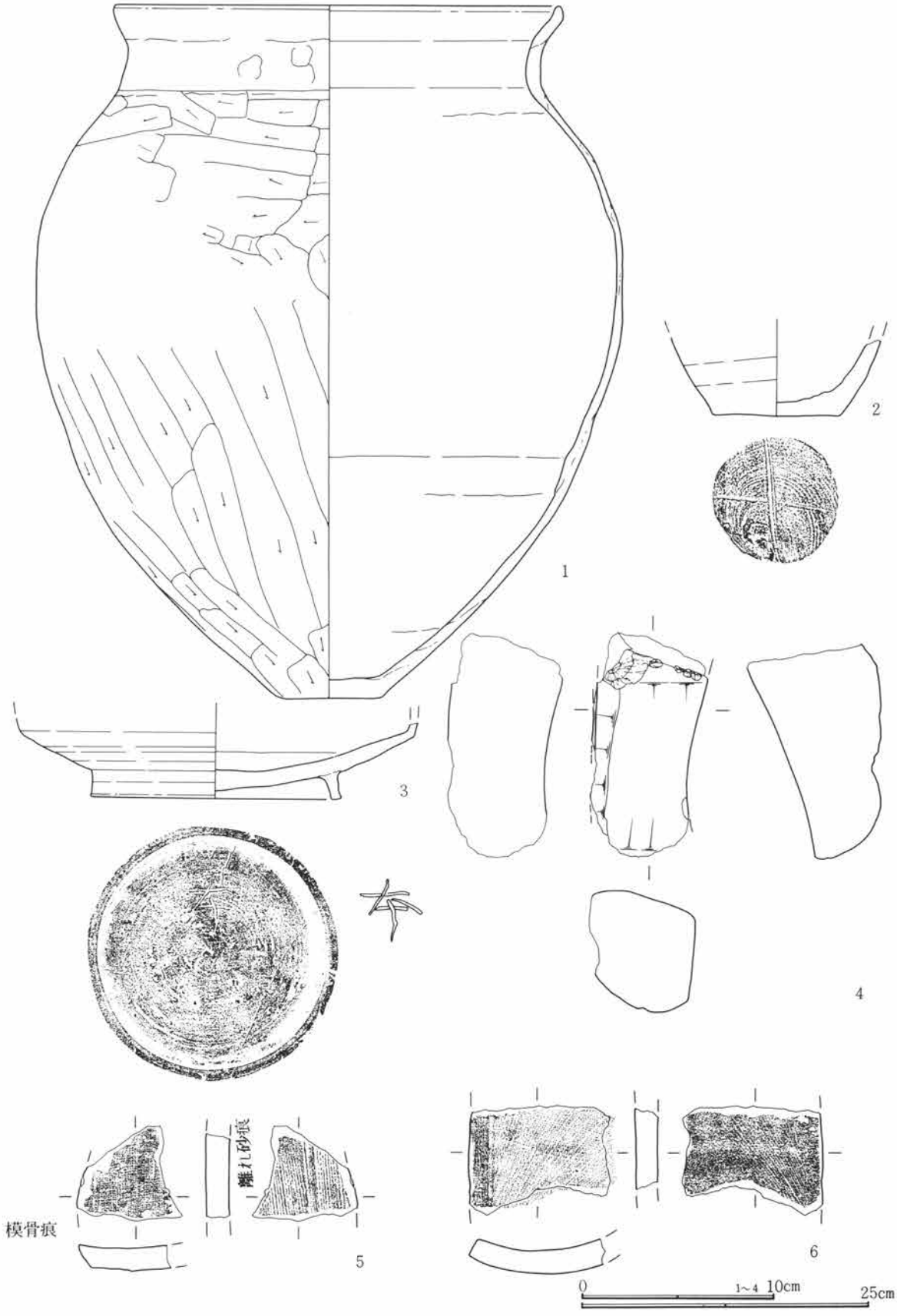
土層断面図外形線は、調査時おいて土層観察面が垂直に出来なかったため、不整合の状態である。

第163図　D区第３号井戸跡実測図

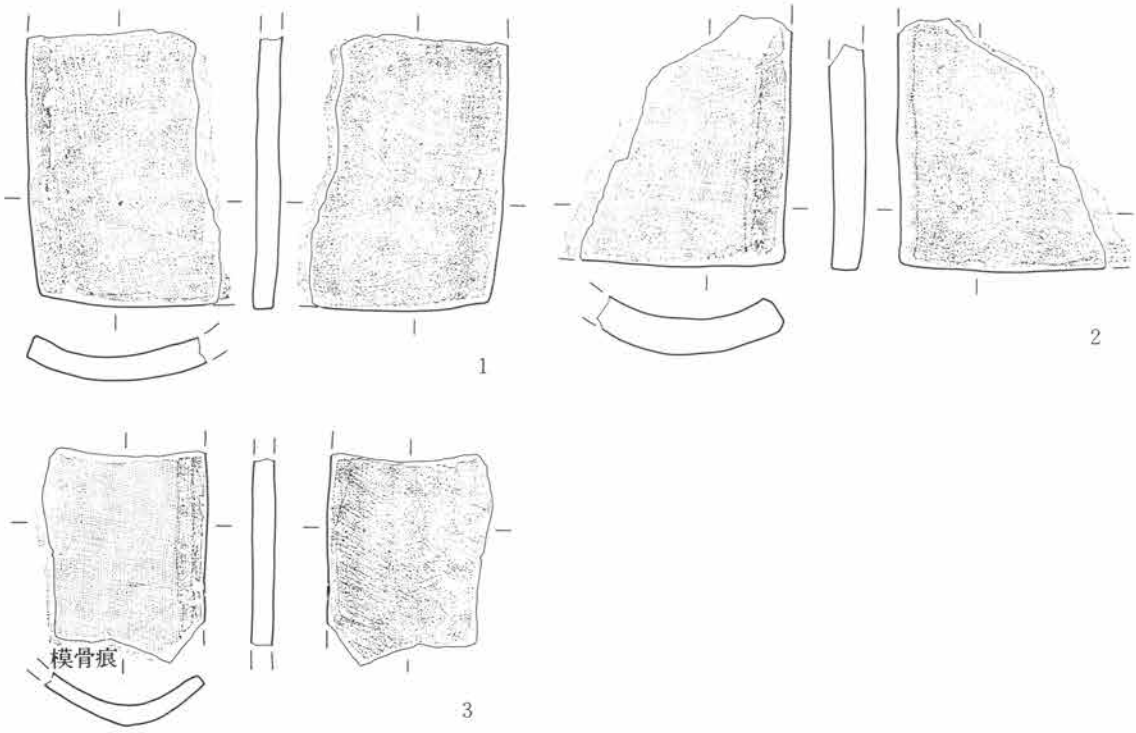
所　見　当井戸跡は、第10号住に切られている。また、本跡が井戸として機能したのかという大疑問点がある。すなわち、掘り込みの深度である。当遺跡内で検出されている井戸跡の深度は、5.5m～７m程（古代～中世）であり、この深度に対し、当井戸跡は3.15mとほぼ平均値の半分程である。そして、湧水の痕跡を残す〝アグリ〟のオーバーハングを成す部分が顕著でなく、非常に微弱である。この点は、湧水があったとしても下半部に降雨期にのみにしか水の溜る状況が考え難く、土層断面からも水の溜りが有ったとは認め難い点が指摘出来る。このことから、当跡は掘削段階では井戸としての着手であったものの、途中で放棄したものと考えられる。　また、土層断面15・16層中には第164図—１・３が埋設された状態で出土しており、同図—３は同図—１の蓋として逆位の状態で出土している。そして、覆土は全体が埋設された状況を呈している。時期は９世紀中頃と考えられる。　（木津）

層　序

1．褐色シルト。　2．褐灰色火山灰。　3．灰色シルト。　4．褐灰色砂質シルト。　5．４層の粗粒。　6．褐灰色火山灰。　7．灰褐色粗砂。
8．７層の細粒。　9．７層のシルト質。　10．褐灰色砂層。　11．褐灰色シルト。　12．粗粒状Ｃ軽石多量。　13．粒状Ｃ軽石少量。　14．粒状Ｃ軽石少量・小塊状Ⅶ層土含有。　15．粗粒状Ｃ軽石含有・塊状炭化物多量混入（土師器甕・須恵器皿出土）（祭祀器埋納の掘り方）。　16．15層での炭化物の含有が減量。　17．粒状Ｃ軽石多量混入・小塊状Ⅶ層土含有。　18．17同質。
19．粒状Ｃ軽石含有。　20．粒状Ｃ軽石多量混入・小塊状Ⅶ層土若干。
21．粒状Ｃ軽石少量・小塊状Ⅶ層土少量含有。　22．粒状Ｃ軽石含有・小塊状Ⅶ層土多量混入。　23．粒状Ｃ軽石含有・小塊状Ⅶ層土含有。
24．粒状Ｃ軽石微量・塊状Ⅶ層土斑状混入。
25．Ｃ軽石無・塊状暗褐色含有・粗大塊状Ⅶ層土多量混入。
26．Ｃ軽石無・塊状暗褐色土含有・粗大塊状Ⅶ層土多量（25層より多い）。
27．Ｃ軽石無・粗大塊状Ⅶ層土少量・塊状暗褐色土混入。
28．
29．
30．
31．　塊状Ⅶ層土主体。混入量・流れ込みの状態により分層される。
32．
35．
36．
33．粒状Ｃ軽石含有・塊状Ⅶ層土含有。　34．33同質（流れ込みの方向が異なる）。
38．33近質。
37．
39．　塊状Ⅶ層土主体。混入量・流れ込みの状態により分層される。
40．
41．粒状Ｃ軽石含有・塊状Ⅶ層土含有。
42．粒状Ｃ軽石含有・塊状Ⅶ層土多量混入。
43．塊状Ⅶ層土多量。



第164図　Ｄ区第３号井戸跡出土遺物実測図



第165図　D区第３号井戸跡出土遺物実測図

土　坑

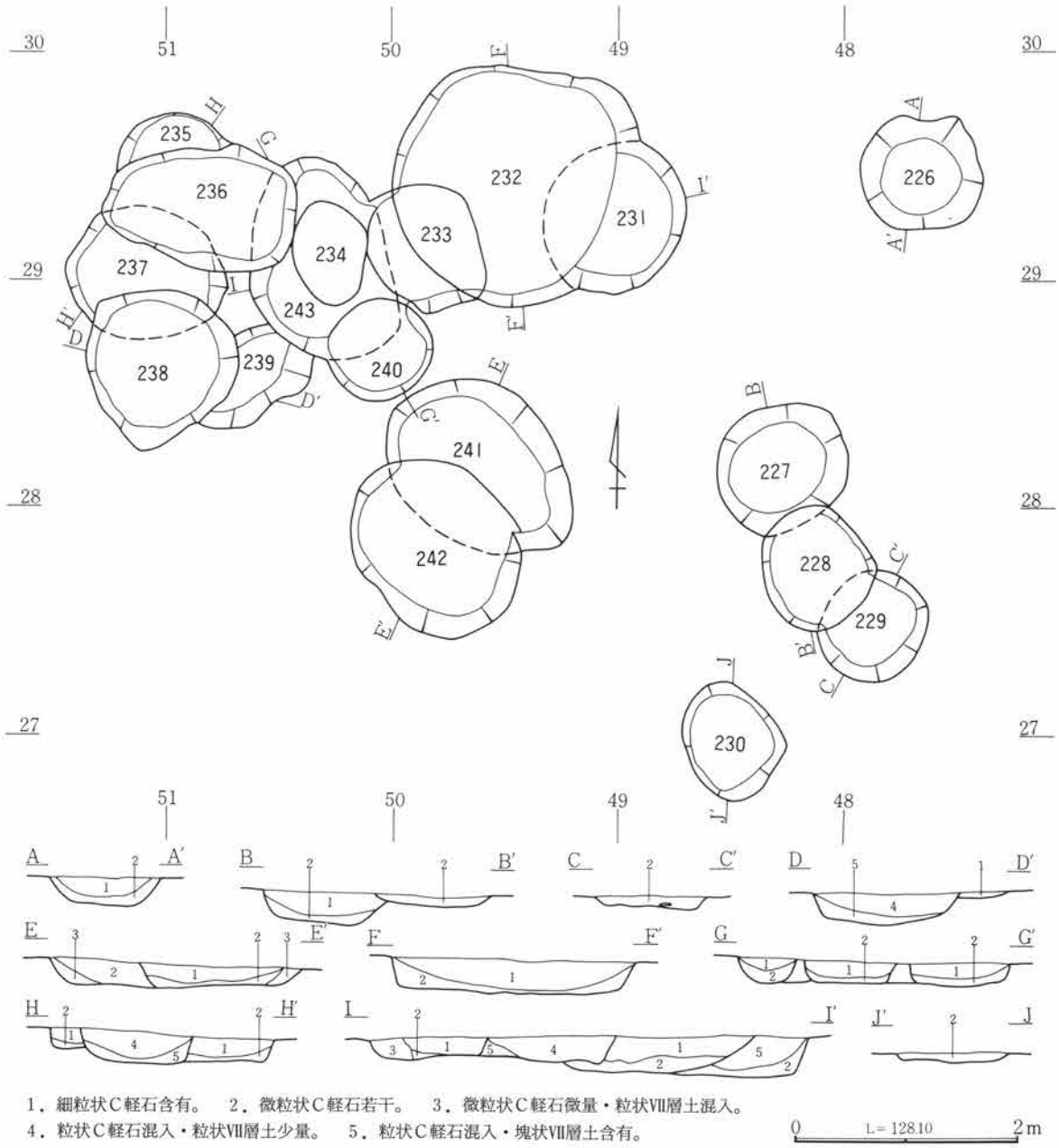
当該の報告対象区内から検出された土坑・ピットは総数427基を数える。この内鎌倉時代以降と考えられるものに就いては第１分冊中で報告した。この数を除外した404基が、当該期の土坑数と判断される。また、土墓として第１分冊中に報告した２基を含めた数値である。

検出された当該期の土坑は、形態上円形を主体とし楕円形・長楕円（隅丸長方形）が検出されている。これらの土坑は、形態上の外に規模の点でも分類出来、大形・中形・小形・極小形にさらに分類出来る。このうち、極小形はピットとして認識される可きもので、土坑としては、上述の形態・規模の点では上述の分類上で最大限９種類に分類される。

分類状態では、群在する状態と散在する状態が認められる。この内前者は、40～45－Ｃ－40～50グリッド内・15～30－Ｄ－35～42グリッド内・10～17－Ｄ－42～48グリッド内・12～16－Ｄ－53～56グリッド内・22～27－Ｄ－50～55グリッド内・45～50－Ｄ－35～48グリッド内の６群が看取される（これらの６群のものを順に１～６の数字を冠し１群～６群と呼称させる）。これらの群は、群毎に特色が有る。１群は、ピットを主体に分布状態が弧状を呈する（このピット群は第１分冊中でも図示したが、明確な時期が把握されていない）。第２群は、大～小形で、円形を呈する土坑が主体である。第３群は、中規模の土坑若干とピットを主体にした群。第４群は、調査区域外に延びると思われるが、楕円形の土坑を主体に構成される。第５群は、全体の分布域は小さいが、土坑を主体に若干のピットが含まれる。第６群は、ピットと小形土坑から構成されている。これらの群在する部分は、住居が検出されていない点もあり、住居が検出されている部分では、土坑と住居との重複も想定されるが、これを明確にすることは殆ど不可能に近い。一方散在する土坑は、Ｄ区内南西側に所在する傾向が認められるものの、構成土坑・ピットの特徴は認め難い点が特徴ともいえる。

これらの土坑で、遺物が出土したものは少数であって、完形を伴うものとしては唯一１基であった。出土

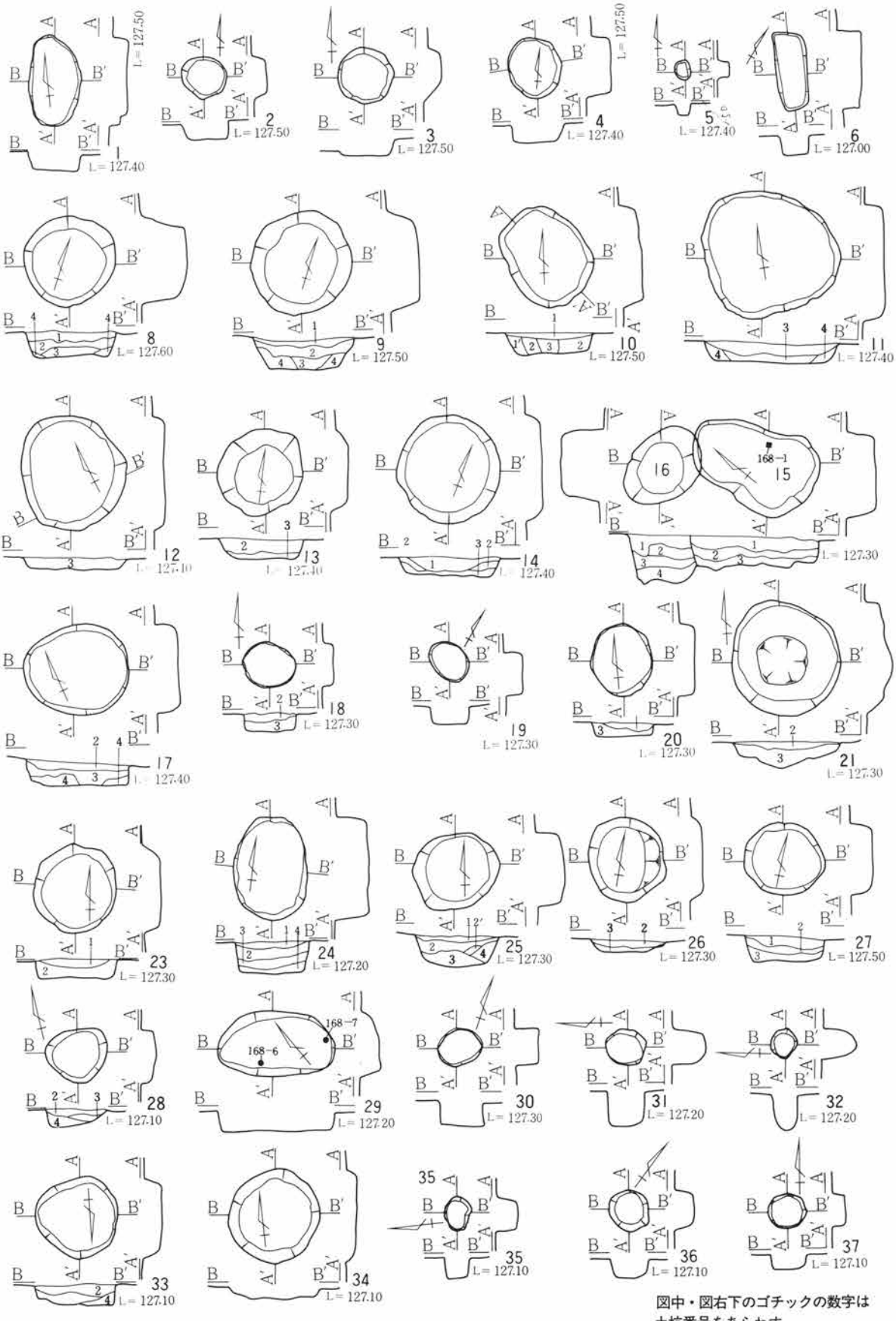
遺物からの点では、9世紀前半以前のものは非常に少なく(瓦は除外して)、いずれも9世紀後半以降のものであった。この点からは、住居が構築される段階と考えられ、これらの土坑は、住居の存在期の所産と推定される。　(木津)



第166図　D区土坑実測図

土坑層序（第167～169図）

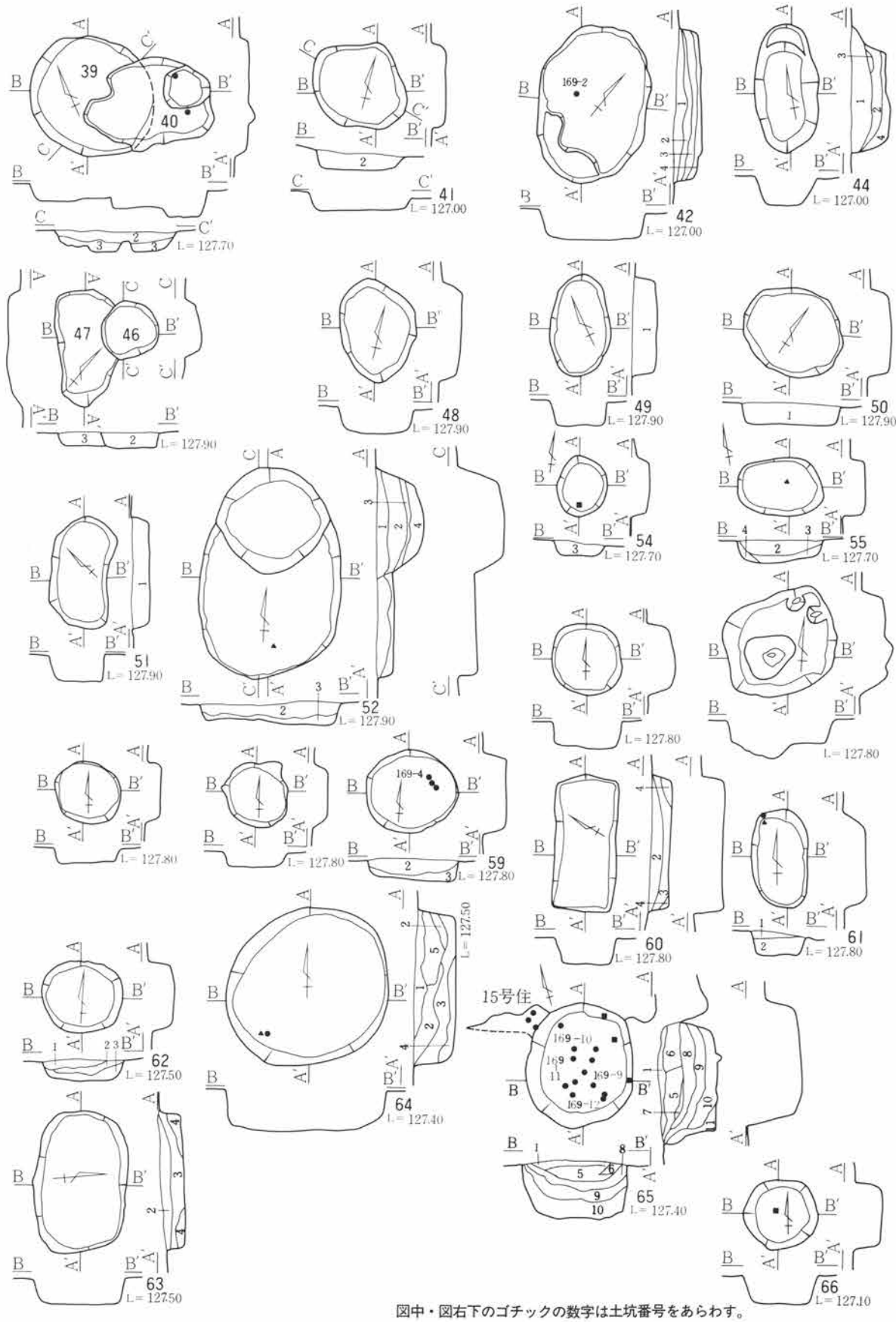
1．粒状C軽石混入。　2．細粒状C軽石含有。　3．微粒状C軽石若干。　4．微粒状C軽石微量（Ⅶ層土の混入認む）。　5．粒状C軽石含有・塊状Ⅶ層土多量混入。　6．5近質。　7．粒状C軽石若干・粒状炭化物混入。　8．細粒状C軽石混入・小塊状Ⅶ層土混入。　9．細粒状C軽石含有。　10．細粒状C軽石微量・Ⅶ層土混入。　11．微粒状C軽石微量・粒状Ⅶ層土混入。



第167図　D区土坑実測図

図中・図右下のゴチックの数字は
土坑番号をあらわす。

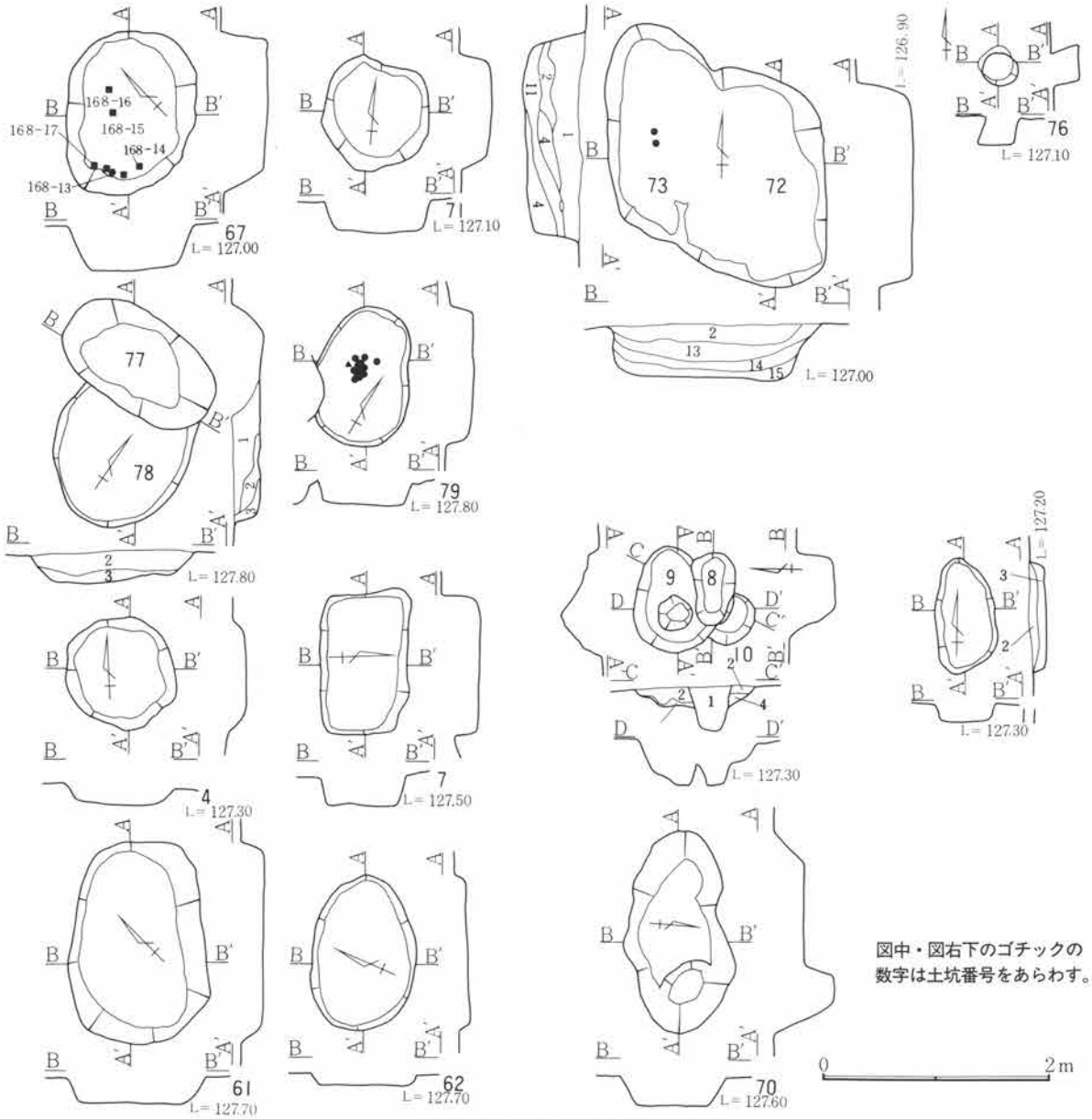
0　2m



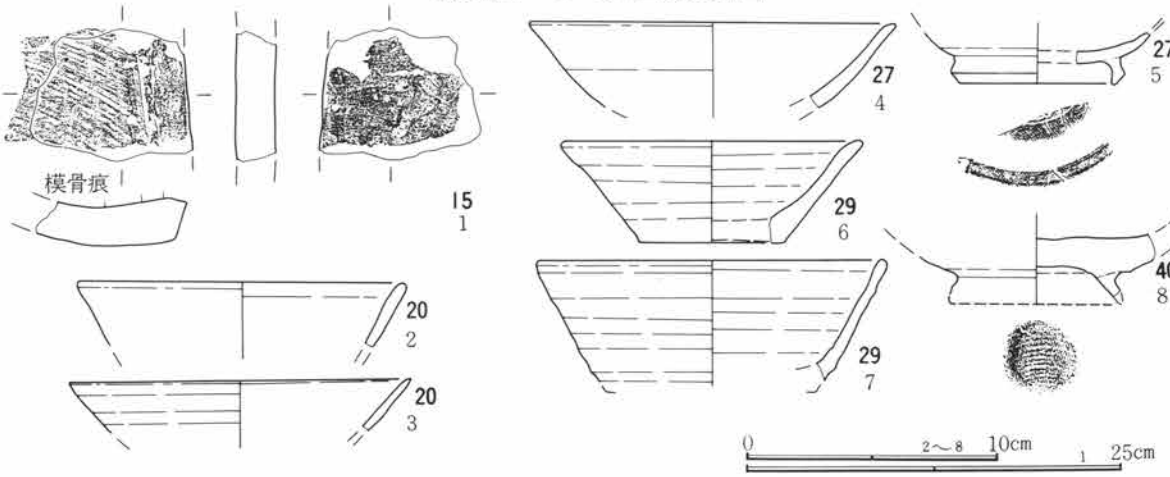
図中・図右下のゴチックの数字は土坑番号をあらわす。

第168図　D区土坑実測図

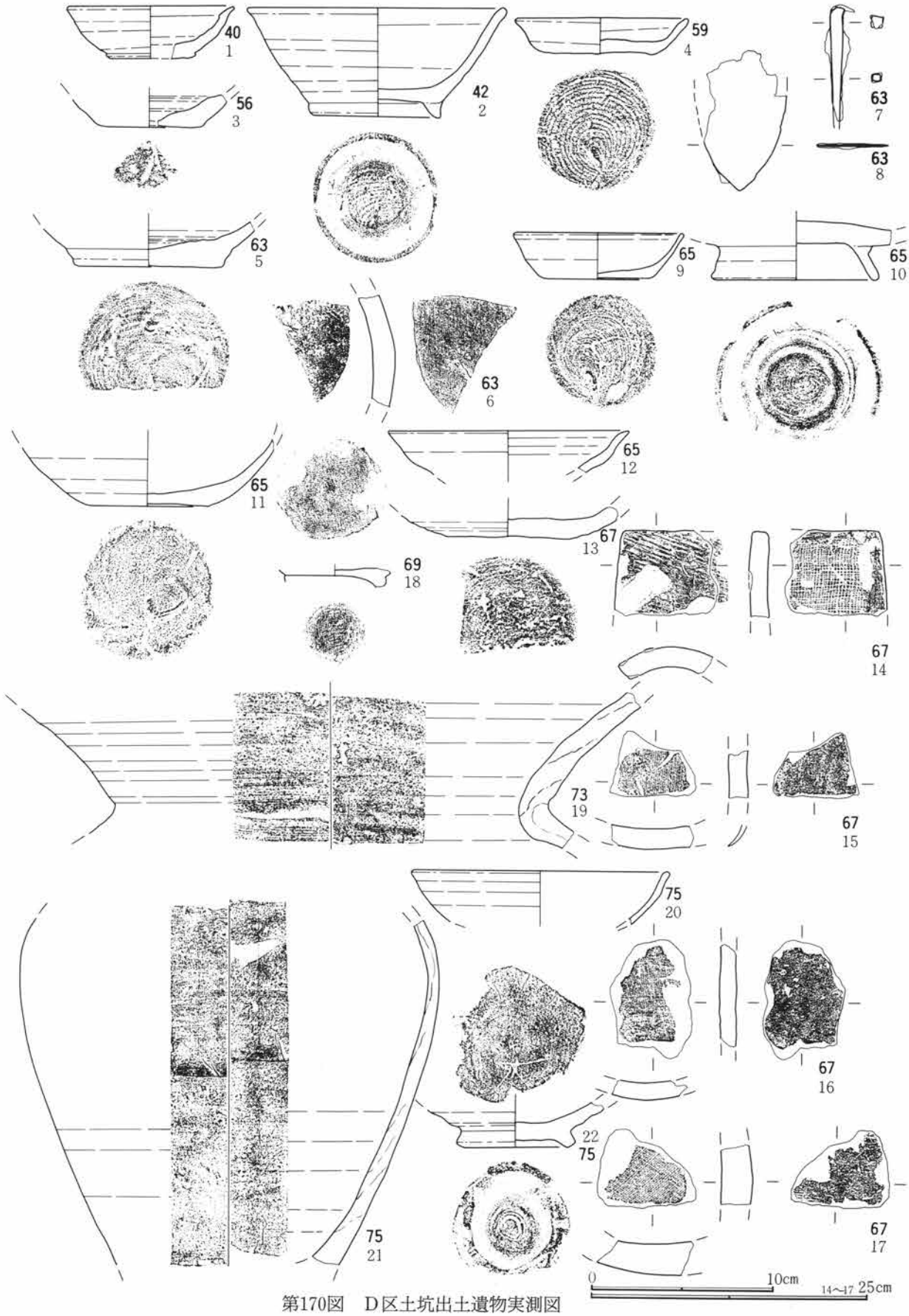
0　2m



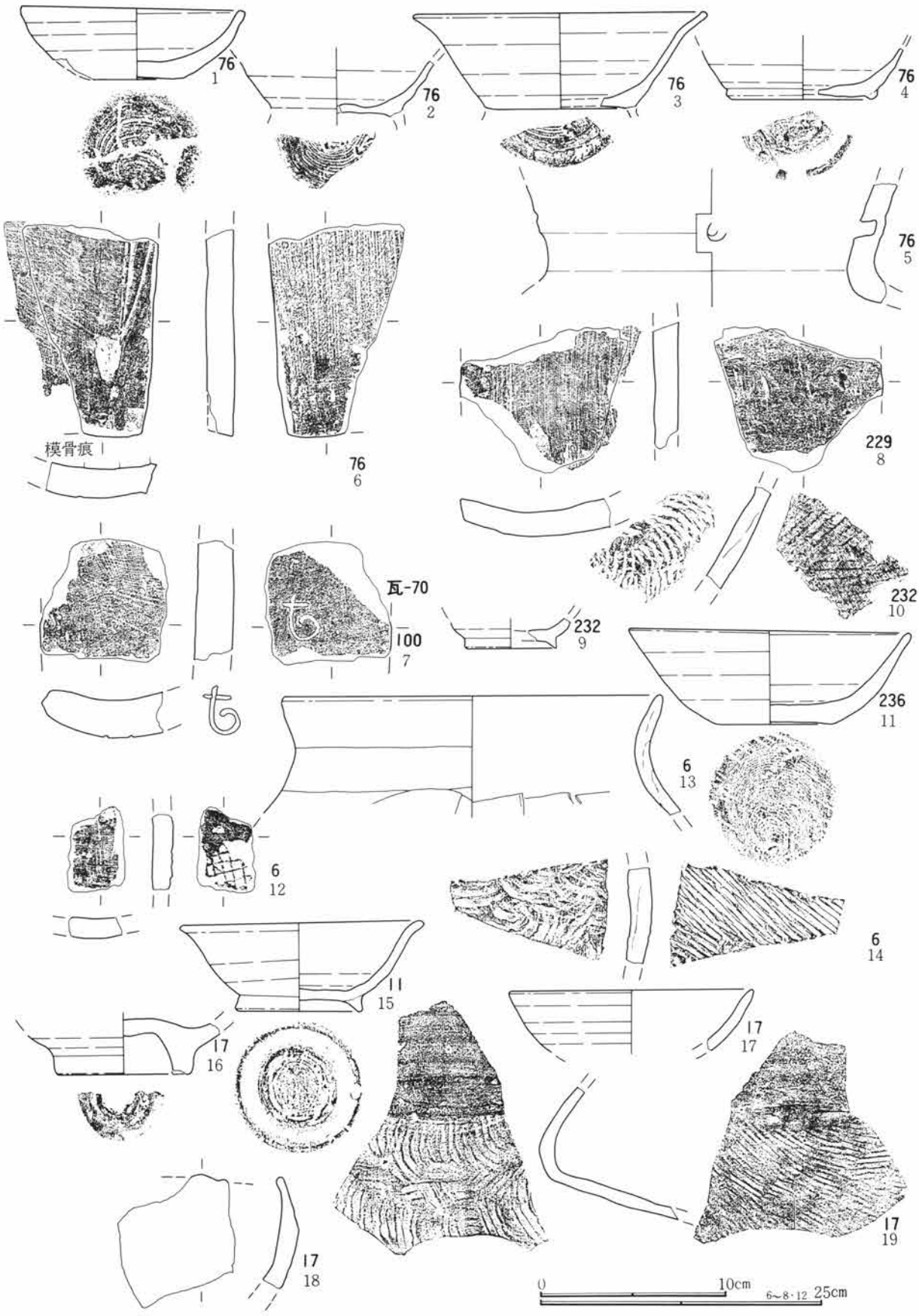
第169図　C・D区土坑実測図



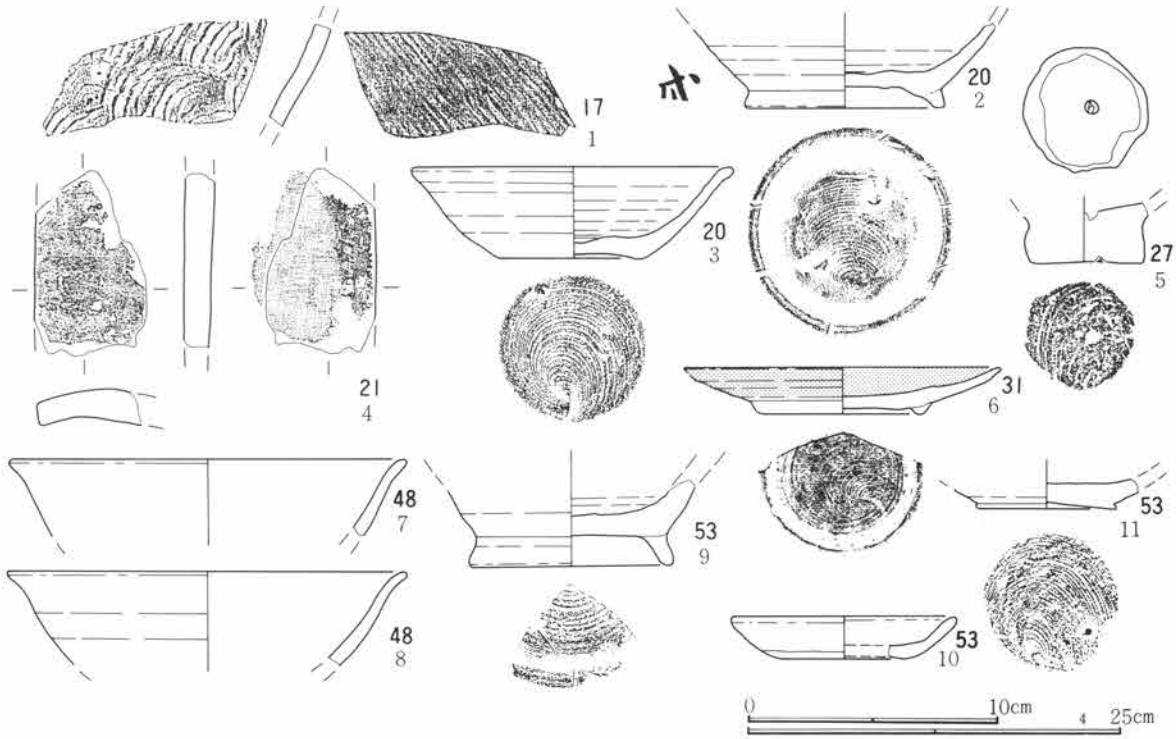
第169図　D区土坑・出土遺物実測図



第170図　D区土坑出土遺物実測図



第171図　C・D区土坑出土遺物実測図



第172図　C区土坑出土遺物実測図

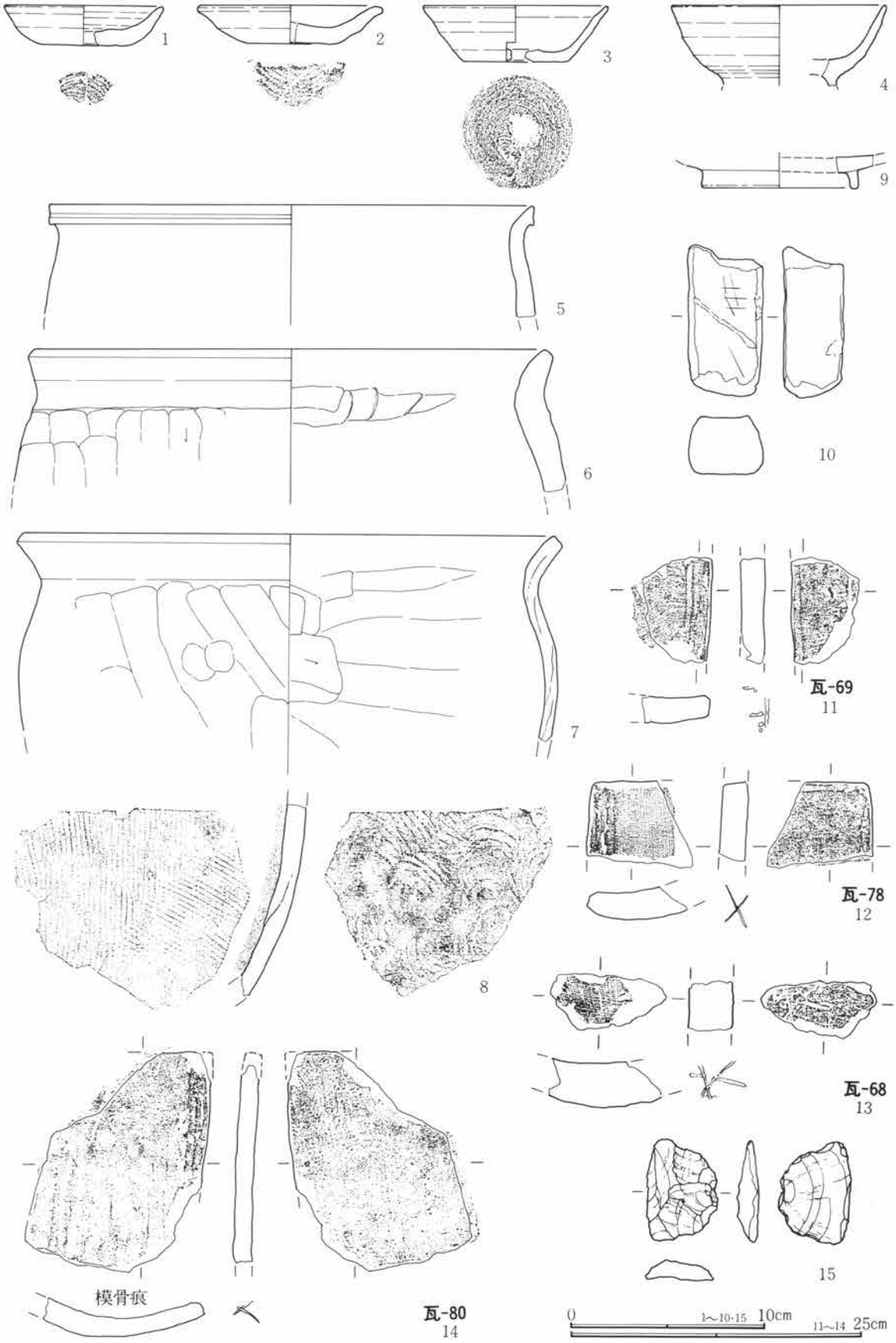
遺構外出土遺物

遺構外出土遺物として扱った遺物は、表土層・文化層の撤去時出土した遺物を主体とする。調査自体は、各層毎に遺構存否の確認作業を実施したため、各文化層毎の把握は成されているが、II層は直下のB軽石以降の堆積であることから主体を成す当該期の文化層はIII層になる。

当該期の遺構の確認は、III層上面で実施し、無理な部分はIII層下層部乃至IV層上面で実施した。遺構外遺物はこの際に出土したものが多い。これは、確認面検出に重機を用いた点に起因するが、予め住居が認定されている場合、この確認面検出に伴い出土した遺物はその住居の所属とした。この場合、その住居の時期より新しいと考えられるものも多く含んでいる場合が多々あった。また、この逆に、重機により遺構確認面検出時に出土した遺物で、下位の住居の存在が認められる以前の段階では、その遺物は文化層扱いとした。この点は、遺構とした中に元来は住居の遺物であった可能性が大きいものも含まれている。

上述の様に遺構外として扱った遺物は、遺構確認時乃至それ以前に出土した文化層扱いにした遺物である。また、今次図示した遺物は土器類を主体とした。このため、土器類以外の施釉陶器・瓦は大半が未掲載になっている。施釉陶器も出土量が多く、また、瓦も多い。施釉陶器については後年図化掲載する考えでいる。

瓦は膨大な量で出土している。これらの瓦のうち、文字・瓦当瓦に就いては掲載したが、大形片・破片等は図示していない。また、図化をはかる場合、基準としうる状況が明確でないため、整理担当としては、技法上で特徴のあるものを考えている。また、破片資料は、観察表を作成し、そのデーターを集約したものをグラフ等を用い提示したいと考えている。しかし、量的に膨大である点から、観察対象となる瓦の選定に苦慮したが、一応、側部乃至端部の残存するものをその対象とした。これにより、大形の破片であってもこの両者が残存しない場合は観察対象から除外した。本区を含め後年その結果を提示したい。　　（木津）



第173図　Ｄ区遺構外出土遺物実測図

文字瓦・瓦当瓦

文字瓦・瓦当瓦は、各出土遺構の中で図化掲載した。しかし、図化したものは、瓦の形状・内外面の状態を拓影により表現することを主眼に置き、縮尺を５分の１とした。また、瓦当文様も同様で、前記の点を主眼に置き図化した。しかし、この状態では、瓦当文様の詳細に就いて判読が困難となっている。そして、破片の場合同笵認定も困難な図である点から別図として転載した。

本項の文字瓦は、文字の部分のみを拓影図で示し、縮尺は２分の１とした。そして、文字の判読が出来たものは右端の〝読〟の部分に示したが、不確実なものは〝か〟を付した。また、文字の一部分のみであったり、読み方が不分明なものは〝判読不明〟と記した。

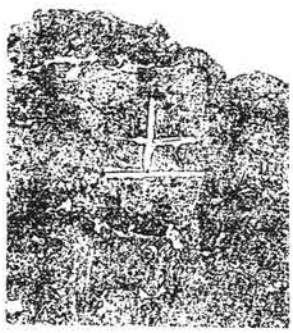
〝判読不明〟としたものの中には、単に文字として認識し得ないものも含まれ、多分に箆傷と考えられるものも含まれている。

文字瓦として本項で扱ったものは86点ある。この中には、各遺構出土のものでも、その遺構毎の出土遺物として図化しなかったものも含まれている。これは、単に５分の１という縮尺で掲載しても文字に対する意義が失われる可能性が有った点にある。

今次の文字瓦の文字資料で類例とし対象可能なものは、備考欄に示した。この備考欄に示した類例は、以下に示す参考文献に図化・掲載されているものである。

参考文献
1　相川龍雄『上野國分寺文字瓦譜』　1934（昭和９年）
2　『史跡上野国分寺跡―寺域確認発掘調査概要―』　群馬県教育委員会　1981（昭和56年）
3　『史跡上野国分寺跡　発掘調査概要　２』　群馬県教育委員会　1982（昭和57年）
4　『史跡上野国分寺跡　発掘調査概要　３』　群馬県教育委員会　1983（昭和58年）
5　『史跡上野国分寺跡　発掘調査概要　４』　群馬県教育委員会　1984（昭和59年）
6　『史跡上野国分寺跡　発掘調査概要　５』　群馬県教育委員会　1985（昭和60年）
7　『史跡上野国分寺跡　発掘調査概要　６』　群馬県教育委員会　1986（昭和61年）
8　『史跡上野国分寺跡　発掘調査概要　７』　群馬県教育委員会　1987（昭和62年）
9　『史跡上野国分寺跡　発掘調査概要　８』　群馬県教育委員会　1988（昭和63年）
10　『上野国分僧寺・尼寺中間地域―関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第20集―』　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団　1988（昭和63年）

瓦-1	出土位置	D区１号住
挿図番号	－	写真図版　102
類　男瓦	生産地	吉井窯跡群



読　上

備考　拓本では「土」と見えるが、焼成後の器面の剝落による。工具先端は尖る。

瓦-2	出土位置	D区２号住
挿図番号	24－6	写真図版　102
類　男瓦	生産地	吉井窯跡群

読　判読不能

備考　文字の一部。左のはらい部分か。

瓦-3	出土位置	D区３号住
挿図番号	26－4	写真図版　102
類　女瓦	生産地	吉井窯跡群

読　成

第174図　文字瓦類(1)

瓦-4	出土位置	D区６号住
挿図番号	30－４	写真図版 102
類 男瓦	生産地	吉井窯跡群

読　田

備考　工具先端は平たい。

瓦-5	出土位置	D区６号住
挿図番号	30－５	写真図版 102
類 女瓦	生産地	吉井窯跡群

読　子

備考　「子」の左上半部。

瓦-7	出土位置	D区10号住
挿図番号	41－11	写真図版 102
類 女瓦	生産地	吉井窯跡群

読　口か田

備考　「口」・「田」の類と考えられ、その右下隅部分である。

瓦-8	出土位置	D区10号住
挿図番号	41－13	写真図版 102
類 男瓦	生産地	吉井窯跡群

読　円管刺突による記号

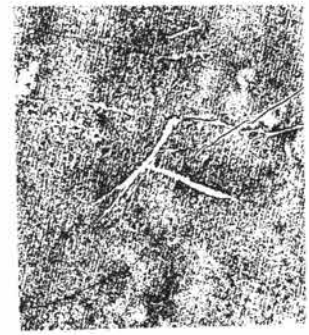
備考　布目を切っていることから、成・整形後の所産。

瓦-9	出土位置	D区10号住
挿図番号	43－１	写真図版 102
類 宇瓦	生産地	吉井窯跡群

読　生

備考　「生」の場合は左文字であるが、類例は同一筆跡でやや多い。

瓦-10	出土位置	D区10号住
挿図番号	43－２	写真図版 102
類 男瓦	生産地	吉井窯跡群



読　人

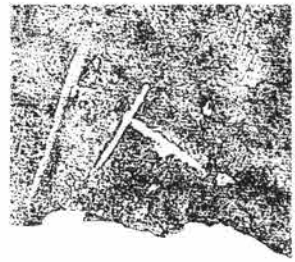
備考　達筆である。筆を能く使える人による文字と考えられる。

瓦-11	出土位置	D区10号住
挿図番号	43－３	写真図版 102
類 女瓦	生産地	吉井窯跡群

読　判読不能

備考　拓本の左下端部が文字。中央は整形時のもの。

瓦-12	出土位置	D区11号住
挿図番号	48－11	写真図版 102
類 女瓦	生産地	吉井窯跡群



読　人

瓦-13	出土位置	D区15号住
挿図番号	62－５	写真図版 102
類	生産地	

読　判読不能

文字とは思われない感もある。

第175図　文字瓦類(2)

瓦-14	出土位置	D区15号住
挿図番号	61－2	写真図版 102
類	女瓦	生産地 吉井窯跡群

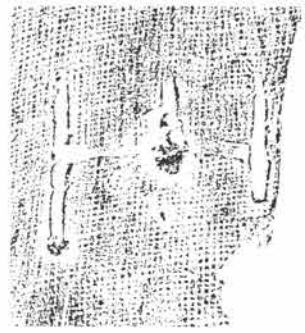
読　木・水・本か刻印

備考

瓦-15	出土位置	D区15号住
挿図番号	61－3	写真図版 102
類	女瓦	生産地 吉井窯跡群

読　方

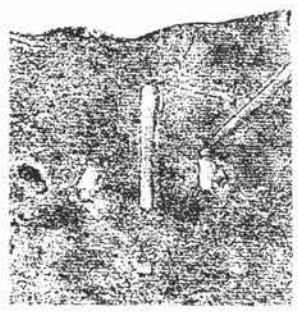
瓦-16	出土位置	D区17号住
挿図番号	68－2	写真図版 102
類	女瓦	生産地



読　山か王

備考

瓦-17	出土位置	D区20号住
挿図番号	72－1	写真図版 102
類	女瓦	生産地 笠懸窯跡群



読　小

備考　笠懸古窯跡群の篦描き文字瓦としては、漢数字が比較的多い。記入部位は凸面上半部が多い。

瓦-18	出土位置	D区23号住
挿図番号	80－1	写真図版 102
類	女瓦	生産地 吉井窯跡群

読　乙

備考　一筆のはこびではない。

瓦-19	出土位置	D区23号住
挿図番号	80－2	写真図版 102
類		生産地 吉井窯跡群

読　女（万呂の略字）

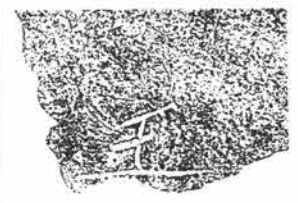
備考　「女」の一部とも思われるが、他の文字での可能性も有る。

瓦-20	出土位置	D区23号住
挿図番号	78－6	写真図版 103
類	女瓦	生産地

読　判読不能

備考　文字としての感は受けられない。

瓦-21	出土位置	D区25号住
挿図番号	84－20	写真図版 103
類	男瓦	生産地 吉井窯跡群



読　王

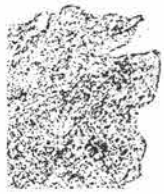
瓦-22	出土位置	D区25号住
挿図番号	84－22	写真図版 103
類	女瓦	生産地 吉井窯跡群

読　千

備考　文字の右上半部である。「千」以外としては既存のものからは判断し難かった。

第176図　文字瓦類(3)

瓦-25	出土位置	D区26号住
挿図番号	86－13	写真図版 103
類 女瓦	生産地	吉井窯跡群



読　判読不能

備考　右上端が文字の部分。右のはらいの部分と考えられる。

瓦-26	出土位置	D区26号住
挿図番号	86－14	写真図版 103
類 女瓦	生産地	吉井窯跡群

読　判読不能

備考　文字は左中央の部分。縦のはらいか。

瓦-27	出土位置	D区28号住
挿図番号	91－13	写真図版 103
類 女瓦	生産地	吉井窯跡群

読　子総

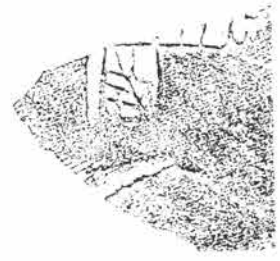
備考　「子」の文字と同一筆跡と考えられるものは多い。刻印「當」と共に認められる例が国分僧寺にある（文献６）。

瓦-28	出土位置	D区30号住
挿図番号	95－5	写真図版 103
類 女瓦	生産地	吉井窯跡群

読　大里

備考　個別の文字例は多い。特に「里」は、「黒」の〝れんが〟続けたものがあるが、「黒」は断定されていない。

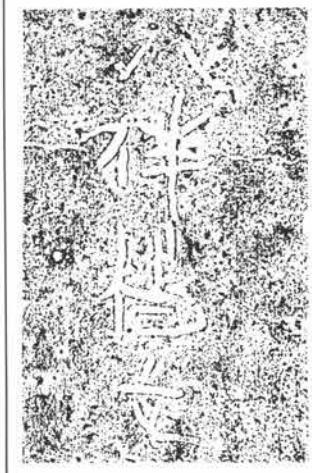
瓦-29	出土位置	D区31号住
挿図番号	97－4	写真図版 103
類 女瓦	生産地	笠懸窯跡群



読　刻印雀

備考　「雀」は、佐位郡雀部郷の略称。刻印文字であるが、正格子叩き具の手元側に刻まれている。

瓦-31	出土位置	D区36号住
挿図番号	100－8	写真図版 103
類 男瓦	生産地	吉井窯跡群



読　八伴楊女

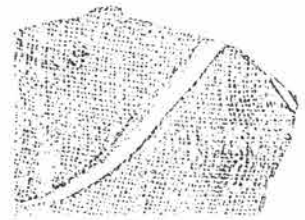
備考　「八」は多胡群八田郷の略称。類例は多い（文献６）。

瓦-30	出土位置	D区36号住
挿図番号	100－1	写真図版 103
類 女瓦	生産地	吉井窯跡群

読　八

備考　瓦－31と同様で、八田郷の伴場麻呂をあらわす。類例に「八伴氏成」等が知られる（文献６・７）。

瓦-32	出土位置	D区38号住
挿図番号	106－2	写真図版 103
類 女瓦	生産地	秋間窯跡群



読　大

備考　秋間古窯跡郡の文字瓦は指頭先で描いたものが多く文字も大きい。一部篦描きのものがある。既存では大が多い。

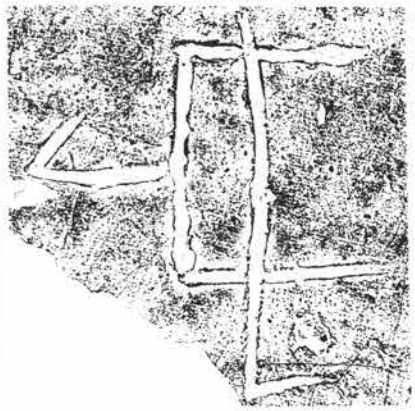
第177図　文字瓦類(4)

瓦-33	出土位置	D区38号住
挿図番号	105－9	写真図版	103
類		生産地	

読　□継

備考　既存例で「織継」が有り、「織」は多胡郡織裳郷の略称か。

瓦-34	出土位置	D区40号住
挿図番号	113－1	写真図版	104
類	女瓦	生産地	吉井窯跡群



読　判読不能

備考　文字とは考え難く、記号等と考えられるが、意味等不明である。

瓦-35	出土位置	D区40号住
挿図番号	110－3	写真図版	103
類	男瓦	生産地	笠懸窯跡群

読　刻印勢

備考　刻印で、勢多郡を示す。僧寺創建に伴う瓦。

瓦-36	出土位置	C区１号住
挿図番号	123－1	写真図版	103
類	男瓦	生産地	吉井窯跡群

読　里

備考　既存例では瓦－28の如く「大里」があり、「黒」とも思われる類例も有る。

瓦-37	出土位置	C区１号住
挿図番号	124－5	写真図版	104
類	女瓦	生産地	吉井窯跡群

読　円管刺突による記号

備考　瓦－６と同様。

第178図　文字瓦類(5)

瓦-38	出土位置	C区３号住
挿図番号	130－４	写真図版 104
類	男瓦	生産地 吉井窯跡群

読　判読不能

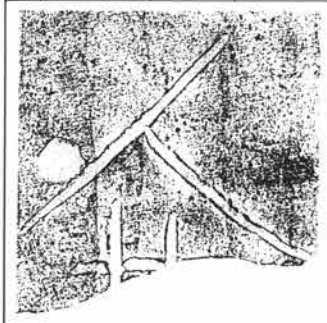
備考　天地に文字の一部が残存し、３文字以上の構成である。中央部分の文字は「？」で判読不能。

瓦-39	出土位置	C区６号住
挿図番号	136－１	写真図版 104
類	女瓦	生産地 吉井窯跡群

読　判読不能

備考　中央右上端のものは器面の割れ。複数以上の文字か？　篦傷とは考えられない。

瓦-40	出土位置	D区１号井戸
挿図番号	145－５	写真図版 104
類	男瓦	生産地



読　人井か

備考　下位の文字は「井」とも思われるが、判読は出来かねる。

瓦-41	出土位置	D区１号井戸
挿図番号	145－４	写真図版 104
類	男瓦	生産地 吉井窯跡群

読　上

瓦-42	出土位置	D区１号井戸
挿図番号	152－１	写真図版 104
類	女瓦	生産地 吉井窯跡群

読　槐

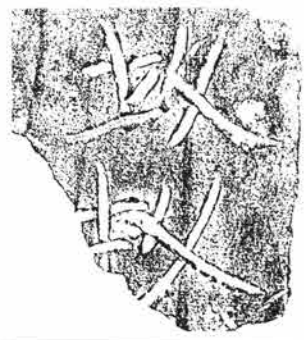
備考　木へんを除いた「鬼」は既存例がある。ただし、この文字の様に上からはらうものではなく、正しい書き方の文字。

瓦-43	出土位置	D区１号井戸
挿図番号	145－６	写真図版 104
類	男瓦	生産地 吉井窯跡群

読　□弓

備考　二文字以上で構成される。上位の文字は判読不能。

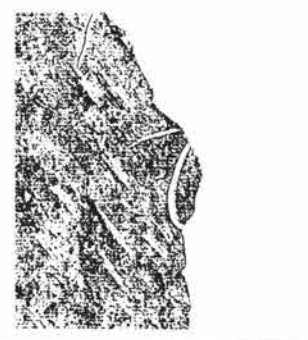
瓦-44	出土位置	D区１号井戸
挿図番号	154－２	写真図版 104
類	女瓦	生産地 吉井窯跡群



読　坂坂

備考　文献１内の(2)馬口の不詳扱いの文字と同一か。判読は平川　南先生による。〔文献１内(2)の採集地はC区〕

瓦-45	出土位置	D区１号井戸
挿図番号	146－５	写真図版 104
類	男瓦	生産地 吉井窯跡群



読　乙

備考　部分的に残存するが、「乙」と考えられる。

瓦-46	出土位置	D区１号井戸
挿図番号	146－７	写真図版 104
類	男瓦	生産地 秋間窯跡群

読　判読不能

備考　篦傷とも思われる。

第179図　文字瓦類(6)

瓦-47	出土位置	D区1号井戸
挿図番号	153－3	写真図版 104
類	女瓦	生産地 吉井窯跡群

読

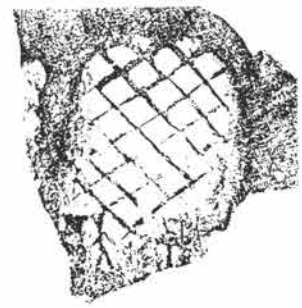
備考　この他に数ケ所篦傷と判断されるものが有る。

瓦-48	出土位置	D区1号井戸
挿図番号	151－1	写真図版 105
類	女瓦	生産地 吉井窯跡群

読　八織刀女

備考　「織」は多胡郡織裳郷の略称。「女」は麻呂であり、多胡郡織裳郷刀麻呂を表している。文献1の5と同一。

瓦-49	出土位置	D区1号井戸
挿図番号	160－9	写真図版 105
類	女瓦	生産地 笠懸窯跡群



読　判読不能

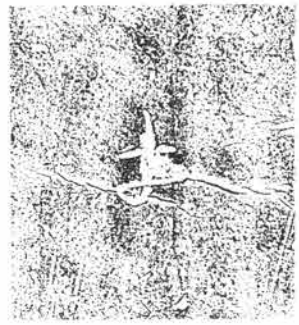
備考　判読不能な文字であるが、数種の文字を組み合わせたとも思われる。現在、平川　南先生が解読作業中である。

瓦-50	出土位置	D区1号井戸
挿図番号	146－2	写真図版 105
類	男瓦	生産地 吉井窯跡群

読　判読不能

備考　文字の一部とも篦傷とも思われる。

瓦-51	出土位置	D区1号井戸
挿図番号	146－1	写真図版 105
類	男瓦	生産地 吉井窯跡群



読　土か

備考　判読し難いが上記二者の孰れかと考えられるが、文字自体に手慣れた感がない。

瓦-52	出土位置	D区1号井戸
挿図番号	153－2	写真図版 105
類	女瓦	生産地 吉井窯跡群

読　子総

備考　「子」は、刻印「當」と共に篦描きされた文字と同一の筆跡と考えられる。文献10に同一例が有る。

瓦-53	出土位置	D区1号井戸
挿図番号	146－4	写真図版 105
類	男瓦	生産地 吉井窯跡群

読　判読不能

備考　「校」・「枚」の下半部と考えられ、文献1の14に「枚」と解読した文字があり、これと同様なものか。

瓦-54	出土位置	D区1号井戸
挿図番号	154－3	写真図版 105
類	女瓦	生産地 笠懸窯跡群

読　代

備考　手慣れた感が見受けられない。

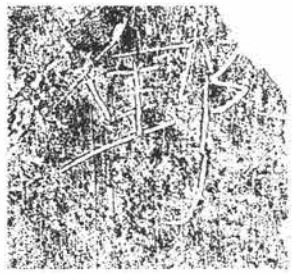
瓦-55	出土位置	D区1号井戸
挿図番号	146－3	写真図版 105
類	女瓦	生産地 吉井窯跡群

読　井か

備考　筆跡を見る限りに於いては、文献1の80の井と同じとも感ぜられる。類例の多い文字である。

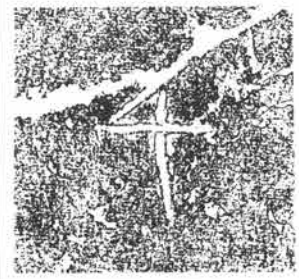
第180図　文字瓦類(7)

瓦-56	出土位置	D区１号井戸
挿図番号	154－5	写真図版
類	女瓦	生産地	吉井窯跡群



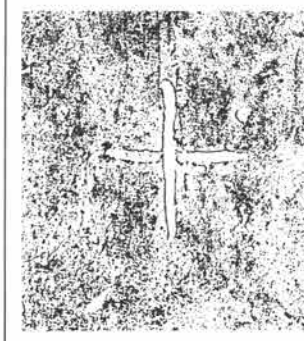
読　野

瓦-57	出土位置	D区１号井戸
挿図番号	154－1	写真図版
類	女瓦	生産地	吉井窯跡群



読　千

瓦-58	出土位置	D区１号井戸
挿図番号	151－2	写真図版
類	女瓦	生産地	吉井窯跡群



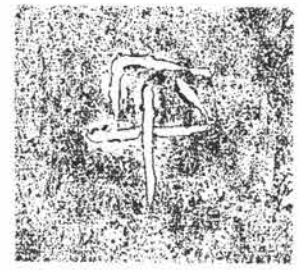
読　十

備考　直線的な筆の運びが特徴である。

瓦-59	出土位置	D区１号井戸
挿図番号	152－2	写真図版
類	女瓦	生産地	

読　南

瓦-60	出土位置	D区１号井戸
挿図番号	153－1	写真図版
類	女瓦	生産地	吉井窯跡群



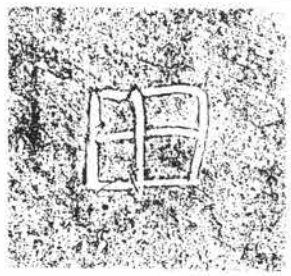
読　平

瓦-61	出土位置	D区１号井戸
挿図番号	153－4	写真図版
類	女瓦	生産地	吉井窯跡群

読　家か

備考　「家」のウ冠の部分と考えられる。

瓦-62	出土位置	D区１号井戸
挿図番号	154－4	写真図版
類	女瓦	生産地	吉井窯跡群



読　田

瓦-63	出土位置	D区１号井戸
挿図番号	152－3	写真図版
類	男瓦	生産地	吉井窯跡群

読　十

備考　文字の線は比較的細い。「十」と判読されるが、記号としての存在は考慮しなかった。

瓦-64	出土位置	D区１号井戸
挿図番号	150－3	写真図版
類	女瓦	生産地	吉井窯跡群

読　子

備考　文字の線は比較的細く、さらに、箆描き後手による撫でが施されている。

第181図　文字瓦類(8)

瓦-65	出土位置	D区1号井戸
挿図番号	150－4	写真図版
類	女瓦	生産地	吉井窯跡群

読　判読不能

備考　下端のものを文字の一部と考えたが、単なる箆傷とも思われる。

瓦-66	出土位置	D区1号井戸
挿図番号	146－6	写真図版
類	男瓦	生産地	吉井窯跡群

読　判読不能

瓦-67	出土位置	D区Ⅲ層
挿図番号		写真図版
類	女瓦	生産地	笠懸窯跡群

読　佐？

備考　この瓦自体字瓦と考えられることにより、記号としてのものである可能性は強い。

瓦-68	出土位置	D区Ⅱ層
挿図番号	173－13	写真図版
類	字瓦	生産地	吉井窯跡群

読　判読不能

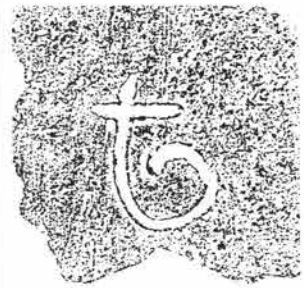
備考　二文字が描かれている可能性が強い。文字は判読不能。

瓦-69	出土位置	D区4－B
挿図番号	173－11	写真図版
類	男瓦	生産地	吉井窯跡群

読　判読不能

備考　類例は多いが現在判読の出来ないものであるが、文献1の68は麻呂の略字を思わせ、「女」の続字とも思われる。

瓦-70	出土位置	D区100号土坑
挿図番号	171－7	写真図版
類	女瓦	生産地	吉井窯跡群



読　判読不能

備考

瓦-71	出土位置	D区101号溝
挿図番号		写真図版
類	女瓦	生産地

読　大か

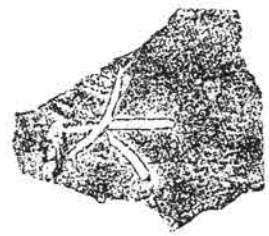
備考　「大」・「本」の類と考えられる。

瓦-72	出土位置	D区Ⅳ－Ⅵ層
挿図番号		写真図版
類	女瓦	生産地

読　判読不能

備考　文字の一部分のみが残存する。

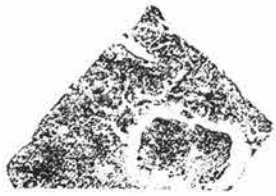
瓦-73	出土位置	V　D－1
挿図番号		写真図版
類	女瓦	生産地	笠懸窯跡群



読　大

第182図　文字瓦類(9)

瓦-74	出土位置	D区II層
挿図番号		写真図版 106
類 女瓦	生産地	吉井窯跡群



読　判読不能

瓦-75	出土位置	D区表土
挿図番号		写真図版 106
類 女瓦	生産地	吉井窯跡群

読　日か

瓦-76	出土位置	D区表土
挿図番号		写真図版 106
類 女瓦	生産地	吉井窯跡群

読　刻印方か

備考　二重の方画を有するものでは、現在判読不明なものが一例（文献10）ある。その他に「方」がある。

瓦-77	出土位置	D区67号土坑
挿図番号	170－15	写真図版 106
類 女瓦	生産地	笠懸窯跡群

読　判読不能

備考　左のはらいの部分が残存する。

瓦-78	出土位置	D区
挿図番号		写真図版 107
類 女瓦	生産地	吉井窯跡群

読　十

備考　文字の線は非常に細い。

瓦-79	出土位置	D区表土
挿図番号		写真図版 107
類 男瓦	生産地	吉井窯跡群

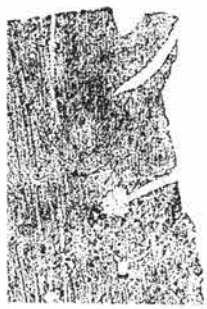
読　判読不能

備考　文字の一部であるが、にんべんとは考え難い。

瓦-80	出土位置	D区B－4
挿図番号	173－12	写真図版 107
類 女瓦	生産地	吉井窯跡群

読　判読不能

瓦-81	出土位置	D区28号住
挿図番号	91－11	写真図版 107
類 男瓦	生産地	吉井窯跡群



読　判読不能

備考　二文字が考えられるが、上・下共に文字の一部である。上位のものは左はらいの部分である。下位は不明。

瓦-82	出土位置	D区31号住
挿図番号	98－1	写真図版 107
類 鐙瓦	生産地	

読　円管刺突の記号

備考　円管刺突の中では最小のものである。類例は管見にない。

第183図　文字瓦類(10)

瓦-83	出土位置	D区31号住
挿図番号		写真図版 107
類 女瓦	生産地	吉井窯跡群

読 成か

備考　一文字乃至二文字が考えられるが、篦の運びからは一文字が考えられる。判読は平川　南先生による。

瓦-85	出土位置	D区1号井戸
挿図番号		写真図版 107
類 男瓦	生産地	吉井窯跡群

読 刻印當

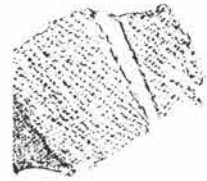
瓦-86	出土位置	D区1号住
挿図番号		写真図版 107
類	生産地	吉井窯跡群

読 主

瓦-87	出土位置	D区
挿図番号		写真図版 107
類	生産地	吉井窯跡群

読 ⊕

瓦-88	出土位置	D区Ⅳ Ⅵ層
挿図番号		写真図版 107
類	生産地	



読 判読不能

瓦-89	出土位置	D区ⅤBC
挿図番号		写真図版 107
類	生産地	

読 判読不能

瓦-90	出土位置	D区 Ⅴ
挿図番号		写真図版 107
類	生産地	

読 判読不能

瓦-91	出土位置	D区Ⅴ2BC
挿図番号		写真図版 107
類	生産地	

読 判読不能

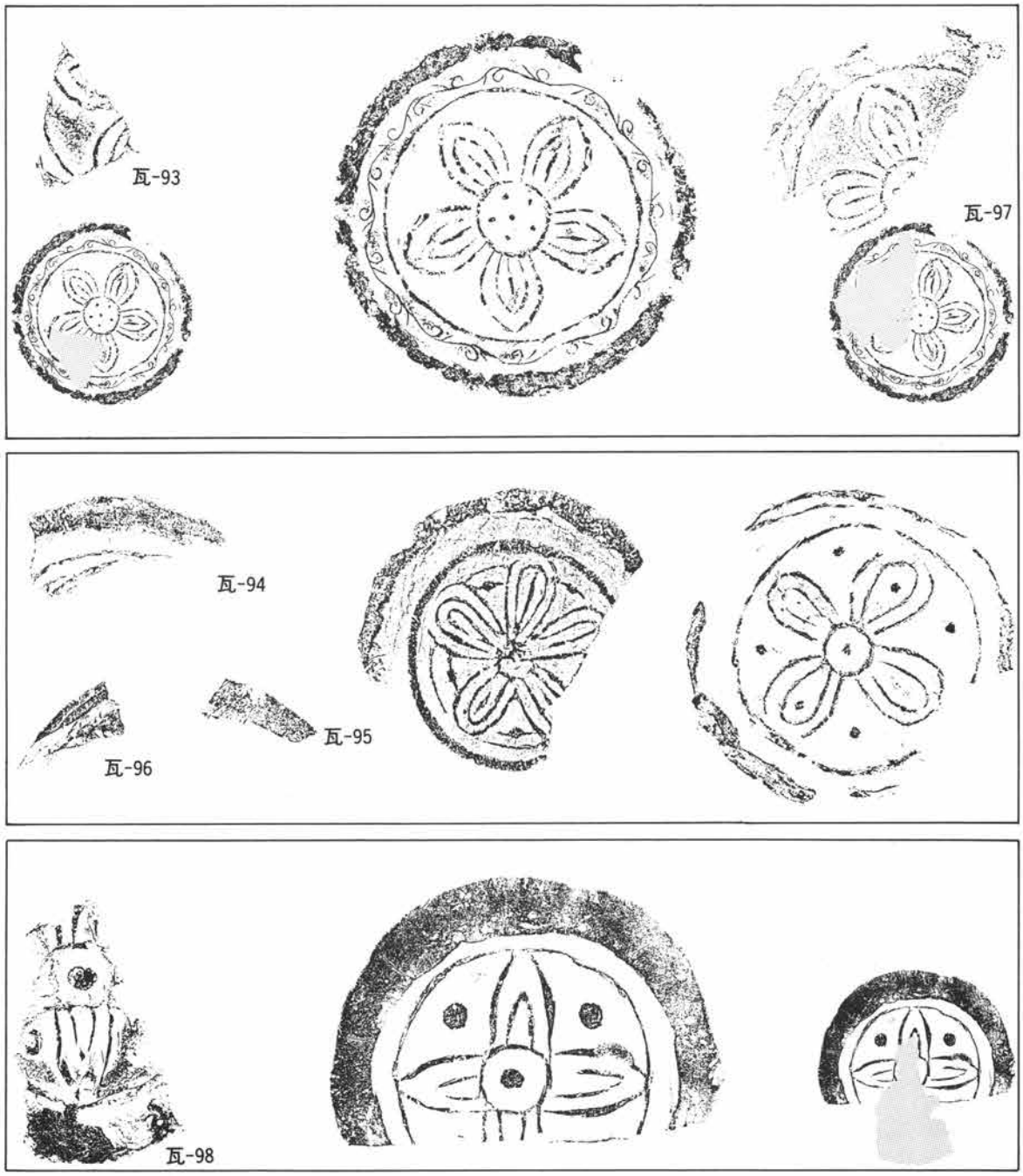
瓦-92	出土位置	D区Ⅴ12
挿図番号		写真図版 107
類	生産地	

読 判読不能

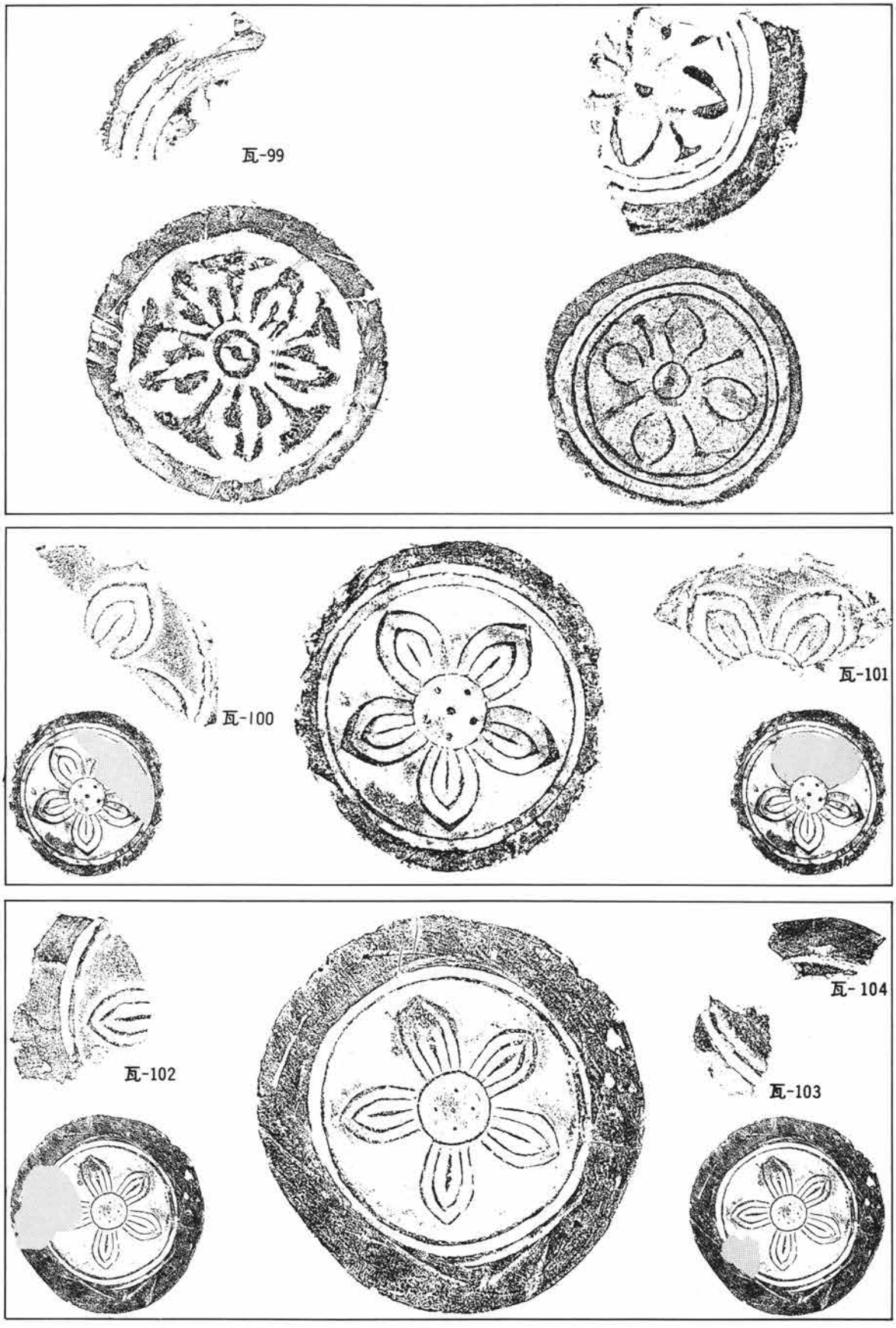
第184図　文字瓦類(11)

瓦当瓦は出土数33点あり、内訳は鐙瓦12点・宇瓦21点である。この内、瓦当部が完存するものは少なく、瓦―111と瓦―119の２点のみであり、他はいずれも破片である。この破片は図化されている縮尺では同笵認定が不可能に近い状態である。同笵認定は瓦研究上重要な観察点でもあることから、本項目で一応同笵認定の作業の一端として転載した。

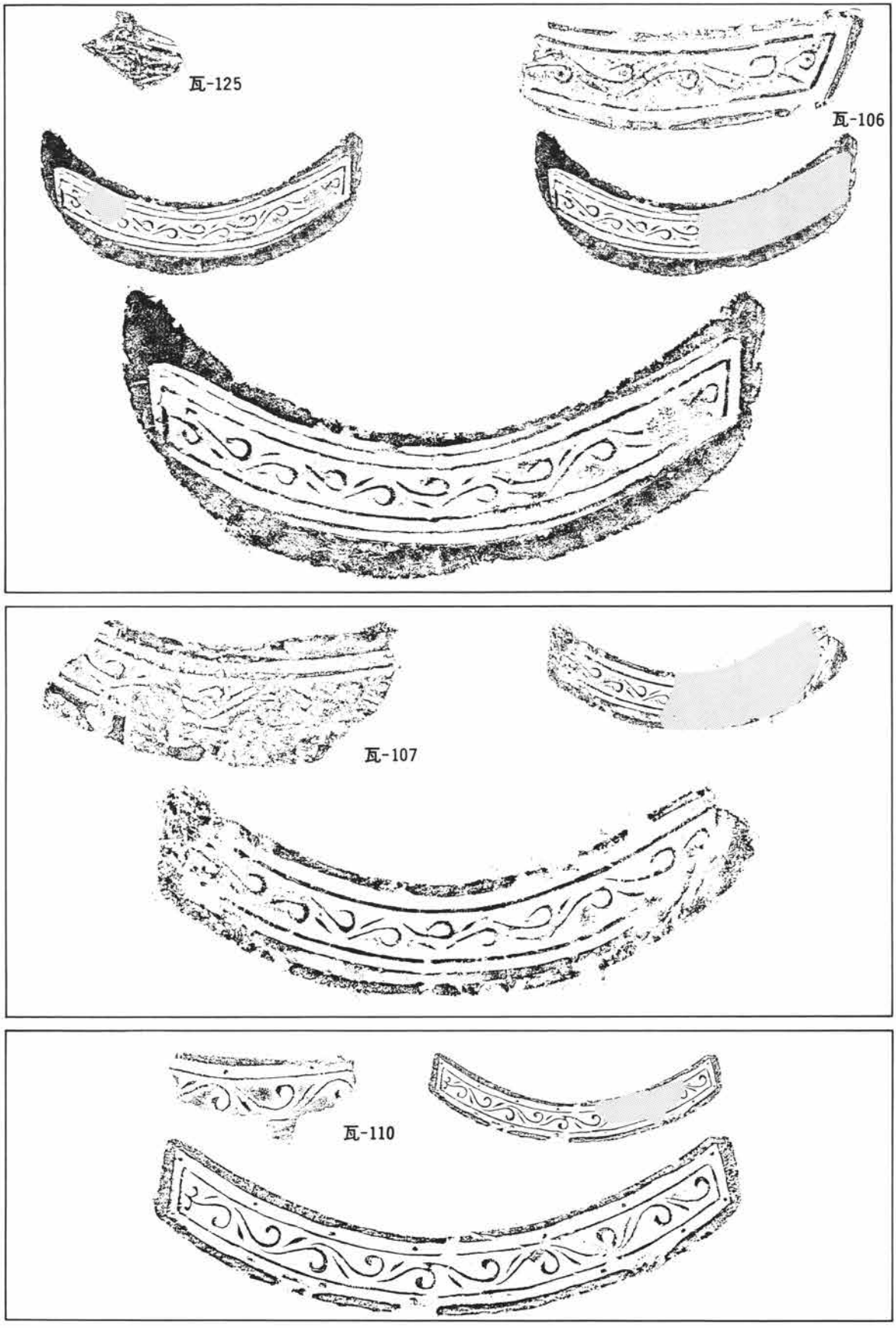
転載した当遺跡出土のものは瓦№を付し縮尺を３分の１とした。また、出土瓦で同笵認定乃至これに類すると考えられる拓影図も同一縮尺で掲載した。そして、同笵として認定し得たものに就いては、完存時のどの部分に相当するかという点を同図内に網点を用い示した。これらの同笵等認定し得なかったものは、第189図に一括掲載した。　（木津）



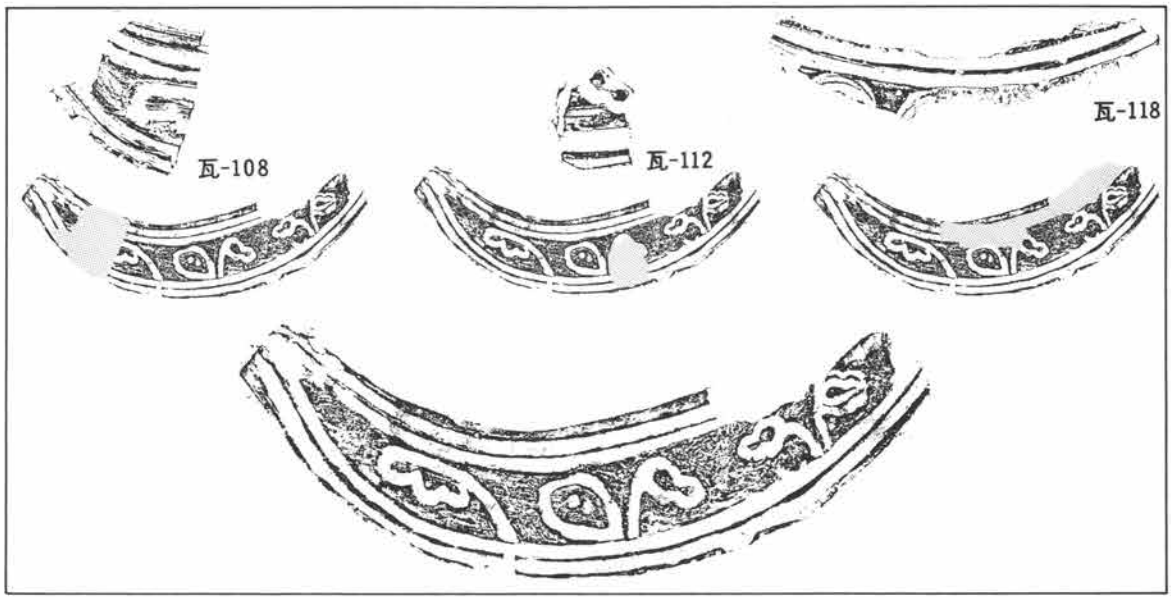
第185図　瓦当瓦類(1)

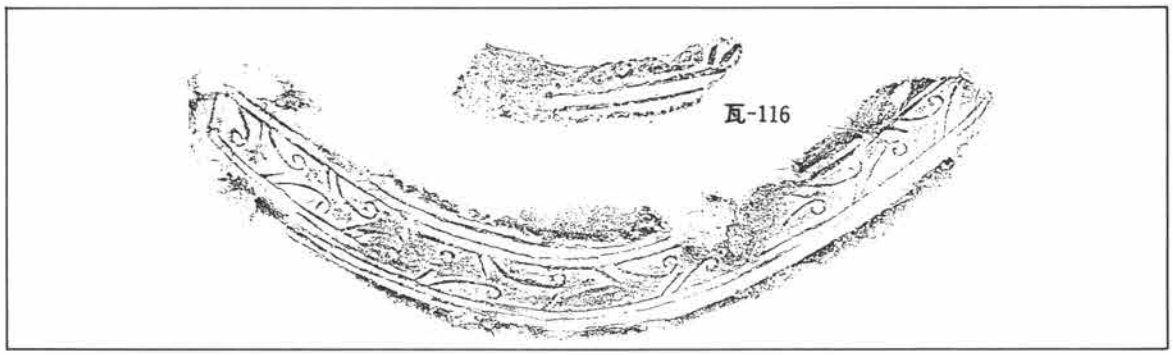


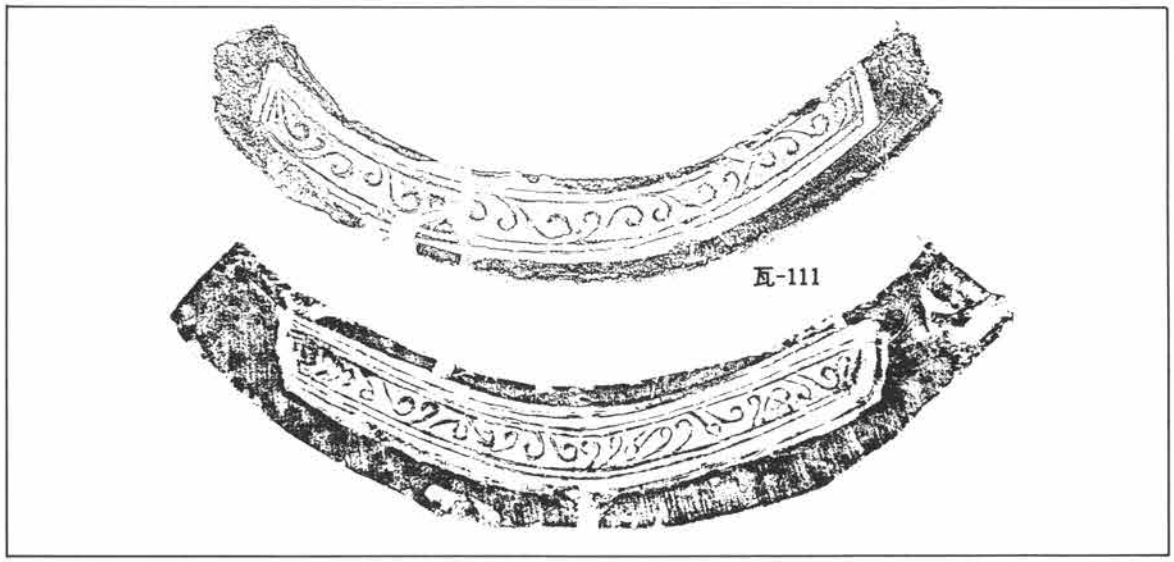
第186図　瓦当瓦類(2)



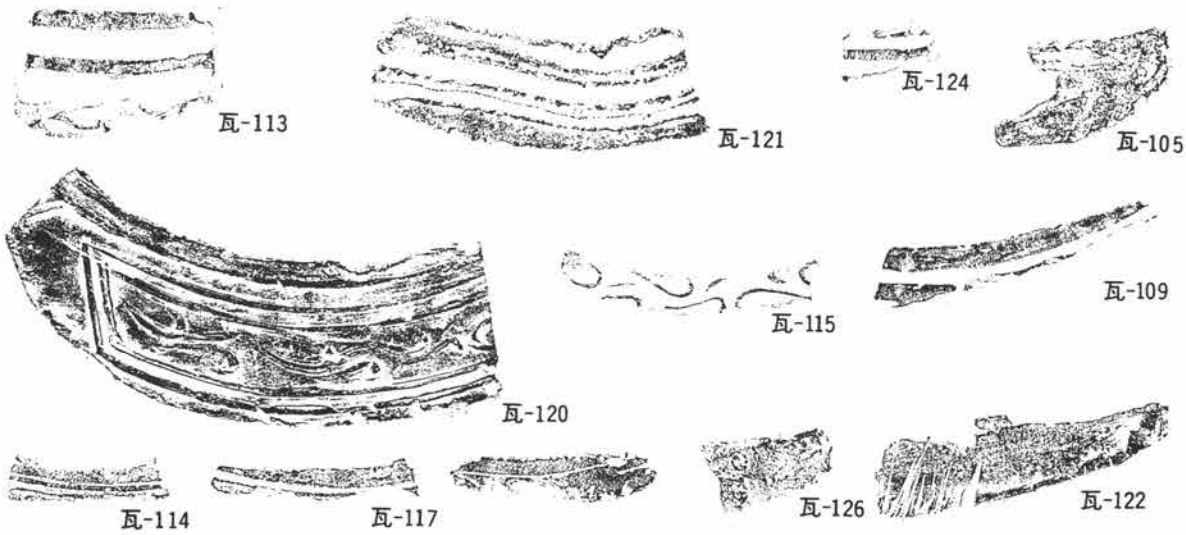
第187図　瓦当瓦類(3)







第188図　瓦当瓦類(4)



第189図　瓦当瓦類(5)

第２表　瓦当瓦観察表

瓦№	出土地	種別	内区・中房・外区	掲載図	焼造地	摘　　要
93	D10住	鐙瓦	単弁５葉蓮華文・１＋５・左偏		笠懸	面径は、他の国分寺創建瓦とほぼ同様であるが、外区に偏行唐草文
97	D１井	〃	行唐草文			帯を有する為内区は小さい。既出寺院は国分僧寺。
94	D15住	〃	単弁４乃至５葉と考えられる。		秋間・乗	国分寺創建頃の素弁の系譜で、弁間に特徴的な珠点を配する。
95	D36住	〃	中房は珠点中房。外区は素文。		附	放光寺跡（山王廃寺）既出の素文中房系素弁６葉が祖形と思われ、
96	C７住	〃				弁数は国分寺創建統一意匠後の影響と考えられる。Ａは群馬郡内で
						出土が多い。
98	D１井	〃	単弁４葉蓮華文・珠点・素文			弁間に珠点を配する。既出例は、当遺跡のみ。
99	D１井	〃	単弁と考えられる。　・重圏		笠懸(鹿)	弁端周辺と外区が残存。類例は図示したＡ～Ｃの３種が想定される。
100	D１井	〃	単弁５葉蓮華文・１＋５・重圏		笠懸	国分寺創建統一意匠。既出例は国分僧寺を中心に東毛での出土が多
101	D遺構外	〃				い。８世紀後半代の官寺乃至これに類する寺院へ供給。
102	D遺構外	〃	単弁５葉蓮華文・１＋４・素文		笠懸	国分寺創建統一意匠の系譜で既出例は多い。中房の１＋４が注意さ
103	D遺構外	〃				れる。国分寺瓦としては、面径が最大値を示す一群に含まれる。文
104	D遺構外	〃				様の位置は低い。
125	D遺構外	宇瓦	右偏行唐草文　・　―　・素文		笠懸	国分寺創建統一意匠の系譜であるが瓦110の同笵資料の様に、文様に
126	D２住	〃				力強さがない。既出例は多く、瓦110と同様に供給が認められる。若
107	D２住	〃				干であるが、放光寺跡（山王廃寺）からも出土している。
110	D９住	〃	右偏行唐草文・　―　・珠点文		笠懸	国分寺創建統一意匠で、瓦100と組瓦を成す。
108	D２住	〃	抽象文　・　・素文			抽象文瓦としては笵種数の少ない意匠である。笵は、文様部分を要
112	D10住	〃				出しており、スタンプ等の押捺による表出ではない。既出例は国分
118	D１井	〃				僧寺にあたる。
116	C２住	〃	右偏行唐草文　・　―　・素文		笠懸	Ａとは同笵認定は出来ないが、類例としてＡが考えられる。
111	D10住	〃	右偏行唐草文　・　―　・素文		吉井	Ａとは同笵認定は出来ないが、類例としてＡが考えられる。
						既出窯に藤岡市金山瓦窯跡が有る。
119	D１井	〃	綾杉文　・　・		秋間	既出例は多く、国分二寺・放光寺跡（山王廃寺）等がある。
113	D22住	〃	重弧文　・　・			重弧文は比較的多いが、同笵は確認出来ず、８世紀後半代か？
121	D１井	〃	重弧文(篦書き)・　・			篦書き重弧文は比較的少ない。８世紀後半代か？
120	D１井	〃	右偏行唐草文　・　・素文		笠懸	既存意匠との同笵は確認出来なかった。瓦116に類似する新たな笵種
115	D36住	〃				で国分二寺に存在が想定される。

第２節　北側調査区（Ｈ区）

第１項　検出した遺構・遺物

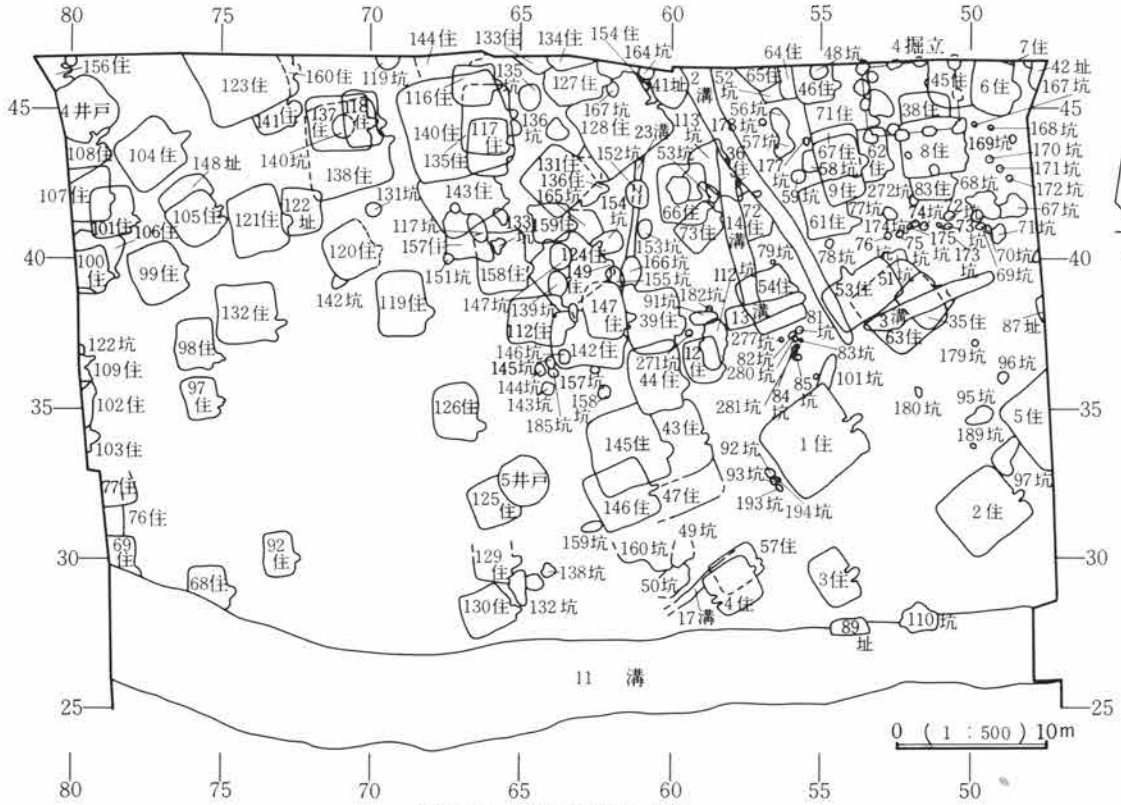
本項に掲載したのは、「上野国分僧寺・尼寺中間地域」（２）に掲載したＨ区の残りの区画（Ｈ区第11号溝状遺構以北）の調査によって検出した遺構・遺物である。また、一部前回漏らした遺構・遺物も補った。

調査は中央を縦断する農道を境に、東側を先行して調査し、続いて西側調査後両側を埋め戻し、農道部分の調査を行った。遺構確認は、基本的にはⅥ層土（東側が黄褐色ローム、西側は暗褐色粘質土）上面でおこなった。西側に対して東側は遺構確認は容易であったが、表土から確認面までが比較的浅く、また、重複する遺構も多いため遺構の残存状態は悪かった。

遺構配置は、黄褐色ロームをベースとする東側においては、カマドが北東方向を向いた古墳時代～奈良時代に属すると考えられる比較的大型の住居跡が主体的にみられる。また、平安時代に属すると思われる住居跡がこれらの大型住居と重複して多数みられる。暗褐色粘質土をベースとする西側は、南西部分に住居跡等の遺構の希薄な空間がみられ、この空間を囲むように平安時代に属すると思われる小型の住居跡がみられる。

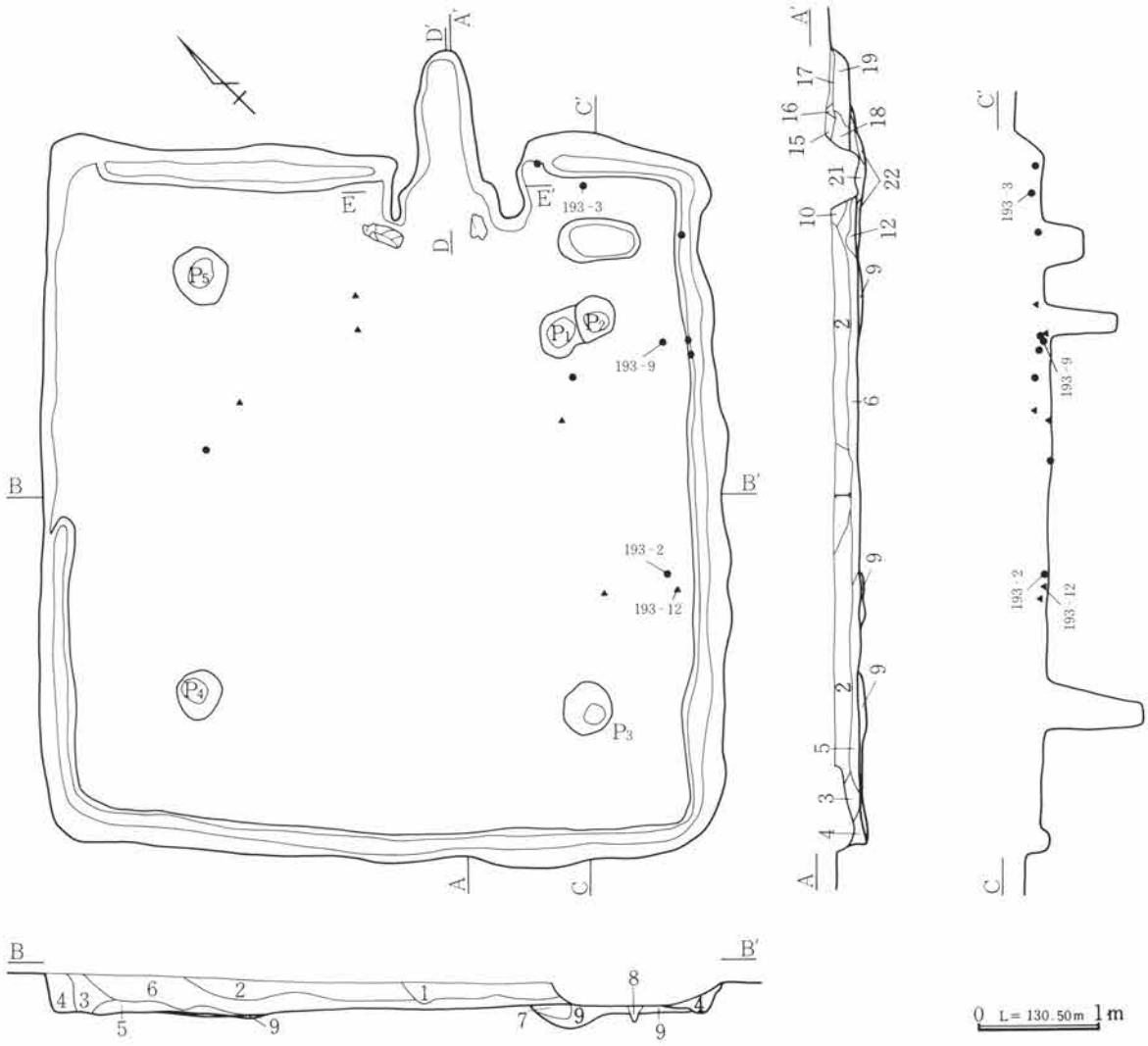
検出した遺構は、竪穴住居跡95軒（１軒は鍛冶跡）、掘立柱建物跡１棟、井戸跡２基、溝状遺構６本、土坑84基であり、これらの内土坑の一部を除いて全遺構を掲載した。

遺物は遺構内出土のものを主体的に扱ったが、土製遺物では土師器・須恵器の坏・埦・甕を主体として、黒色土器坏・埦、羽釜・土釜・瓦の他、鞴の羽口等が検出されている。また、搬入されたものでは、灰釉陶器埦・皿等がある。石製遺物では、薦編み石と呼称されている石器を主とし、臼玉等がある。金属製遺物は、刀子・釘・紡錘車等が検出されている。**(註) 遺構表中の住居・カマド分類は「上野国分僧寺・尼寺中間地域」(2)参照**



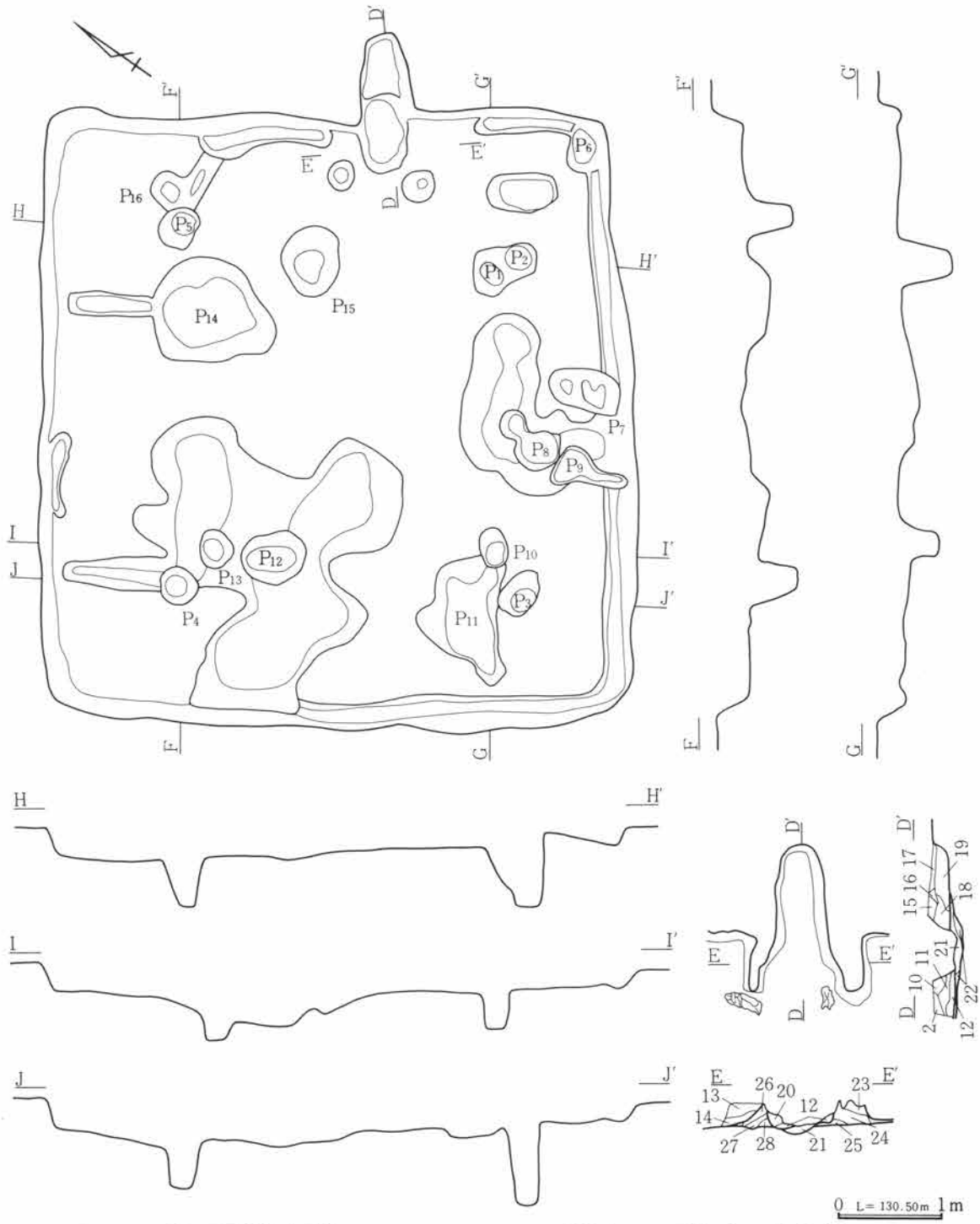
第190図　Ｈ区遺構配置図

遺構名称	Ｈ区第１号住居跡		位置	32～35－Ｈ－53～57グリッド内		分類	Ａ－６	時期	Ⅱ？
平面形態	隅丸方形	規模	5.85m×5.65m	主軸方位	東－37度－北	残存深度	約25cm程		
備考	壁溝は北コーナー部とカマド部分を除き全周する。カマド右に貯蔵穴を持つ。ピットは掘り方を含めて計15個検出され、その内南東壁寄りの２個は出入口施設と思われる。北東部検出の溝は間仕切遺構か。								
カマド	位置形状	北東壁南寄り		分類	Ｂ－１	主軸方位	東－39度－北		
規模	全長147cm・屋外長80cm・屋内長67cm・袖間幅118cm・燃焼部幅63cm・煙道幅30cm								
備考	袖石とその下に検出されたピットはカマド主軸方向よりやや北に寄ることから、焚口部は主軸方向より東向きに開口していたと予測される。								



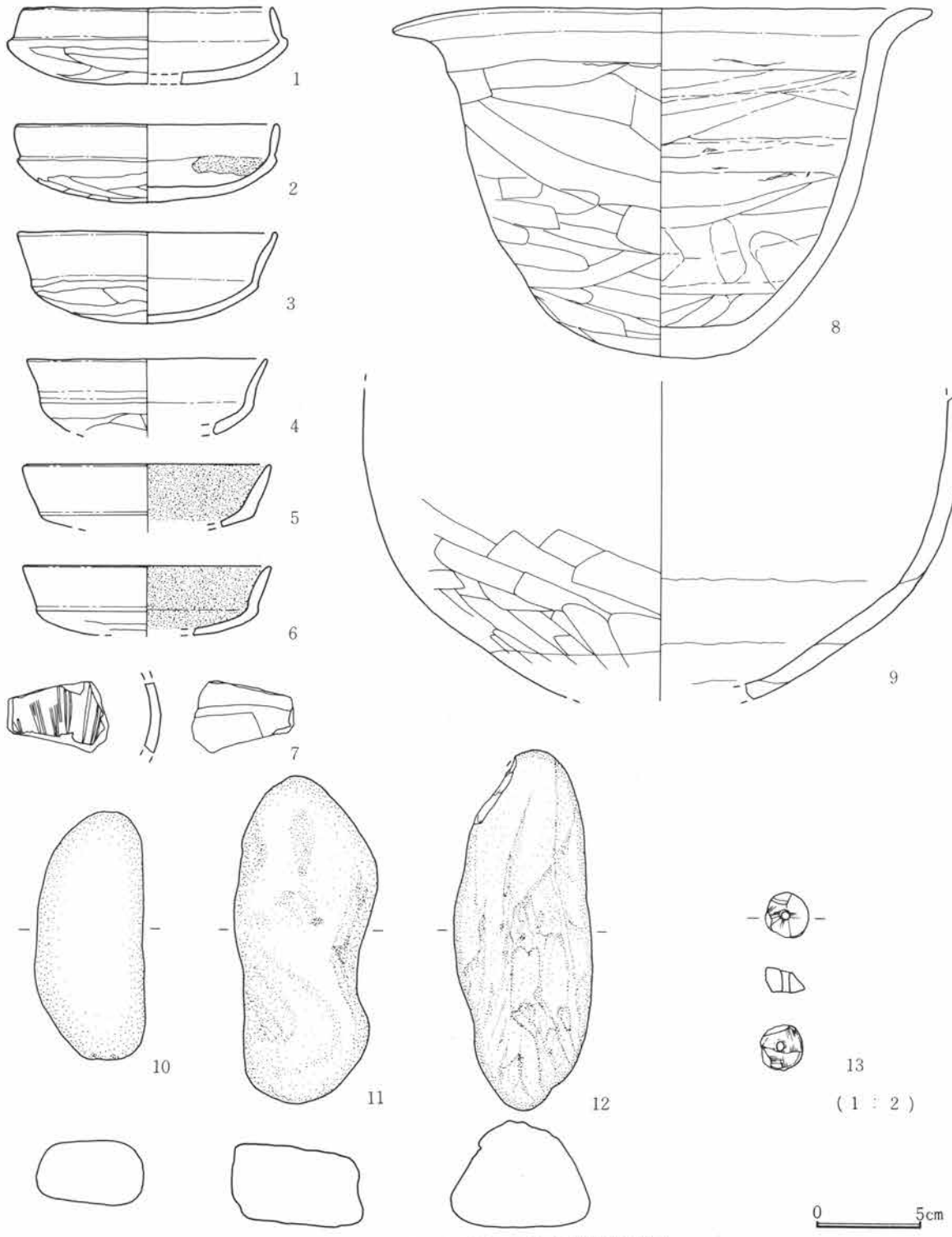
1	暗褐色土	ＣＰを多量、Ⅵ層土小ブロックを少量含む。	5	暗褐色土	ＣＰを多量に、Ⅵ層土粒及びブロックを含む。
2	〃	ＣＰを多量に含み、Ⅵ層土ブロックは１層に比して少ない。	6	〃	ＣＰを多量に、焼土粒を微量含む。
3	〃	ＣＰ粗粒を多量に含み、ＦＡブロックをわずかに含む。	7	〃	Ⅵ層土粒を多量含む。
4	〃	ＣＰ粗粒を多量に含み、Ⅵ層土粒はほとんど含まない。	8	〃	ＦＡブロックを、少量含む。
			9	〃	Ⅵ層土ブロックを少量含む。

第191図　Ｈ区第１号住居跡実測図



10	暗褐色土	焼土・VI層土粒を少量含む。
11	〃	焼土粒・カマド袖石片を含む。
12	灰白色粘質土	灰層で焼土粒を含む。
13	暗褐色土	VI層土粒を少量含む。
14	〃	VI層土粒・焼土を含む。
15	〃	焼土粒を含み粘性が強い。
16	赤褐色焼土	
17	暗褐色土	焼土・粘質土を含む。
18	赤褐色粘質土	焼土・硬化ブロック・灰を多量含む。
19	灰褐色粘質土	焼土・VI層土ブロックを少量含む。
20	暗褐色土	VII層土ブロックを多量含む。
21	灰　層	焼土粒を微量含む。
22	暗褐色土	焼土粒を少量と炭化物を含み、粘性が強い。
23	〃	焼土粒を微量含み、粘性は弱い。
24	〃	焼土粒を多量含む。
25	〃	焼土粒を少量、VI層土粒を多く含む。
26	〃	焼土粒・ＣＰを含む。
27	〃	ＣＰを少量、焼土を多量含む。
28	〃	焼土・灰を含む。

第192図　H区第1号住居跡実測図

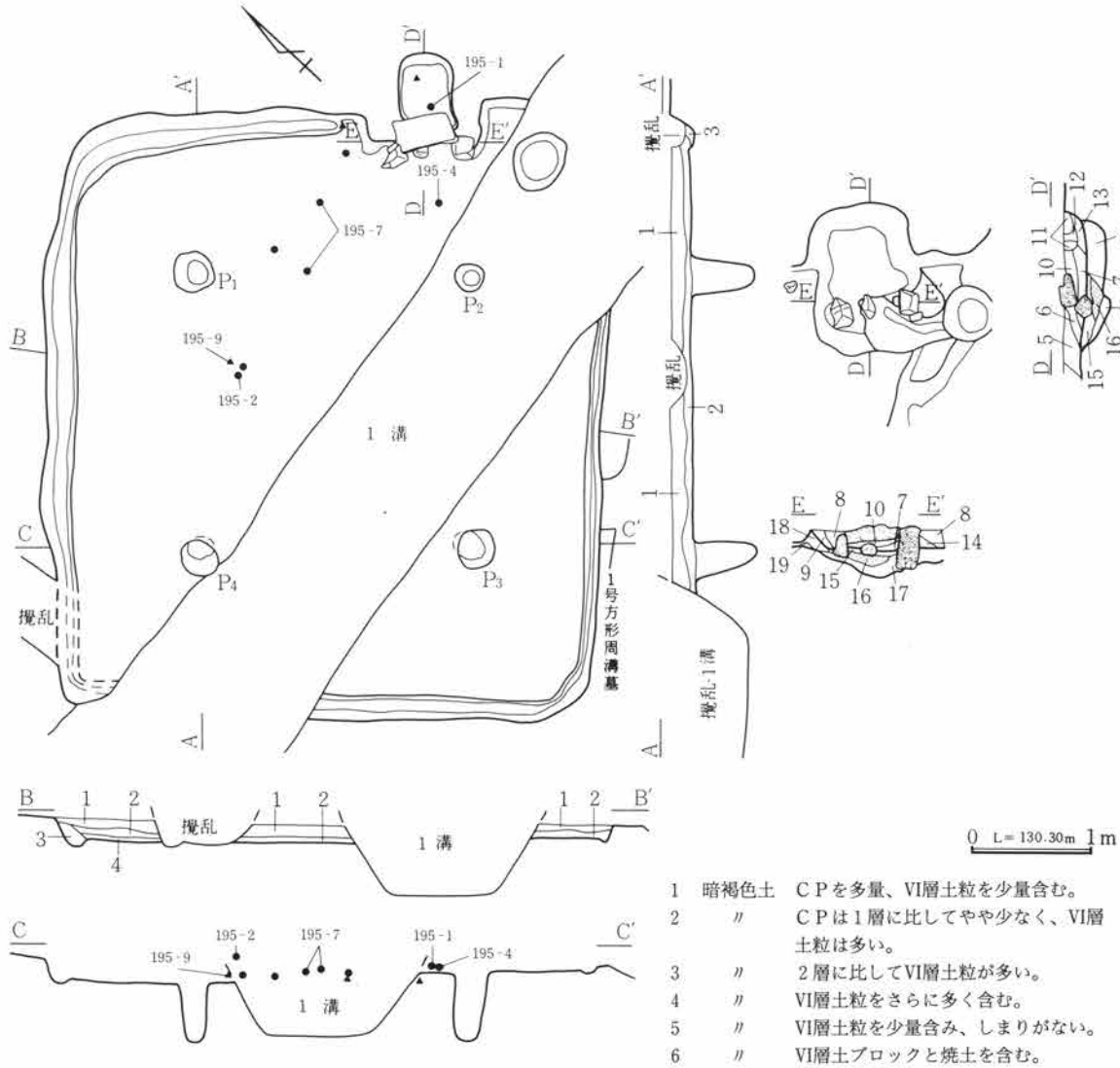


第193図　Ｈ区第１号住居跡出土遺物実測図

柱穴は、P_1～P_5、P_{10}・P_{13}・P_{16}の８本で、位置関係からP_1・P_{10}・P_{13}・P_5と、P_2～P_4・P_{16}という組み合わせで最低１回の建て替えが想定される。このうち後者の柱穴は、掘り方調査時に検出したものであることから、前者が最終使用の柱穴とみることができる。

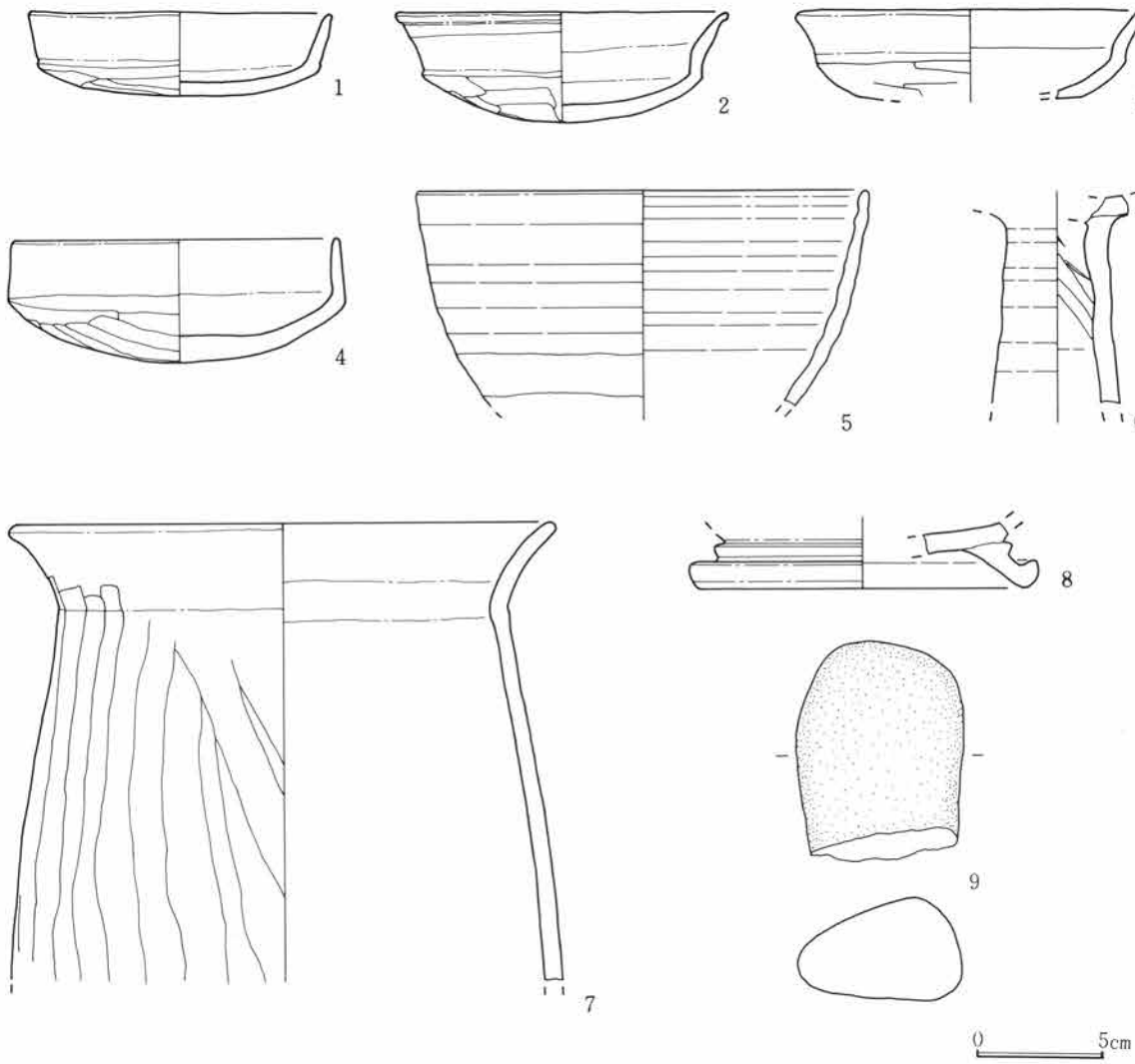
遺物は床面に近い位置から出土したものが多いが、第193図－８を除き総て破片である。また、平面的な位置は、南東壁寄りに多くみられ、カマドからはほとんど出土していないことが特徴である。

遺構名称	H区第２号住居跡	位置	30～33—H—48～61グリッド内	分類	A—6	時期	II？
平面形態	隅丸長方形	規模	5.05m×4.60m	主軸方位	東—41度—北	残存深度	約15cm程
備考	住居中央部は中世溝による攪乱を受けているが、壁溝は全周していたと思われる。カマド右には貯蔵穴があり、柱穴も４個検出されている。						
カマド	位置形状	北東壁南寄り		分類	C—1	主軸方位	東—37度—北
規模	全長91cm・屋外長44cm・屋内長47cm・袖間幅80cm・燃焼部幅50cm・煙道幅—cm						
備考	両袖石と支脚及び天井石を検出。支脚と天井石は原位置を保っているかどうかは不明。						



1　暗褐色土　ＣＰを多量、VI層土粒を少量含む。
2　〃　ＣＰは１層に比してやや少なく、VI層土粒は多い。
3　〃　２層に比してVI層土粒が多い。
4　〃　VI層土粒をさらに多く含む。
5　〃　VI層土粒を少量含み、しまりがない。
6　〃　VI層土ブロックと焼土を含む。
7　〃　焼土を多量含む。
8　暗褐色土　VI層土粒を少量含む。
9　〃　やや暗灰色をおび、粘性がある。
10　〃　焼土を少量含む。
11　黄褐色粘質土
12　暗褐色土　黄褐色粘質土粒、焼土を含む。
13　〃　焼土・灰を含む。
14　〃　VI層土微量含む。
15　暗褐色土　炭化物と焼土粒を微量含む。
16　赤褐色焼土
17　暗褐色土　VI層土粒及び暗褐色粘質土ブロックを微量含む。
18　〃　粘性があり、灰や焼土は含まない。
19　黄褐色土　VI層土と暗褐色土を含み、砂質である。
20　暗褐色土　VI層土ブロックを少量含む。

第194図　H区第２号住居跡実測図

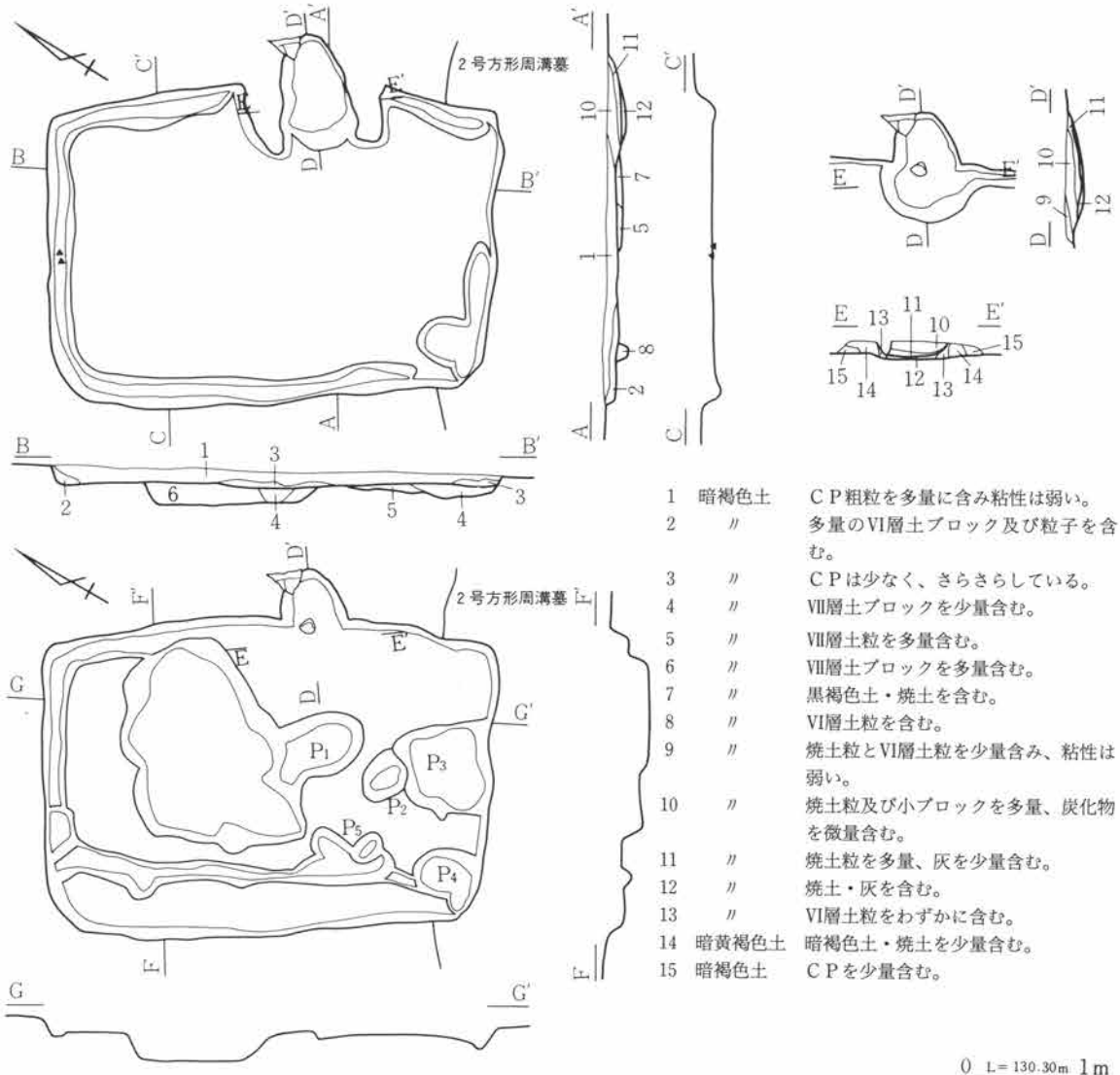


第195図　Ｈ区第２号住居跡出土遺物実測図

当住居跡は、確認面が浅いわりに残存壁高が浅く、攪乱を受けていることもあって残存状態は良好でない。柱穴は４本検出されており、ほぼ等間隔で同規模に掘り込まれている。また、柱穴に重複はみられないことから建て替えは考えられない。カマドは、袖部・燃焼部のあり方から煙道が長く伸びるタイプと思われるが、攪乱され残存していないものと考えられる。

遺物は、カマド正面の床面近くから出土したものが多いが、実測可能なものは少ない。

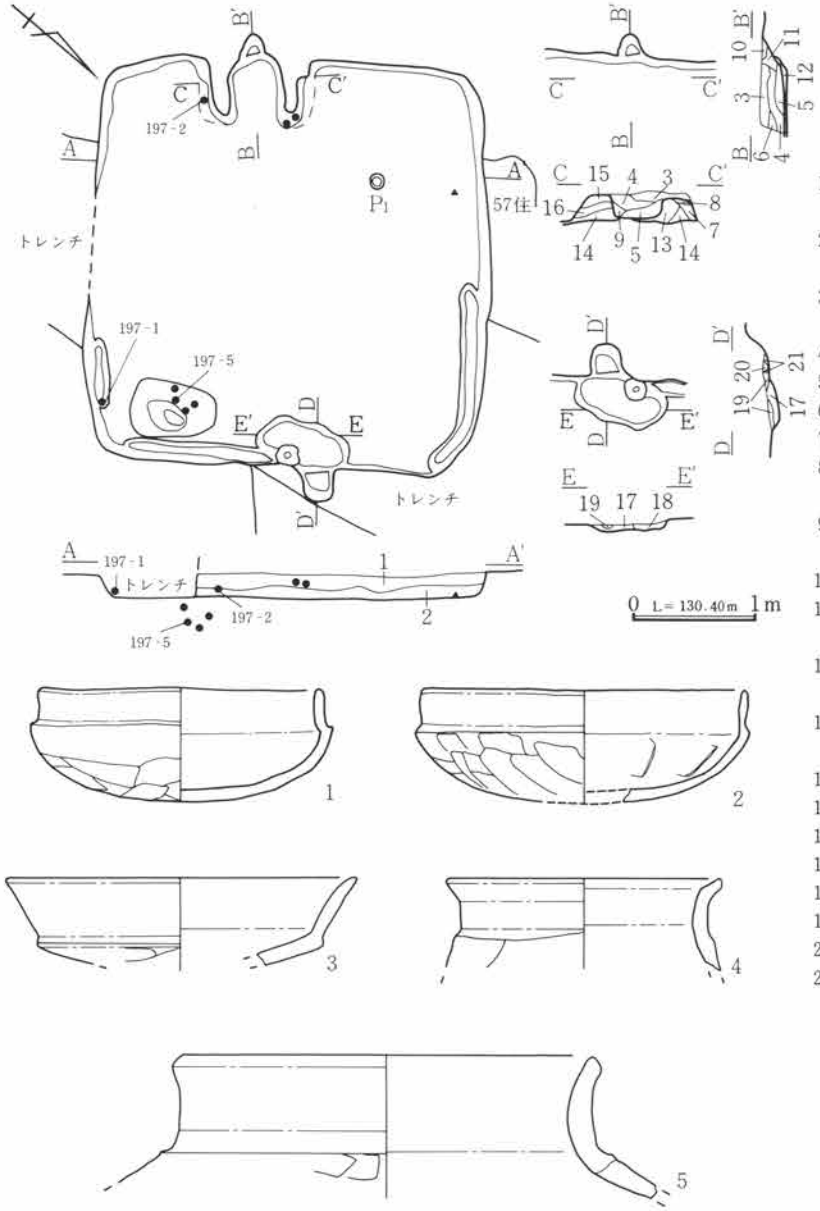
遺構名称	Ｈ区第３号住居跡		位置	28～30―Ｈ―53～55グリッド内		分類	Ｃ－７	時期	？
平面形態	隅丸長方形	規模	2.60m×3.75m	主軸方位	東―31度―北		残存深度	約10cm程	
備考	壁溝はカマド部分と南壁の一部を除きほぼ全周。								
カマド	位置形状	北東壁南寄り			分類	Ｃ－１	主軸方位	東―28度―北	
規模	全長100cm・屋外長41cm・屋内長59cm・袖間幅100cm・燃焼部幅48cm・煙道幅―cm								
備考	カマド先端部に位置する地山の石が焼けている。燃焼部主体は屋内で袖は粘土等を用いていない。								



1	暗褐色土	ＣＰ粗粒を多量に含み粘性は弱い。
2	〃	多量のⅥ層土ブロック及び粒子を含む。
3	〃	ＣＰは少なく、さらさらしている。
4	〃	Ⅶ層土ブロックを少量含む。
5	〃	Ⅶ層土粒を多量含む。
6	〃	Ⅶ層土ブロックを多量含む。
7	〃	黒褐色土・焼土を含む。
8	〃	Ⅵ層土粒を含む。
9	〃	焼土粒とⅥ層土粒を少量含み、粘性は弱い。
10	〃	焼土粒及び小ブロックを多量、炭化物を微量含む。
11	〃	焼土粒を多量、灰を少量含む。
12	〃	焼土・灰を含む。
13	〃	Ⅵ層土粒をわずかに含む。
14	暗黄褐色土	暗褐色土・焼土を少量含む。
15	暗褐色土	ＣＰを少量含む。

第196図　Ｈ区第３号住居跡実測図

遺構名称	Ｈ区第４号住居跡		位置	28～30－Ｈ－56～58グリッド内		分類	Ａ－７	時期	Ⅱ？
平面形態	隅丸方形	規模	3.25m×3.15m	主軸方位	西－30度－南		残存深度	約15cm程	
備考	壁溝は北東部と南東部に一部検出されたのみである。貯蔵穴は南東コーナーの旧カマド横に位置するが、残存状態から使用されていたカマドはａカマドと思われる。								
カマド	位置形状	ａカマド　南西壁南寄り			分類	Ａ－２	主軸方位	西－30度－南	
規模	全長72cm・屋外長17cm・屋内長55cm・袖間幅65cm・燃焼部幅34cm・煙道幅14cm								
備考	袖部分はやや掘り過ぎで、点線の復元ラインになると思われる。								
カマド	位置形状	ｂカマド　北東壁北寄り			分類	－	主軸方位	－	
規模	全長－cm・屋外長26cm・屋内長－cm・袖間幅－cm・燃焼部幅－cm・煙道幅17cm								
備考	使用面はほとんど残存せず、掘り方のみ確認した。								



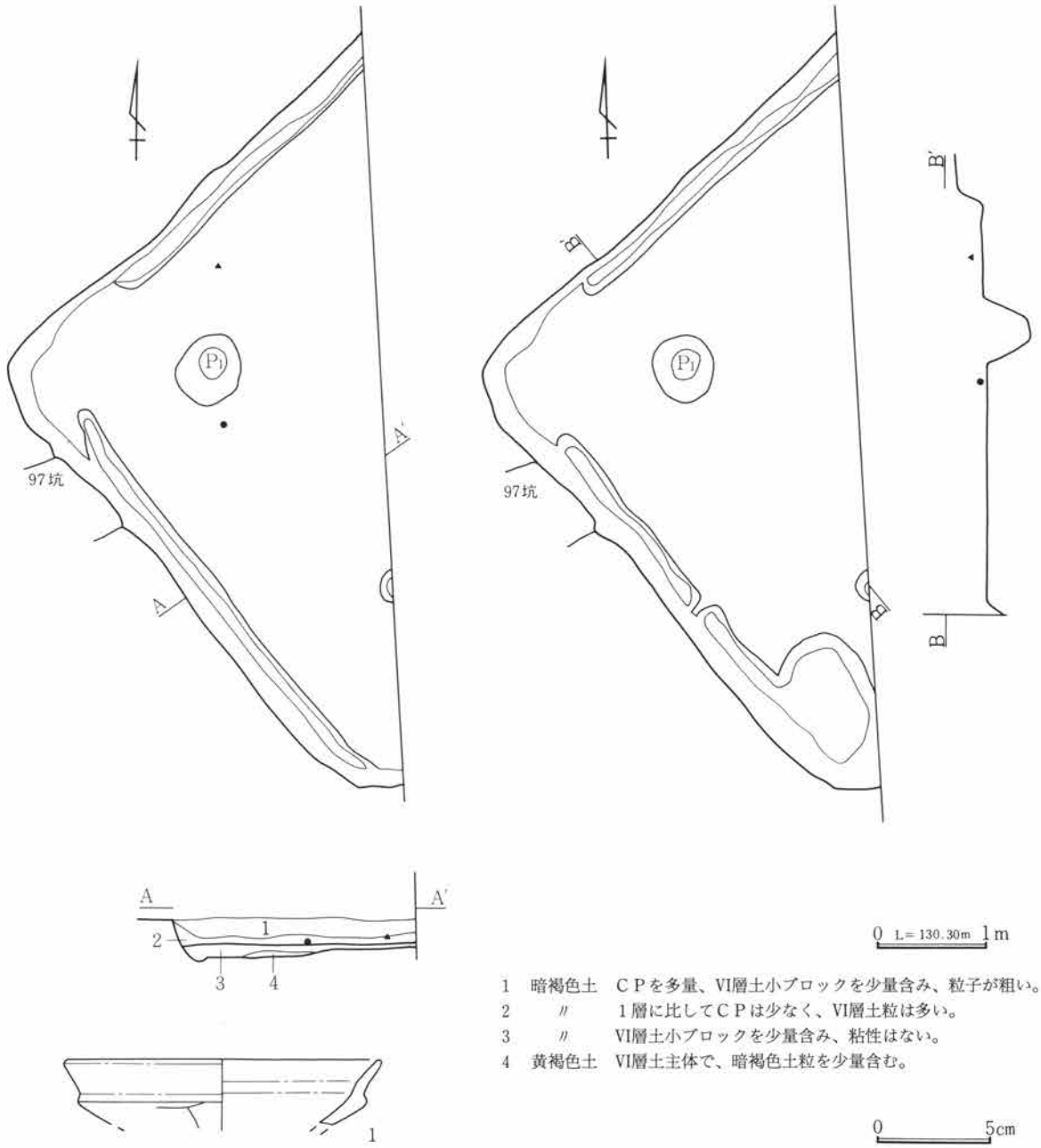
1	暗褐色土	ＣＰとⅥ層土粒を多量に含み、しまりがない。
2	〃	１層に比してＣＰは少なくしまりがない。
3	〃	Ⅵ層土粒を含むⅢ層土が混入して、色調が黒い。
4	〃	Ⅵ層土粒を含む。
5	〃	焼土・炭化物を少量含む。
6	〃	Ⅵ層土ブロックを含む。
7	〃	Ⅵ層土を多く含む。
8	〃	ＣＰ等は含まず、粘性の強い袖の構成土。
9	〃	ＣＰを少量、焼土粒を微量含む。
10	赤褐色焼土	粘性を持つ。
11	暗褐色土	ＣＰは少量で、焼土や炭化物を含まない。
12	〃	灰・焼土・炭化物をわずかに含む。
13	〃	焼土粒・Ⅵ層土粒を微量含む。
14	〃	Ⅵ層土粒は含まない。
15	〃	８層に近似。
16	〃	Ⅵ層土をわずかに含む。
17	〃	焼土粒と灰を含む。
18	〃	Ⅵ層土粒を含む。
19	灰白色土	灰・焼土粒を多量含む。
20	暗褐色土	炭化物をわずかに含む。
21	〃	Ⅵ層土粒をわずかに含む。

第197図　Ｈ区第４号住居跡・出土遺物実測図

当住居跡は、北側で第57号住居跡と重複しているが、重複部分に当住居跡に属すると考えられる旧カマドが残存していることから、57号住→４号住という関係が捉えられる。カマドは図示したように北東壁中央北寄り及び南西壁南寄りの２ヵ所検出されているが、北東壁のものに比較して南西壁のものの残存状態は良好であり、この南西壁側のカマドが最終使用のものとみられる。

遺物は、北東壁のカマド北寄りに掘り込まれた貯蔵穴の底面付近、及び北東壁カマドの袖部から出土したのが顕著な例である他、覆土中の出土を含めても量はきわめて少ない。

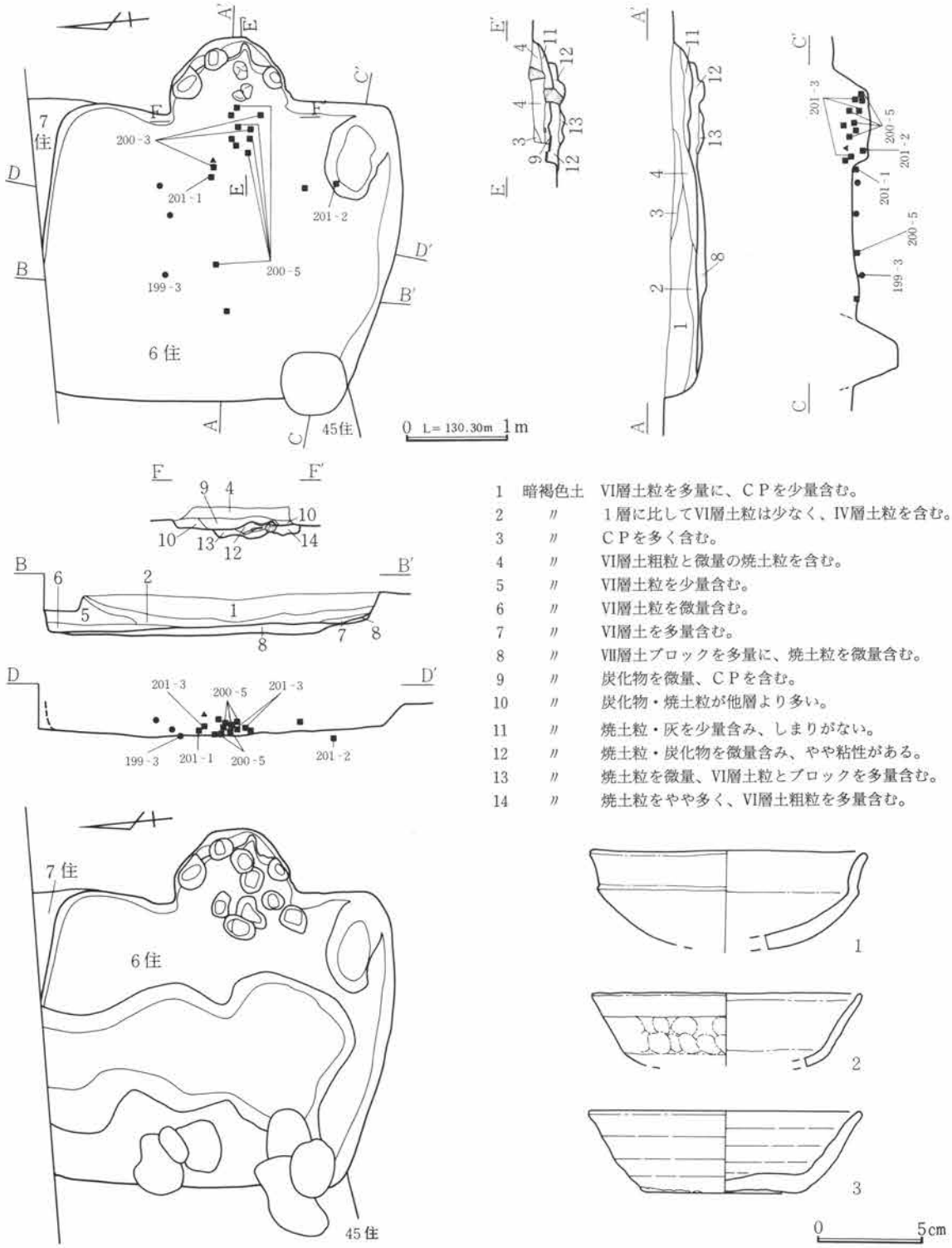
遺構名称	Ｈ区第５号住居跡		位置	33～36―Ｈ―47～49グリッド内		分類	―	時期	Ⅱ？
平面形態	隅丸方形？	規模	― m×5.29m		主軸方位	東―42度―北	残存深度	約20cm程	
備考	住居の半分は発掘区域外でカマドと共に未検出だが、カマドは北東に位置すると思われる。壁溝は西コーナー部は未検出。柱穴は２個検出されており、１号住居と同様な形式になると予想される。								



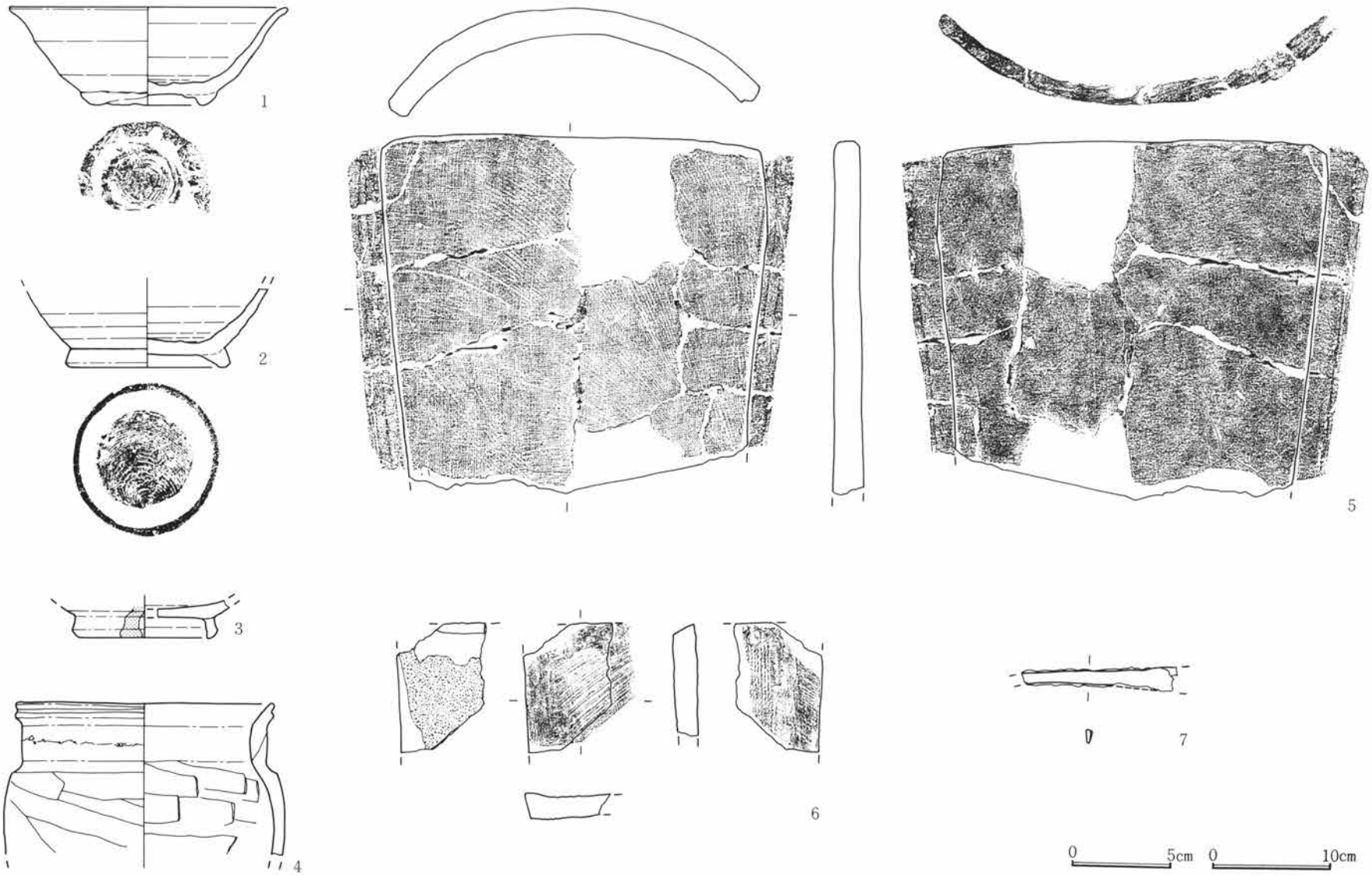
第198図　H区第5号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	H区第6号住居跡		位置	44～46—H—48～50グリッド内		分類	—	時期	?
平面形態	隅丸長方形	規模	2.75m× — m	主軸方位	東—4度—南		残存深度	約15cm程	
備考	北壁は道路のため未検出。西壁も45号住と重複のためはっきりせず、掘り方で確認した。南東コーナー部に貯蔵穴を持つ。								
カマド	位置形状	東壁南寄り		分類	E—1	主軸方位	東—0度—北		
規模	全長75cm・屋外長75cm・屋内長0cm・袖間幅112cm・燃焼部幅95cm・煙道幅—cm								
備考	カマドは幅が広く、南に壁の補強に用いたと思われる石の列があり、掘り方では南側約⅔が下がることから作り替えの可能性も考えられる。								

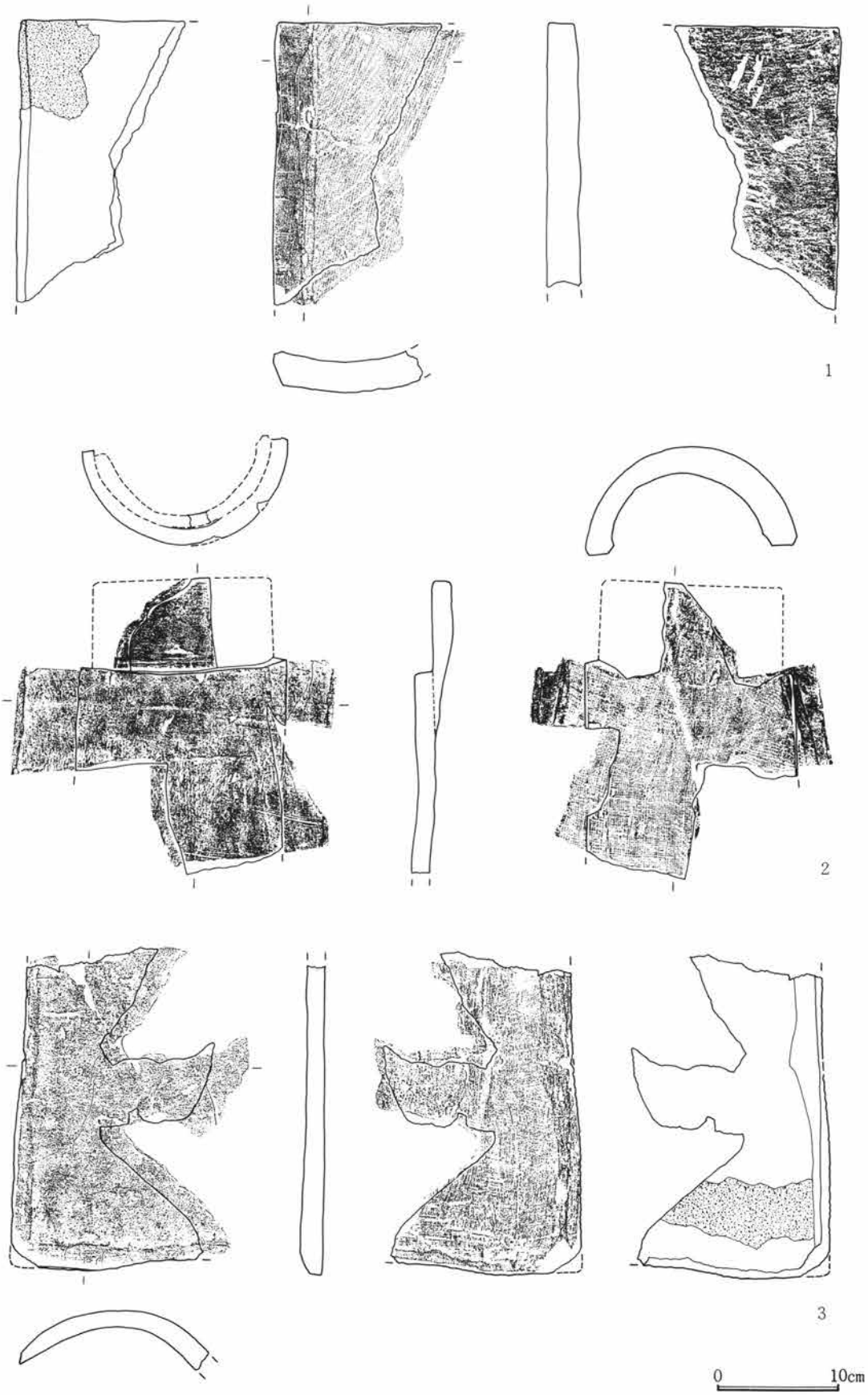
遺構名称	H区第７号住居跡	位置	45～？—H—48～？グリッド内	分類	—	時期	Ⅶ？
平面形態	？	規模	— m× — m	主軸方位	東—？度—北	残存深度	約８cm程
備考	６号住と重複し、北側は道路により未発掘のため大部分は確認できず、平面とセクションで一部確認したのみである。						



第199図　H区第６・７号住居跡・出土遺物実測図



第200図　H区第6・7号住居跡出土遺物実測図

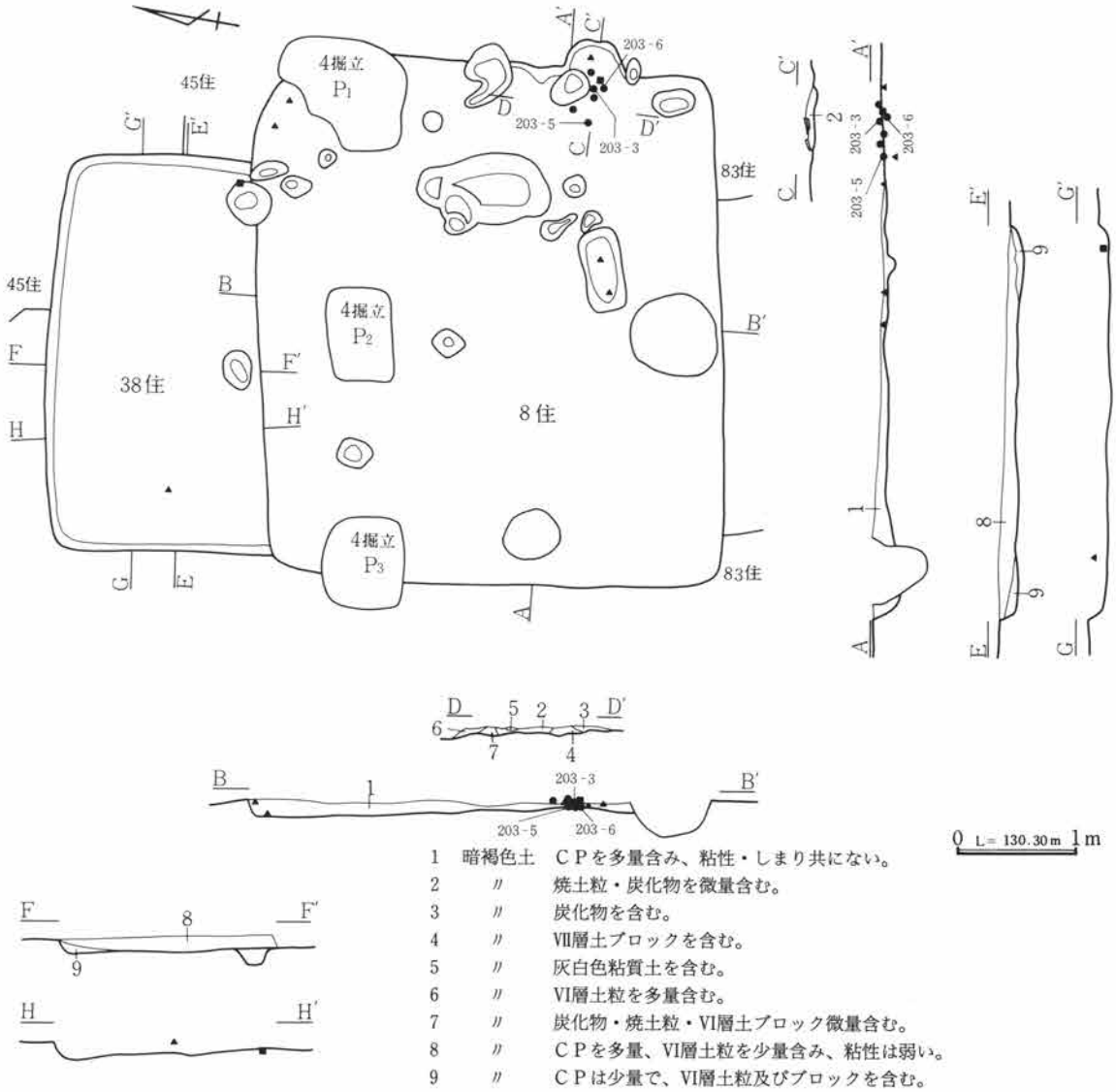


第201図　Ｈ区第６・７号住居跡出土遺物実測図

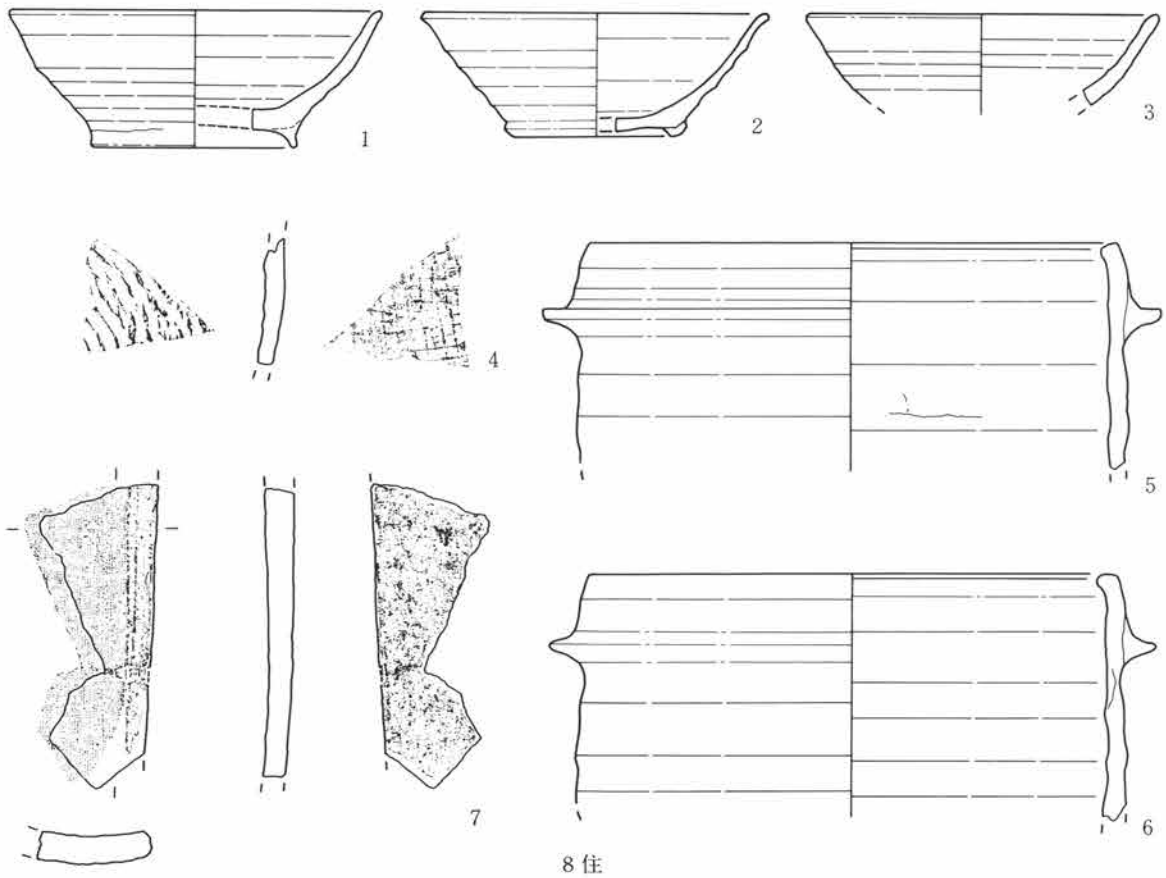
西側で第45号住居跡と重複し、農道断面のセクションにより45号住・７号住→６号住という関係が捉えられたが、第45号住居跡と第７号住居跡の関係は不明である。また、遺物は第45・６・７号住居跡いずれも明確な出土はみられず、したがって先の重複関係を検証することはできなかった。

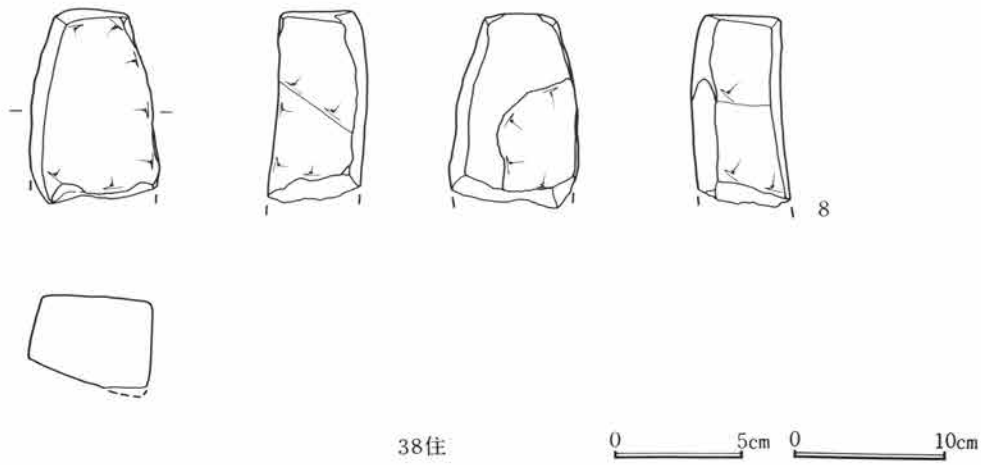
遺構名称	H区第８号住居跡	位置	43・44—H—50～？グリッド内	分類	—	時期	IX
平面形態	隅丸長方形？	規模	— m× — m	主軸方位	東—？度—北	残存深度	約—cm程
備考	床面はほとんど残存せず、わずかにセクションで住居範囲を推定したのみである。カマドもセクションで確認できるのみで、形状ははっきりしない。						

遺構名称	H区第38号住居跡	位置	44・45—H—50～52グリッド内	分類	—	時期	？
平面形態	隅丸方形？	規模	3.20m× — m	主軸方位	東—？度—北	残存深度	約12cm程
備考	住居南側は８号住との重複により失なわれている。						



第202図　H区第８・38号住居跡実測図





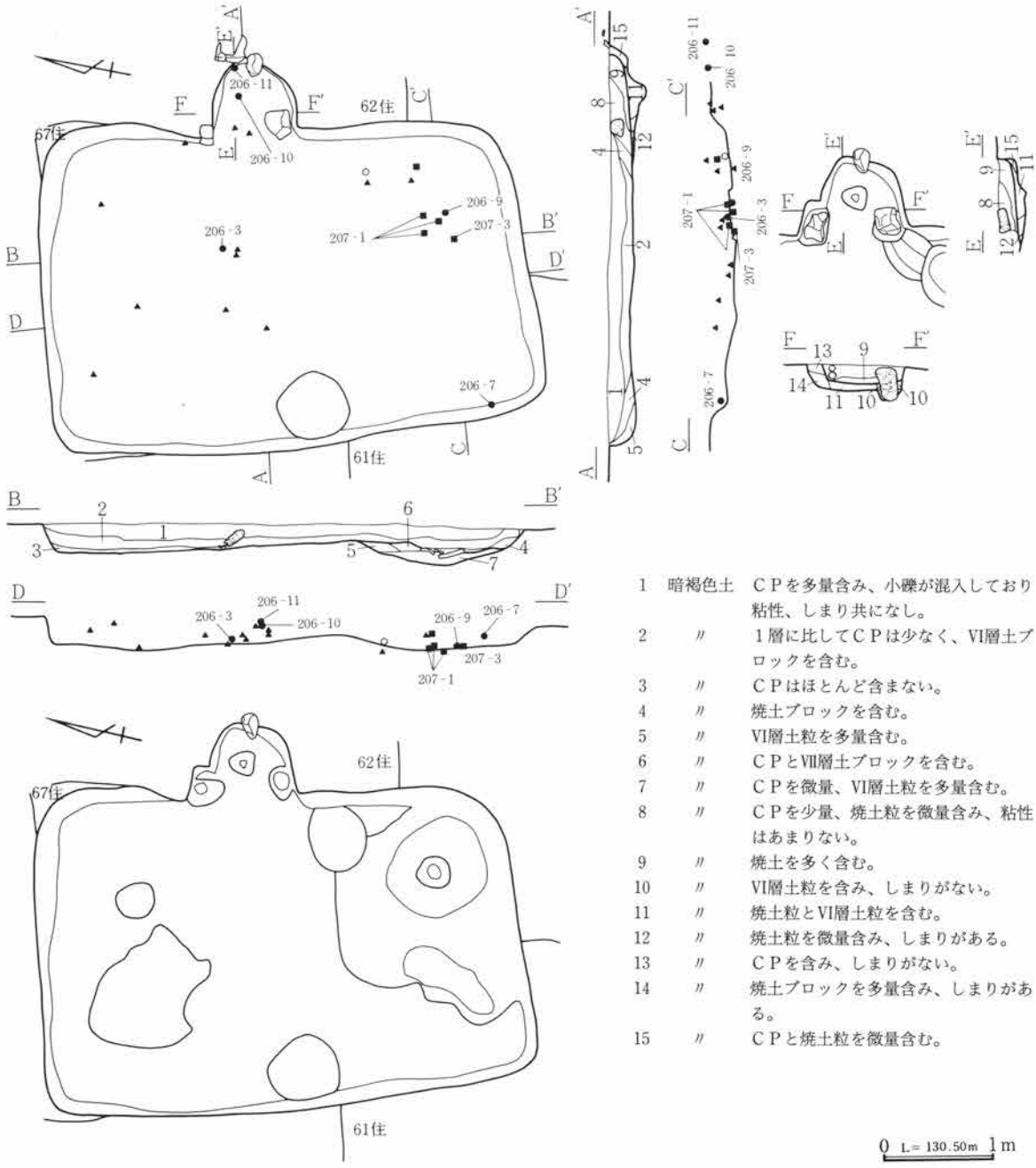
第203図　H区第8・38号住居跡出土遺物実測図

第8・38号住居跡共に残存状態は極めて不良であり、重複関係を明確に示すことはできないが、第38号住居跡のカマドの残存がみられないことなどから、38号住→8号住という関係が想定される。しかしこの関係を検証する手段である出土遺物の比較は、第38号住居跡の伴出遺物に型式的前後関係を窺い知れる資料が皆無でありできなかった。また、第8号住居跡は第83号住居跡と重複しており、これもセクション及び出土遺物からの前後関係把握はできなかったが、一応83号住→8号住という関係を想定しておきたい。

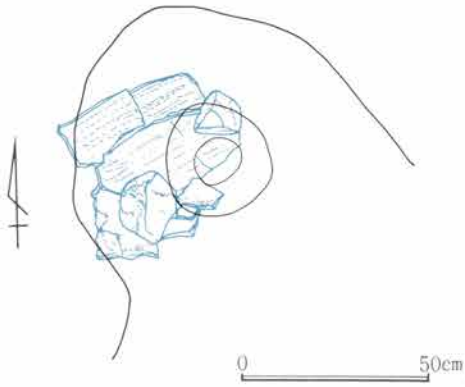
遺物は、第8号住居跡のカマド位置から比較的まとまって出土したのみで、第38号住居跡はごく少ない。

遺構名称	H区第９号住居跡	位置	41～44－H－63～65グリッド内	分類	C－３	時期	X
平面形態	隅丸長方形	規模	2.95m×4.38m	主軸方位	東－15度－北	残存深度	約15cm程
備考	壁は全周し、南東部に瓦で覆ったピット状の遺構を持つ。						

カマド	位置形状	北東壁中央やや北寄り	分類	E－１	主軸方位	東－15度－北
規模	全長80cm・屋外長65cm・屋内長15cm・袖間幅90cm・燃焼部幅72cm・煙道幅－cm					
備考	両袖石と支脚痕を検出。焚口部の石は天井石と思われるが不明。先端部で出土した羽釜は煙出し部に使用したものか。					



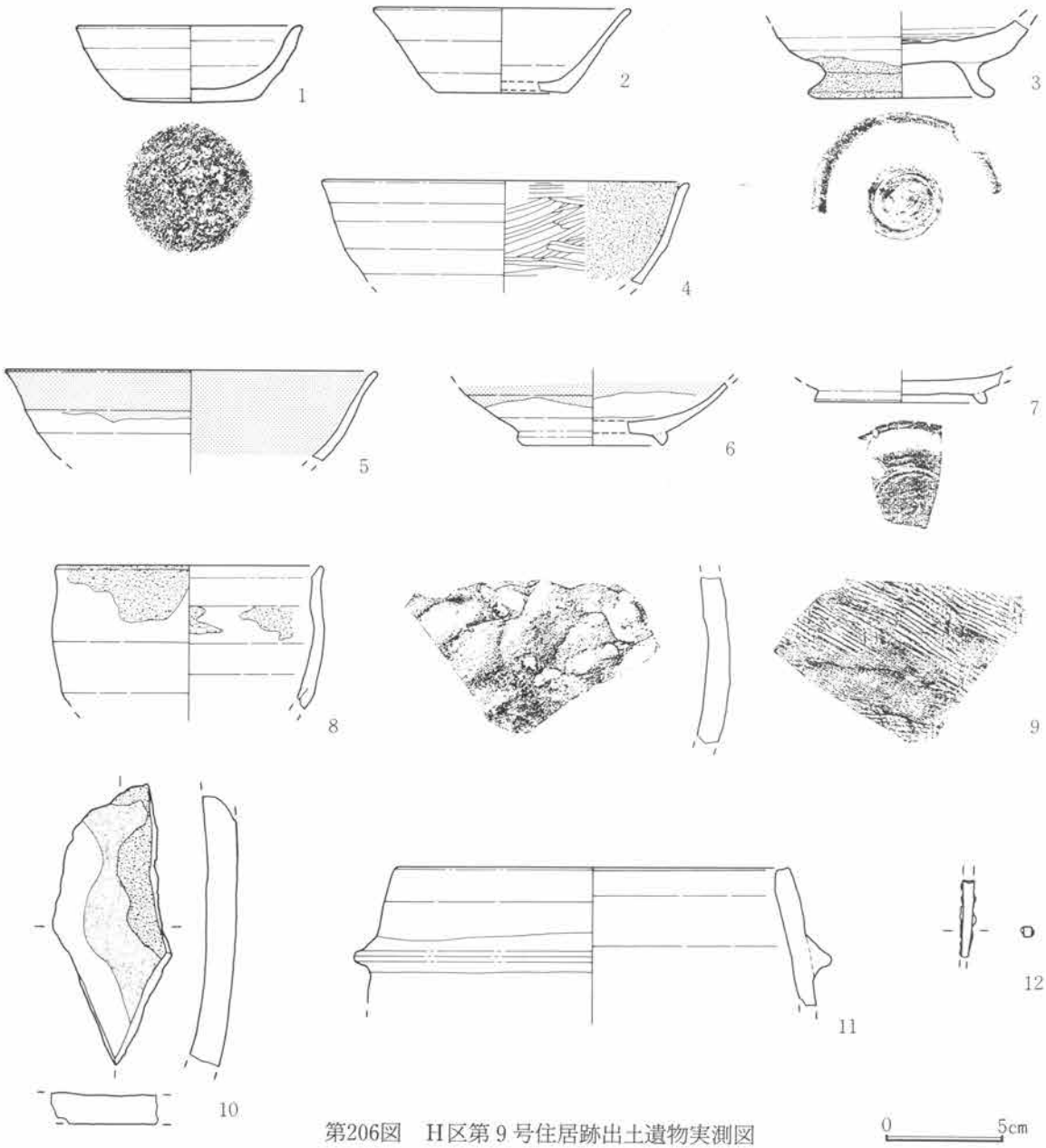
第204図　H区第９号住居跡実測図



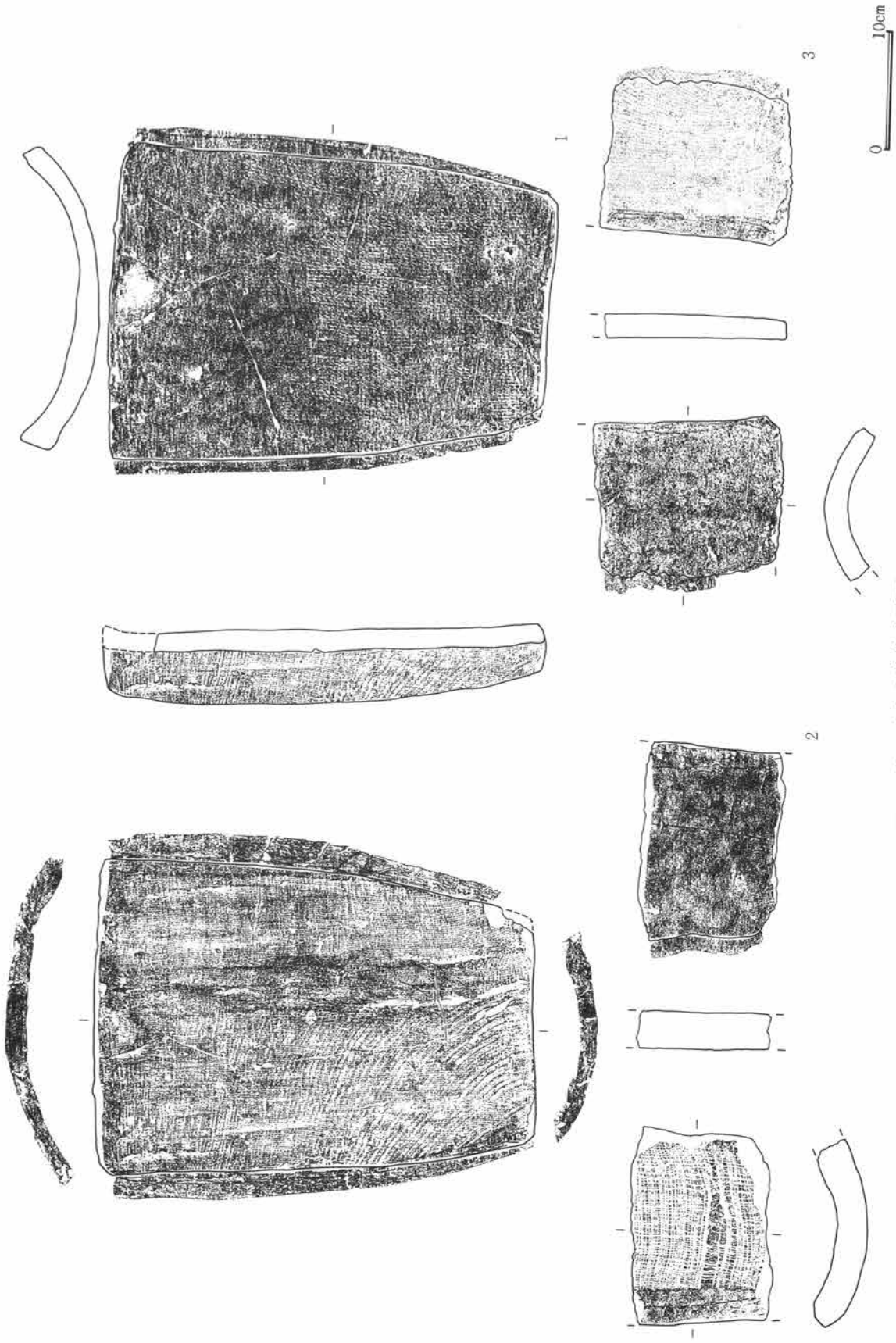
第205図　Ｈ区第９号住居跡貯蔵穴実測図

当住居跡は、第61・62・67号住居跡と重複している。この３軒よりも当住居跡が新しい時期のものであることは、セクション等の検討から容易に捉えることができるが、第61・62・67号住居跡の関係は67号住→62号住の関係が想定できるだけである。

遺物出土は、カマド内出土のものを除き大半が床面から浮いた状態であるが、一ヵ所南東コーナー部近くに床面に貼り付くような状態で女瓦及び礫が出土した。この部分は掘り方段階で下に土坑状の掘り込みが検出された。位置から貯蔵穴とも考えられるが、上を完全に覆った状態では貯蔵穴として機能させることはできない。

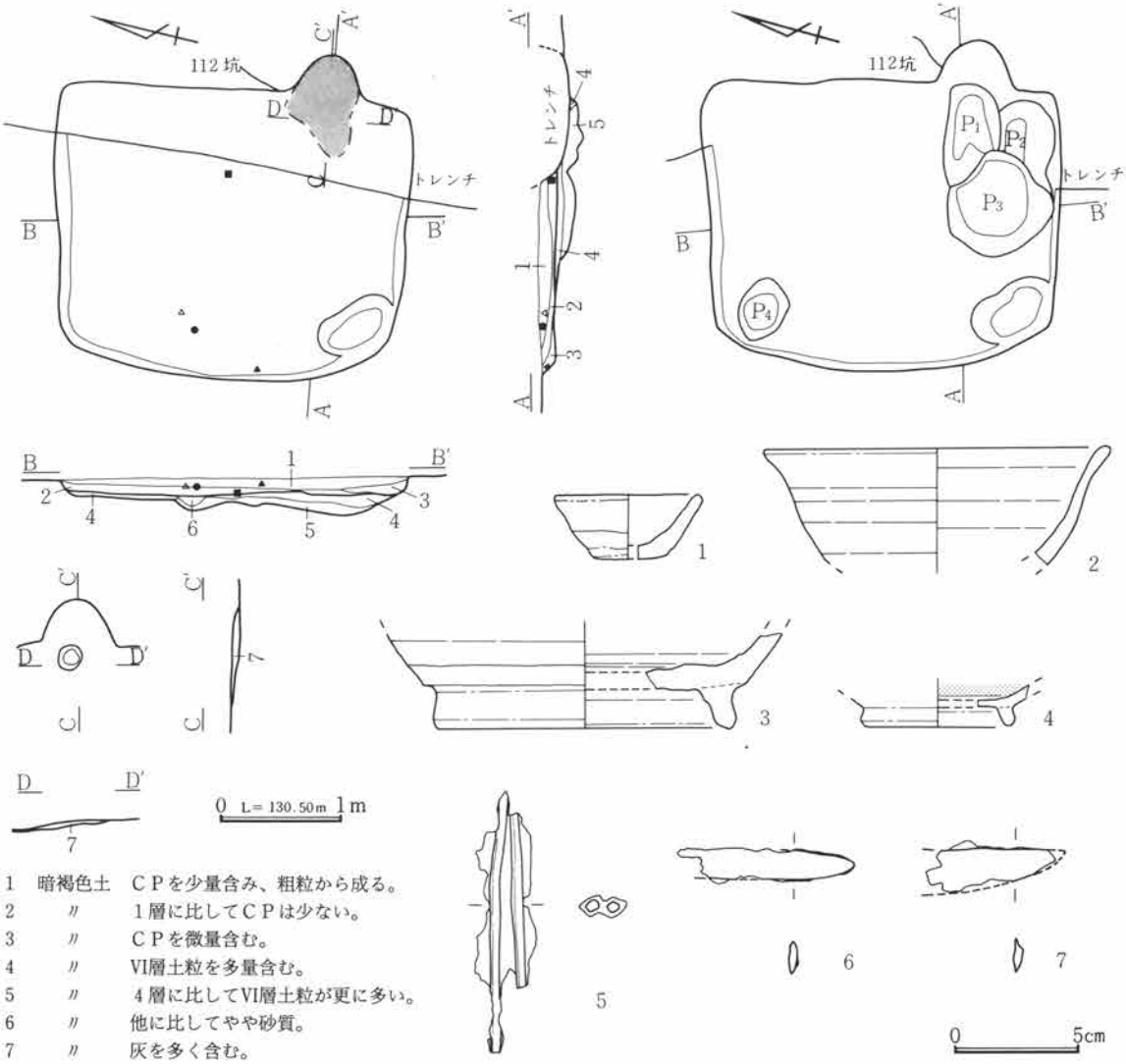


第206図　Ｈ区第９号住居跡出土遺物実測図



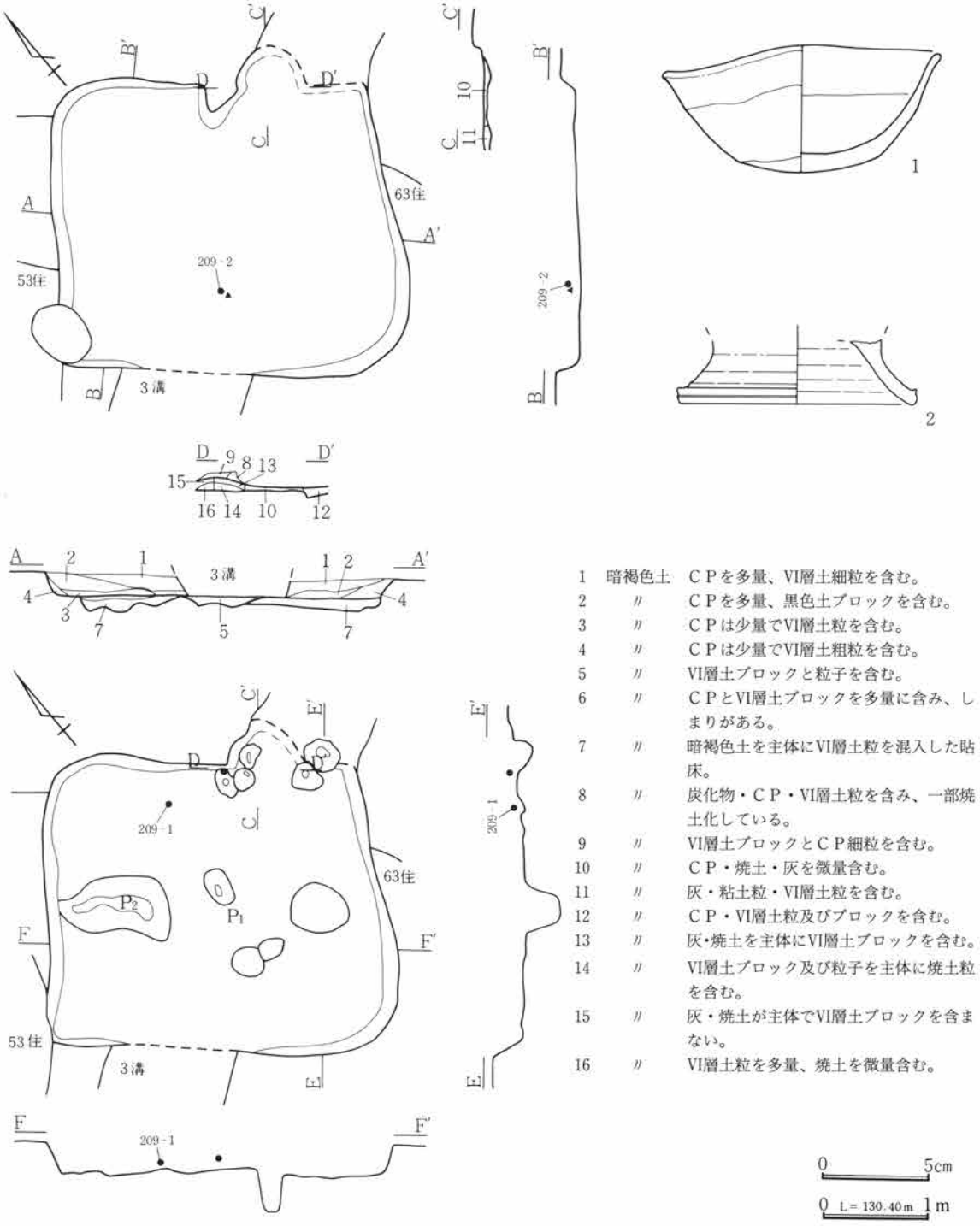
第207図　H区第9号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	H区第12号住居跡	位置	35～37—H—58・59グリッド内	分類	—	時期	?
平面形態	隅丸長方形	規模	— m×2.85m	主軸方位	東—13度—北	残存深度	約5cm程
備考	東壁及びカマドはトレンチのため残存状態が悪く、カマドは灰とピットを検出したのみである。南西コーナー部に貯蔵穴を検出。						



第208図　H区第12号住居跡・出土遺物実測図

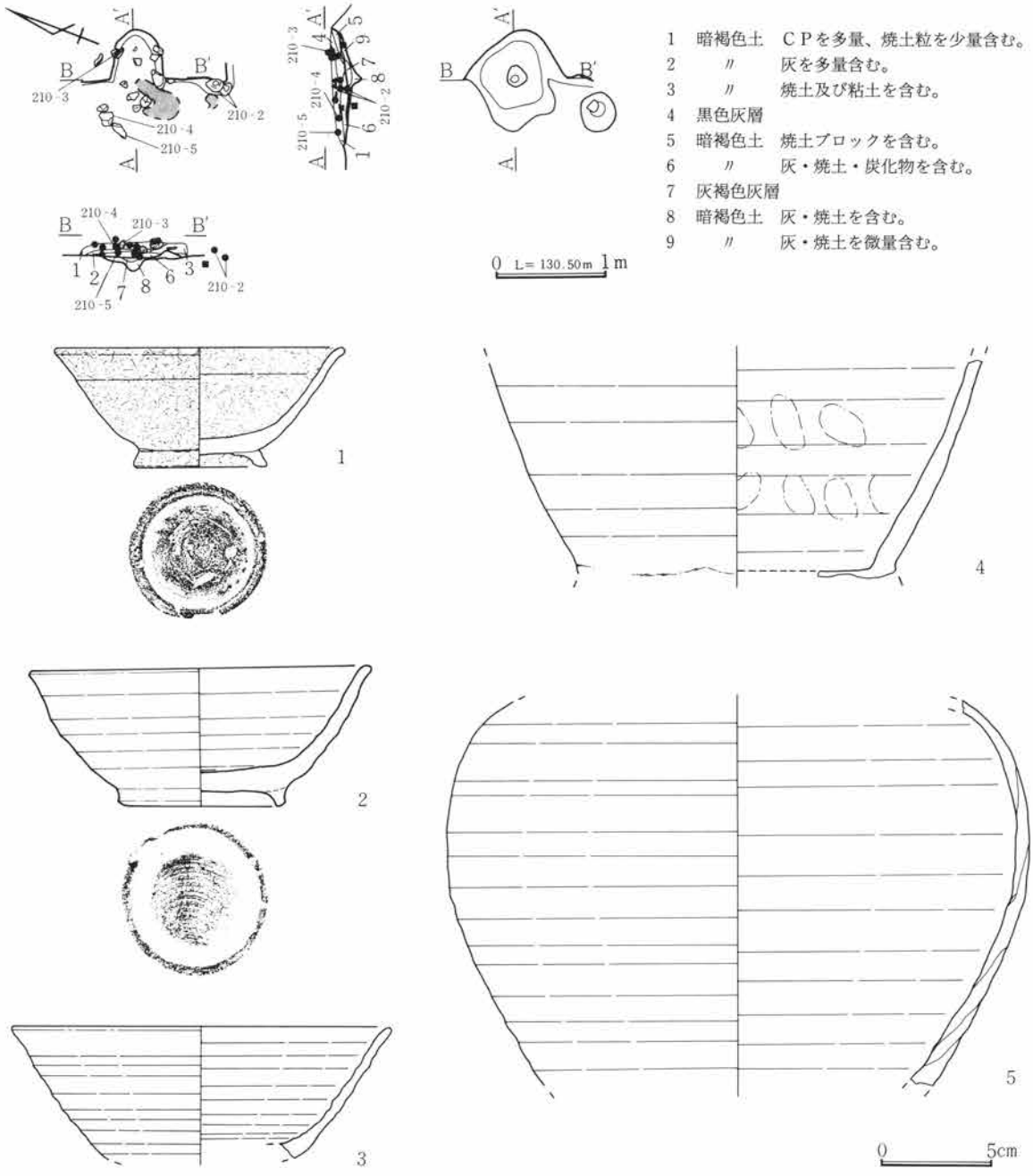
遺構名称	H区第35号住居跡	位置	37～39—H—49～51グリッド内	分類	A—9	時期	III
平面形態	隅丸長方形	規模	2.68m×3.27m	主軸方位	東—45度—北	残存深度	約15cm程
備考	住居中央部は3号溝による攪乱を受けている。						
カマド	位置形状	北東壁南寄り		分類	—	主軸方位	北—42度—東
規模	全長76cm・屋外長36cm・屋内長40cm・袖間幅—cm・燃焼部幅—cm・煙道幅—cm						
備考	カマドの南半分は3号溝による攪乱のため不明である。						



1	暗褐色土	ＣＰを多量、Ⅵ層土細粒を含む。
2	〃	ＣＰを多量、黒色土ブロックを含む。
3	〃	ＣＰは少量でⅥ層土粒を含む。
4	〃	ＣＰは少量でⅥ層土粗粒を含む。
5	〃	Ⅵ層土ブロックと粒子を含む。
6	〃	ＣＰとⅥ層土ブロックを多量に含み、しまりがある。
7	〃	暗褐色土を主体にⅥ層土粒を混入した貼床。
8	〃	炭化物・ＣＰ・Ⅵ層土粒を含み、一部焼土化している。
9	〃	Ⅵ層土ブロックとＣＰ細粒を含む。
10	〃	ＣＰ・焼土・灰を微量含む。
11	〃	灰・粘土粒・Ⅵ層土粒を含む。
12	〃	ＣＰ・Ⅵ層土粒及びブロックを含む。
13	〃	灰・焼土を主体にⅥ層土ブロックを含む。
14	〃	Ⅵ層土ブロック及び粒子を主体に焼土粒を含む。
15	〃	灰・焼土が主体でⅥ層土ブロックを含まない。
16	〃	Ⅵ層土粒を多量、焼土を微量含む。

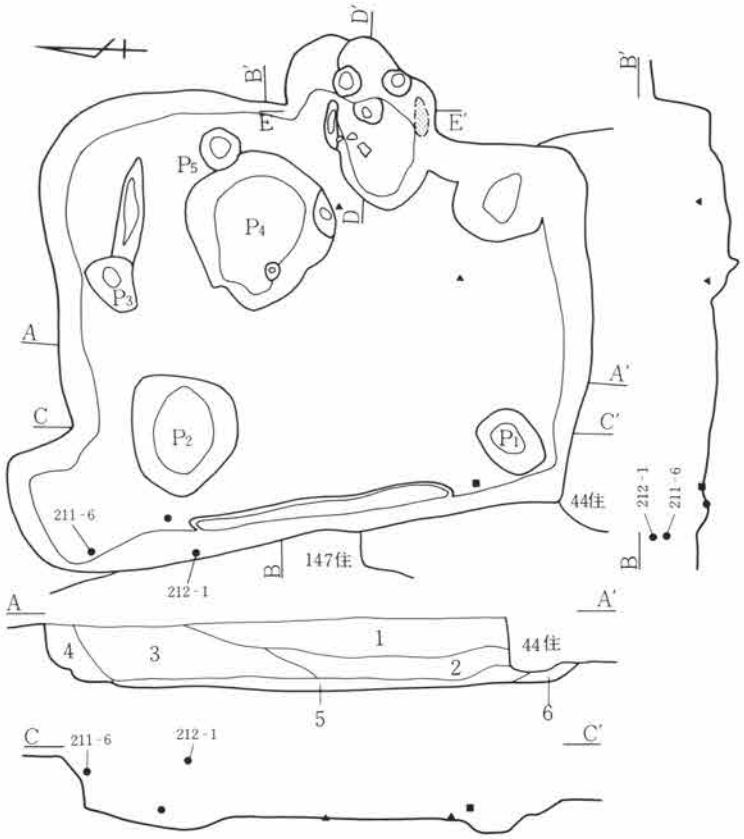
第209図　Ｈ区第35号住居跡・出土遺物実測図

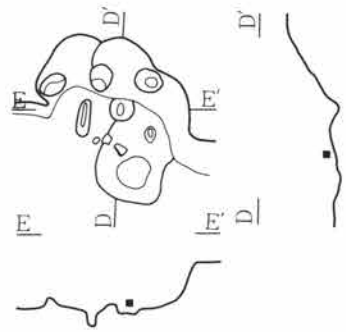
遺構名称	Ｈ区第36号住居跡	位置	42―Ｈ―57・58グリッド内			分類	―	時期	Ⅶ
カマド	位置形状	北東壁？		分類	Ｅ－１	主軸方位	東―25度―北		
規模	全長46cm・屋外長46cm・屋内長―cm・袖間幅48cm・燃焼部幅43cm・煙道幅―cm								
備考	カマド及び貯蔵穴周辺が残存するのみで、住居規模は確認できなかった。								



第210図　Ｈ区第36号住居跡・出土遺物実測図

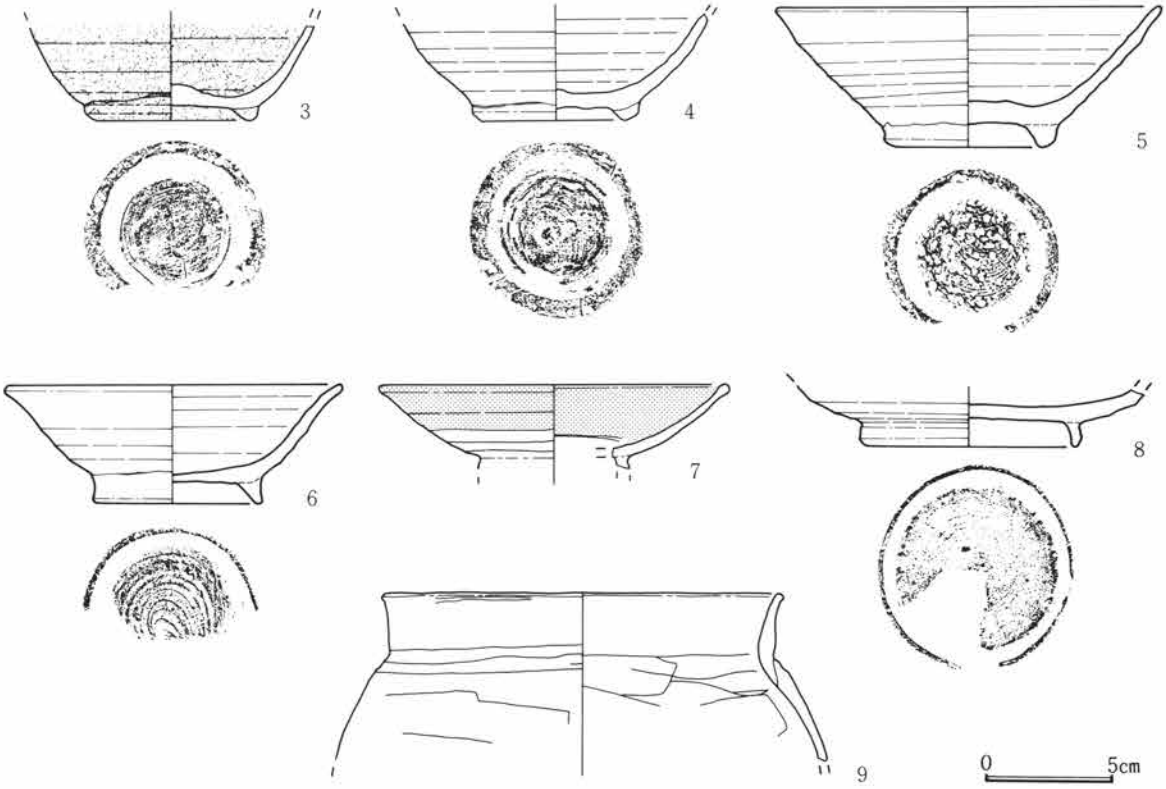
遺構名称	Ｈ区第39号住居跡		位置	36～39―Ｈ―59～61グリッド内		分類	Ｃ－８	時期	Ⅷ
平面形態	隅丸長方形	規模	3.50m×4.27m		主軸方位	東－５度―北		残存深度	約30cm程
備考	南東コーナーに貯蔵穴、西壁中央部に壁溝を検出。北西コーナー部の突出部は別遺構の可能性も考えられる。								
カマド	位置形状	東壁南寄り			分類	―	主軸方位	東―10度―北	
規模	全長90cm・屋外長68cm・屋内長22cm・袖間幅73cm・燃焼部幅50cm・煙道幅―cm								
備考	カマドは二分して検出されたので、形状ははっきりしない。焚口部に比べ、燃焼部奥の幅が広いことから作り替えの可能性も考えられる。								



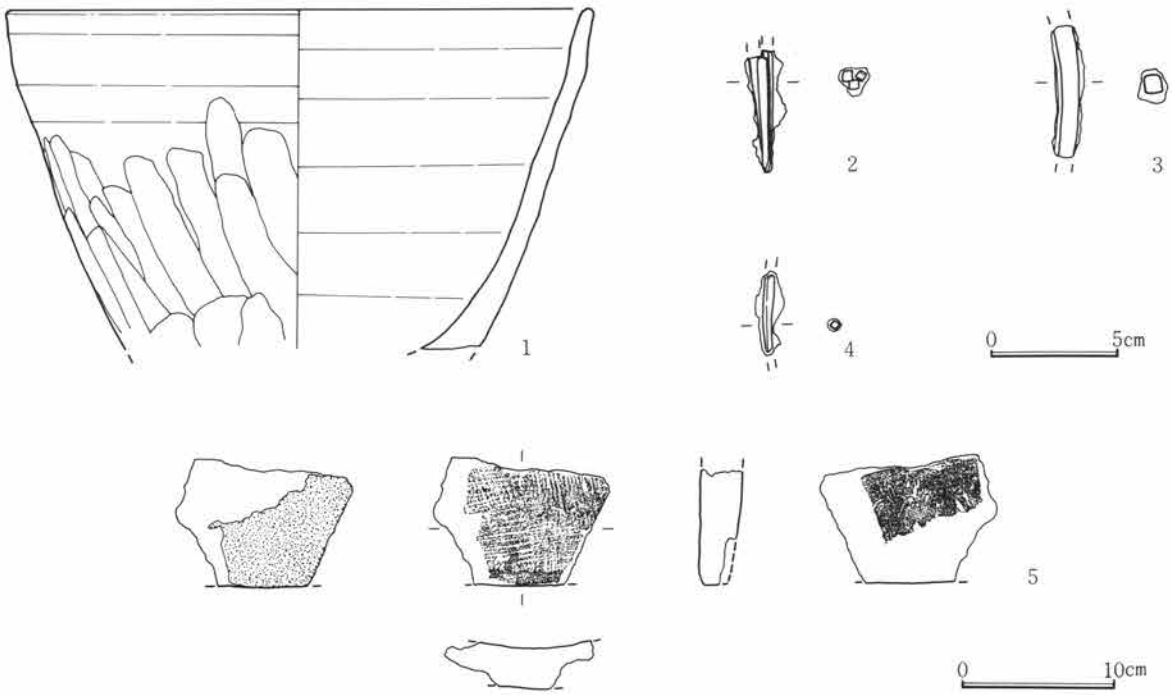


1　暗褐色土　CPを多量、VI層土細粒を少量含む。
2　〃　CPを少量、VI層土細粒を多量含む。
3　〃　CPとVI層土細粒を多量に含む。
4　〃　CPを微量含み、VI層土粒は含まない。
5　〃　CPを少量含む。
6　〃　CPを微量、VI層土細粒を多量含む。

0　L=130.60m　1m



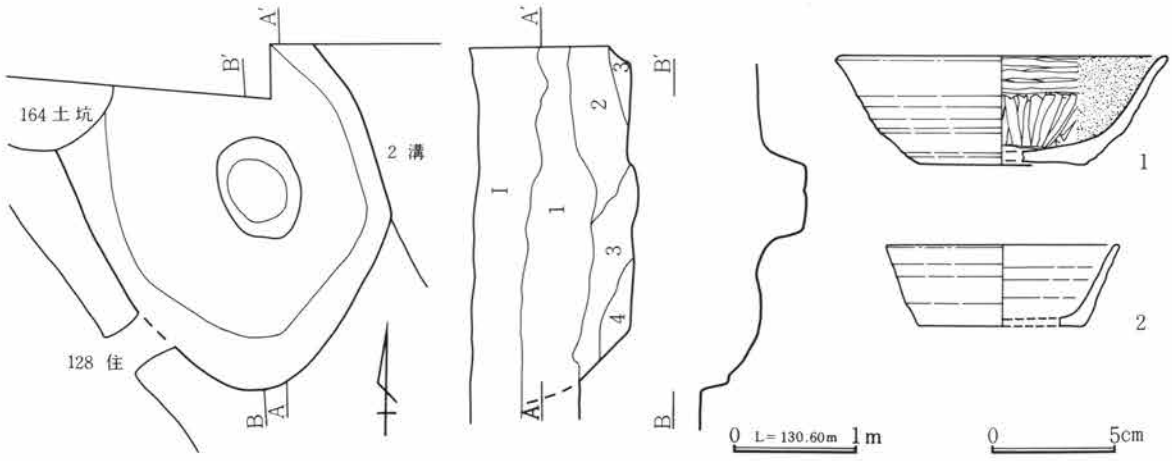
第211図　H区第39号住居跡・出土遺物実測図



第212図　Ｈ区第39号住居跡出土遺物実測図

当住居跡は、西側で第147号住居跡と、南側で第44号住居跡と重複している。前後関係についてはセクションの観察から39号住→44号住であることはほぼ捉えられるが、第147号住居跡との関係は判然としない。南東コーナー部に検出した貯蔵穴と思われるピットを除き、他のP_1～P_5は配置・規模等に共通するものがないことから柱穴である可能性は少なく、その性格は不明である。

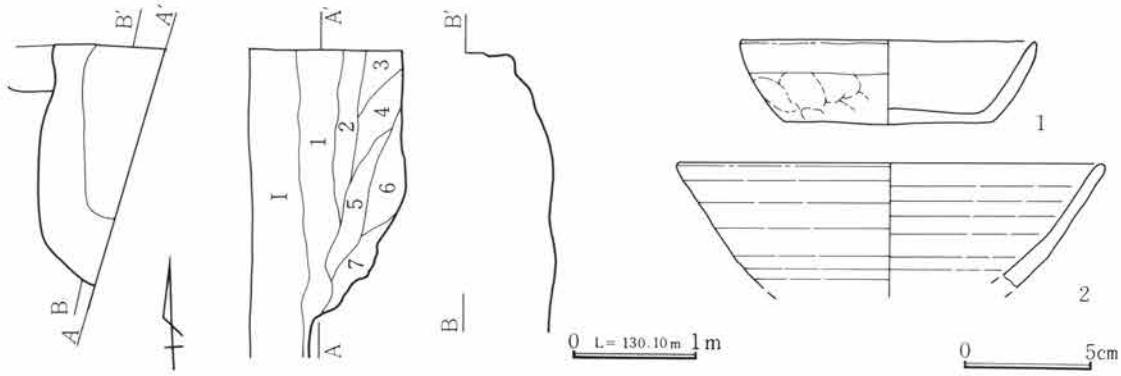
遺構名称	Ｈ区第41号址		位置	44～46―Ｈ―59・60グリッド内		分類	―	時期	？
平面形態	不整形	規模	2.42m×　―　m		主軸方位	北―20度―西		残存深度	約35cm程
備考	当遺構は、西側が農道下のために東側と二度に分けて検出されたので、形も不整形で住居跡とは考えにくい。								



1　暗褐色土　Ⅵ層土ブロックを少量含む。
2　〃　Ⅵ層土ブロックを多量、炭化物・焼土を少量含む。
3　暗褐色土　Ⅵ層土ブロックを少量含む。
4　〃　Ⅵ層土ブロックを含まない。

第213図　Ｈ区第41号址実測図

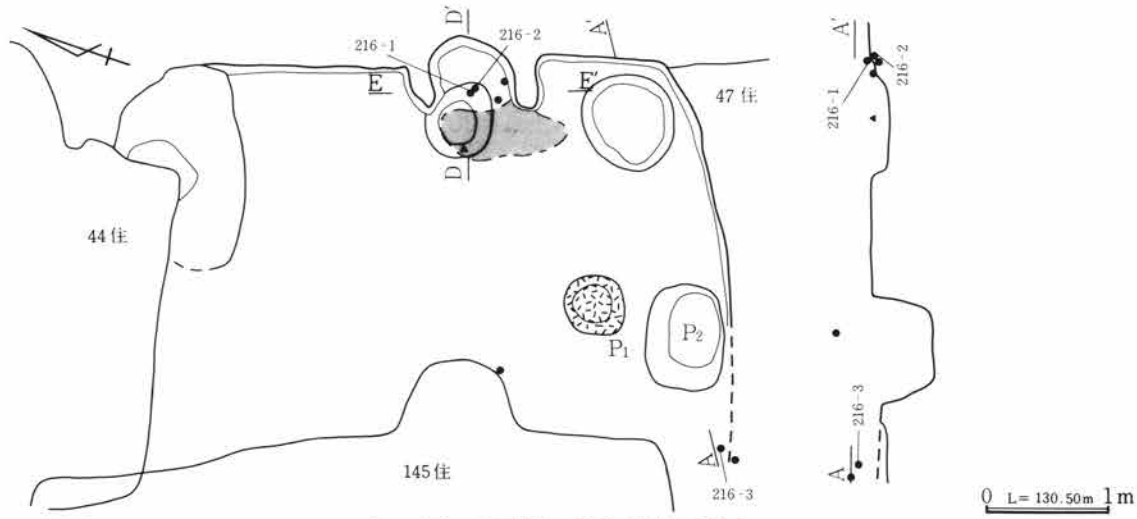
遺構名称	H区第42号址		位置	45・46—H—47・48グリッド内		分類	—	時期	Ⅵ?
平面形態	?	規模	— m× — m	主軸方位	東—?度—北	残存深度	約40cm程		
備考	当遺構は、西側は路線外で北側も山王線下のため、南西コーナー部を検出したのみで遺構の性格については不明である。								



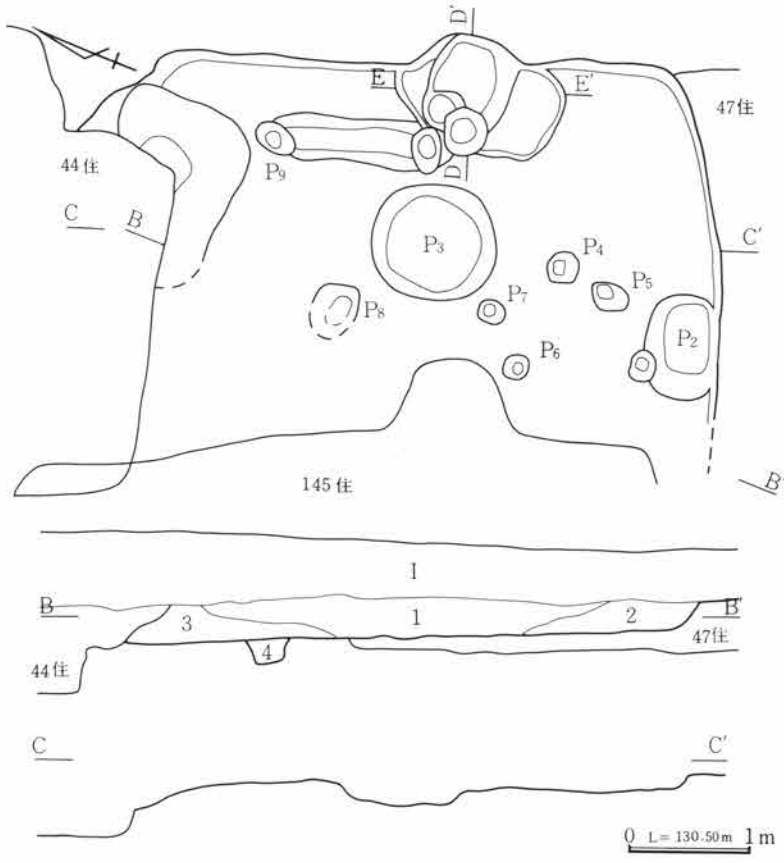
1　暗褐色土　Ⅵ層土ブロック・粒子・焼土を含む。
2　〃　Ⅵ層土を少量、ＣＰを微量、焼土・Ⅳ層土を含む。
3　〃　Ⅵ層土粒とＣＰを微量、Ⅳ層土を含む。
4　暗褐色土　Ⅵ層土粒・ブロックを含む。
5　〃　Ⅵ層土粒・ブロックを多量含む。
6　〃　Ⅵ層土ブロックを含む。
7　〃　Ⅵ層土粒・ブロツクを少量含む。

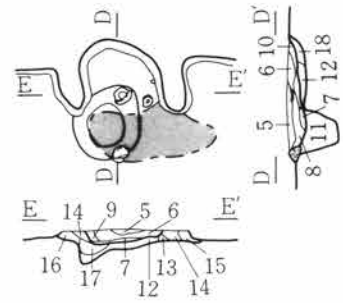
第214図　H区第42号址実測図

遺構名称	H区第43号住居跡		位置	32～35—H—58～?グリッド内		分類	—	時期	Ⅷ?
平面形態	隅丸方形?	規模	— m×4.65m	主軸方位	東—20度—北	残存深度	約5cm程		
備考	住居西半分は未検出。南東コーナー部に貯蔵穴、南に粘土張りの土坑、掘り方で中央部に円形の土坑とピットを多数検出。北東コーナー部の土坑は当住居跡に伴うかどうかはっきりしない。								
カマド	位置形状	北東壁南寄り			分類	A—2	主軸方位	東—18度—北	
規模	全長63cm・屋外長20cm・屋内長43cm・袖間幅95cm・燃焼部幅50cm・煙道幅—cm								
備考	カマド前中央から右寄りにかけて灰面を検出。平面と掘り方で焚口部にピットを検出。袖は白色粘質土を用いて構築。								

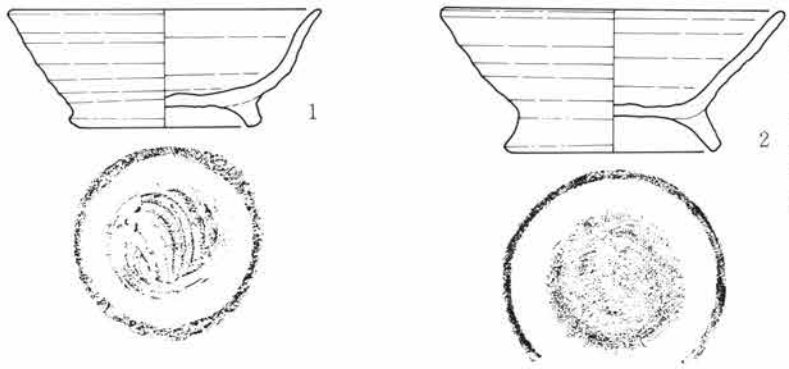


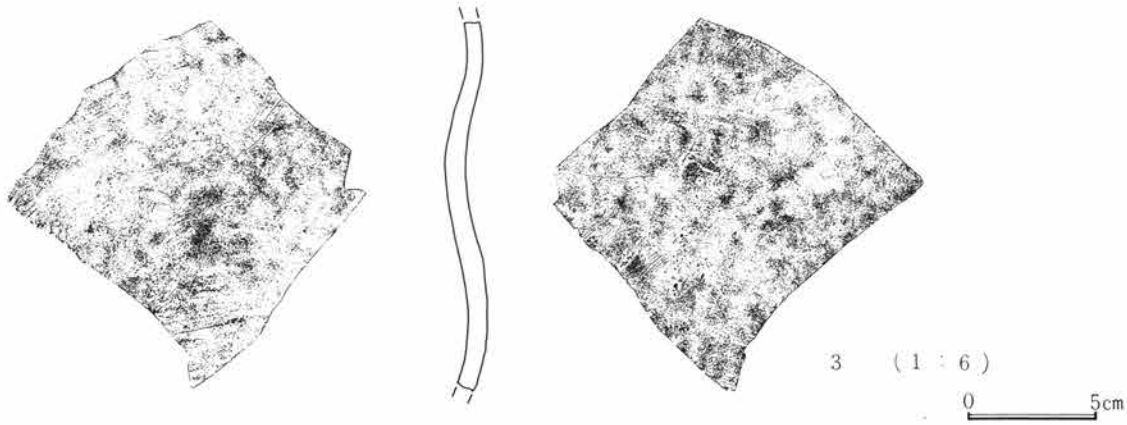
第215図　H区第43号住居跡実測図





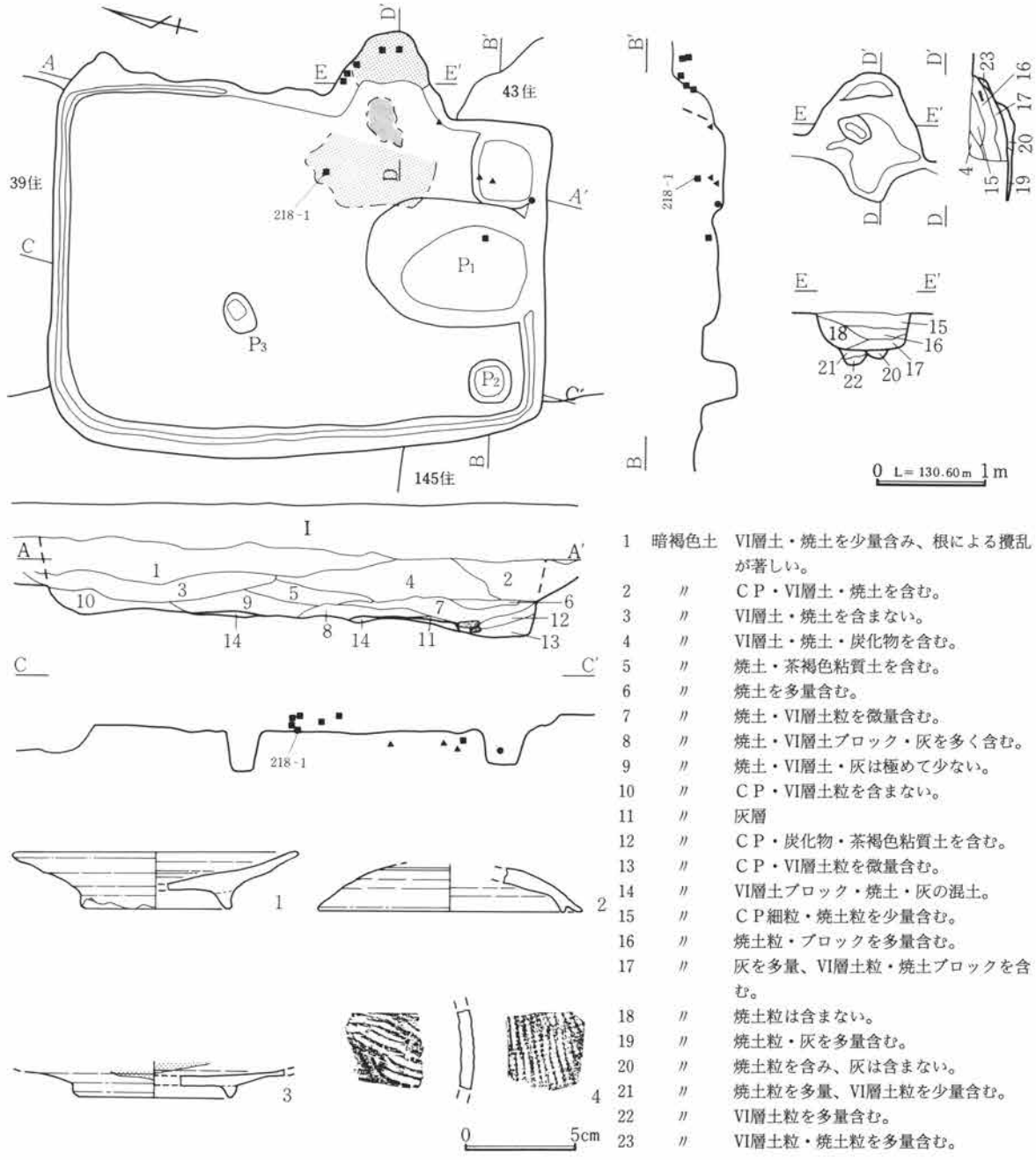
1	暗褐色土	ＣＰ・炭化物を含む。
2	〃	ＣＰ・焼土粒・炭化物を微量含む。
3	〃	ＣＰは少量で、VI層土粒を多く含む。
4	〃	VI層土が主体で、わずかにIV層土を含む。
5	〃	黄白色粘質土粒を少量含む。
6	〃	黄白色粘質土ブロックを多量に含み、一部焼土化している。
7	〃	焼土粒、黄白色粘質土ブロックを多量、灰を少量含む。
8	〃	黄白色粘質土を多量含む。
9	〃	黄白色粘質土を微量含む。
10	黄白色土	６層に近似。
11	黒褐色土	灰・炭化物が主体で、VI層土粒を微量含む。
12	褐色土	VI層土粒を主体に灰を含む焼土ブロック。
13	暗褐色土	VI層土を少量含む。
14	灰白色土	粘質土で焼土粒・IV層土を少量含む。
15	暗褐色土	VI層土、灰白色粘質土を含む。
16	〃	灰白色粘質土を少量含む。
17	〃	VI層土を含む。
18	褐色土	VI層土粒を多量、焼土を含む。





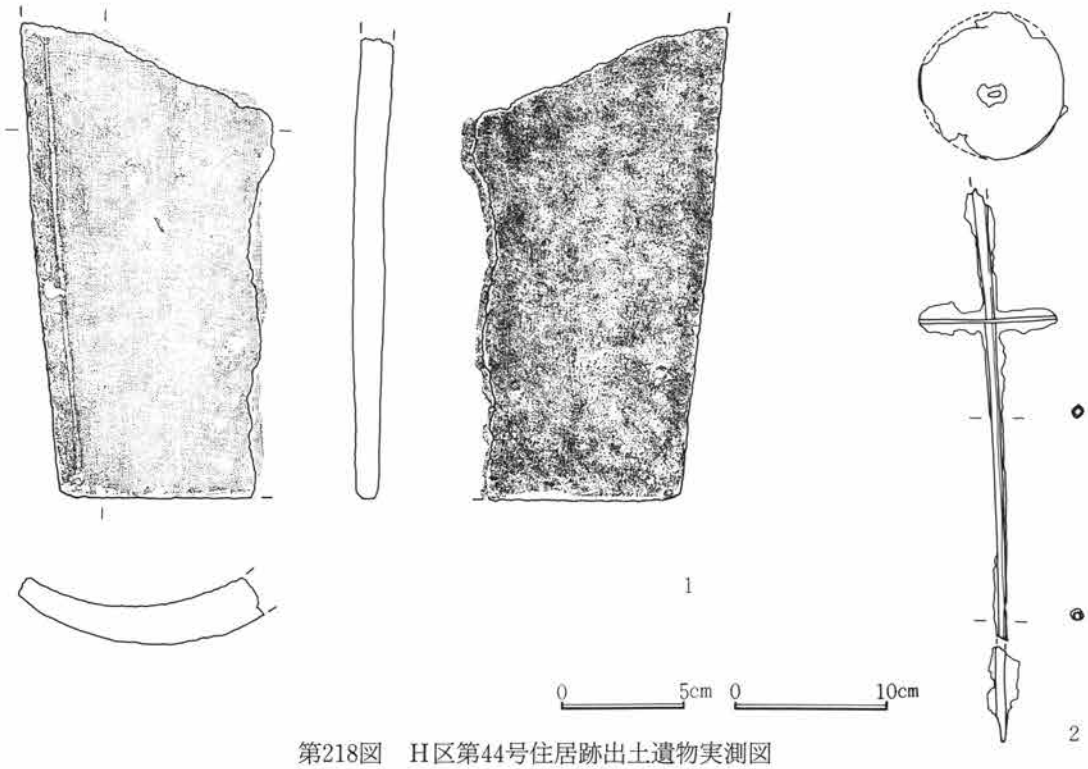
第216図　H区第43号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	H区第44号住居跡	位置	34～37—H—59～61グリッド内	分類	C－8	時期	?
平面形態	隅丸長方形	規模	3.50m×4.53m	主軸方位	東—14度—北	残存深度	約10cm程
備考	壁溝はカマド部分と南壁を除き全周。南東コーナー部に貯蔵穴、他に小ピット2と南壁際に土坑を検出。カマド部が農道下にかかるため2次の調査で全体像を検出。						
カマド	位置形状	東壁南寄り		分類	—	主軸方位	東—2度—北
規模	全長—cm・屋外長67cm・屋内長—cm・袖間幅110cm・燃焼部幅90cm・煙道幅—cm						
備考	先行調査部床面でカマドからのかき出しと思われる焼土面を検出。カマド本体の調査では、燃焼部には灰層が、奥壁部には焼土面が検出された。						



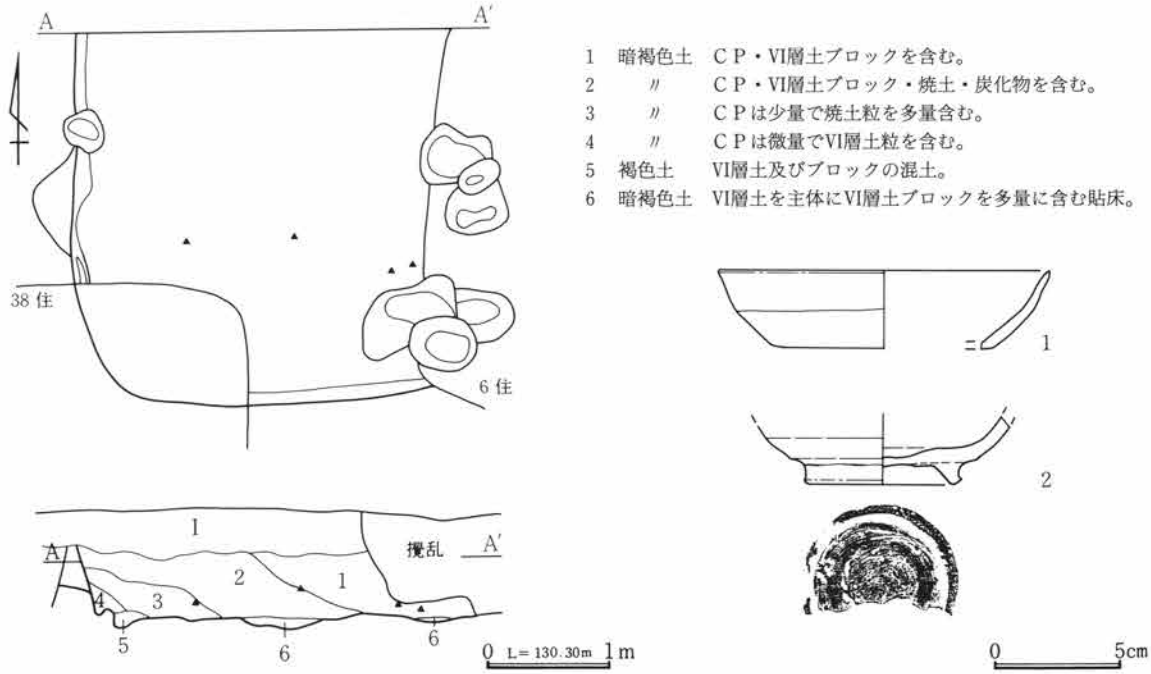
1　暗褐色土　VI層土・焼土を少量含み、根による攪乱が著しい。
2　〃　CP・VI層土・焼土を含む。
3　〃　VI層土・焼土を含まない。
4　〃　VI層土・焼土・炭化物を含む。
5　〃　焼土・茶褐色粘質土を含む。
6　〃　焼土を多量含む。
7　〃　焼土・VI層土粒を微量含む。
8　〃　焼土・VI層土ブロック・灰を多く含む。
9　〃　焼土・VI層土・灰は極めて少ない。
10　〃　CP・VI層土粒を含まない。
11　〃　灰層
12　〃　CP・炭化物・茶褐色粘質土を含む。
13　〃　CP・VI層土粒を微量含む。
14　〃　VI層土ブロック・焼土・灰の混土。
15　〃　CP細粒・焼土粒を少量含む。
16　〃　焼土粒・ブロックを多量含む。
17　〃　灰を多量、VI層土粒・焼土ブロックを含む。
18　〃　焼土粒は含まない。
19　〃　焼土粒・灰を多量含む。
20　〃　焼土粒を含み、灰は含まない。
21　〃　焼土粒を多量、VI層土粒を少量含む。
22　〃　VI層土粒を多量含む。
23　〃　VI層土粒・焼土粒を多量含む。

第217図　H区第44号住居跡・出土遺物実測図



第218図　Ｈ区第44号住居跡出土遺物実測図

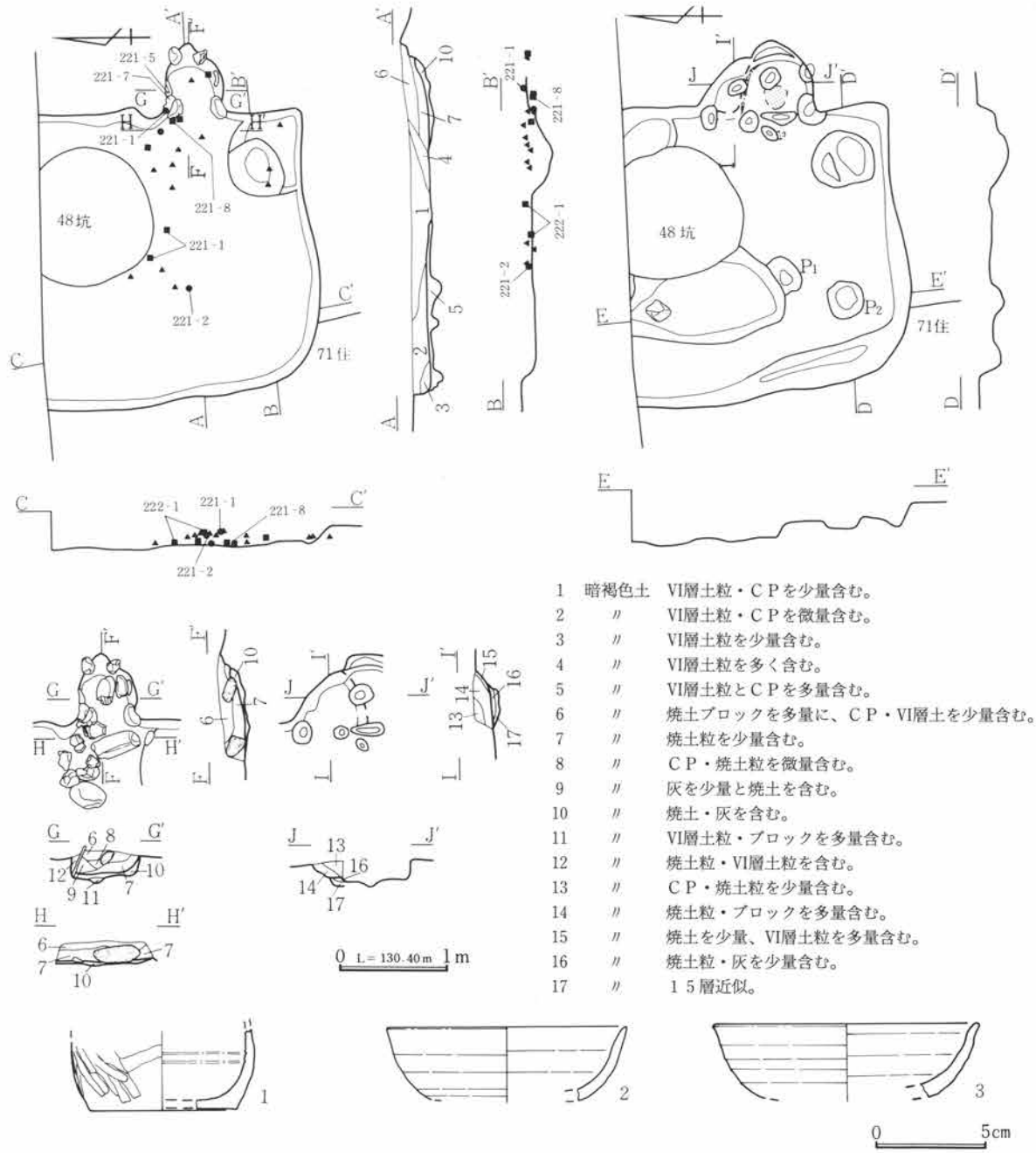
遺構名称	Ｈ区第45号住居跡		位置	45・46―Ｈ―49～51グリッド内		分類	―	時期	？
平面形態	隅丸長方形？	規模	3.10m× ― m		主軸方位	東―０度―北		残存深度	約８cm程
備考	北半は山王線下にかかり未調査。東側は６号住と重複し、セクションから45号住→６号住と考えられる。カマドは６号住との重複により、ピットを含み痕跡のみ検出された。位置は東壁南寄り。								



1　暗褐色土　ＣＰ・Ⅵ層土ブロックを含む。
2　〃　ＣＰ・Ⅵ層土ブロック・焼土・炭化物を含む。
3　〃　ＣＰは少量で焼土粒を多量含む。
4　〃　ＣＰは微量でⅥ層土粒を含む。
5　褐色土　Ⅵ層土及びブロックの混土。
6　暗褐色土　Ⅵ層土を主体にⅥ層土ブロックを多量に含む貼床。

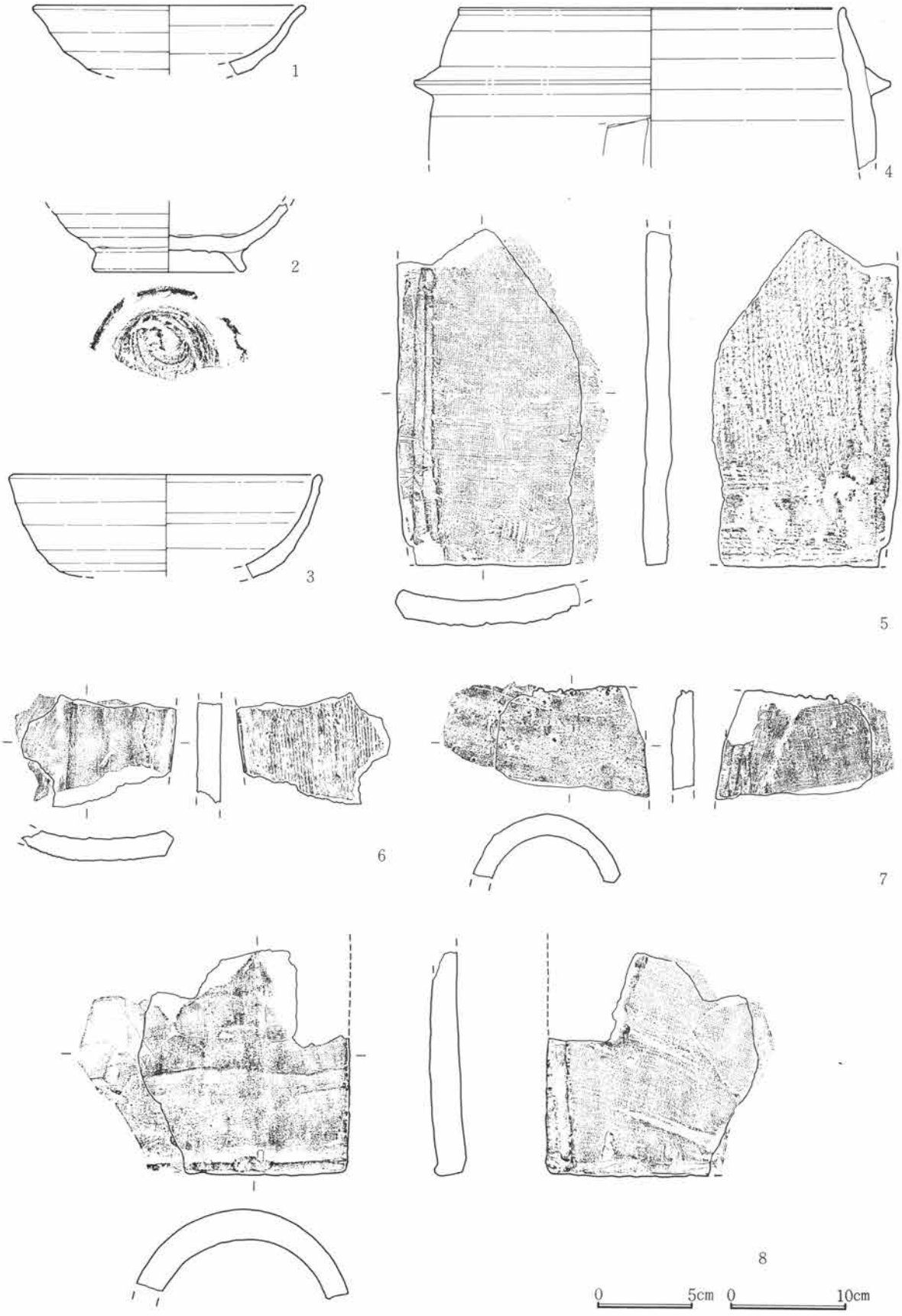
第219図　Ｈ区第45号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	H区第46号住居跡	位置	45・46—H—54・55グリッド内	分類	C—10	時期	IX
平面形態	隅丸長方形	規模	2.70m× — m	主軸方位	東—７度—北	残存深度	約15cm程
備考	北側約⅓は山王線下にかかり未調査。壁溝・柱穴は未検出であり、貯蔵穴は南東コーナー部に位置し、不整円形で径約55cm、深度約14cmである。カマド内及び周辺から多量の礫が検出されている。						
カマド	位置形状	東壁南寄り		分類	E—1	主軸方位	東—７度—北
規模	全長75cm・屋外長65cm・屋内長10cm・袖間幅60cm・燃焼部幅45cm・煙道幅—cm						
備考	袖は礫と瓦で、燃焼部両側は瓦、煙出しの区画は小礫で構築されている。支脚は、中央部に倒れた礫と考えられ、掘り方で中央左寄りに円形ピット及び周囲に焼土が検出された。灰は右寄りに検出。						

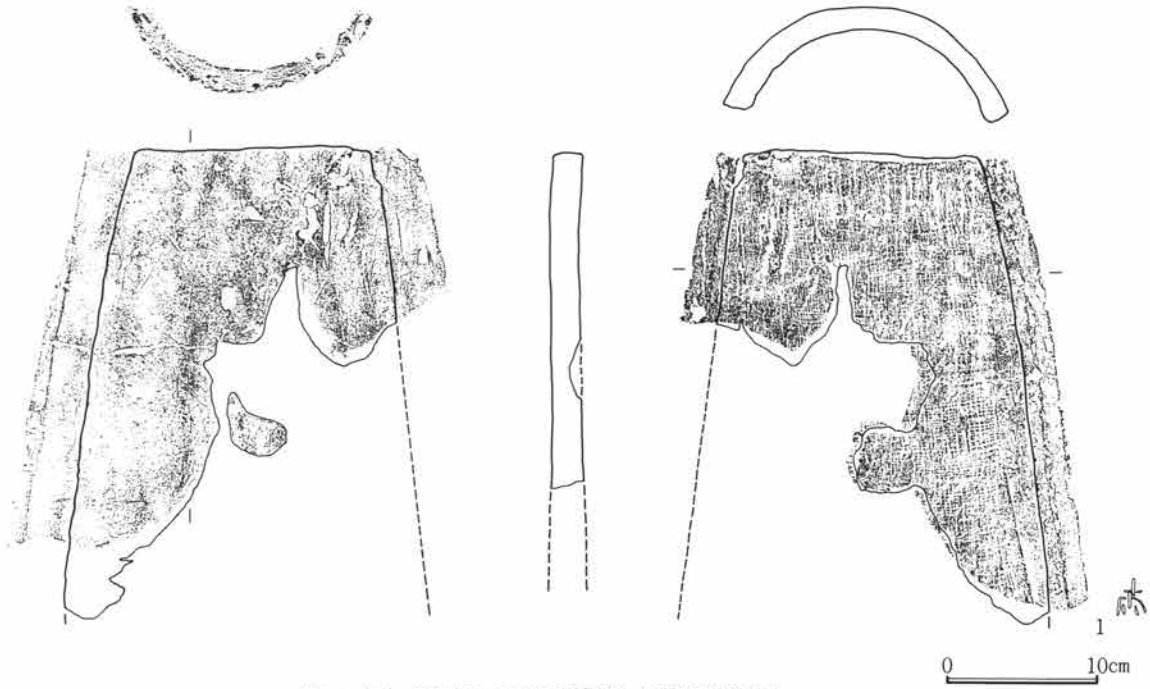


1　暗褐色土　VI層土粒・ＣＰを少量含む。
2　〃　VI層土粒・ＣＰを微量含む。
3　〃　VI層土粒を少量含む。
4　〃　VI層土粒を多く含む。
5　〃　VI層土粒とＣＰを多量含む。
6　〃　焼土ブロックを多量に、ＣＰ・VI層土を少量含む。
7　〃　焼土粒を少量含む。
8　〃　ＣＰ・焼土粒を微量含む。
9　〃　灰を少量と焼土を含む。
10　〃　焼土・灰を含む。
11　〃　VI層土粒・ブロックを多量含む。
12　〃　焼土粒・VI層土粒を含む。
13　〃　ＣＰ・焼土粒を少量含む。
14　〃　焼土粒・ブロックを多量含む。
15　〃　焼土を少量、VI層土粒を多量含む。
16　〃　焼土粒・灰を少量含む。
17　〃　１５層近似。

第220図　H区第46号住居跡・出土遺物実測図

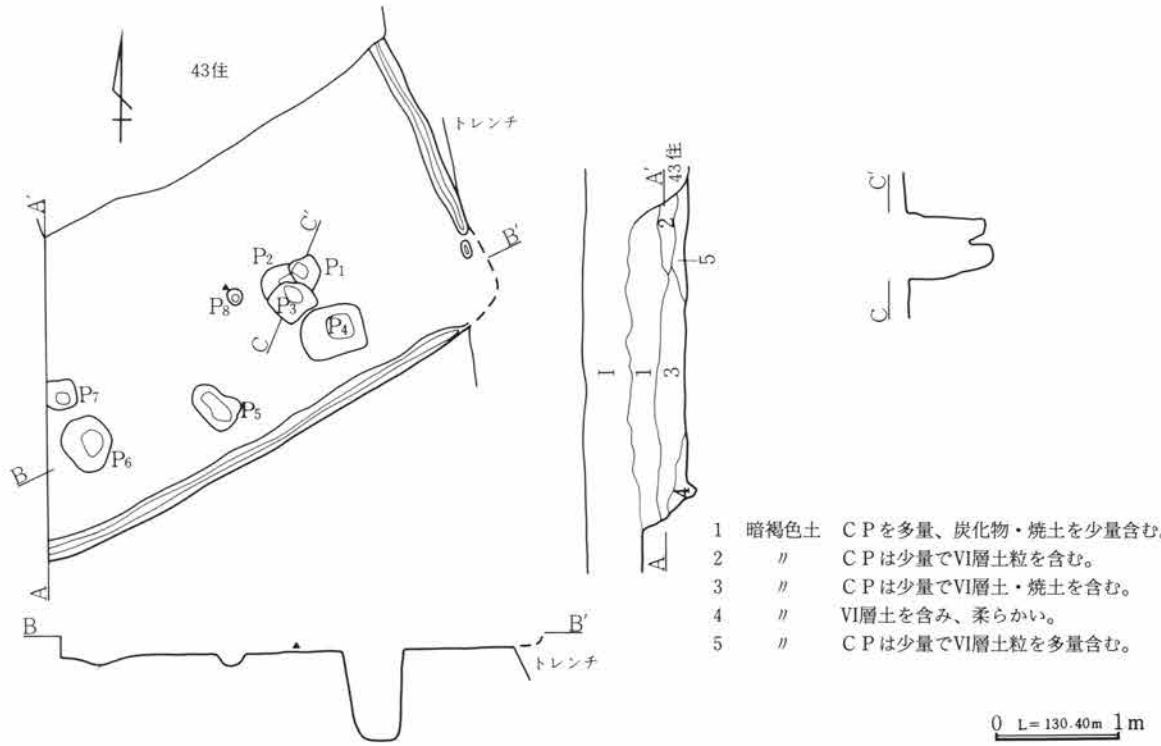


第221図　H区第46号住居跡出土遺物実測図

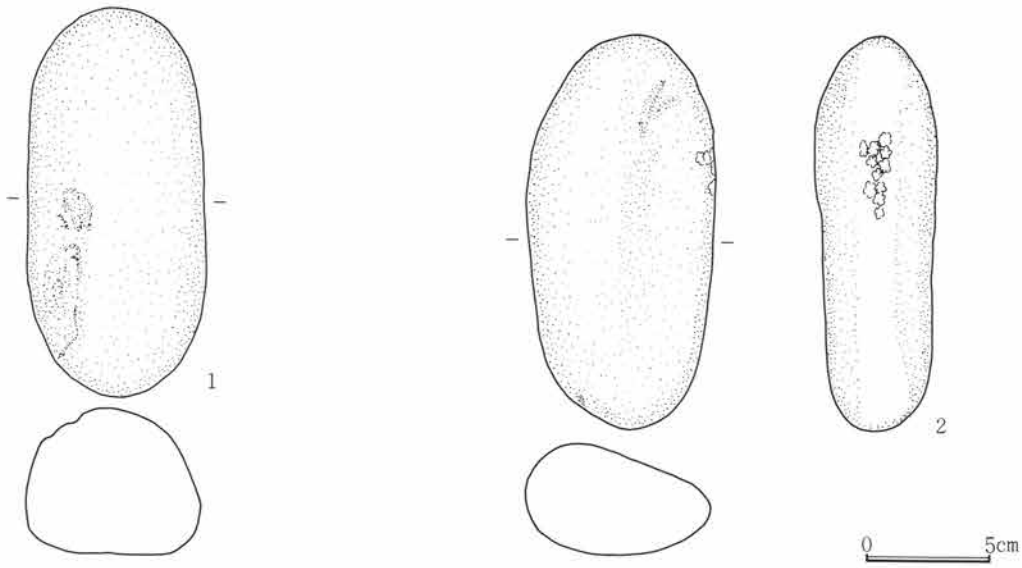


第222図　H区第46号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	H区第47号住居跡		位置	31～33—H—58～60グリッド内		分類	A—？	時期	？
平面形態	隅丸正方形？	規模	— m× — m	主軸方位	東—23度—北	残存深度	約13cm程		
備考	西半が南北農道下にかかり、２次の調査を行ったが、農道下で145・146号住と、北側で43号住と重複している。セクションから47号住→43号住の関係が考えられる。柱穴は２ヶ所検出された。								

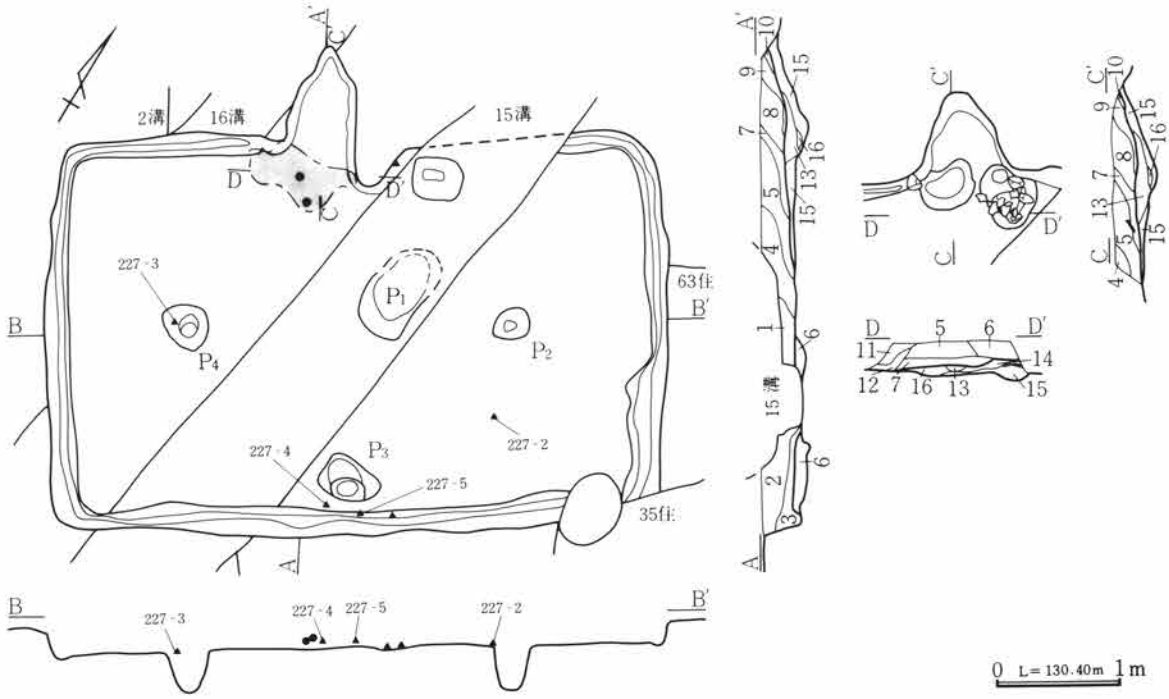


第223図　H区第47号住居跡実測図



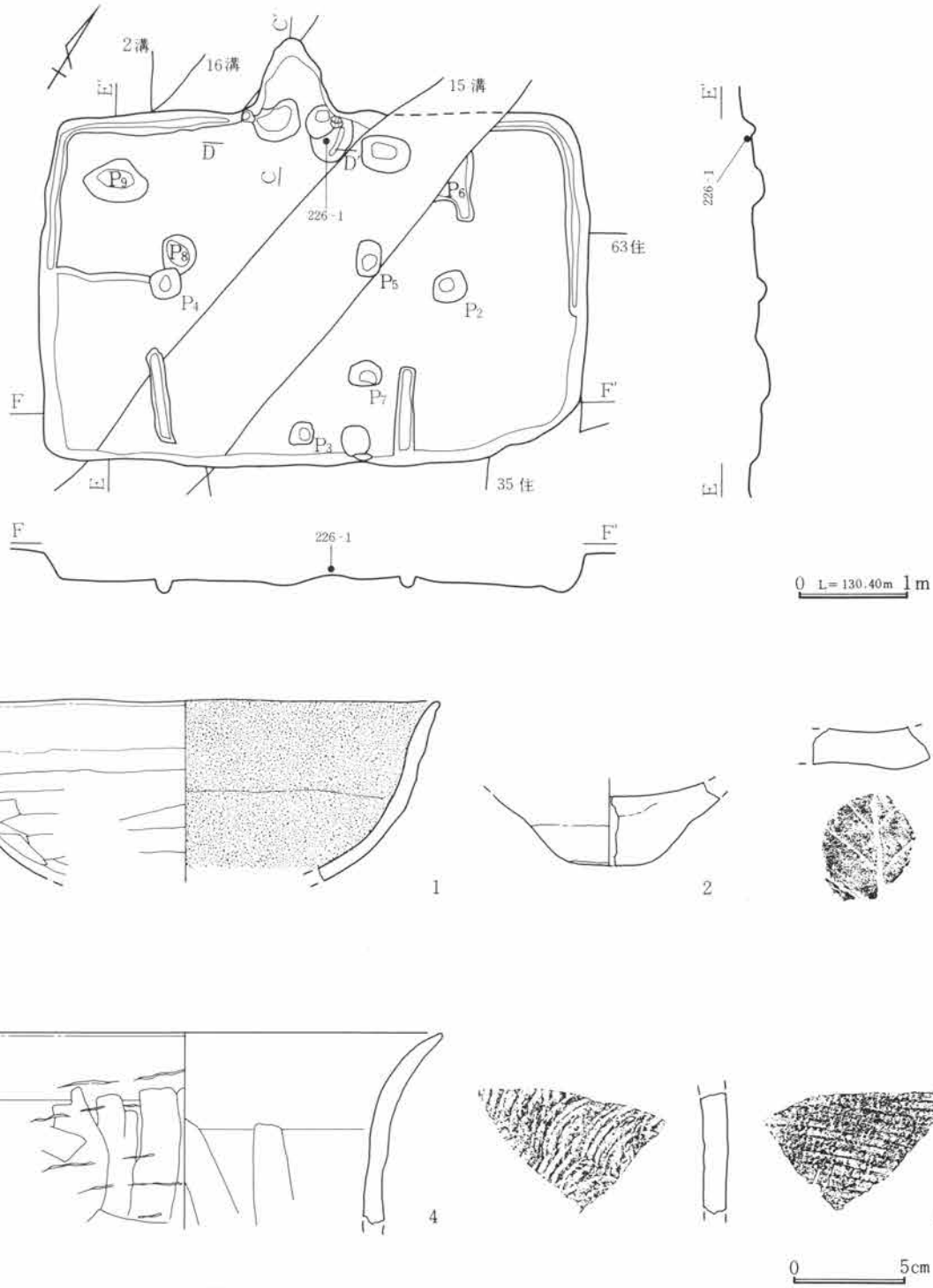
第224図　H区第47号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	H区第53号住居跡		位置	37～40—H—53～55グリッド内		分類	C—15	時期	II
平面形態	隅丸長方形	規模	3.20m×4.95m	主軸方位	北—36度—西		残存深度	約18cm程	
備考	壁及び壁溝は15号溝との重複部を除き全周を検出。壁溝規模は、幅約15～20cm、深度約９cmである。柱穴は中央長軸方向に並んだ径約30cm、深度約35cmの円形ピットが可能性がある。								
カマド	位置形状	北壁中央やや西寄り			分類	C－1	主軸方位	北—25度—西	
規模	全長115cm・屋外長75cm・屋内長40cm・袖間幅95cm・燃焼部幅55cm・煙道幅—cm								
備考	袖は明確に残存せず、壁との連結部に礫を据えており、右袖部先端より内黒の鉢が出土。焚口は半円状のわずかな掘り込みで、８cm程上面の中央から左寄りに灰面を検出した。支脚は未検出。								

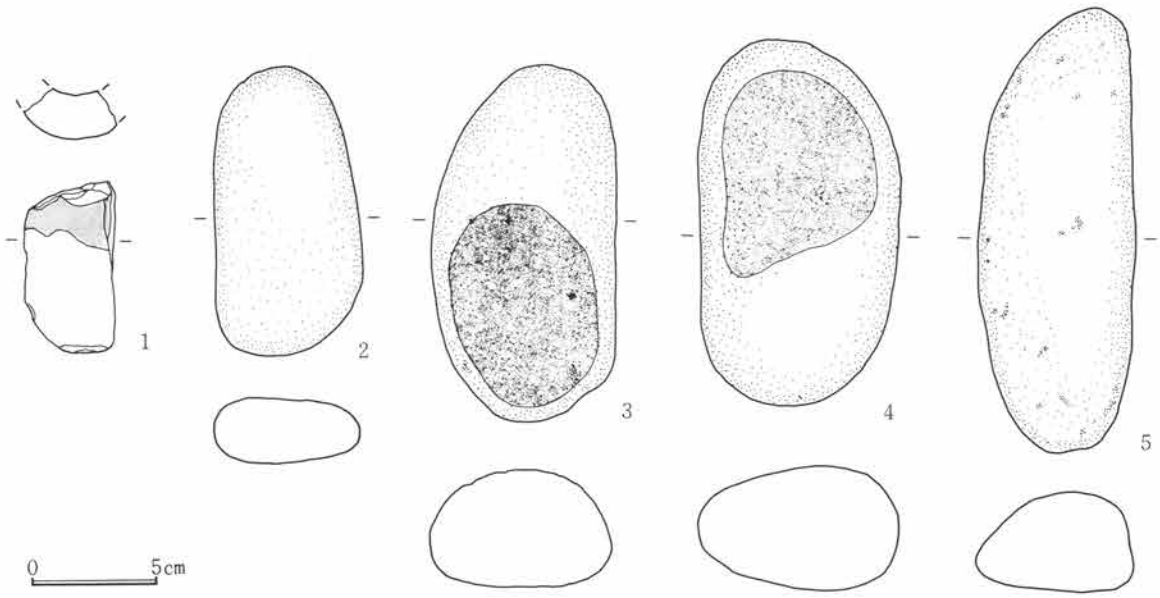


第225図　H区第53号住居跡実測図

1	暗褐色土	ＣＰ・VI層土粒・礫を含む。
2	〃	ＣＰ・VI層土粒を含む。
3	〃	VI層土粒を微量、炭化物を含む。
4	〃	ＣＰ・灰白色粘質土を少量含む。
5	〃	ＣＰを微量、灰白色粘質土ブロック・VI層土ブロックを多量含む。
6	〃	IV層土とVI層土ブロックの混土でＣＰは微量である。
7	〃	ＣＰを少量と灰を含む。
8	灰白色土	粘質土。
9	暗褐色土	灰白色粘質土とその焼土ブロックを多量含む。
10	〃	灰を多量含む。
11	〃	ＣＰは少量でVI層土粒を微量含む。
12	〃	10層に近似。
13	〃	焼土と灰を多量に含み、やや粘性を持つ。
14	〃	VI層土粒を微量含み、粘性がある。
15	〃	VI層土を多量含む。
16	〃	灰とVI層土粒を多量含む。



第226図　H区第53号住居跡・出土遺物実測図

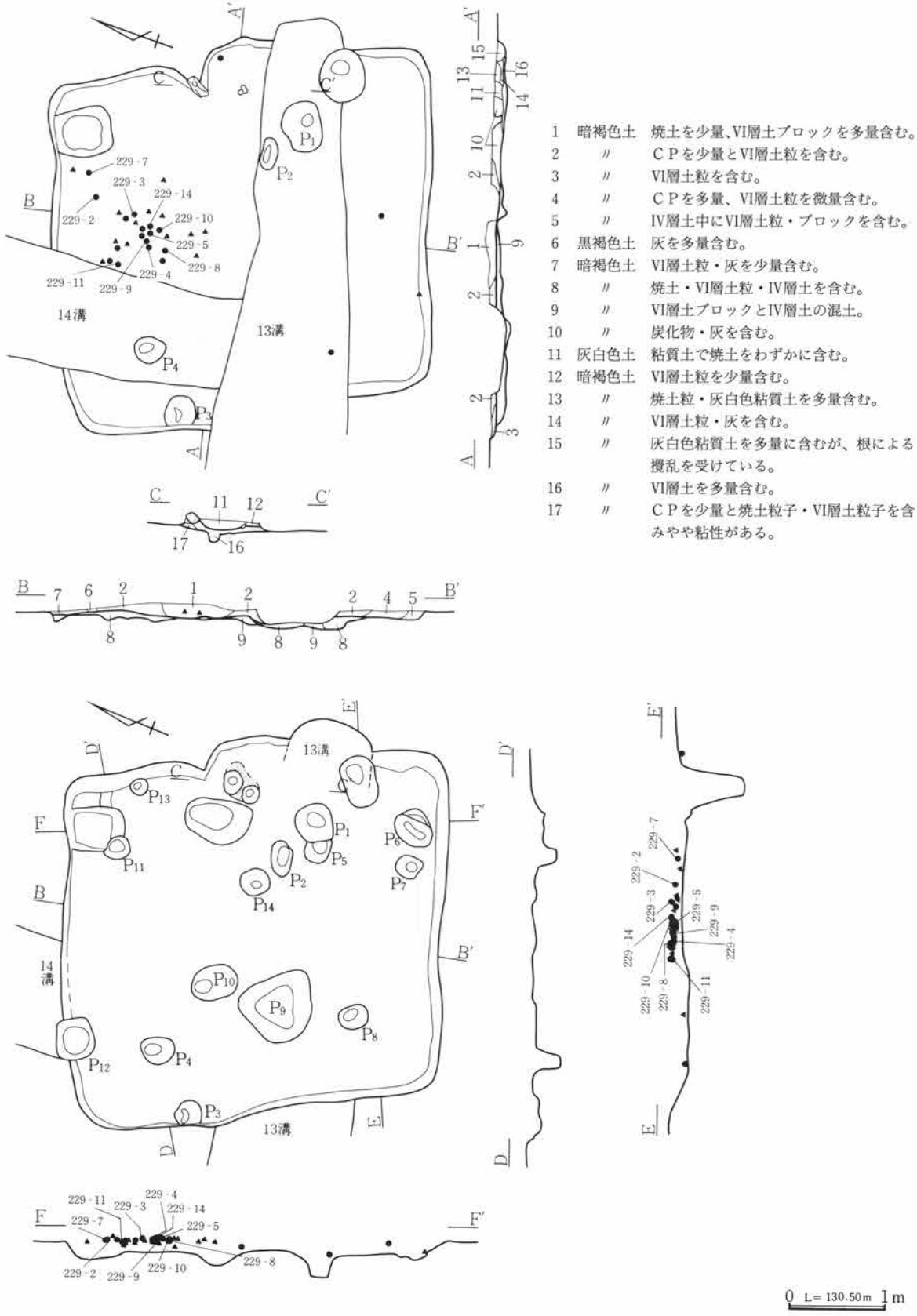


第227図　H区第53号住居跡出土遺物実測図

当住居跡は、北西壁中央部にカマドが設置されており、F・G・H区をとおして北向のカマドは数基みられたが、この向のものは他に類例が無い。他の遺構との重複では、中央部分を第15号溝によって攪乱され、北西壁の一部を失っている。また、第35・63号住居跡と重複している。これらの前後関係は、遺構の残存状態及びセクションの観察から推定して、63号住→35号住・53号住である可能性が高い。しかし第35号住居跡と当住居跡との関係は、明確にすることができなかった。床面検出段階で５本のピットを検出したが、そのうちで表中に記載したとおり中央長軸方向に並んで検出したP_2・P_4の２本のピットが、形態・規模の共通性及び位置関係等から、柱穴とみることができる。つまり当住居跡は２本柱穴であったことになる。その他P_3は南東壁に接するように設定されており、入口施設の一部であった可能性がある。また、掘り方段階で５本のピットが新たに検出されたが、特にP_5・P_8の在り方は、当住居跡が一回以上の建て替えがあったことを示すものと思われる。さらに南東壁から柱穴方向に幅約15cm、長さ約65cm、深度約10cmの溝が２本確認された。これは正方形プランの住居跡に多くみられる間仕切状の溝と同じ性格のものと考えられる。

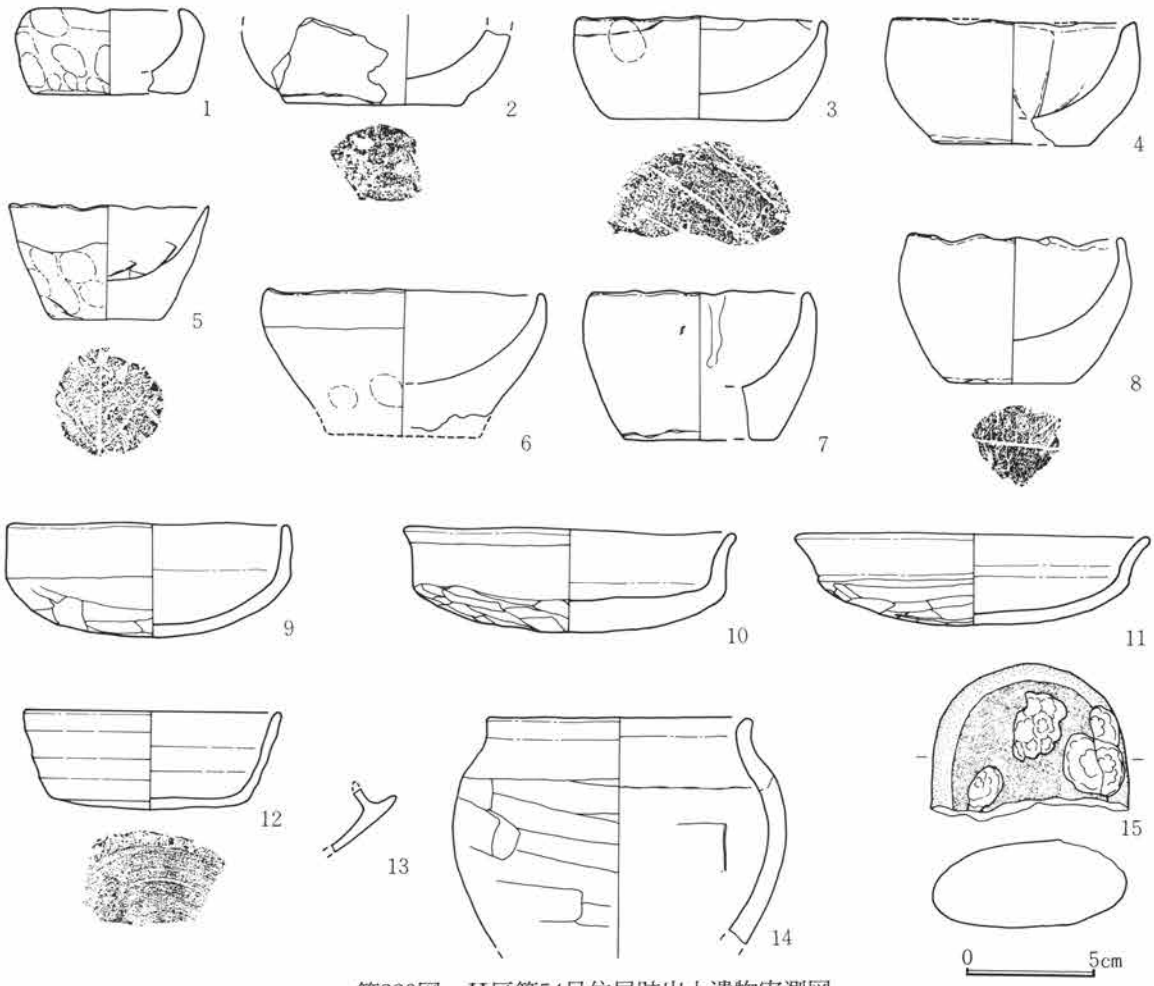
遺構名称	H区第54号住居跡		位置	37～39―H―55～57グリッド内		分類	A－3	時期	II
平面形態	隅丸正方形	規模	3.45m×3.85m		主軸方位	東―28度―北		残存深度	約８cm程
備考	13・14号溝と重複し、⅓程度が破壊されている。壁溝は未検出で、柱穴は掘り方の段階で検出された13ヶ所のうち、径約30cm、深度20cm前後の４ヶ所と考えられる。貯蔵穴は南東コーナーカマド寄り。								
カマド	位置形状	東壁ほぼ中央			分類	E－3	主軸方位	東―？度―北	
規模	全長90cm・屋外長40cm・屋内長50cm・袖間幅―cm・燃焼部幅―cm・煙道幅―cm								
備考	カマド左半のみ残存しており、左袖は礫を据えている。掘り方段階で楕円形の深度約７cm程の掘り方が検出され、中央部から径約20cmの円形及び楕円形プランのピット２個及び焼土面を検出した。								

柱穴は、表中記載のとおりP_4・P_5・P_8・P_{11}の４本と考えられるが、P_4・P_8がそれぞれ対するコーナー部からほぼ等距離であるのに対して、P_5・P_{11}は北東壁には平行するものの、わずかに北寄りにずれがみられる。したがって住居平面プランと柱穴を結んだプランとは合っていない。これは南東壁の東側半分が僅かに南側に張り出していることによると思われ、本来は主軸方位が若干北に振れるものと考えられる。



1　暗褐色土　焼土を少量、Ⅵ層土ブロックを多量含む。
2　〃　ＣＰを少量とⅥ層土粒を含む。
3　〃　Ⅵ層土粒を含む。
4　〃　ＣＰを多量、Ⅵ層土粒を微量含む。
5　〃　Ⅳ層土中にⅥ層土粒・ブロックを含む。
6　黒褐色土　灰を多量含む。
7　暗褐色土　Ⅵ層土粒・灰を少量含む。
8　〃　焼土・Ⅵ層土粒・Ⅳ層土を含む。
9　〃　Ⅵ層土ブロックとⅣ層土の混土。
10　〃　炭化物・灰を含む。
11　灰白色土　粘質土で焼土をわずかに含む。
12　暗褐色土　Ⅵ層土粒を少量含む。
13　〃　焼土粒・灰白色粘質土を多量含む。
14　〃　Ⅵ層土粒・灰を含む。
15　〃　灰白色粘質土を多量に含むが、根による攪乱を受けている。
16　〃　Ⅵ層土を多量含む。
17　〃　ＣＰを少量と焼土粒子・Ⅵ層土粒子を含みやや粘性がある。

第228図　Ｈ区第54号住居跡実測図

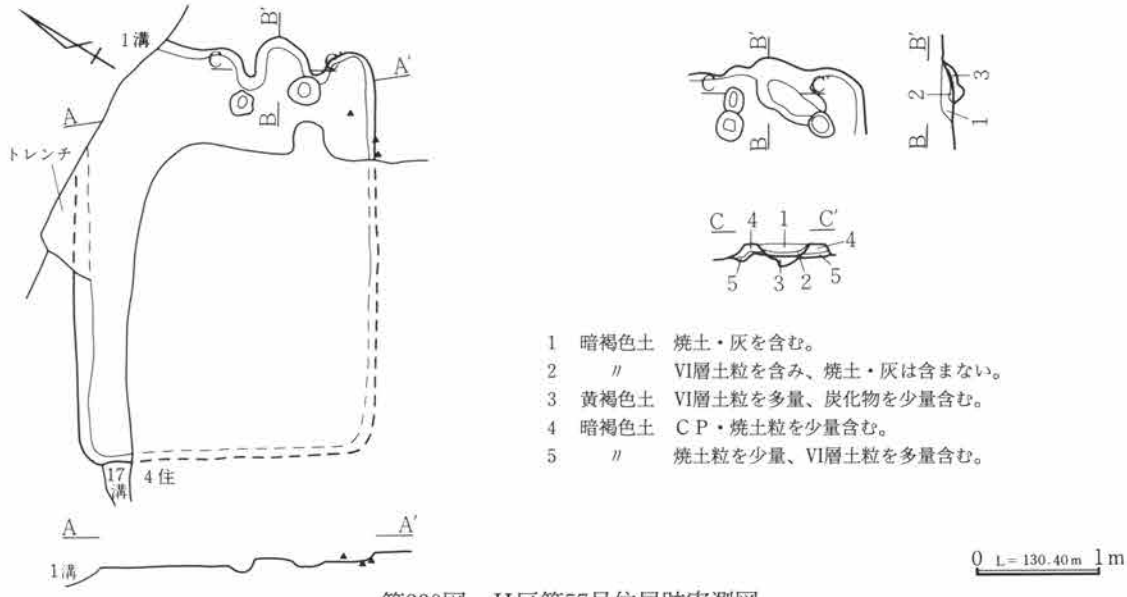


第229図　H区第54号住居跡出土遺物実測図

貯蔵穴は、東コーナー部から約70cmカマドに寄った位置に掘り込まれている。平面プランは円形で、径約50cm、深度約60cmである。その他床面精査段階で北コーナー部に接するように、一辺約65cm、深度約10cmの方形プランの掘り込みが検出されているが、柱穴と考えたP_{11}と一部重複しており同時期のものであるか不明である。

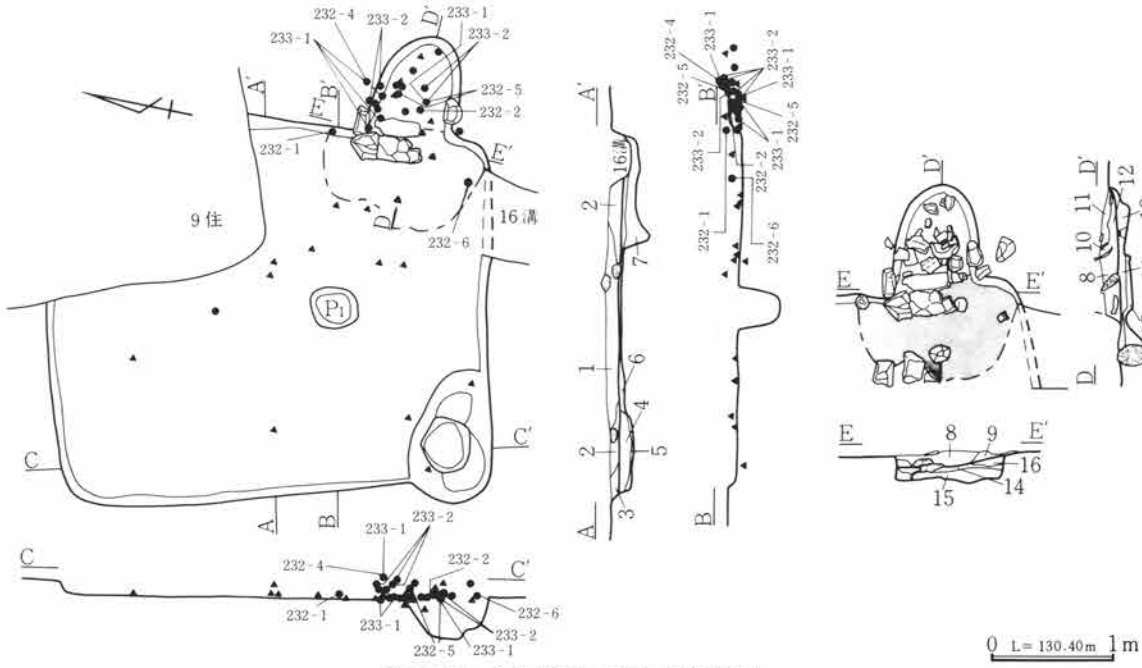
遺物は、住居中央北西壁寄りの同一平面上に集中して出土していることが特徴である。これは第13・14号溝との重複によって一部が失われている可能性はあるものの、この付近に集中するということはいえそうである。また、出土遺物中に手捏ねの土器が多いことが他の住居跡との大きな違いである。

遺構名称	H区第57号住居跡		位置	28～30—H—56～58グリッド内		分類	B－6	時期	?
平面形態	隅丸長方形	規模	3.25m×2.40m	主軸方位	東—32度—北		残存深度	約18cm程	
備考	住居の70％は４号住との重複で失われ、北西コーナーも１号溝によって失われている。床面はほぼ平坦に構築されているが、柱穴・壁溝・貯蔵穴等の施設は検出されていない。								
カマド	位置形状	東壁南寄り			分類	C－1	主軸方位	東—42度—北	
規模	全長60cm・屋外長10cm・屋内長50cm・袖間幅75cm・燃焼部幅30cm・煙道幅—cm								
備考	残存状態は悪く、掘り残し状の袖が若干屋内に延びるが、その先端部にそれぞれ径約25cm、深度約４～６cmの円形ピットが検出されたことにより、構築材の存在が予想される。灰・焼土等は未検出。								

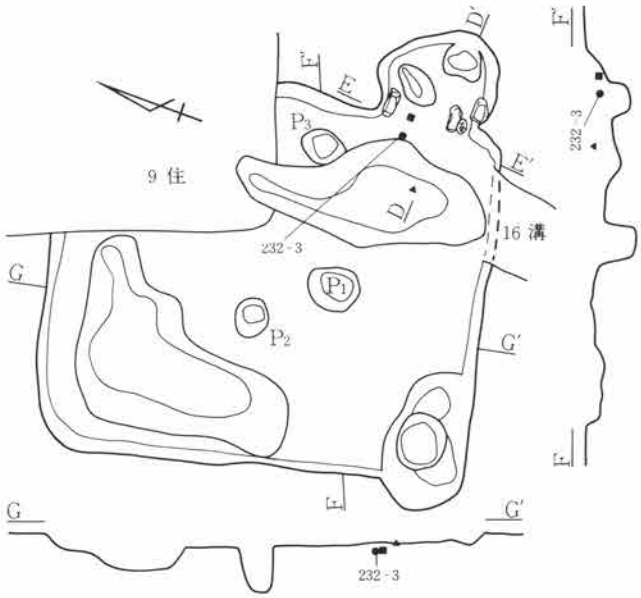


第230図　Ｈ区第57号住居跡実測図

遺構名称	Ｈ区第61号住居跡	位置	40～42―Ｈ―53～55グリッド内	分類	Ｃ―10	時期	X
平面形態	隅丸長方形	規模	3.00m×3.50m	主軸方位	東―18度―北	残存深度	約８cm程
備考	北東コーナー部を９号住によって失っている。壁溝・柱穴は未検出で、貯蔵穴は南西コーナー部に検出した。105cm×65cmの卵形平面の中央部に径約40cm、深度約29cmの円形のピットが検出された。						
カマド	位置形状	東壁南寄り		分類	Ｅ―１	主軸方位	東―４度―北
規模	全長140cm・屋外長90cm・屋内長50cm・袖間幅80cm・燃焼部幅50cm・煙道幅―cm						
備考	焚口は半円状の浅い掘り込みで上面全面に灰面が検出された。袖は明確に突出せず、壁との連結部に載石を据え上部に天井石をのせていたと考えられる。支脚は残存しないが、左寄りにピットを検出。						

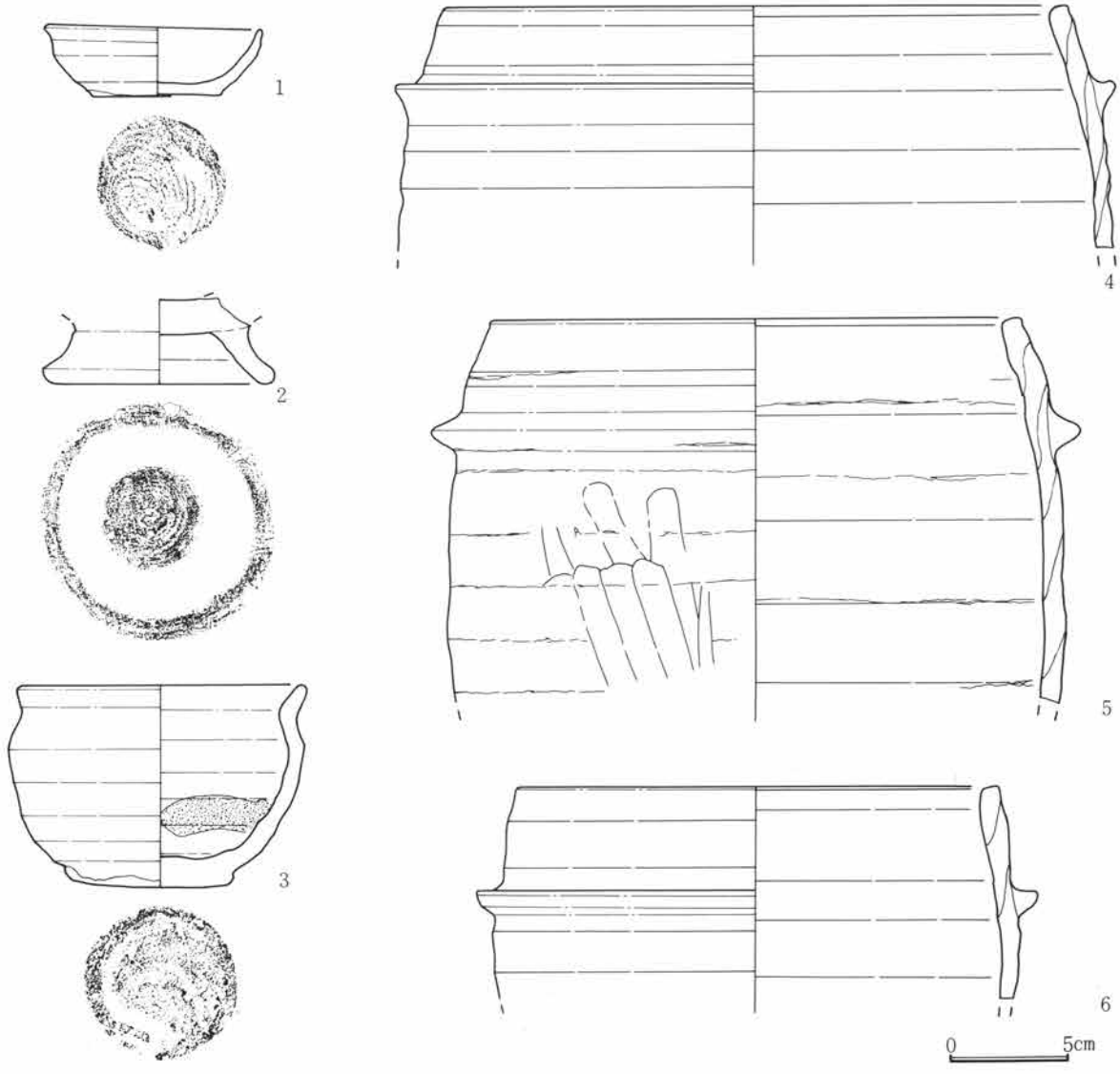


第231図　Ｈ区第61号住居跡実測図

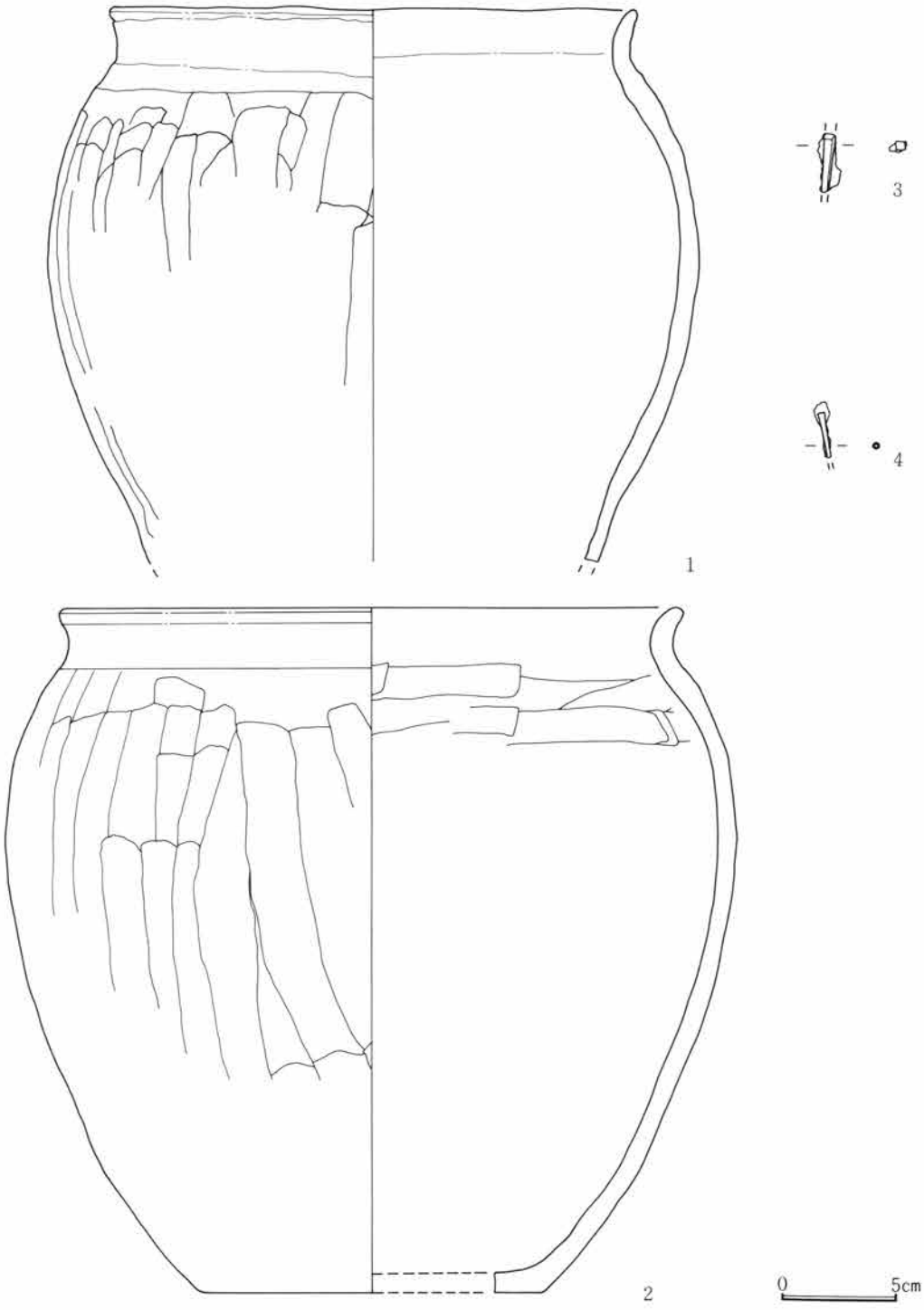


1	暗褐色土	ＣＰを多量、Ⅵ層土粒を微量含む。
2	〃	ＣＰとⅥ層土粒を少量含む。
3	〃	ＣＰは微量でⅥ層土粒を多量含む。
4	〃	Ⅵ層土ブロックを多量、Ⅳ層土を微量含む。
5	褐色土	Ⅵ層土を主体にⅣ層土を少量含む。
6	暗褐色土	Ⅵ層土粒とＣＰを含む貼床。
7	〃	ＣＰは微量でⅥ層土粒を含む。
8	〃	Ⅵ層土粒を含み、焼土は含まない。
9	〃	焼土粒を含む。
10	〃	焼土・灰を多量含む。
11	〃	焼土ブロック・Ⅵ層土粒・灰を含む。
12	〃	焼土粒を多量含む。
13	〃	Ⅵ層土中に焼土を少量含む。
14	〃	灰と炭化物を多量含む。
15	〃	ＣＰとⅥ層土ブロックを少量含む。
16	〃	焼土粒を多量含む。

0　L＝130.40m　1m



第232図　Ｈ区第61号住居跡・出土遺物実測図

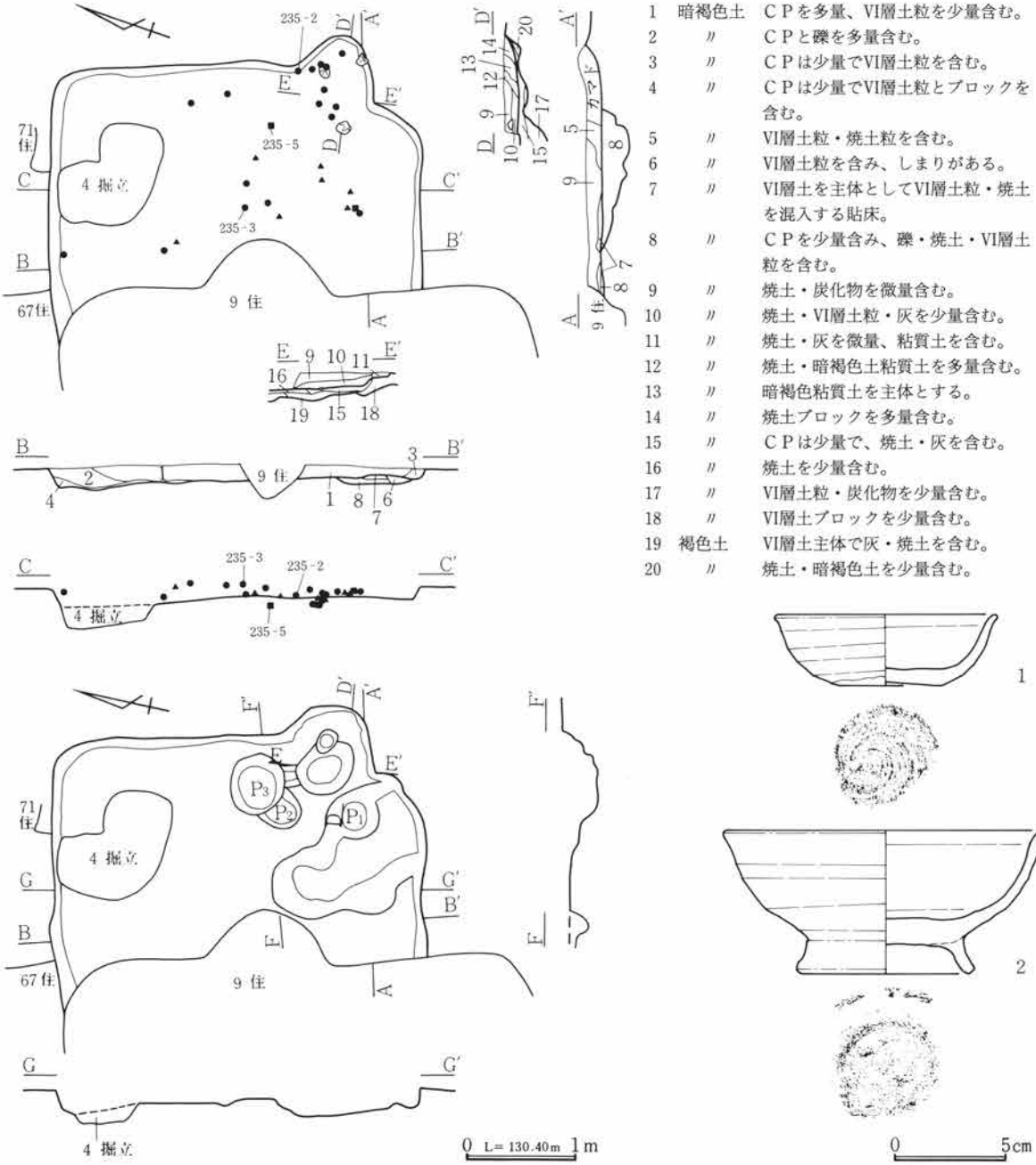


第233図　Ｈ区第61号住居跡出土遺物実測図

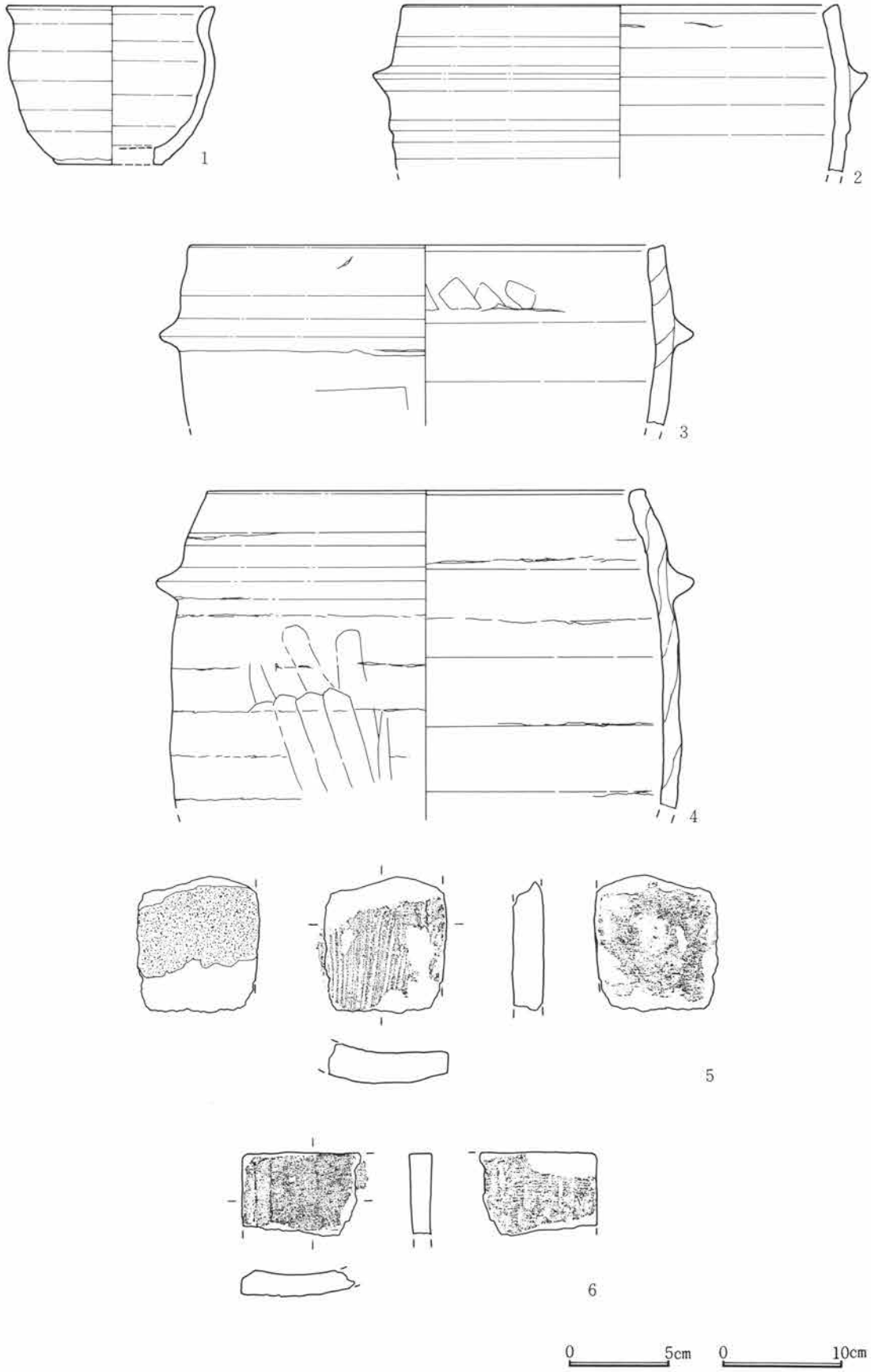
当住居跡は、掘り方段階でカマド前面及び北西コーナー部に、深度約10～15の㎝不整形の掘り込みを検出した。また、床面精査時に検出されたＰ₁の他に、住居中央東西に並んでＰ₂・Ｐ₃の２本のピットが確認された。Ｐ₂は、径約25㎝、深度約40㎝の円形プランで、Ｐ₃は、径・深度共に約25㎝の円形プランである。表中には柱穴未検出と記載したが、このＰ₂・Ｐ₃の２本のピットは規模が比較的近似し、位置にも規則性がありそうであることから、柱穴の可能性がある。

遺物はカマド部分に集中する他、床面近くから多く出土している。壁高が浅いわりに遺物量は多い。

遺構名称	Ｈ区第62号住居跡	位置	42～44―Ｈ―52～54グリッド内	分類	Ｃ―10	時期	X
平面形態	隅丸長方形？	規模	― m×3.35m	主軸方位	東―12度―北	残存深度	約14cm程
備考	西側約⅓を９号住との重複で失っている。床面はVI層土中に構築され、部分的にわずかな貼床がみられる。壁溝・柱穴・貯蔵穴は未検出で、北壁に接して不整形の土坑を検出した。						
カマド	位置形状	東壁南寄り		分類	Ｃ―１	主軸方位	東―12度―南
規模	全長80cm・屋外長45cm・屋内長35cm・袖間幅―cm・燃焼部幅60cm・煙道幅―cm						
備考	住居主軸方位とのずれは大きく、コーナーカマド様である。焚口・燃焼部と床面とのレベル差はほとんどなく平坦である。焼土・灰は検出されなかったが、中央左寄りに支脚の石を検出した。						

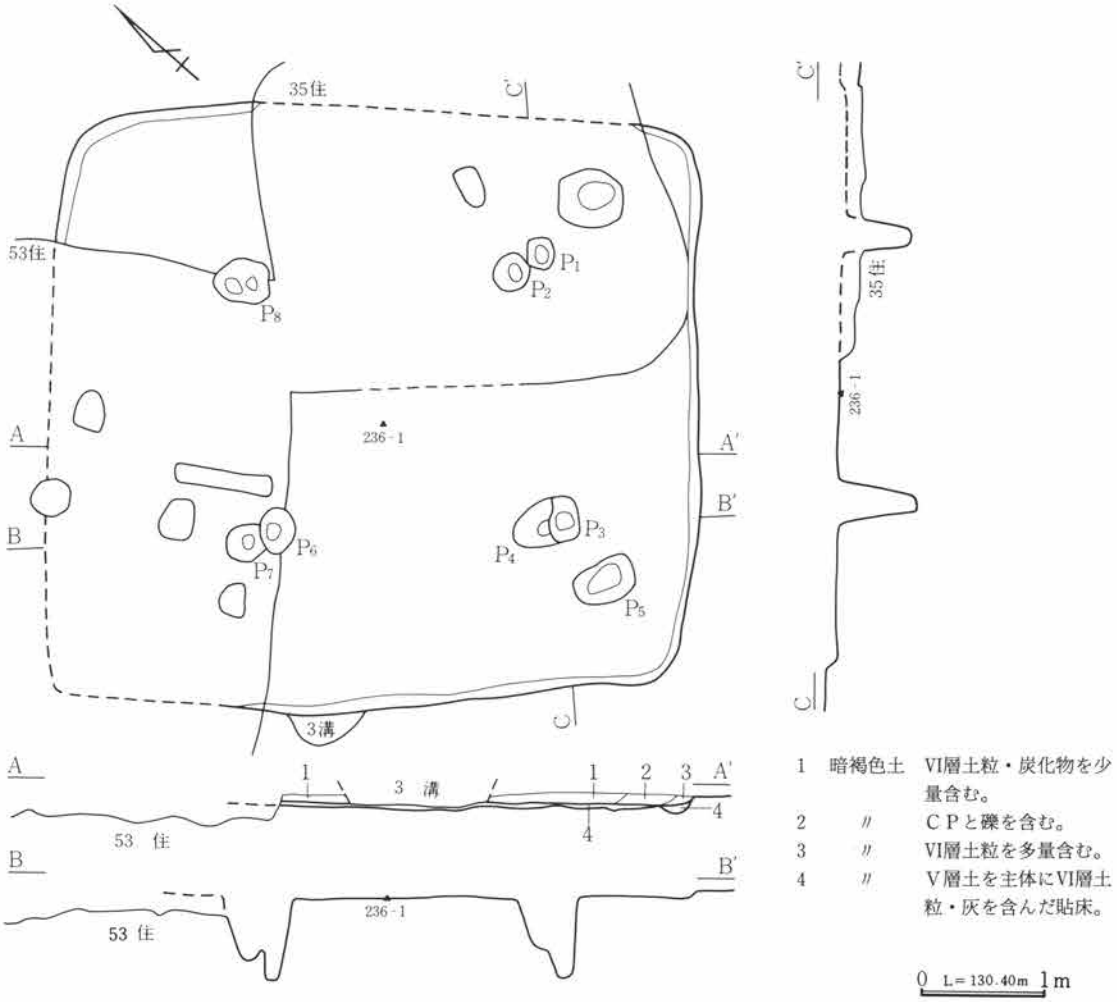


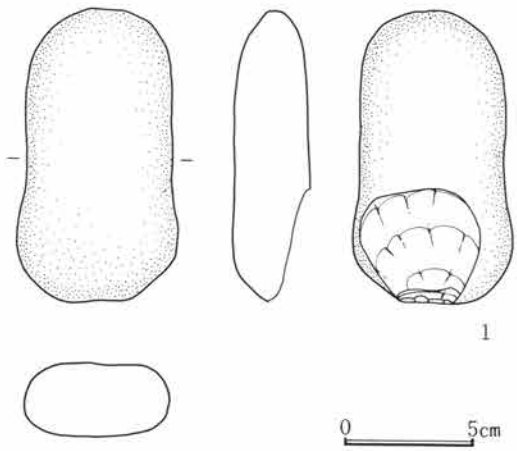
第234図　Ｈ区第62号住居跡・出土遺物実測図



第235図　H区第62号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	Ｈ区第63号住居跡		位置	36～39―Ｈ―50～54グリッド内		分類	Ａ―？	時期	？
平面形態	隅丸方形	規模	4.85m×5.10m	主軸方位	北―44度―東	残存深度	約７cm程		
備考	北西コーナー及びカマドは35・53号住との重複で失われている。柱穴は径約30cm、深度約20cmの円形ピットが４ヶ所検出されたがいずれも同径、深度約60cmのピットと重複している。								



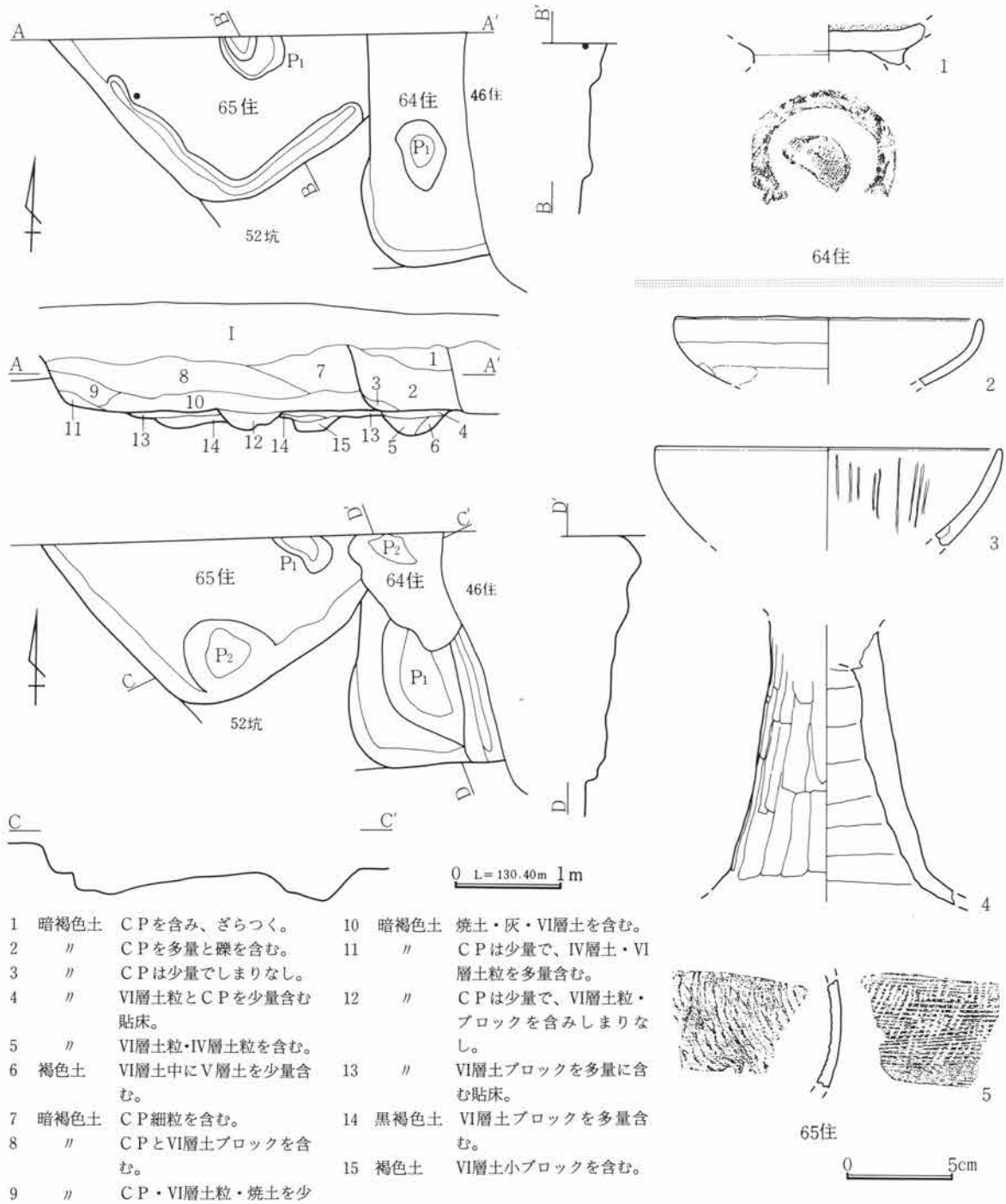


第236図　Ｈ区第63号住居跡・出土遺物実測図

当住居跡は、第35・53号住居跡の２軒の住居跡と重複している。重複関係は、遺構の確認状態及び残存状態から、当住居→35・53号住であるのは明らかである。カマドは北東壁中央に設置されたものと考えられるが、重複によって痕跡も見られない。柱穴は４ヵ所であるが各２本または重複が認められ、最低１回の建て替えが想定される。東コーナー部には、柱穴等のピットよりは規模の大きな円形プランの掘り込みがみられる。これは位置的に貯蔵穴の可能性が高く、このことは想定したカマド位置とも矛盾することはない。遺物は遺構残存の悪さからか石器１点の出土である。

遺構名称	H区第64号住居跡		位置	45・46—H—55・56グリッド内		分類	—	時期	?
平面形態	?	規模	— m× — m		主軸方位	東—?度—北		残存深度	約20cm程

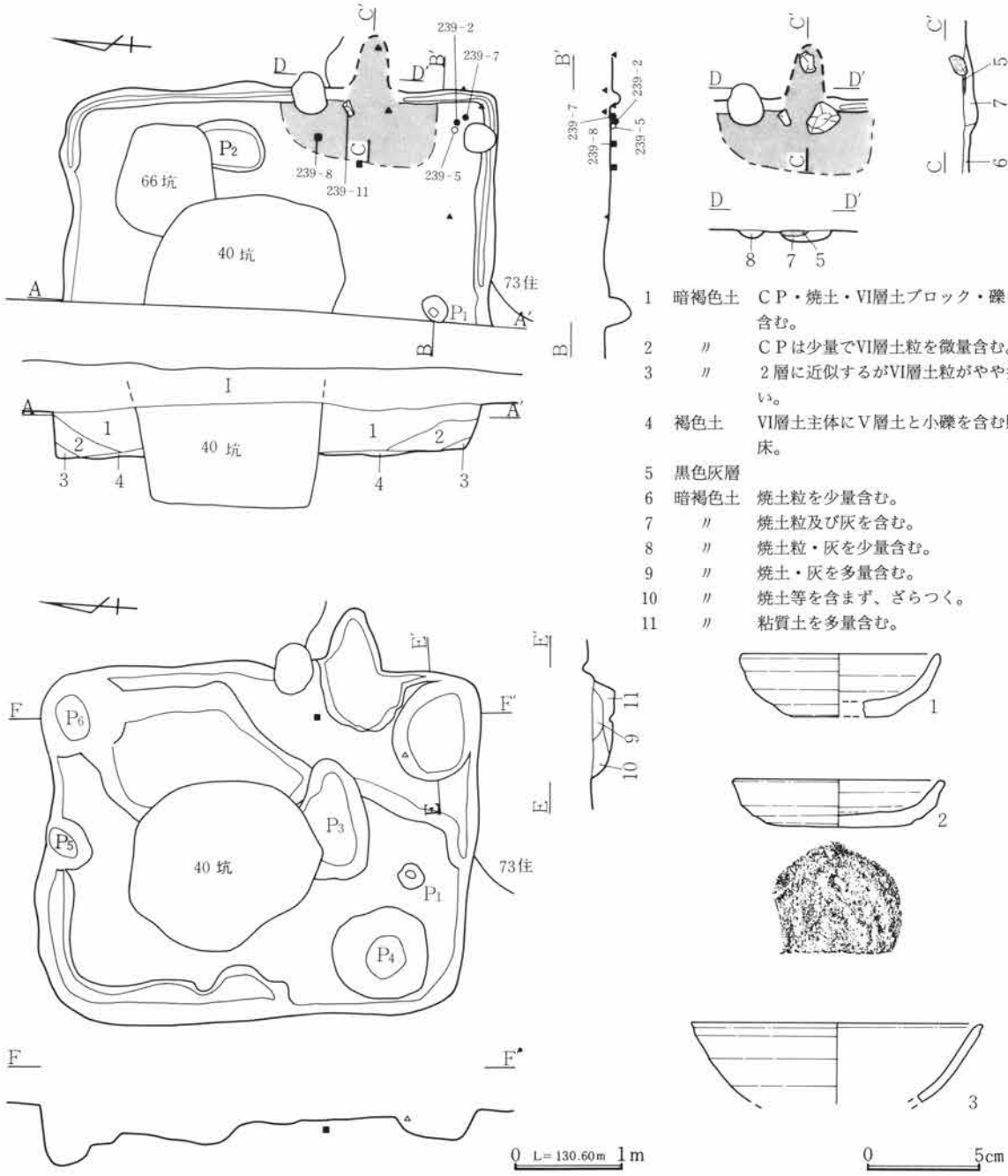
遺構名称	H区第65号住居跡		位置	45・46—H—56・57グリッド内		分類	A—?	時期	Ⅲ?
平面形態	隅丸方形?	規模	— m× — m		主軸方位	東—45度—北		残存深度	約29cm程
備考	東側は46・64号住と重複し、大半は山王線下で未調査である。壁溝はコーナー部に残存し、幅約25cm、深度約10cmである。柱穴は１本検出した。規模は径約60cm、深度約14cmで段を有している。								



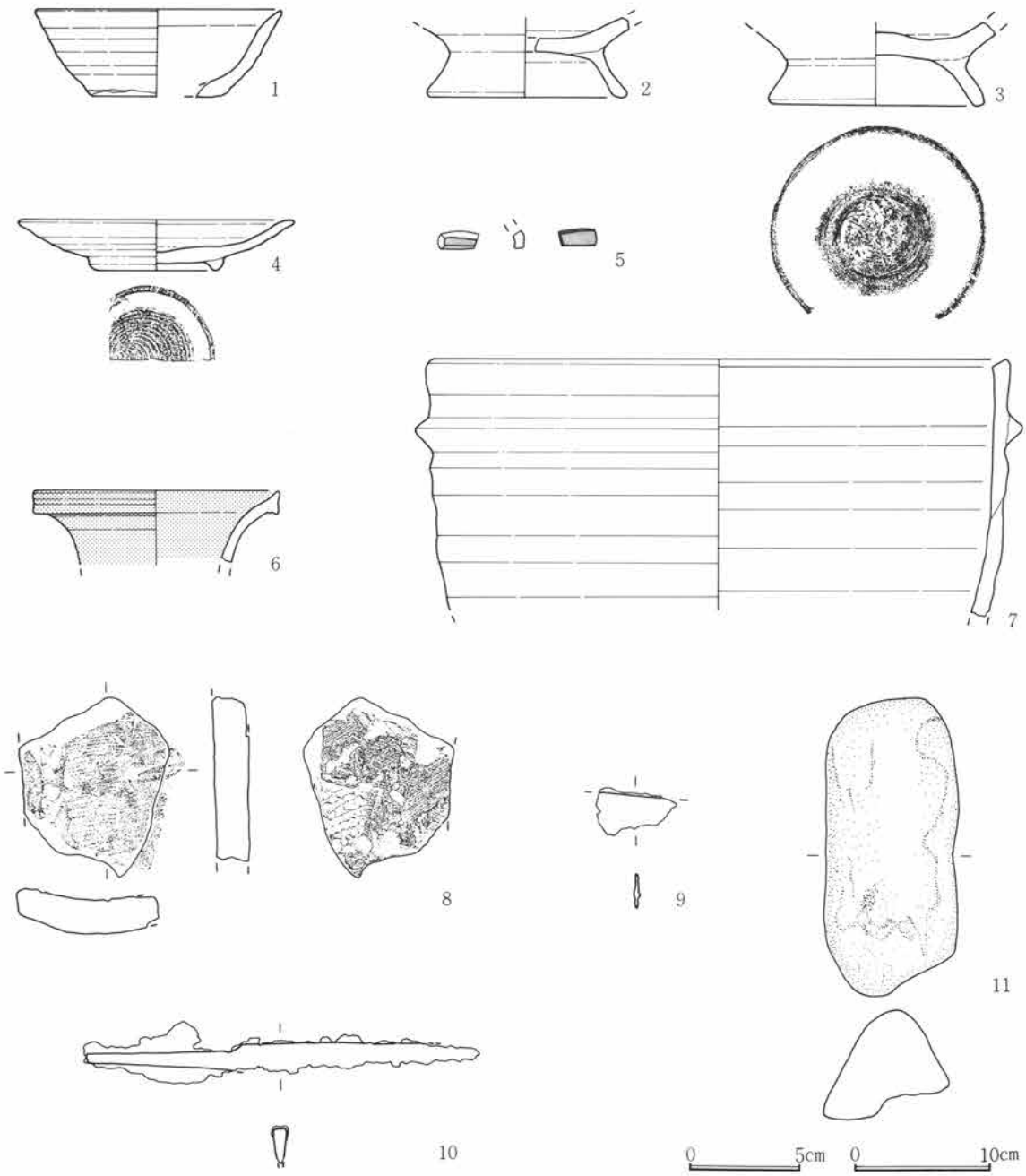
1　暗褐色土　ＣＰを含み、ざらつく。
2　〃　ＣＰを多量と礫を含む。
3　〃　ＣＰは少量でしまりなし。
4　〃　Ⅵ層土粒とＣＰを少量含む貼床。
5　〃　Ⅵ層土粒･Ⅳ層土粒を含む。
6　褐色土　Ⅵ層土中にⅤ層土を少量含む。
7　暗褐色土　ＣＰ細粒を含む。
8　〃　ＣＰとⅥ層土ブロックを含む。
9　〃　ＣＰ・Ⅵ層土粒・焼土を少量含む。
10　暗褐色土　焼土・灰・Ⅵ層土を含む。
11　〃　ＣＰは少量で、Ⅳ層土・Ⅵ層土粒を多量含む。
12　〃　ＣＰは少量で、Ⅵ層土粒・ブロックを含みしまりなし。
13　〃　Ⅵ層土ブロックを多量に含む貼床。
14　黒褐色土　Ⅵ層土ブロックを多量含む。
15　褐色土　Ⅵ層土小ブロックを含む。

第237図　H区第64・65号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	Ｈ区第66号住居跡	位置	41～43―Ｈ―58～60グリッド内	分類	Ｃ－７	時期	X
平面形態	隅丸長方形	規模	3.25m×3.85m	主軸方位	東－２度－北	残存深度	約６cm程
備考	南北農道下にかかり２次の調査を実施した。壁溝は幅約10～40cm、深度約４cmで、南西コーナー部を除きほぼ全周する。柱穴は未検出で、貯蔵穴は南西コーナー部で径約80cm、深度約26cmである。						
カマド	位置形状	東壁南寄り		分類	Ｃ－１	主軸方位	東－３度－北
規模	全長110cm・屋外長50cm・屋内長60cm・袖間幅―cm・燃焼部幅45cm・煙道幅―cm						
備考	焚口・燃焼部共床面とのレベル差はなく、一面の灰面として検出。掘り方段階で、焚口部に深度約８cmの半円状掘り込みを検出。両袖位置及びカマド先端部に礫を検出したが用途は不明である。						



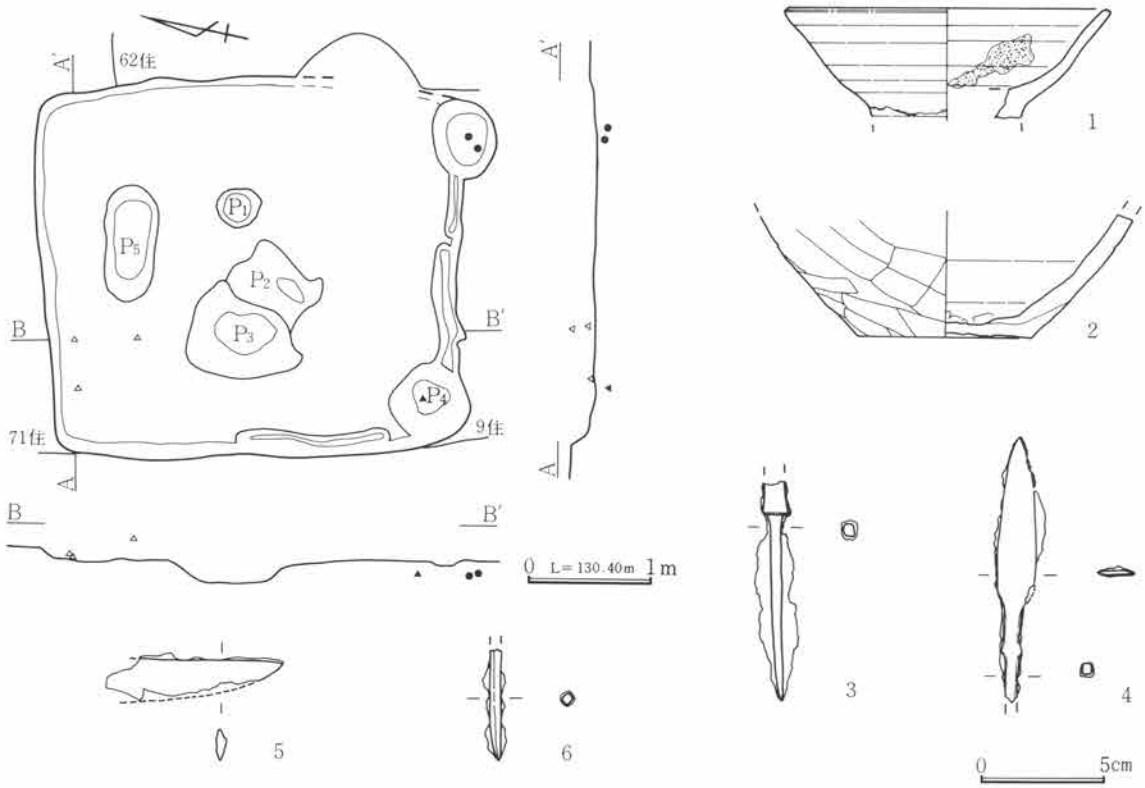
第238図　Ｈ区第66号住居跡・出土遺物実測図



第239図　Ｈ区第66号住居跡出土遺物実測図

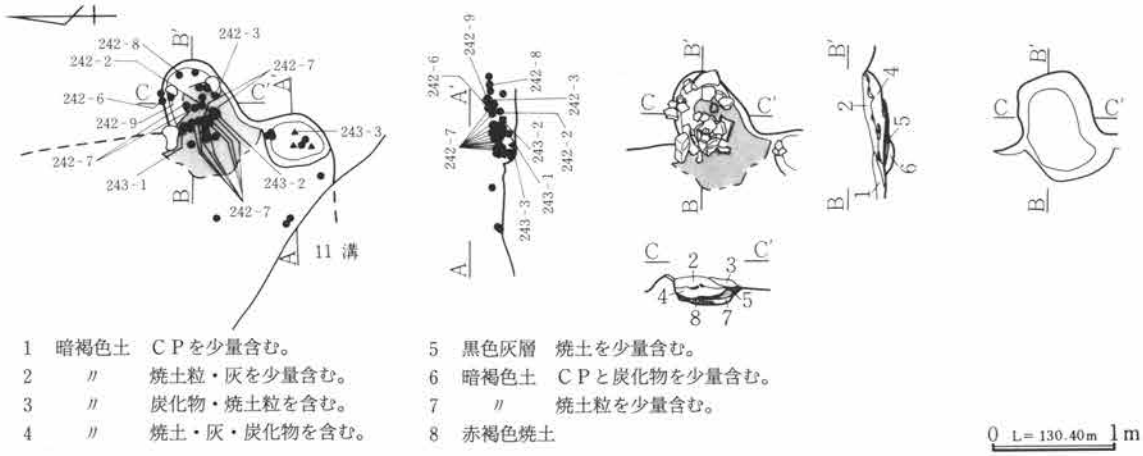
当住居跡は、中央部分を第40・66号土坑によって攪乱されている。また、南東コーナー部で第73号住居跡と重複している。この前後関係は、遺構の検出状態から73号住→66号住であると考えられ、出土遺物からも確認される。貯蔵穴は南東コーナー部のものを想定したが、掘り方段階で北東及び南西コーナー部にP_4・P_6を検出した。特にP_4は径約85cm、深度約20cmの円形で規模・形態共に貯蔵穴に近似している。

遺構名称	Ｈ区第67号住居跡		位置	42～44－Ｈ－53～55グリッド内		分類	Ｃ－７	時期	？
平面形態	隅丸長方形	規模	3.00m×3.30m	主軸方位	東－16度－北	残存深度	約８cm程		
備考	９・62・71号住と重複するが、明確に関係のとらえられるのは、67号住→62号住→９号住である。								
壁溝は南西コーナー部にみられ、幅約10～20cm、深度約８cmである。貯蔵穴は南西コーナー部である。									



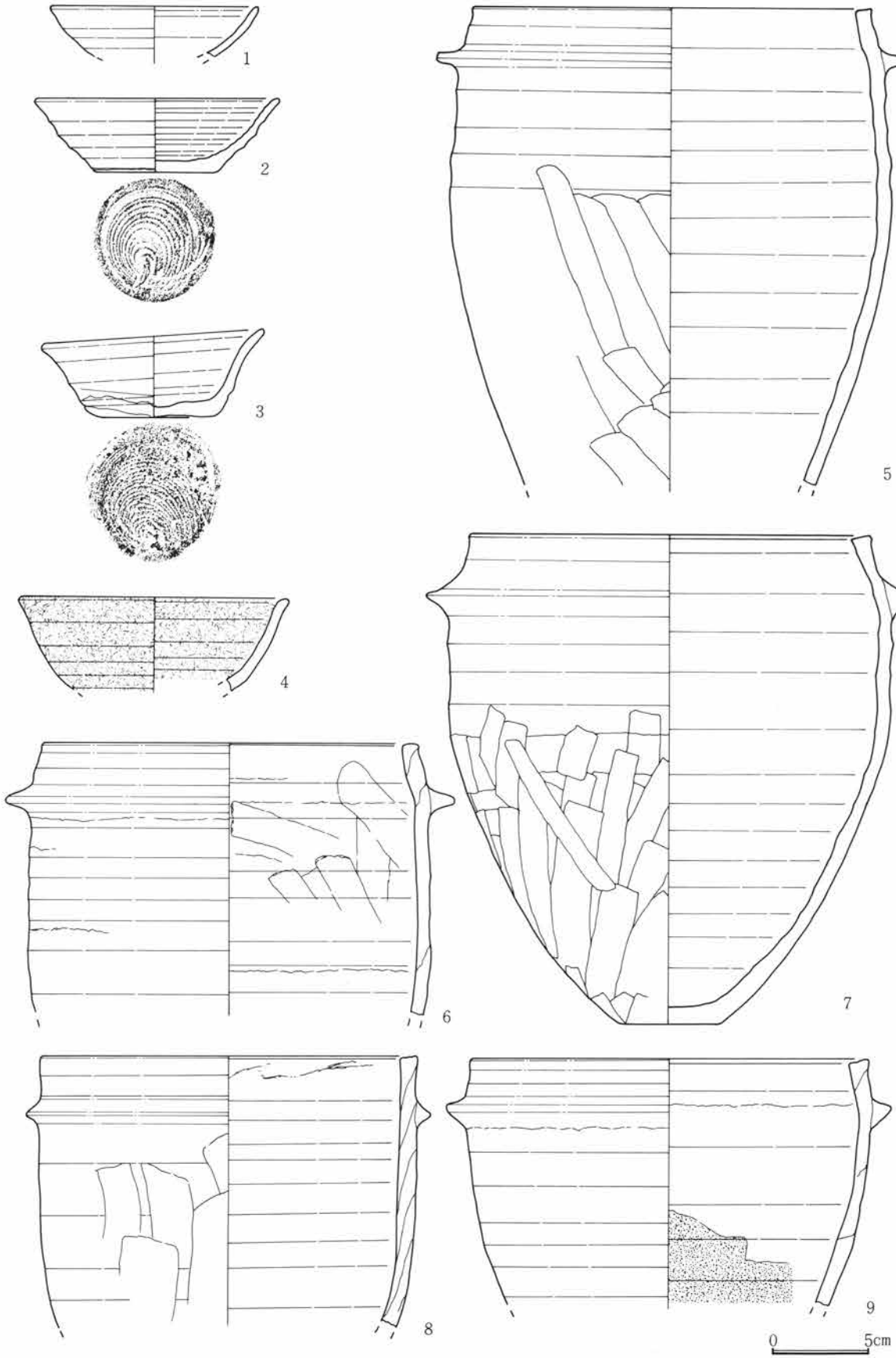
第240図　H区第67号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	H区第68号住居跡		位置	28・29—H—74～76グリッド内		分類	C—？	時期	X
平面形態	隅丸長方形？	規模	— m× — m	主軸方位	東—？度—北		残存深度	約５cm程	
備考	南側は11号溝によって削平され、全体も確認段階で床面下まで掘り下げてしまったため、カマド及び貯蔵穴のみ検出した。貯蔵穴は南東コーナー部で、径約50cm、深度約10cmの円形である。								
カマド	位置形状	東壁南寄り			分類	E—１	主軸方位	東—23度—北	
規模	全長85cm・屋外長55cm・屋内長30cm・袖間幅—cm・燃焼部幅40cm・煙道幅—cm								
備考	焚口から燃焼部にかけて厚さ約２cmの灰層が広がり、その下に約３cmの厚さに焼土層が形成されている。左袖部及び奥壁煙出しとの境には礫が据えられている。支脚は痕跡等未検出である。								

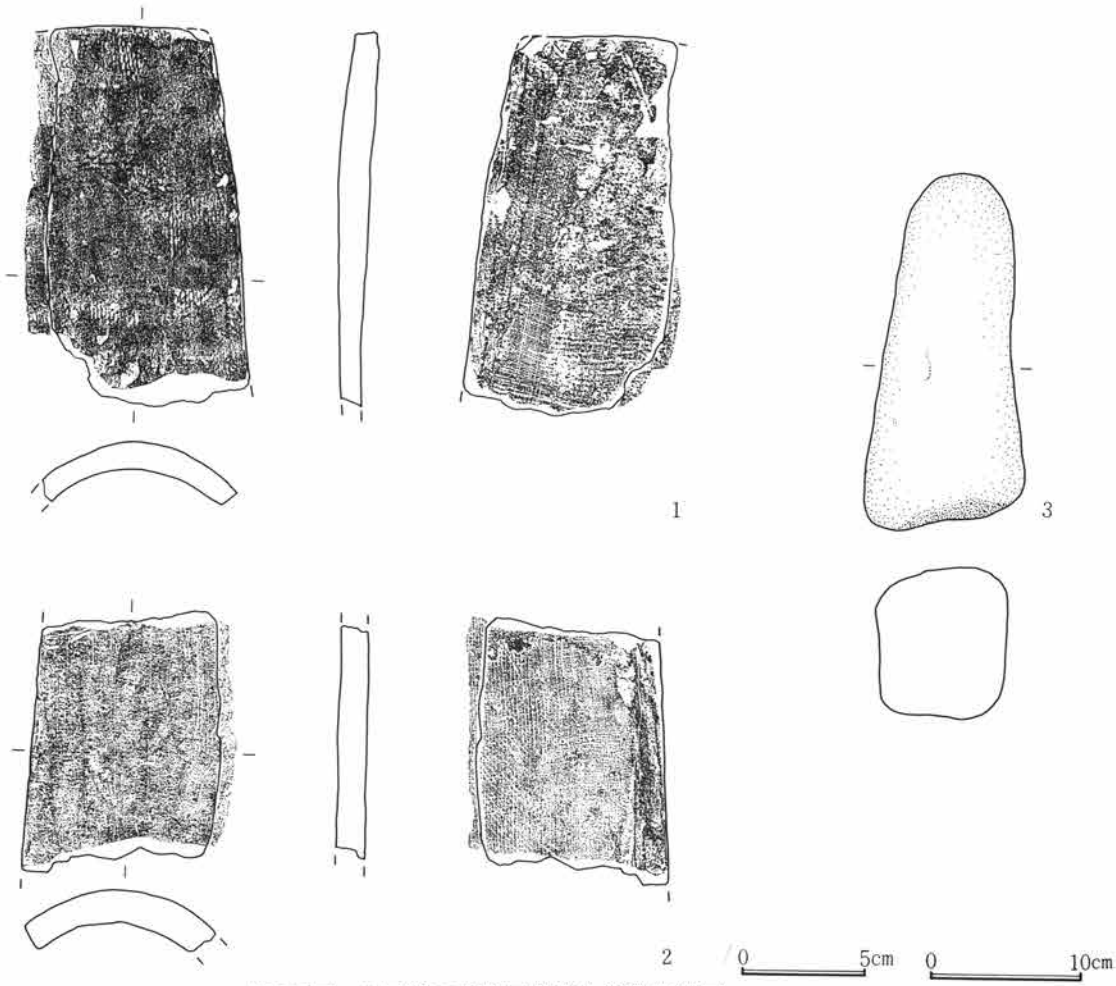


1　暗褐色土　ＣＰを少量含む。
2　〃　焼土粒・灰を少量含む。
3　〃　炭化物・焼土粒を含む。
4　〃　焼土・灰・炭化物を含む。
5　黒色灰層　焼土を少量含む。
6　暗褐色土　ＣＰと炭化物を少量含む。
7　〃　焼土粒を少量含む。
8　赤褐色焼土

第241図　H区第68号住居跡実測図



第242図　H区第68号住居跡出土遺物実測図

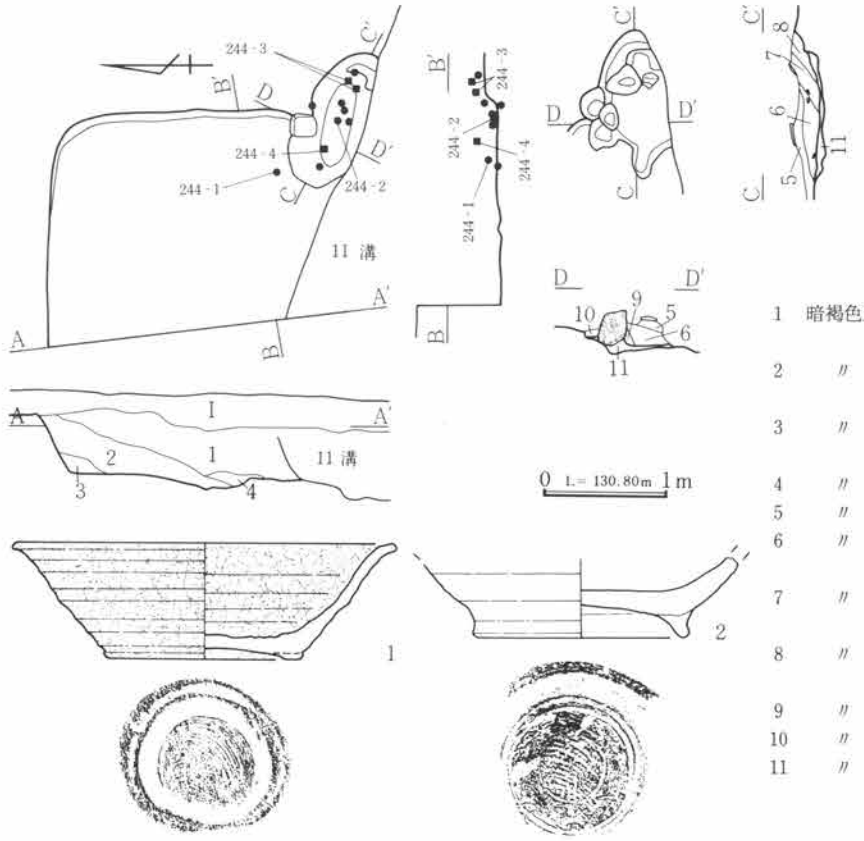


第243図　H区第68号住居跡出土遺物実測図

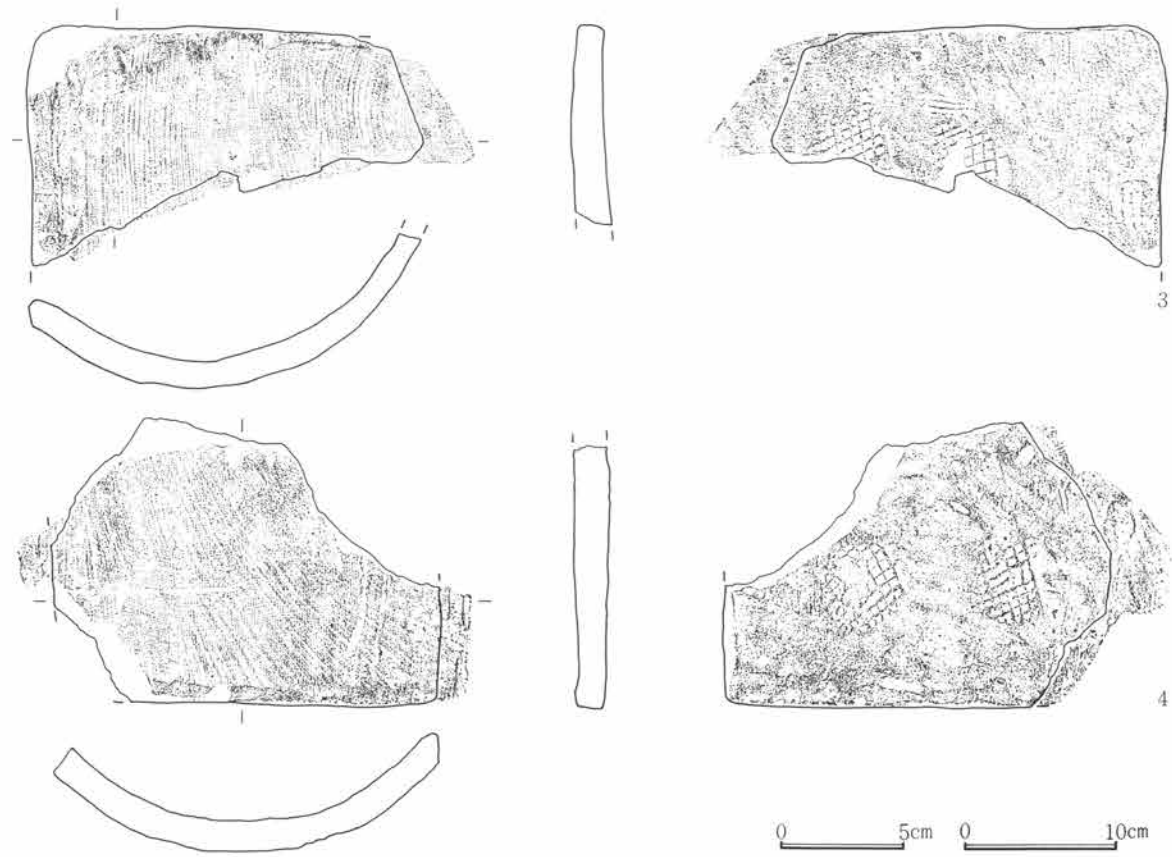
当住居跡の位置する部分は、Ⅵ・Ⅶ層土が粘性を帯びた暗褐色土であり、今報告区の東半にみられるような黄褐色のローム質の部分とは異質である。この土質によるものか当住居跡と第92号住居跡の周囲は、他の住居跡の分布が切れ、比較的広い空間がみられる。また、この空間の周囲にみられる住居跡も、当住居跡と規模・主軸方位共に近い関係の住居跡が集中する傾向が看取される。

また、当住居跡は上述したような条件の中での確認であったため、遺構確認段階ですでに床面レベルに達しており、したがって平面プランの大半は確認することができなかった。しかしカマド及び貯蔵穴は残存し、この２ヵ所から羽釜等の破片が集中的に出土している。

遺構名称	H区第69号住居跡		位置	29・30—H—77・78グリッド内		分類	C—？	時期	？
平面形態	隅丸長方形	規模	— m× — m		主軸方位	東—１度—北	残存深度	約14.5cm程	
備考	南側は11号溝に削平され、西側は調査区外である。北側で76号住と重複し、セクションから、77号住→76号住→69号住と考えられる。壁溝・柱穴は未検出で、貯蔵穴は11号溝によって失われている。								
カマド	位置形状	東壁南寄り			分類	E—１	主軸方位	東—15度—南	
規模	全長115cm・屋外長70cm・屋内長45cm・袖間幅—cm・燃焼部幅—cm・煙道幅—cm								
備考	焚口は深度４cm程の半円形の掘り込みで、明確な灰層・焼土層は検出されていない。袖は左袖のみ残存し、角柱状の蔵石が据えられている。支脚はみられないが、中央部左寄りにピットを検出した。								

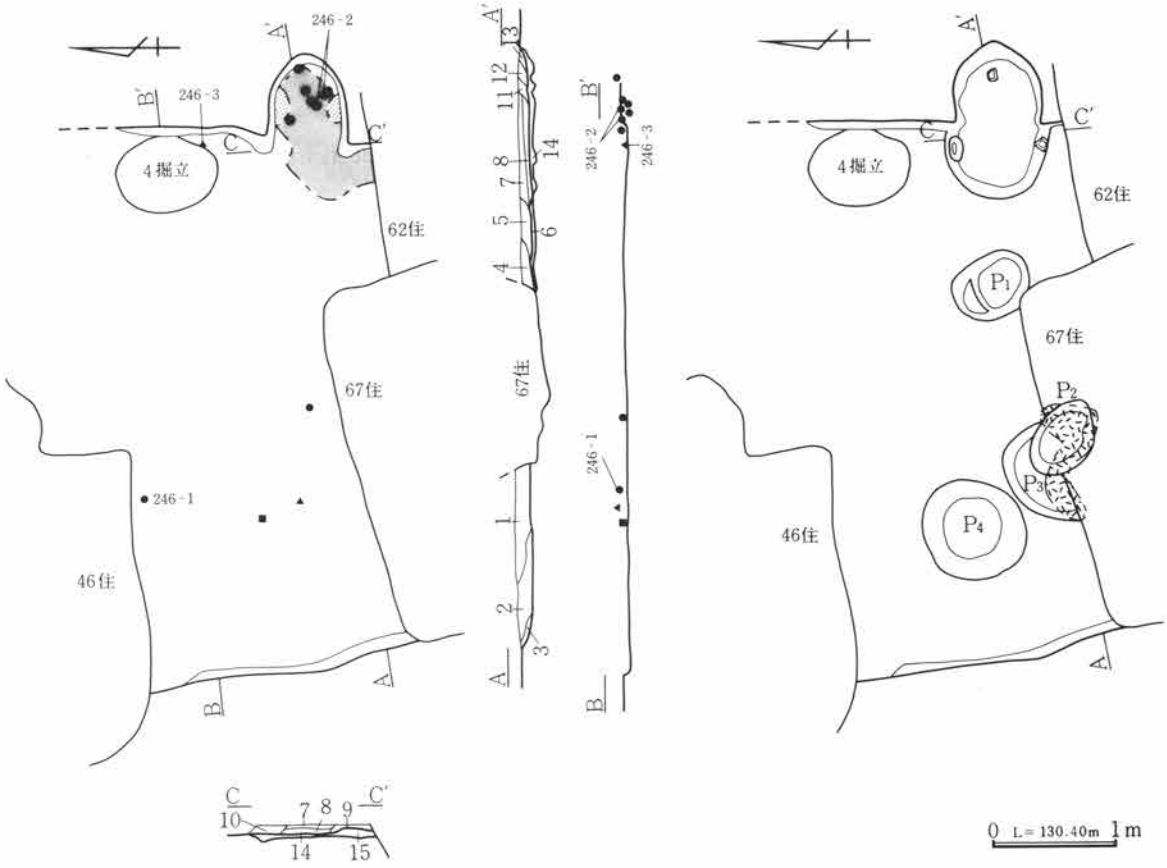


1	暗褐色土	ＣＰ細粒を少量とⅥ層土粒を多量含む。
2	〃	ＣＰ細粒とⅥ層土粒を少量、焼土粒を微量含む。
3	〃	１層に比してＣＰは少なく、粘性が強い。
4	〃	ＣＰとⅥ層土粒を微量含む。
5	〃	焼土・灰を微量とＣＰを含む。
6	〃	ＣＰを少量と焼土・炭化物を含む。
7	〃	ＣＰを微量、炭化物・焼土粒を多量含む。
8	〃	焼土粒及びブロックを多量に含む。
9	〃	焼土粒を多量含む。
10	〃	地山の礫を多量含む。
11	〃	炭化物・灰・地山の茶褐色土ブロックを含む。



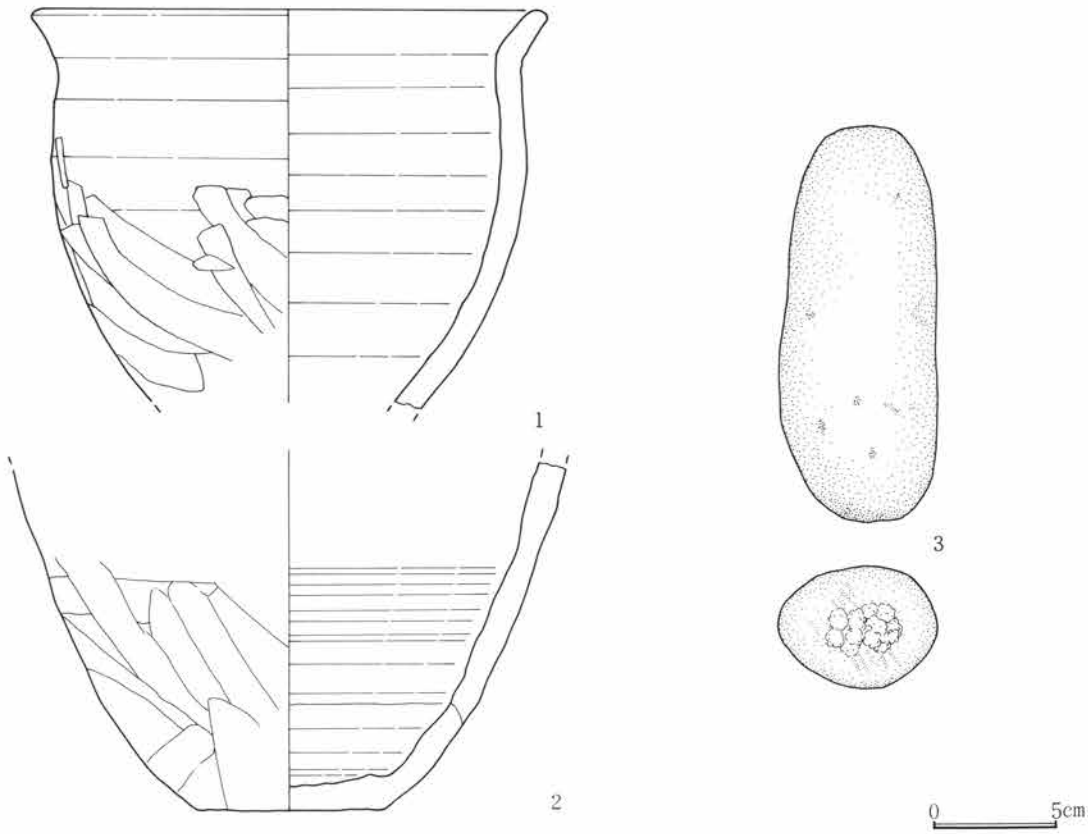
第244図　Ｈ区第69号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	Ｈ区第71号住居跡	位置	44・45—Ｈ—53～55グリッド内	分類	—	時期	Ⅷ
平面形態	隅丸長方形？	規模	4.35m× — m	主軸方位	東—10度—北	残存深度	約８㎝程
備考	北側を46号住に、南側を67号住に切られている。平面形はとらえられず、壁溝・柱穴・貯蔵穴は未検出である。掘り方段階で検出した円形の土坑も規模・形状も不均一で柱穴とは考えられない。						
カマド	位置形状	東壁		分類	Ｅ—３	主軸方位	東—３度—北
規模	全長125㎝・屋外長65㎝・屋内長60㎝・袖間幅80㎝・燃焼部幅60㎝・煙道幅—㎝						
備考	焚口は掘り方段階で浅い半円状の掘り込みとして検出され、燃焼部から焚口右寄り一面に灰面を検出。また、燃焼部両側の一部は特に焼土が厚い。袖は右袖のみ礫石を検出。左袖は長方形据え方のみ。						



1　暗褐色土　ＣＰを多量に含み、炭化物を少量含む。
2　〃　Ⅵ層土粒・ブロックを含む。
3　褐色土　Ⅵ層土を多く含む。
4　暗褐色土　焼土・Ⅵ層土粒を多量、ＣＰを少量含む。
5　〃　ＣＰと焼土を含む。
6　〃　Ｖ層土を主体にⅥ層土を多量に含む貼床。
7　〃　焼土粒・炭化物を少量含む。
8　〃　焼土粒・炭化物・灰を含む。
9　暗褐色土　Ⅵ層土粒を含みやや粘性がある。
10　〃　ＣＰを多量に含み、焼土・灰は含まない。
11　〃　ＣＰを少量と焼土ブロック・粒子を含む。
12　〃　ＣＰ・焼土粒・Ⅵ層土粒を微量含む。
13　〃　12層に比して焼土粒が多い。
14　〃　Ⅵ層土ブロックを多量、炭化物・焼土粒を少量含む。
15　〃　ＣＰ・焼土粒・Ⅵ層土粒を含み、やや粘性がある。

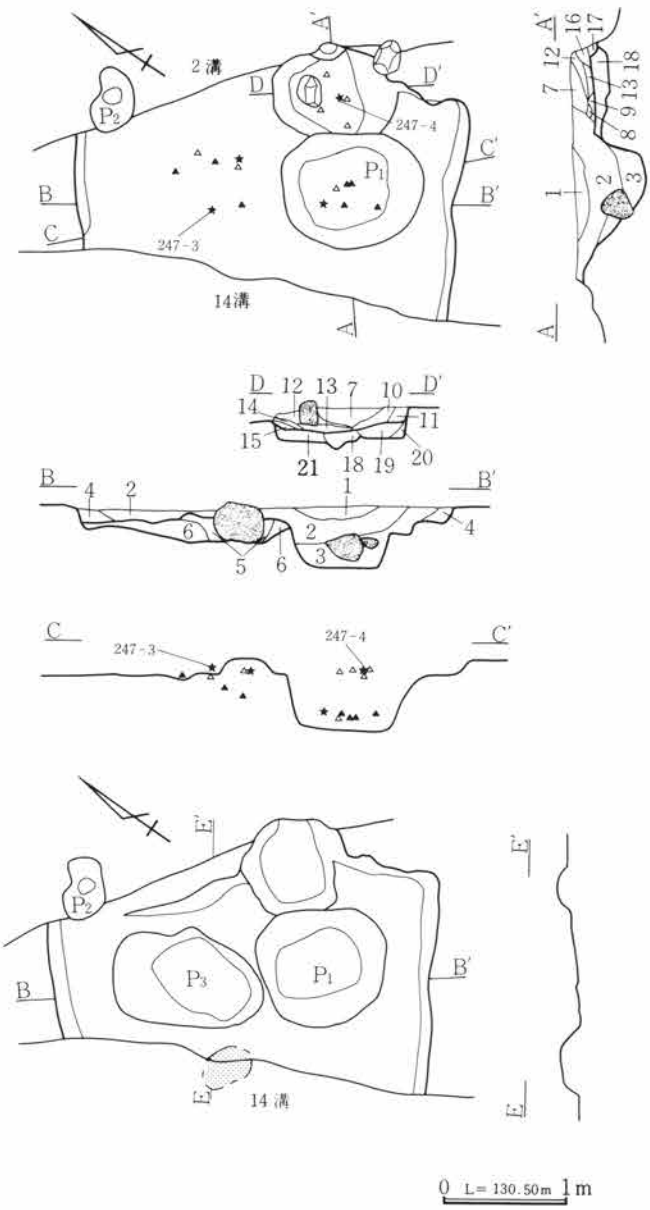
第245図　Ｈ区第71号住居跡・出土遺物実測図



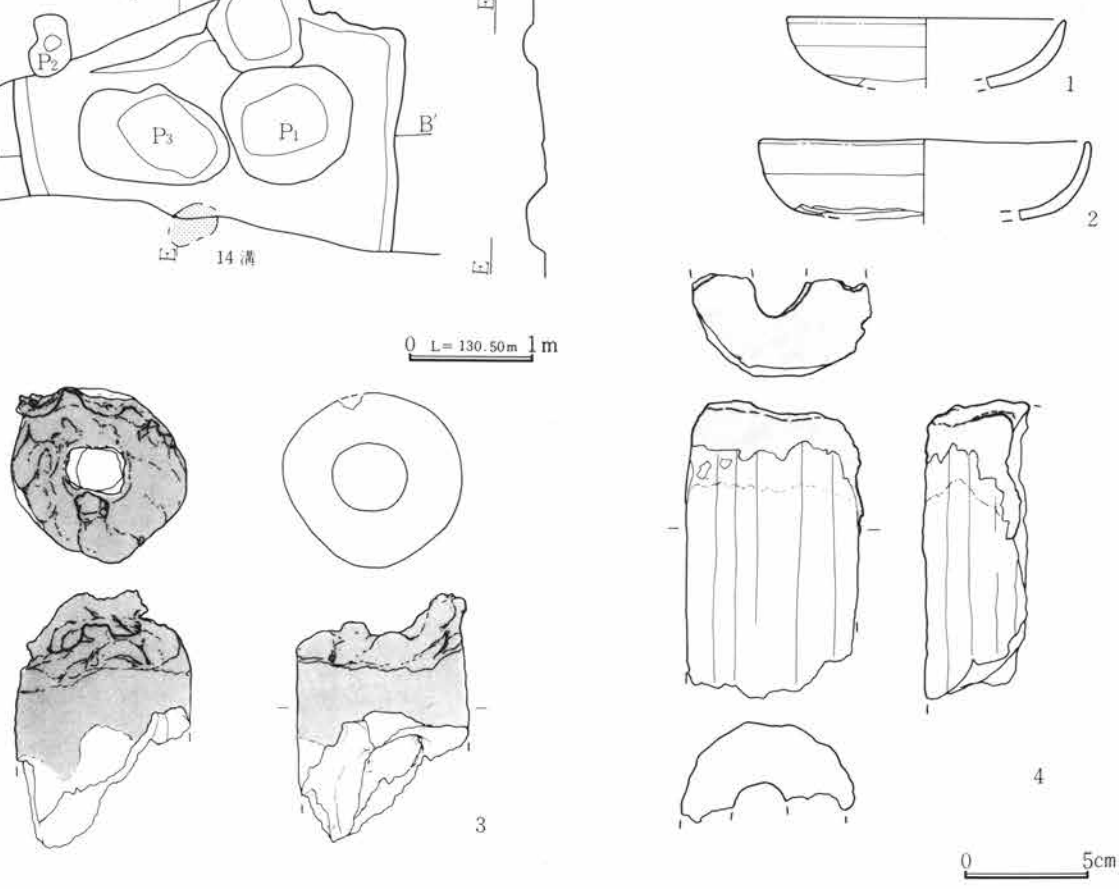
第246図　H区第71号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	H区第72号住居跡		位置	40～42—H—56・57グリッド内		分類	—	時期	VI
平面形態	隅丸方形？	規模	— m×3.05m		主軸方位	東—？度—北	残存深度	約14cm程	
備考	住居中央部を除き、2・14号溝によって切られている。円形土坑及び大礫・焼土部分・羽口等の検出されたことが特徴であり、鍛冶跡と考えられる遺構である。								
カマド	位置形状	東壁南寄り			分類	—	主軸方位	東—？度—北	
規模	全長—cm・屋外長—cm・屋内長—cm・袖間幅—cm・燃焼部幅—cm・煙道幅—cm								
備考	前述のように2号溝によってカマドの大半は失われており、その形状は不明である。								

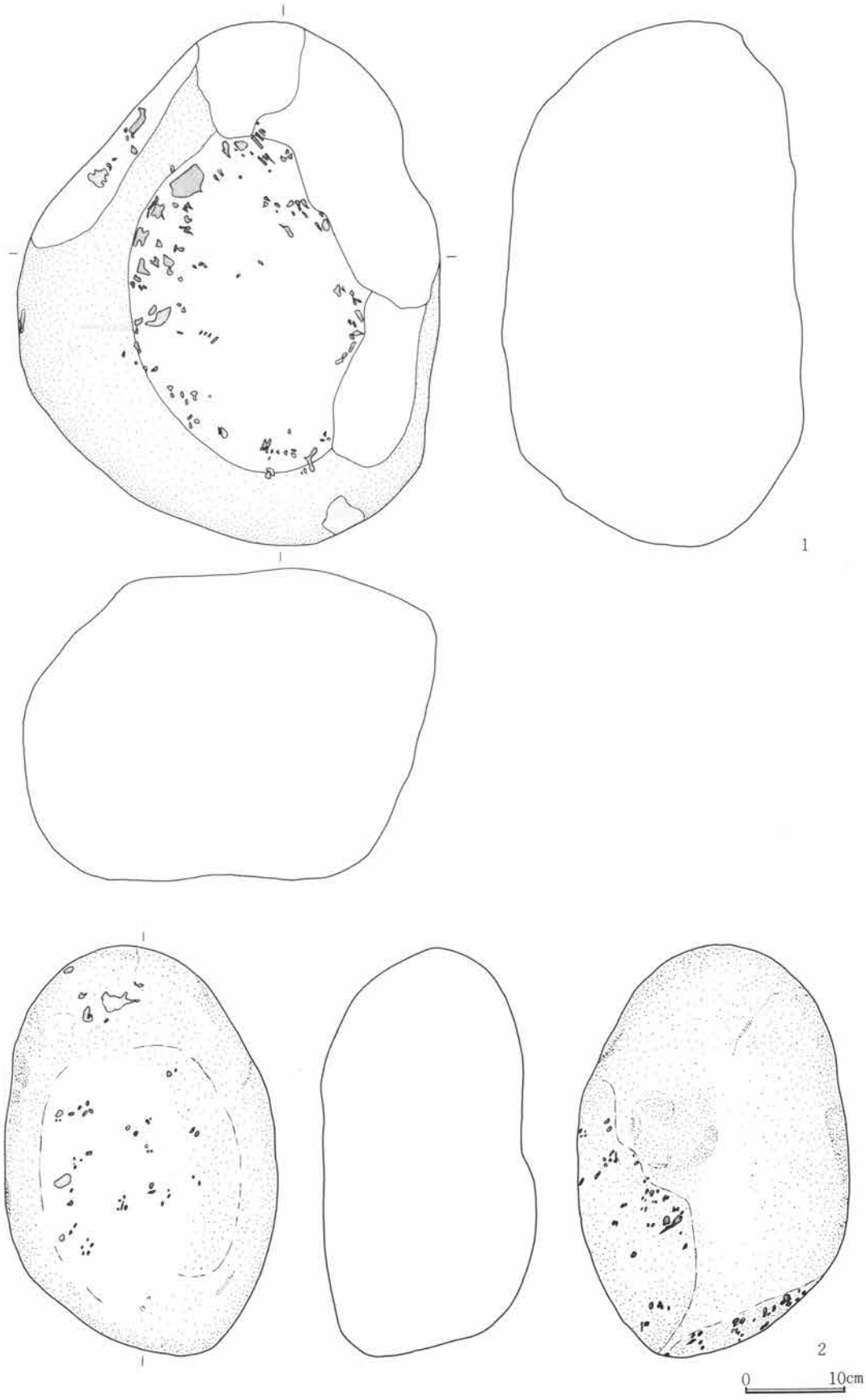
当住居跡は、溝との重複によって中央部以外を失っており、カマドは焚口部のみが残存していた。この部分には鞴の羽口等の他礫が2個出土した。そのうち南側に位置するものは、ほぼ原位置を保っているものと考えられ、袖として機能していた可能性が高い。この他、床面中央南寄りにカマド焚口の掘り込みと重複するかたちで、約115cm×95cm、深度約46cmの楕円形プランの土坑を検出した。この土坑中央底面から5～10cm程上位から大礫2個の他、鞴の羽口・鉄片等が出土した。また、この土坑の北側には安山岩質の大礫（第248図—1）が、床面から12cm程度出るような状態に据えられていた。この礫には、敲打によって平坦化された面が数面あり、褐色の付着物が観察された他、これらの面は明らかに高熱を受けた痕跡があることから、いわゆる台石と考えている。また、使用面が全面に及んでいることから数回の据え直しが行われたことがわかる。さらにこの礫のすぐ西側には45cm×30cmの範囲で焼土が検出された。これらの施設と出土遺物から当住居跡は鍛冶跡と考えている。



1	暗褐色土	ＣＰはやや多く、Ⅵ層土粒及びブロックを含む。
2	〃	１層に近似しているが、全体に粗である。
3	〃	１・２層に比してⅥ層土ブロックを多量に含む。
4	〃	Ⅵ層土粒を多量含む。
5	〃	Ⅵ層土粒及びブロックを多量含む。
6	〃	Ⅵ層土粒は５層に比してやや少ない。
7	〃	ＣＰを少量とⅥ層土粒・ブロックを多量、炭化物を微量含む。
8	〃	炭化物を多量含む。
9	〃	炭化物は少量でⅥ層土粒を多量含む。
10	〃	７層に比してⅥ層土ブロックは小さく、炭化物はより少ない。
11	〃	Ⅵ層土粒を少量含む。
12	〃	炭化物・灰・鉄滓片を含む。
13	〃	Ⅵ層土粒及び焼土を含み柔らかい。
14	〃	焼土粒・灰・鉄滓を多量含む。
15	〃	Ⅵ層土粒を多量含む。
16	〃	Ⅵ層土粒と焼土粒を含む。
17	〃	灰を多量含む。
18	〃	Ⅵ層土ブロックを多量、焼土・灰を少量含む。
19	〃	焼土・炭化物を多量、Ⅵ層土ブロックを少量含む。
20	〃	Ⅵ層土粒を多量、Ⅵ層土ブロックを少量含む。
21	〃	18層よりもⅥ層土ブロックを多く含み、焼土・灰を含まない。

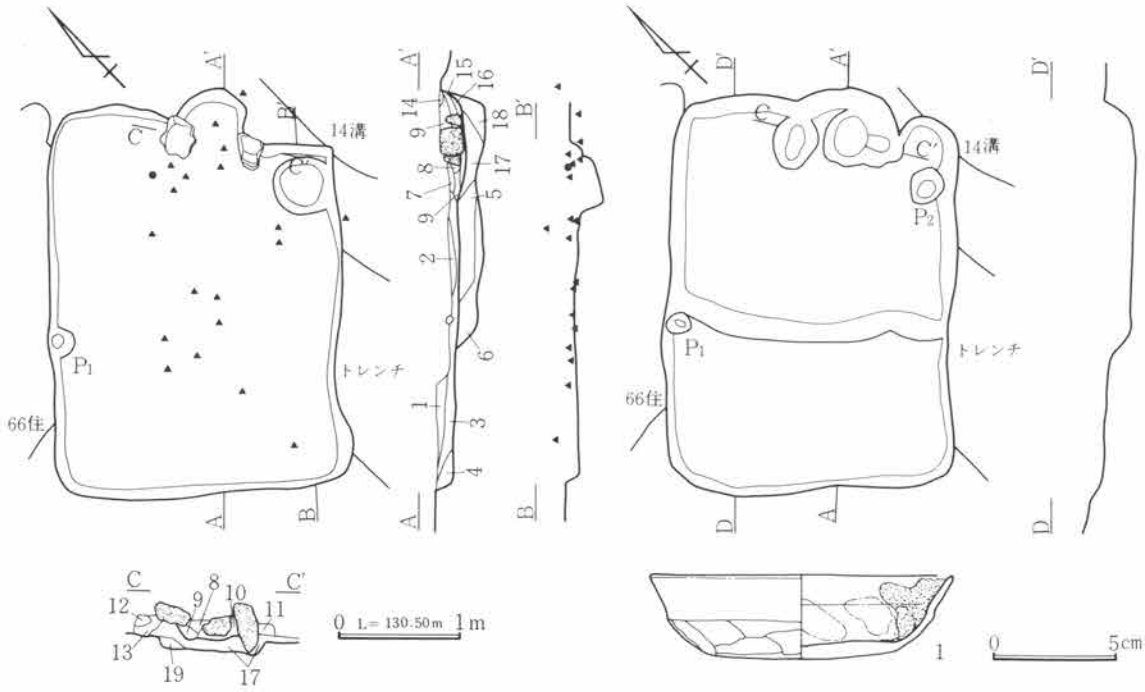


第247図　H区第72号住居跡・出土遺物実測図



第248図　H区第72号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	H区第73号住居跡	位置	40・41—H—58・59グリッド内	分類	B—2	時期	?
平面形態	隅丸長方形	規模	3.10m×2.35m	主軸方位	東—45度—北	残存深度	約12cm程
備考	北西コーナー部を66号住との重複で失っており、66号住に伴うと考えられる円形土坑を検出した。壁溝・柱穴は未検出で、中央部に大小の礫が据えられているが、鍛治的な性格とは考えられない。						
カマド	位置形状	東壁中央わずかに南寄り		分類	E—1	主軸方位	東—33度—北
規模	全長70cm・屋外長35cm・屋内長35cm・袖間幅85cm・燃焼部幅40cm・煙道幅—cm						
備考	焚口・燃焼部は床面と同レベルで、灰面・焼土等は未検出。両袖は自然礫を据えており、間に礫が出土しているが、天井石とは考えられない。支脚は燃焼部中央やや右寄りに礫を立てている。						

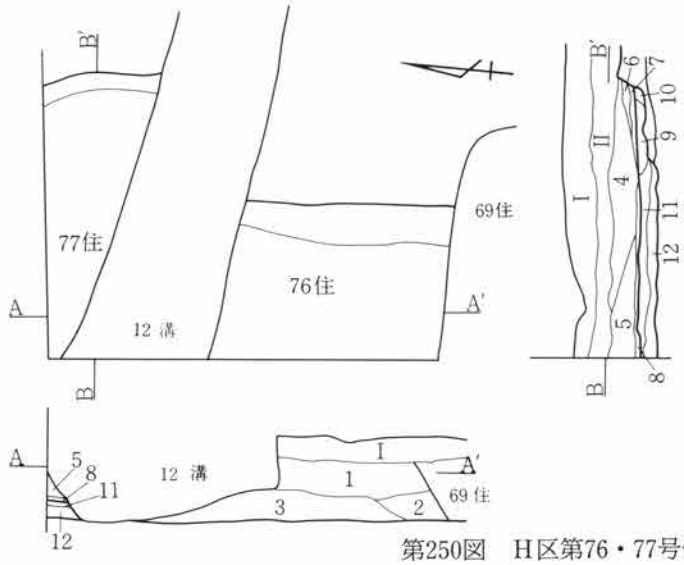


1　暗褐色土　CPとVI層土ブロックを少量含む。
2　〃　VI層土粒・V層土を含む。
3　〃　焼土粒・炭化物・V層土粒を含む。
4　〃　CPは少なく、VI層土粒を多量含む。
5　〃　VI層土ブロック、IV層土を含む貼床。
6　〃　VI層土ブロックを主体にIV層土を含む。
7　〃　CPを多量含む。
8　灰白色土　粘質土でIV層土を少量含む。
9　暗褐色土　灰・焼土・V層土を含む。
10　〃　焼土粒を多量含む。
11　暗褐色土　CP・VI層土粒・焼土粒を少量含む。
12　黄褐色土　VI層土ブロック。
13　暗褐色土　VI層土粒・炭化物を少量含む。
14　〃　焼土ブロックを多量含む。
15　〃　灰を多量含む。
16　〃　CPを含み、焼土粒はほとんど含まない。
17　〃　VI層土ブロックを多量含む。
18　〃　VI層土を少量含む。
19　黄褐色土　VI層土を多量含む。

第249図　H区第73号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	H区第76号住居跡	位置	30～32—H—78・79グリッド内	分類	—	時期	?
平面形態	?	規模	— m× — m	主軸方位	東—?度—北	残存深度	約13cm程

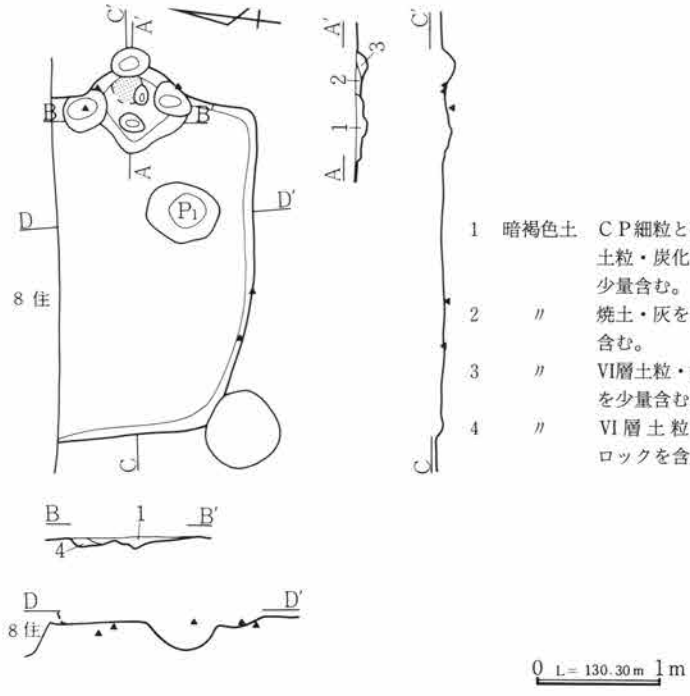
遺構名称	H区第77号住居跡	位置	31・32—H—77・78グリッド内	分類	—	時期	?
平面形態	?	規模	— m× — m	主軸方位	東—?度—北	残存深度	約10cm程
備考	大半が調査区外で、全体像は不明。重複関係は、77号住→76号住→69号住であることが、セクションによって確認された。カマドの位置は不明で、壁溝は未検出である。						



1　暗褐色土　ＣＰ・焼土・炭化物を少量含み、硬化している。
2　〃　焼土を微量含む。
3　〃　ＣＰを少量含む。
4　〃　ＣＰを多量、炭化物・焼土を少量含む。
5　〃　ＣＰを少量含む。
6　暗灰色土　灰層
7　暗褐色土　焼土・灰を含む。
8　〃　Ｖ層土を主体に焼土を混入した貼床。
9　〃　焼土ブロック・灰・Ⅵ層土を含む。
10　〃　灰を多量含む。
11　〃　焼土を微量、Ｖ層土を含む。
12　〃　Ｖ層土ブロックを含む。

第250図　Ｈ区第76・77号住居跡実測図

遺構名称	Ｈ区第83号住居跡	位置	41・42―Ｈ―50～52グリッド内	分類	Ｃ―？	時期	？
平面形態	隅丸長方形？	規模	2.65m×　―　m	主軸方位	東―６度―北	残存深度	約５cm程
備考	確認は南半のみで、北側は８号住と重複しているが、確認面がすでに床面であり、関係は不明。残存部において、壁溝・柱穴はみられず、貯蔵穴は、カマド正面の円形土坑とは考えられず不明である。						
カマド	位置形状	東壁南寄りと考えられる		分類	Ｅ―３	主軸方位	東―８度―北
規模	全長85cm・屋外長40cm・屋内長45cm・袖間幅100cm・燃焼部幅50cm・煙道幅―cm						
備考	掘り方のみ検出され、左袖は礫及び径約35cm、深度約７cm、右袖は径約30cm、深度約13cmの円形据え方のみ検出。燃焼部奥に径約20cmの範囲に焼土がみられた。煙出し部の楕円形ピットは機能不明。						



1　暗褐色土　ＣＰ細粒とⅥ層土粒・炭化物を少量含む。
2　〃　焼土・灰を多量含む。
3　〃　Ⅵ層土粒・焼土を少量含む。
4　〃　Ⅵ層土粒・ブロックを含む。

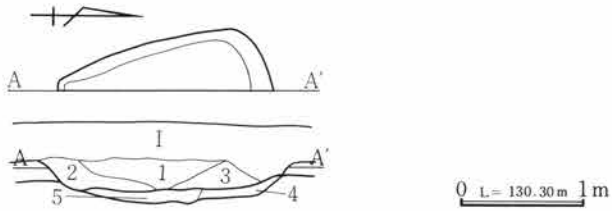
第251図　Ｈ区第83号住居跡実測図

当住居跡は、黄褐色土ロームをベースとする部分に位置し、したがって遺構確認は容易な場所であるが、第８・38号住居跡と共に確認した段階で、すでに床面近くまで下がった状態であったため、かろうじて住居範囲を捉えたにすぎない。

第８号住居跡との前後関係については、表中に記載したとおり、なんら根拠がなく明言することはできないが、遺構の残存状態から一応83号住→８号住と想定しておきたい。

掘り方は、Ⅵ層土主体の暗褐色土の充填された部分がわずかに掘り下げられただけである。カマド正面のピットは床面で検出したものである。

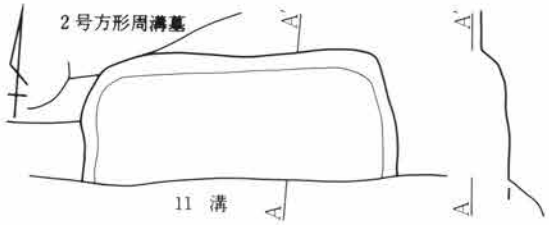
遺構名称	H区第87号址		位置	37・38—H—47グリッド内		分類	—	時期	?
平面形態	隅丸方形？	規模	— m× — m		主軸方位	東—18度—北	残存深度	約13cm程	



1　暗褐色土　ＣＰとⅥ層土粒を少量含む。
2　〃　１層に比してＣＰは少ない。
3　〃　ＣＰとⅥ層土粒を含む。
4　〃　Ⅵ層土粒を多量含む。
5　〃　Ⅵ層土ブロックを多量に含み、しまりあり。

第252図　H区第87号址実測図

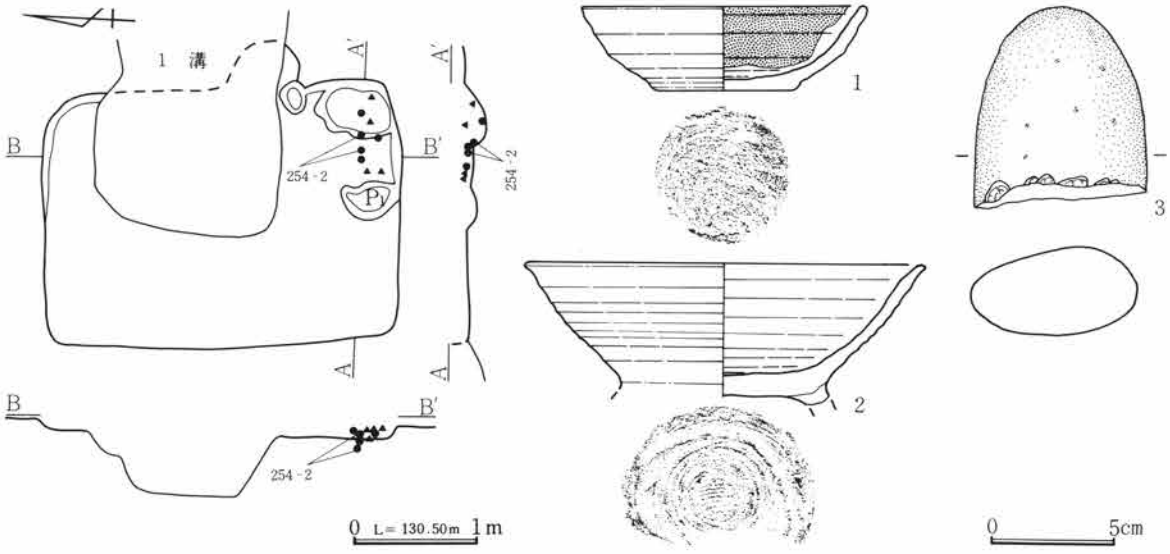
遺構名称	H区第89号址		位置	27—H—53・54グリッド内		分類	—	時期	?
平面形態	隅丸方形？	規模	2.40m× — m		主軸方位	東—８度—北	残存深度	約 —cm程	
備考	南側は11号溝によって切られている。底面は平坦である。壁溝・柱穴・カマド等の施設は全く検出されていないが、形態は比較的しっかりしている。								



第253図　H区第89号址実測図

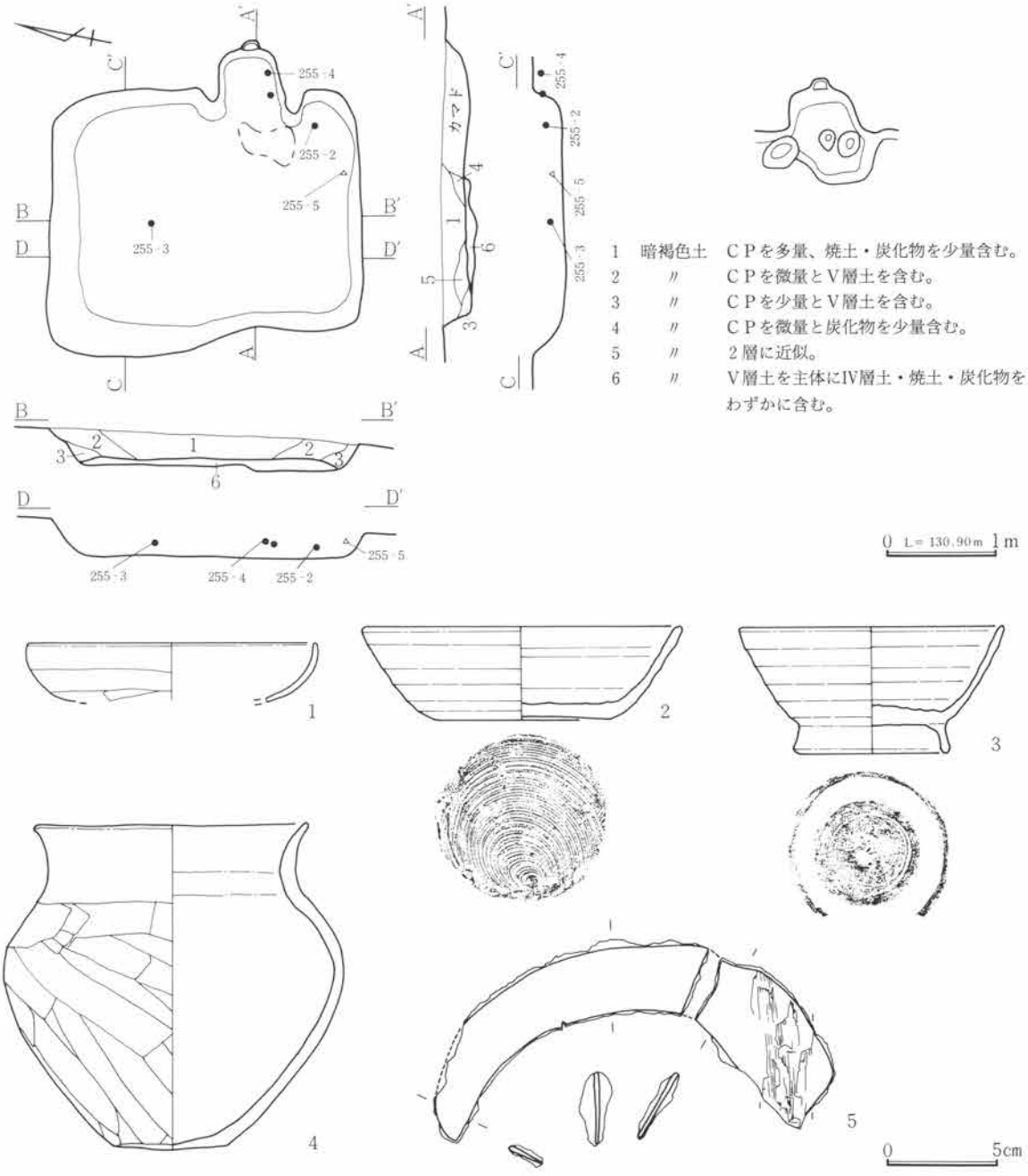
東西壁、北壁はそれぞれ直角に近い角度で交わっている。また、多くの住居跡で見られるように、コーナー部が隅丸になっていること等から、当遺構が住居跡の一部である可能性が強い。しかしそれ以上の根拠に欠けるため址としておく。

遺構名称	H区第92号住居跡		位置	29・30—H—72・73グリッド内		分類	C—10	時期	X
平面形態	隅丸長方形？	規模	— m×2.85m		主軸方位	東—８度—北	残存深度	約７cm程	
備考	確認面は床面に近いレベルであったため、西側半分は促えることができなかった。貯蔵穴は南東コーナー部で、径約60cm、深度約８cmの楕円形である。カマドは東壁南寄りであるが実態は不明。								

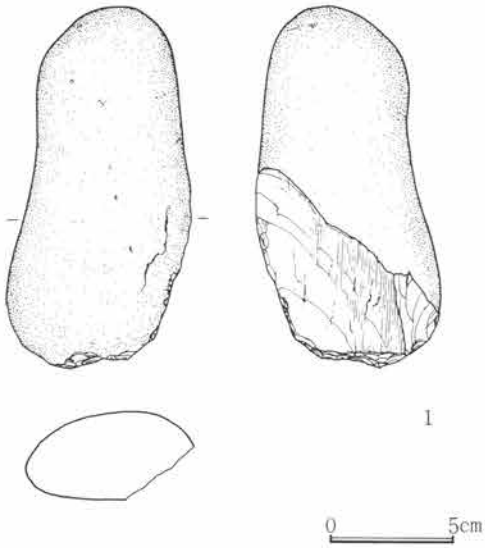


第254図　H区第92号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	H区第97号住居跡	位置	34・35—H—74～76グリッド内	分類	C—10	時期	V
平面形態	隅丸長方形	規模	2.40m×2.75m	主軸方位	東—９度—北	残存深度	約24cm程
備考	床面はほぼ平坦に構築されており、６～10cmの貼り床が全面にみられる。壁際周囲はわずかに溝状の窪みがみられるが、壁溝とするほど明確でない。貯蔵穴・柱穴は全く検出されていない。						
カマド	位置形状	東壁南寄り		分類	D—５	主軸方位	東—８度—北
規模	全長90cm・屋外長45cm・屋内長45cm・袖間幅95cm・燃焼部幅45cm・煙道幅13cm						
備考	焚口は約４cmの半円状の掘り方を有し、上面右寄りに灰面が検出された。両袖は掘り残し状であるが、掘り方段階で左袖部に径約35cm、深度約７cmの楕円形ピットを検出した。支脚は不明。						



第255図　H区第97号住居跡・出土遺物実測図

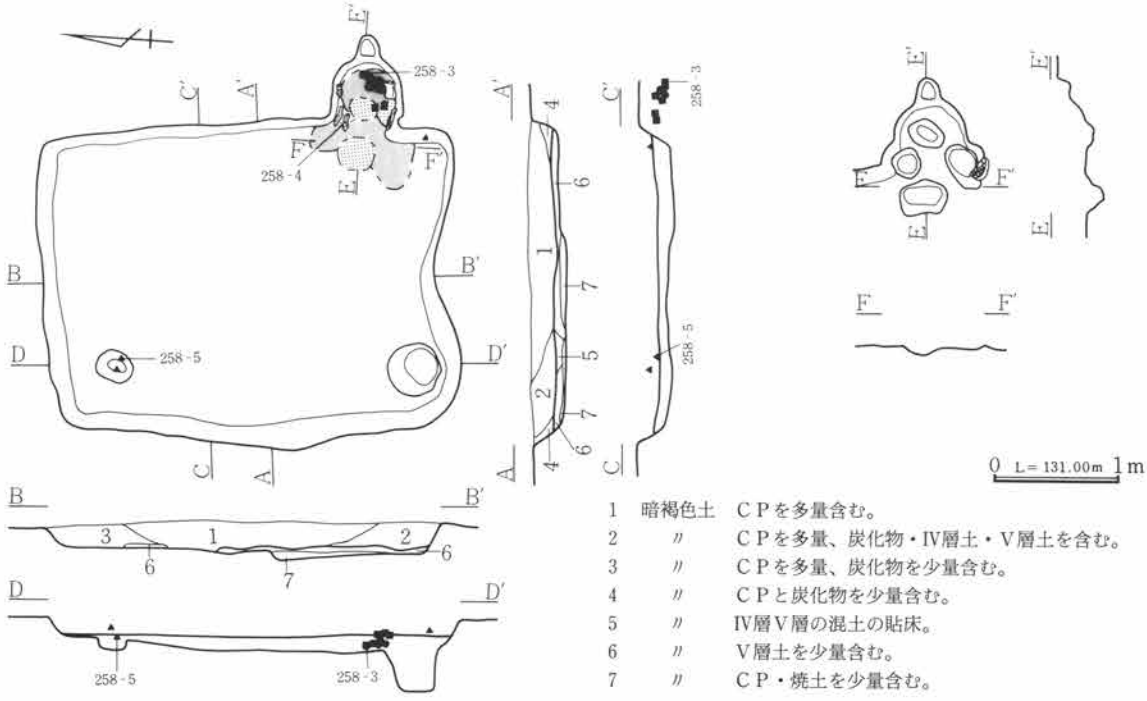


第256図　Ｈ区第97号住居跡出土遺物実測図

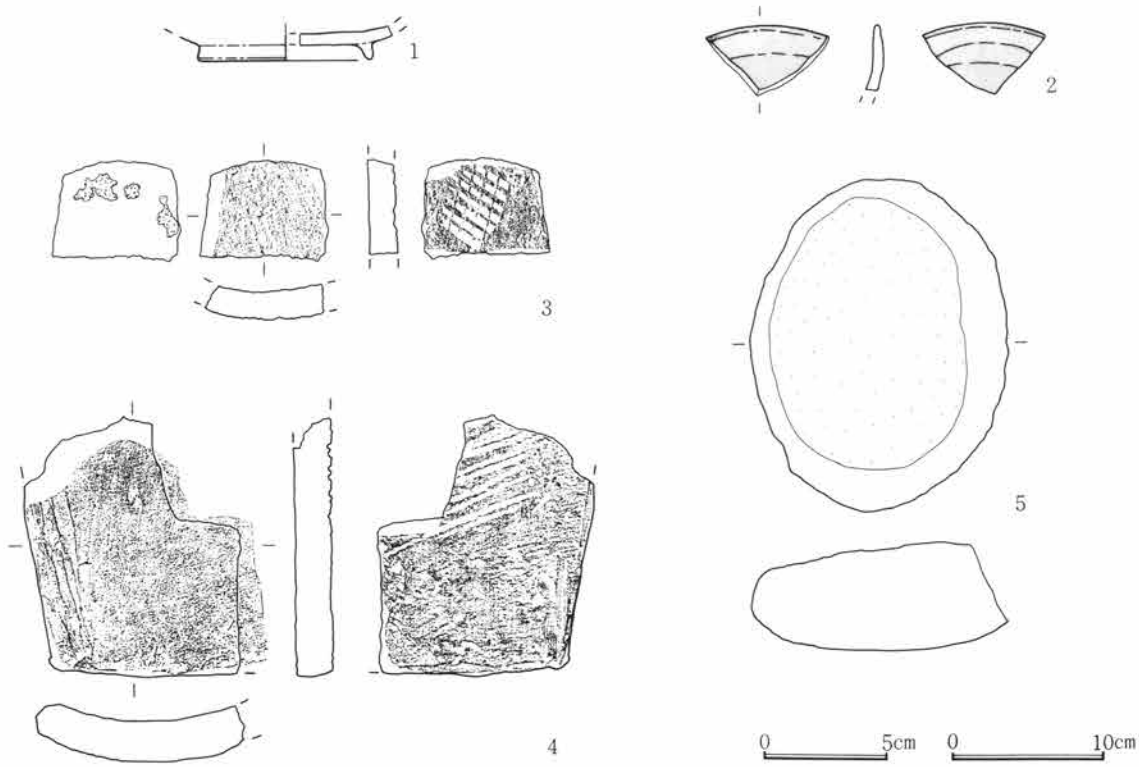
当住居跡は、西側の第92号住居跡を囲むようにみられる空間の外縁部に位置しており、他の遺構との重複はみられない。

遺物は多くは出土していないが、ほとんど貼り床面上からの出土である。第255図－２は南東コーナー部の貯蔵穴の位置する場所から、口縁部を上に向けて出土した。第255図－３は住居中央の床面直上に、伏せられたような状態で出土している。第255図－４は、カマド右壁に接するようにして、口縁部をほぼ水平の状態で出土した。さらに第255図－５の鉄鎌は、南壁側から床面側に傾斜して床面から若干浮いた状態で出土した。こうした遺物出土は、当住居跡に焼失した痕跡等がみられないことから、住居の廃絶に伴いその場に廃棄されたものである可能性が高い。

遺構名称	Ｈ区第98号住居跡		位置	36・37－Ｈ－74～76グリッド内		分類	Ｃ－10	時期	？
平面形態	隅丸長方形	規模	2.60m×3.30m	主軸方位	東－２度－北		残存深度	約20cm程	
備考	床面はほぼ平坦で、壁溝・柱穴は全く検出されず、貯蔵穴は、南西コーナー部で、径約40cm、深度約32cmの円形であり、この南西コーナーは若干張り出している。								
カマド	位置形状	東壁南寄りに扁在			分類	Ｄ－５	主軸方位	東－２度－南	
規模	全長85cm・屋外長70cm・屋内長15cm・袖間幅50cm・燃焼部幅40cm・煙道幅10cm								
備考	焚口・燃焼部は同レベルで、焼土面と灰面の広がりがある。袖は、瓦を組み合わせて構築しており、径約25cmの円形据え方を有する。支脚は残存しないが、燃焼部中央左寄りに楕円形据え方を検出。								



第257図　Ｈ区第98号住居跡実測図

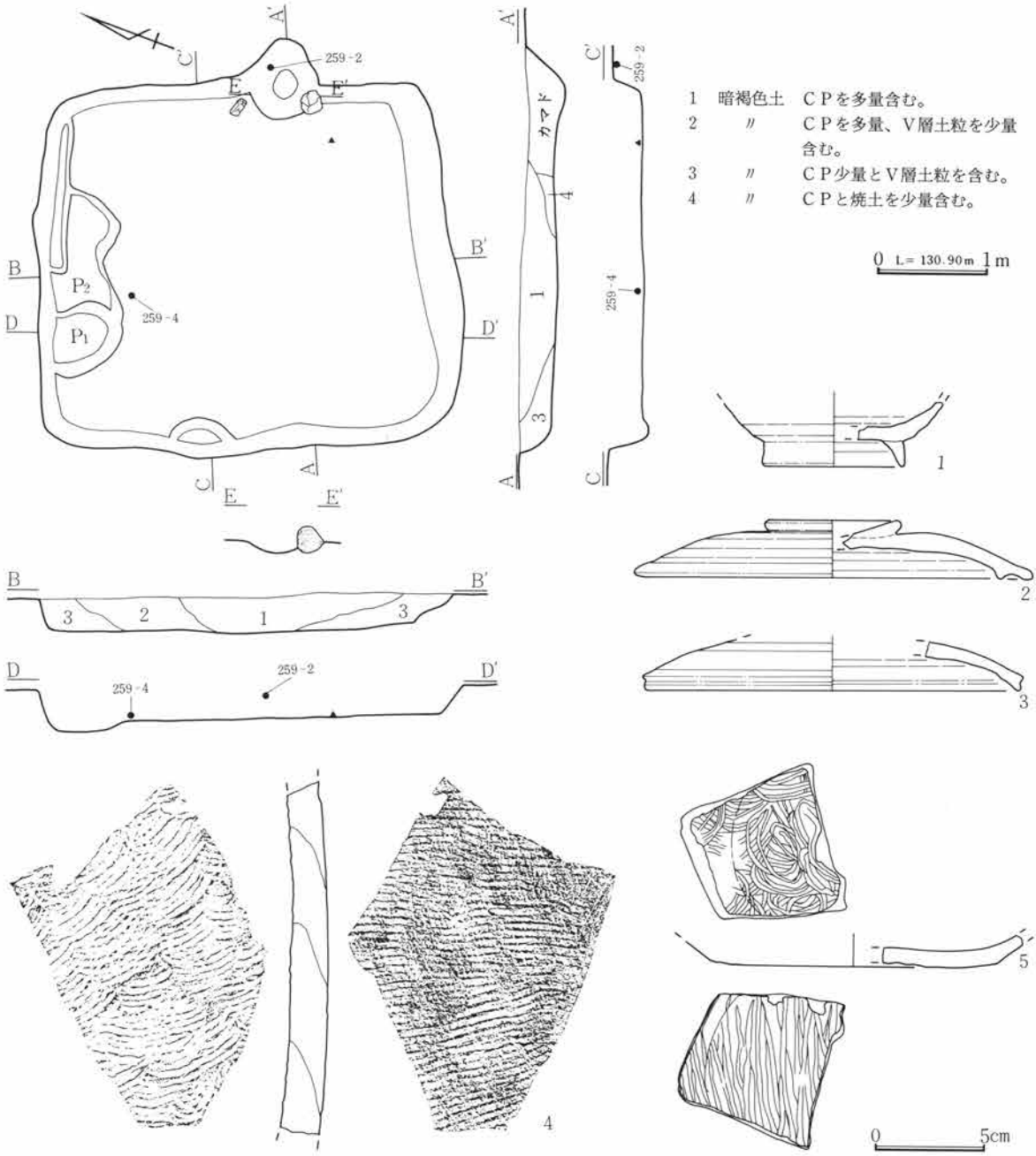


第258図　H区第98号住居跡出土遺物実測図

当住居跡は、第92号住居跡を囲むようにみられる空間部の外縁に位置し、第97・99・132号住居跡等と近い位置関係にあるが重複はしていない。住居規模は若干異なるが第97号住居跡とは、平面形・カマド形態等非常に似ており、いわゆる相似形である。床面は南側程厚く貼り床されほぼ平坦に構築されている。南西コーナー部に検出した貯蔵穴としたものは、床面では明確に検出することはできなかったもので、床面貼り床時に埋没していた可能性もある。遺物は、ほとんどがカマド内の出土であり、住居床面から出土したのは北西コーナー部近くから出土した礫だけである。

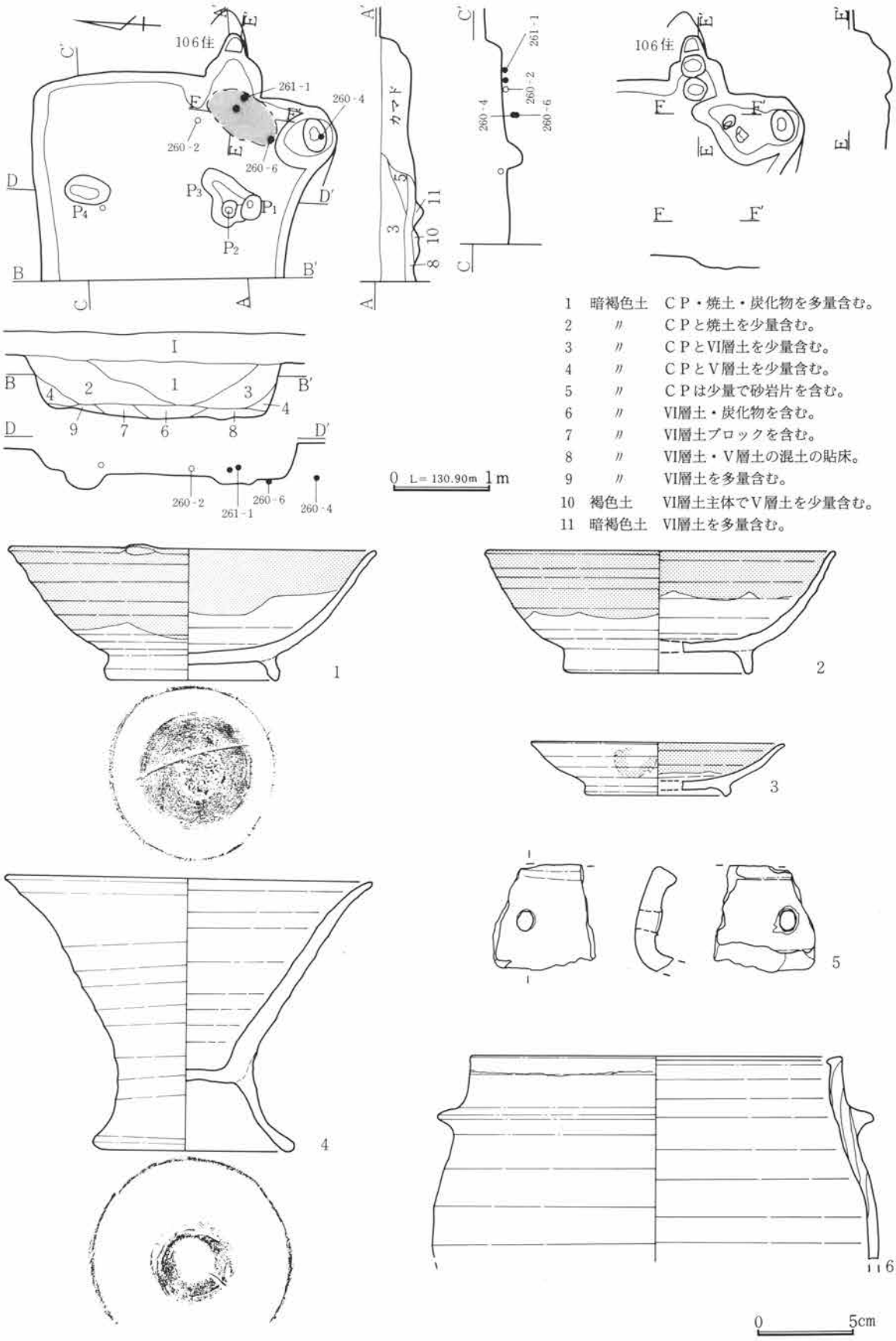
遺構名称	H区第99号住居跡		位置	38～40—H—76～78グリッド内		分類	C—10	時期	IV
平面形態	隅丸長方形	規模	3.25m×3.70m		主軸方位	東—22度—北	残存深度	約23cm程	
備考	壁溝状の溝が北壁の一部に検出されたが、全周する可能性はない。柱穴・貯蔵穴は未検出である。その他土坑状の浅い掘り込みが北壁に接してみられるが性格は不明である。貼床はなし。								
カマド	位置形状	東壁中央やや南寄り			分類	C—1	主軸方位	東—18度—北	
規模	全長75cm・屋外長40cm・屋内長35cm・袖間幅80cm・燃焼部幅60cm・煙道幅—cm								
備考	焚口及び燃焼部は、深度約9cmの円形の掘り込み状で、残存状態不良のため、焼土・灰等は検出されなかった。袖は両袖共礫を使用しているが、左袖は原位置ではないと思われる。								

当住居跡は、第92号住居跡を囲むようにみられる空間部外縁を形成する一群であり、第97・98・132号住居跡の北側に位置している。壁等の掘り込みは比較的しっかりとしておりほぼ垂直の状態で残存している。カマドは袖に石を使用して構築していることはわかったが、残存状態は非常に悪く、焼土・灰等はほとんど検出されなかった。このことは当住居跡内の遺物出土の少なさと無関係とは考えられず、使用期間の短さに起因するものであるかもしれない。

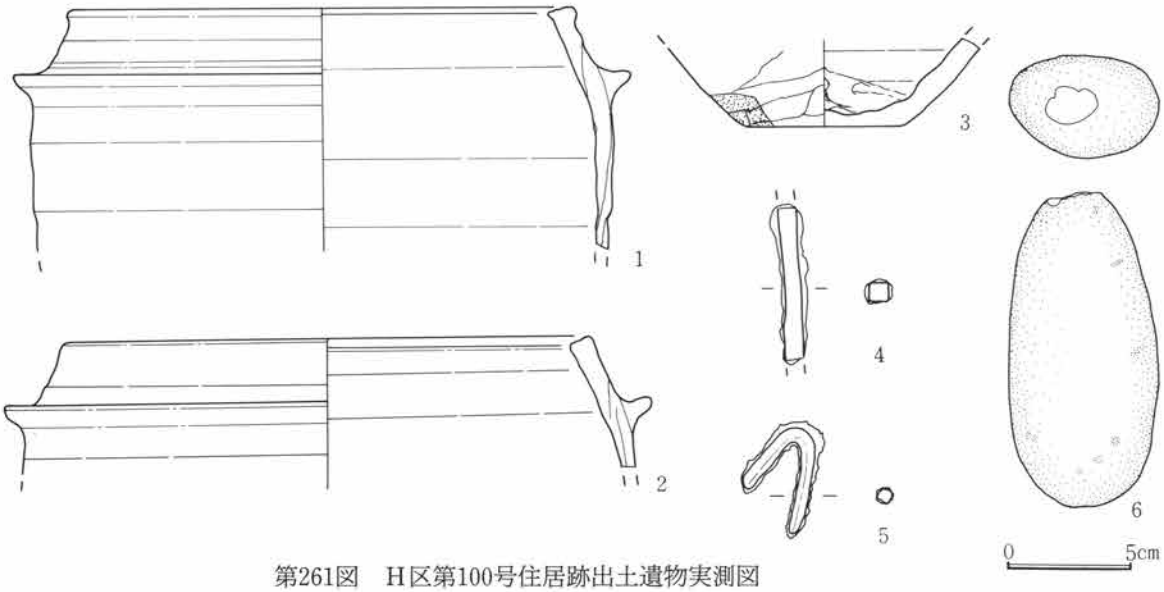


第259図　H区第99号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	H区第100号住居跡	位置	38～40—H—80・81グリッド内	分類	C—？	時期	X
平面形態	隅丸長方形	規模	— m×3.10m	主軸方位	東—１度—南	残存深度	約23cm程
備考	西半は調査区外で未調査。北側で106号住と重複し、106号住→100号住と考えられる。南壁に若干曖昧な部分がある。柱穴は２本検出され径約50cm、深度約12cmの楕円形である。						
カマド	位置形状	東壁南寄り		分類	D-2？	主軸方位	東—10度—北
規模	全長95cm・屋外長70cm・屋内長25cm・袖間幅90cm・燃焼部幅40cm・煙道幅18cm						
備考	焚口・燃焼部は同じレベルで、やや右寄りに灰面がみられる。燃焼部に焼土は全く検出されていない。袖は両袖共曖昧で、袖石等の痕跡はない。支脚は残存しないが、中央に据え方ピットを検出した。						

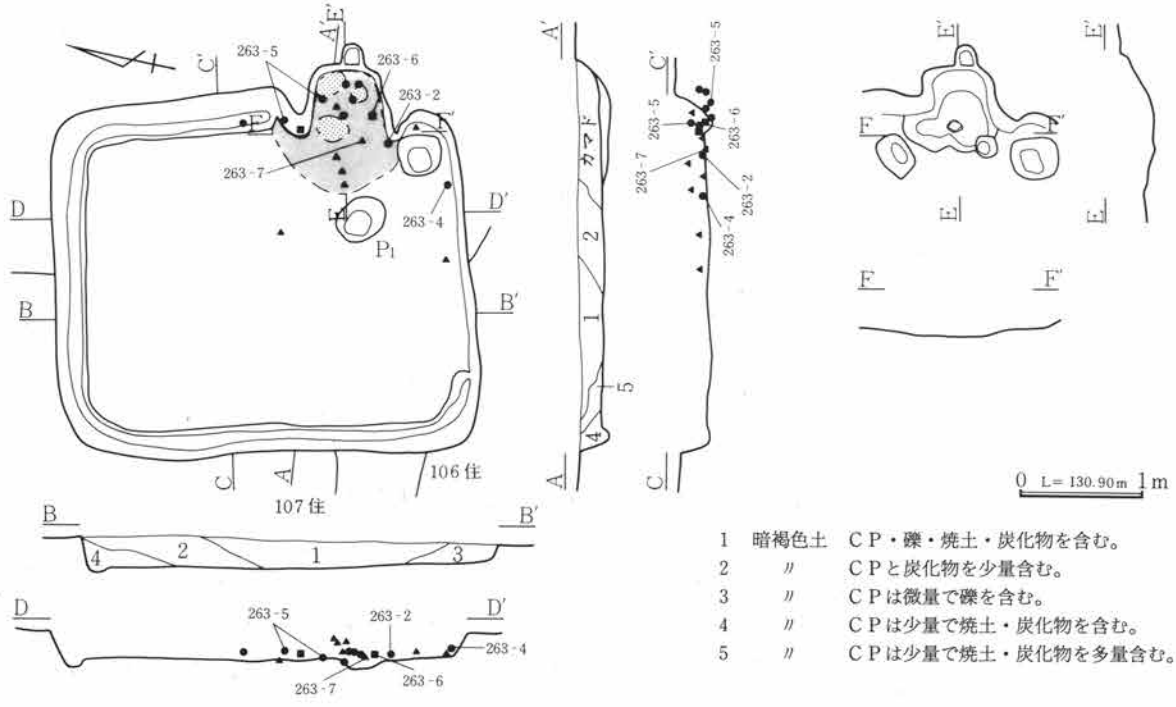


第260図　H区第100号住居跡・出土遺物実測図

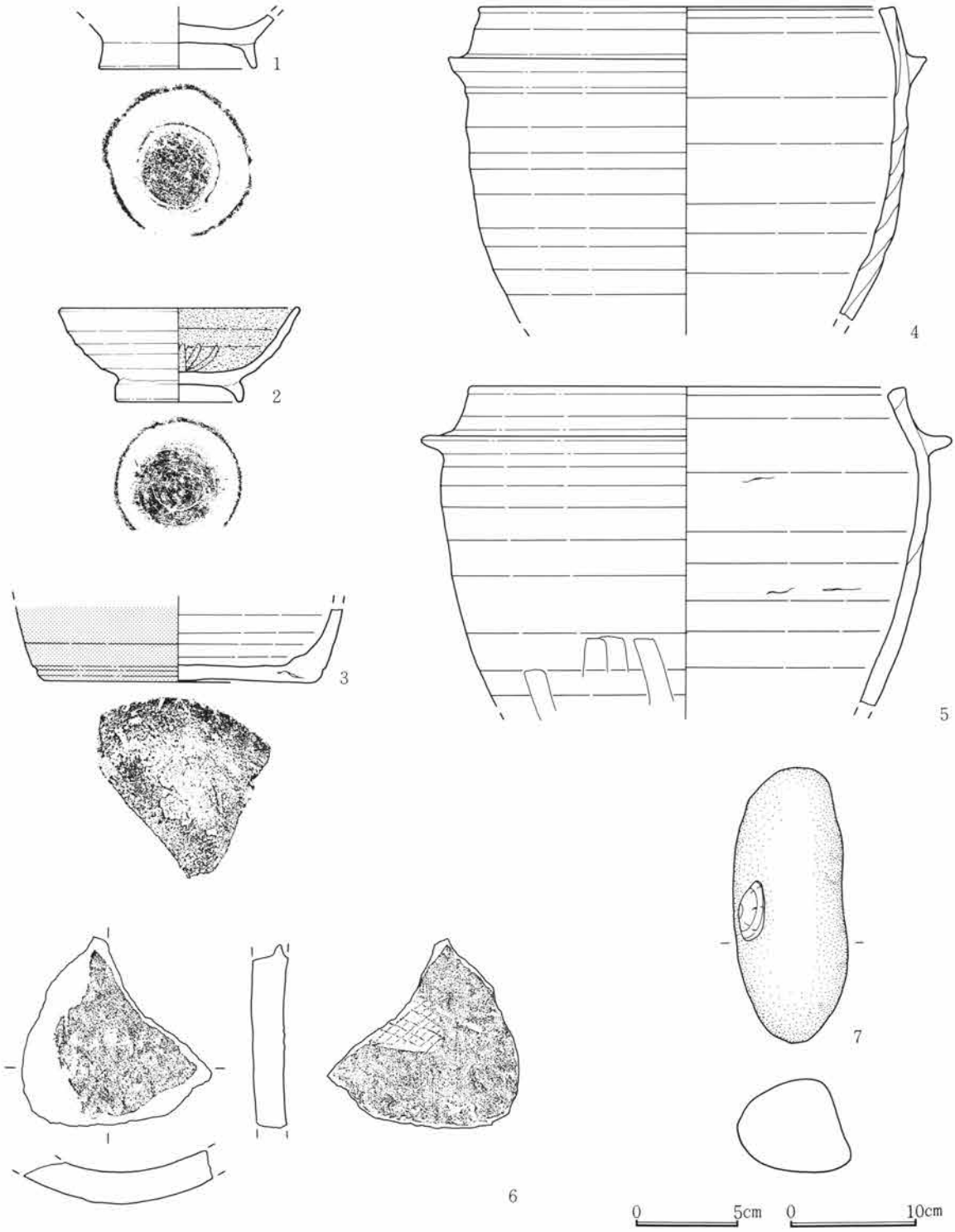


第261図　H区第100号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	H区第101号住居跡	位置	40～42—H—77～79グリッド内	分類	C—7	時期	X
平面形態	隅丸長方形	規模	2.85m×3.30m	主軸方位	東—4度—北	残存深度	約24cm程
備考	壁溝は、幅約５～15cm、深度約３～８cmで、南壁からカマドにかけてはみられない。貯蔵穴は南東コーナー部で、径約40cm、深度約９cmの円形である。カマド正面から検出したピットの性格は不明。						
カマド	位置形状	東壁南寄りに扁在		分類	D—5	主軸方位	東—0度—北
規模	全長75cm・屋外長45cm・屋内長30cm・袖間幅100cm・燃焼部幅55cm・煙道幅10cm						
備考	焚口・燃焼部は床面と同じレベルで、全面に灰面がみられる他部分的に焼土が検出された。袖は両袖共構築材等の痕跡はみられない。支脚は掘り方時中央部に下半部が残存していた。						



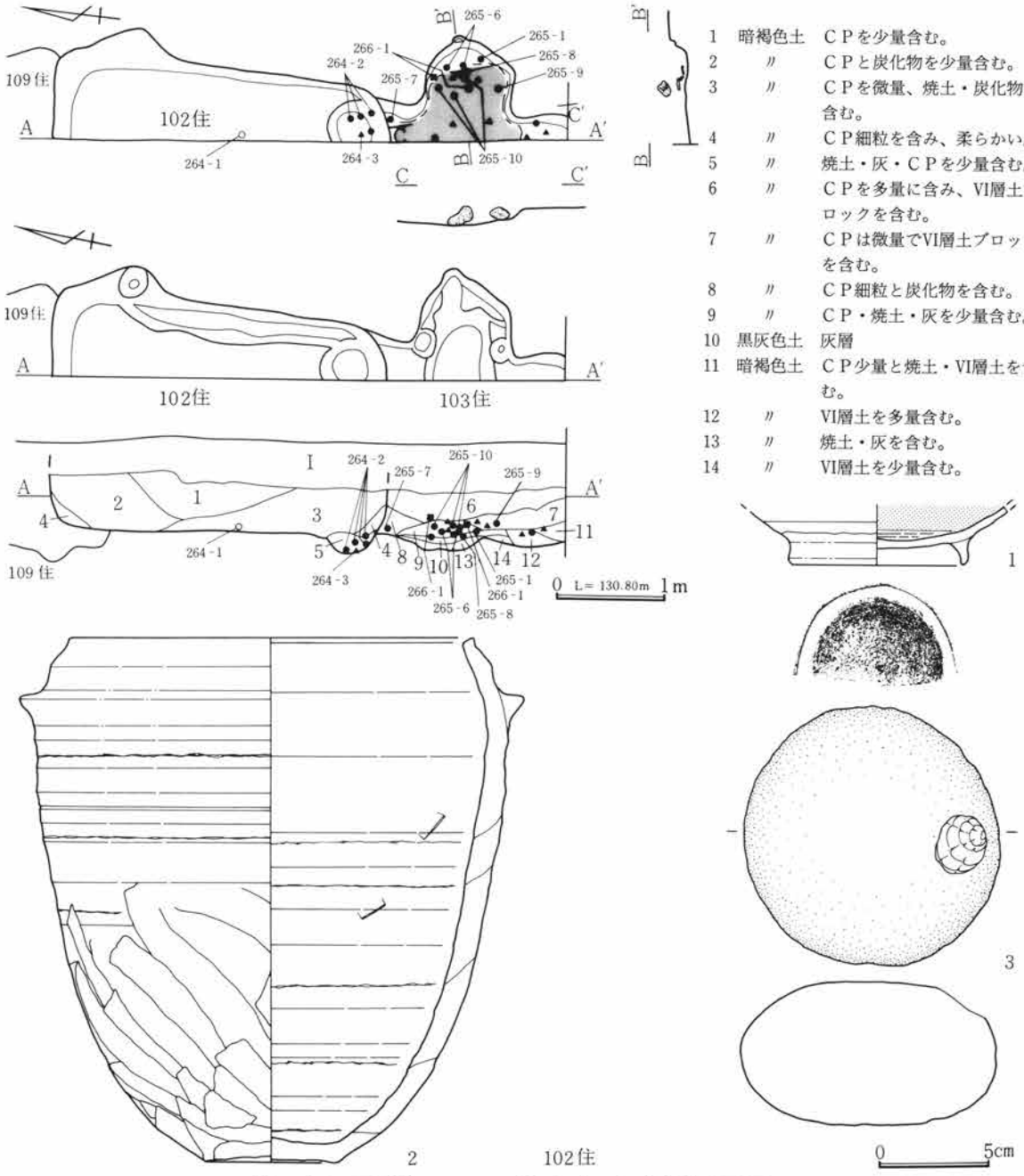
第262図　H区第101号住居跡実測図



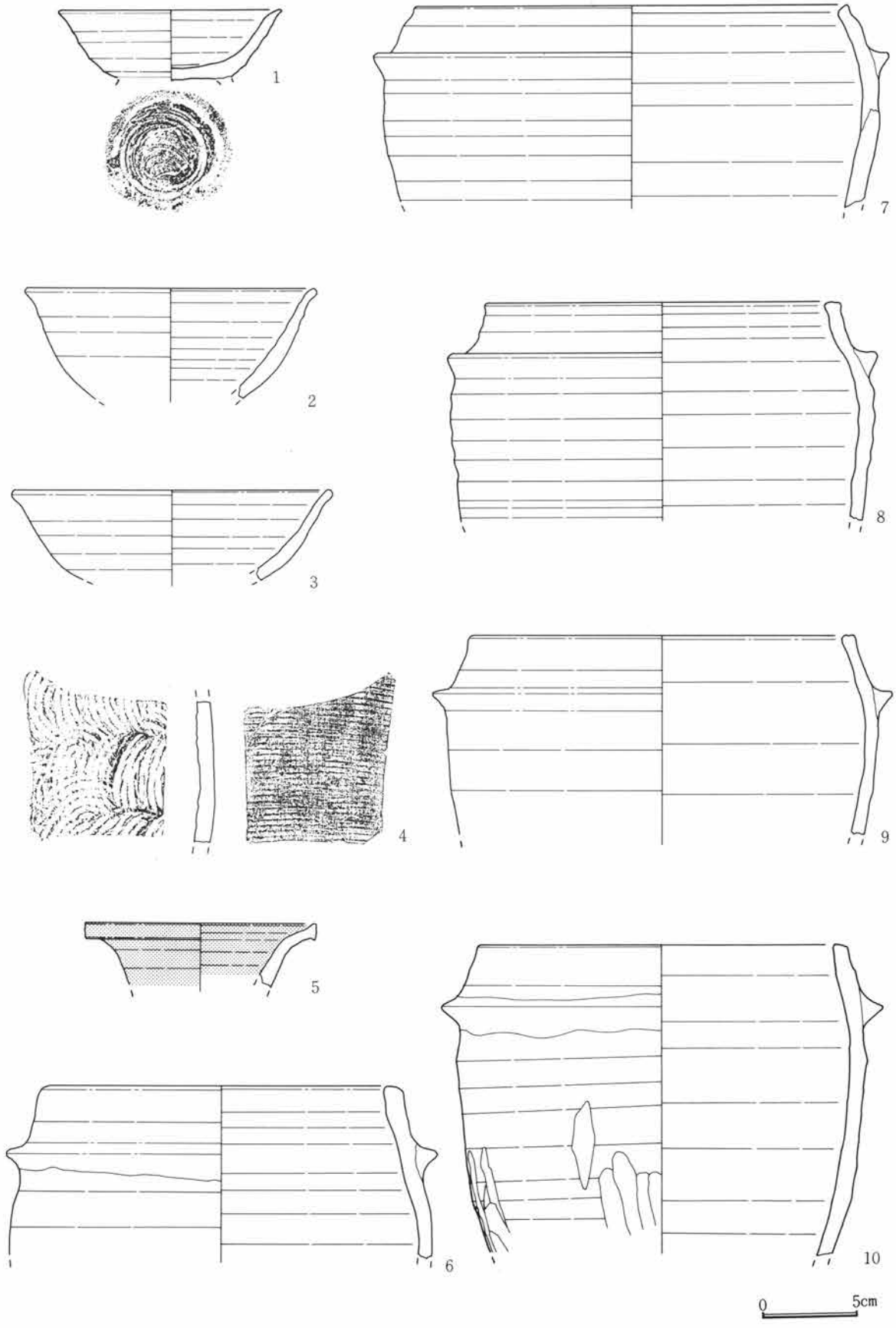
第263図　H区第101号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	H区第102号住居跡		位置	34・35—H—79グリッド内		分類	—	時期	X
平面形態	隅丸長方形？	規模	— m×3.00m	主軸方位	東—？度—北	残存深度	約50cm程		
備考	大半は調査区外で全体像は不明である。一部壁溝が検出され、南東コーナー部に貯蔵穴様の土坑が検出されているが、付近にカマドの痕跡はみられない。セクションから103・109号住→102号住。								

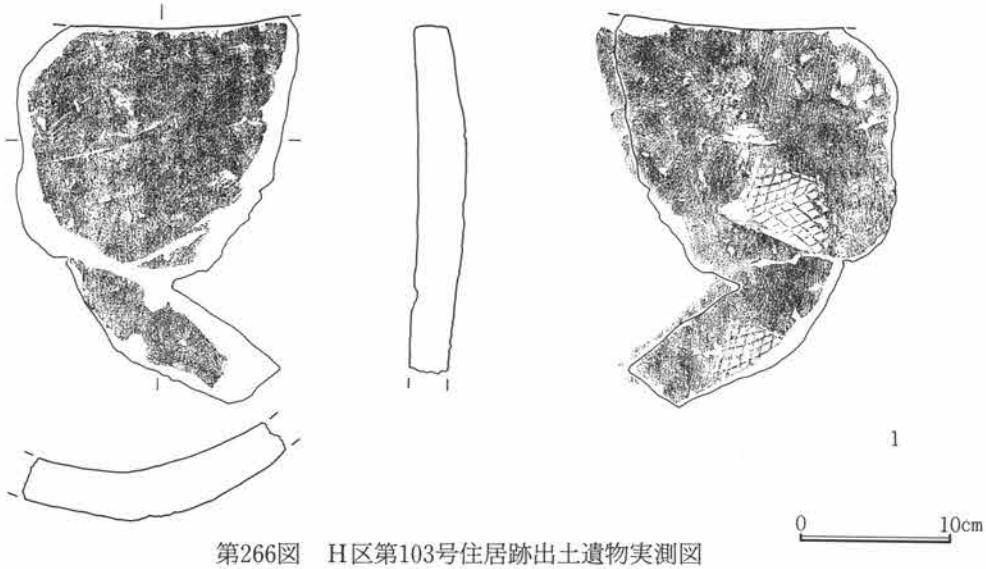
遺構名称	Ｈ区第103号住居跡	位置	33・34―Ｈ―79グリッド内	分類	―	時期	X
平面形態	？	規模	― m× ― m	主軸方位	東―？度―北	残存深度	約40cm程
備考	カマド部分を除き大半が調査区外で未調査の他、北側は102号住によって切られて失われている。したがって住居内の施設等は全く検出できなかった。						
カマド	位置形状	東壁南寄りと考えられる。	分類	Ｅ－２	主軸方位	東―11度―北	
規模	全長75cm・屋外長75cm・屋内長０cm・袖間幅130cm・燃焼部幅75cm・煙道幅８cm						
備考	焚口から燃焼部にかけ一面に灰面があり、その上に礫が多くみられた。袖は構築材は残存していないが、掘り方時両側に据え方と考えられるピットが検出された。						



第264図　Ｈ区第102・103号住居跡・出土遺物実測図



第265図　H区第103号住居跡出土遺物実測図



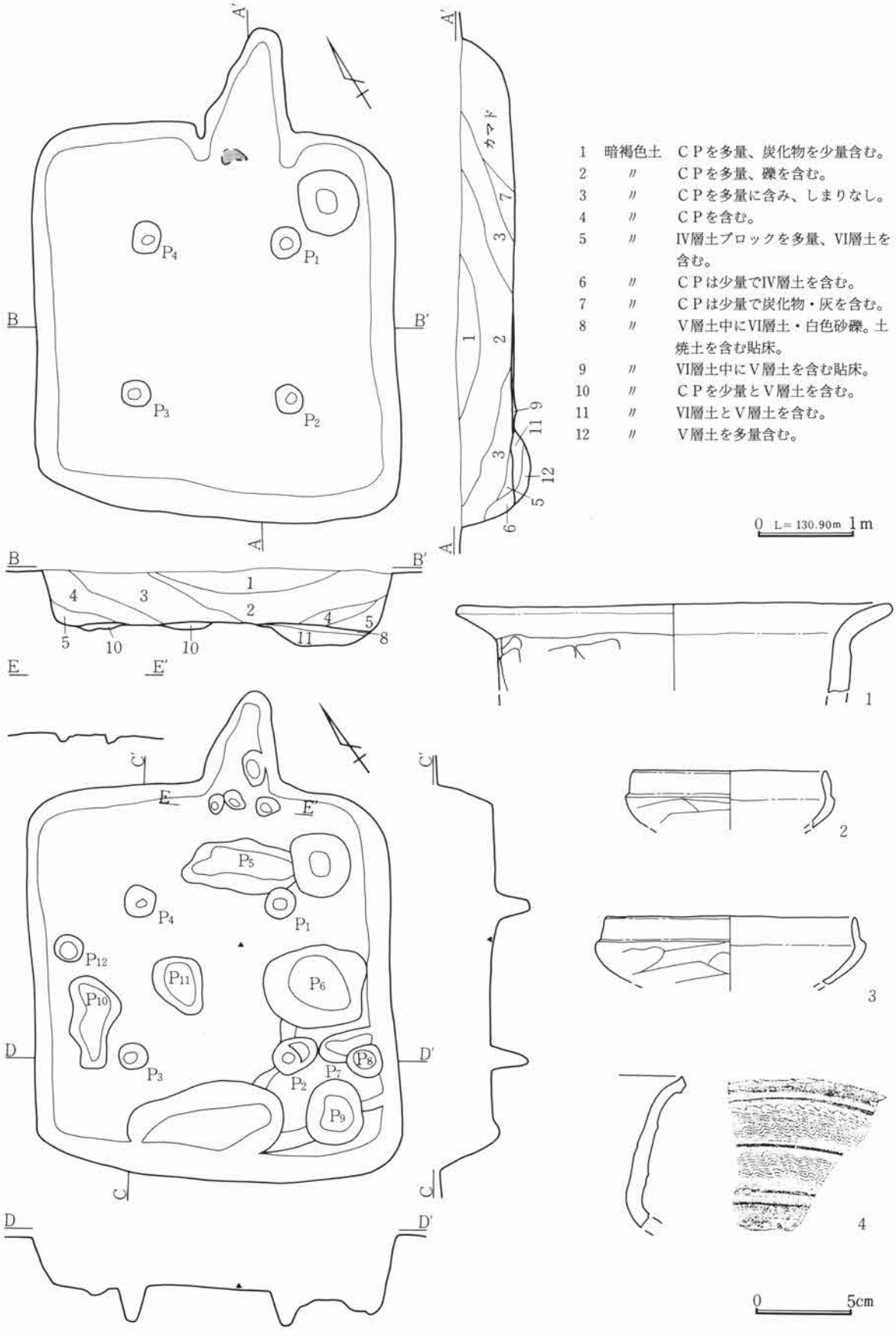
第266図　Ｈ区第103号住居跡出土遺物実測図

第102･103号住居跡は、西側路線際で確認されたもので大半は未調査である。北側では第109号住居跡と重複している。この前後関係は、遺構確認状態及びセクション面の観察によって、109号住→102号住であることがわかった。第102・103号住居跡は東壁が同一線上に一致しており、一軒であるかのようにみえるが、セクション面の観察から、第102号住居跡が第103号住居跡カマドのすぐ北側に南壁を有し、カマドを他の壁に構築したと考えられる非常に小型の住居跡であることがわかった。

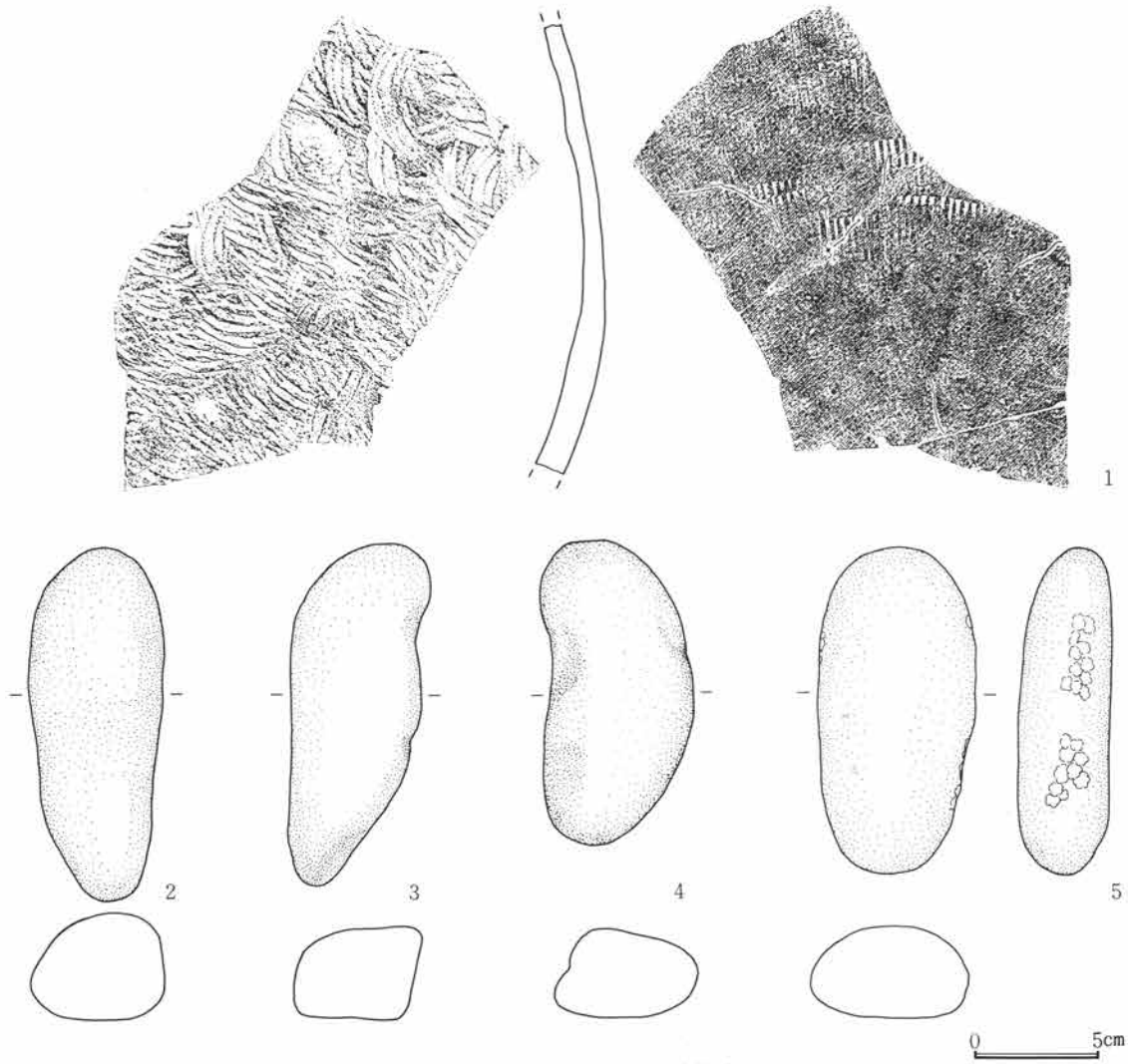
遺物は、第102号住居跡は南東コーナー部の貯蔵穴と考えられる部分から出土し、第103号住居跡は、カマド部分に集中して出土した。どちらの住居跡から出土した遺物も羽釜主体であり、この遺物から時間差を見いだすことはできなかった。

遺構名称	Ｈ区第104号住居跡		位置	42～45―Ｈ―76～78グリッド内		分類	Ａ―11	時期	II
平面形態	隅丸方形	規模	4.30m×4.20m	主軸方位	東―41度―北		残存深度	約55cm程	
備考	北東コーナー部及び東～北壁が曖昧で掘り過ぎ、全体形がうまく促らえられていない。掘り方で土坑等が多く検出されたが、柱穴は４本、貯蔵穴は南東コーナー部より検出された。								
カマド	位置形状	東壁南寄り			分類	Ｃ―１	主軸方位	東―31度―北	
規模	全長145cm・屋外長75cm・屋内長70cm・袖間幅130cm・燃焼部幅70cm・煙道幅20cm								
備考	焚口から煙道にかけゆるい傾斜を有している。灰面は焚口のごく一部にみられ、焼土は検出されていない。袖は掘り残し状であるが、掘り方時円形ピットが検出されており、構築材使用の可能性有。								

当住居跡は、調査区の北西部に位置し、第105･108号住居跡等と接近しているが、重複は全く見られない。床面精査段階で柱穴が４本（P_1～P_4）と東コーナー部に貯蔵穴を検出した。柱穴は、４本とも径約30cm、深度約40cmの円形であり、柱穴間距離も約170cmで一定である。その中でP_2はやや浅い円形ピットと重複しており、建て替えを示唆するものとも考えられるが、他の柱穴にはみられない。貯蔵穴は、円形で径約60cm、深度約53cmであり、中からまとまった遺物出土はみられなかった。掘り方段階で検出したピットにはP_5･P_6･P_9･P_{10}･P_{11}の径約60cm以上のものと、P_8･P_{12}のような径約40cm、深度約20cmの円形を呈するものがある。前者の中では、P_9が形態・規模・位置の点で貯蔵穴に近い機能が考えられ、後者は柱穴に近い規模・形態を有しているが柱穴との位置関係に法則性は認められない。



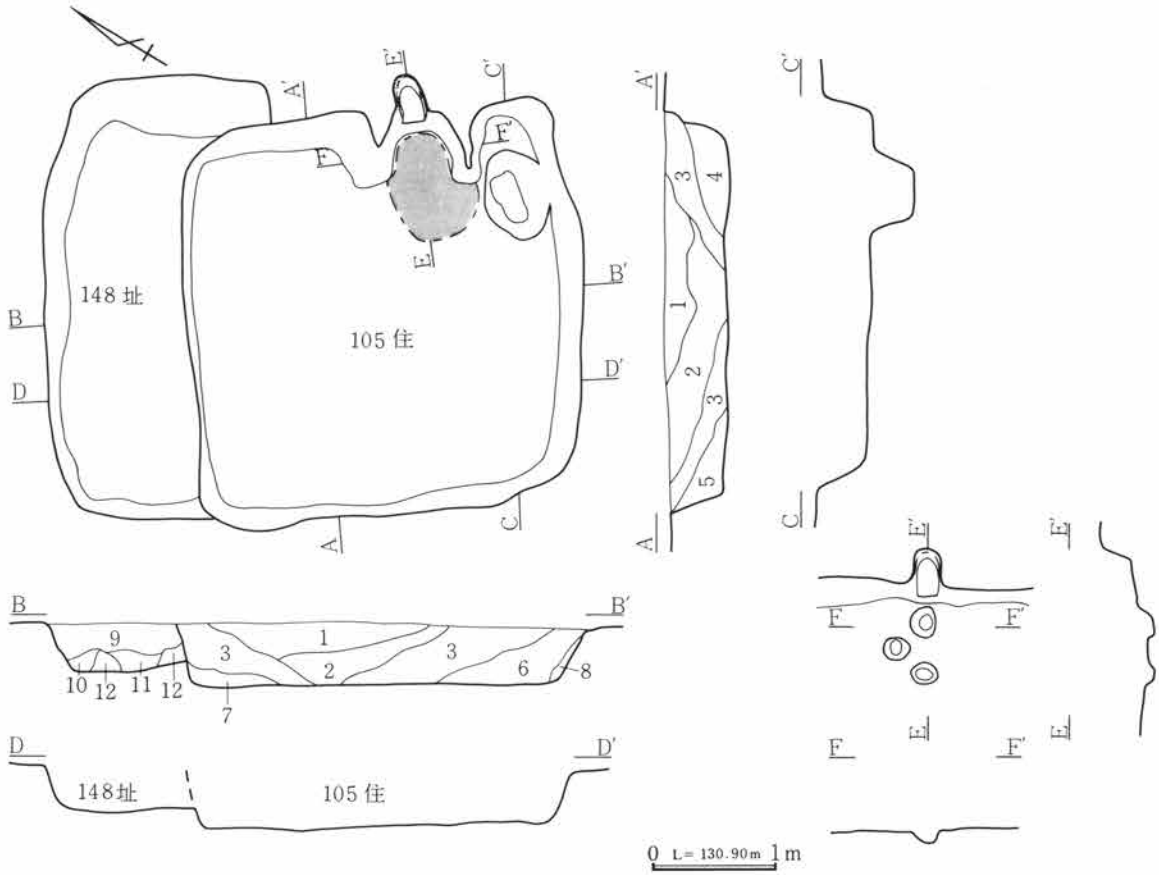
第267図　H区第104号住居跡・出土遺物実測図



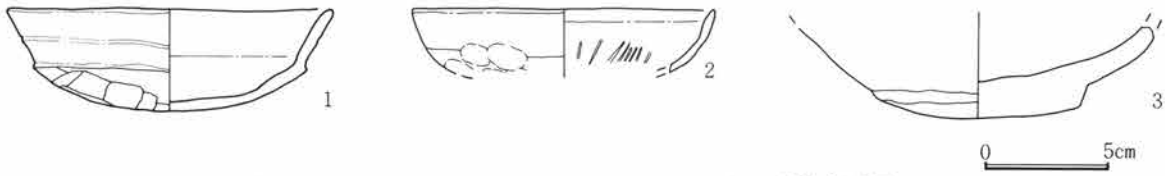
第268図　H区第104号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	H区第105号住居跡		位置	40～42－H－74～76グリッド内		分類	A－9	時期	III
平面形態	隅丸方形	規模	3.15m×3.15m	主軸方位	東－37度－北		残存深度	約48cm程	
備考	床面は平坦で貼床はみられない。壁溝・柱穴は全く検出されず、貯蔵穴は南東コーナー部やや屋内側に検出した。長軸約65cm、短軸約50cm、深度約34cmの長方形状である。								
カマド	位置形状	東壁中央やや南寄り			分類	B-2？	主軸方位	東－40度－北	
規模	全長85cm・屋外長30cm・屋内長55cm・袖間幅110cm・燃焼部幅40cm・煙道幅17cm								
備考	焚口・燃焼部共ほぼ平坦で一面に灰面を検出した。煙道は燃焼部から１段上って屋外に延び、両側とも焼土化していた。袖は両袖共暗褐色土で構築している。支脚は掘り方時円形の据え方を検出。								

遺構名称	H区第148号址		位置	41・42－H－75～77グリッド内		分類	—	時期	—
平面形態	隅丸方形？	規模	3.50m×　—　m	主軸方位	東－30度－北		残存深度	約34cm程	
備考	南側で105号住と重複し、105号住の掘り込みが深いことにより底面の大半は失われている。壁やコーナー部のあり方は非常に良好な状態で、住居である可能性がある。								



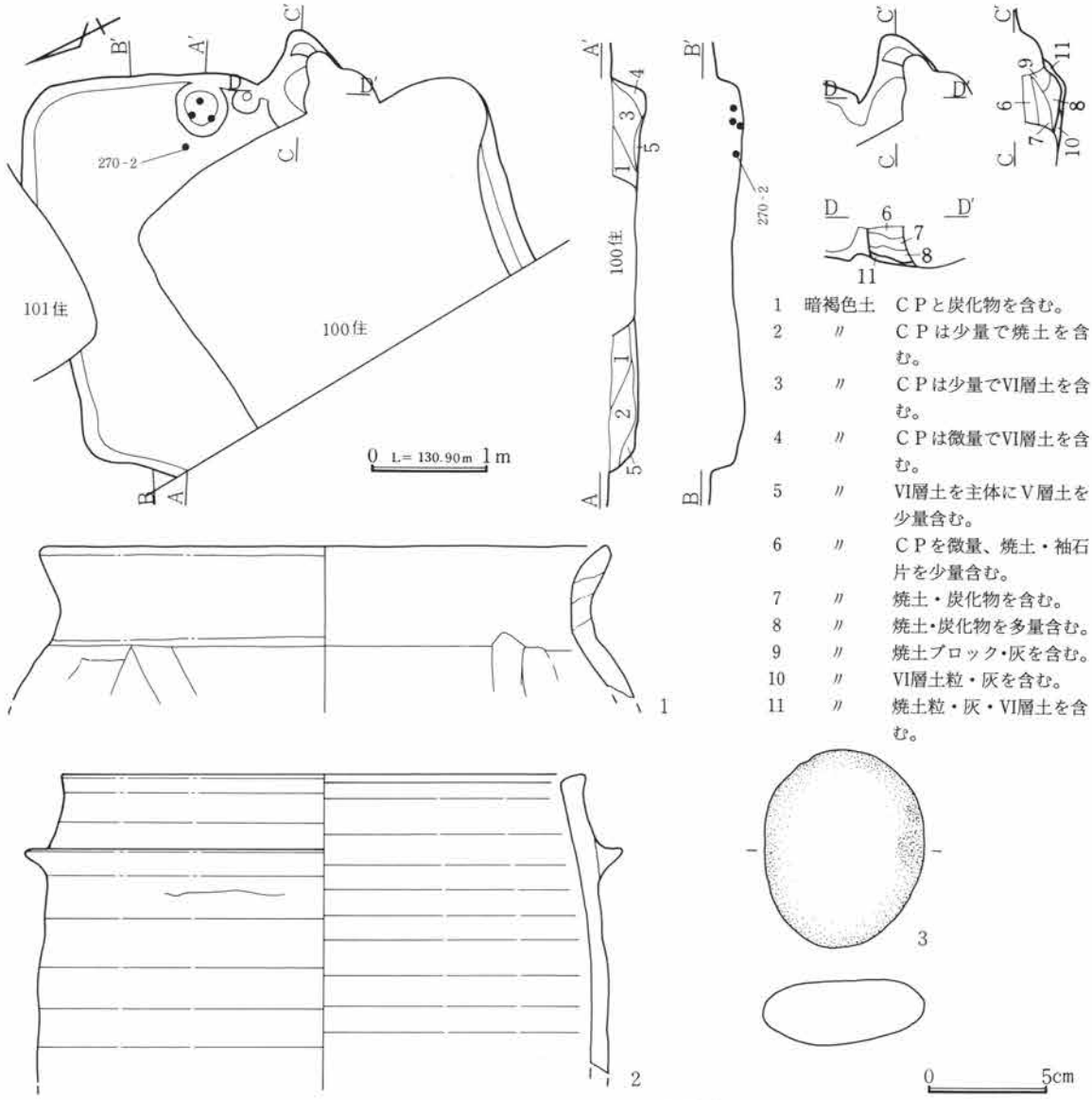
1	暗褐色土	ＣＰを少量含む。	7	暗褐色土	ＣＰを微量含み、Ⅵ層土は含まない。
2	〃	ＣＰを多量、Ⅴ・Ⅵ層土を含む。	8	茶褐色土	Ⅵ層土主体で粘性を持ち、Ⅴ層土を少量含む。
3	〃	ＣＰを多量、Ⅴ・Ⅵ層土を微量含む。	9	暗褐色土	ＣＰとⅥ層土細粒を少量含む。
4	〃	ＣＰと礫を少量、Ⅵ層土を多量含む。	10	〃	ＣＰは微量でⅤ・Ⅵ層土を含む。
5	〃	Ⅵ層土ブロックを多量、ＣＰと焼土を含む。	11	〃	ＣＰを微量含む。
6	〃	ＣＰ・Ⅵ層土・礫を少量含む。	12	〃	ＣＰは微量でⅤ層土を含む。



第269図　H区第105号住居跡・第148号址・出土遺物実測図

当住居跡は第104号住居跡と第121号住居跡の間に位置し、第148号址と重複している。この前後関係は、セクション面の観察から、148号址→105号住であることがわかった。第148号址は、南西壁の一部を第105号住居跡と共通する隅丸長方形の遺構であることが考えられ、壁・底面の状態は住居跡的であるが、カマドが付設された可能性が薄いことなどから、一応址として扱っておく。

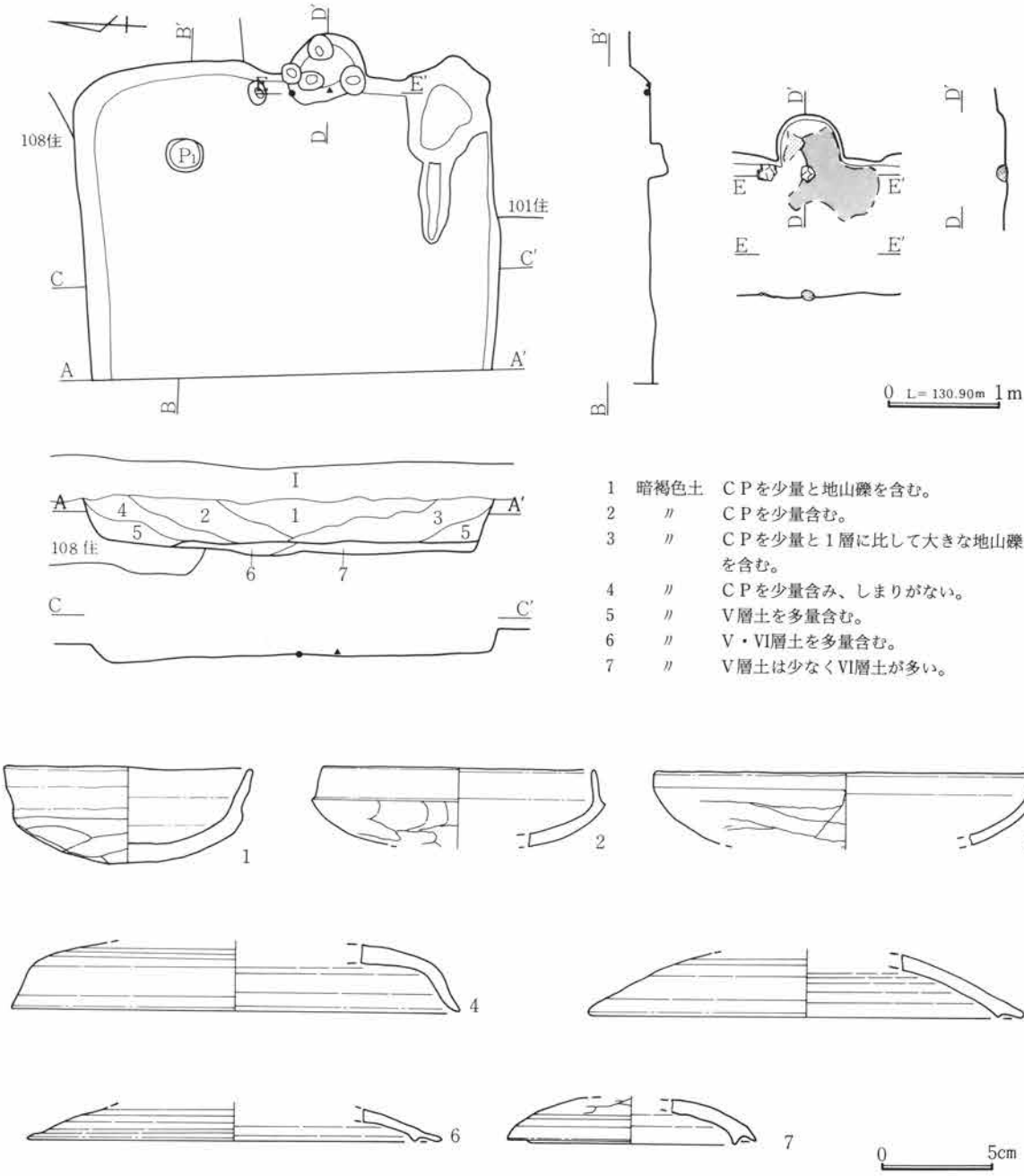
遺構名称	H区第106号住居跡		位置	39・40—H—78・79グリッド内		分類	A—？	時期	X
平面形態	隅丸方形？	規模	3.40m× — m	主軸方位	東—24度—南	残存深度	約9cm程		
備考	壁溝・柱穴・貯蔵穴は検出されておらず、カマドも100号住のカマドによって大半が失われており全体像は不明である。								



第270図　Ｈ区第106号住居跡・出土遺物実測図

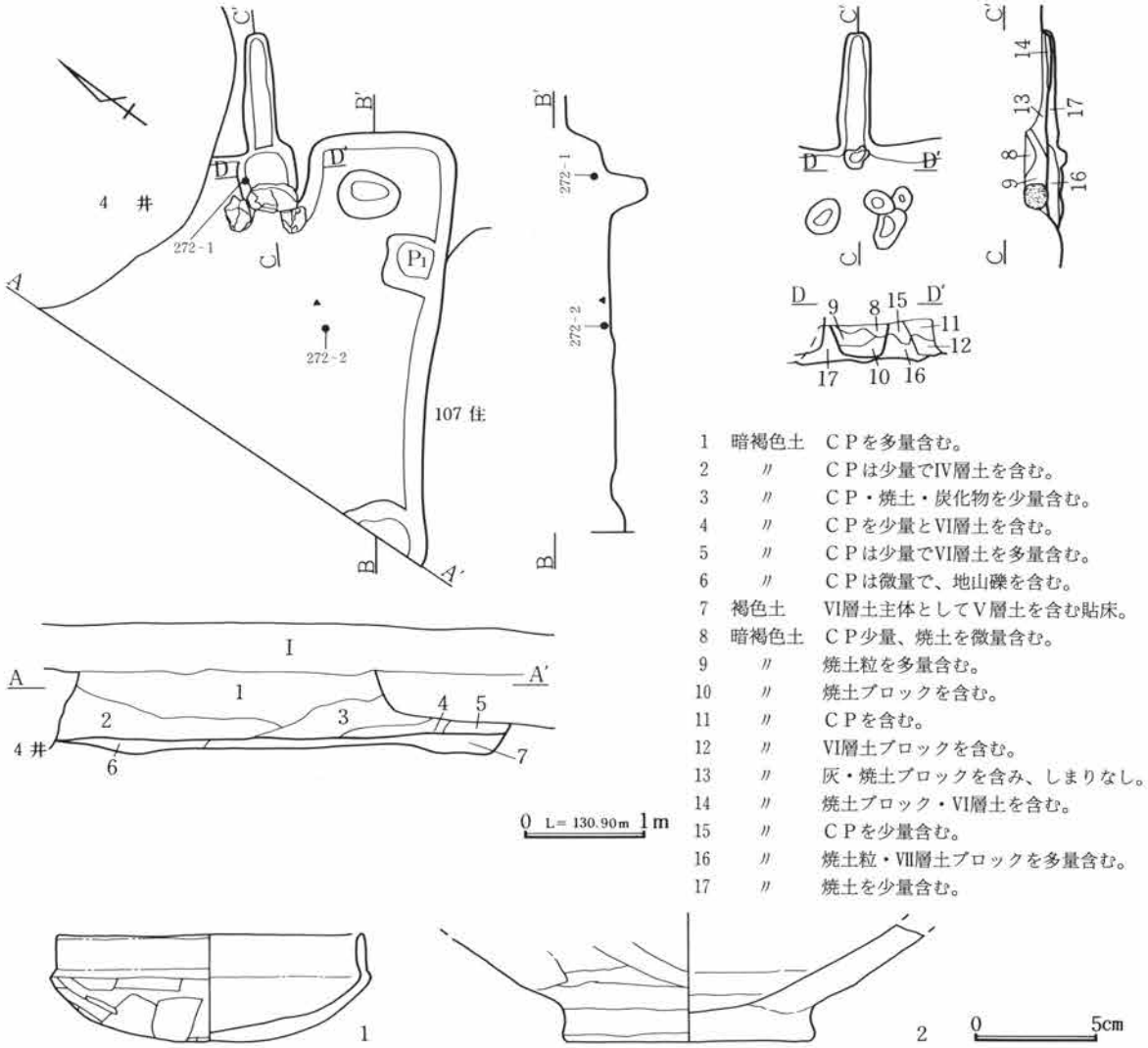
当住居跡は、第100・101号住居跡と重複している。前後関係は、遺構確認状態及びセクション面の観察から、106号住→100・101号住と考えられる。カマドは第100号住居跡との重複で、主体部分が失われており、形態等不明な点が多いが、主軸が南東方向であり他にあまり例をみないものである。

遺構名称	Ｈ区第107号住居跡	位置	41～43―Ｈ―78～80グリッド内		分類	Ｃ―？	時期	Ⅲ
平面形態	隅丸長方形？	規模	― m×3.75m	主軸方位	東―０度―北	残存深度	約45cm程	
備考	カマドを含む南東コーナー部は101号住によって切られている。北側で108号住を切っている。西側は一部調査区外にかかり未調査であるが、残存部で壁溝・柱穴は検出できなかった。							
カマド	位置形状	東壁中央わずかに南寄り		分類	Ｅ―？	主軸方位	東―０度―北	
規模	全長60cm・屋外長40cm・屋内長20cm・袖間幅75cm・燃焼部幅50cm・煙道幅―cm							
備考	101号住によって上面を削平されているため、検出したのは掘り方の一部である。焚口から燃焼部は円形の掘り方を有しており、袖部にピットが検出され、構築材の存在が予想される。							



第271図　H区第107号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	H区第108号住居跡		位置	42～44－H－78～80グリッド内		分類	A－？	時期	II
平面形態	隅丸方形？	規模	― m× ― m	主軸方位	東―39度―北		残存深度	約55cm程	
備考	西側の大半は調査区外で、検出部に壁溝・柱穴は未検出である。重複関係は108号住→107号住・4号井戸である。貯蔵穴は、南東コーナー部内側で、径約50cm、深度約33cmの楕円形である。								
カマド	位置形状	東壁南寄りに扁在すると思われる。			分類	B－2	主軸方位	東―42度―北	
規模	全長160cm・屋外長90cm・屋内長70cm・袖間幅65cm・燃焼部幅45cm・煙道幅20cm								
備考	袖は両袖共屋内に延び、先端部に礫を据え、上部に天井石をのせていたと考えられ、天井石は燃焼部の焼土を多量に含む層中に落下している。燃焼部底面には2～3cm厚の焼土ブロックの層を検出。								

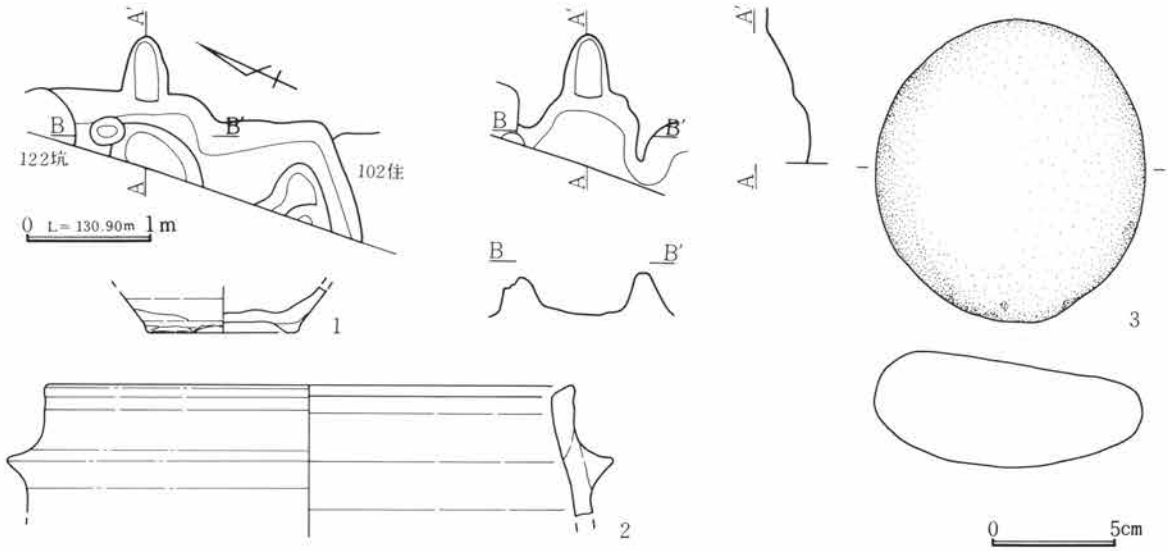


第272図　H区第108号住居跡・出土遺物実測図

当住居跡は、床面精査時に南東壁に接して２ヵ所に浅い掘り込みが検出されている。特に東コーナー部近くのものは一辺が約45cm、深度約５cmの平面方形で何らかの施設に伴うものと考えられるが、不明である。

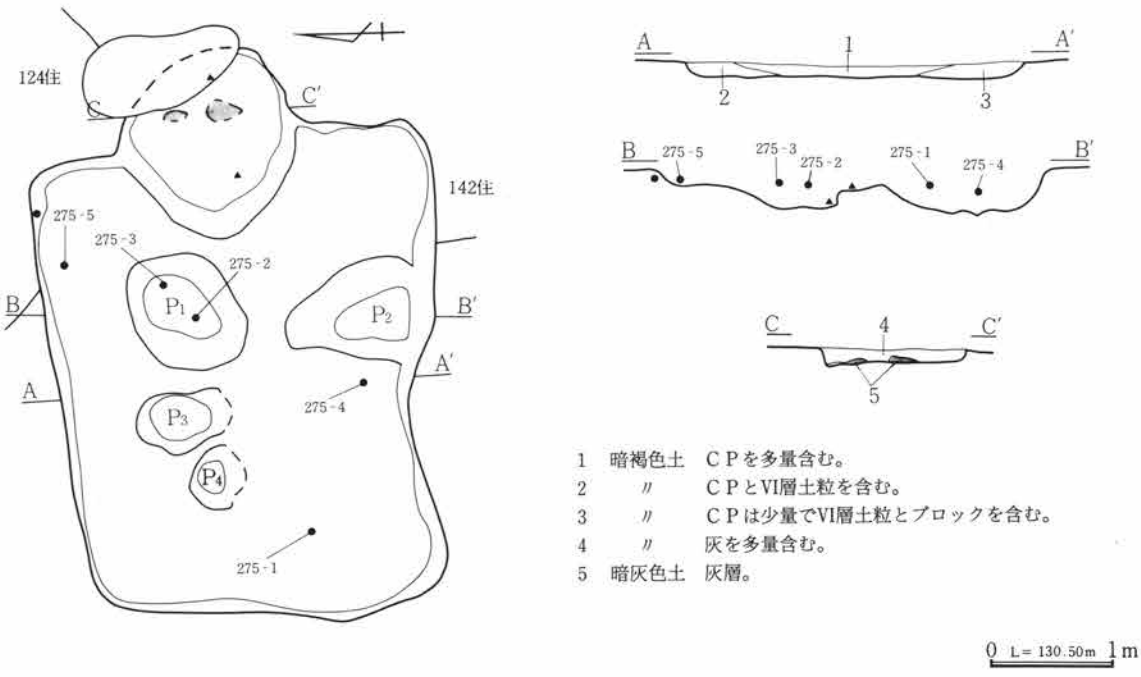
遺構名称	H区第109号住居跡		位置	35～37－H－79グリッド内		分類	A－？	時期	Ⅸ？
平面形態	隅丸方形？	規模	－m×－m	主軸方位	東－11度－北		残存深度	約36cm程	
備考	大半は調査区外で未調査である。南側は102号住に切られ、掘り方段階で壁溝として範囲を確定した。壁溝は幅約15cmで、深度は約３cm残存しているにすぎない。貯蔵穴は不明である。								
カマド	位置形状	東壁南寄りと考えられる。			分類	B－2	主軸方位	東－18度－北	
規模	全長100cm・屋外長50cm・屋内長50cm・袖間幅140cm・燃焼部幅60cm・煙道幅20cm								
備考	焚口部は未検出で、燃焼部は平坦で灰・焼土等は検出されていない。基本的には壁から煙道部を掘り込み、壁をそのままカマド奥壁として袖を造り出し、凸形に形成している。袖構築材は礫である。								

当住居跡は、第102号住居跡南側で重複している。前後関係は表中記載のとおり109号住→102号住であることは、セクション面の観察等で明らかである。また、北側は第122号土坑によって壁等が壊されており、ほとんどカマドのみ調査することができたものである。



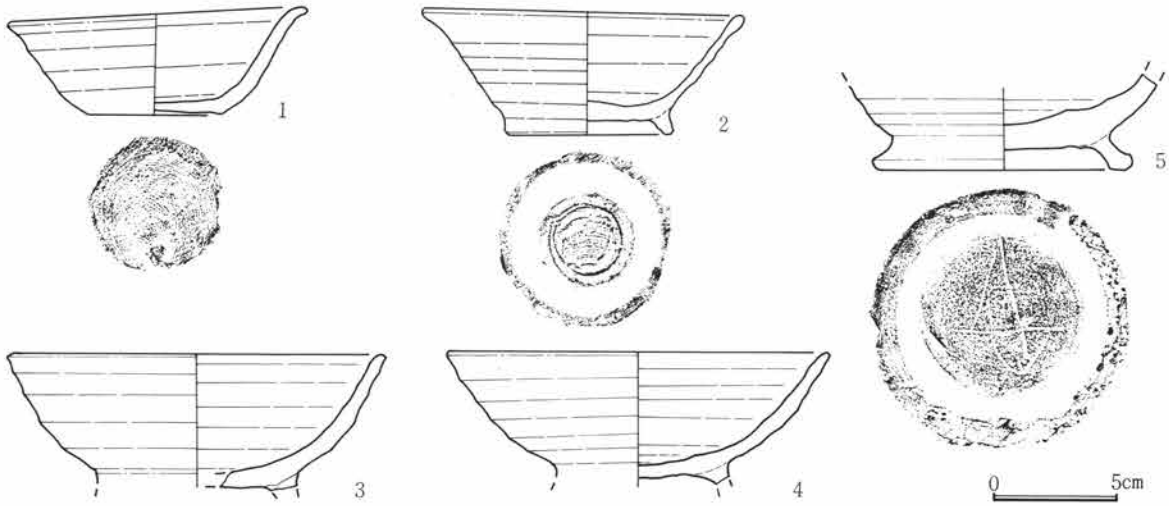
第273図　H区第109号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	H区第112号住居跡	位置	37・38—H—63～65グリッド内	分類	B—2	時期	X
平面形態	隅丸長方形	規模	3.95m×3.25m	主軸方位	東—4度—北	残存深度	約18cm程
備考	南壁は曖昧で若干内側に入り込み、住居全体形を不整なものにしている。掘り方においても壁溝・柱穴・貯蔵穴は検出されず、4基の床下土坑が検出されたが、性格は不明である。						
カマド	位置形状	東壁ほぼ中央		分類	C—1	主軸方位	東—？度—北
規模	全長—cm・屋外長—cm・屋内長—cm・袖間幅—cm・燃焼部幅—cm・煙道幅—cm						
備考	深度約4cmの不整円形の掘り方のみ残存している。先端部はピットによって切られているため、全体規模は捉らえられない。灰・焼土等も観察されず、袖構造等も不明である。						



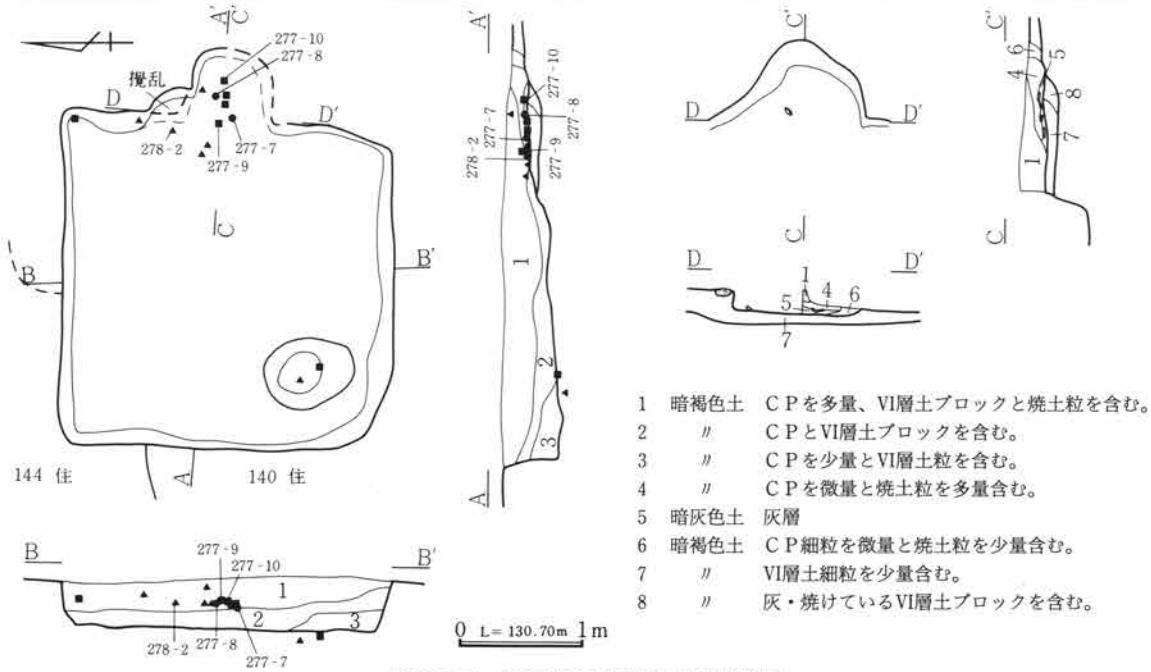
1　暗褐色土　CPを多量含む。
2　〃　CPとVI層土粒を含む。
3　〃　CPは少量でVI層土粒とブロックを含む。
4　〃　灰を多量含む。
5　暗灰色土　灰層。

第274図　H区第112号住居跡実測図



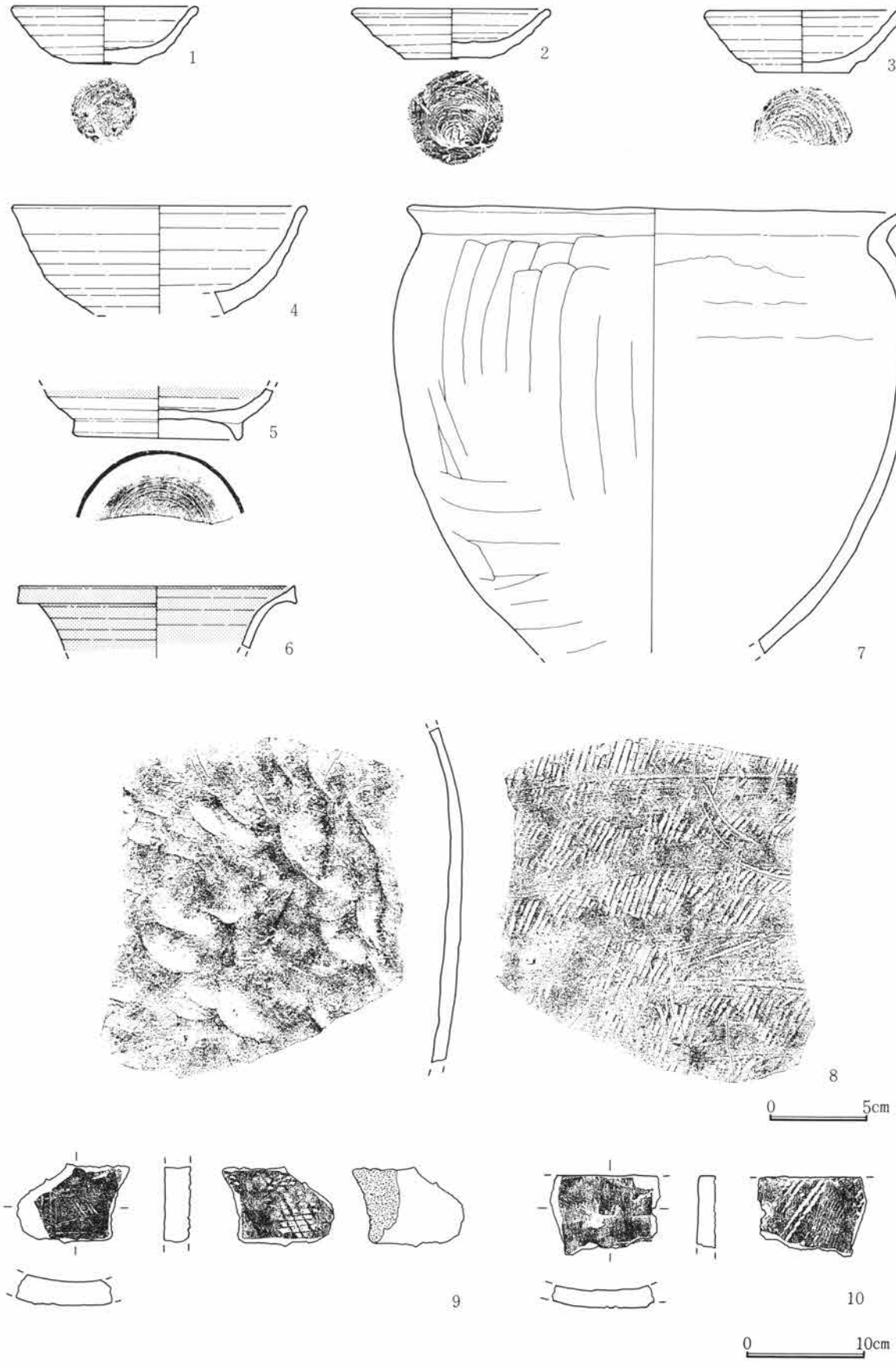
第275図　H区第112号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	H区第116号住居跡		位置	45・46－H－65～67グリッド内		分類	C－10	時期	X
平面形態	正方形	規模	2.60m×2.65m	主軸方位	東－２度－南		残存深度	約40cm程	
備考	床面はほぼ平坦で、壁溝・柱穴は検出されていない。貯蔵穴は南西コーナー部に検出した円形ピットと考えられ、規模は径約70cm、深度約16cmである。								
カマド	位置形状	東壁ほぼ中央			分類	C－1	主軸方位	東－ 4 度－南	
規模	全長―cm・屋外長―cm・屋内長―cm・袖間幅―cm・燃焼部幅―cm・煙道幅―cm								
備考	残存状態は極めて悪く、全体構造は捉えにくい。左側は底面付近まで攪乱で失っている。袖の構造材・支脚等は据え方も検出されていない。底面にわずかに灰層を検出した。								

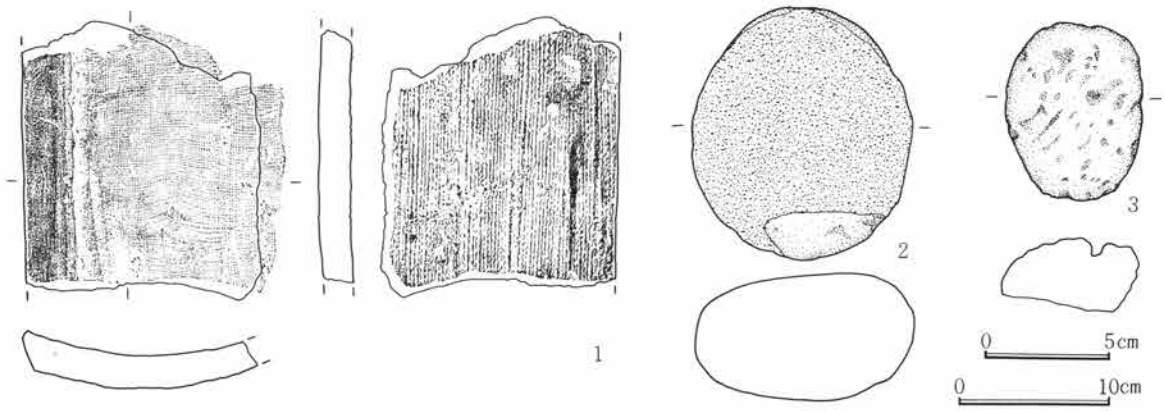


第276図　H区第116号住居跡実測図

当住居跡は、第135・140・144号住居跡と重複している。前後関係は、遺構確認状態から144号住→140号住→135号住→116号住と考えられる。

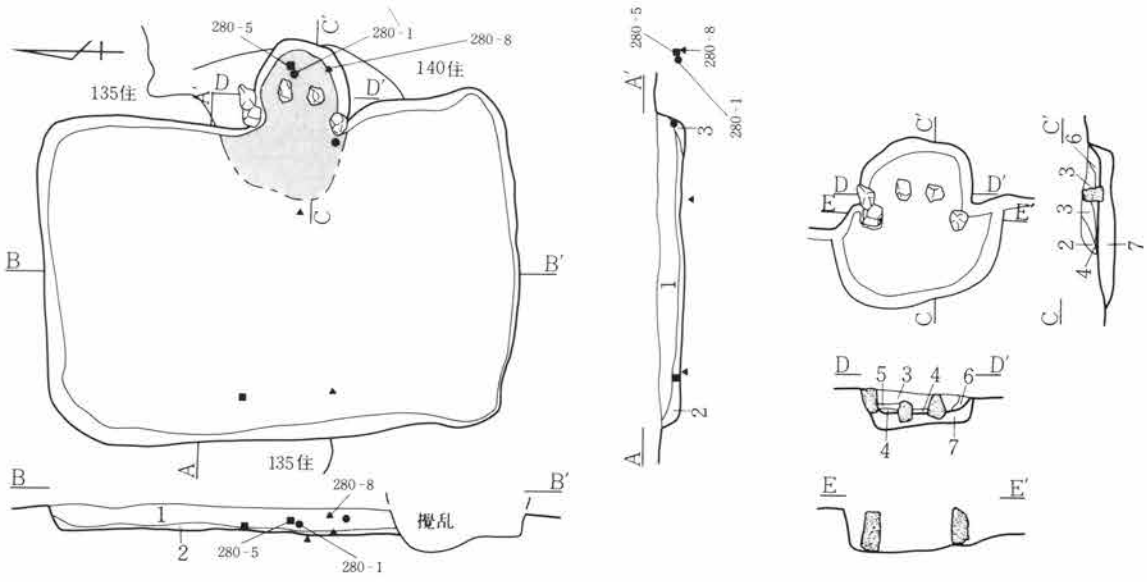


第277図　Ｈ区第116号住居跡出土遺物実測図



第278図　H区第116号住居跡出土遺物実測図

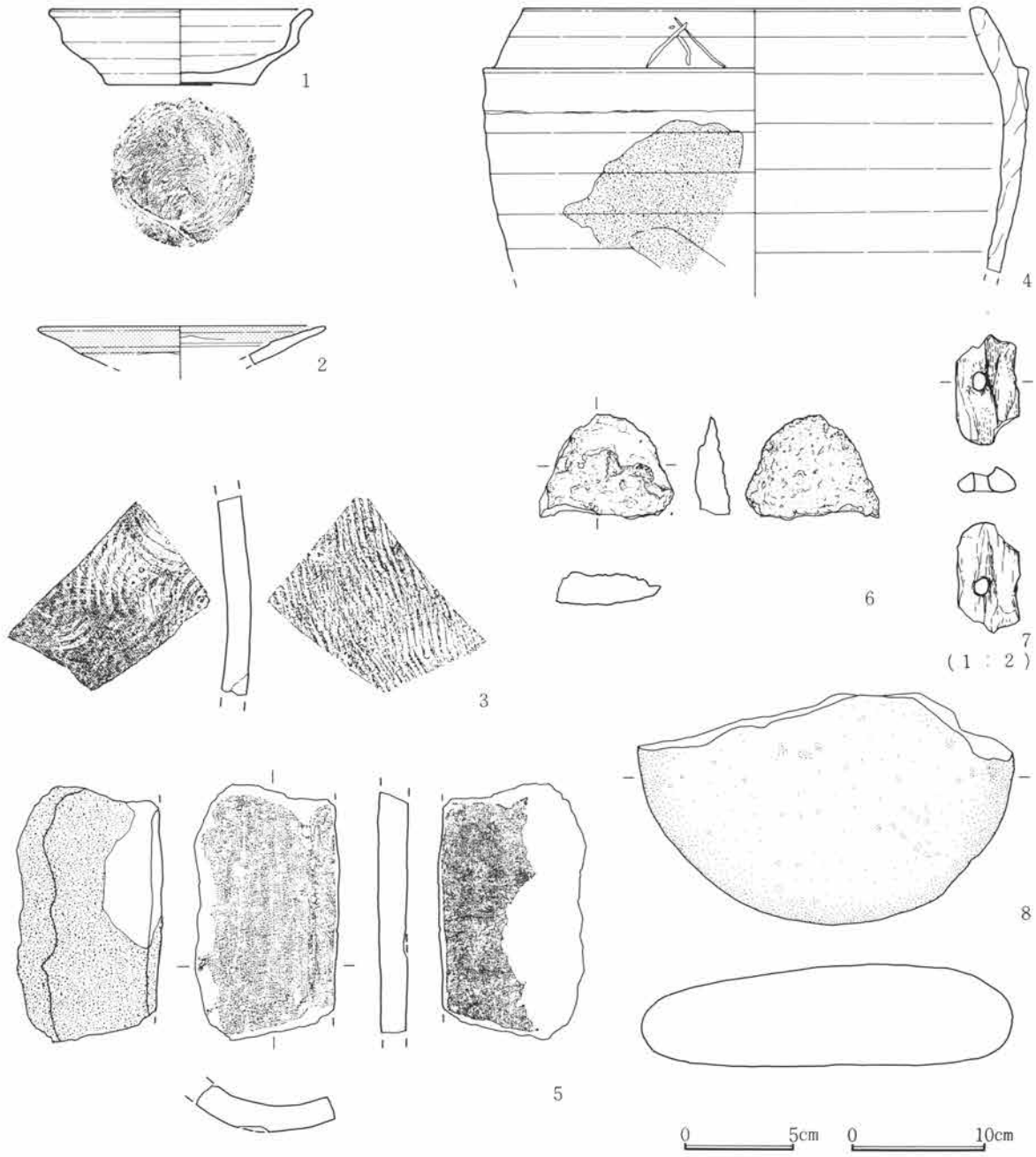
遺構名称	H区第117号住居跡	位置	42～44—H—65・66グリッド内	分類	C—2	時期	X
平面形態	隅丸長方形	規模	2.60m×3.75m	主軸方位	東—0度—北	残存深度	約20cm程
備考	北側で135号住と重複するが、検出時当住居跡のプランが確認されたことから135号住→117号住と考えられる。壁溝・柱穴・貯蔵穴はいずれも掘り方段階においても検出できなかった。						
カマド	位置形状	東壁中央わずかに南寄り		分類	E—3	主軸方位	東—2度—北
規模	全長135cm・屋外長50cm・屋内長85cm・袖間幅85cm・燃焼部幅70cm・煙道幅—cm						
備考	焚口は深度約10cmの半円形状掘り方を有し、上面に燃焼部まで続く一面の灰面を検出。袖は壁との連結部に礫及び截石を据えて構築し、支脚は、燃焼部中央に２個の石が併列して据えられていた。						



1　暗褐色土　ＣＰ・Ⅵ層土粒・焼土粒を含む。
2　〃　ＣＰを多く含む。
3　〃　ＣＰを少量含む。
4　暗灰色土　灰層
5　暗褐色土　ＣＰと焼土粒を少量含む。
6　〃　２層に近似。
7　〃　ＣＰとⅥ層土粒を少量含む。

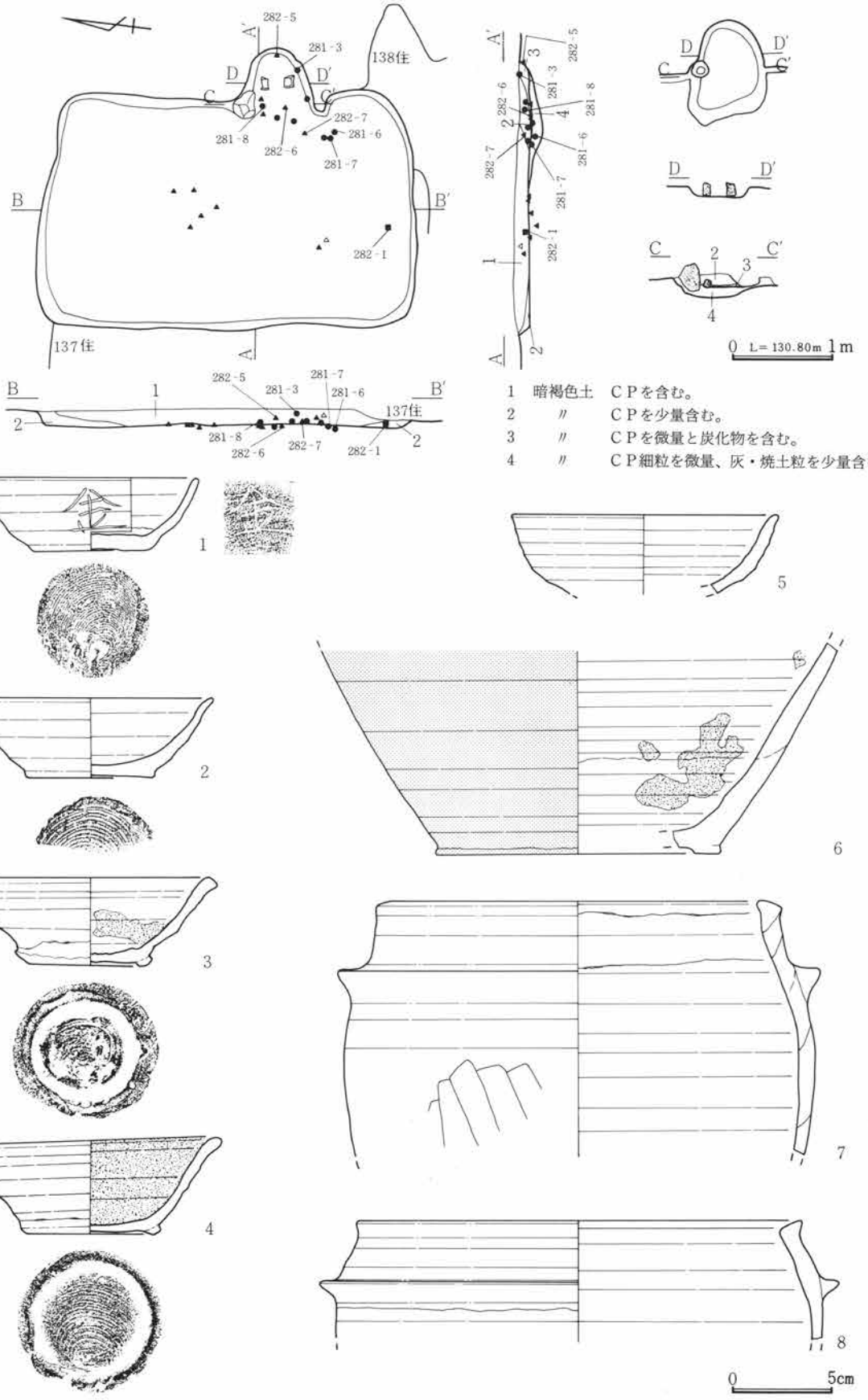
第279図　H区第117号住居跡実測図

当住居跡出土遺物中第280図—６は、鉄分を顕著に含んでおり、その形態的特徴から椀形鉱滓と考えられる。当調査区ではこの一例だけの出土である。しかし当住居跡には鍛冶的な施設はみられず、遺物も鍛冶的遺構に顕著に伴うようなものを全く出土していない。このことは重複する住居跡でも同様である。

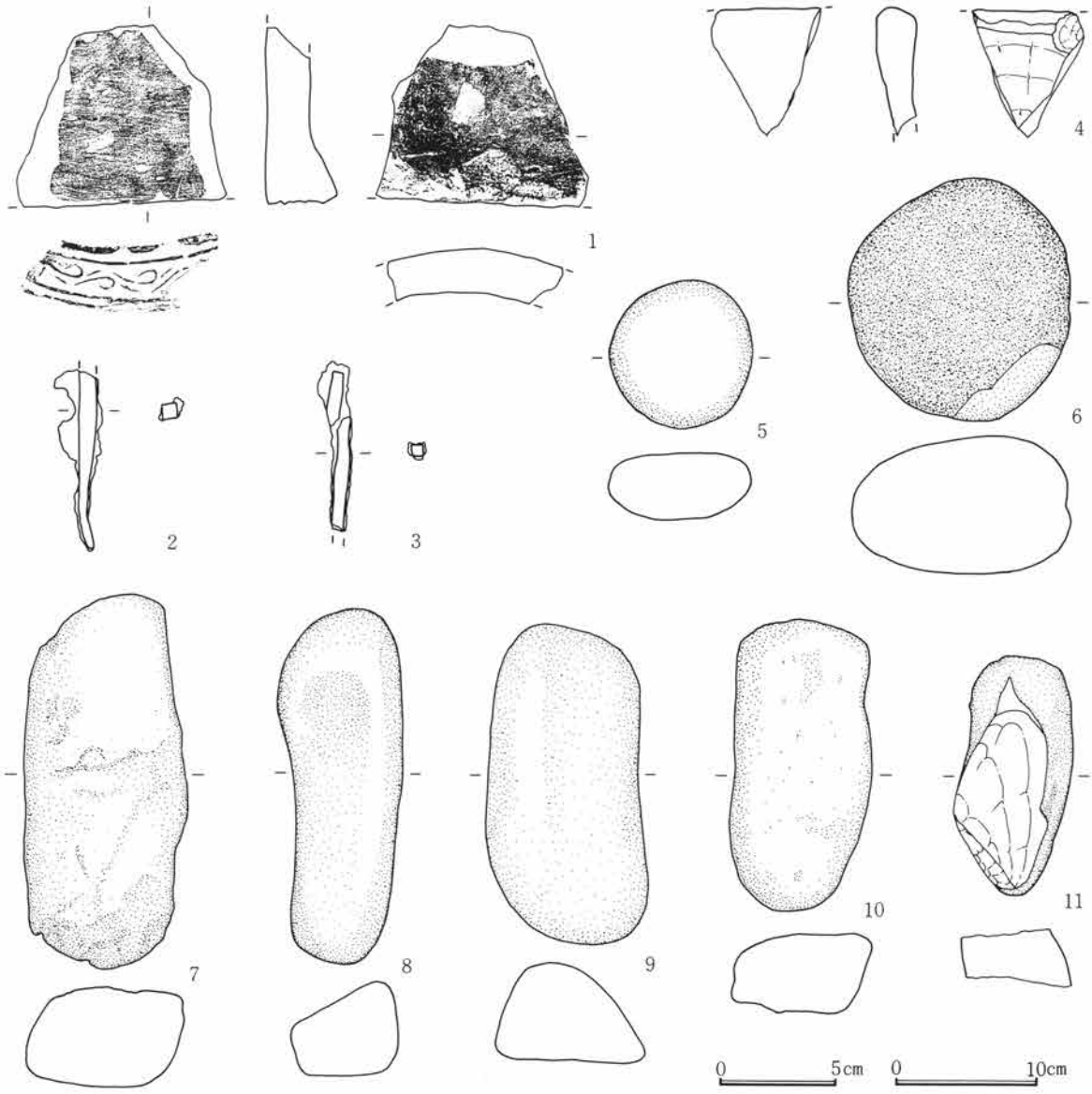


第280図　Ｈ区第117号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	Ｈ区第118号住居跡		位置	43～45―Ｈ―69・70グリッド内		分類	Ｃ―10	時期	Ｘ
平面形態	隅丸長方形	規模	2.30m×3.75m	主軸方位	東－８度―北		残存深度	約15cm程	
備考	137号住と重複するが、当住居が先行し確認できたことにより、138号住・137号住→118号住と考えられる。壁溝・柱穴・貯蔵穴は全く検出されていない。								
カマド	位置形状	東壁南寄り			分類	Ｃ－１	主軸方位	東－８度―北	
規模	全長95cm・屋外長45cm・屋内長50cm・袖間幅95cm・燃焼部幅50cm・煙道幅―cm								
備考	焚口から燃焼部は10cm程の浅い掘り方を有している。灰面・焼土面は全く検出されていない。袖は左袖のみ礫が検出されたが、右袖も同様であったと考えられる。支脚は角礫が併列に据えられていた。								



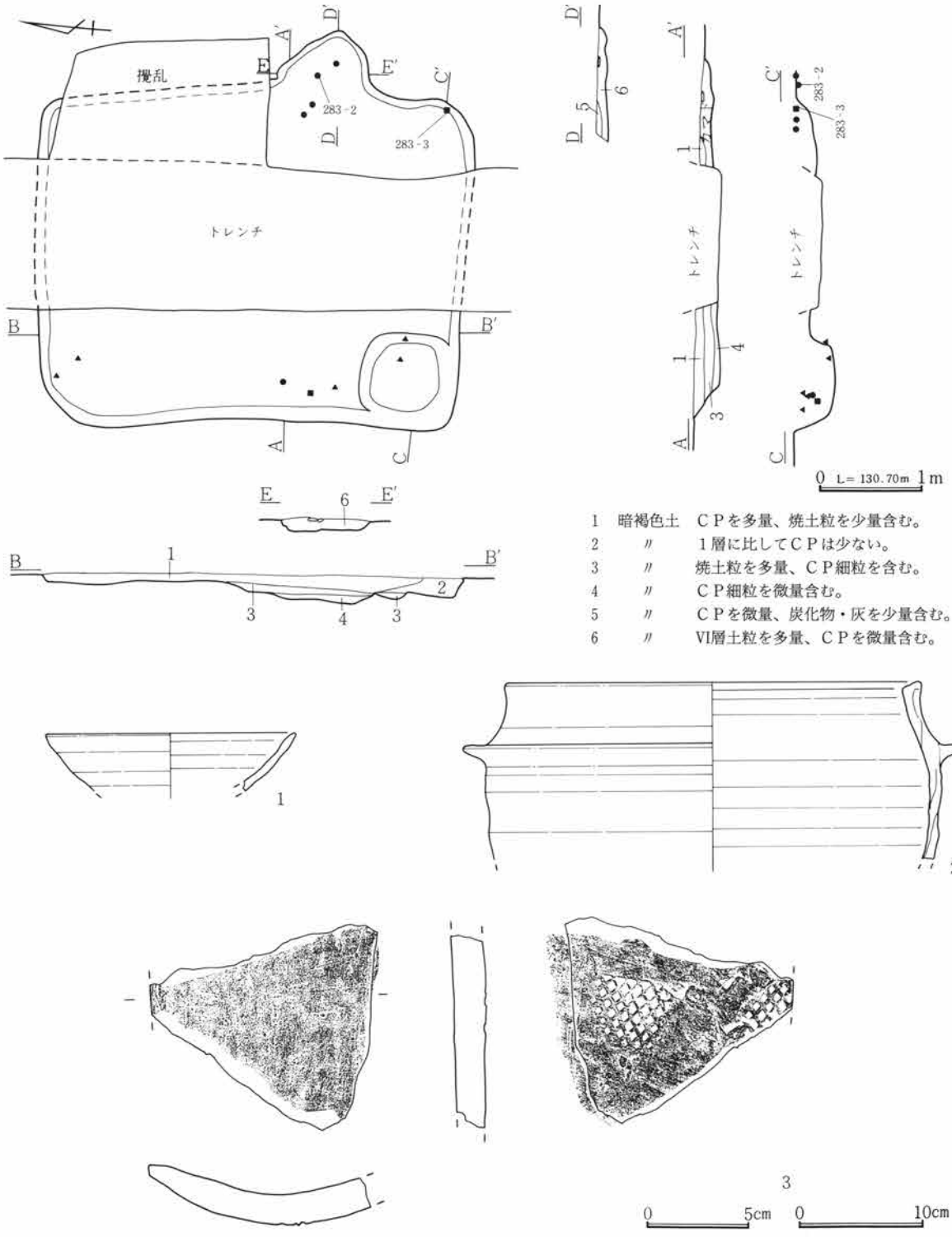
第281図　H区第118号住居跡・出土遺物実測図



第282図　Ｈ区第118号住居跡出土遺物実測図

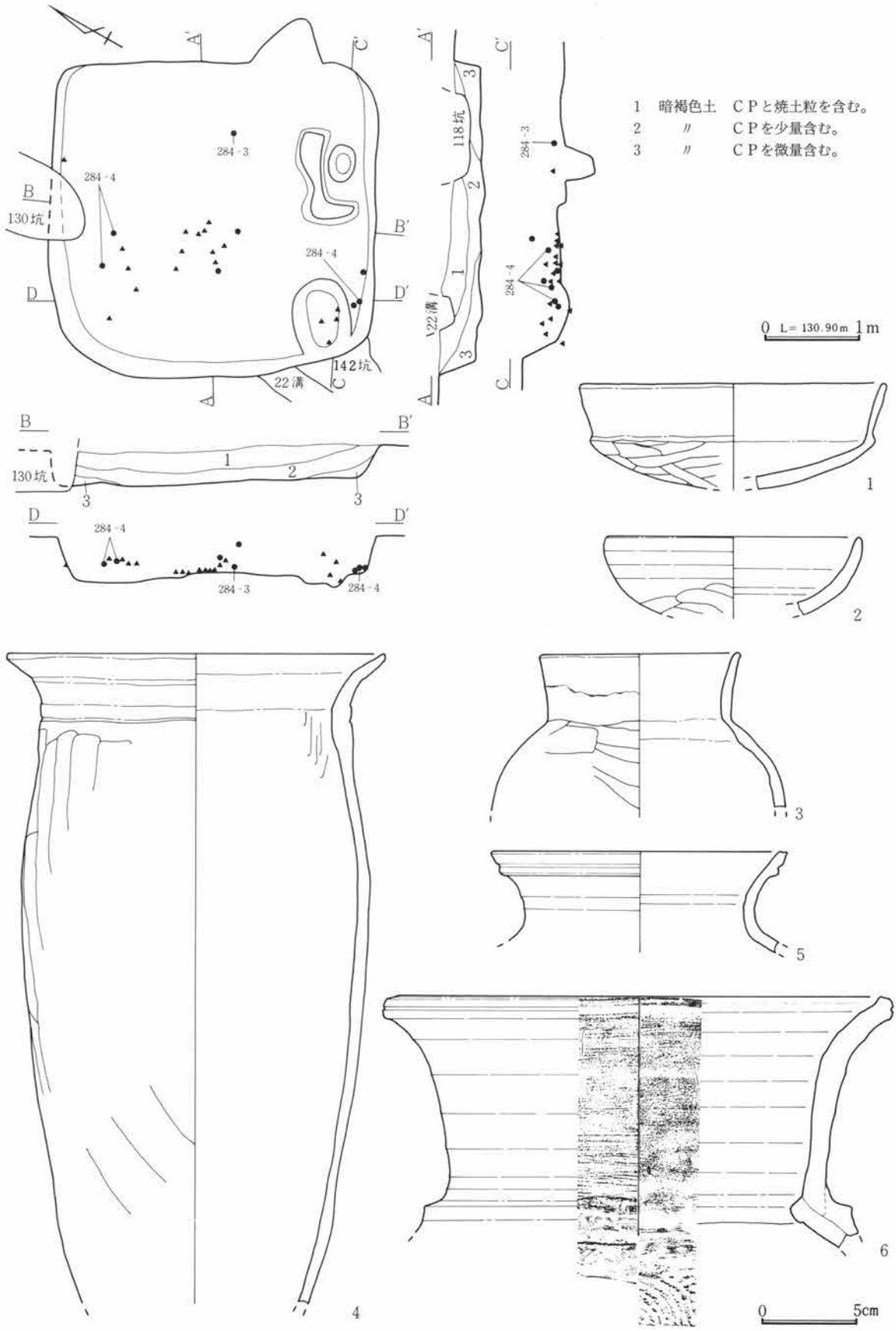
当住居跡は第137・138号住居跡とほぼ完全に重複しており、床面は前出の住居跡覆土中に構築されていることから、つかみにくく遺物の出土レベル及びカマドの使用面を元に捉えた。遺物は、カマド周辺及び床面中央から出土した他、覆土中から多く出土した。

遺構名称	Ｈ区第119号住居跡		位置	37～39―Ｈ―67～69グリッド内		分類	Ｃ―11	時期	Ⅹ
平面形態	隅丸長方形	規模	3.15m×4.20m	主軸方位	東―４度―北		残存深度	約20cm程	
備考	他住居と重複しない数少ない例であるが、中央部を試掘トレンチによって失っている。壁溝・柱穴は検出されず、貯蔵穴は南西コーナー部に検出され、一辺約90cm、深度約20cmの隅丸方形を呈する。								
カマド	位置形状	東壁南寄り			分類	Ｃ－１	主軸方位	東―５度―南	
規模	全長60cm・屋外長60cm・屋内長０cm・袖間幅―cm・燃焼部幅75cm・煙道幅―cm								
備考	残存状態は不良で、構造を明確に捉えることはできない。燃焼部・焚口共に灰・焼土等はほとんどみられず、袖材及び支脚は痕跡も残っていない。								



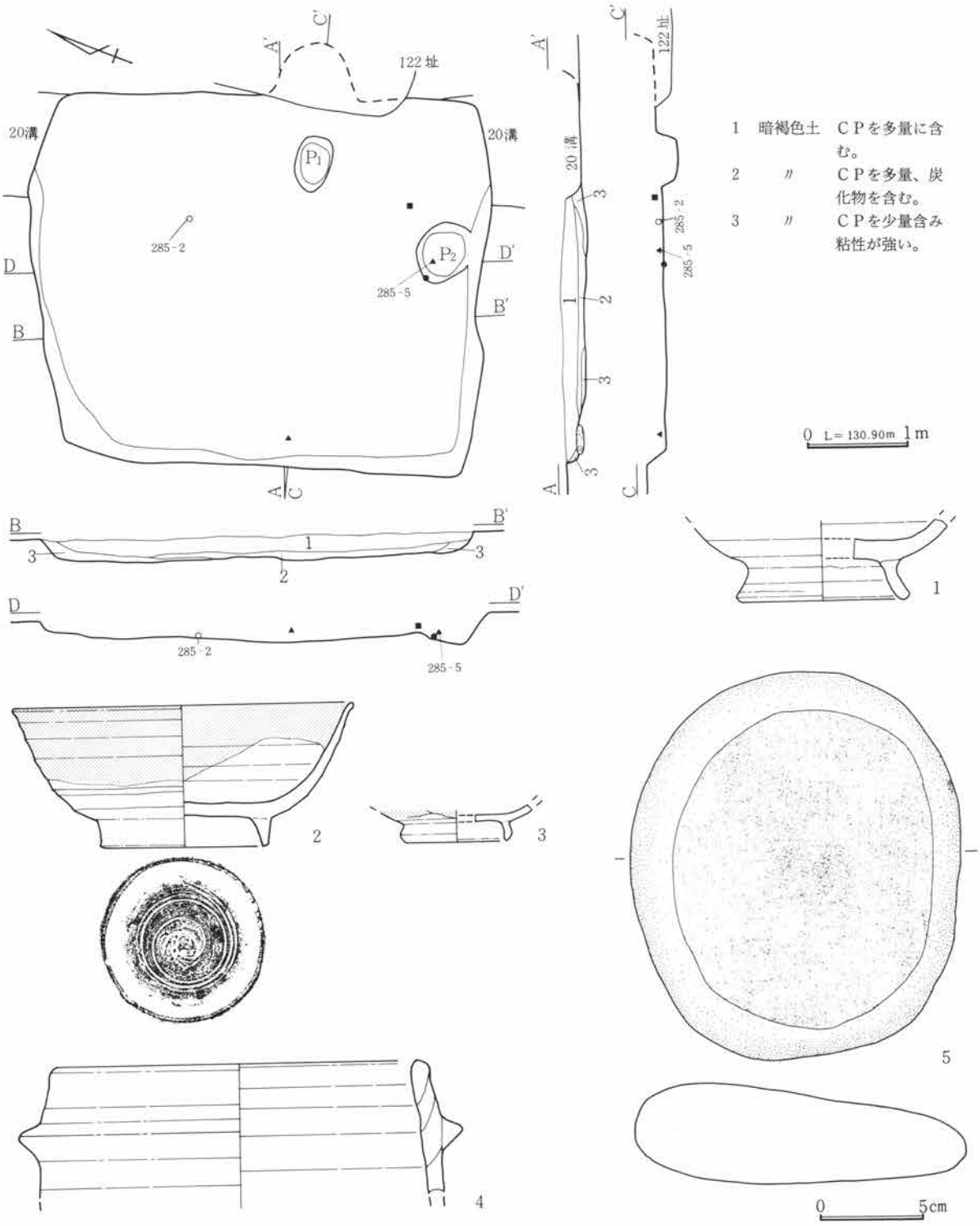
第283図　Ｈ区第119号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	Ｈ区第120号住居跡	位置	39～41－Ｈ－69～71グリッド内	分類	Ａ－？	時期	Ⅲ？
平面形態	隅丸方形？	規模	－ｍ×3.40m	主軸方位	東－34度－北	残存深度	約40cm程
備考	カマドを含む東側は攪乱によって完全に失われ、痕跡もみられない。残存部において、壁溝・柱穴は検出されていない。貯蔵穴は南西コーナー部で、径約60cm、深度約８cmの楕円形プランである。						



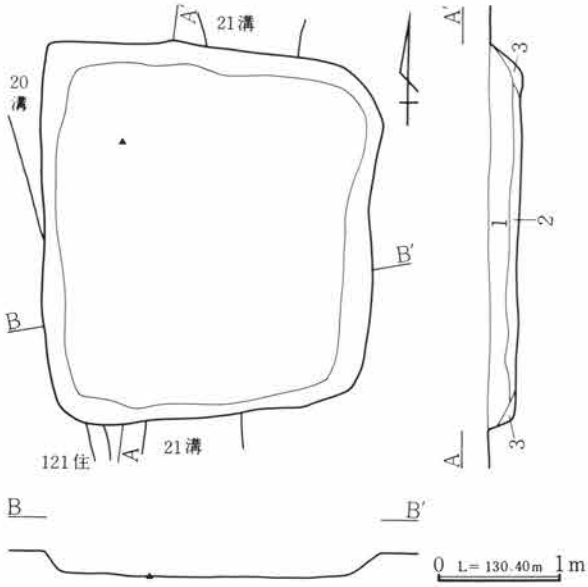
第284図　H区第120号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	H区第121号住居跡	位置	40～42—H—72～74グリッド内	分類	A—？	時期	X
平面形態	隅丸方形？	規模	— m×4.30m	主軸方位	東—14度—北	残存深度	約23cm程
備考	カマドは、20号溝及び122号址との重複によって失っている。壁溝・柱穴・貯蔵穴は検出されていない。南壁に接して検出された径約50cm、深度約12cmの円形ピットの性格は不明である。						



第285図　H区第121号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	H区第122号址		位置	40～42—H—71・72グリッド内		分類	—	時期	?
平面形態	隅丸方形	規模	2.65m×3.00m	主軸方位	東—1度—北	残存深度	約24cm程		
備考	西側で121号住と重複し、中央部を21号溝によって切られている。壁溝・柱穴等の他、カマドの痕跡も検出されていないことから、住居であるか不明である。								



1　暗褐色土　CPを多量、灰褐色小ブロックを少量含む。
2　〃　CP・VI層土ブロックを少量含む。
3　〃　CPを微量、白色粒を多量含む。

第286図　H区第122号址実測図

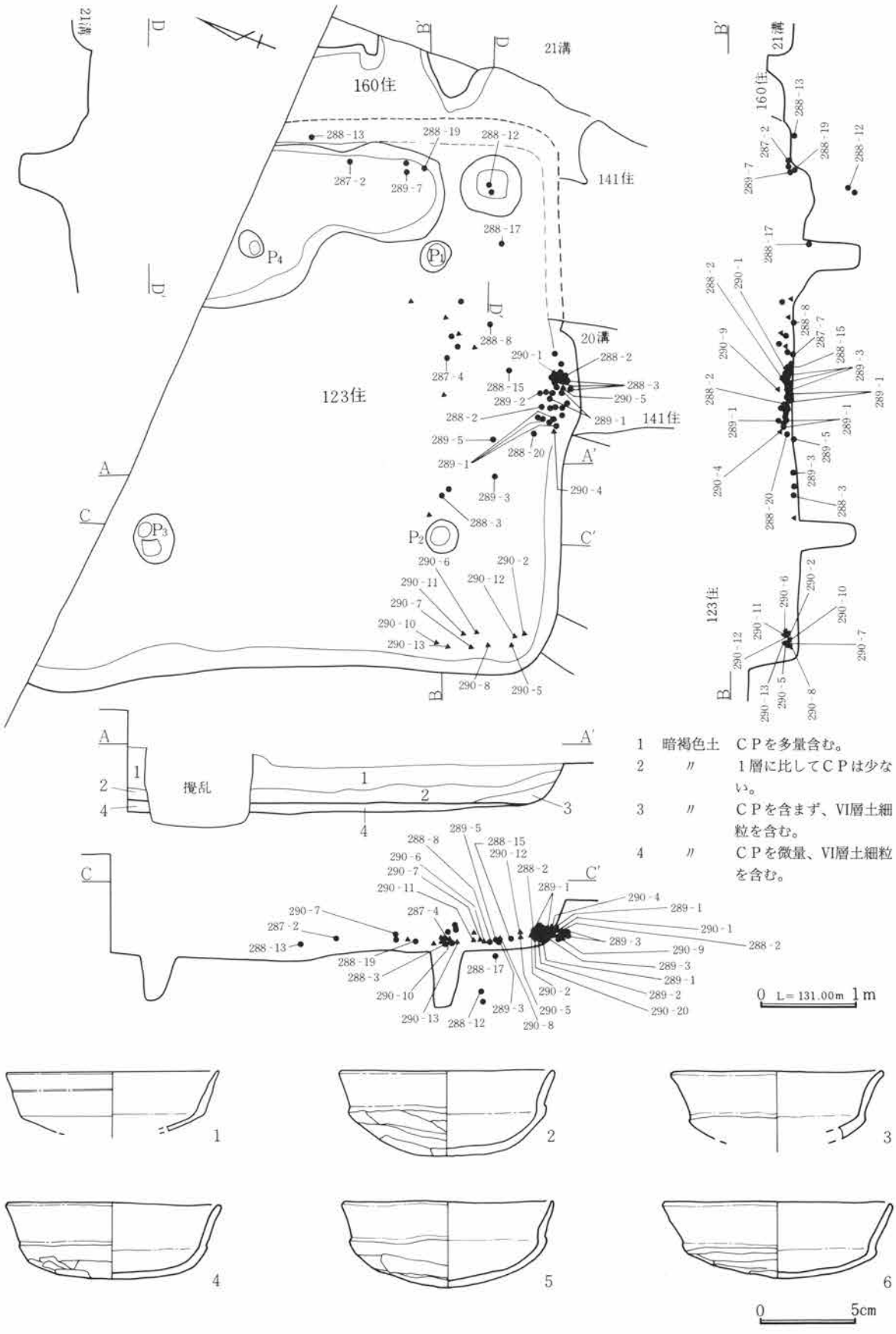
当址は第119・120号住居跡同様遺構空白部の外縁を形成している。西側は第121号住居跡と、東側は第138号住居跡と、中央部で第21号溝と重複している。この重複によって第121号住居跡のカマドは失われており、121号住→当址であることがわかる。また、中央を南北に縦断している第21号溝は中世段階の溝であることがわかっているので、当址→21号溝である。次に第138号住居跡との前後関係が問題となるが、ちょうど重複部が第21号溝によって攪乱され、セクションから判断することはできなかったが、遺構確認段階で当址の北東コーナー部が第138号住居跡に先行してプランの検出ができたことにより、138号住→当址と考えている。遺物は、底面近くから礫が出土しただけで、時期判定のできるようなものは皆無である。

以上当址が平安時代以前のものであることは確かであるが、その相対年代は不明である。

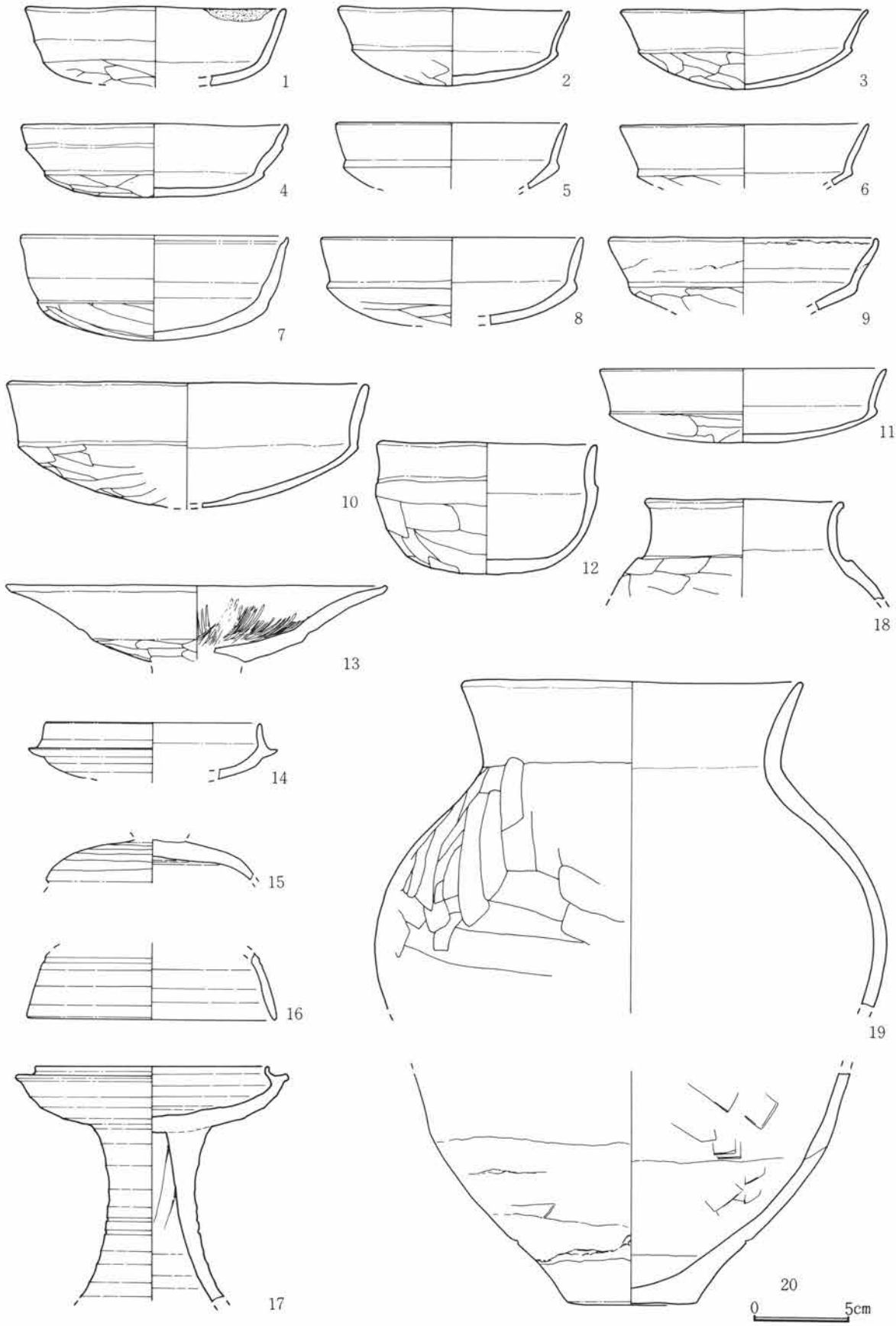
遺構名称	H区第123号住居跡		位置	44～46—H—72～76グリッド内		分類	A—?	時期	II
平面形態	隅丸方形?	規模	6.40m×— m	主軸方位	東—25度—北	残存深度	約48cm程		
備考	北半は山王線下にかかり未調査。壁溝は未検出で、柱穴は3本検出し、径約35cm、深度約57cmの円形プランである。貯蔵穴は東コーナー部円形で、径約60cm、深度約51cm。南壁中央部張り出す。								

遺構名称	H区第160号住居跡		位置	45・46—H—72～74グリッド内		分類	C—?	時期	VIII
平面形態	隅丸長方形?	規模	—m×—m	主軸方位	東—?度—北	残存深度	約30cm程		

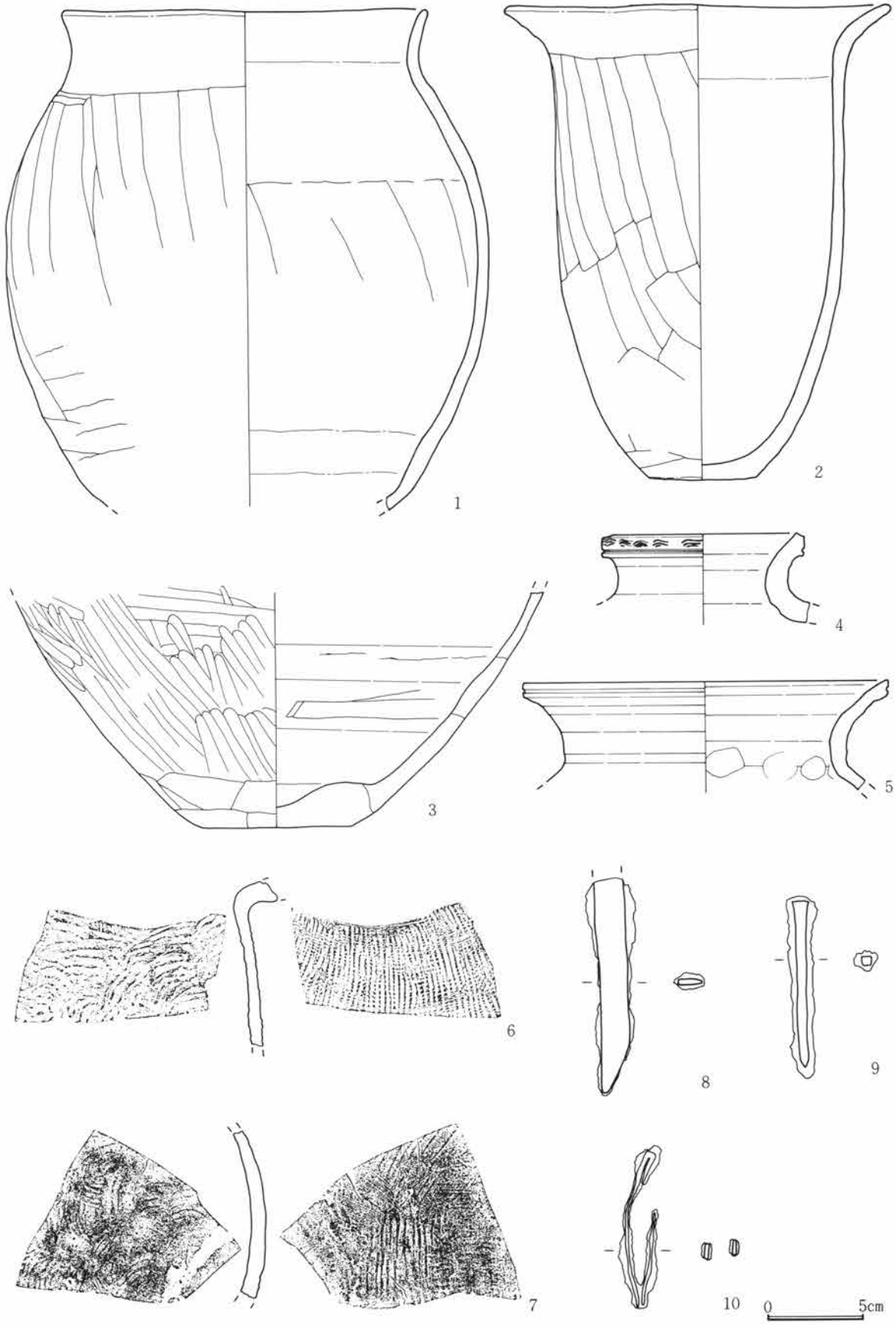
第123・160号住居跡は、当調査区北西側に位置し、路線を東西に横断する舗装道路下にかかるため、北半の調査は不可能であった。遺構確認段階では第123号住居跡と第160号住居跡のプランを分離できず、1軒として調査を開始した。しかし調査途中で、第160号住居跡の床面とカマドの使用面のレベル差が大きいこと及び、床面付近から主体的に出土する遺物と時期を異にする遺物がカマド付近から出土していることから2軒に分離し、カマドを有する方を第160号住居跡とした。両住居跡共に南東壁部で第141号住居跡と重複している。この前後関係について、遺構確認段階で第141号住居跡の北半のプランが検出できなかったため、先行する時期のものと考えていたが、遺物は明らかに第123号住居跡の主体を占める土器群より、後出の様相を有していることがわかる。これらのことから第160号住居跡によって第141号住居跡の北半が失われていることが考えられる。したがって3軒の重複関係は、123号住→141号住→160号住である可能性が高い。これは遺物の上からもほぼ矛盾はきたさない。



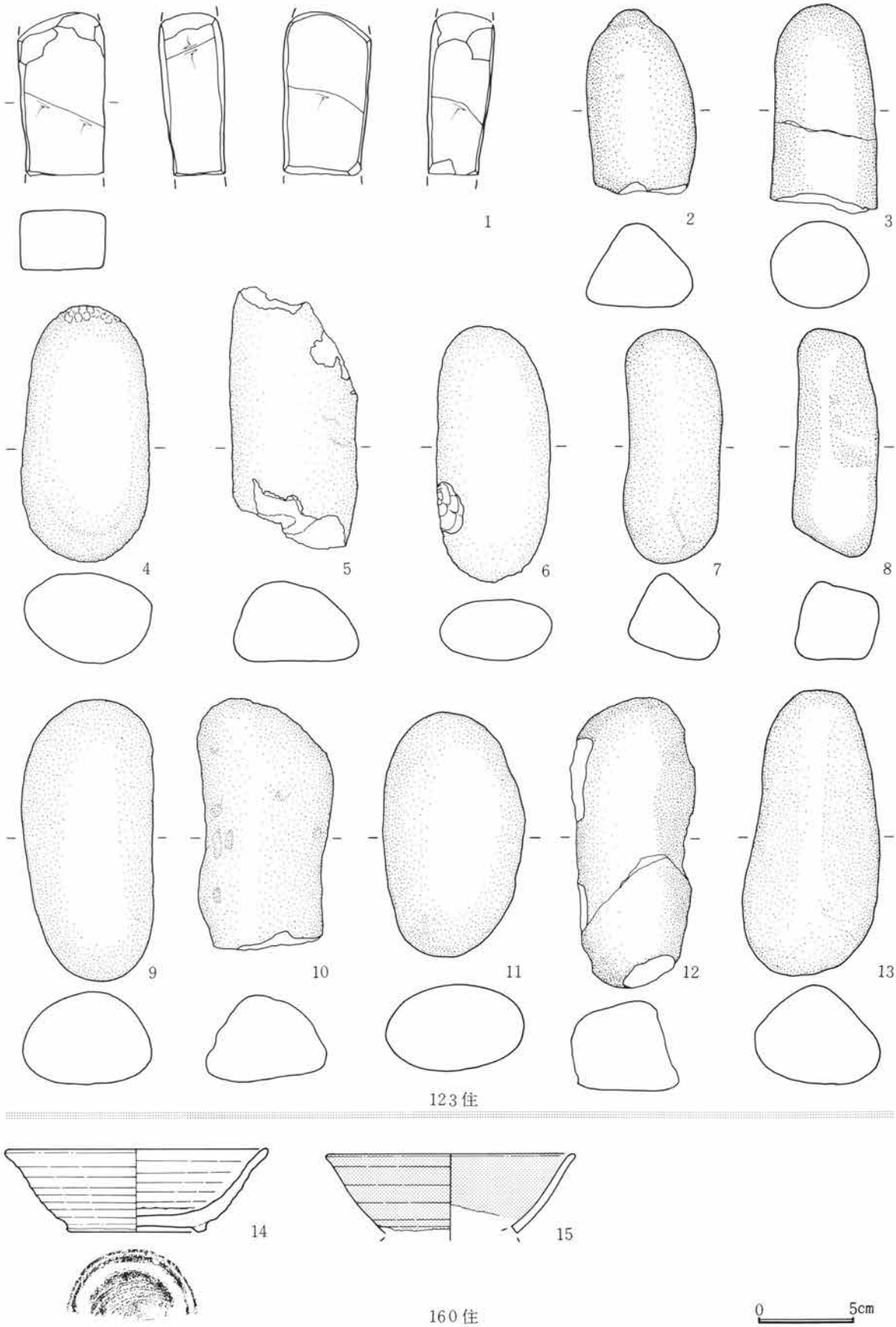
第287図　Ｈ区第123・160号住居跡・出土遺物実測図



第288図　H区第123号住居跡出土遺物実測図



第289図　Ｈ区第123号住居跡出土遺物実測図



第290図　H区第123・160号住居跡出土遺物実測図

第123号住居跡は、ほぼ一辺６ｍ規模の当調査区にあっては大型に属すものである。カマドは北東壁ほぼ中央部に設置されているものと考えられるが、調査区外で判然としない。当住居跡を最も特徴づけているのは、南東壁の中央の一部が若干突出することである。こうした例は、未報告区であるがＩ区に同規模のものが数軒みられる。北東壁に沿う形でみられる不整形の掘り込みは、位置・深度から第160号住居跡に伴うものとは考えられず、当住居跡の掘り方とみられる。

遺物は覆土中から多量に出土しているが、住居跡南寄りの床面付近から集中して出土したのが特徴であり、特に前述の突出部分からは比較的まとまった個体が出土している。この部分は第141号住居跡との重複部分であるが、両住居跡床面レベルには大きな差がみられることから、これらの遺物が第141号住居跡に帰属する可能性はない。また、南コーナー部に薦編み石と呼称されている小礫が集中して出土している。このような礫は、経験的にみてもこのような集中出土する傾向にあるようである。

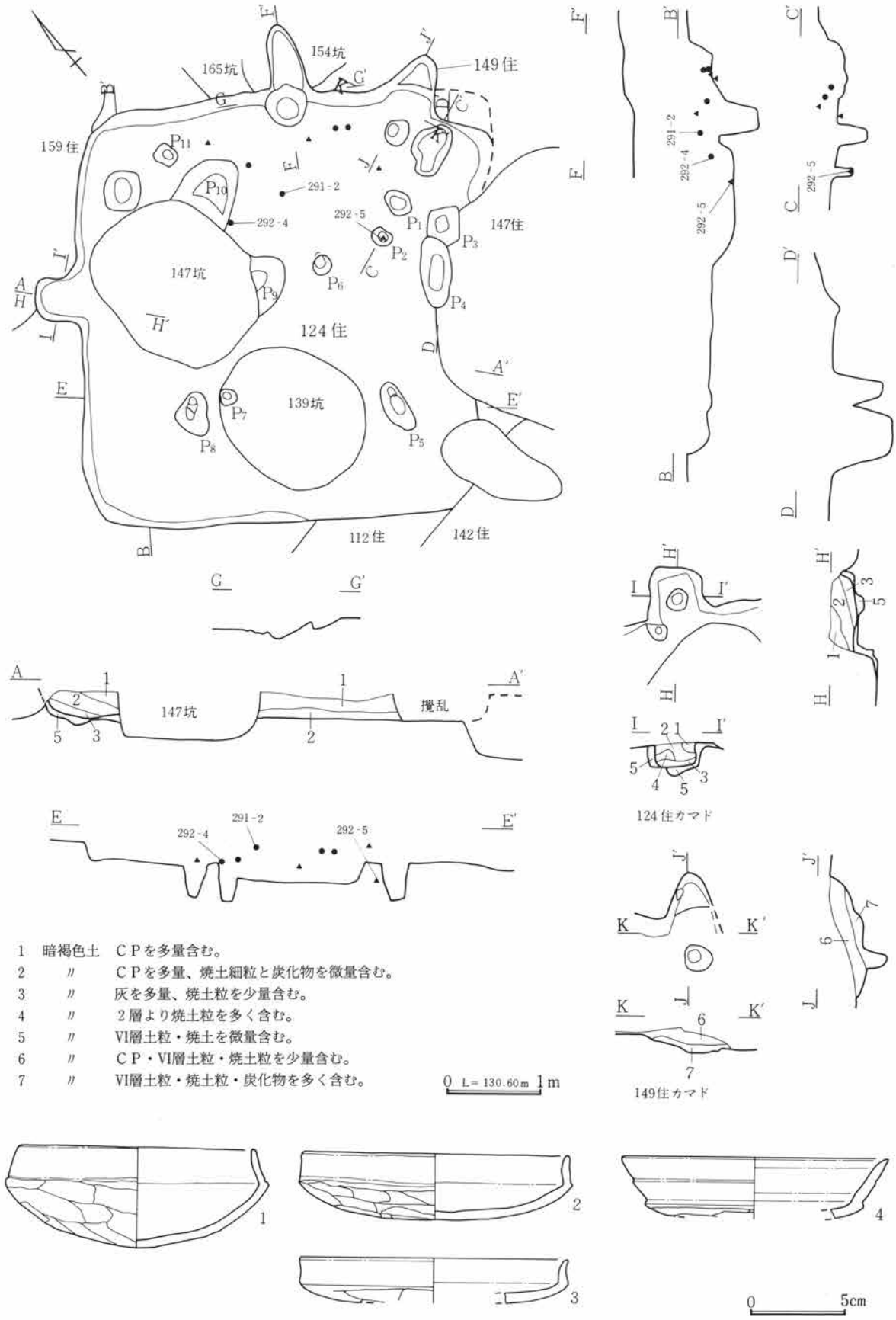
第160号住居跡は、前述のように確認段階で十分に捉えきれなかったため、西側は全く不明であり、東側も第21号溝によってカマドとコーナー部を失っている。遺物は図示したものしか出土していない。

遺構名称	Ｈ区第124号住居跡		位置	38～40－Ｈ－62～64グリッド内		分類	Ａ－12	時期	Ⅱ
平面形態	隅丸方形	規模	－ｍ×4.50m	主軸方位	東－44度－北		残存深度	約17cm程	
備考	南北農道にかかり、２次の調査を行った。壁溝は未検出で、柱穴は４本検出した。径約25～40cm、深度約28～40cmの円形・不整形で一定しない。貯蔵穴はｂカマドの右である。								
カマド	位置形状	ａカマド　北東壁中央			分類	Ｂ？	主軸方位	北－40度－東	
規模	全長106cm・屋外長67cm・屋内長39cm・袖間幅－cm・燃焼部幅－cm・煙道幅26cm								
備考	154号土坑との重複により残存状態は悪い。								
カマド	位置形状	ｂカマド　北西壁ほぼ中央			分類	？	主軸方位	北－40度－西	
規模	全長55cm・屋外長50cm・屋内長５cm・袖間幅－cm・燃焼部幅40cm・煙道幅－cm								
備考	カマドの屋内部は147号土坑によって切られ、残存状態は悪い。								

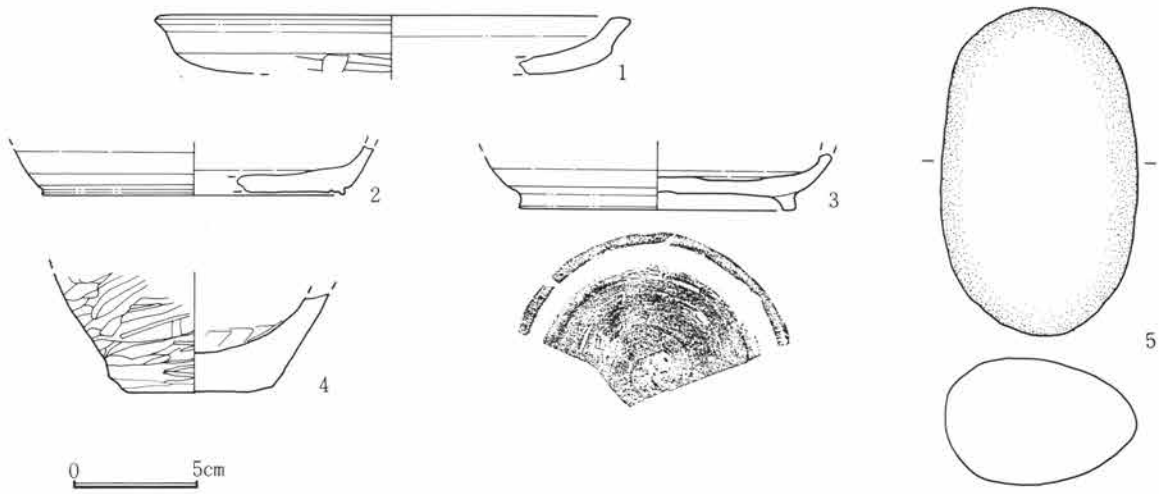
遺構名称	Ｈ区第149号住居跡		位置	39－Ｈ－61・62グリッド内		分類	－	時期	？
カマド	位置形状	東壁南寄り			分類	－	主軸方位	東－20度－北	
規模	全長64cm・屋外長55cm・屋内長９cm・袖間幅－cm・燃焼部幅50cm・煙道幅20cm								
備考	当住居跡は、南北農道にかかるため、124号住との重複関係が発掘時には明確に捉えることができず、カマド部分のみ検出したに止まった。								

第124号住居跡は、北東壁及び北西壁それぞれ中央にカマドを設置した痕跡があるが、どちらも残存状態は不良である。しかし貯蔵穴と思われる35cm×40cmの方形で、深度約40cmのピットが北コーナー部にあることから、住居跡構築段階では北西壁側のカマドが使用され、その後北東壁側に移設されたものと考えられる。それは、北東壁カマドは住居内に壊れた痕跡を残し当住居跡の最終使用の状態を呈しているのに対して、北西壁カマドは、住居内にその痕跡をほとんど残さず、壁外にのみ焼土等がみられる。つまり新しいカマドの設置に伴って、古いカマドを壊して片付けたことが考えられる。

第149号住居跡と第124号住居跡との重複関係は、主軸方位から124号住→149号住と考えられるが、第149号住居跡の掘り込みは相当浅かったものと思われ、第124号住居跡のカマドに影響を与えていない。

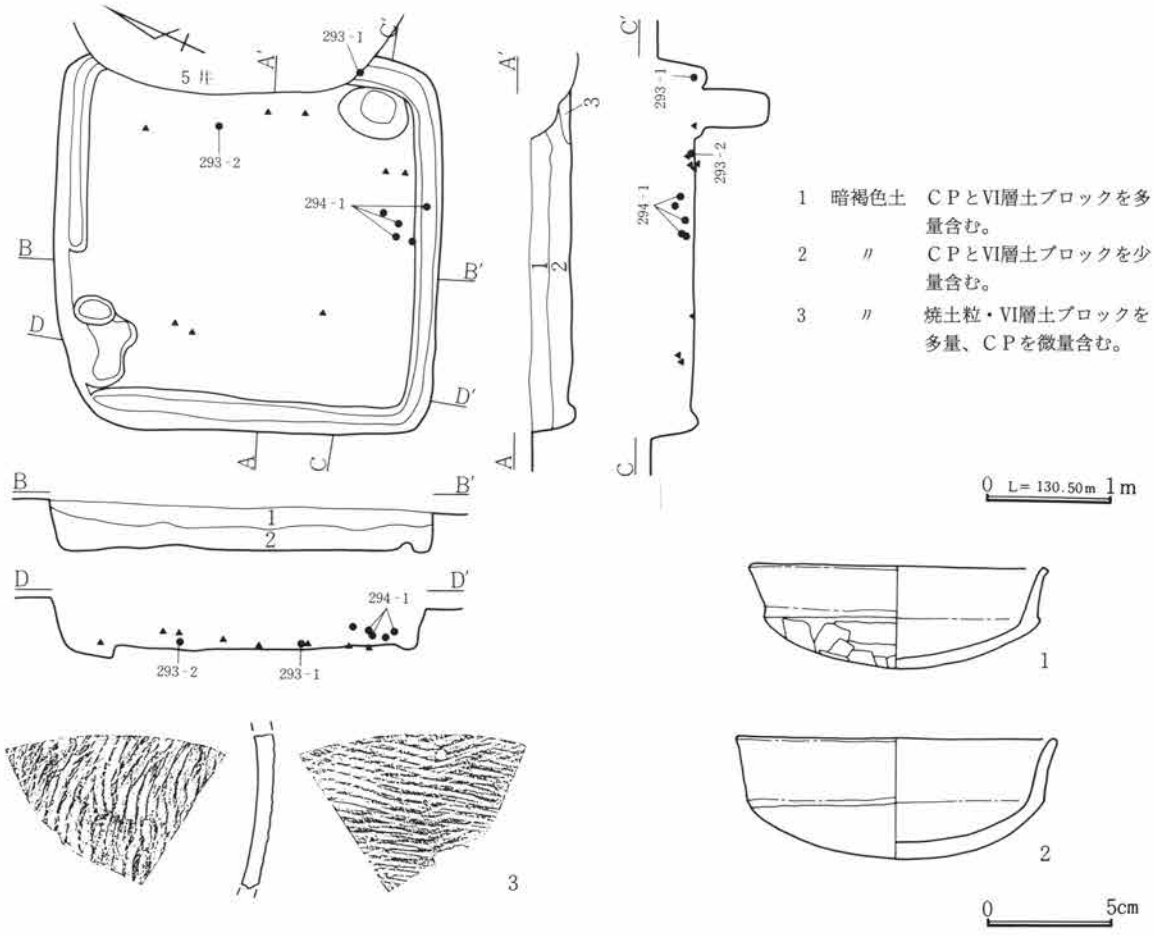


第291図　H区第124・149号住居跡・出土遺物実測図

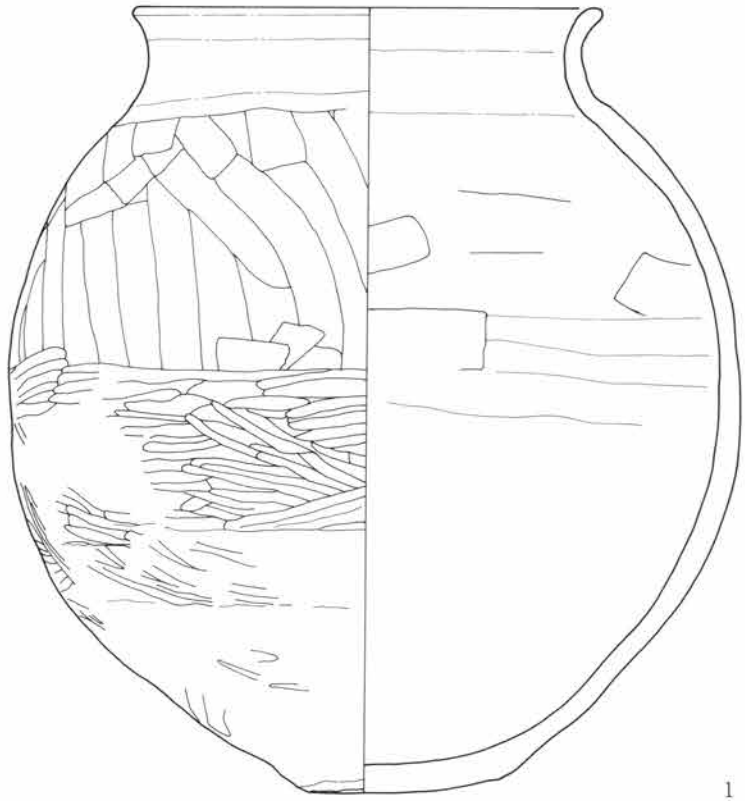


第292図　H区第124号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	H区第125号住居跡	位置	31・32－H－65・66グリッド内	分類	A－2	時期	II
平面形態	隅丸方形	規模	2.95m×3.10m	主軸方位	東－25度－北	残存深度	約36cm程
備考	カマドを含む東壁は５号井戸によって失われている。柱穴は検出されず、壁溝は北壁西側を除き全周すると思われる。幅約５～10cm、深度約５cmである。貯蔵穴は南東コーナー部円形である。						



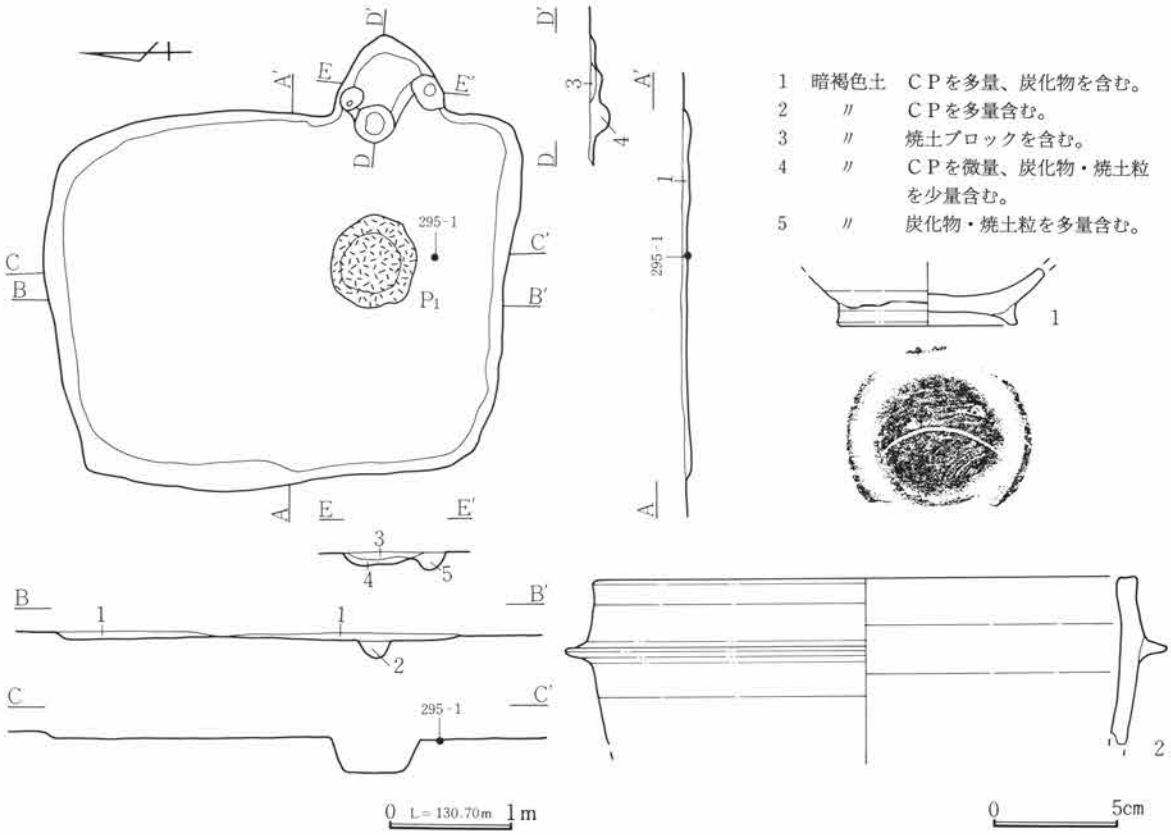
第293図　H区第125号住居跡・出土遺物実測図



第294図　Ｈ区第125号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	Ｈ区第126号住居跡		位置	33～35―Ｈ―66・67グリッド内		分類	Ｃ―10	時期	Ｘ？
平面形態	隅丸長方形？	規模	2.95m×3.60m	主軸方位	東―３度―北		残存深度	約３cm程	
備考	残存は不良で、壁溝・柱穴・貯蔵穴は検出されていない。カマド正面の住居中央部に径約65cm、深度約11cmの円形の白色粘土貼土坑が検出された。前回報告分にも類例があるが、用途不明。								
カマド	位置形状	東壁南寄り			分類	Ｃ－１	主軸方位	東―７度―北	
規模	全長85cm・屋外長65cm・屋内長20cm・袖間幅85cm・燃焼部幅55cm・煙道幅―cm								
備考	カマドも住居同様残存状態は悪く、掘り方の調査だけである。焚口部と考えられる部分には円形ピットがあり、袖構築材据え方と思われる対ピットも検出したが、構築材等の残存はみられなかった。								

当住居跡は、第119号住居跡などと共に遺構空白部を囲むように位置し、他遺構と重複することなく単独で検出された。遺構確認はＢ軽石混じりの土層を取り去った比較的浅い段階で行ったにも拘らず、遺構の残存はきわめて不良であった。したがって壁の立ち上がりはほとんどみられず、住居跡の範囲をほぼ捉えるにとどまった。表中記載のとおり柱穴・貯蔵穴・壁溝等の施設は検出されず、唯一カマド正面の住居中央部に円形プランで、断面鍋底状のピットを検出した。このピットには一定の厚さに灰白色の粘土が貼られていた。同様の灰白色粘土貼りのピットが検出された例は、第43号住居跡及び前回報告のＦ区第45号住居跡がある。この２例の住居跡もカマド正面に当住居跡とほぼ同規模の円形ピットが検出されている。当住居跡とは主軸方位・規模共に相違するが、出土遺物にそれほどの時期差は感じられず、この時期に特徴的な施設であるようだ。しかし施設としては特異な存在であるが、遺構として出土遺物等に他住居跡との相違は認め難い。いずれにしても現時点でその用途について言及するだけの資料の集積がない。

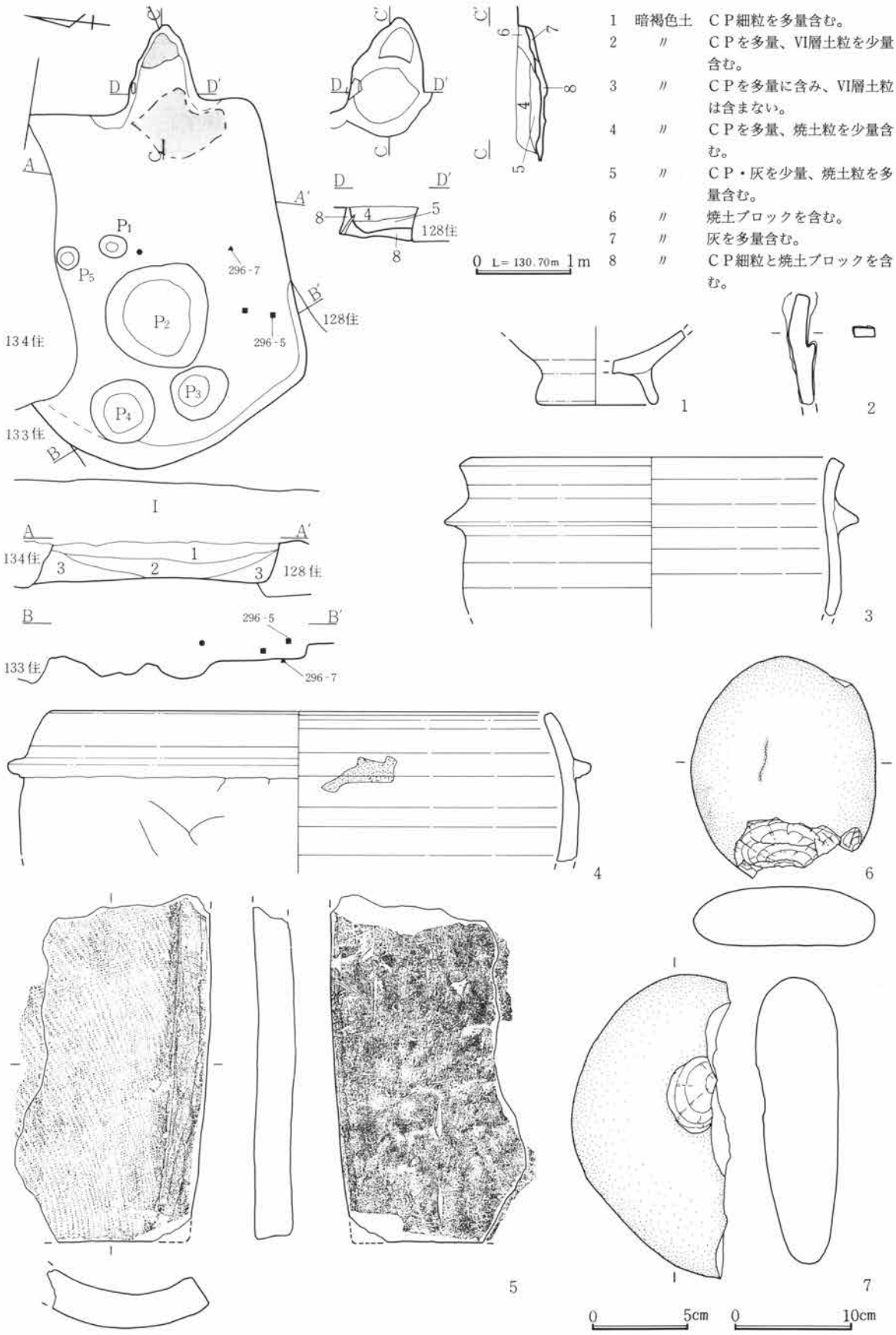


第295図　H区第126号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	H区第127号住居跡	位置	44～46—H—62～64グリッド内	分類	C—？	時期	X
平面形態	隅丸長方形？	規模	— m× — m	主軸方位	東—？度—北	残存深度	約40cm程
備考	カマドを含む東側半分が南北農道下にかかり、２次の調査を実施した。128・133・134号住と重複し、重複関係はセクションから、128号住→127号住→134号住と考えられる。						
カマド	位置形状	東壁中央やや南寄りと考えられる。	分類	C—1	主軸方位	東—７度—北	
規模	全長125cm・屋外長85cm・屋内長40cm・袖間幅—cm・燃焼部幅60cm・煙道幅—cm						
備考	焚口から燃焼部は平坦で、焚口右寄りに灰面の広がりがある。また、奥壁部にも灰面があるが、焼土はほとんど検出されていない。袖は左袖のみ残存し、瓦片を立てて構築している。						

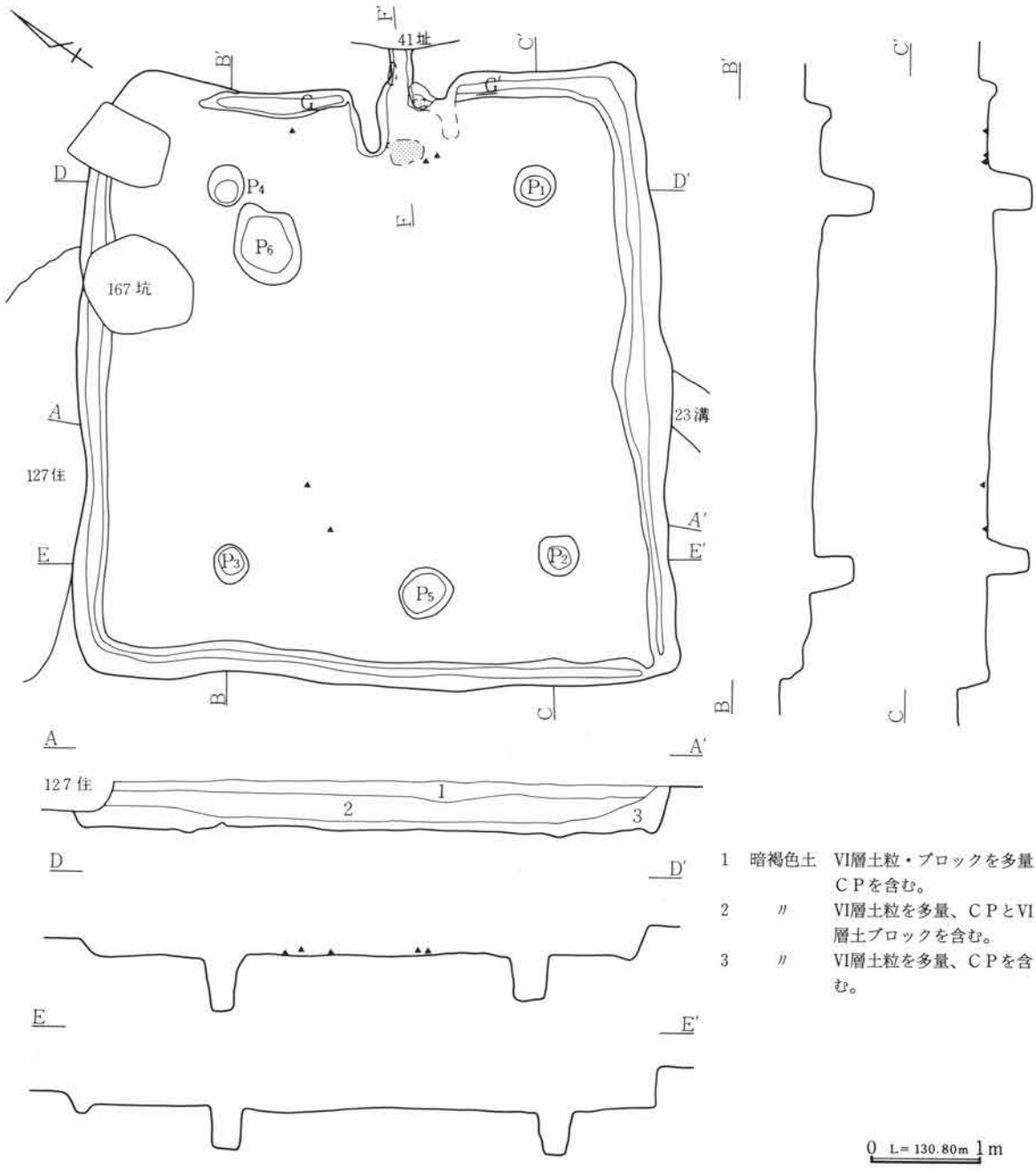
当住居跡は、調査区中央北寄りに位置している。東側は南北農道にかかっていたため、カマド部分は時間をおいて調査を実施した。第128・133・134号住居跡との重複関係については、山王線及び南北農道のセクションで明確に捉えることができ、その順序は表中記載のとおりである。住居跡の残存状態は、重複する住居跡を一括して調査を開始したため、南西壁は明瞭に捉えられたものの、その他の壁は曖昧な状態である。この残存する南西壁は、南西方向に突出するような状態を呈しているが、この突出部分を西コーナーとする長方形プランの住居跡となる可能性がある。

調査は掘り方段階まで一気に掘り下げているため、床面の状態を全面にわたって明瞭に捉えることはできなかった。しかしベルト状に残した状態で見る限り、床面に硬化した部分はみられなかった。また、柱穴・貯蔵穴・壁溝等は全く検出されておらず、床下で南西壁に沿って円形ピットが２本とやや規模の大きな円形土坑状の掘り込みが１基検出された。遺物はいずれも床下から浮いた状態で出土している。

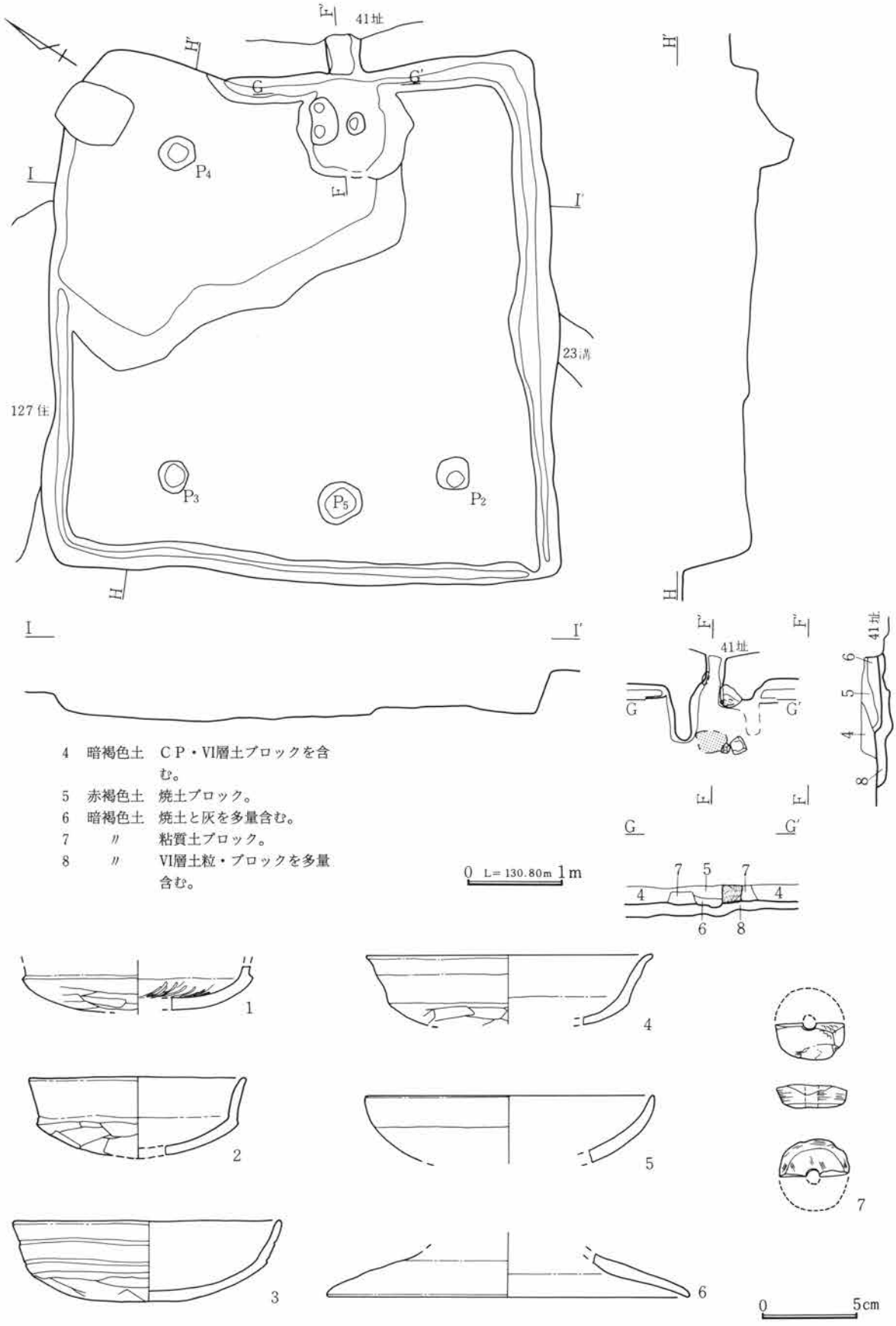


第296図　H区第127号住居跡・出土遺物実測図

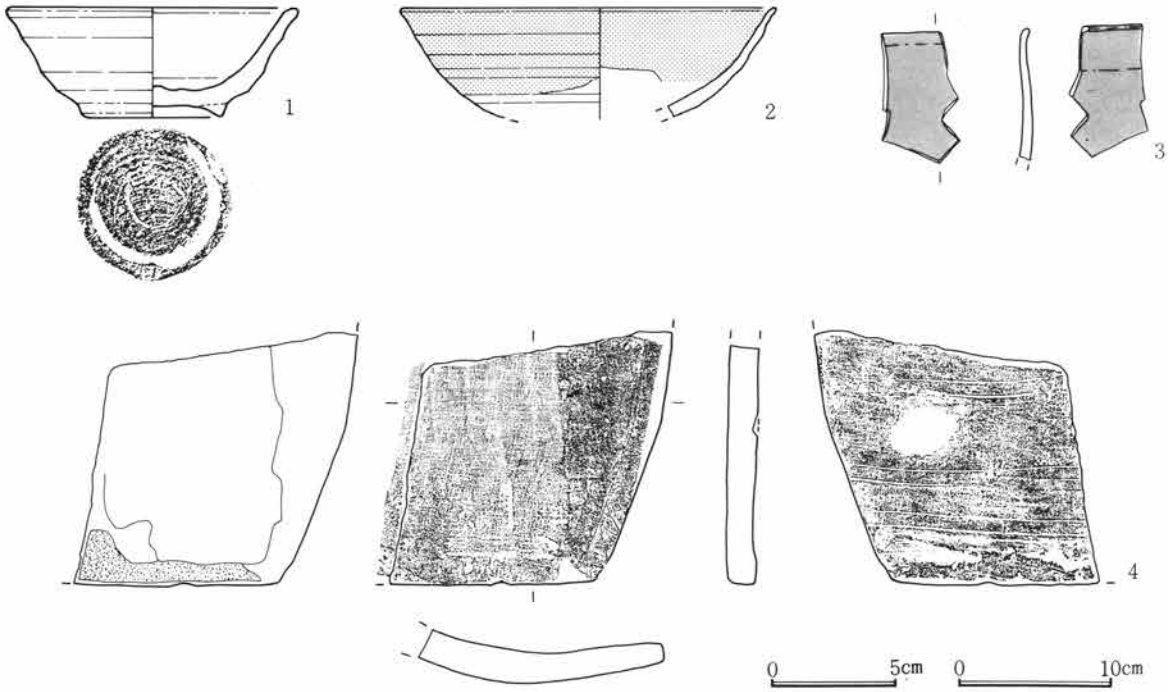
遺構名称	Ｈ区第128号住居跡	位置	42～46－Ｈ－59～63グリッド内	分類	Ａ－６	時期	Ⅲ
平面形態	隅丸方形	規模	5.45m×5.25m	主軸方位	東－35度－北	残存深度	約50cm程
備考	南北農道にかかる部分があり、２次の調査を実施した。壁溝は全周し、幅約５～20cm、深度約２～５cmである。柱穴は４本検出され、径約35cm、深度約37～45cmの円形である。						
カマド	位置形状	東壁中央やや南寄り		分類	Ｂ－１	主軸方位	東－38度－北
規模	全長―cm・屋外長―cm・屋内長65cm・袖間幅―cm・燃焼部幅―cm・煙道幅13cm						
備考	カマド先端部は41号址によって失われている。袖は左袖のみ残存し、粘土で構築されている。右袖の壁への取付け部には角礫が検出されているが、左袖にはみられない。燃焼部の一部に焼土を検出。						



第297図　Ｈ区第128号住居跡実測図



第298図　H区第128号住居跡・出土遺物実測図

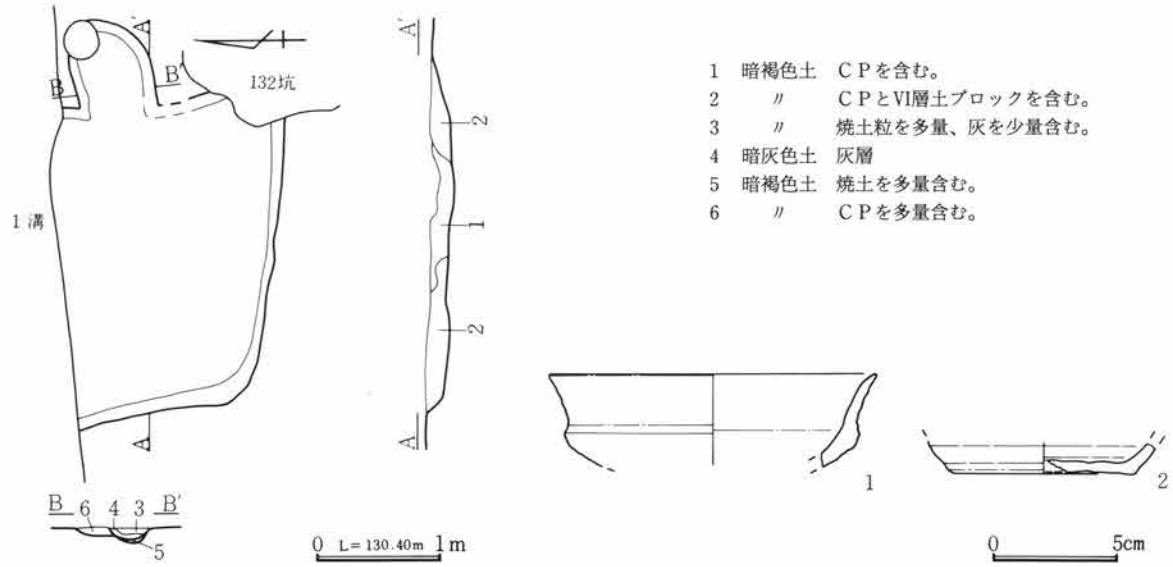


第299図　H区第128号住居跡出土遺物実測図

当住居跡は調査区中央に位置し、北側で第127号住居跡と重複し、カマドの煙道部を第41号址によって失っている。床面精査段階で、柱穴４本の他に円形ピットを２本検出した。

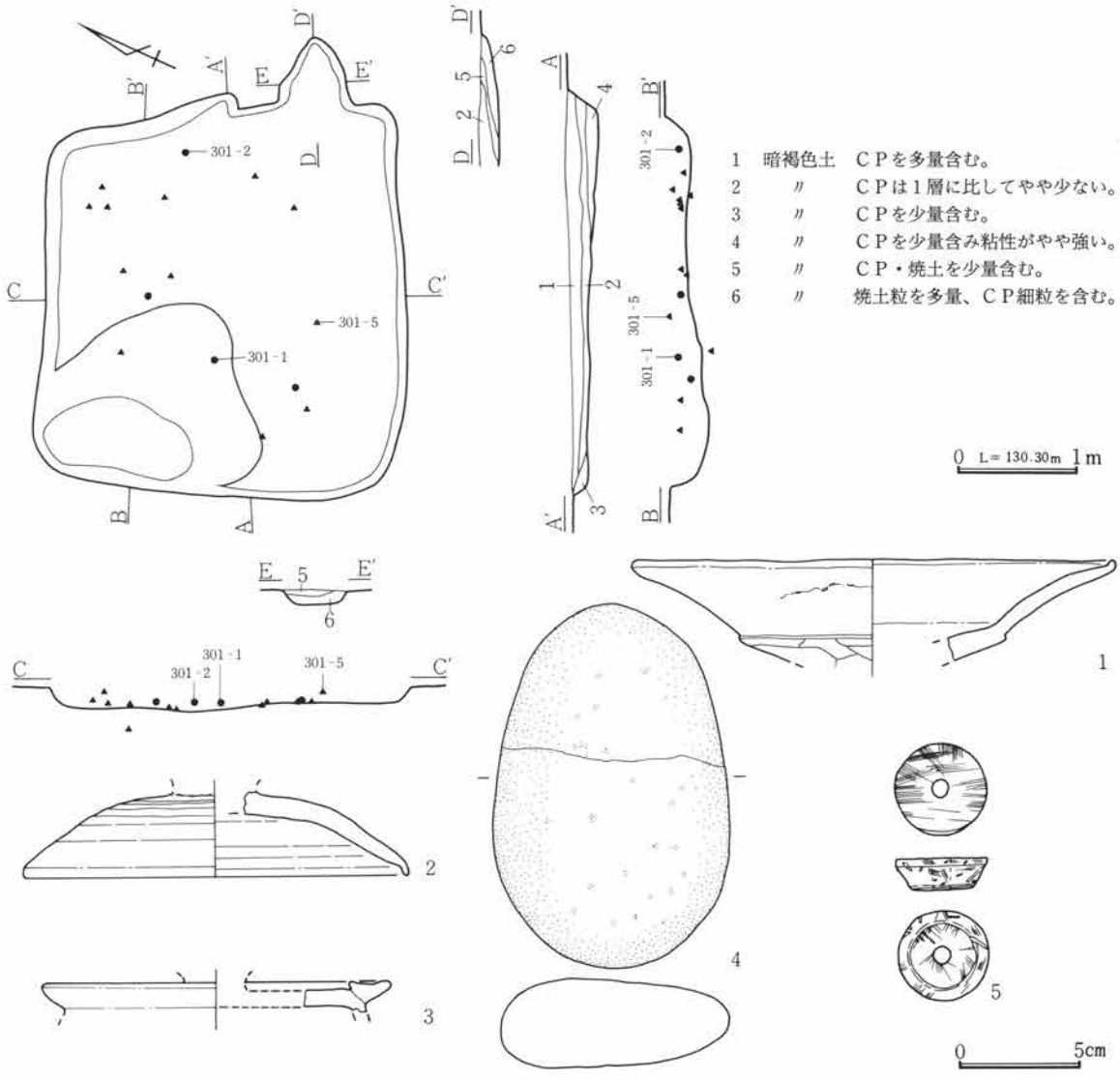
図示した遺物はほとんどが覆土中から出土したもので、床面付近から出土したものは自然礫だけである。第299図に掲載した遺物は当住居跡とは時期を異にし、第154号住居跡に所属する可能性が高い。

遺構名称	H区第129号住居跡	位置	29・30—H—64～66グリッド内	分類	C—10	時期	?
平面形態	隅丸長方形？	規模	2.45m×　—　m	主軸方位	東—？度—北	残存深度	約15cm程
備考	北側半分は１号溝及び攪乱によって失われている。残存部において、壁溝・柱穴・貯蔵穴等は検出されていない。カマドは東壁南寄りに検出したが、残存状態はきわめて不良である。						



第300図　H区第129号住居跡・出土遺物実測図

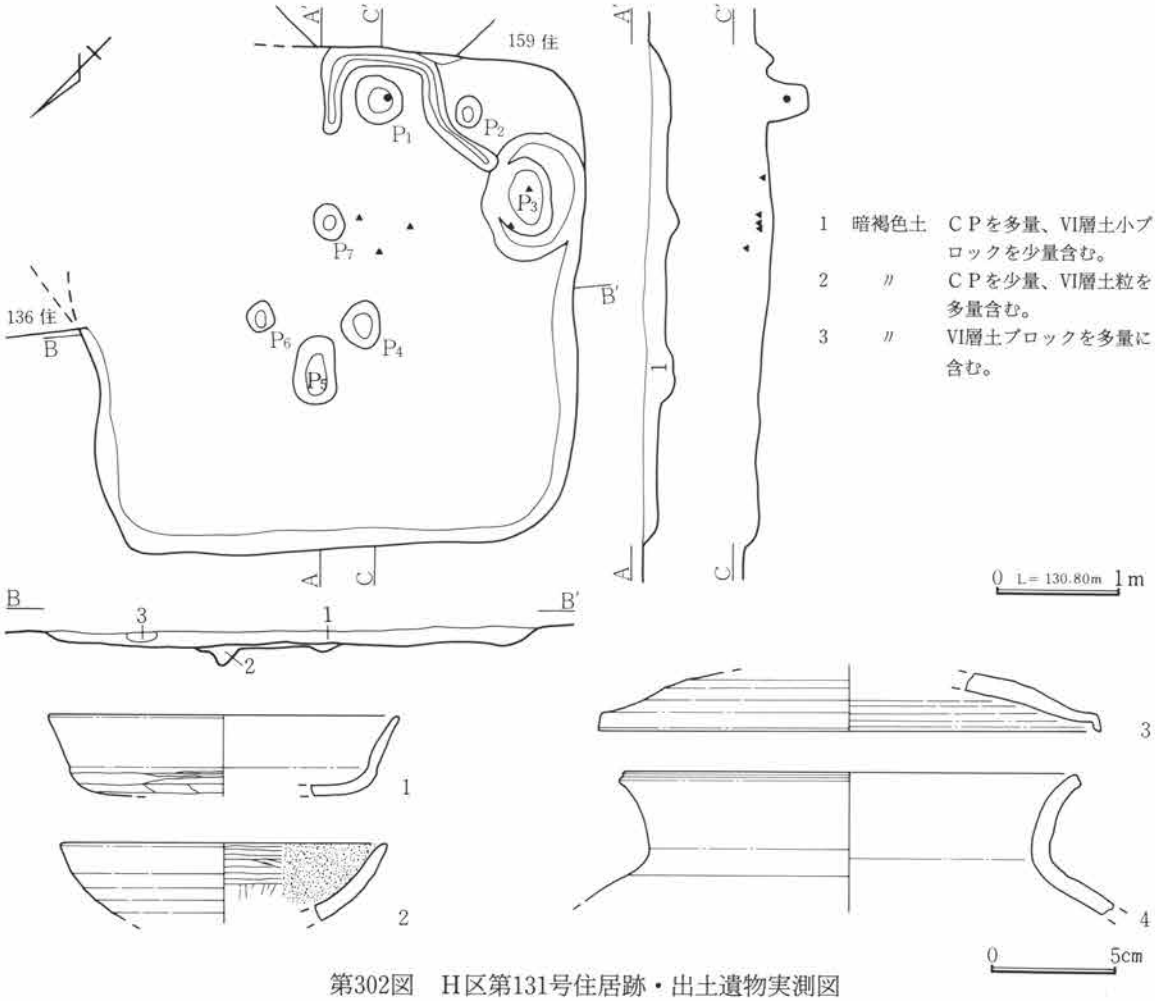
遺構名称	H区第130号住居跡	位置	27～29—H—64～67グリッド内	分類	A—9	時期	?
平面形態	隅丸方形	規模	3.25m×3.10m	主軸方位	東—19度—北	残存深度	約15cm程
備考	129号住に隣接して検出された。壁溝・柱穴・貯蔵穴は検出されなかった。北西コーナー付近は掘り方で12cm程不整形に掘り込まれている。遺物は床面に散在して検出された。						
カマド	位置形状	東壁南寄りに扁在		分類	C—1	主軸方位	東—22度—北
規模	全長60cm・屋外長60cm・屋内長—cm・袖間幅—cm・燃焼部幅42cm・煙道幅—cm						
備考	残存状態は不良で、袖構築材等の痕跡もみられない。また、焚口・燃焼部共に灰・焼土共に微量で、層を成してはいない。						



第301図　H区第130号住居跡・出土遺物実測図

当住居跡は遺構空白部の東縁にあたり、第11号溝に近接して検出された。第129号住居跡ときわめて近い位置にあるが、重複してはいない。遺構の残存状態は、壁高は浅いものの住居全体が完全に捉えられた数少ない例である。遺物はほぼ床面付近に面的な広がりをもって出土している。第301図5の紡錘車は住居中央やや南寄りの床面から若干浮いた状態で出土した。

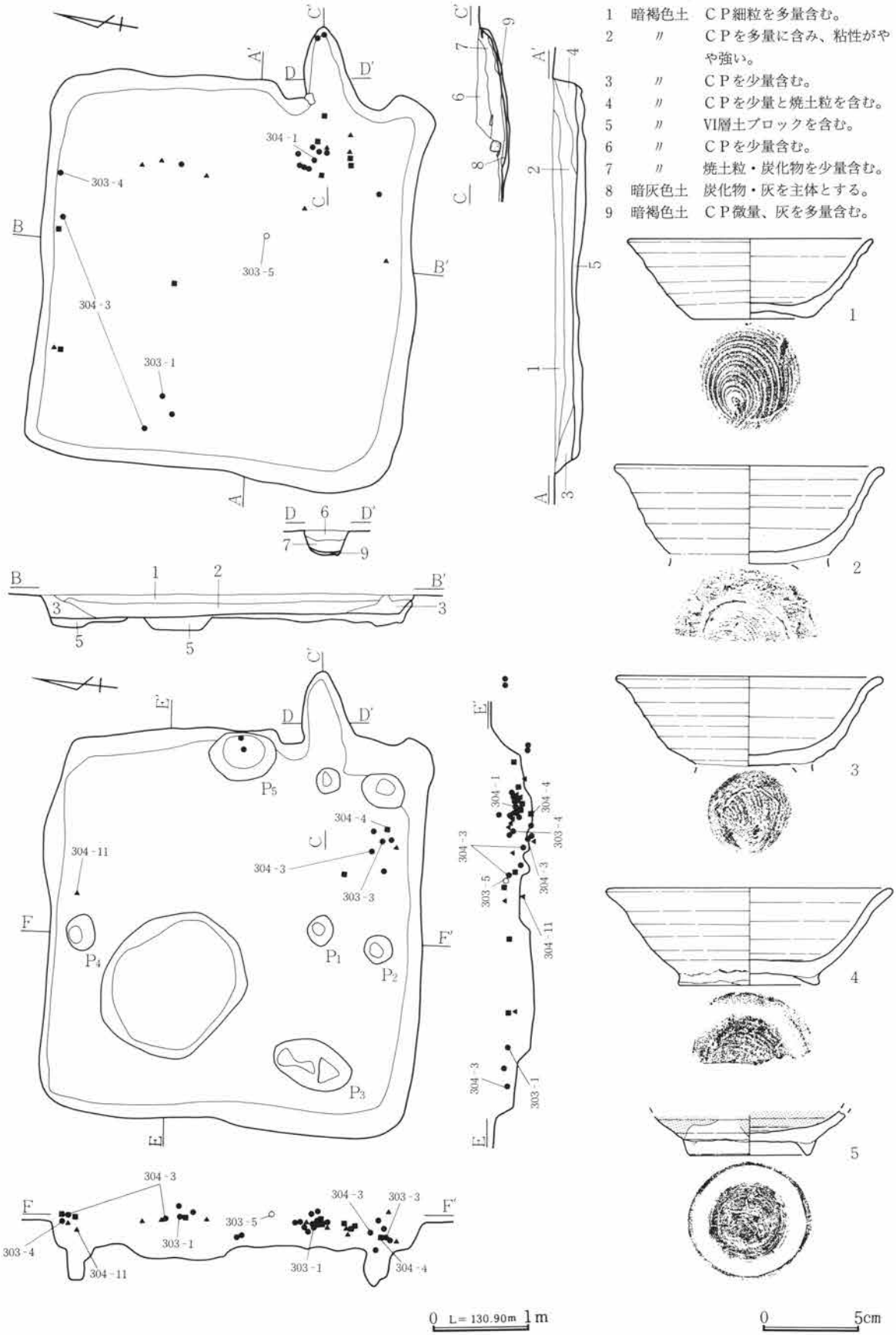
遺構名称	H区第131号住居跡	位置	41～43—H—63・64グリッド内	分類	A—？	時期	Ⅶ
平面形態	隅丸方形	規模	3.80m×3.95m	主軸方位	東—45度—北	残存深度	約13cm程
備考	カマド部は136号住との重複で失っている。６本のピットが検出されたが柱穴とは考えられない。東壁に接して、屈曲する溝に囲まれて、径約40cm、深度約32cmの円形ピットが検出された。貯蔵穴か？						



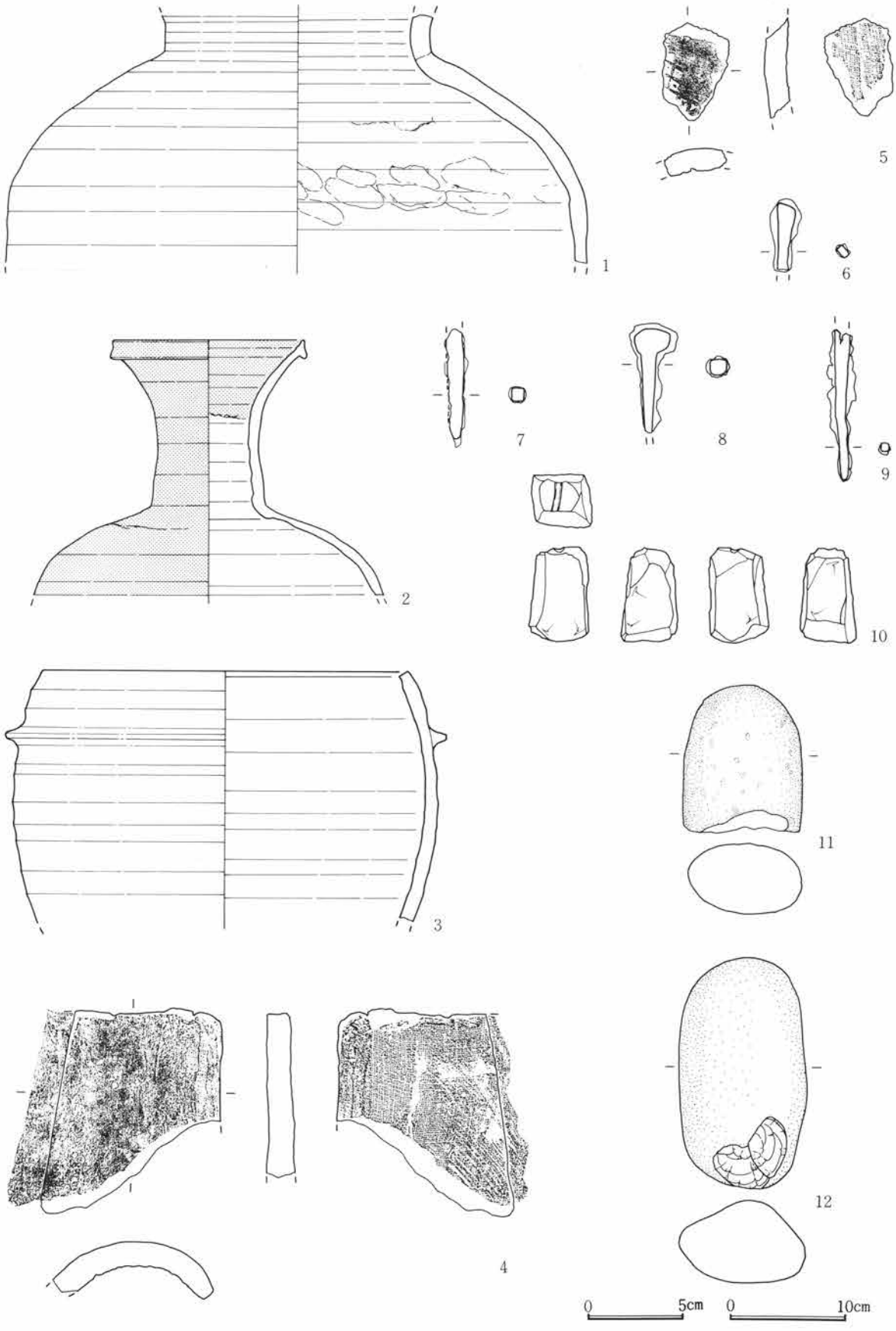
第302図　H区第131号住居跡・出土遺物実測図

当住居跡はⅥ層中での確認であり、遺構確認は比較的容易にできた。しかしこの段階ですでに壁は約13cmしか残存しておらず、遺物も時期を特定しうるような出土状態を示すものは皆無である。

遺構名称	H区第132号住居跡	位置	37～39—H—72～75グリッド内	分類	A—10	時期	Ⅸ
平面形態	隅丸方形	規模	4.01m×3.85m	主軸方位	東—５度—北	残存深度	約25cm程
備考	壁溝・柱穴等は全く検出されていない。掘り方段階で円形土坑・ピットが検出されたが、規則性はみられず、柱穴とは考えられない。南東コーナー部に検出したピットは貧弱であるが貯蔵穴か？						
カマド	位置形状	東壁南寄りに扁在		分類	C—１	主軸方位	東—15度—北
規模	全長90cm・屋外長60cm・屋内長30cm・袖間幅—cm・燃焼部幅35cm・煙道幅—cm						
備考	焚口から燃焼部にかけて浅い掘り方を有している。袖は両袖共構築材は検出されず、その痕跡も認められない。燃焼部中央位置から径約25cm、深度約７cmの支脚据え方と思われる円形ピットを検出した。						



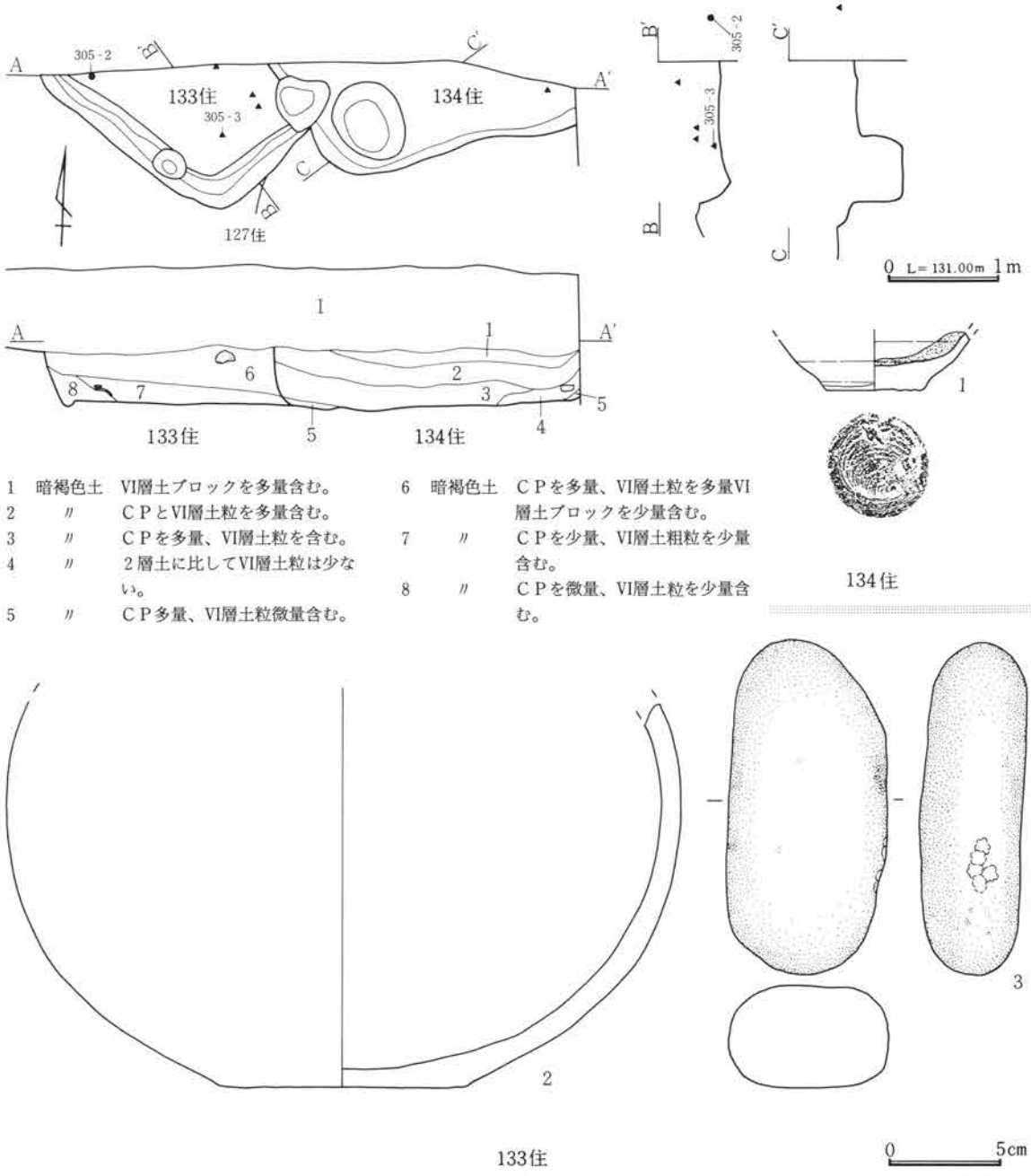
第303図　H区第132号住居跡・出土遺物実測図



第304図　Ｈ区第132号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	H区第133号住居跡	位置	46—H—64・65グリッド内	分類	—	時期	?
平面形態	隅丸方形？	規模	— m× — m	主軸方位	東—？度—北	残存深度	約40cm程
備考	北側の大半は山王線下にかかり未調査である。東側は134号住と重複し、セクションから133号住→134号住と考えられる。柱穴は調査部にはみられず、幅約５～10cmの壁溝が全周すると考えられる。						

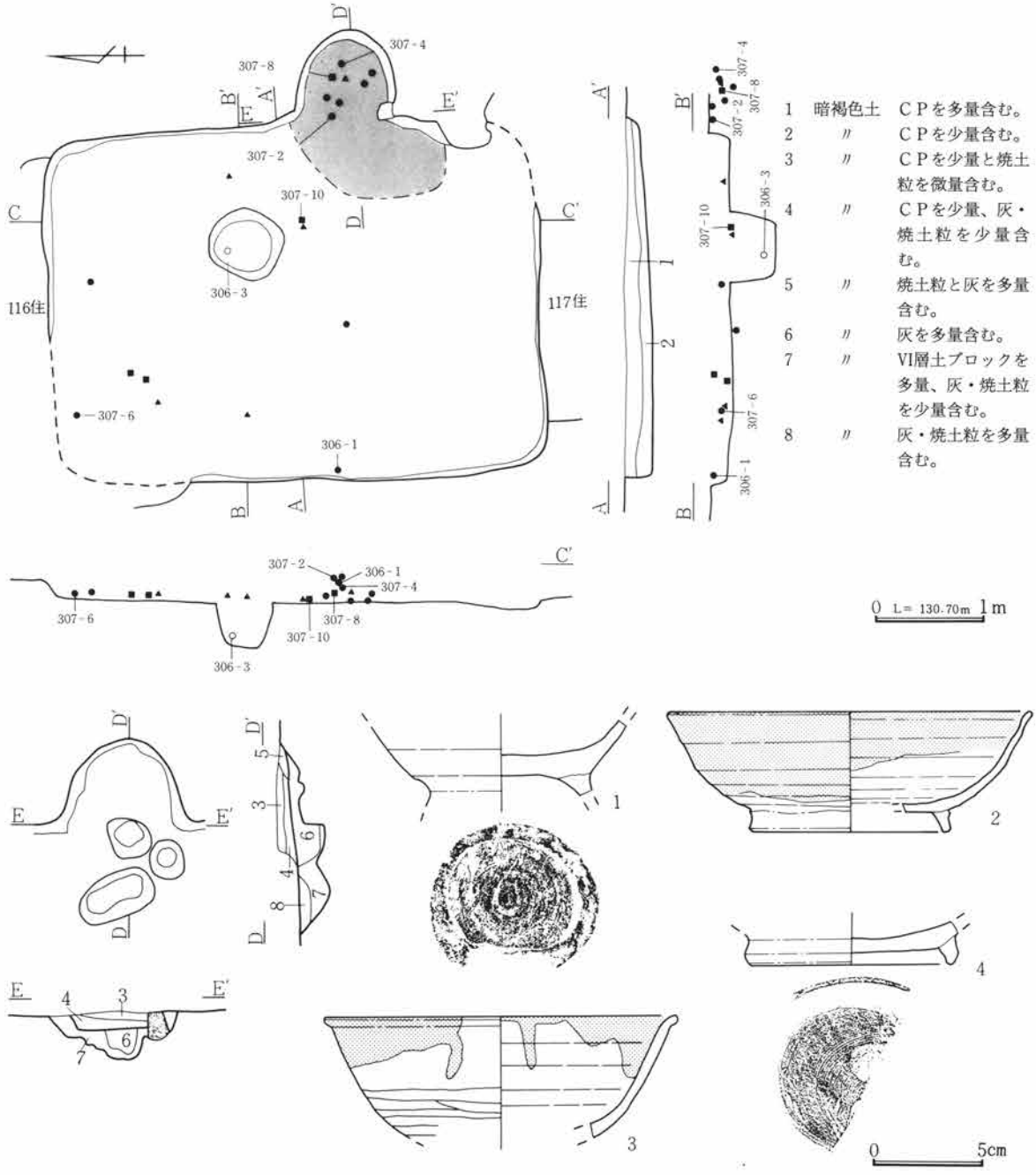
遺構名称	H区第134号住居跡	位置	46—H—62～64グリッド内	分類	—	時期	?
平面形態	隅丸方形？	規模	— m× — m	主軸方位	東—？度—北	残存深度	約55cm程
備考	133号住同様北側は山王線下で未調査である。調査部において壁溝・柱穴は未検出である。コーナー部に径約70cm、深度約40cmの円形土坑を検出したが、位置的に貯蔵穴である可能性が強い。						



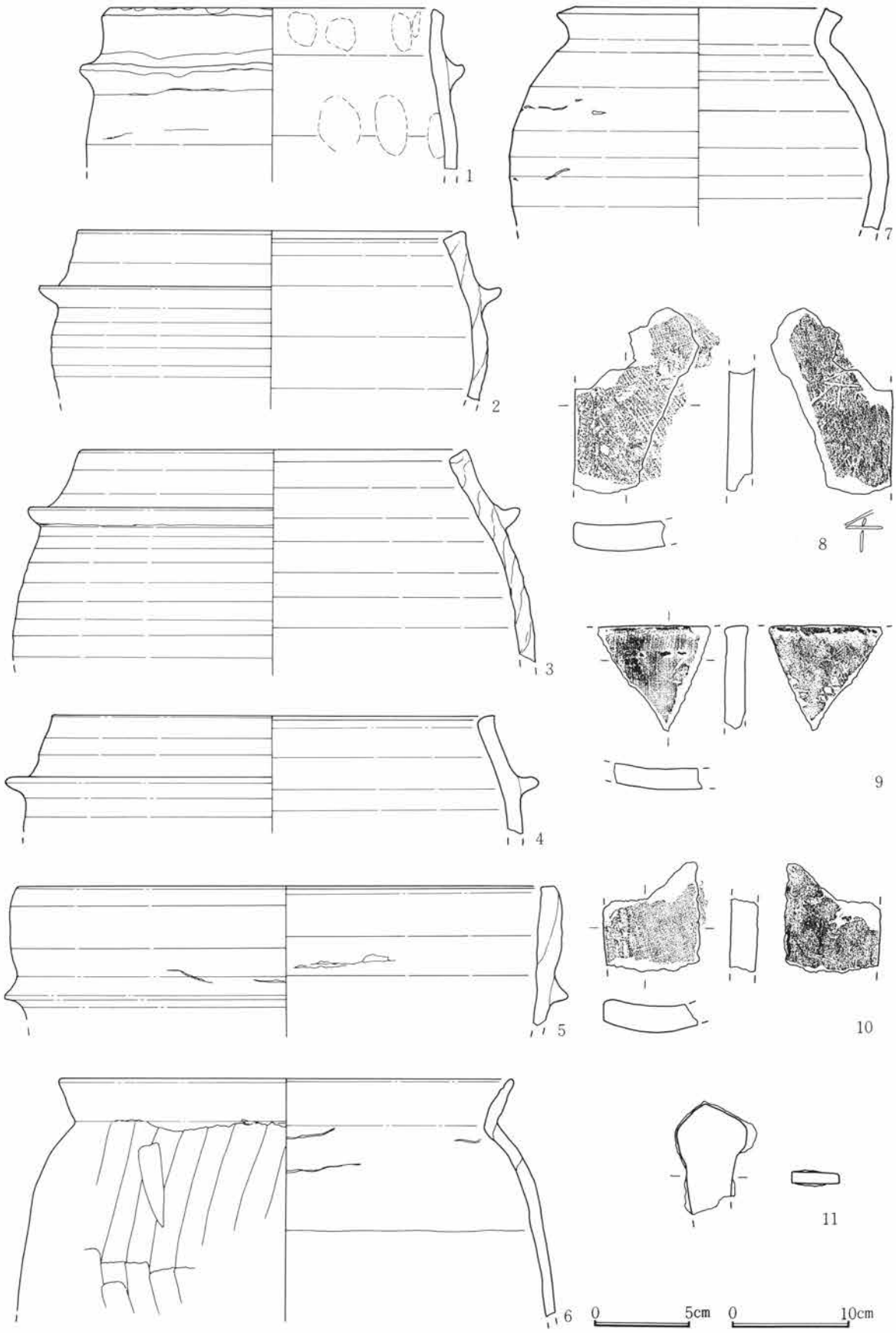
1　暗褐色土　VI層土ブロックを多量含む。
2　〃　ＣＰとVI層土粒を多量含む。
3　〃　ＣＰを多量、VI層土粒を含む。
4　〃　２層土に比してVI層土粒は少ない。
5　〃　ＣＰ多量、VI層土粒微量含む。
6　暗褐色土　ＣＰを多量、VI層土粒を多量VI層土ブロックを少量含む。
7　〃　ＣＰを少量、VI層土粗粒を少量含む。
8　〃　ＣＰを微量、VI層土粒を少量含む。

第305図　H区第133・134号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	Ｈ区第135号住居跡	位置	43～45－Ｈ－65～67グリッド内	分類	Ｃ－11	時期	X
平面形態	隅丸長方形	規模	3.15m×4.45m	主軸方位	東－１度－北	残存深度	約24cm程
備考	116・117・140号住と重複し、140号住→135号住→116・117号住という関係が考えられる。壁溝・柱穴・貯蔵穴は全く検出されず、カマド以外の残存はあまり良好ではない。						
カマド	位置形状	東壁やや南寄り		分類	Ｅ－３	主軸方位	東－１度－南
規模	全長80cm・屋外長80cm・屋内長―cm・袖間幅90cm・燃焼部幅75cm・煙道幅―cm						
備考	燃焼部から焚口右寄りにかけ、一面に灰面が検出された。左袖は残存せず、右袖は角柱状の礫石が据えられている。掘り方段階で中央部及び前面に３個のピットが検出されたが、用途は不明である。						



第306図　Ｈ区第135号住居跡・出土遺物実測図

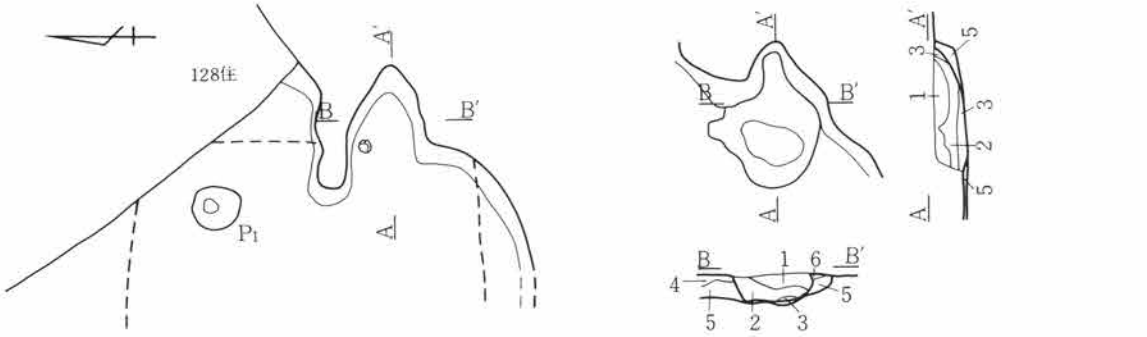


第307図　H区第135号住居跡出土遺物実測図

当住居跡は調査区の中央北寄りで、住居跡の最も密集する部分に位置している。重複住居の前後関係については、遺構の残存状態及び一部セクションの観察によって、表中に記載したように想定した。床面レベルについて、当住居跡及び第116･117号住居跡は、第140号住居跡覆土上面に構築されているため、床面が明確に捉えられたわけではない。しかし確認段階でのカマド残存状態を目安として第116・117号住居跡を先行調査し、その後当住居跡を調査した結果、第116号住居跡との重複部分では、東側に若干当住居跡の壁の一部が検出され、第117号住居跡との重複部分では、第117号住居跡のカマド位置を除き当住居跡の壁がわずかながらも確認されている。この第117号住居跡のカマド部分については、カマド掘り方が住居床面より深く掘り込まれたため、当住居跡の壁が残存しなかったものと思われる。したがって当住居跡の掘り込みが先の２住居跡よりも若干深く掘り込まれたことがわかる。これは当住居跡が第116・117号住居跡に先行する時期のものであることによる掘り込み面の違いとも考えられるが、これらの住居跡の時期差が、生活面のレベル差を生み出すほどのものとは思えない。このことからこの場合は、住居跡の平面規模の違いによる掘り込み深さの違いと考えるのが妥当と考えられる。

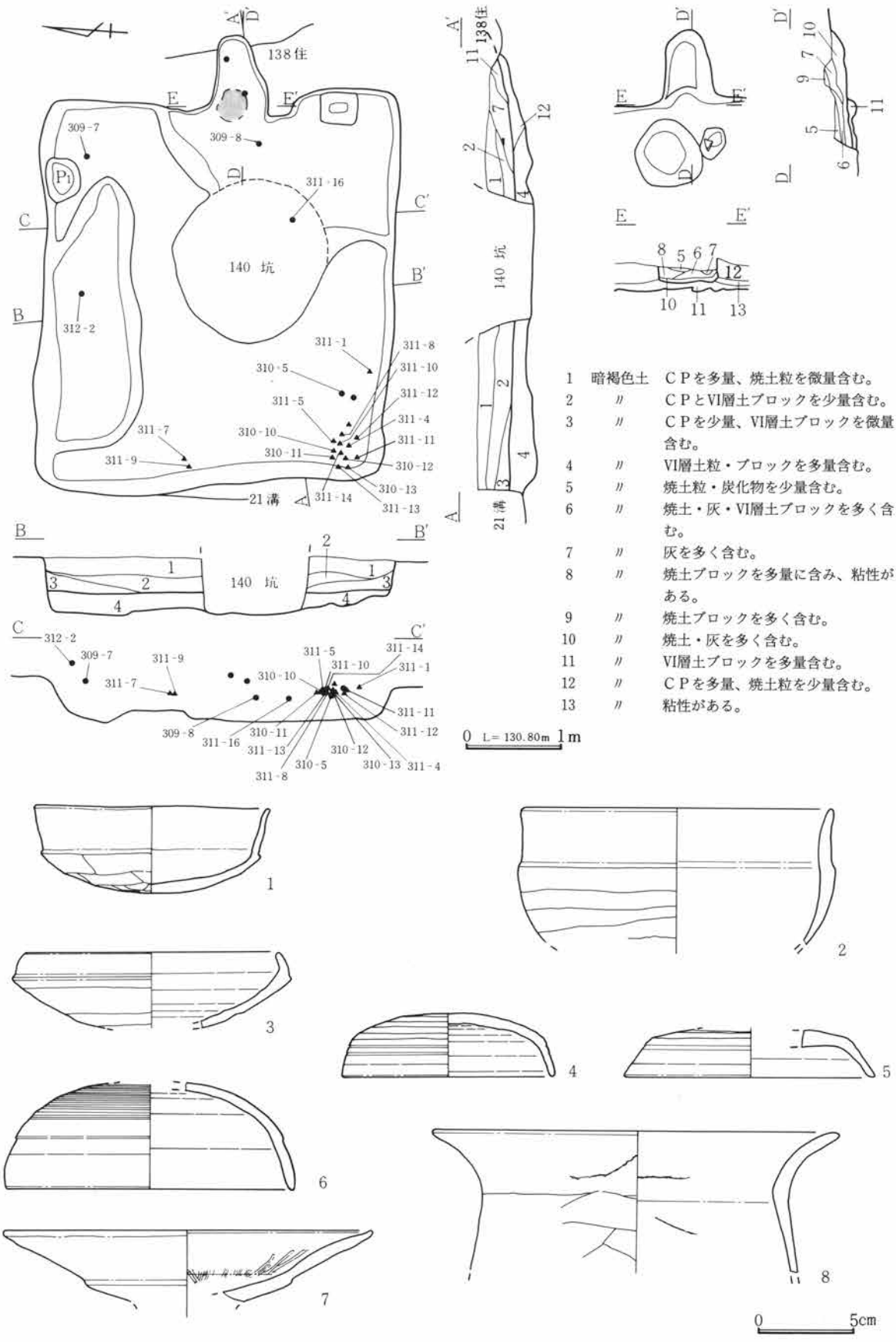
遺物は、カマド及び床面付近からのもの主体で、一部第140号住居跡出土としていたものを含んでいる。

遺構名称	Ｈ区第136号住居跡	位置	41～43―Ｈ―62・63グリッド内	分類	―	時期	?
平面形態	隅丸方形？	規模	― m× ― m	主軸方位	東―？度―北	残存深度	約20cm程
備考	128・131号住を切っていると考えられるが、農道下の２次の調査を行ったため、明確には捉えられなかった。カマドは東壁南寄りに扁在しているが、残存状態は不良である。						

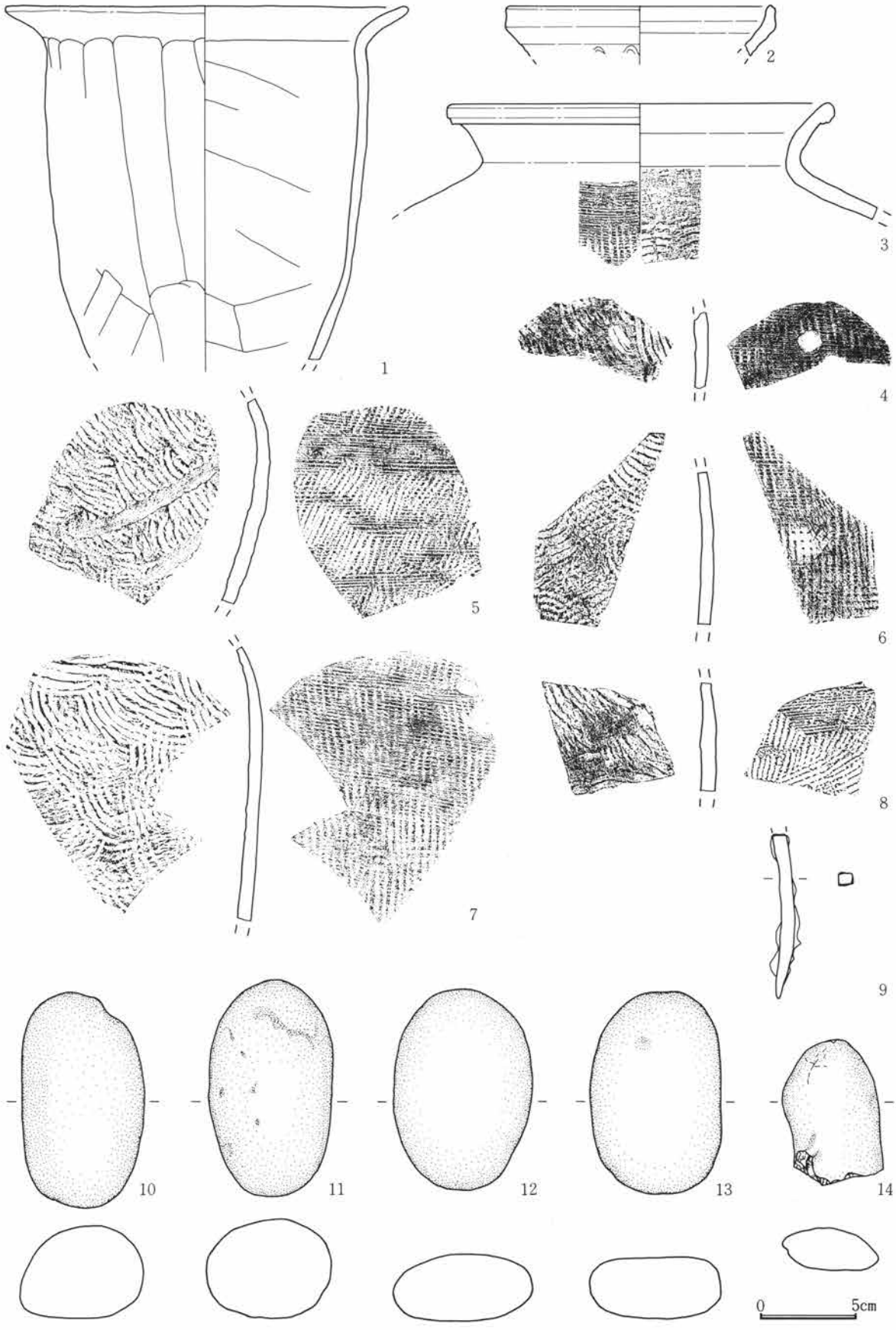


第308図　Ｈ区第136号住居跡実測図

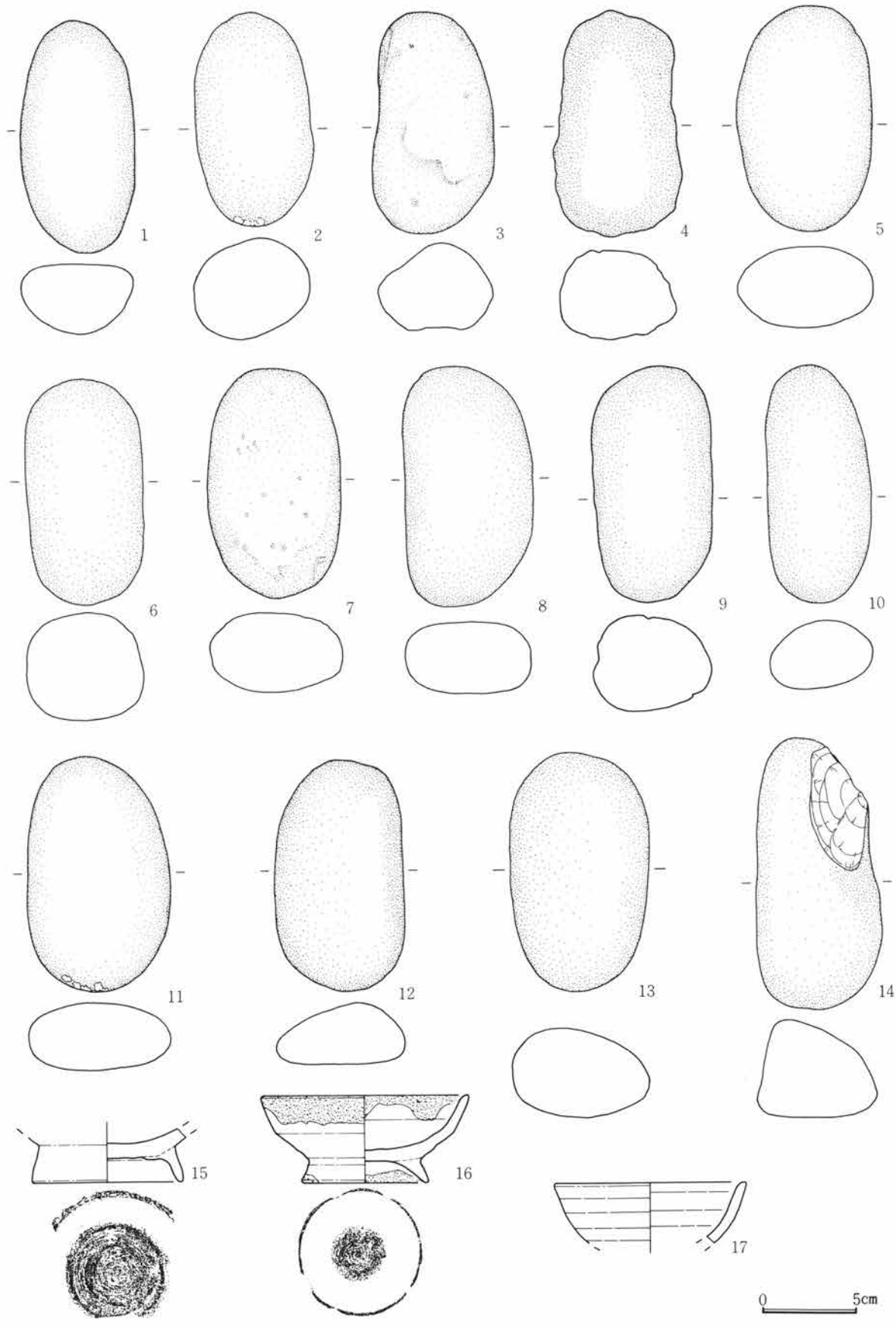
遺構名称	Ｈ区第137号住居跡	位置	43～45―Ｈ―70～72グリッド内	分類	Ｂ―２	時期	II
平面形態	長方形	規模	4.00m×3.65m	主軸方位	東―７度―北	残存深度	約35cm程
備考	138号住→137号住→118号住という重複関係が考えられる。壁溝･柱穴は検出されず、貯蔵穴は南東コーナー部で35×30cmの方形プランである。南西コーナー部に楕円礫が床面に集中して出土。						
カマド	位置形状	東壁ほぼ中央		分類	Ｃ―１	主軸方位	東―11度―北
規模	全長80cm・屋外長80cm・屋内長―cm・袖間幅―cm・燃焼部幅55cm・煙道幅―cm						
備考	118号住との重複で残存状態は悪く、袖等は不明である。燃焼部と思われる部分にわずかに灰面が検出された他、焼土等は明確に残存していない。掘り方段階で円形ピットを検出したが機能は不明。						



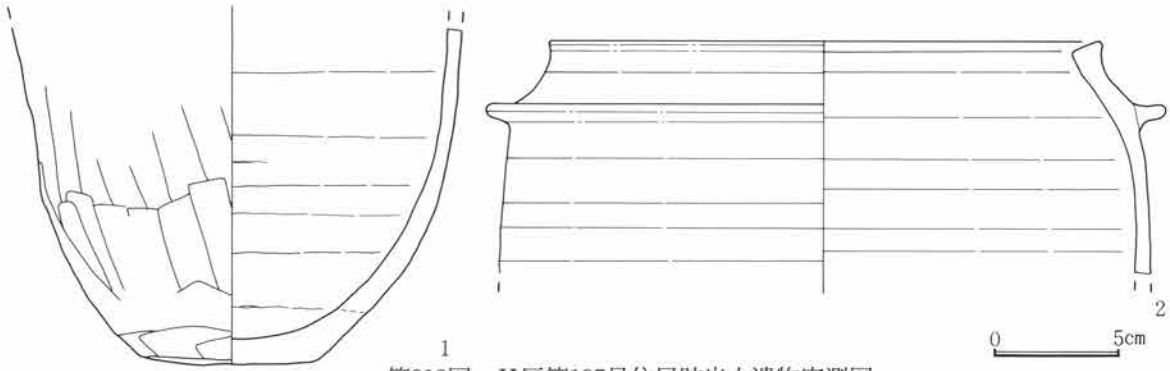
第309図　H区第137号住居跡・出土遺物実測図



第310図　H区第137号住居跡出土遺物実測図



第311図　H区第137号住居跡出土遺物実測図



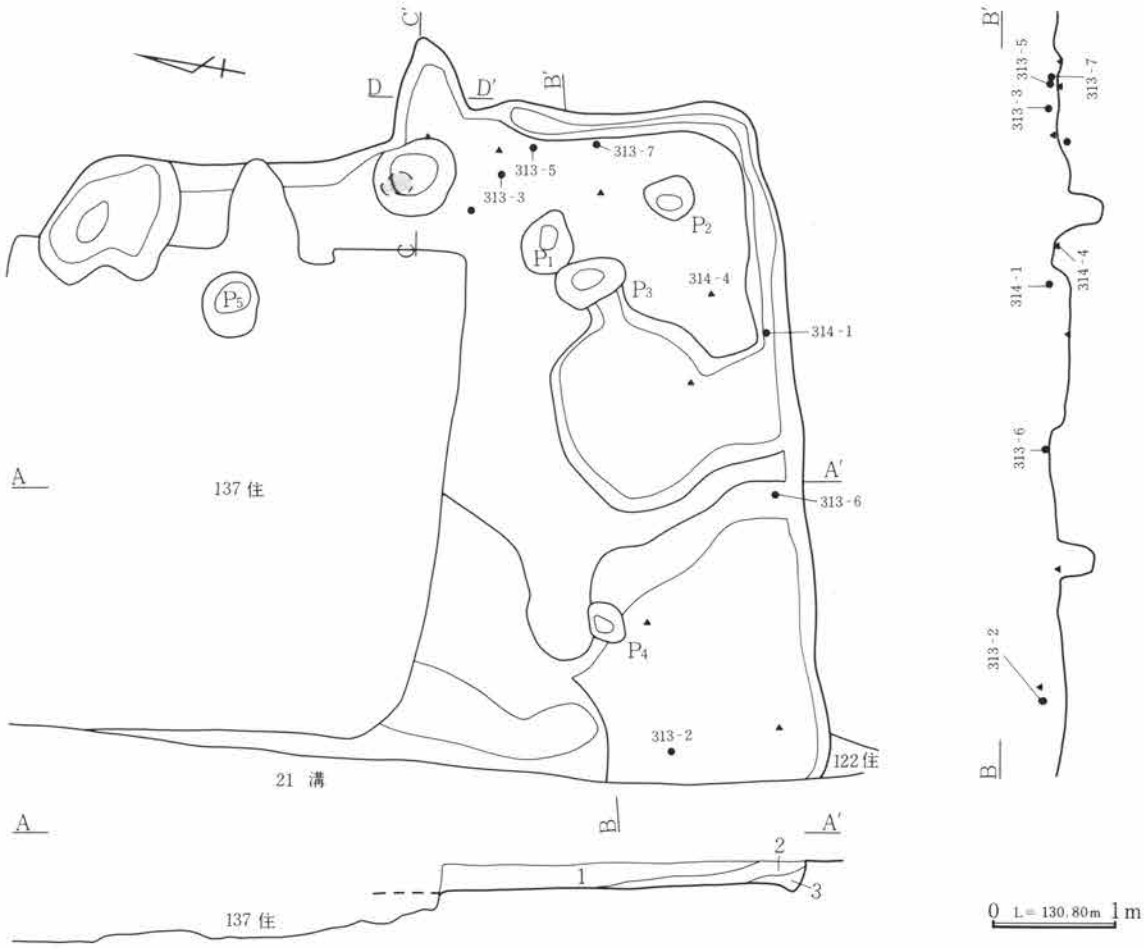
第312図　H区第137号住居跡出土遺物実測図

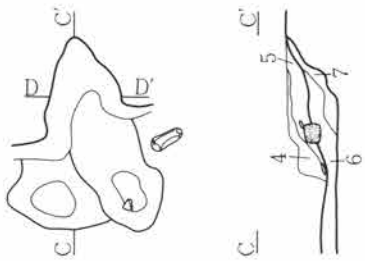
当住居跡は、調査区北寄りの住居跡集中部西寄りに位置している。確認は、Ⅵ層土が黄褐色ローム から暗褐色粘質土へ漸移する場所であるため中間的な土質の中で行った。しかし表中に記載したとおり、３軒の住居跡が重複しているため、平面プランの確認状態から第118号住居跡を先行調査し、その後当住居跡及び第138号住居跡を平行して調査した。その結果平面的には分離ができなかった当住居跡と第138号住居跡とは床面レベルに著しい差があることがわかり、このことによって当住居跡の平面プランを明確に捉えることができた。また、この重複部分のセクションの観察によって、138号住→当住居という前後関係が確認できた。

調査は、床面をベルトで残し他は掘り方まで下げる方法をとった。調査の過程で、床面の硬化は全く検出せず、明確に面的に把握されたわけではないが、セクション面の観察で床面と考えられる層の違いを捉えることができた他、遺物が面的に出土していることからこの面が床面であることの確証を得た。掘り方は、カマド付近と北壁に沿った部分に顕著にみられた。住居跡中央部は第140号土坑によって掘り方面まで攪乱されている。遺物は、際立って多量の出土がみられたわけではないが、自然礫が南西コーナー部に一面的に集中して出土したことが特徴である。このような出土例は他の遺跡でも多々みられるようである。第311図15～17、第312図１・２は当住居跡の時期とは違うものであり、第118号住居跡に帰属すべきものであろう。

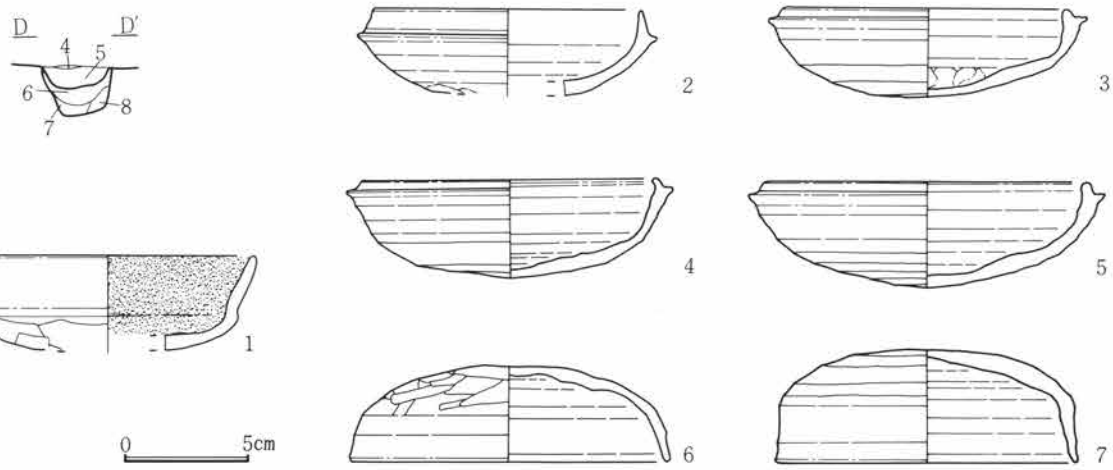
遺構名称	H区第138号住居跡		位置	42～45－H－69～72グリッド内		分類	C－？	時期	II
平面形態	隅丸長方形？	規模	― m× ― m		主軸方位	東－？度－北		残存深度	約20cm程
備考	137号住との重複で北半を失い、西壁部は21号溝との重複で失っている。壁溝は南東コーナー部のみ検出され、柱穴は、検出された５本のピットのうち３本が該当すると考えられる。								
カマド	位置形状	東壁ほぼ中央			分類	C－1	主軸方位	東―20度―北	
規模	全長140cm・屋外長65cm・屋内長75cm・袖間幅―cm・燃焼部幅45cm・煙道幅―cm								
備考	残存は不良でほぼ掘り方の調査しかできなかった。焚口部左側には径約65cm、深度約７cmの円形ピットが検出され、灰が若干検出されている。また、中央部には角礫が検出され、支脚と考えられる。								

当住居跡は、第137号住居跡等との重複によって北半を失っている。確認が比較的浅かったにも拘らず検出された壁高はわずかに20cm程である。また、調査は前述のように最初から掘り方まで下げて行ったが、床面と考えられる面と掘り方面とはあまり差がみられなかった。柱穴は北西部のもの以外は検出されているが、南東部に位置するP_1はほぼ同規模のP_3と重複している。他のP_4・P_5には同様の重複はみられないが、立て替えがあった可能性を示唆するものと思われる。南東コーナー部に位置するP_2は、規模的には柱穴に近いものであるが、その位置から貯蔵穴の可能性が高い。遺物は、ほぼ掘り方面のレベルから出土したものが多く、その年代観からして第137号住居跡とあまり時間差は考えられない。

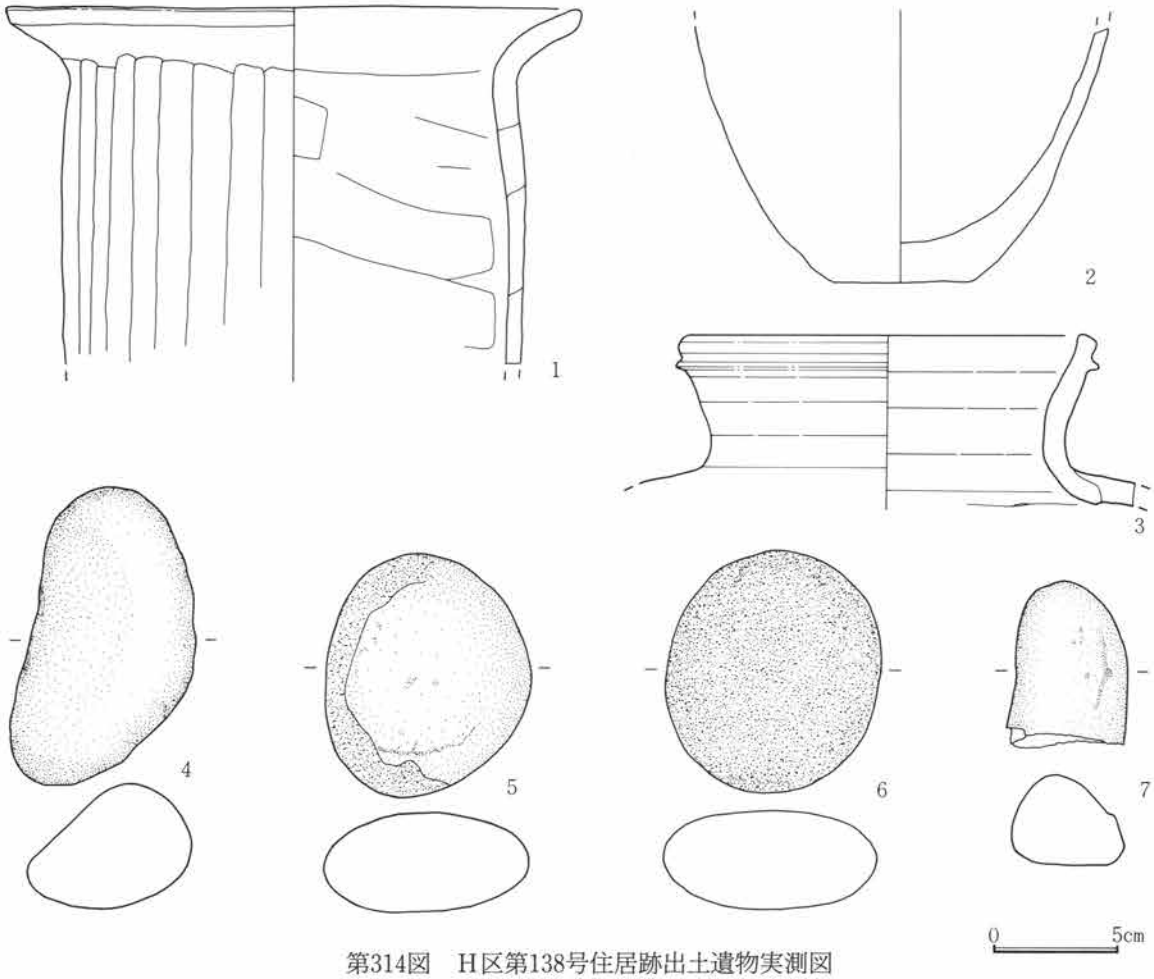




1	暗褐色土	ＣＰを多量、Ⅵ層土粗粒を少量含む。
2	〃	ＣＰとⅥ層土小ブロックを少量含む。
3	〃	ＣＰを微量含む。
4	〃	ＣＰ細粒を少量含む。
5	〃	ＣＰ細粒を微量、灰・焼土粒を多量含む。
6	〃	ＣＰ細粒を少量含み、粗粒である。
7	〃	ＣＰ細粒を微量含み、やや粘性がある。
8	〃	ＣＰ等を含まない。



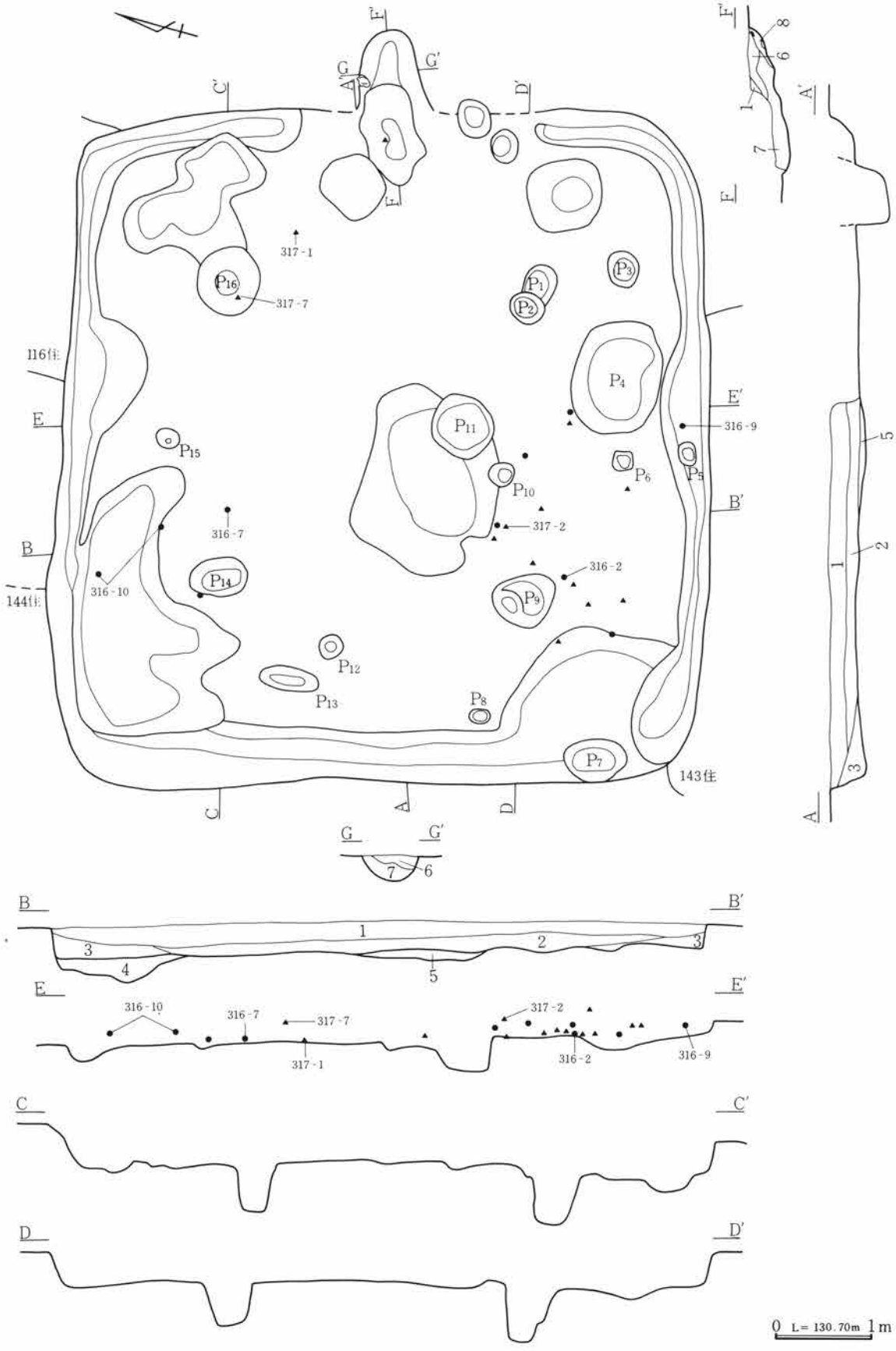
第313図　Ｈ区第138号住居跡・出土遺物実測図



第314図　H区第138号住居跡出土遺物実測図

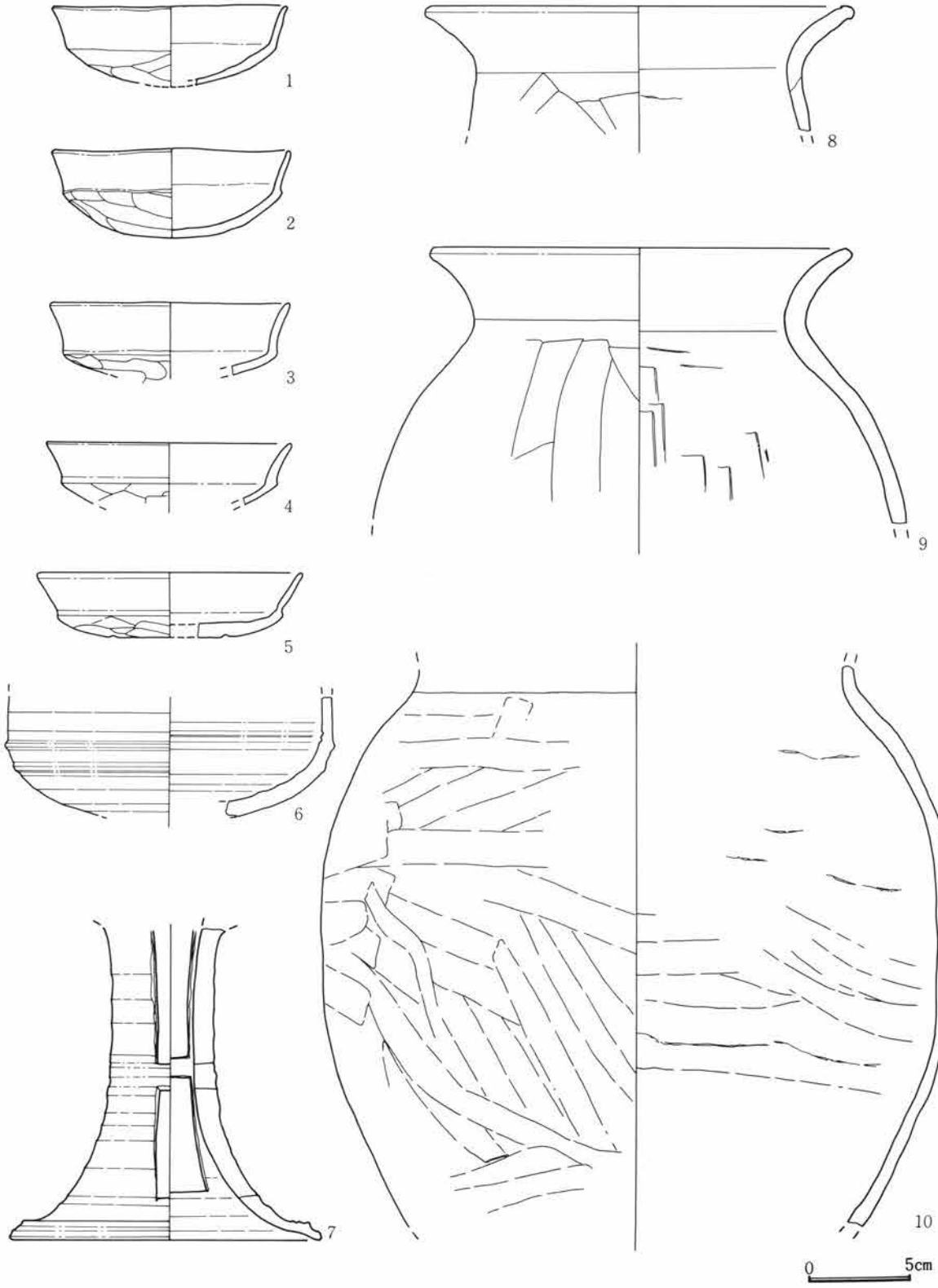
遺構名称	H区第140号住居跡		位置	42～46－H－65～69グリッド内		分類	A－13	時期	II
平面形態	隅丸方形	規模	6.80m×6.50m	主軸方位	東－14度－北		残存深度	約32cm程	
備考	東側は135号住等との重複で残存は不良で、全体に掘り方段階を検出した。柱穴は４本であるが間に小ピットが検出されており、補助柱の存在が考えられる。壁溝は全周すると考えられる。								
カマド	位置形状	東壁ほぼ中央			分類	B-1？	主軸方位	東－17度－北	
規模	全長160cm・屋外長50cm・屋内長110cm・袖間幅―cm・燃焼部幅―cm・煙道幅―cm								
備考	重複によって残存状態は不良である。屋内部に楕円形掘り込みがみられ、袖が屋内側に延びていたことを想定させる。灰・焼土等は全く残存していない。								

当住居跡は、第116・117・135・143・144号住居跡と重複している。前後関係は143号住→当住居→116・117・135号住と考えられる。第144号住居跡は残存状態が悪く、当住居跡との関係は不明である。確認はV～VI層への漸移層中で、C軽石を混入する覆土で、比較的容易にプランの確認ができた。調査は重複が激しいことから、最初から掘り方まで下げて行った。その結果上幅約20～30cm、深度約５～10cmの壁溝がカマド部分を除きほぼ全周検出された。柱穴は、基本的にはP_1・P_9・P_{14}・P_{16}の４本であるが、P_1はP_2と重複が見られる他、P_9・P_{14}にも２本の重複の可能性がある。このことから当住居跡は最低１回の建て替えが想定される。また、表中にも記載したとおり、P_1とP_9の間にP_6またはP_{10}、P_9とP_{14}の間にはP_{12}、P_{14}とP_{16}の間にP_{15}というように、各柱穴を結ぶ直線より外側に位置して、小規模なピットが検出されている。これらの柱

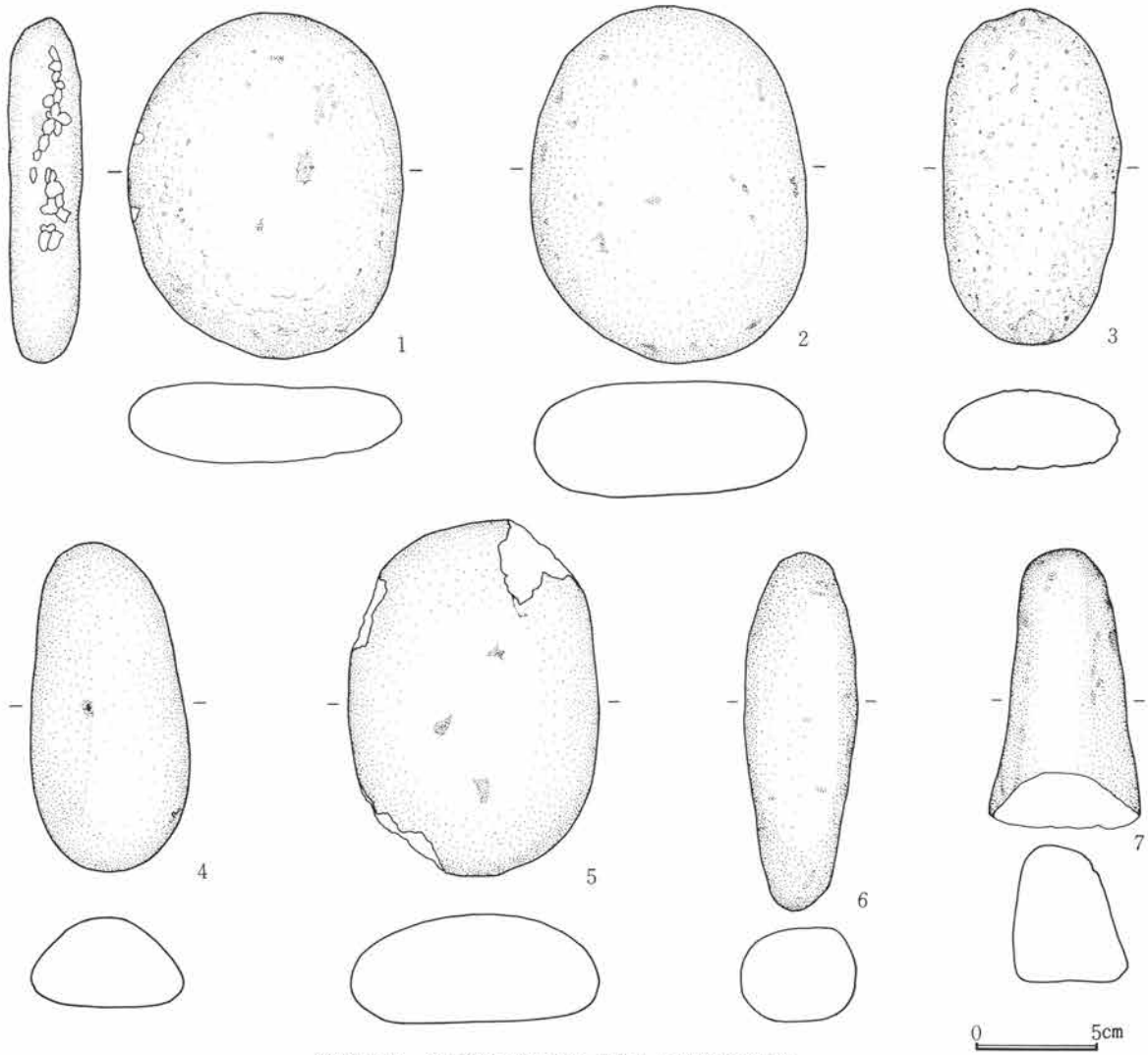


第315図　H区第140号住居跡実測図

1　暗褐色土　ＣＰを多量含む。
2　〃　ＣＰとⅥ層土粒を少量含む。
3　〃　ＣＰを微量含む。
4　黄褐色土　Ⅵ層土主体。
5　暗褐色土　ＣＰを微量含み、Ⅵ層土粒を少量含む。
6　〃　ＣＰを微量、焼土粒を多量含む。
7　〃　灰と焼土粒を多量含む。
8　〃　焼土粒を多量含む。



第316図　Ｈ区第140号住居跡出土遺物実測図

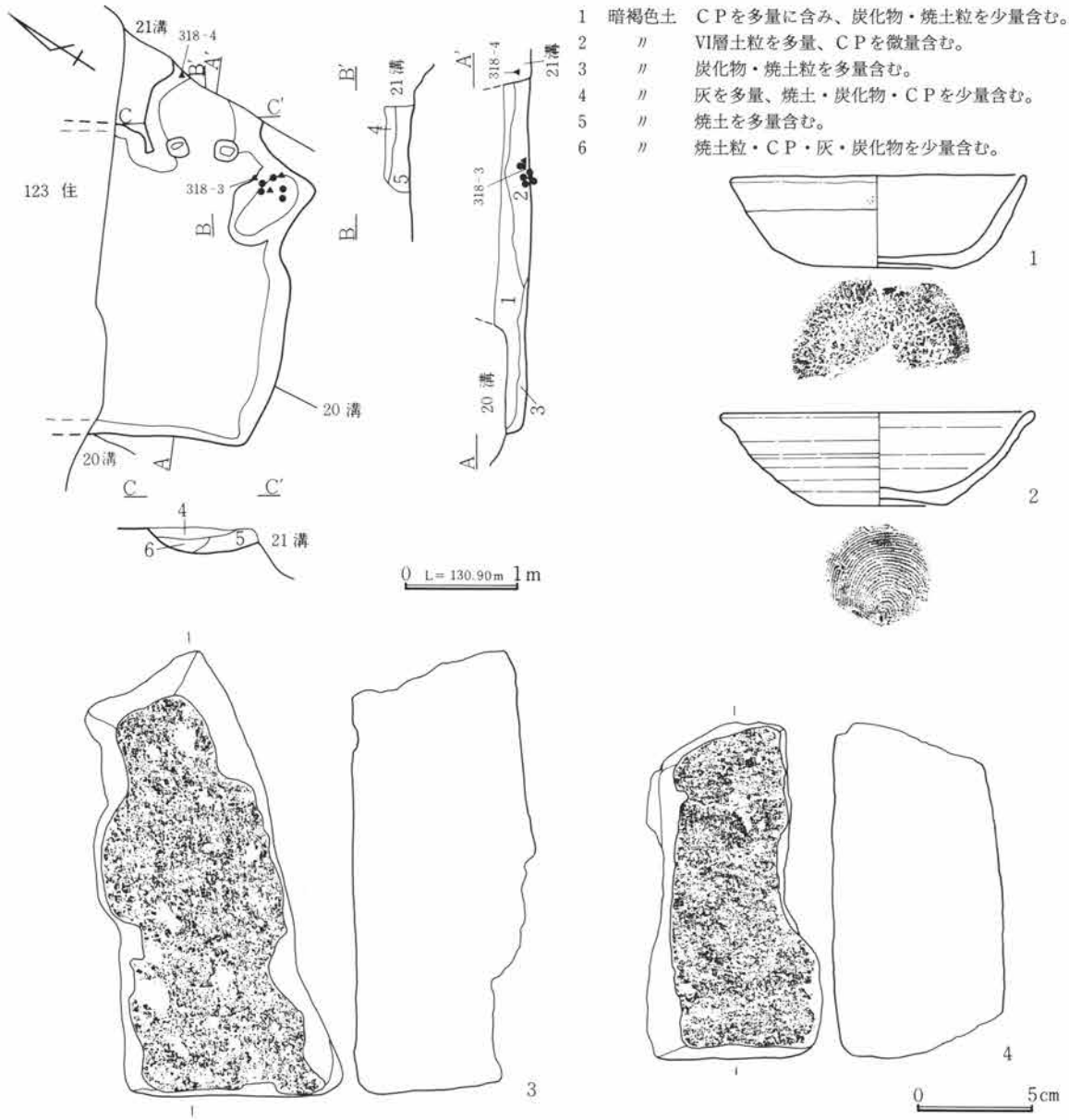


第317図　H区第140号住居跡出土遺物実測図

穴及びピットは、ちょうど同一円周上に乗るような位置関係にある。このことからこれらのピットが偶然の所産とは考えられず、柱穴を補助するような役割が与えられていたものと考えている。貯蔵穴は、東コーナー部ややカマド寄りに位置して検出されている。規模は、約70cm×80cm、深度約58cmで、方形に近い平面形態を有している。掘り方は、貯蔵穴の検出されたコーナー部を除く各コーナー部及び住居跡中央部に検出された。いずれも深度約10～15cmの不整形プランである。

遺物は、掘り方内からの出土はほとんどみられず、大半が床面と考えられる面上に乗るものである。また、貯蔵穴の中からの出土も皆無に近い状態である。これらの遺物の特徴は、土師器主体で僅かに須恵器の高坏がみられる。土師器坏は総ていわゆる「模倣坏」と呼ばれているものだけで構成されており、須恵器高坏は脚部が長脚で、2段透かしを有している。

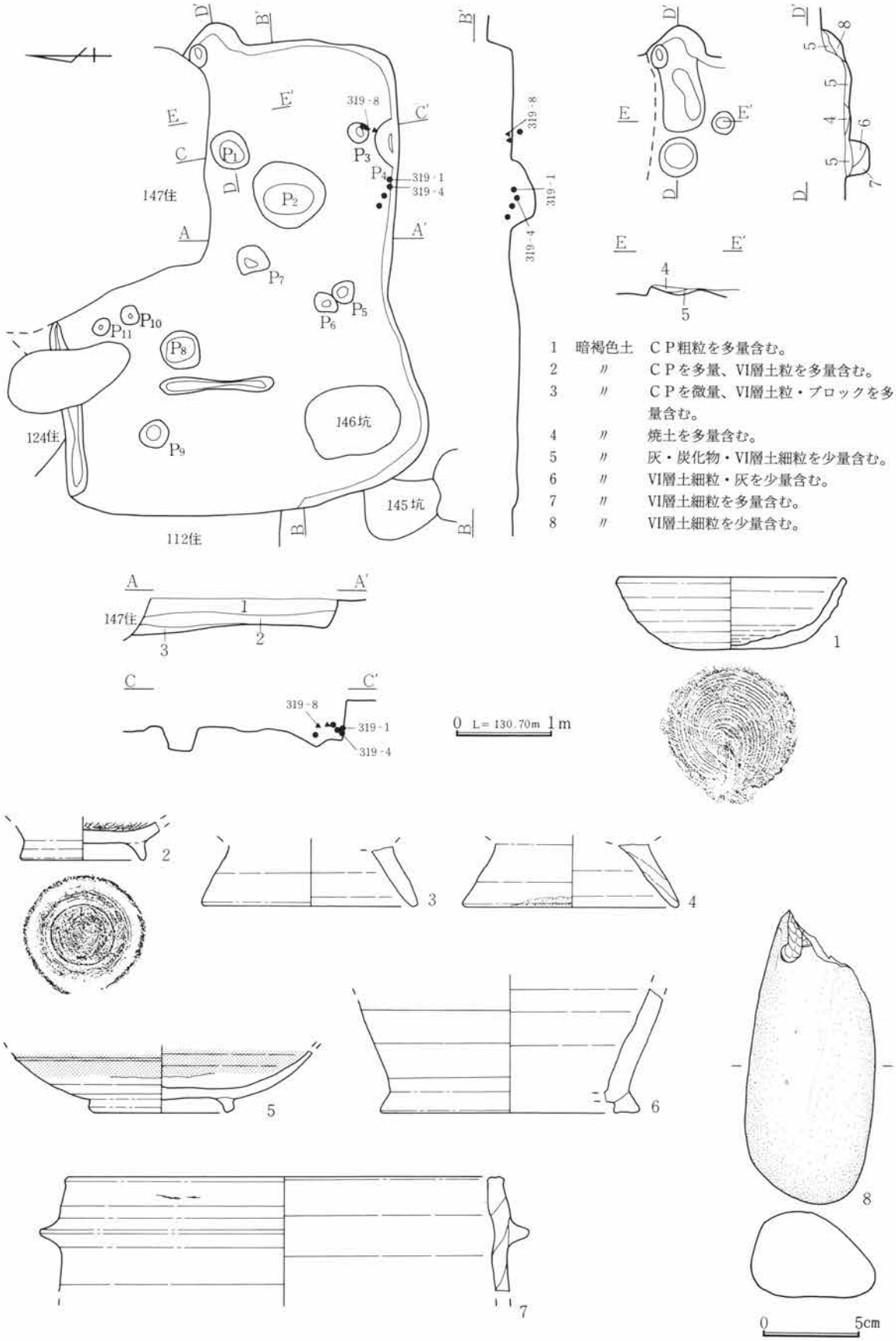
遺構名称	H区第141号住居跡		位置	44・45—H—72～74グリッド内		分類	C—？	時期	Ⅶ？
平面形態	隅丸長方形？	規模	2.65m×　—　m	主軸方位	東—28度—北	残存深度	約16cm程		
備考	北側で123・160号住と重複する。カマドは東壁南寄りにあり、南東コーナー部に貯蔵穴と考えられる楕円形土坑が検出された。柱穴・壁溝は未検出。								



第318図　H区第141号住居跡・出土遺物実測図

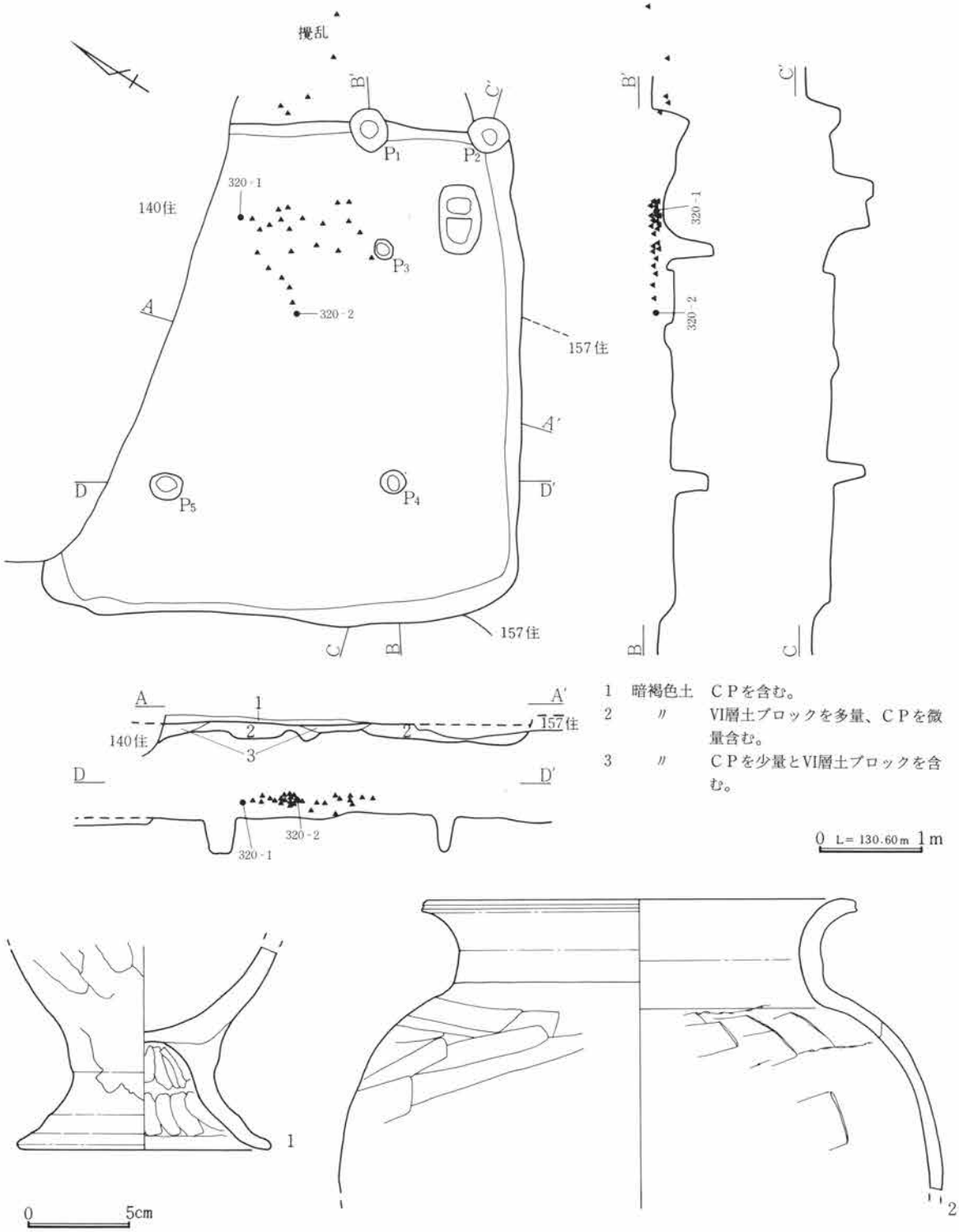
当住居跡は、北側で第123・160号住居跡と重複している。第123号住居跡との重複部分のプランが不明であるのは、重複関係が123住→当住居→160住であるためと考えている。また、カマドの一部は第20号溝によって攪乱されている。平面プランは隅丸長方形と考えられ、カマドは北東壁の南寄りに設置されたものと考えられる。カマドの残存状態は悪く、ほぼ掘り方段階を調査したものと思われる。基本的には燃焼部が壁外に出るタイプであり、袖部と思われる位置にはピットが検出されていることから、第318図３・４等が構築材として使用されていたものと考えられる。遺物は、貯蔵穴内から若干出土した。

遺構名称	H区第142号住居跡	位置	36～38－H－61～64グリッド内	分類	B－2	時期	X
平面形態	隅丸長方形	規模	4.50m×3.75m	主軸方位	東－？度－北	残存深度	約27cm程
備考	カマドは東壁中央と考えられるが、残存は不良である。壁溝は北壁の一部に認められたが全周する可能性はない。ピットが数個検出されているが、配置・深度等規則性はなく柱穴である可能性はない。						



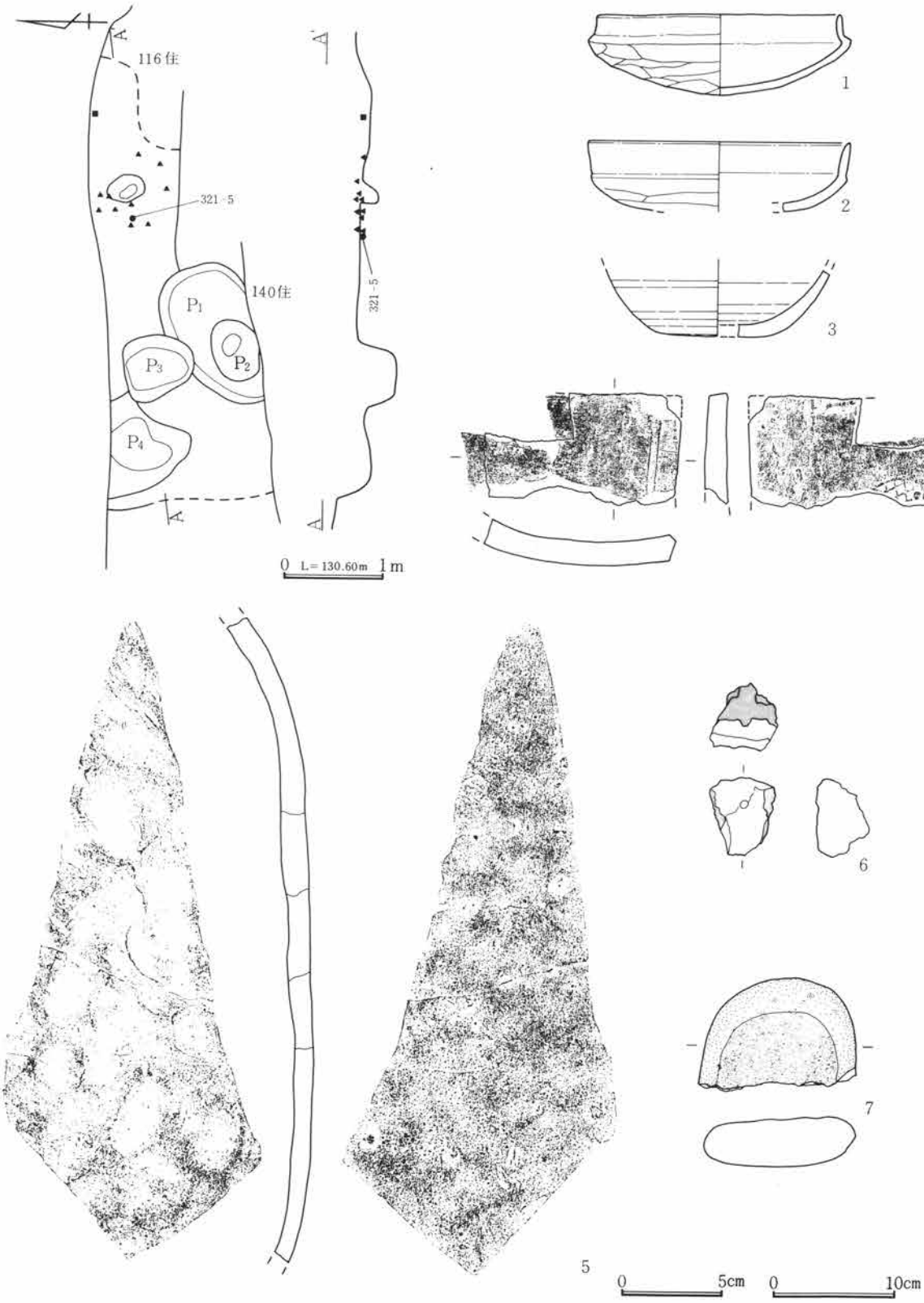
第319図　H区第142号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	H区第143号住居跡	位置	40～43—H—65～68グリッド内	分類	A—？	時期	II？
平面形態	隅丸方形	規模	4.85m×4.60m	主軸方位	東—30度—北	残存深度	約14cm程
備考	北側は140号住との重複で不明である。カマドは東壁にあるものと考えられるが、若干礫の集中する部分以外実態は不明である。柱穴は西側の２本を検出したが、東側は未検出である。						



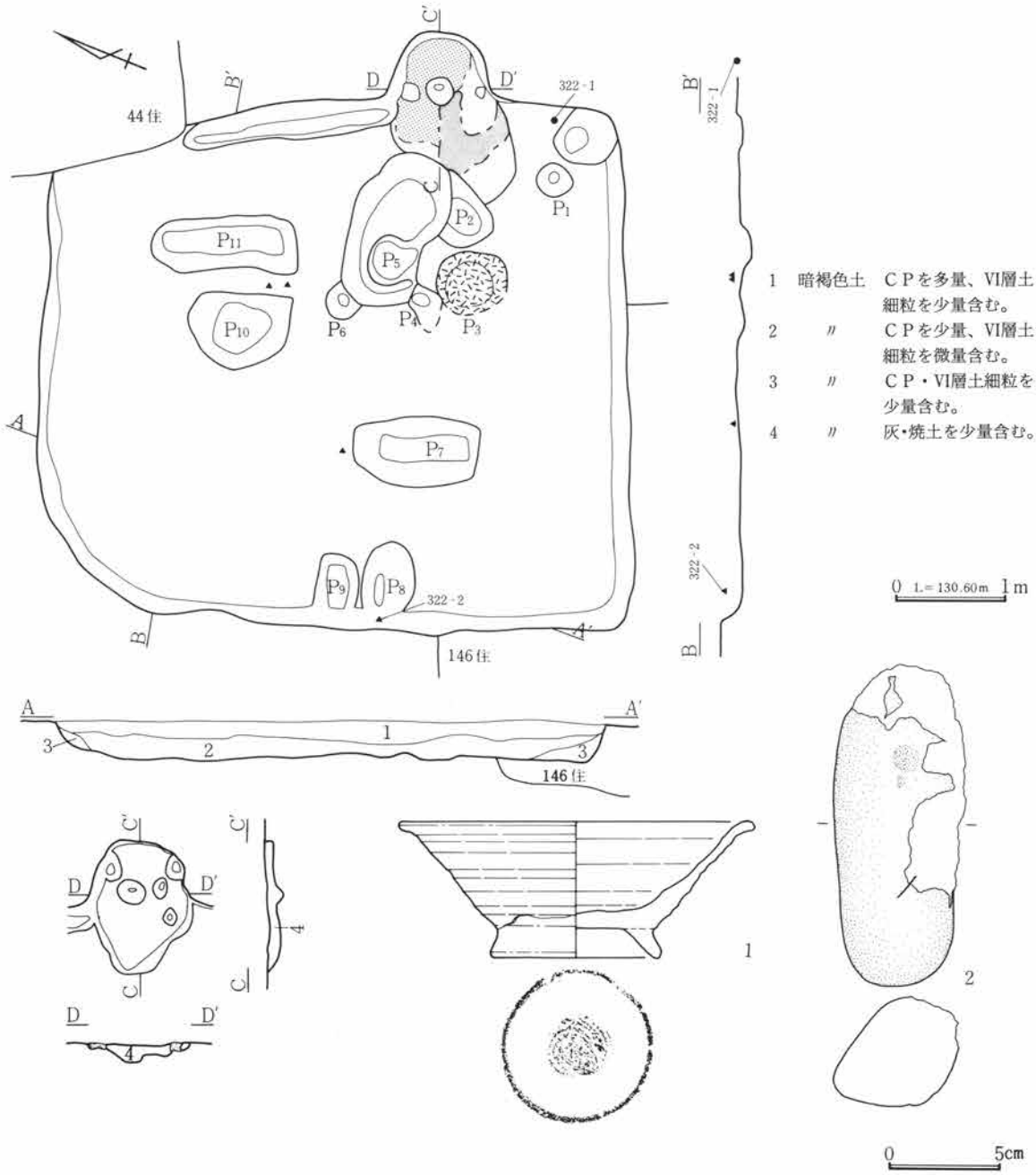
第320図　H区第143号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	H区第144号住居跡		位置	46—H—66～68グリッド内		分類	—	時期	?
平面形態	?	規模	— m× — m		主軸方位	東—?度—北	残存深度	約21cm程	



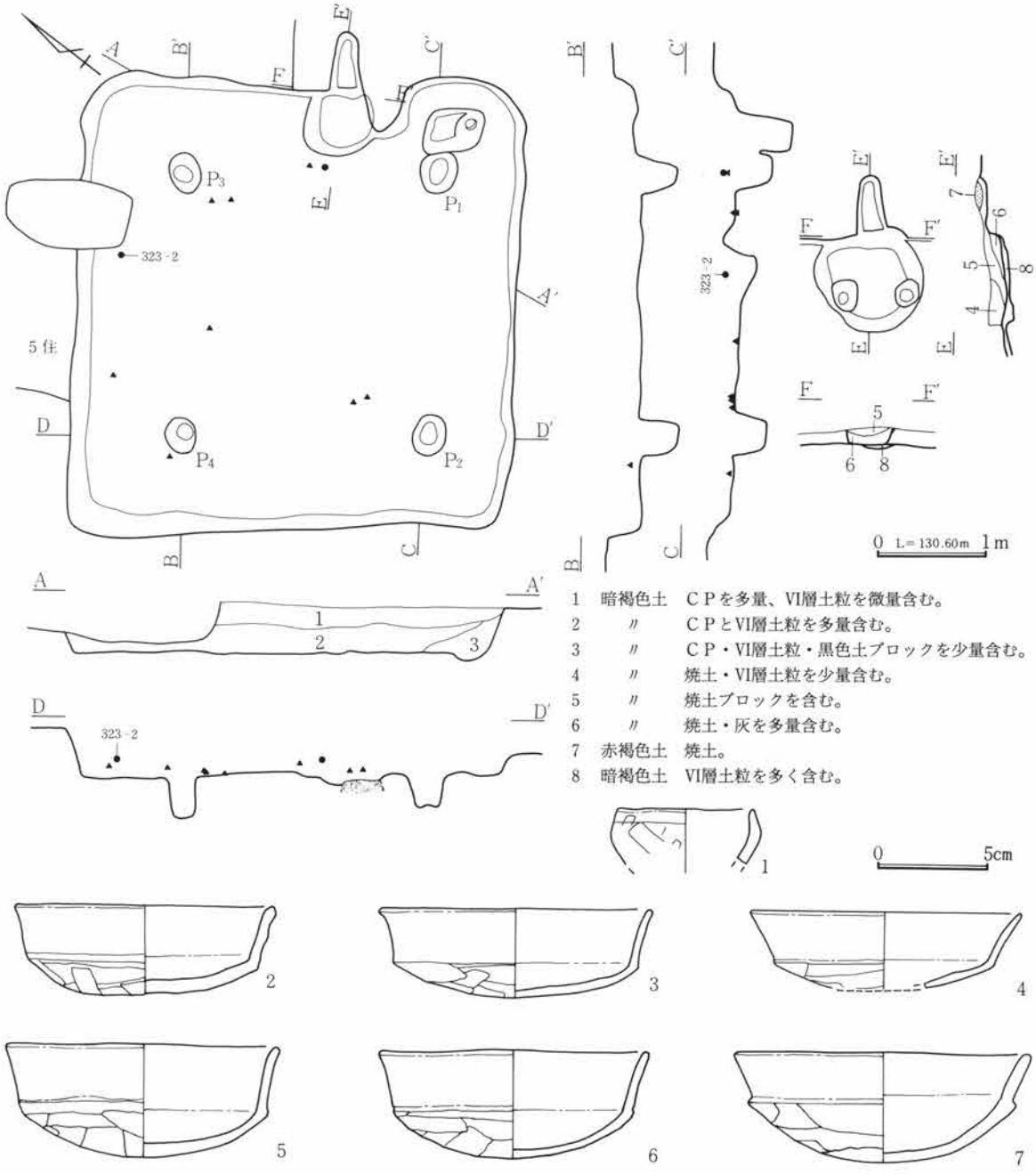
第321図　H区第144号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	Ｈ区第145号住居跡	位置	32～35－Ｈ－60～62グリッド内			分類	Ｃ－？	時期	？
平面形態	隅丸長方形	規模	4.60m×5.25m	主軸方位	東―27度―北		残存深度	約14cm程	
備考	44・146号住との重複で一部失っている。壁溝は東壁に沿って一部みられるが全周はしない。柱穴は未検出で、特記事項はカマド正面に径約65cm、深度約９cmの粘土貼りの円形土坑の存在である。								
カマド	位置形状	東壁南寄り			分類	Ｅ-３？	主軸方位	東―25度―北	
規模	全長115cm・屋外長55cm・屋内長60cm・袖間幅―cm・燃焼部幅80cm・煙道幅―cm								
備考	燃焼面しか残存せず、掘り方の調査である。焼土面は燃焼部中央から奥へ広がり、灰面は燃焼部中央から焚口右側に広がっている。袖は両袖共截石で、埋め込まれた下部のみ残存していた。								

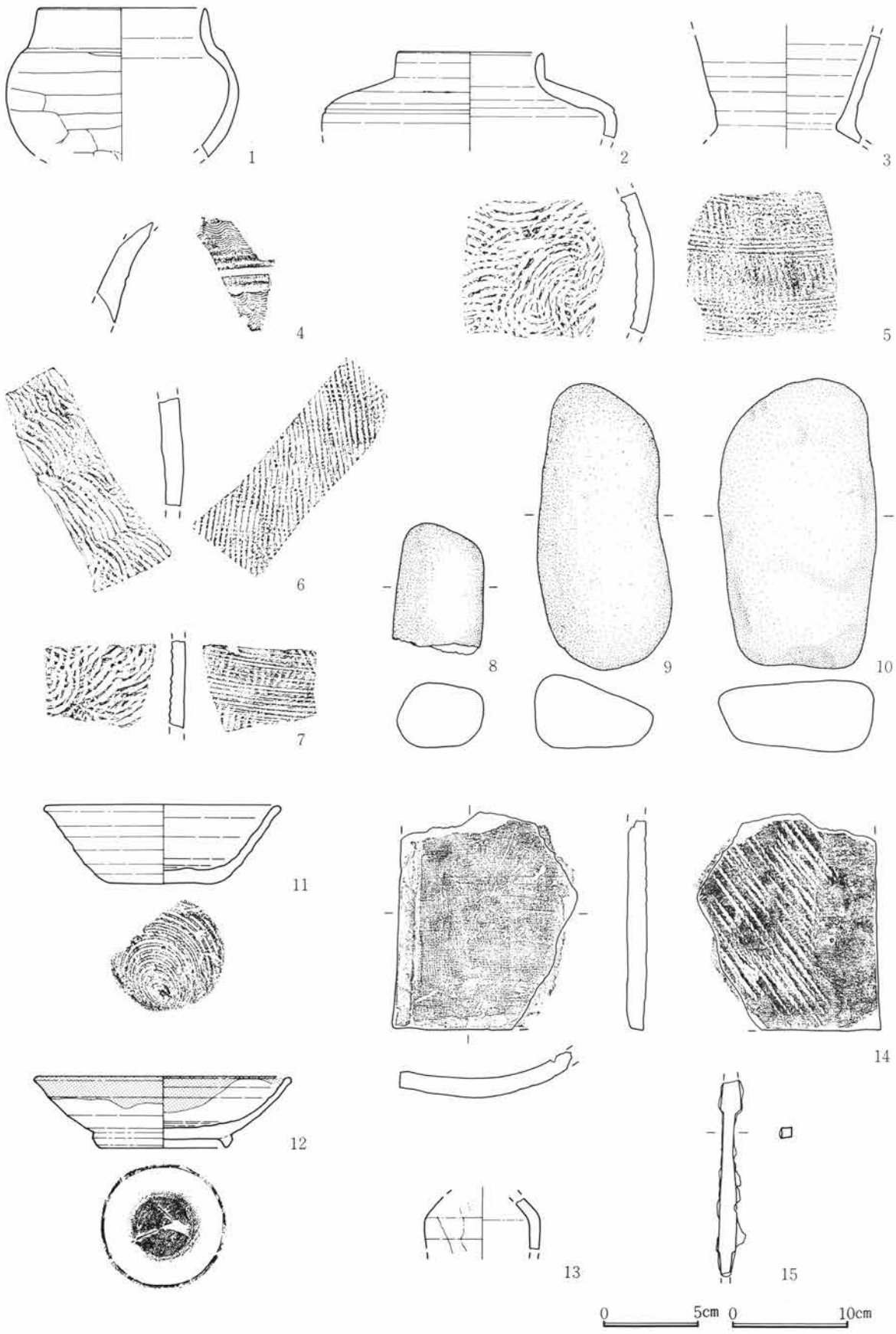


第322図　Ｈ区第145号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	H区第146号住居跡	位置	30～33—H—60～62グリッド内	分類	A—11	時期	II
平面形態	隅丸方形	規模	4.05m×4.00m	主軸方位	東—30度—北	残存深度	約45cm程
備考	145号住等と重複し、セクションから146号住→145号住→44号住の関係が考えられる。壁溝はなく、柱穴は4本であり、径は約30～35cm、深度約34cmである。貯蔵穴は南東コーナー部である。						
カマド	位置形状	東壁中央わずか南寄り		分類	B-2？	主軸方位	東—26度—北
規模	全長110cm・屋外長50cm・屋内長60cm・袖間幅—cm・燃焼部幅—cm・煙道幅15cm						
備考	屋内部はほとんど残存せず掘り方で袖の据え方ピットを1対検出した。燃焼部はごく浅い掘り込みで灰等はみられない。煙道は1段上ったところから水平方向に掘り込まれている。						



第323図　H区第146号住居跡・出土遺物実測図



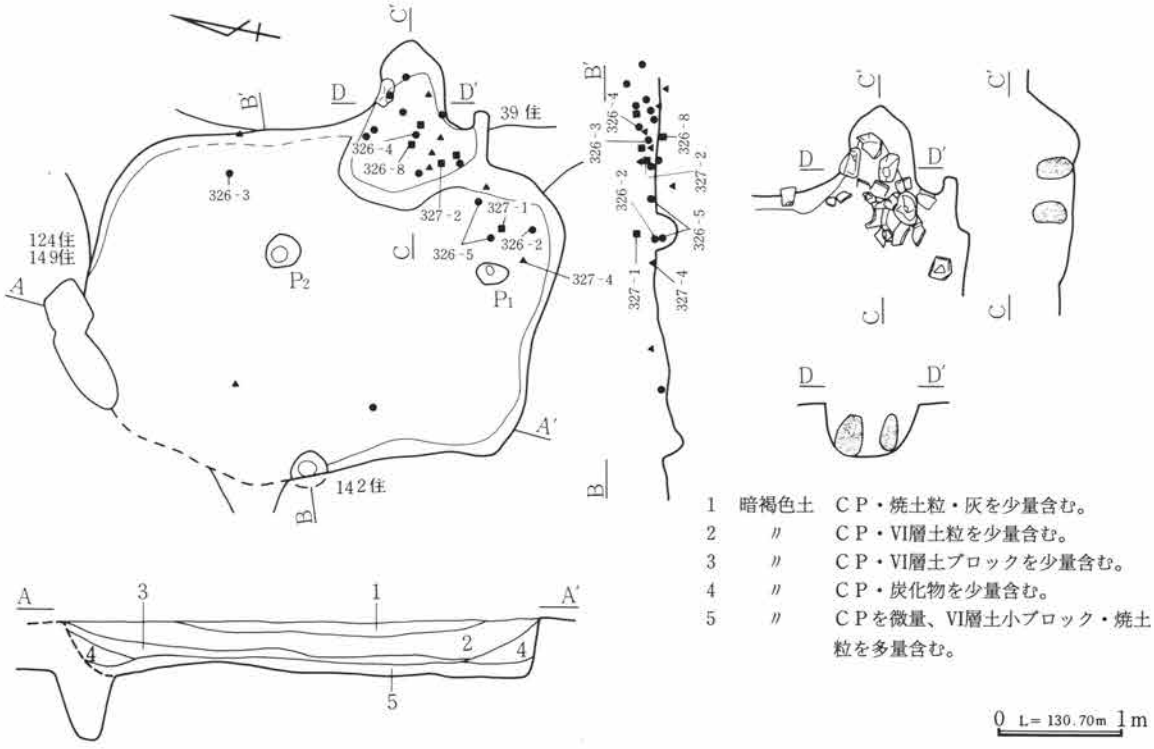
第324図　H区第146号住居跡出土遺物実測図

当住居跡は、調査区中央の住居跡密集部分南寄りに位置し、３軒の住居跡と重複している。確認はⅥ層上面で行った。当住居跡を含む重複遺構の覆土上層は、いずれもＣ軽石を多量に含む暗褐色土であり、確認面の黄褐色土との相違は顕著であり、確認は比較的容易であった。重複する遺構の中で第44号住居跡のプランは、重複部分についても捉えることができたことから、先行して調査を実施した。この前後関係は、重複する位置に設定したセクションによって追証することができた。続いて第145号住居跡は、平面的に前後関係を捉えることができなかったため、共通のセクションベルトを設定してほぼ同時に調査を開始した。このセクションによって当住居→145号住という関係を捉えることができたが、第145号住居跡と当住居跡の床面レベルには約30cmの差があったため、第145号住居跡の粘土貼り土坑を含む床面の一部を失ってしまった。

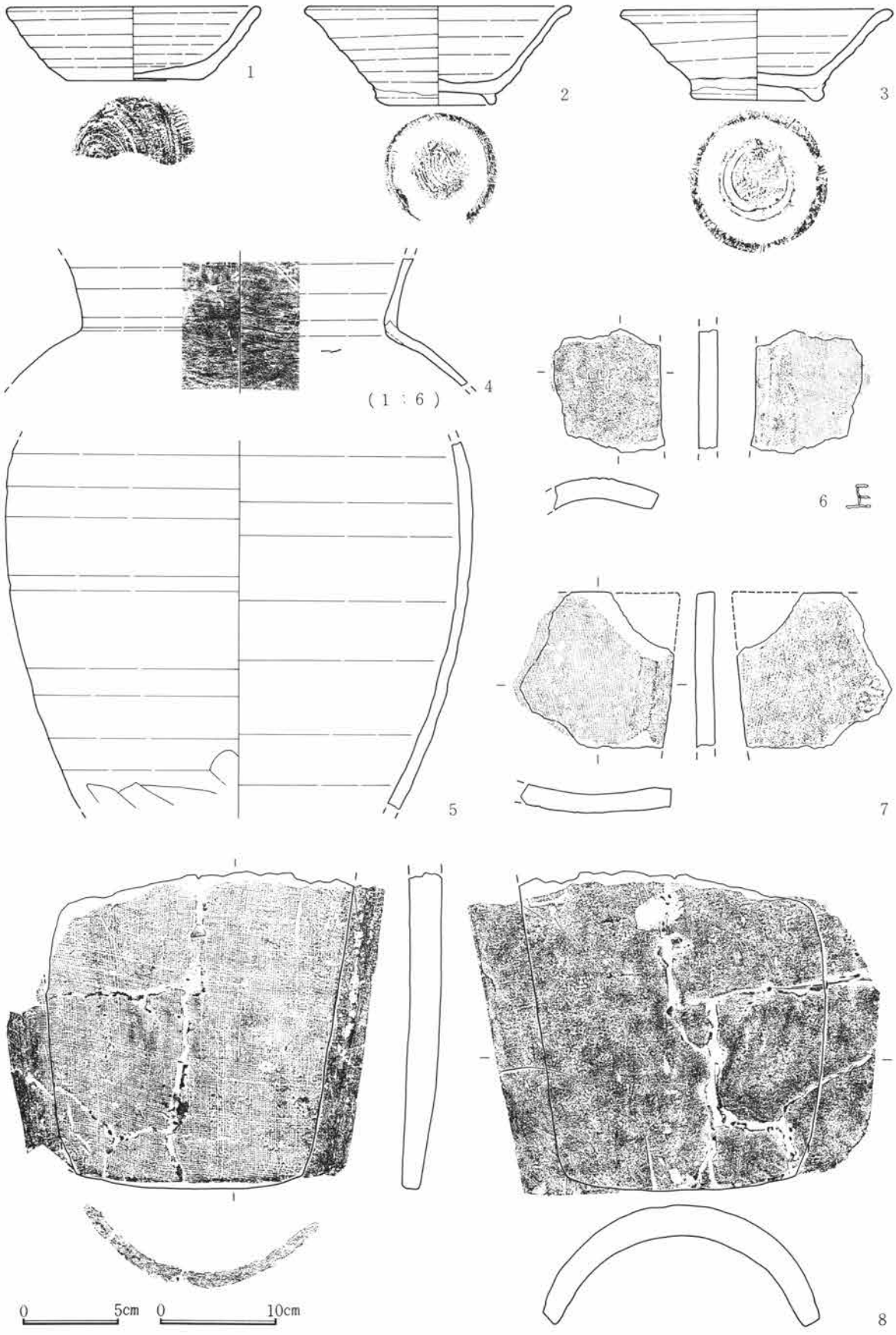
貯蔵穴は、約40cm×50cm、深度約58cmの長方形プランであり、南側の一部は、円形状にさらに約10cm下がっている。また、柱穴P_1がこの貯蔵穴に接するような位置に掘り込まれていることも特徴である。

遺物は、この貯蔵穴内からはほとんど出土しておらず、大半は住居中央部の床面付近から出土したものである。第324図11～14は、当住居跡よりも第145号住居跡に帰属すべきものである。

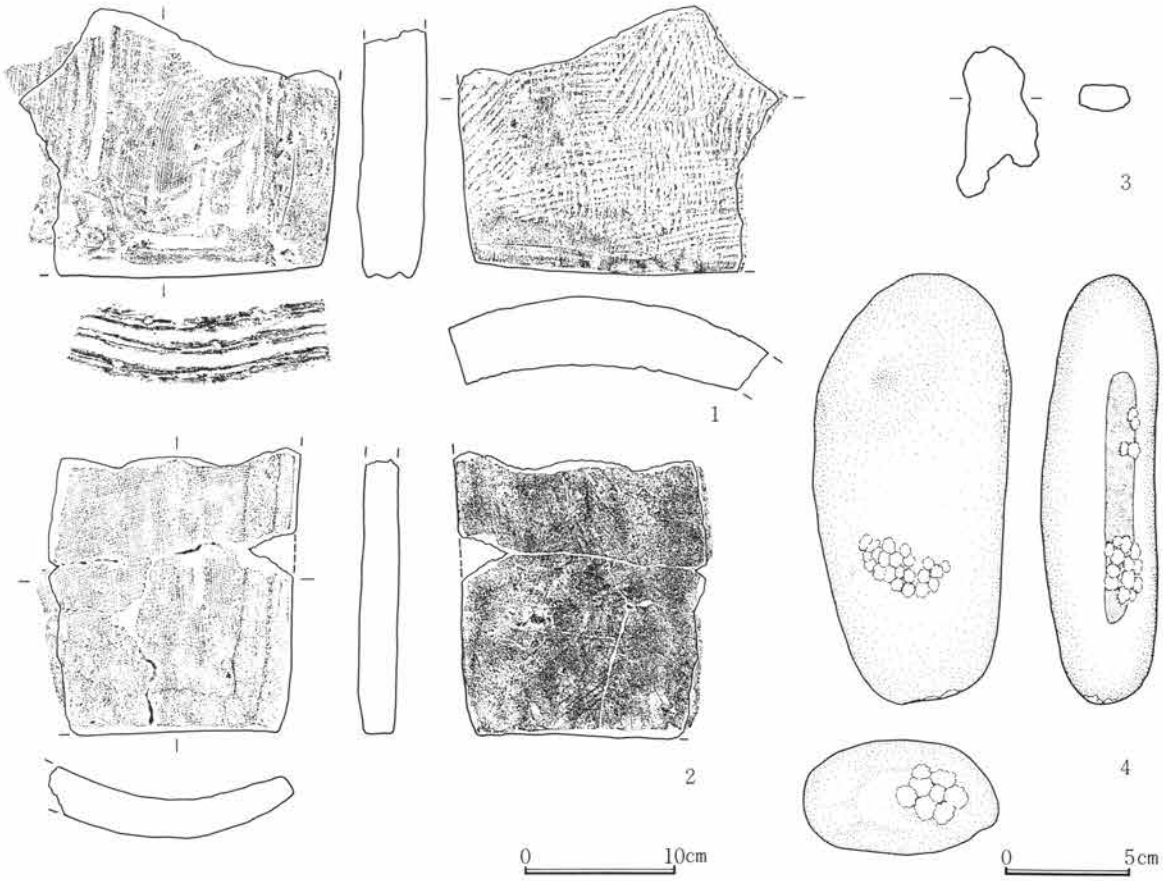
遺構名称	H区第147号住居跡		位置	37～39—H—61～63グリッド内		分類	C—10	時期	X？
平面形態	隅丸長方形	規模	2.75m×3.55m	主軸方位	東—５度—北		残存深度	約25cm程	
備考	他住居との重複が激しく、住居平面も一部曖昧である。床面上でピットが３個検出されたが、規則性は認められない。貯蔵穴・壁溝は未検出である。								
カマド	位置形状	東壁南寄り			分類	E-2？	主軸方位	東—４度—北	
規模	全長140cm・屋外長50cm・屋内長90cm・袖間幅—cm・燃焼部幅45cm・煙道幅—cm								
備考	カマド内からの遺物出土が顕著であるが、屋内側の残存は不良で灰等は未検出である。カマドと壁との連結部には大礫を据えている。この礫の内側は非常に狭く燃焼部とは考えられない。								



第325図　H区第147号住居跡実測図

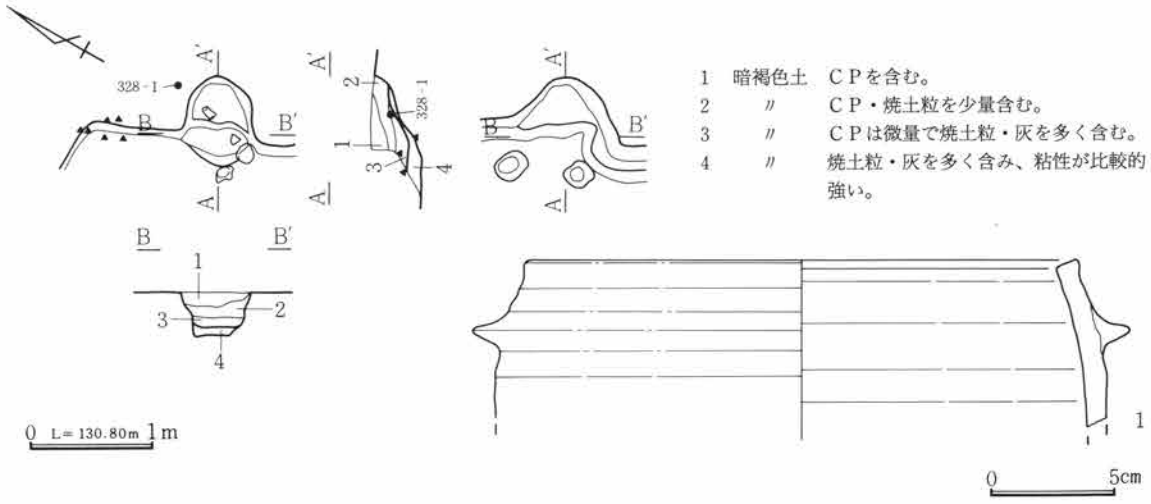


第326図　H区第147号住居跡出土遺物実測図



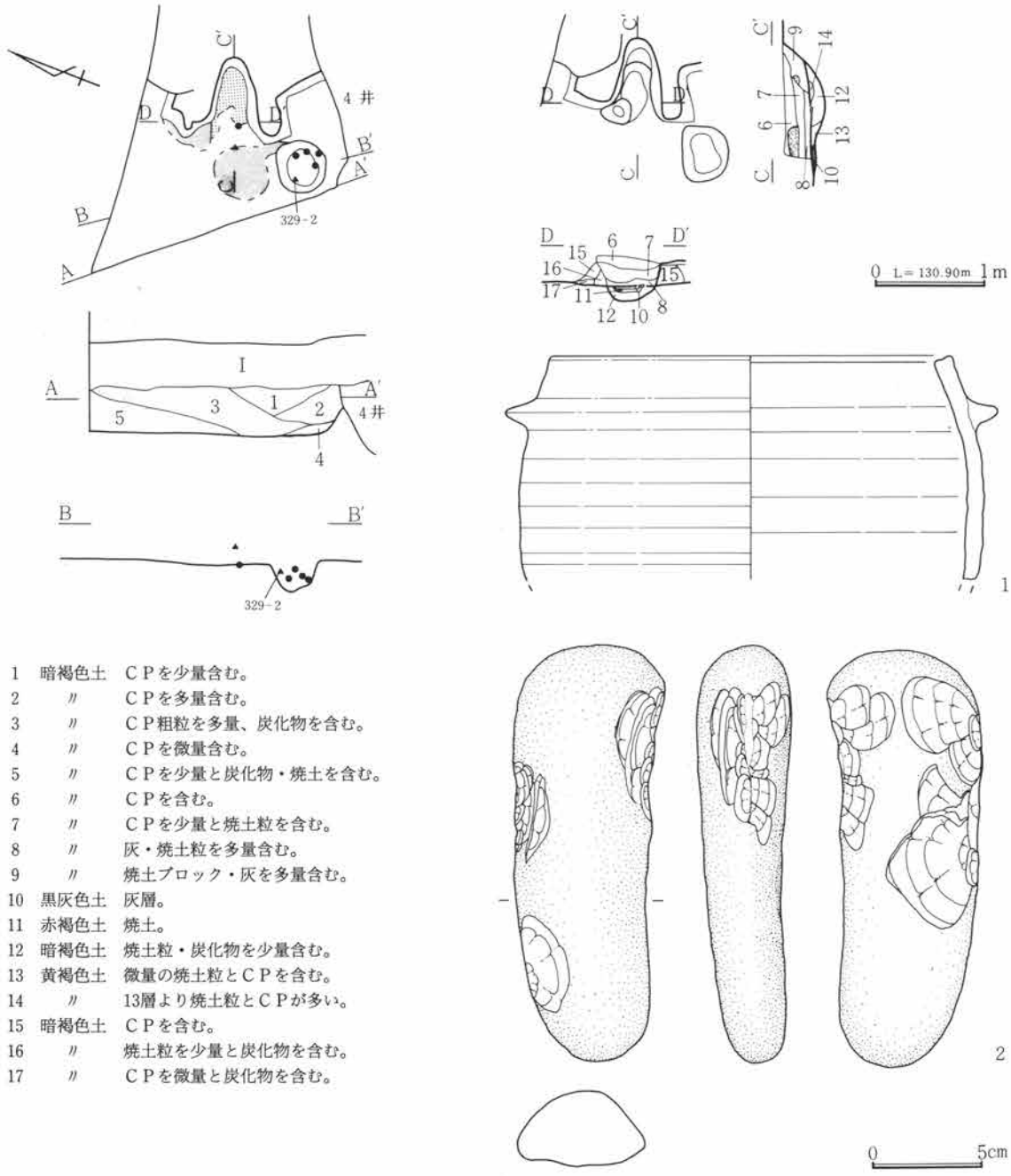
第327図　H区第147号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	H区第154号住居跡	位置	45—H—60・61グリッド内	分類	—	時期	?
カマド	位置形状	東壁の南寄りと考えられる。	分類	C－1	主軸方位	東—29度—北	
規模	全長70cm・屋外長50cm・屋内長20cm・袖間幅—cm・燃焼部幅50cm・煙道幅—cm						
備考	128号住と重複し、128号住より時期的に新しいと考えられるが、平面プランを捉えることはできなかった。カマドも残存は不良で、ほぼ掘り方のみの調査である。						



第328図　H区第154号住居跡・出土遺物実測図

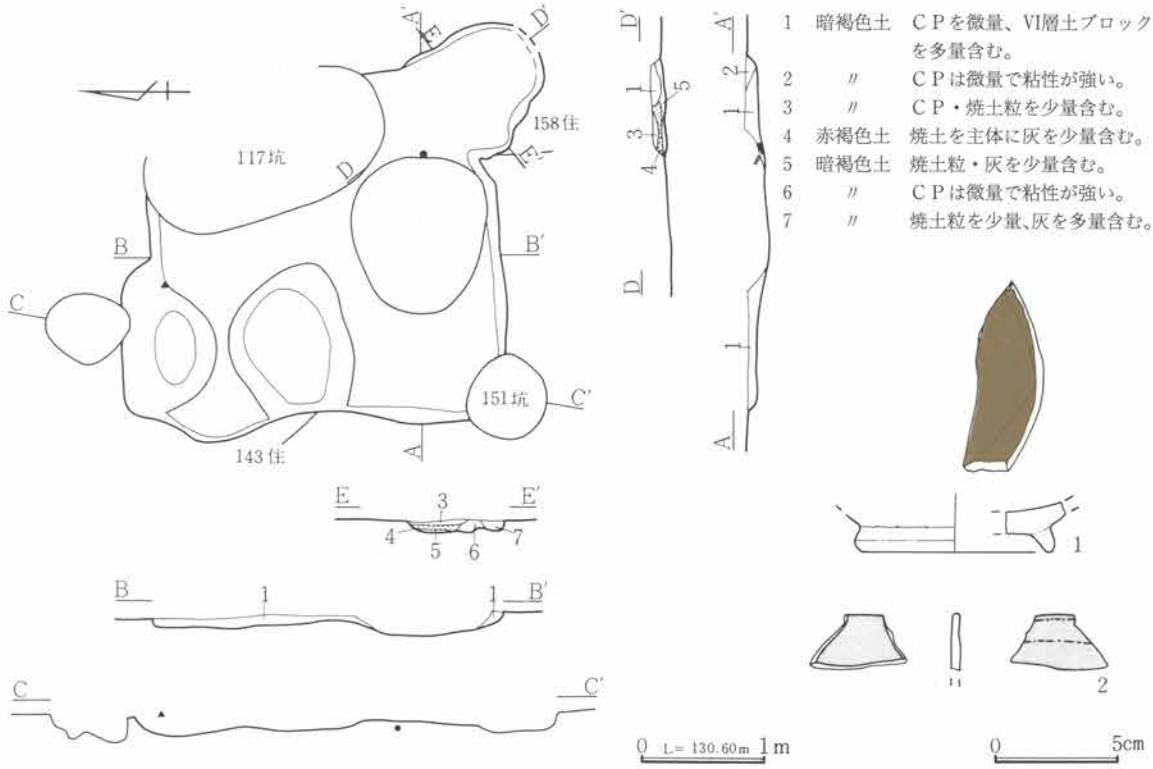
遺構名称	H区第156号住居跡	位置	45・46—H—79～81グリッド内	分類	—	時期	?
平面形態	?	規模	— m× — m	主軸方位	東—?度—北	残存深度	約40cm程
備考	調査区北西端で、カマド周辺のみ検出した。壁溝・柱穴は検出部には認められない。貯蔵穴はカマドすぐ右側で、径約55cm、深度約25cmの円形プランである。遺物は貯蔵穴内のものが多い。						
カマド	位置形状	東壁		分類	B—1	主軸方位	東—14度—北
規模	全長80cm・屋外長40cm・屋内長40cm・袖間幅90cm・燃焼部幅50cm・煙道幅20cm						
備考	焚口部には灰層が広がり、燃焼部から奥には焼土層が顕著である。袖は明確でないが、構築材は痕跡も検出されていない。焚口部中央に扁平な礫を検出したが、底面からは10cm以上浮いた状態である。						



1　暗褐色土　ＣＰを少量含む。
2　〃　ＣＰを多量含む。
3　〃　ＣＰ粗粒を多量、炭化物を含む。
4　〃　ＣＰを微量含む。
5　〃　ＣＰを少量と炭化物・焼土を含む。
6　〃　ＣＰを含む。
7　〃　ＣＰを少量と焼土粒を含む。
8　〃　灰・焼土粒を多量含む。
9　〃　焼土ブロック・灰を多量含む。
10　黒灰色土　灰層。
11　赤褐色土　焼土。
12　暗褐色土　焼土粒・炭化物を少量含む。
13　黄褐色土　微量の焼土粒とＣＰを含む。
14　〃　13層より焼土粒とＣＰが多い。
15　暗褐色土　ＣＰを含む。
16　〃　焼土粒を少量と炭化物を含む。
17　〃　ＣＰを微量と炭化物を含む。

第329図　H区第156号住居跡・出土遺物実測図

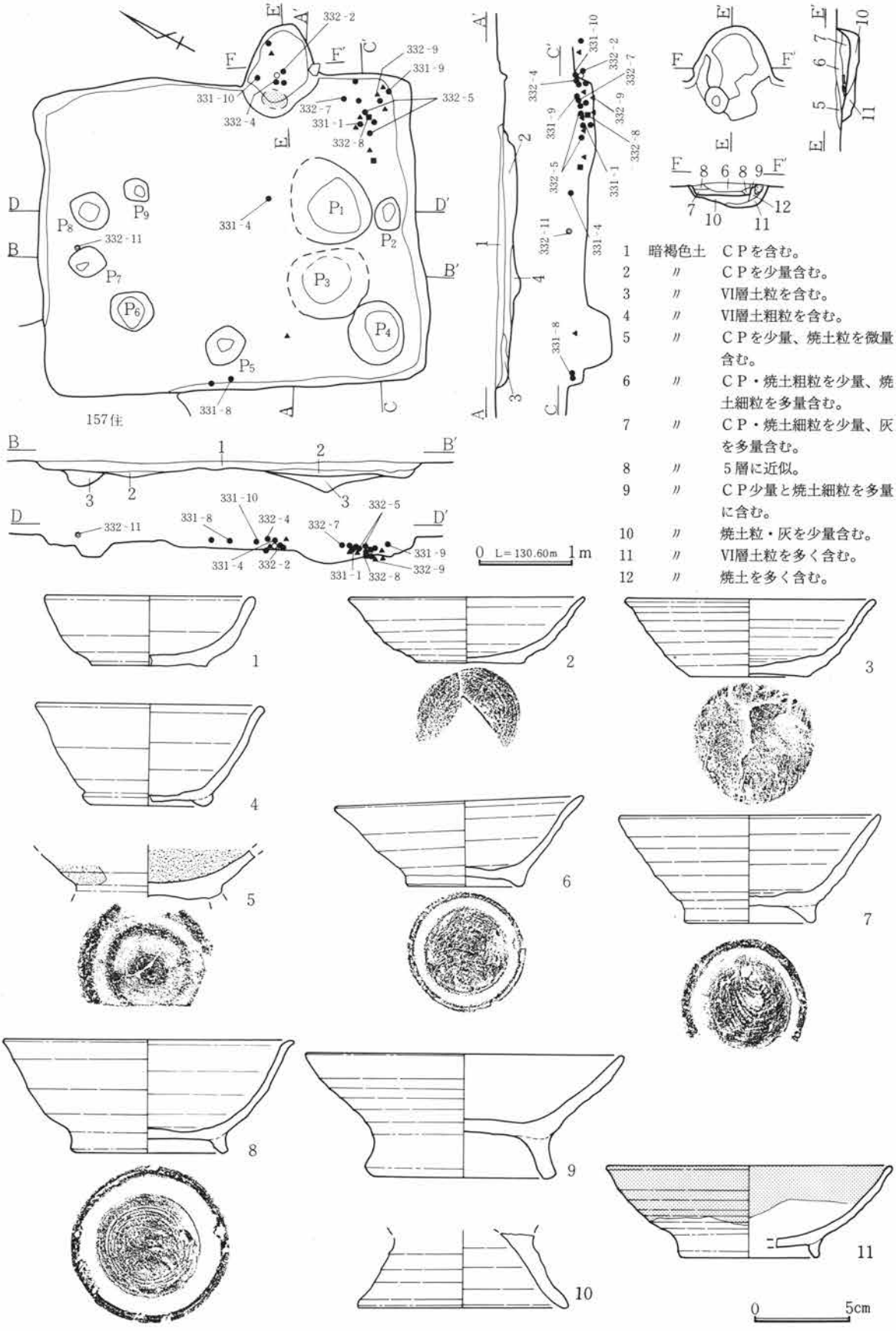
遺構名称	H区第157号住居跡	位置	39～41—H—65～67グリッド内	分類	B—10	時期	?
平面形態	隅丸方形	規模	2.90m×2.90m	主軸方位	東—6度—北	残存深度	約4cm程
備考	柱穴・壁溝等は全く検出されず、掘り方段階の調査で5基の土坑を検出した。遺物は大半が、カマド前面に検出した土坑出土のものである。						
カマド	位置形状	南東コーナー部		分類	E—4	主軸方位	南—38度—東
規模	全長100cm・屋外長100cm・屋内長—cm・袖間幅—cm・燃焼部幅90cm・煙道幅—cm						
備考	残存状態は不良で、袖等の構造は不明である。焚口から燃焼部は平坦で、掘り込み等は認められない。底面上に約4cm厚の焼土層が検出されたが、灰面は検出されていない。						



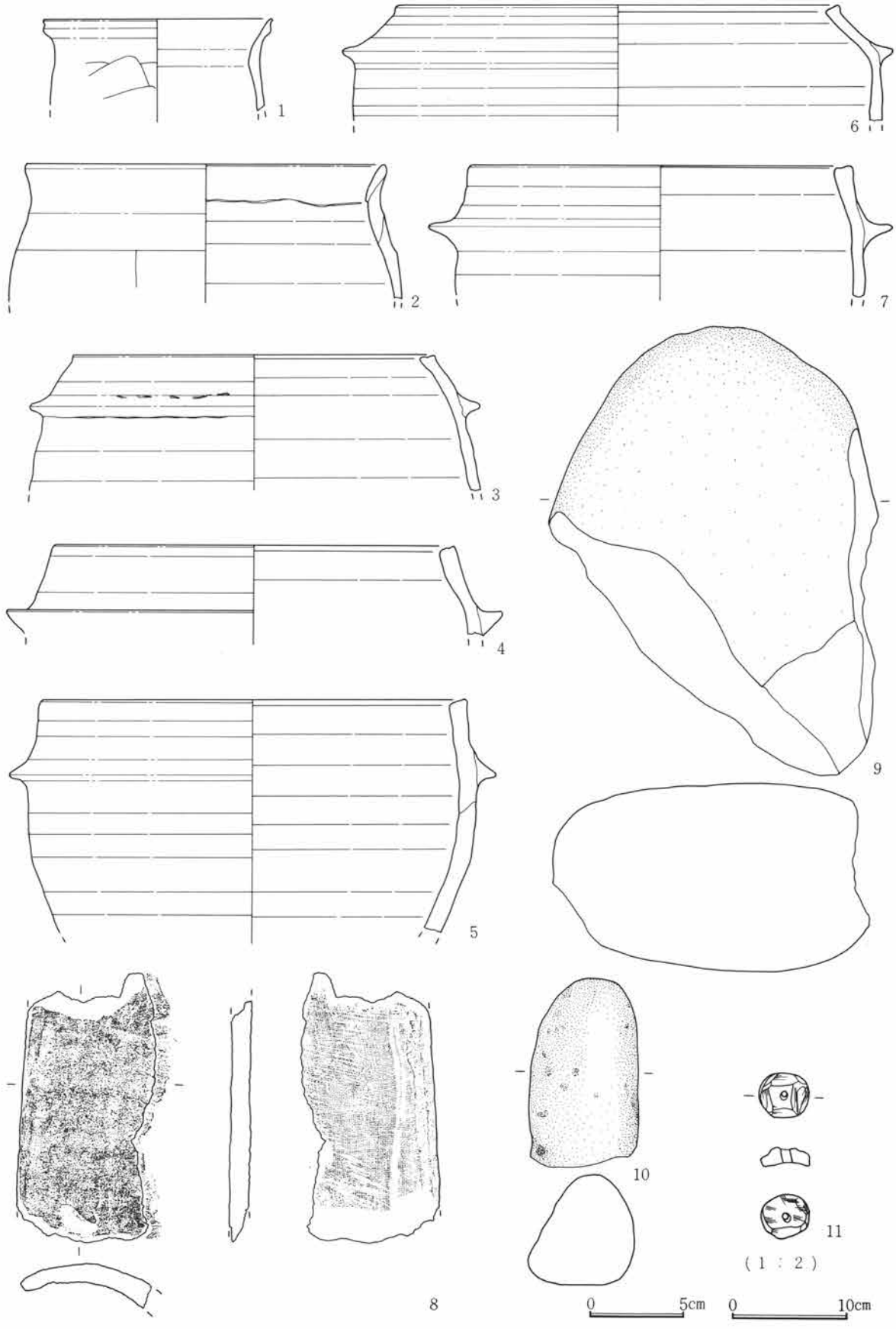
第330図　H区第157号住居跡・出土遺物実測図

当住居跡は土坑との重複が激しく、出土遺物の大半はその帰属が不明のものである。図示したものは覆土中の出土であるが、当住居跡に伴うものである。内面に金が付着していることが特筆される。

遺構名称	H区第158号住居跡	位置	38～40—H—64～66グリッド内	分類	C—10	時期	X
平面形態	長方形	規模	3.20m×3.90m	主軸方位	東—5度—北	残存深度	約12cm程
備考	壁溝は検出されず、貯蔵穴は明確なプランは捉えられなかったが、南東コーナー部の遺物が集中する部分と考えられる。北側に小ピットが、南側に土坑が検出されている。						
カマド	位置形状	東壁南寄り		分類	C—1	主軸方位	東—4度—南
規模	全長95cm・屋外長60cm・屋内長35cm・袖間幅—cm・燃焼部幅60cm・煙道幅—cm						
備考	焚口から燃焼部は約3cmの半円状の掘り込みであり、焼土が円形に検出された。袖は右袖部のみ礫が残存しているが、左袖は何ら痕跡はない。支脚は、燃焼部奥左寄りに検出した礫であろうか？						



第331図　Ｈ区第158号住居跡・出土遺物実測図

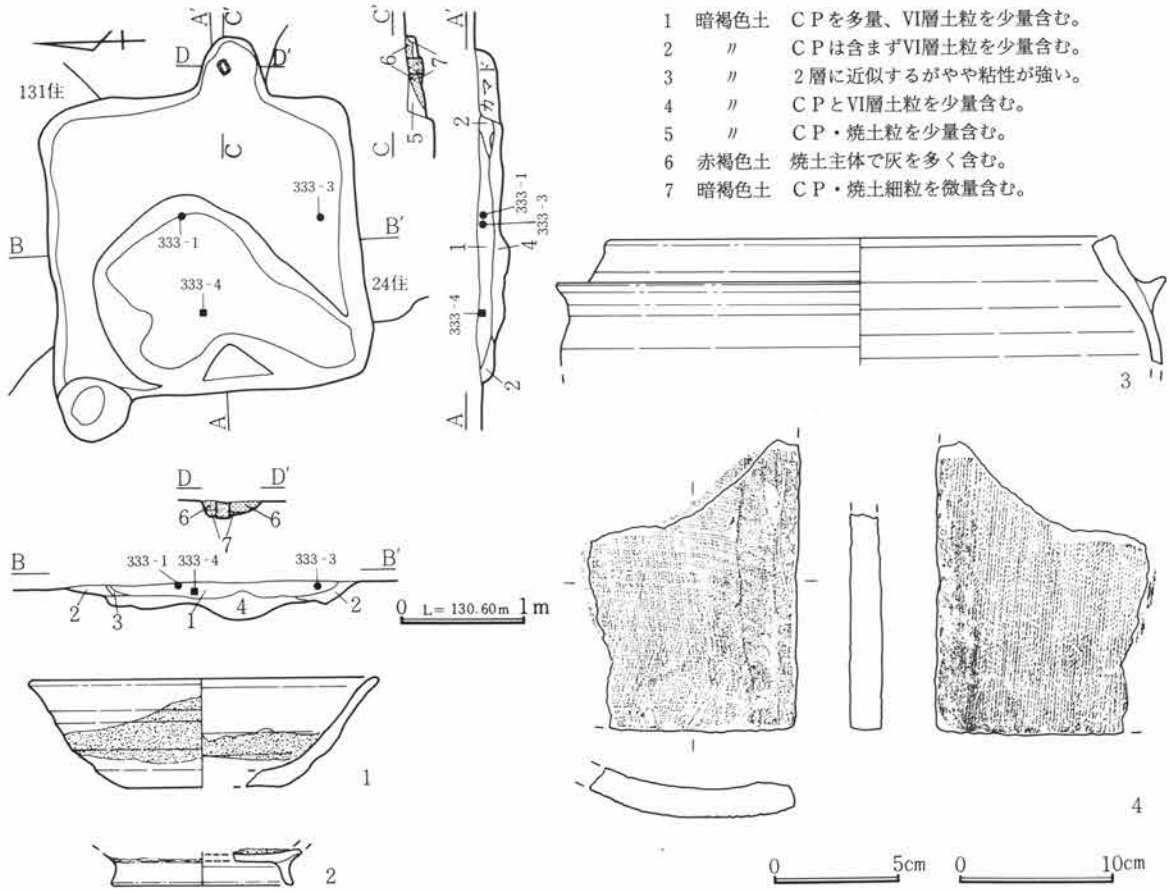


第332図　H区第158号住居跡出土遺物実測図

当住居跡は、調査区中央の住居跡密集部分のやや西よりに位置し、第124・157号住居跡と重複している。確認はⅥ層上面にあたるものであるが、やや粘性を帯びた暗褐色土である。重複遺構の前後関係は、カマドの残存状態を元に判断した。その結果124号住→当住居→157号住という関係が想定された。出土遺物の上からは、第124号住居跡と当住居跡との関係は検証できるものの、第157号住居跡との関係は、出土遺物が微量であり、その遺物から年代的な比較をすることはできなかった。

調査は掘り方段階まで下げておこなったため、床面の状態を子細に観察することはできなかったが、硬化した部分はみられなかった。この段階で円形の床下土坑状の掘り込み、及びピットを検出したが、南西コーナー部に検出した円形土坑は、掘り方がしっかりしており、位置関係と合わせ貯蔵穴の可能性があるものの、遺物は南東コーナー部に集中していることから、この部分である可能性も高い。

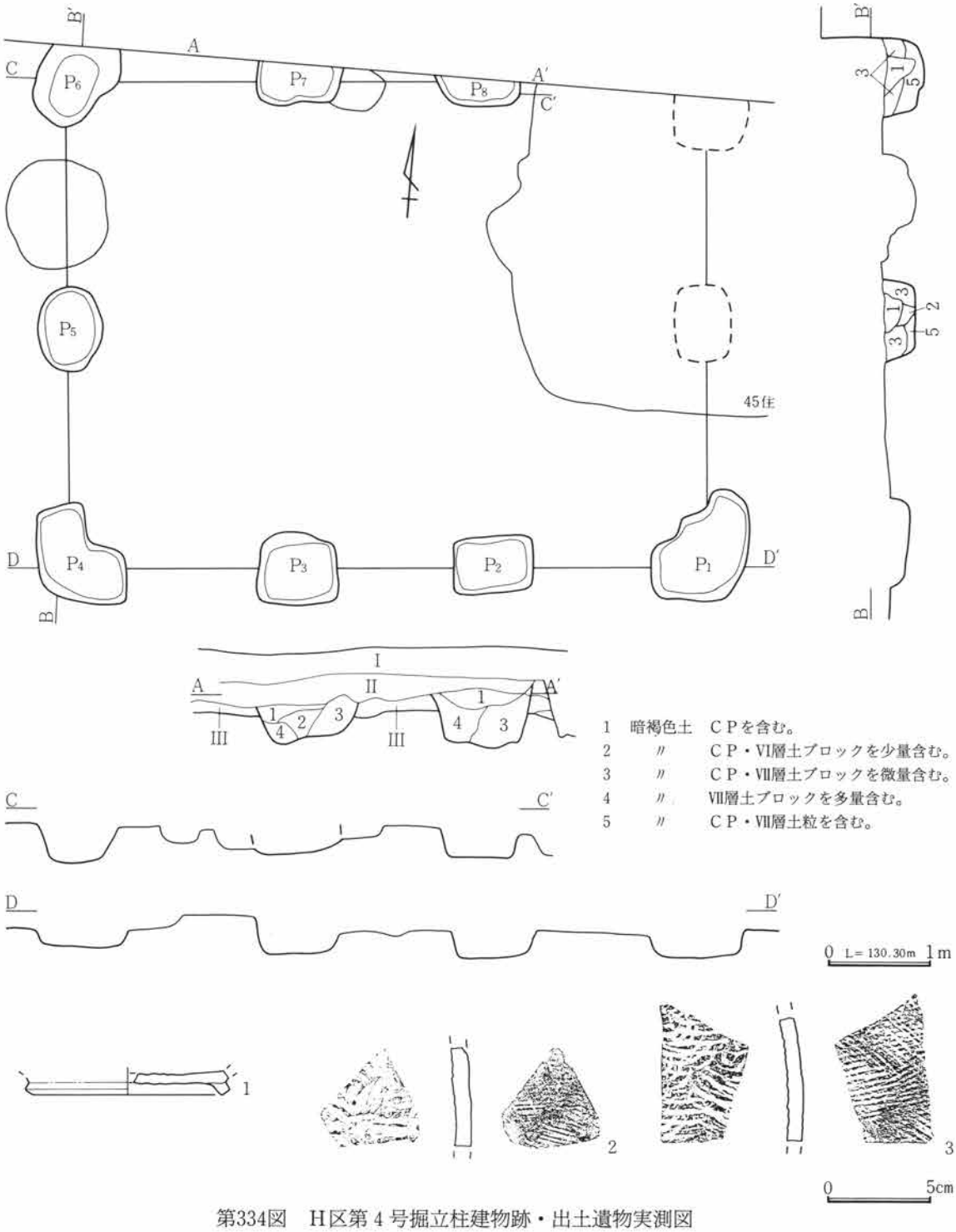
遺構名称	Ｈ区第159号住居跡		位置	40・41—Ｈ—63・64グリッド内		分類	Ａ—９	時期	Ｘ
平面形態	隅丸方形	規模	2.35m×2.45m	主軸方位	東—４度—北	残存深度	約20cm程		
備考	壁溝・柱穴は全く検出されなかった。北西コーナー部には径約55cm、深度約16cmの円形土坑が張り出して検出された。この土坑内から遺物出土は認められなかったが、貯蔵穴である可能性が高い。								
カマド	位置形状	東壁南寄り			分類	Ｅ—１	主軸方位	東—１度—北	
規模	全長65cm・屋外長45cm・屋内長20cm・袖間幅80cm・燃焼部幅50cm・煙道幅—cm								
備考	燃焼部には約７cm厚の焼土層がほぼ全面に認められた。袖は残存せず、わずかに痕跡がわかる程度である。燃焼部奥左寄りに角礫が据えられており、焼土層下に入っていることから支脚と考えられる。								



第333図　Ｈ区第159号住居跡・出土遺物実測図

堀立柱建物跡

H区第4号堀立柱建物跡



第334図　H区第4号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

今回の報告区では古代に属する掘立柱建物跡は、第4号掘立柱建物跡1棟だけである。当跡は調査区北東側の43～46—H—50～53グリッド内に位置し、北側柱穴列の一部は山王線の下にかかるため未調査である。確認は黄褐色VI層土上面で行ったが、確認状態から当跡よりも新しい遺構である第8・45・62・71号住居跡

と重複しているため、実際に全体像が捉えられたのは、これらの遺構の調査が終了した段階である。柱穴は８本検出したが、第45号住居跡との重複によって２本が未検出と考えられ、10本の柱穴で構成された１棟と考えられる。

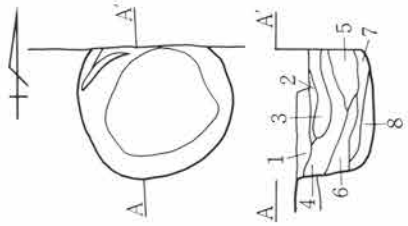
柱穴配置は、２間×３間で、規模は、南側東西長約6.00ｍ、西側南北長約4.60ｍである。柱穴は楕円形のものも一部みられるが、基本的には長方形を呈している。規模は約70㎝×80㎝、深度約50㎝を平均としており、コーナーに当たる柱穴は「Ｌ」字形をしたものである。

柱間長の実長は約2.0～2.2ｍであり、平均するとほぼ約2.1ｍの間隔である。これを約30㎝＝１尺として換算すると、約７尺という値が得られる。

主軸方位は南側柱穴列を基本として計測すると、東―６°―北であり、上野国分僧寺・尼寺中間地域（２）に掲載した、Ｈ区（第11号溝状遺構）南側部分で検出されている３棟の掘立柱建物跡が、ほぼ主軸方位が東西方向を向いているのと比較すると、主軸の振れがやや大きい。したがって先の第１～３号掘立柱建物跡との関係よりも、当調査区北側に展開している数時期に及ぶ掘立柱建物跡群との関係を考えなければならない。時期は第45号住居跡より古いこと以外特定できない。

土坑

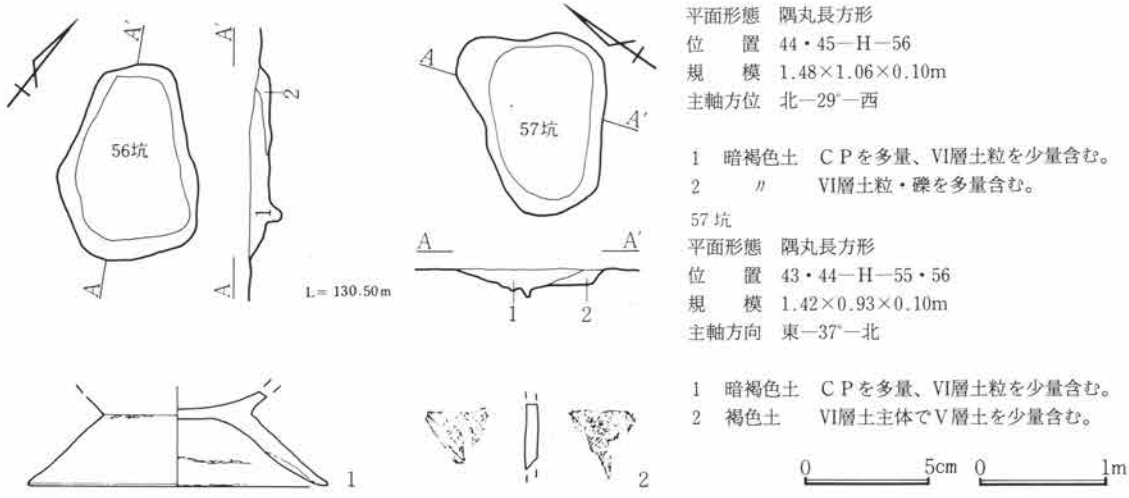
Ｈ区第48号土坑



平面形態　円形
位　　置　45・46―Ｈ―54・55
規　　模　1.23×（1.02）×0.62m

1　暗褐色土　ＣＰを少量とⅥ層土粒・Ⅶ層土ブロックを多量含む。
2　〃　Ⅵ層土粒を少量含む。
3　〃　Ⅶ層土ブロックを多量含む。
4　〃　Ⅵ層土粒を微量含む。
5　〃　Ⅴ層土とⅦ層土ブロックの混土。
6　〃　３層に近似。
7　〃　Ⅴ層土主体にⅦ層土ブロックを含む。
8　〃　Ⅵ層土粒・Ⅶ層土ブロック主体。

Ｈ区第56・57号土坑



56坑
平面形態　隅丸長方形
位　　置　44・45―Ｈ―56
規　　模　1.48×1.06×0.10m
主軸方位　北―29°―西

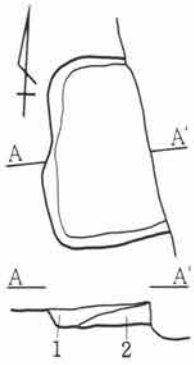
1　暗褐色土　ＣＰを多量、Ⅵ層土粒を少量含む。
2　〃　Ⅵ層土粒・礫を多量含む。

57坑
平面形態　隅丸長方形
位　　置　43・44―Ｈ―55・56
規　　模　1.42×0.93×0.10m
主軸方向　東―37°―北

1　暗褐色土　ＣＰを多量、Ⅵ層土粒を少量含む。
2　褐色土　Ⅵ層土主体でⅤ層土を少量含む。

第335図　Ｈ区土坑・出土遺物実測図

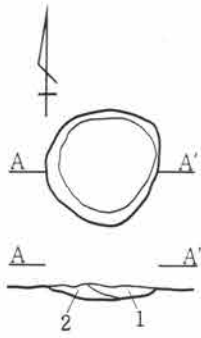
H区第58号土坑



平面形態　隅丸方形
位　　置　42・43—H—55
規　　模　1.4×（0.80）×0.10m

1　暗褐色土　CPを多量含む。
2　〃　CPは少量でⅦ層土ブロックを多量含む。

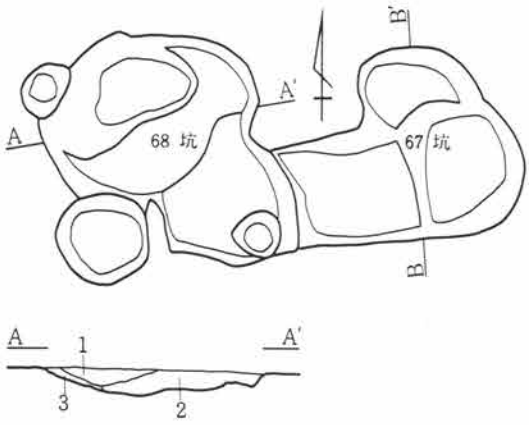
H区第59号土坑

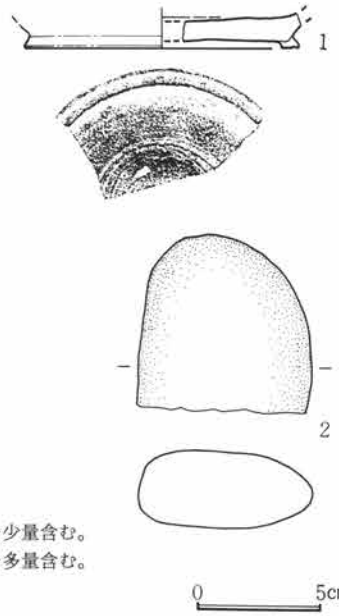


平面形態　円形
位　　置　42—H—55・56
規　　模　0.92×0.90×0.07m

1　暗褐色土　CPを含む。
2　〃　Ⅵ層土粒・礫を多量含む。

H区第67・68号土坑





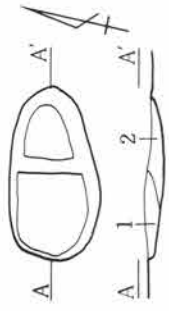
68坑
平面形態　不整形
位　　置　41・42—H—48・49

1　暗褐色土　CPを少量とⅦ層土ブロックを含む。
2　〃　CPを微量、Ⅵ層土粒を含む。
3　褐色土　Ⅵ層土主体でⅤ層土を少量含む。

67坑
平面形態　不整形
位　　置　41・42—H—49・50

1　暗褐色土　CP・Ⅵ層土粒を少量含む。
2　〃　Ⅶ層土ブロックを多量含む。
3　褐色土　Ⅵ層土主体。

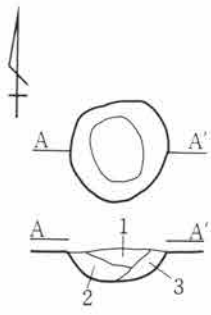
H区第86号土坑



平面形態　楕円形
位　　置　36—H—56・57
規　　模　1.35×0.73×0.10m
主軸方位　東—14°—北

1　暗褐色土　CPを含む。
2　〃　CP・Ⅵ層土粒を含む。

H区第87号土坑

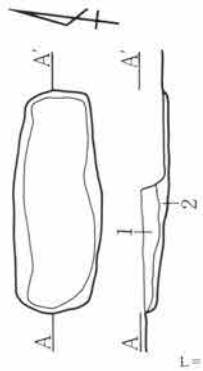


平面形態　円形
位　　置　36—H—57
規　　模　0.78×0.77

1　暗褐色土　CP・Ⅵ層土粒を含む。
2　〃　Ⅶ層土ブロックを多量に含む。
3　〃　CPは少量でⅥ層土粒は含まない。

第336図　H区土坑・出土遺物実測図

H区第91号土坑

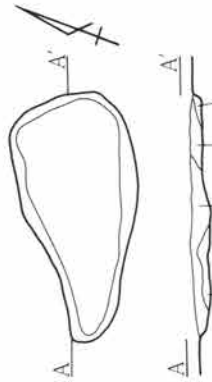


平面形態　隅丸長方形
位　　置　36・37－H－58・59
規　　模　1.76×0.71×0.09m
主軸方位　東－5°－北

1　暗褐色土　ＣＰを多量含む。
2　褐色土　　VI層土中にVII層土ブロック・Ｖ層土を含む。

L＝130.40m

H区第95号土坑

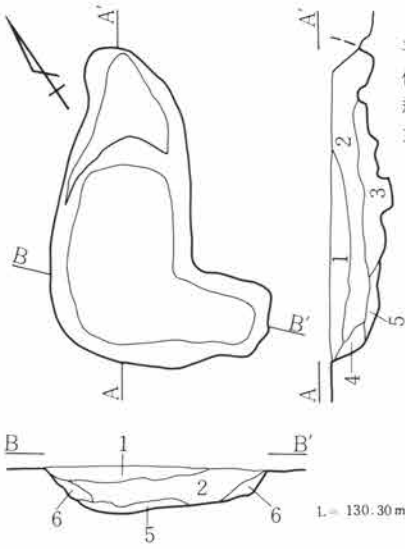


平面形態　不整形
位　　置　34・35－H－49・50
規　　模　1.93×0.98×0.10m
主軸方位　東－24°－北

1　暗褐色土　ＣＰ少量含む。
2　〃　　ＣＰ少量とVI層土ブロックを含む。
3　〃　　VI層土粒・VII層土ブロックを多量含む。

L＝130.30m

H区第97号土坑



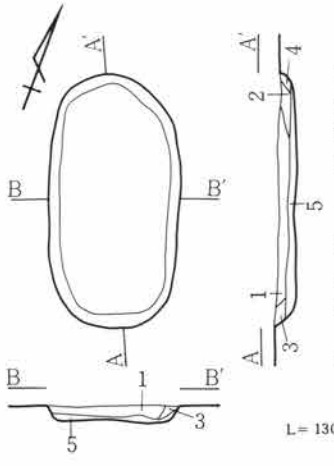
平面形態　不整形
位　　置　32～34－H－48・49
規　　模　2.43×1.12×0.38m
主軸方位　北－40°－東

1　暗褐色土　ＣＰ等は含まず、VII層土ブロックを少量含む。
2　〃　　VI層土等は含まない。
3　褐色土　　VI層土を微量含む。
4　〃　　VI層土を主体でVII層土ブロックを多量含む。
5　〃　　VI層土主体でＶ層土を少量含む。
6　〃　　VI層土主体。

L＝130.30m

当土坑は、調査区東側の第２号住居跡と第５号住居跡の間に位置し、僅かに第２号住居跡と重複している。確認はVI層土上面であるが、北側にみられるよう純粋な黄褐色ローム土ではなく、やや暗褐色を呈する漸移的なものである。当土坑の覆土上層にはＣ軽石が全く含まれず、確認はVII層土ブロックの分布を元に行った。所属時期は、遺物が皆無なため判断はできなかったが、Ｃ軽石がみられないことから弥生時代以前に溯る可能性もある。

H区第117号土坑



平面形態　隅丸長方形
位　　置　40・41－H－66
規　　模　1.98×1.05×0.15m
主軸方位　北－22°－西

1　暗褐色土　焼土粒・VI層土粒を少量含む。
2　〃　　灰・VI層土粒を少量含む。
3　〃　　VI層土粒を多量含む。
4　〃　　VI層土粒を多量、VI層土ブロックを含む。
5　〃　　VI層土粒を少量、灰・炭化物を多量含む。

L＝130.60m

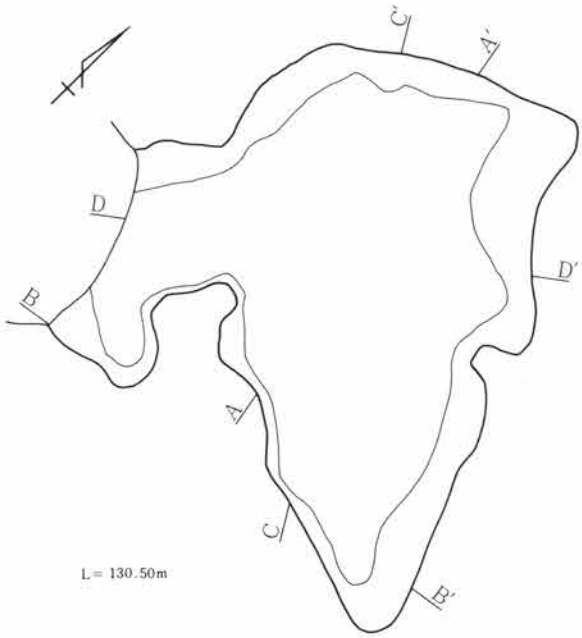
0　1m

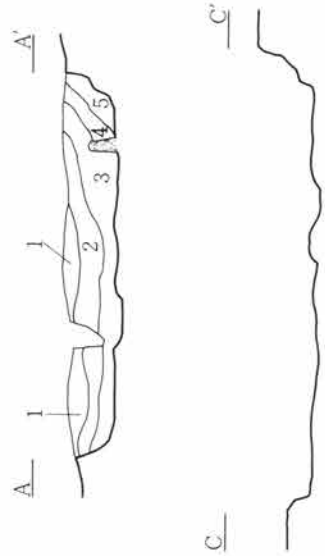
当土坑は、第157号住居跡の中に検出したものである。確認は住居跡の調査段階であり、前後関係は判然としない。

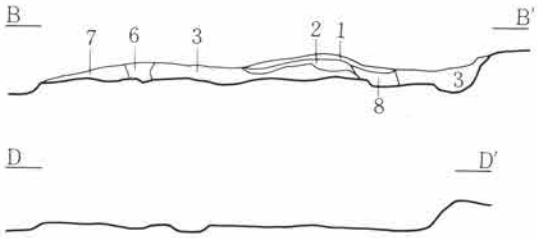
覆土は大きくは２層に分離できるが、下層程焼土・炭化物を多く含んでいる。これがカマド部分との重複に伴って混入したものであるとすれば、住居跡よりも新しい時期のものとみることができるが、住居跡使用時に入ったものとすれば住居跡に伴う可能性がある。

第337図　H区土坑・出土遺物実測図

H区第113号土坑





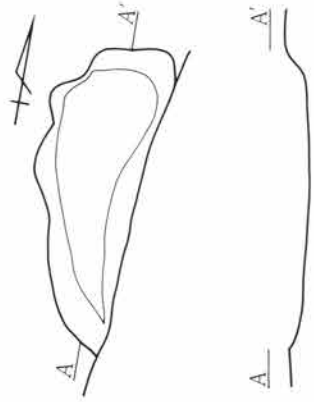


平面形態　不整形
位　　置　41～43－H－57～59
規　　模　4.55×2.40×0.20m
主軸方位　北－40°－西

1　ＣＰ純層　大きさ１～５㎜で青色砂粒を含む。
2　黒褐色土　Ⅵ層土粒・Ⅶ層土ブロックを多量含む。
3　黄褐色土　Ⅵ層土主体でⅦ層土ブロックを多量、礫を含む。
4　暗褐色土　Ⅵ層土を多量、炭化物を含む。
5　黄褐色土　Ⅶ層土ブロックを多量、Ⅴ層土を少量含む。
6　暗褐色土　ＣＰを多量、Ⅵ層土粒を少量含む。
7　〃　ＣＰもⅥ層土も含まない。
8　〃　Ⅵ層土を含まず、ＣＰを多量に含む。

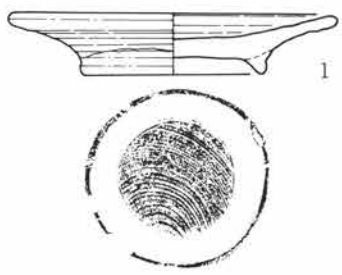
当土坑は、調査区中央やや北寄りに位置し、第66・72号住居跡及び第２・14号溝状遺構と重複している。確認はⅥ層上面で行った。他の遺構との前後関係については、当土坑の覆土上層（１層）には最大約20cmの厚さにＣ軽石が純堆積しており、この層が他の重複する遺構によって攪乱を受けていないことから、当土坑が最も新しい時期のものとみることができる。

H区第132号土坑



平面形態　不整形
位　　置　28・29－H－64・65
規　　模　2.40×（0.90）×0.15m
主軸方位　北－15°－西

L＝130.30m

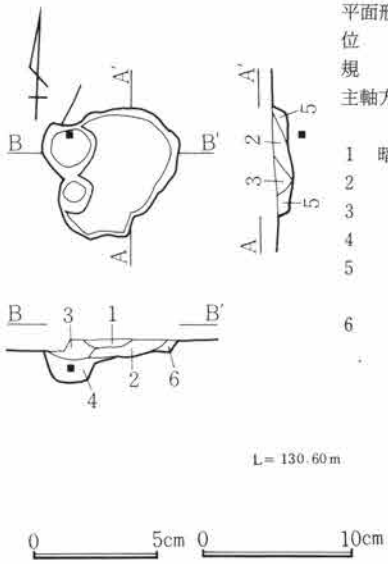


0　1m

0　5cm

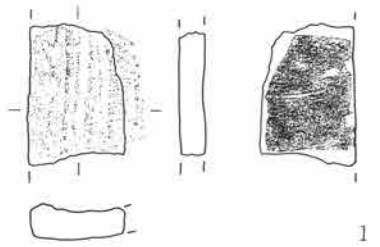
第338図　H区土坑・出土遺物実測図

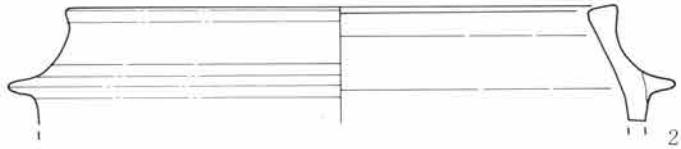
H区第133号土坑



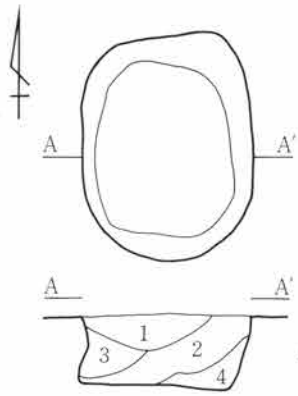
平面形態　不整形
位　　置　41－H－65・66
規　　模　1.08×0.60×0.10m
主軸方位　北－18°－東

1　暗褐色土　ＣＰ細粒・焼土粒を少量含む。
2　〃　ＣＰ細粒・焼土粒・灰を含む。
3　〃　ＣＰ細粒・Ⅵ層土粒を少量含む。
4　〃　ＣＰを微量、灰を多量含む。
5　〃　ＣＰを少量、Ⅶ層土小ブロックを少量含む。
6　〃　ＣＰ細粒を少量含み、焼土は含まない。


1

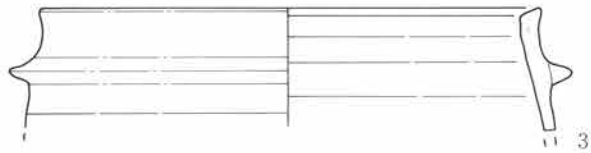

2

H区第135号土坑

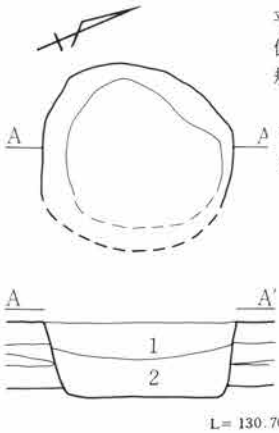


平面形態　隅丸長方形
位　　置　44・45－H－64・65
規　　模　1.76×1.38×0.56m
主軸方位　北－5°－西

1　暗褐色土　ＣＰを多量、Ⅵ層土粒を微量含む。
2　〃　ＣＰ・Ⅵ層土小ブロックを多量含む。
3　〃　ＣＰ・Ⅵ層土小ブロック・Ⅵ層土粒を多量含む。
4　〃　ＣＰ・Ⅵ層土小ブロックを少量、Ⅵ層土粒を多量含む。

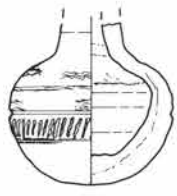

3

H区第140号土坑

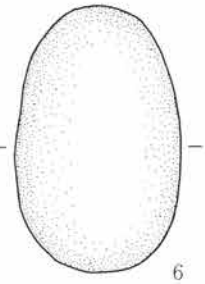


平面形態　円形
位　　置　43・44－H－70・71
規　　模　1.50×（－）×0.10m

1　暗褐色土　ＣＰを多量含む。
2　〃　ＣＰ細粒を少量含む。


4

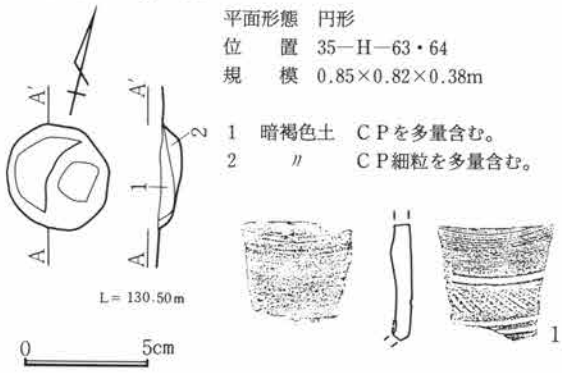
5


6

0　1m　　0　5cm

第339図　H区土坑・出土遺物実測図

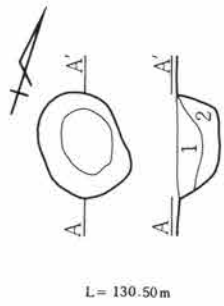
H区第143号土坑



平面形態　円形
位　　置　35—H—63・64
規　　模　0.85×0.82×0.38m

1　暗褐色土　ＣＰを多量含む。
2　〃　　ＣＰ細粒を多量含む。

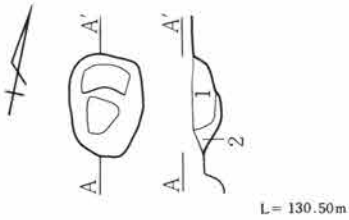
H区第144号土坑



平面形態　円形
位　　置　36—H—64
規　　模　0.75×0.65×0.30m

1　暗褐色土　ＣＰを多量、炭化物を少量含む。
2　〃　　ＣＰを少量、Ⅶ層土ブロックを多量含む。

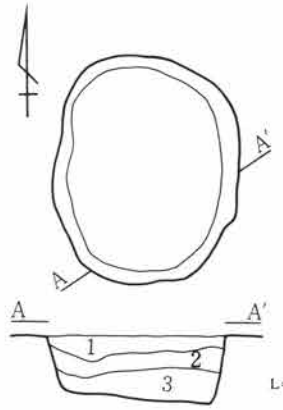
H区第145号土坑



平面形態　楕円形
位　　置　36—H—64・65
規　　模　1.02×0.63×0.26m
主軸方位　東—8°—北

1　暗褐色土　ＣＰを多量含む。
2　〃　　ＣＰを少量とⅦ層土ブロックを多量含む。

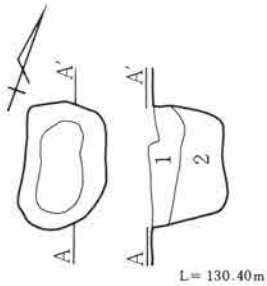
H区第147号土坑



平面形態　隅丸長方形
位　　置　39・40—H—63・64
規　　模　1.78×1.48×0.20m
主軸方位　北—0°

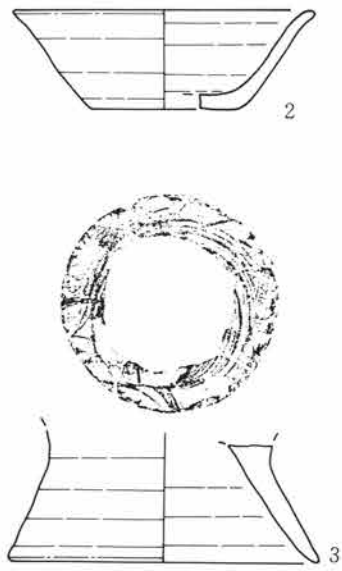
1　暗褐色土　ＣＰを多量含む。
2　〃　　ＣＰを多量、焼土細粒・炭化物を微量含む。
3　〃　　ＣＰ・Ⅵ層土粒を少量含む。

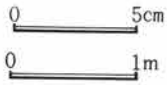
H区第146号土坑



平面形態　楕円形
位　　置　36—H—64
規　　模　1.02×0.63×0.52m
主軸方位　東—10°—北

1　暗褐色土　ＣＰ細粒を多量含む。
2　〃　　ＣＰ細粒を微量含む。





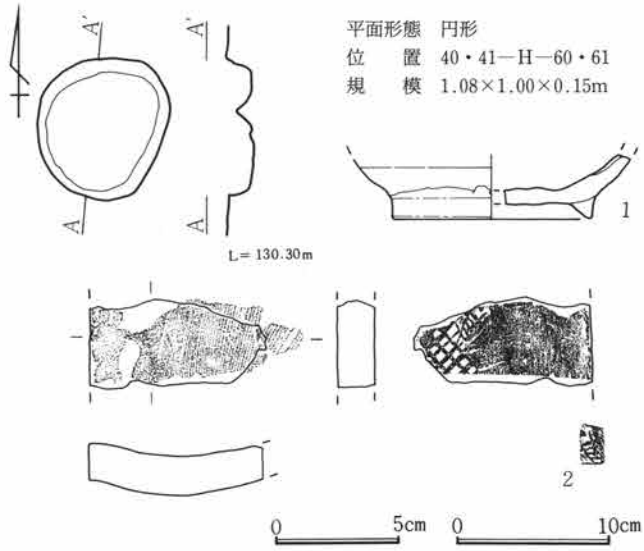
当土坑は、調査区中央の第142号住居跡の南西コーナー部に検出した。確認は第142号住居跡調査後の掘り方面精査中であり、黄褐色を呈するⅦ層土中である覆土はＣ軽石を含むものであり、その量比により上下２層に分離することができた。出土遺物は、実測可能なものは２個体出土している。このうち第340図３は高台付埦の高台部であるが、３つに割れており、それぞれ当土坑、第５号井戸、表土から出土している。つまり当土坑と第５号井戸は比較的近い時期の可能性がある。また、第142号住居跡の遺物と当土坑の遺物も時期的に近いものである。

第340図　H区土坑・出土遺物実測図

H区第152号土坑

平面形態　楕円形
位　　置　41・42—H—60・61
規　　模　1.95×1.48×0.12m
主軸方位　北—27°—西

H区第153号土坑



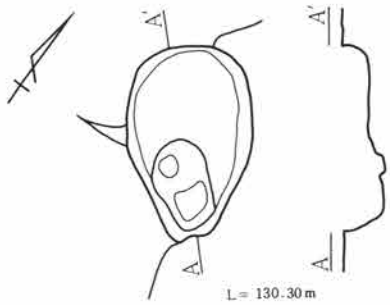
平面形態　円形
位　　置　40・41—H—60・61
規　　模　1.08×1.00×0.15m

H区第154号土坑

平面形態　楕円形
位　　置　40—H—61・62
規　　模　2.08×1.04×0.26m
主軸方位　東—24°—北

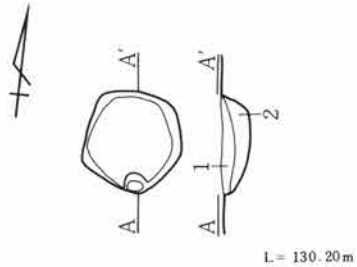
1　暗褐色土　CPを多量、VI層土小ブロックを微量含む。
2　〃　CP・VI層土粒を少量含む。

H区第155号土坑



平面形態　楕円形
位　　置　39—H—61・62
規　　模　1.53×1.00×0.15m
主軸方位　北—40°—西

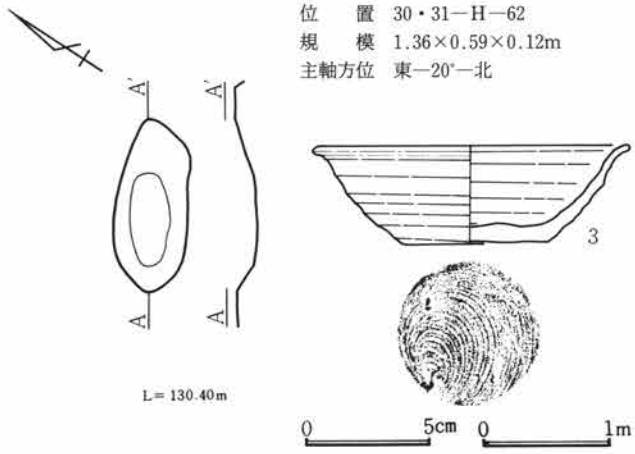
H区第158号土坑



平面形態　円形
位　　置　35—H—62
規　　模　0.80×0.76×0.20m

1　暗褐色土　CPを含む。
2　〃　CPは1層に比して少ない。

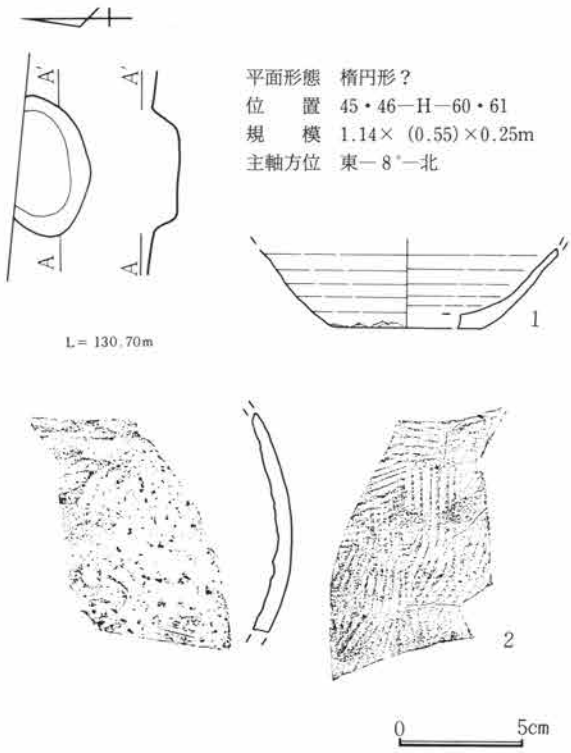
H区第159号土坑



平面形態　楕円形
位　　置　30・31—H—62
規　　模　1.36×0.59×0.12m
主軸方位　東—20°—北

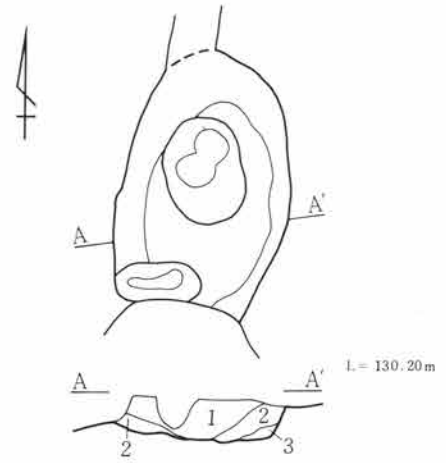
第341図　H区土坑・出土遺物実測図

H区第164号土坑



平面形態　楕円形？
位　　置　45・46—H—60・61
規　　模　1.14×（0.55）×0.25m
主軸方位　東—8°—北

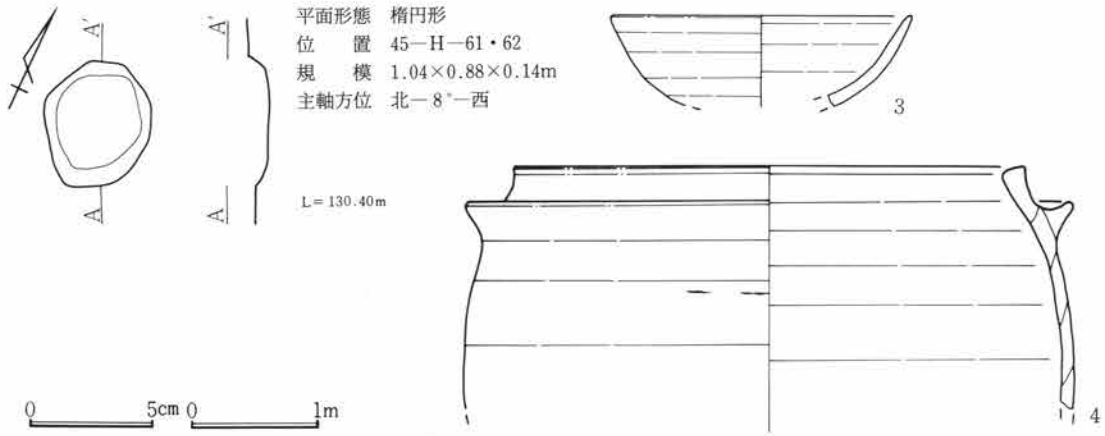
H区第166号土坑



平面形態　楕円形
位　　置　39・40—H—61
規　　模　1.96×1.35×0.28m
主軸方位　北—11°—東

1　暗褐色土　VI層土粒を少量含む。
2　〃　VI層土粒を多量、VI層土ブロックを微量含む。
3　〃　VI層土粒・VII層土ブロックを多量含む。

H区第167号土坑



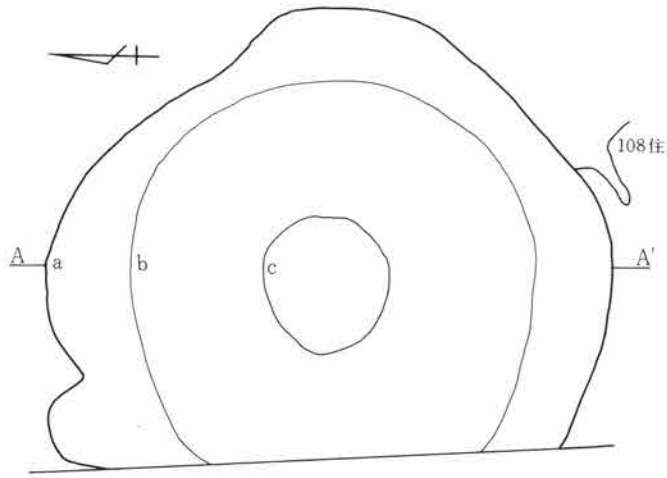
平面形態　楕円形
位　　置　45—H—61・62
規　　模　1.04×0.88×0.14m
主軸方位　北—8°—西

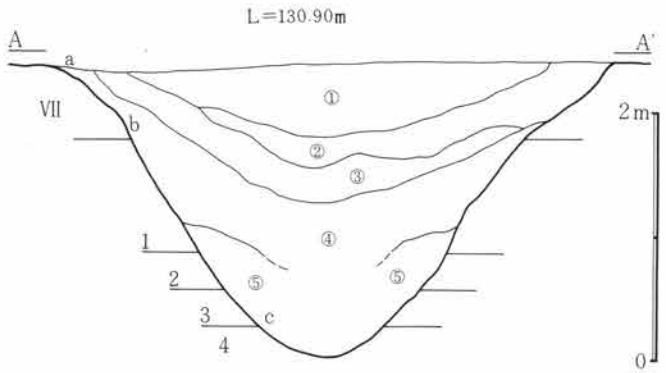
第342図　H区土坑・出土遺物実測図

今回の報告区（H区第11号溝状遺構以北）において検出した土坑は、中世に属するものを除くと約85基であり、このうち平面プランの比較的良好に残存するもの及び遺物出土のみられたもの34基を掲載した。掲載した土坑の大半は、覆土中にC軽石がみられることを特徴としている。したがってほぼ古墳時代以降に属するものであることは確実であるが、それ以上の所属時期及び性格については大半が不明である。これ以外に第117・133号土坑のように覆土中に炭化物や焼土を含むものがみられるが、住居跡と重複による場合が多く、本来住居跡に帰属させるべきものであるかもしれない。また、第97・113・166号土坑は、覆土中にC軽石を含まず、確認面の土層であるVI・VII層土の粒子やブロックを顕著に含むものがみられる。これらはその覆土の特徴から、弥生時代以前の遺構である可能性がある。

井戸跡

遺構名称	Ｈ区第４号井戸跡	位置	44～46―Ｈ―78～80グリッド内				平面形状	円形
規模(m)	地上径4.45m	底径1.0m	最細径 ―	最大径 ―	深度2.30m	湧水位	夏期 ―	・冬期 ―
アグリ部最大径	夏期 ―	・冬期 ―	湧水層	―		耐水層	―	



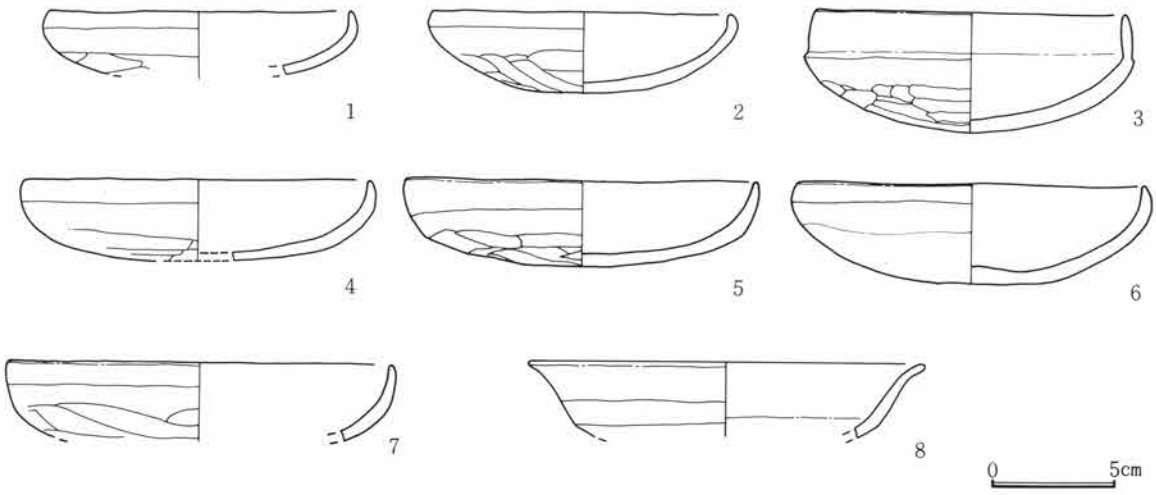


当井戸跡は、調査区北西隅に位置し、第108号住居跡と重複している。前後関係は、遺構の確認段階で当井戸跡の平面プランが第108号住居跡のプランに先行して 検出されたことから、108号住→当井戸跡であると考えられ、出土遺物の比較からもこの関係が検証されている。

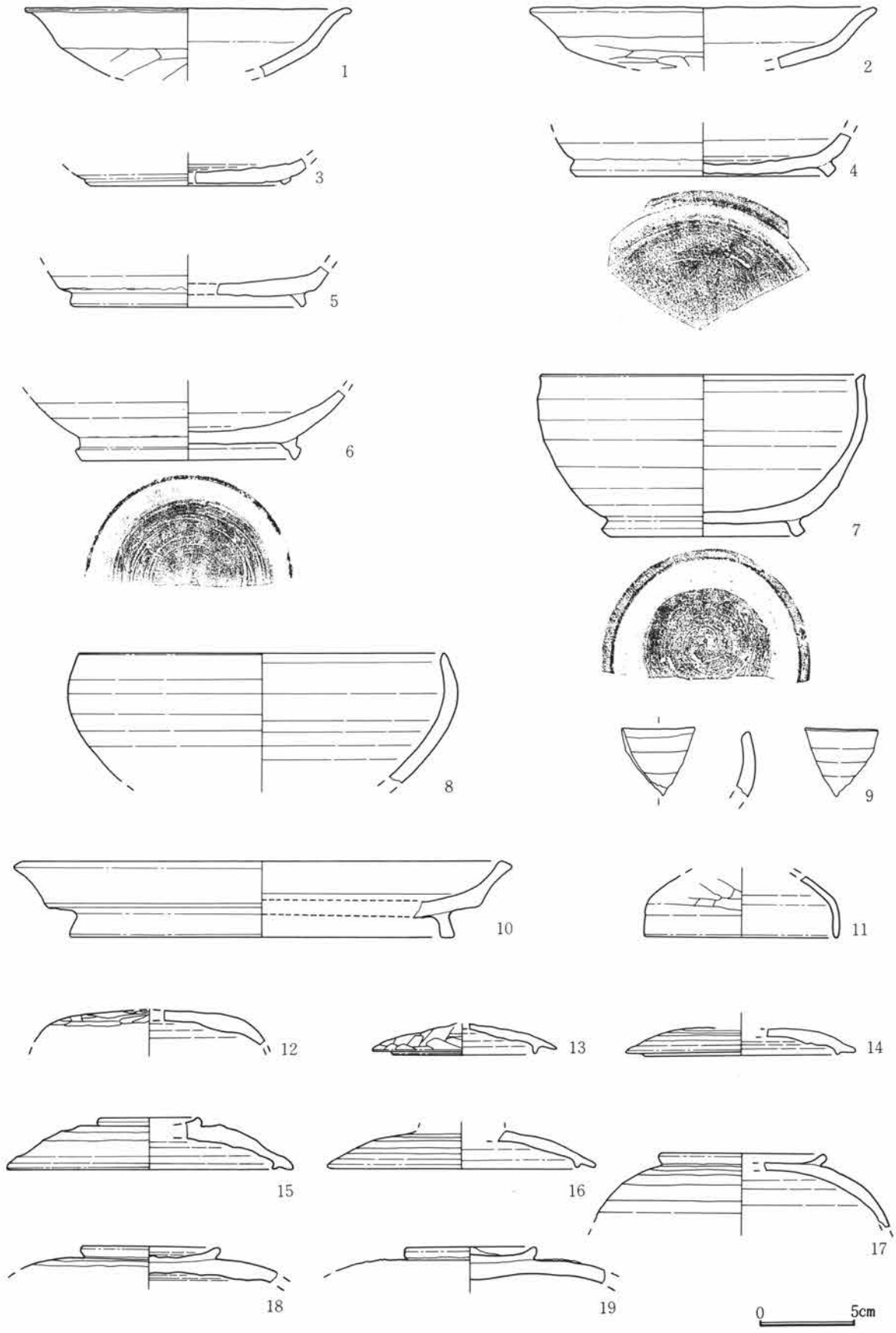
確認面の平面形は円形であり、底面は確認面から約2.3ｍの深さしかない。断面形は、二等辺三角形状を呈している。当調査区で検出した他の井戸跡は、約７ｍ前後の深度を有しており、当井戸跡が井戸として

①　暗褐色土　ＣＰ・ＦＰ・地山礫を多量、他に炭化物を含む。
②　〃　炭化物を多量、ＣＰ・ＦＰを含む。
③　〃　白色の粘質土・炭化物・焼土を含む。
④　〃　焼土・炭化物・土器片・礫を多量、ＣＰを少量含む。
⑤　〃　ＣＰを少量、褐色砂礫を多量含む。

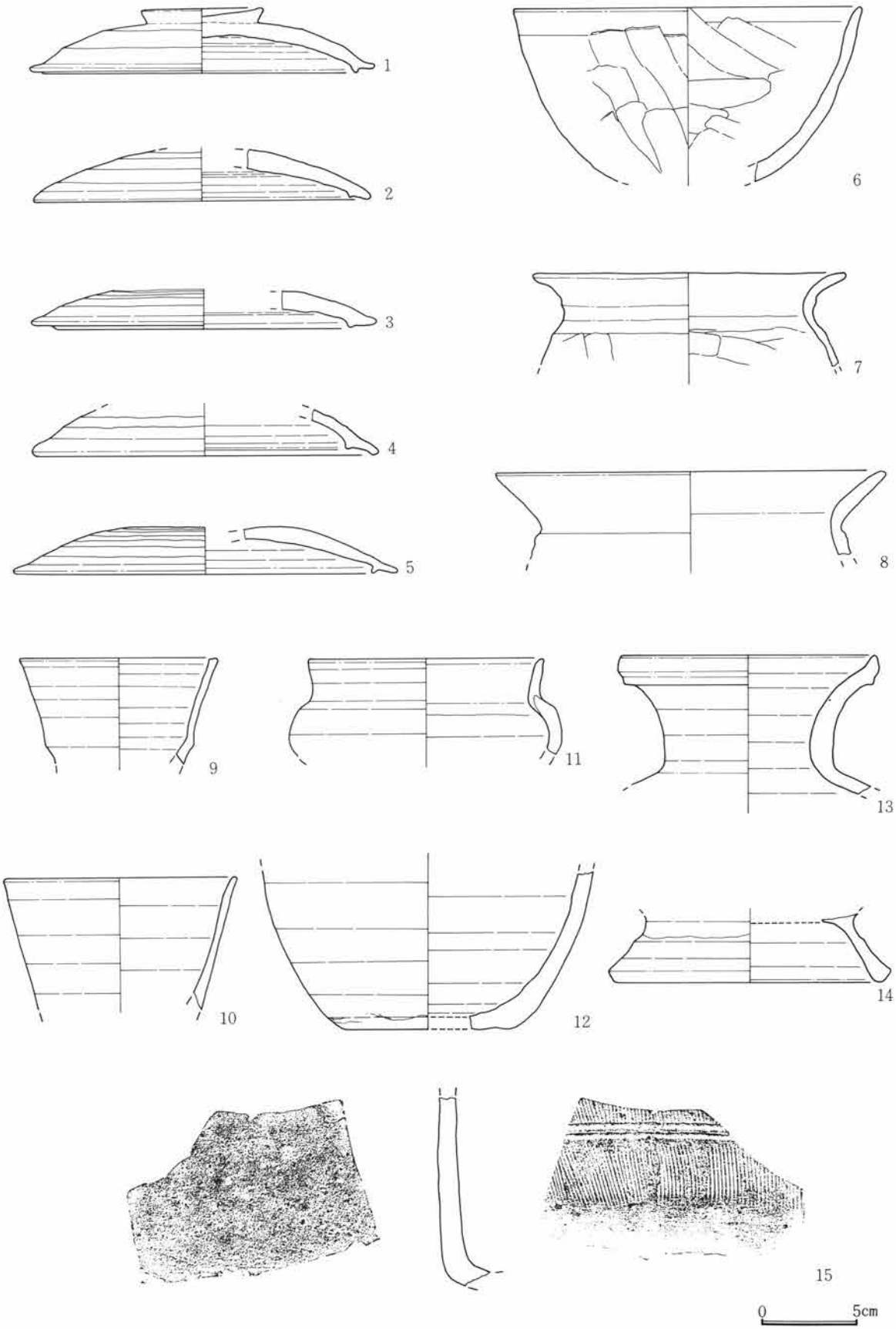
1　褐灰火山灰・砂・小礫混（固結）
2　灰褐色細砂（固結）
3　褐灰色火山灰・砂（固結）
4　灰褐色シルト



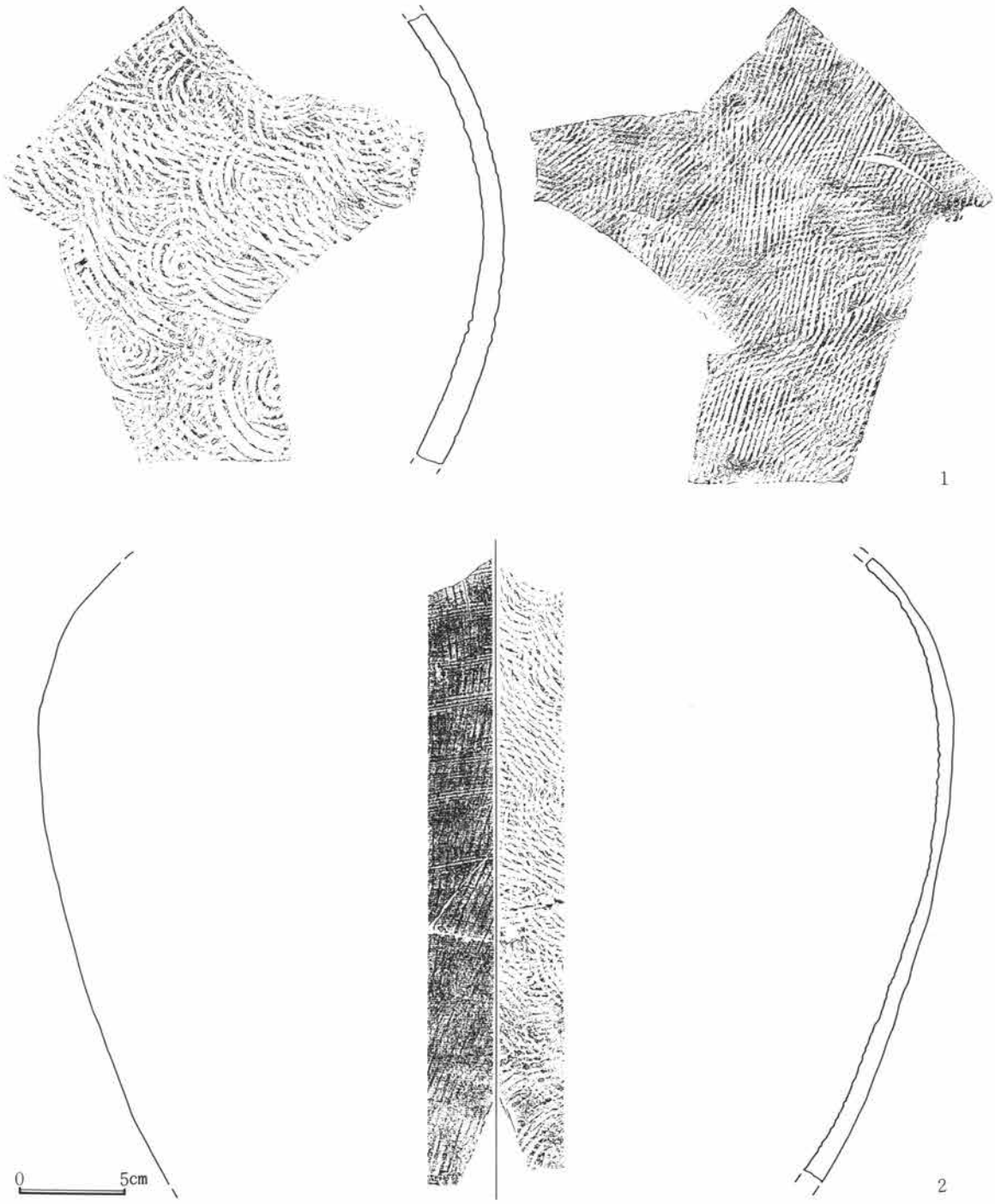
第343図　Ｈ区第４号井戸跡・出土遺物実測図



第344図　H区第4号井戸跡出土遺物実測図



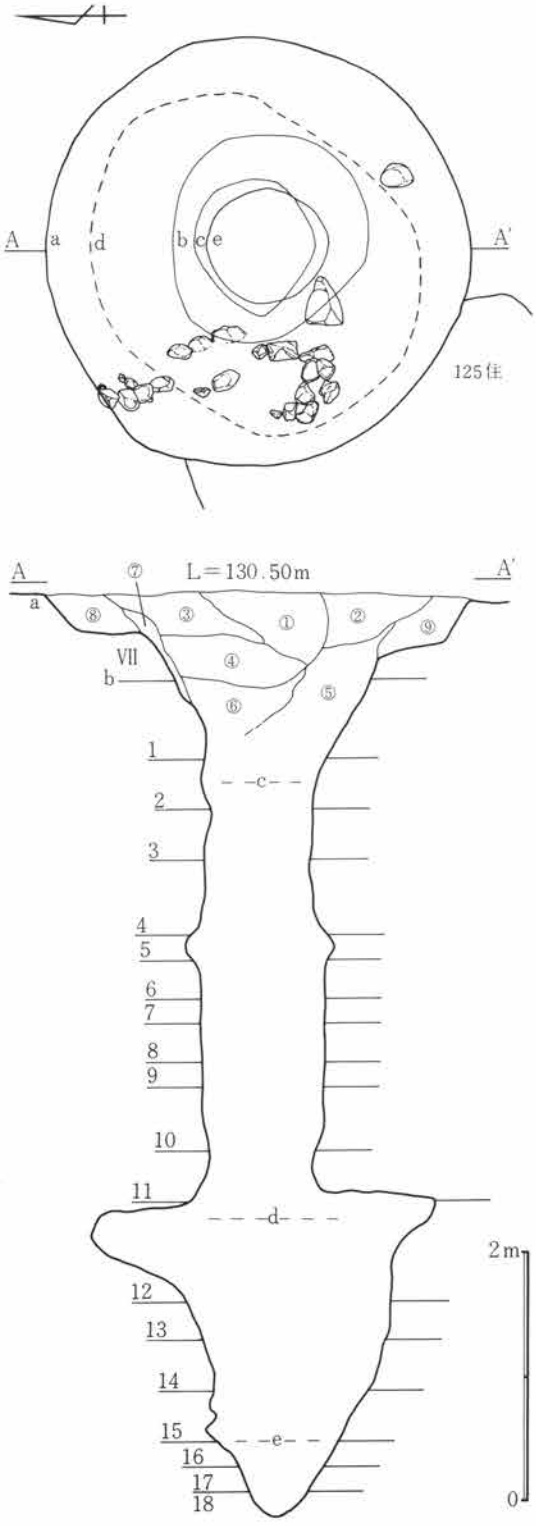
第345図　H区第4号井戸跡出土遺物実測図



第346図　Ｈ区第４号井戸跡出土遺物実測図

機能できるだけの湧水が得られたかどうか疑問ではあるが、同様の規模・平面形態及び掘り方を有するような遺構が他にはみられないことから、当遺構も井戸跡と位置付けた。充塡土中にはＣ軽石を平均的に含む他、上層にＦＰを含むことを特徴としている。また、上層中に焼土や炭化物を含んでいる。これが第108号住居跡との重複によってもたらされたとすれば、当井戸跡は、掘削直後に埋めもどされた可能性がある。この場合井戸として機能できるまで掘削されたとみるよりは、途中で放棄したものと考えられ、これが浅い原因と思われる。遺物はまとまった出土はしていないが、④層中に自然礫が流れ込んだような状態で検出されている。また、出土遺物中に瓦が全くみられないことから、国分寺造営以前のものであろう。

遺構名称	Ｈ区第５号井戸跡	位置	31～33―Ｈ―64・65グリッド内				平面形状	円形
規模(m)	地上径3.30m	底径 ―	最細径0.80m	最大径2.73m	深度7.30m	湧水位	夏期2.75m・冬期4.85m	
アグリ部最大径	夏期1.15m・冬期2.73m	湧水層	5・12・18層			耐水層	6・13層	



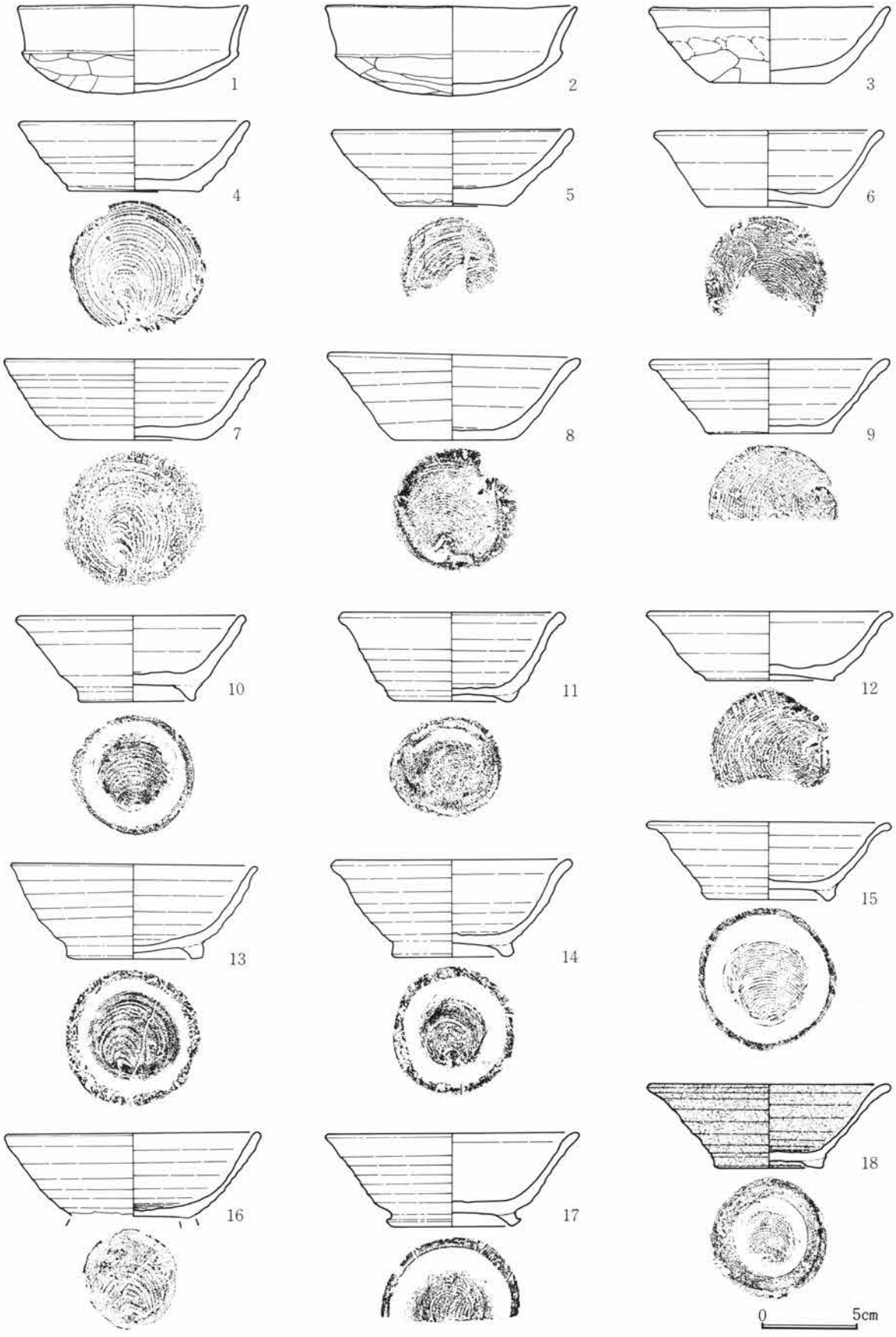
当井戸は、調査区南寄りの遺構空白部を囲む位置にあり、第125号住居跡と重複している。確認はⅦ層土上面であり、充填土上層にはＢ軽石がみられたこれは純堆積によるものではなく、混ぜ込まれた状態であることから、当井戸跡埋没後の塡圧によって沈んだ部分に、後世の土層が堆積したものと考えられる。

調査時に井戸枠等の施設を示すような資料は検出されていないことから、地山井筒円筒形の井戸と推定される。断面形は開口部はロート状で、径約１ｍの円筒状に下がり、約2.7m下に小アグリが、約５ｍ下に最大アグリがみられる。遺物は、小アグリ部から最大アグリ部の間に集中して出土しており、少なくともこの間は人為的な埋没である。最下部から曲物が出土したが、保存が悪く図示できない。

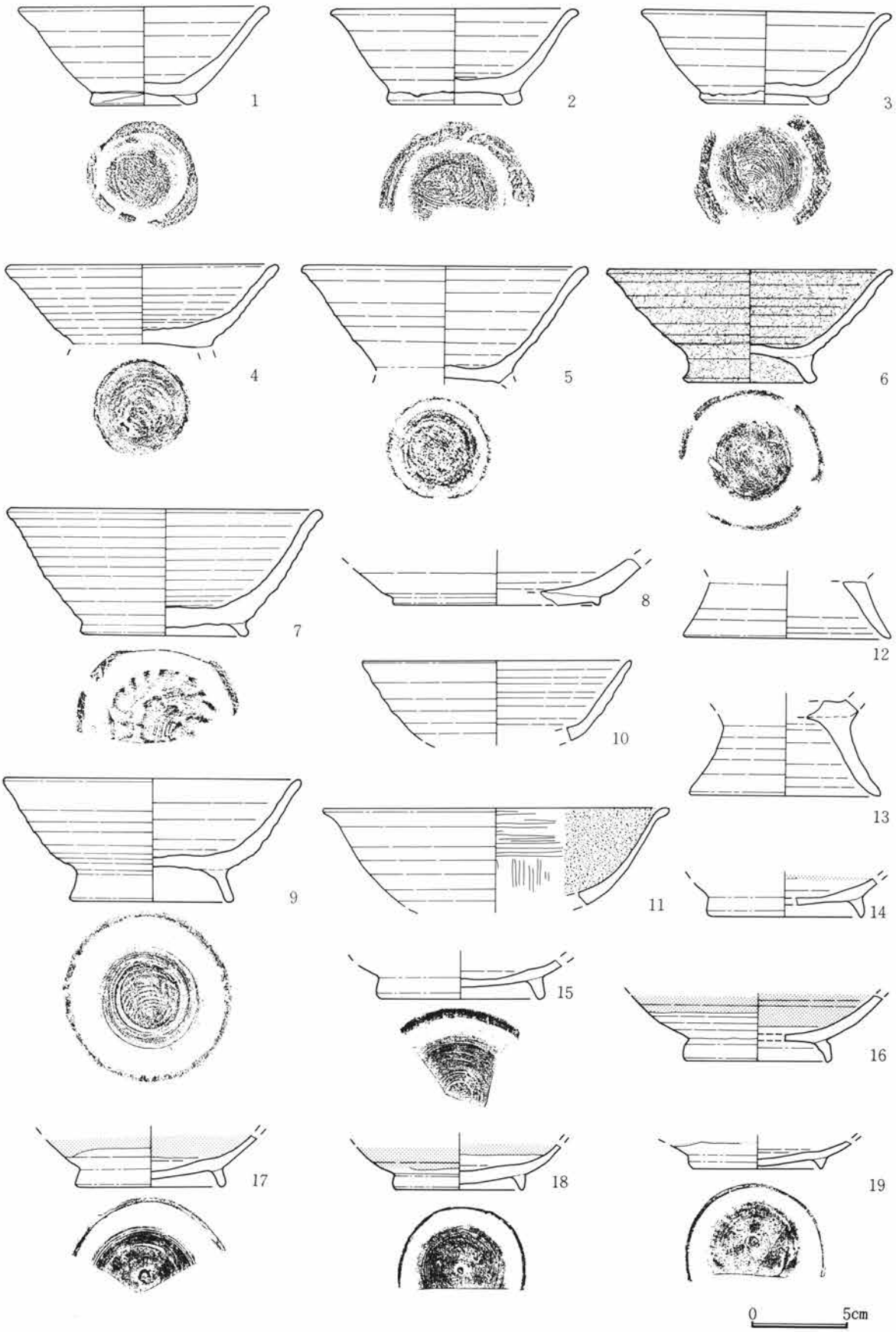
①　暗褐色土　ＢＰを含み、砂質で土器が混入している。
②　〃　ＣＰ・焼土・炭化物を少量含む。
③　〃　ＣＰ・焼土・礫を少量含む。
④　〃　焼土・炭化物を少量、ＣＰを含む。
⑤　〃　ＣＰ・Ⅶ層土・炭化物を少量含む。
⑥　〃　ＣＰ・炭化物を微量含む。
⑦　〃　ＣＰ等はほとんど含まず、灰を多量含む。
⑧　〃　Ⅶ層土を多量、焼土・炭化物を含む。
⑨　〃　Ⅶ層土ブロック・ＣＰを含む。

1　褐灰色火山灰・砂（固結）
2　灰褐色火山灰・砂・小礫混（固結）
3　褐灰色細砂（固結）
4　灰褐色火山灰・砂（固結）
5　褐灰色砂質シルト
6　ブラックバンド
7　褐色火山灰
8　黄褐色軽石・粒
9　黄褐色火山灰
10　灰褐色細砂（固結）
11　褐灰色火山灰・砂（固結）
12　褐色中砂（固結）
13　暗灰色細砂（固結）
14　褐灰色火山灰・砂（固結）
15　褐灰色シルト
16　暗灰色砂質シルト
17　灰褐色シルト
18　暗灰色細砂

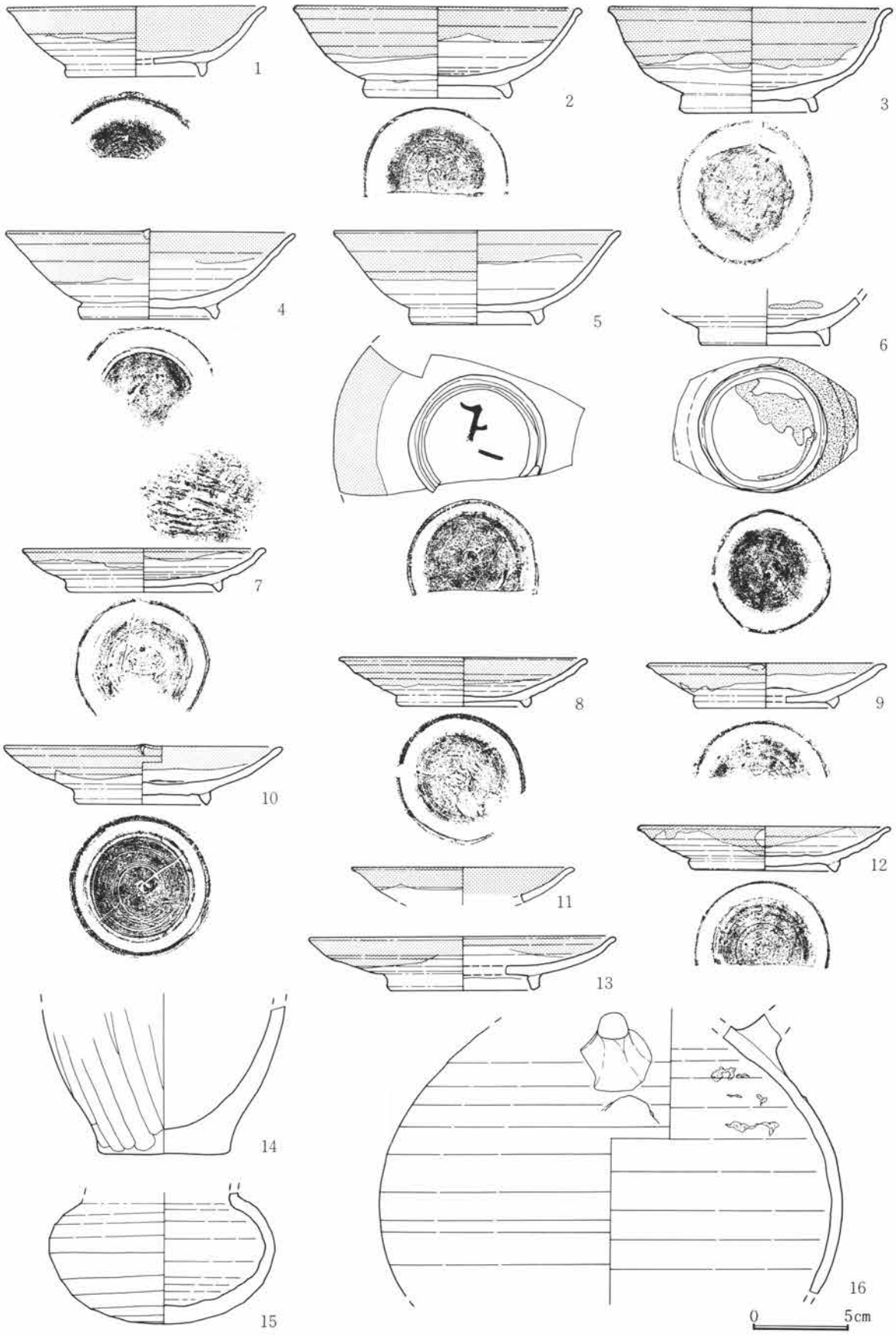
第347図　Ｈ区第５号井戸跡実測図



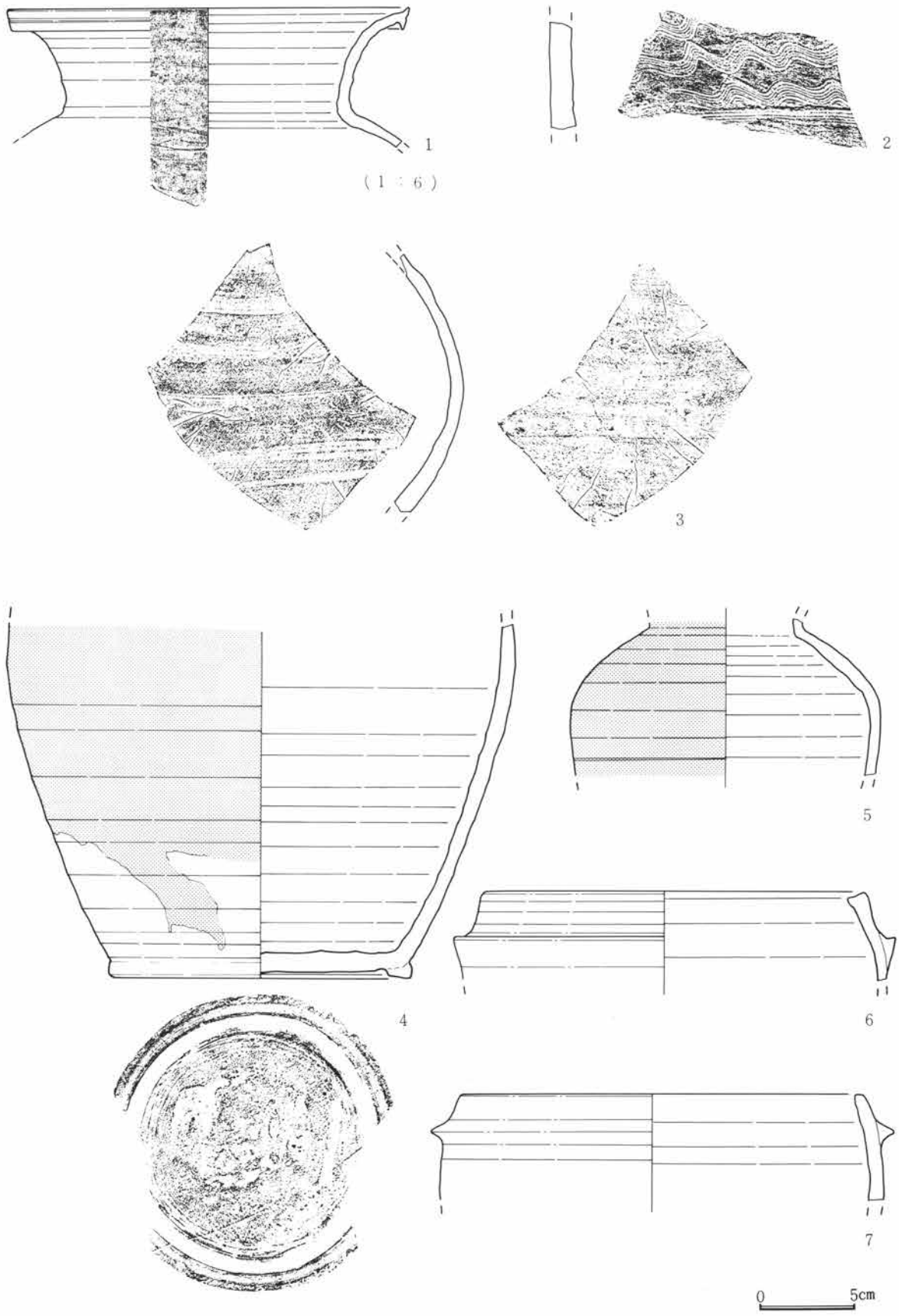
第348図　H区第5号井戸跡出土遺物実測図



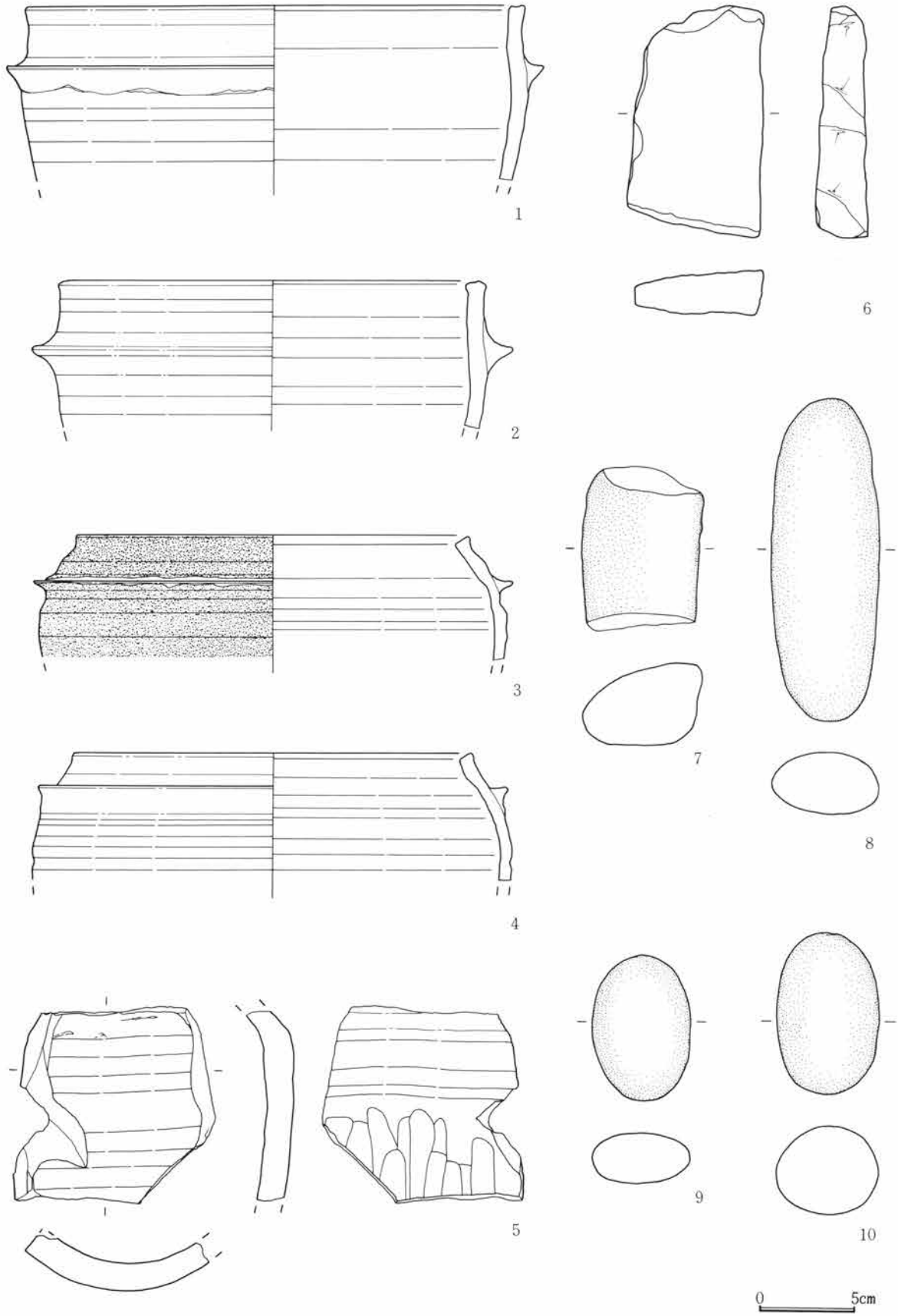
第349図　H区第5号井戸跡出土遺物実測図



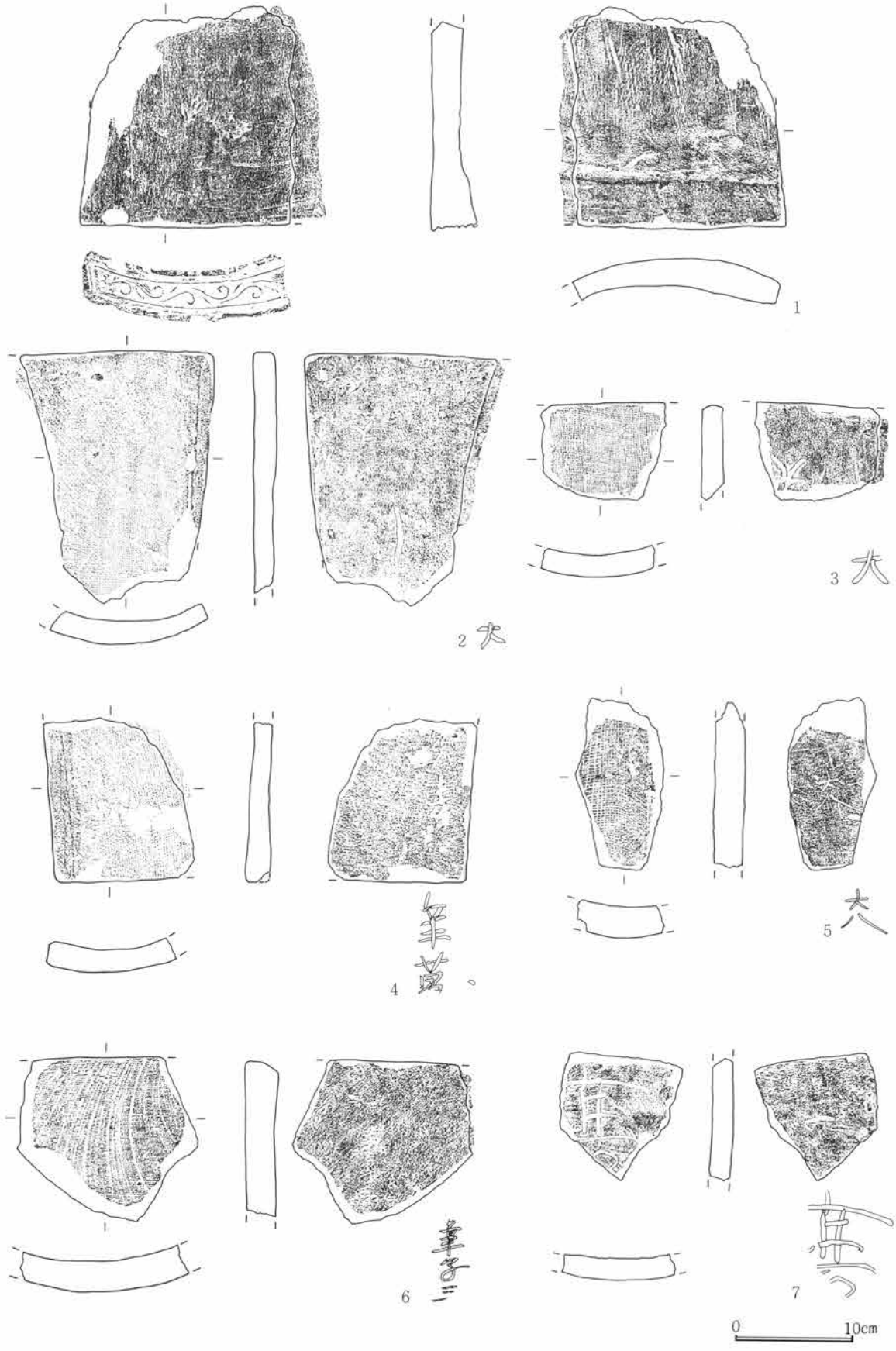
第350図　H区第5号井戸跡出土遺物実測図



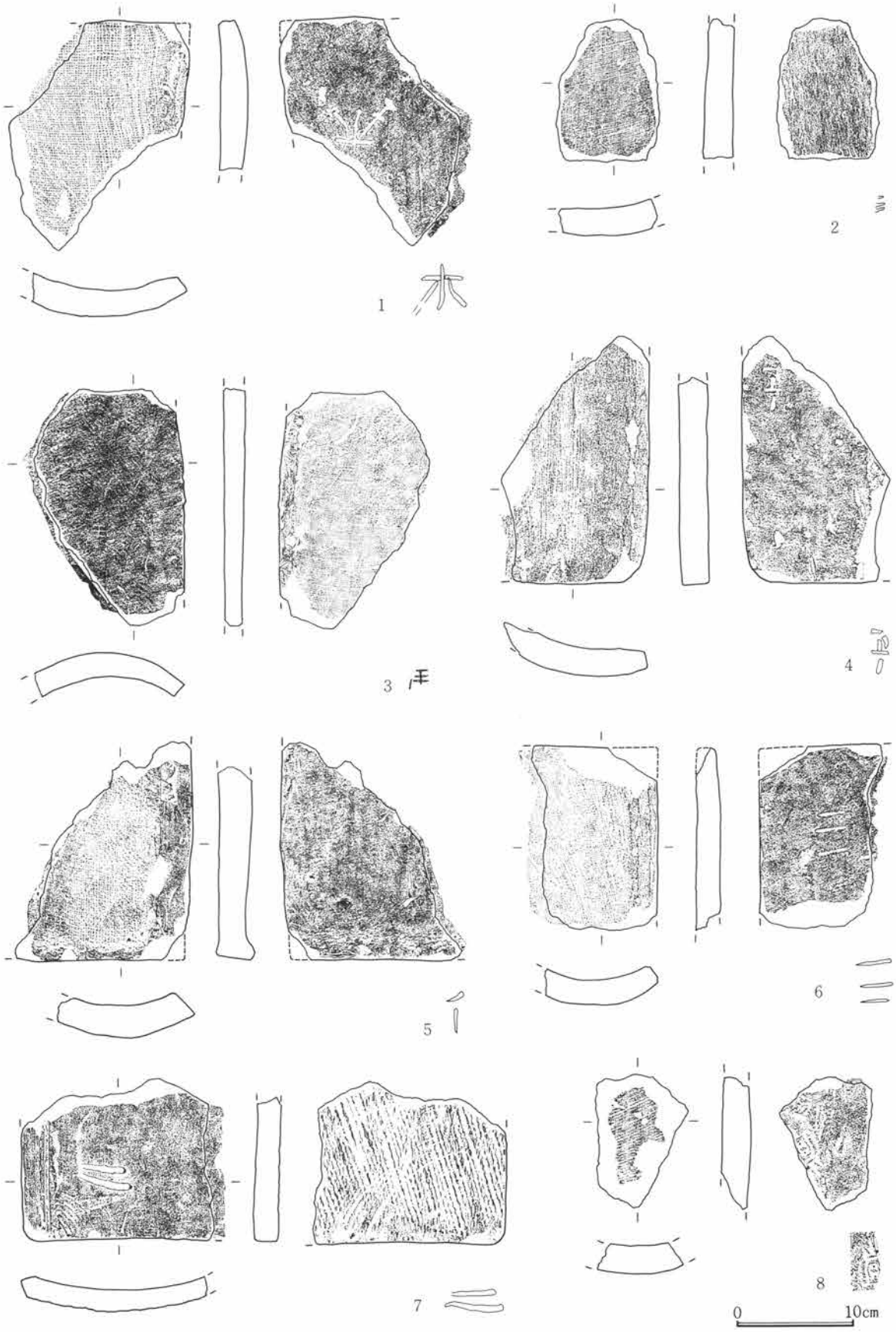
第351図　H区第5号井戸跡出土遺物実測図



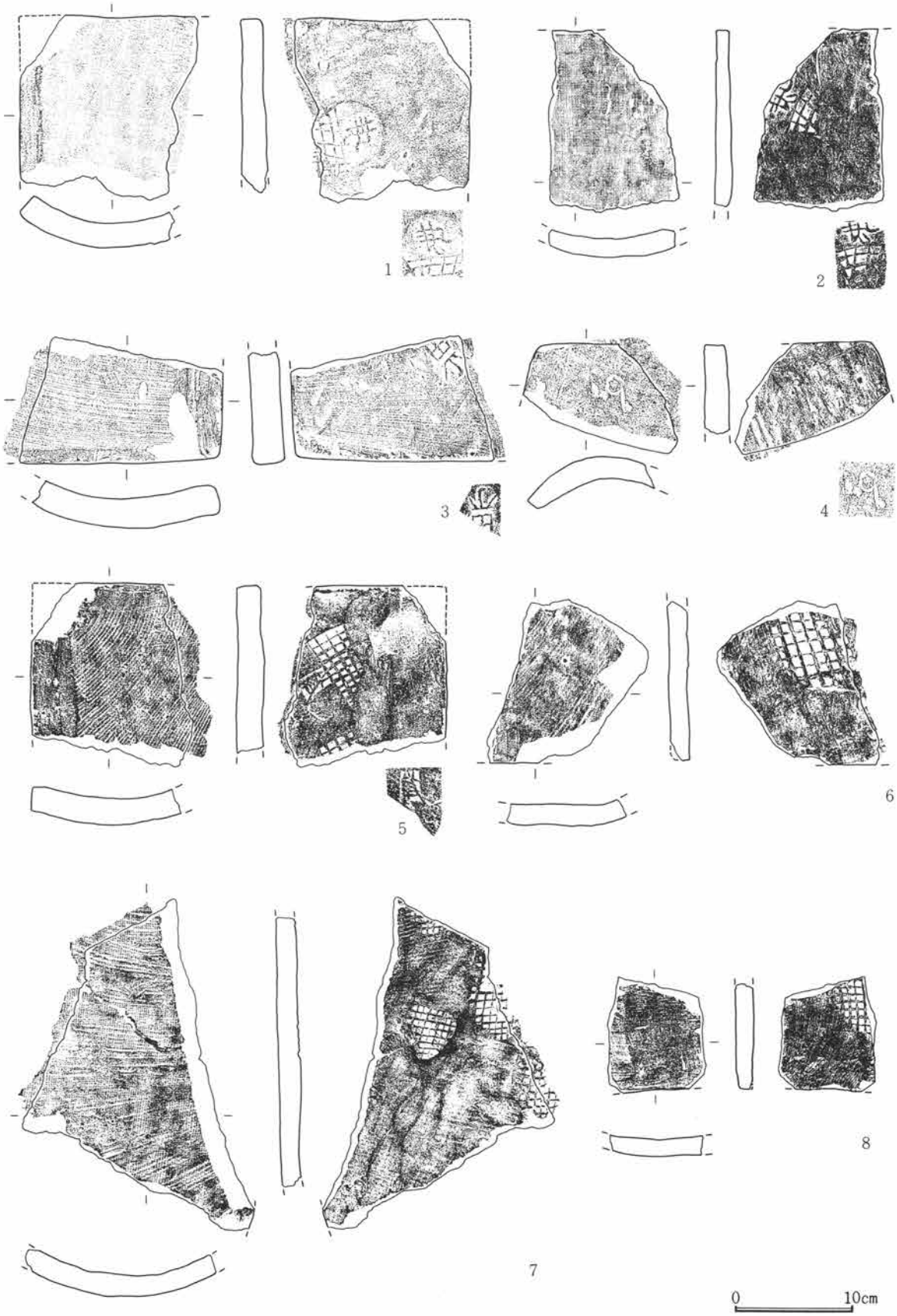
第352図　H区第5号井戸跡出土遺物実測図



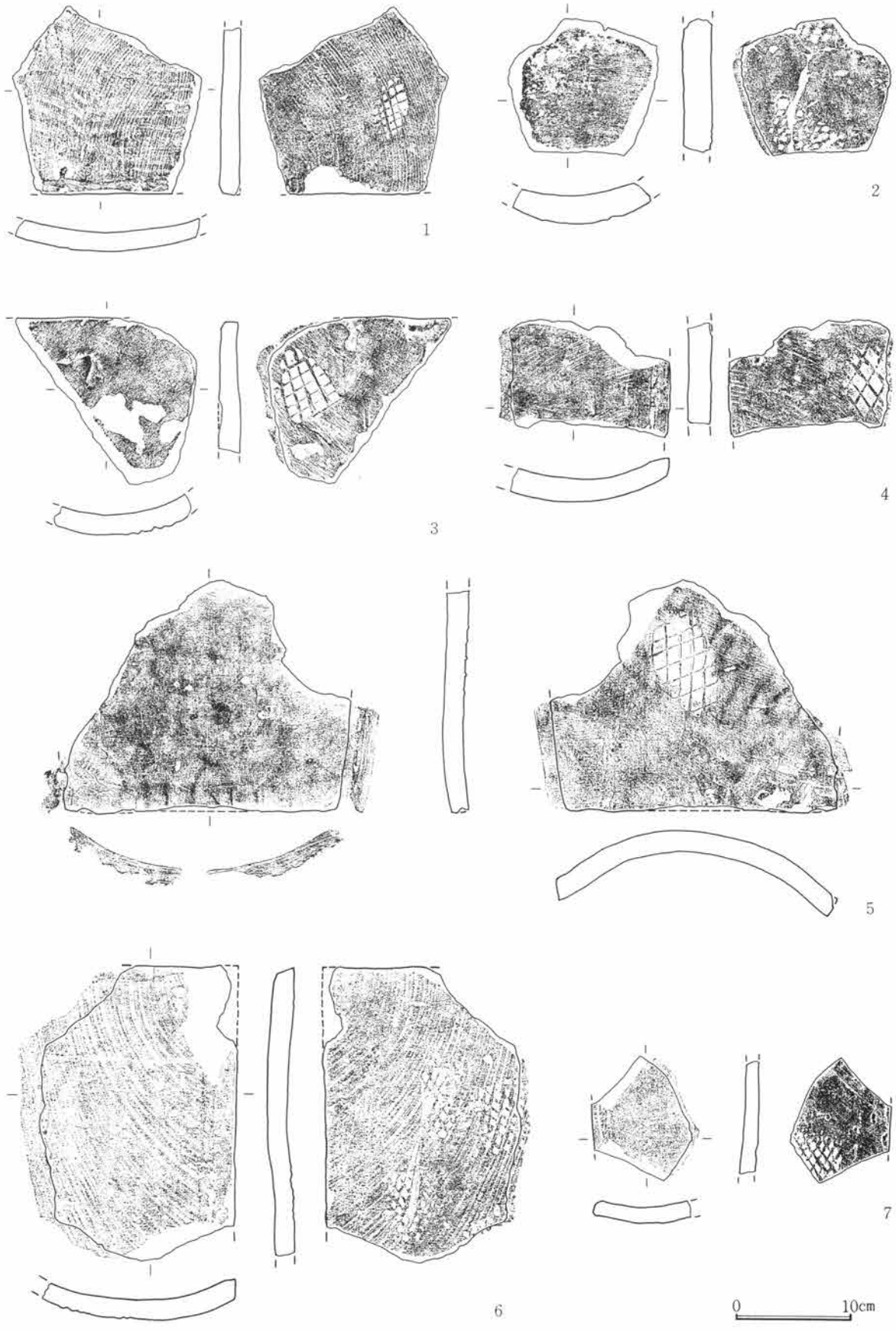
第353図　H区第5号井戸跡出土遺物実測図



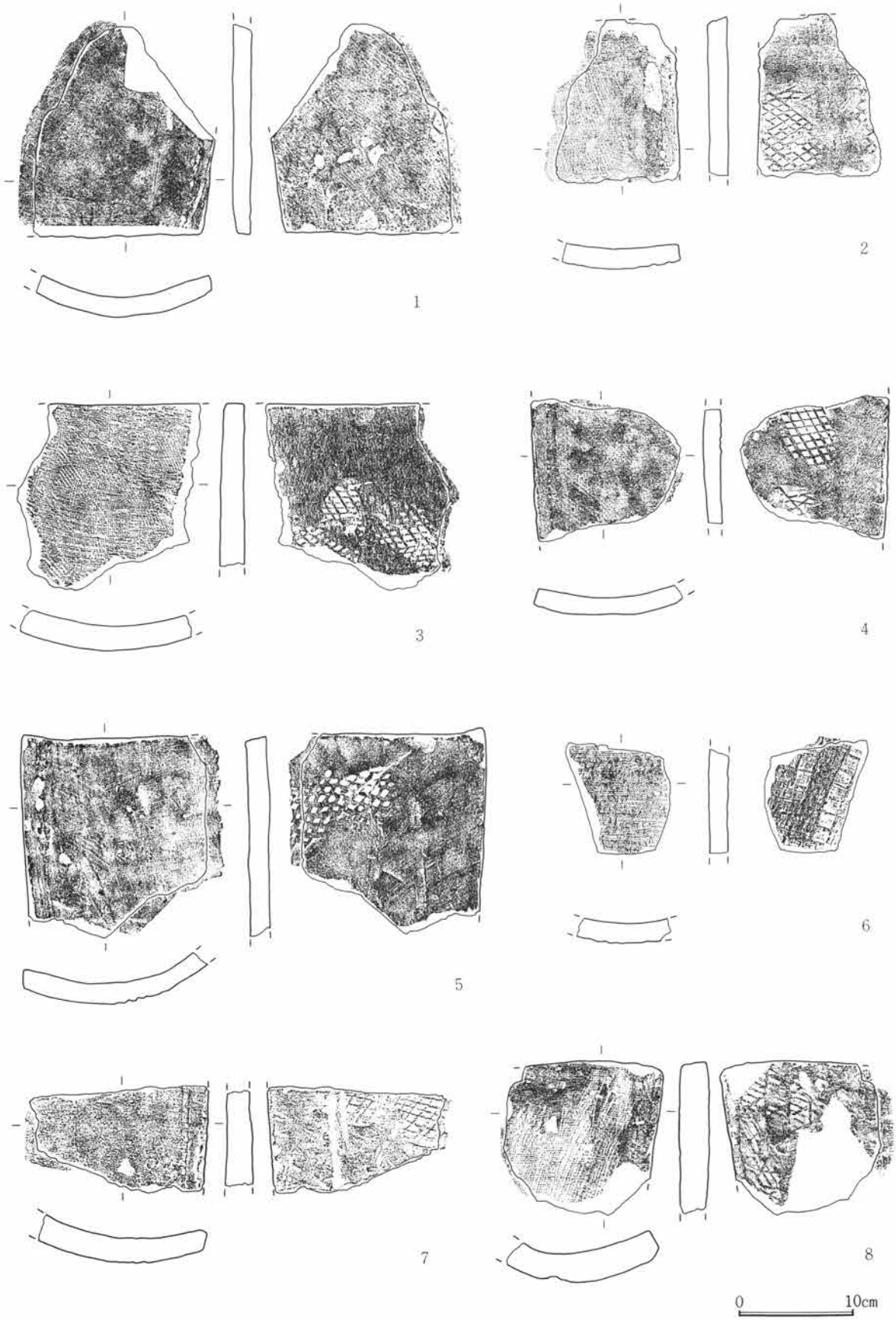
第354図　H区第5号井戸跡出土遺物実測図



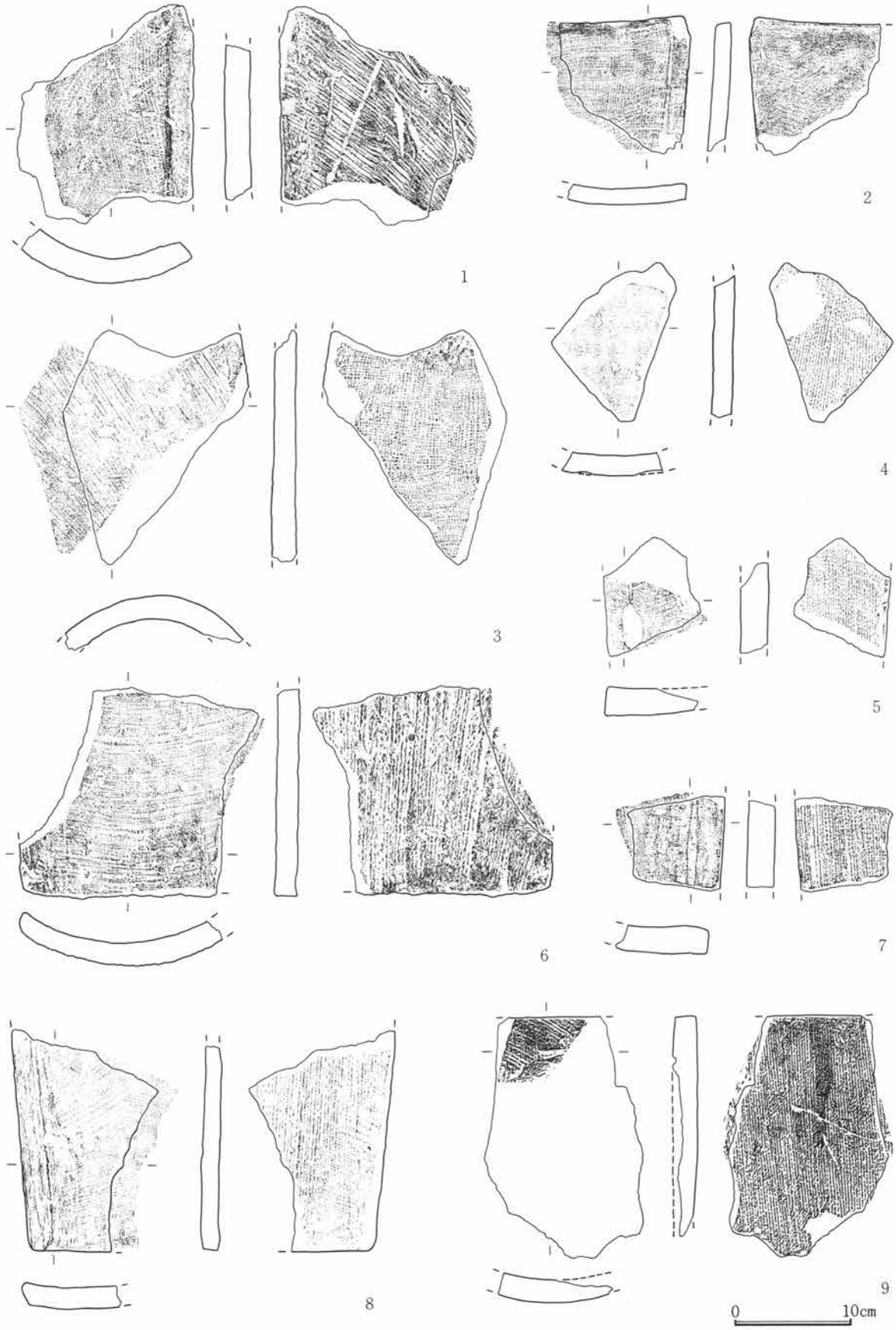
第355図　H区第５号井戸跡出土遺物実測図



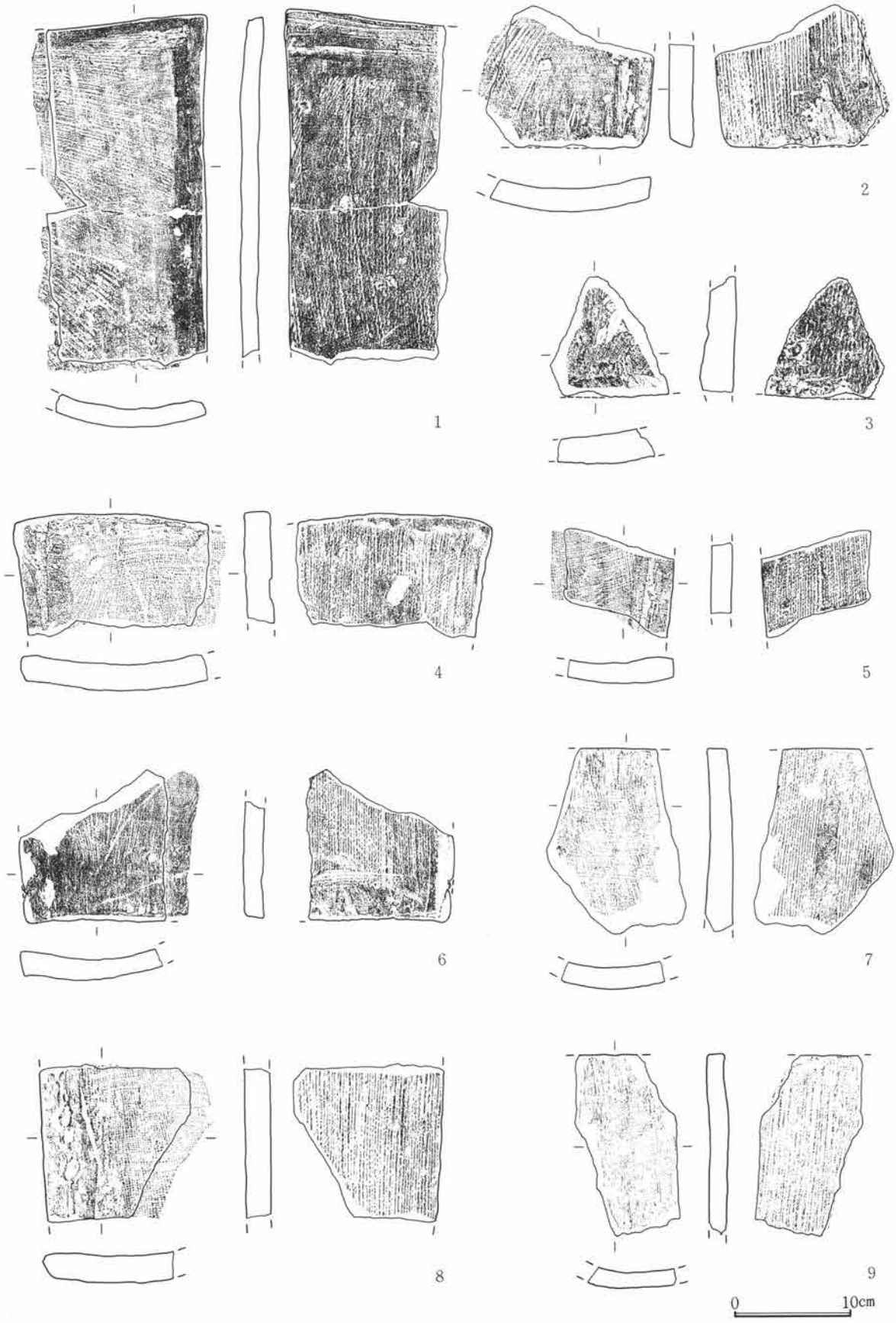
第356図　H区第5号井戸跡出土遺物実測図



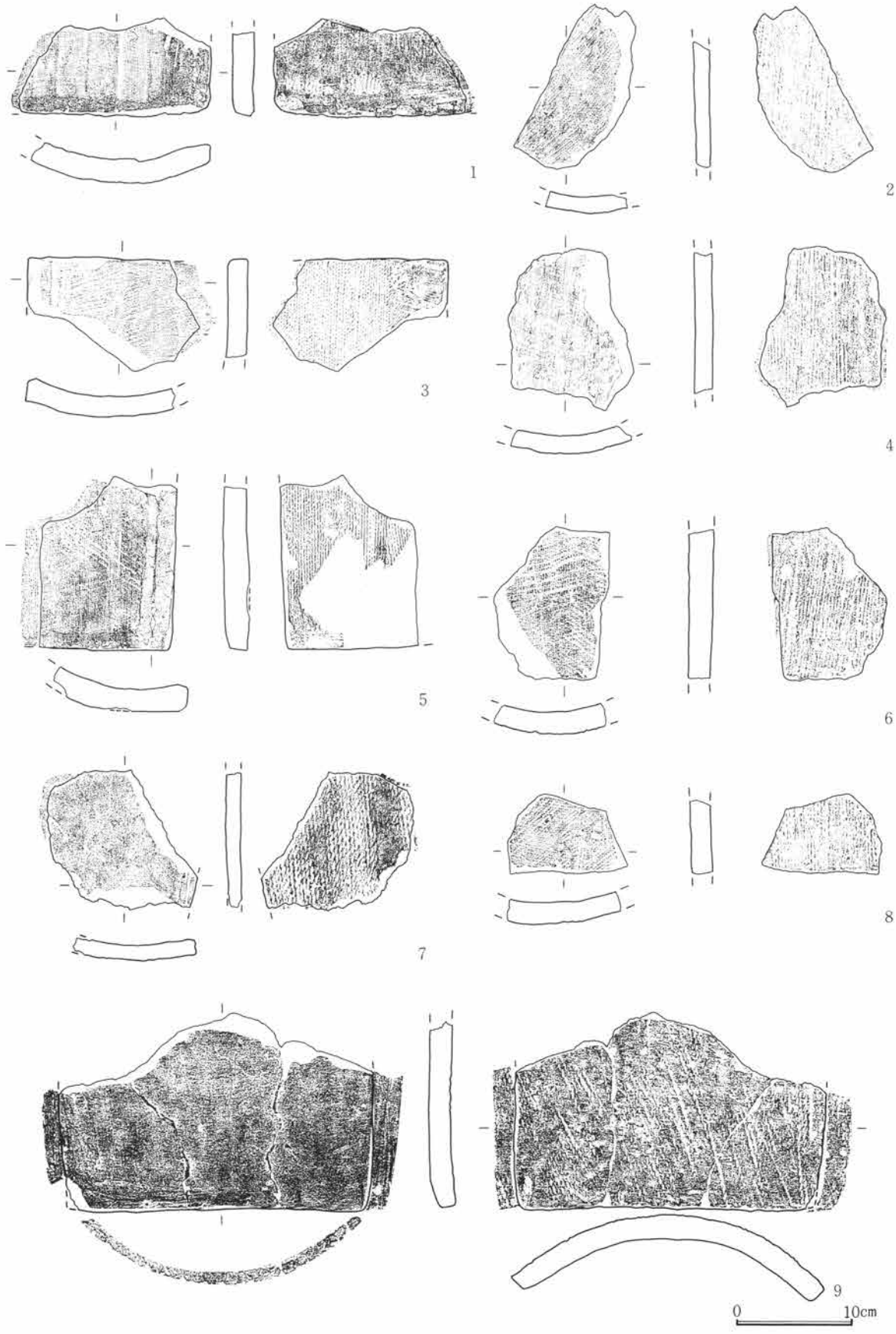
第357図　H区第５号井戸跡出土遺物実測図



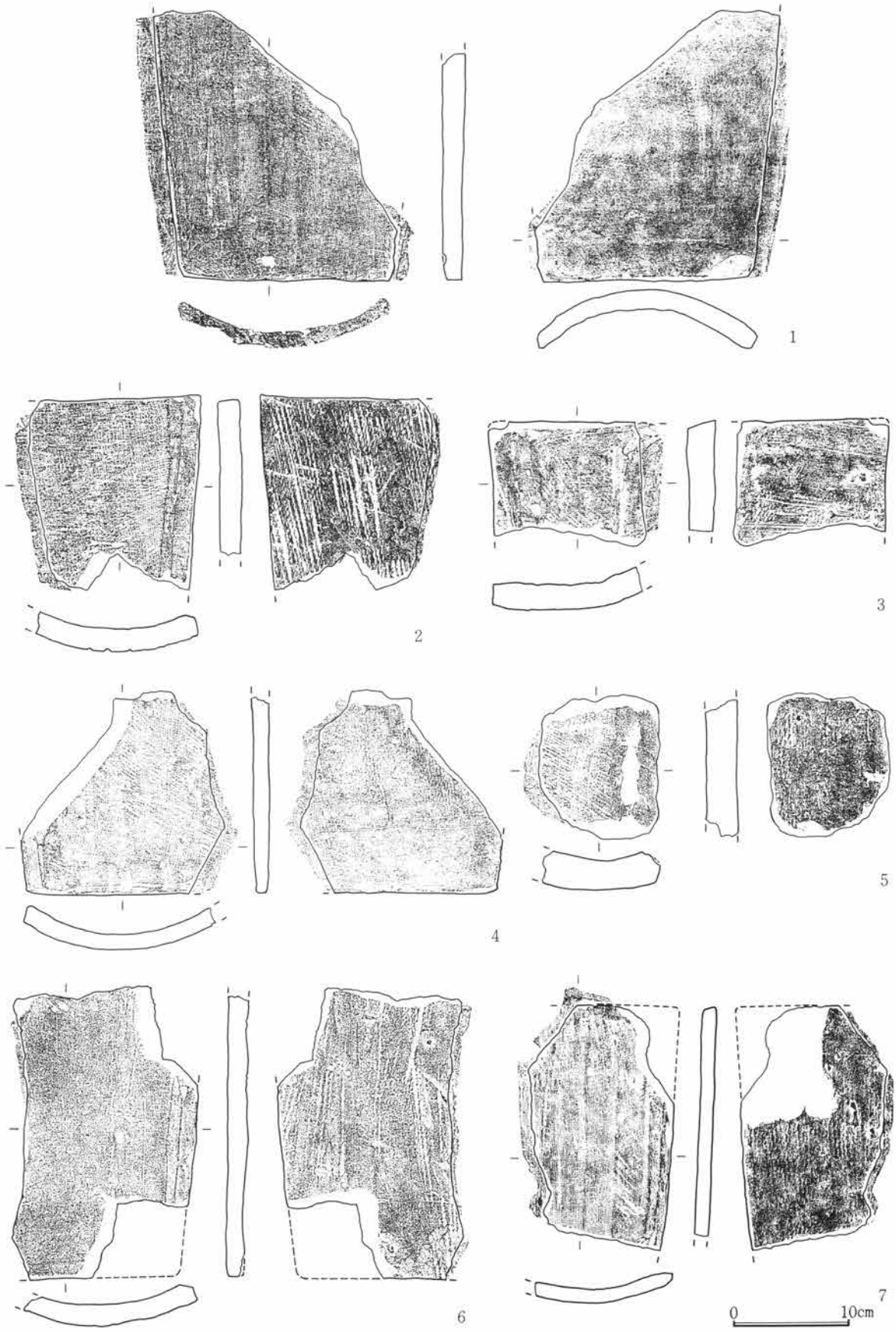
第358図　H区第5号井戸跡出土遺物実測図



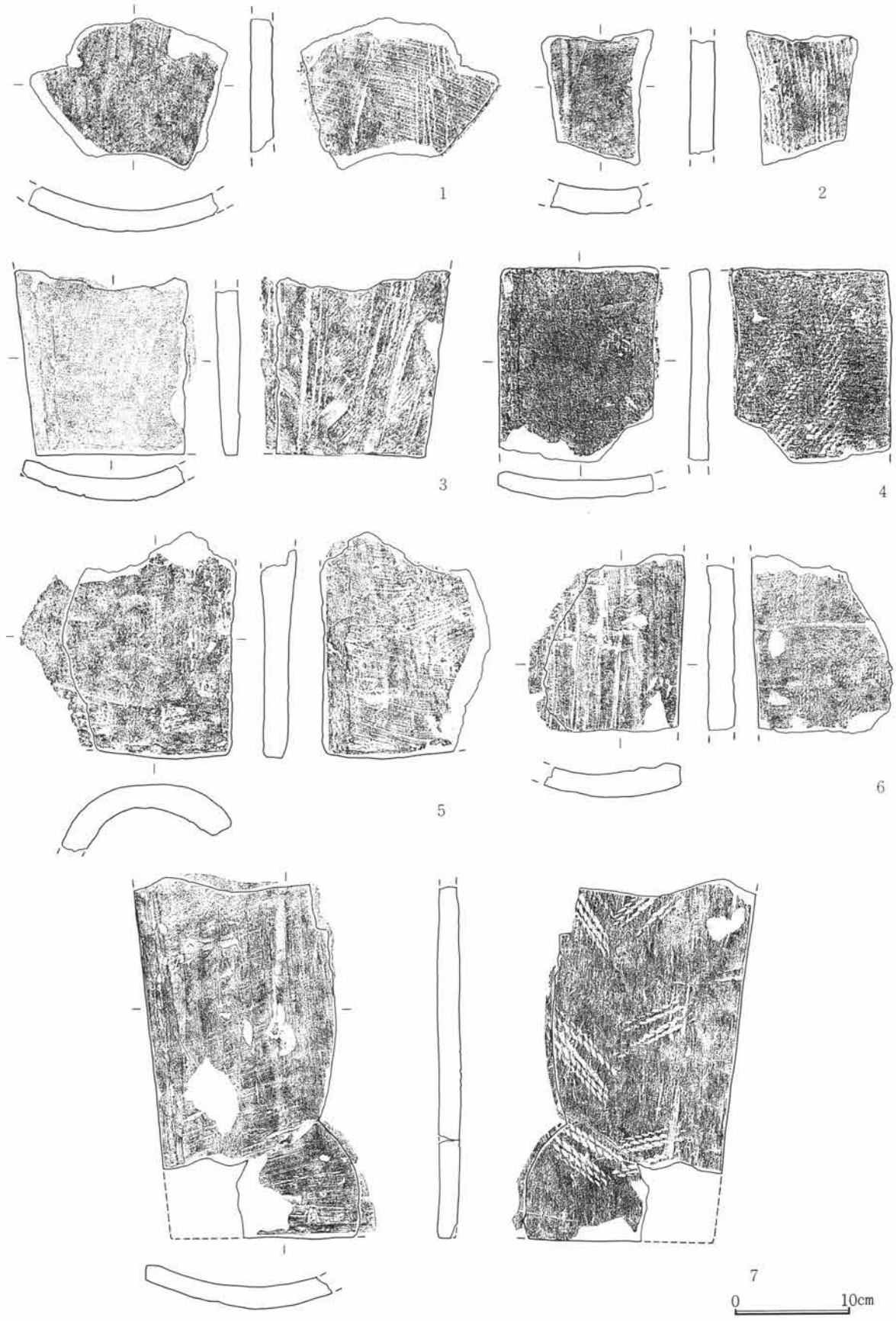
第359図　H区第5号井戸跡出土遺物実測図



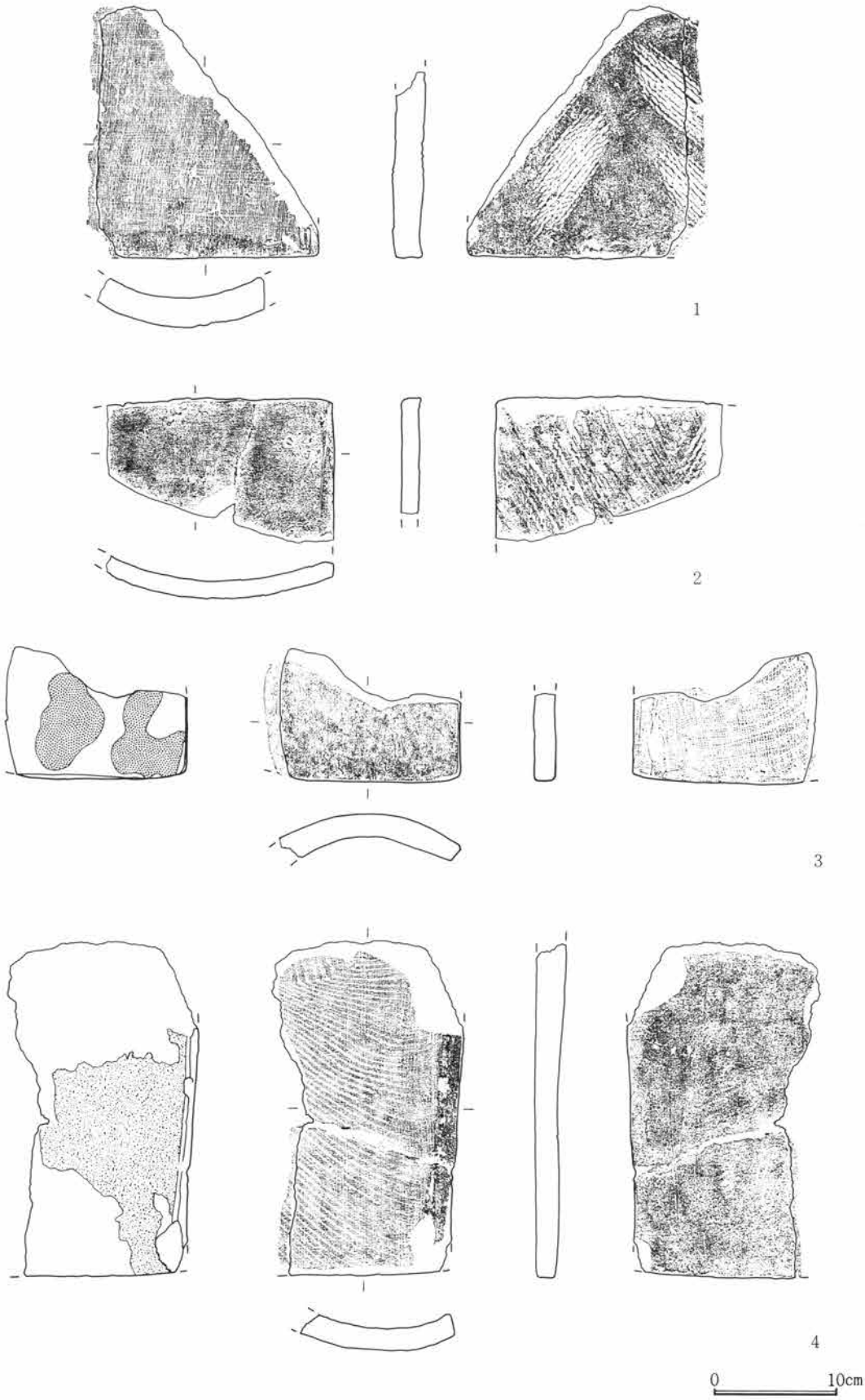
第360図　H区第5号井戸跡出土遺物実測図



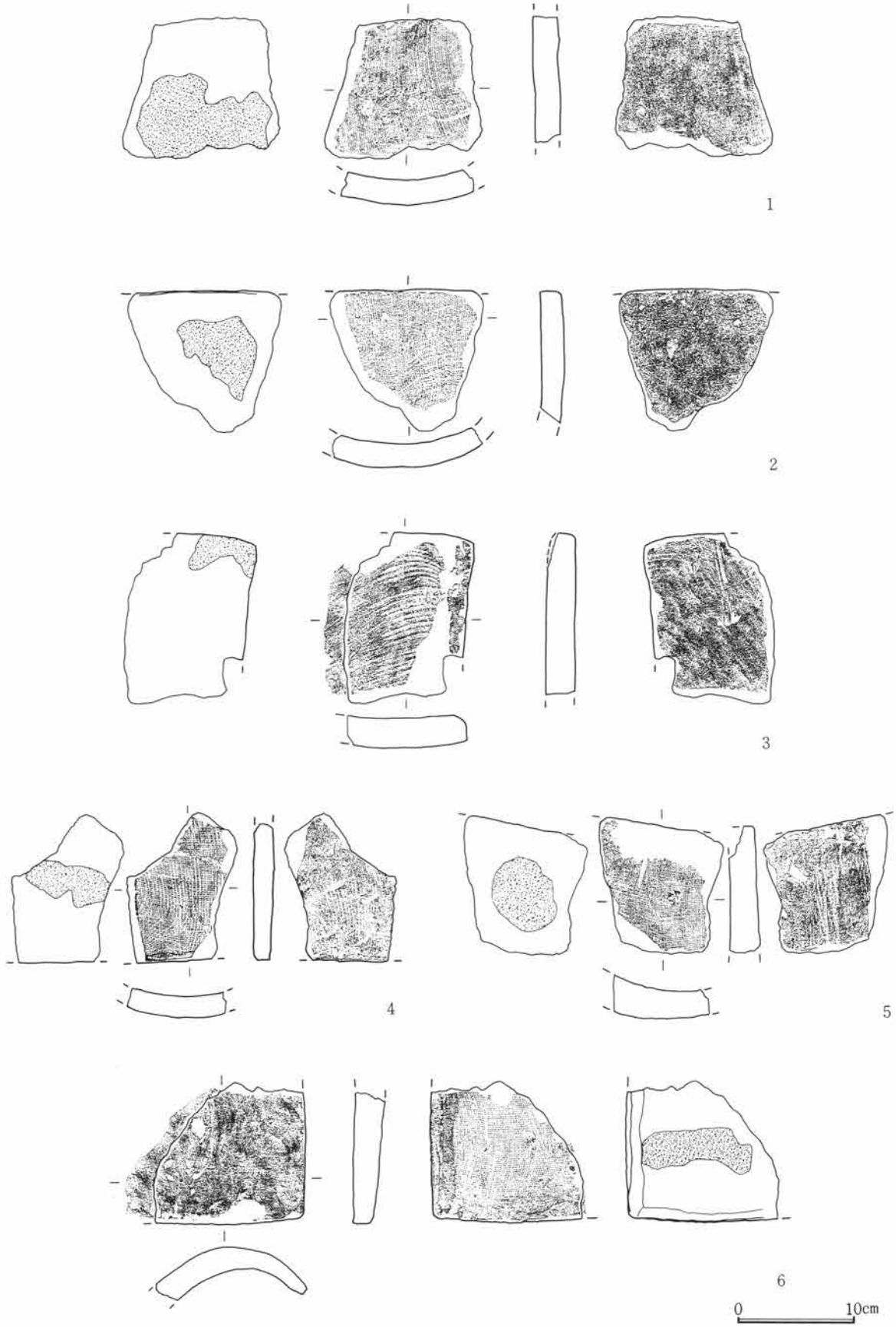
第361図　H区第5号井戸跡出土遺物実測図



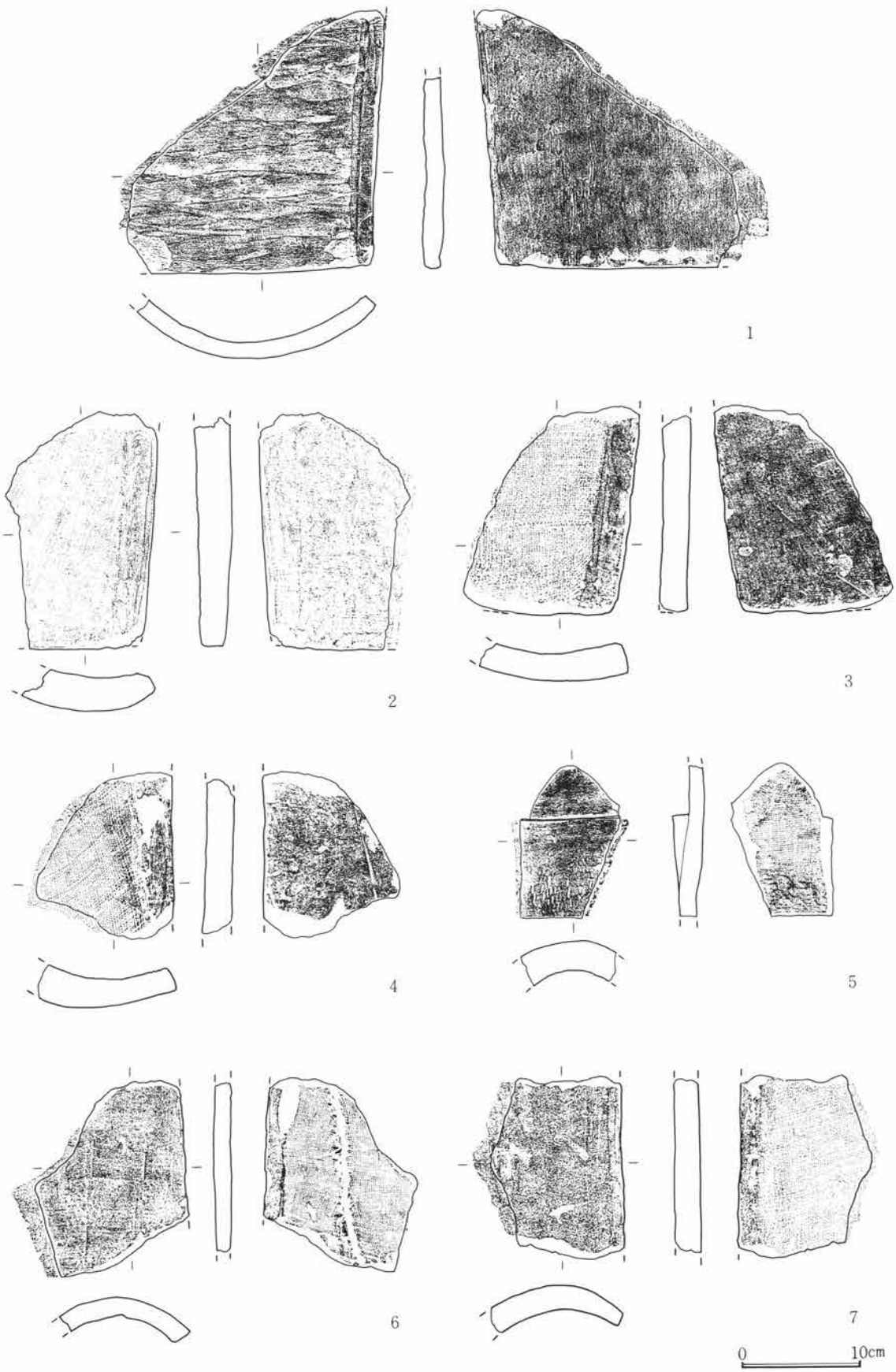
第362図　H区第5号井戸跡出土遺物実測図



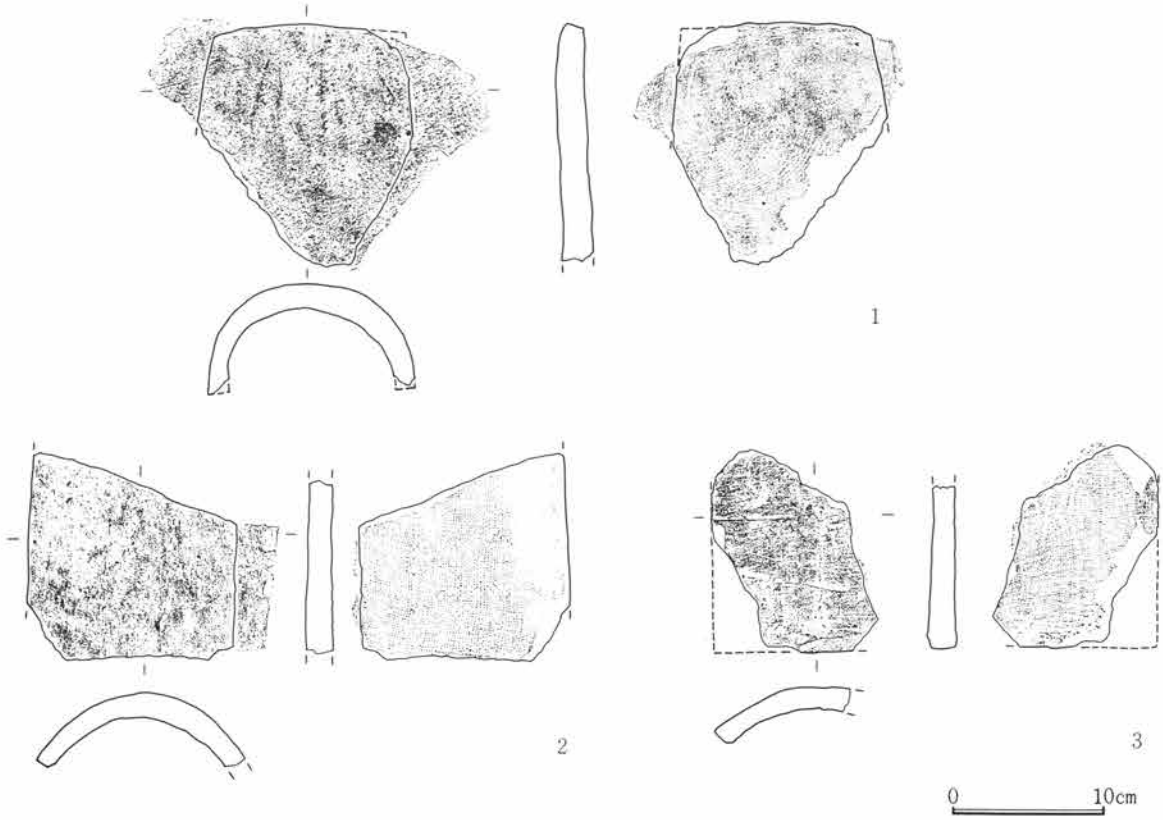
第363図　H区第５号井戸跡出土遺物実測図



第364図　H区第5号井戸跡出土遺物実測図



第365図　H区第5号井戸跡出土遺物実測図



第366図　H区第５号井戸跡出土遺物実測図

溝状遺構

H区第２号溝状遺構

当溝状遺構は、調査区中央東寄りに位置し、北側は山王線下にかかり未調査である。北―35°―西の走行方位を有し、南側は第53号住居跡との重複によって不明となっている。残存長は約20mであり、上幅約40～90cm、下幅約30～80cm、残存深度約11～38cmである。底面標高は全体的に変化はなく傾斜は認められない。その走行方位は第１・128号住居跡等の主軸方位と直行するものであり、有機的関係が考えられる。

H区第３号溝状遺構

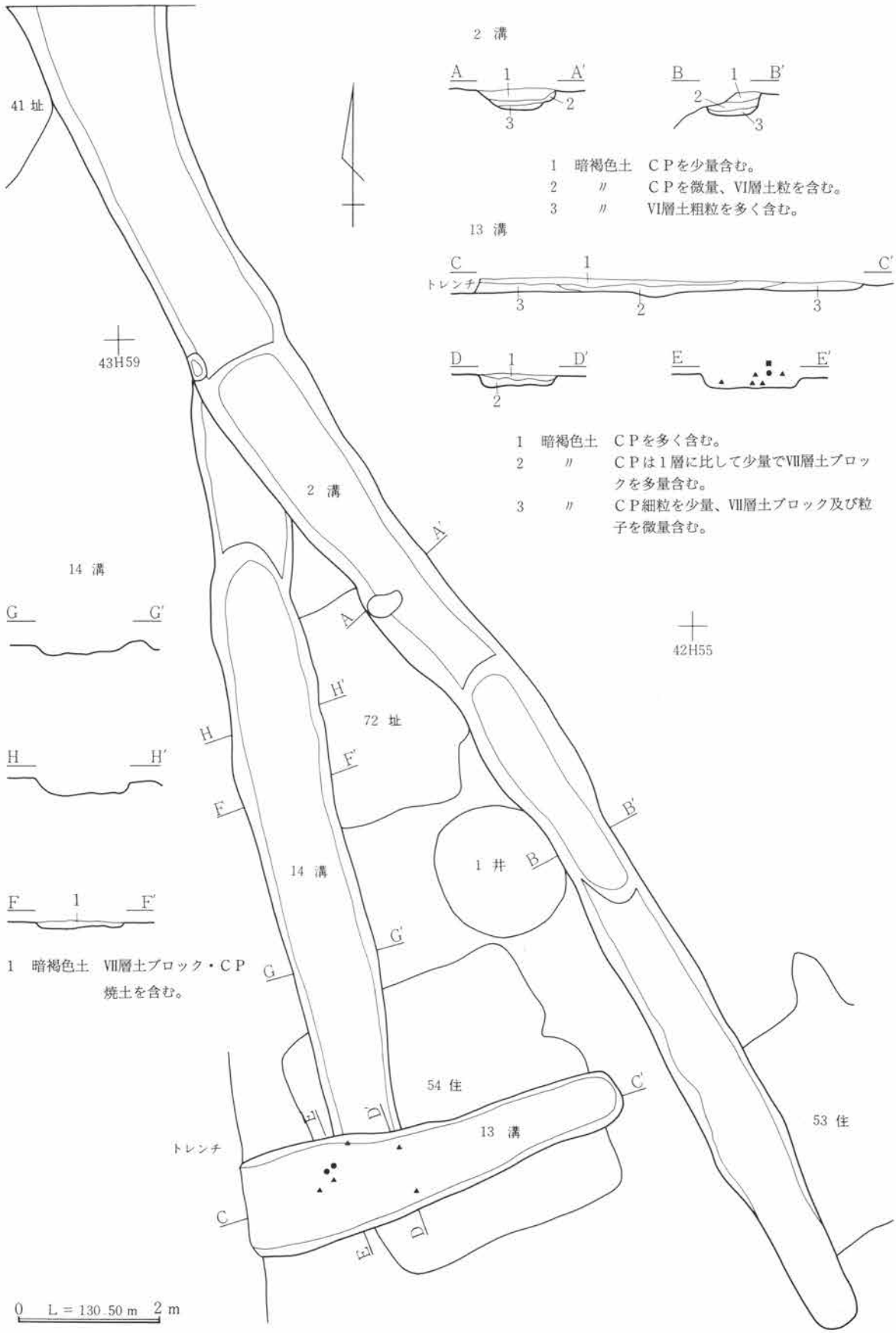
当溝状遺構は、調査区中央東側に位置し、第35・63号住居跡と重複している。確認はVI層上であり、その状態から、63号住→当溝→35号住という関係が想定できる。走行方位は、東―22°―北であり、第２号溝状遺構の方位と直行する位置関係にある。長さ約９m、幅1.1m、残存深度約10cmである。

H区第13号溝状遺構

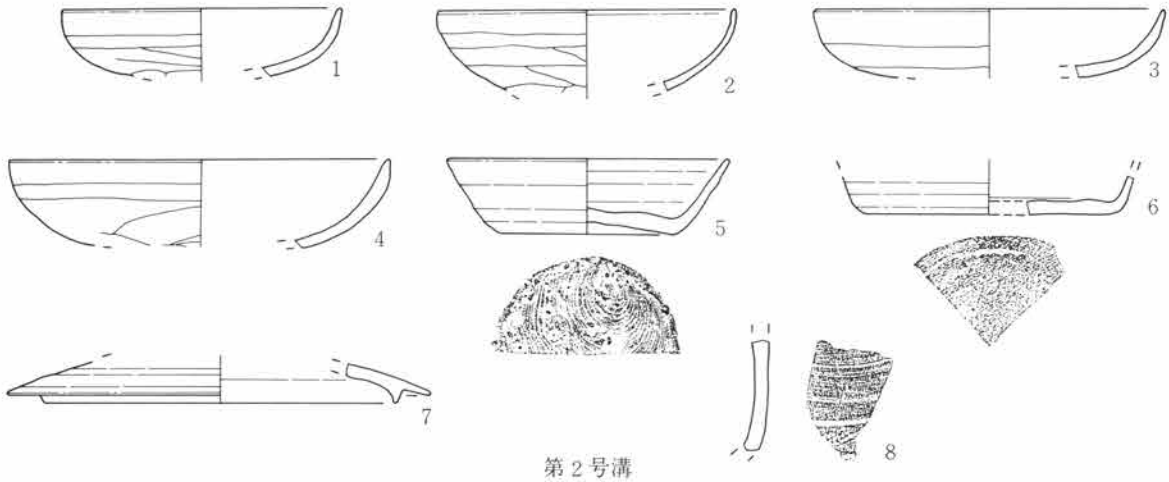
当溝状遺構は、調査区中央東寄りに位置し、第54号住居跡・第14号溝状遺構と重複している。走行方位は、東―18°―北であり、ほぼ第３号溝状遺構と平行する。また、第２号溝状遺構を間に東西に位置しており、重複もみられないことから、これら３本の溝状遺構は区画を意識したものである可能性が強い。残存長は約5.4m、幅約80～145cm、残存深度約14cmである。

H区第14号溝状遺構

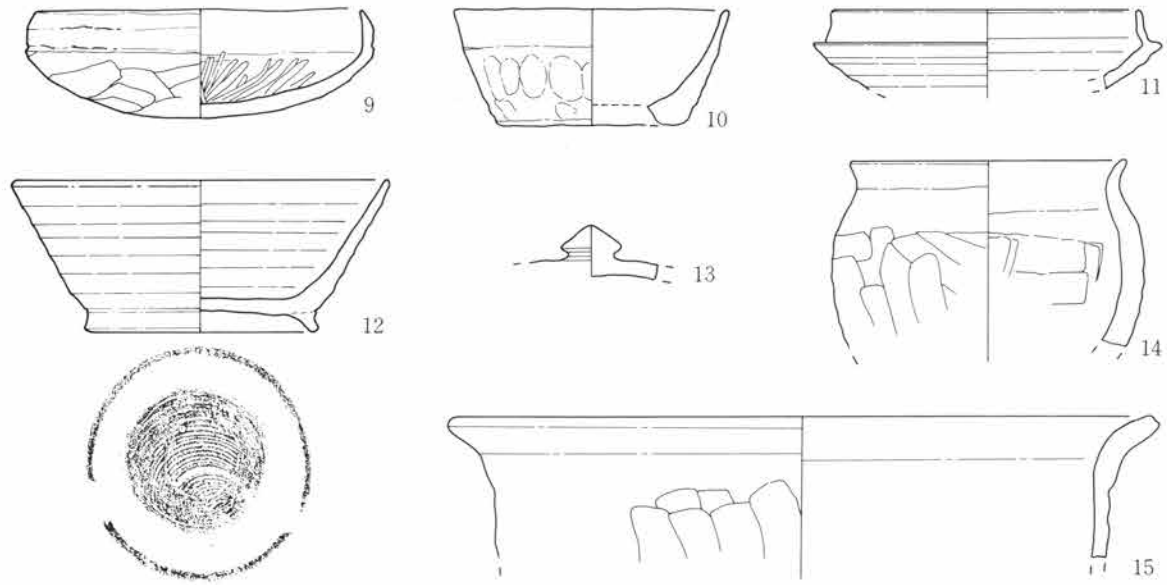
当溝状遺構は、調査区中央東寄りに位置し、北側で第２号溝状遺構と、南側で第13号溝状遺構と重複して

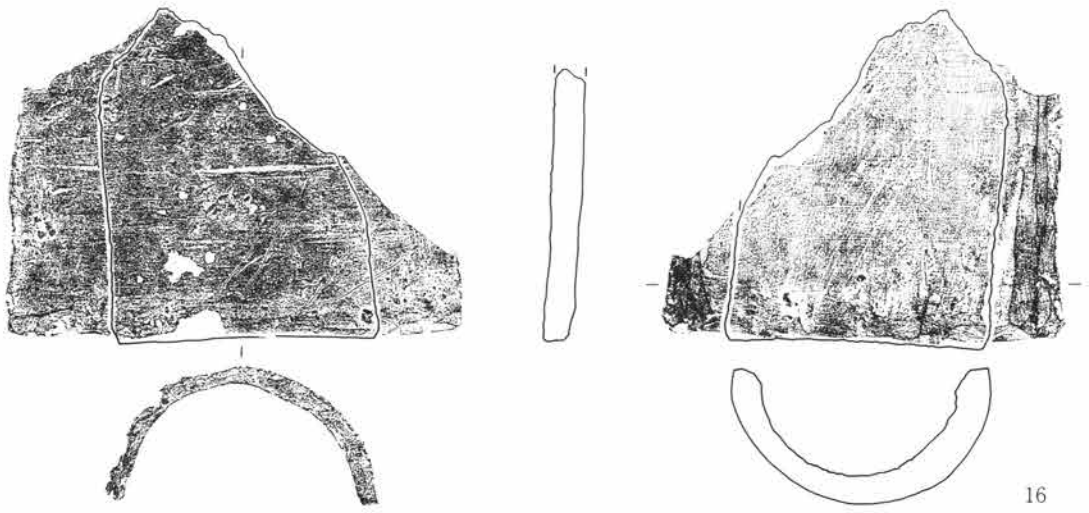


第367図　Ｈ区溝状遺構実測図



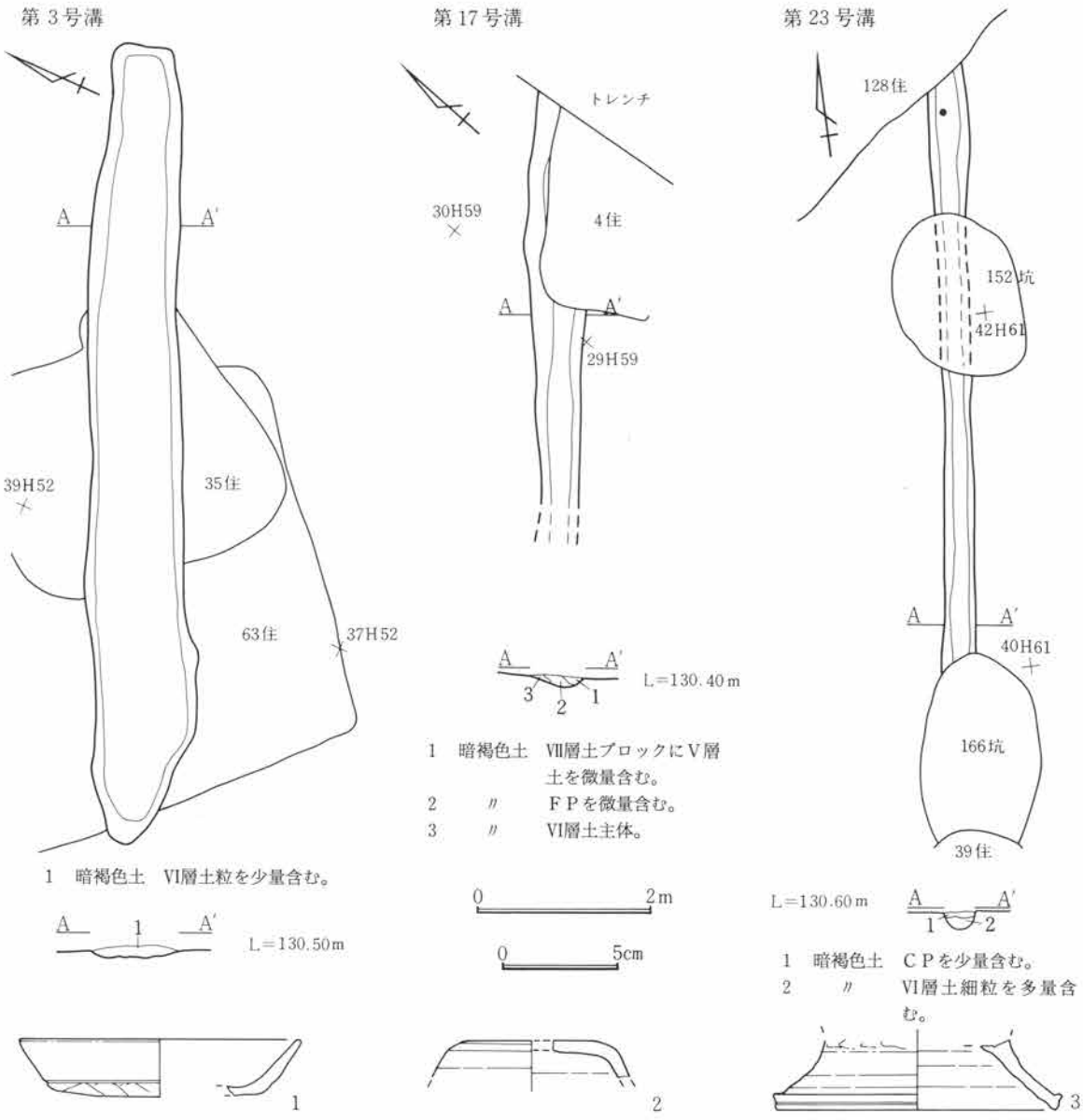
第2号溝





第13号溝

第368図　H区第2・13号溝状遺出土遺物実測図



第369図　Ｈ区第３・17・23号溝状遺構・出土遺物実測図

いる他、第54・72号住居跡と重複している。前後関係は、54・72号住→当溝→２・13号溝と考えられる。残存長は約10.6ｍ、幅約1.3ｍ、残存深度約22㎝で、走行方位は北－10°－西である。

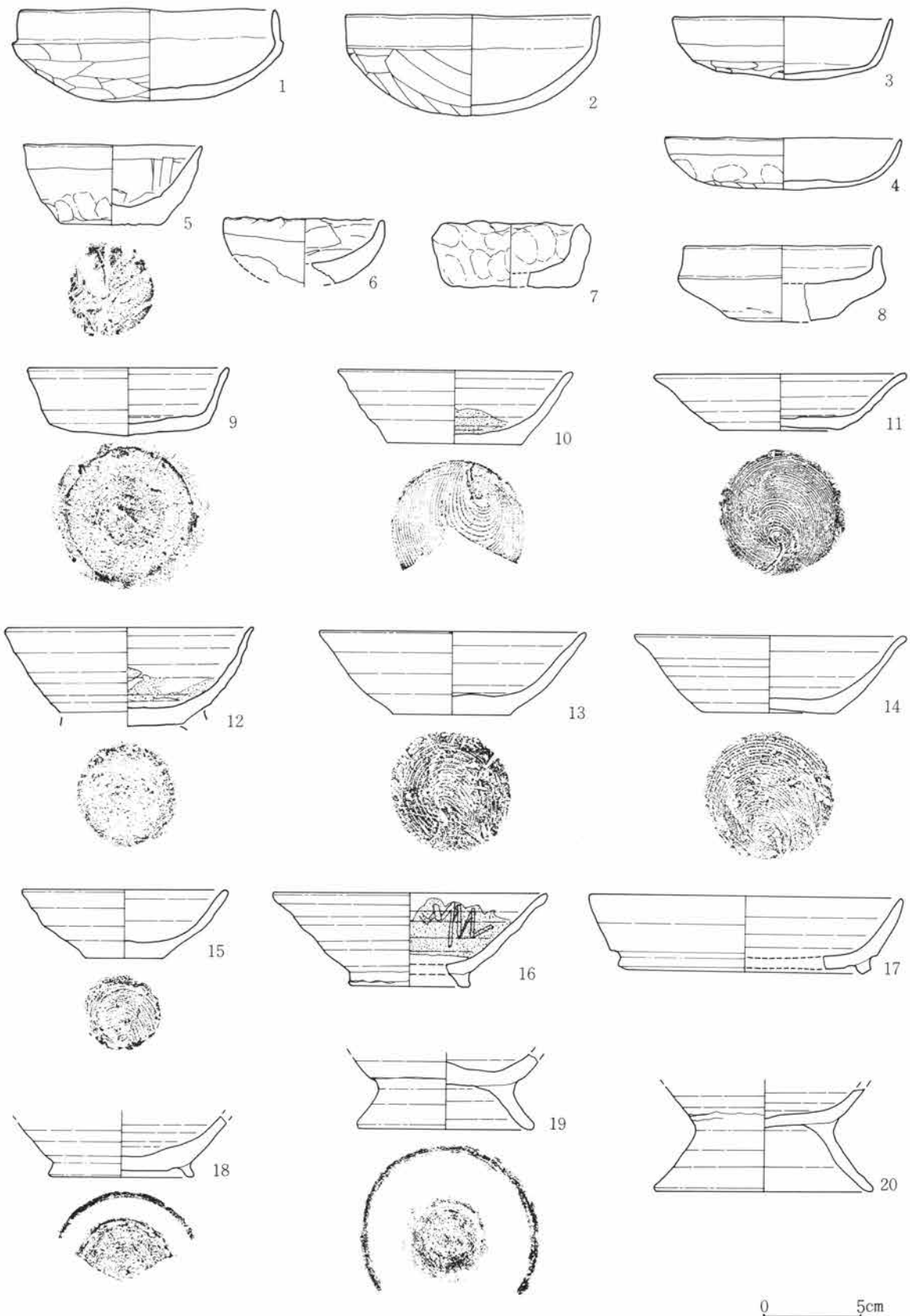
Ｈ区第17号溝状遺構

当溝状遺構は、調査区南寄りに位置している。東側で第４・37号住居跡と重複し、西側は第11号溝状遺構によるものかプランが曖昧になっている。残存長は約4.7ｍ、幅約60㎝、残存深度約13㎝である。走行方位は、東－40°－北である。

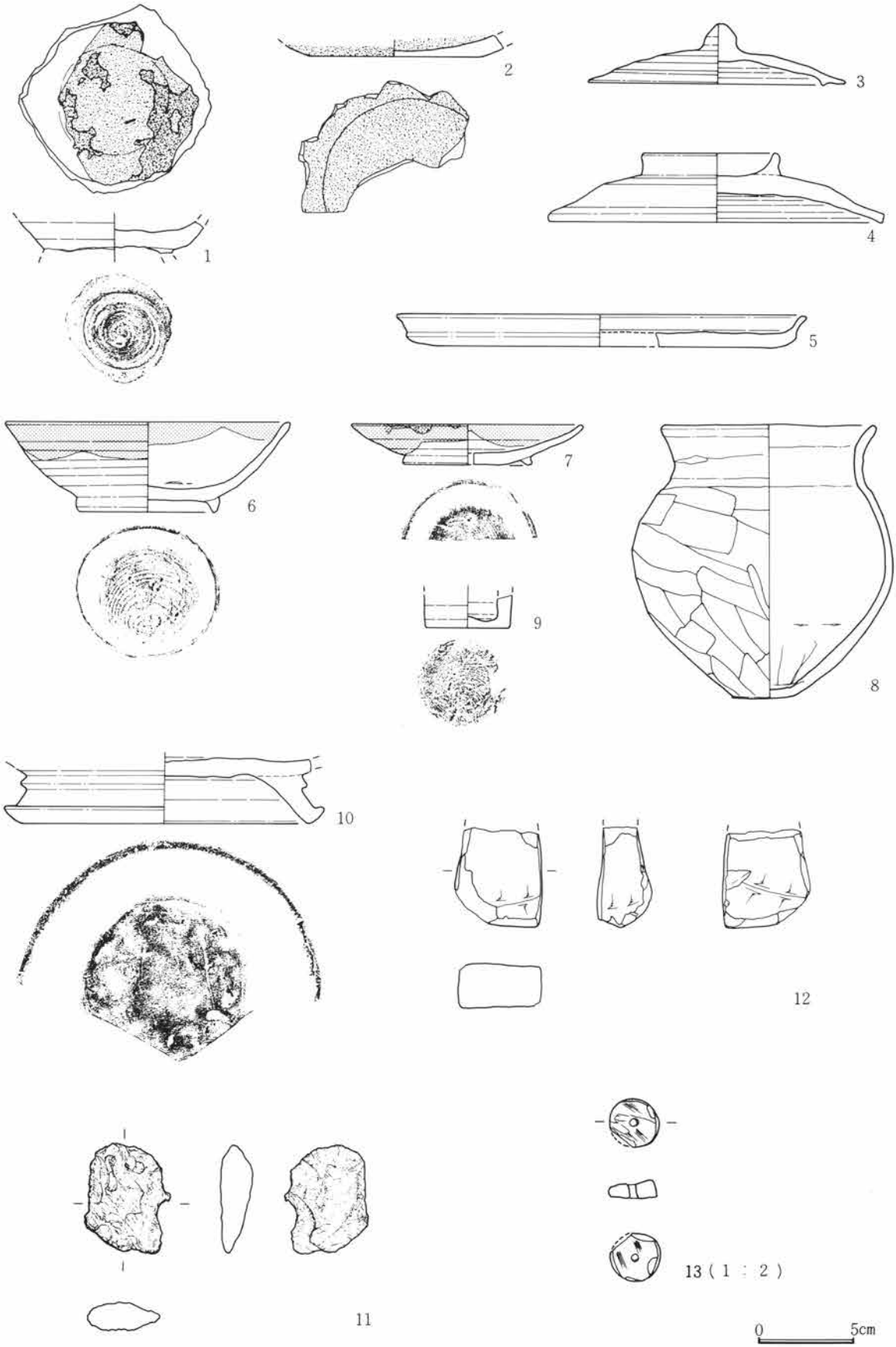
Ｈ区第23号溝状遺構

当溝状遺構は、調査区中央の遺構密集部に位置している。北側は第128号住居跡と、中央部で第152号土坑と、南側で第166号土坑と重複している。確認状態から当溝→152・166号土坑であるが、第128号住居跡との関係は不明である。残存長約6.6ｍ、幅約35㎝、残存深度約20㎝、走行方位北－６°－東である。

遺構外出土遺物

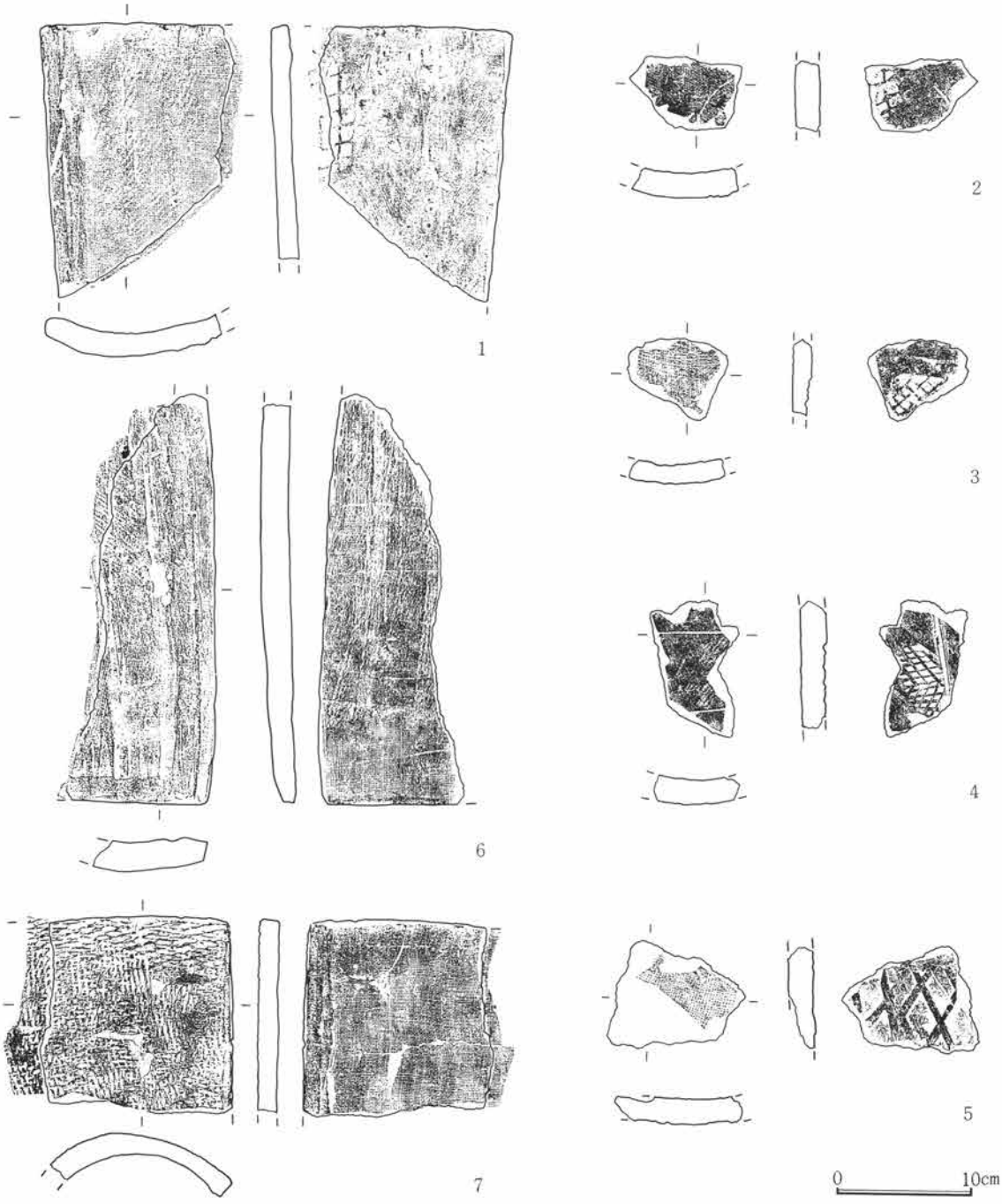


第370図　Ｈ区遺構外出土遺物実測図



第371図　Ｈ区遺構外出土遺物実測図

第372図　H区遺構外出土遺物実測図



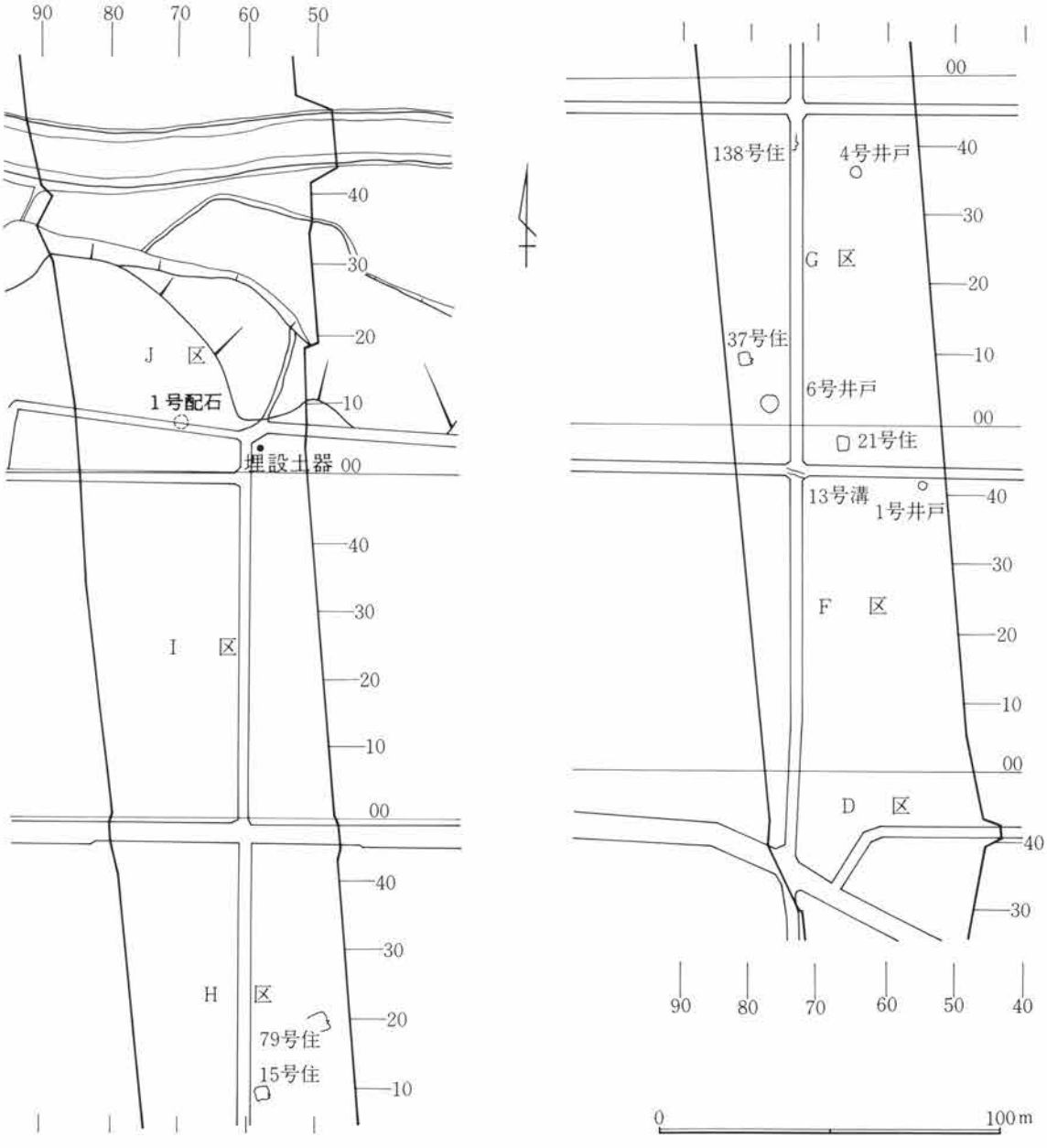
第373図　H区遺構外出土遺物実測図

当調査区の確認は一部の遺構を除いて、基本的にVI層上面で行ったが、古墳時代～奈良・平安時代の文化層は中世段階にかなり削平されたようで、検出遺構の残存壁高等も比較的浅い。そのためこの遺構確認段階で所属遺構の不明な遺物が多量に出土している。図示したものは完形に近い残存状態を示す土器を主体に、一部特異なものを含んでいる。瓦は軒瓦や格子叩等の成整形技法の顕著に捉えられるもの及び篦描文字のみられるもの等である。この他臼玉・砥石、不明の銅製品を掲載したが、特に銅製品については古墳時代～奈良・平安時代に属するという確証はない。以上に上げた遺物の内、特に時期の捉えやすい土器についてみると、土師器では外稜を有する坏が目立ち、その他ロクロ使用酸化焔焼成のものが多い。これらは当調査区検出遺構の所属時期の主体を成すものである。

追補

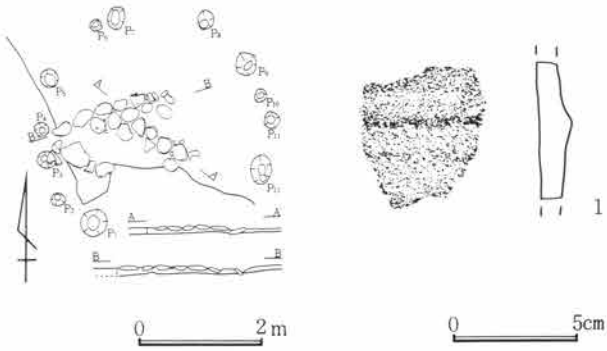
ここでは「上野国分僧寺・尼寺中間地域」（1）報告掲載予定の遺構・遺物、及び「上野国分僧寺・尼寺中間地域」（2）掲載遺構出土遺物中漏れてしまったものを収めたものである。特に前者は北側調査区における縄文時代遺構・遺物中のメインとなるものであったが、遺物の所在が不明であったため報告を控えていたものである。後者は住居跡出土の完形遺物で、出土位置の明確であるにも拘らず、遺物所在不明のため報告できなかったもの、及び特殊な出土遺物を提示した。また、（2）に掲載予定であったF・G・H（第11号溝状遺構以南）区の遺構外出土遺物についても同様に掲載した。

掲載した遺構は、J区第1号配石遺構、J区第1号埋設土器、F区第21号住居跡、G区第37・138号住居跡、H区第15・79号住居跡、F区第1号井戸跡、G区第4・6号井戸跡、F区第13号溝状遺構である。



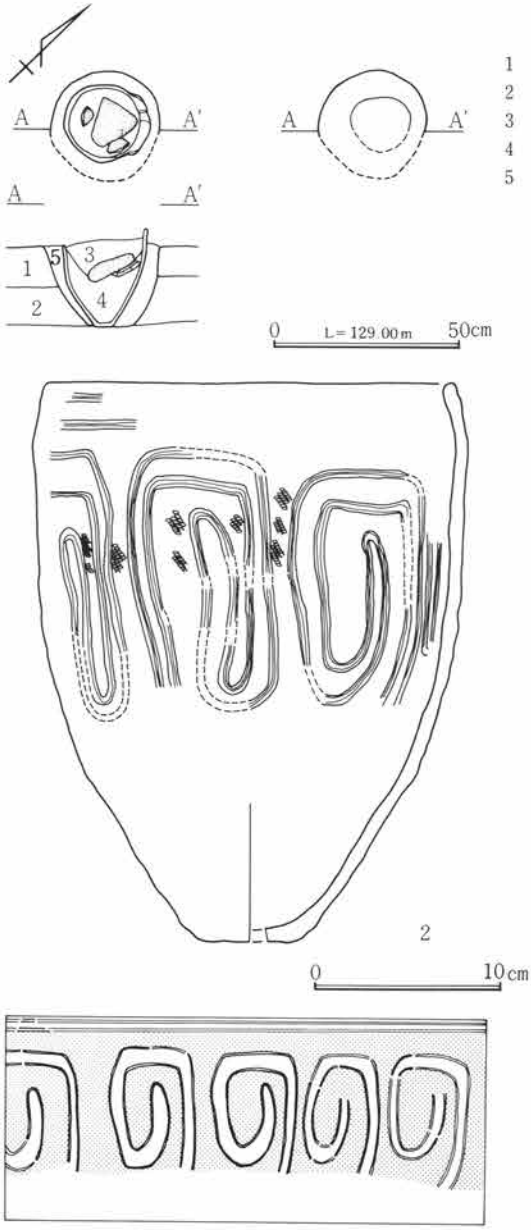
第374図　追補

J区第１号配石遺構



当遺構は、J区中央部の「神明宮」跡に検出した遺構であり、偏平な自然礫が一面的に敷かれた状態が認められた。配石下の調査によってピットが円形に検出されたことから、当遺構が敷石住居であろうと結論づけた。この配石部分から出土した遺物が第375図１である。小破片であり磨滅が激しいため、図から判断しにくいと思われるが、微隆起線が横位に施され、下位に縄文施文の痕跡がみられることから加曽利Ｅ４式と考えられ、当遺構の所属時期も同様と考えられる。

J区第１号埋設土器



1　褐色土　白色粘土粒子を多量に含み、しまりがあり、粘性もややある。
2　黄褐色土　白色粘土粒子を微量含み、しまり、粘性共にあり。
3　黒褐色土　炭化物を微量含み、しまりがあるが粘性はない。
4　〃　3層に近似。
5　茶褐色土　白色粘土粒を多量に混入し、しまり、粘性共にあり。

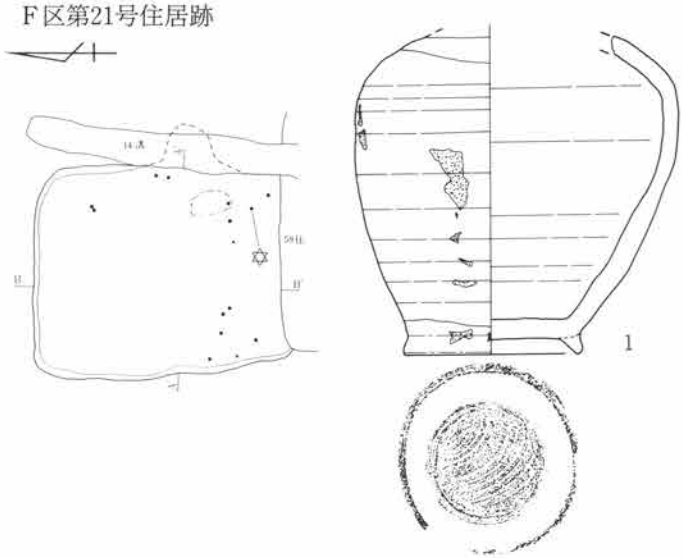
当遺構は、４・５－Ｊ－58・59グリッド内に位置し、確認はVI層に当たると思われる暗褐色粘質土中である。遺構確認段階で口縁部の一部は露出していたため、上部の状態は不明である。掘り方は、径約30cm、残存深度約22cmの円形プランである。埋設土器の周囲に埋め込まれた土は、当遺構構築のベースとなっている粘質土主体で固くしまっており、土器内に充填していた土が上層に僅かに炭化物を含み、ほとんど粘性・しまりをもたないのとは異質である。

埋設土器充填土は大きく上下２層に分離可能であるが、その違いは非常に微妙である。この２層の分離される位置に、偏平な自然礫が１個と土器片が検出されている。この充填土は土器埋設後に入ったものと考えられその時点で礫が土器内に落ちたものと考えられる。つまりこの礫は蓋石であった可能性が非常に強い。

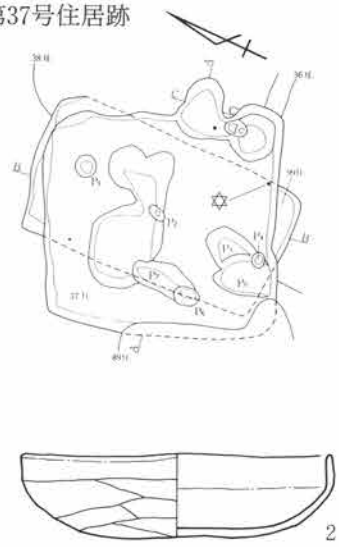
出土土器は、平口縁と考えられる深鉢である。器形は、胴部中位にやや張りを有し、口縁部は僅かに内湾する。文様は口縁部に沿って２本の平行沈線を廻らし、胴部中位に２本沈線で５単位の巻きの弱い渦巻文を施し、単節ＬＲと思われる原体を充填施文しているが、器面の粗れが激しく全体は捉えられない。出土土器の時期は称名寺式に属するものと考えられる。

第375図　追補

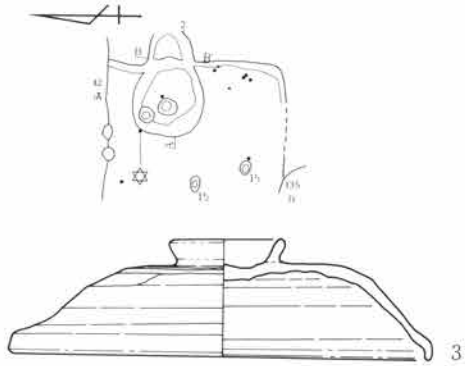
F区第21号住居跡



G区第37号住居跡

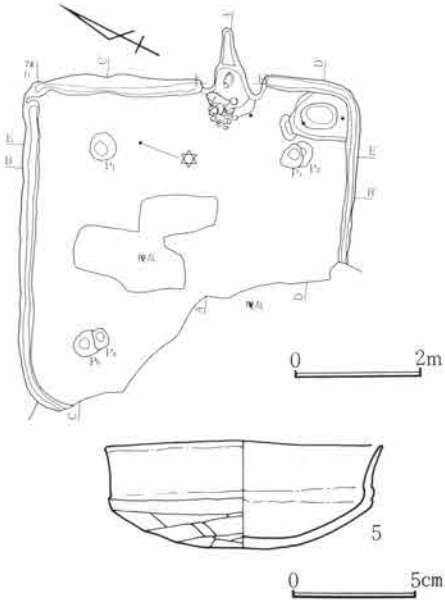


G区第138号住居跡



H区第15号住居跡

H区第79号住居跡



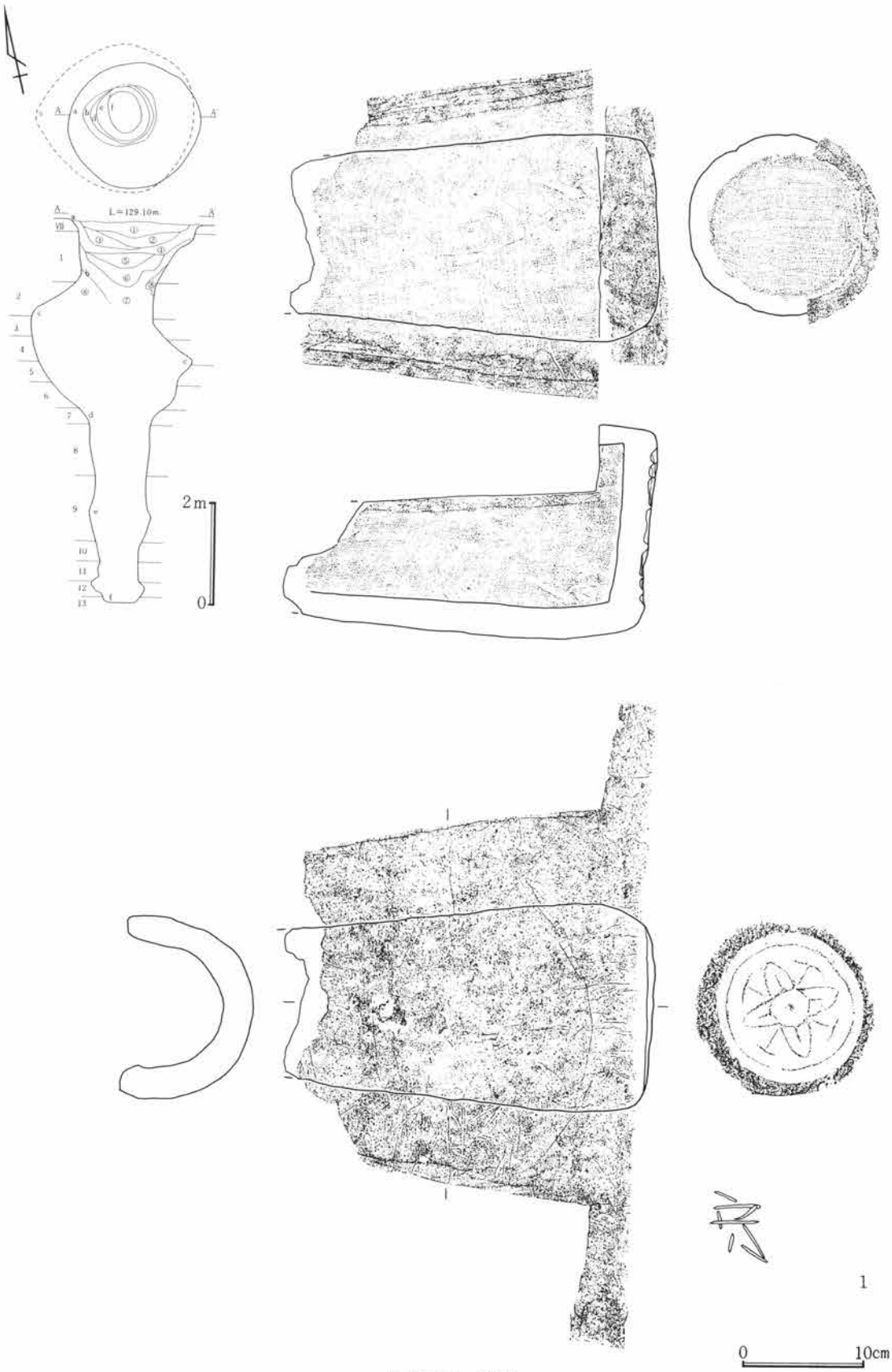
第376図　追補

F区第21号住居跡出土の瓶（第376図１）は、カマド残存部正面に検出された焼土の南側から出土したものであり、中にはわずかであるが空間がみられた。充填土は住居跡覆土とは若干異質で径１㎜大の砂質土であり、水で洗われたような状態を呈する。

H区第15号住居跡出土の石製品（第376図４）は、榛名山系の軽石を加工したものであり、下端は平坦で中央に全長の1/2程度まで穿孔がみられる。また、上端はわずかに欠けているが、横位に穿孔されていたものと考えられる。これらの特徴から当遺物は、「浮き」ではないかと考えている。

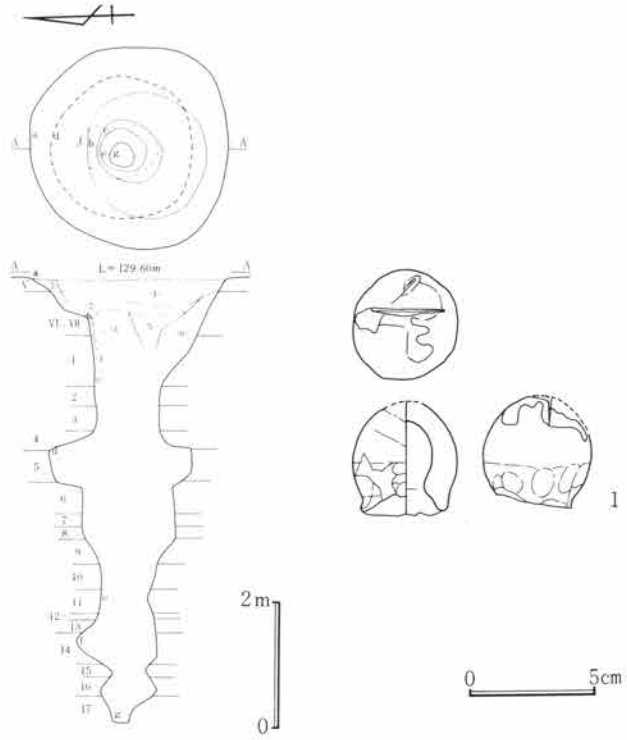
G区第４号井戸跡出土遺物（第378図１）は、「埴輪」の破片と考えられるものである。したがって直接当井戸跡の時期に関連しないが、こうした遺物が持ち込まれるためには、近い位置にその供給先が想定されることから、敢えてここに掲載した。上端に切り込みがあり、「鈴」であろうか。

F区第１号井戸跡

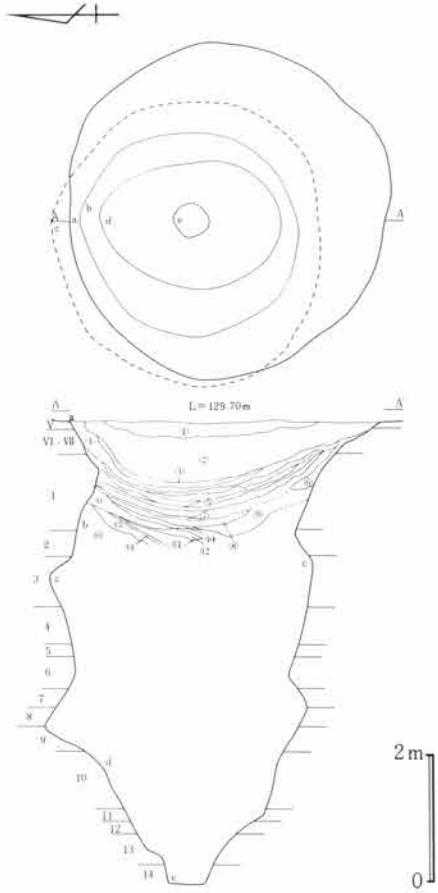


第377図　追補

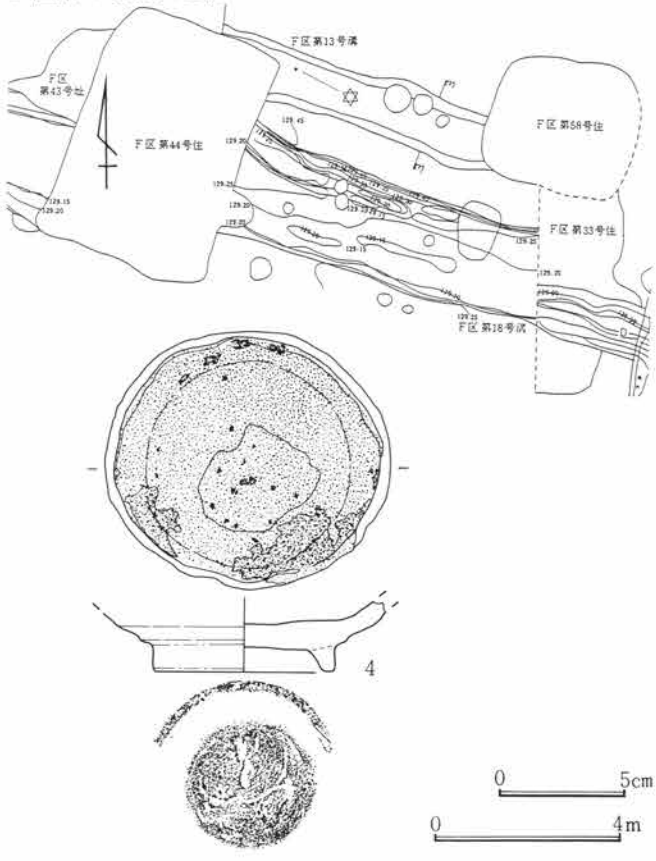
G区第4号井戸跡

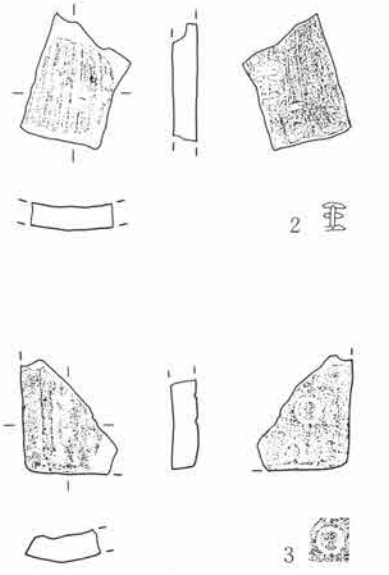


G区第6号井戸跡

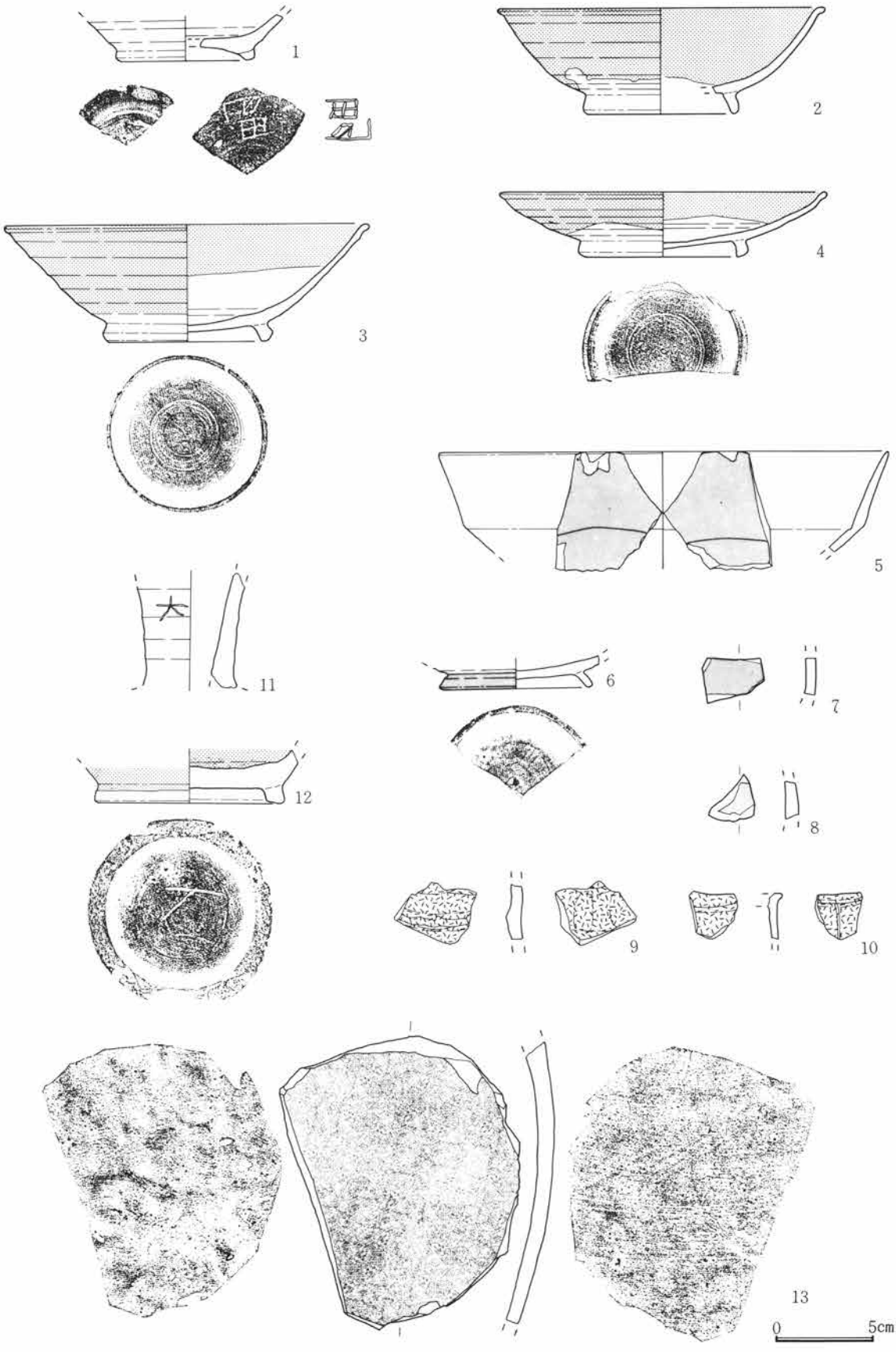


F区第13号溝状遺構

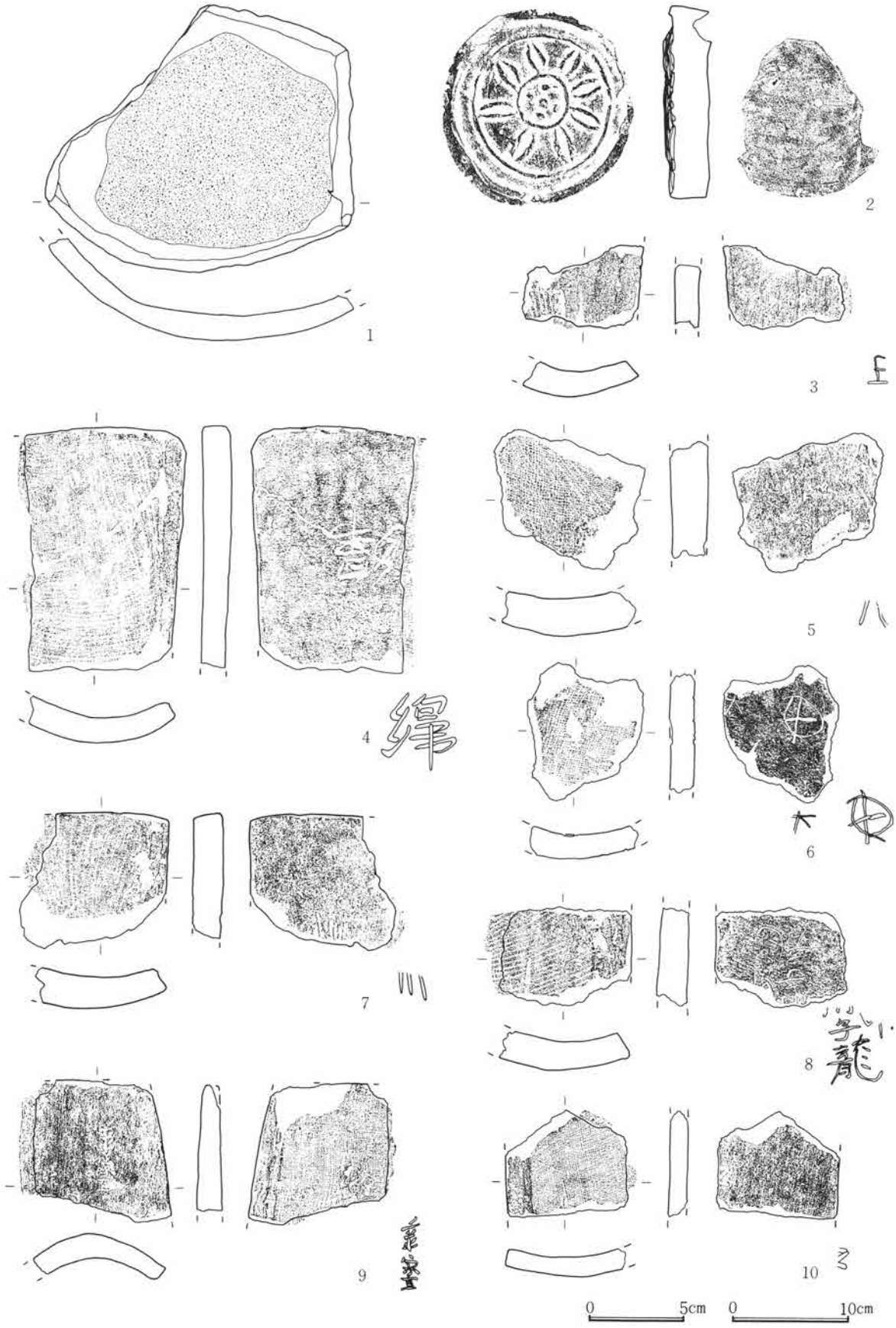




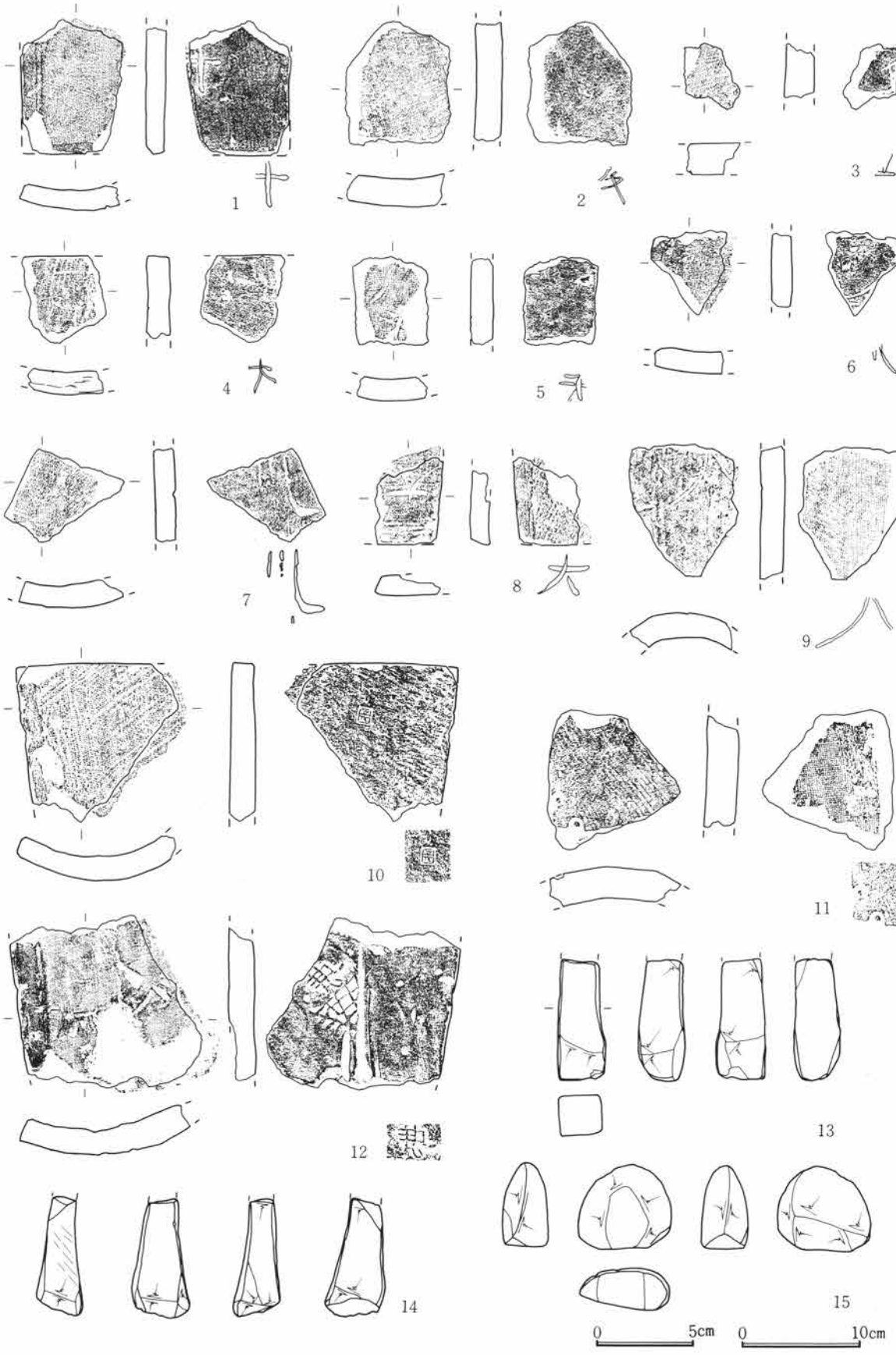
第378図　追補



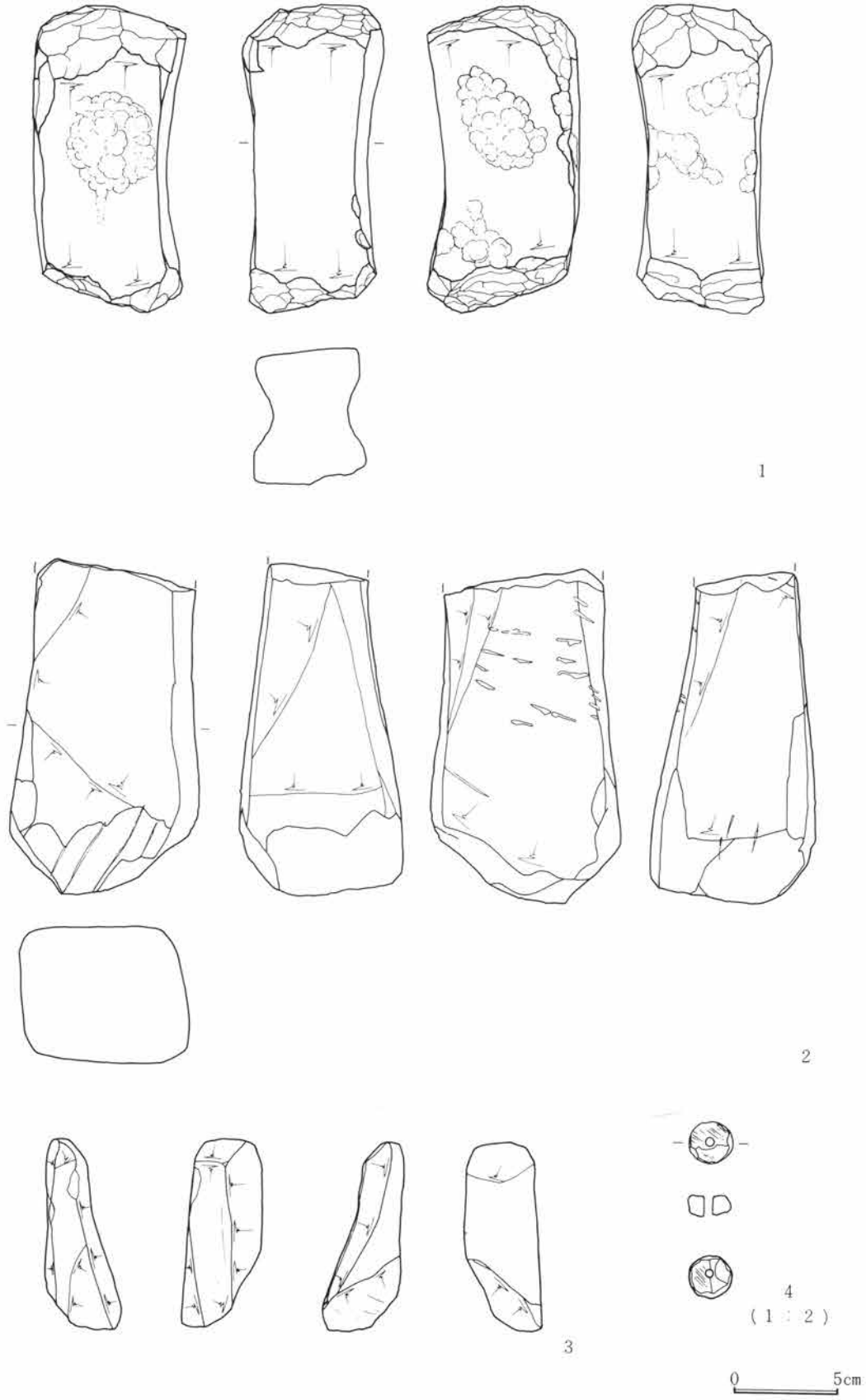
第379図　追補



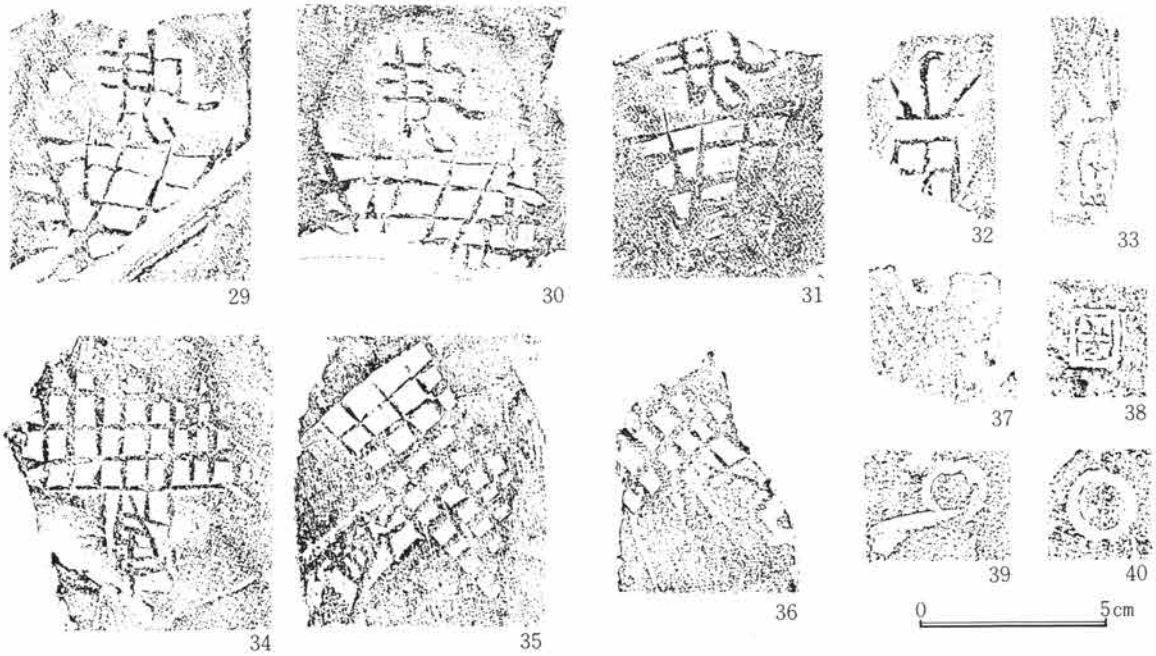
第380図　追補



第381図　追補



第382図　追補



第383図　文字及び刻印集成

第5章 ま と め

第1節 遺 構

第1項 構築基準辺に就いて（住居掘り方に就いての一解釈）

この「構築基準辺」に就いては第4章第1節で若干述べたが、ここで具体的に記述しておきたい。しかし、この「構築基準辺」は人間が相対する辺を備える物を造作する場合、その全てに係わることとして考えており、この点では〝人間〟の存在する時代全てが対象となるが、筆者が従前より具体的に検討を加えてきたのが古墳時代以降であることから、前提として古墳時代以降に係わる遺構等を対象としたい。また、この「構築基準辺」の概念を述べるには、上述の全ての時代の全てのものに係わるであろうが、紙数の関係上大略的なことしか記述出来ない。この点では、各時代と通じ代表的な遺構のみをもって記述することを御断りしておく。

目的としては、今次の報告中の住居主軸を新たな方法を用いたことにより、この方法を説明付けすることを第1点におく、このため、主体的には住居跡であって、具体的には〝住居掘り方〟と考えていただければと思う。

1．横穴式石室における構築基準辺

横穴式石室は、平面形状態による分類もさることながら、大半の場合石材による構造であり、その石材が〝規模・加工の状態・積方〟により分類されている。

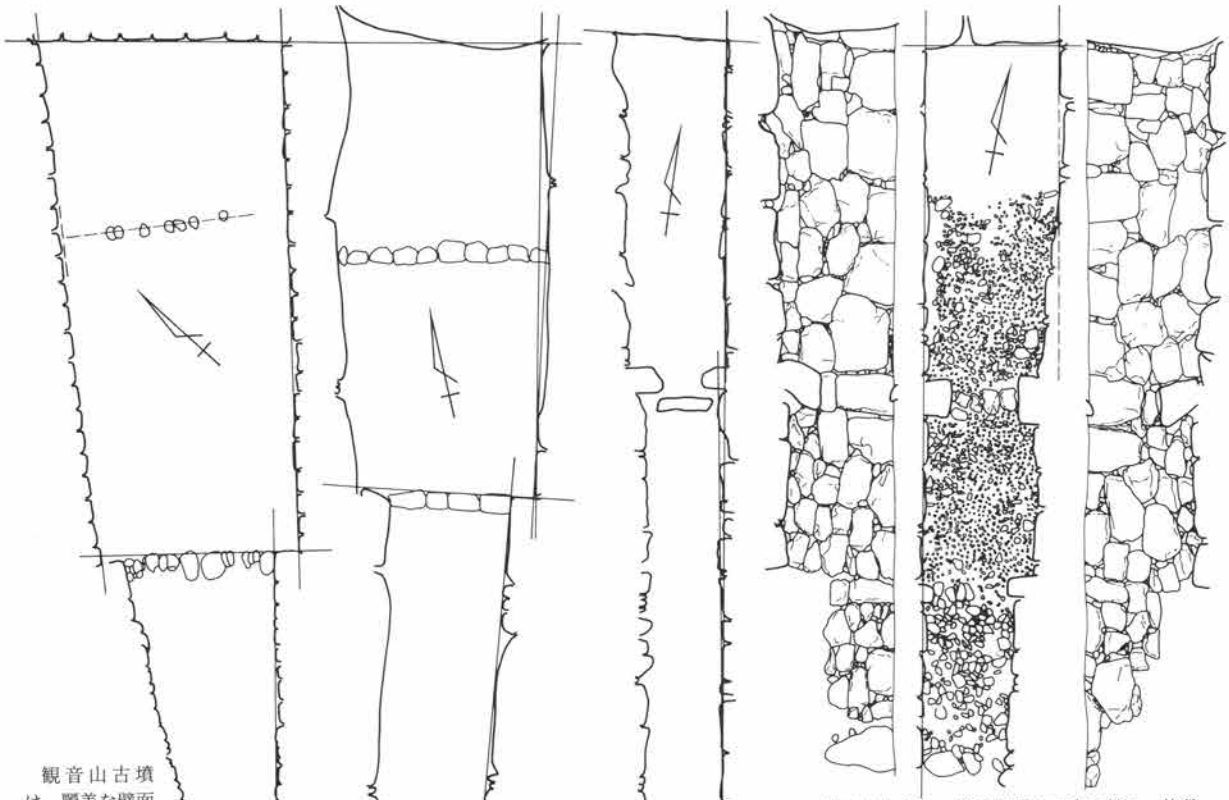
群馬県下に於いても、古墳は、多数構築された横穴式石室を具備する。必然的にそれらは構築物であって人間が〝人力・道具・機材〟を用いて構築したものである。しかし、この構築物の中の横穴式石室は、一つ一つの石を順番を決めて積み上げるのであって、この順番が問題になるのである。また、この横穴式石室を構築する場合、多くのものが〝掘り方〟を具備している。この〝掘り方〟は、各時期・地域により様々である。横穴式石室の構築技法は、この〝掘り方〟を加味して論じなければならないところであるが、今回は石室のみに就いて述べたい。

多くの横穴式石室の玄室に限ってその構築過程を概述すれば以下のとおりであろう。（裏込め・掘り方は除外して）。

①奥壁材の設置（河原石等のものでなる、巨石の様な石材を用いる場合）。②奥壁寄り側からの側壁（腰石）の設置。③玄門石の設置。④各壁の積み上げ。⑤天上石の設置。の5段階にわけられる。

一般に図示される石室平面図（底面）は、側壁底面の腰石部分のものであって、①～③の段階のものであるが、この①～③を設置する段階には、掘り方底面に、どの様に石材を設置するかの、ある種の計画線的なものが引かれたとも思われる。しかし、実際の構築時には、人が中に入り石材の設置に係わる作業があり、その計画線があったにしろ、踏まれて消える程のものと思われる。そして、実際の石室図を見る限りに於いて、図上の左右の不均衡な状態（第384図参照）の様に、側壁の構築段階に生じている。このことは、構築段階に於いて、構築技法自体に何らの特性が存在したことが推察される。

第384図に図示した以外でも、多々認められるのが、この左右面の不均整である。これは、構築時に片側を先行させたか、片側を基準にして〝幅を設定したなどの状況が示唆され、少なくとも、中心幅から左右に等規離をもっての構築とは考え難い点にある。



観音山古墳は、麗美な壁面を削で構築するが、平面形状はこれに比して〝歪〟がある。この要因は、奥壁面を基準に右壁の構築があり、両者は、ほぼ直行に近い状態であって、羨道もこれに準じている。また、玄室内の間仕切りは左壁を基準にしている。

観音塚古墳は巨石を用い構築がある。この巨石は二次的に動かすことは至難であったと考えられ、全体の〝歪〟は認め得るところであるが、やはり、右壁面の片側に比較的整った状態が看取される。また、玄室内間仕切り列石も右壁を基準とする。

前二子古墳は、右壁を通して基準としている。　玄室部では、左壁列の造作に〝歪〟が認められる。そして、右壁を基準として左壁側への幅員値を設定し、左壁の腰石の設置をしている状態が顕著に認められる。

巌穴山古墳は、複室構造の石室を備え、均整のとれた形状を呈している。この巌穴山古墳の場合も、前二子古墳例同様に、この均整のとれている形状からも片側の基準が看取され、本墳の場合は、左側壁側が通して基準になっている。特に、複室構造であることから、玄室・前室・羨道部各幅は、玄門右門柱石による何らかの制約が認められる。また、玄室側壁では、左側壁側の腰石は大きく、間隙も石の組み合わさりが良好である。しかし、これに対し、右側壁は腰石自体も全体に小さく、間隙も左壁に対し間のあいた観がある。この点は腰石より上位でも認められる。

玉村15号墳は、無袖型の石室で、奥壁幅に対し、入口部幅が狭くなっている。これにより、右壁を基準にし、左壁側を合わせる様に積んでいる。また、左壁の最奥最下段目は、奥壁からほぼ直角に据えている。

御部入11号古墳も玉村15号墳と同様であるが、玄室部をある程度意識してか、左壁側に奥壁から腰石をほぼ直角に据えている。右壁を基準にして左壁側を3段階の面として多面構造としている。

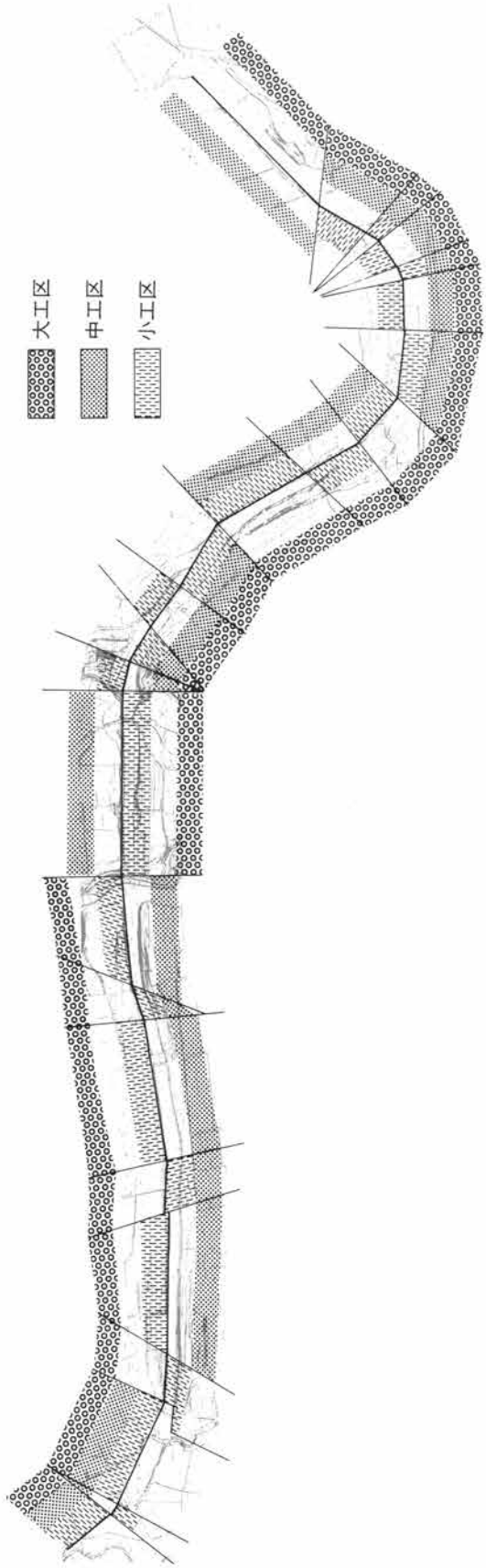
亀山京塚古墳は、単室構造であるが、やや特殊な状況も看取される。構築基準辺は左壁と考えられるが、奥壁との係わりに若干疑念があり、玄室部分を基準に左壁を基準にしたと考えられる点にある。

南下E号墳は、石室群面に赤色顔料により作業朱線が施されているが、奥壁から右壁が直角に送り出されている。右壁は左壁を基準として、玄門部方向へ積まれている。

奈良古墳群ヤ号墳は、亀山京塚と同様な構造の観があるが、左壁を基準にしている。

虚空蔵塚古墳は、左壁例が前庭部（？）左壁と一直線を成しており、左壁側基準辺となっている。また、敷石も同様に、左壁側には截組み構造が認められないが、右側では顕著である。

第384図　横穴式石室に於ける〝構築基準辺〟



第385図　女堀に於ける〝構築基準辺〟
（東大室・飯土井地区）

則、横穴式石室の様に相対する面を具備する場合、片側を先行させ構築（壁全体を構築とするのではなく、腰石設置段階ぐらいをさす）。これを基準として、反対側へ幅員をとり、構築したと考えられる場合、この先行する部分を基準にした〝辺〟であって、これを横穴式石室の場合の構築基準辺とする。

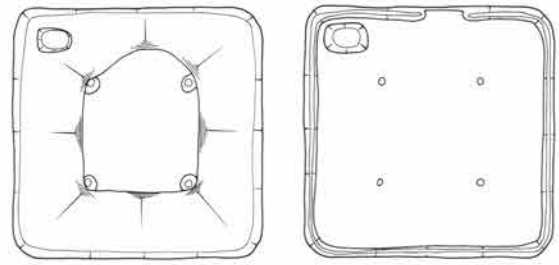
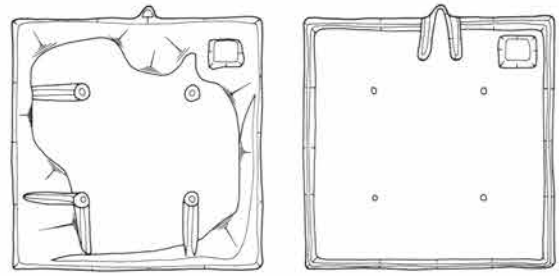
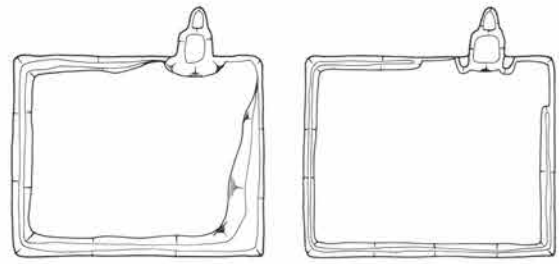
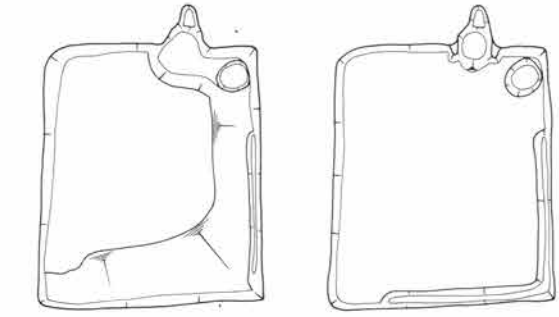
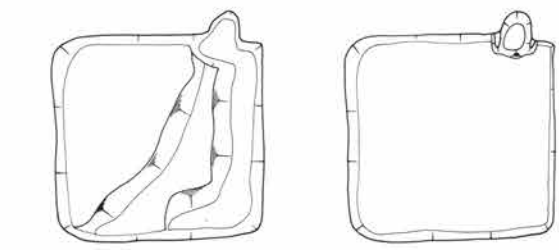
2．女堀における構築基準辺

女堀は、赤城山南麓に於いて、標高95.0mのあたりを、直線・緩やかな曲線を描きながら、前橋市上泉町から佐波郡東村西国定の間約15㎞にわたり構築された用水堀である。しかし、構築当初の目的を完遂することなく放棄している。

女堀に於ける構築基準辺とは、女堀の各部分にみとめられる北側の法と、土塁基部の接する辺（構築頭初の旧地表面での外郭線、第385図参照）である。北側のこの辺は、曲線を描く以外の部分でも、ある程度の規離で直線走行が確実な形で認められる。また、女堀の緩やかな曲線を描く走行部分でも短い直線走行部分が連接した状態（部分的に走行方向を変更する場合のみに曲線を描く）になっている。しかし、この対岸にあたる南側はこのことが確実な状態は認められない。

女堀の堀削は、現在のオープンカット工法に近い工法により構築されている。調査所見からは、北側から南側に向かう状態で堀削されているものの、〝未完〟である。特に南側に就いては顕著で、各小間割からもその状況は看取される。しかし、全体的には、北側はある程度完成状態に近い部分（神沢川以東の東大室地区１～５区）があり、この完形状態に近い部分からは、北側半分をほぼ終了させていることが判断される。これらのことは、工事の底面段階での堀削は、北側をほぼ完成させながらさらに、南側の堀削を続けるという状況であって、北側から構築当初の幅を求めたものと推測される。

女堀は、この直線走行する北辺をもって、多角形的に構築されている。そして、この北辺は、構築着手以前の走行方向を決定した折りに引かれた計画線と考えられ、このため、北側を先行させ完成状態しながらも南側が未完成の状態は、北辺を基準として幅の設定があったこと

掘り方模式図	特　　徴
	古墳時代（前期） 特徴　住居中央部を生活面と同位乃至同様な面を残し、縁辺部をやや深く掘り込んでいる。この段階では、壁溝は認められないが、全ての住居とは考え難い。住居によっては、壁溝と同様な掘り方状態が認められる。しかし、壁溝自体、全てが壁体保護施設としての物であった確証が無い。壁体保護材の据え方が全てとも思われない。また、図示した掘り方を有し壁溝をも図化する場合、唯単に〝黒い〟部分を掘り、図化とも思われ、調査時の誤認も有ると考える。
	古墳時代（後期） 特徴　鬼高式のやや古い段階での例であるが、これより古い場合はカマド部分直下を含め壁溝が検出される例が多い。図示例はカマド設置を意識しての掘り方であって、カマドを据える部分に構築段階から〝掘り方〟が認められる。壁溝も一部にその痕跡が認められるが、これが全ての状況でない。状況とすれば、古墳時代前期例と同様であって一様でもない。同様に、柱穴部に〝間仕切〟様の掘り込みが認められるが、大半の場合壁溝同様な埋土であって、地山土の混入が多く〝間仕切〟と確実視し得る状況が不分明。
	古墳時代末期～奈良時代初期 特徴　正方形住居がほぼ無くなり、長方形が主体となる。壁溝も、カマド部分周辺を除き認め得る場合が多いが、生活面と同様な面は中央に集中する傾向が認められ、壁溝側に寄ってやや浅く〝掘り方〟が認められ、やや広めの巾で認められている（明確な溝としての形状は示さず、掘り方とし荒掘りされた状況）。この場合も壁体保護施設として確実視し得る状況での検出報告は板材が出土した例以外ない。カマドは箱状の掘り方に煙道が上位に付設する。柱穴は床面上で認め得ず、住居の構造自体大きく変化している。
	平安時代前半 特徴　形状は長方形乃至正方形を基調とするが均整が失われた形状で、梯形・四角形の様な〝不整な長方形・正方形〟と称せる形状である。しかし、この四辺の壁の中でも二辺ほどは直線的な走行が認められ、直角乃至これに近い状態である。掘り方では、片側乃至半分側に偏在して認められる場合が多い。また、壁溝も、一部分とか一辺～二辺に認められ、全周するものは無いに等しい。さらに、この壁溝自体も、掘り方に重複する部分であったり、直線走行する壁下である場合が多いと思われる。カマドは、前代の延長上の形態であるが、形状に丸味を帯びる状態となっている。
	平安時代中頃 特徴　平安時代前半の住居の形状が、さらに均整さを失った観が強い。基調は同様であるが、直線走行する壁は一辺のものも多くなり、〝形崩れ〟の観を強調させている。掘り方も、直線的に走行する部分に多く認められ、平安時代前半頃のそれに共通する要素と考えられる。カマドは、馬蹄形状になる。この頃の掘り方に、用途不明の土坑状のものが多く認められ、確実な形状で床面下に存在している。

第386図　各時代毎の住居掘り方模式図

ことが想定出来、この基準になったと想定出来る辺が、女堀における構築基準辺であり、北辺がこれにあたるのである。そして、本来的な工区はここにあり(計画時の着手前段階)、報告書で述べられた大工区は堀削の進行中での状況等により生じた2次的なものを、計画当初での元来の工区とを混用しており、〝150～200m内外の中で流動的な決定ではなく、地形上に、その構築する可き堀の北辺を多角形的に設定した段階の〝構築基準辺〟が〝中工区〟と考える。また、〝大工区〟は、地形の状況にあると考えられ、基本的には河川と河川の間であったと考えられるが、迂回路的な部分（譬ば、東大室地区の石山丘陵との部分）など、地形の制約により生ずる変換部分などが本来的な〝大工区〟と考える。

3．住居跡に於ける〝構築基準辺〟

住居跡に於いての当該の観点は若干前述した。上述の様に、横穴式石室・女堀での具体的な状態を述べたが、他の場合に於いても同様な〝構築技法〟は確実に存在すると考えている。ただ、技法というよりも、人間が物を造作する時の〝観念〟的な存在かも知れない。

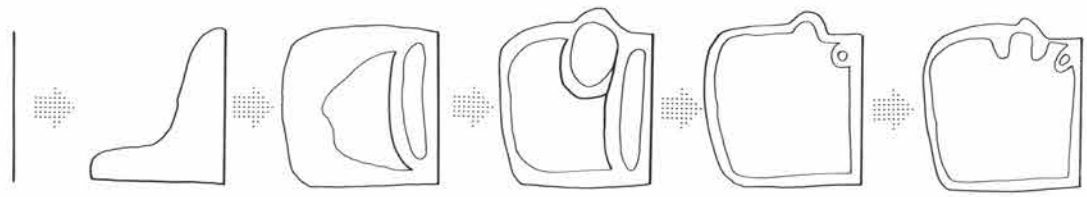
ここで、古代に於いて我々が最も通有に扱われている住居例をもって述べてみたい。

古墳時代以降平安時代末期に至る竪穴式住居跡は、凡そ、以下の変遷が考えられる。

古墳時代前期（五領・石田川期）―― 正方形（隅部が丸味を帯びるものも含める）・長方形
〃　中期（和泉期）―― 正方形
〃　後期（鬼高期）―― 正方形
飛鳥・白鳳時代（真間期）―― 長方形・正方形
奈良時代　（真間期）―― 長方形
平安時代(前半)（国分期）―― 長方形
〃　（後半）（〃）―― 長方形・不整方形・梯形等

であり、正方形から長方形へ、そして不均整な形状へと推移している。この中で、特にその構築の〝規画〟がしっかりしたものでは〝正方形〟であり、4辺長・隅部の角度等構築時に於ける〝匠さ〟が窺われる。

これらの各時期の住居は、掘り方を認める場合が多い。この掘り方を代表例に模式図化したのが第386図である。この掘り方の特徴は図中に記したので、図と共に参照されたい。



1．構築基準辺の設定（規模の設定）
2．西側壁の設定(ほぼ規模の確定と単純な荒掘り作業)
3．2段階に設定した規模に合わせる様に、雑に対照に荒掘りする。
4．部分的な壁の修正とカマド部の荒掘り（掘り方完成)。
5．床面（生活面）の構築。
6．カマドの構築を含め上厚構造の構築。

第387図　平安時代住居構築過程想定図

この様に、正方形住居跡の場合、大きく1の類形の細分で概ね2様に分類される。この共通点は、壁に沿う形で掘り方が認められる。また、長方形の場合は、片側に偏在する状態が多く、不均整な住居は、一辺乃至上述の様に〝掘り方〟は、堀削当初に構築深度を決定付ける要素が多分にあったと考えられる。このことか

ら、平安時代後期の不均整な住居の場合、直線的な壁面下に〝掘り方〟が顕著な場合がやや多く、構築着手時の段階には、この直線的な壁面の〝辺〟を基準にしたと推測される。すなわち、平面形状の不均整な住居に於いて、四壁の内の一辺以上に直線的〝辺〟が存在する場合、この直線的な〝辺〟を基準に住居構を実施したと考えられる。ただ、この〝辺〟が複数の場合は、カマドを付設する東に対する点を考慮しなければならないが、どれか一辺を基準にしたと思われる点から、その住居における最も直線的な部分をもって判断されると考える。そして、一辺を基準として不整形状に構築する点では、構築の掘削に当たった人が単乃至複数であった可能性が強く感じられる。また第387図には上述点を踏まえ構築過程の復原を試みた。

上述してきた様に〝構築基準辺〟とは、片側を基準にして〝物〟を造作する場合の基準になった〝辺〟である。

参考文献
『群馬県史　資料編３　原始古代３』　群馬県史編さん委員会　1981（昭和56年）
『女堀―中世初期・農業用水址の発掘調査―　県営圃場整備事業荒砥南部・北部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団　1985（昭和60年）

第２項　Ｃ・Ｄ区検出の住居跡とその出土遺物

はじめに

今次の報告で掲載したＣ・Ｄ区の住居跡は50軒である。これらの内８軒を除いた42軒は、個別の住居跡の遺存状態は別にしても、住居の形状が把握出来るものである。これらの住居跡は、概ね９世紀後半から11世紀中頃の約200年間に亘り構築されたものである。

ここでは、検出された住居跡を形式学的観点から種別・分類を行い、さらにそれらを序列し、相対年代を付加することにより編年することを目的の一部とする。この作業は、検出された住居跡群をどのように理解するか、出土遺物のみの年代観だけでは、各住居跡の存続期間の推定・新旧住居間の係わりが不分明であることから、このことを解決する一方法として用い、上述の２点を可能な限り分明にしたいと考えるが、後年も他の調査区の整理業務が継続するため結論的な事は後年に期すると考えている。

検出された住居跡の形状は四角形を基調とする様々な形状とも言い得るものであるが、各住居跡の細部を対比検討することにより数種の種分け・分類が出来た（第388図参照）。以下図を説明する形で住居跡について遺物を含めまとめてみたい。

住居跡は、四角形基調の正方形・長方形と両者の中間様の矩形と長方形での二者（主軸と長辺との関係）を含めた四者、則ち、４分類が基本形態を形成する。しかし、細部では上述四者の分類に於いて分類出来得るものではない。このことより細部での状況を加味せねばならない、この細部の状況がカマド・貯蔵穴（ここでは、便宜上〝貯蔵穴〟と記述するが、その性格に就いては貯蔵穴と考え難いので後述したい）である。このカマドは、その形状・構築位置であり、貯蔵穴はその有無により加味されるものである。[註1]

１．住居跡

Ｃ・Ｄ区内から検出された住居跡で、住居の改築が判断されるものが存在する。この改築と判断される理由としては、住居の埋没後に同一の場所に２～３辺の壁を共有する形で新たに住居を構築することは考え難い点からである。この改築が考えられる住居跡にＤ区第１・12・22・29・31・44号住居跡があげられる。又、

これらの住居跡は、その状況より、上屋構造を備えながらの部分的な拡張とは考え難く、恐らくは住居を廃棄せずに、上屋構造自体がその機能がまっとう出来なくなった段階か、構成員等の内的変化等により、上屋構造を修築する必要性に迫られた際に平面的に拡張を実施したと考えられるのである。そして、この改築が認められる住居の改築前後での形状を把握し、さらに切り合い関係を加味すれば、住居形態の推移を復元することが可能になると考える。

先ず、上述の改築が認められる住居跡の改築前後の形状を明らかにしたい。

D区第1号住居跡(以下、D1住の如く名称を略記する)は、構築当初2.0m×2.8mを測り長方形呈するが、改築以後は3.03m×3.17mを測り矩形に成っている。又、カマドの位置は東壁よりやや北東隅部寄りで中央同位地で修築している。このD1住では、横長の長方形から矩形への変遷が看取される。

D12住では、改築と考えられる部分はカマドの位置する部分より東側である。この場合、カマドは隅部の位置で変化が無かったか、拡張部であったかであるがこれを明らかにする証左は確認出来なかった。唯、本住居の如くのカマドは、その指向方向が南東隅部にカマドを付設するそれに同様である。しかし、それらのカマドは、焚口部から煙道部の底面は同一面を以て構築しているものが大半であり、本住居例の様に器設部から煙道部にかけて著しい段を有するものとは異なる。この点では、〝南東隅部のカマド形態〟(焚口部から煙道部の底面が同一面を以て構築する状態)が定着する以前の形状と考えられる。だが、出土遺物のみを見る範囲では、カマドを南東隅部に備える住居と同様の組成があることは、本住居の存続期間乃至構築主体者の特性等を想定させるに足るものが感ぜられる。

D22住は、南東隅部にカマドを備える住居跡である。本住居は南壁及び東壁が考えられる。唯、本跡の場合は、カマドの改修が認められず住居自体の存続期間が短かった可能性があることから単なる拡張と考えられる。そして、本跡の状況からは、正方形志向から長方形志向への変遷が示唆される。

D29住は、平面形状を不整形を呈するもののその基調は矩形を呈している。そして改築は東壁の北半分と北壁側が改築されており、これに伴ない床面(生活面)レベルが上げられている。又、貯蔵穴は改築以前の段階に伴なうものと考えられ改築に伴ない埋設されたものと考えられる。そして、カマドは、東壁のほぼ中央程に位置しており、改築を前後しての位置は変化が無く、形状も殆ど変化が認められない。

本住居からは、住居の基本的な形状には変化が無いが貯蔵穴の有無に大きな変化を認め得ることが出来る。

D31住は、改築と考えられる部分は東壁側であり、この痕跡は断面で顕著に認められる。この断面での状況から改築以前の形状を推定すると、南北方向に長辺を採る長方形基調であったと考えられる。そして、貯蔵穴は、配置関係から改築以前に係わる所産と判断される。このことから、貯蔵穴は改築以後には存在しなかったと考えられる。

改築以後は、住居の形状が正方形に変化しており、これに伴うカマドの改築は位置を南東隅部に付設している。しかし、基調を正方形にとる住居でカマドの付設状態を見る限りにおいては、その付設する指向方向により二者に分類出来る。すなわち指向方向が、対角線上には構築せず前段階の如く付設するD2・6・31住と住居の対角線方向にカマドを付設するD12・22・26・C5住の二者が認められ、かかる状況は、正方形基調で南東隅部にカマドを付設する住居跡には二者の様相が存在することが明らかである。このことを本跡の改築状況からまとめれば、前者一群から後者の一群への変遷・推移が確認出来る。

上述のことから、本跡は正方形指向で南東隅部にカマドを付設する住居跡の中ではC5住と供に最も古いものであることが判断される。更に、本住居の状況より当該の形状に先行する改築以前の住居形状はD40住等の形状であったことが認識される。

C３住は、西壁カマド・北西隅部に改築が認められる。これは、構築頭初はD31住とほぼ同様な形状であったものが、改築されたのである。このD30・C３住に類似する住居にC２住が上げられる。このC２住はC１住に切られているが、カマドを南東隅部に付設する住居である。しかし、D30・C２住は、南東隅部より北側に若干寄った部分に付設しており、住居形状も、南東隅部にカマドを付設する住居形状の特徴は認められず、長辺を南北にとる形状に変化している。改築は、あたかも梯形状を呈する様になっているが、部分的な拡張も北西隅部により起因している。カマドは改築前後での形状には著しい形状差が認められる。そして、上述の切り合い関係等から、C２住よりC３住が後出すると考えられるものの、C２住を切るC１住は、少なくとも、C２住が廃棄されてより多少の時間が継過した後に構築を考える可きとすれば、C３住の改築段階ぐらいの時点でC１住が構築されたと推定される。この点を整理すれば、C２住→C３・D30住→C３住の改築・C１住の構築。の順位が判断される。このことから、C１住が当該調査区に於ける住居形状では最も新しいものとして理解される。

上述してきたことは住居の上屋構造等を含めた段階での改築の状況に就いて記述してきたが、検出された住居の中には、部分的な修築として認識される〝カマドの据え変え〟が有り、これも住居と同様に修築を前後して、これに伴う住居内の細部での状況を検討することが上述してきた点を補えると考える。

〝カマドの据え変え〟に就いては若干問題が有る。これは、〝据え変え〟の認識である。ここで言う据え変えとは位置を移動する場合を指すのではなく、同部位での作り替えを含めてのものである。

筆者は、中間地域の調査を通して夥しい量のカマドを調査し、その中で掘り方土について幾つかの疑問を持っていた。この疑問とは、掘り方土内に認められる焼土と炭化物である。この両者の状態・混入量は各住居ににより異なるが何故混入するかである。この要因として以下の３者が考えられる。

１．据え変え。　　２．草木の根・小動物に因る攪乱。　　３．構築時に構築に際し行われた空焚き。

この３者で、１は、ある程度使用後、全体（使用時当初の掘り方域を越える範囲）が一旦破客し、新たに掘り方を設定し構築を行った際、旧態の使用に伴い酸化した壁・底面の焼土等が混入したと考えられる。ましてや、一般的に考えた場合、住居はある程度の存続期間が考えられ(この存続期間を10～20位年と想定し)、その期間内にカマドの据え変えが１回も無いとは考え難く、据え変えは常識的範囲の中で考えねばならない。

２は、草木の根が埋没後の壁面を掘り方方向に伸びた場合に生ずると考えられるものの、検出される壁面にはさほど顕著な酸化層は認められない。又、小動物（昆虫も含める）の場合でも同様であるが、モグラ等地表下にテリトリーを有する小動物の場合の攪乱は、破壊の痕跡も顕著であると考えられ、我々が土層断面観察中に散見する塊状焼土の不連続は、この様な場合もあったと考えられる。唯、それがどのくらい以前の事にも拠るが我々が視認し得るか否かでもある。しかし、掘り方内で認められる焼土粒の混入状況からすれば考え難い一面の方が強い。これらのことよりこの要因が考えられるものの、焼土・炭化物は検出時の状態がそれとは考え難い。

３は、常識的に考えた場合、一旦完成後のことと考えられる。掘り方段階で空焚きを行なうことは、祭祀に係わるか単なる抜気と考えられるが、このときに生じた焼土が如何にして混入するのか、ややの矛盾がある。

このほかに幾つかの可能性が考えられるが恐らく発掘調査を通してはとうてい容認しえるものではないと考えられたため敢えて記述しなかった。そして、上述してきたことより、掘り方土内に焼土粒が含まれる場合多くの場合〝据え変え〟と考えている。

上述した〝カマドの据え変え〟を判断する視点として掘り方土内の焼土粒子を考えた、そして、改築の有

ると判断される住居には以下のものが有る。

D１・６・７・８・９・10・11・12・14・15・21・23・26・27・29・40・44・46住

C３・５・６住

これらの住居で、住居内で移動して再構築している住居はD44住である。このD44住は、東壁中央より南東隅部寄りに移築している。この際南東隅部に存在している貯蔵穴にほぼ接する状態になっており、この両者の位置関係では貯蔵穴の機能が果たせなかったと考えられ、カマド移築後は埋設されていた可能性が濃厚である。この住居の状態を検出した住居と対照させると住居東壁中央部にカマドを備え南東隅部に貯蔵穴を構築する住居より、住居東壁南東隅部寄りにカマドを備え貯蔵穴を伴なわない住居の方が新しいと判断される。これらの据え変えの確実視される住居以外で、逆に据え変えの行なわれなかったと判断した住居に以下のものがある。

D16・17・22・28・30・31・C１住

又、これら７軒と前述21軒以外は、据え変えの有無が判断出来なかった住居である。この据え変えがなかったと判断される住居は、住居の存続期間が短期間であったか、構築そのものが非常に堅固であったと考えられる。しかし、後者の場合に於いては、やはり、本来的には存続期間が短期間であったと考えるのが妥当と考えられる。又、この７軒の中でD16住は、屋内の状況が通有とは異なり完全に造り上げられなかったのではないかという感を強く受ける。この点からD16住は構築から廃棄に至る期間が非常に短期間であったと考えられる。

ここで、上述してきたことを総括し、以下の２点に視点を絞り住居形状の変遷を考えてみたい。

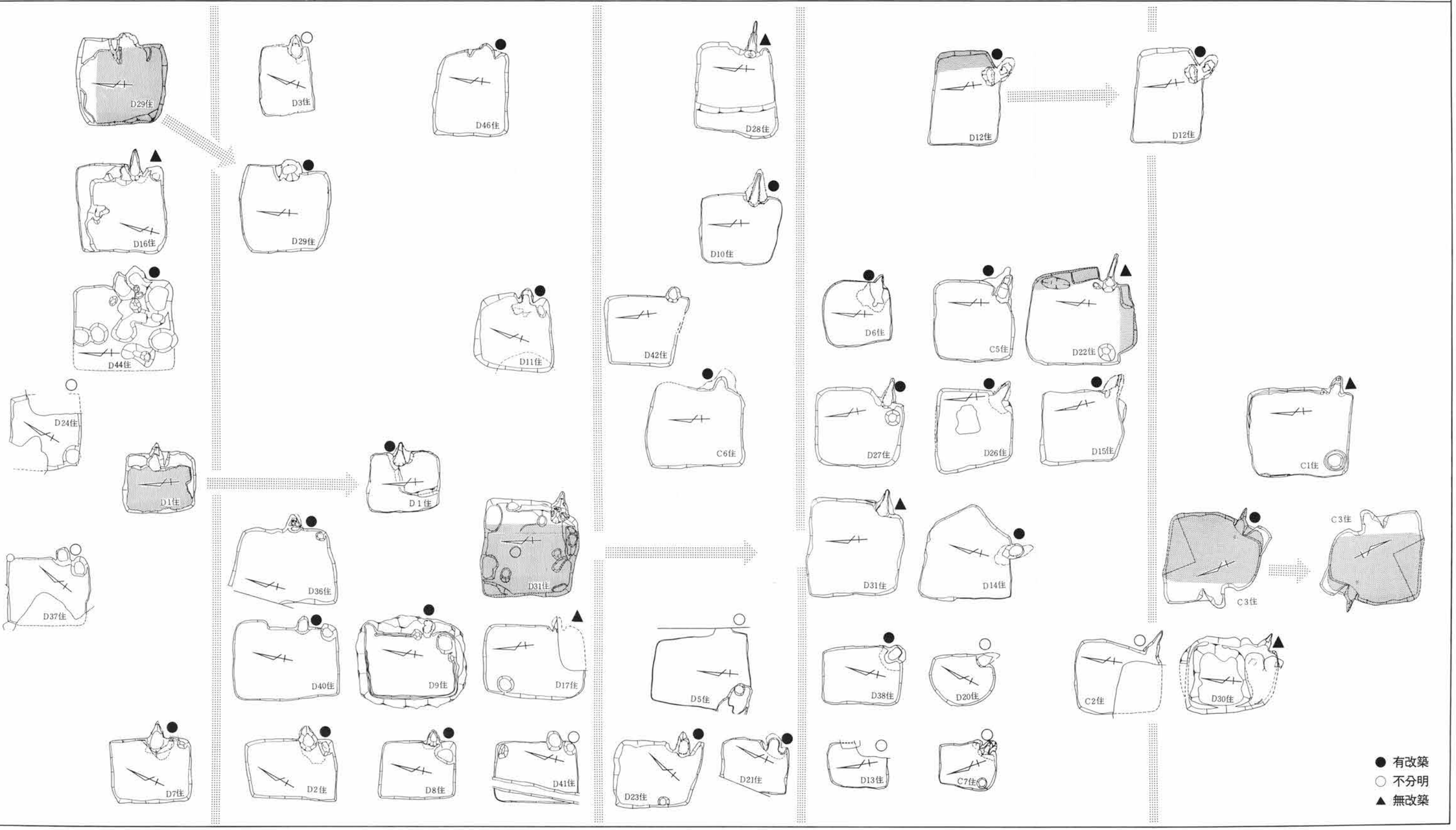
１．平面形状とカマドの設置位置。　　２．南東隅部の貯蔵穴の有無。

第Ⅰ段階では、長方形（長辺にカマドを設置するもの・短辺にカマドを設置するものである。以下、この両者の内前者を横長方形とし、後者を縦長方形とする）・正方形・矩形の４者を基調にし、カマドを壁の中央寄りに設置する住居が混在する感がある。

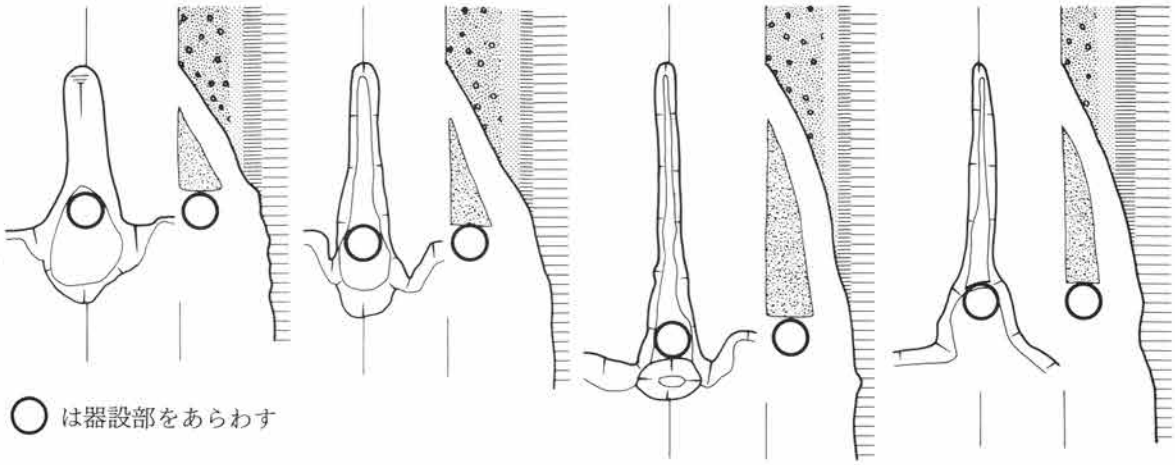
第II段階次の段階では横長方形から矩形への変遷がD１・22・31住で認められるものの、他の住居跡を見る範囲の限りでは混在していると判断される。この第Ⅰ・II段階の間には、カマドが南東隅部方向へその設置位置を変えるという推移がある。この状況が顕著になると、カマドそのものは住居南東隅部に設置され第IV段階となるが、この段階でカマドそのものの指向方向・形状によりさらに細かい段階の設定が考えられる。そして、最終第Ⅴ段階では、C２住を切って構築のあるC１住の矩形気味の横長方形でカマドを南東隅部寄りという前段階への形状に戻っている。さらに、これらの状況に２の貯蔵穴の有無を付加すれば、横長方形で、カマドが南東隅部寄りに構築する場合貯蔵穴の有るものが、無いものに先行すると判断される。これらの点をまとめ住居の変遷過程を図化したものが折図第388図である。この図は、住居の構築されたであろう段階を示したが、全てがこの順で構築された事を示すのではなく、形式上での段階と考えて戴きたい。特に第II・III段階としたものはかなり混在した状態であったと考えられる。又、この図の中で最も古く考えたD24・37号住居跡は、矩形を呈する均整のとれたものであり、その指向方向は他の住居跡に比較し異なっており住居形状全体の傾向が不均整化への変遷が認められる事と、出土遺物からも検出された住居跡群の中でも古期に位置付けられる。しかし、D24住は８・23号住居跡により切られカマドが失なわれており詳細に就いては不明である。又、この逆に検出された住居跡の中でも、最も新しい時期に考えられる隅部寄りにカマドを付設する第Ⅴ段階D30・C１・６住は、南東隅部にカマドを付設する住居の前段階の一群と同様であるが、D30住は、出土遺物の様相が南東隅部にカマドを構築する住居群と同様のD25住を確実に切っており、C１住

段階	第 I 段階	第 II 段階	第 III 段階	第 IV 段階	第 V 段階
時期	9世紀	10世紀		11世紀	
摘要 形状	カマド位置が東壁中央寄りで燃焼空間がやや広い	カマド燃焼部幅の減少 カマドの付設位置が南東隅部寄りになる	傍竈坑の消滅	カマドの付設位置が南東隅部になる	カマド付設位置がIII期的になる

縦長方形・正方形・横長方形（大型／小型）



第388図　C・D区住居変遷経過図



第389図　カマド復原想定図

は確実にＣ２住を切り構築し、Ｃ３住は、Ｄ30住との形状類似から判断される。そして、この両者以外は上述した観点によりその変遷を示した。

カマドは、上述してきたとおり住居の変遷を考える上に於いて非常に重要な観点となったので、ここでＣ・Ｄ区のカマドに就いて若干まとめておきたい。

Ｃ・Ｄ区内でカマドが遺存していた住居は39軒あり、これらの内、遺存が悪く形状等が不分明なＤ５住を除く38軒は、朧げながらもある程度は形状が復元されるものである。これらの内である程度遺存の良好なカマドを各段階毎に摘出し使用時の復元を試みたい。摘出する住居は以下のとおりである。

第Ⅰ段階　　Ｄ１・７・16住

第Ⅱ段階　　Ｄ１・９・11・29住

第Ⅲ段階　　Ｄ10・23・28・Ｃ６住

第Ⅳ段階　　Ｄ12・15・22・26・27・31・Ｃ２・５・７住

第Ⅴ段階　　Ｄ30・Ｃ１・３住

これらの住居のカマドの特徴を示すと第３表のとおりである。

これらの各段階での形状の特徴を集約すれば以下のとおりである。

第Ⅰ段階　　燃焼部の幅が広く、煙道は燃焼部底面から30～40㎝程の段差を有し立ち上がり上位で仰角を変え長く先細り状であったと考えられる。

第Ⅱ段階　　燃焼部の幅が狭いが基本的には第Ⅰ段階からの構造と変化が無い。

第Ⅲ段階　　第Ⅰ・Ⅱ段階と基本的な変化が無いがＤ10・28住の様な煙道立ち上がり部に著しい段差が低位の段差になっている。

第Ⅳ段階　　燃焼部全体が屋外側に突出址、燃焼部自体の縮小傾向がある。煙道は、前段階的要素も認められるが比較的低位で設けている。

第Ⅴ段階　　燃焼部は第Ⅳ段階より見た目では更に縮小した様に認められるが、実際の使用段階での燃焼空間の状態は殆ど変わりが無かったものと考えられる。煙道の立ち上がりは再び段差を設けるようになる。

上述の各段階での特徴を踏まえその変遷状態を煙道部の復元を含め図示したのが第389図である。

段　階	住居名	袖	燃　焼　部	煙　道	煙道部復原 A＝付加高・B＝長 C＝形状・D＝全長	摘　要
第Ⅰ段階	D1住	不詳。	大半突出？			改築が有り詳細不分明。
〃	D7住	広く長い。	舌状を呈する。 広く、屋外に半分程突出。	細く、仰角約30度。	A＝50・B＝118 C＝円管状・D＝198	煙道幅25cm程と考えられる。
〃	D16住	広くやや長い。	舌状を呈する。 狭く屋内に入る。	先細りで、仰角30度で上位で45度程。	A＝40・B＝110・C＝細い舌状・D＝180	煙道沿いに支脚有り。 第Ⅱ段階的要素がある。
第Ⅱ段階	D1住	広く長い。	舌状を呈する。 広く屋外に半分突出。	細く、仰角50度程で上位で30度程になる。	A＝50・B＝85・C＝細い円管状・D＝180	改築があり、燃焼部は旧体の感を受ける。
〃	D11住	やや広く瘤状。	短い舌状を呈する。 狭く屋内側に入る。	未検出。立ち上がり仰角50度程。	A＝50・B＝125・C＝細い舌状か？・D＝165	
〃	D29住	瘤状。	台形状。 狭く屋内に入る。	未検出。立ち上がりはほぼ垂直。	不　詳	煙道はほぼ水平に屋外に延びたと考えられる。
第Ⅲ段階	D10住	広くやや長い。	短い舌状。 狭く屋内側に入る。	ほぼ水平で先細り。 奥壁仰角70度程。	A＝50・B＝121・C＝断面プレパラアーチ・D＝180	改築後煙道幅が縮小している。
〃	D23住	広く長い。	舌状を呈する。 狭く大半が屋内に入る。	やや広いが先細り。 立ち上がり仰角30度程。	A＝40・B＝148・C＝先細りの長い舌状か？・D＝220	据え変え・補強が繰り返される。
〃	D28住	広くやや長い。	舌状を呈する。 狭く大半が屋内に入る。	先細り。立ち上がり仰角30度程。平坦を有する。	A＝50・B＝140・C＝先細りの長い舌状・D＝220	第Ⅳ段階的要素がある。
〃	C6住	未検出。	舌状を呈し狭い。	未検出。立ち上がり仰角60度程。	A＝70・B＝48(105) C＝先細りの舌状か D＝100	(　)の数値は上位で立ち上がり角に変角があったと考えられる。
第Ⅳ段階	D12住	瓦で作り出す。	短い舌状。狭く煙道の立ち上り部を器設にする。 全体が屋外に突出。	未検出。立ち上がり仰角40度程。	C＝本段階中の煙道形状と考えられる。	D9住に類似する。
〃	D15住	左袖細くやや長い。 右袖は南壁を利用。	不整形で狭い。	細く長い。 立ち上がりは緩やか。	A＝60・B＝150・C＝細く長いD＝220	煙道は緩やかに曲線を描き立ち上がる。
〃	D22住	微小な瘤状。	球形状（極短い舌状）。	細く長い。 残存状況良好。	A＝60・B＝105・C＝細長い・D＝175	検出された煙道がほぼ旧状に近いと考えられる。 天井崩落。
〃	D26住	微小な瘤状。	舌状で、検出部の奥壁寄り側か。	未検出。立ち上がり仰角60度程。	A＝60・B＝？・C＝？・D＝？	煙道はD22住の状態と推定される。
〃	D27住	瘤状。	舌状と考えられる。 狭く屋外側に突出。	ほぼ水平で細長い。 奥壁立ち上がり仰角60度程。	A＝50・B＝90・C＝細長い・D＝205	第Ⅲ段階的要素が強い。
〃	D31住	瘤状。	舌状を呈する。 狭く屋内側に入る。	平坦面を中段に有する。立ち上がり仰角20度程。	A＝50・B＝170・C＝細長くなる・D＝245	第Ⅲ段階的要素が強い。
〃	C1住	未検出。	舌状を呈する。 狭く屋外側に突出。	緩やかに曲線を描き立ち上がる。	A＝50・B＝165・C＝細長い・D＝250	第Ⅴ段階的要素が認められる。
〃	C5住	左袖細くやや長い。 右袖は南壁を利用。	舌状気味。 やや広く屋外側に突出。	先細り状か。緩やかに立ち上がる。上位で変角。	A＝60・B＝140・C＝先細りか D＝210	
〃	C7住	細くやや長い。	舌状と呈し、やや狭い。	先細り状か、下位で立ち上がり角に変角がある。	A＝50・B＝100・C＝先細り状か D＝195	煙道はさらに上位で変角したとも考えられる。
第Ⅴ段階	D30住	右袖が瘤状。	舌状を呈する。 短く狭い。	ほぼ水平で細長い。立ち上がり仰角60度程。	A＝50・B＝？・C＝長い・D＝？	煙道長はD22住程と思われる。
〃	C2住	瘤状。	舌状を呈する。 狭く屋外側に突出。	未検出。立ち上がり仰角40度程。	A＝50・B＝55以上 C＝細長いか？・ D＝150以上	
〃	C3住	細くやや長い。	舌状を呈する。 半分程が屋外側に突出。	細く長い。立ち上がり仰角30度程。	A＝50・B＝155・C＝細く長い・ D＝250？	

第3表　カマド特徴・復原一覧表

2．傍竈坑（ぼうそうこう）

傍竈坑とは、本文中で貯蔵穴と記したものであるが、一般的に住居南東隅部でカマド（竈）の右傍らで検出される土坑状のものであり、貯蔵穴とは考え難い施設として理解していることにより、「貯蔵穴」名称を用いるのは多くの誤解を生じせしめるため、新たに名称を与えなければならず、前記のとおり抽象名称として用いるのもので、性格等は加味した名称ではない。今後、性格等が確定した段階で名称変更をする考えであるが、現段階として〝傍竈坑〟の名称を用いる。この土坑状の施設は、古墳時代後期の住居跡の場合普遍的に存在するが、形状・規模共に当該のものとは異なり、平安時代頃の住居に唐突に再び普遍的に出現している。

住居内の土坑状の施設乃至掘り込みは、（当該のもの以外）掘り方乃至各隅部で検出される場合が多いが、その中で、掘り方面で検出される土坑状の掘り込みが比較的多く、今次の報文中のC・D区の住居跡でも確認されている。この土坑状の掘り込みは、大半の場合円形状を呈するもので、明らかに何らかの意識により構築されたものと考えられる。しかし、筆者としては、この土坑状の掘り込みに就いての見解をもち得ないのが現状である。

傍竈坑は、古墳時代後期のそれと同列に考えられおり、〝貯蔵穴〟として記されている報告例が多い。しかし、当遺跡での検出状況では、当該坑の上面（床面と同位の面）にカマドから排出された炭化物と灰がカマド焚口部から連続して分布している例[註2]や、瓦・土器類で蓋をした様な例や、土器類を埋設した様な状態や瓦・土器片等を設置した例などが多い(具体的な遺構名称は現段階では示し得ないが、当該期の約1,000軒程の住居を調査した記憶からである)。また、深度の点では、深くても20～30cm程であり、ある一定の物を地下に貯蔵する施設として考え難い一面がある。これらの点から住居南西隅部でカマドの右傍で検出される土坑状のものは、貯蔵穴ではなく他の性格を考えねばならない。

この傍竈坑は、住居形状の変遷の中で、第II段階から第III段階に遷る時に消滅するとして一つのメルクマールとして捉えた。この間の現象は、傍竈坑の位置寄りにカマドを構築することにより消滅するという点にある。また、前述した検出状況からも、その存在意義には非常に大きなものが認められる。この傍竈坑の性格を当遺跡に於ける現状の中で考えれば、前述した様に、カマドが傍竈坑の部分に移ることにより消滅という状況下で、その消滅する傍竈坑の存在意義がカマドにより消去されることになる。このことからすれば、傍竈坑は、カマドとの係わりが想起され、〝火〟に係わる何らかの祭祀的習俗と類推される。しかし、床面より下位に〝坑〟を設ける点では、〝火〟のみではない可能性も考えられ、住居構築から廃棄の間での生活に伴なう何らかの祭祀行為とも想起されるが、未だ確定し得る状態ではなく、今後に託す可きと考える。

3．出土遺物

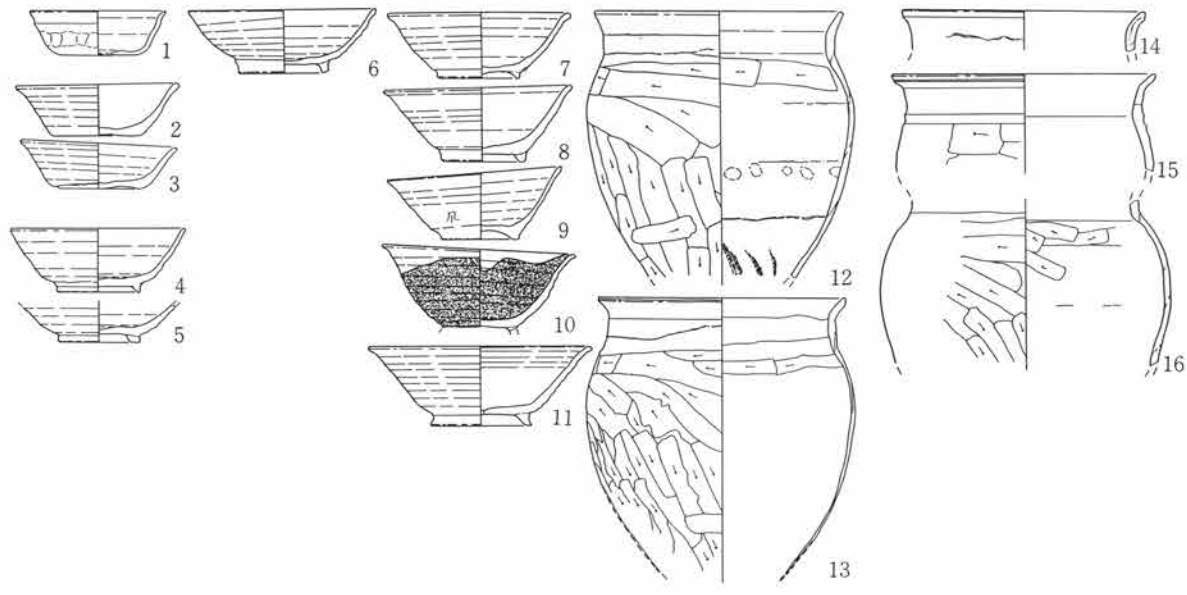
ここで前述した各住居形状毎の分類で、各段階毎に遺物を再整理してみたい。この作業は、各段階毎の住居は、構築段階を想定したものである。しかし、実際住居は、構築から廃棄までの存続期間は各住居により異なったと考えられ、この存続期間をある程度明らかにすることを目的とするものであるが、根本となる〝年代〟の明確な根拠は言及しかねる点がある。しかし、近年当該期（9世紀後半～11世紀中頃）の土器編年作業が進んでおり、その年代間の根拠は、数氏により既に提唱されている[註3]。ここでは、紙数と時間的制約があるため、その根拠そのものに就いての詳述は後年に期するつもりである。

各段階設定した住居は、遺物を切り離して、型式学的方法を用い行なったものである。ここで、各段階毎に出土した遺物（本報告書中に図化掲載したものだけを扱い、未掲載遺物を除外したものである）を一覧表

にしたのが第4表である。この表中に示した数値は、〝一括性〟を考慮したものではない。この〝一括性〟を考慮して作製したのが第390～395図である。この第390～395図自体は、C・D区の住居形状分類の対照出来た住居のみのものであり、この図により各段階での〝遺物組成〟が把握される。だが、出土遺物自体は、住居が廃棄される時に住居と共に廃棄されたか、住居埋没過程の段階で混入（自然・人為による）したものである。この点は、〝一括性〟の中で認知し得る遺物がある程度の住居廃棄時期を判断出来ると考える。

供給	在地生産品																				搬入品						
焼成	酸化焔（中性）										還元焔										施釉陶器						
種	土師器				土師質土器						須恵器						瓦				灰釉			緑釉			
器種	坏	埦	甕	他	皿	坏	埦	甕	羽釜	土釜	他	坏	埦	鉢	甕	羽釜	他	男瓦	女瓦	鐙瓦	宇瓦	他	碗	皿	他	碗	皿	他
第Ⅰ段階			6		1	1	6		1		1	2	1	3		1			5		1		1			3		
第Ⅱ段階	2		11		2	11	13	2	4		4	8	4			1	1	18	20		3		6	1	3			
第Ⅲ段階	1		1		2	7		1	1	2	2	1					2	10	30	1	3		4					
第Ⅳ段階			2		11	2			8	25	3				3		2	18	47	2	2		2					
第Ⅴ段階					5	1				5	2				1			17	15		1							
摘要	本表の数量値は、本報告書中に掲載したものからの数値である。又、瓦は焼成による分類は行なわなかった。																											

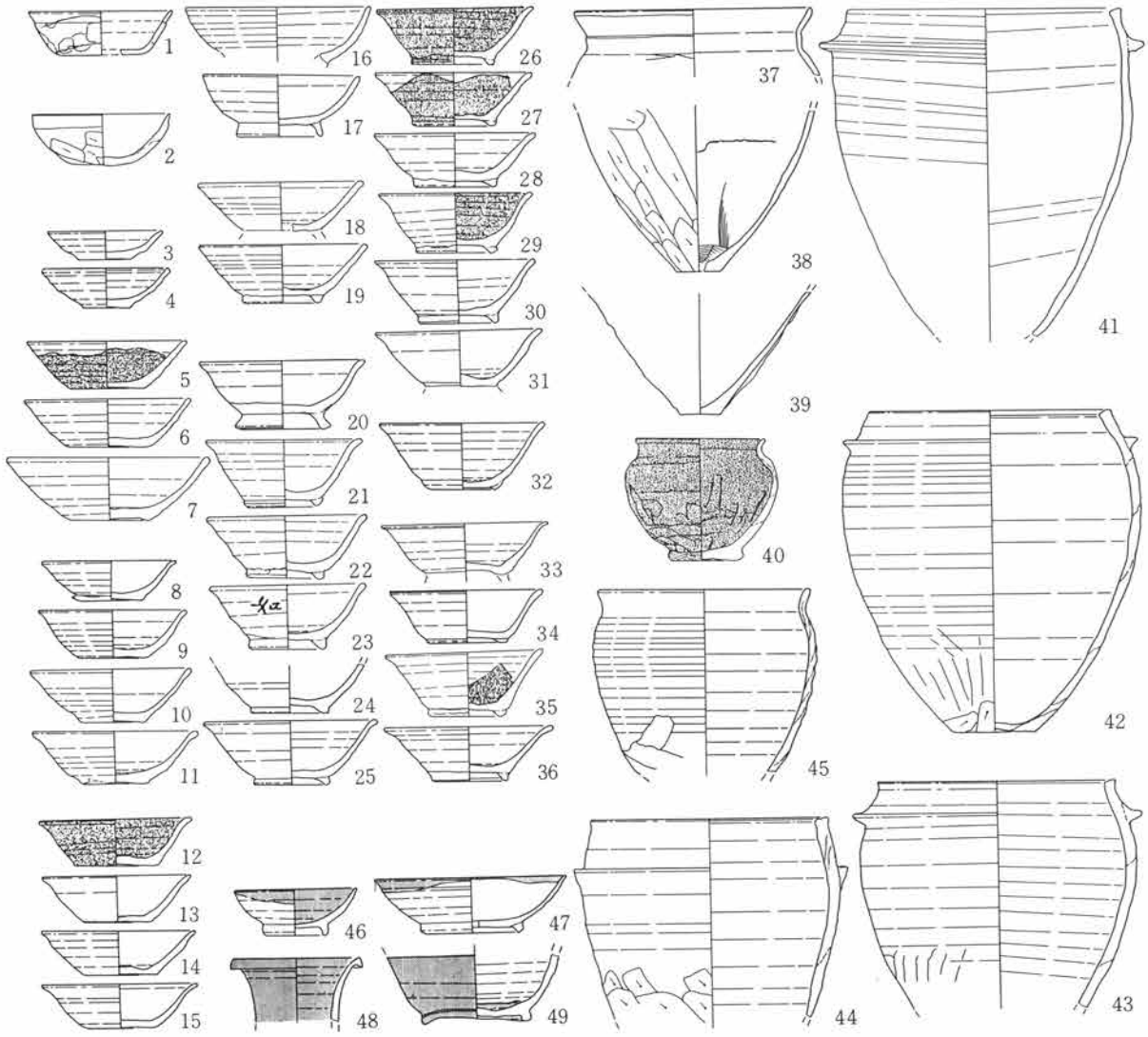
第4表　各住居段階別出土遺物種一覧表



第Ⅰ段階
1．D16住(63－1)　2．D37住(102－1)　3．D44住(116－2)　4．D16住(63－3)　5．D16住(63－5)　6．D16住(64－2)
7．D16住(64－1)　8．D37住(102－3)　9．D16住(63－4)　10．D16住(64－3)　11．D7住(33－1)　12．D7住(33－3)
13．D16住(65－1)　14．D37住(103－1)　15．D37住(103－2)　16．D37住(103－3)

第390図　住居第Ⅰ段階出土遺物（一括性の認識しうる遺物）

第390～395図には、段階の異なる住居でも特に坏・類では〝ある一時期に作られたか、生産地が同一であったかと考えられる遺物（同一形態）〟が含まれている。この遺物は、その遺物の存続時期の上限・下限をある程度は示していると考えられる。この状況は半ば各段階の前後で顕著に認められ、これらを、その上限に想定し得る遺物を摘出すれば、遺物の序列が出来るものであるが、この点に就いては後述したい。則、各段階の存続期間を見定めるには、この遺物の相互間での状況を検証することにより考えたい。この点を考えるに当たり、当該期の出土遺物の中で、その存在が最も普遍性が高く、完形乃至これに準ずる状態で最も多く出土する坏・類を摘出し、同一形態がどの住居段階まで存続するのかを望見し、**住居の存続期のみなし**の期間

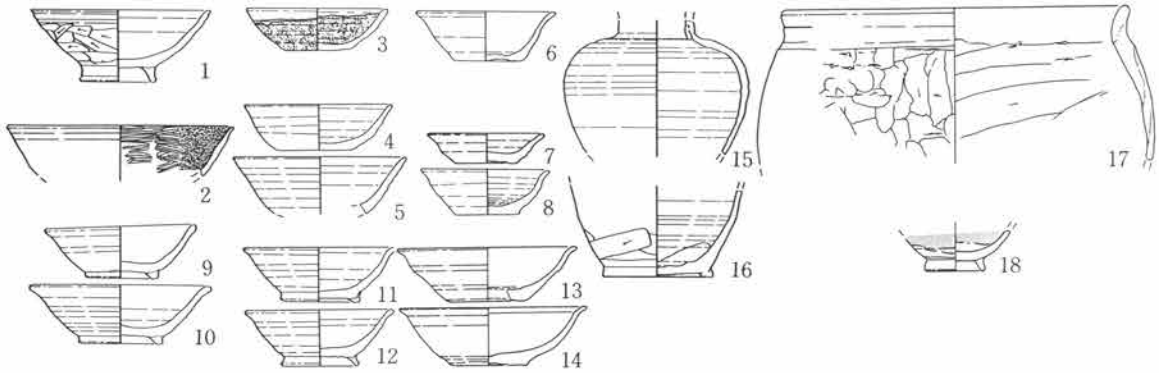


第II段階

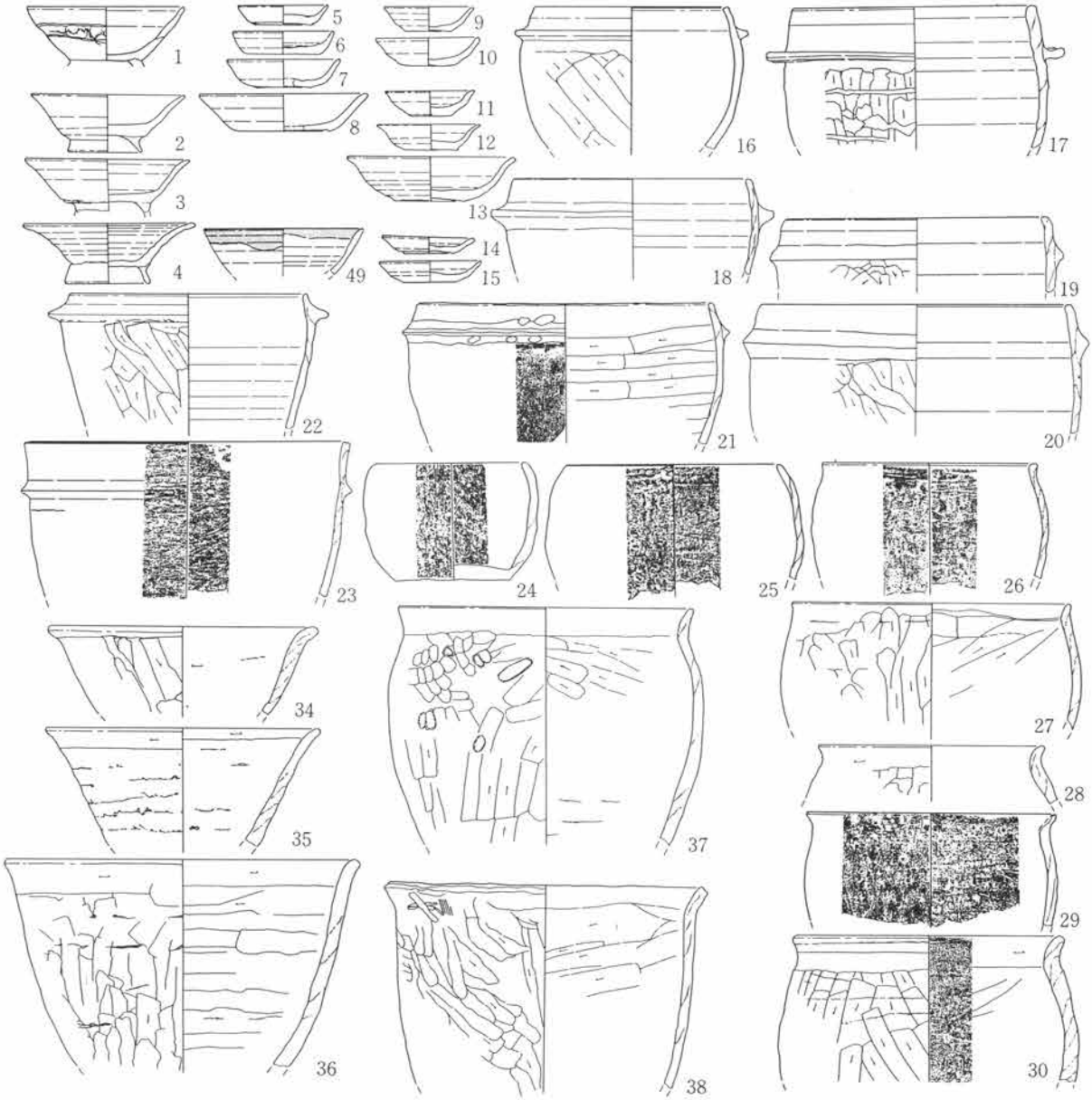
1．D８住(35－１)　2．D46住(117－1)　3．D36住(100－1)　4．D３住(26－１)　5．D11住(46－２)　6．D29住(92－１)
7．D46住(118－5)　8．D３住(26－２)　9．D11住(46－２)　10．D36住(100－2)　11．D11住(46－３)　12．D46住(117－2)
13．D11住(46－４)　14．D11住(46－４)　15．D11住(46－１)　16．D40住(108－2)　17．D40住(108－1)　18．D46住(118－4)
19．D11住(40－６)　20．D３住(26－３)　21．D46住(117－3)　22．D46住(118－2)　23．D46住(118－1)　24．D36住(100－3)
25．D29住(92－３)　26．D46住(117－5)　27．D９住(36－２)　28．D２住(23－４)　29．D46住(117－4)　30．D46住(118－3)
31．D11住(46－４)　32．D11住(46－５)　33．D29住(92－２)　34．D２住(23－３)　35．D41住(114－1)　36．D11住(46－７)
37．D29住(93－１)　38．D29住(93－２)　39．D29住(93－３)　40．D46住(118－6)　41．D46住(118－7)　42．D11住(48－８)
43．D９住(38－１)　44．D９住(38－２)　45．D２住(23－６)　46．D40住(108－4)　47．D９住(36－３)　48．D29住(93－５)
49．D36住(100－6)

第391図　住居第II段階出土遺物（一括性の認識しうる遺物）

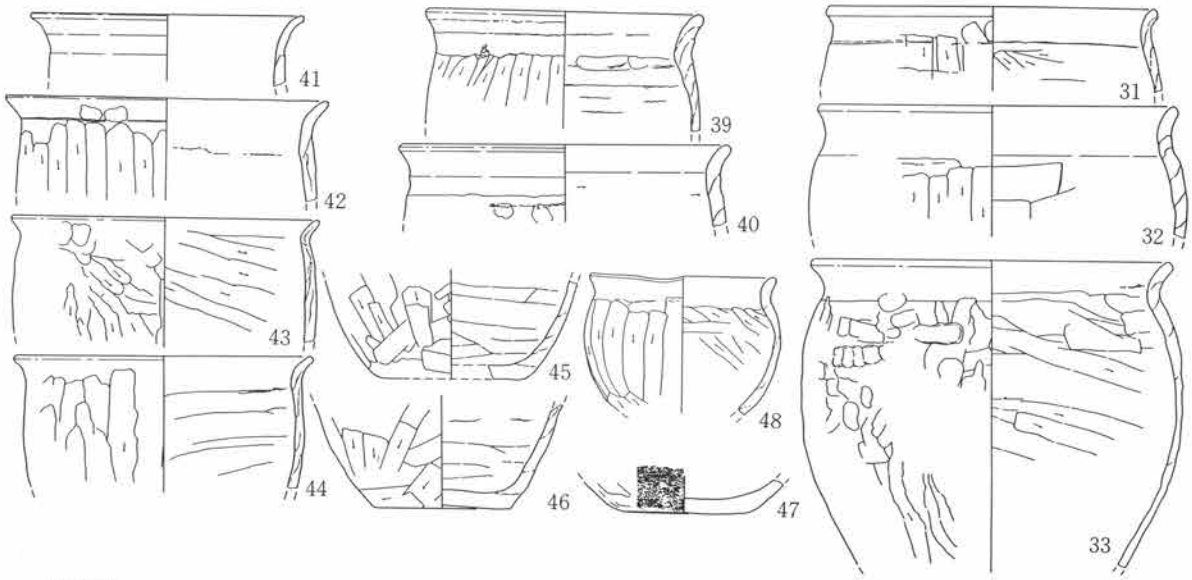
としたい。



第392図　住居第III段階出土遺物（一括性の認識しうる遺物）



第393図　住居第IV段階出土遺物　1（一括性の認識しうる遺物）



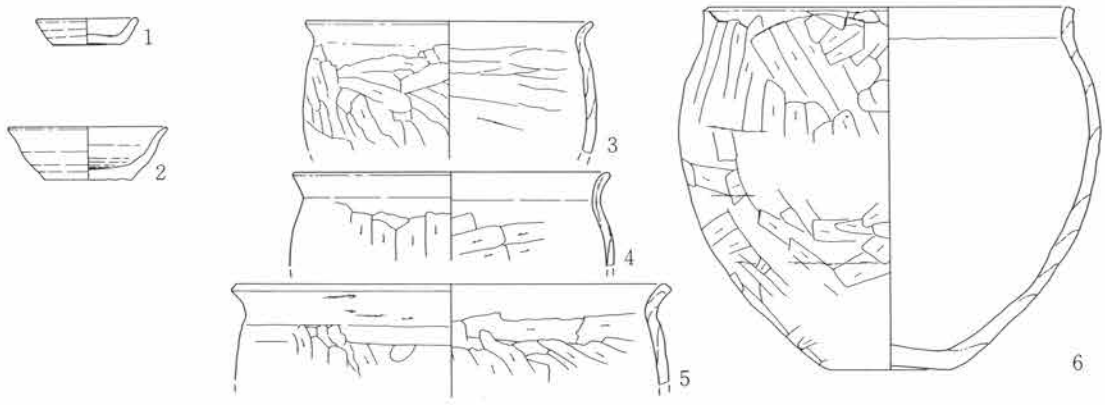
第Ⅲ段階

1．D23住(78－1)　2．C6住(135－1)　3．D23住(76－2)　4．D23住(76－4)　5．D21住(73－1)　6．D23住(76－3)
7．D5住(29－1)　8．D23住(76－1)　9．D23住(76－6)　10．D23住(78－2)　11．D23住(76－7)　12．D23住(76－5)
13．C6住(135－3)　14．C6住(135－2)　15．D28住(91－5)　16．D10住(41－1)　17．C6住(135－5)　18．C6住(135－8)

第Ⅳ段階

1．D12住(50－2)　2．D27住(88－1)　3．D12住(50－3)　4．D15住(57－2)　5．D12住(50－1)　6．D15住(57－1)
7．C5住(133－2)　8．D14住(55－3)　9．D38住(105－1)　10．D31住(96－2)　11．C5住(133－1)　12．D31住(96－1)
13．C5住(133－3)　14．D6住(29－1)　15．D22住(75－1)　16．C2住(125－1)　17．D12住(52－4)　18．D15住(58－2)
19．D15住(59－1)　20．D15住(59－2)　21．D6住(30－2)　22．C7住(138－1)　23．D15住(59－3)　24．C7住(138－2)
25．D14住(56－2)　26．D14住(56－1)　27．D26住(86－5)　28．D27住(88－2)　29．D6住(29－2)　30．D27住(88－3)
31．D12住(50－5)　32．D31住(96－5)　33．D12住(52－2)　34．D27住(88－5)　35．D27住(88－6)　36．D27住(88－4)
37．D15住(58－1)　38．D12住(52－1)　39．D15住(57－3)　40．D31住(96－4)　41．D31住(96－3)　42．D6住(30－1)
43．D12住(50－4)　44．C5住(133－4)　45．D15住(58－3)　46．D15住(58－4)　47．D15住(58－5)　48．D38住(105－4)

第394図　住居第Ⅳ段階出土遺物　2（一括性の認識しうる遺物）



第Ⅴ段階

1．C3住(127－1)　2．C3住(127－6)　3．C3住(129－1)　4．D30住(95－1)　5．C3住(129－2)　6．C1住(121－1)

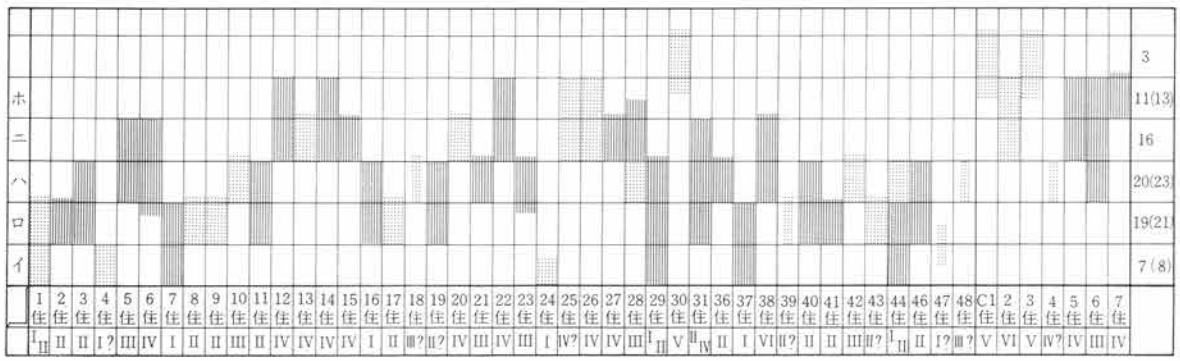
第395図　住居第Ⅴ段階出土遺物（一括性の認識しうる遺物）

ここで、上述した坏・類で同一形態を認識するため、出土した坏・類（107点）を型式学的に分類したのが第396・397図である。また、各遺物で前述した各住居の段階毎の出土遺物には、Ⅰ～Ⅴを付したが、逆にⅠ～Ⅴを付さなかったものは〝一括性〟の中での漏と、住居形状が確実に把握出来なかったものである。しかし、資料の数量が少量であるため問題も多いと思われる。分類の基準は、底径（類の場合は、坏部の底面を

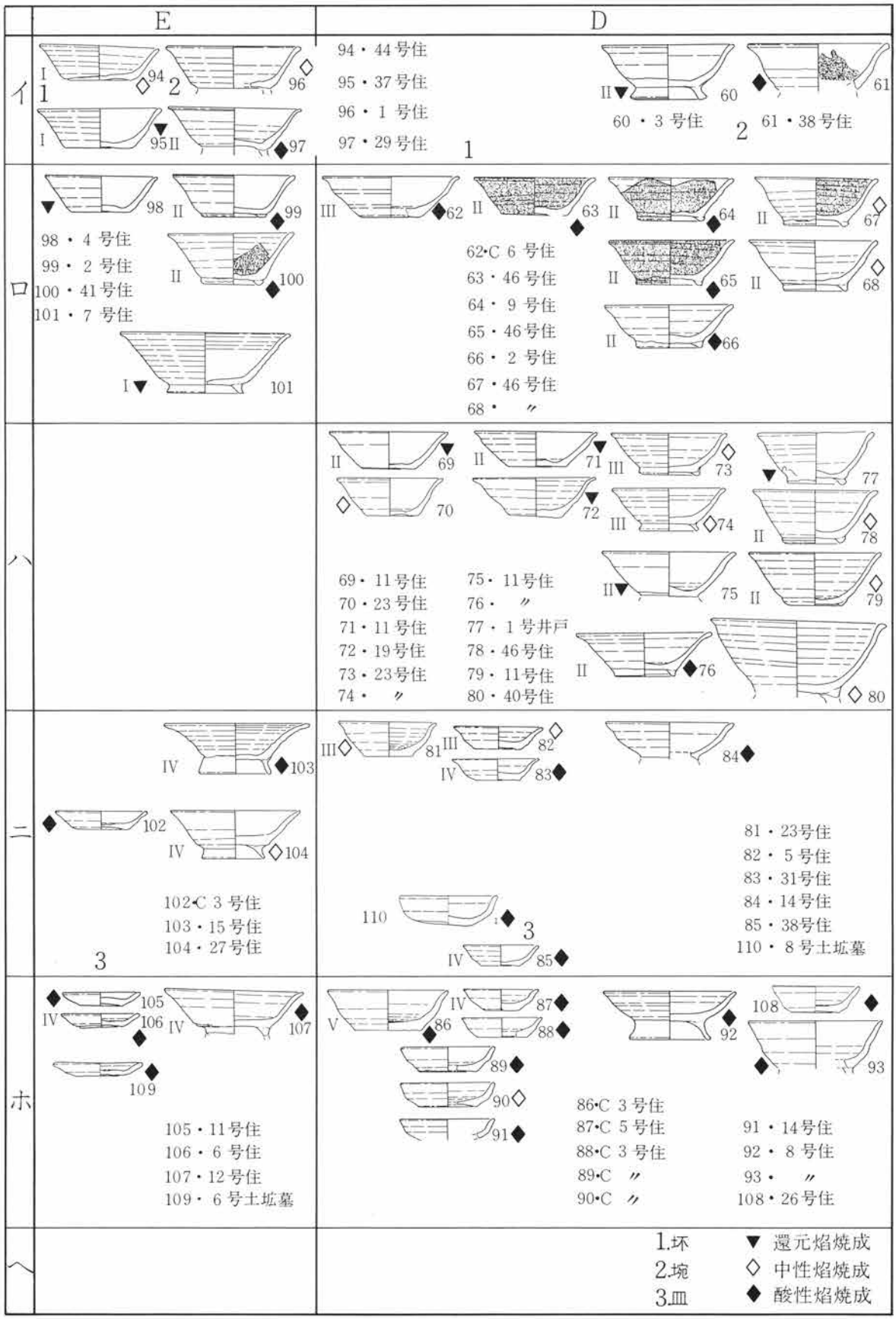
用いたが、完器の場合、高台貼付位置から推定可能な範囲で判断した）と、形状に求めた。この理由としては、奈良・平安時代の坏の底径が年代が下がると共に縮小するという通有知見と、11世紀頃にこの逆化の現象が認められるという近年の諸氏による指摘によるが、器高・口径を加味すると、同一器種内での大小関係等を混同する危険性が想定された点による。また、形状は、筆者が土器そのものの生産地を推定する場合に於いて、胎土と共に有力な検証方法の一つに考えている点による。[註4]

この結果、C・D区の住居跡群から出土した坏・類は、形態上2器種3分類5系列5段階を認めることが出来た（ただ、ニ～ホ段階に就いては資料増加がないと序列に判断しかねる点がある）。これは、須恵器・土師質土器の2器種、坏（1）・（2）・皿（3）・の3分類、内湾しながら立ち上がる（A）・全体的に直線的に立ち上がる（B）・体部下半で内湾気味に立ち上がり口縁部がやや直線的で、口唇部直下で外反する（C）・Cに類似するが体部がやや直線的で、口縁部から口唇部直下にかけて顕著に外反する（D）・外反しながら立ち上がる（E）の5系列、底径値が各系列毎で異なる5段階であるが、詳細に就いては管見の及ぶ範囲で他にも多くの形状のものがあり、今後の資料蓄積後明らかにしたい。

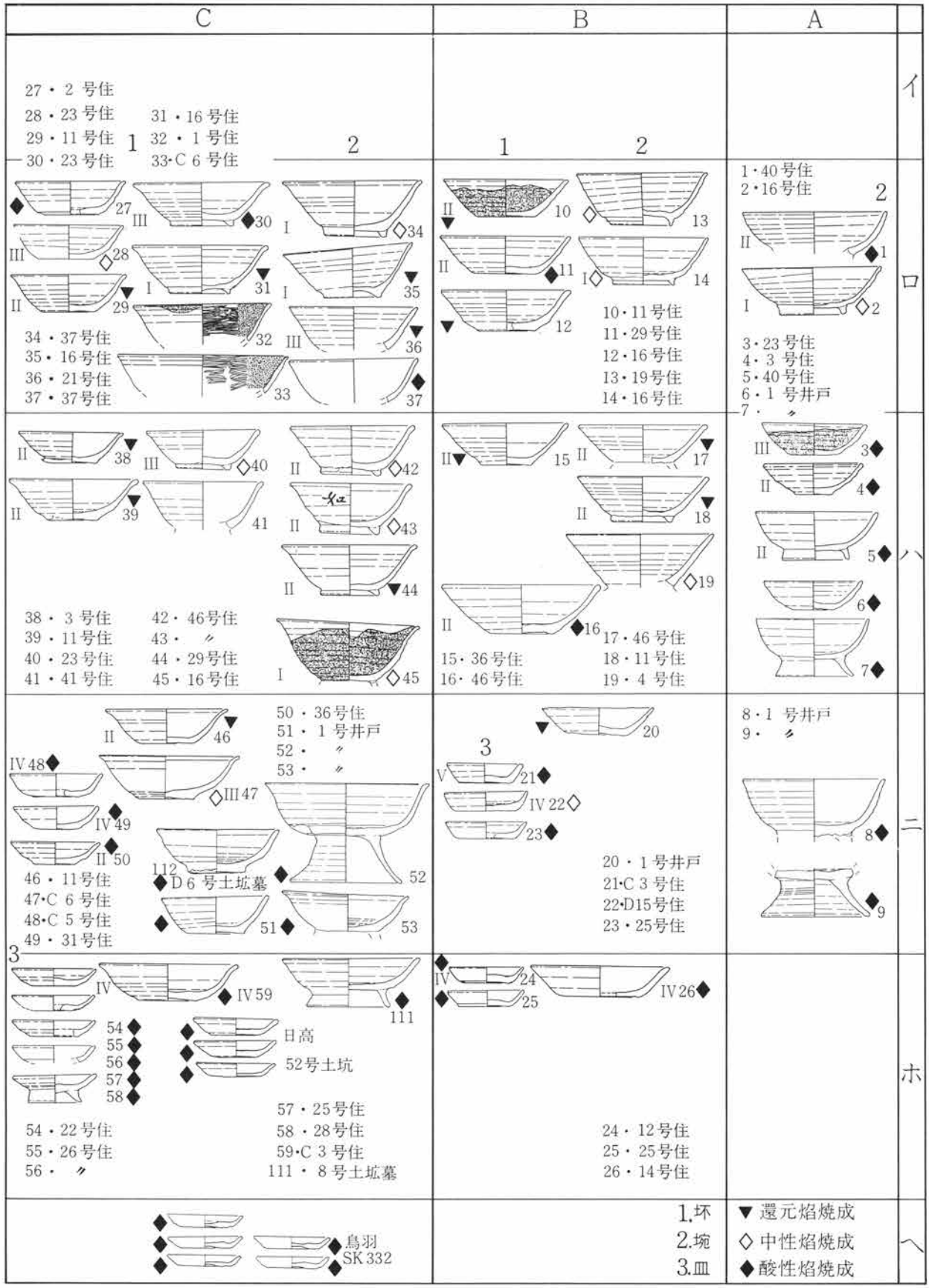
この第396・397図を踏まえると、第Ⅰ段階の住居群の遺物は、イ・ロ段階に亙り、第II段階の住居群の遺物はイ・ロ・ハ段階に亙り、第III段階の住居群の遺物はロ・ハ・ニ段階に亙り、第IV段階の住居群の遺物はハ・ニ・ホ段階に亙り、第Ⅴ段階の住居群の遺物はニ段階にのみ分布している。この中でⅠ～IIIの各住居分類段階（以下、住居段階と略記する）毎の上限と考えられる状況は、各住居段階毎に帰属する遺物の土器分類段階（以下、土器段階と略記）で最古の段階に相当させられ、下限と考えられるものは、この逆に最新土器段階と判断される。すなわち、第Ⅰ・II・III段階の住居群を例にすれば、第Ⅰ段階住居の住居のその出現時点は、土器イ段階以前で、最終的に廃棄されるのは土器ロ段階である。第II段階住居の出現は土器イ段階にあり、最終廃棄段階は土器ハ段階で、この間に第III段階住居の住居が土器ロ段階で構築され、土器ニ段階で廃棄されている。このことは、各住居段階が最大限で、土器3段階に亙り存続したことが想定される。しかし、住居第Ⅴ段階になると，遺物自体の全体量が少ないという状況下では問題がある。ただ、遺物自体の数量は遺構数に比例する傾向もあり、当該段階が3基という数量に因るとも思われる。また、住居第Ⅰ～IV段階では、土器段階で3段階に亙り分布するものの、当該段階は、2段階でしか認められず、土器ホ段階以降のものが、住居内から出土が無いという点にもその要因であるが、これ自体は、上述の住居数と第Ⅴ段階以降の後続住居が無いことから、居住民の減少という点と、少なくとも土器自体が搬入品であることから、生産地側での何らかの変化が遠因として考えられる。このことを考慮すれば、住居第Ⅴ段階の住居は、土器ホ段階以降にもその存続時期があったことが考えられる。



第5表　住居存続のみなし一覧表



第396図　坏・類分類図Ⅰ



第397図　坏・類分類図II

上述してきた土器からみた住居段階毎の各住居の中には、少なくとも各段階を越えて存続した土器があることが明らかで、また、その各段階内で存続が終了している住居が存在していることも認められる。このうち前者は、住居の構築が、各住居段階で、新旧の存在が考えられ、このうちの〝旧〟のものは前段階の〝新〟の段階に新しい形状としてほぼ並立して構築されたことが類推出来る。これにより、各住居段階は、時間軸上では二分出来る要素が認められる。そして、この各段階を二分した場合、住居第Ⅰ～Ⅴ段階は都合10段階に分けることが出来、これを棟世代として把握することが出来る[註5]。この両点を一覧表にしたのが第5表である。

この10段階に細分された状態は、住居の建て替え段階が10段階あったことを示唆するが、この建て替えは、住居の構成員の世代に直接乃至間接に係わると考えられるが分明な証左はない。又、各住居段階には、住居自体の規模に大小の存在がある。この両者の存在は当該住居群が示す構成員の状況と把握出来る。これは、大小の住居内の面積相違は、自ずと構成人員数を規定しており、大小関係をこの観点から換言すれば、大型住居の構成員は〝多〟であり、小型住居ではその構成員が〝少〟であったことが指摘は出来よう。また、〝多〟は通有観点では〝家族〟として認識出来、〝少〟の場合は、〝奴卑〟〝家族からの独立〟等が想定されるが、当遺跡の立地からの性格から、国分二寺との係わりが考えられ、この点で両者の想定を論述するには他の調査区との対照が必要であるので詳述は後年に期したい。すなわち、この10段階の建て替えからその構成員の世代交替も考えうる範囲ではあるが、建て替えそのものが世代交替とは言及し得ない。

一方各土器段階では、5段階の設定を行なったが、その段階は確実にある程度の時間空間を備えている。この5段階の土器の変化（この5系列5段階は、それぞれ毎に平行し同一時間幅をもって均一的に変遷を遂げたものとは考えてはいない。これを証明し得る根拠は現在明示出来得ない。また、均一的に平行し変化したとする方の根拠もなく、単に型式学を主に分類したという点にしかない。）の中で、ニ・ホ段階を境に大きな変化がある。土器組成では皿の出現であり、形状では従来の底径の縮少化の逆に増加が認められる。この両者の状況は、各段階には、前段階に於ける微少な変化ではなく、寧、顕著な変化を認識し得る程である。だが、この認識も資料数の点で問題は既に露呈していると考えるが、住居形状の変遷からすれば、各土器段階での変遷継過は概ね把握されていると考えている。この土器段階の各階程の時間幅は、ほぼ各住居段階の時間幅に対応するものと考えられる。ここで、この5段階の年代観を提示しておきたい。

年代観に就いては、前述のとおりを現状とすれば明確な根拠がない。ここでは、イ・ホ段階の年代観を元に均等的に中間段階を設定しておきたい。

土器イ段階は、住居第Ⅰ段階が廃棄される段階に対比され、第Ⅰ段階自体の遺物組成から9世紀後半代でもさらに末期的要素が認められる。この点から現段階としてイ段階を9世紀後半～末としておきたい。

土器ホ段階では、現在資料数も少なく提示されている年代観も諸氏により異なる点がある。共通点としては鳥羽遺跡検出のＳＫ332（以下鳥羽ＳＫ332と略記する）を定点として考えている。この点から土器ホ段階の年代観を若干再考しておきたい。再考するに就いては以下の点を踏まえたい。

鳥羽ＳＫ332に就いては詳述する可くもないが、出土した皿5点は、Ｂ軽石降下以前に半ば埋まった状態であったことから、その年代観は、Ｂ軽石降下を若干遡る11世紀末～12世紀初頭の年代観が与えられている。しかし、この根拠となりうるＢ軽石降下年を「中右記」記事内に認められる天仁元年（1108）としてのことであるが、未だ考古学的に確実視し得た年代ではない。一方、文献史学等からは天仁元年説を有力視する考察があり[註6]、現在では、Ｂ軽石の年代は天仁元年とすることに妥当性が求められているかの感がある。著者としては正直なところ半信半疑な状態である[註7]。いずれにせよ、11世紀代の土器の年代観を求める場合、Ｂ軽石

の降下年が大きな要素として存在している。ここでは、B軽石の降下年を一応1108年として考えて土器の年代観の根拠としたい。

この鳥羽ＳＫ332はドーナツ状の円形を呈する土坑であり、類例としては、日高52号土坑がある[註8]。この日高52号土坑からは皿が3点出土している。以下、この鳥羽ＳＫ332・日高52号土坑例と土器ホ段階を比較して考えてみたい。

鳥羽ＳＫ332出土の皿5点はいずれも共通した器形で、口径と底径の差が少なく器高1.2～1.5cmと低い。作りは、轆轤を用い底部から体部そして後円部を短くつまみ出した状態であり、下半部にはＣ系列の特徴を留めている。日高52号土坑例は筆者の分類のＣ系列3のホ段階（以下Ｃ３ホと略記する）と同様の形状にあり、口径・底径との比率が未だ顕著で、器高も高い。このＣ３ホに対比し得るものは2点あり、鳥羽ＳＫ332に比較的類似した形状のもの1点があるが、他2点に対し底部の器厚が3～4mm程薄くこれを付加して復元すれば、3点はほぼ同一形状と判断される。しかし、器形の変化が年代が下がると鳥羽ＳＫ332的様相になるとすれば、寧、是認し得るのかも知れないが、器厚の均一化という点は鳥羽ＳＫ332の皿5点には認め難い点でもあり、やはり3点は同一形状と考える。この鳥羽ＳＫ332の皿とＣ３ホには、形状差が顕著であるが、この顕著な状況は、ニ段階からホ段階への変化の中で、坏・の器形の変化が著しく、一段階が継過する間の状況と類似性が認められ、比較的短期の間に著しい器形変遷を遂げているかもしれない。このことから、両者間の時間差は、ほぼ土器段階の一段階程の時間差と思われる。

又、鳥羽ＳＫ332の皿の様に器高の低い一群を他系列で求めれば、Ｅ系列の外反する一群中のホ段階に認められれる。しかし、この一群は、口径・底径の比率が大きく、変遷過程の中では口径：底径比の差は器高値の次の二次的要素と考えられる。同様にＢ系列中では、Ｃ系列と同様な変遷が考えられる。この両者共通点は器高の低化が考えられ、Ｃ系列を含め共通するが、Ｄ系列では未だ判然とした状況は把握し得なかった。さらに、各系列中でＣ系列の出土量が多いという点は、何らかの状況が内在していると考えられ、この状況が鳥羽ＳＫ332の皿を残させた要因とも推測させる。

これらのことから、鳥羽ＳＫ332の皿を11世紀末頃と考えた場合、Ｃ３ホ・日高52号土坑は11世紀中頃でも後半代での形状と考えておきたい。

4．まとめ

上述してきたように、イ段階を9世紀後半～末とし、ホ段階を11世紀中頃とした場合、その間約180～200年になり、この時間幅が土器段階の住居第Ⅰ～Ⅴ段階の期間として理解される。そして、この180～200年を前述した住居の棟世代で均等分割すれば、棟世代当たり平均18～20年となり土器1段階の時間幅は36～40年程となる。すなわち、この数値が土器1段階の時間幅となり、100年間でほぼ3形式が現状での分類限界としても　認識される。ただし、Ｂ軽石の降下年を1108年としたことによる数値である。

前述してきた各土器段階は、概ね1段階は36～40年程であることが机上で算出された。この時間幅が、各住居段階の時間幅として考えられるものの、実際にはこれと異なったかもしれない。しかし、現状で一応のみなしとして考えたい。

Ｃ・Ｄ区内で検出された住居は上述してきたとおりの形状で5段階・土器類（坏・・皿）でも5段階が認められ、土器類の年代観から概ね9世紀末から11世紀中頃でも後半の頃の年代が得られ、各土器・住居段階は36～40年程の時間幅が想定された。しかし、大きな問題は、同時存続する住居がどの位あるのかという点が未解であるが、住居によっては遺物量が少量であったりするので、今後の住居自体の類例の増加を見た後

に再考したい。一応この点を踏まえて作成したのが第5表である。

上述してきた住居の変遷は、構築と廃棄を繰り返し行われてきた状況を復元する目的があったが、段階の設定と、ある程度の存続期の想定が出来ただけであった。しかし、本来的な確信部分はこれに内在する大きな2つの問題を解決する可き糸口にせねば何らの意味が無い。ここで、内在する大きな2つの問題に就いて問題提議をし後年の整理に向けての1指針にしたい。

内在する問題とは次の2点である。

1．古墳時代後期に出現したカマドは、7世紀末頃まで屋内に4本の主柱を備えていたが、この頃を境として住居の主柱が消滅し始め小型化への傾向が現れ、時期が下るに従いこの傾向が定着する。この7世紀末を住居形態上の画期とすることは広く周知されるところであるが、当該のC・D区の住居では、南東隅部寄りと南東隅部にカマドを設置するものが多く検出されている。この形態で最も着眼せねばならないのが屋内空間の利用である。これは、住居の出入口部分が大半の場合確実に南壁側に構築されたと判断されることから、住居の4辺の内ほぼ南壁を除く3辺はほとんど障害物が無くなり屋内の何等かの変かに対応してのことと想起され、ここに、カマド自体の移動の要因も含まれていると考えられるのである。ここに、この状況が何如にして生じたかという問題がある。

2．住居が廃棄され新たな住居が構築される場合、この中間地域では、世代継続が本当に存在したか否かである。世代継続が存在することは、集落的様相が認められるが、世代継続が無く上述の状況が存在するならば、特殊域としての生活空間となるがこの点を検証する方法を筆者は未だ暗中摸索の最中である。そして、これが為に所謂〝集落論〟が展開し得るのかという基本的問題がある。

本稿では上述の2点を今後の課題として考察していきたい。

註

註1　本遺跡の第2分冊の報文中で、F・G・H区内で検出された住居・カマドを細分はしているが、いずれも本項と目的とすることが異なるため、あえて用いなかった。また、カマドの分類は検出時の状態のみをもって細分しており、当時の元来の形状に根ざすものではなく、不確実な状態での細分には問題がある。

註2　カマドの右側にカマドの灰を掻き出すという状況は多い。このことは、単純に当時の人の利き手によると考えられる。この点は、カマドの右側に灰の掻き出しが有る場合は、当時の人が右利きにより生じたものと判断している。また、右利きという点では、大江正行氏により砥石により検証されている。筆者も砥石を観察する場合、この利き手により生ずる使用痕の違いを含め図化に心懸けている。筆者の観察する範囲には右利きの使用痕が看取される場合が大半である。

註3　井上唯雄「群馬県下の歴史時代の土器」『群馬県史研究　第8号』　群馬県史編さん委員会　1978（昭和53年）
中沢　悟「第5章第4節　出土土器の分類と編年」『昭和53年度県営畑地帯総合土地改良事業清里地区埋蔵文化財発掘調査報告書　第1集　清里・陣場遺跡』　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1982（昭和57年）
坂井　隆「第Ⅲ章第4節　古代の遺構・遺物について」『熊野堂遺跡(1)－上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書第3集－』　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1984（昭和59年）
小島敦子「Ⅳ－1．賀茂遺跡出土の平安時代の土器について」『賀茂遺跡　国道122号（太田バイパス）道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1984（昭和59年）
神谷佳明「第Ⅳ章第4節　平安時代の土器について」『糸井宮前遺跡Ⅰ－関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第8集－』　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1985（昭和60年）
綿貫綾子「古代末期～中世における在地系土器の諸問題　浅間山噴出のB軽石降下年代について」『神奈川考古　第21号』　神奈川考古同人会　1986（昭和61年）
坂口　一・三浦京子「奈良・平安時代の土器の編年－住居の重複と共伴関係による土器型式組列の検討－」『群馬県史研究　第24号』群馬県史編さん委員会　1986（昭和61年）
桜岡正信「第4章第1節第1項　土器の分類と時期設定」『上野国分僧寺・尼寺中間地域(2)－関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第20集－』　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1988（昭和63年）
綿貫邦男「第5章　鳥羽遺跡出土の土器序列について（試案）」『鳥羽遺跡Ⅰ・J・K区－関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第21集－』　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1988（昭和63年）
などがある。

註4　近年、当事業団を中心に各調査報告書中で須恵器当の胎土分析を掲載する様になり、土器の化学的分析が進んできている。一方、集落調査に伴なう調査報告を主体に、古墳～平安時代の土器編年作業が進められいる。
一般には、生産地（窯跡）の調査により進むのが通有であるが、群馬県の最大の特殊性として、この生産地例での調査例が極少であり、これが故に集落例からの編年作業が進んでいるとも言い得る状況である。筆者はこの現状下で、何如にすれば古代窯業生産体制

を復元出来るかという観点から、土器の胎土等を肉眼観察することにより、生産地を推定する方法を用いている。
現在、胎土を観察し始めて10余年になるが、県下内で胎土から多くの情報を得られる様になり、瓦・土器を含め、県下の生産地をある程度判断出来る様になってきた。そして、胎土観察を多くするうちに、県下11窯跡群は各窯跡群には器形自体に特徴があることが判断出来る様になったのだが、まだ確実視し得るとは言い難い部分がある。
今後、上述の視点から土器を分析していく所存であることを添えておく。

註5　倉田芳郎氏は、千葉県上の台遺跡の調査所見を「千葉上の台遺跡の発掘調査」(『考古学ジャーナル』№95　1974) に著された。氏はこの中で、3軒の切り合いから5世代の建て替えが考えられると論述された。この論点は、土器の変遷過程を遺構（住居跡）から論述するが必要であることを、単に土器のみからの変遷過程を論述することへの危惧を促されたと拝察する。筆者も、短絡的な、一住居跡出土の一括資料で住居そのものを考えに入れない作業には同様に危惧の念を感じている。この点から、先ず住居自体の分類等を実施し、遺跡内での存続世代を先ず検証したかったことが目的であった。しかし、確実な世代数は文字記録でもない限り検証は出来得ず、これにより、住居を単位とする〝棟世代〟を用いた。

註6　小島敦子・斎藤利昭「Ⅲ．2開削計画およびその結果」『女堀　県営圃場整備事業荒砥南部・北部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1985（昭和60年）

註7　鳥羽ＳＫ332以降の平安時代の土器は未出である。一方鎌倉時代では、現在県下で知られる在地系土器（軟質陶器）では、長楽寺の紀年銘の入った鉢があり、他は壺形であるが、古代末の皿と同種の遺物と（系譜は不明）としては、大御堂遺跡で出土した土師質土器皿（カワラケ）が数点あり、13世紀前半頃の年代観が考えられるものであるが、県下で、この時期のものは唯一この大御堂例のみである。この大御堂例と同じものは北関東に於いては下古館で数例有るのみで、鎌倉市内でも、確実に鎌倉時代の文化層からの出土例である。そして、鳥羽ＳＫ332のそれとは異なっており、両者間には時間のへだたりが大きく感ぜられる。この点では鳥羽ＳＫ332の皿は、12世紀代での存在が確実で、下限として12世紀前半とすれば確実と考える。そして、Ｂ軽石が2回降下していることから、通説化しているＢ軽石の降下年「天仁元年」があるが、筆者自身としては、土師質土器皿のみの観点では、Ｂ軽石の降下は、天仁元年＋50年間ぐらいが下限と考えている（天仁元年は否定するものではない）。

註8　大江正行「第6篇第4章　祭祀　52号土坑」『日高遺跡　関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第5集』　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1982（昭和57年）

第2節　遺　　物

第1項　C・D区の特殊遺物

はじめに

本項で扱う特殊遺物とは、通有の集落遺跡で扱われる特殊遺物と様相を異にする。これは、当中間地域は、立地からの特性があり、これにより自と大きな違いがある。すなわち、国分二寺・国府が隣接することにより生ずる様相である。以下、その遺物毎に記述する。

1．金銅製男神立像（鋳造）

金銅製男神立像は1体出土している。出土地点は、D区第28号住居跡（以下D28住と略記）の北西隅部より南側14cmで西壁より20cm離れた地点から出土しており、D28住に近接している地点である。出土状況は、D28住周辺の平面精査を実施している段階で、Ⅲ層土の下層部からの出土である。また、この点で、土坑等の存在も予期されるところであるが、それらの痕跡は認められなかった。また、D28住に近接することからD28住での存在とも考えうる範囲でもあるが、出土時の状況からは判断しかねる。恐らくは何らかの遺構に伴なわなければ出土する筈が無く、遺構に伴なうことは確実視される。

本品は、全体高5.28cm、神像部高4.81cm、重量31.6ｇを計測・計量する。全体に錆化が認められる。そして、全体に黒く煤けた状態で火中している可能性がある。

特徴は、全体に反り上がった状態で丸味があり、裳裾は広がっている。また、小まかな装飾の鋳出はされていない。左右両手は、胸部の部分で合わさり、笏と考えられる突出物が鋳出されている。しかし、この笏は、右手のみで所持しているとは判断出来ない。衣の袖は、腕の輪郭下で5段の襞状に表出されている。頭部は、宝冠を鋳出している。顔面は精緻に表出しておらず、顔立ちは見栄えは悪い。足（脚）部は裳の下に輪郭を表出している。背面側では、腰部に帯による裳のたるみが表出されている。

金銅製の所以たる〝鍍金〟は、正面側の右袖部にややまとまっており、全体では所々に残存する。鍍金は本品の形状・大きさにより水銀アマルガムによるものと推定される。

鋳造は、前面側と背面側の鋳型を合せ鋳出している。また、内型内に鉄芯を入れている。この鉄芯は一辺

4㎜程の四角柱状のもので、台座裏面に認められるが、目的等は言及しかねる。

2．金銅製宝相華文飾金具

本品はD区第12号住居跡覆土内より、図中右側を下にしてほぼ垂直に起きた状態で出土している。遺存状態は全体に錆が及んでおり、鍍金も3分之1程が残存する。旧状は図中に想定線を加えたが、復原し得ない。文様は宝相華文を中央（？）に配し、上下の「枡」形状の部分には珠文を横位に配し、復原で8ケが考えられる。この「枡」形状の部分で図中左側下部には、円形を呈する刻線内の中央に珠文を配している。これらの珠文は、背面側より先端の丸い鑿状の工具により陽出されている。

第398図　金銅製男神立像実測図

宝相華文は、華弁の沿辺に毛彫りを施すが全体に精緻な観はなく、量産物として彫られた様な観を受ける。そして、この毛彫りには鑿枕は認められず、鍍金を施す以前に研きが懸けられた可能性が考えられる。

3．輸入磁器

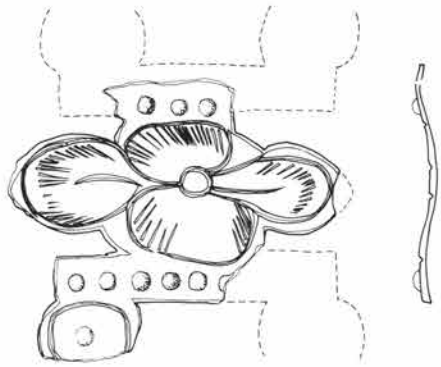
今次報告区内から3点出土している。この3点の内訳は、D2住出土（カマド前面の床面直上）の白磁碗口縁部片（第24図－3）・D38住出土（床面直上層土内）白磁碗体部片（第105図－5）・D区表土出土（掲載漏）青磁底部片1点の3点である。この3点は、いずれも北方諸窯系の製品と考えられるが、第2分冊中でも記された様に、未報告区にも多数の出土品がある。この点を踏まえ、詳細に就いては今後に一括して総括したい。

	出土地	図番号	器種	器形の特徴	釉調・胎土	摘要
1	D2住	24－3	白磁　碗口縁部細片	口縁部は玉縁を呈する。	玉縁下は釉溜りをみせ、陰青に片寄る色調を呈する。また、釉の気泡は細かく透明感は強い。生地色調は淡白灰色を呈する。	カマド前面床直出土。内外面に擦痕が多い。口縁部の擦れが著しい。
2	D38住	105－5	白磁　碗	体部下半に回転篦削りを施す。(轆轤左回転)下端部に露胎部がある。	釉調は陰青に片寄る色調を呈すると考えられる。釉の気泡は細かく、透明感が強い。生地の色調は淡白灰色を呈する。	床面直上層土内出土。
3	D表土		青磁　碗	轆轤左回転。底面のみに目痕の白砂が3ケ所に見られる。	釉は薄く気泡は細かい。色調は、暗緑色を呈する。胎土の色調はくすんだ灰色を呈する。また、部分的に再貫入が認められる。	目込み部はやや摩滅する。

第6表　輸入陶磁器観察表

4．木器椀

木器椀はD区第1号井戸跡から1点のみ出土している。遺存状態は3分の1程度である。度目は、口径15.6cm・底径8.6cm・器高3.3cmを計測する。この椀の一部分には、炭化した部分が認められる。この炭化は、火により生じたものと考えられるが、破損段階で生じたのか、完存時に生じたのか判断しかねる。また、掲載図中に示した年輪は、やや模式図的観も有るが、年輪の曲線から椀を作り出した部分の樹齢は30年～150年ぐらいの部分と推定される。樹種は、ケヤキに類するものと思われる。



第399図　D区表土層出土青磁碗片実測図

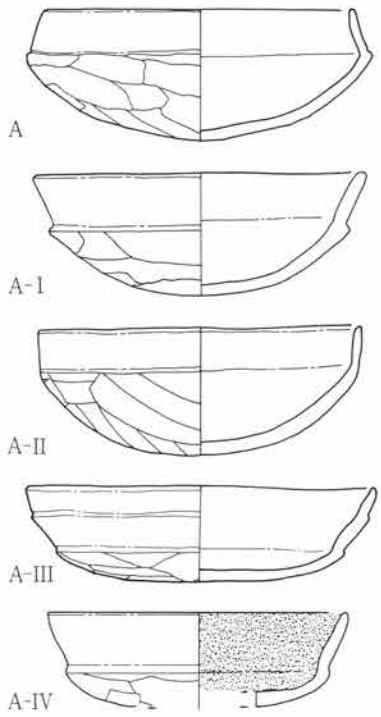
5．石　帯

D1住掘り方から1点出土しているが、丸鞆とは思われない(要検討)。

第2項　いわゆる「模倣坏」の胎土について

はじめに

いわゆる「模倣坏」については、その系譜を須恵器蓋坏に求めることでほぼ見解が一致し、6世紀前半の段階に器形に多くのバラエティが出現することが想定されている。この「模倣坏」について、これまでは形態を中心とした分類と変遷が捉えられてきた。筆者は『上野国分僧寺・尼寺中間地域』H区出土遺物の整理を通して、「模倣坏」の胎土・焼成の違いが器形と大きく拘っていることに気付いた。そこで『上野国分僧寺・尼寺中間地域』（2）で段階設定を目的に行った土師器坏A・AI・AIIの3分類にさらにAIII・AIVの2例を加え5分類を行い、それぞれの胎土・焼成の観察から器形と胎土・焼成との関係について述べ、その系統関係に対する問題提起としたい。ただ先の報告の中で行った分類は、段階設定を目的としながらも「模倣坏」の基本的器形バラエティの一部を抽出したに過ぎず、各類の段階的あり方については全く捉えることはできなかった。そこで段階的位置付けについては当遺跡と同じ前橋台地上に位置している三ッ寺III遺跡、保渡田遺跡報告[註1]に従い、各段階の年代観については前述の理由から筆者独自の見解をもたないため、坂口[註2]、井川両氏の年代観を参考にしたい。

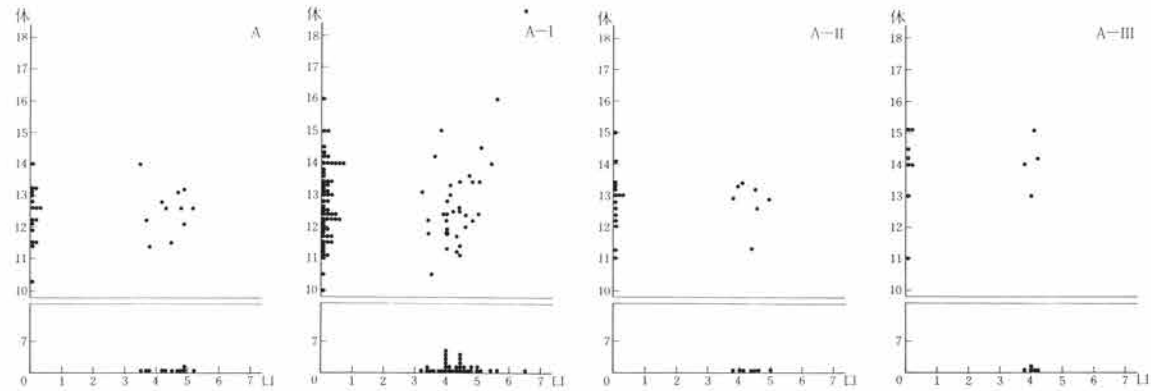


第400図　器形分類

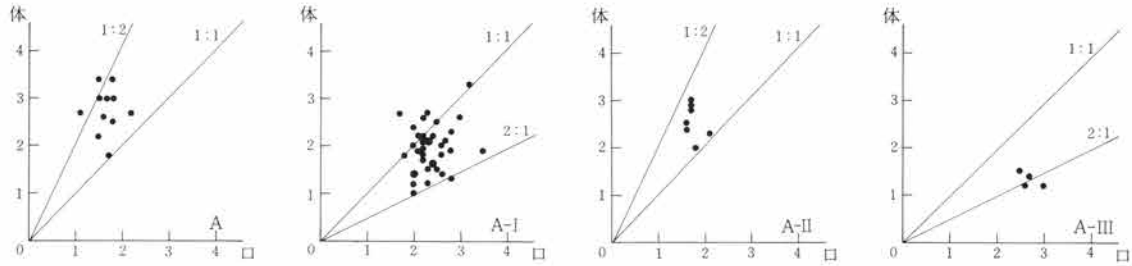
分類

分類は内面黒色処理を施すことを特徴としたAIVを除き、器形バラエティの基本形の抽出につとめた。また、各部の計測については、時間的変化を無視しているため各類の特徴を捉えにくいが、大まかな傾向をつかむため、第401・402図にグラフ化した。以下にこの図を元に各類の特徴を述べる。

Aは、口縁部が「く」字状に内傾するもので、口径は12～13cm、口縁部高：体部高が1：1と1：2のラインの間に入る。AIは、口縁部が外傾または外反するもので、口径は12cm及び14cm付近に集中し、口縁部高：体部高が1：1と2：1のラインの間にある。AIIは、口縁部が直立することを特徴とするもので、口径は13cm前後に集まり、口縁部高：体部高がAと同様な傾向をもつ。AIIIは、外傾する口縁部の中位に稜を



第401図　口径・器高分布図



第402図　口縁部高・体部高比

有するもので、口径は14cm前後に、口縁部高：体部高が２：１のラインに集まる傾向がある。AIVは内面黒色処理することを特徴としたもので、出土例が少なく傾向を捉えることはできなかったが、基本的にはＡＩと同形態のものが多いように思われる[註3]。この分類を須恵器蓋坏と対比すると、Aが坏、ＡＩ・AIIIが蓋の模倣であるのは明らかである。ＡIIは中間的な様相が認められるため、Aに近いものとＡＩに近いものとに分離される可能性がある。したがって坏模倣のものは器高における体部の割合が口縁部より多い傾向があり、蓋模倣のものは、ほぼ同じ割合であるか口縁部の割合が多い傾向を有することになり、これは比較的古い段階の須恵器蓋坏の器形的特徴と符号する。

胎土

「模倣坏」の特徴的な胎土を抽出すると、(１)、水晒されたような細粒で夾雑物を全く含まないもの、(２)、(１) に近い素地で砂粒等を若干含むもの、(３)、やや粗い素地で砂粒等を比較的多く含むもの、(４)、その他の４種に大きく捉えることができる。そして (１)・(２) の胎土を有するものは、比較的硬質に焼成されたものと、軟質なものがみられるのに対して、(３) は硬質に焼成されたものが多い傾向がある。また、(２)・(３) の胎土を有するものは、胎土の色調が白味の強い肌色で、器面が暗褐色に処理されたような状態[註4]のものが顕著である。(４) は、ＦＰと思われる軽石を含む黄褐色の「ねばり」の強い胎土をもつＨ区第81号住居跡出土例 (第422図―１) や、白い色調をもつ陶土のような特異なものを一括したもので、一つの傾向で捉えることはできない。

次に各分類と胎土の関係についてみると、Aは (２)・(３) の胎土で構成され、ＡＩは (１) の胎土が主体を占め、わずかに (２)・(３) の胎土のものがみられる。ＡIIは (２)・(３) の胎土が主で、わずかに (１) の胎土も認められる。AIIIは殆ど (３) で構成され、AIVは (１) が主体と考えられる。そして前述のように、(２)・(３) で構成されるＡ・ＡII・AIIIには器面が暗褐色を呈するものが多い。これをＨ区出土の103例についてみると、Aは17例中すべて (２)・(３) で、６例に器面処理がみられた。ＡＩは、62例中 (１) が54例、(２)・(３) が８例で３例に器面処理がみられた。ＡIIは15例中 (１) が６例、(２)・(３) が９例で７例に器面処理がみられ、AIIIは７例すべて (２)・(３) で内３例に器面処理がみられた。AIVは２例で２例共 (１) の胎土であった。以上のことから器形と胎土の関係は、Ａ・ＡII・AIIIと (２)・(３) の第１グループ及びＡＩと (１) の第２グループの２つに大きく分けることができ、当遺跡においては量的に第２グループが主体を占めている。仮に上記の関係が成り立つとすれば、第１のグループは坏と蓋のセットを両方模倣していることになり、このグループに器面処理を施すものが多いことは、蓋坏のセットの忠実な模倣と同時に、須恵器の色調をも模倣しようという意図の現れではないかと考えている。そして第２のグループに蓋を模倣したものしかみられないことは、その均一な胎土及び出土量から、量産を意図しているのではないかと思われる。これらの２つのグループに属するものは、Ｈ区第14号住居跡等多くの遺構で共伴が認められ、また、井川氏の段階設定の上では第３分類期以降に両者が併存している。したがってこの２グループは

時間的に前後するものではなく、ほぼ同時期に製作・供給されていたことを示している。つまりこの2グループは同時期における系統差として理解されるものであり、製作者または製作地の違いを反映したものではないかと考えられる。特に第1グループの特徴である器面処理は、栃木県にその傾向の強いことが知られており[註5]、その影響下にあることが予想される。また、第2グループは当遺跡を含め周辺遺跡においても6世紀代を通して主体を占めていることは明らかであり、当地域を特徴付ける胎土である。しかし各集落内での焼成は現在までのところ捉えられておらず、また、長期間にわたる胎土の均一性は顕著であることなどから、主体的生産地の存在が想定されるが地域の特定はできない[註6]。この2グループの出現は、現状では井川氏の第3分類期以降、つまり「模倣坏」が器種構成の主体を占めていく段階と考えられる。それ以前のいわゆる「模倣坏」は、器形的に須恵器蓋の細部にわたって模倣しており、胎土はやや粗く砂質で（3）に近いものや、内斜口縁や強く内湾する口縁を特徴とする前段階の土器群に近似するものが多い。したがって井川氏の第2分類期と第3分類期の間つまり6世紀初頭に胎土の大きな変化がみられ、ここに画期が求められる。

蛇足ではあるがこの「模倣坏」の出現・展開の要因については、第2分類期以前から須恵器蓋坏等がわずかづつ集落内に供給されていることから、日常食器における須恵器指向の強まりが契機となって、土師器の器形に影響を及ぼしたことが考えられる。その後の器形バラエティの展開は、各段階の須恵器の器形に系譜を求めることができないものが多いことから、須恵器を模倣したものではなく土師器独自の器形変化をしたものと考えられる。

おわりに

以上6世紀代における特徴的な胎土についてその違いについて指摘したが、これまで器形偏重の分類がなされ、こうした胎土の違いについて気付きながら触れられることは少なかった。しかしこの胎土を問題にすることによって、細分されている器形バラエティを逆に大きなまとまりとして捉え直すことができる。この問題を時期毎、地域毎に求めて行くことによって製作者の問題へとより近付けるものと考えている。

註

註1　井川達雄　「古墳時代・奈良時代の土器について」『三ッ寺Ⅲ遺跡・保渡田遺跡・中里天神塚古墳』上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告第5集　群馬県教育委員会　群馬県埋蔵文化財調査事業団　日本鉄道建設公団　1985

註2　坂口　一　「古墳時代後期の土器の編年」『群馬文化』第208号 群馬県地域文化研究協議会 1986

註3　当遺跡においてもAⅢと同形態の資料も検出しているが、数少ない資料の中でも圧倒的にAⅠの形態をとるものが多い。

註4　このような資料すべてではないが、栃木県の出土例の分析によって器面に漆を塗布したものがあることが知られている。

註5　器面を赤色や黒色に処理する伝統は当県に比較して明らかに強く、器面を暗褐色に処理したものは8世紀代まで残存している。

註6　大規模な集落調査によっても現在まで土師器焼成窯は明らかになっていない。このことは集落内で消費された土師器がその集落で生産された可能性の薄いことを表している。また、胎土のまとまり及び器形等の類似性は、当県にあっていくつかの生産拠点の存在を予想させる。現状で証明の手段はないが、須恵器生産の場所の近くで土師器も焼成されていたものと考えている。

第3項　住居内出土の礫につて

竪穴住居内から細長い河原石が出土する例がよく見られるが、個々の礫について観察されたものは数少なく、出土事実を述べただけの報告書が大半である。しかし、本遺跡でも多くの出土例が見られることから11溝以北のH区を例に考えてみたい。これまでに礫について考察された中で管見に触れた例を上げて見ると、大川清氏が長野県伊那・福島遺跡で述べた「トイレット・ストーン」説が最初のようであるが、この意見に追随する例はないと思われる。尾崎喜左雄博士は群馬県入野遺跡で出土状態の特殊性などから「祭祀遺構」ではないかと考えられたが、他の遺跡では必ずしも同様の出土状態を示すとは言えない。現在最も一般化しつつあるのが、肥留間博氏が東京都船田遺跡でまた柿沼幹雄氏が埼玉県下田・諏訪遺跡で述べた「編物石」説である。両氏とも民俗例の莚編みの錘に類似し、大きさ・重さに共通性を有することなどから「編物石」と考えるのが最も妥当であろうとされている。これと異なる意見としては、石北直樹氏が群馬県石墨遺跡で年代別に重さを分類し、敲打痕を有するものが含まれることなどから「敲石」の可能性を指摘している。

本遺跡の今回報告分中のH区11溝以北の住居内出土の礫は下表の通りである。(河原石以外は除く。)

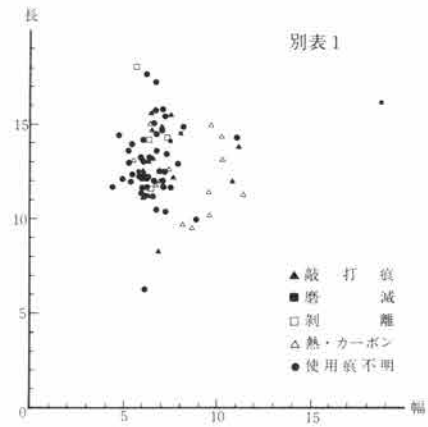
No.	挿図番号	遺構名称	量目				遺存状況	材　質	使用痕・その他
			長さ	幅	厚さ	重さ			
1	193－10	H－1住	12.0	5.3	3.1	338.3	完形	粗粒安山岩	下端に若干敲打痕あり。
2	193－11	〃	15.7	6.7	3.6	633.8	〃	変質安山岩	使用痕は不明。
3	193－12	〃	17.2	6.7	5.2	866.7	〃	細粒安山岩	上端側面に使用に伴うものか剝離面がある。その他使用痕なし。
4	195－9	H－2住	(8.6)	6.7	4.1	351.0	½	粗粒安山岩	半截されており、一部に熱を受けた痕跡をとどめている。
5	224－1	H－47住	15.3	7.1	5.7	1,023.3	完形	〃	使用痕は不明。
6	224－2	〃	15.5	7.5	4.1	832.9	〃	〃	側面に敲打痕が顕著に残る。
7	227－2	H－53住	11.4	5.9	2.6	319.3	〃	〃	使用痕は不明。
8	227－3	〃	14.1	7.4	4.6	712.5	〃	〃	二面に磨滅した痕跡あり。
9	227－4	〃	14.5	8.0	4.9	894.1	〃	〃	上半の一部に磨滅した面が認められるが、裏面に対応するような面は見られない。
10	227－5	〃	17.6	6.2	3.9	685.0	〃	変質安山岩	使用痕は不明。
11	229－15	H－54住	(6.2)	7.9	3.5	274.0	½	粗粒安山岩	半截されており、実測面及び上端部に熱によるハゼと思われる剝離面が見られ両面共に磨滅。
12	236－1	H－63住	11.6	6.4	2.9	371.3	完形	黒色安山岩	下端部からの打撃によって一面の剝離面が形成され、さらに刃部調整のような数回の小剝離が加えられている。
13	239－11	H－66住	13.1	6.0	4.8	538.3	〃	黒色頁岩	断面は三角形状で、加工痕・使用痕等は認められない。
14	243－3	H－68住	14.1	6.1	6.0	907.1	〃	変質安山岩	両側面及び下面に若干磨滅したような痕跡が見られるが、自然面との区別はつけがたい。
15	246－3	H－71住	15.6	6.4	4.8	738.1	〃	〃	上下両端部に敲打痕が見られる。
16	254－3	H－92住	(8.6)	6.9	3.5	293.4	½	〃	半截された面の縁辺に、更に小さな剝離が見られることにより、この縁辺が機能部であった可能性がある。
17	256－1	H－97住	14.3	7.3	3.5	454.2	完形	黒色頁岩	自然石の一端を片面から大きく剝離し、刃部を形成し、側縁調整及び刃部加工を行っている。一次使用面には磨滅した部分が見られる。
18	258－1	H－98住	13.1	10.2	4.2	835.4	〃	石英閃緑岩	熱によるハゼが激しく、原石面の大半は失われている。
19	261－6	H－100住	12.5	6.0	4.0	461.6	〃	〃	下端部・側面の一部に敲打に伴う痕跡が残る。
20	263－7	H－101住	13.1	5.5	4.5	495.7	〃	変質安山岩	側面近くに剝離面が一面見られる。上端部は熱を受けた痕跡が顕著で、変色している。その他使用痕は不明。

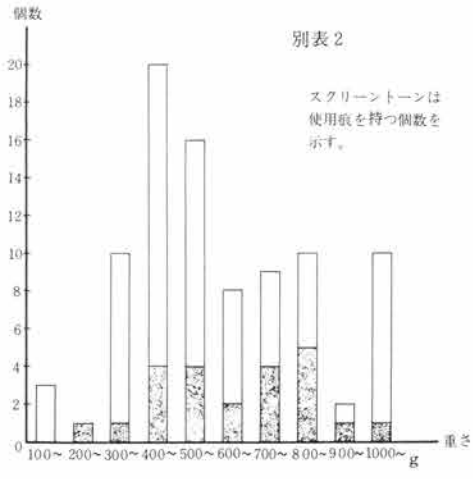
No.	挿図番号	遺構名称	量目				遺存状況	材　　質	使　用　痕　・　そ　の　他
			長さ	幅	厚さ	重　さ			
21	264－3	H－102住	11.3	11.4	6.3	116.0	完形	粗粒安山岩	熱で全体に変色し、器面ももろくなっている。
22	268－2	H－104住	14.0	5.4	4.3	532.6	〃	黒色頁岩	使用痕は不明。
23	268－3	〃	13.6	5.2	3.5	452.5	〃	流紋岩	使用痕は不明。
24	268－4	〃	12.1	6.0	3.6	420.9	〃	粗粒安山岩	上下端部に若干敲打痕が見られる。
25	268－5	〃	13.0	6.3	3.7	476.7	〃	〃	側面部の敲打痕は顕著であり、上下端にも若干見られる。
26	270－3	H－106住	8.3	6.8	2.7	237.7	〃	〃	下端及び側端にわずかに敲打痕がみられる。
27	273－3	H－109住	12.0	10.8	6.5	827.4	〃	石英閃緑岩	縁辺部にわずかに敲打痕が見られ、熱を受けたものと見られ、変色した部分がある。
28	278－2	H－116住	10.0	8.8	4.9	559.2	〃	粗粒安山岩	敲打痕は明瞭に観察されない。カマド内出土のためか、実測面に顕著なカーボンの付着が見られる。
29	280－8	H－117住	(10.0)	16.4	3.7	1,040.0	½	〃	側縁部に使用痕は見られず、上下の両面の平坦部が使用部と思われる。
30	282－5	H－118住	6.3	6.1	2.8	152.5	完形	粗粒安山岩	使用痕は不明。
31	282－6	〃	10.2	9.5	5.8	823.5	〃	〃	器面に薄くカーボンの付着がみられる。
32	282－7	〃	15.8	7.0	4.2	784.3	〃	変質安山岩	器面にハゼ状の剝落が見られる。特に両端部は顕著。
33	282－8	〃	13.6	6.7	4.3	641.6	〃	輝緑岩	下端部に敲打痕と見られる痕跡があるが顕著でない。
34	282－9	〃	13.0	5.3	4.0	491.2	〃	粗粒安山岩	使用痕は不明。
35	282－10	〃	12.3	5.8	3.4	497.4	〃	溶結凝灰岩	上端部にわずかに剝離が見られる。
36	282－11	〃	10.1	4.7	2.4	179.5	〃	黒色頁岩	本来は楕円形を呈するものと思われるが、両側が截断されたようになっている。
37	285－5	H－121住	16.1	18.7	4.7	2,375.0	〃	粗粒安山岩	平坦面が広範囲にわたって磨滅している。
38	290－2	H－123住	(9.4)	5.5	4.4	318.0	⅔	〃	半截されたような状態であるが、截断面に磨滅等使用に伴う痕跡はない。
39	290－3	〃	(10.8)	5.5	3.4	387.8	〃	溶結凝灰岩	半截されているが截断面に使用痕は見られず、使用に伴い欠損したと考えられ、これは残存部が更に2つに割れていることから想定できる。
40	290－4	〃	13.2	6.5	4.6	627.7	完形	粗粒安山岩	側面の一部及び上端部に顕著な敲打痕がある。
41	290－5	〃	(13.4)	5.5	4.1	570.8	⅔	石英閃緑岩	両端部は熱を受けることによって割れ欠損している。また、全体にもろい感じである。
42	290－6	〃	13.2	5.9	3.0	402.6	完形	変質安山岩	側面からの打撃により一面の剝離が見られるが側面にその他の使用痕は見られず、これが使用に伴うものとは考えられない。
43	290－7	〃	12.1	4.9	4.4	392.0	〃	珪質変質岩	使用痕は不明。
44	290－8	〃	11.7	4.3	4.0	311.1	〃	粗粒安山岩	上端部にわずかに磨滅部が見られるが、明瞭でない。
45	290－9	〃	14.5	6.7	4.7	777.2	〃	粗粒安山岩	器面が若干磨滅しているが、使用に伴うものかどうか不明。
46	290－10	〃	12.5	6.8	4.4	626.0	〃	ひん岩	先端部を截断されたような状態で、この截断面には若干の磨滅が見られることから、この面が使用面と思われる。
47	290－11	〃	12.6	7.4	4.4	574.5	〃	石英閃緑岩	欠損部・使用痕等は見られず、側面近くの一部に熱を受けた痕跡がある。
48	290－12	〃	15.0	6.4	4.5	701.7	〃	〃	両側面は熱によるものかもろく剝離している。
49	290－13	〃	14.7	7.0	5.1	750.4	〃	粗粒安山岩	使用痕は不明。
50	292－5	H－124住	12.9	7.8	5.0	814.2	〃	〃	使用痕は不明。
51	296－6	H－127住	11.4	9.5	3.1	481.1	〃	細粒安山岩	上下両端部が欠損している。熱を受けたことによる剝離とおもわれる。
52	296－7	〃	(8.2)	15.5	4.2	730.0	½	石英閃緑岩	半分欠損し、欠損面から若干の剝離が見られるが、全体に熱を受け変色していることから、熱による剝離と思われる。
53	301－4	H－130住	14.9	9.6	3.7	758.1	完形	粗粒安山岩	二つに分割し出土した。上半は熱を受けたものと思われ、変色している。

No.	挿図番号	遺構名称	量目				遺存状況	材　　質	使　用　痕　・　そ　の　他
			長さ	幅	厚さ	重　さ			
54	304－11	H－132住	(7.1)	6.2	3.6	244.2	½	角閃石安山岩	半截されているが截断面に使用の痕跡は認められない。
55	304－12	〃	12.0	6.7	4.2	520.2	完形	細粒安山岩	下端の一部に二面の剝離が見られるが、継続的使用に伴うものとは考えられない。
56	305－3	H－133住	14.7	6.5	4.5	848.6	〃	粗粒安山岩	周縁に沿って敲打痕が見られ、両面共に若干磨滅している。
57	310－10	H－137住	11.2	6.3	4.8	587.3	〃	変質安山岩	上下端部に敲打痕が見られ、ここが使用部位であった可能性がある。
58	310－11	〃	11.2	6.4	5.1	500.0	〃	溶結凝灰岩	使用痕は不明。
59	310－12	〃	10.4	7.2	3.5	403.7	〃	粗粒安山岩	使用痕は不明。
60	310－13	〃	10.5	6.7	3.2	378.3	〃	〃	上下端にわずかに敲打痕を有する。
61	310－14	〃	(7.1)	5.0	2.2	125.8	½	黒色頁岩	半截された状態であるが、使用に伴うものかどうか不明。上端及び右側面に若干の剝離が見られ、使用部位を示唆している。
62	311－1	〃	12.1	6.1	3.7	419.3	完形	粗粒安山岩	上下端にわずかに敲打痕が見られ、敲石であった可能性がある。
63	311－2	〃	11.1	6.0	5.2	534.0	〃	〃	上下両端に明瞭な敲打痕がみられる。
64	311－3	〃	11.6	6.0	4.5	451.6	〃	溶結凝灰岩	上下端にわずかに敲打痕が見られるが、その他の使用痕は不明。
65	311－4	〃	11.7	6.7	4.6	583.1	〃	石英閃緑岩	熱によるものか器面全面にハゼが見られる。
66	311－5	〃	11.7	7.1	4.1	552.6	〃	粗粒安山岩	上下端部にわずかではあるが、敲打痕がみられる。また、上半は熱を受け黒く変色している。
67	311－6	〃	11.7	6.2	5.6	677.7	〃	ひん岩	断面四角形に近く、四面が面取りされたようにも見えるが、擦痕等の使用痕は認められない。
68	311－7	〃	12.0	7.0	4.1	446.5	〃	粗粒安山岩	縁辺が若干磨滅している。
69	311－8	〃	12.5	6.8	3.8	552.1	〃	ひん岩	下端に敲打痕状のものがわずかに見られることから敲石であった可能性もある。
70	311－9	〃	12.2	6.2	5.0	577.2	〃	粗粒安山岩	使用痕は不明。
71	311－10	〃	12.3	5.4	3.6	388.2	〃	〃	上下端共わずかに敲打痕が見られることから使用部位は両端部と考えられる。
72	311－11	〃	12.2	7.6	3.6	512.0	〃	〃	側縁及び上下端部に敲打痕がみられる。
73	311－12	〃	12.0	6.9	3.7	425.6	〃	ひん岩	上端部は熱によって若干剝離した状態であるが使用部位は特定できない。
74	311－13	〃	12.5	7.2	4.7	653.4	〃	粗粒安山岩	右側縁部に若干敲打痕が見られることからここが使用部と思われ、他に使用痕は見られない。
75	311－14	〃	14.2	6.3	5.1	701.8	〃	〃	上下端共に敲打痕は明瞭に見られないが、上端側部に一面の剝離がみられる。この剝離は使用に伴うものと考えられる。
76	314－4	H－138住	11.7	7.4	5.0	527.7	〃	かんらん岩	使用痕は不明。
77	314－5	〃	9.7	8.1	3.9	450.8	〃	粗粒安山岩	使用痕は確認できないが、縁辺に特に厚くカーボンの付着が見られる。
78	314－6	〃	9.5	8.6	3.9	465.4	〃	ひん岩	使用痕は見られず、全面に薄くカーボンが付着している。
79	314－7	〃	(6.5)	4.7	3.5	158.0	½	流紋岩	半截されているが截断面に磨滅は見られない。
80	317－1	H－140住	13.8	11.1	3.2	837.5	完形	粗粒安山岩	縁辺に沿って敲打痕が見られる。
81	317－2	〃	14.3	11.0	4.6	1,186.5	〃	石英閃緑岩	縁辺にわずかに敲打痕が認められる。また器面は熱により変色している。
82	317－3	〃	13.4	7.2	3.2	426.0	〃	粗粒安山岩	使用痕は不明。
83	317－4	〃	13.2	6.4	3.6	450.3	〃	石英閃緑岩	使用痕は不明。
84	317－5	〃	14.3	10.2	4.4	1,039.5	〃	〃	縁辺の一部は熱によりハゼている。また、平坦面に円錐状の凹みが数箇所見られる。
85	317－6	〃	14.4	4.6	3.8	387.2	〃	砂岩	使用痕は不明。
86	317－7	〃	11.2	6.1	5.5	486.5	〃	石英閃緑岩	半截された截断面縁辺及び平面に若干磨滅した部分が見られることから、この面を使用した可能性が高い。

No.	挿図番号	遺構名称	量目 長さ	幅	厚さ	重さ	遺存状況	材質	使用痕・その他
87	319－8	H－142住	15.0	6.5	4.3	667.0	5/6	粗粒安山岩	上端及び下端近くの裏面に剝離がみられるが、特に上端の截断面に使用の痕跡は見られず、使用に伴い割れた可能性が高い。
88	321－7	H－144住	(5.7)	7.7	2.4	172.4	1/2	〃	平面部は磨滅しており、この面を使用したものと考えられる。
89	322－2	H－145住	12.2	6.0	4.8	578.2	完形	石英閃緑岩	半面は熱によってハゼており、残存面ももろくなっている。
90	324－8	H－146住	(6.6)	4.8	3.4	170.9	1/2	粗粒安山岩	半截されているが、截断面に使用の痕跡は見られず、使用に伴い割れたものと思われる。
91	324－9	〃	14.8	7.0	3.7	574.1	完形	〃	下端に敲打痕がわずかに見られる。
92	324－10	〃	14.9	8.1	3.8	810.7	〃	変質安山岩	使用痕は不明。
93	327－4	H－147住	17.0	7.8	4.5	947.5	〃	粗粒安山岩	下端部・側面の一部及び平面の下端部近くに明瞭な敲打痕が見られる。また側面に磨滅した面がある。
94	329－2	H－156住	18.0	5.6	3.2	724.8	〃	変質安山岩	両側面共上半に剝離が見られ、稜線は打製石斧の側縁部と同じような状態を呈している。この両側面が使用部位であったことは明白である。
95	332－9	H－158住	(21.8)	16.6	9.4	5,400.0	1/2	粗粒安山岩	下半は欠損し、上端の一部も熱によりハゼている。全体に熱により変色している。
96	332－10	〃	10.0	5.7	5.7	397.8	〃	石英斑岩	半截の状態であるが、截断面に使用痕は認められず、使用に伴い割れたものと思われる。

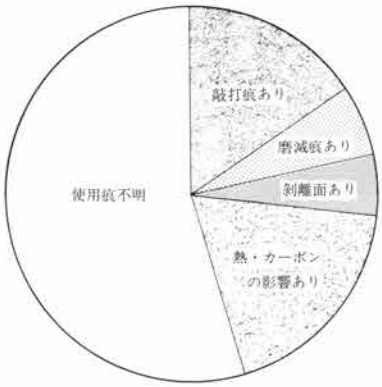
まず、大きさを見ると別表1のように、長さ11～16cm・幅4～8cmの範囲のものが多い。重さでは別表2のように分散傾向が見られ、400g～500gの間がやや多い。ついで使用痕等の観察を中心に分類すると別表3のようになる。(使用に伴わないと思われる痕跡については使用痕不明に含めた。) 6・25・93のように顕著な敲打痕を持ち敲石として使用したと思われるものや、8・37のように磨滅面を持ち磨石（台石）として用いられたと思われるもの、17のように刃部調整が行われているものなど、明らかに石器として用いられたと考えられるものが27.5%含まれている。材質別に分類すると別表4のように粗粒安山岩が多い。



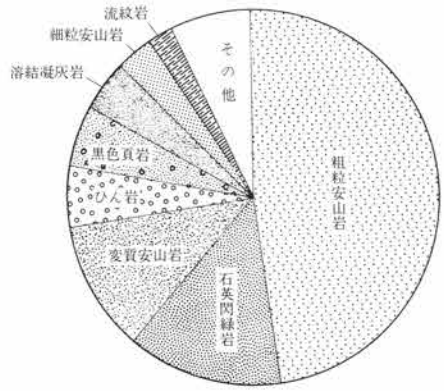


これらの表に現れた事実から、本遺跡出土の礫を考えて見たい。第一に加工・使用痕等詳しく観察してゆくと、自然礫と思われた中に1/4以上も石器として用いられていたものが含まれていたこと。第二には重さから見ると600g以上のものが43.2%を占め、年代的には適合するとは言いがたいが石北氏の指摘されるのと同様にかなり重いものが多いことが上げられる。使用痕の有無については別表2に見られるように重さにかかわらず分布しているが、石器として用いられたと思われるもの以外の使用痕を持たない礫については「編物石」としての可能性を考えてみよう。礫を4個以上出土した住居について重さ・個数を見ると別表5のようになり、柿沼氏の言われた等しい重量・偶

別表3



別表4



別表5

遺構名称	総個数	100g~	200g~	300g~	400g~	500g~	600g~	700g~	800g~	900g~	1000g~
H−53住	4			1			1	1	1		
H−104住	4				3	1					
H−118住	7（6）	1			2		1	1	1		
H−123住	12（9）			2	1	1	2	3			
H−137住	19（18）			2	5	8	2	1			
H−138住	4（3）				2	1					
H−140住	5				3				1		1

（　）内は完形品の個数を示す。

数個の組み合わせに必ずしも適合するとは言えない。民俗例では礫を莚編みなどの錘に用いてはいるが、木を鼓状に削った「槌の子」を用いることも知られており、古代も同様に考えられるのではないだろうか。また縦糸を巻いた2個1組を次々交差させていくのであるから、あまり重いものは不適当と思われる。このように考えていくと、本遺跡出土礫のなかで「編物石」として用いられたものはかなり限定されよう。出土状態から考えられる「祭祀遺構」または「祭祀遺物」の可能性についても、入野遺跡に近い例を示す住居跡はあるものの、手捏土器等の他の祭祀遺物を伴う例は他の遺跡にも見られず、本遺跡のように石器としての使用痕を持つものが含まれる場合などは薄いと言えよう。群馬県鳥羽遺跡のⅠ10B号住居跡で見られるように、カマドから多くの礫が出土し「カマド祭祀」的な様相を示している例もあるが、いずれにしても特殊な出土状態を示さない限り祭祀に関する遺物と限定することは困難である。

考えうる可能性について検討したが、比較的重い使用痕不明の礫の用途・性格については依然不明である。しかし、最近の報告書の中には肥留間・柿沼両氏も指摘されたように礫についての詳しい観察を掲載する例も増え始め、今後はこれらをもとに地域・年代・出土状態・量目・使用痕等による分析がなされてゆけばいずれ解明され各々による用途・性格の違いも現れてくると思われる。

参　考　文　献

群馬県多野郡吉井町教育委員会　『入野遺跡』　1962
小林行雄　『続古代の技術』　塙書房　1964
埼玉県教育委員会　『埼玉の民俗』写真集　1967
長野県考古学会　『伊那・福島遺跡』　1968　大川　清
八王子市船田遺跡調査会　『船田』　1969　肥留間　博他
尾崎喜左雄　「群馬県入野遺跡」　『新版考古学講座』6　雄山閣　1970
埼玉県教育委員会　『上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ下田・諏訪』　1979
工藤員功　『暮らしの中の竹とわら』日本人の生活と文化6　ぎょうせい　1982
沼田市教育委員会・群馬県教育委員会・日本道路公団　『石墨遺跡』　1985　石北直樹他
群馬県教育委員会・㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　『島羽遺跡』　1986
門田正志　「宇和の俵作り」　『技術と民俗（下）』日本民俗文化大系14　小学館　1986
栃木県上三川町教育委員会　『薄市遺跡・大山遺跡』　1988
建設省・群馬県教育委員会・㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　『書上下吉祥寺遺跡・書上上原之城遺跡・上植木壱町田遺跡』　1988

遺構・遺物観察表

遺構・遺物観察表

遺構観察表

D区土坑一覧表

遺構名称	位置	平面形状	主軸方位	規模（単位cm）			備考
				長	幅	深度	
D区第1号土坑	20—D—39	楕円形	N—6°—E	93.0	56.0	19.0	中・近世。
D区第2号土坑	20—D—40	円形	N—0°—E	45.0	48.0	20.0	3号土坑と切り合う。
D区第3号土坑	20—D—40	円形	N—0°—E	58.0	59.0	18.0	2号土坑と切り合う。
D区第4号土坑	19—D—39	円形	N—6°—W	63.0	58.0	27.0	
D区第5号土坑	19—D—39	円形	N—0°—E	21.0	16.0	13.0	
D区第6号土坑	2—D—48	長方形	N—35°—W	81.0	32.0	26.0	
D区第7号土坑	25—D—51	不整円形	N—20°—W	156.0	119.0	39.0	
D区第8号土坑	24—D—50	円形	N—18°—W	95.0	94.0	28.0	
D区第9号土坑	23—D—48	円形	N—19°—W	107.0	106.0	37.0	
D区第10号土坑	23—D—45	不整形	N—43°—W	105.0	95.0	23.0	
D区第11号土坑	22—D—44	不整円形	N—11°—E	133.0	141.0	24.0	
D区第12号土坑	22—D—44	円形	N—26°—E	119.0	104.0	15.0	
D区第13号土坑	21—D—43	円形	N—8°—W	88.0	89.0	31.0	
D区第14号土坑	20—D—44	円形	N—22°—W	114.0	108.0	19.0	
D区第15号土坑	19—D—43	不整形	N—49°—E	90.0	132.0	36.0	遺物図169—1、1号溝を切る。
D区第16号土坑	20—D—44	楕円形	N—49°—E	76.0	76.0	53.0	1号溝を切る。
D区第17号土坑	21—D—42	円形	N—23°—E	94.0	111.0	30.0	
D区第18号土坑	21—D—41	円形	N—0°—E	48.0	56.0	20.0	
D区第19号土坑	21—D—41	楕円形	N—26°—W	40.0	40.0	19.0	
D区第20号土坑	21—D—42	円形	N—4°—E	76.0	65.0	19.0	遺物図169—2・3。
D区第21号土坑	20—D—42	円形	N—5°—E	119.0	114.0	29.0	
D区第22号土坑	20—D—41	円形	N—96°—W	94.0	100.0	24.0	
D区第23号土坑	19—D—42	円形	N—0°—E	93.0	85.0	23.0	
D区第24号土坑	19—D—42	楕円形	N—5°—W	107.0	78.0	36.0	1号溝を切る。
D区第25号土坑	19—D—43	円形	N—0°—E	80.0	89.0	33.0	1号溝を切る。
D区第26号土坑	18—D—43	円形	N—10°—W	88.0	78.0	15.0	
D区第27号土坑	18—D—43	円形	N—12°—W	85.0	75.0	28.0	遺物図169—4・5。
D区第28号土坑	18—D—42	不整円形	N—10°—E	68.0	55.0	19.0	
D区第29号土坑	17—D—42	楕円形	N—40°—E	70.0	123.0	23.0	遺物図169—6・7。
D区第30号土坑	17—D—43	不整円形	N—17°—W	45.0	38.0	28.0	
D区第31号土坑	17—D—41	円形	N—0°—E	41.0	37.0	39.0	
D区第32号土坑	16—D—42	円形	N—0°—E	27.0	32.0	37.0	
D区第33号土坑	16—D—41	不整円形	N—0°—E	84.0	85.0	23.0	
D区第34号土坑	16—D—40	円形	N—6°—E	99.0	96.0	14.0	
D区第35号土坑	16—D—41	不整形	N—8°—E	28.0	35.0	23.0	
D区第36号土坑	16—D—40	円形	N—40°—W	43.0	43.0	22.0	
D区第37号土坑	15—D—40	円形	N—0°—E	36.0	39.0	14.0	
D区第38号土坑	14—D—40	不整形	N—12°—W	88.0	85.0	25.0	
D区第39号土坑	14—D—40	円形	N—22°—E	125.0	(85.0)	21.0	5号住居との新旧関係は不明。
D区第40号土坑	14—D—39	不整形	N—22°—E	81.0	105.0	40.0	遺物図169—8・170—1。5号住居との新旧関係は不明。
D区第41号土坑	14—D—40	不整形	N—15°—W	90.0	95.0	19.0	
D区第42号土坑	12—D—39	楕円形	N—45°—W	163.0	114.0	34.0	遺物図170—2。

遺構観察表

D区第43号土坑	11—D—39	———	N—29°—W	730+α	——	——	
D区第44号土坑	8—D—38	楕円形	N—9°—E	134.0	68.0	44.0	
D区第45号土坑	10—D—52	円形	N—38°—E	62.0	61.0	24.0	
D区第46号土坑	16—D—57	円形	N—43°—W	61.0	61.0	17.0	47号土坑との新旧関係は不明。
D区第47号土坑	16—D—57	不整形	N—43°—W	122.0	47.0+α	15.0	46号土坑との新旧関係は不明。
D区第48号土坑	15—D—57	不整円形	N—11°—W	107.0	79.0	28.0	
D区第49号土坑	14—D—56	楕円形	N—27°—E	106.0	63.0	28.0	
D区第50号土坑	14—D—56	円形	N—31°—W	93.0	104.0	25.0	
D区第51号土坑	13—D—56	楕円形	N—45°—E	116.0	60.0	29.0	
D区第52号土坑	9—D—56	楕円形	N—4°—E	219.0	148.0	51.0	
D区第53号土坑	8—D—51	隅丸方形	N—0°—E	49.0	44.5	29.0	
D区第54号土坑	7—D—52	隅丸方形	N—6°—W	64.0	53.0	19.0	
D区第55号土坑	7—D—52	楕円形	N—12°—E	60.0	92.0	23.0	
D区第56号土坑	7—D—53	円形	N—47°—W	53.0	46.0	23.0	遺物図170—3。
D区第57号土坑	6—D—56	不整形	N—0°—E	109.0	112.0	42.0	
D区第58号土坑	5—D—56	不整形	N—0°—E	65.0	66.0	16.0	
D区第59号土坑	4—D—56	円形	N—4°—E	97.0	87.0	26.0	遺物図170—4。
D区第60号土坑	6—D—53	長方形	N—64°—E	144.0	64.0	28.0	
D区第61号土坑	5—D—53	楕円形	N—0°—E	103.0	59.0	26.0	
D区第62号土坑	5—D—50	円形	N—6°—E	85.0	75.0	28.0	
D区第63号土坑	5—D—49	楕円形	N—14°—E	98.0	141.0	29.0	遺物図170—5～170—8。
D区第64号土坑	2—D—49	不整円形	N—3°—W	164.0	169.0	44.0	
D区第65号土坑	3—D—48	不整円形	N—15°—E	130.0	105.0	68.0	遺物図170—9～170—12。
D区第66号土坑	5—D—42	円形	N—0°—E	71.0	78.0	30.0	
D区第67号土坑	4—D—42	楕円形	N—47°—E	140.0	111.0	41.0	遺物図170—13～170—17。
D区第68号土坑	4—D—42	円形か	N—0°—E	88.0	50.0+α	59.0	31号住居に切られる。
D区第69号土坑	4—D—41	不整形	N—0°—E	56.0+α	85.0+α	50.0	遺物図170—18。31号住居に切られる。
D区第70号土坑	4—D—41	円形か	N—0°—E	86.0+α	35.0+α	——	31号住居に切られる。
D区第71号土坑	2—D—42	不整円形	N—6°—E	101.0	91.0	28.0	
D区第72号土坑	4—D—39	隅丸長方形か	N—2°—E	177.0	85.0+α	51.0	
D区第73号土坑	4—D—39	隅丸長方形か	N—2°—E	183.0	103.0+α	56.0	遺物図170—19。18号住居を切る。
D区第74号土坑	18—D—41	楕円形	N—54°—E	29.0	19.0	24.0	
D区第75号土坑	18—D—40	隅丸方形	N—0°—E	39.0	41.0	22.0	遺物図170—20～22。
D区第76号土坑	18—D—40	隅丸方形	N—0°—E	35.0	33.0	25.0	遺物図171—1～6。
D区第77号土坑	25—D—56	隅丸長方形	N—56°—E	96.0	142.0	27.0	77・78号土坑を切る。
D区第78号土坑	25—D—57	楕円形	N—56°—E	92.0+α	118.0	24.0	77号土坑に切られる。
D区第79号土坑	25—D—56	楕円形	N—30°—W	119.0	79.0	24.0	77号土坑に切られる。
D区第80号土坑	28—D—55	長方形か	N—14°—E	19.4+α	106.0	——	
D区第81号土坑	28—D—54	円形	———	106.0	102.0	——	
D区第82号土坑	19—D—53	不整円形	———	34.0	30.0	——	
D区第83号土坑	27—D—55	円形	———	60.0	60.0	——	
D区第84号土坑	27—D—53	円形	———	22.0	22.0	——	
D区第85号土坑	27—D—53	不整形	———	24.0	30.0	——	
D区第86号土坑	27—D—53	隅丸方形	———	26.0	28.0	——	
D区第87号土坑	26—D—54	隅丸方形	———	32.0	28.0	——	
D区第88号土坑	19—D—53	円形	———	36.0	44.0	——	
D区第90号土坑	16—D—46	不整形	———	28.0	22.0	——	
D区第91号土坑	26—D—52	不整形	N—33°—E	84.0	103.0	25.0	
D区第92号土坑	25—D—52	円形	N—0°—E	79.0	81.0	16.0	
D区第93号土坑	25—D—53	円形	N—0°—E	70.0	62.0	18.0	
D区第94号土坑	18—D—47	円形	———	22.0	22.0	——	
D区第95号土坑	18—D—47	円形	———	24.0	24.0	——	

D区第96号土坑	18—D—47	円形	———	20.0	1.8	——	
D区第98号土坑	17—D—47	不整円形	———	38.0	27.0	——	
D区第99号土坑	17—D—47	楕円形	N—88°—W	22.0	36.0	——	
D区第100号土坑	D						遺物図170—7。
D区第101号土坑	18—D—48	不整円形	———	18.0	20.0	——	
D区第102号土坑	17—D—48	円形	———	16.0	22.0	——	
D区第103号土坑	17—D—48	円形	———	24.0	20.0	——	
D区第104号土坑	17—D—49	円形	———	28.0	30.0	——	
D区第105号土坑	16—D—48	円形	———	28.0	28.0	——	
D区第106号土坑	17—D—48	楕円形	N—53°—W	33.0	14.0	——	
D区第107号土坑	16—D—48	円形	———	24.0	26.0	——	
D区第108号土坑	16—D—47	円形	———	36.0	30.0	——	
D区第109号土坑	16—D—46	円形	———	30.0	26.0	——	
D区第110号土坑	15—D—46	円形	———	26.0	25.0	——	
D区第111号土坑	24—D—52	円形	N—0°—E	84.0	79.0	20.0	
D区第112号土坑	24—D—51	楕円形	N—4°—E	42.0	32.0	——	
D区第113号土坑	24—D—52	円形	N—0°—E	68.0	62.0	12.0	
D区第114号土坑	24—D—51	円形	———	42.0	40.0	——	
D区第115号土坑	24—D—51	円形	———	30.0	30.0	——	
D区第116号土坑	23—D—51	円形	———	34.0	30.0	——	
D区第117号土坑	23—D—51	楕円形	N—0°—E	71.0	88.0	16.0	
D区第118号土坑	23—D—52	円形	———	28.0	28.0	——	
D区第119号土坑	23—D—52	円形	———	32.0	30.0	——	
D区第120号土坑	23—D—52	円形	N—0°—E	67.0	87.0	15.0	
D区第121号土坑	23—D—51	円形	———	32.0	34.0	——	
D区第122号土坑	23—D—51	円形	———	44.0	42.0	——	
D区第123号土坑	23—D—51	楕円形	N—34°—W	34.0	30.0	——	
D区第124号土坑	23—D—52	隅丸方形	———	30.0	28.0	——	
D区第125号土坑	22—D—51	楕円形	N—30°—E	34.0	30.0	——	
D区第126号土坑	22—D—51	円形	N—0°—E	83.0	78.0	11.0	
D区第127号土坑	23—D—51	隅丸方形	———	30.0	30.0	——	
D区第128号土坑	16—D—45	円形	———	18.0	18.0	——	
D区第129号土坑	16—D—46	円形	———	30.0	32.0	——	
D区第130号土坑	20—D—52	円形	N—6°—E	94.0	97.0	13.0	
D区第131号土坑	19—D—52	円形	N—6°—E	62.0	66.0	13.5	
D区第132号土坑	19—D—52	隅丸方形	———	33.0	34.0	——	
D区第134号土坑	15—D—56	円形	———	54.0	51.0	——	
D区第135号土坑	14—D—57	円形	———	66.0	60.0	——	
D区第136号土坑	13—D—57	不整形	———	107.0	105.0＋α	——	
D区第137号土坑	13—D—56	円形	———	33.0	40.0	——	
D区第138号土坑	12—D—56	隅丸方形	———	24.0	30.0	——	
D区第139号土坑	9—D—56	楕円形	N—84°—W	24.0	34.0	——	
D区第140号土坑	9—D—55	楕円形	N—64°—W	30.0	38.0	——	
D区第141号土坑	9—D—55	楕円形	N—86°—W	20.0	17.0	——	
D区第142号土坑	9—D—55	隅丸方形	———	29.0	34.0	——	
D区第143号土坑	8—D—55	隅丸方形	———	37.0	43.0	——	
D区第144号土坑	D						
D区第145号土坑	13—D—55	不整形	———	58.0	54.0	——	
D区第146号土坑	13—D—55	隅丸長方形	N—33°—E	36.0	28.0	——	
D区第147号土坑	11—D—51	隅丸方形	N—0°—E	68.0	58.0	28.0	
D区第148号土坑	14—D—52	楕円形	N—85°—W	47.5	70.0	——	
D区第149号土坑	12—D—51	円形	N—0°—E	53.0	56.0	——	

D区第150号土坑	15—D—49	円形	N—7°—E	100.0	103.0	11.0	
D区第151号土坑	15—D—49	隅丸方形	N—20°—W	37.0	36.0	——	
D区第152号土坑	15—D—47	円形	N—8°—W	22.0	20.0	——	
D区第153号土坑	15—D—47	不整形	———	30.0	24.0	——	
D区第154号土坑	14—D—47	円形	———	40.0	40.0	——	
D区第155号土坑	14—D—47	不整円形	———	60.0	60.0	——	
D区第156号土坑	14—D—48	不整形	———	29.0	40.0	——	
D区第157号土坑	14—D—50	楕円形	N—4°—W	34.0	24.0	——	
D区第158号土坑	14—D—49	円形	———	30.0	28.0	——	
D区第159号土坑	13—D—48	円形	———	46.0	40.0	——	
D区第160号土坑	13—D—48	隅丸長方形	N—35°—E	46.0	50.0	——	
D区第161号土坑	13—D—48	円形	———	30.0	34.0	——	
D区第162号土坑	13—D—47	楕円形	N—80°—W	22.0	28.0	——	
D区第163号土坑	12—D—47	楕円形	N—80°—W	22.0	30.0	——	
D区第164号土坑	12—D—48	不整形	———	16.0	10.0	——	
D区第165号土坑	13—D—55	楕円形	N—7°—E	28.0	38.0	——	
D区第166号土坑	12—D—48	円形	———	32.0	28.0	——	
D区第169号土坑	12—D—47	不整形	———	26.0	38.0	——	
D区第170号土坑	12—D—47	円形	———	24.0	22.0	——	
D区第171号土坑	8—D—49	隅丸方形	———	24.0	26.0	——	
D区第172号土坑	12—D—46	楕円形	N—50°—E	47.0	28.0	——	
D区第173号土坑	8—D—48	円形	———	20.0	24.0	——	
D区第174号土坑	8—D—48	円形	———	20.0	20.0	——	
D区第175号土坑	8—D—47	楕円形	N—47°—E	56.0	27.0	——	
D区第176号土坑	8—D—47	円形	———	34.0	37.0	——	
D区第177号土坑	15—D—45	隅丸長方形	N—33°—W	47.0	27.0	——	178号と切り合うが新旧関係は不明。
D区第178号土坑	15—D—45	隅丸方形	———	38.0	38.0	——	177号と切り合うが新旧関係は不明。
D区第179号土坑	13—D—45	不整形	N—0°—E	64.0	45.0	18.0	
D区第180号土坑	13—D—45	円形	N—0°—E	27.0	36.0	20.5	
D区第181号土坑	1—D—55	円形	———	36.0	40.0	——	
D区第182号土坑	1—D—54	楕円形	N—92°—W	44.0	120.0	——	
D区第183号土坑	1—D—53	隅丸方形	———	80.0	63.0	——	
D区第184号土坑	8—D—47	円形	———	32.0	30.0	——	
D区第185号土坑	12—D—40	円形	———	60.0+α	70.0	——	
D区第186号土坑	12—D—40	円形か	———	60.0	52.0	——	
D区第187号土坑	11—D—45	円形	N—50°—W	32.0	38.0	14.0	
D区第188号土坑	10—D—46	円形	N—50°—W	82.0	77.0+α	13.0	189号土坑と切り合うが新旧関係は不明。
D区第189号土坑	10—D—45	円形	N—50°—W	66.0	65.0+α	18.0	188号土坑と切り合うが新旧関係は不明。
D区第190号土坑	12—D—40	不整形	———	60.0+α	60.0	——	
D区第191号土坑	9—D—45	円形	N—0°—E	86.0	78.0+α	13.0	192号土坑と切り合うが新旧関係は不明。
D区第192号土坑	9—D—45	円形	N—0°—E	49.0	45.0+α	90	192号土坑と切り合うが新旧関係は不明。
D区第193号土坑	3—D—50	円形	———	56.0	50.0	——	
D区第194号土坑	3—D—49	隅丸方形	———	38.0	47.0	——	
D区第195号土坑	1—D—42	不整形	N—0°—E	91.0	83.0	12.0	
D区第196号土坑	0—D—53	円形	———	32.0	31.0	——	
D区第197号土坑	0—D—53	楕円形	N—16°—W	39.0	31.0	——	
D区第198号土坑	1—D—41	不整形	N—0°—E	65.0	52.0	13.0	
D区第199号土坑	1—D—40	隅丸長方形か	N—0°—E	(79.0)	184.0	21.0	200号土坑と切り合うが新旧関係は不明。
D区第200号土坑	0—D—40	不整形	N—0°—E	157.0	82.0	21.0	199号土坑と切り合うが新旧関係は不明。
D区第201号土坑	4—D—50	隅丸方形	———	32.0	32.0	——	
D区第224号土坑	33—D—48	不整形	———	100.0	120.0	——	
D区第225号土坑	33—D—48	隅丸長方形	N—3°—W	130.0	80.0	——	

D区第226号土坑	29—D—38	不整円形	N—7°—E	49.0	55.0	13.0	切り合い関係なし。
D区第227号土坑	28—D—38	円形	N—11°—W	(56.0)	59.0	15.0	228号土坑に切られる。
D区第228号土坑	28—D—38	隅丸方形	N—11°—W	(53.0)	48.0	7.0	229・227号土坑を切る。
D区第229号土坑	28—D—38	隅丸方形	N—29°—E	50.0	41.0	6.0	遺物図170—8。228号土坑に切られる。
D区第230号土坑	27—D—38	不整形	N—3°—E	51.0	49.0	6.0	切り合い関係なし。
D区第231号土坑	29—D—39	円形	N—79°—E	(64.0)	70.0	17.0	232号土坑に切られる。
D区第232号土坑	30—D—40	不整形	N—79°—W	(83.0)	106.0	16.0	遺物図170—9・10。231号土坑を切り、233号土坑に切られる。
D区第233号土坑	29—D—40	隅丸方形か	N—79°—E	49.0	58.0	12.0	243・232号土坑を切る。
D区第234号土坑	29—D—40	不整形	N—79°—W	28.0	44.0	11.0	233・243号土坑を切る。
D区第235号土坑	30—D—41	円形か	N—36°—E	12.0+α	50.0	9.0	236号土坑に切られる。
D区第236号土坑	29—D—41	不整形	N—36°—E	49.0	83.0	13.0	遺物図170—11。235・237・243号土坑を切る。
D区第237号土坑	29—D—41	円形か	N—36°—E	(55.0)	67.0	15.0	236・238号土坑に切られる。
D区第238号土坑	29—D—41	不整円形	N—75°—W	66.0	72.0	16.0	237・239号土坑を切る。
D区第239号土坑	29—D—41	不整形	N—75°—W	22.0+α	41.0	4.0	238・243号土坑に切られる。
D区第240号土坑	29—D—40	隅丸方形	N—30°—W	44.0	46.0	12.0	234号土坑を切る。
D区第241号土坑	28—D—40	楕円形	N—23°—E	(71.0)	95.0	12.0	242号土坑に切られる。
D区第242号土坑	28—D—40	不整円形	N—23°—E	72.0	84.0	12.0	241号土坑を切る。
D区第243号土坑	29—D—40	不整形	N—79°—E	(62.0)	(90.0)	11.0	234・233・240・236号土坑に切られる。

C区土坑一覧表

遺構名称	位置	平面形状	主軸方位	規模（単位cm）			備考
				長	幅	深度	
C区第3号土坑	46—C—44	円形	N—0°—E	90.0	90.0	23.0	
C区第4号土坑	49—C—40	円形	N—0°—E	100.0	94.0	17.0	
C区第6号土坑	45—C—39	不整形	N—10°—E	102.0	232.0	42.0	遺物図171—12～14。
C区第8号土坑	43—C—37	不整形	N—2°—W	27.0	63.0	39.0	
C区第9号土坑	43—C—37	不整形	N—2°—W	540+α	89.0	35.0	
C区第10号土坑	43—C—37	隅丸方形か	N—2°—W	24.0+α	7.0+α	18.0	
C区第11号土坑	43—C—37	楕円形	N—3°—W	96.0	52.0	15.0	遺物図171—15。
C区第61号土坑	49—C—53	隅丸長方形	N—46°—W	173.0	122.0	20.0	
C区第62号土坑	47—C—54	楕円形	N—25°—W	91.0	134.0	10.0	
C区第63号土坑	46—C—53	楕円形	N—55°—W	96.0	78.0	8.0	
C区第64号土坑	45—C—52	楕円形か	N—21°—E	119.0	47+α	9.0	
C区第65号土坑	45—C—51	円形か	N—13°—W	105.0	45+α	8.0	
C区第66号土坑	46—C—44	不整形	N—0°—E	245.0	111.0	11.0	
C区第67号土坑	45—C—46	長方形	N—0°—E	91.0	51.0	24.0	
C区第68号土坑	46—C—41	円形	N—0°—W	83.0	100.0	12.0	
C区第70号土坑	44—C—44	不整形	N—7°—W	174.0	93.0	52.0	
C区第71号土坑	42—C—44	円形	N—12°—W	78.0	68.0	31.0	
C区第72号土坑	42—C—43	隅丸長方形	N—54°—W	103.0	58.0	19.0	
C区第73号土坑	41—C—45	不整形	N—0°—E	116.0	94.0	29.0	

遺物一覧表

D区第1号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
22－1 61	須恵器 埦	床直層 破片	口 15.1	赤褐色粒子 黒色粒子 微粒雲母 黒色鉱物粒子	酸化焔	内-黒 外-鈍橙	紐作り後轆轤整形(右回転)。内面暗文を施す。	
22－2 61	須恵器 埦	覆土内 破片	口 14.3 高 4.5 底 (7.8)	赤褐色粒子 白色鉱物粒子	中性焔	明褐灰	轆轤成形(右回転)、高台欠損(付高台)。	
22－3 61	土師器 甕	床直 ¼残存	口 19.0	〃	酸化焔	橙	口縁部は外反する。紐作り。外面胴部は篦削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篦撫で。	
22－4 61	須恵器 大甕	カマド内 破片	——	黒色鉱物粒子 白色鉱物粒子	還元焔	灰白	紐作り後轆轤整形。	
22－5 61	施釉陶器 緑釉埦	覆土内 破片	——	粗	良好	緑	轆轤成形(右回転)、高台欠損(付高台)。	
22－6 61	施釉陶器 緑釉皿	覆土内 破片	——	〃	〃	〃	〃	
22－7 61	石製品 石帯 (鉈尾)	掘り方内 破片	幅 3.68 長 2.8 厚 0.58	花崗岩類 はんれい岩 かこう岩	—	—	重さ14.7g。外面は水研き仕上げ。裏面は磨き整形。	
22－8 61	石製品 砥石頁岩	覆土内 破片	重 5.3	(珪質頁岩に近い)	—	—	研面は非常に平滑で、比較的硬い砥石。	
22－9 61 瓦－105	瓦 宇瓦	覆土内 細片	厚 1.5	半透明鉱物粒子	還元焔	暗灰	曲線顎。瓦当意匠は不明。 瓦当部、顎部に赤色顔料を塗彩。	吉井系
22－10 61	瓦 女瓦	覆土内 ¼残存	厚 2.1	赤褐色鉱物粒子 白色鉱物粒子	中性焔か	鈍橙	一枚造り。凸面縄叩き。	笠懸系

D区第2号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
23－1 61	須恵器 坏	傍竈坑 破片	口 12.0	砂粒多 赤褐色粒子	酸化焔	浅黄橙	轆轤成形(右回転)。	
23－2 61	須恵器 坏	覆土内 ⅓残存	口 12.0 底 6.0 高 3.7	〃	〃	〃	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。	
23－3 61	須恵器 埦	覆土内 ほぼ完形	口 13.0 底 6.8 高 4.4	微粒雲母多 赤褐色粒子	〃	鈍黄橙	轆轤成形(右回転)、付高台。	
23－4 61	須恵器 埦	傍竈坑 ½残存	口 13.5 底 7.0 高 4.5	白色粒子	〃	〃	〃	
23－5 61	須恵器 甕	覆土内 破片	口 14.2	〃	〃	橙	口縁部は外反する。紐作り後轆轤整形(右回転)。胴部下半篦削り。	
23－6 61	須恵器 甕	床直層 破片	口 18.0	黒色鉱物粒子 細粒円礫	〃	浅橙	口縁部は外反する。紐作り後轆轤整形(右回転)胴部下半・底部は篦削り。	
23－7 61	鉄製品 刀子	覆土内 切先部残存	重 (4.1)	——	—	—	使用に伴う研減りがみられる。	
24－1 61	須恵器 羽釜	カマド内 破片	口 20.6	細粒雲母 白色鉱物粒子	酸化焔 気味	鈍黄橙	口縁部は直立する。紐作り後轆轤整形(右回転)。鍔は貼り付け。	
24－2 61	施釉陶器 灰釉瓶	掘り方内 破片	底 15.2	粗	還元焔	褐灰	紐作り後轆轤整形(右回転)。高台は付高台。 内側底面に灰釉が多い。	
24－3 61	施釉磁器 白磁碗	床直	口 16.1	——	良好	露胎は 乳白色	轆轤成形(右回転)。口唇部は玉縁。 化粧土を施こす。	

24—4 61 瓦—106	瓦 宇　瓦	カマド内 ⅓残存	厚　1.6	白色粒子	還元焔 気味	橙褐	内区・右扁行唐草文。外区・殊点文を配す。布目撫で消し。凸面篦撫で。側部面取り3回。	笠懸系
24—5 61 瓦—107	瓦 宇　瓦	カマド右袖 ¼　残存	厚　2.5	白色粒子多量	還元焔	〃	4と同笵。凸面は叩き整形。凹面布目擦り消し有。凹面布合せ目痕。	〃
24—6 61 瓦—2	瓦 男　瓦	カマド内 破片	厚　1.9	白色鉱物粒子 凝灰岩粒	不詳 （二次 焼成）	橙	半截作り。篦描き文字瓦「半読不能」（凸面）。凸面縄叩き（密）後、轆轤撫で凹面粘土板剝ぎ取り痕。	〃
24—7 61	鉄製品 不　詳	覆土内 破片	重　(5.8)	——	—	—	断面円形気味。錆化顕著。	
24—8 61	鉄製品 不　詳	覆土内	重　(7.4)	——	—	—	先端部が平偏に仕上げられている。鑿状のものか。錆化顕著。	

D区第3号住居跡

挿図番号 図版番号	種　別 器　種	出土位置 遺存状態	度目　(cm) 量目　(g)	胎　土	焼　成	色　調	器形・技法等の特徴	備　考
26—1 62	土師器 坏	カマド内 ½残存	口　10.8 底　3.9 高　3.3	赤褐色粒子 凝灰岩粒	酸化焔	橙	轆轤成形（右回転）、底部は回転糸切り。	
26—2 62	須恵器 坏	覆土内 完形	口　11.3 底　6.0 高　3.3	小角礫粒多	還元焔	灰白	轆轤成形（右回転）、底部は回転糸切り。内底面は胎土の仕込みが不良で絞胎状を呈す。	
26—3 62	須恵器 埦	床直 ⅔残存	口　14.0 底　8.0 高　5.3	白色鉱物粒子 細砂粒多	〃	灰	轆轤成形（右回転）、付高台。高台の作りが厚い。	
26—4 62 瓦—3	瓦 女　瓦	覆土内 ¾残存	長　37.3 厚　2.7	白色鉱物粒子	〃	暗灰	一枚造り。篦描き文字瓦「成」（凹面）。	吉井系

D区第4号住居跡

挿図番号 図版番号	種　別 器　種	出土位置 遺存状態	度目　(cm) 量目　(g)	胎　土	焼　成	色　調	器形・技法等の特徴	備　考
27—1 62	須恵器 坏	床直層 完形	口　12.0 底　6.2 高　3.7	小角礫多	還元焔	灰	轆轤成形（右回転）、底部は回転糸切り。外面篦状工具を用い整形。	
27—2 62	須恵器 埦	床直 破片	口　16.0	〃	〃	鈍黄橙	轆轤成形（右回転）、高台欠損（付高台）。	
27—3 62	施釉陶器 灰釉埦	覆土内 破片	底　8.3	粗	良好	灰白	轆轤成形（右回転）、付高台。内底面磨滅。	

D区第5号住居跡

挿図番号 図版番号	種　別 器　種	出土位置 遺存状態	度目　(cm) 量目　(g)	胎　土	焼　成	色　調	器形・技法等の特徴	備　考
28—1 62	須恵器 坏	床直層 ⅗残存	口　9.4 底　5.0 高　2.4	白色粒子多	中性焔	灰白	轆轤成形（右回転）、底部は回転糸切り。	
28—2 62	鉄製品 小　刀	床面直上 鋒先及び 茎端欠損	重　(56.1)	——	—	—	錆化が顕著であるが、研ぎ減りによる鎬筋が認められる。焼き入れは先端中央寄り。棟は丸味を帯びる。	

D区第6号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
29—1 62	土師質土器 皿	P_5 ほぼ完形	口 8.3 底 4.6 高 1.6	赤褐色粒子 微粒砂	酸化焔	浅黄橙	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。	
29—2 62	土師器 土釜	床直層 破片	口 (22.0)	小角礫 シルト粒	酸化焔	赤褐	口縁部は外反する。紐作り後篦撫で整形。外面撫で整形(縦)。内面横撫で。	
30—1 62	土師器 土釜	カマド左袖 破片	口 26.0	黒色鉱物粒子多 小角礫	〃	鈍橙	口縁部は外反する。紐作り後篦撫で整形。内面は横撫で。	
30—2 62	須恵器 羽釜	床直 破片	口 (26.0)	黒色鉱物粒子 乳白色鉱物粒子	〃	鈍黄	口縁部は内湾する。紐作り後轆轤整形(右回転)。鍔は貼り付け。	
30—3 62	須恵器 壺	床直層	底 13.2	白礫及び円礫	還元焔	灰	紐作り後轆轤整形(右回転)。	
30—4 62 瓦—4	瓦 男瓦	掘り方内 P_6内破片	厚 1.7	白色鉱物粒子 赤褐色粒子	不詳 (二次焼成)	鈍黄橙	半截作り。篦描き文字瓦「田」(凹面)。凸面篦削り後叩き整形。側部面取り2回。	笠懸系
30—5 62 瓦—5	瓦 女瓦	カマド 破片	厚 1.6	白色鉱物粒子	還元焔	灰白	桶巻き造り。篦描き文字瓦「子」(凸面)。	吉井系
31—1 62	瓦 女瓦	床直層 ⅓残存	狭 24.5 厚 2.8	黒色粒子	〃	〃	一枚造り。模骨痕有。側部面取り2回凹面側部に〝バリ〟が認められる。凸面縄叩き(密)。	秋間系か乗附系31—2と同種
31—2 62	瓦 女瓦	床直層 細片	厚 2.1	〃	〃	〃	一枚造り。側部面取り2回。凸面離砂痕。	秋間系 31—1と同種
31—3 62	瓦 女瓦	床直層 〃	厚 1.6	白色粒子 黒色粒子	〃	白灰	一枚造り。凹面粘土板剝ぎ取り痕。凸面撫で側部面取り2回、端部面取り2回。	乗附系
31—4 62	瓦 女瓦	床直層 〃	厚 1.7	白色鉱物粒子	中性焔	浅黄橙	一枚造りか。模骨痕有。凸面縄叩き(密)後撫で。	吉井系

D区第7号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
33—1 62	須恵器 埦	床直層 破片	口 17.9 底 8.1 高 6.3	シルト質多	還元焔	灰白	轆轤成形(右回転)、付高台。	
33—2 62	施釉陶器 緑釉埦	覆土内 破片	——	密	良好	露胎乳白色 釉調緑	轆轤成形(右回転)。 体部下半から底部回転篦削り。	
33—3 63	土師器 甕	床直層 ⅓残存	口 20.0	砂粒	酸化焔	鈍橙	「コ」の字状口縁。紐作り、外面胴部は篦削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篦撫で。	
33—4 63	瓦 女瓦	床直 破片	厚 1.8	白色粒子	還元焔	灰白	模骨痕有、樋巻き造り。(一枚造りか。)凹面粘土板剝ぎ取り痕。凸面縄叩き密。端部側、横撫で(轆轤撫で)側部面取り3回。	乗附系
33—5 63	瓦 女瓦	覆土内 〃	厚 2.0	赤褐色粒子 シルト粒	〃	灰	模骨痕有、樋巻き造り。(一枚造りか。)凹面粘土板剝ぎ取り痕。凸面縄叩き側部面取り2回端部面取り3回。	〃
33—6 62	鉄製品 不詳	覆土内 〃	重 (30.8)	——	—	—	薄い板状である。錆化が顕著。	
33—7 62	鉄製品 釘?	覆土内 〃	重 (4.4)	——	—	—	錆化が著しい。断面は長方形を呈す。	

D区第8号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
35—1 63	須恵器 坏	傍竈坑 ½残存	口 12.0 底 7.0 高 3.6	黒色鉱物粒子	酸化焔	橙	型作り(女型)底部及び体部下半まで粘土板で、体部上半から、口縁部粘土紐。	
35—2 63	須恵器 埦	床直層 ⅓残存	口 14.0 底 8.6 高 5.0	微粒砂(シルト)多	〃	浅黄橙	轆轤成形(右回転)、付高台。	
35—3 63 瓦—109	瓦 宇瓦	床直層 細片	厚 2.5	黒色粒子 白色鉱物粒子	還元焔	灰白	模骨痕有。(一枚造りか。)瓦当意匠は、篦描き重弧。瓦当周辺及び側部撫で仕上げ。	藤岡系
35—4 63	瓦 女瓦	覆土内 破片	厚 2.4	白色粒子多	酸化焔 (二次焼成か)	鈍橙	紐作り。凸面斜格子叩き密。凹面縦位の撫で(布目擦り消し。)側部面取り2回。	不詳

D区第9号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
36—1 63	須恵器 坏	覆土内 ⅓残存	口 13.0	透明鉱物粒 赤褐色粒子	酸化焔	鈍赤褐	轆轤成形(右回転)。	
36—2 63	須恵器 埦	傍竈坑 ½残存	口 13.1 底 7.0 高 4.5	半透明鉱物粒 赤褐色粒子	〃	浅黄橙	轆轤成形(右回転)、付高台。内・外面焼成後の被熱による燻り。	
36—3 63	施釉陶器 灰釉埦	傍竈坑 ¼残存	口 16.0 底 8.0 高 4.6	密	良好	灰	轆轤成形(右回転)、付高台。施釉は浸掛か。	
38—1 63	須恵器 羽釜	カマド袖 ⅓残存	口 19.8	シルト質多	中性焔	鈍黄橙	口縁部は内湾する。紐作り後轆轤整形(右回転)。鍔は貼り付け、胴部下半・底部は篦削り。	
38—2 63	須恵器 羽釜	カマド内 破片	口 20.0	〃	還元焔 気味	灰白	口縁部は内傾する。紐作り後轆轤整形(右回転)。鍔は貼り付け、胴部下半・底部は篦削り。	
38—3 63 瓦—110	瓦 宇瓦	カマド内 ⅓残存	厚 2.2	白色粒子多	中性焔	鈍黄橙	右扁行唐草文。外区に点文を配す。凹面布目撫り消し後撫で、内黒。粘土板剝ぎ取り痕。凸面篦撫で後縄叩き。側部面取り2回。	笠懸系 創建意匠
38—4 63	瓦 男瓦	傍竈坑 細片	厚 1.6	白色鉱物粒子	酸化焔	浅黄橙	紐作り後轆轤整形。内面布仕用の痕跡なし。端部面取り3回。	吉井系
39—1 64	瓦 女瓦	覆土内 ½残存	狭 (21.3) 厚 1.8	黒色粒子	還元焔	暗灰色	一枚造り。凹面布合せ目痕。凸面縄叩き密。(縦位の主とし狭端部縁辺に横位に施す。)凸面離砂痕。側部・端部面取り2回。	乗附系か 秋間系
39—2 64	瓦 女瓦	覆土内 〃	厚 3.0	白色鉱物粒子 多量	〃	灰褐色	一枚造り。凹面粘土板剝ぎ取り痕。凸面撫で。側部面取り3回。端部面取り2回。	吉井系

D区第10号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
41—1 64	須恵器 壺	カマド煙道 圧壁½残存	底 8.9	白色粒子	還元焔	灰白	紐作り後轆轤整形(右回転)。底部周辺篦削り高台は付高台。	
41—2 64	土師器 土釜	覆土内 破片	口 22.0	〃	酸化焔	鈍黄橙	口縁部は外反する。紐作り。外面胴部は篦削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篦撫で。	
41—3 64	須恵器 羽釜	カマド内 破片	口 25.2	砂粒多	〃	橙	口縁部は直立する。紐作り後轆轤整形(右回転)。鍔は貼り付け。	
41—4 64	鉄製品 刀子	床直層 完存	重 (16.0)	——	—	—	刀身長(8.0cm)茎長(5.3cm)重ね(0.4cm)仕用に伴う研ぎ減りが著しい。鍛造は通有。	
41—5 64	鉄製品 刀子	床直層 破片	重 (12.0)	——	—	—	鋒欠損し、遺存不良、重ね(0.4cm)。	
41—6 64	鉄製品 不詳	覆土内 〃	重 (15.1)	——	—	—	くびれを有し、舌状を呈する。片面先端突帯を認める。重ね(0.3cm)。	

41－7 64	鉄製品 釘	覆土内 ½残存	重　(13.1)	——	—	—	断面長方形気味、一辺(0.45cm)。	
41－8 64	鉄製品 釘	覆土内 〃	重　(6.8)	——	—	—	断面長方形気味、一辺(0.65cm)。	
41－9 64 瓦－93	瓦 鐙瓦	カマド内 細片	厚　2.3	白色鉱物粒子 多	還元焔	灰	単弁5葉蓮華文。中房の子葉は1＋5。外区に左偏行唐草文を施す。瓦当接合部は印籠付。	吉井系
41－10 64 瓦－112	瓦 宇瓦	覆土内 細片	厚　3.2	黒色粒子	〃	灰	抽象文の瓦当意匠。瓦当接合部は印籠付。顎は段顎。	笠懸系
41－11 64 瓦－7	瓦 女瓦	覆土内 破片	厚　2.95	白色鉱物粒子 凝灰岩粒	酸化焔	橙色	一枚造り。刻印文字瓦「判読不能」(凸面)。凸面撫で、側部面取り3回、端部面取り2回。	吉井系
41－12 64	瓦 男瓦	覆土内 ⅓残存	厚　0.8	白色鉱物粒子	還元焔	灰白	半截作り。凸面轆轤撫で。	吉井系
41－13 64 瓦－8	瓦 男瓦	カマド右袖 破片	厚　2.0	白色鉱物粒子 多	〃	灰褐	半截作り。円管刺突。側部面取り3回。	〃
42－1 64	瓦 玉縁付 男瓦	カマド燃焼部右壁・右袖(改築前)一部欠損	広　17.8 狭　(17.3) 長　39.8	白色鉱物粒子 黒色粒子	〃	灰	半截作り。凸面縄叩き後轆轤撫で。凹面布合せ目痕3ヶ所側部面取り3回。端部面取り3回。	乗附系玉縁幅(14.5)厚2.0
42－2 64	瓦 男瓦	カマド左袖 ⅔残存	厚　2.0	白色鉱物粒子	酸化焔 (二次焼成か)	橙	半截作り。凸面荒い篦整形。内外面共にイテハゼが著しい。側部面取り2回、端部面取り2回。	〃
42－3 65	瓦 玉縁付 男瓦	覆土内 ⅔残存	厚　1.8	白色鉱物粒子 黒色粒子	還元焔	灰褐	凸面轆轤成形後縄叩き密。さらに下半部を轆轤撫でを施す。側部面取り2回。	〃
43－1 65 瓦－9 瓦－111	瓦 宇瓦	カマド 煙道天井 ⅓残存	広　28.4 厚　2.2	白色鉱物粒子	不詳 (二次焼成)	鈍黄橙	右扁行唐草文。外区は素文。反が強い。顎は段顎。篦描き文字瓦「王」(凸面)。凸面撫で。女瓦部一枚造りか。側部面取り2回。	吉井系
43－2 65 瓦－10	瓦 男瓦	カマド 焚口天井 ほぼ完形	広　(19.8) 狭　(14.6) 長　38.9	〃	酸化焔 気味	橙灰	半截作り。篦描き文字瓦「人」(凸面)。凸面撫で整形。凸面に篦傷状のものが3ヶ所認められる。側部面取り2回。	〃
43－3 64 瓦－11	瓦 女瓦	カマド内 細片	厚　2.4	〃	還元焔	灰褐	一枚造りか。篦描き文字瓦「判読不能」(凸面)。凸面強い篦撫で整形。	〃
43－4 65	瓦 熨斗瓦か 女瓦	覆土内 細片	厚　2.5	〃	〃	灰白	一枚造りか。凹面粘土板剝ぎ取り痕。側部の突く通有の女瓦とは異なる。側部面取り2回。	〃
43－5 65	瓦 女瓦	覆土内 細片	厚　2.0	黒色粒子 白色粒子	〃	灰	一枚造りか。端部面取り1回。ハゼが認められる。	乗附系
44－1 65	瓦 男瓦	カマド右袖 ⅓残存	幅　17.9 厚　1.2	白色鉱物粒子	〃	暗褐	半截作り。凸面縄叩き(密)後轆轤撫で。側部面取り3回。	吉井系
44－2 65	瓦 女瓦	カマド内 ¾残存	長　41.0 厚　2.2	白色鉱物粒子 多	〃	暗灰	一枚造りか。凸面撫で整形。側部面取り3回、端部面取り2回。	〃
44－3 65	瓦 女瓦	覆土内 破片	厚　2.6	白色鉱物粒子	酸化焔 か(二次焼成)	橙	桶巻き造りか。模骨痕有。凸面縄叩き(密)後撫で整形。凹面布目擦り消し有。側部面取り2回、端部面取り2回。	〃
44－4 66	瓦 女瓦	覆土内 〃	厚　2.1	〃	中性焔	浅黄橙	一枚造り。凹面粘土板剝ぎ取り痕。凸面叩き整形。側部面取り3回、端部面取り2回。	〃
45－1 65	瓦 女瓦	カマド内 ⅓残存	厚　3.3	白色鉱物粒子	中性焔 還元気味	暗灰褐	一枚造りか。模骨痕有。凸面篦撫で。側部面取り3回、端部面取り2回。	〃
45－2 66	瓦 男瓦	カマド内 破片	厚　2.1	白色鉱物粒子 凝灰岩粒	還元焔	暗灰	半截作り。凸面撫で整形。側部面取り2回。	〃
45－3 66	瓦 女瓦	覆土内 細片	厚　2.2	赤褐色粒子 シルト粗粒子	不詳 (二次焼成)	鈍橙	一枚造り。凹面粘土板剝ぎ取り痕。凸面縄叩き(密)。凸面離砂痕。	秋間系

D区第11号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目（cm） 量目（g）	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
46—1 66	土師質土器 皿	覆土内 ほぼ完形	口 8.2 底 4.6 高 1.5	細砂粒 赤褐色粒子	酸化焔	鈍黄	轆轤成形(左回転)、底部は回転糸切り。	
46—2 66	須恵器 坏	覆土内 ほぼ完形	口 12.4 底 5.4 高 4.0	黒色粒子 白色粒子	還元焔	灰	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。	
46—3 66	須恵器 坏	傍竈坑 ⅓残存	口 12.4 底 5.8 高 3.9	砂粒多	中性焔	灰白	〃	
46—4 66	須恵器 坏	覆土内 ほぼ完形	口 13.0 底 6.0 高 3.6	細砂粒 黒色鉱物粒子	〃	灰	〃	
47—1 66	須恵器 坏	覆土内 ⅓残存	口 13.2 底 5.6 高 3.7	白色鉱物粒子	還元焔	〃	〃	
47—2 66	須恵器 坏	カマド内 ⅓残存	口 13.4 底 6.2 高 4.0	シルト質強	〃	灰白	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。内外面焼成後の被熱により爛れている。	
47—3 66	須恵器 坏	覆土内 ほぼ完形	口 13.8 底 5.6 高 4.3	白色粒子	〃	灰	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。	
47—4 66	須恵器 埦	覆土内 ½残存	口 14.0 底 (6.0)	微粒砂	酸化焔 還元気味	鈍灰	轆轤成形(右回転)、高台欠損(付高台)。	
47—5 66	須恵器 埦	覆土内 ⅓残存	口 14.0 底 6.0 高 5.5	〃	中性焔 中性気味	灰黄	〃	
47—6 66	須恵器 埦	覆土内 完形	口 14.1 底 6.6 高 4.8	シルト質	還元焔	〃	轆轤成形(右回転)、付高台。	
47—7 66	須恵器 埦	カマド内 覆土内 ⅓残存	口 14.2 底 6.6 高 4.5	白色粒子 シルト質	酸化焔	鈍橙	〃	
47—8 66	土師器 甕	カマド内 ¼残存	口 11.0	赤褐色粒子 微粒雲母	〃	鈍黄褐	「コ」の字状口縁。紐作り、外面胴部は篦削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篦撫で。	
47—9 66	土師器 甕	カマド右袖 破片	口 16.4	〃	〃	黄	〃	
48—1 66	土師器 甕	床直 破片	口 18.0	赤褐色粒子 微粒雲母 黒色鉱物粒子	〃	鈍黄	〃	
48—2 66	土師器 甕	〃	口 18.0	〃	〃	黄	〃	
48—3 66	土師器 甕	〃	口 19.0	〃	〃	橙	〃	
48—4 66	土師器 甕	床直 破片	口 20.0	〃	〃	黄	〃	
48—5 66	土師器 甕	〃	口 21.3	赤褐色粒子 黒色鉱物粒子	〃	〃	〃	
48—6 66	土師器 甕	〃	口 21.0	赤褐色粒子 微粒雲母	〃	橙	〃	
48—7 66	須恵器 広口壺	〃	口 20.0	赤褐色粒子	中性焔	鈍黄	紐作り後轆轤整形(右回転)。	
48—8 66	須恵器 羽釜	カマド内 ⅔残存	口 20.2 底 7.0 高 27.0	赤褐色粒子 白色鉱物粒子	〃	鈍橙	口縁部は内湾する。紐作り後轆轤整形(右回転)。鍔は貼り付け、胴部下半・底部は篦削り。体部下半篦撫で。	
48—9 66	瓦 宇瓦	覆土内 破片	厚 1.8	白色粒子	還元焔 気味	灰黄褐	一枚造り。瓦当意匠不明。	吉井系

48—10	瓦 玉縁付 男瓦	覆土内 〃	厚 1.3	シルト質	還元焰	灰白	半截作り。凸面縄叩き後轆轤成形。側部面取り2回。	秋間系
48—11 67 瓦—12	瓦 女瓦	カマド右袖 ⅓残存	厚 2.6	白色粒子 赤褐色粒子	還元焰 気味	灰黄褐	一枚造り。篦描き文字瓦「人」(凸面)。側部面取り2回。凸面撫で整形。	吉井系
49—1 67	瓦 女瓦	カマド左袖 ⅓残存	厚 1.5	シルト質強	還元焰	白黄灰	一枚造り。模骨痕有。横面に粘土いり有。凸面縄叩き(密)凸面離砂痕。側部面取り2回。	秋間系
49—2 67	瓦 女瓦	〃	厚 2.0	白色鉱物粒子 凝灰岩粒	〃	暗灰	一枚造り。凸面撫で整形。側部面取り3回、端部面取り2回。	吉井系

D区第12号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
50—1 67	土師質土器 坏	覆土内 ½残存	口 8.0 底 4.7 高 1.7	赤褐色粒子 細砂粒	酸化焰	浅黄橙	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。	
50—2 67	土師質土器 埦	覆土内 ¼欠損	口 14.0 底 (6.4)	黒色鉱物粒子 シルト粗粒	〃	鈍黄橙	型作り後(女型)轆轤整形(右回転)。高台欠損(付高台)。	
50—3 67	土師質土器 埦	(支脚) ½残存	口 14.5	白色粒子 赤褐色粒子 黒色鉱物粒子	〃	灰白	轆轤成形(右回転)。高台欠損(付高台)。	
50—4 67	土師器 土釜	カマド内 破片	口 24.5	砂粒多 小角礫細砂粒 黒色鉱物粒子	〃	橙	口縁部は外傾する。紐作り後篦撫で整形。	
50—5 67	土師器 土釜	カマド左袖 破片	口 26.4	細砂粒 黒色鉱物粒子	〃	鈍橙	口縁部は外反する。紐作り後篦撫で整形。	
52—1 67	土師器 土釜	カマド内 破片	口 28.5	細砂粒 小角礫	〃	赤褐 赤黒	口縁部は外傾する。紐作り後篦撫で整形。	
52—2 67	土師器 土釜	カマド内 ¼残存	口 28.7	〃	〃	暗赤褐 橙	口縁部は外反する。紐作り後篦撫で整形。	
52—3 67	須恵器 大甕	覆土内 破片	——	黒色粒子 シルト質	還元焰	灰白	紐作り。叩き整形(外面平行叩き・内面宛具は青海波文)後轆轤再整形。	
52—4 67	須恵器 羽釜	カマド左袖 破片	口 21.4	小角礫	〃	鈍褐	口縁部は内湾する。紐作り後轆轤整形(右回転)。鍔は貼り付け。有機質付着。	
52—5 67	鉄製品 釘?	覆土内 両端欠損	重 (10.2)	——	—	—	断面は長方形を呈す。釘の可能性が強い。	
52—6 67	鉄製品 釘?	覆土内 破片	重 (2.8)	——	—	—	〃	
53—1 67	瓦 女瓦	覆土内 ⅓残存	長 (37.0) 厚 2.1	白色鉱物粒子 多	還元焰	暗灰	一枚造り。凸面撫で整形。側部面取り3回、端部面取り2回。	吉井系
53—2 68	瓦 男瓦	カマド右袖 ⅓残存	厚 2.0	黒色粒子 白色粒子多	〃	灰	半截作り。凹面布合せ目痕3ヶ所。側部面取り1回、端部面取り2回。凸面撫で整形。	〃
53—3 68	瓦 男瓦	カマド左袖 ⅓残存	狭 (14.5) 幅 16.4 厚 2.3	白色鉱物粒子	還元焰	暗灰	半截作り。凸面撫で整形。側部面取り3回、端部面取り2回。	乗附系 53—4と同一個体?
53—4 67	瓦 男瓦	床直層 破片	厚 1.5	〃	〃	〃	〃	〃 53—3と同一個体?
53—5 68	瓦 玉縁付 男瓦	床直層 ¼残存	厚 2.4	白色鉱物粒子 赤褐色粒子	還元焰	灰黄褐	半截作り。凸面縄叩き後轆轤撫で。玉縁部に指頭幅大の凹帯を施す。側部面取り3回。	藤岡系

D区第13号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
54—1 68	鉄製品 不詳	覆土内 破片	重 (27.8)	——	—	—	錆化が著しい。工具ではなく、飾り金具でもない。金具等のものか。	

D区第14号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目（cm） 量目（g）	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
55—1 68	土師質土器 坏	覆土内 破片	口 10.0	黒色鉱物粒子 シルト質	酸化焔	灰白	轆轤成形(右回転)。	
55—2 68	土師質土器 埦	カマド内 破片	口 13.4	黒色鉱物粒子	〃	鈍黄橙	轆轤成形(右回転)、高台欠損(付高台)。	
55—3 68	土師質土器 坏	床直層 破片	口 15.0 底 (8.0) 高 3.3	細粒砂 シルト質	〃	〃	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。	
56—1 68	土師器 土釜	〃	口 19.0	赤褐色粒子 凝灰岩砂粒	〃	鈍赤褐	口縁部は直立する。紐作り後篦撫で整形。	
56—2 68	土師器 土釜	〃	口 19.4	〃	〃	〃	口縁部は内湾する。紐作り後篦撫で整形。	
56—3 68	鉄製品 釘？	覆土内	重 (2.16)	——	—	—	断面は正方形を呈す。錆化顕著。	
56—4 68	鉄製品 釘	覆土内 ½残存	重 (25.3)	——	—	—	〃	
56—5 68	鉄製品 鎌	床直層 完存	重 (69.1)	——	—	—	鍛造は良好。使用に伴う研ぎ減りが認められる。着装部に木質残存。	
56—6 68	瓦 女瓦	底面 ⅓残存	厚 2.4	白色粒子	不明 （二次焼成）	黄橙	一枚造り。凹面粘土板剝ぎ取り痕。凸面撫で整形。側部面取り2回、端部面取り2回。	
56—7	金銅製品 飾り金具	覆土内 断片	重 (5.5)	——	—	—	仏壇に伴う、飾り金具か。もしくは仏像等の飾り金具か。	

D区第15号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目（cm） 量目（g）	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
57—1 68	土師質土器 坏	床直層 ほぼ完形	口 9.0 底 6.4 高 2.1	細粒砂 シルト質	中性焔	灰褐	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。	
57—2 68	土師質土器 埦	床直層 口縁¼高 台½欠損	口 15.3 底 7.6 高 5.3	白色鉱物粒子	酸化焔	鈍橙	轆轤成形(右回転)、付高台。	
57—3 68	土師器 土釜	覆土内 ⅛残存	口 22.0	細砂粒多	〃	鈍黄橙	口縁部は外反する。紐作り後篦撫で整形。	
58—1 68	土師器 土釜	カマド左袖 破片	口 26.2	細粒砂	〃	鈍赤褐	〃	
58—2 68	土師器 羽釜	床直層 口縁⅓欠損 破片	口 21.0	〃	〃	橙褐灰	口縁部は内湾する。紐作り後轆轤整形(右回転)。鍔は貼り付け。	
58—3 68	土師器 土釜	カマド内 破片	底 10.8	白色鉱物粒子	〃	暗赤褐	紐作り後篦撫で整形。底部離砂痕有。	
58—4 68	土師器 土釜	床直層	底 10.8	円礫多	〃	〃	紐作り後篦撫で整形。	
58—5 68	土師器 土釜	掘り方内 破片	底 9.8	砂粒多	〃	黒褐	紐作り後篦撫で整形。底部離砂痕有。	
59—1 68	須恵器 羽釜	カマド内 破片	口 23.2	〃	〃	橙	口縁部は直立し、口唇部は、内傾している。紐作り後轆轤整形(右回転)。鍔は貼り付け。	
59—2 69	須恵器 羽釜	カマド左袖 破片	口 27.4	〃	〃	橙	口縁部は内湾する。紐作り後轆轤整形(右回転)。鍔は貼り付け。	
59—3 68	須恵器 羽釜	床直 破片	口 28.9	細粒砂多	〃	鈍赤褐	口縁部は外反する。紐作り後轆轤整形(右回転)。鍔は貼り付け。	
59—4 69	須恵器 大甕	〃	——	黒色粒子	還元焔	鈍黄褐	紐作り。叩き整形(外面平行叩き・内面宛具は青海波文)後轆轤再整形。	乗附系
59—5 69	施釉陶器 灰釉埦	カマド左袖 破片	口 14.0	密	良好	灰	轆轤成形(右回転)。高台欠損。施釉は浸掛。	

59－6 69 瓦－94	瓦 鐙　瓦	カマド内 細片	厚　2.3	白色鉱物粒子	還元焔	暗灰色	瓦当意匠不詳。折り曲げ技法。男瓦部は、凸面撫で整形。側部面取り２回。	吉井系 59－7、 125－2と 同一個体
59－7 69	瓦 男　瓦	カマド左 袖⅔残存	狭　(16.7) 厚　2.3	〃	〃	〃	半截作り。両面に粘土板剝ぎ取り痕。凸面篦撫で整形。凹面全面に赤色顔料塗彩。狭端部側に漆喰が認められる。凸面にも赤色顔料。	側部面取り３回。吉井系。59－6、125－2と同一個体
60－1 69	瓦 女　瓦	カマド右袖 ⅓残存	狭　(21.8) 厚　2.4	凝灰岩 白色鉱物粒子	〃	灰	樋巻き造り。凹面布目撫で消し。凸面撫で整形。側部面取り２回。凹面狭端部側自然釉付着。	乗附系か 吉井系
60－2 69	瓦 女　瓦	カマド内 ¼残存	厚　2.3	白色鉱物粒子	中性焔	鈍黄橙	一枚造り。凹面粘土板剝ぎ取り痕。凸面手撫で。側部面取り３回、端部面取り２回。ハゼが顕著。	吉井系
60－3 69	瓦 女　瓦	カマド右壁 ⅔残存	厚　2.6	〃	酸化焔	鈍橙	一枚造り。凸面撫で整形、側部面取り３回。ハゼが顕著。	器設天井
61－1 69	瓦 女　瓦	カマド右壁 ⅔　残存	厚　2.5	白色鉱物粒子	還元焔	灰	一枚造り。凹面粘土板剝ぎ取り痕。凸面撫で整形。	吉井系
61－2 69 瓦－14	瓦 女　瓦	カマド内 ⅔残存	厚　2.1	〃	中性焔	鈍黄橙	一枚造り。篦描き文字瓦「判読不能」(凸面)。両面に粘土板剝ぎ取り痕。凸面撫で整形。側部面取り１回。	〃
61－3 69 瓦－15	瓦 女　瓦	〃	厚　2.0	〃 凝灰岩粒	還元焔	暗灰	一枚造り。刻印文字瓦「方」(凹面)。凹面粘土板剝ぎ取り痕。凸面撫で整形。側部面取り１回。端部面取り１回。	〃
61－4 70	瓦 女　瓦	カマド左壁 ⅔残存	厚　2.5	白色鉱物粒子	〃	灰白	一枚造り。凹面粘土板剝ぎ取り痕。凸面叩き整形撫で。側部面取り３回、端部面取り２回。	〃
62－1 70	瓦 女　瓦	カマド右壁 ⅓残存	厚　2.3	凝灰岩粒 白色鉱物粒子	還元焔 (二次焼成)	灰	一枚造り。凸面撫で整形。側部面取り３回、端部面取り２回。	〃
62－2 70	瓦 女　瓦	カマド左壁 ⅓残存	厚　2.5	白色鉱物粒子	還元焔	暗灰色	一枚造り。凹面粘土板剝ぎ取り痕。凸面撫で整形。側部面取り３回、端部面取り２回。	〃
62－3 70	瓦 女　瓦	カマド右壁 ⅓残存	厚　2.5	〃	中性焔 (二次焼成)	鈍黄橙	一枚造り。凹面粘土板剝ぎ取り痕。凸面撫で整形。側部面取り３回、端部面取り２回。	〃
62－4 70	瓦 女　瓦	床直 ⅓残存	厚　2.9	白色粒子多 透明円粒鉱物	不詳 (二次焼成)	黄橙	樋巻き造りか。凹面粘土板剝ぎ取り痕。凸面斜格子叩き後撫で整形。	笠懸系
62－5 70 瓦－13	瓦 女　瓦	掘り方内 細片	厚　1.5	白色鉱物粒子	中性焔	橙褐	一枚造りか。篦描き文字瓦「判読不能」(凸面)とも思われる。	藤岡系

D区第16号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目　(cm) 量目　(g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
63－1 70	土師器 坏	覆土内 ¼残存	口　10.9 底　6.0 高　3.6	白色鉱物粒子 細砂粒 シルト質	酸化焔	鈍橙	型作り(女型)、底部は型肌。	
63－2 70	須恵器 坏	覆土内 ⅓残存	口　14.0 底　6.0 高　4.4	白色粒子	還元焔	灰	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。	
63－3 70	土師質土器 黒色土器 埦	覆土内 ⅓残存	口　14.0 底　6.6 高　5.2	微粒雲母多量 白色鉱物粒子 若干	中性焔	鈍黄褐	轆轤成形(右回転)、付高台。燻しは不良。	
63－4 70	須恵器 埦	覆土内 ⅔残存	口　14.0 底　6.2 高　5.5	微粒雲母多量	還元焔	灰橙	轆轤成形(右回転)、付高台。 内面墨書「爪」	
63－5 70	須恵器 埦	覆土内 口縁部欠損	底　6.5	〃	〃	〃	〃	

64－1 70	須恵器 埦	覆土内 口縁底部 一部欠損	口 14.7 底 6.7 高 5.2	微粒雲母多量	還元焔	灰橙	轆轤成形(右回転)、付高台。	
64－2 70	土師質土器 埦	覆土内 ほぼ完形	口 15.2 底 7.2 高 5.0	赤褐色粒子 細粒砂	中性焔	〃	〃	
64－3 70	土師質土器 黒色土器 埦	覆土内 ⅓残存	口 15.5 底 (6.0)	微粒雲母多量	〃	灰白	轆轤成形(右回転)、高台欠損(付高台)。燻しは不良。	
65－1 70	土師器 甕	傍竈坑 底部欠損	口 19.8	微粒砂 黒色鉱物粒子	酸化焔	橙	「コ」の字状口縁。紐作り、外面胴部は篦削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篦撫で。	
65－2 70	石製品 砥石	床直層 ½残存	重 114.5	流紋岩(砥沢)	—	—	使用に伴う磨滅が著しい。器面の風化が著しく擦根等が不明瞭。	5点の接合。
65－3 70	瓦 女瓦	傍竈坑 破片	厚 3.3	白色鉱物粒子 黒色粒子	還元焔	灰	一枚造り。凸面撫で整形。側部面取り3回。	乗附系

D区第17号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
66－1 70	須恵器 壺	覆土内 破片	底 17.9	白色鉱物粒子 シルト質	還元焔	灰白	紐作り後撫で整形。	
67－1 70	鉄製品 不詳	床直層	重 (19.9)	——	—	—	断面は正方形を呈す。錆化が著しい。先端は尖っている。	
67－2 70	鉄製品 釘	〃	重 (13.6)	——	—	—	断面長方形気味。錆化が著しい。	
67－3 70	施釉陶器 灰釉瓶	掘り方内 破片	底 9.6	粗	良好	灰白	紐作り後轆轤整形(右回転)、付高台。	
67－4 70	瓦 女瓦	覆土内 細片	厚 2.0	黒色粒子	還元焔	白灰	一枚造り。凸面正格子叩き。凹面粘土板剝ぎ取り痕。側部面取り1回。	秋間系
68－1 71	瓦 男瓦	カマド左袖 ⅗残存	狭 15.0 幅 17.4	白色鉱物粒子	還元焔 (二次焼成)	灰	半截作り。凸面撫で整形。凹面粘土板剝ぎ取り痕。側部面取り1回、端部面取り1回。	吉井系
68－2 71 瓦－16	瓦 女瓦	床直 ⅗残存	厚 2.0	白色鉱物粒子	中性焔	灰黄	一枚造り。篦記号判読不能(凹面)。両面粘土板剝ぎ取り痕。凸面撫で整形。側部面取り2回、端部面取り1回。	〃
68－3 71	瓦 女瓦	床直層 ½残存	厚 2.8	赤褐色粒子 白色鉱物粒子	酸化焔	橙	一枚造り。凹面粘土板剝ぎ取り痕。凸面撫で整形。側部面取り3回、端部面取り2回。	〃
68－4 71	瓦 女瓦	床直	厚 1.9	白色鉱物粒子	〃	〃	一枚造り。凸面撫で整形。端部面取り2回。	〃
68－5 71	瓦 女瓦	床直	厚 2.0	白色粒子 小角礫	中性焔	浅黄橙	一枚造り。凹面粘土板剝ぎ取り痕。内黒。撫で整形。凸面粘土板剝ぎ取り痕。凸面縄叩き側部面取り2回。	笠懸系

D区第19号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
71－1 71	須恵器 坏	覆土内 完形	口 13.5 底 5.0 高 4.0	凝灰岩粒 黒色粒子	還元焔	灰	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。	
71－2 71	土師質土器 埦	床直 ほぼ完形	口 14.2 底 6.7 高 5.5	白色粒子 赤褐色粒子	中性焔 酸化気味	橙褐	轆轤成形(右回転)、付高台。	

D区第20号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
72—1 71 瓦—17	瓦 女瓦	覆土内 ¼残存	長 (38.0) 厚 1.5	白色粒子 赤褐色粒子	還元焔	灰	樋巻き造り。篦描き文字瓦「小」(凸面)。模骨痕有。凹面粘土板剝ぎ取り痕。側部面取り2回、端部面取り1回。	

D区第21号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
73—1 71	須恵器 坏	床直 破片	口 13.8	微粒雲母	還元焔	灰褐	轆轤成形(右回転)。内外面燻りがみられる。	
73—2 71	土製品 円盤	覆土内 ½残存	重 30.0	砂粒多	酸化焔	暗褐	粘土円盤の中心に焼成前に穿孔。紡錘車か。	
73—3 71	礫器 敲石	覆土内 完存	長 12.6 重 (382.0)	石英閃緑岩	—	—	小口の両端を打面として使用している。側縁も若干の使用痕を認める。	

D区第22号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
75—1 71	土師質土器 皿	床直層 ⅓残存	口 9.0 底 4.7 高 1.9	黒色鉱物粒子 シルト質	酸化焔	浅黄橙	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。	
75—2 71	土師質土器 埦	覆土内 破片	底 6.0	黒色鉱物粒子 砂粒	中性焔	鈍黄橙	轆轤成形(右回転)、高台欠損(付高台)。	
75—3 71	礫器 敲石	覆土内 ½残存	重 (374.0)	石英閃緑岩	—	—	小口の両端を打面として使用している。側縁も若干の使用痕を認める。偏平部にも2条の削り痕有。	
75—4 72	瓦 女瓦	覆土内 ⅓残存	広 (29.8) 厚 1.7	白色鉱物粒子	酸化焔か	鈍黄褐	樋巻き造り。模骨痕有。凸面縄叩き後轆轤撫で整形。凹面粘土板剝ぎ取り痕、模骨痕を篦で撫で消す。側部面取り2回、端部面取り2回。	吉井系
75—5 71 瓦—113	瓦 宇瓦	カマド内 破片	厚 2.4	〃	還元焔	灰	女瓦部は樋巻き造りか模骨痕有。瓦当意匠は、重弧文と重カク文とも考えられる。瓦当断面からは後者の可能性が強い。凸面篦撫で。	〃 凸面に赤色顔料塗彩。
75—6 71	瓦 女瓦	覆土内 破片	厚 2.0	〃	酸化焔	橙	一枚造り。凸面板目叩き後撫で整形。端部面取り2回。	吉井系
75—7 71	瓦 女瓦	〃	厚 1.9	〃	〃	〃	一枚造り。凸面板目叩き後撫で整形。側部面取り2回、端部面取り2回。	吉井系

D区第23号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
76—1 72	土師質土器 坏	床直層 完形	口 14.0 底 5.1 高 3.7	細粒砂 シルト質	中性焔	灰黄	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。	
76—2 72	土師質土器 坏	〃	口 11.2 底 5.5 高 3.4	〃	〃	灰白	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。内面、口唇直下燻処理。外面にも認められる。	
76—3 72	土師質土器 坏	〃	口 11.2 底 5.5 高 4.0	白色鉱物粒子	〃	灰黄褐	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。	
76—4 72	土師質土器 坏	覆土内 ほぼ完形	口 11.8 底 6.0 高 3.7	微粒砂	〃	黄灰	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。全体に燻しがかかっている。	

76－5 72	土師質土器 埦	床直 ⅓残存	口 11.9 底 6.2 高 4.5	黒色鉱物粒子 微粒雲母	中性焔	鈍黄褐	轆轤成形(右回転)、付高台。内面底部・外面高台内側の部分だけ燻れている。	
76－6 72	土師質土器 埦	床直 ⅓残存	口 12.2 底 5.8 高 4.2	微粒雲母	〃	鈍黄橙	轆轤成形(右回転)、付高台。内面有機質付着。	
76－7 72	土師質土器 埦	〃	口 12.2 底 6.4 高 4.4	白色鉱物粒子 細粒砂	〃	浅黄橙	轆轤成形(右回転)、付高台。	
78－1 72	土師質土器 埦	床直 ⅓残存	口 14.5 底 6.2 高 5.8	白色鉱物粒子 シルト質	酸化焔	鈍黄橙	轆轤成形(右回転)、付高台。内外面で同じ部分が燻れている。	
78－2 72	土師質土器 埦	床直 ½残存	口 14.7 底 6.8 高 4.7	微粒雲母	〃	橙	轆轤成形(右回転)、付高台。	
78－3 72	土師質土器 甕	カマド内 ¼残存	口 16.7	小礫多	中性焔 酸化気味	灰黄	口縁部は外反する。紐作り後轆轤整形(右回転)胴部下半・底部は篦削り。	
78－4 72	鉄製品 釘か	覆土内	重 4.6	——	—	—	頭部が通有の釘とは異なり釘でない可能性有。先端部周辺が欠損し断面は一様でない。	
78－5 72	瓦 男瓦	覆土内 ¼残存	厚 1.5	赤褐色粒子	不詳 (二次焼成)	橙	半截作り。凸面縄叩き(密)後、轆轤撫で。凹面粘土板剝ぎ取り痕。側部面取り1回、端部面取り1回。	藤岡系
78－6 72 瓦－20	瓦 女瓦	カマド左袖 破片	厚 2.1	赤褐色粒子 白色鉱物粒子	中性焔 還元気味	浅黄橙	桶巻き造り。篦描き沈線「判読不能」(凹面)。模骨痕有。凹面粘土板剝ぎ取り痕。凸面縄叩き後轆轤撫で。	乗附系
78－7 72	瓦 女瓦	床直 ⅓残存	厚 2.3	細砂粒	不詳 (二次焼成か)	暗黄褐	一枚造り。凸面斜格子叩き。凹面粘土板剝ぎ取り痕、撫でによる布目擦り消し。凸面粘土板剝ぎ取り痕。撫での叩き整形。	笠懸系
78－8 72	瓦 女瓦	覆土内 細片	厚 1.3	白色鉱物粒子 凝灰岩粒	酸化焔か	黄橙	一枚造りか。凹面はコモ状編み物。凸面撫で後叩き整形。	吉井系
78－9 72	瓦 女瓦	カマド内 破片	厚 2.2	白色鉱物粒子	還元焔	暗灰色	桶巻き造りか。模骨痕有。凸面撫で整形。側部面取り2回。	乗附系
78－10 72	瓦 女瓦	床直 破片	厚 2.0	赤褐色粒子 白色鉱物粒子	不詳 (二次焼成か)	橙褐	一枚造りか。凹面布目撫で消し。凸面縄叩き後、縄目撫で消し。側部面取り2回。	吉井系
79－1 72	瓦 男瓦	カマド右袖 破片	幅 15.1 厚 2.2	白色鉱物粒子	還元焔	暗灰	半截作り。凸面撫で。側部面取り2回。	
79－2 72	瓦 女瓦	カマド内 ⅓残存	狭 21.8 厚 2.2	黒色粒子	還元焔	灰	一枚造り。凹面粘土板剝ぎ取り痕・全面自然釉付着。凸面撫で。側部面取り1回、端部面取り1回。	秋間系
79－3 73	瓦 女瓦	カマド内 ¼残存	厚 1.8	白色鉱物粒子	〃	暗灰	一枚造り。凸面撫で整形。側部面取り3回。	吉井系
79－4 73	瓦 女瓦	床直 破片	厚 2.2	白色粒子	〃	灰	一枚造り。凹面布目撫で消し。凸面粘土板剝ぎ取り痕、側部面取り2回。	笠懸系
79－5 73	瓦 女瓦	床直 破片	厚 1.7	黒色粒子 シルト粒	〃	白灰	一枚造り。凸面縄叩き(密)。凸面離砂痕。	秋間系
79－6 73	瓦 女瓦	床直 細片	厚 1.5	白色鉱物粒子	〃	黒灰	一枚造り。凸面平行叩き止め。側部面取り1回、端部面取り1回。	吉井系
80－1 73 瓦－18	瓦 女瓦	カマド左壁 ½残存	厚 1.9	〃	〃	灰白	一枚造り。篦描き文字瓦「乙」(凹面)。凹面粘土板剝ぎ取り痕。凸面撫で整形。側部面取り1回、端部面取り1回。	〃
80－2 73 瓦－19	瓦 女瓦	床直 破片	厚 2.4	〃	中性焔	灰褐	一枚造り。篦描き文字瓦「女の一部か」(凸面)。凹面粘土板剝ぎ取り痕。凸面撫で整形。側部面取り3回。	〃
80－3 73	瓦 女瓦	覆土内 細片	厚 2.0	〃	〃	浅黄橙	桶巻き造りか。模骨痕有。凹面粘土板剝ぎ取り痕。凸面撫で整形。側部面取り2回。	〃
80－4 73	瓦 女瓦	床直 破片	厚 1.8	黒色粒子 シルト粒	還元焔	白灰	一枚造り。凸面縄叩き(密)。	秋間系

D区第24号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
82—1 73	土師質土器 坏	床直 体部½欠損	底 5.8	微粒雲母 赤褐色粒子	酸化焔 還元気味	鈍黄橙	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。	
82—2 73	鉄製品 釘	覆土内 ½残存	重 (2.93)	——	—	—	断面は正方形を呈する。錆化が著しい。	
82—3 73	鉄製品 釘	〃	重 (11.0)	——	—	—	〃	
82—4 73	鉄製品 釘か	〃	重 (1.9)	——	—	—	〃	
82—5 73	鉄製品 刀子	床直 鋒先欠損	重 (22.9)	——	—	—	尖先を損ずる。使用に伴う研ぎ減りが著しい。茎は完存する。茎長6.9cm。	
82—6 73	瓦 女瓦	覆土内 破片	厚 2.3	白色粒子	還元焔	灰	一枚造り。凹面粘土板剝ぎ取り痕。布目撫で消し。凸面撫で後叩き整形。(斜格子)。側部面取り2回。	笠懸系

D区第25号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
84—1 73	土師質土器 皿	覆土内 ⅓残存	口 8.2 底 5.4 高 1.8	細粒砂 シルト質	酸化焔	鈍橙	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。	
84—2 73	土師質土器 皿	〃	口 8.7 底 6.1 高 1.8	〃	〃	鈍橙	〃	
84—3 73	土師質土器 皿	覆土内 破片	口 8.9	〃	〃	〃	轆轤成形(右回転)。	
84—4 73	施釉陶器 灰釉埦	覆土内 底部½残存	底 7.6	密	良好	灰黄	轆轤成形(右回転)、付高台。施釉は刷毛とも浸しとも区別しがたい。	
84—5 73	土師器 土釜	掘り方内 底部残存	底 7.6	凝灰岩粒 砂粒多	酸化焔	鈍黄橙	紐作り後篦撫で整形。	
84—6 73	施釉陶器 灰釉埦	掘り方内 破片	口 14.0	密	良好	灰	轆轤成形(右回転)。高台欠損(付高台)。施釉は浸掛。	
84—7 73	鉄製品 釘	覆土内 先端欠損	重 (5.56)	——	—	—	断面は正方形を呈す。先端部は曲がっている。頭部周辺には、木質が残存する。錆化が著しい。	
84—8 73	鉄製品 釘	覆土内 ½残存	重 (1.57)	——	—	—	断面は正方形を呈す。錆化が著しい。	
84—9 73	鉄製品 釘	〃	重 (5.45)	——	—	—	断面は正方形を呈する。錆化が著しい。	
84—10 73	鉄製品 釘	覆土内 完存	重 (10.8)	——	—	—	〃	
84—11 73	鉄製品 釘	覆土内 ½残存	重 (2.0)	——	—	—	〃	
84—12 73	鉄製品 釘	〃	重 (2.3)	——	—	—	〃	
84—13 73	鉄製品 釘	〃	重 (3.14)	——	—	—	〃	
84—14 73	鉄製品 不詳	〃	重 (10.2)	——	—	—	断面は偏平な長方形を呈する。	
84—15 73	鉄製品 不詳	〃	重 (3.5)	——	—	—	薄い板状であるが、工具とは思われない。	
84—16 73	鉄製品 不詳	覆土内 破片	重 (29.5)	——	—	—	板状で金具等の隅部と思われる。残存状態から旧体は五角形状を呈している。	
84—17 73	鉄製品 不詳	〃	重 (5.17)	——	—	—	断面は正方形を呈する。犬釘状の釘か。	

84—18 73	鉄製品 不詳	覆土内 破片	重 (5.5)	——	—	—	断面は長方形を呈する。刀子、小刀の茎か。	
84—19 73	鉄製品 刀子か	覆土内 破片	重 (10.8)	——	—	—	著しく変形しているが、刀子の刀身断面は三角形状を呈する。	
84—20 73 瓦—21	瓦 男瓦	掘り方内 細片	厚 2.2	白色鉱物粒子	還元焔	暗灰	半截作り。篦描き文字瓦「玉か五」（凸面）。	吉井系
84—21 73	瓦 女瓦	〃	厚 2.0	〃	〃	灰	一枚造り。凹面・凸面粘土板剝ぎ取り痕有。凹面布目撫で消し（縦）。凸面撫で整形（縦）。側部面取り1回。	乗附系
84—22 73 瓦—22	瓦 女瓦	覆土内 破片	厚 2.0	〃	還元焔	暗灰	一枚造り。篦描き文字瓦「千か」（凸面）。凸面撫で整形。側部面取り3回。	吉井系
84—23 73	瓦 女瓦	掘り方内 細片	厚 1.9	白色粒子	〃	〃	一枚造り。凸面斜格子叩き。凹面布目撫で消し。	笠懸系

D区第26号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
86—1 74	土師質土器 皿	覆土内 破片	口 9.0 底 (4.2) 高 1.6	赤褐色粒子 黒色鉱物粒子 シルト質	還元焔	鈍橙	轆轤成形（右回転）、底部は回転糸切り。	
86—2 74	〃 〃	〃 〃	口 8.0 底 4.9 高 1.8	〃 〃 〃	〃	鈍橙	轆轤成形（右回転）。	
86—3 74	須恵器 埦	掘り方内 破片	口 14.0	白色鉱物粒子	中性焔	鈍黄橙	轆轤成形（右回転）、高台欠損（付高台）。	
86—4 74	土師器 小型甕	〃	口 15.3	赤褐色粒子 黒色鉱物粒子	酸化焔	鈍橙	口縁部は直立する。紐作り後篦撫で整形。	
86—5 74	土師器 土釜	床直層 破片	口 24.0	透明鉱物粒子 黒色鉱物粒子	〃	浅黄橙	〃	
86—6 74	鉄製品 釘か	床直	重 (8.5)	——	—	—	断面は正方形を呈する。錆化が著しい。	
86—7 74	鉄製品 釘か	〃	重 (2.2)	——	—	—	〃	
86—8 74	鉄製品 不詳	〃	重 (4.06)	——	—	—	断面は長方形を呈する。	
86—9 74	鉄製品 〃	〃	重 (16.4)	——	—	—	片丸造り。柳刃状の形状を呈するが、鏃とも思われない。工具である可能性が強い。	
86—10 74	鉄製品 〃	床直 不詳	重 (27.9)	——	—	—	断面円形を呈するが、元来は多面体の円形状と思われる。鉄製紡錘車の芯棒と思われる。	
86—11 74	鉄製品 犬釘	覆土内 先端欠損	重 (7.7)	——	—	—	断面正方形を呈する。遺存状態は良好であるが先端を欠損する。	
86—12 74	瓦 女瓦	カマド内 ½残存	厚 2.8	白色鉱物粒子 凝灰岩粒	中性焔 酸化気味	橙	一枚造り。凹面粘土板剝ぎ取り痕。凸面撫で整形・内面に篦傷あり。側部面取り3回、端部面取り2回。	吉井系
86—13 74 瓦—25	瓦 女瓦	覆土内 破片	厚 2.0	白色鉱物粒子	還元焔	黒灰	一枚造り。篦描き文字瓦「判読不能」（凸面）。凸面撫で整形。	〃
86—14 74 瓦—26	瓦 女瓦	カマド内 細片	厚 1.9	白色粒子	還元焔	暗灰	一枚造り。篦描き文字瓦「判読不能」（凸面）。凸面撫で仕上げ。	吉井系
86—15 74	瓦 女瓦	覆土内 破片	厚 1.6	白色鉱物粒子 凝灰岩粒	不詳 （二次焼成）	浅橙	桶巻き造り。模骨痕有。凸面轆轤撫で。側部面取り3回、端部面取り3回。	〃

D区第27号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
88－1 74	土師質土器 埦	床直 ⅔残存	口 13.6 底 6.6 高 5.1	シルト質 微粒砂	中性焔 酸化気味	灰黄	轆轤成形(右回転)、付高台。	
88－2 74	土師器 土釜	覆土内 破片	口 19.9	赤褐色粒子 砂粒多	酸化焔	橙褐灰	口縁部は外反する。紐作り後篦撫で整形。	
88－3 74	土師器 土釜	カマド内 ¼残存	口 24.0	〃	〃	鈍赤褐	〃	
88－4 74	土師器 土釜	覆土内 破片	口 31.5	〃	〃	橙	〃	
88－5 74	土師器 鉢	〃	口 23.8	〃	〃	淡黄	紐作り後篦撫で整形。	
88－6 74	土師器 鉢	〃	口 24.3	白色粒子	〃	黄橙	紐作り後撫で整形。	
88－7 74	須恵器 羽釜	カマド 破片	口 21.0	赤褐色粒子 砂粒	〃	鈍褐	口縁部は内湾する。紐作り後轆轤整形(右回転)。鍔は貼り付け。	
88－8 74	須恵器 壺	覆土内 破片	口 20.0	白色鉱物粒子	中性焔 (二次焼成か)	鈍黄橙	紐作り後轆轤整形(右回転)、底部周辺篦削り。	
88－9 74	土師器 甕	〃	底 20.8	砂粒 赤褐色粒子	酸化焔	鈍橙	口縁部は外反する。紐作り。外面胴部は篦削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篦撫で。	
88－10 74	鉄製品 釘か	床直	重 (5.5)	——	—	—	断面は長方形を呈する。	
88－11 74	鉄製品 不詳	掘り方内 一部欠損	重 (6.39)	——	—	—	平面は隅丸の梯形を呈し、断面は長円形を呈する。	
89－1 75	瓦 男瓦	床直 ⅔残存	厚 1.6	白色鉱物粒子	中性焔	浅黄橙	半截作り。凸面平行叩き後撫で整形。側部面取り2回、端部面取り1回。	吉井系
89－2 75	瓦 男瓦	掘り方内 ⅔残存	狭 11.3 幅 13.9 厚 1.2	黒色粒子	還元焔	灰	半截作り。凸面縄叩き(密)後轆轤撫で。側部面取り3回、端部面取り1回。	乗附系
89－3 75	瓦 女瓦	カマド右袖 ½残存	狭 (19.3) 幅 27.5 厚 1.8	白色鉱物粒子 シルト粒	中性焔	灰褐	凹面布撫で消し(縦)、 紐作りか。凸面無整形。側部面取り2回、端部面取り1回。	吉井系
89－4 75	瓦 女瓦	覆土内 ¼残存	厚 1.9	白色鉱物粒子	還元焔	灰	一枚造り。凹面粘土板剝ぎ取り痕。凸面平行叩き後撫で整形。側部面取り3回、端部面取り1回。	〃

D区第28号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
91－1 75	土師質土器 足高高台 皿	掘り方内 破片	口 9.0 底 5.6 高 3.1	砂粒 透明鉱物粒	酸化焔	浅黄橙	轆轤成形(右回転)、付高台。	
91－2 75	須恵器 坏	床直 破片	底 6.2	白色鉱物粒子 シルト粒	還元焔	灰	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。	
91－3 75	須恵器 甕	〃	口 19.0	赤褐色粒子 白色鉱物粒子	酸化焔	鈍赤	「コ」の字状口縁。紐作り、外面胴部は篦削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篦撫で。	
91－4 75	施釉陶器 灰釉埦 (皿か)	〃	底 7.8	粗	良好	灰	轆轤成形(右回転)、付高台。	
91－5 75	須恵器 壺	覆土内 ⅓残存	——	凝灰岩粒	還元焔	灰	紐作り後轆轤整形(右回転)。	
91－6 75	須恵器 大甕	覆土内 破片	——	黒色粒子	〃	灰	紐作り。叩き整形(外面平行叩き・内面宛具は青海波文)後轆轤再整形。内面撫で。	
91－7 75	鉄製品 釘	〃	重 (5.2)	——	—	—	断面は正方形を呈す。錆化が著しい。	
91－8 75	鉄製品 釘	覆土内 完存	長 (17.6) 重 (61.9)	——	—	—	太さ9㎜の棒状の鉄を加工し、先端部は細く、頭部は平たくしている。	

91－9 75	礫　器 塙　石	覆土内 一部欠損	長　13.9 重　590	ひん岩	—	—	一部に、塙打の跡が見られる。	
91－10 75	礫　器 磨　石	覆土内 完存	長　3.15 重　77	粗粒安山岩	—	—	片面が磨滅している。	
91－11 75 瓦－81	瓦 男　瓦	覆土内 破片	厚　2.3	白色鉱物粒子	還元焔	灰	半截作り。篦描き文字瓦「判読不能」(凸面)。凹面粘土板剝ぎ取り痕。 凸面撫で整形。端部面取り３回。	吉井系
91－12 75 瓦－114	瓦 宇　瓦	覆土内 細片	厚　2.6	〃	還元焔	灰	瓦当意匠は不明であるが、国分寺創建意匠と考えられる。女瓦部は一枚造り。瓦当接合部は芋付。	〃
91－13 75 瓦－27	瓦 女　瓦	覆土内 破片	厚　2.1	〃	〃	暗灰	一枚造り。篦描き文字瓦「子総」(凸面)。凹面指撫で有。凸面撫で整形。側部面取り３回。	〃

D区第29号住居跡

挿図番号 図版番号	種　別 器　種	出土位置 遺存状態	度目　(cm) 量目　(g)	胎　土	焼　成	色　調	器形・技法等の特徴	備　考
92－1 75	須恵器 坏	貯蔵穴内 口縁一部欠損	口　14.0 底　6.7 高　4.0	砂粒	還元焔	白灰	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。	
92－2 75	土師質土器 埦	掘り方内 口縁½欠損	口　14.0 底　(6.4) 高　(6.0)	微粒雲母	中性焔	鈍黄褐	轆轤成形(右回転)、高台欠損(付高台)。内外面燻りが認められる。	
92－3 75	土師質土器 埦	貯蔵穴内 ⅓残存	口　14.6 底　6.4 高　5.1	〃	〃	鈍黄	轆轤成形(右回転)、付高台。	
93－1 75	土師器 甕	貯蔵穴内 破片	口　20.0	微粒雲母 シルト質	酸化焔	橙褐	「コ」の字状口縁。紐作り、外面胴部は篦削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篦撫で。	
93－2 76	土師器 甕	〃	底　4.0	赤褐色粒子 砂粒	〃	鈍橙	紐作り。外面胴部は篦削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篦撫で。	
93－3 76	土師器 甕	掘り方内 破片	底　3.6	〃	〃	橙	紐作り。外面胴部は篦削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篦撫で。	
93－4 76	施釉陶器 灰釉瓶	覆土内 破片	口　11.5	密	良好	灰	紐作り後轆轤整形(右回転)。	
93－5 76	施釉陶器 灰釉瓶	〃	口　11.2	〃	〃	灰	紐作り後轆轤整形(右回転)。自然釉付着顕著。	
93－6 76	瓦 女　瓦	覆土内 細片	厚　1.4	白色鉱物粒子 凝灰岩粒	中性焔	鈍黄橙	一枚造りか。凸面斜格子叩き。 凹面布目撫で消し。	吉井系
94－1 76	瓦 女　瓦	カマド右袖 ¼残存	長　31.8	〃	不詳 (二次焼成)	橙	樋巻き造りか。模骨痕有。凹面粘土板剝ぎ取り痕。凸面撫で仕上げ。側部面取り１回、端部面取り１回。	〃

D区第30号住居跡

挿図番号 図版番号	種　別 器　種	出土位置 遺存状態	度目　(cm) 量目　(g)	胎　土	焼　成	色　調	器形・技法等の特徴	備　考
95－1 76	土師器 土　釜	覆土内 破片	口　25.5	白色鉱物粒子 砂粒	酸化焔	黒 浅黄橙	口縁部は外反する。紐作り。外面胴部は篦削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篦撫で。	
95－2 76	須恵器 甑	〃	底　20.8	赤褐色粒子 白色鉱物粒子	中性焔	褐灰	紐作り後轆轤整形(右回転)。	
95－3 76	須恵器 大甕	〃	——	白色鉱物粒子 凝灰岩粒	還元焔	灰	紐作り後轆轤整形。	
95－4 76	瓦 玉縁付 男　瓦	覆土内 玉縁部のみ	厚　1.3	〃	〃	〃	半截作り。凹面布合せ目痕、凸面轆轤撫で。側部面取り２回、端部面取り２回。	吉井系
95－5 76 瓦－28	瓦 女　瓦	掘り方P1内 破片	厚　2.4	白色鉱物粒子	〃	暗灰	一枚造り。篦描き文字瓦「大里」(凸面)。凸面撫で整形。側部面取り２回、端部面取り２回。	〃
95－6 76	瓦 女　瓦	カマド右袖	厚　1.8	〃	中性焔	鈍黄褐	一枚造り。凸面撫で整形。側部面取り２回、端部面取り２回。	藤岡系

D区第31号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
96—1 76	土師質土器 坏	覆土内 口縁½欠損	口 9.1 底 4.7 高 2.2	白色粒子 半透明鉱物粒子 シルト質	酸化焔	鈍黄橙	口縁部は轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。内面に稜を有するように強く外反する。	97—1と同一個体
96—2 76	土師質土器 坏	掘り方内 完形	口 9.1 底 5.0 高 2.5	砂粒多	〃	浅黄橙	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。	
96—3 76	土師器 土釜	覆土内 破片	口 22.0	シルト質 赤褐色粒子 微粒雲母	〃	鈍橙	口縁部は外反する。紐作り後篦撫で整形。	
96—4 76	土師器 土釜	〃	口 27.0	細粒砂 凝灰岩粒	酸化焔	黒褐	口縁部は外反する。紐作り後篦撫で整形。	
96—5 76	土師器 土釜	カマド内 破片	口 28.0	〃	〃	鈍黄褐	口縁部は外反する。紐作り後篦撫で整形。	
96—6 76	鉄製品 釘か	掘り方内 破片	重 (21.2)	——	—	—	断面長方形を呈す。	
96—7 76	鉄製品 刀子	床直層 刃部欠損	茎長 (7) 重 (11.5)	——	—	—	茎先端欠損。比較的茎の重は薄い。	
97—1 76	土師器 土釜	カマド覆土 破片	底 10.0	白色粒子 半透明鉱物粒子 シルト質	〃	鈍黄	紐作り後篦撫で整形。	96—1と同一個体
97—2 76	瓦 宇瓦	覆土内 細片	厚 2.7	白色粒子	還元焔	暗灰	一枚造り。瓦当部欠損。凸面篦撫で(縦)。	笠懸系
97—3 76	瓦 女瓦	床直 破片	厚 1.6	〃	〃	〃	一枚造り。凸面斜格子叩き。凹面布目撫で消し。凸面粘土板剝ぎ取り痕。	〃
97—4 76 瓦—29	瓦 女瓦	床直 細片	厚 1.8	〃	不詳 (二次焼成)	橙	一枚造り。凸面正格子叩き。刻印文字瓦「雀」(凸面)。	〃
98—1 77 瓦—81	瓦 鐙瓦	覆土内 ⅓残存	厚 1.3	シルト粗粒	還元焔	灰	半截作りか。瓦当部欠損。瓦当接合部は芋付。凸面縄叩き(密)。後撫で消し。瓦当接合部周辺は側部面取り2回。	秋間系 一枚造りの可能性有り。
98—2 77	瓦 女瓦	カマド右袖 ⅓残存	厚 1.6	白色鉱物粒子	〃	灰褐	一枚造り。凹面粘土板剝ぎ取り痕。凸面撫で。側部面取り2回。	吉井系
98—3 77	瓦 玉縁付男瓦	〃	玉縁幅 (11.4) 厚 1.9	〃	還元焔か(二次焼成)	灰橙	半截作り。凸面縄叩き(密)。側部面取り2回。	〃
98—4 77	瓦 女瓦	〃	厚 2.0	小角礫	中性焔 (二次焼成)	浅黄橙	一枚造り。凸面縄叩き(密)後撫で整形(縦)。側部面取り2回。	乗附系
98—5 76	瓦 女瓦	覆土内 破片	厚 2.2	〃	還元焔	白灰	桶巻き造りか。模骨痕有。凹面布目撫で消し。凸面撫で整形。端部面取り3回。	〃

D区第36号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
100—1 77	土師質土器 坏	床直層 ⅓残存	口 8.8 底 4.6 高 2.9	微粒雲母 砂粒 シルト質	酸化焔	橙	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。	
100—2 77	須恵器 坏	カマド内 ⅓残存	口 13.6 底 5.2 高 4.4	白色粒子 凝灰岩粒	還元焔	黄灰	〃	
100—3 77	須恵器 埦	床直層 底部のみ残存	底 6.6	細粒砂 微粒雲母	〃	灰白	轆轤成形(右回転)、付高台。	
100—4 77	土師器 甑	覆土内 破片	——	細粒砂 シルト質	中性焔	鈍橙	紐作り後轆轤整形(右回転)。鍔は張り付け。	

100－5 77	施釉陶器 灰釉段皿	覆土内 破片	口　19.0	密	良好	灰白	轆轤成形(右回転)。施釉方法は不詳。器形は大きい。	
100－6 77	施釉陶器 灰釉瓶	覆土内 ⅓残存	底　9.2	密	良好	灰	紐作り後轆轤整形(右回転)。体部下半、回転篦削り。	
100－7 77	鉄製品 不詳	覆土内 不詳	重　(7.3)	――	―	―	断面は長方形を呈する。錆化が著しい。	
100－8 77 瓦－31	瓦 女瓦	カマド左袖 ⅗残存	長　39.9 厚　2.1	凝灰岩粒 黒色粒子	還元焔	暗灰	一枚造り。篦描き文字瓦「八伴楊子」(凸面)。凹面粘土板剝ぎ取り痕。凸面撫で整形。側部面取り3回、端部面取り2回。	吉井系
100－9 77 瓦－95	瓦 鐙瓦	覆土内 細片	厚　1.9	白色鉱物粒子 黒色粒子	〃	白灰	一本造り。瓦当部欠損。凸面撫で整形。	〃
100－10 77 瓦－115	瓦 宇瓦	〃	厚　1.8	白色粒子	〃	灰白	均整唐草文。既出に同笵なし。	笠懸系 144－5と同一個体
101－1 78 瓦－30	瓦 女瓦	カマド内 ⅓残存	厚　2.3	白色鉱物粒子 赤褐色粒子	酸化焔 (二次焼成か)	橙	一枚造り。篦描き文字瓦「八」(凸面)。凸面撫で整形。側部面取り2回、端部面取り1回。	吉井系
101－2 78	瓦 女瓦	カマド左袖 ⅓残存	厚　2.7	〃	中性焔	鈍黄橙	一枚造り。凹面粘土板剝ぎ取り痕。凸面撫で整形。端部面取り2回。	〃

D区第37号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目　(cm) 量目　(g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
102－1 78	須恵器 坏	貯蔵穴内 完形	口　13.1 底　6.8 高　4.1	白色鉱物粒子	還元焔	褐灰	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。	
102－2 78	須恵器 埦	覆土内 破片	口　14.0	赤褐色粒子 凝灰岩粒	酸化焔	鈍黄褐	轆轤成形(右回転)。	
102－3 78	土師質土器 埦	貯蔵穴内 口縁¼欠損	口　15.2 底　6.7 高　5.9	黒色鉱物粒子	中性焔	灰黄	轆轤成形(右回転)、付高台。	
103－1 78	土師器 甕	貯蔵穴内 破片	口　19.5	微粒雲母	酸化焔	鈍橙	「コ」の字状口縁。紐作り、外面胴部は篦削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篦撫で。	103-2・103-3と同一個体
103－2 78	土師器 甕	〃	口　21.0	〃	〃	〃	〃	103-1・103-3と同一個体
103－3 78	土師器 甕	〃	――	〃	〃	橙	〃	103-1・103-2と同一個体
103－4 78	瓦 女瓦	貯蔵穴内 ⅗残存	長　40.5 厚　2.4	白色鉱物粒子	中性焔	鈍黄橙	一枚造り。凸面板目叩き後撫で整形。側部面取り2回、端部面取り2回。	吉井系

D区第38号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目　(cm) 量目　(g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
105－1 78	土師質土器 皿	覆土内 ⅓残存	口　8.0 底　4.0 高　2.2	微粒雲母 赤褐色粒子	酸化焔	浅黄橙	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。	
105－2 78	土師質土器 埦	覆土内 破片	口　15.0	赤褐色粒子 白色鉱物粒子	〃	鈍橙	轆轤成形(右回転)、高台欠損(付高台)。	
105－3 78	土師器 羽釜か	覆土内 破片	底　(16.0)	凝灰岩粒 白色鉱物粒子	不詳 (二次焼成)	橙	紐作り後篦撫で整形。	
105－4 78	土師器 小型甕	カマド左袖 ⅓残存	口　15.0	黒色鉱物粒子 細砂粒	酸化焔	鈍橙	口縁部は外反する。紐作り。外面胴部は篦削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篦撫で。	
105－5 78	施釉磁器 白磁	覆土内 破片	――	密	良好	乳白色	轆轤成形(右回転)、高台欠損(付高台)。化粧土は認められない。	北方諸窯系

105—6 78	鉄製品 釘	床直層 ½残存	重　(2.5)	——	—	—	断面は正方形を呈する。	
105—7 78	鉄製品 刀子か	床直層 破片	重　(5.5)	——	—	—	棟は丸味を帯びるのか。	
105—8 79	瓦 男瓦	床直層 ½残存	厚　2.4	白色鉱物粒子	還元焔	灰	半截作り。板目叩き後撫で整形。側部面取り4回。	
105—9 78 瓦—33	瓦 女瓦	床直層 破片	厚　1.8	〃	中性焔	灰褐	一枚造り。篦描き文字瓦「織継か」(凸面)。凸面撫で整形。	吉井系
105—10 79	瓦 女瓦	床直層 ¾残存	長　38.9 厚　3.0	〃	還元焔	暗灰	一枚造り。凸面篦傷有。撫で整形。側部面取り4回、端部面取り3回。	吉井系 105-11と同一個体
105—11 78	瓦 女瓦	床直層 細片	厚　2.5	〃	〃	〃	一枚造り。凸面撫で整形。	吉井系 105-10と同一個体
105—12 78	瓦 女瓦	〃	厚　2.0	黒色粒子	〃	灰白	一枚造り。凸面縄叩き密。端部の部分で縦横に施している。	秋間系
106—1 79	瓦 女瓦	床直層 ⅗残存	厚　1.9	白色鉱物粒子 黒色粒子	〃	灰	一枚造り。凸面撫で整形。側部面取り3回。	吉井系
106—2 79 瓦—32	瓦 女瓦	床直層 ½残存	厚　2.0	黒色粒子	〃	白灰	一枚造り。篦描き文字瓦「大」(凹面)。凸面縄叩き密。	秋間系
106—3 79	瓦 男瓦	床直層 細片	厚　1.4	〃	〃	灰	半截作りか。凸面撫で整形。自然釉付着。	〃
106—4 78	瓦 女瓦	床直層 破片	厚　2.4	黒色粒子 シルト粒	〃	灰白	一枚造り。凸面縄叩き密。凸面離砂痕多量。側部面取り3回、端部面取り2回。	〃
106—5 78	瓦 女瓦	床直層 細片	厚　1.4	〃	〃	〃	一枚造り。凸面撫で整形。端部面取り1回。自然釉付着。	〃

D区第40号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
108—1 79	土師質土器 埦	貯蔵穴内 完形	口　13.1 底　7.2 高　5.2	赤褐色粒子 シルト質	酸化焔	淡黄	轆轤成形(右回転)、付高台。	
108—2 79	土師質土器 埦	カマド内 覆土内 ½残存	口　15.5	〃	酸化焔	淡黄	轆轤成形(右回転)、高台欠損(付高台)。	
108—3 79	土師質土器 埦	床直層 高台部欠損	口　18.3 底　7.6	半透明鉱物粒 白色鉱物粒子	中性焔	淡黄灰	轆轤成形(右回転)、高台欠損(付高台)。足高高台か。	
108—4 79	施釉陶器 灰釉埦	床直層 ほぼ完形	口　10.2 底　5.0 高　3.9	密	良好	白灰	轆轤成形(右回転)、付高台。施釉は浸掛。	
108—5 79	施釉陶器 灰釉埦	掘り方内 覆土内 破片	口　13.7	〃	〃	白灰	轆轤成形(右回転)。高台欠損(付高台)。施釉は浸掛。	
108—6 79	施釉陶器 灰釉埦	カマド内 ½残存	底　7.8	〃	〃	灰白	轆轤成形(右回転)。付高台。施釉は浸掛。	
109—1 79	施釉陶器 灰釉埦	床直層 ½残存	底　7.4	〃	〃	〃	轆轤成形(右回転)。付高台。施釉は浸掛。内面磨滅し金が付着する。	
109—2 79	鉄製品 不詳	覆土内 不詳	重　(9.9g)	——	—	—	断面は長方形を呈する。残存長12.6cm(伸身長)	
109—3 79	瓦 男瓦	カマド左袖 残存	狭　(14.8) 幅　20.3 厚　1.8	白色粒子	還元焔	灰	半截作り。凹面布合せ目痕。凸面篦撫で整形。凸面広端部断面半円形の隆帯が巡る。側部面取り2回。端部面取り2回。	笠懸系
109—4 80	瓦 男瓦	覆土内 ⅗残存	厚　2.0	白色粒子 白色鉱物粒子	〃	〃	半截作り。凸面撫で整形。側部面取り1回。凹面粘土板剝ぎ取り痕。	〃
109—5 79	瓦 男瓦	カマド内 破片	厚　1.8	白色鉱物粒子	〃	〃	半截作り。凸面撫で整形。側部面取り3回。	笠懸系か

109—6 80	瓦 男　瓦	カマド内 細片	厚　1.5	白色粒子 黒色粒子	還元焔	灰	紐作りか。凸面撫で整形。側部面取り3回。	笠懸系か
110—1 80	瓦 男　瓦	床直 ⅓残存	広　(17.6) 幅　14.8 厚　2.5	〃	〃	〃	半截作り。内面布目撫で消し。凸面撫で整形。側部面取り1回。凸面篦傷有。布目が非常に緻密。	乗附系か
110—2 80	瓦 男　瓦	カマド内 ⅓残存	狭　(12.2) 幅　15.0 厚　1.8	〃	還元焔 （二次焼成）	暗灰褐	半截作り。凹面粘土板剝ぎ取り痕。凸面撫で整形。側部面取り2回、端部面取り2回。	吉井系
110—3 80 瓦—35	瓦 男　瓦	床直 ⅓残存	長　42.3 厚　1.7	白色粒子	不詳 （二次焼成）	鈍橙	半截作り。刻印文字瓦「勢」（凸面）。凹面布合せ目痕。凸面轆轤撫で。	笠懸系
111—1 80	瓦 男　瓦	床直 ¼残存	広　17.5 幅　17.2 厚　1.8	白色鉱物粒子 黒色粒子	還元焔	灰	半截作り。凹面粘土板剝ぎ取り痕。凸面撫で整形。側部面取り2回、端部面取り2回。	吉井系
111—2 80	瓦 女　瓦	カマド右袖 ¼残存	厚　2.0	白色鉱物粒子	〃	〃	作り不詳（一枚造りか。）凹面布合せ目痕・粘土板剝ぎ取り痕。凸面平行叩き（叩きの方向性は桶巻きの可能性がある。	〃
111—3 80	瓦 男　瓦	床直層 破片	厚　2.0	白色鉱物粒子 赤褐色粒子	中性焔	鈍黄橙	半截作り。凹面粘土板剝ぎ取り痕。凸面撫で整形。側部面取り3回。	〃
112—1 81	瓦 男　瓦	カマド内 ⅓残存	厚　1.7	黒色粒子	還元焔	灰白	半截作り。凹面粘土板剝ぎ取り痕・布合せ目痕。凸面縄叩き密後轆轤撫で。側部面取り1回、端部面取り1回。	秋間系
112—2 80	瓦 男　瓦	カマド内 破片	厚　1.1	〃	〃	〃	半截作り。凸面縄叩き整形密後轆轤撫で。側部面取り1回、端部面取り1回。	〃
112—3 81	瓦 男　瓦	床直層 破片	厚　2.0	白色鉱物粒子	〃	黒灰	半截作り。凹面布撫で消し。凸面平行叩き。側部面取り2回。	乗附系
112—4 81	瓦 女　瓦	カマド内 ⅓残存	厚　2.0	〃	〃	暗灰	一枚造り。凹面粘土板剝ぎ取り痕。凸面撫で整形。側部面取り2回。	吉井系
113—1 81 瓦—34	瓦 女　瓦	カマド内 ほぼ完形	広　(28.2) 狭　(19.0) 長　39.6	〃	〃	灰	一枚造り。篦描き記号瓦（凸面。）凹面粘土板剝ぎ取り痕。凸面撫で整形。側部面取り2回、端部面取り2回。	〃
113—2 81	瓦 男　瓦	カマド内 細片	厚　1.5	黒色粒子 白色鉱物粒子	還元焔	灰	半截作り。凸面撫で整形。側部面取り1回。	吉井系
113—3 81	瓦 女　瓦	カマド内 ¼残存	厚　2.0	黒色粒子	〃	白灰	一枚造り。凹面粘土板剝ぎ取り痕、凸面縄叩き密。側部面取り4回、端部面取り2回。	秋間系

D区第41号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目（cm） 量目（g）	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
114—1 81	土師質土器 埦	貯蔵穴内 ½残存	口　13.3 底　5.8 高　5.2	白色鉱物粒子	酸化焔	鈍橙	轆轤成形（右回転）、付高台。	
114—2 81	須恵器 埦	貯蔵穴内 破片	口　12.6	〃	還元焔	灰白	轆轤成形（右回転）、高台欠損（付高台）。	

D区第43号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目（cm） 量目（g）	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
115—1 81	須恵器 羽釜	床直層 破片	口　20.2	黒色粒子 白色粒子	還元焔 酸化気味	灰褐	口縁部は内湾する。紐作り後轆轤整形（右回転）。鍔は貼り付け。器厚は非常に薄い。	

遺物一覧表

D区第44号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 量目	(cm) (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
116—1 81	土師質土器 埦	床直層 破片	口	13.6	白色鉱物粒子	酸化焔	鈍黄橙	轆轤成形(右回転)、高台欠損(付高台)。	
116—2 81	土師質土器 坏	新カマド内 ほぼ完形	口 底 高	12.5 6.5 3.7	細砂粒	中性焔	橙 黄灰	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。	
116—3 81	須恵器 羽釜	旧カマド内 破片	口	23.7	黒色粒子	還元焔	灰	口縁部は直立し、口唇部は内側に肥厚している。紐作り後轆轤整形(右回転)。鍔は貼り付け。	
116—4 81	須恵器 羽釜	貯蔵穴内 破片	口	23.7	白色鉱物粒子 凝灰岩粒	中性焔	浅黄橙	〃	

D区第46号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 量目	(cm) (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
117—1 81	土師器 坏	カマド掘り方½残存	口 底 高	16.5 5.4 1.3	白色粒子 シルト質	酸化焔	鈍橙	口縁部は外傾する。型作り後底部下半～底部は篦撫でを施こし、口縁部円面は撫で整形施こす。底部に離砂痕有。	
117—2 81	土師質土器 坏 (黒色土器)	掘り方内 完形	口 底 高	12.8 7.0 3.8	白色鉱物粒子	〃	黒	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。内外面燻し処理。	
117—3 81	須恵器 埦	〃	口 底 高	13.0 6.6 5.7	白色鉱物粒子 凝灰岩粒	中性焔	灰白 オリーブ灰	轆轤成形(右回転)、付高台。	
117—4 81	土師質土器 埦	〃	口 底 高	13.0 6.7 5.0	白色鉱物粒子 凝灰岩粒	中性焔	〃	轆轤成形(右回転)、付高台。	
117—5 81	土師質土器 埦 (黒色土器)	カマド内 掘り方内 完形	口 底 高	13.2 6.9 4.7	凝灰岩粒 微粒雲母	酸化焔	黒灰	轆轤成形(右回転)、付高台。内外面燻し処理。	
118—1 81	土師質土器 埦	床直 完形	口 底 高	13.2 6.6 5.3	白色鉱物粒子	〃	鈍黄灰	轆轤成形(右回転)、付高台。外面口縁部に「如」の墨書。	
118—2 82	土師質土器 埦	床直 ⅓残存	口 底 高	13.5 5.1 6.5	黒色鉱物粒子	〃	鈍橙	轆轤成形(右回転)、付高台。	
118—3 82	土師質土器 埦 (黒色土器)	カマド内 一部欠損	口 底 高	13.5 6.7 5.2	白色鉱物粒子	〃	鈍黄褐	轆轤成形(右回転)、付高台。内外面燻し処理。	
118—4 82	須恵器 埦	掘り方内 覆土内 破片	口	14.0	〃	還元焔 酸化気味	灰白	轆轤成形(右回転)、高台欠損(付高台)。	
118—5 82	土師質土器 坏	掘り方内 覆土内 ⅓残存	口 底 高	17.2 (6.5) 5.3	凝灰岩粒 黒色鉱物粒子	酸化焔	オリーブ灰	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。	
118—6 82	土師器 小型甕	カマド覆土 一部欠損	口 底 高	11.0 6.0 10.2	白色鉱物粒子 細砂粒	〃	黒	紐作り後撫で整形。底部は厚く肩が張り、口縁部は強く屈曲する。外面は撫で、内面は篦撫でを施す。	
118—7 82	須恵器 羽釜	掘り方覆土 ⅓残存	口	23.0	凝灰岩粒 細砂粒	〃	鈍橙	口縁部は内湾し口唇部は外側に肥厚している。紐作り後轆轤整形(右回転)。鍔は貼り付け。胴部下半篦削り。	
118—8 82	施釉陶器 灰釉埦	床直層 底部残存	底	5.2	密	良好	灰白	轆轤成形(右回転)、付高台。施釉は不詳。内面全部に釉付着。	

D区第47号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目（cm） 量目（g）	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
119—1 82	土師質土器 鉢 (内黒土器)	覆土内 破片	口 13.7	凝灰岩粒 微粒砂	酸化焔	橙	轆轤成形。内面に研磨を施し燻し処理。	
119—2 82	須恵器 皿	覆土内 ⅓残存	口 13.3 底 6.3 高 2.9	白色粒子	中性焔 還元気味	灰	轆轤成形(右回転)、付高台。	
119—3 82	土師器 甕	覆土内 破片	口 18.0	赤褐色粒子	酸化焔	鈍橙	口縁部は外反する。紐作り。外面胴部は篦削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篦撫で。	
119—4 82	瓦 女瓦	覆土内 ⅓残存	厚 2.0	白色鉱物粒子	還元焔	灰白	一枚造り。凹面粘土板剝ぎ取り痕。凸面撫で整形。側部面取り2回、端部面取り1回。端部に広葉樹の木葉圧痕有。	乗附系か 吉井系

C区第1号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目（cm） 量目（g）	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
121—1 82	土師器 土釜	床直 ⅓残存	口 29.5 底 9.6 高 28.9	砂粒多 凝灰岩粒	酸化焔	鈍赤褐	口縁部は外反する。紐作り後篦撫で整形。	
121—2 82	鉄製品 鉄鏃	覆土内 茎先欠損	残存長14.3 身幅 1.1 重 (19.9)	——	—	—	有茎半根三角型篦被式とも考えうるが、鏃関から切先の間にはふくらが認められ、柳葉式とも考えられる。鍛造は不良。	
121—3 82	鉄製品 刀子	覆土内	長 17.7 重 19.0	——	—	—	使用に伴う砥き減りが顕著。身長9.7・身幅0.6・重0.25・茎長8.0。	鍛造良好なのか？
123—1 82 瓦—36	瓦 男瓦	カマド左袖 ⅗残存	広 19.0 幅 18.0 厚 2.3	白色鉱物粒子	還元焔	灰白	半截作り。篦描き文字瓦「里か黒」(凸面)。凸面撫で整形。側部面取り4回、端部面取り3回。	吉井系
123—2 82	瓦 男瓦	カマド右袖 ⅗残存	厚 2.2	〃	中性焔	オリーブ灰	半截作り。凹面粘土板剝ぎ取り痕。布目擦り消し。凸面縄叩き密後。撫で整形。	〃
123—3 83	瓦 男瓦	カマド支脚 破片	厚 1.8	白色粒子	〃	灰褐	半截作り。凹面布合せ目痕。凸面篦撫で整形。側部面取り2回。	笠懸系
123—4 83	瓦 男瓦	床直層 細片	厚 1.9	白色鉱物粒子	還元焔	灰	半截作り。凸面撫で整形。側部面取り2回。	吉井系
124—1 83	瓦 男瓦	床直層 破片	厚 1.6	〃	酸化焔	鈍橙	半截作り。凹面粘土板剝ぎ取り痕。凸面撫で整形。側部面取り2回。	〃
124—2 83	瓦 女瓦	床直層	厚 2.1	白色鉱物粒子 シルト粒	還元焔	灰白	一枚造り。凸面撫で整形。側部面取り2回、端部面取り1回。	〃
124—3 83	瓦 女瓦	カマド内 破片	厚 1.5	白色粒子 黒色粒子	〃	灰	一枚造り。凹面粘土板剝ぎ取り痕。凸面平行叩き	笠懸系
124—4 83	瓦 女瓦	貯蔵穴内 破片	厚 1.8	白色鉱物粒子 透明鉱物粒子	〃	灰白	一枚造り。凹面粘土板剝ぎ取り痕。凸面撫で整形。側部面取り2回。	吉井系
124—5 83 瓦—37	瓦 女瓦	覆土内 細片	厚 1.9	白色鉱物粒子	中性焔	灰	一枚造りか。凹面円管刺突。粘土板剝ぎ取り痕。凸面撫で整形。	〃

C区第2号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目（cm） 量目（g）	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
125—1 83	須恵器 羽釜	カマド内 破片	口 17.0	砂粒多	酸化焔	橙	口縁部は内湾する。紐作り後轆轤整形(右回転)。鍔は貼り付け。	
125—2 83 瓦—116	瓦 宇瓦	カマド内	厚 1.9	白色鉱物粒子	還元焔	灰	右扁行唐草文。顎は段顎。女瓦部一枚造り。凸面撫で整形。側部面取り1回。	吉井系 59-6・59-7と同一個体
125—3 83	瓦 鐙瓦	カマド内 ¼残存	厚 2.3	〃	〃	暗灰	半截作り。凹面粘土板剝ぎ取り痕・赤色顔料塗彩。凸面撫で整形。側部面取り2回。	吉井系

125－4 83	瓦 男　瓦	カマド内 破片	厚　2.0	白色鉱物粒子	還元焔	灰	半截作り。凹面粘土板剝ぎ取り痕。凸面撫で整形。側部面取り3回。	吉井系
125－5 83	瓦 女　瓦	カマド内	厚　2.5	〃	〃	〃	紐作り。凸面撫で整形。側部面取り2回、端部面取り2回。	不詳
126－1 83	瓦 女　瓦	カマド右袖 ⅓残存	厚　2.1	〃	酸化焔	橙	一枚造り。凸面撫で整形。側部面取り3回、端部面取り2回。	吉井系
126－2 83	瓦 女　瓦	カマド左袖 〃	厚　2.2	白色鉱物粒子 黒色粒子	還元焔	灰	一枚造り。凹面布目撫で消し。凸面撫で整形。側部面取り2回、端部面取り3回。	乗附系
126－3 84	瓦 女　瓦	カマド内 破片	厚　1.8	黒色鉱物粒子	〃	〃	一枚造り。凸面撫で整形。内外面ハゼが著しい。	吉井系
126－4 83	瓦 女　瓦	カマド内 破片	厚　2.0	白色鉱物粒子	還元焔	暗灰	一枚造り。凹面粘土板剝ぎ取り痕。凸面撫で整形。側部面取り2回。	吉井系
126－5 83	瓦 男　瓦	カマド内 細片	厚　1.8	〃	〃	〃	半截作り。凸面撫で整形。側部面取り2回。	〃

C区第3号住居跡

挿図番号 図版番号	種　別 器　種	出土位置 遺存状態	度目　(cm) 量目　(g)	胎　土	焼　成	色　調	器形・技法等の特徴	備　考
127－1 84	土師質土器 皿	覆土内 完形	口　8.2 底　5.5 高　2.1	赤褐色粒子 シルト粒 細粒砂	酸化焔	橙	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り後篦削り。口唇部は有機質付着。	
127－2 84	土師質土器 皿	床直層 破片	口　8.4 底　5.3 高　2.1	細粒砂 シルト質	中性焔	灰白	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。	
127－3 84	土師質土器 皿	覆土内 ½残存	口　9.7 底　5.2 高　1.9	〃	〃	橙	〃	
127－4 84	土師質土器 皿	覆土内 ¼残存	口　9.9 底　6.2 高　2.6	砂粒	酸化焔	褐灰 黒灰	〃	
127－5 84	土師質土器 皿	覆土内 ½残存	口　10.0 底　6.3 高　2.6	細粒砂	中性焔	褐灰 灰白	〃	
127－6 84	土師質土器 坏	床直 ⅔欠損	口　12.8 底　7.0 高　4.2	赤褐色粒子 黒色鉱物粒子	酸化焔	橙	〃	
127－7 84	土師器 土　釜	覆土内 破片	口　22.9	砂粒	〃	橙褐	口縁部は外反する。紐作り後篦撫で整形。	
128－1 84	石製品 丸　石	覆土内 完存	長　14.8 幅　9.9 厚　2.9	粗粒安山岩	—	—	小口で縁辺に敲打痕有。火中している。	重 650ｇ
129－1 84	土師器 土　釜	床直 破片	口　23.0	赤褐色粒子 シルト質	酸化焔	黄橙	口縁部は外反する。紐作り後篦撫で整形。	
129－2 84	土師器 土　釜	カマド内	口　35.0	砂粒	酸化焔 (二次焼成)	橙	口縁部は外反する。紐作り後篦撫で整形。	
129－3 84	須恵器 大　甕	床直層	——	白色鉱物粒子 凝灰岩粒	還元焔	暗灰	紐作り後轆轤整形。内面一部磨滅。	
129－4 84	瓦 女　瓦	カマド内 ¾残存	広　(26.1) 狭　(23.0) 長　(37.2)	黒色粒子	〃	灰	一枚造り。模骨痕有。凸面縄叩き密。凸面離砂痕多。側部面取り2回、端部面取り2回。	乗附系
130－1 84 瓦－117	瓦 宇　瓦	覆土内 細片	厚　2.3	白色鉱物粒子	中性焔	〃	瓦当意匠(不分明)。瓦当接合部は印籠付。創建意匠と思われる。女瓦部は一枚造り。凸面赤色顔料塗彩。	吉井系
130－2 84	瓦 男　瓦	床直層 破片	厚　1.8	シルト粒	還元焔	白灰	半截作り。凸面轆轤撫で。側部面取り3回。	秋間系
130－3 84	瓦 女　瓦	床直層 ⅓残存	厚　2.3	白色鉱物粒子	〃	灰白	桶巻き造り。模骨痕有。凸面縄叩き(密)後撫で整形。	乗附系か 笠懸系
130－4 84 瓦－38	瓦 女　瓦	覆土内 細片	厚　2.8	〃	中性焔	灰	一枚造り。篦描き文字瓦「判読不能」(凸面)。凸面撫で整形。	吉井系

130—5 84	瓦 女　瓦	覆土内 破片	厚　1.8	赤褐色粒子 シルト粒	還元焔	白灰	桶巻き造りか。凸面撫で整形。側部面取り1回。	130-6・7と同一個体か。秋間系
130—6 85	瓦 女　瓦	カマド内 ¼残存	厚　2.0	〃	〃	〃	〃	130-5・7と同一個体か。秋間系
130—7 84	瓦 女　瓦	床直層 細片	厚　2.3	〃	〃	〃	〃	130-5・6と同一個体か。秋間系
130—8 85	瓦 女　瓦	カマド内 破片	厚　2.0	白色鉱物粒子	〃	灰白	桶巻き造り。模骨痕有。凹面布目擦り消し。凸面轆轤撫で。側部面取り2回。端部面取り2回。	乗附系か笠懸系
130—9 84	瓦 女　瓦	〃 〃	厚　1.4	白色粒子	〃	灰	桶巻き造り。凸面正格子叩き。両面粘土板剝ぎ取り痕。	笠懸系
130—10 85	瓦 女　瓦	〃 〃	厚　2.5	白色鉱物粒子	〃	灰白	一枚造り。凹面粘土板剝ぎ取り痕。凸面縄叩き後撫で整形。端部面取り1回。	吉井系

C区第4号住居跡

挿図番号 図版番号	種　別 器　種	出土位置 遺存状態	度目　(cm) 量目　(g)	胎　土	焼　成	色　調	器形・技法等の特徴	備　考
131—1 85	施釉陶器 緑釉埦	床直層 破片	——	密	良好	緑	轆轤成形(右回転)、高台欠損(付高台)。	
131—2 85	瓦 男　瓦	覆土内 細片	厚　2.3	白色鉱物粒子	還元焔	暗灰	半截作り。凸面撫で整形。側部面取り2回。	吉井系
131—3 85	瓦 女　瓦	床直層 破片	厚　1.8	シルト質	還元焔	白灰	一枚造りか。凹面指頭による撫で(文字か)。凸面縄叩き(密)。	秋間系

C区第5号住居跡

挿図番号 図版番号	種　別 器　種	出土位置 遺存状態	度目　(cm) 量目　(g)	胎　土	焼　成	色　調	器形・技法等の特徴	備　考
133—1 85	土師質土器 皿	覆土内 破片	口　7.9 底　3.1 高　2.2	黒色鉱物粒子 シルト質	酸化焔	灰黄	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。	
133—2 85	土師質土器 坏	カマド内	口　10.0 底　6.0 高　2.5	砂粒	〃	黄橙	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。	
133—3 85	土師質土器 坏	カマド内 ⅓残存	口　15.0 底　6.2 高　3.9	白色粒子	酸化焔 還元気味	灰黄	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。	
133—4 85	土師器 土　釜	カマド内 破片	口　23.9	砂粒	酸化焔	橙	口縁部は外反する。紐作り後篦撫で整形。	
133—5 85	鉄製品 釘　か	覆土内	重(19.5g)	——	—	—	断面は長方形を呈す。錆化が顕著。	
133—6 85	鉄製品 刀　子	覆土内	重　(6.3g)	——	—	—	使用に伴う研ぎ減りが著しい。	
133—7 85	土製品 円　盤	覆土内 完存	5.3×5.0	白色粒子	還元焔	灰白	土師質埦を転用し不完全な穴を有する。	
133—8 85	瓦 鐙　瓦	カマド内 破片	厚　2.3	黒色粒子 白色粒子	中性焔	灰褐	半截作り。瓦当部欠損。凸面の成形(篦削り)から鐙瓦と考えられる。想定される意匠は統一国分寺意匠である。	笠懸系
133—9 85	瓦 女　瓦	カマド内	厚　1.7	白色鉱物粒子	還元焔	灰	一枚造り。凸面撫で整形。側部面取り3回。	吉井系

C区第6号住居跡

挿図番号 図版番号	種　別 器　種	出土位置 遺存状態	度目　(cm) 量目　(g)	胎　土	焼　成	色　調	器形・技法等の特徴	備　考
135—1 85	土師質土器 坏　か (内黒土器)	覆土内 破片	口　18.6	微粒雲母	酸化焔	黄橙	轆轤成形(右回転)、内面横位の研磨を施し、燻し処理。	

135—2 85	土師質土器 坏	覆土内 ¼残存	口 14.6 底 6.0 高 4.3	白色鉱物粒子 半透明鉱物粒子 細砂粒	〃	鈍黄褐	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。	
135—3 85	土師質土器 坏	床直層 破片	口 15.0 底 6.2 高 4.6	赤褐色粒子 黒色粒子	中性焔	灰褐	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。	
135—4 85	須恵器 大甕	床直層	口 27.9	白色鉱物粒子	還元焔	橙	紐作り後叩き整形。	
135—5 85	土師器 土釜	床直層	底 13.5	白色鉱物粒子 砂粒多	酸化焔	鈍橙	口縁部は外反する。紐作り後箆撫で整形。	
135—6 85	施釉陶器 灰釉埦	覆土	——	密	良好	灰	轆轤成形(右回転)、高台欠損(付高台)。	
135—7 85	施釉陶器 灰釉埦	床直層	口 13.0	〃	〃	〃	轆轤成形(右回転)、高台欠損(付高台)。施釉は浸掛。	
135—8 85	施釉陶器 灰釉埦	床直層 底部残存	底 4.8	〃	〃	〃	轆轤成形(右回転)、付高台。施釉は浸掛。	
135—9 85	瓦 女瓦	カマド内 ½残存	厚 2.4	白色鉱物粒子	不詳 (二次焼成)	浅黄橙	一枚造り。凹面粘土板剝ぎ取り痕。凸面粘土板剝ぎ取り痕を撫で消す。側部面取り3回、端部面取り2回。	吉井系
136—1 85 瓦—39	瓦 女瓦	カマド堀り 方内破片	厚 2.2	〃	還元焔	暗灰	一枚造り。箆描き文字瓦「子」か。(凸面)。凸面撫で整形。側部面取り1回、端部面取り1回。	〃
136—2 85	瓦 男瓦	覆土内 細片	厚 1.8	白色鉱物粒子 半透明鉱物粒子	還元焔	灰	半截作り。箆描き文字瓦「生」か。(凹面)。凸面撫で整形。	〃
136—3 85	瓦 女瓦	床直層 細片	厚 1.7	黒色粒子	〃	灰白	樋巻き造りか。凸面正格子叩き。両面粘土板剝ぎ取り痕。	吉井系
136—4 85	瓦 女瓦	床直層	厚 1.5	白色鉱物粒子 半透明鉱物粒子 砂粒	中性焔	浅黄橙	一枚造り。凸面斜格子叩き。凹面布目撫で消し、側部面取り2回。端部面取り2回。	〃

C区第7号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
138—1 86	須恵器 羽釜	床直 破片	口 19.8	白色鉱物粒子 砂粒	酸化焔	橙	口縁部は内湾する。紐作り後轆轤整形(右回転)。鍔は貼り付け。	
138—2 86	土師器 土釜	傍竈坑 ¼残存	口 13.1 底 10.2 高 10.2	白色鉱物粒子 凝灰岩粒	酸化焔	鈍黄橙	口縁部は内湾する。紐作り後箆撫で整形。	
138—3 86	須恵器 大甕	床直 破片	——	白色鉱物粒子 凝灰岩粒	還元焔	暗灰	紐作り後轆轤整形。内面磨滅。	
138—4 86	土製品 円盤	覆土内 完存	径 2.2	シルト質 赤褐色粒子	酸化焔	黄橙	土師質土器・皿の破片の転用。割れ口をよく研いている。	
138—5 86	瓦 男瓦	覆土内 破片	厚 2.3	白色鉱物粒子	還元焔	灰白	半截作り。凹面粘土板剝ぎ取り痕。凸面撫で整形。側部面取り3回。端部面取り2回。	吉井系
139—1 86 瓦—96	瓦 鐙瓦	カマド左 壁¼残存	広 (14.8) 狭 (11.4) 長 28.3	黒色粒子 白色粒子	〃	暗灰	瓦当部欠損。男瓦部は素文造り後轆轤整形。凸面轆轤撫で。側部面取り2回。端部面取り1回。全面自然釉付着。	秋間系
139—2 86	瓦 男瓦	カマド内 ¼残存	厚 1.8	白色鉱物粒子	〃	灰	半截作り。凹面布目撫で消し有。凸面撫で仕上げ。側部面取り1回。	吉井系
139—3 86	瓦 女瓦	カマド内	厚 2.1	〃	〃	〃	桶巻き造りか。模骨痕か。凹面粘土板剝ぎ取り痕。凸面撫で整形。側部面取り2回。	〃
140—1 86	瓦 女瓦	カマド右 壁¼残存	幅 23.5 狭 20.5 厚 2.1	〃	〃	灰白	一枚造り。模骨痕有。凹面布目撫で消し。凸面縄叩き密後撫で整形。側部面取り2回。端部面取り2回。	〃
140—2 86	瓦 女瓦	カマド内 破片	厚 2.6	〃	〃	灰	桶巻き造り。模骨痕有。凸面轆轤撫で。側部面取り3回。端部面取り2回。	乗附系
140—3 86	瓦 女瓦	カマド内	厚 2.5	黒色粒子	〃	灰白	一枚造り。凹面布目撫で消し。凸面縄叩き密。凸面離砂痕多量。側部面取り2回。端部面取り2回。	秋間系

D区第1号井戸跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目（cm） 量目（g）	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
142－1 87	土師質土器 坏	埋土内 ½残存	口 10.7 底 6.6 高 3.1	シルト質	中性焔	オリーブ灰	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。	
142－2 87	土師質土器 坏	〃 ⅔残存	口 11.5 底 6.2 高 3.8	〃	酸化焔	浅黄褐	〃	
142－3 87	須恵器 坏	〃 ½残存	口 12.0 底 6.0 高 2.9	〃	還元焔 酸化気味	灰白	〃	
142－4 87	須恵器 埦	〃 ¾残存	口 12.3 底 6.1 高 5.4	白色鉱物粒子	還元焔	灰	轆轤成形(右回転)、付高台。	
142－5 87	土師質土器 埦	〃 高台欠損	口 13.6	〃	酸化焔	鈍黄橙	轆轤成形(右回転)、高台欠損(付高台)。	
142－6 87	土師質土器 埦	〃 ⅓残存	口 15.3	〃	〃	黄橙	〃	
142－7 87	土師質土器 埦	〃 一部欠損	口 7.1 底 8.4 高 6.2	微粒砂 シルト質	〃	オリーブ灰	轆轤成形(右回転)、付高台。	
142－8 87	土師質土器 足高高台埦	〃	口 17.7 底 12.0 高 10.5	赤褐色粒子 凝灰岩粒	〃	橙	轆轤成形(右回転)、付高台。体部下半～底部回転篦削り。	
142－9 87	土師質土器 足高高台埦	埋土内 坏部欠損	——	赤褐色粒子 凝灰岩粒	酸化焔	橙	轆轤成形(右回転)、付高台。	
142－10 87	土師質土器 甕	〃 破片	——	白色鉱物粒子	〃	鈍黄橙	口縁部は外反する。紐作り。外面胴部は篦削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篦撫で。	
142－11 87	施釉陶器 灰釉埦	〃	——	密	良好	灰	轆轤成形(右回転)、高台欠損(付高台)。施釉は不詳。	
142－12 87	施釉陶器 灰釉埦	〃 体部下半欠損	底 6.7	〃	〃	〃	轆轤成形(右回転)、付高台。施釉は不詳。	
142－13 87	施釉陶器 灰釉埦	〃 破片	底 (6.8)	〃	〃	〃	〃	
142－14 87	施釉陶器 灰釉埦	〃	——	〃	〃	〃	轆轤成形(右回転)、高台欠損(付高台)。施釉は不詳。	
142－15 87	施釉陶器 灰釉埦	〃	底 (7.6)	〃	〃	〃	轆轤成形(右回転)、付高台。施釉は浸掛。	
142－16 87	施釉陶器 灰釉埦	〃	底 (8.2)	〃	〃	〃	〃	
142－17 87	施釉陶器 灰釉埦	〃 ¼残存	——	〃	〃	〃	轆轤成形(右回転)、付高台。施釉は浸掛。	
142－18 87	施釉陶器 灰釉瓶	〃 破片	——	〃	〃	〃	紐作り後轆轤整形(右回転)。施釉は刷毛塗か。	
143－1 87	礫器 塙石	埋土内 完存	長 14.6 幅 5.8 厚 4.6	——	—	—	小口より側面に塙打痕有。磨滅面有。	
143－2 87	〃 〃	〃 ½残存	幅 7.5 厚 5.0	——	—	—	小口及び側面に塙打痕有。	
143－3 87	〃 〃	〃 破片	幅 7.5	——	—	—	小口に塙打痕有。	
143－4 87	〃 〃	〃 ½残存	幅 8.2 厚 4.6	——	—	—	〃	
143－5 87	石製品 砥石	〃 破片	重 (21.1)	——	—	—	比傷は細かく多い。	
143－6 87	鉄製品 釘か	〃 完存	重 (　)	——	—	—	断面等不詳。錆化が非常に著しい。	
143－7 87	鉄製品 釘か	〃 破片	重 (　)	——	—	—	断面は正方形を呈する。錆化が著しい。	

143－8 87 瓦－99	瓦 鐙　瓦	埋土内 被片	厚　1.8	黒色粒子	還元焔	灰	瓦当接合部は芋付。瓦当意匠は不文明。	秋間系
143－9 87 瓦－97	瓦 鐙　瓦	〃	厚　2.1	白色鉱物粒子	〃	〃	単弁5葉蓮華文。中房の子葉は1＋5。外区に左扁行唐草文を巡す。瓦当接合部は芋付。背面撫で整形。	吉井系
143－10 87 瓦－100	瓦 鐙　瓦	〃	厚　2.5	白色粒子 半透明鉱物粒子	中性焔	浅黄橙 灰褐	単弁5葉蓮華文。中房の子葉は1＋5。瓦当接合部は芋付。背面からの刺突が認められる。	笠懸系
143－11 87 瓦－98	瓦 鐙　瓦	埋土内 破片	——	白色鉱物粒子	還元焔	灰	単弁4葉蓮華文。珠点中房。弁間に珠点を配す。一本造り。	吉井系
143－12 87	瓦 鐙　瓦	〃	厚　1.8	白色粒子	〃	暗灰	瓦当部欠損。一本造り。想定される瓦当意匠は単弁4葉。男瓦部は半截作りか。凸面撫で整形。側部面取り2回。	〃
143－13 87	瓦 鐙　瓦	〃	厚　1.8	シルト質	〃	白灰	瓦当部欠損。瓦当接合部は芋付。男瓦部は半截作りか。凸面篦撫で整形。側部面取り1回。	秋間系
144－1 88 瓦－119	瓦 宇　瓦	〃 女瓦部½ 欠損	狭　21.8 幅　(24.1) 厚　1.4	黒色粒子	〃	灰	瓦当意匠は綾杉文。女瓦部は一枚造り。凹面模骨痕・粘土板剝ぎ取り痕。凸面縄叩き密、瓦当側横位に施す。凸面離砂痕。	〃
144－2 88 瓦－118	瓦 宇　瓦	〃 ½残存	厚　3.1	黒色粒子	〃	灰白	瓦当意匠は描象。瓦当接合部は印籠付。段顎。女瓦部凹面に指撫でが見られる。剝落部分には粘土板剝ぎ取り痕が認められる。凸面横撫で整形。	笠懸系
144－3 88 瓦－124	瓦 宇　瓦	〃 破片	厚　1.3	〃	〃	〃	瓦当意匠は重弧文。瓦当接合部は印籠付。女瓦部一枚造り。模骨痕有。凸面縦位の篦撫で。側部面取り1回。	秋間系
144－4 88 瓦－121	瓦 宇　瓦	〃	厚　2.0	白色鉱物粒子	〃	〃	瓦当意匠は篦描き重弧文。瓦当部から凹面にかけて自然釉付着。凸面篦撫で整形。	吉井系
144－5 88 瓦－120	瓦 宇　瓦	〃	厚　1.8	赤褐色粒子	〃	〃	瓦当意匠は均整唐草文。瓦当接合部は印籠付。女瓦部は一枚造りか(模骨痕有)。凸面撫で整形。	100-10と同一個体。笠懸系
145－1 88 瓦－122	瓦 宇　瓦	〃	厚　1.5	白色粒子 赤褐色粒子	不詳 (二次焼成)	鈍黄橙	瓦当意匠は残存部にない。瓦当接合部は印籠付。女瓦部は一枚造りか。凸面縄叩き(粗)。顎部に赤色顔料塗彩。	〃 161-1と同一個体。
145－2 88	瓦 宇　瓦	〃	厚　2.3	白色粒子	還元焔	灰	瓦当部欠損。瓦当接合部は印籠付。顎部は横位の篦撫で。女瓦部は一枚造りか。凸面縦位の篦撫で。	〃
145－3 88 瓦－123	瓦 宇　瓦	埋土内 破片	厚　3.2	白色鉱物粒子	中性焔	灰褐	瓦当残存部分は模様なし。	吉井系
145－4 88 瓦－41	瓦 男　瓦	〃	厚　2.4	〃	還元焔	暗灰	半截作り。篦描き文字瓦「上」(凸面)。凸面撫で整形。側部面取り2回。	〃
145－5 88 瓦－40	瓦 男　瓦	〃 ⅔残存	幅　16.5 厚　1.5	〃	〃	白灰	半截作り。篦描き文字瓦「人・井？」(凸面)。凸面撫で整形。側部面取り3回。	〃
145－6 89 瓦－43	瓦 男　瓦	〃	狭　(20.8) 厚　2.0	〃	〃	暗灰	半截作り。篦描き文字瓦「口弓」(凸面)。凸面撫で整形。側部面取り3回。端部面取り2回。	〃
146－1 89 瓦－51	瓦 男　瓦	〃 ¾残存	広　19.5 幅　16.7 厚　2.1	〃	〃	灰	半截作り。篦描き文字瓦「土？」(凸面)。側部面取り2回。端部面取り1回。	〃
146－2 89 瓦－50	瓦 男　瓦	〃 細片	厚　2.3	〃	〃	暗灰	半截作り。篦描き文字瓦「判読不能」(凸面)。凸面撫で整形。	〃
146－3 89 瓦－55	瓦 男　瓦	〃 ⅓残存	厚　2.2	〃	〃	〃	半截作り。篦描き文字瓦「井？」(凸面)。凹面粘土板剝ぎ取り痕。凸面撫で整形。側部面取り2回。端部面取り3回。	〃

146－4 89 瓦－53	瓦 男　瓦	埋土内 破片	厚　1.7	白色鉱物粒子	還元焔	灰	半截作り。篦描き文字瓦「判読不能」(凸面)。凸面撫で整形。側部面取り1回。端部面取り1回。	吉井系
146－5 89 瓦－45	瓦 男　瓦	〃	厚　2.0	〃	〃	暗灰	半截作り。篦描き文字瓦「乙？」(凸面)。凸面撫で整形。側部面取り2回。	〃
146－6 89 瓦－66	瓦 男　瓦	〃 細片	厚　1.8	〃	〃	〃	半截作り。篦描き文字瓦「判読不能」(凹面)。凸面撫で整形。側部面取り1回。	〃
146－7 89 瓦－46	瓦 男　瓦	埋土内 破片	厚　2.1	白色鉱物粒子	還元焔	白灰	半截作り。凸面縄叩き(密)後撫で整形。端部に篦傷有。	秋間系か 乗附系
147－1 89	瓦 男　瓦	〃 ¼残存	厚　1.8	黒色粒子	〃	灰	半截作り。凹面粘土板剝ぎ取り痕。凸面轆轤撫で整形。側部面取り2回。	秋間系
147－2 89	瓦 男　瓦	〃 ⅓残存	厚　1.6	白色鉱物粒子	〃	〃	半截作り。凹面布合せ目痕。凸面撫で整形。側部面取り2回。端部面取り1回。	吉井系
147－3 89	瓦 男　瓦	〃 破片	厚　1.4	赤褐色粒子 白色鉱物粒子	中性焔	灰褐	半截作り。凹面布合せ目痕。凸面轆轤撫で整形。側部面取り3回。端部面取り1回。	147-4と同一個体。笠懸系
147－4 89	瓦 男　瓦	〃	厚　1.4	〃	〃	〃	〃	147-3と同一個体。 〃
147－5 90	瓦 男　瓦	〃 細片	厚　1.1	白色粒子 半透明鉱物粒子	酸化焔	黄橙	半截作り。凸面轆轤撫で。側部面取り1回。端部面取り1回。玉縁付男瓦の玉縁部の可能性がある。	笠懸系
147－6 90	瓦 男　瓦	〃 細片	厚　0.9	〃 〃	〃	〃	半截作り。凸面轆轤。側部面取り1回。	笠懸系
148－1 90	瓦 男　瓦	〃 ⅓残存	厚　1.8	白色鉱物粒子	還元焔	灰	半截作り。両面粘土板剝ぎ取り痕。凸面撫で整形。側部面取り2回。端部面取り1回。	吉井系
148－2 90	瓦 男　瓦	〃 ¾残存	狭　(11.8) 幅　13.8 厚　1.6	黒色粒子	〃	白灰	半截作り。凹面布合せ目痕。篦傷あり。凸面篦撫で整形。側部面取り2回。端部面取り1回。	秋間系
148－3 90	瓦 男　瓦	〃	厚　1.5	赤褐色粒子 黒色粒子	〃	〃	半截作り。凹面粘土板剝ぎ取り痕。部分補修あり。凸面縄叩き(密)後轆轤撫で整形。撫で整形。	〃
148－4 90	瓦 男　瓦	埋土内 ⅖残存	狭　11.5 厚　2.1	白色鉱物粒子 半透明鉱物粒子	還元焔	灰	半截作り。凹面布合せ目痕。凸面縄叩き(密)後撫で整形。側部面取り3回。端部面取り1回。	吉井系
149－1 90	瓦 男　瓦	〃 ¾残存	幅　16.6 長　36.3 厚　2.2	黒色粒子	〃	〃	半截作り。凹面粘土板剝ぎ取り痕。凸面篦撫で整形。側部面取り3回。端部面取り1回。	秋間系
149－2 90	瓦 男　瓦	〃 ⅓残存	狭　(11.5) 幅　16.3 厚　0.9	白色粒子	〃	〃	半截作り。凸面轆轤撫で整形。凹面布合せ目痕。側部面取り2回。端部面取り1回。	笠懸系
149－3 90	瓦 男　瓦	〃 破片	厚　1.7	白色粒子 半透明鉱物粒子	酸化焔 (二次焼成)	黄橙	半截作り。凹面粘土板剝ぎ取り痕。凸面器面の風化が著しい。側部面取り2回。端部面取り2回。	〃
149－4 90	瓦 男　瓦	〃 ⅓残存	厚　1.7	〃 〃	還元焔	灰	紐作り。凹面紐作りの痕跡あり。凸面撫で整形。側部面取り2回。端部面取り2回。	〃
149－5 91	瓦 男　瓦	〃 破片	厚　2.0	黒色粒子 白色鉱物粒子	〃	暗灰	半截作り。凹面粘土板剝ぎ取り痕。凸面正格子叩き。側部面取り1回。端部面取り1回。	乗附系
150－1 91	瓦 玉縁付 男　瓦	〃 ⅔残存	厚　2.2	白色粒子	〃	灰褐	半截作り。凹面粘土板剝ぎ取り痕。粘土板合せ目有。凸面轆轤整形。側部面取り2回。	笠懸系
150－2 91	瓦 玉縁村男瓦	〃 ¾残存	狭　14.6 幅　15.0 厚　2.0	黒色粒子 白色鉱物粒子	〃	灰	半截作り。凹面布合せ目痕。凸面轆轤整形。側部面取り3回。端部面取り2回。	玉縁幅 12.0 乗附系
150－3 91 瓦－64	瓦 女　瓦	〃 破片	厚　1.5	白色鉱物粒子	〃	暗灰	一枚造り。篦描き文字瓦「子」(凸面)。凸面撫で整形。側部面取り3回。端部面取り1回。	吉井系
150－4 91 瓦－65	瓦 女　瓦	〃 細片	厚　2.7	白色鉱物粒子 凝灰岩粒	酸化焔? (二次焼成か)	橙	一枚造りか。篦描き文字瓦「判読不能」(凸面)。凸面縄叩き(密)。	吉井系

151－1 91 瓦－48	瓦 女　瓦	埋土内 ⅔残存	長　40.8 狭　20.5 厚　2.1	白色鉱物粒子 凝灰岩粒	還元焔	暗灰	一枚造り。篦描き文字瓦「織刀女」(凸面)。凸面撫で整形。側部面取り２回。端部面取り３回。	吉井系 女＝万呂
151－2 92 瓦－58	瓦 女　瓦	〃	長　37.8 狭　14.6 広　26.6	〃	〃	〃	一枚造り。篦描き文字瓦「十」(凸面)。凸面撫で整形。側部面取り３回。端部面取り２回。	〃
152－1 93 瓦－42	瓦 女　瓦	〃	広　27.6 幅　23.0 厚　1.9	〃	〃	〃	一枚造り。篦描き文字瓦「槐」(凸面)。凹面粘土板剝ぎ取り痕。凸面撫で整形。側部面取り１回。端部面取り１回。	〃
152－2 91 瓦－59	瓦 女　瓦	〃 破片	厚　2.0	白色鉱物粒子 シルト粒	中性焔	灰褐	一枚造り。篦描き文字瓦「南」(凸面)。凹面粘土板剝ぎ取り痕。凸面平行叩き後撫で整形。	〃
152－3 91 瓦－63	瓦 女　瓦	〃	厚　1.7	白色粒子	還元焔	灰	一枚造り。篦描き文字瓦「十」(凸面)。側部面取り３回。	笠懸系
153－1 92 瓦－60	瓦 女　瓦	〃 ⅔残存	厚　1.9	白色鉱物粒子	〃	〃	一枚造り。篦描き文字瓦「平」(凸面)。凹面粘土板剝ぎ取り痕。凸面撫で整形。側部面取り２回。端部面取り１回。	吉井系
153－2 91 瓦－52	瓦 女　瓦	〃 ⅓残存	長　2.0	〃	〃	暗灰	一枚造り。篦描き文字瓦「子総」(凸面)。凸面撫で整形。端部面取り２回。	〃
153－3 92 瓦－47	瓦 女　瓦	〃	厚　1.9	〃	中性焔	灰褐	一枚造り。篦描き文字瓦？「八」(凸面)。篦傷の可能性有。凸面撫で整形。側部面取り２回。端部面取り２回。	〃
153－4 91 瓦－61	瓦 女　瓦	〃 破片	厚　2.0	〃	還元焔	黒灰	一枚造り。篦描き文字瓦「家か」(凹面)。凸面撫で整形。側部面取り３回。	〃
154－1 92 瓦－57	瓦 女　瓦	〃 ⅓残存	厚　2.4	〃	〃	暗灰	一枚造り。篦描き文字瓦「千」(凸面)。凸面撫で整形。端部面取り２回。	〃
154－2 92 瓦－44	瓦 男　瓦	埋土内 破片	厚　2.3	〃	〃	〃	半截作り。篦描き文字瓦「坂か」(凸面)。凸面撫で整形。側部面取り２回。	吉井系
154－3 92 瓦－54	瓦 女　瓦	〃 ⅓残存	厚　2.2	白色粒子 白色鉱物粒子	〃	暗灰	一枚造り。篦描き文字瓦「代」(凸面)。凸面撫で整形。側部面取り２回。端部面取り１回。	〃
154－4 92 瓦－62	瓦 女　瓦	〃 ⅔残存	厚　2.2	白色鉱物粒子	〃	灰	一枚造り。篦描き文字瓦「田」(凸面)。凸面撫で整形。端部面取り２回。	〃
154－5 92 瓦－56	瓦 女　瓦	〃	厚　1.4	〃	〃	〃	桶巻き造り。篦描き文字瓦「野」(凸面)。凸面撫で整形。	〃
155－1 93	瓦 女　瓦	〃 ⅔残存	長　41.2 広　28.6 狭　22.1	〃	中性焔	灰褐	一枚造り。凹面粘土板剝ぎ取り痕。凸面縄叩き(密)後撫で整形。側部面取り２回。端部面取り２回。	〃
155－2 92	瓦 女　瓦	〃 細片	厚　2.8	〃 黒色粒子	還元焔	灰	紐作り。凹面紐作りの痕跡がみられる。凸面縄叩き整形(密)後撫で整形。側部面取り３回。	〃
155－3 93	瓦 女　瓦	〃 ⅔残存	長　41.3 厚　2.0	白色粒子 黒色粒子	〃	〃	一枚造り。模骨痕有。凸面斜格子叩き。両面粘土板剝ぎ取り痕。凸面撫で整形後斜格子叩き。側部面取り１回。端部面取り２回。	笠懸系
156－1 94	瓦 女　瓦	〃 ⅓残存	狭　25.0 厚　2.1	透明鉱物粒子	〃	灰白	桶巻き造り。凹面模骨痕。粘土板合せ目有。凸面縄叩き(密)後撫で整形。側部面取り３回。端部面取り２回。	乗附系
156－2 94	瓦 女　瓦	〃 ⅓残存	幅　26.4 狭　24.4 厚　2.2	黒色粒子	〃	暗灰	一枚造り。凸面縄叩き(密)。両面自然釉付着。側部面取り２回。端部面取り２回。	秋間系
156－3 94	瓦 女　瓦	〃 ⅔残存	厚　3.1	白色鉱物粒子 赤褐色粒子	中性焔	灰褐	一枚造り。凸面撫で整形。側部面取り２回。端部面取り２回。	吉井系
157－1 94	瓦 女　瓦	埋土内 ⅔残存	広　27.8 厚　1.8	白色鉱物粒子 赤褐色粒子	中性焔	灰褐	桶巻き造り。凹面模骨痕粘土板剝ぎ取り痕。凸面轆轤撫で。側部面取り２回。端部面取り１回。	吉井系

157－2 95	瓦 女　瓦	埋土内 ⅓残存	広　26.8 厚　1.9	白色鉱物粒子 黒色粒子	還元焔	暗灰	一枚造り。凹面粘土板剝ぎ取り痕。篦傷有。凸面粘土板剝ぎ取り痕。撫で整形。側部面取り2回。端部面取り2回。	吉井系
157－3 95	瓦 女　瓦	〃 ⅔残存	厚　1.8	白色鉱物粒子	〃	灰	一枚造り。凸面縄叩き(粗)多量。側部面取り2回。端部面取り1回。	笠懸系
158－1 95	瓦 女　瓦	〃 ¼残存	厚　2.0	白色鉱物粒子 黒色粒子	〃	〃	一枚造り。凹面布目撫で消し。凸面撫で整形後斜格子叩き。側部面取り1回、端部面取り1回。	〃
158－2 95	瓦 女　瓦	〃 細片	厚　1.5	〃 黒色粒子	〃	暗灰	作りは不詳。凹面コモ状圧痕。凸面自然釉付着。	乗附系
158－3 95	瓦 女　瓦	〃 ⅔残存	厚　1.8	白色鉱物粒子	〃	〃	紐作り。凹面撫で整形。凸面撫で整形。側部面取り2回。端部面取り2回。	〃
158－4 95	瓦 女　瓦	〃 ⅓残存	厚　2.0	黒色粒子 白色鉱物粒子	〃	〃	一枚造り。凸面不正格子叩き。側部面取り2回、端部面取り1回。	〃
158－5 95	瓦 女　瓦	〃 ⅓残存	厚　2.0	黒色粒子	〃	白灰	一枚造り。凸面粗大斜格子叩き。側部面取り2回。	秋間系
159－1 95	瓦 女　瓦	〃 破片	広　19.0 厚　1.6	白色鉱物粒子 黒色粒子	〃	暗灰	紐作り。凹面撫で整形。凸面轆轤撫で。側部面取り2回。端部面取り2回。	乗附系
159－2 95	瓦 女　瓦	〃 ⅔残存	長　35.5 厚　1.8	黒色粒子 シルト粒	〃	灰	一枚造り。側部・凹面・凸面粘土板剝ぎ取り痕。凸面縄叩き(密)。	〃
159－3 96	瓦 女　瓦	埋土内 ¼残存	狭　20.7 厚　2.5	白色鉱物粒子	〃	灰白	一枚造り。凹面粘土板剝ぎ取り痕。凸面撫で整形。側部面取り3回。端部面取り3回。	笠懸系
159－4 96	瓦 女　瓦	〃 破片	厚　1.5	〃	〃	灰	紐作り。凹面撫で整形。凸面撫で整形。側部面取り3回。	吉井系
159－5 96	瓦 女　瓦	〃	厚　3.0	白色鉱物粒子 赤褐色粒子	〃	〃	一枚造り。凸面斜格子叩き。側部面取り2回。端部面取り2回。	乗附系
159－6 96	瓦 女　瓦	〃	厚　1.9	白色鉱物粒子	〃	灰白	桶巻き造り。凹面模骨痕有。凸面轆轤撫で整形。側部面取り2回。端部面取り2回。	吉井系
159－7 96	瓦 女　瓦	〃	厚　1.5	白色粒子	〃	灰	一枚造り。凸面斜格子叩き。凹面撫で整形。凸面撫で整形後斜格子叩き。側部面取り2回。端部面取り2回。	笠懸系
160－1 96	瓦 女　瓦	〃 ⅓残存	厚　2.3	白色粒子 白色鉱物粒子	〃	〃	一枚造り。凹面粘土板剝ぎ取り痕。凸面撫で整形。側部面取り3回。端部面取り1回。	吉井系か 乗附系
160－2 96	瓦 女　瓦	〃 細片	厚　1.7	白色粒子 白色鉱物粒子 半透明鉱物粒子	〃	白灰	一枚造りか。凸面粗大斜格子。側部面取り2回。	笠懸系か
160－3 96	瓦 女　瓦	〃 ⅓残存	厚　2.5	赤褐色粒子 白色鉱物粒子	中性焔	浅黄橙 (二次焼成か)	一枚造り。凸面撫で整形。側部面取り2回。端部面取り2回。	吉井系
160－4 96	瓦 女　瓦	〃 破片	厚　1.7	白色粒子	還元焔	灰	一枚造りか。模骨痕有。凹面布目撫で消し。凸面斜格子叩き。側部面取り1回。端部面取り1回。	笠懸系
160－5 96	瓦 女　瓦	〃	厚　1.7	白色鉱物粒子	〃	〃	一枚造りか。模骨痕有。凹面布目撫で消し。凸面粘土板剝ぎ取り痕。叩き整形後撫で整形。	〃
160－6 96	瓦 女　瓦	埋土内 破片	厚　2.0	黒色粒子	還元焔	灰	一枚造り。凹面ひび割れ(焼成前)の保修有。凸面平行叩き。端部面取り2回。	乗附系
160－7 96	瓦 女　瓦	〃 細片	厚　1.6	白色粒子 黒色粒子	〃	黒灰	一枚造りか。凹面粘土板剝ぎ取り痕。凸面撫で整形後斜格子叩き。	笠懸系
160－8 96	瓦 女　瓦	〃 破片	厚　2.5	黒色粒子 黒色鉱物粒子	〃	灰	一枚造りか。凹面粘土板剝ぎ取り痕。凸面篦撫で整形。側部面取り3回。	〃
160－9 96	瓦 女　瓦	〃	厚　1.5	白色粒子 黒色粒子	〃	〃	一枚造り。凸面撫で整形後格子叩き。	〃
161－1 96	瓦 女　瓦	〃 ⅓残存	厚　2.0	白色鉱物粒子 白色粒子	中性焔	鈍黄橙	一枚造り。凸面撫で整形後凸面縄叩き(粗)。側部面取り1回。端部面取り1回。	145-1と同一個体。笠懸系
161－2 96	瓦 女　瓦	〃	厚　1.8	白色鉱物粒子 白色粒子	還元焔	灰	紐作り。凹面横撫で整形。凸面轆轤撫で。側部面取り3回。端部面取り1回。	笠懸系か 吉井系
161－3 97	瓦 女　瓦	〃 破片	厚　2.5	凝灰岩粒 黒色鉱物粒子	不詳 (二次焼成)	橙	一枚造り。凸面平行叩き。側部面取り1回。	吉井系
161－4 97	瓦 熨斗瓦	〃	厚　1.8	白色粒子 黒色粒子	還元焔	暗灰	一枚造りか。模骨痕有。凹面布目撫で消し。凸面撫で整形。側部面取り2回。	笠懸系

161－5 97	瓦 女　瓦	埋土内 被片	厚　1.4	白色粒子	還元焔	灰	一枚造り。凹面布目撫で消し。凸面斜格子叩き後撫で整形。側部面取り2回。	笠懸系
161－6 97	瓦 女　瓦	〃	厚　1.7	白色粒子 黒色粒子	〃	〃	一枚造り。凹面粘土板剝ぎ取り痕。凸面平行叩き後撫で整形。側部面取り3回。	〃
161－7 97	瓦 女　瓦	埋土内 〃	厚　2.6	白色鉱物粒子	中性焔	浅黄橙	一枚造り。凸面板目叩き後撫で整形。側部面取り3回。	吉井系
161－8 97	瓦 女　瓦	〃	厚　1.7	〃	還元焔	灰	紐作り。凹面横撫で整形。凸面轆轤撫で整形。側部面取り3回。端部面取り1回。	〃

D区3号井戸跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目（cm） 量目（g）	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
164－1 97	土師器 甕	埋土内 ½残存	口　23.2 底　5.2 高　35.8	黒色鉱物粒子 細粒砂	酸化焔	鈍橙	「コ」の字状口縁。紐作り、外面胴部は篦削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篦撫で。	
164－2 97	土師質土器 不　詳	〃 破片	——	砂粒 赤褐色粒子	〃	橙	紐作り後轆轤整形(右回転)。	
164－3 97	須恵器 皿	〃 口縁部欠損	底　13.0	黒色粒子 白色鉱物粒子	還元焔	灰	轆轤成形(右回転)。付高台。内面自然釉付着。	
164－4 97	石製品 砥石	〃 ½残存	重　(513)	——	—	—	使用に伴う研き減りが顕著。図の裏面は手持砥として使用している。	
164－5 97	瓦 女　瓦	〃 細片	厚　2.6	黒色粒子 シルト粒	不詳 （二次焼成）	浅黄橙	一枚造り。模骨痕有。凸面縄叩き(密)。凸面離砂痕。	乗附系
164－6 97	瓦 女　瓦	〃 破片	厚　1.9	白色鉱物粒子	還元焔	灰	一枚造り。両面粘土板剝ぎ取り痕。凸面撫で整形。側部面取り3回。	吉井系
165－1 97	瓦 女　瓦	埋土内 破片	厚　1.5	白色鉱物粒子	酸化焔	鈍橙	一枚造り。凹面粘土板剝ぎ取り痕。凸面撫で整形。側部面取り1回。端部面取り2回。	吉井系
165－2 97	瓦 女　瓦	〃	厚　2.1	〃	還元焔	灰	一枚造り。凸面板目叩き整形後撫で整形。側部面取り3回。	〃
165－3 97	瓦 女　瓦	〃	厚　1.5	〃	中性焔	鈍橙	桶巻き造り。(模骨痕か)。凸面轆轤整形？。側部面取り3回、端部面取り1回。	〃

C・D区土坑

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目（cm） 量目（g）	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
169－1 99	瓦 女　瓦	D15坑 覆土内 破片	厚　2.6	白色鉱物粒子	還元焔	灰白	桶巻き造り。凹面模骨痕・粘土板剝ぎ取り痕。凸面轆轤撫で整形。側部面取り2回。	吉井系
169－2 99	須恵器 坏	D20坑 覆土内 破片	口　14.0	〃	中性焔	灰	轆轤成形(右回転)。器面内外面燻しが見られる。	
169－3 99	施釉陶器 灰釉埦	D20坑 覆土内 破片	口　13.6	密	良好	灰	轆轤成形(右回転)。施釉方法不明。	
169－4 99	土師質土器 埦	D27坑 覆土内 破片	——	黒色粒子	中性焔	灰黄褐	轆轤成形(右回転)。	
169－5 99	施釉陶器 灰釉埦	〃	——	密	良好	灰白	轆轤成形(右回転)、付高台。施釉方法は不詳。	
169－6 99	土師質土器 埦か	D29坑 覆土内 破片	——	赤褐色粒子 細砂粒	中性焔	灰白	轆轤成形(右回転)。	
169－7 99	須恵器 坏	〃	——	黒色鉱物粒子 白色鉱物粒子 細砂粒	還元焔	浅黄橙	〃	
169－8 99	土師質土器 埦	D40坑 〃 〃	——	白色粒子 シルト質	酸化焔	鈍橙	轆轤成形(右回転)、付高台。	

170—1 99	土師質土器 坏	D40坑 覆土内 破片	口　9.0 底　4.8 高　2.8	細砂粒 シルト質	酸化焔	浅黄	轆轤成形(右回転)。	
170—2 99	須恵器 埦	D42坑 覆土内 ⅓残存	口　14.0 底　7.1 高　5.8	白色鉱物粒子	還元焔	赤灰	轆轤成形(右回転)、付高台。	
170—3 99	須恵器 羽釜	D56坑 覆土内 破片	底　5.8	〃	〃	灰白	紐作り後轆轤整形(右回転)。	
170—4 99	土師質土器 皿	D59坑 覆土内 完形	口　9.5 底　2.0 高　6.4	微粒雲母	酸化焔	暗赤褐	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。	
170—5 99	土師質土器 鉢	D63坑 覆土内 破片	底　8.0	白色粒子	〃	黄灰	轆轤成形(右回転)。	
170—6 99	須恵器 壺	〃	——	白色粒子 白色鉱物粒子	還元焔	灰	紐作り。叩き整形後轆轤整形。	
170—7 99	鉄製品 釘	〃	厚　1㎜内外	——	—	—	断面は正方形を呈する。	
170—8 99	鉄製品 不詳	D63坑 覆土内 ¼残存	重　(16.5)	——	—	—	非常に薄い造りで、飾り金具等の断片と考えられる。	
170—9 99	土師質土器 皿	D65坑 覆土内 口縁部½ 欠損	口　9.3 底　5.9 高　4.6	微粒雲母 白色鉱物粒子	酸化焔	橙	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。口唇部内外面周辺有機質付着。	
170—10 99	土師質土器 埦	〃 〃 破片	底　9.1	白色粒子 シルト質	中性焔	オリーブ灰	轆轤成形(右回転)、付高台。	
170—11 99	土師質土器 坏	〃 〃 口縁部欠損	底　6.4	白色鉱物粒子 砂粒	酸化焔	橙	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。	
170—12 99	土師質土器 埦か	〃 〃 破片	口　13.0	シルト粒 白色鉱物粒子	中性焔	黄灰色	〃	
170—13 99	土師質土器 坏	D67坑 〃 〃	底　7.0	白色粒子 砂粒	〃	浅黄色	〃	
170—14 99	瓦 男瓦	〃	厚　1.8	白色鉱物粒子	還元焔	灰	半截作り。凸面平行叩き。側部面取り2回、端部面取り2回。	吉井系
170—15 99 瓦—77	瓦 女瓦	〃	厚　1.7	黒色鉱物粒子	〃	〃	一枚造り。篦描き文字瓦「判読不能」(凹面)。凸面撫で整形。	〃
170—16 99	瓦 宇瓦	〃	厚　1.5	〃	〃	〃	瓦当部欠損。一枚造り。凹面撫で整形。	〃
170—17 99	瓦 女瓦	〃	厚　2.8	白色鉱物粒子	中性焔	オリーブ灰	一枚造り。凹面撫で整形。	〃
170—18 99	土製品 円盤	D69坑 覆土内 完存	径　5.8	白色鉱物粒子 赤褐色粒子	酸化焔	橙	土師質土器埦の高台端部・体部を打ち欠き円形に整形をなす。	
170—19 99	須恵器 大甕	D73坑 覆土内 破片	——	白色鉱物粒子 白色粒子	還元焔	暗灰	口縁部は外反する。紐作り後轆轤整形(右回転)。	
170—20 99	施釉陶器 灰釉埦	D75坑	口　14.0	密	良好	灰	轆轤成形(右回転)。施釉は浸掛。	
170—21 99	須恵器 壺	D75坑	——	黒色粒子	還元焔	灰	紐作り後轆轤整形(右回転)。	
170—22 99	須恵器 埦	〃	底　6.3	白色粒子 黒色鉱物粒子	〃	〃	轆轤成形(右回転)、付高台。	
171—1 100	土師質土器 坏	D76坑 覆土内 ¼残存	口　11.9 底　5.0 高　3.8	白色鉱物粒子 赤褐色粒子 シルト粒	酸化焔	浅黄橙	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。	

171－2 100	須恵器 埦	〃 破片	——	白色鉱物粒子 黒色粒子	還元焔 酸化気味	灰黄色	轆轤成形(右回転)、高台欠損(付高台)。	
171－3 100	須恵器 埦	〃	口 15.6 底 8.0 高 5.0	〃	〃	〃	〃	
171－4 100	土師質土器 埦	〃	——	白色鉱物粒子 細粒砂	酸化焔	鈍橙	轆轤成形(右回転)、付高台。	
171－5 100	土師質土器 甑	〃	——	砂粒 白色鉱物粒子	〃	鈍黄褐	紐作り後轆轤整形(右回転)。下端部に穴を備える。	
171－6 100	瓦 女瓦	D76坑 覆土内 破片	厚 2.5	赤褐色粒子	中性焔	鈍黄褐	一枚造り。凹面粘土板剝ぎ取り痕。凸面縄叩き(密)。端部側横位に施す。凸面離砂痕多量。側部面取り2回、端部面取り1回。	秋間系
171－7 100 瓦－70	瓦 女瓦	D100坑	厚 3.2	白色鉱物粒子	還元焔	暗灰	一枚造り。篦描き文字瓦「も判読不能」(凸面)。凹面布目撫で消し。凸面撫で整形。側部面取り3回。	吉井系
171－8 100	瓦 女瓦	D229坑	厚 2.0	白色鉱物粒子 黒色粒子	〃	灰白	一枚造り。凹面粘土板剝ぎ取り痕。凸面撫で整形。側部面取り2回。	乗附系
171－9 100	土師質土器 埦	D232坑	底 5.0	白色粒子	酸化焔	浅黄橙	轆轤成形(右回転)、付高台。内面黒く燻し処理。研磨は認められない。	
171－10 100	須恵器 甕	D263坑	——	黒色粒子 シルト粒	不詳 (二次焼成か)	黄橙	紐作り。叩き整形(外面平行叩き・内面宛具は青海波文)後轆轤再整形。	
171－11 100	土師質土器 坏	〃 ¼残存	口 14.9 底 6.0 高 5.0	白色鉱物粒子 細粒砂	酸化焔	浅黄橙	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。	
171－12 100	瓦 女瓦	C6坑 覆土内 破片		白色粒子	不詳 (二次焼成)	鈍黄橙	一枚造り。凹面布目撫で消し。凸面撫で整形後不正格子。	笠懸系
171－13 100	土師器 甕	〃	口 (21.0)	赤褐色粒子 細粒砂	酸化焔	鈍橙	口縁部は外反する。紐作り。外面胴部は篦削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篦撫で。	
171－14 100	須恵器 大甕	〃	——	黒色粒子 白色粒子	還元焔	灰	紐作り。叩き整形(外面平行叩き・内面宛具は青海波文)後轆轤再整形。	
171－15 100	土師質土器 埦	C11坑 〃 ほぼ完形	口 12.5 底 6.4 高 4.6	白色粒子	酸化焔	黄橙	轆轤成形(右回転)、付高台。内面燻し処理。	
171－16 100	土師質土器 埦 (足高高台付)	C17坑 覆土内 破片	——	黒色鉱物粒子 細砂粒	酸化焔 (二次焼成)	浅黄	轆轤成形(右回転)、付高台。内面燻し処理か。	
171－17 100	土師質土器 (坏か)	〃	口 (13.0)	黒色鉱物粒子	酸化焔	内鈍橙 外明褐灰 外明褐灰	轆轤成形(右回転)。	
171－18 100	土師質土器 埦	〃	——	白色鉱物粒子	不詳 (二次焼成)	鈍橙	轆轤成形(右回転)。トリベの破片か。C区に類例あり。	
171－19 100	須恵器 甕	C17坑 覆土内 破片	——	黒色粒子	還元焔	灰	紐作り。叩き整形(外面平行叩き・内面宛具は青海波文)後轆轤再整形。	
172－1 100	須恵器 甕	〃	——	黒色粒子 白色粒子	〃	灰	紐作り。叩き整形(外面平行叩き・内面宛具は青海波文)後轆轤再整形。	
172－2 100	須恵器 埦	C20坑 覆土内 ⅓残存	底 8.0	〃	〃	灰	轆轤成形(右回転)、付高台。体部外面墨書文字「成」か(逆位)。	
172－3 100	須恵器 坏	〃 口縁⅔欠損	口 12.8 底 6.0 高 3.7	微粒雲母 白色鉱物粒子	中性焔 還元気味	灰	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。	
172－4 100	瓦 男瓦	C21坑 破片	厚 1.9	白色鉱物粒子	還元焔	暗灰	半截作り。凸面撫で整形。側部面取り2回。	吉井系
172－5 100	土師質土器 皿か	C27坑 底部残存	——	微粒砂 シルト質	酸化焔	橙	轆轤成形(右回転)。15世紀のものか。	土師質土器皿胎土A類

172—6 100	施釉陶器 灰釉皿	C31坑 破片	口　12.8 底　6.5 高　1.9	密	良好		轆轤成形(右回転)。付高台。施釉方法不詳。	
172—7 100	土師質土器 埦	C48坑 覆土内 破片	口　(16.0)	赤褐色粒子 白色粒子 細砂粒	酸化焔	鈍橙	轆轤成形(右回転)。	
172—8 100	須恵器 坏	〃 破片	口　(16.0)	〃	〃	灰橙	〃	
172—9 101	須恵器 埦	C53坑 破片	底　8.2	白色鉱物粒子 黒色粒子	還元焔	灰白	轆轤成形(右回転)、付高台。	
172—10 100	土師質土器 皿	〃 破片	口　9.0 底　(5.3) 高　(1.6)	黒色鉱物粒子 シルト質	中性焔	オリーブ灰	轆轤成形(右回転)。	
172—11 101	土師質土器 坏	〃	——	白色鉱物粒子 赤褐色粒子	酸化焔	橙	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。	

D区遺構外

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目（cm） 量目（g）	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
173—1 101	土師質土器 坏	破片	口　8.2 底　5.0 高　2.0	——	—	—	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。	
173—2 101	土師質土器 皿	½残存	口　9.6 底　4.4 高　1.9	赤褐色粒子 細粒砂	酸化焔	黄橙	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。	
173—3 101	土師質土器 坏	破片	口　9.6 底　5.4 高　2.9	白色鉱物粒子 砂粒	中性焔	鈍黄橙	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。焼成後底部を穿孔。	
173—4 101	須恵器 埦	破片	口　11.0	白色粒子 黒色粒子	還元焔	灰	轆轤成形(右回転)、高台欠損(付高台)。	
173—5 101	土師器 甕	〃	——	白色粒子 パミス	酸化焔	黄橙	紐作り後轆轤整形。	
173—6 101	土師器 甕	〃	——	白色鉱物粒子 砂粒	〃	〃	口縁部は外反する。紐作り。外面胴部は篦削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篦撫で。	
173—7 101	土師器 甕	〃	——	〃	〃	〃	〃	
173—8 101	須恵器 大甕	〃	——	黒色粒子 白色粒子	還元焔	灰	紐作り。叩き整形(外面平行叩き・内面宛具は青海波文)後轆轤再整形。内面磨滅。	
173—9 101	施釉陶器 緑釉埦	破片	底　8.0	密	良好	オリーブ灰	轆轤成形(右回転)、付高台。研磨後施釉。	
173—10 101	石製品 砥石	½残存	重　(153.4)				四面に使用痕が認められる。図示面は置ピ、他の三面は手持ちで使用した。可能性が高い。	
173—11 101 瓦—69	瓦 女瓦	細片	厚　2.0	白色鉱物粒子	中性焔	鈍黄橙	一枚造り。凹面粘土板剝ぎ取り痕。凸面撫で整形。側部面取り3回。	吉井系
173—12 101 瓦—80	瓦 女瓦	〃	厚　2.2	〃	〃	〃	一枚造り。篦描き文字瓦か。「十」か「×」。凸面撫で整形。側部面取り3回、端部面取り2回。	〃
173—13 101 瓦—68	瓦 女瓦	〃	厚　3.7	〃	〃	〃	一枚造り。凸面篦記号有。凸面撫で整形。	〃
173—14 101	瓦 女瓦	破片	厚　1.7	黒色粒子	還元焔	白灰	一枚造り。篦描き文字瓦か「判読不能」(凸面)。凹面布目撫で消し。凸面縄叩き(密)後撫で整形。側部面取り2回、端部面取り2回。	秋間系
173—15 101	石器 不詳	破片	重　(18.7)	——	—	—	剝片石器と思われるが、片面側は小単位の剝離痕有。石器の破片とも思われる。部分的な調整痕有。	

H区遺物観察表

H区第1号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目（cm） 量目（g）	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
193－1	土師器 坏A	覆土内 ½残存	口 (12.0) 底 — 高 (3.7)	白・黒色鉱物粒少 赤褐色粒多	酸化焔 軟質	にぶい赤褐	底部は扁平気味の丸底で、口縁部との境に段を有し、口縁部はやや内湾気味に内傾する。整形は、底部円周方向手持箆削り、口縁部及び内面は横撫でを施す。	
193－2 108	土師器 坏AII	覆土内 完形	口 12.6 底 — 高 3.7	砂粒少	酸化焔 やや軟質	にぶい橙	底部は浅い丸底で、口縁部との境に強い段を有し、口縁部横撫で、底部箆削り、内面撫でを施す。器面は褐色に塗られた状態を呈する。	AIと胎土異質。
193－3 108	土師器 坏AI	覆土内 完形	口 12.6 底 — 高 4.3	白色鉱物粒微	酸化焔 軟質	橙	底部はやや深い丸底で、口縁部との境に段を有し、口縁部は外傾する。口縁部横撫で、底部箆削り、内面は撫でである。	
193－4	土師器 坏AI	覆土内 破片	口 (11.5) 底 — 高 (3.6)	白・黒・褐色微粒少 白色鉱物粒微	酸化焔 軟質	橙	底部丸底で、口縁部との境にわずかに屈曲を有し、口縁部はやや外反する。整形は、底部は円周方向手持ち箆削り、口縁部及び内面横撫でを施す。	
193－5	土師器 坏AI	覆土内 破片	口 (12.0) 底 — 高 (3.0)	白色鉱物粒微 赤褐色粒多	酸化焔 軟質	にぶい橙	底部は丸底で、口縁部との境にほとんど段を有していない。口縁部はやや内湾気味に外傾する。整形は、底部箆削り、口縁部及び内面横撫で後、内面黒色処理を施す。	
193－6	土師器 坏AI	覆土内 破片	口 (12.0) 底 — 高 (3.2)	黒色鉱物粒 褐色細粒微	酸化焔 軟質	橙	底部丸底で、口縁部との境に屈曲を有し、口縁部は外傾する。整形は、底部円周方向の手持箆削り、口縁部及び、内面横撫で調整後内面黒色処理を施す。	
193－7	土師器 坏	覆土内 破片	口 — 底 — 高 —	白・黒色鉱物粒微 赤褐色粒多	酸化焔 やや硬質	橙	底部平底気味で、途中に一回の屈曲を有して口縁部が立ち上がる器形と思われる。整形は外面箆削り、内面は横撫で後放射状磨きを施す。	厚 0.5
193－8 108	土師器 鉢	覆土内 ¾残存	口 26.2 底 10.0 高 16.8	黒色鉱物粒多 褐色粒多 灰色砂粒多	酸化焔 硬質	黄橙	口縁部は強く外反し、胴部に張りはほとんど見られない。底部はやや丸底気味。胴部は斜位の撫で、口縁部横撫で、内面横位撫で。	
193－9	土師器 甕	覆土内 ¼残存	口 — 底 — 高 (14.8)	白色砂粒多 黒色鉱物粒多 赤褐色粒多	酸化焔 軟質	橙	胴部下半に最大径を有し、下半は直線的に底部に向かう器形である。胴部下半に2ヵ所明確な接合痕が見られる。整形は外面縦方向箆削り、内面は撫でと思われるが、内外面共に器面の荒れが激しく、不明確である。	底部、胴上半欠損
193—10 108	石器 薦編み石	覆土内 完形	長 12.0 幅 5.3 厚 3.1	粗粒安山岩			下端に若干敲打痕あり。	重 338.3
193—11 108	石器 薦編み石	覆土内 完形	長 15.7 幅 6.7 厚 3.6	変質安山岩			使用痕は不明。	重 633.8
193—12 108	石器 薦編み石	覆土内 完形	長 17.2 幅 6.7 厚 5.2	細粒安山岩			上端側面に使用に伴うものか剝離面がある。その他使用痕なし。	重 866.7
193—13 108	石製品 臼玉	床直 完形	長 1.8 幅 1.8 厚 0.7	滑石			円形に近い形状であるが、面の調整は雑で、割った形をそのままとどめている。穴の穿孔は1方向からである。	

（註）H区遺物分類記号は「上野国分僧寺・尼寺中間地域」(2)参照

H区第2号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目（cm） 量目（g）	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
195－1 108	土師器 坏AII	カマド 覆土内 ½残存	口 (12.0) 底 — 高 3.2	砂粒多 黒色鉱物粒微 白色鉱物粒少	酸化焔 硬質	にぶい 橙	底部はごく浅い丸底で、口縁部との境に段を有し、口縁部は直立する。口縁部横撫で、底部篦削り、内面撫でを施す。内面器面は特に密に調整されている。	
195－2 108	土師器 坏AI	覆土内 完形	口 13.2 底 — 高 4.4	褐色粒多	酸化焔 硬質	にぶい 黄橙	底部は浅い丸底で、口縁部との境に段を有し口縁部は外反し、口唇部が外面肥厚する。口縁部は横撫で、底部篦削り、内面撫でを施す	
195－3	土師器 坏AI	覆土内 破片	口 (13.6) 底 — 高 (3.5)	褐色粒 白色細粒多 赤褐色細粒微	酸化焔 硬質	にぶい 橙	底部丸底で、口縁部との境に屈曲を有し、口縁部は外反する。整形は底部円周方向の手持ち篦削り、口縁部及び内面は横撫でを施す。内外面共に黒色に処理した痕跡がある。	
195－4 108	土師器 坏A	覆土内 完形	口 13.0 底 — 高 4.9	黒色鉱物粒微 白色鉱物粒少	酸化焔 硬質	灰黄褐	底部は浅い丸底で、口縁部は底部から「く」字状に屈曲し、内傾する。口縁部は横撫で、底部篦削り、内面撫でを施す。器面は暗褐色で、部分的に光沢が見られる。	
195－5	須恵器 埦	覆土内 破片	口 (18.0) 底 — 高 (8.5)	白色細粒多 黒色細粒少	還元焔 やや硬質	灰	内湾気味に口縁部に至る深埦形態で、口縁部内面に一本の沈線が廻る。整形は轆轤整形後下半回転篦削りを施す。	
195－6	須恵器 高坏	覆土内 破片	口 — 底 — 高 (8.2)	白色細粒多 石英粒多	還元焔 やや硬質	灰	透しを有さない長脚の高坏で、坏部形態は不明。整形は轆轤整形で内面は斜方向の撫でを施す。	脚部のみ残存。
195－7 108	土師器 甕AII	覆土内 ½残存	口 (21.8) 底 — 高 (18.2)	片岩粒多 褐色粒多	酸化焔 硬質	にぶい 褐	口縁部は強く外反し、胴部最大径は下半に位置する。口縁部横撫で後、胴部を縦位（下→上）篦削りを施す。内面は粗い撫で。	
195－8	須恵器 台付長頸壺？	覆土内 破片	口 — 底 (13.0) 高 (2.6)	白色細粒少 黒色粒微	酸化焔 硬質	灰白	高台部のみの残存で全体形は不明。脚部と胴部接合部の間に断面三角形状の突帯を1条廻らす。	
195－9 108	石器 薦編み石	覆土内 ½残存	長 8.6 幅 6.7 厚 4.1	粗粒安山岩			半截されており、一部に熱を受けた痕跡をとどめている。	重 351.0

H区第4号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目（cm） 量目（g）	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
197－1 108	土師器 坏A	覆土内 ½残存	口 (11.0) 底 — 高 4.4	褐色粒少	酸化焔 硬質	灰褐	底部はやや深い丸底で、口縁部との境に強い段を有し、口縁部はやや内傾する。口縁部横撫で、底部篦削りで、口縁部との間に、整形不明瞭な部分が見られる。内面は篦状工具を使用した撫でである。	器面暗褐色塗布状やや光沢あり。
197－2	土師器 坏AII	覆土内 破片	口 (13.0) 底 — 高 (4.5)	白色鉱物粒少 赤褐色粒多	酸化焔 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部との境に段を有し、口縁部はわずかに内湾気味に直立する。整形は底部一定方向の手持ち篦削り、口縁部及び内面横撫で、内面の一部に篦状工具の当て目残存。	
197－3	土師器 坏AI	覆土内 破片	口 (14.0) 底 — 高 (3.4)	白色鉱物粒少 赤褐色細粒多	酸化焔 硬質	明赤褐	底部丸底で、口縁部との境に段を有し、口縁部はやや外反する。整形は底部手持ち篦削り口縁部及び内面横撫でを施す。	内面の荒れ激しい
197－4	土師器 小型甕	覆土内 破片	口 (11.0) 底 — 高 (3.5)	白色鉱物粒少 赤褐色粒微 赤褐色砂粒	酸化焔 やや硬質	黒褐	「コ」字状口縁を有し、肩部に最大径を有するものと思われる。整形は紐作り成形後口縁部横撫で、胴部篦削りを施す。	
197－5	土師器 甕	覆土内 破片	口 (17.0) 底 — 高 (5.6)	白色鉱物粒多 赤褐色粒少	酸化焔 硬質	にぶい 橙	肩はあまり張らず、胴部中位に最大径を有すると思われる。口縁部はやや外反気味に直立する。整形は胴部篦削り、口縁部横撫でである。	

遺物一覧表

H区第5号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
198—1	土師器 坏AI	覆土内 破片	口 (14.2) 底 — 高 (3.1)	白・黒色細粒少 赤褐色粒少	酸化焔 硬質	橙	底部丸底で、口縁部との境に明瞭な段を有し口縁部は直線的に外傾する。整形は底部手持ち篦削り、口縁部及び内面横撫でを施す。	

H区第6号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
199—1 108	土師器 坏AII	貯蔵穴 ¾残存	口 13.2 底 — 高 (4.7)	白・黒色鉱物粒少 灰色砂粒多	酸化焔 硬質	橙	底部は深い丸底で、口縁部との境に段を有し口縁部は外傾気味に直立する。口縁部横撫で底部篦削り、内面撫でを施す。	胎土が他と異質。
199—2	土師器 坏DI	カマド 破片	口 (13.0) 底 — 高 (3.6)	黒・白色鉱物細粒少 赤褐色細粒少	酸化焔 軟質	にぶい橙	底部は平底気味の丸底で、体部は直線的に立ち上がり、口縁端部がやや内湾する。整形は底部手持ち篦削り、体部二段の指による押さえ、口縁部及び内面横撫でを施す。	
199—3	須恵器 坏EII	覆土内 破片	口 (13.0) 底 (8.0) 高 (3.9)	黒色粒多	還元焔 硬質	灰白	轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。口縁部わずかに外反する。轆轤右回転。	
200—1	須恵器 埦CII	貯蔵穴 破片	口 (14.0) 底 6.0 高 5.0	灰褐色粒少 白色鉱物粒多	還元焔 軟質	黄灰	轆轤整形(右回転)。体部にやや張りを有し口縁部は外反する。底部は回転糸切り未調整で付高台。高台の張り付けは非常に雑で潰れている。	
200—2	須恵器 埦B？	覆土内 ½残存	口 — 底 8.4 高 (4.0)	黒・白色鉱物細粒 白色細粒含	還元焔 軟質	灰白	轆轤整形(右回転)。底部回転糸切り無調整後付高台。高台は底部から体部側にかけて貼り付け。高台部断面台形状で、丁寧な撫でを施す。内面に重ね焼の痕跡と思われる粘土の剝離が残存。	口縁部欠損。
200—3	灰釉陶器 高台付埦	覆土内 破片	口 — 底 (7.4) 高 (2.0)	美濃系？		灰白	轆轤成整形。付高台。高台は底部回転撫で調整後、比較的丁寧に撫でている。断面は三日月高台に近似。施釉技法は不明。高台部に重ね焼きの剝離痕を残す。	大原2号か？
200—4	土師器 小型甕	覆土内 破片	口 (13.0) 底 — 高 (7.8)	白色鉱物細粒 黒色鉱物粒 褐色粒	酸化焔 硬質	橙	口縁部「コ」字状を呈し、口縁端部に一条沈線が廻ったような状態を呈する。胴部は上半にやや張りを有し、最大径となっている。整形は、口縁部内外面横撫で、胴部外面斜方向篦削り。内面は横方向の篦撫でである。	口縁部外面に黒色炭化物付着。
200—5 108	瓦 女瓦	覆土内 カマド ¾残存	広 32.8 狭 — 長 —	白色鉱物粒多	中性焔 やや硬質	橙	一枚作り。凸面粘土板糸切り痕あり。側部面取り3面。	厚 2.4 反 8.0
200—6	瓦 女瓦	覆土内 破片	厚 1.9	黒色粒多 白色細粒多 白色鉱物粒微	還元焔 硬質	灰白	一枚作り？凹凸面に粘土板糸切り痕あり。凸面縄叩き。凸面に自然釉。	
200—7 108	鉄器 釘	覆土内 破片	長 (7.9) 幅 (0.7) 重 14.2				身の大半は欠損。	
201—1	瓦 女瓦	覆土内 破片	厚 2.5	赤褐色粒少 白色細粒少 白色鉱物粒微	中性焔 硬質	にぶい橙	凹面粘土板糸切り痕あり。側部面取り2面。	
201—2	瓦 玉縁付 男瓦	覆土内 ¾残存	狭 19.6 厚 2.0	白色鉱物粒	還元焔 硬質	にぶい褐	凹面粘土板糸切り痕。凸面縄叩き。凹面布目擦消し。側部面取り4面。	
201—3	瓦 男瓦	覆土内 ½残存	厚 1.5	白色鉱物粒多	酸化焔 やや硬質	にぶい赤褐	凹面布目の擦消し。広端部篦削り。広端部側内面に約5㎝幅で帯状にカーボン付着。側部面取り3面。	

H区第8号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目（cm） 量目（g）	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
203－1	須恵器 埦CⅠ	覆土内 破片	口（14.8） 底（8.2） 高 5.4	黒色粒少 白色大粒少	還元焔 やや硬質	灰	轆轤整形(右回転)。体部上半にやや張りを有し、口縁部わずかに外反する。高台は付高台で､底部切り離しは回転糸切りと考えられる。	
203－2 109	須恵器 埦CⅡ	覆土内 破片	口（13.8） 底（7.2） 高 4.9	黒色鉱物粒微 褐色粒少	還元焔 やや軟質	浅黄	轆轤整形(右回転)。底部回転糸切り後の付高台。外面轆轤痕を明瞭に残し、内面は回転の撫でにより消している。	
203－3	土師質 埦CⅠ	覆土内 破片	口（14.0） 底 — 高（3.7）	白・黒色鉱物粒 細砂粒多	酸化焔 やや硬質	淡橙	轆轤整形(右回転)。内外面共轆轤目やや目立つ。体部にやや張りを有し、口縁部わずかに外反する。底部は不明。	
203－4	須恵器 甕	覆土内 破片	口 — 底 — 高 —	黒色粒 白色鉱物粒 褐色細粒	還元焔 硬質	灰白	外面格子叩き。内面青海波文。	厚 0.6
203－5	須恵系 羽釜C	覆土内 破片	口（21.0） 底 — 高（8.8）	白色鉱物粒多 黒色鉱物粒微 砂粒	中性焔 やや硬質	灰黄	紐作り後轆轤整形(右回転)。口縁部はやや内傾し、胴部に張りはあまり見られない。口唇部は内傾し、内側にわずかに突出する。また鍔は水平である。	
203－6	須恵系 羽釜C	覆土内 破片	口（21.0） 底 — 高（9.5）	白色鉱物粒多 黒色粒少	酸化焔 硬質	橙	紐作り後轆轤整形(右回転)。口縁部はわずかに内傾し、胴部に張りはほとんどない。口唇部は内傾し内側にわずかに突出する。鍔は断面三角形状である。	
203－7	瓦 女瓦	覆土内 破片	厚 1.8	白色鉱物粒 黒色粒少	還元焔 硬質	灰	一枚作り？側部面取り２面。	

H区第38号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目（cm） 量目（g）	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
203－8 109	石製品 砥石	覆土内 ½残存	長 7.5 幅 5.1 厚 3.5	流紋岩 (砥沢)			５面残存しているが、一部熱を受け剝落している。	重 183.3

H区第９号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目（cm） 量目（g）	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
206－1 109	土師質 坏	貯蔵穴 ¼残存	口（9.9） 底（5.6） 高 3.3	黒・白色鉱物粒少	酸化焔 やや軟質	にぶい黄橙	轆轤整形(右回転)。体部はやや内湾し、底部は摩滅し切り離し技法は不明。	
206－2	須恵器 坏EⅢ	覆土内 破片	口（11.2） 底（5.6） 高 3.7	白色鉱物粒多 黒色鉱物粒少 褐色細粒少	中性焔 軟質	灰黄褐	轆轤整形(右回転)。体部下半にわずかに張りを有し、外反気味に口縁に立ち上がる。底部は回転糸切り後未調整。	
206－3	土師質 埦	覆土内 ¼残存	口 — 底（8.0） 高（3.2）	黒色鉱物粒多 褐色粒少 白色鉱物粒少	中性焔 硬質	浅黄	轆轤整形(右回転)。底部は回転糸切り後「八」字状に開くやや長脚の高台を付けている。	高台部～断面二次焼成の痕跡あり。
206－4 109	黒色土器 埦	覆土内 破片	口（16.0） 底 — 高（4.5）	白色鉱物粒多 褐色粒多 白色細粒少	酸化焔 硬質	にぶい褐	轆轤整形(右回転)。内面斜位篦研磨後、黒色処理。	
206－5	灰釉陶器 埦	覆土内 破片	口（16.4） 底 — 高（3.8）	美濃系		灰	体部にやや張りを有し、口縁部は緩やかに外反する。施釉は内面厚く、外面薄く刷毛掛け	虎渓山１
206－6	灰釉陶器 埦	覆土内 破片	口 — 底（6.2） 高（2.7）	美濃系		灰	轆轤成整形。(右回転)。体部下半に篦削りなし。高台部は付高台で三日月高台である。施釉は、浸し掛け。内面に重ね焼きの剝離痕がみられる。	
206－7 109	緑釉陶器 埦	覆土内 破片	口 — 底（7.6） 高（1.3）			暗オリーブ	高台は、底部回転篦調整後の付高台。釉は高台部から底部も含み全面に施されている。	

206－8	土師質 小型甕	覆土内 破片	口 (11.7) 底 — 高 (6.2)	白・黒色細粒少 赤褐色粒少	酸化焔 硬質	にぶい 褐	紐作り後轆轤整形(右回転)。上半部にわずかに張りを有し、口縁部は外反気味に直立する。口縁部外面及び内面上半にカーボン付着。	
206－9	須恵器 甕	覆土内 破片	口 — 底 — 高 —	白・黒色細粒微	還元焔 やや硬質	灰	外面平行叩き、一部重なったことによるか格子叩き状になっている。内面は素文の当て具痕を有する。内外面共にカーボンの付着が認められるが、転用硯とは考えられない。内面にハゼあり。	厚 0.9
206－10	須恵器 甕	覆土内 破片	口 — 底 — 高 —	白色鉱物粒微 白・褐色細粒微	還元焔 やや軟質	褐灰 灰黄褐	外面叩き不明。内文素文の当て具痕。	厚 1.3
206－11	須恵系 羽釜C	覆土内 破片	口 (17.2) 底 — 高 (6.0)	白色鉱物粒多 細粒砂多 黒色鉱物粒少	酸化焔 硬質	浅黄橙	紐作り後轆轤整形(右回転)。口縁部はわずかに内傾する。鍔は雑な作りで、断面は三角形状である。	
206－12	鉄器 釘	覆土内 破片	長 (3.3) 幅 (0.5) 重 2.1				上下共に欠損、断面方形。	
207－1 109	瓦 女瓦	覆土内 完形	広 29.5 狭 20.5 厚 1.8	細粒	還元焔 硬質	灰	ほぼ完形。凹面にわずかに模骨痕がみられる。布目は撫でによって一部消されている。凸面は全面に縄叩きがされていたと考えられるが横位の撫でによつて大半は消されている。側部面取り2面。	
207－2	瓦 女瓦？	カマド 覆土内 破片	厚 3.1	白色鉱物粒 赤褐色粒 砂粒	中性焔 硬質	灰	女瓦と思われるが不明。布目非常に粗い。側部面取り3面。	
207－3	瓦 男瓦	覆土内 ¼残存	厚 2.1	白色鉱物粒多	還元焔 やや硬質	灰	凹面粘土板糸切り痕あり。桶巻き作り。側部面取り3面。	

H区第12号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
208－1 109	土師器 手捏	覆土内 ¼残存	口 (6.0) 底 (2.8) 高 (2.6)	黒色鉱物粒微 白色鉱物粒少 砂粒	酸化焔 硬質	にぶい 橙	底部平底で、内湾気味に立ち上がる。整形は口縁部横撫でを施す。	
208－2	須恵器 埦CII	覆土内 破片	口 (14.0) 底 — 高 (4.6)	白色鉱物粒多 黒色鉱物粒少 灰色鉱物粒	酸化焔 やや硬質	橙	轆轤整形(右回転)。体部中位に張りを有し、口縁部は外反する。	
208－3	須恵器 埦？	貯蔵穴 破片	口 — 底 (12.2) 高 (3.8)	黒・褐色粒多 砂粒微 白色鉱物粒微	還元焔 硬質	灰白	紐作り後轆轤整形(右回転)。体部下端回転箆削り。高台は底部回転糸切り後付高台。	
208－4	灰釉陶器 埦	覆土内 破片	口 — 底 (6.0) 高 (1.7)	美濃系？		灰白	高台は付高台。内面に同径程度の高台剝離痕あり。内面の釉はこの部分まで流れている。	
208－5 109	鉄器 釘	覆土内 破片	長 (10.6) 幅 (0.5) 重 37.3				2本が錆によって固まっている。どちらも両端を欠損しているが、1本が折れ曲がったものではない。断面方形。	
208－6 109	鉄器 刀子？	覆土内 破片	長 (7.2) 幅 (1.3) 重 7.4				形状、厚み等から刀子と思われるが、錆の進行で剝落が激しく不明。	
208－7 109	鉄器 刀子？	覆土内 破片	長 (5.2) 幅 (1.7) 重 13.1				先端部のみ残存。錆が進み表面の剝落が激しい。	

H区第35号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
209—1 109	土師器 坏	覆土内 完形	口 12.8 底 — 高 5.8	黒色鉱物粒微 白色細粒少	酸化焔 やや硬質	灰黄	丸底で体部は深い椀形で、口縁部わずかに外反する。口縁部は横撫でで､内面は雑な撫で、外面体部は指で押さえたような感じを受ける。底部はざらついており、凸型に粘土を押し付けて成形したかのようである。	胎土は陶土か？
209—2	須恵器 台付壺？	覆土内 破片	口 — 底 (11.0) 高 (3.0)	黒色粒 白色細粒	還元焔 硬質	灰白	須恵器甕と同形態の脚部。張り付け部からの剝離。	

H区第36号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
210—1	須恵器 埦CI	覆土内 ¼残存	口 (13.0) 底 (6.0) 高 5.3	白色鉱物粒多 黒色細粒多	中性焔 やや硬質	灰	轆轤整形(右回転)。体部内湾気味で、口縁部は外反する。高台は回転糸切り未調整後の付高台。高台形状は角高台で比較的丁寧な貼り付けである。	
210—2 109	須恵器 埦CII	覆土内 ¼残存	口 (15.2) 底 (7.4) 高 6.1	黒色鉱物粒少 白色鉱物粒微	中性焔 やや硬質	灰黄	轆轤整形(右回転)。底部は回転糸切り後の付高台。体部下半に張りを有し、口縁部わずかに外反する。	
210—3	須恵器 埦 B	覆土内 ¼残存	口 (17.0) 底 — 高 (5.8)	白色鉱物粒少 白色細粒微 赤褐色細粒少	還元焔 硬質	浅黄	轆轤整形(右回転)。体部にほとんど張りをもたず、直線的に口縁部に立ち上がる。轆轤目を顕著に残している。	
210—4	須恵器 壺	覆土内 破片	口 — 底 — 高 (9.7)	白色細粒少 白色鉱物粒微	還元焔 硬質	灰	紐作り後轆轤整形(右回転)。底部は剝離し内面には指頭痕状の痕跡を残す。また、内面にわずかにハゼが観察された。	
210—5	須恵器 甕	覆土内 ¼残存	口 — 底 — 高 —	白色鉱物粒少 白色細粒少	還元焔 硬質	黄灰	紐作り後轆轤整形(右回転)。胴部上半に最大径を有する。外面の轆轤目は比較的粗い。	

H区第39号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
211—1	土師器 坏	覆土内 破片	口 — 底 — 高 (3.2)	白色鉱物粒少	酸化焔 硬質	明赤褐	底部丸底で内斜口縁を有し、外面「く」字に屈曲する。上半撫で、下半篦削りを施す。	
211—2	土師器 坏	覆土内 破片	口 — 底 — 高 —	白色細粒少 褐色細粒	酸化焔 やや硬質	明赤褐	底部丸底の内斜口縁を有する坏と考えられ、器内面に放射状の篦磨きを有している。	内面に暗文あり。 厚 0.4
211—3	須恵器 埦CI～II？	覆土内 ½残存	口 — 底 (7.0) 高 (3.7)	白色鉱物粒少	還元焔 軟質	黄灰	轆轤整形(右回転)。体部下半に若干張りを有し、口縁部は外反すると考えられる。高台は底部回転糸切り未調整後の付高台で、雑な作りである。	燻あり。
211—4	須恵器 埦CI	覆土内 ½残存	口 — 底 (7.0) 高 (4.0)	白色鉱物粒多 黒色鉱物粒微	中性焔 軟質	灰白	轆轤整形(右回転)。体部中位に張りを有し口縁部は外反するものと考えられる。高台は回転糸切り未調整後付高台。高台貼付けは比較的雑な作りである。	内外面共カーボンが付着。
211—5 109	須恵器 埦 B	覆土内 ¼残存	口 (15.3) 底 (6.8) 高 5.5	白色鉱物粒少 黒色鉱物粒微	還元焔 やや軟質	灰白	轆轤整形(右回転)。底部は回転糸切り後付高台。体部上半にわずかに張りがあり、口縁部は外反しない。器外面は「ハゼ」が激しい。	
211—6 110	須恵器 埦CII	覆土内 ½残存	口 (13.4) 底 (6.6) 高 4.7	白色鉱物粒多 黒色鉱物粒微	還元焔 やや軟質	灰白	轆轤整形(右回転)。底部は回転糸切り後付高台。体部にほとんど張りを有さず、口縁部が外反する。	
211—7	灰釉陶器 皿	覆土内 破片	口 (14.0) 底 — 高 (3.4)	美濃系		灰白	轆轤成整形。体部下端2段の回転篦削り。高台は付高台。施釉は刷毛掛けである。内面に重ね焼きの痕跡を残す。	光ケ丘1

211—8 110	灰釉陶器 埦	覆土内 ¼残存	口 — 底 (8.7) 高 (2.3)	美濃系？		灰白	轆轤成整形(右回転)。体部下半に張りを有する。高台は三日月高台で、体部下端及び底部回転篦削り後の付高台である。施釉は刷毛掛けで、外面は高台貼り付け部に及ぶ。	光ケ丘1
211—9	土師器 甕CIV	覆土内 破片	口 (16.0) 底 — 高 (6.7)	白・黒色鉱物粒少 赤褐色細粒少	酸化焔 硬質	橙	紐作り。胴部上位に最大径を有し、口縁部は「く」字状に屈曲する。整形は胴部上位横位篦削り、口縁部横撫で、内面篦撫でである。また頸部には沈線を2条雑に廻らせる。口縁部は比較的厚い。	
212—1 110	須恵器 鉢	覆土内 ¼残存	口 (23.2) 底 — 高 (13.2)	白色鉱物粒微 黒色砂粒少 小礫微	中性焔 やや硬質	灰白	轆轤整形(右回転)。体部が直線的に鉢形を呈し、上半轆轤整形痕を残し、下半は(下→上)への篦削りを施している。体部下半付近にカーボンの付着が見られる。	
212—2	鉄器 釘	覆土内 破片	長 (4.4) 幅 (0.4) 重 8.0				3本が錆によって固められている。3本共断面方形で、先端部が残存する。	
212—3	鉄器 釘？	覆土内 破片	長 (5.2) 幅 (0.7) 重 19.0				両端欠損。断面方形で釘である可能性あり。	
212—4	鉄器 釘	覆土内 破片	長 (3.1) 幅 (0.4) 重 3.4				両端欠損。断面方形で稜が比較的良好に残存。	
212—5 109	瓦 女瓦	覆土内 破片	厚 2.7	白色鉱物粒多 黒色鉱物粒少	還元焔 やや軟質	灰	一枚作り。凹面粘土板糸切り痕あり。凹面及び断面にはカーボンが厚く付着している。凸面にも布目の圧痕がわずかに見られる。	

H区第41号址

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
213—1 110	黒色土器 坏	覆土内 破片	口 (13.1) 底 (6.6) 高 (4.3)	黒色鉱物粒微 白色鉱物粒少 褐色粒微	酸化焔 やや軟質	浅黄	轆轤整形(？)。底部回転糸切り無調整。体部下半にわずかに張りを有し、口縁部はごくわずかに外反する。内面は中央付近放射状、周縁横位の篦磨き後黒色処理を施す。	
213—2 110	須恵器 坏	覆土内 ¼残存	口 (9.2) 底 (6.5) 高 3.3	白色鉱物粒多 黒色鉱物粒少	還元焔 硬質	灰白	轆轤整形(右回転)。底部は切り離し技法は不明で、手持ち篦削り調整が施されている。体部は直線的に開く器形。	

H区第42号址

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
214—1	土師器 坏DII	覆土内 ¼残存	口 (11.8) 底 (8.2) 高 3.3	白・黒色鉱物粒少	酸化焔 硬質	橙	底部平底で、体部から口縁部はわずかに内湾気味に立ち上がる。整形は、底部不定方向手持ち篦削り。口縁部は横撫で、内面撫で、体部は指先で押さえた痕跡を残す。	
214—2	須恵器 埦 B	覆土内 破片	口 (17.1) 底 — 高 (4.8)	細粒砂少 黒色粒多	還元焔 やや硬質	灰	轆轤整形(右回転)。口縁部はほぼ直線的に立ち上がる。	外面自然釉。

H区第43号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
216—1 110	須恵器 埦CI	カマド 完形	口 12.4 底 7.6 高 4.6	黒色鉱物粒多	還元焔 硬質	灰白	轆轤整形(右回転)。体部下半に若干張りを有し、口縁部はほとんど外反しない。底部は回転糸切り後雑な付高台。	
216—2 110	土師質 埦	カマド ¼残存	口 (13.7) 底 (8.6) 高 5.6	黒・白色鉱物粒少	酸化焔 やや硬質	にぶい黄橙	轆轤整形(右回転)。体部はやや内湾気味に立ち上がる。底部は付高台に伴い撫で調整されているため、切り離し技法は不明。高台は他に比してやや高い。	

216—3	須恵器 大甕	覆土内 破片	口 — 底 — 高 —	白色鉱物粒多 黒色粒微	還元焔 硬質	灰	内外面共に叩き。当て具等の痕跡を残していない。	厚 1.1

H区第44号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
217—1 110	須恵器 高台付皿	覆土内 ¼残存	口 (13.2) 底 (6.8) 高 2.3	黒色鉱物粒少	還元焔 やや軟質	灰白	轆轤整形(右回転)。体部はやや外反気味に開く。底部は回転糸切り後雑な付高台。	
217—2	須恵器 蓋	覆土内 破片	口 (12.0) 摘 — 高 (2.0)	砂質 白色鉱物粒 黒色粒	還元焔 硬質	灰白	轆轤整形(右回転)。かえりを有し、摘は宝珠摘と考えられる。外面上部3段の回転篦削りを施す。	
217—3	灰釉陶器 高台付皿	覆土内 破片	口 — 底 (7.0) 高 (1.3)	美濃系？		灰白	轆轤成整形(右？)。体部に緩い屈曲を有する。底部は回転糸切り後に撫で調整を施したものと考えられ、付高台である。施釉は漬け掛け。	
217—4	須恵器 甕	覆土内 破片	口 — 底 — 高 —	黒・褐色粒	還元焔 硬質	灰	外面擬格子叩き、内面青海波文。	厚 0.5
218—1	瓦 女瓦	覆土内 ½残存	厚 2.3	赤褐色砂粒多 黒色粒少	酸化焔 硬質	褐	側部面取り2面。	
218—2 110	鉄器 紡輪	覆土内	長 21.9 幅 0.5 重 48.9				紡錘車はごく薄く作られ、中央に断面方形の軸が装着されている。軸両端は若干欠損する。	

H区第45号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
219—1	土師器 坏DII	覆土内 破片	口 (13.0) 底 (9.0) 高 3.0	白・黒色鉱物粒微 細粒砂少	酸化焔 やや硬質	橙	底部平底で、体部にわずかな屈曲を有し、口縁部わずかに外反する。整形は、底部篦削り口縁部横撫で、体部は指先で押さえを行っている。	
219—2	須恵器 埦C？	覆土内 ¼残存	口 — 底 (6.0) 高 (2.3)	白色細粒少 赤褐色粒少	中性焔 軟質	浅黄橙	轆轤整形(右回転)。体部にはやや張りがある。底部は回転糸切りと考えられるが、高台貼付けはやや雑。	

H区第46号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
220—1 110	土師器 ？	床直 ¼残存	口 — 底 (6.7) 高 (3.4)	褐色粒少 白色鉱物粒微	酸化焔 やや軟質	灰褐	底部平底で、体部に張りを有する。器面は外面・底部共に粗く磨かれ、内面は横位の撫でを施す。器形不明。	
220—2	土師質 坏	カマド 破片	口 (11.0) 底 — 高 (3.3)	白色鉱物粒多 黒色鉱物粒微 細粒砂少	酸化焔 やや硬質	浅黄橙	轆轤整形(右回転)。体部が内湾する。	
220—3 110	土師質 埦？	カマド 破片	口 (12.2) 底 — 高 (3.3)	白色鉱物粒多 褐色粒少 黒色鉱物粒微	酸化焔 硬質	にぶい 黄橙	轆轤整形(右回転)。体部下半に張りを有しやや内湾気味に立ち上がる。	
221—1 110	土師質 埦	覆土内 ¼残存	口 (14.2) 底 — 高 (3.6)	黒色鉱物粒多 白色鉱物粒少 褐色粒少	酸化焔 硬質	にぶい 橙	轆轤整形(右回転)。体部にやや張りを有し口縁部は外反する。	
221—2	須恵器 埦	覆土内 ¼残存	口 — 底 (8.0) 高 (3.3)	白色鉱物粒少 赤褐色細粒多	還元焔 やや硬質	灰白	轆轤整形(右回転)。体部下半に張りを有する。底部は回転糸切り無調整後付高台。高台貼付は比較的丁寧。	
221—3 110	土師質 埦	カマド 破片	口 (16.3) 底 — 高 (5.3)	黒色鉱物粒多 白色鉱物粒少 褐色粒微	酸化焔 硬質	にぶい 黄橙	轆轤整形(右回転)。体部下半に張りを有し内湾気味に立ち上がる。高台は付高台と思われる。	

221—4	須恵系 羽釜C	カマド 破片	口 (20.0) 底 — 高 (8.4)	白色鉱物粒多 黒色鉱物粒少 褐色粒少	酸化焔 やや硬 質	橙	紐作り後轆轤整形(右回転)。口縁部はわずかに内傾し、胴部にあまり張りは見られない。鍔部下1.5cmより下部は縦位篦削り。	
221—5	瓦 女瓦	覆土内 ½残存	厚 2.0	黒色粒多 大・小礫少	還元焔 硬質	灰白	一枚作り？凹面粘土板糸切り痕あり。裏面狭端部横位、その他縦位縄叩き。裏面に離れ砂の痕跡を残す。側部面取り3面。	
221—6	瓦 女瓦	覆土内 破片	厚 2.0	黒色粒 白色細粒少	還元焔 硬質	灰白	凹面布面の擦消し。裏面縦位縄叩き。自然釉側部面取り2面。	
221—7	瓦 男瓦	覆土内 破片	厚 2.0	黒色粒多 白色細粒少	還元焔 硬質	灰白	凸面縄叩きあり。凹面布合せ目痕あり。表裏共に薄い自然釉。側部面取り3面。	
221—8	瓦 男瓦	覆土内 ¼残存	厚 2.5	黒色粒少 白色細粒多 白色鉱物粒少	酸化焔 やや硬 質	明赤褐	桶巻き作り。凹面に布目あり。側部に半截した痕跡を残している。	
222—1 110	瓦 男瓦	覆土内 ½残存	広 — 狭 15.8 長 —	白色鉱物粒	中性焔 やや硬 質	にぶい 黄橙	凹面布目の擦消し。篦描き文字瓦文字不明(凹面)。側部面取り2面。	反 6.0 厚 2.0

H区第47号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
224—1 110	石器 薦編み石	P3 完形	長 15.3 幅 7.1 厚 5.7	粗粒安山岩			使用痕は不明。	重1023.3
224—2 110	石器 薦編み石	覆土内 完形	長 15.5 幅 7.5 厚 4.1	粗粒安山岩			側面に敲打痕が顕著に残る。	重 832.9

H区第53号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
226—1 111	土師器 鉢	カマド 掘り方 ½残存	口 (22.8) 底 — 高 (8.0)	黒・白色鉱物粒微 褐色粒微	酸化焔 軟質	浅黄	底部丸底で口縁部との境にわずかに段を有し口縁部はやや外反する。底部篦削り、口縁部横撫でを施す。内面に研磨は見られず撫で後黒色処理を施す。	
226—2	土師器 壺	覆土内 破片	口 — 底 (7.0) 高 (3.7)	陶土 白色鉱物粒多	酸化焔 硬質	にぶい 橙	紐作り。球形状の胴部を有するものと考えられ、底部は尖底状に突出する。器面は磨きに近い撫で。	
226—3 110	土師器 手捏	覆土内 破片	口 — 底 — 高 —		酸化焔 軟質	淡黄	底部に木葉痕あり。	厚 1.8
226—4	土師器 甕AI	覆土内 破片	口 (23.0) 底 — 高 (8.5)	白色鉱物粒少 褐色粒微 赤褐色細粒多	酸化焔 やや軟 質	にぶい 橙	紐作り。長胴で口縁部に最大径を有し、胴部にほとんど張りを持たない。整形は、口縁部横撫で後胴部縦位篦削り。内面横位、縦位の撫で。外面に粘土紐接合痕を明瞭に残す。	
226—5	須恵器 甕	覆土内 破片	口 — 底 — 高 —	白色鉱物粒少 黒色細粒微	還元焔 硬質	灰	紐作り。外面格子叩き。内面青海波文。	厚 1.1
227—1 111	土製品 羽口	覆土内 破片	内径 1.5 外径 3.0	白色鉱物粒多	酸化焔	明黄褐	先端部欠損。	厚 1.7
227—2 110	石器 薦編み石	覆土内 完形	長 11.4 幅 5.9 厚 2.6	粗粒安山岩			使用痕不明。	重 319.3
227—3 110	石器 薦編み石	覆土内 完形	長 14.1 幅 7.4 厚 4.6	粗粒安山岩			2面に磨滅した痕跡あり。	重 712.5
227—4 110	石器 薦編み石	覆土内 完形	長 14.5 幅 8.0 厚 4.9	粗粒安山岩			上半の一部に磨滅した面が認められるが、裏面に対応するような面は見られない。	重 894.1

227—5 110	石　器 鷹編み石	覆土内 完形	長　17.6 幅　6.2 厚　3.9	変質安山岩			使用痕不明。	重 685.0

H区第54号住居跡

挿図番号 図版番号	種　別 器　種	出土位置 遺存状態	度目（cm） 量目（g）	胎　土	焼　成	色　調	器形・技法等の特徴	備　考
229—1	土師器 手　捏	覆土内 ¼残存	口　(6.0) 底　(6.0) 高　3.4	褐色細粒少	酸化焔 軟質	浅黄橙	手捏。底部平底で、体部は直線的に立ち上がり、口縁部は「く」字状に内傾する。整形は、体部外面に指頭痕を明瞭に残し、内面は撫でである。	
229—2	土師器 手　捏	覆土内 ¼残存	口　— 底　(7.0) 高　(2.8)	褐色粒微	酸化焔 軟質	にぶい 黄褐	紐作り。底部平底で木葉痕あり。体部下端に若干張りを有している。	
229—3 111	土師器 手　捏	覆土内 ½残存	口　(10.0) 底　(7.0) 高　4.0	褐色粒微	酸化焔 軟質	にぶい 黄橙	紐作り。底部平底で木葉痕あり。体部は比較的浅く内湾気味に立ち上がる。器厚非常に厚い。整形は体部外面指先の押さえ、内面撫で口縁部横撫では行わない。	
229—4	土師器 手　捏	覆土内 ¼残存	口　(9.6) 底　(6.0) 高　(4.9)	褐色粒微	酸化焔 軟質	浅黄橙	紐作り。底部平底で若干突出する。体部中位に張りを有し、口縁部はわずかに内湾する。器厚は厚い。整形は内面に篦撫での痕跡を明瞭に残す。外面は、指先による押さえた状態である。	
229—5 111	土師器 手　捏	覆土内 ¾残存	口　8.0 底　4.4 高　4.5	白色鉱物粒少 白色細粒少	酸化焔 軟質	浅黄	紐作り。底部平底で木葉痕あり。体部はやや内湾気味に立ち上がる。整形は、体部指の押さえ、口縁部横撫で、内面篦撫でである。外面体部は粘土が柔らかなうちに指で押さえたらしく、指先の痕跡を多数残している。	
229—6	土師器 手　捏	覆土内 ¼残存	口　(10.6) 底　— 高　(5.5)	褐色細粒微	酸化焔 軟質	にぶい 黄橙	紐作り。底部平底で、体部やや外反気味に立ち上がり、口縁部内湾する。器厚非常に厚い整形は、体部下端に指先の押さえの痕跡を明瞭に残す。口縁部は横撫で、内面は撫でである。	
229—7	土師器 手　捏	覆土内 ¼残存	口　(8.6) 底　(6.0) 高　5.8	褐色粒微	酸化焔 軟質	にぶい 黄橙	紐作り。底部平底で、体部上位に若干張りを有し、口縁部はわずかに内湾する。器厚は底部が特に厚い。整形は内外面共に撫でを施す	カーボン付着。
229—8	土師器 手　捏	覆土内 ¼残存	口　(8.6) 底　(5.0) 高　5.8	褐色粒微	酸化焔 やや軟質	浅黄	紐作り。底部平底で木葉痕あり。体部は上位に若干張りを有し、口縁部は内湾する。口縁部は波状を呈する。器厚は底部が特に厚い。整形は内外面共撫でを施す。	
229—9 111	土師器 坏AII？	覆土内 ½残存	口　(11.2) 底　— 高　4.5	白・黒色鉱物粒少	酸化焔 硬質	にぶい 赤褐	底部やや深めの丸底で、口縁部は直立する。口縁部横撫で、内面は回転の撫で。底部は篦削りを施す。	
229—10 111	土師器 坏？	覆土内 ½残存	口　(13.2) 底　— 高　4.0	褐色粒多 黒色鉱物粒微	酸化焔 やや硬質	橙	底部は浅い丸底で口縁部直立し、先端が外反する。底部は異常に厚い。口縁部横撫で、内面撫で、底部篦削りを施す。	
229—11 111	土師器 坏AI	覆土内 ¾残存	口　(14.0) 底　— 高　3.6	褐色粒少 黒色鉱物粒少 白色鉱物粒微	酸化焔 硬質	にぶい 赤褐	底部は浅い丸底で、口縁部との境に段を有し口縁部は外反する。口縁部横撫で、内面も回転の撫で。底部篦削りである。	
229—12 111	須恵器 坏？	掘り方 破片	口　(10.2) 底　(7.3) 高　4.0	白色鉱物粒微	還元焔 硬質	灰	轆轤整形(右回転)。体部は直線的に立ち上がり、中位に強い轆轤痕を残す。底部は回転篦調整を施す。	
229—13	須恵器 坏　A	覆土内 破片	口　— 底　— 高　—	白色細粒微	還元焔 やや軟質	灰	受部を有する蓋坏の坏部。轆轤整形。底部は回転篦削り整形を施す。	
229—14	土師器 小型甕	覆土内 ¼残存	口　(10.6) 底　— 高　(9.0)	白色細粒少 白色鉱物粒少 黒色砂粒多	酸化焔 硬質	にぶい 黄橙	胴部上位に張りがあり、口縁部は「C」字状に立ち上がる。胴部横位篦削り(右→左)後口縁部横撫で、内面篦撫で。	
229—15 111	石　器 磨　石	覆土内 ½残存	長　(6.2) 幅　7.9 厚　3.5	粗粒安山岩			半截されており、実測面及び上端部に熱によるハゼと思われる剝離面が見られる。両面共磨滅している。	重 274.0

H区第61号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
232—1 111	土師質 坏	覆土内 ¾残存	口 9.1 底 5.4 高 2.8	黒色鉱物粒微 白色鉱物粒少	酸化焔 やや軟質	黄灰	轆轤整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整でやや突出し、体部上半にわずかに張りを有し、口縁部は外反する。	カーボンが全面に付着。
232—2 111	土師質 埦	覆土内 ¾残存	口 — 底 9.8 高 (3.4)	黒色鉱物粒微 白色鉱物粒少	酸化焔 硬質	にぶい 黄橙	やや長脚の高台。轆轤整形後付高台。底部切り離し技法は、付高台に伴い撫でられているため不明。内面は放射状に篦磨きされている	黒色土器の焼き戻りか？
232—3 112	須恵系 小型甕	カマド ¾残存	口 12.0 底 6.9 高 8.3	白色鉱物粒少 黒色鉱物粒微 褐色粒微	酸化焔 やや硬質	褐灰	紐作り轆轤整形(右回転)。底部は回転糸切り後周辺は撫でが施されている。底部がわずかに突出し、口縁部は「C」字状に外反する。	炭化物付着（籾粒か？）
232—4	須恵系 羽釜C	覆土内 破片	口 (26.0) 底 — 高 (10.0)	白色細粒多 赤褐色粒少 砂粒少	酸化焔 やや軟質	橙	紐作り後轆轤整形(右回転)。口縁部はやや内傾し、胴部最大径と鍔部径がほぼ同じ程度である。鍔は張り付けで両側を丁寧に撫でている。	
232—5	須恵系 羽釜C	カマド ½残存	口 (23.0) 底 — 高 (15.8)	白色鉱物粒多 黒・赤褐色粒多	酸化焔 軟質	橙	紐作り後轆轤整形(整形に轆轤の回転力をほとんど使用していない)。鍔は張り付けで雑胴部には粘土紐接合痕を明瞭に残している。口縁部下内面の接合部は指先で強く押さえられている。外面胴部には縦位の撫でを施す。	
232—6	須恵系 羽釜C	覆土内 破片	口 (20.0) 底 — 高 (8.8)	白色鉱物粒少 黒色鉱物粒微 褐色粒	酸化焔 硬質	橙	紐作り後轆轤整形(右回転)。口縁部はやや内傾し、胴部に張りはほとんど見られない。鍔は張り付けで両側を強く撫でている。鍔の張り付けは雑。内面整形は横～斜位の撫でを施す。	
233—1 111	土師系 土釜	カマド ½残存	口 (23.1) 底 — 高 (24.2)	小礫少 黒色鉱物粒少 白色鉱物粒多 灰色砂粒多	酸化焔 硬質	にぶい 橙	紐作り。胴部上半に張りを有し、口縁部は直立し口唇部は外面肥厚する。胴部(上→下)への縦位篦削り後、口縁部横撫でを施している。内面篦撫でを施す。	
233—2 111	土師系 土釜	カマド ½残存	口 (27.4) 底 (15.0) 高 29.8	黒・白色鉱物粒多 砂粒少	酸化焔 硬質	にぶい 褐	紐作り。胴部上半に張りを有し、口縁部は「C」字状に外反する。胴部は(上→下)への縦位篦削り後、口縁部横撫でを施す。内面は篦撫でである。	
233—3 112	鉄器 釘	覆土内 破片	長 (2.5) 幅 (0.4) 重 1.7				両端欠損。断面は方形で稜が明瞭に残存する	
233—4 112	鉄器 釘	覆土内 破片	長 (2.5) 幅 (0.3) 重 1.2				ごくわずかしか残存していないが、断面は方形と思われ、釘の一部である可能性が高い。	

H区第62号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
234—1 112	土師質 坏	カマド 覆土内 ½残存	口 (9.9) 底 (4.4) 高 3.1	黒・白色鉱物粒少 褐色粒多	酸化焔 やや軟質	にぶい 黄橙	轆轤整形(右回転)。体部に張りを有し、口縁部は外反する。	
234—2 112	土師質 埦	覆土内 ½残存	口 (14.3) 底 (7.9) 高 6.3	黒色鉱物粒多 白色鉱物粒少 褐色粒少	酸化焔 やや軟質	灰黄	轆轤整形(右回転)。体部中位にわずかに張りを有し、口縁部がごくわずかに外反する。高台は付高台で、切り離し技法は不明。	
235—1 112	須恵系 小型甕	覆土内 ¾残存	口 (10.5) 底 (5.3) 高 7.8	白色鉱物粒少 黒色鉱物粒微 褐色粒微	酸化焔 硬質	にぶい 褐	紐作り轆轤整形(右回転)。脚部上半に最大径を有し、口縁部は「C」字状に緩く外反する。底部は回転糸切り無調整で、若干突出する。	
235—2 112	須恵系 羽釜C	カマド 破片	口 (22.0) 底 — 高 (8.3)	粗粒砂多 褐色粒少	酸化焔 硬質	橙	紐作り後轆轤整形(右回転)。口縁部やや内湾し、口唇部平坦で内傾する。胴部の張りは弱く、鍔部が最大径である。胴部には粘土紐接合痕が観察された。	
235—3	須恵系 羽釜C	覆土内 破片	口 (23.0) 底 — 高 (15.8)	白色鉱物粒多 黒・赤褐色粒多	酸化焔 軟質	橙	第232図—5と同一個体。	

235—4	須恵系 羽釜C	覆土内 破片	口 (23.0) 底 — 高 (15.8)	白色鉱物粒多 黒・赤褐色粒多	酸化焔 軟質	橙	第232図—5と同一個体。	
235—5	瓦 女瓦	カマド 破片	厚 2.6	砂粒 褐色粒多	還元焔 軟質	灰	一枚作り。凹面粘土板糸切り痕あり。カーボン表面から断面におよぶ。カマドで使用のためか？側部面取り2面。	
235—6	瓦 女瓦	覆土内 破片	厚 1.9	白色粒 白色鉱物粒多 砂粒	還元焔 硬質	灰	一枚作り。側部面取り2面。	

H区第63号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
236—1 112	石器 敲石	覆土内 完形	長 11.6 幅 6.4 厚 2.9	黒色安山岩			下端部からの打撃によって1面の剝離面が形成され、更に刃部調整のような数回の小剝離が加えられている。	重 371.3

H区第64号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
237—1	土師質 埦	覆土内 ½残存	口 — 底 — 高 (1.5)	黒色鉱物粒少 褐色粒微	酸化焔 軟質	にぶい 褐	轆轤整形。高台は付高台で強く撫でを施し、中央部の糸切り痕に指先で雑な一方向の撫でを行っている。	内面にカーボンが厚く付着

H区第65号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
237—2	土師器 坏CI	覆土内 ½残存	口 (14.0) 底 — 高 (3.1)	黒色鉱物粒多 白色鉱物粒微	酸化焔 軟質	にぶい 赤褐	底部丸底で、口縁部は内湾気味に立ち上がる整形は、底部篦削り、口縁部は内面横撫でである。口縁部横撫でと底部篦削りの間に整形の曖昧な部分のあるのが特徴である。	
237—3	土師器 坏	覆土内 破片	口 (16.0) 底 — 高 (4.5)	白色細粒少 黒色細粒微	酸化焔 軟質	橙	紐作り。体部は内湾気味である。整形は体部横位の篦削りを施し、口縁部横撫で。内面は撫で後放射状暗文を施す。	
237—4 112	土師器 高坏	覆土内 ½残存	口 — 底 — 高 (13.3)	白色鉱物粒少 灰色砂粒微	酸化焔 やや硬質	にぶい 黄橙	紐作り。脚部下半で「く」字状に屈曲し、開く器形。坏部との接合部は絞り込んでいる。脚部(下→上)への縦位篦撫で。	
237—5	須恵器 甕	覆土内 破片	口 — 底 — 高 —	白色細粒多 黒色粒微	還元焔 やや硬質	灰	外面擬格子状叩き後横位の櫛描き。内面青海波文。	厚 0.5

H区第66号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
238—1	土師質 坏F′？	覆土内 ¼残存	口 (9.0) 底 (4.4) 高 2.8	黒色鉱物粒少 褐色粒微	酸化焔 軟質	淡黄	轆轤整形(右回転)。底部は回転糸切り後無調整で、体部に緩い屈曲を有し、口縁部はわずかに外反する。	
238—2	土師質 皿	覆土内 ¾残存	口 (9.6) 底 (6.0) 高 2.1	褐色粒少 黒色鉱物粒少 灰色砂粒少	酸化焔 やや軟質	浅黄橙	轆轤整形(右回転)。体部中位で1段屈曲するように立ち上がる。底部は回転糸切り無調整と思われ、ごくわずかに突出する。	
238—3 112	土師質 埦	覆土内 破片	口 (13.0) 底 — 高 (3.5)	黒色鉱物粒少 白色鉱物粒微	酸化焔 やや軟質	淡黄	轆轤整形(右回転)。体部内湾し、口唇部は薄く若干外反する。	
239—1	土師質 坏	覆土内 ¼残存	口 (11.0) 底 (6.0) 高 (3.8)	白・黒色細粒多	中性焔 やや硬質	灰黄	轆轤整形(右回転)。底部回転糸切り後無調整。体部中位に若干張りを有し、口縁部わずかに外反する。外面轆轤痕を明瞭に残すが内面は丁寧に撫でを施している。	

239—2	土師質 埦E	覆土内 ½残存	口 — 底 (9.0) 高 (3.5)	白・黒色鉱物粒少 白色細粒多	酸化焔 硬質	にぶい 橙	轆轤整形(右回転)。体部形状は不明であるが、若干外反気味の長脚の、高台を貼付している。高台貼付けは、回転を利用した撫でで丁寧である。	
239—3 112	土師質 埦	覆土内 ½残存	口 — 底 (9.6) 高 (3.7)	シルト 灰色砂粒微	酸化焔 硬質	浅黄橙	轆轤整形(右回転)。高台はやや長脚で付高台である。底部切り離し技法は、高台貼り付けに伴い撫で調整が施され不明。	
239—4 112	灰釉陶器 皿	掘り方 覆土内 ½残存	口 (12.2) 底 (6.0) 高 2.2	美濃系		灰白	轆轤成整形(右回転)。体部やや内湾気味で口縁部はわずかに外反する。底部は回転糸切り後付高台。	虎渓山1
239—5 112	緑釉陶器 ?	覆土内 破片	口 — 底 — 高 —			明緑灰	高台部と思われ、軟質。	厚 0.4
239—6	灰釉陶器 長頸瓶	覆土内 破片	口 (11.0) 底 — 高 (3.2)	猿投系?		灰白	外反し段を有する口縁で、内面に厚く、外面は薄く施釉されている。	
239—7	須恵系 羽釜D	覆土内 破片	口 (26.0) 底 — 高 (11.1)	黒色鉱物粒少 白色鉱物粒微	酸化焔 硬質	にぶい 黄橙	紐作り後轆轤整形(右回転)。最大径を鍔部に有し、胴部の張りは弱い。口縁部は外傾し、口唇部は平坦で内傾している。整形は胴部外面、胴中位縦位の撫でを施す。	
239—8	瓦 女瓦	覆土内 破片	厚 2.5	白色鉱物粒少 白色細粒多 褐色粒多	還元焔 軟質	灰黄	一枚作り。布目縦位の雑な撫で。凸面斜格子叩き。側部面取り2面。	
239—9 112	鉄器 刀子	覆土内 破片	長 (17.7) 幅 (1.5) 重 47.0				先端及び刃部は錆の進行で欠損している。	
239—10 112	鉄器 刀子?	覆土内 破片	長 (3.6) 幅 (2.1) 重 3.6				薄い鉄片状で、錆の進行が激しく不明。	
239—11 112	石器 薦編み石	覆土内 完形	長 13.1 幅 6.0 厚 4.8	黒色頁岩			断面三角形状で、加工痕、使用痕等は認められない。	重 538.3

H区第67号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
240—1	土師質 埦	覆土内 破片	口 (13.0) 底 — 高 (4.2)	黒色鉱物粒少 白色細粒多 褐色粒微	酸化焔 硬質	にぶい 褐	轆轤整形(右回転)。体部下半に緩い屈曲を有し、口縁部は外反する。内面の撫で整形は特に丁寧で、口唇部に2条の沈線状のものが見られる。	高台剝落
240—2	須恵系 羽釜	覆土内 破片	口 — 底 (7.0) 高 (4.7)	白色鉱物粒多 褐・黒色粒少	酸化焔 硬質	にぶい 褐	紐作り後轆轤整形、胴部下半斜位の篦削り、内面横位の撫でを施す。	
240—3 112	鉄器 釘	覆土内 破片	長 (8.5) 幅 (0.5) 重 16.2				下半部は断面方形に近いもので、上半は急な段差を有し、太くなっている。機能部は欠損部と考えられる。	
240—4 112	鉄器 鏃	覆土内 破片	長 (10.5) 幅広 (1.5) 幅狭 (0.4)				先端部は薄く鋭利に成形され、基部から茎部は断面方形である。	重 17.8
240—5 112	鉄器 刀子	覆土内 破片	長 (7.0) 幅 (1.7) 重 6.9				先端の一部のみ残存。刃部は錆の進行で欠損する。	
240—6 112	鉄器 釘	覆土内 破片	長 (4.5) 幅 (0.5) 重 4.8				先端部が残存し、断面は方形である。	

H区第68号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目（cm） 量目（g）	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
242－1	土師質 坏	覆土内 破片	口（10.6） 底　— 高（2.5）	白色細粒少 黒色鉱物粒微	中性焔 硬質	灰白	轆轤整形(右回転)。体部に張りがあり、全体的に内湾する。内外面共に轆轤痕の部分は撫でを施している。	
242－2 112	土師質 坏EII	カマド ¼残存	口（12.4） 底（6.0） 高　3.7	黒色鉱物粒多 白色細粒多	酸化焔 硬質	にぶい 褐	轆轤整形(右回転)。体部中位に張りを有し口縁部はわずかに外反する。底部は回転糸切り無調整である。	
242－3 112	須恵器 坏EIII？	カマド 完形	口　11.3 底　7.0 高　4.2	黒・白色鉱物粒微 灰色砂粒少	中性焔 硬質	にぶい 橙	轆轤整形(右回転)。体部から口縁部にかけ外反する。底部は回転糸切り無調整である。底部と内面底部相対する位置にカーボンの付着が見られる。	
242－4	須恵器 埦CII	覆土内 ¼残存	口（13.8） 底　— 高（4.6）	白色鉱物粒多	中性焔 軟質	黒褐	轆轤整形(右回転)。体部に丸味を有し、口縁部は比較的強く外反する。内外面に燻あり。	
242－5 112	須恵系 羽釜C	覆土内 ¼残存	口（20.3） 底　— 高（24.1）	黒・白色鉱物粒少 褐色粒少	酸化焔 硬質	にぶい 黄橙	紐作り轆轤整形(右回転)。胴部上半に若干張りを有し、口縁部はわずかに内傾する。口唇部は平坦で水平に近い。胴部最大径の位置より以下は斜位(上→下)の篦削りを施す。	
242－6	須恵系 羽釜C	覆土内 破片	口（19.2） 底　— 高（13.6）	白色鉱物粒多 褐色細粒多	中性焔 硬質	灰褐	紐作り後轆轤整形(右回転)。鍔部に最大径を有し、胴部に張りをほとんど有しない。鍔の貼り付けは、比較的丁寧である。内面上位に斜位の撫でを雑に施す。	
242－7 112	須恵系 羽釜C	カマド 覆土内 ¾残存	口（20.5） 底（5.2） 高　24.7	小礫少 白色鉱物粒多 褐色粒多 黒色鉱物粒少	中性焔 硬質	にぶい 黄橙	紐作り轆轤整形(右回転)。胴部上半に最大径を有し、口縁部は内傾する。口唇部は平坦でわずかに内傾している。胴部中位以下は斜位(上→下)篦削りを施す。	
242－8	須恵系 羽釜D	カマド 破片	口（19.2） 底　— 高（13.7）	黒色鉱物粒多 白色粒少 褐色粒多	中性～ 酸化焔 やや硬質	橙	紐作り後轆轤整形(右回転？)。最大径を鍔部に有し、口縁部はわずかに外に開く。鍔は貼り付け後両側を撫でているが、あまり丁寧でない。胴部は中位以下に縦位の強い撫でを施す。	
242－9	須恵系 羽釜C	覆土内 破片	口（20.2） 底　— 高（12.4）	白色鉱物粒多 黒色鉱物粒少	還元焔 硬質	灰白	紐作り後轆轤整形(右回転)。最大径を鍔部に有し、口縁部やや内傾する。口唇部はやや窪みわずかに内傾する。鍔の貼り付けは丁寧である。	
243－1	瓦 男瓦	覆土内 ¼残存	厚　2.0	白色鉱物粒 黒・褐色粒少	酸化焔 軟質	にぶい 橙	凹面粘土板糸切り痕あり。凸面縄叩き後撫で消している。側部面取り３面。	
243－2 113	瓦 男瓦	覆土内 破片	厚　2.0	白色鉱物粒多	中性焔 硬質	にぶい 黄橙	一枚作り。凸面は縦位の撫で。凹面には厚くカーボンが付着している。側部面取り１面。	
243－3 113	石器 薦編み石	貯蔵穴 完形	長　14.1 幅　6.1 厚　6.0	変質安山岩			両側面及び下面に若干磨滅したような痕跡が見られるが、自然面との区別はつけがたい。	重907.1

H区第69号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目（cm） 量目（g）	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
244－1 113	須恵器 埦CII	覆土内 ½残存	口（15.2） 底（7.8） 高　4.6	黒色鉱物粒微 灰色砂粒微	中性焔 軟質	黄灰	轆轤整形(右回転)。体部中位に若干張りを有し、口縁部は外反する。底部は糸切り後非常に雑な付高台。	燻焼成。
244－2	須恵器 埦	カマド ¼残存	口　— 底（8.2） 高（3.0）	白・黒色鉱物粒多	還元焔 やや硬質	褐灰	轆轤整形(右回転)。底部回転糸切り後付高台。中央径２cm程を除き、回転の撫でを施している。	
244－3	瓦 女瓦	カマド ¼残存	厚　2.2	白色鉱物粒多 黒色鉱物粒少	酸化焔 硬質	にぶい 橙	広端部近く凹面に帯状にカーボン付着。凸面小判型格子文あり。	
244－4 113	瓦 女瓦	カマド ¼残存	厚　2.0	白色鉱物粒少 褐色粒少	中性焔 硬質	灰褐	凹面はわずかに模骨痕と思われる痕跡が観察でき、布目は粗く撫で消されている。凸面は全面撫で後正格子叩き。側部面取り２面。	

H区第71号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
245—1 113	土師器 坏CII	覆土内 ½残存	口 (12.0) 底 — 高 (3.1)	黒色鉱物粒多 褐色粒微	酸化焔 硬質	にぶい 橙	底部平底気味で、体部わずかに内湾気味に立ち上がる。口縁部横撫で、底部篦削りで、間に指で押さえた部分が見られる。	
245—2	須恵器 蓋	覆土内 ½残存	口 — 摘 (4.4) 高 (2.4)	白色鉱物粒少 黒・褐色細粒少	酸化焔 硬質	浅黄橙	轆轤整形(右回転)。摘接合部は回転糸切り後ほとんど調整を加えない状態。摘接合に伴ない若干の撫でを施す。体部に篦削りを施さない。	
246—1 113	須恵系 小型甕	覆土内 ½残存	口 (20.4) 底 — 高 (15.5)	黒・白色鉱物粒少 褐色粒少	酸化焔 硬質	にぶい 橙	紐作り轆轤整形(右回転)。胴部上位に張りを有し、口縁部は「く」字状に外反する。胴部上半及び内面は轆轤整形を残し、胴部下半は斜位(上→下)の篦削り。	
246—2	須恵系 羽釜	カマド ½残存	口 — 底 (7.4) 高 (13.7)	白色鉱物粒少	酸化焔 やや軟質	暗赤褐	紐作り後轆轤整形。胴部下半は、縦斜位の篦削りを施す。内面調整は雑。	
246—3 113	石器 敲石	覆土内 完形	長 15.6 幅 6.4 厚 4.8	変質安山岩			上下両端部に打痕が見られる。	重 738.1

H区第72号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
247—1	土師器 坏CI	覆土内 破片	口 (11.0) 底 — 高 (2.7)	黒色鉱物粒少 白色細粒少	酸化焔 やや硬質	にぶい 赤褐	底部丸底で体部～口縁部内湾気味に立ち上がる。調整は口縁部横撫で、底部篦削りとの間に調整の曖昧な部分が見られる。	
247—2 113	土師器 坏CI	P1 ½残存	口 (13.2) 底 — 高 (3.3)	黒色鉱物粒少 褐色粒少	酸化焔 硬質	にぶい 橙	底部は浅い丸底で、体部は内湾気味に立ち上がる。底部は篦削り、口縁部横撫で、間に調整の不明瞭な部分が認められる。	
247—3 113	土製品 羽口	覆土内 ½残存	内径 3.0 外径 7.2	黒色鉱物粒少 スサ入り	基酸化 先還元焔	橙	先端部は高熱のため変質し、安山岩のような肌になっている。更にその表面にスラグ状の物質が厚く付着している。	
247—4 113	土製品 羽口	覆土内 ½残存	内径 2.5 外径 6.6	黒色鉱物粒少 白色粒少 スサ入り	基酸化 先還元焔	橙	表面は模骨状の痕跡があり、面取りされた様な状態を呈している。先端は高熱のため、安山岩質に変質し、更にスラグ状の物質が付着している。	
248—1 113	石器 台石	覆土内 完形	長 50.1 幅 41.4 厚 30.0	アプライト			実測面は最終使用面と思われる部分で、黒褐色の付着物が多く見られる他、使用面が打撃熱等によりハゼで平坦面となっている。この他5面ほどの使用面がある。	重 92.0 (kg)
248—2 113	石器 台石	覆土内 完形	長 40.1 幅 26.8 厚 20.9	アプライト			3面の使用面があり、黒褐色の付着物がみられる。	重 30.8 (kg)

H区第73号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
249—1 113	土師器 坏CII	カマド ¾残存	口 (12.0) 底 — 高 3.2	黒・白色鉱物粒少	酸化焔 硬質	にぶい 橙	底部はごく浅い丸底で、体部に1段の屈曲を有する。口縁部横撫で、体部横位篦削り、底部篦削りを施す。	

H区第92号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目（cm） 量目（g）	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
254—1 114	土師質 坏	貯蔵穴 ¼残存	口 (11.3) 底 (5.5) 高 3.3	黒・白色鉱物粒少 褐色粒少	酸化焔 やや硬質	にぶい橙	轆轤整形(右回転)。体部中位にわずかに張りを有し、口縁部はわずかに外反する。底部は回転糸切り後無調整で、若干突出する。	
254—2 113	土師質 埦	覆土内 ½残存	口 (15.9) 底 — 高 (5.5)	白・黒色鉱物粒少 褐色粒少	酸化焔 やや軟質	にぶい橙	轆轤整形(右回転？)。体部中位に若干張りを有し、口縁部はわずかに外反する。底部は回転糸切り後付高台で、糸切りの痕跡は大半が高台貼り付けに伴い撫で消されている。	
254—3 113	石器 敲石？	覆土内 ½残存	長 (8.0) 幅 6.9 厚 3.5	変質安山岩			半截された面の縁辺に更に小さな剝離が見られることにより、この縁辺が機能部であった可能性がある。	重 293.4

H区第97号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目（cm） 量目（g）	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
255—1	土師器 坏CI	覆土内 破片	口 (13.0) 底 — 高 (2.6)	白色鉱物粒少 黒色鉱物粒微	酸化焔 やや軟質	明赤褐	底部丸底で、体部から口縁部内湾気味に立ち上がる。調整は底部篦削り、口縁部横撫で、内面撫でを施す。	
255—2 114	須恵器 坏DIV	覆土内 ¼残存	口 (14.2) 底 (7.5) 高 4.1	黒色鉱物粒多 白色鉱物粒微	還元焔 硬質	灰白	轆轤整形(右回転)。体部は全体に内湾気味に立ち上がる。底部は回転糸切り後無調整。	
255—3 114	須恵器 埦A	覆土内 完形	口 11.7 底 7.0 高 5.5	黒色鉱物粒多 灰色砂粒少	還元焔 硬質	灰白	轆轤整形(右回転)。体部は直線的に立ち上がり、張りを有しない。底部は回転篦切り後付高台。貼り付けは非常に丁寧である。	
255—4 114	土師器 小型甕	覆土内 ¼残存	口 12.2 底 5.6 高 14.5	黒色鉱物粒少 白色鉱物粒多 灰色砂粒多	酸化焔 硬質	にぶい橙	口縁部は「C」字状に外反し、胴部上半に強い張りを有している。肩部は横位(右→左)、胴部斜位(下→上)の篦削り後口縁部横撫で、内面は篦撫でを施す。	
255—5 114 140	鉄器 鎌	覆土内 破片	長 (17.8) 幅 (3.2) 重 135.3				全体に湾曲が強く背部が錆の進行により欠損している。基部には柄と考えられる木質が残存している。	
256—1 114	石器 礫器？	覆土内 完形	長 14.3 幅 7.3 厚 3.5	黒色頁岩			自然石の一端を片面から大きく剝離し、刃部を形成し、側縁調整及び刃部加工を行っている。一次使用面には磨滅した部分が見られる	重 454.2

H区第98号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目（cm） 量目（g）	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
258—1 114	緑釉陶器 埦	覆土内 破片	口 — 底 (7.0) 高 (1.3)			オリーブ	高台は、底部回転篦調整後の付高台。釉は高台部、底部を含み全面に施されている。	
258—2 114	緑釉陶器 埦？	覆土内 破片	口 — 底 — 高 —			オリーブ	体部外面に篦削り状の調整がくわえられている。釉の発色は第258図—1と同じで同一個体の可能性あり。	厚 0.4
258—3 114	瓦 女瓦	カマド 破片	厚 2.0	白色鉱物粒少 黒色鉱物粒少	還元焔 硬質	灰褐	一枚作り。凸面斜格子叩き、凹面に2次焼成のためか、カーボンの付着が見られる。	
258—4	瓦 女瓦	カマド ¼残存	厚 2.7	褐色粒 白・黒色細粒多	酸化焔 やや硬質	橙	凹面布目丁寧に撫で消している。凸面縄叩き側部面取り3面。	
258—5 114	石器 不明	覆土内 ¼残存	長 13.1 幅 10.2 厚 4.2	石英閃緑岩			熱によるハゼが激しく、原石面の大半は失われている。	重 835.4

H区第99号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
259—1	須恵器 埦A	覆土内 破片	口 — 底 (6.4) 高 (2.8)	白・黒色細粒少	還元焔 硬質	黄灰	轆轤整形(右回転)。底部回転篦切り後付高台。高台貼り付けは丁寧で、内面やや内湾する。体部は腰にやや張りを有する。	
259—2	須恵器 蓋	覆土内 ¼残存	口 (18.0) 摘 (6.0) 高 2.6	黒・白色細粒多	還元焔 硬質	褐灰	轆轤整形(右回転)。比較的強いかえりを有し、摘は環状である。外面は広範に回転篦削りを施す。	
259—3	須恵器 蓋	覆土内 破片	口 (17.0) 摘 — 高 (2.2)	白色鉱物粒微 白色細粒多	還元焔 硬質	灰	轆轤整形(右回転)。かえりを有さない。上面は比較的丁寧な篦削りを施す。	
259—4	須恵器 甕	覆土内 破片	口 — 底 — 高 —	灰褐色粒多 白色鉱物粒少	還元焔 やや硬質	褐灰	外面擬格子状叩き、内面青海波文。	厚 1.7
259—5	土師器 坏	覆土内 破片	口 — 底 (13.0) 高 (1.1)	白色鉱物粒微 白色細粒少	酸化焔 やや硬質	にぶい 褐	底部平底に近く、体部はやや内湾気味に立ち上がる。内外面共に磨きを施している。	

H区第100号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
260—1 114	灰釉陶器 輪花埦	掘り方 覆土内 ¾残存	口 (18.8) 底 (9.2) 高 6.7	美濃系		灰白	轆轤成整形(右回転)。体部はわずかに丸味を有し、口縁部の外反は強くない。底部は回転篦切り後腰部に回転篦削りを施し、付高台である。施釉は漬け掛け。4単位の輪花、内面に指撫での痕跡を残す。	
260—2 114	灰釉陶器 埦	カマド ¼残存	口 (18.0) 底 (9.8) 高 6.3	美濃系		灰白	轆轤成整形(右回転)。体部全体に丸味を有し、口縁部は外反する。高台は底部及び腰部回転篦削り調整後の付高台である。施釉は漬け掛けである。	
260—3	灰釉陶器 高台付皿	覆土内 破片	口 (13.5) 底 (7.0) 高 (2.7)	猿投系？ K—90？		灰白	轆轤成整形(右回転)。底部は篦調整後付高台で、三日月高台である。体部下半は回転篦削りを施し、口縁部は緩く外反する。施釉は内面のみ観察されたが、刷毛掛けと思われる。	
260—4 114	土師質 台付鉢	貯蔵穴 カマド ¾残存	口 18.8 底 10.3 高 13.8	黒色鉱物粒微 褐色粒少	酸化焔 やや硬質	にぶい 橙	紐作り轆轤整形(右回転？)。体部は外反気味に開き、高台は比較的長脚で付高台である。	
260—5	須恵器 甕？	覆土内 破片	口 — 底 — 高 —	黒色粒多 白色細粒多 白色鉱物粒	還元焔 やや軟質	灰	口縁部と考えられるが、器形は不明。焼成前に内面から穿孔をしている。	厚 1.1
260—6	須恵系 羽釜C？	覆土内 破片	口 (19.0) 底 — 高 (10.2)	白色鉱物粒多 黒色鉱物粒少	酸化焔 やや硬質	橙	紐作り後轆轤整形(右回転)。口縁部は直立し、鍔下の胴部に最大径を有する。口唇部は平坦でやや内傾し、内面に若干突出する。	
261—1	須恵系 羽釜C	掘り方 破片	口 (20.2) 底 — 高 (9.6)	白色鉱物粒少 白色細粒多 黒色粒少	中性焔 やや軟質	淡黄	紐作り後轆轤整形。口縁部はやや内傾し、口唇部も平坦で内傾する。鍔は非常に丁寧な貼り付けを行っている。胴部に張りはほとんど見られない。	
261—2	須恵系 羽釜C	掘り方 破片	口 (21.0) 底 — 高 (5.1)	黒色鉱物粒少 白色鉱物粒多 褐色粒多	酸化焔 やや硬質	橙	紐作り後轆轤整形(右回転)。口縁部は内傾し、口唇部平坦で内傾する。鍔は丁寧に貼り付けており、上反する。	
261—3	須恵系 羽釜	覆土内 ¼残存	口 — 底 6.0 高 (3.4)	白色鉱物粒多	還元焔 硬質	灰白	紐作り後轆轤整形。胴部外面斜位の撫で、内面底部円周方向の指撫で。 底部付近にカーボン付着。	
261—4 114	鉄器 釘？	覆土内 破片	長 6.0 幅 (0.8) 重 12.8				両端欠損し、断面は方形。釘か？	
261—5 114	鉄器 釘	覆土内 破片	長 (4.6) 幅 (0.6) 重 12.2				両端共欠損していると思われる。断面は方形で、中央から曲がっている。	

261－6 114	石　器 薦編み石	覆土内 完形	長　12.5 幅　6.0 厚　4.0	石英閃緑岩			下端部及び側面の一部に敲打に伴う痕跡が残る。	重 461.6

H区第101号住居跡

挿図番号 図版番号	種　別 器　種	出土位置 遺存状態	度目　(cm) 量目　(g)	胎　土	焼　成	色　調	器形・技法等の特徴	備　考
263－1	土師質 埦	床直 ½残存	口　－ 底　7.3 高　(2.6)	白・黒色鉱物粒多 赤褐色粒少	酸化焔 やや硬質	にぶい橙	轆轤整形(右回転)。体部形状は不明。付高台で調整は比較的丁寧に行っている。	
263－2 114	黒色土器 埦	覆土内 ½残存	口　(11.6) 底　(6.2) 高　4.4	黒・白色鉱物粒少 褐色粒少	酸化焔 やや軟質	灰白	轆轤整形(右回転)。体部は丸味を有しており、口縁部も外反しない。高台は付高台で、底部切り離し技法は不明である。内面は放射状の粗い篦磨き後黒色処理を施す。	
263－3	灰釉陶器 瓶？	覆土内 破片	口　－ 底　(13.0) 高　(3.4)	猿投系？		灰黄	轆轤整形。胴部下端は回転篦削りを施し、底部際に沈線を１条廻らしている。内面は轆轤痕を明瞭に残している。施釉は刷毛掛けと思われ、胴部全面及び底部にも一様の厚さで施されている。	
263－4	須恵系 羽釜Ｃ	覆土内 ½残存	口　(20.0) 底　－ 高　(15.0)	白・黒色鉱物粒多 赤褐色粒少	酸化焔 硬質	にぶい橙	紐作り後轆轤整形(右回転)。口縁部内傾し、口唇部平坦でわずかに内傾する。胴部にあまり張りはなく、最大径は鍔部である。鍔の貼り付けは丁寧で、上面が水平の状態である。	
263－5	須恵系 羽釜Ｃ	覆土内 ½残存	口　(21.0) 底　－ 高　(15.2)	白色鉱物粒多 黒色鉱物粒少	還元焔 硬質	灰黄	紐作り後轆轤整形(右回転)。口縁部は比較的強く内傾し、胴部にあまり張りは見られない。鍔は丁寧に撫で貼り付けている。外面胴部下半には縦位の撫でが雑に施されている。	
263－6	瓦 女　瓦	覆土内 破片	厚　2.4	白色鉱物粒多	中性焔 やや軟質	にぶい褐	凸面斜格子叩き。凹面布目を撫で消している	
263－7 114	石　器 薦編み石	覆土内 完形	長　13.1 幅　5.5 厚　4.5	変質安山岩			側面近く剝離面が一面見られる。上端部は熱を受けた痕跡が顕著で、変色している。その他使用痕は不明。	重 495.7

H区第102号住居跡

挿図番号 図版番号	種　別 器　種	出土位置 遺存状態	度目　(cm) 量目　(g)	胎　土	焼　成	色　調	器形・技法等の特徴	備　考
264－1	灰釉陶器 埦	覆土内 ½残存	口　－ 底　(7.6) 高　(2.6)	美濃系		灰白	轆轤成整形(右回転)。底部回転篦調整及び体部下半回転篦削り後付高台。高台貼り付けは丁寧。内面は中央部まで回転撫でが丁寧に施されている。施釉は、刷毛掛けと思われる。	光ケ丘１
264－2 115	須恵系 羽釜Ｃ	貯蔵穴 覆土内 ½残存	口　(18.0) 底　(5.8) 高　23.2	黒色鉱物粒多 白色鉱物粒少 灰色砂粒少	中性焔 やや硬質	にぶい黄褐	紐作り轆轤整形(右回転)。鍔貼り付け部に胴部最大径を有し、口縁部は強く内傾する。胴部上半は轆轤痕を残し、下半は斜位(上→下)の篦削りを施す。	
264－3 115	石　器 不　明	覆土内 完形	長　11.3 幅　11.4 厚　6.3	粗粒安山岩			熱により全体に変色し、器面も脆くなっている。	重1160.0

H区第103号住居跡

挿図番号 図版番号	種　別 器　種	出土位置 遺存状態	度目　(cm) 量目　(g)	胎　土	焼　成	色　調	器形・技法等の特徴	備　考
265－1 114	土師質 埦	カマド ¾残存	口　11.6 底　－ 高　(3.6)	黒色鉱物粒多 灰色砂粒多 褐色粒多	酸化焔 やや硬質	淡黄	轆轤整形(右回転？)。体部にやや丸味を有し、口縁部はわずかに外反する。高台は底部回転糸切り後の付高台であるが、貼り付け部から剝離している。	器面の粗れが顕著

265－2	土師質 埦	カマド 破片	口 (15.2) 底 — 高 (5.6)	灰色鉱物粒多 褐色粒多	酸化焔 軟質	浅黄橙	轆轤整形(右回転)。体部に丸味を有し、口縁部外反する。内面に轆轤調整痕を明瞭に残す。第265図－3と近似。	
265－3	土師質 埦	カマド 破片	口 (16.8) 底 — 高 (4.6)	黒色鉱物粒少 灰色鉱物粒多 褐色粒多	酸化焔 軟質	浅黄橙	轆轤整形(右回転)。体部に丸味を有し、口縁部は外反する。	
265－4	須恵器 甕	カマド 破片	口 — 底 — 高 —	白色鉱物粒多 褐色粒少	還元焔 やや硬質	にぶい橙	外面平行叩き。内面青海波文。	厚 0.9
265－5	灰釉陶器 瓶	カマド 破片	口 (12.0) 底 — 高 (3.3)	美濃系		灰	轆轤整形。施釉は内面厚く、外面はごく薄く発色していない。	光ケ丘1 ～大原2
265－6	須恵系 羽釜C	カマド 破片	口 (19.0) 底 — 高 (8.8)	白・灰色鉱物 粒多	還元焔 やや軟質	灰白	紐作り後轆轤整形(右回転)。口縁部やや内傾し、胴部にわずかに張りを有する。口唇部は丸味を有している。	
265－7	須恵系 羽釜B	カマド 破片	口 (22.5) 底 — 高 (10.5)	黒・白色鉱物 粒多	酸化焔 やや軟質	にぶい橙	紐作り後轆轤整形(右回転)。胴部上位に張りを有し、口縁部も内湾する。口唇部は平坦で強く内傾する。	
265－8	須恵系 羽釜C	カマド 破片	口 (18.4) 底 — 高 (11.3)	白・黒色粒多	中性焔 硬質	橙	紐作り後轆轤整形(右回転)。鍔貼り付け部に張りを有し、口縁部にかけて屈曲する。口唇部は平坦で水平である。内外面共に轆轤回転を利用した撫でを施す。	
265－9	須恵系 羽釜C	カマド 破片	口 (20.0) 底 — 高 (10.3)	白・灰色鉱物 粒多 褐色粒少	酸化焔 やや硬質	橙	紐作り後轆轤整形(右回転)。胴部にあまり張りを有さず、口縁部は強く内傾する。内外面共に轆轤回転を利用した撫でを施す。	
265－10 115	須恵系 羽釜C	カマド ¼残存	口 (19.2) 底 — 高 (16.0)	黒色鉱物粒多 白色鉱物粒微 灰色砂粒少 褐色粒多	中性焔 硬質	灰黄	紐作り轆轤整形(右回転)。鍔貼り付け部直下に胴部最大径を有し、口縁部はわずかに内傾する。胴部上半は轆轤痕を残し、下半は粗い縦位の撫でを施している。	
266－1 115	瓦 女瓦	カマド ¼残存	厚 3.3	白色鉱物粒多 褐色粒多	還元焔 やや硬質	灰褐	一枚作り。凸面斜格子叩き。凹面は全面斜位の撫でによって布目は完全に消されている。	

H区第104号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
267－1 115	土師器 甕AI	カマド 覆土内	口 (22.8) 底 — 高 (4.5)	黒・白色鉱物 粒多 褐色粒多 片岩質砂粒多	酸化焔 やや硬質	橙	口縁部は「く」字状に強く外反し、胴部上半に張りは見られない。口縁部横撫で後、胴部縦位箆削り。	
267－2	土師器 坏A	覆土内 破片	口 (10.0) 底 — 高 (2.9)	雲母細粒少 赤褐色粒多	酸化焔 軟質	橙	底部丸底で、口縁部との境に屈曲を有し、口縁部がやや内傾する。調整は、口縁部横撫で内面撫で、底部箆削りを施す。	
267－3	土師器 坏A	覆土内 破片	口 (13.0) 底 — 高 (3.5)	雲母細粒少 褐色粒多	酸化焔 軟質	浅黄橙	底部丸底で、口縁部との境に屈曲を有し、口縁部は内傾する。調整は口縁部横撫で、内面撫で、底部箆削りを施す。	
267－4	須恵器 甕	覆土内 破片	口 — 底 — 高 —	白色鉱物粒多	還元焔 硬質	灰	紐作り後轆轤整形。口縁部に2条の突帯を廻らし、間に9本単位の櫛状工具で波状文を施す。内外面共に自然釉がかかっている。	厚 0.8
268－1	須恵器 甕	覆土内 破片	口 — 底 — 高 —	白・黒色鉱物 粒多	還元焔 硬質	灰白	外面平行叩き、内面青海波を施す。	厚 0.7
268－2 115	石器 鷹編み石	覆土内 完形	長 14.0 幅 5.4 厚 4.3	黒色頁岩			使用痕不明。	重 532.6
268－3 115	石器 鷹編み石	覆土内 完形	長 13.6 幅 5.2 厚 3.5	流紋岩			使用痕不明。	重 452.5
268－4 115	石器 敲石	覆土内 完形	長 12.1 幅 6.0 厚 3.6	粗粒安山岩			上下端部に若干敲打痕が見られる。	重 420.9

268－5 115	石　器 敲　石	覆土内 完形	長　13.0 幅　6.3 厚　3.7	粗粒安山岩			側面部の敲打痕は顕著であり、上下端にも若干見られる。	重 476.7

H区第105号住居跡

挿図番号 図版番号	種　別 器　種	出土位置 遺存状態	度目　(cm) 量目　(g)	胎　土	焼　成	色　調	器形・技法等の特徴	備　考
269－1 115	土師器 坏AIII	カマド 掘り方 ½残存	口　(13.0) 底　— 高　4.1	黒色鉱物粒少 褐色粒多 灰色砂粒多	酸化焔 硬質	淡黄	底部は浅い丸底で口縁部との境に強い段を有し、口縁部は外傾する。口縁部中位に1本の沈線を廻らしている。口縁部横撫で、底部篦削りを施す。	
269－2	土師器 坏	覆土内 破片	口　(12.0) 底　— 高　(2.5)	白色細粒少	酸化焔 やや硬質	橙	底部は丸底で、口縁部やや内湾気味に立ち上がる。口縁部は横撫で、体部は指による押さえ、底部は不明。内面は横位に丁寧な撫でを施し、放射状暗文状の篦磨きが認められる。	
269－3	土師器 甕	覆土内 破片	口　— 底　8.1 高　(3.6)	白・黒色鉱物粒少	酸化焔 やや軟質	浅黄橙	紐作り。胴部中位に張りを有するタイプと考えられる。底部は突出し、やや丸底気味である。器面の荒れが激しく調整は不明。	

H区第106号住居跡

挿図番号 図版番号	種　別 器　種	出土位置 遺存状態	度目　(cm) 量目　(g)	胎　土	焼　成	色　調	器形・技法等の特徴	備　考
270－1	土師器 甕	カマド 掘り方 破片	口　(24.0) 底　— 高　(6.4)	白・黒色鉱物粒多 褐色粒多	酸化焔 やや硬質	浅黄橙	紐作り。胴中位に張りを有するタイプで、口縁部は外反する。調整は口縁部横撫で、胴部外面縦位篦削り。内面縦位の撫でを施す。	
270－2	須恵系 羽釜C	覆土内 破片	口　(22.0) 底　— 高　(12.5)	白色鉱物粒多 黒色細粒多	中性焔 硬質	灰白	紐作り後轆轤整形(右回転)。胴部に張りをほとんど有さず、口縁部はわずかに内傾する。口唇部は外面断面三角形状に肥厚し、上面平坦で、わずかに内傾している。内外面共に轆轤回転を利用した撫でを施す。	
270－3 115	石　器 敲　石	覆土内 完形	長　8.3 幅　6.8 厚　2.7	粗粒安山岩			下端部及び側縁の一部にわずかに敲打痕が見られる。	重 237.7

H区第107号住居跡

挿図番号 図版番号	種　別 器　種	出土位置 遺存状態	度目　(cm) 量目　(g)	胎　土	焼　成	色　調	器形・技法等の特徴	備　考
271－1 115	土師器 坏AII	覆土内 ¼残存	口　(11.0) 底　— 高　4.2	黒色鉱物粒微 褐色粒少	酸化焔 軟質	橙	底部は丸底で、口縁部との境に段を有し、口縁部は屈曲しながら直立する。口縁部横撫で底部篦削りを施す。	
271－2	土師器 坏　A	カマド 破片	口　(12.0) 底　— 高　(3.4)	白色鉱物粒多 黒色細粒少 赤褐色粒多	酸化焔 やや硬質	橙	底部丸底で、口縁部との境に強い屈曲を有し口縁部内傾する。調整は、口縁部横撫で、内面撫で、底部篦削りを施す。	
271－3	土師器 坏CI	覆土内 破片	口　(19.0) 底　— 高　(3.3)	黒色鉱物粒多 白色細粒少 褐色細粒多	酸化焔 やや軟質	橙	底部丸底で、口縁部やや内湾する。調整は底部篦削り、口縁部横撫で、内面撫でを施す。底部篦削りと、口縁部横撫でとの間で、調整不明瞭な部分のあるのが特徴である。	
271－4	須恵器 蓋？	覆土内 破片	口　20.0 摘　— 高　(3.0)	黒色鉱物粒多 白色細粒少	還元焔 硬質	灰	轆轤整形(右回転)。口唇部やや平坦。	高台付皿か蓋か明確でない
271－5	須恵器 蓋	覆土内 破片	口　(19.4) 摘　— 高　(2.8)	白色細粒多 黒色鉱物粒少	還元焔 硬質	灰白	轆轤整形(右回転)。摘部欠損し形状は不明。内面にかえりを有する。外面先端から3cm程除き回転篦削りを施す。	
271－6	須恵器 蓋	覆土内 破片	口　(18.5) 摘　— 高　(1.3)	白・黒色細粒少	還元焔 硬質	灰白	轆轤整形(？)。内面にかえりを有する。	
271－7	須恵器 蓋	覆土内 破片	口　(11.0) 摘　— 高　(2.0)	白色鉱物粒微 白色細粒微	還元焔 軟質	灰白	轆轤整形。内面に強いかえりを有している。外面の周辺は円周方向、内側は不定方向の手持ち篦削りを施す。	

H区第108号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
272—1 115	土師器 坏 A	覆土内 ¼残存	口 12.4 底 — 高 4.3	黒色鉱物粒少 褐色粒少	酸化焔 やや硬質	明赤褐	底部はやや深い丸底で、口縁部との境に強い段を有し、口縁部はわずかに内傾する。口縁部横撫で、底部篦削りを施す。	
272—2	土師器 甕	覆土内 破片	口 — 底 (10.0) 高 (4.7)	白・黒・灰色鉱物粒多 褐色粒多	酸化焔 軟質	橙	紐作り。球胴を呈する比較的大形のもので底部が著しく突出する。底部には木葉痕と思われる痕跡を残している。胴部下半に横位の篦削りが観察された。	

H区第109号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
273—1	須恵器 埦 C ?	覆土内 破片	口 — 底 (6.0) 高 (1.8)	白色鉱物粒少 黒色細粒多	中性焔 軟質	灰黄	轆轤整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整後の付け高台。高台貼り付けは雑。	
273—2	須恵系 羽釜 C	覆土内 破片	口 (21.0) 底 — 高 (5.2)	白色鉱物粒多 黒色細粒少	中性焔 やや軟質	にぶい橙	紐作り後轆轤整形(右回転)。口縁部は外反気味に直立する。胴部の張りはほとんど見られない。内外面、鍔部共に回転を利用した撫で調整を施す。	
273—3 115	石器 敲石	覆土内 完形	長 12.0 幅 10.8 厚 6.5	石英閃緑岩			縁辺部にわずかに敲打痕が見られ、熱を受けたものと見られ、変色した部分がある。	重 827.4

H区第112号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
275—1 115	須恵器 坏E II	覆土内 完形	口 11.8 底 5.4 高 4.0	白色鉱物粒少 灰色砂粒多	中性焔 やや硬質	橙 黒褐	轆轤整形(右回転)。体部下端にわずかに張りを有し、口縁部は外反する。底部は回転糸切り無調整である。	
275—2 115	須恵器 埦C II	覆土内 ¼残存	口 12.8 底 6.6 高 4.9	黒色鉱物粒少 褐色粒少 白色鉱物粒微	中性焔 やや軟質	灰黄	轆轤整形(右回転)。体部にほとんど張りをもたず、口縁部は外反する。底部は回転糸切り後付高台。	
275—3 115	土師質 埦	覆土内 ¼残存	口 (15.0) 底 — 高 (5.4)	褐色粒少 白・黒色鉱物粒微	酸化焔 硬質	明赤褐	轆轤整形(右回転)。体部下半にやや張りを有し、口縁部は外反しない。高台は付高台。	足高高台か？
275—4 116	土師質 埦	覆土内 ¼残存	口 15.2 底 — 高 (5.3)	褐色粒少 白・黒色鉱物粒微	酸化焔 硬質	明赤褐	轆轤整形(右回転)。体部に丸味を有し、口縁部は外反しない。高台は付高台で、底部切り離しは、高台貼り付けに伴う撫でにより不明。	足高高台か？
275—5 115	須恵器 壺	覆土内 ¼残存	口 — 底 10.3 高 (3.8)	白色鉱物粒多	還元焔 硬質	灰黄	紐作り轆轤整形(右回転)。底部は回転篦削り後付高台。底部に篦描きあり。厚く釉が流れている。	

H区第116号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
277—1 116	土師質 坏	カマド ¼残存	口 9.5 底 3.4 高 2.9	黒色鉱物粒少 褐色粒少 灰色砂粒少	中性焔 やや硬質	浅黄橙	轆轤整形(右回転)。体部中位に若干張りを有し、口縁部はわずかに外反する。底部は回転糸切り無調整で、わずかに突出する。	
277—2 116	土師質 坏	覆土内 ¼残存	口 10.0 底 4.4 高 2.5	黒色鉱物粒少 褐色粒少 灰白色シルト	酸化焔 やや軟質	にぶい橙	轆轤整形(右回転)。体部中位にわずかに張りを有する。底部は回転糸切り無調整。	
277—3 116	土師質 坏	カマド ¼残存	口 (10.0) 底 (4.8) 高 3.1	黒色鉱物粒微 白色鉱物粒少 褐色粒少	酸化焔 硬質	橙	轆轤整形(右回転)。体部はわずかに内湾する。底部は、回転糸切り無調整で、若干突出する。	

277－4 116	土師質 埦	覆土内 ¼残存	口 (15.0) 底 — 高 (5.4)	褐色粒多 黒・白色鉱物粒微 片岩微	酸化焔 軟質	橙	轆轤整形(右回転)。体部は丸味をもって立ち上がり、口縁部はごくわずかに外反する。底部は付高台。	
277－5 116	灰釉陶器 埦	覆土内 ¼残存	口 — 底 (8.6) 高 (2.4)	美濃系		明赤褐	轆轤成整形(右回転？)。底部及び腰部回転篦削り後付高台。施釉技法は不明。	
277－6	灰釉陶器 瓶	カマド 覆土内 破片	口 (14.0) 底 — 高 (3.2)	美濃系？		灰白	紐作り後轆轤整形と思われる。施釉は刷毛掛け。外面は薄く、内面に厚くかけられている。	
277－7 116	土師系 土釜	カマド 覆土内 破片	口 (25.2) 底 — 高 (22.5)	黒色鉱物粒多 灰色砂粒多 白色鉱物粒少	酸化焔 硬質	明赤褐	紐作り。口縁部はやや厚手で、「く」字状に屈曲し、胴部上半に張りを有している。口縁部横撫で後胴部上半縦位(上→下)、下半横位(左→右)の篦削りを施す。	
277－8	須恵器 甕	カマド 破片	口 — 底 — 高 —	白色細粒微 黒色鉱物粒少	還元焔 やや硬質	灰白	紐作り後叩き成形。外面平行叩き、内面素文の当て具痕あり。	厚 0.6
277－9	瓦 女瓦	カマド 破片	厚 2.0	白色鉱物細粒少 白色細粒多 黒色鉱物粒微	還元焔 やや軟質	灰黄褐 灰	凸面斜格子叩き、凹面撫で。凸面に加熱の痕跡あり。カマド内出土のためか？	
277－10	瓦 女瓦	カマド 破片	厚 1.5	黒色鉱物粒少	中性焔 硬質	橙	凸面粘土板糸切り痕あり。凹面布目を横位に雑に撫で消していいる。凸面縄叩き。一部に貫通しない円孔がある。	
278－1	瓦 女瓦	カマド 破片	厚 2.2	黒色鉱物粒多 白色シルト	還元焔 硬質	灰白	一枚作り。凸面長軸方向の縄叩き。離れ砂かと思われる砂粒が多量についている。両側共布目の擦り消し。側部面取り２面。	
278－2 116	石器 敲石	カマド 完形	長 10.0 幅 8.8 厚 4.9	粗粒安山岩			敲打痕は明瞭に観察されない。カマド内の出土のためか。実測面に顕著なカーボンの付着が見られる。	重 559.2
278－3 116	石器 不明	覆土内 完形	長 7.1 幅 5.4 厚 2.9	軽石(二ツ岳)			軽石で実測面の裏面は削り取られたような状態である。	重 80.4

H区第117号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
280－1 116	土師質 坏	覆土内 ¾残存	口 (11.8) 底 (6.8) 高 3.4	黒色鉱物粒多 白色鉱物粒少	酸化焔 硬質	にぶい橙	轆轤整形(左回転)。体部に１段の強い屈曲を有し、口縁部は外反する。底部は回転糸切り無調整で、わずかに突出する。	
280－2	灰釉陶器 段皿	覆土内 破片	口 (13.0) 底 — 高 (1.7)	猿投系？		にぶい黄橙	轆轤成整形(？)。内面にわずかに段を有する。施釉は漬け掛け。	
280－3	須恵器 甕	覆土内 破片	口 — 底 — 高 —	白・褐色細粒多	還元焔 硬質	灰	外面平行叩き。内面青海波文。外面薄く自然釉がかかっている。	厚 1.1
280－4 116	須恵系 羽釜B	覆土内 破片	口 21.0 底 — 高 (11.7)	黒色鉱物粒少 白色鉱物粒多 褐色粒多	酸化焔 やや硬質	にぶい橙 灰黄褐	紐作り後轆轤整形(右回転)。鍔貼り付け部に胴部最大径を有する。口縁部はやや内湾気味に内傾し、口唇部は平坦で水平である。鍔はごく低く雑な作りである。	外面にカーボン付着。
280－5	瓦 女瓦	カマド 破片	厚 2.2	白色鉱物粒多	中性焔 やや軟質	にぶい黄橙	凹面、断面も含めてカーボンが厚く付着。カマド内出土のためか？側部面取り１面。	
280－6 116	椀形鉱滓 ？	覆土内	長 (4.7) 幅 6.1 重 32.0				２方向は割れた状態で、一面には砂粒が付着している。鉄分を含んでいる。	
280－7 116	石製品 臼玉	覆土内 完形	長 3.3 幅 1.9 孔径 0.5	滑石			上下端及び両側部に面取りされた部分が見られる他、顕著な調整は見られない。穿孔は１方向からのものである。	厚 0.7
280－8 116	石器 台石？	覆土内 ½残存	長 (10.2) 幅 (17.0) 厚 4.5	粗粒安山岩			側縁部に使用痕は見られず、上下の両面の平坦部が使用部と思われる。	重1040.0

遺物一覧表

H区第118号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
281—1 117	土師質 坏	覆土内 ¼残存	口 10.9 底 5.4 高 3.7	黒色鉱物粒多 白色細粒少 褐色細粒多	酸化焔 硬質	淡黄	轆轤整形(左回転)。腰部に屈曲を有し、口縁部内湾気味に立ち上がる。外面に焼成前の篦描き文字「金」。	
281—2 116	土師質 坏	覆土内 ¼残存	口 (12.0) 底 (6.2) 高 4.0	白色鉱物粒微 褐色粒少	酸化焔 軟質	浅黄橙	轆轤整形(右回転？)。体部に若干張りを有し、口縁部は弱く外反する。底部は回転糸切り無調整でやや突出する。	
281—3 116	須恵器 埦CII	覆土内 ¼残存	口 12.6 底 6.5 高 4.3	灰色砂粒少 黒色鉱物粒微 小礫微	還元焔 硬質	灰	轆轤整形(右回転)。体部にあまり張りを有さず、口唇部が肥厚し口縁部は外反する。高台は底部回転糸切り後の雑な付高台である。	
281—4 117	須恵器 埦CII	貯蔵穴 完形	口 12.8 底 6.7 高 4.1	黒・白色鉱物粒少 灰色砂粒少	中性焔 やや硬質	にぶい黄橙	轆轤整形(右回転)。体部にほとんど張りをもたず、口縁部は強く外反する。高台は底部回転糸切り後の非常に雑な付高台である。	
281—5 116	土師質 埦	覆土内 カマド 掘り方	口 (13.2) 底 — 高 (3.9)	黒・白色鉱物粒少 褐色粒多	酸化焔 軟質	浅黄橙	轆轤整形(右回転)。体部は中位で1段屈曲し、口縁部はわずかに内湾する。(施釉陶器における稜埦に近い)底部は不明。	¼残存
281—6	灰釉陶器 瓶	覆土内 破片	口 — 底 (14.0) 高 (10.3)	美濃系？		灰	紐作り後轆轤整形？(左回転)。底部付高台。釉は脚部全体に薄くかかっている。施釉は刷毛掛けか？	
281—7	須恵系 羽釜C	覆土内 破片	口 (20.0) 底 — 高 (12.5)	白色細粒多 白色鉱物粒微	還元焔 硬質	灰白	紐作り後轆轤整形(右回転)。鍔部直下に胴部最大径を有し、口縁部はやや内傾する。口唇部はほぼ平坦で外傾する。鍔の貼り付けは比較的丁寧である。内外面共轆轤回転によって撫でを施し、外面胴部中位以下は縦位の篦削りを施す。	
281—8	須恵系 羽釜C	カマド 掘り方 破片	口 (22.0) 底 — 高 (5.7)	黒色鉱物粒微 褐色粒多 砂粒少	中性焔 やや硬質	浅黄橙	紐作り後轆轤整形(右回転)。胴部最大径部に鍔を貼り付け。口縁部は内湾し、口唇部は平坦で内傾する。鍔の貼り付けは比較的丁寧で胴部内外面共回転を利用した撫で調整。	
282—1	瓦 宇瓦	覆土内 破片	幅 — 高 5.0 厚 3.3	白色細粒多 白色鉱物粒微	中性焔 やや軟質	灰黄	一枚作り。右扁行唐草文、凹面布目横位に撫で消す。	
282—2 116	鉄器 釘	覆土内 破片	長 7.5 幅 0.6 重 15.5				断面方形で先端側が残存する。	
282—3 116	鉄器 釘	覆土内 破片	長 6.7 幅 0.5 重 12.0				両端欠損し、中央で截断されている。断面方形。	
282—4 116	石器 不明	覆土内 破片	長 (5.3) 幅 (4.6) 厚 1.7	不明			原石面と思われる部分に磨滅に伴うものか光沢が見られる。	重 60.0
282—5 117	石器 不明	覆土内 完形	長 6.3 幅 6.1 厚 2.8	粗粒安山岩			使用痕不明。	重 152.5
282—6 117	石器 不明	覆土内 完形	長 10.2 幅 9.5 厚 5.8	粗粒安山岩			器面に薄くカーボンの付着が見られる。	重 823.5
282—7 117	石器 薦編み石	覆土内 ¾残存	長 15.8 幅 7.0 厚 4.2	変質安山岩			器面にハゼ状の剝落が見られる。特に両端部は顕著。	重 784.3
282—8 117	石器 薦編み石	覆土内 完形	長 13.0 幅 5.3 厚 4.0	粗粒安山岩			使用痕は不明。	重 491.2
282—9 117	石器 薦編み石	覆土内 完形	長 13.6 幅 6.7 厚 4.3	輝緑岩			下端部に敲打痕と見られる痕跡があるが顕著でない。	重 641.6
282—10 117	石器 薦編み石	覆土内 完形	長 12.3 幅 5.8 厚 3.4	溶結凝灰岩			上端部にわずかに剝離が見られる。	重 497.4

282—11	石　器 薦編み石	覆土内 ½残存	長　10.1 幅　4.7 厚　(2.4)	黒色頁岩			本来は楕円形を呈するものと思われるが、両側が截断されたようになっている。	重 179.5

H区第119号住居跡

挿図番号 図版番号	種　別 器　種	出土位置 遺存状態	度目　(cm) 量目　(g)	胎　土	焼　成	色　調	器形・技法等の特徴	備　考
283—1	土師質 埦	覆土内 ¼残存	口　(12.0) 底　— 高　(2.7)	黒色鉱物粒多 白色細粒多	中性焔 軟質	灰白	轆轤整形(右回転)。体部から口縁部が内湾気味に立ち上がる。外面の轆轤目特に顕著である。	
283—2	須恵系 羽釜C	カマド 破片	口　(20.0) 底　— 高　(8.4)	黒・白色鉱物粒少	中性焔 やや硬質	浅黄橙	紐作り後轆轤整形(？)。口縁部は反りを有しながらやや内傾する。鍔は胴部最大径部直上に貼り付けられている。鍔の貼り付けは丁寧である。	
283—3	瓦 女　瓦	覆土内 破片	厚　2.7	白色粒多 白・黒色鉱物粒少 赤褐色粒少	中性焔 硬質	にぶい 黄橙	一枚作り。凹面に布目痕は残存せず、全面撫でが施されている。凸面は三角形単位の斜格子叩きを施す。側部面取り１面。	

H区第120号住居跡

挿図番号 図版番号	種　別 器　種	出土位置 遺存状態	度目　(cm) 量目　(g)	胎　土	焼　成	色　調	器形・技法等の特徴	備　考
284—1 117	土師器 坏AI	覆土内 ¼残存	口　(16.0) 底　— 高　(5.5)	褐色粒微	酸化焔 軟質	明赤褐	底部は丸底で、口縁部との境に段を有し、口縁部は直線的に開く。底部は篦削り、口縁部は横撫でを施す。	
284—2	須恵器 埦	覆土内 破片	口　(13.0) 底　— 高　(4.0)	白色鉱物粒多 黒色鉱物粒少	酸化焔 硬質	にぶい 褐	轆轤整形(左回転？)。口縁部強く内湾し体部外面下半は斜位の篦削りを施す。	一度還元されている感じ。
284—3 117	土師器 短頸壺	覆土内 破片	口　(10.2) 底　— 高　(7.2)	灰色砂粒微	酸化焔 軟質	橙	胴部は球形で、口縁部が直立する。胴部横位(右→左)に篦削り後口縁部横撫で。	
284—4 117	土師器 甕AIV	覆土内 ¼残存	口　19.6 底　— 高　(33.5)	黒色鉱物粒多 灰色砂粒多 褐色粒多	酸化焔 やや軟質	にぶい 橙	胴部上半にわずかに張りを有し、口縁部は１段の屈曲を有する。胴部縦位(上→下)の篦削り後、口縁部横撫でを施す。内面は斜位の篦撫でを施す。	
284—5 117	須恵器 甕	覆土内 破片	口　(15.3) 底　— 高　(5.0)	白色鉱物粒多	還元焔 硬質	褐灰	紐作り轆轤整形。口縁部は有段で１条沈線が廻る。頸部は「C」字状に外反する。	
284—6 117	須恵器 甕	覆土内 破片	口　(26.4) 底　— 高　(12.1)	黒色鉱物粒微 白色鉱物粒少	還元焔 硬質	にぶい 黄	紐作り叩き整形。口縁部は直立気味に立ち上がり上半が外反する。胴部と頸部との接合部分外面に断面三角形の突帯を廻らしている。頸部は平行叩き？後横位撫で、内面青海波文	

H区第121号住居跡

挿図番号 図版番号	種　別 器　種	出土位置 遺存状態	度目　(cm) 量目　(g)	胎　土	焼　成	色　調	器形・技法等の特徴	備　考
285—1	土師質 埦E	覆土内 ¼残存	口　— 底　8.0 高　(3.6)	白色鉱物粒多 黒色鉱物粒少	酸化焔 軟質	灰黄	轆轤整形(右回転)。底部はやや高い付高台。貼り付けは丁寧である。	
285—2 117	灰釉陶器 深　埦	覆土内 ¾残存	口　16.4 底　7.8 高　7.0	美濃系		灰白	轆轤成整形(右回転？)。腰に張りを有し、口縁部わずかに外反する。底部及び腰部に回転篦削り調整後付高台。施釉は漬け掛けで、発色は悪い。	丸石２
285—3	灰釉陶器 埦	覆土内 破片	口　— 底　5.0 高　(1.5)	美濃系		灰白	轆轤成整形。高台は丁寧な付高台(三日月高台)。施釉は漬け掛けと考えられる。	

285－4	須恵系 羽釜C	覆土内 破片	口 19.0 底 — 高 (6.5)	黒色鉱物粒少 白色鉱物粒多 褐色粒微	中性焔 軟質	橙	紐作り後轆轤整形(右回転)。口縁部はやや内傾し、口唇部は丸味を有する。鍔は断面三角形の厚みのあるもので、貼り付けはやや雑である。	
285－5 117	石器 台石 (磨石)	覆土内 完形	長 16.1 幅 18.7 厚 4.7	粗粒安山岩			平坦面が広範囲にわたって磨滅している。	重2325.0

H区第123号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
287－1	土師器 坏AⅠ	覆土内 破片	口 11.0 底 — 高 (3.4)	褐色細粒少	酸化焔 軟質	橙	底部丸底で、口縁部は底部から強く屈曲し、直線的に立ち上がる。口縁部横撫で、底部篦削りであるが、磨滅が激しく不明瞭。	
287－2 118	土師器 坏AⅠ	覆土内 完形	口 11.2 底 — 高 4.4	褐色粒少 黒色鉱物粒微	酸化焔 軟質	橙	底部は比較的深い丸底で、口縁部は外反する。口縁部横撫で、底部篦削り。	
287－3 118	土師器 坏AⅠ	覆土内 破片	口 (10.9) 底 — 高 (3.5)	灰色砂粒微 褐色粒少	酸化焔 やや硬質	橙	底部は浅い丸底で、口縁部は外反する。口縁部横撫で、底部篦削り。	
287－4 118	土師器 坏AⅠ	覆土内 ½残存	口 (11.1) 底 — 高 3.9	黒色鉱物粒微 褐色粒少	酸化焔 軟質	橙	底部は丸底で口縁部は緩く外反する。口縁部横撫で、底部篦削り。	
287－5 118	土師器 坏AⅠ	貯蔵穴 ¾残存	口 (10.8) 底 — 高 4.4	黒色鉱物粒微 褐色粒少	酸化焔 軟質	橙	底部は比較的深い丸底で、口縁部との境に段を有し、口縁部は外傾する。口縁部横撫で、底部篦削り。	
287－6 118	土師器 坏AⅠ	覆土内 ¾残存	口 11.9 底 — 高 4.0	褐色粒少 黒色鉱物粒微	酸化焔 軟質	橙	底部は浅い丸底で、口縁部は緩く屈曲し外傾する。口縁部横撫で、底部篦削りを施す。	
288－1 118	土師器 坏AⅣ	覆土内 ¼残存	口 (13.5) 底 — 高 (4.0)	黒色鉱物粒少 褐色粒少	酸化焔 やや軟質	浅黄橙	底部は丸底で、口縁部との境で「く」字状に屈曲し、口縁部は中位にわずかに段を有し、外傾する。口縁部横撫で、底部篦削り。	
288－2 118	土師器 坏AⅠ	覆土内 完形	口 12.0 底 — 高 4.0	褐色粒少	酸化焔 軟質	橙	底部は浅い丸底で、口縁部との境に段を有し、口縁部は外傾する。口縁部横撫で、底部篦削りを施す。	
288－3 118	土師器 坏AⅠ	覆土内 ¼残存	口 (12.9) 底 — 高 4.1	灰色砂粒微 褐色粒少	酸化焔 軟質	橙	底部比較的深い丸底で、口縁部は外反する。口縁部横撫で、底部篦削りを施す。	
288－4 118	土師器 坏AⅢ	覆土内 ¼残存	口 (13.9) 底 — 高 3.8	白・黒色鉱物粒少 褐色粒多	酸化焔 硬質	明赤褐	底部はごく浅い丸底で、口縁部との境に段を有し、口縁部は中位に1段段を有し、やや内湾気味に立ち上がる。口縁部横撫で、底部篦削り。	
288－5	土師器 坏AⅠ	覆土内 破片	口 (12.0) 底 — 高 (3.4)	黒・白色細粒少 褐色細粒多	酸化焔 軟質	橙	底部は丸底で、口縁部との境に段を有し、口縁部は直線的に外傾する。口縁部は横撫で、底部は篦削りであるが、磨滅が激しく不明瞭。	
288－6	土師器 坏AⅠ	覆土内 破片	口 (13.0) 底 — 高 (3.1)	黒色鉱物粒微 褐色細粒少	酸化焔 やや軟質	橙	底部浅めの丸底で、口縁部との境に段を有し、口縁部直線的に外傾する。口縁部横撫で、底部篦削りを施す。	
288－7	土師器 坏AⅠ	覆土内 ¼残存	口 (14.0) 底 — 高 5.5	黒色鉱物粒多 白色細粒少	酸化焔 やや軟質	赤灰	浅い丸底で、口縁部との境に1段の稜を有し、口縁部やや内湾気味に直立する。底部は不定方向の篦削り、口縁部横撫でである。口縁部内面の端部近くに1条沈線が廻る。	
288－8	土師器 坏AⅠ	覆土内 ¼残存	口 (13.5) 底 — 高 (4.5)	白色鉱物粒微 黒色細粒少	酸化焔 軟質	橙	底部やや深めの丸底で、口縁部との境に段を有し、口縁部は直線的に外傾する。口縁部横撫で、底部は篦削りを施す。	
288－9	土師器 坏AⅠ	覆土内 ¼残存	口 (14.2) 底 — 高 (3.7)	褐色細粒微	酸化焔 硬質	橙	底部浅い丸底で、口縁部との境に段を有し、口縁部は外傾し、口唇部やや内湾する。口縁部は横撫で、底部篦削りを施す。口縁部に粘土紐巻き上げの痕跡を止どめる。	

288—10 118	土師器 坏AⅠ	覆土内 ¼残存	口 (18.9) 底 — 高 (6.5)	黒色鉱物粒微 褐色粒少	酸化焔 やや硬 質	橙	底部は丸底で、口縁部との境に段を有し、口縁部はやや外反気味に直立する。口縁部横撫で、底部篦削りを施す。	
288—11	土師器 坏AⅡ	覆土内 ¼残存	口 (15.0) 底 — 高 3.8	白色細粒微 褐色粒微	酸化焔 軟質	橙	底部丸底で浅く、1段段を有し口縁部が外反気味に立ち上がる。口縁部横撫で、底部篦削りを施す。	
288—12 118	土師器 埦？	覆土内 完形	口 11.5 底 — 高 6.8	黒色鉱物粒微 褐色粒 灰色砂粒微	酸化焔 軟質	にぶい 黄橙	底部は深い丸底で、口縁部との境に段を有し、口縁部はやや外反気味に直立する。口縁部は横撫で、底部は篦削りで、口縁部との間にわずかに調整の曖昧な部分が見られる。	
288—13	土師器 高　坏	覆土内 ¼残存	口 (19.8) 底 — 高 (4.0)	白色細粒少 白色鉱物粒微	酸化焔 軟質	橙	体部と口縁部との境に段を有し、口縁部外反する。口縁部は横撫で、体部横位の篦削りを施す。内面底部から口縁部にかけて放射状の篦磨きを施す。	脚部欠損
288—14	須恵器 坏　A	覆土内 破片	口 (11.2) 底 — 高 (2.9)	白・黒色粒少	還元焔 やや軟 質	灰白	轆轤整形(？)。受け部を有し、口縁部内傾する。蓋坏の坏身。	
288—15	須恵器 蓋	覆土内 ¼残存	口 — 摘 — 高 (2.3)	白・黒色鉱物 粒多	還元焔 やや軟 質	黄灰	轆轤整形(右回転)。強く内湾する体部を有する。体部回転篦削りを施す。	摘、口縁部欠損。
288—16	須恵器 蓋	覆土内 破片	口 (13.0) 摘 — 高 (3.5)	白色鉱物粒少	還元焔 やや硬 質	褐灰	轆轤整形。口縁部と体部との境に1段の稜を有する。	
288—17 118	須恵器 高　坏	覆土内 ½残存	口 (12.2) 底 — 高 (11.9)	白色鉱物粒多 黒色鉱物粒少	還元焔 硬質	赤灰	轆轤整形(右回転)。坏部は受けを有するもので、体部は浅い。脚部は長脚で、2面に2段の透かしを有する。	
288—18 118	土師器 壺？	覆土内 破片	口 (10.3) 底 — 高 (5.0)	褐色粒少 灰色砂粒微	酸化焔 硬質	橙	胴部の張りは強く、口縁部は直立し、上半が外反する。胴部上半横位(左→右)の篦削り、口縁部横撫でを施す。	
288—19 118	土師器 甕	覆土内 ¼残存	口 (17.8) 底 — 高 (17.0)	黒・白色鉱物 粒少 褐色粒多 砂粒多	酸化焔 硬質	橙	口縁部はやや外反し、胴部上半に強い張りを有する。胴部上半斜位(下→上)、下半(左→右)の篦削り後口縁部横撫でを施す。内面は横位篦撫で。	
288—20	土師器 甕	覆土内 破片	口 — 底 (6.6) 高 (11.9)	黒色鉱物粒少 灰・白色鉱物 粒多	酸化焔 やや軟 質	にぶい 褐	紐作り。底部やや突出し、胴部に強い張りを有する。胴部内外面共撫で調整。	
289—1 118	土師器 甕	覆土内 ½残存	口 (19.0) 底 — 高 (25.7)	黒色鉱物粒多 褐色粒多 砂粒多	酸化焔 軟質	にぶい 橙	口縁部は「C」字状に外反し、胴部中位に比較的強い張りを有する。胴部斜位(下→上)篦削り後口縁部横撫で、内面横位篦撫でを施す。	
289—2 118	土師器 甕AⅡ	覆土内 ½残存	口 (19.9) 底 (5.2) 高 24.5	白色鉱物粒多 黒色鉱物粒少 褐色粒多	酸化焔 硬質	にぶい 赤褐	口縁部は強く外反し、胴部中位にわずかに張りを有する。胴部縦位(下→上)の篦削り後口縁部に横撫でを施す。内面横位篦撫で。	
289—3	土師器 甕	覆土内 破片	口 — 底 8.0 高 (12.0)	黒・白色鉱物 粒多 褐色粒多	酸化焔 やや硬 質	橙	紐作り。胴部上半に張りを有する。内面撫で、外面縦位～斜位の粗い磨きで底部付近横位の篦削りを有する。内面は紐作りの痕跡を明瞭に残す。	
289—4 118	須恵器 甕	覆土内 破片	口 (10.5) 底 — 高 (3.5)	白・黒色鉱物 粒少	還元焔 硬質	黄灰	頸部は「C」字状に外反し、口縁部は直立する。口唇部は平坦でやや外傾している。口縁部下端に1条の沈線を廻らし、上半に4本単位の波状文を施す。	
289—5 118	須恵器 甕	覆土内 破片	口 (18.9) 底 — 高 (5.1)	砂粒微	還元焔 硬質	灰黄	紐作り叩き整形。口縁部は強く外反し、胴部の張りは強い。胴部外面は平行叩き後横位に櫛描き状の条線を施す。内面当て具は不明。頸部接合部内面は指による押さえの痕跡を明瞭に残している。	
289—6	須恵器 甕	覆土内 破片	口 — 底 — 高 —	白色細粒少	還元焔 硬質	灰黄	紐作り。外面凝格子状叩き。内面青海波文(同心円状当て具)。	厚 0.6
289—7	須恵器 横　瓶	覆土内 破片	口 — 底 — 高 —	黒・白色鉱物 粒微	還元焔 硬質	灰白	紐作り後叩き整形。外面平行叩き。内面青海波文。内面に接合痕を明瞭に残している。	厚 0.7

289－8 118	鉄　器 工　具	覆土内 破片	長　(11.0) 幅　(1.2) 重　47.2				一定の厚みを有し、先端部にも鋭利さは認められず、刀子とは考えられない。	
289－9 118	鉄　器 釘	覆土内 破片	長　(8.6) 幅　(0.5) 重　30.0				基部が残存するものと考えられる。断面方形。	
289－10 118	鉄　器 鑷子	覆土内 破片	長　(8.1) 幅　(0.8) 重　14.3				断面長方形の細長い棒状のものを中央から折り曲げた様な状態であり、ちょうどピンセットのような形であったと思われる。	
290－1 119	石製品 砥　石	覆土内 ½残存	長　8.4 幅　4.5 厚　3.1	流紋岩 (砥沢)			½に割れたものを再度使用している。割面にも若干磨かれた痕跡がある。上面はほぼ原石面を残している。	重 210.0
290－2 119	石　器 薦編み石	覆土内 ½残存	長　(9.4) 幅　5.5 厚　4.4	粗粒安山岩			半截されたような状態であるが、截断面に磨滅等使用に伴う痕跡はない。	重 318.0
290－3 119	石　器 薦編み石	貯蔵穴 覆土内 ¾残存	長　(10.8) 幅　5.5 厚　3.4	溶結凝灰岩			半截されているが、截断面に使用痕は見られず、使用に伴い欠損したものと考えられる。このことは残存部が更に２つに割れていることからも想定できる。	重 387.8
290－4 119	石　器 敲　石	覆土内 完形	長　13.2 幅　6.5 厚　4.6	粗粒安山岩			側面の一部及び上端部に顕著な敲打痕が見られる。	重 627.7
290－5 119	石　器 薦編み石	覆土内 ¾残存	長　(13.4) 幅　5.5 厚　4.1	石英閃緑岩			両端部は熱を受けることによって割れ欠損している。また、全体に脆い感じ。	重 570.8
290－6 119	石　器 薦編み石	覆土内 完形	長　13.2 幅　5.9 厚　3.0	変質安山岩			側面からの打撃により１面の剝離が見られるが、側面にその他の使用痕は見られず、これが使用に伴うものとは考えられない。	重 402.6
290－7 119	石　器 薦編み石	覆土内 完形	長　12.1 幅　4.9 厚　4.4	珪質変質岩			使用痕不明。	重 392.0
290－8 119	石　器 薦編み石	覆土内 完形	長　11.7 幅　4.3 厚　4.0	粗粒安山岩			上端部にわずかに磨滅部が見られるが、明瞭でない。	重 311.1
290－9 119	石　器 薦編み石	覆土内 完形	長　14.5 幅　6.7 厚　4.7	粗粒安山岩			器面が若干磨滅しているが、使用に伴うものかどうか不明。	重 777.2
290－10 119	石　器 敲石？	覆土内 完形	長　12.9 幅　6.8 厚　4.4	ひん岩			先端部を截断されたような状態で、この截断面には若干の磨滅が見られることから、この面が使用面と思われる。	重 626.0
290－11 119	石　器 薦編み石	覆土内 完形	長　12.6 幅　7.4 厚　4.4	石英閃緑岩			欠損部、使用痕等は見られず、側面近くの一部に熱を受けた痕跡がある。	重 574.5
290－12 119	石　器 薦編み石	覆土内 完形	長　15.0 幅　6.4 厚　4.5	石英閃緑岩			両側面は熱によるものか、脆く剝離している。	重 701.7
290－13 119	石　器 薦編み石	覆土内 完形	長　14.7 幅　7.0 厚　5.1	粗粒安山岩			使用痕不明。	重 750.4

H区第160号住居跡

挿図番号 図版番号	種　別 器　種	出土位置 遺存状態	度目　(cm) 量目　(g)	胎　土	焼　成	色　調	器形・技法等の特徴	備　考
290－14 120	須恵器 埦CII	覆土内 ¼残存	口　(13.7) 底　(7.2) 高　4.2	白色鉱物粒多 黒色鉱物粒少	還元焔 硬質	灰	轆轤整形(右回転)。体部下半に張りを有し、口縁部は外反する。高台は底部回転糸切り後の付高台である。	
290－15	灰釉陶器 埦	覆土内 ¼残存	口　(13.0) 底　— 高　(4.1)	美濃系？		灰	轆轤成整形(右回転)。体部の張りは弱く、口縁部の外反もあまり顕著でない。施釉は刷毛掛けと考えられる。	

H区第124号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目（cm） 量目（g）	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
291—1 120	土師器 坏A	覆土内 ¼残存	口 12.4 底 — 高 5.2	黒・白色鉱物粒多	酸化焔 硬質	にぶい橙	底部は比較的深い丸底で、口縁部との境に段を有し、口縁部は内傾する。口縁部横撫で、底部篦削り。	胎土と器面の色調相違。
291—2 120	土師器 坏A	覆土内 ¼残存	口 (14.1) 底 — 高 3.4	黒色鉱物粒微 褐色粒少	酸化焔 やや軟質	橙	底部は非常に浅い丸底で、口縁部は内傾する。底部篦削り、口縁部横撫でを施す。	
291—3 120	土師器 坏AII	覆土内 破片	口 (14.0) 底 — 高 (2.3)	灰色砂粒少 黒色鉱物粒微 褐色粒微	酸化焔 やや硬質	橙	底部浅い丸底で、口縁部との境に強い屈曲を有し、口縁部やや外反気味に直立する。口縁部横撫で、底部篦削りを施す。	
291—4 120	土師器 坏AIII？	覆土内 破片	口 (14.0) 底 — 高 (3.1)	白色鉱物粒少 黒色細粒微	酸化焔 やや硬質	明黄褐	底部は浅い丸底で、口縁部との境に強い段を有する。口縁部は、直線的に外傾し、中位に段を有する。口縁部は横撫で、底部は篦削りである。	
292—1	須恵器 皿	覆土内 破片	口 (19.0) 底 — 高 (2.3)	灰色鉱物粒微	還元焔 やや軟質	灰白	轆轤整形。底部浅い丸底気味で、口縁部は外面肥厚し、口唇部は丸味を有する。底部は手持ち篦削り、口縁部及び内面は回転を利用した撫でを施す。	
292—2	須恵器 埦	覆土内 破片	口 — 底 (12.0) 高 (1.9)	灰色砂粒微 黒色細粒少	還元焔 やや軟質	灰白	轆轤整形(右回転)。底部回転篦調整後の削り出し高台。体部は直線的に外傾するものと思われ、体部下半に回転篦削りを施す。	
292—3	須恵器 埦	覆土内 ¼残存	口 — 底 (11.0) 高 (2.2)	白色細粒少 黒色鉱物粒少	還元焔 やや硬質	灰	轆轤整形(右回転)。底部回転篦調整後の付高台(角高台)。口縁部は直線的に外傾するものと思われる。	
292—4 120	土師器 甕	覆土内 ¼残存	口 — 底 6.0 高 (4.7)	黒色鉱物粒微	酸化焔 軟質	浅黄橙	底部はやや突出する。外面は斜位の篦磨きを施す。内面は篦撫で。	
292—5 119	石器 鷹編み石	覆土内 完形	長 12.9 幅 7.8 厚 5.0	粗粒安山岩			使用痕は不明。	重 814.2

H区第125号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目（cm） 量目（g）	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
293—1	土師器 坏AI	覆土内 完形	口 11.8 底 — 高 4.0	灰色砂粒微 白色鉱物粒微 褐色粒少	酸化焔 軟質	橙	底部丸底で、口縁部はわずかに外反する。底部篦削り、口縁部横撫で。	
293—2	土師器 坏AI	覆土内 完形	口 12.8 底 — 高 4.8	白・黒色鉱物粒微 褐色粒多 灰色砂粒微	酸化焔 軟質	橙	底部は丸底で、口縁部はわずかに外反する。底部篦削り、口縁部横撫でと考えられるが、器面の粗れが激しく不明。	
293—3	須恵器 甕	覆土内 破片	口 — 底 — 高 —	白色鉱物粒多 褐色粒微	還元焔 やや硬質	灰白	外面平行叩き、内面青海波文。	厚 0.6
294—1 119	土師器 壺	覆土内 ¾残存	口 18.8 底 8.7 高 31.0	黒色鉱物粒少 白色鉱物粒多 褐色粒少	酸化焔 硬質	にぶい黄橙	口縁部は「C」字状に外反し、胴部中位に強い張りを有する。胴部上半斜～縦位(上→下)篦撫で後、下半は横位篦磨きを施す。口縁部は横撫で。	

H区第126号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目（cm） 量目（g）	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
295—1	須恵器 埦C	覆土内 ¼残存	口 — 底 (7.0) 高 (2.0)	黒・白色鉱物粒少	中性焔 軟質	にぶい黄橙	轆轤整形(右回転)。底部回転糸切り無調整後付高台。高台貼り付けは雑。	
295—2	須恵系 羽釜C	覆土内 破片	口 (21.8) 底 — 高 (6.6)	褐色粒少 白色鉱物粒少 白色細粒多	中性焔 軟質	浅黄橙	紐作り後轆轤整形(右回転)。胴部に張りをほとんど有さず、口縁部わずかに内傾する。鍔の貼り付けは比較的丁寧である。	

H区第127号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
296—1	土師質 埦	カマド 覆土内 破片	口 — 底 (6.0) 高 (3.7)	黒色鉱物粒多 白色細粒少 褐色粒微	中性焔 やや軟質	にぶい 黄橙	轆轤整形(右回転)。底部回転糸切り無調整後付け高台。高台はやや長脚で、貼り付けは比較的丁寧。	
296—2 120	鉄器 不明	カマド 破片	長 (5.7) 幅 (1.1) 重 10.7				断面長方形で、片側に枝状に突起が見られる。用途は不明。	
296—3	須恵系 羽釜C	カマド 覆土内 破片	口 (20.0) 底 — 高 (8.2)	黒色鉱物粒少 白色鉱物粒多	酸化焔 硬質	橙	紐作り後轆轤整形(?)。胴部上位に張りを有し、口縁部は外反する。鍔は屈曲部に貼付されている。鍔の貼付は非常に丁寧に行われている。口唇部は平坦で外傾している。	
296—4	須恵系 羽釜B	カマド 覆土内 破片	口 (26.0) 底 — 高 (7.7)	黒色微粒微 白色細粒微	酸化焔 やや軟質	橙	紐作り後轆轤整形(?)。胴部上位に張りを有し、口縁部は内湾する。鍔は胴部最大部に貼付されているが、貼り付け、整形共に雑。鍔部より下半は斜位の篦削りを施す。	
296—5	瓦 女瓦	カマド ½残存	厚 3.0	白色鉱物粒多 褐色粒少 小礫少	中性焔 やや硬質	褐灰	一枚作り。凹面粘土板糸切り痕あり。凸面は撫でを施す。側部面取り1面。	
296—6 119	石器 不明	カマド 覆土内 ¾残存	長 (11.4) 幅 9.5 厚 3.1	細粒安山岩			上下両端部が欠損している。熱を受けたことによる剝離と思われる。	重 481.1
296—7 119	石器 台石	覆土内 ½残存	長 (8.2) 幅 15.5 厚 4.2	石英閃緑岩			半分欠損し、欠損面から若干の剝離が見られるが、全体に熱を受け変色していることから、熱による剝離と思われる。	重 730.0

H区第128号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
298—1	土師器 坏AII	覆土内 ¼残存	口 — 底 — 高 (2.2)	白色鉱物粒多 褐色粒多 黒色鉱物粒少	酸化焔 硬質	明赤褐	底部浅い丸底で、口縁部との境に段を有し、口縁部は直立するものと思われる。調整は口縁部横撫で、底部篦削り、内面は撫で調整後放射状暗文状の篦磨き。	
298—2 120	土師器 坏AI	覆土内 ½残存	口 (11.3) 底 — 高 (4.0)	黒色鉱物粒微 褐色粒少	酸化焔 軟質	明赤褐	底部は丸底で、口縁部との境に段を有し、口縁部はわずかに外反する。口縁部横撫で、底部篦削りを施す。	
298—3 120	土師器 坏AIII	覆土内 ¾残存	口 (14.1) 底 — 高 4.2	白色鉱物粒多 褐色粒少 黒色鉱物粒微	酸化焔 硬質	にぶい 赤褐	底部は浅い丸底で、口縁部は底部から「く」字状に屈曲し、やや内湾気味に外傾する。また、口縁部には2本の沈線を廻らしている。口縁部横撫で、底部篦削り。	
298—4	土師器 坏AI	覆土内 破片	口 (15.0) 底 — 高 (3.7)	白・褐・黒色 細粒微	酸化焔 軟質	橙	底部浅い丸底で、口縁部との境に段を有し、口縁部は外反する。口縁部は横撫で、底部は篦削りを施す。	
298—5	土師器 坏CI?	覆土内 破片	口 (15.2) 底 — 高 (3.5)	黒・白・褐色 細粒少	酸化焔 軟質	にぶい 橙	底部丸底で、口縁部やや内湾気味に立ち上がる。体部と口縁部との境にわずかに稜を有することからA系列のものであるかもしれない。調整は体部曖昧で、口縁部横撫で。	
298—6	土師器 高坏	覆土内 破片	口 — 底 (19.0) 高 (2.3)	褐色粒多 白色鉱物粒少	酸化焔 やや軟質	橙 明赤褐	やや内湾する脚部?	
298—7 120	石製品 紡錘車	覆土内 ½残存	径 (3.6) 厚 (1.2) 重 22.0	滑石			側面及び下面は比較的良く残っており、調整痕も明瞭に観察できる。上面は剝離したものと思われる。	孔径 0.6
299—1 120	須恵器 埦CII	覆土内 ¾残存	口 (11.6) 底 5.4 高 4.4	白・黒色鉱物 粒少 灰色砂粒微	中性焔 硬質	にぶい 黄橙	轆轤整形(右回転)。体部下半にやや張りを有し、口縁部はわずかに外反する。高台は、底部回転糸切り後の付高台で雑である。	
299—2	灰釉陶器 埦	覆土内 破片	口 (15.0) 底 — 高 (4.3)	美濃系		灰白	轆轤成整形(右回転)。体部に丸味を有し、口縁部わずかに外反する。施釉は漬け掛けと考えられる。	

299—3 120	緑釉陶器 深　埦	覆土内 破片	口　— 底　— 高　—	不明		灰オリーブ	体部にはあまり強い張りはなく、口縁部は強く外反する。	厚　0.4
299—4	瓦 女　瓦	覆土内 破片	厚　2.1	白色鉱物粒少 黒色鉱物粒多 褐色粒多 砂粒微	還元焔 やや硬質	灰褐	凹面端部付近は広範囲にわたって面取りされている。凹面に幅2.5cmの模骨痕を明瞭に残す側端部は狭端部に向かって強く篦で削り取られている。側部面取り1面。	

H区第129号住居跡

挿図番号 図版番号	種　別 器　種	出土位置 遺存状態	度目　(cm) 量目　(g)	胎　土	焼　成	色　調	器形・技法等の特徴	備　考
300—1	土師器 坏AI	覆土内 破片	口　(13.0) 底　— 高　(3.6)	褐色粒多 黒色細粒少	酸化焔 軟質	橙	底部丸底で、口縁部との境に段を有し、口縁部が外反する。	
300—2	須恵器 坏DII	覆土内 破片	口　— 底　(7.0) 高　(1.1)	白・黒色細粒少	還元焔 硬質	灰	轆轤整形(右回転)。底部回転糸切り後無調整。	

H区第130号住居跡

挿図番号 図版番号	種　別 器　種	出土位置 遺存状態	度目　(cm) 量目　(g)	胎　土	焼　成	色　調	器形・技法等の特徴	備　考
301—1	土師器 高　坏	覆土内 破片	口　(20.0) 底　— 高　(4.1)	褐色粒少 黒色細粒少	酸化焔 軟質	黄橙	体部と口縁部との境に段を有し、口縁部は外反気味に立ち上がる。口唇部は若干内側に屈曲する。口縁部横撫で、体部横位篦削り。内面は撫でを施す。	
301—2	須恵器 蓋	覆土内 ¼残存	口　(16.0) 摘　— 高　(3.5)	黒色鉱物粒少 白色細粒少	還元焔 硬質	灰	轆轤整形(右回転)。かえりを有さず、口縁端部が屈曲する。	
301—3	須恵器 蓋	覆土内 破片	口　(14.0) 摘　— 高　(1.2)	白色鉱物粒少	還元焔 硬質	褐灰	轆轤整形。上端が鍔状に突出し、口縁部は直線的に延びるものと思われる。短頸壺の蓋。	
301—4 120	石　器 不　明	覆土内 完形	長　14.9 幅　9.6 厚　3.7	粗粒安山岩			2つに分割し出土した。上半は熱を受けたものと思われ、変色している。	重 758.1
301—5 120	石製品 紡錘車	覆土内 完形	径　3.8 厚　1.4 重　40.0	蛇紋岩			側面にわずかに反りが見られ、器面には明瞭な擦痕が観察できる。	孔径 0.8

H区第131号住居跡

挿図番号 図版番号	種　別 器　種	出土位置 遺存状態	度目　(cm) 量目　(g)	胎　土	焼　成	色　調	器形・技法等の特徴	備　考
302—1	土師器 坏AI	貯蔵穴 破片	口　(14.0) 底　— 高　(3.2)	褐色粒少	酸化焔 軟質	にぶい 黄橙	底部は浅い丸底で、口縁部との境に緩い段を有し、口縁部はやや外反気味に立ち上がる。底部は篦削り、口縁部横撫でを施す。	
302—2	土師質 黒色土器 埦	覆土内 破片	口　(13.0) 底　— 高　(3.0)	白色細粒多 黒色細粒微 褐色細粒少	酸化焔 やや軟質	にぶい 黄橙	轆轤整形(?)。口縁部内湾する。内面は轆轤整形後中央部放射状、周辺横方向篦磨きを施し、黒色処理する。	
302—3	須恵器 蓋	覆土内 破片	口　(20.0) 摘　— 高　(2.3)	黒色鉱物粒少 白色細粒多	還元焔 硬質	灰	轆轤整形(?)。口縁端部が強い屈曲をし、かえりを有さない。外面中央付近は回転篦削りを施す。	
302—4	土師器 甕	貯蔵穴 破片	口　(18.0) 底　— 高　(5.6)	白色鉱物粒少 褐色粒少 黒色鉱物粒微 小礫	酸化焔 硬質	にぶい 橙	胴部に張りを有し、硬質はやや外反気味に立ち上がる。口唇部平坦で外傾し、平坦部に沈線が廻る。口縁部横撫で、胴部上位横位篦削り。	

遺物一覧表

H区第132号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
303—1	須恵器 坏EⅠ	カマド ¾残存	口 12.6 底 6.0 高 4.1	白色砂粒微	還元焰 やや硬質	灰黄褐	轆轤整形(右回転)。体部中位にわずかに張りを有し、口縁部がやや外反する。底部は回転糸切り無調整。	
303—2 120	須恵器 埦CⅡ	覆土内 ¼残存	口 (14.0) 底 — 高 (5.0)	褐色粒少 砂粒微	中性焰 軟質	灰黄	轆轤整形(右回転?)。体部にわずかに張りを有し、口縁部は強く外反する。高台は底部回転糸切り後の付高台であるが、貼り付け部から剝離している。	
303—3 120	須恵器 埦CⅡ	覆土内 ¾残存	口 13.7 底 — 高 (4.7)	灰色シルト多 褐色粒少 黒色鉱物粒少	中性焰 やや軟質	にぶい 黄橙	轆轤整形(右回転)。体部に丸味を有し、口縁部は強く外反する。高台は、底部回転糸切り後の付高台であるが、貼り付け部から剝離している。	
303—4	須恵器 埦CⅡ	覆土内 ¼残存	口 (14.8) 底 (7.0) 高 5.0	白・黒色鉱物粒多 砂粒多	中性焰 軟質	灰白	轆轤整形(右回転)。体部にやや張りを有し、口縁部は外反する。底部は回転糸切り無調整後付高台。高台の張り付けは非常に雑。	
303—5	灰釉陶器 埦	覆土内 ¼残存	口 — 底 6.0 高 (2.0)	美濃系		灰	轆轤成整形(?)。底部は雑な付高台で回転撫で調整を施し、底部切り離しは不明。体部下半の篦削りは施されず、施釉は漬け掛けである。内面に重ね焼きの痕跡を残す。	
304—1	須恵器 甕	覆土内 破片	口 — 底 — 高 (12.8)	白色鉱物粒多 褐色粒少	還元焰 硬質	灰	紐作り後轆轤整形。胴部に丸味を有し、頸部が直立する。内面胴部中位に2段の指頭痕を明瞭に残す。	
304—2 120	灰釉陶器 瓶	覆土内 破片	口 10.0 底 — 高 (12.5)	美濃系		灰白	紐作り後轆轤整形。胴部は丸味が強く、口縁部は外反する。頸部内面には胴部との接合痕を明瞭に残している。施釉は、口縁部内面の一部及び外面全体に厚くかかっている。方法は不明。	
304—3 120	須恵系 羽釜B	覆土内 破片	口 (19.1) 底 — 高 (13.0)	白・黒色鉱物粒少 砂粒微	還元焰 硬質	黄灰	紐作り轆轤整形(右回転)。胴部上半に比較的強い張りを有し、口縁部は内湾気味に内傾する。胴部下半には篦削りが施されていると考えられる。	
304—4	瓦 男瓦	覆土内 破片	厚 2.2	白色鉱物粒多 褐色粒少	酸化焰 やや硬質	にぶい 橙	凹面に粘土板糸切り痕あり。凹面に布の合わせ目あり。側部面取り2面。	
304—5	瓦 男瓦	覆土内 破片	厚 2.0	砂粒少 黒色細粒多 白色細粒少	酸化焰 やや硬質	浅黄	凸面に布の合わせ目あり。凹面斜格子叩き。	
304—6 121	鉄器 釘	覆土内 破片	長 (3.4) 幅 (0.6) 重 7.0				断面長方形で、上下で太さが違っているが、釘であろうと思われる。	
304—7 121	鉄器 釘?	覆土内 破片	長 (5.7) 幅 (0.7) 重 12.3				両端欠損、断面は方形。	
304—8 121	鉄器 釘	覆土内 破片	長 (5.3) 幅 (0.8) 重 18.2				基部が残存しているが、錆が多く内部の形状は判然としない。	
304—9 121	鉄器 釘?	覆土内 破片	長 (7.8) 幅 (0.5) 重 17.4				断面方形で、基部側が欠損する。	
304—10 121	石製品 砥石	覆土内 ½残存	長 (4.9) 幅 (3.1) 厚 2.7	流紋岩 (砥沢)			上端は欠損しているが、孔の痕跡が見られ、さげ砥であったことがわかる。実測図第1面の中央部は浅い溝状の窪みが見られる。	重 56.5
304—11 121	石器 薦編み石	覆土内 ½残存	長 (7.1) 幅 6.2 厚 3.6	角閃石安山岩			半截されているが、截断面に使用の痕跡は認められない。	重 244.2
304—12 121	石器 薦編み石	覆土内 完形	長 12.0 幅 6.7 厚 4.2	細粒安山岩			下端の一部に2面の剝離が見られるが、継続的使用に伴うものとは考えられない。	重 520.2

H区第134号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
305—1	土師質 坏	覆土内 ¼残存	口 — 底 (4.5) 高 (2.3)	黒・白色鉱物粒少	酸化焔 やや軟質	灰白	轆轤整形(右回転)。底部回転糸切り無調整。底部やや突出する。内面は吸炭した痕跡がある。	

H区第133号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
305—2	土師器 甕	覆土内 ¼残存	口 — 底 (11.0) 高 (17.0)	雲母細粒多 白色鉱物粒多 褐色粒少	酸化焔 やや軟質	明赤褐	底部平底で、胴部球形を呈する。外面の粗れ及び内面のハゼが目立つ。	底部の磨滅激しい
305—3 121	石器 敲石	覆土内 完形	長 14.7 幅 6.5 厚 4.5	粗粒安山岩			周縁に沿って敲打痕が見られ、両面共に若干磨滅している。	重 848.6

H区第135号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
306—1	土師質 埦	覆土内 ¼残存	口 — 底 — 高 (3.3)	黒色鉱物粒多 白色鉱物粒少 褐色粒少	酸化焔 やや軟質	にぶい 黄橙	轆轤整形(?)。底部回転糸切り無調整後付高台。高台貼り付けは比較的丁寧に撫で調整を施している。	
306—2 121	灰釉陶器 埦	覆土内 ¼残存	口 (16.3) 底 (9.0) 高 5.4	美濃系		灰黄	轆轤成整形(右回転)。体部中位に張りを有し、口縁部はわずかに外反する。高台は体部下半及び底部篦削り後の付高台であり、高台内面に貼り付けの痕跡を明瞭に残し、雑である。施釉は漬け掛け。	
306—3	灰釉陶器 埦	覆土内 ¼残存	口 (15.8) 底 — 高 (5.4)	美濃系		黄灰	轆轤成整形(?)。体部下半に張りを有し、口唇部がわずかに屈曲する。外面下半は粗い篦撫でが横位帯状に施されている。施釉は漬け掛けである。	
306—4	灰釉陶器 埦	覆土内 ¼残存	口 — 底 (9.6) 高 (1.9)	美濃系		灰白	轆轤成整形。底部は回転糸切り無調整後付高台である。底部は若干突出している。	
307—1	須恵系 羽釜C	覆土内 破片	口 (17.8) 底 — 高 (8.3)	白色鉱物粒多 小礫少	中性焔 やや硬質	灰黄	紐作り後轆轤整形(右回転)。口縁部はわずかに外反気味に立ち上がり、口唇部は平坦で強く外傾する。鍔の貼り付け及び器面調整は非常に雑である。内面には押圧の痕跡を明瞭に残している。	
307—2	須恵系 羽釜C	覆土内 破片	口 (20.0) 底 — 高 (8.6)	白色鉱物粒多 黒色鉱物粒少 褐色粒少	中性焔 硬質	灰褐 オリーブ灰	紐作り後轆轤整形(右回転)。胴部がわずかに張り、口縁部は内傾する。内外面共に轆轤回転利用の撫で調整。	
307—3	須恵系 羽釜B	覆土内 破片	口 (20.0) 底 — 高 (10.9)	白・黒色鉱物粒多 褐色粒多	酸化焔 硬質	灰黄褐 橙	紐作り後轆轤整形(右回転)。胴部上位に張りを有し、口縁部は内傾する。鍔の貼り付けは丁寧である。内外面共轆轤回転を利用した撫でを施す。	
307—4	須恵系 羽釜C	覆土内 破片	口 (23.0) 底 — 高 (6.0)	白色鉱物粒少 灰色砂粒少	還元焔 硬質	灰白	紐作り後轆轤整形(右回転)。胴部はあまり張らず、口縁部はわずかに内傾する。内外面共に轆轤回転を利用した撫で調整。	
307—5	須恵系 羽釜D	覆土内 破片	口 (28.0) 底 — 高 (7.2)	白色鉱物粒多 褐色粒少 黒色鉱物粒少	中性焔 やや硬質	黄灰	紐作り後轆轤整形(?)。口縁部は全体に肥厚し、直立する。鍔は断面三角形で雑な貼り付けである。口唇部は平坦で水平である。	
307—6	須恵系 土釜	覆土内 破片	口 (23.6) 底 — 高 (12.2)	黒・白色鉱物粒多 褐色粒少	酸化焔 硬質	橙	紐作り。口縁部は「く」字状に屈曲し、胴部に張りを有している。口縁部は雑な横撫で、胴部縦位篦削りを施す。	
307—7 121	須恵系 小型甕	覆土内 破片	口 (14.8) 底 — 高 (11.4)	白色鉱物粒多 黒色鉱物粒少	酸化焔 硬質	灰褐	紐作り轆轤整形(右回転)。胴部に強い張りを有し、口縁部は「C」字状に外反する。口唇部は平坦で外傾する。	

307－8 121	瓦 女　瓦	覆土内 破片	厚　2.2	白色鉱物粒多 褐色粒少 黒色鉱物粒少	還元焔 硬質	灰	一枚作り。凹面粘土板糸切り痕あり。篦描き文字瓦「千」(凸面)。側部面取り1面。	
307－9	瓦 女　瓦	覆土内 破片	厚　1.7	黒色鉱物粒多 白色鉱物粒微 白色細粒少	還元焔 やや硬質	灰	一枚作り。凸面斜格子叩き。広端部つぶれたような感じ。	
307－10	瓦 女　瓦	覆土内 破片	厚　2.3	白色鉱物粒多	還元焔 硬質	にぶい 褐	一枚作り。布目の擦消しなし。側部面取り2面。	
307－11 121	鉄　器 不　明	覆土内 破片	長　(5.7) 幅　(2.5) 重　35.7				断面長方形で、上半が膨らむ。用途不明。	

H区第137号住居跡

挿図番号 図版番号	種　別 器　種	出土位置 遺存状態	度目　(cm) 量目　(g)	胎　土	焼　成	色　調	器形・技法等の特徴	備　考
309－1 121	土師器 坏AI	覆土内 ½残存	口　(12.2) 底　— 高　4.4	灰色砂粒微 黒色鉱物粒微 褐色粒少	酸化焔 軟質	橙	底部は丸底で、口縁部との境に段を有し、口縁部は外傾する。口縁部横撫で、底部篦削りを施す。	
309－2	土師器 鉢	覆土内 ¼残存	口　(16.0) 底　— 高　(6.9)	灰色砂粒少	酸化焔 軟質	橙	底部は比較的深い丸底と考えられ、口縁部との境に段を有し、口縁部はわずかに外反気味に立ち上がる。口縁部は横撫で、底部円周方向篦削り。内面は撫でを施す。	
309－3 121	須恵器 坏A	覆土内 ¼残存	口　(13.1) 底　— 高　(3.9)	白色鉱物粒多 灰色砂粒少	還元焔 やや硬質	暗灰黄	轆轤整形(右回転)。口縁部は「く」字状に内傾し、外に短い受けを有する。底部は3段階ほどの回転篦削りを施す。	
309－4 121	須恵器 蓋	覆土内 ¾残存	口　(11.0) 摘　— 高　3.2	黒・白色鉱物粒少 褐色粒少 灰色砂粒微	還元焔 硬質	褐灰	轆轤整形(右回転)。口縁部はやや内湾気味に外傾する。底部は丸底で、外面全面回転篦削りを施す。	
309－5	須恵器 蓋	覆土内 破片	口　(13.0) 摘　— 高　(2.4)	白色鉱物粒多 黒色細粒少	還元焔 硬質	褐灰	轆轤整形(右回転)。体部に1条の沈線を廻らす。外面上部は回転篦削りを施す。	
309－6 121	須恵器 蓋	覆土内 ¼残存	口　(14.9) 摘　— 高　(5.4)	黒色鉱物粒少 白色鉱物粒多 灰白色シルト少	還元焔 硬質	黄灰	無蓋の高坏と思われる。轆轤整形(右回転)。底部と口縁部との境に段を有し、口縁部はわずかに内湾する。底部はカキ目が見られ、内面底部に青海波状の当て具痕が見られる。	
309－7	土師器 高　坏	覆土内 破片	口　(19.0) 底　— 高　(3.6)	黒色細粒少 褐色細粒多	酸化焔 軟質	橙	体部と口縁部の境に段を有し、口縁部は強く外反し、口唇部わずかに屈曲する。口縁部横撫で、体部篦削りで内面の一部に篦磨きの痕跡を残す。	
309－8	土師器 甕AIV	カマド 掘り方 破片	口　(21.0) 底　— 高　(7.2)	黒・白色鉱物粒多 褐色細粒多	酸化焔 硬質	にぶい 橙	紐作り。胴上半に胴部最大径を有する長胴の甕で、口縁部は強く外反する。口縁部横撫で胴部上半斜位篦削り。内面は横位の篦撫でを施す。	
310－1	土師器 甕AII	カマド 覆土内 破片	口　(21.0) 底　— 高　(18.4)	白色鉱物粒多 黒色粒少 褐色粒多	酸化焔 やや軟質	橙 にぶい 褐	紐作り。胴部にあまり張りをもたない長胴の甕で、口縁部は強く外反する。外面調整は、口縁部横撫で後胴部上半は縦位、下半は斜位の篦削り、内面は斜位の篦撫でを施す。	
310－2	須恵器 不　明	覆土内 破片	口　(14.0) 底　— 高　(2.6)	白色鉱物粒多	還元焔 硬質	灰	轆轤整形。頸部に波状文を廻らす。	口縁部であるかどうか不明
310－3	須恵器 甕	覆土内 破片	口　(20.0) 底　— 高　(6.0)	白色細粒少	還元焔 硬質	褐灰	紐作り後叩き整形。口縁部は「く」字状に外反し、口唇部外面肥厚する。整形は内面に青海波を残し、外面平行叩き後横位カキ目を施す。	断面茶色
310－4	須恵器 甕	覆土内 破片	口　— 底　— 高　—	白色細粒少	還元焔 硬質	赤灰	第310図－3と同一個体。	厚　0.7
310－5	須恵器 甕	覆土内 破片	口　— 底　— 高　—	白色細粒多 黒色細粒少	還元焔 硬質	灰	外面は擬格子状叩き及びカキ目、内面青海波文。	厚　0.8

310－6	須恵器 甕	覆土内 破片	口 — 底 — 高 —	白色細粒少	還元焔 硬質	褐灰	第310図－3と同一個体。	厚 0.7
310－7	須恵器 甕	覆土内 破片	口 — 底 — 高 —	白色細粒少	還元焔 硬質	赤灰	第310図－3と同一固体。	厚 0.7
310－8	須恵器 甕	覆土内 破片	口 — 底 — 高 —	白色細粒少	還元焔 やや硬質	オリーブ灰	第310図－5と同一個体。	厚 0.8
310－9 121	鉄器 釘	覆土内 破片	長 (8.4) 幅 (0.7) 重 14.4				基部を欠損する。断面方形。	
310－10 122	石器 敲石？	覆土内 完形	長 11.2 幅 6.3 厚 4.8	変質安山岩			上下端部に敲打痕が見られ、ここが使用部位であった可能性がある。	重 587.3
310－11 122	石器 薦編み石	覆土内 完形	長 11.2 幅 6.4 厚 5.1	溶結凝灰岩			使用痕不明。	重 500.0
310－12 122	石器 不明	覆土内 完形	長 10.4 幅 7.2 厚 3.5	粗粒安山岩			使用痕等は確認できない。	重 403.7
310－13 122	石器 敲石？	覆土内 完形	長 10.5 幅 6.7 厚 3.2	粗粒安山岩			上下端にわずかに敲打痕を有する。	重 378.3
310－14 121	石器 敲石	覆土内 ½残存	長 (7.1) 幅 5.0 厚 2.2	黒色頁岩			半截された状態であるが、使用に伴うものかどうか不明。上端及び右側面に若干の剝離が見られ、使用部位を示唆している。	重 125.8
311－1 122	石器 薦編み石	覆土内 完形	長 12.1 幅 6.1 厚 3.7	粗粒安山岩			上下端にわずかに敲打痕が見られ、敲石であった可能性がある。	重 419.3
311－2 122	石器 敲石	覆土内 完形	長 11.1 幅 6.0 厚 5.2	粗粒安山岩			上下両端に明瞭な敲打痕が見られる。	重 534.0
311－3 122	石器 敲石？	覆土内 完形	長 11.6 幅 6.0 厚 4.5	溶結凝灰岩			上端の一部にわずかに敲打痕が見られるが、その他の使用痕は不明。	重 451.6
311－4 122	石器 不明	覆土内 完形	長 11.7 幅 6.7 厚 4.6	石英閃緑岩			熱によるものか器面全面にハゼが見られる。	重 583.1
311－5 122	石器 敲石？	覆土内 完形	長 11.7 幅 7.1 厚 4.1	粗粒安山岩			上下端部にわずかではあるが、敲打痕が見られる。また、上半は熱を受け黒く変色している。	重 552.6
311－6 122	石器 薦編み石？	覆土内 完形	長 11.7 幅 6.2 厚 5.6	ひん岩			断面四角形に近く、4面が面取りされたようにも見えるが、擦痕等の使用痕は認められない。	重 677.7
311－7 122	石器 敲石？	覆土内 完形	長 12.0 幅 7.0 厚 4.2	粗粒安山岩			縁辺が若干磨滅している。	重 446.5
311－8 122	石器 薦編み石	覆土内 完形	長 12.5 幅 6.8 厚 3.8	ひん岩			下端に敲打痕状のものがわずかに見られることから敲石であった可能性もある。	重 552.1
311－9 121	石器 薦編み石	覆土内 完形	長 12.2 幅 6.2 厚 5.0	粗粒安山岩			使用痕等は不明。	重 577.2
311－10 122	石器 敲石？	覆土内 完形	長 12.3 幅 5.4 厚 3.6	粗粒安山岩			上下両端共わずかに敲打痕が見られることから、使用部位は両端部と考えられる。	重 388.2
311－11 121	石器 敲石	覆土内 完形	長 12.2 幅 7.6 厚 3.6	粗粒安山岩			側縁及び上下端部に敲打痕が見られる。	重 512.0

311—12 122	石　器 薦編み石 ？	覆土内 完形	長　12.0 幅　6.9 厚　3.7	ひん岩			上端部は熱によって若干剝離した状態であるが、使用部位は特定できない。	重 425.6
311—13 122	石　器 敲石？	覆土内 完形	長　12.5 幅　7.2 厚　4.7	粗粒安山岩			右側縁部に若干敲打痕が見られることから、ここが使用部と思われる。他に使用痕は認められない。	重 653.4
311—14 121	石　器 敲石？	覆土内 完形	長　14.2 幅　6.3 厚　5.1	粗粒安山岩			上下端共に敲打痕は明瞭に見られないが、上端側部に一面の剝離が見られる。この剝離は使用に伴うものと考えられる。	重 701.8
311—15	土師質 埦	覆土内 ¼残存	口　— 底　(8.0) 高　(2.7)	白色鉱物粒多 黒色鉱物粒微 褐色粒少	酸化焔 やや軟 質	橙	轆轤整形(右回転)。底部は回転糸切りと考えられるが、高台貼り付けに伴い撫で調整がされている。体部形態は不明。	高台部のみ残存。
311—16 123	土師質 埦	覆土内 ¾残存	口　(10.9) 底　(6.7) 高　4.6	白色鉱物粒微 灰色砂粒少 黒色鉱物粒少	酸化焔 硬質	浅黄橙	轆轤整形(右回転)。坏部は内湾する。高台は、底部切り離し後の付高台で、高台貼り付けに伴い底部に回転の撫でを施している。	坏部高台部内外面にカーボン付着。
311—17	土師質 埦	覆土内 破片	口　(10.0) 底　— 高　(3.2)	黒色鉱物粒少 白色鉱物粒多 褐色粒微	酸化焔 軟質	浅黄橙	轆轤整形(右回転)。体部に丸味を有し、口縁部は外反しない。	
312—1	土師器 甕　A	カマド 覆土内 ¼残存	口　— 底　6.9 高　(13.2)	白色鉱物粒多 黒色粒少 褐色細粒多	酸化焔 やや軟 質	にぶい 赤褐	紐作り。底部付近にわずかに張りを有する。	
312—2	須恵系 羽釜 C	覆土内 破片	口　(22.0) 底　— 高　(9.2)	黒・白色鉱物 粒多 褐色細粒少	中性焔 やや硬 質	浅黄橙	紐作り後轆轤整形(右回転)。胴部に張りはあまり見られず、口縁部は反り気味に内傾する。鍔の貼り付けは丁寧で、水平である。内外面共に轆轤回転利用の撫でを施す。	

H区第138号住居跡

挿図番号 図版番号	種　別 器　種	出土位置 遺存状態	度目　(cm) 量目　(g)	胎　土	焼　成	色　調	器形・技法等の特徴	備　考
313—1	土師器 坏AI	覆土内 ¼残存	口　(12.0) 底　— 高　(3.7)	白色鉱物粒少	酸化焔 軟質	黄橙	浅い丸底の底部で、口縁部との境に段を有し、口縁部はやや内湾気味に外傾する。口縁部横撫で、底部篦削り、内面は撫で調整後内面黒色処理する。	
313—2	須恵器 坏　A	覆土内 ¼残存	口　(11.0) 底　— 高　(3.0)	黒色鉱物粒少 白色鉱物粒微	還元焔 やや硬 質	灰白	轆轤整形(右回転)。受けを有する蓋坏の坏部で、丸底の底部を有し、手持ちの篦削りを施す。	
313—3	須恵器 坏　A	覆土内 完形	口　(11.2) 底　— 高　3.5	白・黒色鉱物 粒少	還元焔 硬質	灰	轆轤整形(左回転)。丸底で、口縁部は短く肥厚し、受け部もわずかに張り出す。内面底部には指による押圧痕があり、粘土紐の接合痕と思われる痕跡を残している。底部は回転篦削りを施す。	
313—4 123	須恵器 坏A？	覆土内 ½残存	口　(11.8) 底　— 高　3.9	白色鉱物粒少	還元焔 硬質	灰	轆轤整形(左回転)。底部は丸底で口縁部は短く内傾し、外面に受けがわずかに突出する。底部は回転篦削りを施す。	
313—5 123	須恵器 坏　A	覆土内 ½残存	口　(12.9) 底　— 高　4.2	白色細粒多 白色鉱物粒微	還元焔 硬質	黄灰	轆轤整形(左回転)。丸底で口縁部はやや内傾し、受けが外面に若干突出する。底部は回転篦削り。	
313—6 123	須恵器 蓋	覆土内 ¾残存	口　12.8 摘　— 高　3.8	灰色鉱物粒少 白色鉱物粒微	還元焔 やや軟 質	灰白	轆轤整形(右回転)。口縁部中位にわずかな稜を有し、底部は手持ち篦削りを施す。	
313—7 123	須恵器 蓋	覆土内 ½残存	口　(12.1) 摘　— 高　4.5	黒・灰色鉱物 粒少 白色鉱物粒微	還元焔 硬質	灰黄	轆轤整形(左回転)。口縁部はわずかに外反気味に立ち上がる。底部は回転篦削り。	
314—1	土師器 甕AII	覆土内 ¼残存	口　(23.0) 底　— 高　(13.7)	灰色鉱物粒多 褐色粒少	酸化焔 やや硬 質	にぶい 黄橙	紐作り。口縁部は「く」字状に強く外反し、口唇部がわずかに直立する。胴部の張りは下半にあると考えられる。口縁部は横撫で、胴部は、口縁部横撫で後の縦位篦削り。内面は横位撫でを施す。	

314—2	土師器 甕	覆土内 ¼残存	口 — 底 5.5 高 (10.0)	白・黒色鉱物粒多	酸化焔 硬質	にぶい 赤褐	紐作り。整形は外面縦位篦削り、内面横位撫でであるが、不明瞭。	
314—3	須恵器 甕	覆土内 破片	口 (17.0) 底 — 高 (6.9)	白色細粒多 赤褐色細粒少	還元焔 硬質	灰	紐作り後叩き整形。口縁部は「く」字状に外反し、口縁上部に1条の突帯を廻らす。胴部外面平行叩き、内面青海波文。頸部の貼り付け痕を明瞭に残す。	
314—4 122	石器 薦編み石	覆土内 完形	長 11.7 幅 7.4 厚 5.0	かんらん岩			使用痕は不明。	重 572.7
314—5 122	石器 不明	覆土内 完形	長 9.7 幅 8.1 厚 3.9	粗粒安山岩			使用痕は確認できないが、縁辺に特に厚くカーボンの付着が見られる。	重 450.8
314—6 122	石器 不明	覆土内 完形	長 9.5 幅 8.6 厚 3.9	ひん岩			使用痕は見られず、全面に薄くカーボンが付着している。	重 465.4
314—7 122	石器 薦編み石	覆土内 ½残存	長 (6.5) 幅 4.7 厚 3.5	流紋岩			半截されているが、截断面に磨滅等は見られない。	重 158.0

H区第140号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
316—1 123	土師器 坏AI	覆土内 ¼残存	口 (11.4) 底 — 高 (3.8)	褐色粒少	酸化焔 軟質	にぶい 橙	底部は丸底で、口縁部との境に段を有し、口縁部はわずかに外反気味に外傾する。口縁部横撫で、底部篦削りを施す。	
316—2 123	土師器 坏AI	覆土内 ¾残存	口 (11.6) 底 — 高 4.2	灰色砂粒微	酸化焔 やや軟質	橙	底部丸底で、口縁部との境に段を有し、口縁部はわずかに外反する。口縁部横撫で、底部篦削り。	
316—3	土師器 坏AI	カマド 掘り方 ¼残存	口 (11.7) 底 — 高 (3.5)	褐色粒少	酸化焔 軟質	橙	底部は浅い丸底で、口縁部との境に強い屈曲を有し、口縁部は外反する。口縁部は横撫で底部篦削り、内面撫でを施す。	
316—4	土師器 坏AI	覆土内 破片	口 (12.0) 底 — 高 (3.0)		酸化焔 硬質	にぶい 橙	底部は丸底で、体部との境にシャープな段を有し、口縁部は外反する。底部篦削り、口縁部横撫で、内面撫でを施す。	
316—5	土師器 坏AI	覆土内 ¼残存	口 (13.0) 底 — 高 (3.2)	黒色細粒微	酸化焔 軟質	にぶい 褐	底部は浅い丸底で、境に段を有し、口縁部は直線的に外傾する。底部は篦削り、口縁部横撫で、内面撫でを施す。	
316—6	須恵器 高坏？	カマド 掘り方 覆土内	口 — 底 — 高 (5.8)	黒・白色細粒少	還元焔 硬質	灰	轆轤整形(？)。体部中位に突帯を2帯廻らす。	破片
316—7 123	須恵器 高坏	覆土内 ¾残存	口 — 底 15.1 高 (15.0)	黒色鉱物粒少 白色鉱物粒多	還元焔 硬質	灰	轆轤整形(？)。脚部は長脚で、2方向に2段の長方形透かしを有する。脚端部は段を有し、甕の口縁部状を呈する。脚部接合面に糸切り状の痕跡を残している。	
316—8	土師器 坏AIV	覆土内 破片	口 (21.0) 底 — 高 (6.1)	白・黒色鉱物粒多	酸化焔 やや硬質	橙	紐作り。口縁部は「く」字状に外反し、胴部上半に胴部最大径を有する。口縁部横撫で後胴部斜位篦削りを施す。	
316—9	土師器 甕	覆土内 破片	口 (20.0) 底 — 高 (13.3)	白色鉱物粒多 黒色鉱物粒微	酸化焔 硬質	にぶい 黄橙	紐作り。口縁部は「く」字状に外反し、口唇部は平坦で外傾する。胴部の張りが強く、中位に最大径を有している。口縁部横撫で、胴部縦位篦削り、内面横位篦撫でを施す。	
316—10	土師器 甕	覆土内 ¼残存	口 — 底 — 高 (27.3)	白色鉱物粒少 褐色粒多	酸化焔 硬質	にぶい 褐	紐作り。胴部に張りがあり、中位に最大径を有する。口縁部は横撫で、胴部は上半横～斜位、下半斜位篦削り、内面は横位篦撫でを施す。	
317—1 123	石器 敲石	覆土内 完形	長 13.8 幅 11.1 厚 3.2	粗粒安山岩			縁辺に沿って敲打痕が見られる。	重 837.5

317—2 123	石　器 敲石？	覆土内 完形	長　14.3 幅　11.0 厚　4.6	石英閃緑岩			縁辺にわずかに敲打痕が認められる。また、器面は熱により変色している。	重1186.5
317—3 123	石　器 薦編み石	覆土内 完形	長　13.4 幅　7.2 厚　3.2	粗粒安山岩			使用痕不明。	重 426.0
317—4 123	石　器 薦編み石	覆土内 完形	長　13.2 幅　6.4 厚　3.6	石英閃緑岩			使用痕不明。	重 450.3
317—5 123	石　器 不　明	覆土内 完形	長　14.3 幅　10.2 厚　4.4	石英閃緑岩			縁辺の一部は熱によりハゼている。また、平坦面に円錐状の凹みが数ヶ所見られる。	重1039.5
317—6	石　器 薦編み石	覆土内 完形	長　14.4 幅　4.6 厚　3.8	砂岩			使用痕は不明。	重 387.2
317—7 123	石　器 敲石？	覆土内 完形	長　11.2 幅　6.1 厚　5.5	石英閃緑岩			半截された截断面縁辺及び平面に若干磨滅した部分が見られることから、この面を使用した可能性が高い。	重 486.5

H区第141号住居跡

挿図番号 図版番号	種　別 器　種	出土位置 遺存状態	度目　(cm) 量目　(g)	胎　土	焼　成	色　調	器形・技法等の特徴	備　考
318—1 124	土師器 坏DII	覆土内 ½残存	口　(12.7) 底　(7.3) 高　3.9	黒色鉱物粒多 白色鉱物粒少 褐色粒少	酸化焔 硬質	橙	平底で体部下半にわずかに張りを有し、口縁部は直線的に外傾する。体部は指頭痕を残し口縁部は横撫でを施す。底部は土釜の底部のように縮みじわが見られる。	
318—2 124	須恵器 坏EII	覆土内 ¾残存	口　(13.4) 底　(5.6) 高　3.9	灰色砂粒微 褐色粒少	中性焔 やや軟質	灰黄	轆轤整形(右回転)。体部上半に若干張りを有し、口縁部は強く外反する。底部は回転糸切り無調整。	
318—3 124	石製品 袖石？	貯蔵穴 ¾残存	長　(19.1) 幅　(11.1) 厚　8.0	地山シルト層			角柱状を呈したものと思われるが、3面しか残存していない。	熱を受け欠損面も変質。
318—4	石製品 袖石？	カマド ½残存	長　(14.4) 幅　(7.6) 厚　7.4	地山シルト層			第318図—3と同一。	熱を受け欠損面も変質。

H区第142号住居跡

挿図番号 図版番号	種　別 器　種	出土位置 遺存状態	度目　(cm) 量目　(g)	胎　土	焼　成	色　調	器形・技法等の特徴	備　考
319—1 124	須恵器 坏DIII	覆土内 ¾残存	口　11.7 底　— 高　3.7	白色鉱物粒少	還元焔 硬質	灰白	轆轤整形(右回転)。体部中位にやや張りを有する。底部は回転糸切り無調整。	
319—2	黒色土器 埦	覆土内 ½残存	口　— 底　6.5 高　(1.9)	白色鉱物粒多 赤褐色粒少	酸化焔 やや硬質	にぶい 黄橙	轆轤整形(？)。底部回転糸切り後の付高台と考えられるが、高台貼り付けに伴い調整を受けている。内面は放射状篦磨き後黒色処理を施す。	
319—3	土師質 埦	覆土内 破片	口　— 底　(11.0) 高　(3.1)	白色鉱物粒多 黒色鉱物粒微	中性焔 やや軟質	灰黄	轆轤整形。直線的に「八」字状に開く足高高台部。貼り付けた面で剝落している。	
319—4	土師質 埦	覆土内 破片	口　— 底　(11.0) 高　(3.2)	白色鉱物粒多 黒色鉱物粒微	中性焔 やや軟質	灰黄	第319図—3と同一？	
319—5	灰釉陶器 埦	覆土内 破片	口　— 底　(7.0) 高　(3.2)	美濃系		灰白	轆轤成整形(右回転)。底部は回転篦切り後付高台(三日月高台)。体部下半に篦削りは見られず、内面底部は指撫でを施す。施釉は漬け掛けと思われる。	
319—6	須恵器 瓶	覆土内 破片	口　— 底　(13.6) 高　(6.4)	褐色粒少 白色細粒微	還元焔 硬質	褐灰	紐作り後轆轤整形。高台は付高台で、底部から「く」字状に外に開く。胴部外面下半は回転篦削り、内面は撫でを施す。	

319—7	須恵系 羽釜 D	覆土内 破片	口 (22.8) 底 — 高 (6.0)	白色鉱物粒多 黒・灰色鉱物 粒少	中性焔 やや硬 質	灰黄	紐作り後轆轤整形(右回転)。口縁部はごくわずかに内傾し、口唇部は丸味を有する。胴部の張りは弱い。	
319—8 124	石器 薦編み石	覆土内 ¾残存	長 (15.0) 幅 6.5 厚 4.3	粗粒安山岩			上端及び下端近くの裏面に剝離が見られるが特に上端の截断面に使用の痕跡は見られず、使用に伴い割れた可能性が高い。	重 667.0

H区第143号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
320—1 124	土師質 台付鉢	覆土内 ¼残存	口 — 底 (12.2) 高 (9.5)	灰色砂粒少	酸化焔 やや硬 質	にぶい 褐	紐作り轆轤整形(?)。体部は鉢状に開くものと考えられ、脚部は「八」字状を呈する。胴部斜位(下→上)篦削り、脚部内面指撫で。	
320—2 124	土師器 甕	覆土内 破片	口 (21.0) 底 — 高 (14.0)	白・黒色鉱物 粒少 灰色砂粒多	酸化焔 やや硬 質	明赤褐	胴部に張りを有し、最大径を胴中位に有する。口縁部は「コ」字状に近い形態で、口唇部に一条の沈線が廻る。口縁部横撫で、胴部斜位篦削り、内面横撫でを施す。	

H区第144号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
321—1 124	土師器 坏 A	カマド 覆土内 ¼残存	口 (12.1) 底 — 高 3.9	白色鉱物粒少 褐色粒少	酸化焔 やや軟 質	灰黄褐	底部丸底で口縁部との境に強い段を有し、口縁部は短く内傾する。口縁部横撫で、底部篦削り。	胎土と器面の色調が違う。
321—2	土師器 坏AII	覆土内 ¼残存	口 (13.0) 底 — 高 (3.4)	黒色鉱物粒微 褐色細粒少	酸化焔 軟質	にぶい 橙	底部は浅い丸底で、口縁部との境に段を有し、口縁部は直立する。口縁部は横撫で、底部篦削り、内面撫でを施す。	
321—3	土師質 坏	覆土内 ½残存	口 — 底 5.0 高 (3.3)	白色鉱物粒多 黒色鉱物粒少 褐色粒多	酸化焔 硬質	橙	轆轤整形(右回転)。底部回転糸切り無調整。体部はやや丸味をもって立ち上がる。	
321—4	瓦 女瓦	覆土内 破片	厚 1.8	白色鉱物粒多 黒色鉱物粒少	還元焔 硬質	黒褐	一枚作り。凸面粘土板糸切り痕あり。凸面正格子叩き。凸面篦削り。凹面布目の擦消しあり。側部面取り1面。	
321—5	須恵器 甕	覆土内 破片	口 — 底 — 高 —	白色鉱物粒多	還元焔 硬質	黒褐	紐作り叩き整形。内外面共に素文。	厚 1.3
321—6 124	土製品 羽口	覆土内 破片	口 — 底 — 高 —	白色粒少 スサ少	先端部 酸化焔 ?	黒褐	羽口先端部で、先端は発泡し、ガラス質の付着物が見られる。	
321—7 124	石器 磨石?	覆土内 ½残存	長 (5.7) 幅 7.7 厚 2.4	粗粒安山岩			平面部は磨滅しており、この面を使用したものと考えられる。	重 172.4

H区第145号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
322—1 124	須恵器 埦 E?	覆土内 ½残存	口 (15.8) 底 (7.6) 高 6.0	白色鉱物粒多 灰色砂粒少	還元焔 硬質	灰白	轆轤整形(右回転)。体部にはほとんど張りを有さず、口縁部は強く外反する。高台はやや長脚で、底部回転糸切り後の付高台である。	
322—2 124	石器 薦編み石 ?	覆土内 完形	長 12.2 幅 6.0 厚 4.8	石英閃緑岩			半面は熱によってハゼており、残存面も脆くなっている。	重 578.2

H区第146号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
323—1	土師器 手捏	覆土内 ¼残存	口 6.1 底 — 高 (2.5)	白色鉱物粒少 黒色鉱物粒微	酸化焔 軟質	褐灰	口縁部が「く」字状に屈曲する。口縁部横撫で、体部わずかに篦削りの痕跡を残す。	
323—2 124	土師器 坏AI	覆土内 完形	口 11.7 底 — 高 3.9	褐色粒微	酸化焔 硬質	橙	底部は浅い丸底で、口縁部はやや外傾する。口縁部横撫で、底部篦削りを施す。内面の撫で調整は丁寧である。	
323—3 124	土師器 坏AI	覆土内 ¾残存	口 12.2 底 — 高 4.0	褐色粒少	酸化焔 やや硬質	橙	底部は浅い丸底で、口縁部との境に段を有し、口縁部はやや外反する。口縁部横撫で、底部篦削りを施す。	
323—4	土師器 坏AI	覆土内 ¼残存	口 (12.0) 底 — 高 (3.4)	白色鉱物粒微 褐色粒多	酸化焔 軟質	橙	底部は浅い丸底で、口縁部との境に段を有し、口縁部外反する。口縁部は横撫で、底部篦削り、内面撫でを施す。	
323—5 124	土師器 坏AI	覆土内 ¾残存	口 12.3 底 — 高 5.0	褐色粒多	酸化焔 やや軟質	橙	底部は丸底で、口縁部との境に段を有し、口縁部はやや外傾する。口縁部横撫で、底部篦削りを施す。	
323—6 124	土師器 坏AI	覆土内 ½残存	口 (12.2) 底 — 高 4.7	灰色砂粒多	酸化焔 やや硬質	橙	底部丸底で、口縁部との境に段を有し、口縁部はわずかに外反する。口縁部は横撫で、底部篦削りを施す。	
323—7 124	土師器 坏AI	覆土内 ¾残存	口 (13.3) 底 — 高 4.8	褐色粒多 灰色砂粒少	酸化焔 やや硬質	橙	底部は丸底で、口縁部との境に強い段を有し、口縁部は外傾する。口縁部横撫で、底部篦削りを施す。	
324—1	土師器 短頸壺	覆土内 ¼残存	口 (8.8) 底 — 高 (7.7)	褐色粒多 黒色鉱物粒微	酸化焔 軟質	橙	口縁部はやや内傾気味に直立し、胴部に張りを有し、上半に最大径を有する。口縁部は横撫で、胴部は横位篦削りを施す。	
324—2	須恵器 短頸壺	覆土内 破片	口 (7.6) 底 — 高 (4.4)	白色細粒少 黒色鉱物粒多	還元焔 硬質	灰白 灰	轆轤整形。肩は平坦で胴部との境が強く屈曲し、口縁部は短く直立する。肩部中位には蓋を重ね焼きした痕跡を残し、その部分より外側には自然釉が見られる。	
324—3	須恵器 長頸壺	覆土内 破片	口 — 底 — 高 (5.6)	白・黒色鉱物 粒多	還元焔 やや硬質	灰	紐作り轆轤整形(右回転)。頸部に胴部との接合の痕跡が明瞭に見られる。	
324—4	須恵器 甕	覆土内 破片	口 — 底 — 高 —	白・黒色鉱物 粒多 赤褐色粒少	中性焔 軟質	黄灰 橙	頸部と思われ、外面に平行沈線及び上下に波状文を施している。	厚 1.4
324—5	須恵器 甕	覆土内 破片	口 — 底 — 高 —	白色鉱物粒多 褐色粒少	還元焔 硬質	青灰	紐作り叩き成形。外面平行叩き後横位のカキ目、内面青海波文。	厚 0.9
324—6	須恵器 甕	覆土内 破片	口 — 底 — 高 —	白・黒色鉱物 粒多	還元焔 硬質	灰	紐作り叩き成形。外面擬格子叩き、内面青海波文。断面にカーボン付着。	厚 1.1
324—7	須恵器 甕	覆土内 破片	口 — 底 — 高 —	白色鉱物粒多 褐色粒微	還元焔 硬質	青灰	第324図－5と同一。	厚 0.8
324—8 125	石器 薦編み石	覆土内 ½残存	長 (6.6) 幅 4.8 厚 3.4	粗粒安山岩			半截されているが、截断面に使用の痕跡は見られず、使用に伴い割れたものと思われる。	重 170.9
324—9 125	石器 敲石	覆土内 完形	長 14.8 幅 7.0 厚 3.7	粗粒安山岩			下端部に敲打痕がわずかに見られる。	重 574.1
324—10 125	石器 薦編み石 ?	覆土内 完形	長 14.9 幅 8.1 厚 3.8	変質安山岩			使用痕は不明。	重 810.7
324—11 124	須恵器 坏EI	覆土内 ½残存	口 (12.2) 底 (5.7) 高 4.0	黒色鉱物粒多 白色鉱物粒少	還元焔 硬質	灰白	轆轤整形(右回転)。体部にほとんど張りをもたず、口縁部は外反する。底部は回転糸切り無調整。	
324—12 125	灰釉陶器 埦	覆土内 ½残存	口 (13.3) 底 (7.2) 高 3.6	美濃系		灰白	轆轤成整形(右回転)。体部はやや張り、口縁部は外反する。高台は底部回転篦削り後の付高台。施釉は刷毛掛けか？	大原2

324—13	須恵器 壺	覆土内 破片	口 — 底 — 高 (2.6)	白色鉱物粒少 赤褐色粒少	還元焔 硬質	灰	轆轤整形。肩に若干の張りを有し、胴部と頸部が細長くのびる器形と思われる。外面に自然釉を有する。	
324—14	瓦 女瓦	覆土内 ¼残存	厚 1.7	黒色鉱物粒多 赤褐色粒多 白色鉱物粒少	酸化焔 硬質	橙 にぶい橙	一枚作り？凹面の布目は部分的に横位の箆撫でが施されている。凸面縄叩き。側部面取り2面。	
324—15 125	鉄器 鏃	覆土内 破片	長 9.8 幅 0.5 重 28.0				先端部及び茎の一部を欠損する。断面は方形。	

H区第147号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
326—1 125	須恵器 坏DIII	覆土内 ¼残存	口 (13.3) 底 (6.9) 高 3.7	白・黒色鉱物粒少	還元焔 硬質	灰	轆轤整形(右回転)。体部はやや内湾気味に立ち上がる。底部は回転糸切り無調整。	
326—2 125	須恵器 埦CII	覆土内 ¾残存	口 14.0 底 6.3 高 5.1	黒・白色鉱物粒多 小礫微	中性焔 やや硬質	明黄褐 褐灰	轆轤整形(右回転)。体部にほとんど張りをもたず、口縁部が強く外反する。高台は底部回転糸切り後付高台で、貼り付けは非常に雑。	外面にカーボン付着。
326—3 125	須恵器 埦CII	覆土内 ¾残存	口 14.0 底 6.9 高 4.7	黒色鉱物粒微 白色鉱物粒少 灰色砂粒多	中性焔 やや硬質	にぶい橙	轆轤整形(右回転)。体部中位にわずかに張りを有し、口縁部外反する。高台は底部回転糸切り後の付高台である。	
326—4	須恵器 甕	カマド 破片	口 — 底 — 高 (12.8)	白色鉱物粒少 黒色鉱物粒多	還元焔 やや軟質	灰	紐作り叩き成形。内外面共に素文。	
326—5	須恵系 羽釜	覆土内 ¼残存	口 — 底 — 高 (19.0)	白色鉱物粒多 黒色鉱物粒少 赤褐色粒微	酸化焔 硬質	橙	紐作り轆轤整形(右回転)。胴部下端斜位箆削り。	
326—6 125	瓦 男瓦	カマド 破片	厚 1.7	白色鉱物粒多 褐色粒多	還元焔 やや硬質	赤灰	箆描き文字瓦、「山」(凸面)。側部面取り2面。	
326—7 125	瓦 女瓦	覆土内 破片	厚 1.5	黒色粒少 白色粒多	還元焔 やや硬質	灰	両面に粘土板糸切り痕あり。凸面斜格子叩き。側部面取り2面。	
326—8 125	瓦 女瓦	覆土内 ½残存	広 — 狭 19.7 長 —	白色鉱物粒多 褐色粒微	中性焔 やや硬質	橙	一枚作り。狭端部の凹面の箆削りはあまり巾広くなく、女瓦であるのか曖昧。側部面取り2面。	反 6.5 厚 2.7
327—1 125	瓦 宇瓦	覆土内 ¼残存	幅 — 高 3.0 反 —	黄褐色シルト粒	還元焔 硬質	青灰	一枚作り。凸面縄叩きあり。重弧。凹面箆状工具による粗い撫でを施す。側部面取り1面。	
327—2	瓦 女瓦	覆土内 ¼残存	厚 2.6	白色鉱物粒多 褐色粒多 黒色鉱物粒少	中性焔 やや軟質	にぶい橙	凹面布目を指先の撫でででわずかに行い消している。凸面叩きはなし。側部面取り2面。	
327—3 125	鉄器 不明	覆土内 破片	長 5.8 幅 2.0 重 36.8				形状不整形。何であるか不明。	
327—4	石器 敲石	覆土内 完形	長 17.0 幅 7.8 厚 4.5	粗粒安山岩			下端部、側面の一部及び平面の下端部近くに明瞭な敲打痕が見られる。また、側面に磨滅した面がある。	重 947.5

H区第154号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
328—1	須恵系 羽釜C	覆土内 破片	口 (22.0) 底 — 高 (6.6)	黒色鉱物粒少 白色鉱物粒多	還元焔 硬質	褐灰	紐作り轆轤整形(右回転)。鍔部直下に胴部最大径を有し、口縁部はやや内傾する。口唇部はほぼ平坦で、やや内傾する。鍔の貼り付けは比較的丁寧である。	

H区第156号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
329—1	須恵系 羽釜C	貯蔵穴 破片	口 (18.0) 底 — 高 (10.0)	小礫少 赤褐色粒多 黒色鉱物粒多	中性焔 硬質	橙	紐作り轆轤整形(右回転)。胴部上半に胴部最大径を有し、口縁部はわずかに内傾する。口唇部は「V」字状に窪んでいる。鍔の貼り付けは丁寧である。	
329—2 126	石器 敲石	貯蔵穴 完形	長 18.5 幅 6.9 厚 4.2	変質安山岩			両側面共上半に剝離が見られ、稜線は打製石斧の側線部と同じような状態を呈している。この両側面が使用部位であったことは明らかである。	重 724.8

H区第157号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
330—1 126	灰釉陶器 椀	覆土内 破片	口 — 底 (8.0) 高 (2.0)	美濃系		灰白	轆轤成整形、付高台。	内面全面に金泥を塗布。
330—2 126	緑釉陶器 椀	覆土内 破片	口 — 底 — 高 —			オリーブ灰	口縁部はわずかに外反する。	厚 0.4

H区第158号住居跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
331—1	土師質 坏F	覆土内 ¼残存	口 (11.0) 底 (6.0) 高 3.6	白色鉱物粒少 黒色鉱物粒多	酸化焔 軟質	褐灰	轆轤整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整で、わずかに突出する。体部下半にわずかに張りを有し、口縁部は外反しない。	
331—2 126	須恵器 坏EI	覆土内 ¼残存	口 12.2 底 5.5 高 3.4	灰色砂粒少 白色鉱物粒少	還元焔 やや硬質	淡黄	轆轤整形(右回転？)。体部中位にやや張りを有し、口縁部はわずかに外反する。底部は回転糸切りで、若干撫でられ糸切り痕は明瞭でない。	
331—3 126	須恵器 坏EI	覆土内 ¼残存	口 13.0 底 6.2 高 4.0	黒・白色鉱物粒多 褐色粒多	中性焔 やや硬質	淡黄	轆轤整形(右回転)。体部にわずかに張りを有し、口縁部は若干外反する。底部は回転糸切り無調整。	
331—4	須恵器 椀CII	覆土内 ¼残存	口 (12.0) 底 (6.8) 高 5.3	小礫少 黒色鉱物粒少 白色鉱物粒多	中性焔 軟質	にぶい黄橙	轆轤整形(右回転)。体部にわずかに張りを有し、口縁部外反する。底部は回転糸切り無調整後の付高台と考えられ、貼り付けは非常に雑である。	
331—5	黒色土器 椀	覆土内 ¼残存	口 — 底 — 高 (7.6)	黒色鉱物粒少 白色鉱物粒微 褐色細粒少	酸化焔 やや硬質	浅黄	轆轤整形(右回転)。底部切り離し技法は、高台部貼り付けに伴い回転撫で調整を受け不明。内面の器面の粗れが激しく不明だが、研磨後の吸炭と考えられる。高台は剝落しているが、剝離面の磨滅が激しく、再利用が考えられる。	
331—6 126	須恵器 椀CII	貯蔵穴 ¾残存	口 13.1 底 6.3 高 4.4	黒色鉱物粒多 灰色砂粒多	中性焔 やや軟質	橙・褐	轆轤整形(右回転)。体部は直線的に開き、口縁部はわずかに外反する。高台は底部回転糸切り後の付高台である。	
331—7 126	須恵器 椀CI	覆土内 ½残存	口 (13.5) 底 (6.6) 高 5.6	黒色鉱物粒多 灰色砂粒少 小礫微	還元焔 やや硬質	灰白	轆轤整形(右回転)。体部に張りはあまり見られず、口縁部もほとんど外反しない。高台は底部回転糸切り後の付高台。	
331—8 126	須恵器 椀CI	覆土内 ¾残存	口 15.1 底 8.1 高 5.8	小礫微 黒・白色鉱物粒少	中性焔 やや硬質	灰黄	轆轤整形(右回転)。体部下半に張りを有し、口縁部はわずかに外反する。高台は底部回転糸切り後の付高台。	
331—9 126	土師質 椀E	覆土内 ¼残存	口 (16.5) 底 (10.0) 高 6.3	黒色鉱物粒多 褐色粒少 灰色砂粒少 白色鉱物粒少	酸化焔 硬質	橙	轆轤整形(右回転)。体部は張りをほとんどもたず、口縁部はやや内湾する。高台は比較的長脚で、底部回転糸切り後の付高台。	足高高台内面のハゼが激しい。

331—10	土師質 埦 E	覆土内 破片	口 — 底 (11.0) 高 (3.8)	白色鉱物粒多 黒色鉱物粒少	酸化焔 やや硬 質	橙	轆轤整形(？)。長脚の付高台。	
331—11 126	灰釉陶器 埦	覆土内 ¼残存	口 (14.8) 底 (7.2) 高 4.7	美濃系		灰白	轆轤成整形(右回転)。体部に張りを有し、口縁部はわずかに外反する。高台は底部回転篦削り後の付高台。施釉は漬け掛けである。	
332—1	土師器 小型甕	覆土内 破片	口 (12.0) 底 — 高 (4.8)	白・黒色鉱物 粒少 褐色粒少	酸化焔 やや硬 質	にぶい 褐	口縁部はわずかに外反し、上端が直立する。内面は「コ」字状を呈する。胴部はあまり張りをもたない。口縁部横撫で後胴部斜位篦削り、内面胴部は櫛状の痕跡を残す篦撫で。	
332—2	須恵系 小型甕	覆土内 破片	口 (19.0) 底 — 高 (7.0)	白色鉱物粒多 黒色鉱物粒少 褐色粒微	酸化焔 硬質	にぶい 褐	轆轤整形(右回転)。口縁部は比較的厚手で外反する。胴部上半に最大径を有する。胴部は、回転を利用したと思われる篦削り後、口縁部～肩部に轆轤回転を利用した撫でを施す。	内面に接合痕を明瞭に残す
332—3	須恵系 羽釜 B	覆土内 破片	口 (19.0) 底 — 高 (7.1)	白色鉱物粒多 褐色粒多 黒色鉱物粒少	中性焔 硬質	橙	紐作り轆轤整形(右回転)。胴部上半に最大径を有し、胴部は強く張り、口縁部は内傾する。口唇部は平坦で外に若干突出する。鍔の貼り付けは比較的雑。	
332—4	須恵系 羽釜 C	覆土内 破片	口 (21.0) 底 — 高 (4.6)	白色鉱物粒多 褐色粒少 砂礫少	酸化焔 軟質	褐灰	紐作り轆轤整形(右回転？)。口縁部は比較的強く内傾し、鍔貼り付け部直下に胴部最大径を有すると思われる。	
332—5	須恵系 羽釜 C	覆土内 破片	口 (22.2) 底 — 高 (12.1)	小礫少 白色鉱物粒多 褐色粒少	酸化焔 軟質	にぶい 橙	紐作り轆轤整形(右回転)。口縁部はわずかに内傾し、口唇部は平坦で内傾する。胴部最大径は鍔部直下に位置する。鍔の貼り付けは丁寧である。	
332—6	須恵系 羽釜 C	覆土内 破片	口 (23.2) 底 — 高 (6.0)	白色鉱物粒少 褐色粒多 黒色鉱物粒多	中性焔 やや軟 質	褐灰	紐作り轆轤整形(？)。鍔貼り付け部直下に胴部最大径を有し、口縁部は強く内傾する。	
332—7	須恵系 羽釜 C	覆土内 破片	口 (20.0) 底 — 高 (6.9)	白色鉱物粒多 褐色粒多	酸化焔 やや硬 質	褐灰	紐作り轆轤整形(右回転)。胴部の張りは弱く、口縁部はほぼ直立する。口唇部は平坦で沈線状に窪む。	
332—8	瓦 男 瓦	覆土内 ¼残存	厚 1.9	白色鉱物粒多 小礫多 黒色鉱物粒少 褐色粒多	酸化焔 硬質	茶	凹面粘土板糸切り痕あり。凸面にカーボンが厚く付着している。側部面取り３面。	
332—9 126	石 器 台石？	覆土内 ½残存	長 (23.2) 幅 (17.2) 厚 9.7	粗粒安山岩			下半は欠損し、上端の一部も熱によりハゼている。全体に熱により変色している。	重5400.0
332—10 126	石 器 薦編み石	覆土内 ¼残存	長 (10.0) 幅 5.7 厚 5.7	石英斑岩			半截の状態であるが、截断面に使用痕は認められないことから、使用に伴い割れたものと思われる。	重 397.8
332—11 126	石製品 臼 玉	覆土内 完形	長 1.5 幅 1.7 厚 0.6	滑石			上面は孔を中心として周囲を４回の擦切りによって成形をしている。擦切り後の調整はほとんど加えられていない。裏面は剝離している。	重 20.0 孔 0.3

H区第159号住居跡

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎 土	焼 成	色 調	器形・技法等の特徴	備 考
333—1 126	須恵器 坏E II	覆土内 ¼残存	口 (13.9) 底 (6.3) 高 (4.2)	黒色鉱物粒少	還元焔 硬質	灰白	轆轤整形(右回転)。体部外面には明瞭に轆轤痕を残し、口縁部は外反する。底部は回転糸切り無調整。	内外面共カーボン厚く付着
333—2	黒色土器 埦	カマド 破片	口 — 底 7.0 高 (1.2)	白・黒色鉱物 粒少	酸化焔 やや軟 質	にぶい 黄橙 褐灰	轆轤整形(？)。底部切り離し技法は、高台貼り付けに伴う調整で不明。内面は放射状篦研磨後黒色処理を施す。	
333—3	須恵系 羽釜 B	覆土内 破片	口 (20.0) 底 — 高 (5.1)	白色鉱物粒多 黒色鉱物粒少	還元焔 硬質	浅黄	紐作り轆轤整形(右回転)。胴部上半に比較的強い張りを有し、口縁部は強く内傾する。口唇部はやや丸味をもち内傾している。	
333—4	瓦 女 瓦	覆土内 破片	厚 2.0	黒色細粒多	還元焔 軟質	灰	凹面粘土板糸切り痕あり。狭端部側の凹面の篦削りが見られない。凸面縄叩き。側部面取り２面。	

遺物一覧表

H区第4号掘立柱建物跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
334—1	須恵器 瓶？	柱穴覆土内 破片	口 — 底 (9.9) 高 (1.1)	白・黒色鉱物粒少	還元焔 硬質	灰	轆轤整形(右回転)。底部は切り離し後回転篦調整を施し、付高台。	自然釉。
334—2	須恵器 甕	柱穴覆土内 破片	口 — 底 — 高 —	黒色鉱物粒微 白色鉱物粒少	還元焔 硬質	オリーブ黒 灰	外面平行叩き、内面青海波文。内外面共に自然釉。	厚 0.8
334—3	須恵器 甕	柱穴覆土内 破片	口 — 底 — 高 —	黒色鉱物粒多 白色鉱物粒微	還元焔 硬質	灰	外面平行叩きを重ねることにより、格子状叩きとしている。内面青海波文。	厚 0.8

H区土坑

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
335—1	土師器 台付甕	56•57土坑 覆土内 ¼残存	口 — 底 (12.0) 高 (3.7)	白・黒色鉱物粒多 褐色粒多	酸化焔 やや硬質	にぶい橙	脚部は「く」字状に強く開く。内外面共に円周方向の撫で、内面に接合痕を明瞭に残す。	
335—2	須恵器 甕	56•57土坑 覆土内 破片	口 — 底 — 高 —	白・黒色鉱物粒少 褐色粒少	酸化焔 やや硬質	橙	外面格子叩き、内面素文。	厚 0.5
336—1	須恵器 埦	67土坑 覆土内 破片	口 — 底 (11.0) 高 (1.4)	黒色鉱物粒多 白色鉱物粒少	還元焔 硬質	灰	轆轤整形(右回転)。底部回転篦調整後付高台。高台は角高台で、接地部は窪んでいる。	
336—2	石器 薦編み石	67土坑 覆土内 ½残存	長 (7.0) 幅 6.9 厚 3.0	変質安山岩			明確な使用痕は認められない。	重 240.0
338—1 126	須恵器 高台付皿	132土坑 覆土内 ¾残存	口 13.0 底 7.4 高 2.4	黒・白色鉱物粒微	還元焔 硬質	灰	轆轤整形(右回転？)。体部は厚く外反する。高台は底部回転糸切り後の付高台。	
339—1	瓦 女瓦	133土坑 覆土内 破片	厚 1.7	白・黒色鉱物粒少 赤褐色粒少	酸化焔 やや硬質	にぶい黄橙	一枚作り。凸面に布の合わせ目あり。側部面取り2面。	
339—2	須恵系 羽釜C	133土坑 覆土内 破片	口 (22.0) 底 — 高 (4.6)	白色鉱物粒多 褐色粒少 黒色鉱物粒少	中性焔 硬質	橙	紐作り轆轤整形(右回転？)。胴部にあまり張りをもたず、口縁部は反り気味に内傾する。	
339—3	須恵系 羽釜C	135土坑 覆土内 破片	口 (20.0) 底 — 高 (4.7)	白色鉱物粒多 黒色鉱物粒少	酸化焔 やや軟質	橙	紐作り轆轤整形(右回転)。胴部の張りは弱く、口縁部は反り気味に直立する。鍔の貼り付けは丁寧だが、下半に接合痕がわずかに観察される。	
339—4 126	須恵器 甑	140土坑 覆土内 ½残存	口 — 底 — 高 (6.3)	白色細粒多	還元焔 やや硬質	にぶい橙 灰白	底部は丸底で肩の張りがある。胴部に3条の沈線を廻らし、波状文を2段、刻みを1段施す。	穿孔部欠損。
339—5 126	土師質 埦	140土坑 覆土内 ¾残存	口 (11.5) 底 (6.5) 高 4.5	黒・白色鉱物粒少 砂粒微	酸化焔 硬質	橙	轆轤整形(右回転)。体部中位に張りを有し、口縁部は外反する。高台は付高台で、底部切り離しは不明。	
339—6	石器 薦編み石	140土坑 覆土内 完形	長 10.6 幅 6.6 厚 3.3	粗粒安山岩			明瞭な使用痕は認められない。	重 380.0
340—1	須恵器 長頸壺	143土坑 覆土内 破片	口 — 底 — 高 —	白・黒色鉱物粒少	還元焔 やや硬質	オリーブ灰	長頸壺の肩部、確認できた範囲で、3本の沈線と間に櫛状工具の刺突が見られる。また頸部周辺にはカキ目状の同心円が見られる。	厚 0.8
340—2	須恵器 坏EII	146土坑 覆土内 ¼残存	口 (12.0) 底 (6.0) 高 (3.8)	白色鉱物粒多 黒色鉱物粒少	還元焔 やや軟質	灰白	轆轤整形(右回転)。底部回転糸切り無調整。体部にわずかに張りを有し、口縁部外反する。	
340—3	土師質 埦E	146土坑• 5井戸覆土内・表土	口 — 底 12.4 高 (5.2)	褐色粒少 黒色鉱物粒少	酸化焔 やや軟質	黄橙	轆轤整形(右回転)。底部回転糸切り後の付高台。	½残存

341－1	須恵器 埦	153土坑 覆土内 破片	口 — 底 (8.0) 高 (2.5)	白・黒色鉱物粒少	還元焔 硬質	灰白	轆轤整形(右回転)。底部回転糸切り後付高台。高台部断面三角形で、貼り付けは雑。	
341－2 126	瓦 女瓦	153土坑 覆土内 破片	厚 2.5	白色鉱物粒多 黒色鉱物粒少	還元焔 硬質	黄灰	一枚作り。凹面粘土板糸切り痕あり。凸面正格子叩き。側部面取り2面。	
341－3 126	須恵器 坏EII	159土坑 覆土内 ¼残存	口 12.5 底 5.7 高 3.8	黒色鉱物粒多 白色鉱物粒少	中性焔 やや硬質	にぶい橙	轆轤整形(右回転)。体部中位にわずかに張りを有し、口縁部は強く外反する。底部は回転糸切り無調整。	
342－1	須恵器 坏EII	164土坑 覆土内 ½残存	口 — 底 (6.0) 高 (3.2)	黒色鉱物粒多 白色鉱物粒少	還元焔 やや硬質	灰白	轆轤整形(右回転)。底部回転糸切り無調整。体部にわずかに張りがあり、口縁部は外反するものと思われる。	糸切り痕体部に及ぶ。
342－2	須恵器 甕	164土坑 覆土内 破片	口 — 底 — 高 —	黒・白色鉱物粒少	還元焔 硬質	暗青灰	紐作り叩き成形。外面平行叩き、内面青海波文。内外面共自然釉付着。内面自然釉厚い。	厚 0.8
342－3	土師質 埦?	167土坑 覆土内 破片	口 (12.0) 底 — 高 (3.6)	白・黒色鉱物粒少 褐色粒多	酸化焔 軟質	浅黄橙	轆轤整形(?)。体部下半に張りを有し、口縁部内湾する。	
342－4	須恵系 羽釜B	167土坑 覆土内 破片	口 (21.0) 底 — 高 (9.8)	小礫少 白色鉱物粒多 褐色粒少	中性焔 硬質	褐	紐作り轆轤整形(右回転)。胴部上半の張りが強く、口縁部は内湾する。鍔は反り気味に上方を向く。	

H区第4号井戸跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
343－1	土師器 坏BIV	覆土内 ¼残存	口 (12.0) 底 — 高 (2.5)	黒色鉱物粒多 白色鉱物粒少 褐色粒多	酸化焔 軟質	橙	底部は浅い丸底で、口縁部は内湾する。底部は篦削り、口縁部横撫でを施し、間に調整の不明瞭な部分がある。	
343－2	土師器 坏BIV	覆土内 ¼残存	口 (12.0) 底 — 高 3.2	黒色鉱物粒多 白色鉱物粒少	酸化焔 やや硬質	にぶい橙	底部は浅い丸底で、口縁部は内湾する。底部篦削り、口縁部横撫でで、間に調整の不明瞭な部分が見られる。	
343－3 126	土師器 坏 A	覆土内 ¾残存	口 12.3 底 — 高 4.8	黒色鉱物粒少 褐色粒多 灰色砂粒少	酸化焔 硬質	にぶい褐	底部は丸底で、口縁部との境に段を有し、口縁部はわずかに内傾する。口縁部は横撫で、底部は篦削りで、口縁部との間に篦削りを施さない部分が見られる。	胎土と器面の色調が相違。
343－4	土師器 坏BIV	覆土内 ¼残存	口 (13.8) 底 — 高 (3.2)	黒色鉱物粒多 白色鉱物粒少	酸化焔 やや硬質	にぶい橙	底部は浅い丸底で、口縁部は内湾する。底部篦削り、口縁部横撫でで、間に調整の不明瞭な部分が見られる。	
343－5 127	土師器 坏CI	覆土内 ½残存	口 (14.2) 底 — 高 3.5	黒色鉱物粒多 褐色粒多	酸化焔 硬質	橙	底部は浅い丸底で、口縁部はやや外傾気味に立ち上がる。口縁部は横撫で、底部は篦削りで、間に整形の不明瞭な部分が見られる。	
343－6 127	土師器 坏BII	覆土内 ¾残存	口 13.9 底 — 高 4.0	黒色鉱物粒多 灰色砂粒多 褐色粒多	酸化焔 やや軟質	橙	底部は丸底で、口縁部は内湾する。口縁部横撫で、底部篦削りを施す。	
343－7	土師器 坏BIV	覆土内 ¼残存	口 (15.2) 底 — 高 (3.0)	黒色鉱物粒多 白色鉱物粒少 褐色粒多	酸化焔 軟質	橙	底部は浅い丸底で、口縁部は弱く内湾する。底部は篦削り、口縁部横撫でで、間に調整不明瞭な部分が見られる。	
343－8	土師器 皿	覆土内 破片	口 (15.8) 底 — 高 (3.0)	黒色鉱物粒多 褐色粒多 白色鉱物粒少	酸化焔 軟質	橙	底部は浅い丸底で、口縁部は強く外反する。口縁部横撫で、底部調整は不明。	
344－1	土師器 皿	覆土内 破片	口 (17.0) 底 — 高 (3.5)	黒色鉱物粒多 白色鉱物粒少 褐色粒多	酸化焔 軟質	橙	底部は浅い丸底で、口縁部は強く外反する。底部篦削り、口縁部は横撫でを施し、間に調整の不明瞭な部分が見られる。	
344－2	土師器 皿	覆土内 ¼残存	口 (18.0) 底 — 高 (3.1)	黒色鉱物粒少 白色鉱物粒微 褐色粒多	酸化焔 軟質	橙	底部は浅い丸底で、口縁部は外反する。底部篦削り、口縁部横撫でで、間に調整の不明瞭な部分が見られる。	
344－3	須恵器 埦	覆土内 破片	口 — 底 (10.7) 高 (1.3)	褐色粒多	還元焔 やや軟質	灰白	轆轤整形(右回転)。底部回転篦削り後付高台。	

344－4	須恵器 埦？	覆土内 破片	口 — 底 (13.8) 高 (2.1)	黒色鉱物粒多 白色鉱物粒少 褐色粒少	還元焔 やや軟質	灰白	轆轤整形(右回転)。底部は回転篦調整後の付高台。内面撫で。	
344－5	須恵器 埦	覆土内 破片	口 — 底 12.0 高 (1.7)	白色鉱物粒多 黒色鉱物粒少	還元焔 やや硬質	灰白	轆轤整形(右回転)。底部は回転篦切り後付高台。高台断面三角形で、貼り付けは丁寧である。	
344－6	須恵器 埦	覆土内 破片	口 — 底 (11.0) 高 (3.6)	黒色鉱物粒少 白色鉱物粒微 小礫微 褐色粒多	還元焔 硬質	灰白	轆轤整形(右回転)。底部回転篦切り無調整後付高台。高台は外面に稜を有し、三日月高台に近似。	
344－7 127	須恵器 埦	覆土内 ½残存	口 (16.8) 底 (10.6) 高 8.3	黒色鉱物粒多 白色鉱物粒少	還元焔 硬質	灰白	轆轤整形(右回転)。体部は深く内湾し、口縁部はわずかに外反する。高台は底部回転篦切り後の付高台で、体部下端に２段の回転篦削りを施す。	
344－8	須恵器 鉢	覆土内 ¼残存	口 (19.0) 底 — 高 (6.7)	黒色鉱物粒少 白色鉱物粒微	還元焔 やや硬質	灰	轆轤整形(右回転)。口縁部が強く内湾する鉄鉢模倣と考えられる器形を呈する。	
344－9	須恵器 鉢？	覆土内 破片	口 — 底 — 高 —	黒色鉱物粒少 褐色粒多 白色鉱物粒微	還元焔 やや硬質	灰	轆轤整形(？)。口縁部が強く内湾する。	厚 0.8
344－10	須恵器 皿	覆土内 破片	口 26.0 底 20.0 高 3.9	白・黒色鉱物 粒少	還元焔 やや硬質	灰白	轆轤整形(右回転)。口縁部は外反し、口唇部平坦でやや外傾する。高台は付高台(角高台)。腰部に回転篦削りを１段施す。	
344－11	須恵器 蓋	覆土内 破片	口 10.0 摘 — 高 (3.1)	黒・白色鉱物 粒少	還元焔 やや軟質	灰白	轆轤整形(？)。丸い体部を有し、口縁部は直立する。体部手持ち篦削りを施す。	
344－12	須恵器 蓋	覆土内 破片	口 — 摘 — 高 (1.8)	白色鉱物粒微 黒色鉱物粒少	還元焔 軟質	灰白	轆轤整形(右回転)。体部手持ち篦削り。	
344－13	須恵器 蓋	覆土内 ¼残存	口 (9.6) 摘 — 高 (1.6)	黒・白色鉱物 粒少	還元焔 やや硬質	灰	轆轤整形(？)。内面にかえりを有し、比較的扁平である。外面は手持ち篦削りを施す。	
344－14	須恵器 蓋	覆土内 ¼残存	口 (12.0) 摘 — 高 (1.4)	黒色鉱物粒多 白色鉱物粒少 褐色粒少	還元焔 やや硬質	灰白	轆轤整形(右回転)。内面にかえりを有し、外面に回転篦削りを施す。	
344－15 127	須恵器 蓋	覆土内 ½残存	口 (14.8) 摘 (5.4) 高 2.6	黒色鉱物粒多	還元焔 硬質	灰白	轆轤整形(？)。内面にかえりを有する。摘は環状摘である。	外面自然釉が厚くかかる。
344－16	須恵器 蓋	覆土内 ¼残存	口 (14.0) 摘 — 高 (2.0)	白・黒色鉱物 粒少	還元焔 硬質	灰	轆轤整形(右回転)。内面にかえりを有し、外面に回転篦削りを施す。	
344－17	須恵器 蓋？	覆土内 破片	口 — 摘 (8.6) 高 (3.8)	黒色鉱物粒少 白色鉱物粒微	還元焔 硬質	灰 灰白	轆轤整形(右回転)。体部の丸味が強く、環状摘を有する。外面回転篦削りを施す。	外面に自然釉。
344－18	須恵器 蓋	覆土内 ¼残存	口 — 摘 (7.0) 高 (1.8)	白色シルト少 黒色鉱物粒多 白色鉱物粒微	還元焔 硬質	灰白	轆轤整形(右回転)。環状摘を有する。外面上部回転篦削りを施す。	
344－19	須恵器 蓋	覆土内 破片	口 — 摘 (6.6) 高 (2.0)	白・黒色鉱物 粒多	還元焔 硬質	灰	轆轤整形(？)。環状摘を有する。外面には自然釉と、付着物が多量に見られる。	
345－1 127	須恵器 蓋	覆土内 ¼残存	口 (17.8) 摘 6.2 高 3.3	黒色鉱物粒少 白色鉱物粒微	還元焔 硬質	灰白	轆轤整形(右回転)。内面にかえりを有する。摘は環状摘で外面に回転篦削りを施す。	外面に自然釉。
345－2 127	須恵器 蓋	覆土内 ½残存	口 (17.4) 摘 — 高 (2.4)	黒・白色鉱物 粒少	還元焔 硬質	灰白	轆轤整形(右回転)。内面にかえりを有する。外面に回転篦削りを施す。摘の形状は不明。	
345－3	須恵器 蓋	覆土内 破片	口 (18.0) 摘 — 高 (1.9)	白・黒色鉱物 粒多	還元焔 やや硬質	灰	轆轤整形(右回転)。内面にかえりを有する。外面に回転篦削りを施す。	外面に自然釉。
345－4	須恵器 蓋	覆土内 破片	口 18.0 摘 — 高 (2.3)	白色鉱物粒多 黒色鉱物粒少 小礫微	還元焔 硬質	灰白	轆轤整形(右回転)。内面にかえりを有する。外面上部は回転篦削りを施す。	

345—5	須恵器 蓋	覆土内 ½残存	口 (20.0) 摘 — 高 (2.4)	黒・白色鉱物粒多	還元焔 硬質	灰	轆轤整形(右回転)。かえりを有し、体部回転篦削りを施す。	
345—6	土師器 鉢	覆土内 ¼残存	口 (18.0) 底 — 高 (9.0)	褐色粒多 黄色シルト多 黒色鉱物粒少	酸化焔 硬質	橙	体部にやや丸味をもった鉢形で、口縁部横撫で後体部下位→上位への篦削りを施す。	
345—7	土師器 甕	覆土内 破片	口 (16.0) 底 — 高 (4.7)	黒色鉱物粒少 白色鉱物粒多 灰色砂粒多 褐色粒少	酸化焔 やや硬質	橙	口縁部は「コ」字状に近い形態で、胴部は比較的丸味が強い。口縁部横撫で、胴部外面篦削り、内面篦撫でを施す。	
345—8	土師器 甕 B ?	覆土内 破片	口 (20.0) 底 — 高 (4.3)	黒色鉱物粒多 褐色粒多 白色鉱物粒微	酸化焔 やや硬質	橙	口縁部が「く」字状に強く屈曲し、胴部上半に張りを有する。口縁部横撫で、胴部篦削り。	
345—9	須恵器 長頸壺?	覆土内 破片	口 (10.0) 底 — 高 (5.3)	黒色鉱物粒微 白色鉱物粒少	還元焔 硬質	灰	轆轤整形(右回転)。頸部に1段の屈曲を有し、口唇部は平坦で水平である。	内外面自然釉。内面厚い
345—10	須恵器 長頸壺	覆土内 破片	口 (12.0) 底 — 高 (6.7)	黒色鉱物粒多 白色鉱物粒微	還元焔 硬質	灰 灰白	轆轤整形(右回転)。直線的に開く口縁部を有する。	内外面自然釉。
345—11	須恵器 短頸壺	覆土内 破片	口 (12.0) 底 — 高 (4.8)	黒・白色鉱物粒微	還元焔 軟質	灰白	轆轤整形(?)。口縁部はやや反り気味に直立し、胴部に強い張りを有する。	
345—12	須恵器 瓶	覆土内 破片	口 — 底 9.0 高 (8.0)	黒色鉱物粒多	還元焔 やや硬質	灰白	胴部の張りは弱く、底部調整は指先の雑な撫でを施す。	
345—13	須恵器 甕	覆土内 破片	口 (13.0) 底 — 高 (7.1)	白色鉱物粒多	還元焔 硬質	灰	紐作り轆轤整形(?)。胴部に張りを有し、口縁部に段を有する。	
345—14	須恵器 瓶	覆土内 破片	口 — 底 (14.5) 高 (3.5)	黒・白色鉱物粒多	還元焔 硬質	灰白	轆轤整形。付高台。貼り付け部から剝離し、焼成に伴い変形している。	
345—15	須恵器 甕	覆土内 破片	口 — 底 — 高 —	白色鉱物粒多 砂粒少	還元焔 硬質	灰	櫛状工具で縦位に条線状に施文し、中位に2本の平行沈線を廻らす。	厚 1.3
346—1	須恵器 甕	覆土内 破片	口 — 底 — 高 —	黒色鉱物粒多 白色鉱物粒微	還元焔 硬質	灰白	紐作り叩き成形。外面平行叩き、内面青海波文。	厚 1.3
346—2	須恵器 甕	覆土内 ¼残存	口 — 底 — 高 (28.0)	黒色鉱物粒多 灰白色シルト	還元焔 やや硬質	灰白 灰	紐作り叩き成形。外面平行叩き後横位にカキ目を施し、内面青海波文。	厚 1.0

H区第5号井戸跡

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
348—1 127	土師器 坏AI	覆土内 ¾残存	口 11.9 底 — 高 4.5	黒色鉱物粒微 灰色砂粒多	酸化焔 やや硬質	橙	底部丸底で、口縁部との境に段を有し、口縁部は直線的に外傾する。口縁部横撫で、底部篦削りを施す。	
348—2 127	土師器 坏AI	覆土内 完形	口 13.0 底 — 高 4.6	白色鉱物粒少 黒色鉱物粒微 褐色粒多	酸化焔 軟質	橙	底部は丸底で、口縁部との境に段を有し、口縁部は直線的に外傾する。口縁部横撫で、底部篦削りを施す。	
348—3 127	土師器 坏 E	覆土内 ¾残存	口 (12.2) 底 (6.0) 高 3.9	金雲母多 黒・白色鉱物粒多	酸化焔 硬質	にぶい黄橙	底部は平底で、体部はやや内湾気味に立ち上がる。口縁部横撫で、体部上半指の押さえ、下半斜位(右→左)篦削り、底部は篦削りを施す。内面は雑な撫で。	
348—4 127	須恵器 坏DIV	覆土内 ¾残存	口 12.0 底 7.0 高 3.6	白色鉱物粒多 黒色鉱物粒少	還元焔 硬質	灰白	轆轤整形(右回転)。体部はやや内湾気味に外傾し、口縁部は全く外反しない。底部は回転糸切り無調整。	
348—5 127	須恵器 坏?	覆土内 ½残存	口 (12.6) 底 (5.5) 高 3.9	黒・白色鉱物粒少	中性焔 やや軟質	灰褐	轆轤整形(右回転)。体部下半は外反し、上半で内湾気味に立ち上がる。底部は回転糸切り無調整。	

348－6 127	須恵器 坏EII	覆土内 ½残存	口 (12.0) 底 (6.4) 高 3.9	白色鉱物粒多 黒色鉱物粒少	還元焔 やや軟質	灰	轆轤整形(右回転)。底部回転糸切り無調整。体部上半にわずかに張りが見られ、口縁部が強く外反する。	
348－7 127	土師質 坏	覆土内 ¾残存	口 (13.5) 底 (6.9) 高 4.2	灰色砂粒多 褐色粒多 黒色鉱物粒少	酸化焔 やや硬質	にぶい 黄橙	轆轤整形(右回転)。体部はやや内湾気味に開く。体部外面は轆轤調整痕が顕著である。底部は回転糸切り無調整であるが、周辺部は不明瞭となっており、高台の剝離した可能性がある。	
348－8 127	須恵器 坏EIII	覆土内 ¾残存	口 12.7 底 4.4 高 5.7	黒・白色鉱物 粒少	還元焔 硬質	灰白	轆轤整形(右回転)。体部に張りは見られず、底部から外反気味に立ち上がる。底部は回転糸切り無調整。	
348－9 127	須恵器 坏EII	覆土内 ¼残存	口 (12.4) 底 (6.2) 高 3.8	褐色粒少 白色鉱物粒少	中性焔 硬質	灰黄	轆轤整形(右回転)。体部中位にわずかに張りを有し、口縁部は外反する。底部は回転糸切り無調整。	
348－10 127	須恵器 埦CII	覆土内 ¾残存	口 11.6 底 5.9 高 4.4	小礫少 白色鉱物粒多 灰色砂粒少	還元焔 硬質	灰白	轆轤整形(右回転)。体部中位にわずかに張りを有し、口縁部は強く外反する。高台は底部回転糸切り後の付高台で、貼り付けは雑である。	
348－11 127	須恵器 埦CII	覆土内 ¾残存	口 (11.7) 底 (6.0) 高 4.6	白色鉱物粒多 小礫少 黒色鉱物粒少	還元焔 硬質	灰白	轆轤整形(右回転)。体部中位にわずかに張りを有し、口縁部は外反する。高台は底部回転糸切り後の付高台で、非常に雑なつくりである。	
348－12 127	須恵器 坏EII	覆土内 ½残存	口 (12.4) 底 (6.6) 高 3.5	黒色鉱物粒多 灰色砂粒多	中性焔 やや硬質	にぶい 黄橙	轆轤整形(右回転)。体部にやや張りを有し、口縁部は外反する。底部は回転糸切り無調整。	
348－13 127	須恵器 埦CI	覆土内 ¾残存	口 12.6 底 6.8 高 4.8	黒色鉱物粒多 白色鉱物粒少	還元焔 硬質	灰白	轆轤整形(右回転？)。体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。高台は底部回転糸切り後の付高台。	
348－14 127	須恵器 埦CII	覆土内 ½残存	口 (12.0) 底 (6.0) 高 (5.0)	灰色砂粒少 黒色鉱物粒微	酸化焔 やや硬質	にぶい 橙	轆轤整形(右回転)。体部上半に張りを有し、口縁部は強く外反する。高台は付高台。底部切り離しは高台貼り付けに伴い撫で調整され不明。	
348－15 127	須恵器 埦CII	覆土内 ¾残存	口 (12.5) 底 (6.0) 高 (4.0)	小礫少 白色鉱物粒多 褐色粒多	酸化焔 硬質	にぶい 橙	轆轤整形(右回転)。体部中位に若干張りを有し、口縁部は強く外反する。高台は底部回転糸切り後の付高台。	
348－16 127	須恵器 埦CI	覆土内 ¾残存	口 (13.2) 底 — 高 (4.3)	黒色鉱物粒少 灰色砂粒多 褐色粒多	中性焔 やや硬質	灰白	轆轤整形(右回転)。体部下半にやや張りを有し、口縁部はわずかに外反する。高台は剝離しているが、底部回転糸切り後の付高台である。	
348－17 128	須恵器 埦CII	覆土内 ¼残存	口 (12.8) 底 (6.2) 高 4.8	白色鉱物粒多 黒色鉱物粒少 灰色砂粒多	中性焔 硬質	灰白	轆轤整形(右回転)。体部下端に若干張りを有し、口縁部は外反する。高台は底部回転糸切り後付高台。	
348－18 128	須恵器 埦 D	覆土内 完形	口 12.2 底 5.4 高 4.3	黒色鉱物粒微 白色鉱物粒少 砂粒少	中性焔 硬質	橙	轆轤整形(右回転)。体部から口縁部にかけ外反する。高台は底部回転糸切り後付高台。高台内面に回転の撫でを施し、角高台状にしている。	燻焼成。
349－1	須恵器 埦CII	覆土内 ¼残存	口 (13.0) 底 (5.6) 高 5.1	黒・白色鉱物 粒多 褐色粒少	還元焔 硬質	灰	轆轤整形(右回転)。底部回転糸切り後付高台。貼り付けは非常に雑で、１廻りしていない。	井戸中での鉄分付着。
349－2	須恵器 埦CII	覆土内 ¼残存	口 (13.0) 底 (7.0) 高 4.9	白色鉱物粒多 褐色粒多 小礫微	還元焔 硬質	明オリーブ灰	轆轤整形(右回転)。底部回転糸切り後付高台。貼り付けは雑。体部中位にわずかに張りを有し、口縁部が強く外反する。	
349－3	須恵器 埦CII	覆土内 ½残存	口 (13.0) 底 (6.4) 高 4.8	白・黒色鉱物 粒多 片礫少	還元焔 硬質	灰白	轆轤整形(右回転)。底部回転糸切り後付高台。貼り付けは雑。体部中位に張りを有し、口縁部が強く外反する。	
349－4 128	須恵器 埦CI	覆土内 ¾残存	口 (13.7) 底 (6.7) 高 4.4	黒・白色鉱物 粒多	中性焔 やや硬質	にぶい 黄橙	轆轤整形(右回転)。体部はほぼ直線的に開き、口縁部は外反しない。高台は底部回転糸切り後の付高台であるが剝離している。	
349－5 128	須恵器 埦CII	覆土内 ¾残存	口 (14.4) 底 — 高 (6.1)	小礫少 褐色粒少 白色鉱物粒微	中性焔 やや軟質	灰黄褐	轆轤整形(右回転？)。体部の張りはほとんど見られず、口縁部の外反も顕著ではない。高台は剝離しているが、底部切り離し後の付高台である。	

349—6 128	須恵器 埦E？	覆土内 ¼残存	口 (14.4) 底 (6.4) 高 5.8	白色鉱物粒多	還元焔 やや軟 質	褐灰	轆轤整形(右回転)。体部はほとんど張りをもたず直線的に強く外傾し、口縁部外反する。高台はやや長脚で底部切り離し後の付高台で貼り付けは丁寧。	
349—7 128	須恵器 埦CII	覆土内 ½残存	口 (16.3) 底 (8.7) 高 6.5	黒色鉱物粒微	中性焔 やや軟 質	灰白	轆轤整形(右回転)。体部は深く、中位にやや張りを有し、口縁部はわずかに外反する。高台は底部回転糸切り後の付高台で、高台に沿って底部を指先で強く押さえている。	
349—8	須恵器 埦	覆土内 破片	口 — 底 (10.6) 高 (2.4)	黒色鉱物粒少	還元焔 やや軟 質	淡黄	轆轤整形(右回転)。高台は底部からつまみ上げたような状態である。体部下半に回転篦削りを施す。	
349—9 128	土師質 埦	覆土内 ¼残存	口 (15.2) 底 (8.0) 高 6.5	黒色鉱物粒多 灰色砂粒多 褐色粒	酸化焔 硬質	浅黄橙	轆轤整形(右回転)。体部下端にわずかに張りを有し、口縁部はやや外反気味に開く。高台は底部回転糸切り後の付高台で、貼り付けは丁寧である。	
349—10	土師質 埦	覆土内 ¼残存	口 (14.0) 底 — 高 (4.1)	黒色鉱物粒多 褐色粒多	酸化焔 やや軟 質	浅黄橙	轆轤整形(右回転)。体部はやや内湾し、口縁部も外反しない。外面に轆轤目を明瞭に残し、内面は比較的丁寧な撫でを施す。	
349—11	黒色土器 埦	覆土内 ¼残存	口 (18.0) 底 — 高 (5.0)	白色鉱物粒多 褐色粒少	酸化焔 やや硬 質	淡黄	轆轤整形(？)。体部に丸味を有し、口縁部が強く外反する。内面上半横位、下半放射状磨き後黒色処理。	
349—12	土師質 埦	覆土内 破片	口 — 底 (11.0) 高 (2.9)	白色鉱物粒少	還元焔 やや軟 質	褐灰	轆轤整形(？)。底部回転糸切り後付高台。	足高高台
349—13	土師質 埦	覆土内 破片	口 — 底 (10.0) 高 (4.9)	白色鉱物粒微 褐色粒多 灰色砂粒少	酸化焔 硬質	黄橙	轆轤整形(？)。付高台。	足高高台
349—14	灰釉陶器 埦	覆土内 破片	口 — 底 (8.8) 高 (1.9)	美濃系？		灰白	轆轤成整形(？)。底部は回転糸切り後付高台。施釉は不明。	
349—15	灰釉陶器 埦	覆土内 破片	口 — 底 (8.0) 高 (2.1)	美濃系		灰白	轆轤成整形(？)。底部回転糸切り後付高台。施釉は不明。	
349—16	灰釉陶器 埦	覆土内 ¼残存	口 — 底 7.4 高 (3.2)	美濃系		灰白	轆轤成整形(右回転)。高台は付高台で比較的高い。体部下半に回転篦削りを施すが、高台貼り付けに伴う撫でで高台付近は曖昧である。	
349—17	灰釉陶器 埦	覆土内 ¼残存	口 — 底 (7.6) 高 (2.6)	美濃系		灰白	轆轤成整形(右回転)。底部は回転篦切り後付高台。施釉は漬け掛け。	
349—18	灰釉陶器 埦	覆土内 ¼残存	口 — 底 (6.6) 高 (2.3)	美濃系		灰白	轆轤成整形(右回転)。底部は回転篦切り後付高台。高台貼り付けに伴い全面撫でを施す。施釉は刷毛掛け？	
349—19	灰釉陶器 皿	覆土内 ¼残存	口 — 底 6.6 高 (1.4)	美濃系		灰白	轆轤成整形(右回転)。付高台。底部は撫でで施釉は漬け掛けである。	
350—1	灰釉陶器 埦	覆土内 ¼残存	口 (13.4) 底 (7.4) 高 (3.6)	美濃系		灰白	轆轤成整形(右回転)。付高台。体部に丸味を有し、口縁部わずかに外反する。底部撫でを施し、切り離し不明。施釉は刷毛掛け。	
350—2 128	灰釉陶器 埦	覆土内 ¾残存	口 (15.0) 底 (7.8) 高 4.7	美濃系		灰白	轆轤成整形(右回転)。体部下半に張りを有し、口縁部はわずかに外反する。高台は三日月高台で、体部下半及び底部回転篦削り後付高台。施釉は刷毛掛けと考えられる。	大原2
350—3 128	灰釉陶器 埦	覆土内 ¾残存	口 14.6 底 7.2 高 5.4	美濃系		灰白	轆轤成整形(右回転)。体部下半に強い張りを有し、口縁部は外反する。内面体部下半に段を有する。高台は、体部下半及び底部回転篦削り後付高台。施釉は漬け掛け。	丸石2
350—4	灰釉陶器 輪花埦	覆土内 ¼残存	口 (15.2) 底 (7.0) 高 4.5	美濃系		灰白	轆轤成整形(右回転)。底部付高台。底部切り離し不明。体部に丸味を有し、口縁部わずかに外反する。施釉は漬け掛け。	

350－5 128	灰釉陶器 埦	覆土内 ¼残存	口 (15.0) 底 (6.6) 高 4.9	美濃系		灰白	轆轤成整形(右回転)。底部回転篦切り後付高台。体部下半に張りを有し、口縁部はわずかに外反する。施釉は刷毛掛け。	底部に墨書「上？」
350－6	灰釉陶器 埦	覆土内 ¼残存	口 — 底 6.7 高 (2.5)	美濃系		灰白	轆轤成整形(右回転)。底部回転篦切り後付高台。施釉は漬け掛け。	外面にカーボン？付着。
350－7 128	灰釉陶器 皿	覆土内 ¾残存	口 (12.4) 底 (8.1) 高 2.3	美濃系		灰白	轆轤成整形(右回転)。体部はやや内湾気味で、口縁部がわずかに外反する。高台は底部回転篦削り後の付高台。内面に篦撫で状の痕跡がある。	丸石２
350－8 128	灰釉陶器 皿	覆土内 ¾残存	口 (12.8) 底 (6.9) 高 2.5	美濃系		灰白	轆轤成整形(右回転)。体部はやや内湾気味で、口縁部はわずかに外反する。高台は底部回転篦削り後の付高台。施釉は漬け掛け？	
350－9	灰釉陶器 輪花皿	覆土内 ½残存	口 (12.0) 底 (7.0) 高 2.3	美濃系		灰白	轆轤成整形(右回転)。体部にわずかに丸味を有し、口縁部外反する。底部は回転篦切り後付高台。施釉は刷毛掛け。	
350－10	灰釉陶器 輪花皿	覆土内 完形	口 14.6 底 6.8 高 3.0	美濃系		灰白	轆轤成整形(右回転)。体部は丸味をもって立ち上がり、口縁部は外反しない。体部下端は回転篦削り、高台は底部回転篦切り後の付高台。輪花は４単位。施釉は漬け掛け。	内面に重ね焼痕あり。 大原２
350－11	灰釉陶器 皿	覆土内 ¼残存	口 (11.6) 底 — 高 (1.8)	美濃系		灰白	轆轤成整形(右回転)。体部にやや丸味を有し、口縁部がわずかに外反する。施釉は刷毛掛けで、内面が特に厚い。	
350－12 128	灰釉陶器 皿	覆土内 ½残存	口 (13.1) 底 (7.8) 高 2.3	美濃系		灰白	轆轤成整形(右回転)。体部はやや内湾気味で口縁部外反する。高台は底部回転篦削り後の付高台。施釉は漬け掛け？	虎渓山１
350－13	灰釉陶器 皿	覆土内 ¼残存	口 (18.0) 底 (7.4) 高 2.8	猿投系？		灰白	轆轤成整形(右回転)。体部やや内湾気味に立ち上がり、底部付高台。体部下半に２段の回転篦削りを施す。施釉は漬け掛け。	
350－14	土師器 甕	覆土内 ¼残存	口 — 底 (6.9) 高 (7.5)	白色鉱物粒多 灰白色シルト 褐色粒少	酸化焔 やや軟 質	橙	底部がやや突出し、胴部下半にわずかに張りを有する。外面縦位篦削り(下→上)、内面撫で。	
350－15 128	須恵器 短頸壺	覆土内 ¾残存	口 — 底 — 高 (6.7)	白色鉱物粒多	還元焔 硬質	灰	轆轤整形(左回転)。丸底で胴部上半に最大径を有する。底部は７段の回転篦削りを施す。内面と外面肩部に自然釉がかかる。	
350－16	須恵器 壺	覆土内 ¼残存	口 — 底 — 高 (13.8)	白色鉱物粒多 褐色粒少	還元焔 硬質	灰	胴部中位に強い張りを有し、肩部に把手がつく。胴部と頸部の接合痕は内面に特に顕著である。	内面にカーボン付着。
351－1 128	須恵器 甕	覆土内 破片	口 (41.7) 底 — 高 (14.4)	白色鉱物粒多	還元焔 硬質	オリーブ黒	紐作り。頸部は胴部から「く」字状に外反し、口縁部は段を有し短く直立する。胴部内外面に当具、叩き具共に痕跡は見られない。外面に薄く自然釉がかかる。	断面はセピア色。
351－2	須恵器 甕	覆土内 破片	口 — 底 — 高 —	白色鉱物粒多	還元焔 やや硬 質	灰	外面に波状文を施す。（６本単位の櫛状工具）	厚 1.3
351－3	須恵器 瓶？	覆土内 破片	口 — 底 — 高 —	白・黒色鉱物 粒少 褐色粒微	還元焔 やや軟 質	灰	紐作り。胴部の丸味が強い。器形不明。	厚 1.0
351－4 128	灰釉陶器 瓶	覆土内 ¼残存	口 — 底 (15.4) 高 (18.0)	美濃系		灰オリーブ	紐作り轆轤整形(？)。胴部下半は回転篦削りを施す。高台は幅広で付高台である。釉は胴部下半にまで及んでいる。	
351－5	灰釉陶器 瓶	覆土内 ¼残存	口 — 底 — 高 (7.9)	美濃系		灰白	紐作り轆轤整形(？)。肩に丸味を有する。施釉は刷毛掛け。	
351－6	須恵系 羽釜C	覆土内 破片	口 (19.8) 底 — 高 (4.6)	白色鉱物粒多 褐色粒微 黒色鉱物粒少	還元焔 やや硬 質	灰	紐作り轆轤整形(？)。口縁部はやや内傾し、口唇部は平坦で内面に若干突出する。	
351－7	須恵系 羽釜C	覆土内 破片	口 (21.0) 底 — 高 (5.5)	白色鉱物粒多 黒色鉱物粒少 小礫微	還元焔 やや硬 質	黒褐	紐作り轆轤整形(？)。胴部上位に張りを有し、口縁部は内湾する。口唇部は平坦で水平である。	

352－1	須恵系 羽釜C	覆土内 破片	口 (26.0) 底 — 高 (9.0)	白色鉱物粒多 小礫微 黒色鉱物粒少	還元焔 硬質	黄灰	紐作り轆轤整形(右回転)。鍔貼り付け部に胴部最大径を有し、胴部に張りをほとんどもたない。口縁部は直立し、口唇部に窪みを有する。	
352－2	須恵系 羽釜C	覆土内 破片	口 (22.2) 底 — 高 (7.7)	褐色粒少 白色鉱物粒少 砂粒少	酸化焔 硬質	にぶい 橙	紐作り轆轤整形(？)	
352－3	須恵系 羽釜B	覆土内 破片	口 (20.4) 底 — 高 (6.3)	白色鉱物粒多 褐色粒微	中性焔 硬質	暗褐	紐作り轆轤整形(？)。胴部上半に強い張りを有し、口縁部内傾する。口唇部は外に突出し、平坦で内傾する。	外面に厚くカーボン付着。
352－4	須恵系 羽釜B	覆土内 破片	口 (20.6) 底 — 高 (6.6)	白色鉱物粒多 黒色鉱物粒少 灰色砂粒多	還元焔 硬質	灰	紐作り轆轤整形(？)。胴部上半に張りを有し、口縁部は内傾する。口唇部は平坦で内傾する。	
352－5	須恵質 不明	覆土内 破片	口 — 底 — 高 —	褐色粒少	還元焔 硬質	黄灰	轆轤整形(？)。下半縦位篦削り。側面に面取りされた部分があり、この部分が窓状になるのか、この部分が端部になるのか不明。	中世以降の遺物か 厚 1.5
352－6 128	石製品 砥石	覆土内 ¾残存	長 (11.9) 幅 6.9 厚 2.3	流紋岩 (砥沢)			側面の一面を除き他は剝離面で、使用された痕跡はない。使用面と思われる側面も、使用面なのか原石面なのか区別はつけがたい。	重 205.2
352－7 128	石器 敲石	覆土内 ½残存	長 (8.4) 幅 6.1 厚 3.8	変質安山岩			上下両端共に截断されているが、上端の截断面及び縁辺が磨滅しているのに対し、下端の截断面はシャープであり、使用部は上端の截断面であったことがわかる。	重 373.2
352－8 128	石器 薦編み石	覆土内 完形	長 16.6 幅 5.6 厚 3.2	ひん岩			上下両端部の器面が粗れているが、使用痕であるかは不明。	重 526.9
352－9 128	石器 不明	覆土内 完形	長 7.5 幅 5.1 厚 2.6	流紋岩			使用痕は不明。	重 146.8
352－10 128	石器 不明	覆土内 完形	長 8.3 幅 5.3 厚 4.6	粗粒安山岩			明瞭な使用痕は不明。	重 302.7
353－1 129	瓦 宇瓦	覆土内 ¼残存	幅 — 高 4.0 反 —	白色鉱物粒多 砂粒少	還元焔 硬質	灰白	一枚作り。凸面縄叩き。側部面取り1面。右扁行唐草文。	厚 2.7
353－2 129	瓦 女瓦	覆土内 ½残存	厚 2.0	白色鉱物粒多 黒色鉱物粒微	還元焔 硬質	灰	桶巻き作り。凹面に粘土板糸切り痕、側部面取り1面。篦描き文字瓦「大」(凸面)。	
353－3 129	瓦 女瓦	覆土内 破片	厚 2.0	白色鉱物粒多 灰色砂粒微 シルト粒少 片岩微	還元焔 硬質	灰	一枚作り？篦描き文字瓦「大」(凸面)。	
353－4 129	瓦 女瓦	覆土内 破片	厚 2.0	白色鉱物粒少 褐色粒少 黒色鉱物粒微	還元焔 硬質	灰	一枚作り。側部面取り3面。凹面布目やや粗い。凸面全面撫でで、篦描き文字瓦「辛葛？」(凸面)。	
353－5 129	瓦 女瓦？	覆土内 破片	厚 2.7	白色鉱物粒多 黒色鉱物粒微 灰白色シルト	還元焔 やや軟 質	灰白	一枚作り？凹面布目は粗い。凸面は撫で。篦描き文字瓦「大八」(凸面)。	
353－6 129	瓦 女瓦	覆土内 破片	厚 2.9	白色鉱物粒多 褐色粒少 黒色鉱物粒微	還元焔 硬質	灰	一枚作り。凹面粘土板糸切り痕あり。篦描き文字瓦「辛子三」(凸面)。	
353－7 129	瓦 女瓦	覆土内 破片	厚 1.9	白色鉱物粒少	中性焔 やや軟 質	灰	一枚作り？凹面布目横位の撫で。篦描き文字瓦「高」(凹面)。	
354－1 129	瓦 女瓦	覆土内 破片	厚 2.5	白色鉱物粒多 褐色粒少 砂粒微	中性焔 硬質	灰	一枚作り。側部面取り1面。凸面縦位撫で。篦描き文字瓦「木」(凸面)。凹面布目は粗い。	
354－2 129	瓦 女瓦	覆土内 破片	厚 2.7	白色鉱物粒多 片岩少	還元焔 硬質	にぶい 褐	一枚作り？篦描き文字瓦、文字不明(凸面)。	
354－3 129	瓦 男瓦	覆土内 ¼残存	厚 1.8	黄灰色シルト 粒少 白色砂粒少 白色鉱物粒多 褐色粒少	中性焔 やや軟 質	灰白	一枚作り。篦描き文字瓦「王」(凹面)。側部面取り1面。	

354－4 130	瓦 女　瓦	覆土内 ¼残存	厚　2.5	褐色粒多 黒・白色鉱物粒少	中性焔 硬質	灰	一枚作り。凸面縦位撫で。篦描き文字、文字不明(凸面)。凹面側部内面に巾広の篦削りを施す。側部面取り２面。	
354－5 129	瓦 女　瓦	覆土内 ¼残存	厚　3.0	白色鉱物粒微 褐色粒微	中性焔 やや軟質	橙	一枚作り。凹面粘土板糸切り痕あり。端部は凸面側に突出し、宇瓦状を呈する。凹面の布目は粗く縦位に撫でられている。凸面縦位撫で。篦描き文字瓦、文字不明(凸面)。側部面取り１面。	
354－6 130	瓦 女　瓦	覆土内 破片	厚　2.2	白色鉱物粒多	還元焔 硬質	灰	一枚作り。凹面粘土板糸切り痕あり。凸面は縦位の撫でを施し、篦描き文字瓦「三」(凸面)。側部面取り３面。	
354－7 130	瓦 女　瓦	覆土内 ¼残存	厚　2.2	白色鉱物粒多	還元焔 硬質	暗青灰	一枚作り。凸面縄叩き。凹面布目を縦位に撫で消し、篦描き文字瓦「二」(凹面)。燻焼成。側部面取り２面。	
354－8 130	瓦 女　瓦	覆土内 破片	厚　2.4	赤褐色粒多 白色鉱物粒少	中性焔 やや軟質	にぶい橙	一枚作り？凹面粘土板糸切り痕あり。 刻印文字瓦「山田」(凸面)。	
355－1 129	瓦 女　瓦	覆土内 ¼残存	厚　2.3	白色鉱物粒多 黄灰色シルト粒少	還元焔 やや軟質	にぶい橙	凹面布目細かく、模骨痕が見られる。凸面撫で。刻印文字瓦「勢」(凸面)。凸面不整格子叩き。側部面取り１面。	
355－2 130	瓦 女　瓦	覆土内 破片	厚　1.6	白色鉱物粒多 黒色鉱物粒少	還元焔 硬質	灰	一枚作り？凸面不整格子叩き。刻印文字瓦「勢」(凸面)。	
355－3 130	瓦 女　瓦	覆土内 破片	厚　2.8	褐色粒多 白色鉱物粒少 黒色鉱物粒微	中性焔 硬質	明赤褐	一枚作り。両面に粘土板糸切り痕あり。刻印文字瓦「山田？」(凸面)。側部面取り２面。	
355－4 130	瓦 男　瓦	覆土内 破片	厚　2.1	白色鉱物粒多 褐色粒多 シルト粒多	中性焔 やや硬質	灰褐	一枚作り。両面撫で。刻印文字瓦「○」(凸面)。側部面取り２面。	
355－5 130	瓦 女　瓦	覆土内 ¼残存	厚　2.4	白色鉱物粒多	還元焔 硬質	黄灰	一枚作り。凹面粘土板糸切り痕あり。凸面正格子叩き。カマド２次使用後のものか凹面の一部に熱を受けた痕跡がある。側部面取り２面。	
355－6 130	瓦 女　瓦	覆土内 破片	厚　1.8	白色鉱物粒微 砂粒微	還元焔 硬質	灰白	一枚作り。凹面粘土板糸切り痕あり。凸面正格子叩き。凹面は雑な撫でを施す。	
355－7 130	瓦 女　瓦	覆土内 ¼残存	厚　1.9	白色鉱物粒多 黒色鉱物粒少	還元焔 やや硬質	褐灰	一枚作り。両面に粘土板糸切り痕あり。凸面正格子叩き。凹面わずかに撫でが見られる。	
355－8	瓦 女　瓦	覆土内 破片	厚　1.7	褐・黒・白色粒少	中性焔 硬質	黒褐	一枚作り。凸面粘土板糸切り痕あり。凸面正格子叩き。燻焼成に近い感じ。凹面篦等による横位撫でにより、布目は大半が消されている。	
356－1 130	瓦 女　瓦	覆土内 ¼残存	厚　1.5	黒色鉱物粒少 白色鉱物粒微 灰白色シルト	還元焔 硬質	灰	一枚作り。両面に粘土板糸切り痕あり。凸面正格子叩き。凹面にわずかに撫でが見られる。	
356－2	瓦 女　瓦	覆土内 破片	厚　2.5	白色鉱物粒多 褐色粒微 黒色鉱物粒少	中性焔 軟質	褐	一枚作り。凸面斜格子叩き？	
356－3 130	瓦 女　瓦	覆土内 破片	厚　2.0	褐色粒少 白色鉱物粒少	還元焔 やや軟質	灰	一枚作り。凸面斜格子叩き？凹面は、横位の撫でにより布目の大半は消されている。	
356－4	瓦 女　瓦	覆土内 破片	厚　2.0	黒色鉱物粒少 白色鉱物粒微 赤褐色粒微	還元焔 硬質	灰	一枚作り。凹面粘土板糸切り痕あり。凸面斜格子叩き。凹面は粗い撫でにより部分的に布目が消されている。側部付近の篦削りは撫で後。	
356－5 131	瓦 女　瓦	覆土内 ½残存	広　－ 狭　23.6 長　－	白色鉱物粒少 褐色粒少 砂粒微	還元焔 硬質	灰	一枚作り。凹面は横位撫でを施し、布目を粗く消している。凸面には斜格子叩きの他、平行叩き状の叩き具面の痕跡を残している。側部面取り１面。	反　5.1 厚　1.9
356－6 131	瓦 女　瓦	覆土内 ½残存	厚　1.9	白色鉱物粒多 黒色鉱物粒少	還元焔 硬質	灰	一枚作り。両面粘土板糸切り痕あり。凸面斜格子叩き。凹面の布目はやや粗い撫でによって消されている。側部面取り２面。	

356—7	瓦 女　瓦	覆土内 破片	厚　1.4	白色鉱物粒微 黒色鉱物粒少	還元焔 硬質	黄灰	一枚作り。凸面粘土板糸切り痕あり。凸面斜格子叩き。凹面は縦位の粗い撫でによって、布目は擦消されている。側部面取り2面。	
357—1	瓦 女　瓦	覆土内 ¼残存	厚　1.7	褐色粒少 白・黒色鉱物粒少	還元焔 やや軟質	灰	一枚作り。凸面斜格子叩き。凹面は横位の撫でにより布目の大半は消されている。端部及び側部付近は、この撫で後に箆削りされている。側部面取り1面。	
357—2	瓦 女　瓦	覆土内 破片	厚　1.7	白色鉱物粒多	還元焔 硬質	灰	一枚作り。凸面斜格子叩き。側部面取り1面。	
357—3 131	瓦 女　瓦	覆土内 ¼残存	厚　2.2	白色鉱物粒多 褐色粒少	還元焔 やや軟質	灰	一枚作り。凹面粘土板糸切り痕あり。凸面斜格子叩き。	
357—4 131	瓦 女　瓦	覆土内 破片	厚　1.6	白色鉱物粒多 黒色鉱物粒微	還元焔 硬質	灰	一枚作り。凸面斜格子叩き。凹面は粗い撫でにより、部分的に布目が消されている。側部面取り1面。	
357—5 131	瓦 女　瓦	覆土内 ¼残存	厚　1.8	褐色粒少 白色鉱物粒少	還元焔 やや硬質	にぶい 黄橙	一枚作り。凸面粘土板糸切り痕あり。凸面斜格子叩き。凹面部分的に強い撫でが施され、布目が擦消されている。側部面取り1面。	
357—6 131	瓦 女　瓦	覆土内 破片	厚　1.7	褐色粒微 黄灰色シルト	還元焔 硬質	灰	一枚作り。凹面粘土板糸切り痕あり。凸面正格子叩き。	
357—7	瓦 女　瓦	覆土内 破片	厚　2.4	白色鉱物粒多	還元焔 硬質	オリーブ黒	一枚作り。凸面斜格子叩き。凹面は横位の撫でにより、布目の大半が消されている。側部面取り2面。	
357—8	瓦 女　瓦	覆土内 破片	厚　2.5	灰色砂粒少	還元焔 やや軟質	黄灰	一枚作り。凹面粘土板糸切り痕あり。凸面不整格子叩き？凹面は非常に雑な撫でが見られる。側部面取り2面。	
358—1 131	瓦 女　瓦	覆土内 ¼残存	厚　2.2	白色鉱物粒多 褐色粒多	中性焔 硬質	灰黄褐	一枚作り。凸面条痕状の叩き目。両面とも器面の調整が雑。側部面取り2面。	
358—2	瓦 女　瓦	覆土内 破片	厚　1.5	黒色鉱物粒微 褐色粒微 白色鉱物粒少	還元焔 硬質	黄灰	一枚作り。凹面粘土板糸切り痕あり。凹面布目粗く、わずかに撫でられた痕跡あり。凸面叩き具の痕跡がある。また、一部に布目が見られる。側部面取り2面。	
358—3	瓦 男　瓦	覆土内 ¼残存	厚　2.2	白色鉱物粒少 灰色砂粒多	還元焔 硬質	黄灰	一枚作り。凸面平行叩き？凹面の布目は非常に粗い。凸面の叩きは浅い平行叩き状を呈する。側部面取り1面。	
358—4	瓦 女　瓦	覆土内 破片	厚　1.8	褐色粒少 黒色鉱物粒少 黄灰色シルト	還元焔 やや軟質	灰	一枚作り。凸面縄叩き部に離型剤と思われる砂粒が多量に付着している。	
358—5	瓦 女　瓦	覆土内 破片	厚　2.4	黒色細粒少	還元焔 やや軟質	灰	一枚作り。凹面粘土板糸切り痕あり。凸面縄叩き部分に離型剤と思われる砂が多量に付着している。側部面取り1面。	
358—6	瓦 女　瓦	覆土内 ¼残存	厚　2.0	黄灰色シルト粒多、小礫微 黒色鉱物粒少	還元焔 硬質	灰褐	一枚作り。凸面縄叩き。側部面取り2面。	
358—7	瓦 女　瓦	覆土内 破片	厚　2.4	黒色鉱物粒多	還元焔 硬質	灰	一枚作り。凸面縄叩き部に離型剤と思われる砂粒が多量に付着している。側部面取り3面。	
358—8	瓦 女　瓦	覆土内 破片	厚　1.6	黒色鉱物粒微 褐色粒多	還元焔 硬質	灰	一枚作り。両面粘土板糸切り痕あり。凸面縄叩き部分に離型剤の砂粒が多数付着している。側部面取り2面。	
358—9 131	瓦 女　瓦	覆土内 ½残存	厚　2.2	黒色粒多 灰色砂粒少	還元焔 やや硬質	灰白	一枚作り。凹面粘土板糸切り痕あり。凸面は密に縄叩きされ、離型剤と見られる砂粒が多量に付着している。また、部分的に撫でられ縄叩きの目がつぶれている。	
359—1 131	瓦 女　瓦	覆土内 ½残存	厚　1.7	赤褐色粒微 白色鉱物粒少	還元焔 やや軟質	灰	一枚作り？凹面粘土板糸切り痕あり。凸面は縄叩き後粗く撫で消す。凹面部分的にわずかに布目が撫で消されている。凸面広端部はわずかに厚みが増している。側部面取り2面。	
359—2	瓦 女　瓦	覆土内 破片	厚　2.0	黒色粒少 砂粒微	還元焔 硬質	灰	一枚作り。凹面粘土板糸切り痕あり。凸面縄叩きの部分に離型剤と見られる砂粒が、多量に付着している。側部面取り2面。	
359—3	瓦 女　瓦	覆土内 破片	厚　2.9	黒色鉱物粒多	還元焔 硬質	灰白	一枚作り？凹面粘土板糸切り痕あり。凸面に比較的厚く自然釉がかかる。凸面縄叩き。凹面布目の擦消し。	

359－4	瓦 女　瓦	覆土内 破片	厚　2.5	黒色鉱物粒多	還元焔 硬質	灰	一枚作り。凸面縄叩き。側部面取り2面。	
359－5 132	瓦 女　瓦	覆土内 破片	厚　2.1	黒色鉱物粒多	還元焔 硬質	灰白	一枚作り。凸面の縄叩きの部分に離型剤と思われる砂粒多量に付着。側部面取り3面。	
359－6	瓦 女　瓦	覆土内 破片	厚　1.8	褐色粒少 白色鉱物粒少	還元焔 硬質	灰	一枚作り。凸面端部付近横、以外縦の縄叩きで、表面に細粒砂(離型用か？)が多量に付着している。側部面取り1面。	
359－7	瓦 女　瓦	覆土内 破片	厚　2.4	灰色粒少 黒色粒多	還元焔 やや軟質	灰	一枚作り。凸面縄叩き部に離型剤と思われる砂粒が多量に付着している。凹面布目の擦消し。	
359－8	瓦 女　瓦	覆土内 ¼残存	厚　2.2	褐色粒少 白色細粒少 灰色シルト粒	還元焔 硬質	灰	一枚作り。凸面縄叩きの部分に離型剤と見られる砂が多量に付着している。側部面取り2面。	
359－9	瓦 女　瓦	覆土内 破片	厚　1.7	白色鉱物粒少	還元焔 硬質	灰	一枚作り。凸面縄叩き部に離型剤と思われる砂粒が多量に付着している。	
360－1	瓦 女　瓦	覆土内 破片	厚　1.9	黒・白色鉱物粒少	還元焔 硬質	灰	凹面模骨痕が顕著。凸面は縄叩きが粗い撫でにより部分的に消されている。側部面取り2面。	
360－2	瓦 女　瓦	覆土内 破片	厚　1.5	黒色鉱物粒少 白・灰色粒少	還元焔 硬質	灰	一枚作り。凹面粘土板糸切り痕あり。凸面縄叩き部に離型剤と思われる砂粒が多量に付着している。	
360－3	瓦 女　瓦	覆土内 破片	厚　1.7	黒色鉱物粒多	還元焔 硬質	灰	一枚作り。凹面粘土板糸切り痕あり。凸面縄叩き部に離型剤と見られる砂粒が多量に付着している。側端部は2面の面取りがされているが、中間に削りの施されない部分があり、そこに布目の痕跡が残っている。一枚作りのためか？	
360－4 132	瓦 女　瓦	覆土内 破片	厚　1.5	白色鉱物粒微 黒色鉱物粒少	還元焔 硬質	灰	一枚作り。凸面縄叩き部に離型剤と思われる砂粒が多量に付着している。	
360－5	瓦 女　瓦	覆土内 ¼残存	厚　2.1	黒色粒多	還元焔 硬質	灰	一枚作り。凹面粘土板糸切り痕あり。凸面の縄叩きの部分に離型剤と見られる砂粒が多量に付着している。側部面取り2面。	
360－6 132	瓦 女　瓦	覆土内 破片	厚　2.0	灰色粒多 灰黄色シルト粒多	還元焔 硬質	灰	一枚作り。凸面縄叩き部に離型剤と見られる砂粒が多量に付着している。	
360－7	瓦 女　瓦	覆土内 破片	厚　1.4	白色鉱物粒微	還元焔 硬質	灰	凹面は縦位の撫でによって布目の大半が消され、その後2面側部の面取りを行っている。凸面縄叩き。	
360－8	瓦 女　瓦	覆土内 破片	厚　1.9	黒色鉱物粒多 白色鉱物粒少	還元焔 硬質	灰	一枚作り。凹面粘土板糸切り痕あり。凸面縄叩き部に離型剤と思われる砂粒が多量に付着している。	
360－9 132	瓦 女　瓦	覆土内 ¼残存	広　－ 狭　(24.5) 長　－	白色鉱物粒多 黒色鉱物粒微	還元焔 やや硬質	にぶい 黄橙	一枚作り。凹面は全面縦位の撫でにより布目は完全に消されている。凸面は粗い縄叩き。側部面取り2面。	反　6.0 厚　2.0
361－1	瓦 女　瓦	覆土内 ½残存	広　－ 狭　17.9 長　－	黒色鉱物粒微 片岩多 褐色粒少	還元焔 やや軟質	灰白	凹面模骨痕を明瞭に残す。凸面は縄叩き後全面撫で。部分的に凹面の布目と同様の布目圧痕が認められる。側部面取り3面。	反　4.1 厚　1.7
361－2	瓦 女　瓦	覆土内 ¼残存	厚　1.8	白色鉱物粒多 黒色鉱物粒少 褐色粒微	還元焔 硬質	灰	一枚作り。凹面粘土板糸切り痕あり。凹面布目は横位の粗い撫でにより部分的に消されている。側部面取り2面。	
361－3	瓦 女　瓦	覆土内 破片	厚　2.3	白色鉱物粒少	中性焔 硬質	にぶい 橙	凹面粘土板糸切り痕あり。凹面に模骨痕を粗く残し、布目は粗い指撫でによって一部撫で消されている。凸面は横位の撫でが施され、縄叩きの一部が消されている。側部面取り2面。	
361－4	瓦 女　瓦	覆土内 ¼残存	厚　1.5	白色鉱物粒少 片岩微	還元焔 やや軟質	灰	凹面粘土板糸切り痕あり。凹面にわずかに模骨痕と思われる痕跡を残す。凸面は縄叩き後特に端部付近に強く横位撫でを施す。側部面取り2面。	
361－5	瓦 女　瓦	覆土内 破片	厚　2.7	白色鉱物粒少 褐色砂粒少	還元焔 やや硬質	灰	一枚作り。凹面粘土板糸切り痕あり。凸面縄叩き。側部面取り2面。	

361－6	瓦 女　瓦	覆土内 ¼残存	厚　1.9	褐色粒少 白色鉱物粒少	還元焔 やや硬質	灰	一枚作り。凸面縦位撫で後縄叩き。凸面縦位に布目を粗く撫で消す。側部面取り2面。	
361－7	瓦 女　瓦	覆土内 ¼残存	厚　1.2	白色鉱物粒少 片岩微 黒色粒少	還元焔 やや軟質	明褐灰	凹面粘土板糸切り痕あり。凹面に模骨痕を残し、2次的に熱を受けた様な状態を呈する。凸面は縄叩き後横位に粗い撫でを施す。側部面取り3面。	
362－1	瓦 女　瓦	覆土内 破片	厚　2.1	黒・白色鉱物 粒少	還元焔 やや軟質	灰	一枚作り。凸面粘土板糸切り痕あり。凹面は縦位の撫でにより、布目は完全に消されている。凸面縄叩き。	
362－2	瓦 女　瓦	覆土内 破片	厚　2.1	白色鉱物粒少 黒色鉱物粒微	還元焔 硬質	灰褐	一枚作り。凹面は縦位撫でがされ、布目の大半は擦消されている。凹面の大半及び断面は2次的な加熱を受けたように変色している。凸面縄叩き。	
362－3	瓦 女　瓦	覆土内 ¼残存	厚　2.0	白色鉱物細粒 褐色粒少	中性焔 硬質	灰	一枚作り。凹面は横位の雑な撫でにより布目が消されている。凸面縄叩き。側部面取り2面。	
362－4	瓦 女　瓦	覆土内 ¼残存	厚　1.6	白色鉱物粒多 赤褐色粒少	還元焔 硬質	褐灰	一枚作り。凹面は縦位の粗い撫でにより布目の大半が消されている。側部の面取りは撫で後で、2面。凸面縄叩き。	
362－5	瓦 男　瓦	覆土内 ¼残存	厚　2.1	白色鉱物粒多	還元焔 硬質	灰	一枚作り。凹面粘土板糸切り痕あり。凸面は縦位縄叩き後、全面に縦位の粗い撫でを施し叩き痕を消している。側部面取り3面。	
362－6	瓦 女　瓦	覆土内 破片	厚　2.4	白色鉱物粒少 黒色粒微	還元焔 やや軟質	灰	一枚作り？凹面は篦状工具により縦位に強く撫でられ、模骨痕状を呈している。凸面も布の圧痕及び縄叩きがある。側部面取り2面。	
362－7 I32	瓦 女　瓦	覆土内 ½残存	厚　1.9	白色鉱物粒少 赤褐色粒少	還元焔 やや軟質	灰	一枚作り。凹面布目を横位に撫で消し、さらに間隔をおいて縦位に指撫でを施す。側部の面取りは撫で後。凸面は撫で後「ハ」字状に縄叩き。凸面にも部分的に布目痕が残る。側部面取り2面。	
363－1	瓦 女　瓦	覆土内 ¼残存	厚　2.6	白色鉱物粒多 褐色粒少	還元焔 硬質	灰	一枚作り。凹面端部に篦削りを施す。凸面「ハ」字状に縄叩き。側部面取り2面。	
363－2	瓦 女　瓦	覆土内 破片	厚　1.5	白色鉱物粒少 灰色粒多	還元焔 やや硬質	灰黄	一枚作り。凹面は横位の撫でにより、布目は完全に消されている。凸面縄叩き。側部面取り2面。	
363－3	瓦 男　瓦	覆土内 破片	厚　1.8	白色鉱物粒多 黒色鉱物粒少 片岩粒微	還元焔 やや軟質	灰	一枚作り。凹面の布目は非常に粗い。凸面の一部に朱塗りの痕跡あり。側部面取り2面。	
363－4	瓦 女　瓦	覆土内 ½残存	厚　1.8	白色鉱物粒多 褐色粒多	中性焔 やや硬質	灰	一枚作り。凹面粘土板糸切り痕あり。凸面は全面縦位撫でを施す。側部面取り3面。	凹面カーボン付着
364－1	瓦 女　瓦	覆土内 破片	厚　2.2	白色鉱物粒多 灰白色シルト	中性焔 硬質	にぶい 赤褐	一枚作り。凹面粘土板糸切り痕あり。凸面は全面に縦位の撫でが施されている。凹面及び断面の一部は2次焼成によるものか、変色とカーボンの付着が見られる。	
364－2	瓦 女　瓦	覆土内 破片	厚　2.0	白色鉱物粒多 褐色粒微	還元焔 やや硬質	灰褐	一枚作り。凸面全面撫で、凹面中央部に2次焼成のためか、変色とカーボンの付着が見られる。	
364－3	瓦 女　瓦	覆土内 破片	厚　2.5	白色細粒多 褐色粒微	還元焔 硬質	褐灰	一枚作り。凹面粘土板糸切り痕あり。凹面は粗い撫でによって布目が消されている。凸面は全面比較的丁寧な撫でがなされている。凹面の一部は2次焼成を受けたものか、変色とカーボンの付着が認められる。	
364－4	瓦 女　瓦	覆土内 破片	厚　1.7	砂粒少 褐色粒微	還元焔 やや硬質	褐灰	一枚作り。両面粘土板糸切り痕あり。凸面燻焼成のような色調、凹面の一部はカーボンの付着が見られ、2次的に加熱を受けたものと思われる。側部面取り2面。	
364－5	瓦 女　瓦	覆土内 破片	厚　2.4	白色鉱物粒少 褐色粒微	中性焔 硬質	明褐灰	一枚作り。凹面中央に2次焼成のためか、変色と厚いカーボンの付着が見られる。凸面は縦位の撫でが施されているが、縄叩きと思われる痕跡が認められる。	

364－6	瓦 男　瓦	覆土内 破片	厚　2.2	白・黒色鉱物粒少 片岩微	還元焔 硬質	黄灰	一枚作り。凹面中央部に2次焼成のためかカーボンの付着が認められる。凸面は全面撫で後部分的に篦削りがされている。側部面取り2面。	
365－1 132	瓦 女　瓦	覆土内 ½残存	厚　1.4	白色鉱物粒少 黒色鉱物粒多	還元焔 硬質	灰	紐作り。凹面横位に強く撫でを施し、端部付近に削りを施す。凸面も縦横の撫でを施している。側部面取り2面。	
365－2	瓦 女　瓦	覆土内 ¼残存	厚　3.0	白色鉱物粒少 砂粒少	還元焔 やや硬質	灰	一枚作り。凹面粘土板糸切り痕あり。凸面は平行叩き状の痕跡を残し、側部付近及び中央部は縦位の篦削りを施す。側部面取り4面。	
365－3	瓦 女　瓦	覆土内 ¼残存	厚　2.2	白色鉱物粒多 片岩微 黒色鉱物粒微 褐色粒微	中性焔 硬質	灰赤	一枚作り。凹面粘土板糸切り痕あり。凸面は篦状工具の縦位撫でが施されている。凹面は2次焼成によるものか変色が見られる。側部面取り2面。	
365－4	瓦 女　瓦	覆土内 破片	厚　2.2	白色鉱物粒多 褐色粒少	還元焔 軟質	褐灰	一枚作り。凸面全面撫で。側部面取り1面。	
365－5	瓦 玉縁付 男　瓦	覆土内 破片	厚　2.5	白色鉱物粒少 片岩微 黒色鉱物粒微	還元焔 硬質	灰	一枚作り？玉縁付男瓦で、凸面は縄叩き後粗く撫で消す。	
365－6 132	瓦 男　瓦	覆土内 破片	厚　1.5	白・黒色鉱物粒少	中性焔 やや硬質	灰白	凸面に模骨痕あり。凸面は横位の強い撫でを施す。凹面に布の合せ目あり。側部面取り1面。	
365－7	瓦 男　瓦	覆土内 破片	厚　2.0	白色鉱物粒多	還元焔 やや硬質	灰赤	一枚作り。凸面は縦位の撫でを施す。側部面取り3面？	
366－1	瓦 男　瓦	覆土内 ½残存	厚　2.0	白色鉱物粒多 片岩微	還元焔 硬質	灰	桶巻き作り。凹面粘土板糸切り痕あり。凸面の表面に若干自然釉あり、発泡気味。側部面取り2面。	
366－2	瓦 男　瓦	覆土内 破片	厚　1.8	白色鉱物粒少 シルト粒	還元焔 硬質	灰	一枚作り。側部面取り2面。	
366－3	瓦 男　瓦	覆土内 破片	厚　2.0	赤褐色粒少 白色細粒微	中性焔 やや軟質	にぶい褐	一枚作り。凸面は横位の篦削りを施す。側部面取り1面。	

H区溝状遺構

挿図番号 図版番号	種　別 器　種	出土位置 遺存状態	度目（cm） 量目（g）	胎　土	焼　成	色　調	器形・技法等の特徴	備　考
368－1	土師器 坏BIV	2溝 覆土内 ¼残存	口　(11.2) 底　— 高　(2.6)	黒色鉱物粒多 白色鉱物粒微	酸化焔 軟質	明赤褐	底部浅い丸底で、体部内湾し口縁部直立する。底部篦削り、口縁部横撫でで、間に調整の曖昧な部分がある。	
368－2	土師器 坏BIV	2溝 覆土内 ¼残存	口　(11.9) 底　— 高　(3.2)	白色鉱物粒微 黒色鉱物粒少	酸化焔 軟質	橙	底部丸底で口縁部は内湾する。底部～体部篦削り、口縁部は横撫でを施し、間に調整の曖昧な部分がある。	
368－3	土師器 坏BIV	2溝 覆土内 破片	口　(14.0) 底　— 高　(3.0)	白色鉱物粒微 褐色粒少	酸化焔 軟質	橙	底部浅い丸底で、体部～口縁部内湾する。底部円周方向篦削り、口縁部横撫で、間に明確に調整不明な部分が見られる。	
368－4	土師器 坏BIV	2溝 覆土内 ¼残存	口　(15.2) 底　— 高　(3.5)	白色鉱物粒少 黒色鉱物粒多	酸化焔 やや軟質	明赤褐	底部丸底で、口縁部やや内湾気味に立ち上がる。底部篦削り、口縁部横撫でで、間に調整の曖昧な部分が見られる。	
368－5	須恵器 坏DIV	2溝 覆土内 ½残存	口　(11.3) 底　(7.0) 高　3.0	黒色鉱物粒多 白色鉱物粒微	還元焔 硬質	灰	轆轤整形(右回転)。底部回転糸切り無調整。体部はやや浅く直線的に立ち上がる。	
368－6	須恵器 坏？	2溝 覆土内 破片	口　— 底　(10.0) 高　(1.5)	白・黒色鉱物粒多	還元焔 硬質	褐灰	轆轤整形(？)。底部回転篦切り後粗い篦調整を加えたものと見られる。体部は直角に近い角度で立ち上がる。	
368－7	須恵器 蓋	2溝 覆土内 破片	口　(17.0) 摘　— 高　(1.6)	黒・白色鉱物粒少	還元焔 硬質	灰白	轆轤整形(？)。かえりを有し、比較的扁平で、先端2cm程を除いて回転篦削りを施す。	外面自然釉。
368－8	須恵器 長頸壺	2溝 覆土内 破片	口　— 底　— 高　—	黒色鉱物粒多 白色鉱物粒少	還元焔 やや軟質	灰	肩部の破片で、同心円の沈線を2本廻らし、間に斜位の櫛状工具の刺突を施す。	厚　0.6

368－9 132	土師器 坏　A	13溝 覆土内 ¼残存	口　(13.2) 底　— 高　4.2	黒色鉱物粒少 白色鉱物粒微 灰色砂粒多	酸化焔 硬質	にぶい 黄橙	底部は浅い丸底で、口縁部との境に段を有し、口縁部は内湾する。口縁部横撫で、底部篦削り。内面は撫で後に放射状の粗い篦磨きを施す。	
368－10 132	土師器 手　捏	13溝 覆土内 ¼残存	口　(11.0) 底　(7.0) 高　4.6	白色鉱物粒多 黒色鉱物粒少	酸化焔 軟質	浅黄橙	底部平底で、体部直線的に開く。口縁部横撫で、体部に指頭痕が観察できる。	
368－11	須恵器 坏　A	13溝 覆土内 破片	口　(12.4) 底　— 高　(2.8)	白色鉱物粒多 黒色鉱物粒微 褐色粒少	還元焔 硬質	灰白	轆轤整形(右回転)。丸底で受け部を有し、口縁部は内傾する。	
368－12 133	須恵器 埦A？	13溝 覆土内 ½残存	口　(15.0) 底　(9.3) 高　6.0	白色細粒多	還元焔 やや硬質	灰黄褐	轆轤整形(右回転)。体部は直線的に外傾する。高台は底部回転糸切り後の付高台で、貼り付けは丁寧である。	
368－13	須恵器 蓋	13溝 覆土内 破片	口　— 摘　2.4 高　(2.0)	白色鉱物粒多	還元焔 硬質	灰	宝珠摘部。	
368－14	土師器 小型甕	13溝 覆土内 破片	口　(11.0) 底　— 高　(7.2)	白色鉱物粒少 黒色鉱物粒多 褐色粒微	酸化焔 軟質	にぶい 黄橙	口縁部は「C」字状に外反する。胴部は上半に張りを有する。胴部縦位篦削り後、口縁部横撫で。内面横位篦撫でを施す。	
368－15	須恵系？ 土　釜	13溝 覆土内 破片	口　(28.0) 底　— 高　(5.5)	白色鉱物粒少 褐色粒少	酸化焔 硬質	暗灰黄	口縁部は厚手で外反し、胴部に張りをもたない。胴部下方からの縦位篦削り後、口縁部横撫でを施す。	
368－16 133	瓦 男　瓦	13溝 覆土内 ¾残存	広　16.9 狭　— 長　—	白色鉱物粒少 褐色粒多	中性焔 硬質	灰	一枚作り？凹面粘土板糸切り痕あり。凸面横位の撫でを全面に施す。側部面取り３面。	反　9.0 厚　1.9
369－1	土師器 坏AⅠ	３溝 覆土内 破片	口　(12.0) 底　— 高　(2.4)	白・黒色鉱物 粒少	酸化焔 軟質	橙	底部は扁平に近い丸底で、体部は直線的に外傾する。底部との屈曲部には沈線を１本廻らし、稜としての効果を出している。	
369－2	須恵器 蓋	３溝 覆土内 破片	口 摘　— 高　(1.5)	白・黒色鉱物 粒多	還元焔 硬質	灰オリーブ	轆轤整形(右回転)。天井部回転篦削り。	
369－3	須恵器 瓶	３溝 覆土内 破片	口　— 底　12.0 高　(3.0)	白・黒色鉱物 粒少	還元焔 硬質	灰	長脚の付高台。端部に段を有する。底部貼り付け部より剝離。	高台部

H区遺構外出土遺物

挿図番号 図版番号	種　別 器　種	出土位置 遺存状態	度目　(cm) 量目　(g)	胎　土	焼　成	色　調	器形・技法等の特徴	備　考
370－1 133	土師器 坏　A	山王線下 完形	口　13.1 底　— 高　4.6	灰色砂粒少	酸化焔 やや軟質	褐	底部は丸底で、口縁部との境に段を有し、口縁部は内傾する。口縁部横撫で、底部篦削り内面は篦撫での痕跡を残す。	胎土と器面の色調相違。
370－2	土師器 坏AⅠ	表土 ½残存	口　(13.0) 底　— 高　5.0	白色鉱物粒多 黒色鉱物粒少	酸化焔 硬質	にぶい 黄橙	底部は深い丸底で、口縁部との境に屈曲を有し、口縁部は直立する。口縁部は横撫で、底部不定方向篦削り、内面は撫でを施す。	
370－3 133	土師器 坏CⅠ	表土 ¾残存	口　(11.1) 底　— 高　3.0	黒・白色鉱物 粒少	酸化焔 軟質	橙	底部は浅い丸底で、口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。口縁部は横撫で、底部篦削りを施し、間にちぢみじわ状の残る調整不明の部分が見られる。	
370－4	土師器 坏CⅠ	表土 ½残存	口　(12.0) 底　— 高　2.6	黒色鉱物粒多 白色鉱物粒少 砂粒多	酸化焔 やや硬質	橙	底部は平底気味で、体部は内湾気味に立ち上がる。口縁部は横撫で、体部指による押さえ底部は一定方向の篦削りで、内面は撫でを施す。	
370－5 133	土師器 手　捏	表土 完形	口　9.0 底　5.0 高　4.0	白色細粒多	酸化焔 やや硬質	浅黄橙	底部は平底で木葉痕を有し、体部はわずかに内湾気味に立ち上がる。口縁部は雑な横撫で体部撫で、体部下端に指先の押さえを施す。内面は篦と指先による撫でを施す。	
370－6	土師器 手　捏	表土 ¼残存	口　(8.0) 底　— 高　(3.2)	砂粒微 褐色細粒少	酸化焔 軟質	浅黄橙	底部は不明で、体部は丸味が強い。口縁部は平らでなく、外面に輪積み痕を残す。内外面共に撫でを施す。	

370－7	土師器 手捏	表土 ¼残存	口 (7.0) 底 (6.0) 高 3.4	褐色粒少	酸化焔 軟質	浅黄橙	底部平底で、体部は浅く直線的に立ち上がる。底部・体部共に指先で押さえ成形している。	
370－8	土師器 手捏	表土 ¼残存	口 (10.0) 底 (5.0) 高 3.8	褐色粒微	酸化焔 軟質	浅黄橙	底部は平底で突出し、体部は外反気味に立ち上がり、口縁部は直立する。口縁部横撫で、体部・内面撫でを施す。	
370－9 133	須恵器 坏	表土 ¾残存	口 (10.2) 底 (8.0) 高 3.4	白色鉱物粒少	還元焔 硬質	灰	轆轤整形(右回転)。体部から口縁部はやや外反気味に外傾する。底部は回転篦切り無調整で、中央部が若干突出する。	
370－10	須恵器 坏EII	表土 ½残存	口 (12.0) 底 (7.0) 高 3.7	白色鉱物粒少 砂粒多	還元焔 やや軟質	灰白	轆轤整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。体部はやや丸味を有し、口縁部はわずかに外反し、底部は突出気味である。	内面底部に炭化物付着。
370－11 133	須恵器 坏EII	表土 ¾残存	口 (12.7) 底 (6.0) 高 2.8	黒色鉱物粒微 褐色粒少 白色鉱物粒少	中性焔 やや硬質	橙	轆轤整形(右回転)。体部下半にやや張りを有し、口縁部は外反する。器高が低く皿状を呈する。底部は回転糸切り無調整。	
370－12 133	須恵器 椀B	表土 完形	口 12.6 底 4.9 高 4.9	黒色鉱物粒少 灰色砂粒多 褐色粒少	中性焔 やや硬質	灰黄	轆轤整形(右回転)。体部中位に張りを有し口縁部は外反しない。底部はやや突出気味で切り離し技法は器面が粗れ不明。高台が剝離しているものと考えられる。	内面にカーボン残存。
370－13	須恵器 坏EI	表土 ½残存	口 (13.6) 底 (6.2) 高 4.2	小礫微 砂粒少 白・黒色粒多	還元焔 硬質	灰白	轆轤整形(右回転)。底部回転糸切り無調整であるが、あまり明瞭に残存していない。体部内湾気味で、口縁部の外反は弱い。	
370－14	須恵器 椀EII	表土 ½残存	口 (14.0) 底 (6.8) 高 3.9	白・黒色細粒多 褐色粒多	還元焔 軟質	灰	轆轤整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。体部やや内湾し、口縁部は外反する。	内外面のハゼ激しい。
370－15	土師質 坏	表土 ¼残存	口 (10.4) 底 (4.0) 高 3.5	白色細粒少 砂粒少	酸化焔 硬質	にぶい黄橙	轆轤整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。底径は非常に小さく突出する。体部に屈曲を有し、口縁部は外反しない。内面はコテが当てられたものか？	
370－16	須恵器 椀CII	表土 ½残存	口 (14.0) 底 (6.0) 高 4.7	白色細粒多	還元焔 やや硬質	灰白	轆轤整形(右回転？)。高台はいわゆる角高台で付高台である。体部の内湾は弱く、口縁部は外反する。	内面に炭化物が厚く付着。
370－17	須恵器 椀	不明 破片	口 (16.0) 底 (12.8) 高 3.8	黒色粒多	還元焔 硬質	灰白	轆轤整形(？)。底部は回転篦調整で、高台は角高台で丁寧な貼り付けである。体部は比較的浅く直線的に立ち上がる。	外面薄い自然釉。
370－18	須恵器 椀A？	表土 破片	口 — 底 (7.4) 高 (3.0)	黒色粒多 白色細粒少	還元焔 硬質	灰白	轆轤整形(右回転)。底部は回転篦調整後付高台。体部下端回転篦削りを施す。	
370－19	土師質 椀	表土 ½残存	口 — 底 9.0 高 (3.5)	黒色粒少 白色細粒微	酸化焔 硬質	橙	轆轤整形(右回転？)。底部は高台貼り付けに伴い回転撫で調整されている。高台貼り付けは非常に丁寧。	足高高台
370－20	土師質 椀	表土 ¼残存	口 — 底 (11.0) 高 (5.2)	黒色細粒微 褐色細粒少	酸化焔 軟質	浅黄橙	轆轤整形(右回転)。底部回転糸切り後付高台。高台貼り付けは非常に丁寧。	足高高台
371－1	土師質 椀	表土 破片	口 — 底 — 高 (1.9)	黒色鉱物粒多 白色鉱物粒少 白色細粒多	酸化焔 硬質	にぶい橙	轆轤整形(左回転)。底部回転撫で調整後付高台。	内面に炭化物厚く付着。
371－2	黒色土器 皿？	表土 破片	口 — 底 (9.0) 高 (1.0)	黒色粒少	酸化焔 軟質	黒	底部平底で、内外面共に丁寧な研磨を施し、全面黒色処理を施す。轆轤使用の有無不明。	
371－3	須恵器 蓋	道状遺構 完形	口 13.2 摘 1.7 高 3.1	白・黒色粒多	還元焔 硬質	灰白	轆轤整形(右回転)。体部上半3段の回転篦削り。内面にかえりを有し、摘は宝珠摘である。	
371－4	須恵器 蓋	表土 ¼残存	口 17.2 摘 7.0 高 3.5	黒色粒多	還元焔 硬質	灰白	轆轤整形(右回転)。天井部外面回転糸切り無調整で、周辺回転篦削り後、高台状の摘貼付。内面にかえりをもたない。	
371－5	須恵器 皿	表土 破片	口 (21.0) 底 (20.0) 高 1.6	黒色粒多	還元焔 硬質	灰白	轆轤整形(？)。底部は平底で、口縁部との境に段を有し、口縁部は外反気味に立ち上がる。口縁部横撫で、底部粗い篦削りを施す。	
371－6	灰釉陶器 椀	5井戸 ½残存	口 (14.6) 底 (7.0) 高 4.6	美濃系		灰白	轆轤成整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整後付高台。体部の丸味は強く、下半に篦削りは見られない。施釉は漬け掛け。	

371－7	灰釉陶器 皿	表土 ¼残存	口 (12.0) 底 (6.7) 高 2.1	美濃系		灰白	轆轤成整形(右回転)。底部回転糸切り無調整後付高台。底部はやや突出する。体部は内湾気味に立ち上がる。施釉は漬け掛け。	
371－8 133	土師器 小型甕	表土 完形	口 11.0 底 3.2 高 13.9	黒色鉱物粒多 灰色砂粒多 小礫微	酸化焔 硬質	にぶい 褐	体部上半に張りを有し、口縁部「く」字状に外反する。胴部斜位(上→下)→上半横位(右→左)篦削り後口縁部横撫でを施す。内面は篦撫でで、内面下端に痕跡が顕著。	
371－9 133	須恵器 壺	表土 破片	口 — 底 (4.5) 高 (1.6)	白・黒色粒少	還元焔 硬質	赤褐 黒褐	轆轤整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	壺Gか？
371－10	須恵器 瓶	表土 破片	口 — 底 (16.0) 高 (3.3)	黒色粒多 白色粒少	還元焔 硬質	灰白	紐作り轆轤整形(？)。高台部と底部との境に突帯を廻らす。底部内外面に指先の押さえ明瞭に残す。	
371－11 133	銅 不明	37土坑 覆土内 完形	長 5.5 幅 1.4 重 101.9				不整形。部分的に緑錆が見られ、銅を含むものであることは確かで、表面に調整等の加えられた痕跡はなく、製品とは考えられない。	
371－12	石製品 砥石	表採 ¼残存	長 (5.0) 幅 4.5 厚 2.3	流紋岩 (砥沢)			4面は使用に伴い平坦面を形成し、端部は加工された段階の成形面を残している。	重 80.0
371－13 133	石製品 臼玉	1溝 覆土内 完形	長 1.6 幅 1.7 厚 0.6	滑石			上下面及び側面共比較的丁寧に調整されている。一部剝離し欠損している。	重 3.5 孔径 0.3
372－1	瓦 宇瓦	表土 破片	幅 — 高 3.0 反 —	白色粒多 黒色粒少	還元焔 硬質	灰	桶巻き作り。凸面布目の擦消しあり。左扁行唐草文。	厚 3.5
372－2	瓦 鐙瓦	11溝 覆土内 破片	厚 1.7	黒色粒多 白色粒少	還元焔 硬質	灰白	単弁5葉か？凸面縦方向の篦削りを施す。	
372－3 133	瓦 男瓦	11溝 破片	厚 2.5	白色鉱物粒少 砂粒多 褐色粒多	還元焔 やや硬質	灰白	篦描き文字瓦「□成」(凸面)。	
372－4 134	瓦 女瓦	6井戸 破片	厚 2.2	褐色粒多 白色鉱物粒少	還元焔 硬質	黄灰	一枚作り。凹面粘土板糸切り痕あり。凸面は指先による撫で。篦描き文字瓦「山□」(凹面)。	
372－5 134	瓦 男瓦	山王線下 破片	厚 2.3	白色シルト 灰色砂粒多 黒色粒少	還元焔 硬質	灰	一枚作り。凹面粘土板糸切り痕あり。篦描き文字瓦「真」(凸面)。	
372－6 134	瓦 女瓦	2井戸 破片	厚 2.1	褐色粒少 白色粒多	還元焔 硬質	灰	一枚作り。凹面布目の擦消しあり。端部凹面側にわずかに面取り(1面)がある。篦描き文字瓦「人」(凹面)。	
372－7 134	瓦 女瓦	11溝 破片	厚 2.1	白色鉱物粒多 褐色粒少	還元焔 硬質	灰	一枚作り。凹面粘土板糸切り痕あり。篦描き文字瓦「？」(凸面)。	
372－8 134	瓦 女瓦	表土 破片	厚 2.2	白色細粒多 黒色細粒少	還元焔 硬質	灰	一枚作り。凹面粘土板糸切り痕あり。粘土板合せ目あり。凸面正格子叩き。刻印文字瓦「？」(凸面)。	
372－9 134	瓦 女瓦	11溝 破片	厚 1.7	白色粒多	還元焔 硬質	褐灰	一枚作り。篦描き文字瓦「？」(凸面)。側部面取り1面。	
372－10 134	瓦 男瓦	表土 破片	厚 2.1	白色鉱物粒多 褐色粒多	還元焔 硬質	暗オリーブ灰	一枚作り。篦描き文字瓦「十」(凹面)。側部面取り3面。	
372－11 134	瓦 女瓦	1溝 破片	厚 3.3	白色鉱物粒多	還元焔 やや硬質	灰	一枚作り。凹面粘土板糸切り痕あり。篦描き文字瓦「？」(凸面)。	
373－1	瓦 女瓦	7井戸 ¼残存	厚 1.7	白・黒・褐色 細粒多	還元焔 硬質	黒褐 にぶい 黄橙	桶巻き作り。凹面粘土板糸切り痕あり。凹面広端部横位撫で、凸面斜格子叩き。側部面取り3面。	
373－2	瓦 女瓦	4溝 破片	厚 1.8	白・黒色細粒少 白色鉱物粒微	還元焔 硬質	橙・灰	一枚作り。凸面正格子叩き。	
373－3	瓦 女瓦	表土 破片	厚 1.4	白・黒色粒少	還元焔 硬質	赤	一枚作り。凹面粘土板糸切り痕あり。凸面正格子叩き。	
373－4	瓦 女瓦	表土 破片	厚 1.9	褐・白色細粒少	還元焔 硬質	橙 淡黄	一枚作り。凹面粘土板糸切り痕あり。凸面斜格子叩き。	

373－5	瓦 女　瓦	1溝 破片	厚　1.9	白色鉱物粒少 黒色粒多	還元焔 硬質	淡黄 灰	一枚作り？凸面斜格子叩き。	
373－6	瓦 女　瓦	7井戸 ¼残存	厚　2.3	白色鉱物粒微 褐色粒少	還元焔 硬質	黒褐 橙	凹面模骨痕は明瞭で、布目は縦位の粗い撫でで、一部消されている。凸面は、布目痕の上に縄叩きが部分的に見られ、さらに粗い撫でが施されている。側部面取り2面。	
373－7	瓦 男　瓦	表土 ¼残存	厚　1.5	白色鉱物粒多 褐色粒少	還元焔 硬質	オリーブ灰 黒	一枚作り？凹面は布目が部分的に積まれたようになっている。凸面広端部付近は横位でそれ以外縦位の縄叩きを施す。側部面取り3面	

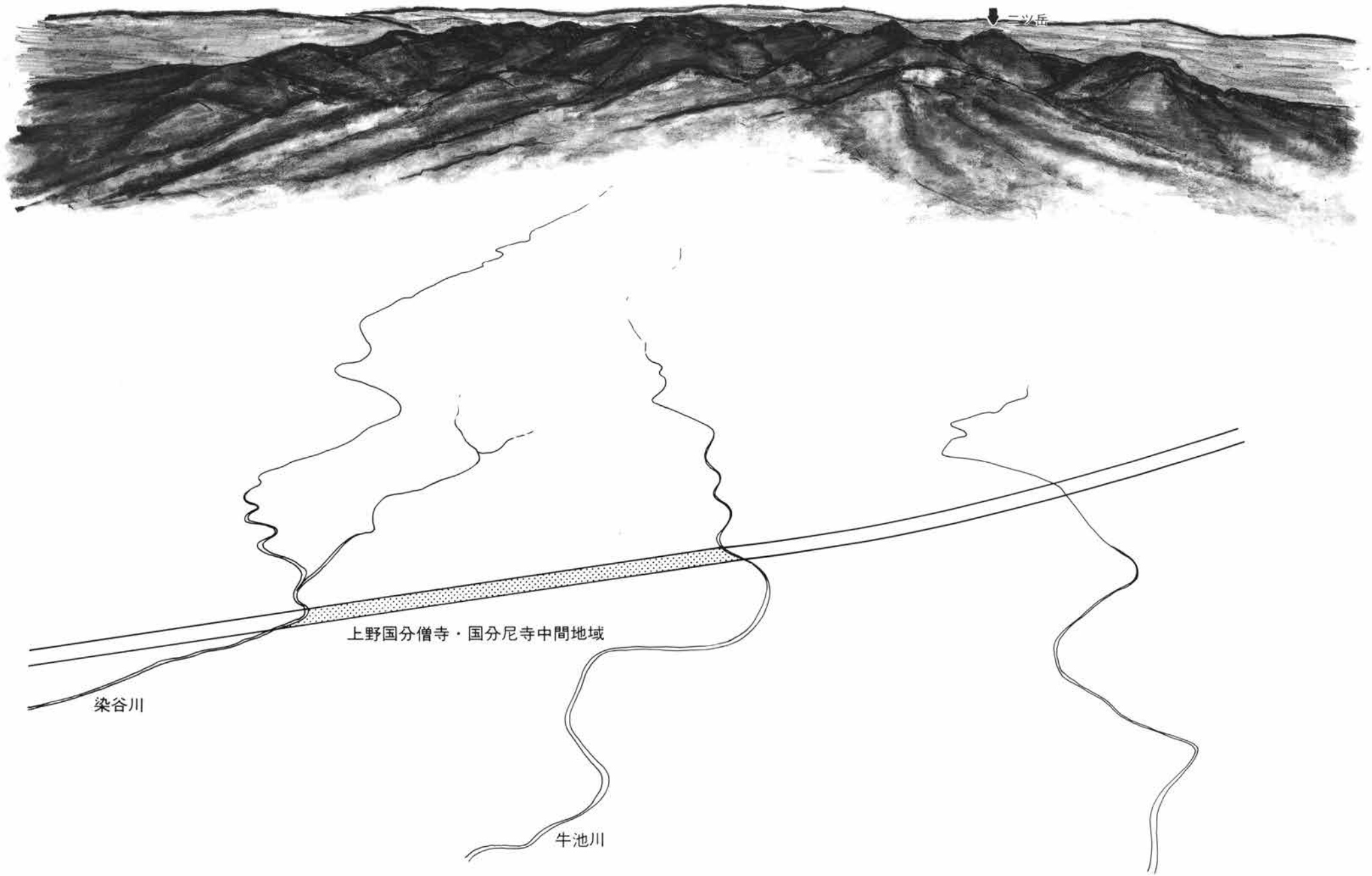
追補

挿図番号 図版番号	種　別 器　種	出土位置 遺存状態	度目　(cm) 量目　(g)	胎　土	焼　成	色　調	器形・技法等の特徴	備　考
375－1 134	縄文土器 深　鉢	J区1号 配石遺構 破片	口　— 底　— 高　—	白色鉱物粒多 黒色鉱物粒少	酸化焔 やや軟質	褐	磨滅が激しいため、図から判断しにくいと思われるが、微隆起線が横位に施され、下位に縄文施文の痕跡が見られる。	加曽利E4式。 厚　1.3
375－2 135	縄文土器 深　鉢	J区1号 埋設土器 ½残存	口　(21.7) 底　(5.2) 高　29.5	白・黒色鉱物粒多	酸化焔 軟質	褐	平口縁と考えられる深鉢である。器形は、胴部中位にやや張りを有し、口縁部はわずかに内湾する。文様は口縁部に沿って2本の平行沈線を廻らし、胴部中位に2本沈線で5単位の巻きの弱い渦巻文を施し、単節ＬＲと思われる原体を充塡施文しているが、器面の粗れが激しく全体は促えられない。	称名寺式
376－1 134	須恵器 壺	F区21号 住居跡 覆土内 ¼残存	口　— 底　7.2 高　(12.7)	白・黒色細粒少	還元焔 硬質	灰白	紐作り轆轤整形(右回転？)。肩部に最大径を有し、胴部の張りは弱い。底部は回転糸切り無調整で、三角高台貼付。肩部に回転篦削りを施す。	
376－2 134	土師器 坏ＣⅠ	G区37号 住居跡 覆土内 完形	口　12.4 底　— 高　3.3	黒色鉱物粒多 白色粒少	酸化焔 やや硬質	にぶい 橙	底部は平底気味で、体部はやや内湾し、口縁部は直立する。口縁部は横撫で、底部不定方向篦削り、体部調整は曖昧である。	
376－3 136	須恵器 蓋	G区138 号住居跡 覆土内 ¼残存	口　16.8 摘　4.6 高　4.6	小礫微 黒色粒多	還元焔 硬質	黄灰	轆轤整形(右回転)。体部は比較的深く、天井部は平坦であり、外面は3段？の回転篦削り後、環状摘貼付。内面にかえりをもたない。	
376－4 136	石製品 浮き？	H区15号 住居跡 覆土内 ¼残存	長　6.3 幅　4.1 厚　3.9	軽石			榛名山系の軽石を加工したものであり、下端は平坦で中央に全長の½程度まで穿孔が見られる。また、上端はわずかに欠けているが横位に穿孔されていたものと考えられる。これらの特徴から当遺物は、「浮き」ではないかと考えている。	重　20.0
376－5 136	土師器 坏ＡⅡ	H区79号 住居跡 覆土内 完形	口　11.0 底　— 高　4.1	砂粒少 黒色細粒少	酸化焔 軟質	橙	底部は浅い丸底で、口縁部との境で強く屈曲し、口縁部は外反気味に直立する。底部篦削り、口縁部横撫で、内面撫でを施す。	
377－1 136	瓦 男　瓦	F区1号 井戸跡 ¼残存	径　14.5 狭　— 長　—	白色鉱物粒多	還元焔 硬質	灰	単弁4葉線文。側部面取り3面。篦描き文字瓦「守？」(凸面)。	自然釉。 厚　2.4
378－1 137	埴　輪	G区4号 井戸跡 破片	長　(4.5) 幅　4.2	黒色粒多 白色粒	酸化焔 硬質	明赤褐	空洞の球形で、一端に剝がれた痕跡がある。上端には断面三角形の一本の切り込みが見られることから、「鈴」と考えられる。	
378－2 136	瓦 男　瓦	G区6号 井戸跡 破片	厚　1.6	白色鉱物粒多 褐色粒多	中性焔 硬質	灰	一枚作り？篦描き文字瓦「王」(凸面)。	
378－3 136	瓦 男　瓦	G区6号 井戸跡 破片	厚　1.7	褐色粒少 白色鉱物粒多	還元焔 硬質	灰	一枚作り？凹面の布目は縦位の撫でで完全に消されている。凸面も縦位に撫でが施されている。刻印の「○」が見られる。側部面取り2面。	
378－4 137	須恵器 埦	F区13号 溝 ¼残存	口　— 底　(7.2) 高　(2.8)	黒色粒多	還元焔 硬質	灰	轆轤整形(右回転？)。底部は回転糸切り無調整で、付高台。高台の貼り付けは丁寧である。底部の糸切り痕の大半を撫で消している。	内面に炭化物付着

379—1 137	須恵器 埦	H区1号 井戸跡 破片	口　— 底　(6.6) 高　(2.2)	白・黒色粒	中性焔 軟質	黒褐	口縁部は欠損する。轆轤整形。底部回転篦削り。付高台。内面に篦描き文字「？」。	
379—2 137	灰釉陶器 埦	G区表土 ½残存	口　(16.5) 底　(7.4) 高　5.3	美濃系		灰白	口縁端部は外反する。轆轤成整形(右回転)。付高台。施釉手法は刷毛掛け。	
379—3	灰釉陶器 埦	G区表土 ½残存	口　(18.6) 底　(8.5) 高　5.8	美濃系		灰	口縁端部は外反する。轆轤成整形(右回転)。底部は回転篦撫で。施釉手法は漬け掛け。	
379—4	灰釉陶器 高台付皿	G区表土 ½残存	口　(16.6) 底　(8.4) 高　3.3	美濃系		灰白	口縁部は外反する。轆轤成整形(右回転)。付高台。底部は回転篦削り。施釉手法は漬け掛け。	
379—5	緑釉陶器 埦	F区第Ⅲ 層 破片	口　(22.7) 底　— 高　(5.1)	美濃系		オリーブ灰	轆轤成整形。口縁部は外傾する。体部中位は屈曲する。	
379—6	緑釉陶器 埦	F区3号 溝 破片	口　— 底　(7.8) 高　(1.5)	美濃系		オリーブ灰	轆轤成整形(右回転)。付高台。	
379—7 137	緑釉陶器 埦	G区表土 破片	口　— 底　— 高　—			浅黄	轆轤成整形。	厚　0.5
379—8 137	緑釉陶器 埦	G区表土 破片	口　— 底　— 高　—			浅黄	轆轤成整形。	厚　0.6
379—9 137	白磁 托？	不明 破片	口　— 底　— 高　—					厚　0.6
379—10 137	白磁 托？	G区表土 破片	口　— 底　— 高　—				口縁部片と思われるが器種等不明。外面に陰刻が見られる。	厚　0.4
379—11 137	須恵器 長頸壺	G区第Ⅲ 層 破片	口　— 底　— 高　(5.7)	白・黒色粒	還元焔 硬質	緑灰	紐作り後轆轤整形。外面の頸部に文字「大」あり。	
379—12 137	灰釉陶器 壺	F区第Ⅲ 層 破片	口　— 底　(9.4) 高　(2.5)	美濃系		灰白	紐作り後轆轤成整形。底部は回転糸切り後、指撫で付高台。外面底部に篦描きあり。	
379—13 137	須恵器 転用硯	F区第Ⅳ 層 破片	口　— 底　— 高　—	黒色粒 黒色鉱物粒	還元焔 硬質	灰白	紐作り。叩き整形(外面平行叩き・内面当て具は青海波文)後轆轤再整形。甕の破片の転用。	厚　0.9
380—1 138	須恵器 転用硯	G区11号 井戸跡 破片	口　— 底　— 高　—	白・黒色粒	還元焔 硬質	灰	紐作り叩き整形。内面当て具は青海波文。外面轆轤再整形。内面硯としての使用痕あり。	厚　1.5 墨が付着している
380—2 137	瓦 鐙瓦	G区表土 破片	厚　2.1	白・黒色粒	還元焔 硬質	灰	単弁8葉蓮華文。中房の子葉は1＋4。周縁は篦撫で。	径　16.5
380—3 138	瓦 女瓦	F区表土 破片	厚　2.3	白色粒 白・黒色鉱物粒	還元焔 硬質	灰	一枚作り。凹面に粘土板剝ぎ取り痕あり。篦描き文字瓦「上」(凸面)。	
380—4 138	瓦 女瓦	G区1号 井戸跡 ¼残存	厚　2.5	黒色鉱物粒多 黒色粒少	還元焔 硬質	灰	一枚作り。凹面粘土板糸切り痕あり。側部面取り1面。篦描き文字瓦「綿」(凸面)。	
380—5 138	瓦 女瓦	F区1号 溝 破片	厚　3.3	白・赤褐色粒 黒色鉱物粒	中性焔 硬質	暗灰黄	一枚作り。凹面に粘土板剝ぎ取り痕あり。篦描き文字瓦、文字不明(凸面)。	
380—6 138	瓦 女瓦	F区9号 溝 破片	厚　2.1	白・赤褐色粒 黒色鉱物粒	中性焔 硬質	灰黄	一枚作り。篦描き文字瓦「大　⊕？」(凸面)。	
380—7 138	瓦 女瓦	F区表土 破片	厚　2.7	白・赤褐色粒 白色鉱物粒	還元焔 硬質	灰	一枚作り。凹面に粘土板剝ぎ取り痕あり。篦描き文字瓦、文字不明(凸面)。	
380—8 138	瓦 女瓦	F区3号 溝 破片	厚　2.6	白・赤褐色粒 白色鉱物粒	還元焔 硬質	灰	一枚作り。両面に粘土板剝ぎ取り痕あり。篦描き文字瓦「武の一部残存か、子・龍」(凸面)。	

380—9 139	瓦 男　瓦	F区表土 破片	厚　2.2	白・赤褐色粒 白色鉱物粒	中性焔 硬質	褐灰	篦描き文字瓦「辛家直」(凸面)。	
380—10 138	瓦 女　瓦	F区1号 溝 破片	厚　1.7	白・赤褐色粒 黒色鉱物粒	還元焔 硬質	灰	一枚作り。篦描き文字瓦、文字不明(凸面)。	
381—1 138	瓦 女　瓦	F区2号 溝 破片	厚　1.6	赤褐色粒 白色鉱物粒	中性焔 硬質	にぶい 黄橙	一枚作り。凸面縄叩き後、擦消し。篦描き文字瓦「十」(凸面)。	
381—2 139	瓦 女　瓦	G区表土 破片	厚　2.2	白・赤褐色粒 白色鉱物粒	酸化焔 硬質	にぶい 赤褐	一枚作り。凹面に粘土板剝ぎ取り痕あり。篦描き文字瓦、文字不明(凸面)。	
381—3 139	瓦 女　瓦	F区3号 溝 破片	厚　2.7	白・赤褐色粒 白色鉱物粒	還元焔 硬質	灰	篦描き文字瓦、文字不明(凹面)。粘土板合せ目あり。	
381—4 139	瓦 女　瓦	F区1号 溝 破片	厚　1.9	赤褐色粒 白・黒色鉱物粒	中性焔 硬質	灰	凹面に粘土板剝ぎ取り痕あり。篦描き文字瓦「大」(凹面)。	
381—5 139	瓦 女　瓦	F区1号 溝 破片	厚　1.9	白色粒 白・黒色鉱物粒	中性焔 硬質	淡黄	篦描き文字瓦、文字不明(凹面)。粘土板合せ目あり。	
381—6 139	瓦 女　瓦	G区表土 破片	厚　1.7	白・赤褐色粒 白色鉱物粒	酸化焔 硬質	橙	篦描き文字瓦、文字不明(凸面)。	
381—7 138	瓦 女　瓦	F区表土 破片	厚　2.0	白・黒色粒 白色鉱物粒	還元焔 硬質	灰	凹面一部布目の擦消し。篦描き文字瓦、文字不明(凸面)。	
381—8 139	瓦 女　瓦	F区1号 溝 破片	厚　1.6	白色粒 白・黒色鉱物粒	中性焔 硬質	にぶい 黄橙	凸面縄叩き。篦描き文字瓦「大」(凹面)。	
381—9 139	瓦 男　瓦	G区表土 破片	厚　2.0	白色鉱物粒多	中性焔 硬質	にぶい 橙	凹面に粘土板糸切り痕あり。篦描き文字瓦「大」(凸面)。	
381—10 139	瓦 女　瓦	F区第Ⅲ 層 破片	厚　2.0	白・赤褐色粒	還元焔 硬質	暗灰	一枚作り。凹面に粘土板剝ぎ取り痕あり。刻印文字瓦、文字不明(凸面)。	
381—11 139	瓦 男　瓦	G区表土 破片	厚　2.6	褐・黒色粒 白色鉱物粒少	酸化焔 硬質	明赤褐	凸面に平行叩き？あり。刻印文字瓦「○」(凸面)。	
381—12 139	瓦 女　瓦	G区表土 破片	厚　2.2	白・黒色粒 赤褐色粒	酸化焔 硬質	にぶい 橙	一枚作り。凹面粘土板剝ぎ取り痕あり。凸面不整格子叩き。刻印文字瓦「勢」(凸面)。	
381—13 140	石製品 砥石	G区表土 完形	長　6.2 幅　2.5 厚　2.1	流紋岩 (砥沢？)			断面方形を呈す。小口欠損、両小口の他全面使用。手前小口付近火熱をうけている。	重　57.1
381—14 140	石製品 砥石	G区表土 完形	長　6.0 幅　3.0 厚　2.3	流紋岩 (砥沢)			両小口欠損。小口の他全面使用。左側面に刃調整痕が見られる。	重　41.9
381—15 140	石製品 砥石	G区表土 完形	長　4.3 幅　4.8 厚　2.2	軽石			やや丸味のある小型の石。全面使用痕あり。	重　19.7
382—1	石製品 砥石	F区32号 住居跡 覆土内 完形	長　14.8 幅　6.9 厚　6.6	輝石安山岩 (粗粒)			糸巻状。全面使用痕あり。特に表面顕著。両側面に敲打による凹あり。	重 853.1
382—2 140	石製品 砥石	G区表土 完形	長　16.1 幅　9.1 厚　6.6	輝石安山石 (粗粒)			断面方形を呈す。小口欠損。小口の他全面使用。手前小口と裏面に刃調整痕あり。	重1163.0
382—3 140	石製品 砥石	G区表土 完形	長　9.1 幅　3.6 厚　3.7	流紋岩 (砥沢)			不定形で欠損した小口又、剝離と思われる面も使用している。手持砥石。刃調整痕がわずかに認められる。	重 102.3
382—4 140	石製品 臼玉	G区73号 住居跡 覆土内 完形	長　1.4 幅　1.4 厚　0.6	滑石			表面に研磨痕が見られる。穿孔は丁寧。	重　2.2 孔径 0.3

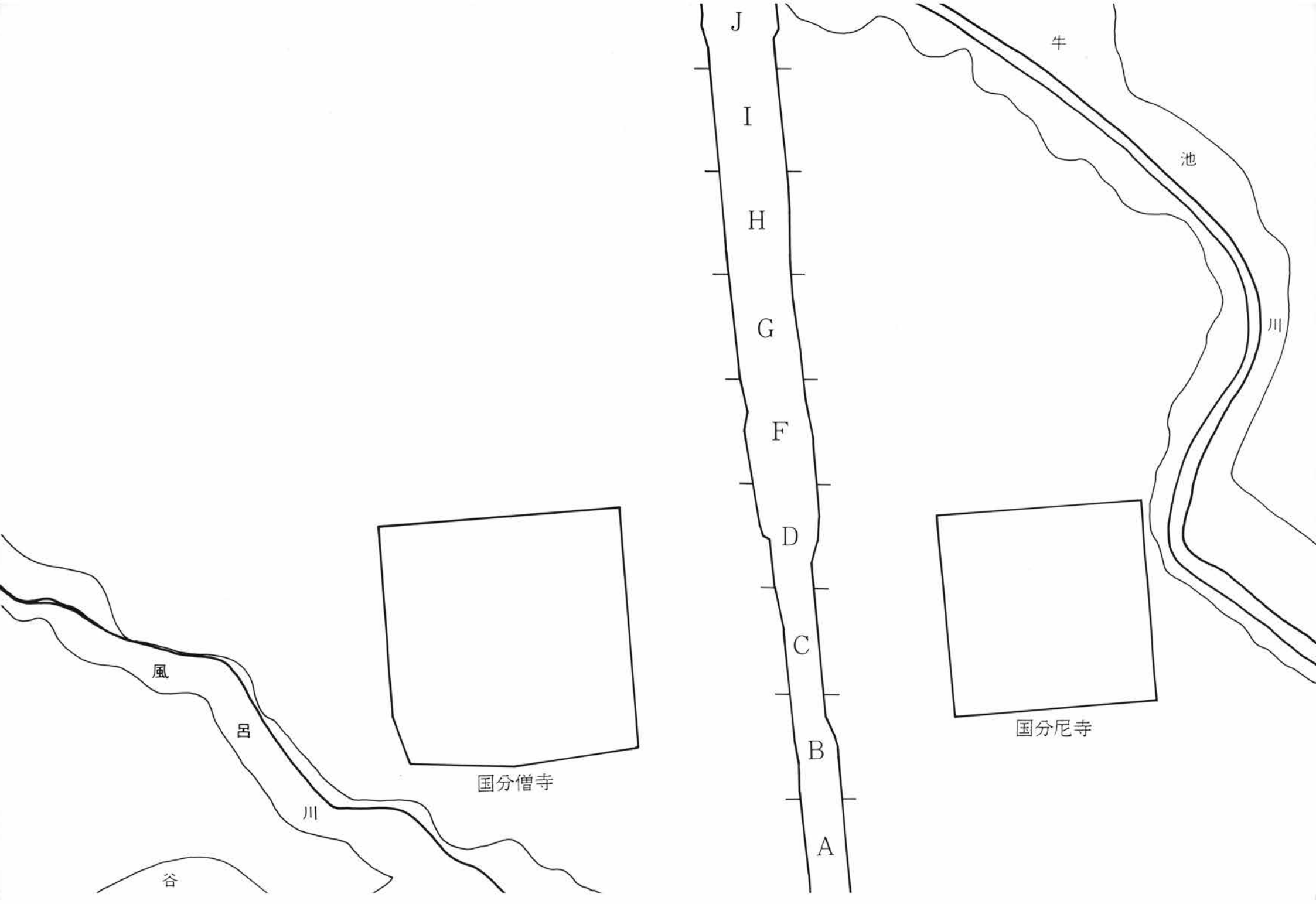
写　真　図　版


二上山
上野国分僧寺・国分尼寺中間地域
染谷川
牛池川

第1図版　遺跡地周辺俯瞰(南西より)

牛
池
川
山王廃寺
（放光寺）
利
根
川
僧寺
尼寺
上野国分僧寺・
国分尼寺中間地域
染
谷
川
上野国府
元総社村
推定東山道

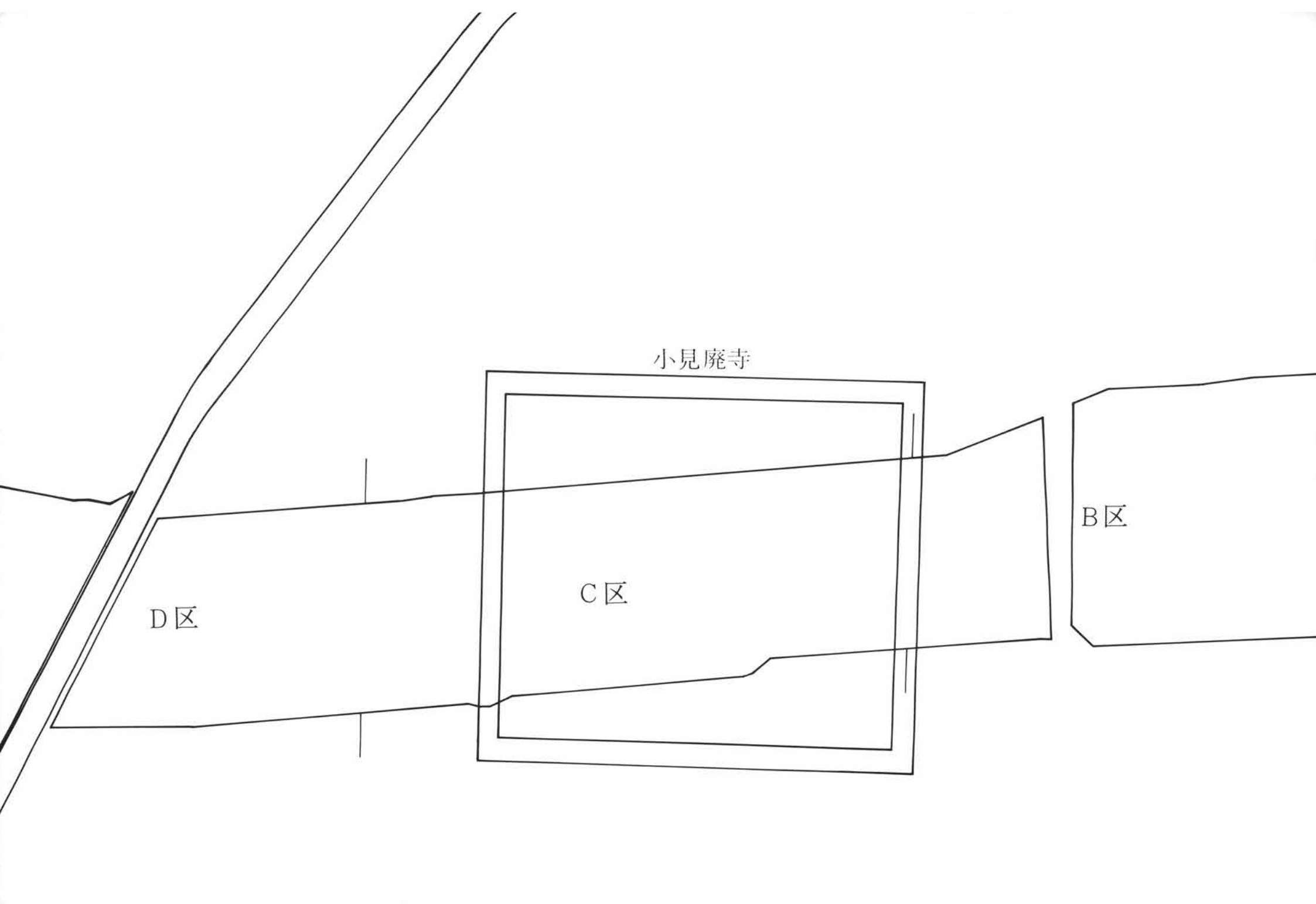
第2図版　遺跡地周辺旧景 昭和20～23年頃（米軍航空写真より作製）


J
I
H
G
F
D
C
B
A
牛
池
川
国分尼寺
風
呂
川
谷
国分僧寺

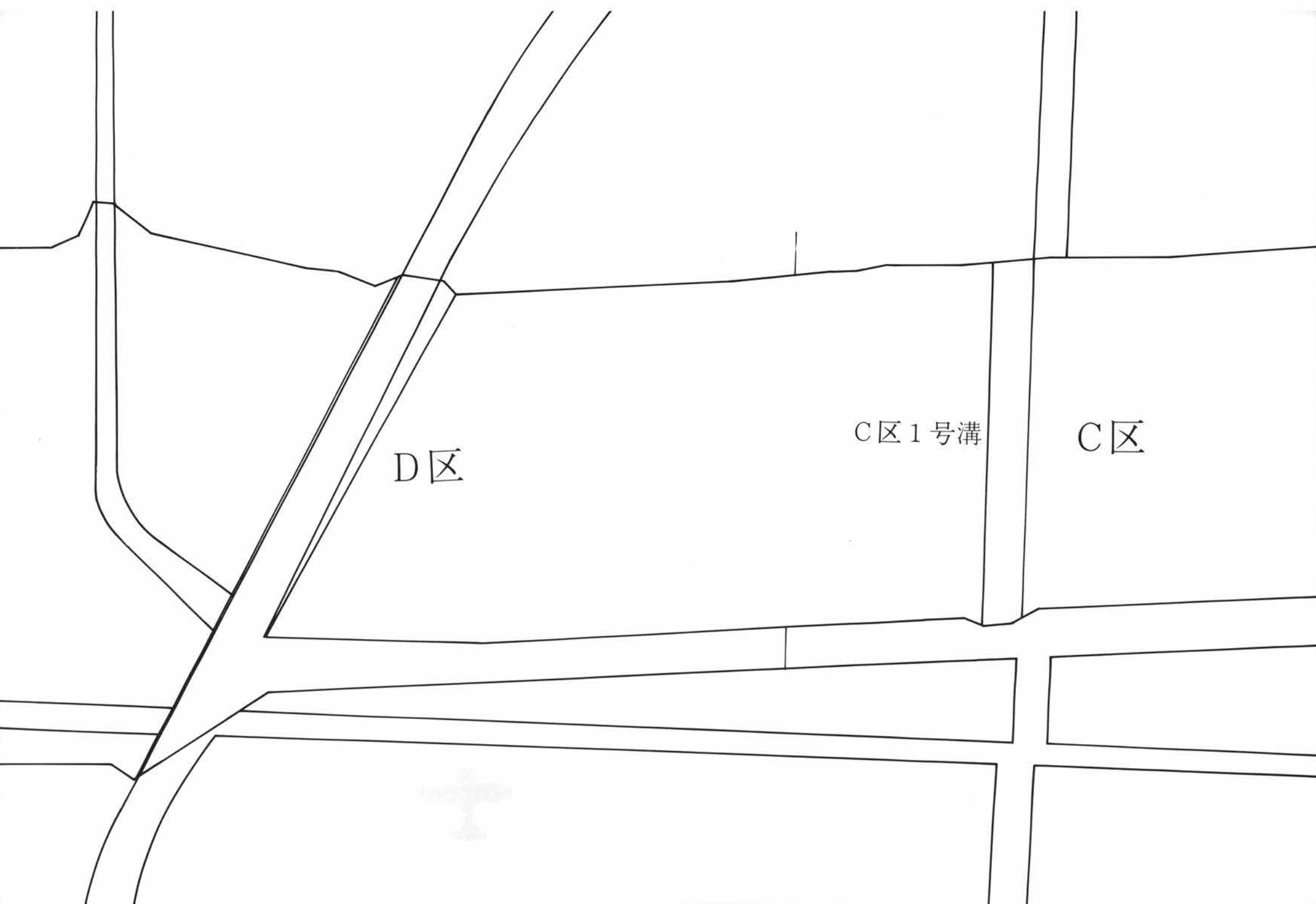
第3図版　南側調査区垂直写真

牛
池
川
山王廃寺
（放光寺）
J
I
H
G
F
D
C
B
国分僧寺
国分尼寺
風
呂
川

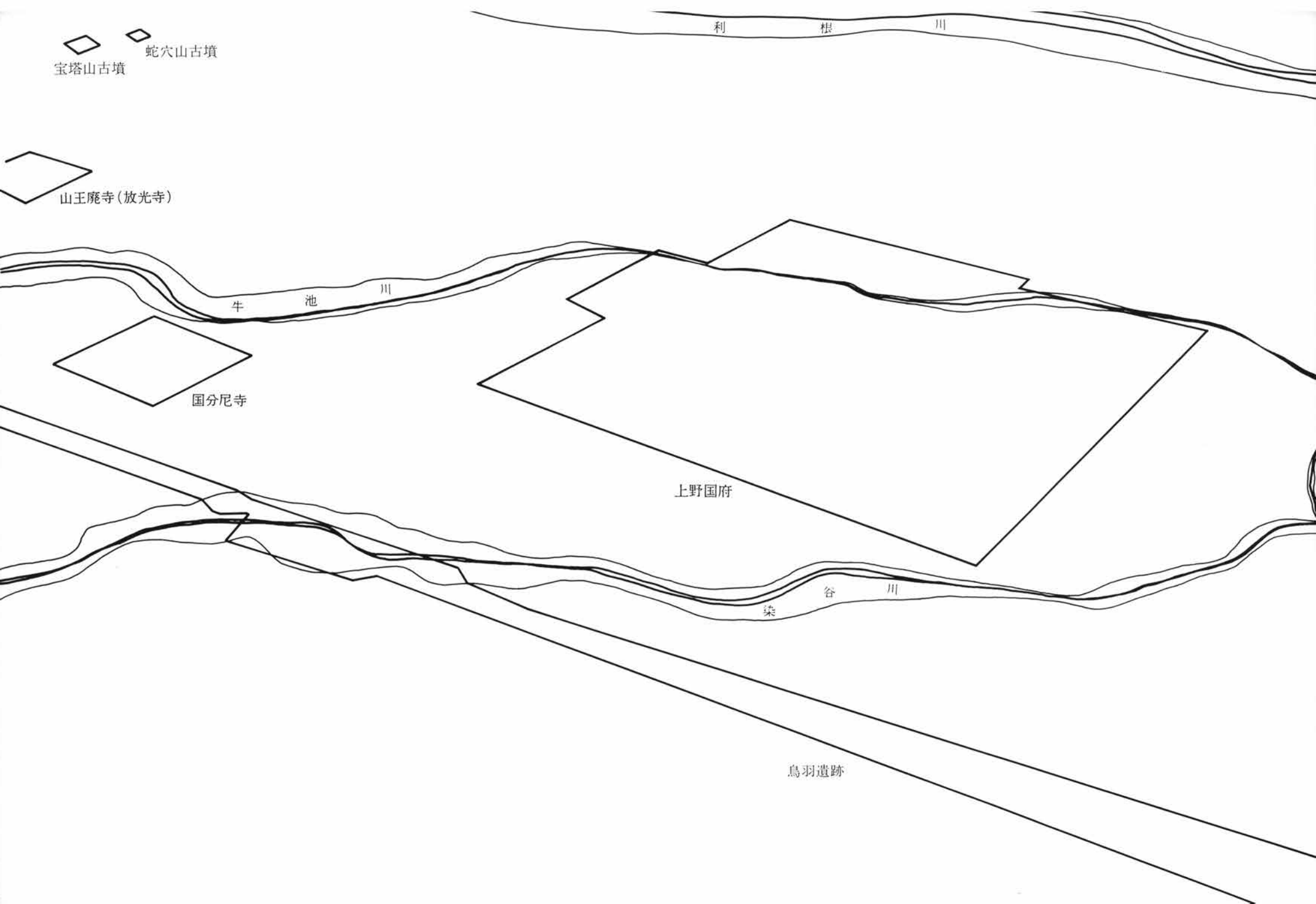
第4図版　北側調査区垂直写真


小見廃寺
B区
C区
D区

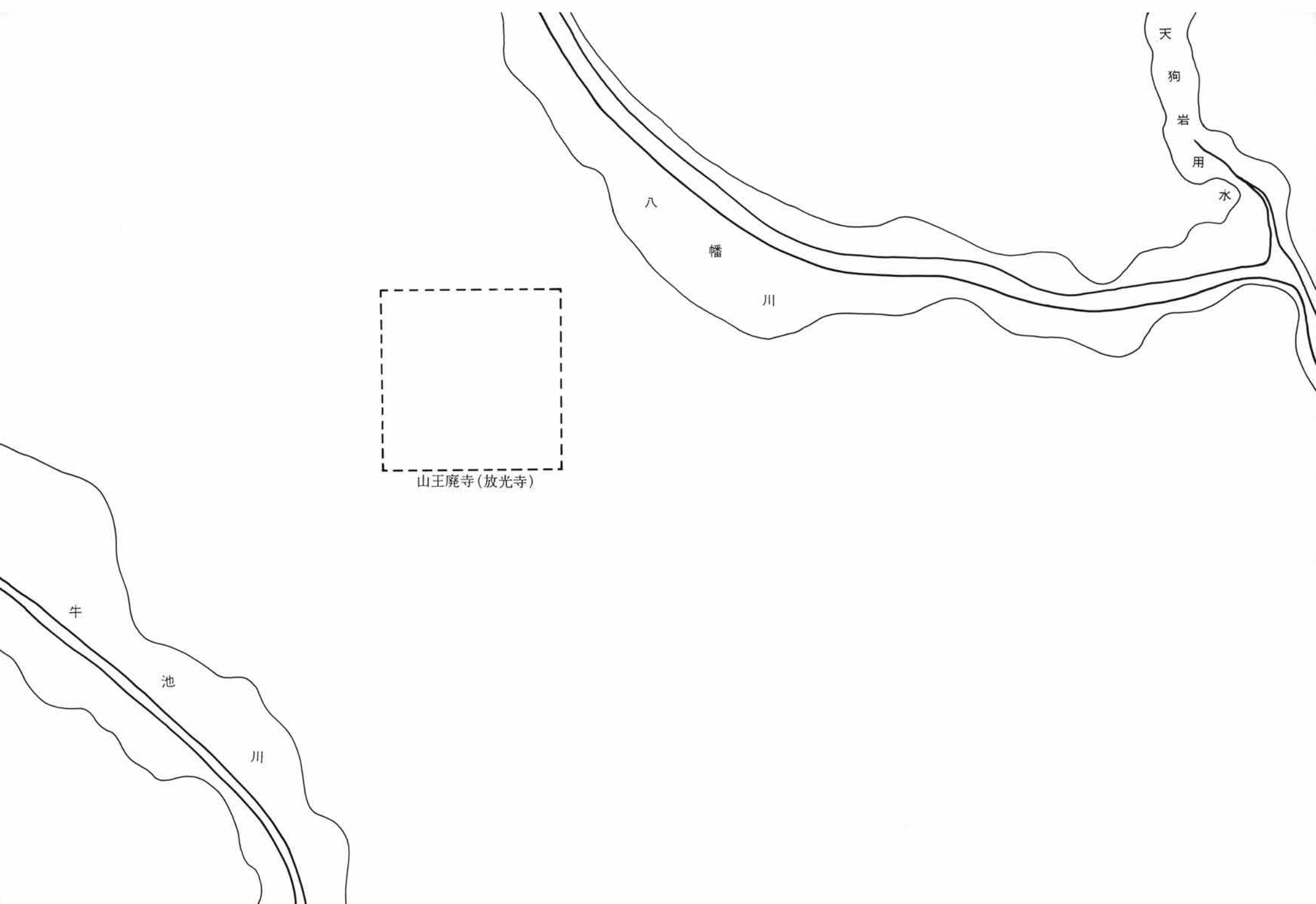
第5図版　B～D区航空写真


D区
C区１号溝
C区

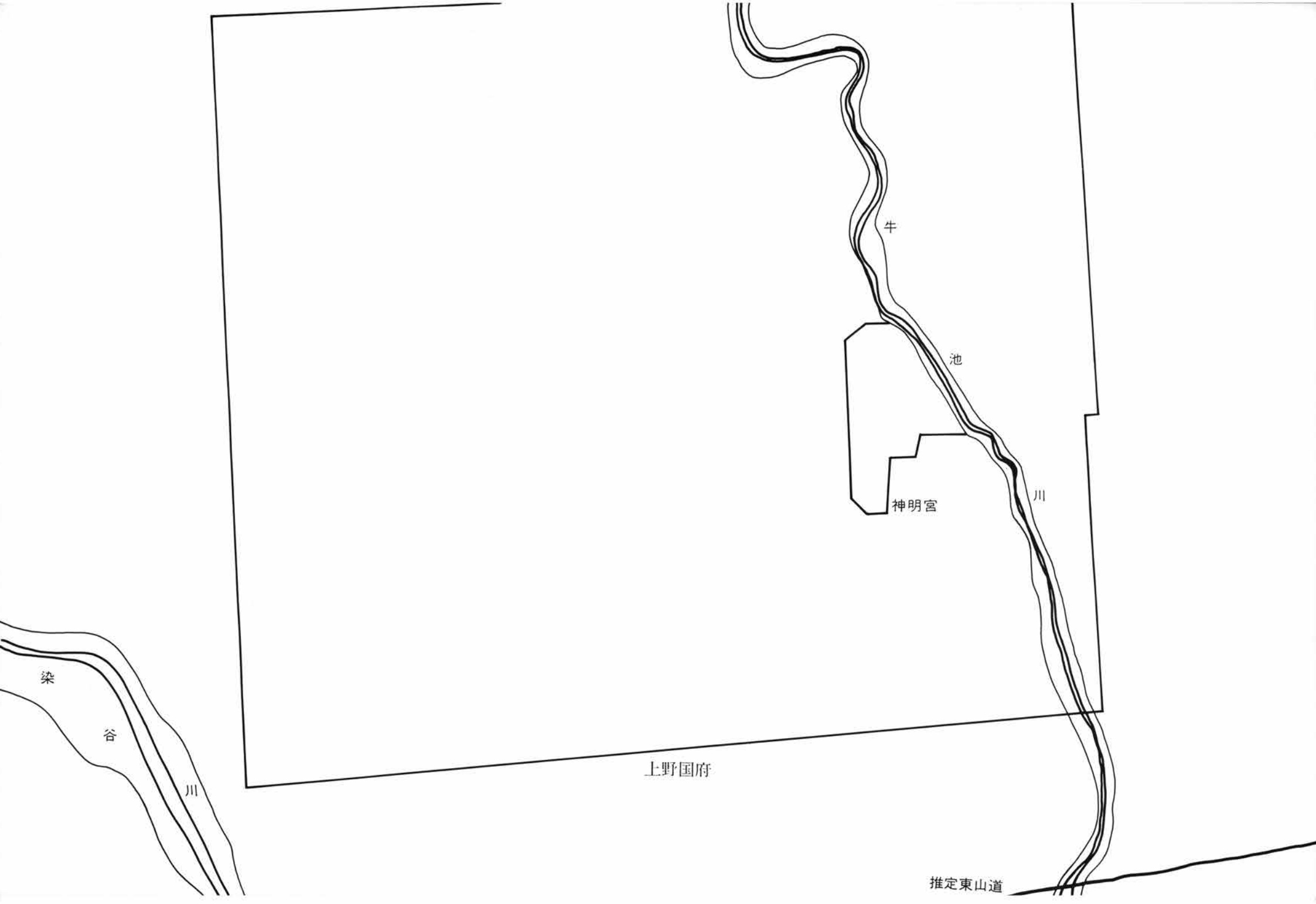
第6図版 ◎・D区航空写真


利根川
蛇穴山古墳
宝塔山古墳
山王廃寺（放光寺）
牛池川
国分尼寺
上野国府
染谷川
鳥羽遺跡

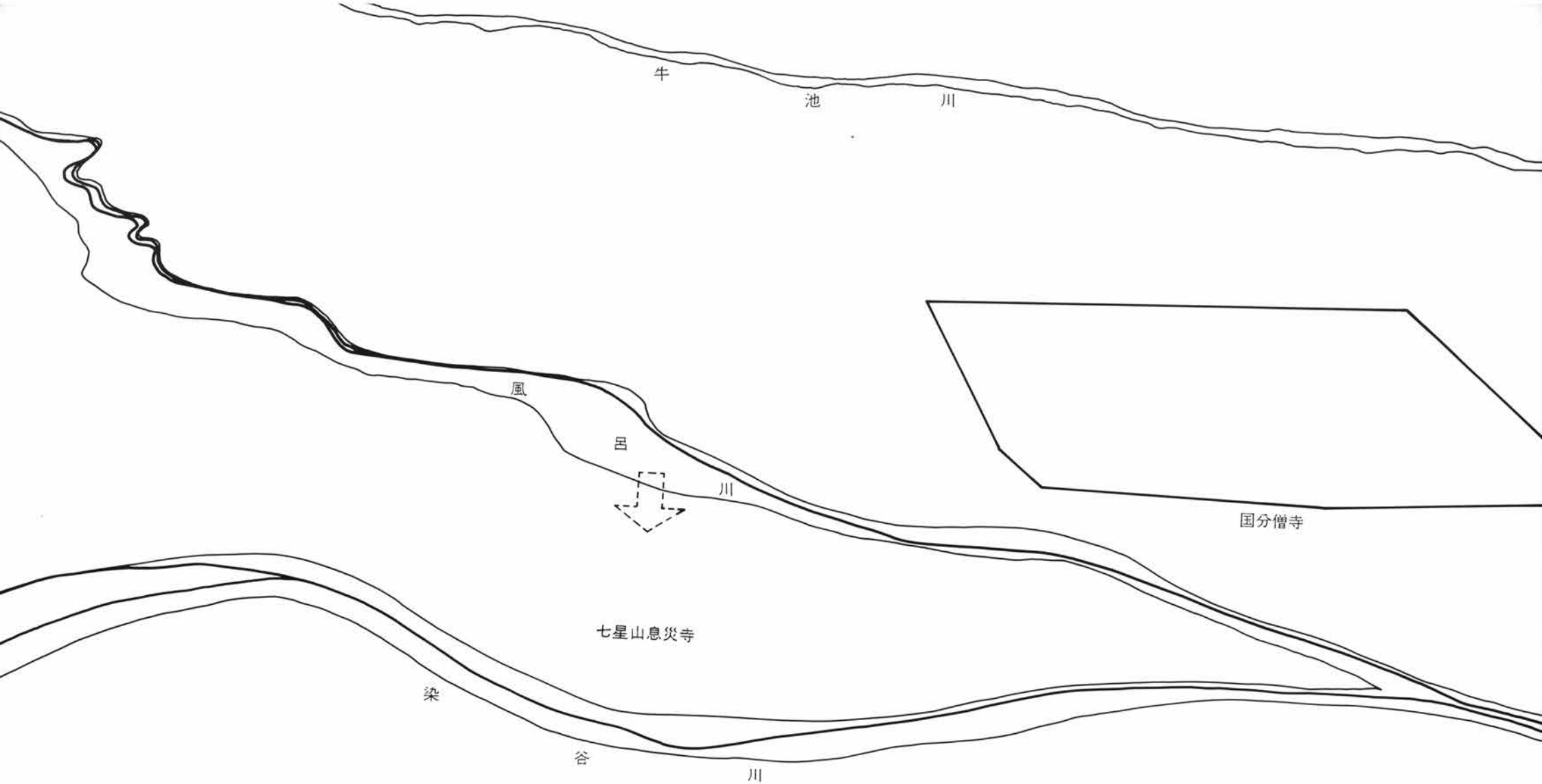
第7図版　中間地域(左)・鳥羽遺跡(右)・国府(中央)・放光寺跡(左上)


天
狗
岩
用
水
八
幡
川
山王廃寺(放光寺)
牛
池
川

第8図版　放光寺跡周辺現況

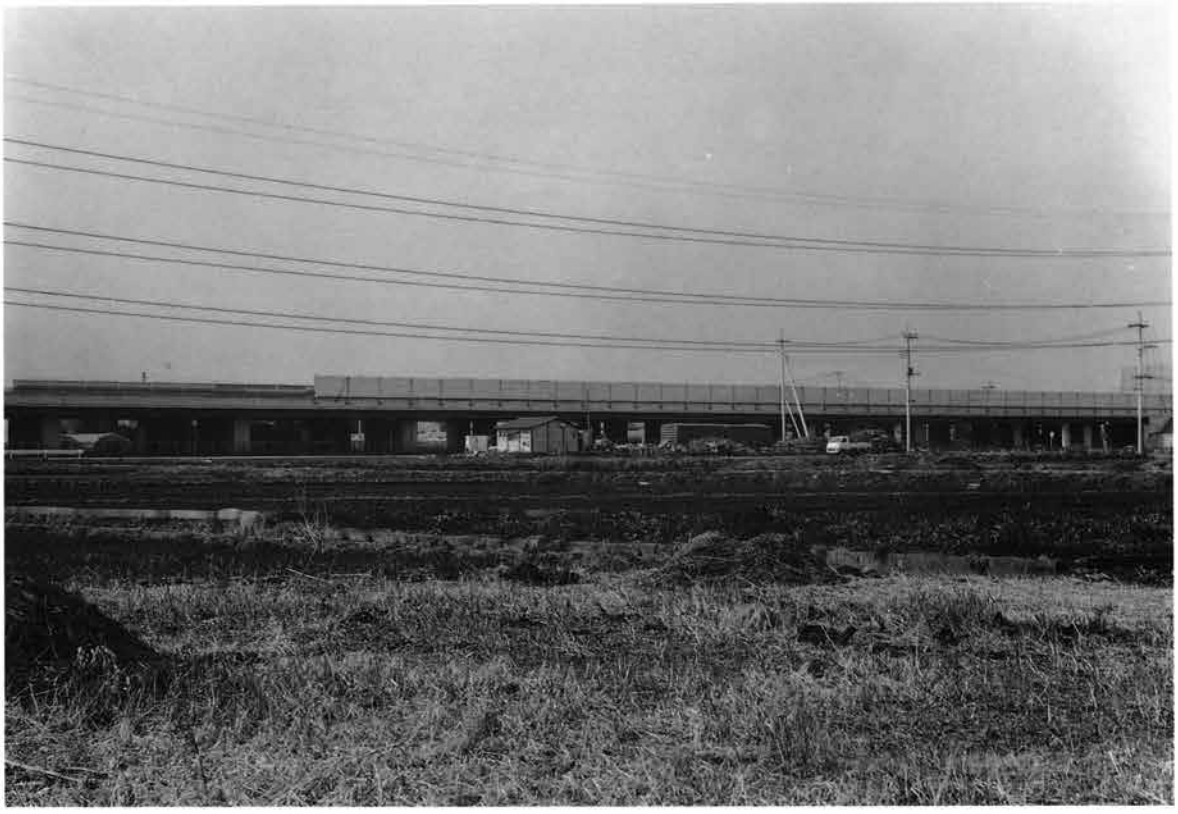

牛
池
川
神明宮
染
谷
川
上野国府
推定東山道

第9図版　国府遺跡


牛
池
川
風
呂
川
国分僧寺
七星山息災寺
染
谷
川

第10図版　中央七堂山息災寺(妙見寺)・中央右国分僧寺

1　国分僧寺金堂より国分尼寺を望む



2　国分尼寺より国分僧寺を望む

第12図版

1　D区1号住全景

2　D区1号住掘り方全景

3　D区1号住遺物出土状態（石帯）

4　D区1号住遺物出土状態

5　D区2号住全景

6　D区2号住掘り方全景

7　D区2号住カマド

8　D区2号住遺物出土状態

1　D区3号住全景

2　D区3・4号住全景

3　D区3号住カマド

4　D区3号住遺物出土状態

5　D区5号住全景

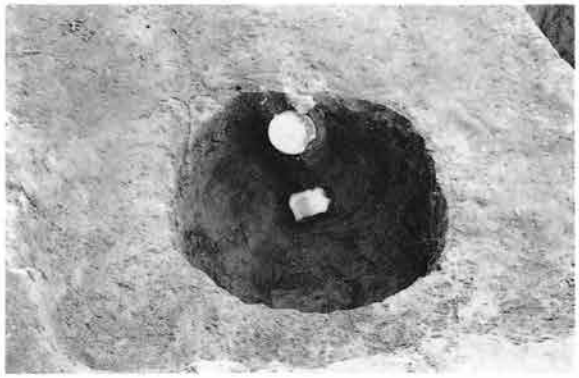
6　D区6号住遺物出土状態

7　D区6号住全景

8　D区6号住掘り方全景

第14図版

1　D区6号住カマド



2　D区6号住遺物出土状態（P21）

3　D区6号住遺物出土状態（P7）

4　D区6号住遺物出土状態（P6）

5　D区7号住周辺

6　D区7号住全景

7　D区7号住掘り方全景

8　D区7号住カマド

1　D区7号住カマド掘り方

2　D区7号住カマド掘り方

3　D区7号住南東隅部周辺遺物出土状態

4　D区8・9・21号住全景

5　D区8号住全景

6　D区8号住掘り方全景

7　D区8号住カマド

8　D区8号住カマド掘り方

第16図版

1　D区8号住遺物出土状態

2　D区8・9・21号住全景

3　D区9号住全景

4　D区9号住全景

5　D区9号住カマド

6　D区9号住カマド・カマド周辺

7　D区9号住カマド掘り方

8　D区9号住貯蔵穴周辺

1　D区9号住遺物出土状態

2　D区9号住遺物出土状態

3　D区9号住遺物出土状態

4　D区9号住遺物出土状態

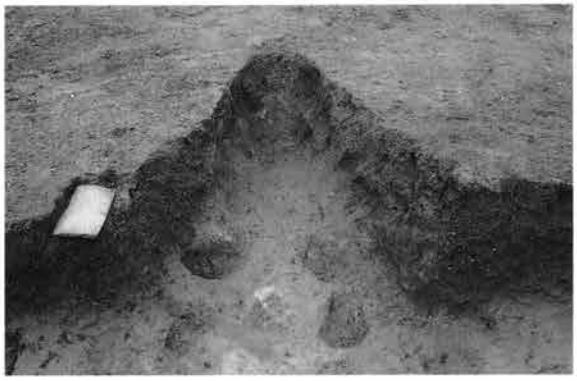
5　D区10号住全景

6　D区10号住カマド確認時状況

7　D区10号住カマド

8　D区10号住カマド

第18図版



1　D区10号住カマド

2　D区10号住遺物出土状態

3　D区10号住刀子出土状態

4　D区11号住掘り方全景

5　D区12号住全景

6　D区12号住全景

7　D区12号住カマド確認状態

8　D区12号住カマド遺物出土状態

1　D区12号住カマド遺物出土状態

2　D区12号住遺物出土状態

3　D区14号住全景

4　D区14号住遺物出土状態

5　D区14号住遺物出土状態

6　D区15号住全景

7　D区15号住カマド

8　D区15号住カマド遺物出土状態

第20図版

1　D区15号住カマド遺物出土状態

2　D区15号住カマド遺物出土状態

3　D区15号住カマド遺物出土状態

4　D区15号住遺物出土状態

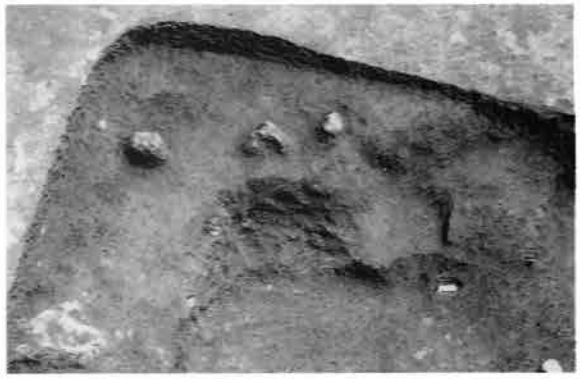
5　D区16号住全景

6　D区16号住全景

7　D区16号住カマド

8　D区16号住カマド掘り方

1　D区16号住南東隅部周辺遺物出土状態



2　D区16号住北東隅部周辺状況

3　D区16号住遺物出土状態

4　D区16号住遺物出土状態

5　D区16号住遺物出土状態

6　D区18号住全景

7　D区20号住周辺

8　D区20号住全景

第22図版

1　D区20号住掘り方全景

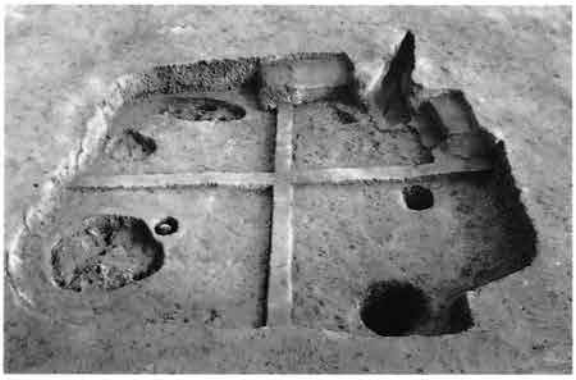
2　D区20号住カマド

3　D区20号住カマド

4　D区20号住カマド

5　D区21号住全景

6　D区21号住カマド



7　D区22号住掘り方全景

8　D区22号住カマド

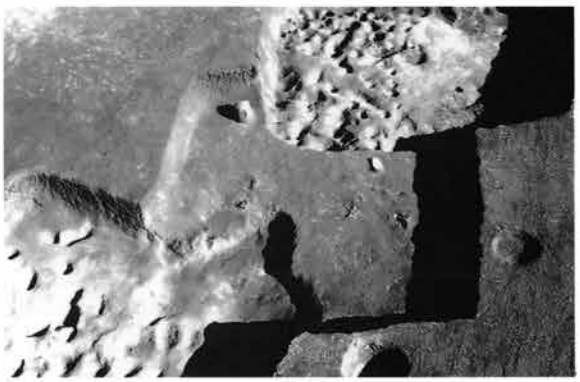
1　D区23号住掘り方全景

2　D区23号住南西隅部周辺遺物出土状態

3　D区23号住カマド

4　D区23号住カマド

5　D区23号住北東隅部周辺遺物出土状態



6　D区24号住全景

7　D区24号住掘り方全景

8　D区25号住掘り方全景

第24図版

1　D区25号住掘り方P2灰出土状態

2　D区26号住掘り方全景

3　D区26号住カマド

4　D区26号住カマド掘り方

5　D区27号住掘り方全景

6　D区27号住カマド

7　D区27号住カマド遺物出土状態

8　D区27号住カマド掘り方

1　D区28号住全景

2　D区28号住全景

3　D区28号住カマド

4　D区28号住カマド

5　D区29号住全景

6　D区29号住カマド

7　D区29号住カマド遺物出土状態

8　D区29号住カマド

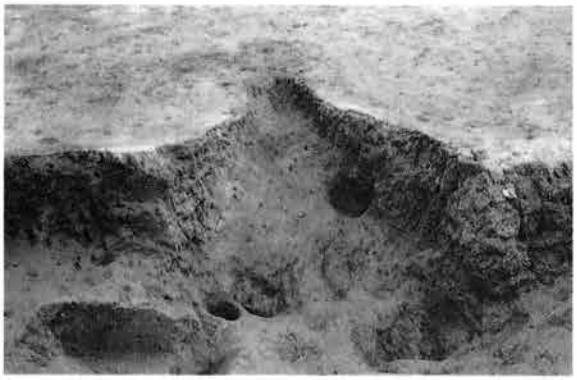
第26図版

1　D区31号住全景

2　D区31号住掘り方全景

3　D区31号住カマド遺物出土状態

4　D区31号住カマド

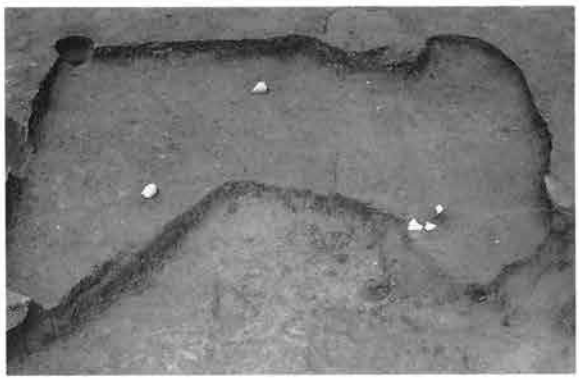


5　D区31号住カマド掘り方

6　D区36号住掘り方全景

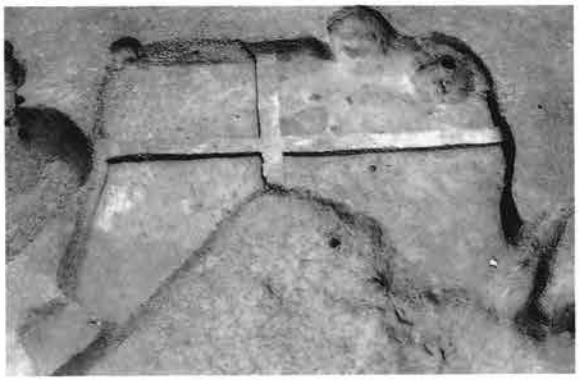
7　D区36号住カマド

8　D区36号住遺物出土状態



1　D区37号住全景

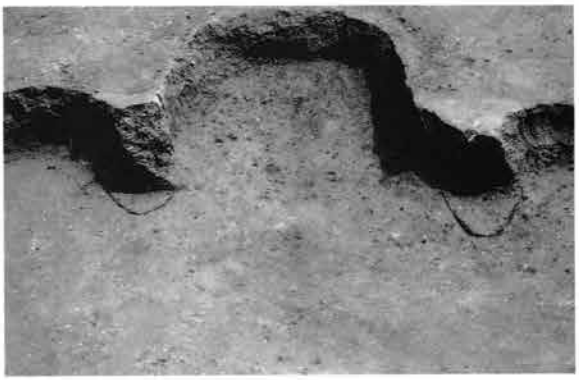
2　D区37号住全景



3　D区37号住掘り方全景

4　D区37号住カマド遺物出土状態

5　D区37号住カマド



6　D区37号住カマド

7　D区37号住カマド掘り方

8　D区37号住南東隅部周辺遺物出土状態

第28図版

1　D区37号住貯蔵穴遺物出土状態

2　D区38号住全景

3　D区38号住全景

4　D区38号住掘り方全景

5　D区38号住カマド

6　D区38号住カマド掘り方

7　D区38号住遺物出土状態

8　D区39号住全景

1　D区40号住全景

2　D区40号住掘り方全景

3　D区40号住カマド遺物出土状態

4　D区40号住カマド掘り方

5　D区41号住全景

6　D区42号住全景

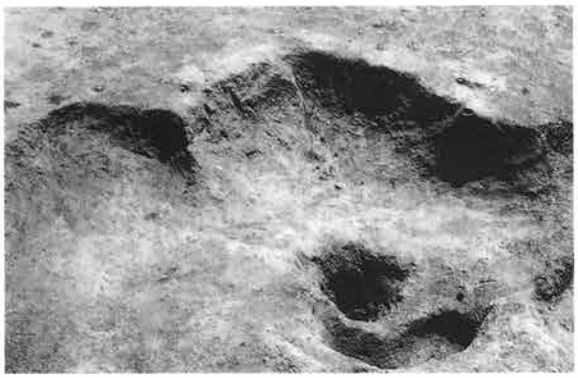
7　D区42号住カマド掘り方

8　D区43号住全景

第30図版

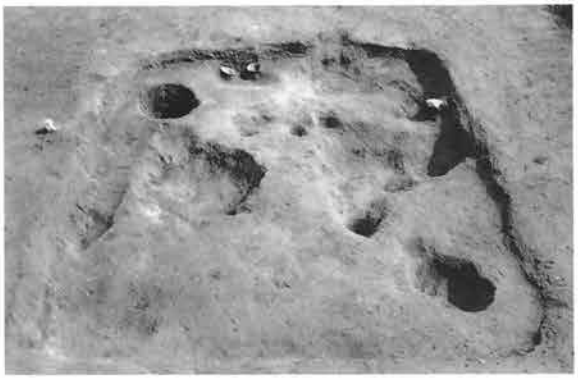
1　D区44号住全景

2　D区44号住カマド



3　D区44号住カマド掘り方

4　D区46号住全景



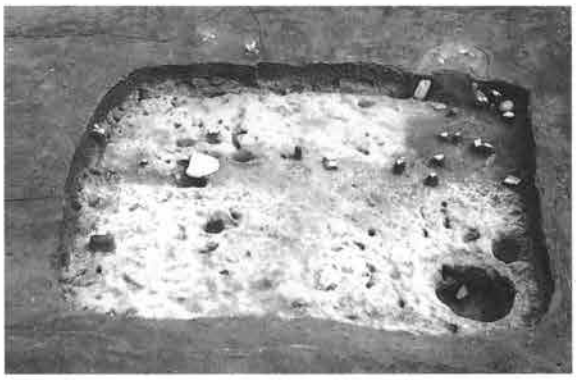
5　D区46号住掘り方全景

6　D区46号住カマド

7　D区46号住カマド

8　D区46号住カマド掘り方

1　D区46号住遺物出土状態



2　C区1号住全景

3　C区1号住全景

4　C区1号住カマド周辺遺物出土状態

5　C区1号住カマド遺物出土状態

6　C区1号住貯蔵穴

7　C区1号住遺物出土状態

8　C区2号住カマド遺物出土状態

第32図版

1　C区2号住カマド掘り方

2　C区3号住全景

3　C区3号住第1カマド

4　C区3号住第2カマド

5　C区3号住第2カマド掘り方

6　C区3号住第2カマド掘り方

7　C区4号住全景

8　C区5号住全景

1　C区5号住全景

2　C区5号住カマド

3　C区5号住カマド

4　C区6号住全景

5　C区6号住全景

6　C区7号住掘り方全景

7　C区7号住カマド遺物出土状態

8　C区7号住遺物出土状態

第34図版

1　H区1号住全景

2　H区1号住掘り方全景

3　H区1号住カマド

4　H区1号住カマド掘り方

5　H区1号住遺物出土状態

6　H区1号住遺物出土状態

7　H区1号住遺物出土状態

8　H区1号住遺物出土状態

1　H区２号住全景

2　H区２号住カマド

3　H区２号住カマド掘り方

4　H区２号住遺物出土状態

5　H区３号住全景

6　H区３号住カマド掘り方

7　H区４号住全景

8　H区４号住新カマド

第36図版

1　H区4号住旧カマド

2　H区4号住遺物出土状態

3　H区5号住全景

4　H区5号住掘り方全景

5　H区6・7号住全景

6　H区6・7号住掘り方全景

7　H区6号住カマド

8　H区6号住遺物出土状態

1　H区８号住全景

2　H区９号住全景

3　H区９号住掘り方全景

4　H区９号住カマド

5　H区９号住カマド掘り方

6　H区９号住遺物出土状態

7　H区12号住全景

8　H区12号住掘り方

第38図版

1　H区12号住遺物出土状態

2　H区35号住全景

3　H区35号住掘り方全景

4　H区36号住カマド

5　H区36号住カマド掘り方

6　H区38号住全景

7　H区39号住掘り方全景

8　H区39号住カマド

1　H区41号址全景

2　H区42号址全景

3　H区43号住全景

4　H区43号住掘り方全景

5　H区43号住カマド

6　H区43号住カマド掘り方

7　H区44号住全景（農道西）

8　H区44号住全景（農道下）

第40図版

1　H区44号住カマド

2　H区44号住カマド掘り方

3　H区45号住掘り方全景

4　H区45号住貯蔵穴

5　H区46号住全景

6　H区46号住掘り方全景

7　H区46号住カマド

8　H区46号住カマド掘り方

1　H区46号住カマド掘り方

2　H区47号住全景

3　H区53号住全景

4　H区53号住カマド

5　H区53号住遺物出土状態

6　H区53号住遺物出土状態

7　H区54号住全景

8　H区57号住全景

第42図版

1　H区57号住カマド掘り方

2　H区61号住全景

3　H区61号住掘り方全景

4　H区61号住カマド

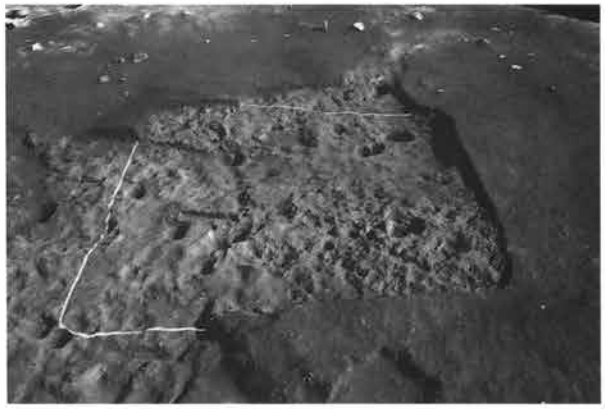
5　H区61号住カマド掘り方

6　H区62号住全景

7　H区62号住掘り方全景

8　H区62号住カマド

1　H区62号住遺物出土状態



2　H区63号住全景

3　H区64号住全景

4　H区65号住全景

5　H区65号住掘り方全景

6　H区65号住遺物出土状態

7　H区66号住全景（農道下）

8　H区66号住掘り方全景（農道下）

第44図版

1　H区66号住カマド

2　H区66号住遺物出土状態

3　H区67号住全景

4　H区67号住遺物出土状態

5　H区68号住全景

6　H区68号住カマド

7　H区68号住カマド掘り方

8　H区68号住遺物出土状態

1　H区69号住全景

2　H区69号住カマド

3　H区69号住カマド掘り方

4　H区71号住全景

5　H区72号住全景

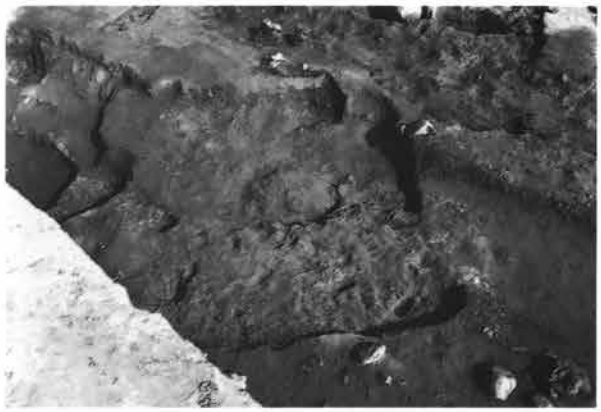
6　H区72号住カマド

7　H区72号住遺物出土状態

8　H区72号住遺物出土状態

第46図版

1　H区73号住全景



2　H区73号住掘り方全景

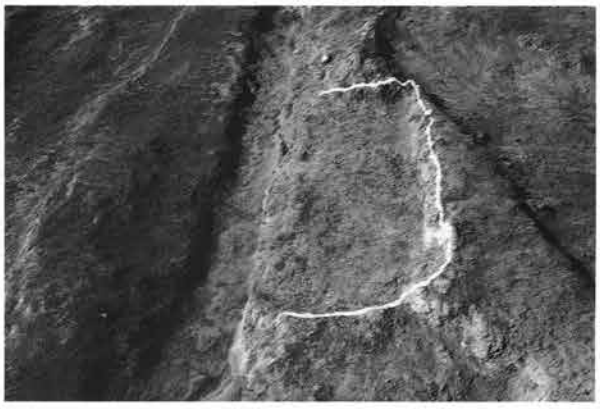
3　H区73号住カマド

4　H区73号住カマド掘り方

5　H区76･77号住全景

6　H区83号住全景

7　H区87号址全景



8　H区89号址全景

1　H区92号住全景

2　H区92号住遺物出土状態

3　H区97号住全景

4　H区97号住カマド

5　H区97号住カマド掘り方

6　H区97号住遺物出土状態

7　H区97号住遺物出土状態

8　H区97号住遺物出土状態

第48図版

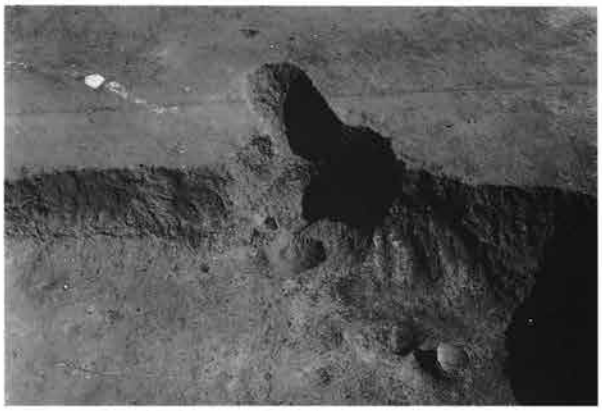
1　H区98号住全景

2　H区98号住カマド掘り方

3　H区99号住全景

4　H区99号住カマド

5　H区100号住全景



6　H区100号住カマド掘り方

7　H区100号住遺物出土状態

8　H区100号住遺物出土状態

1　H区101号住全景

2　H区101号住カマド

3　H区101号住カマド掘り方

4　H区101号住遺物出土状態

5　H区102号住全景

6　H区103号住カマド

7　H区104号住全景

8　H区104号住カマド掘り方

第50図版

1　H区105号住・148号址全景

2　H区105号住カマド掘り方

3　H区106号住全景

4　H区106号住カマド掘り方

5　H区107号住全景

6　H区107号住カマド

7　H区108号住全景

8　H区108号住カマド

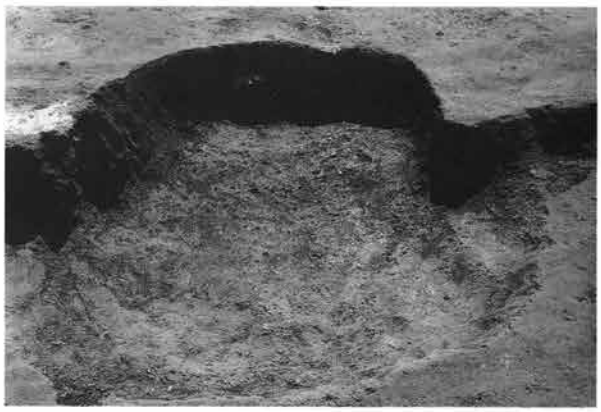
1　H区109号住全景

2　H区112号住全景

3　H区116号住全景

4　H区117号住全景

5　H区117号住カマド



6　H区117号住カマド掘り方

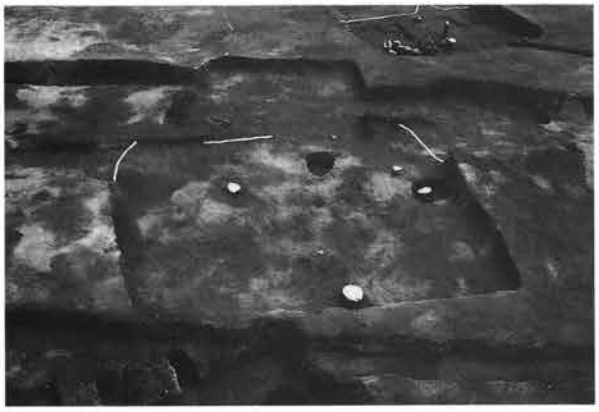
7　H区118号住全景

8　H区118号住カマド掘り方

第52図版

1　H区119号住全景

2　H区120号住全景

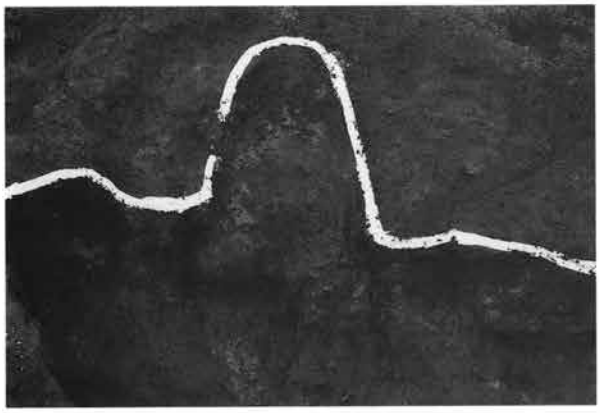


3　H区121号住・122号址全景

4　H区123号住全景

5　H区123号住遺物出土状態

6　H区124号住全景（農道西）



7　H区124号住新カマド

8　H区124号住旧カマド

1　H区125号住全景

2　H区126号住全景

3　H区127・128・133・134号住全景（農道西）

4　H区127号住カマド

5　H区128号住全景

6　H区128号住掘り方全景

7　H区128号住カマド

8　H区128号住カマド掘り方

第54図版

1　H区129号住全景

2　H区130号住全景

3　H区131号住全景

4　H区132号住全景

5　H区132号住掘り方全景

6　H区135号住全景

7　H区135号住カマド掘り方

8　H区136号住全景

1　H区137号住全景

2　H区137号住カマド掘り方

3　H区138号住全景

4　H区140・144号住全景

5　H区141号住全景

6　H区142号住全景（農道下）

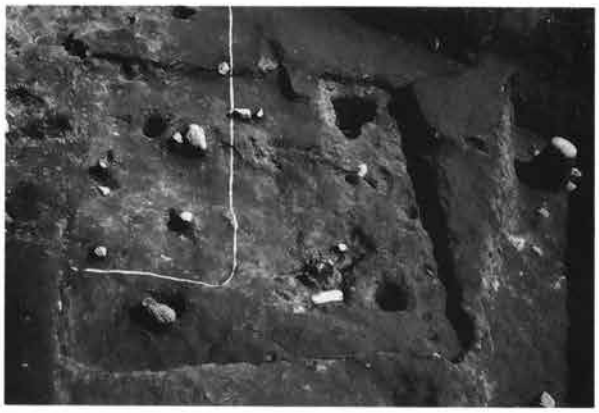
7　H区142号住全景（農道西）

8　H区143号住全景

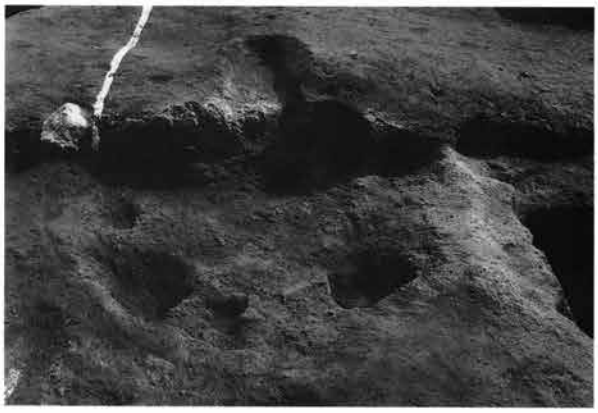
第56図版

1　H区145号住全景

2　H区145号住カマド



3　H区146号住全景



4　H区146号住カマド掘り方

5　H区147号住全景

6　H区147号住カマド

7　H区147号住カマド掘り方

8　H区154号住カマド

1　H区156号住全景

2　H区156号住遺物出土状態

3　H区157号住全景

4　H区158号住全景

5　H区158号住カマド掘り方

6　H区158号住遺物出土状態

7　H区158号住遺物出土状態

8　H区159号住全景

第58図版

1　H区4号掘立

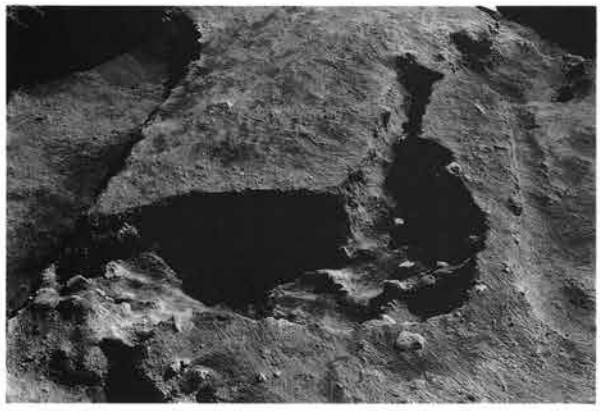
2　H区56・57号土坑

3　H区58・59号土坑

4　H区70～77号土坑

5　H区86・87号土坑

6　H区95号土坑



7　H区97号土坑

8　H区112号土坑

1　H区113号土坑

2　H区117号土坑

3　H区119号土坑

4　H区139号土坑

5　H区164号土坑

6　H区166号土坑

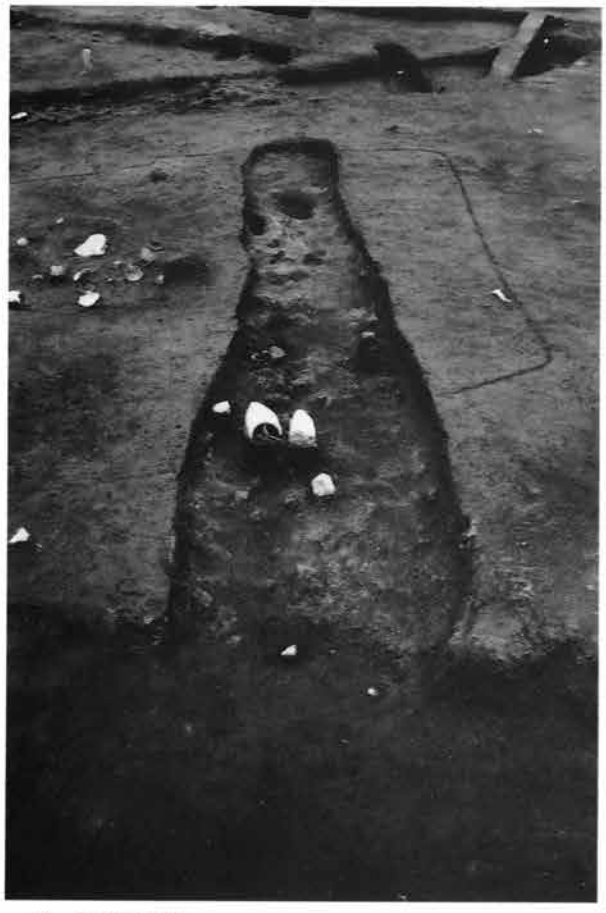
7　H区4号井戸

8　H区5号井戸

第60図版

1　H区２号溝

2　H区３号溝

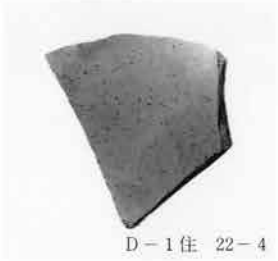


3　H区13号溝

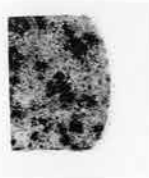
4　H区14号溝

D－1住　22－1

D－1住　22－2


D－1住　22－4

D－1住　22－7

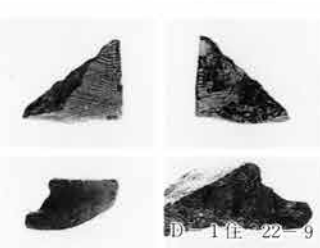


D－1住　22－3

D－1住
22－5

D－1住

D－1住
22－8


D－1住　22－9

D－2住　23－1

D－2住　23－2

D－2住　23－3

D－1住　22－10

D－2住　23－4

D－2住　23－5

D－2住　23－7

D－2住　23－6

D－2住　24－1

D－2住　24－2

D－2住　24－3

D－2住　24－7

D－2住　24－8

D－2住　24－5

D－2住　24－

D－2住　24－6

第62図版

D－3住
26－1

D－3住　26－2

D－3住　26－3

D－6住 29－2

D－3住
26－4

D－4住　27－1

D－4住　27－2

D－4住　27－3

D－6住　29－1

D－5住　28－2

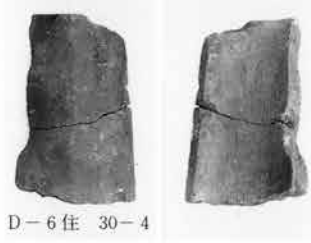
D－5住　28－1

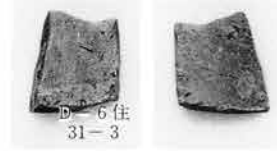
D－6住　30－1

D－6住　30－2

D－6住
31－2

D－6住　30－3


D－6住　30－4


D－6住
31－3

D－6住　30－5

D－6住　31－4

D－7住　33－1

D－6住　31－1

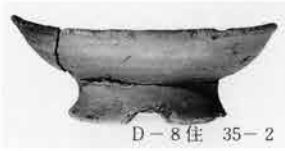
D－7住　33－2

D－7住　33－7

D－7住　33－6

D－7住　33－3

D－8住　35－1


D－8住　35－2

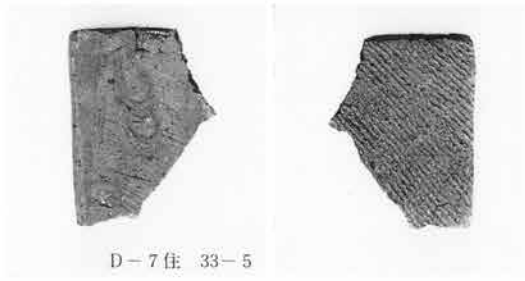
D－8住　35－3

D－8住　35－4

D－7住　33－4

D－9住　38－2

D－9住　36－3


D－7住　33－5

D－9住
38－4

D－9住　38－1

D－9住　36－1

D－9住　36－2

D－9住　38－3

第64図版

D－9住　39－1

D－9住　39－2

D－10住　41－1

D－10住　41－2

D－10住　41－4

D－10住　41－5

D－10住　41－9

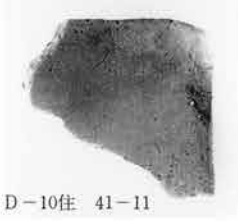
D－10住　41－3

D－10住　41－6

D－10住　41－7

D－10住　41－8

D－10住　41－10


D－10住　41－11

D－10住　41－12

D－10住　42－1

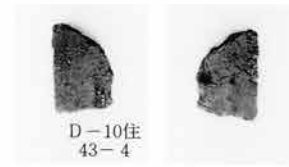
D－10住　41－13

D－10住　43－3

D－10住　42－2

D－10住　42－3

D－10住　44－1



D－10住
43－4

D－10住
43－5

D－10住　43－1

D－10住　44－2

D－10住　43－2

D－10住　44－3

D－10住　45－1

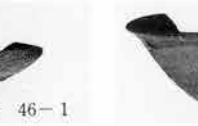
第66図版

D－10住　44－4

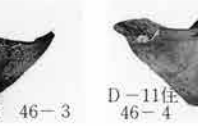
D－10住　45－3

D－10住
45－2

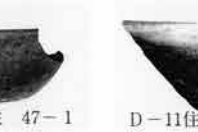
D－11住　46－1


D－11住　46－2

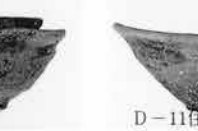
D－11住　46－3


D－11住
46－4

D－11住　47－1


D－11住　47－2

D－11住　47－3


D－11住　47－4

D－11住　47－5

D－11住　47－6

D－11住　47－7

D－11住
47－8

D－11住　47－9

D－11住　48－1

D－11住　48－3

D－11住　48－5

D－11住　48－4

D－11住　48－6

D－11住
48－2

D－11住　48－7

D－11住　48－9

D－11住　48－8

D－11住　49－1

D－11住　49－2

D－11住　48－11

D－12住　50－1

D－12住
50－2

D－12住　50－3

D－12住　52－1

D－12住　50－4

D－12住　50－5

D－12住
52－5

D－12住
52－6

D－12住　52－2

D－12住　52－3

D－12住　52－4

D－12住　53－4

D－12住　53－1

第68図版

D－12住　53－2

D－12住　53－3

D－12住　53－5

D－14住　56－6

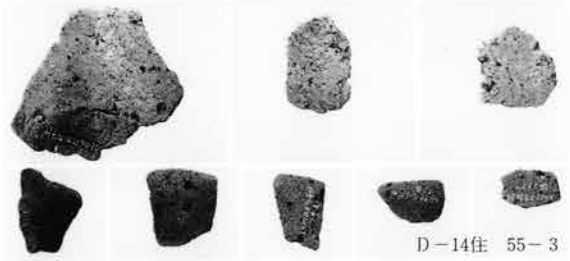
D－15住　59－1

D－15住　59－3

54－1

55－1

D－14住　55－2


D－14住　55－3

D－14住　56－1

D－14住　56－2

D－14住
56－3

D－14住
56－4

D－14住　56－5

D－15住　57－1

D－15住　57－2

D－15住　57－3

D－15住　58－1

D－15住　58－3

D－15住　58－4

D－15住　58－2

D－15住　58－5

D－15住　59－2

D－15住　59－4

D－15住
59－5

D－15住　59－7

D－15住　60－3

D－15住　60－1

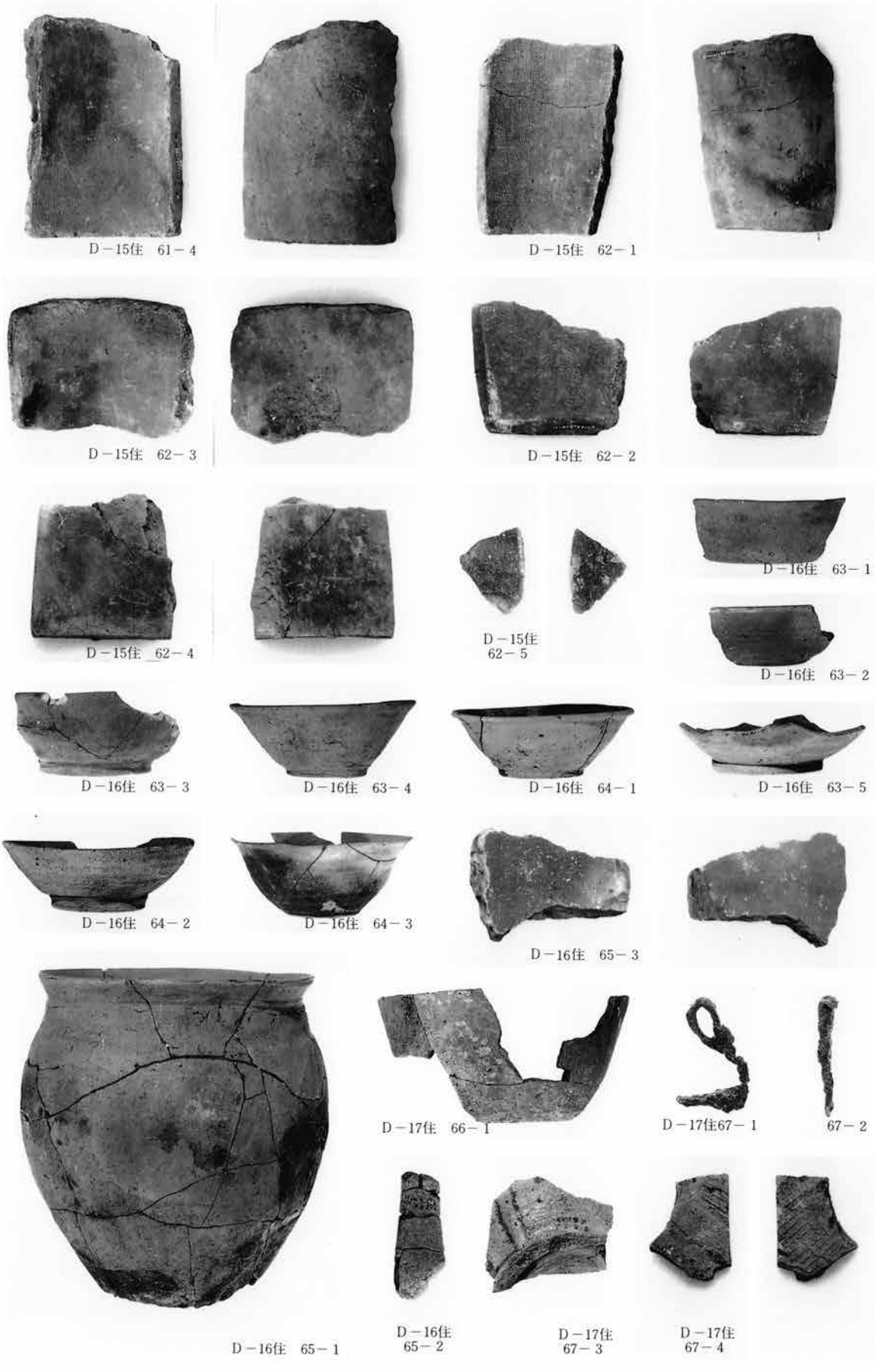
D－15住　61－2

D－15住　60－2

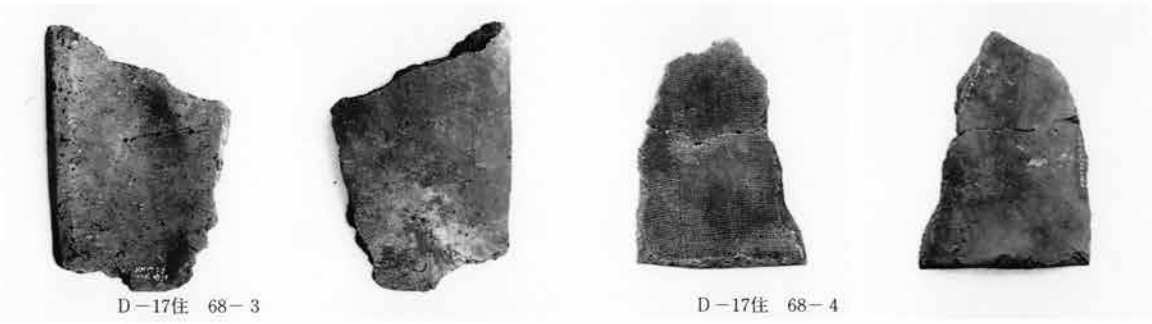
D－15住　61－1

D－15住　61－3

第70図版

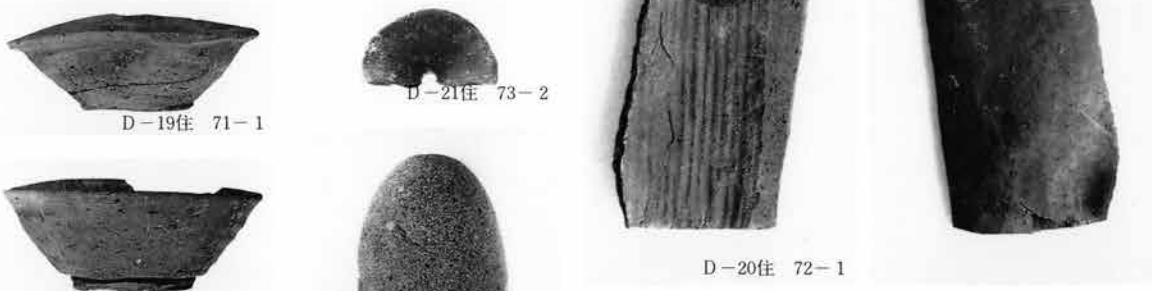

D－15住　61－4
D－15住　62－1
D－15住　62－3
D－15住　62－2
D－15住　62－4
D－15住
62－5
D－16住　63－1
D－16住　63－2
D－16住　63－3
D－16住　63－4
D－16住　64－1
D－16住　63－5
D－16住　64－2
D－16住　64－3
D－16住　65－3
D－16住　65－1
D－17住　66－1
D－17住67－1
67－2
D－16住
65－2
D－17住
67－3
D－17住
67－4

D－17住　68－1　　D－17住　68－2

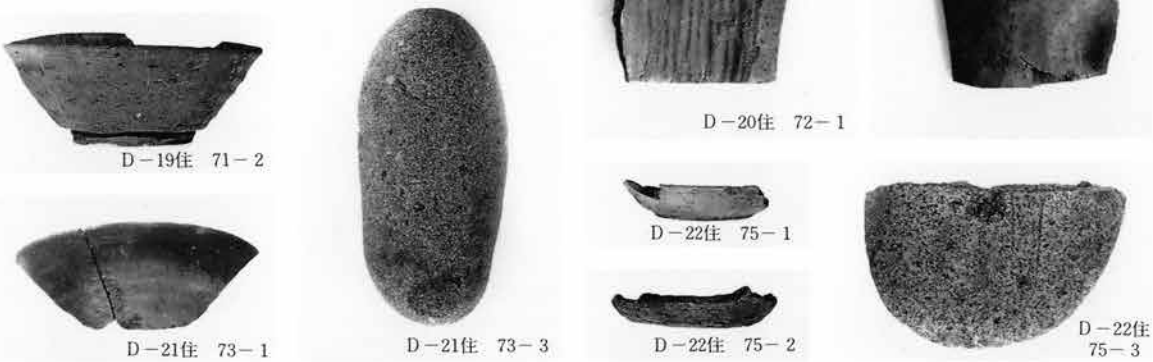


D－17住　68－3　　D－17住　68－4

D－17住　68－5



D－19住　71－1　　D－21住　73－2



D－19住　71－2　　D－20住　72－1

D－22住　75－1

D－21住　73－1　　D－21住　73－3　　D－22住　75－2　　D－22住　75－3

D－22住　75－5　　D－22住　75－6　　D－22住　75－7

第72図版

D－22住　75－4

D－23住　78－3

D－23住　76－1

D－23住　76－2

D－23住　76－3

D－23住　76－4

D－23住　76－5

D－23住　76－6

D－23住　76－7

D－23住　78－1

D－23住
78－2

78－4

D－23住　78－5

D－23住　78－6

D－23住　78－9

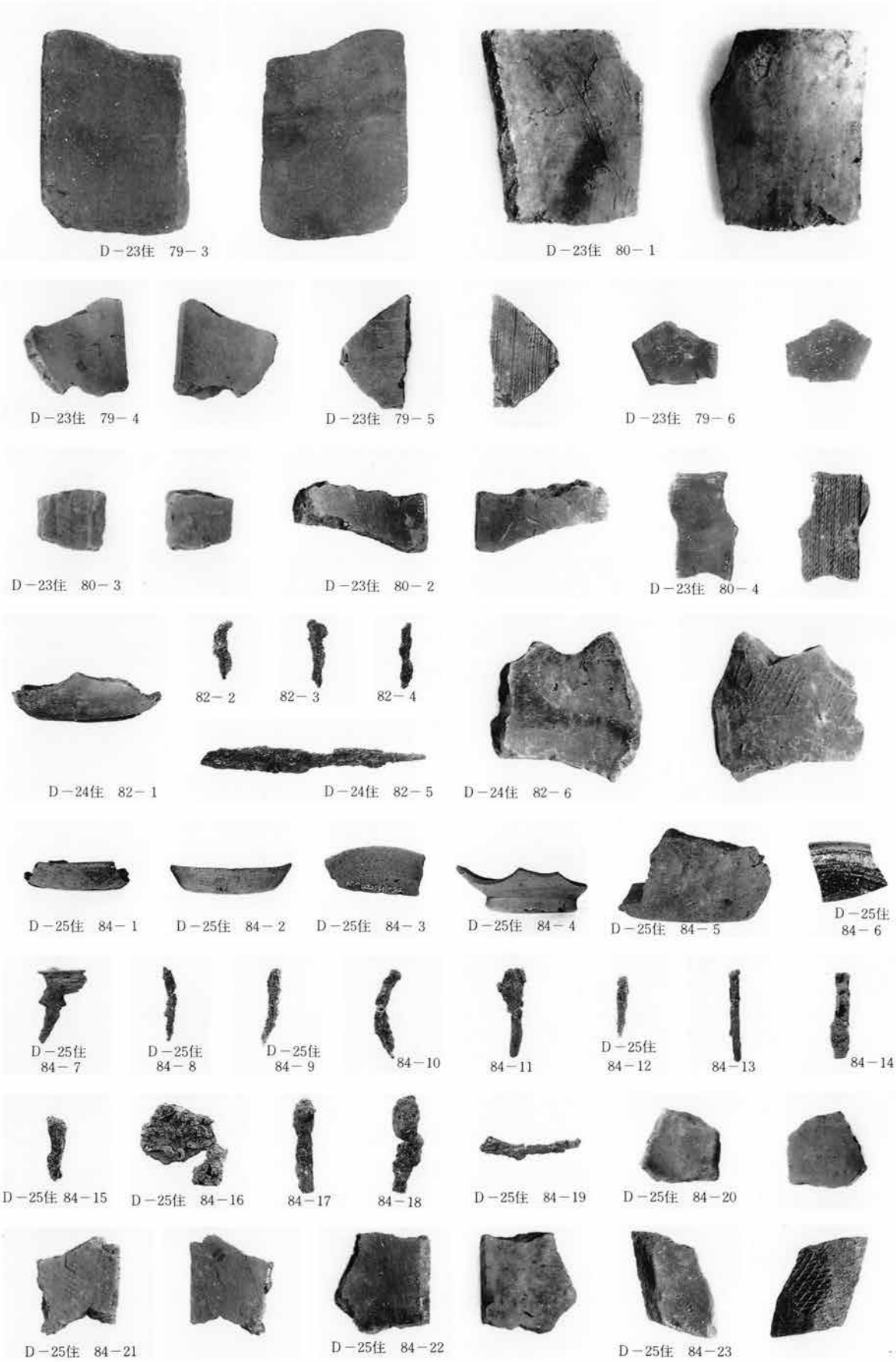
D－23住　78－8

D－23住　79－2

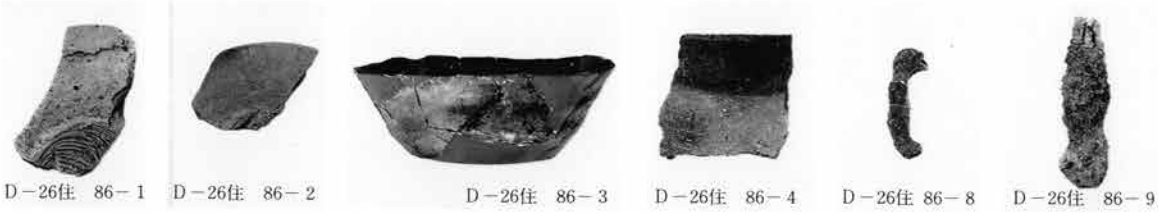
D－23住　78－10

D－23住　79－1

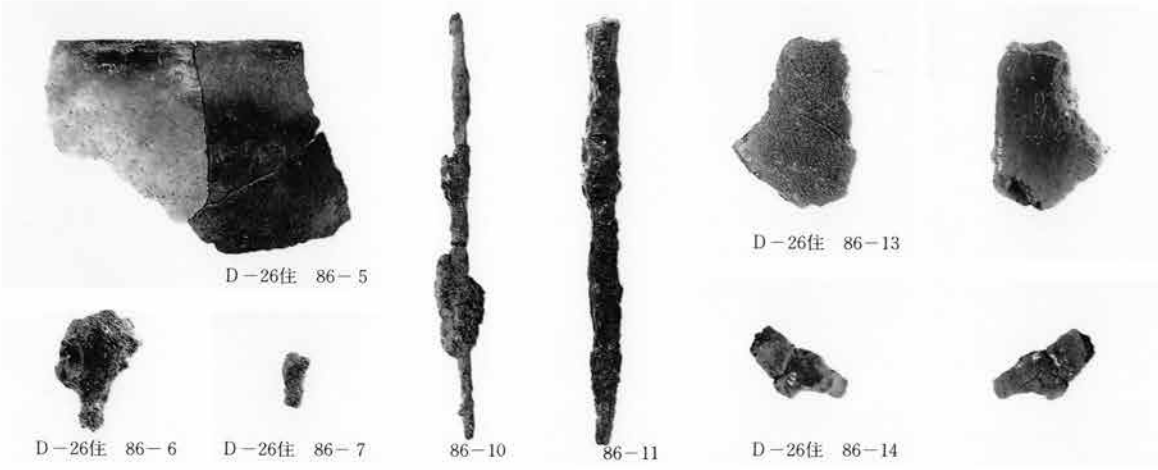
D－23住　78－7


D－23住　79－3
D－23住　80－1
D－23住　79－4
D－23住　79－5
D－23住　79－6
D－23住　80－3
D－23住　80－2
D－23住　80－4
82－2
82－3
82－4
D－24住　82－1
D－24住　82－5
D－24住　82－6
D－25住　84－1
D－25住　84－2
D－25住　84－3
D－25住　84－4
D－25住　84－5
D－25住
84－6
D－25住
84－7
D－25住
84－8
D－25住
84－9
84－10
84－11
D－25住
84－12
84－13
84－14
D－25住 84－15
D－25住　84－16
84－17
84－18
D－25住　84－19
D－25住　84－20
D－25住　84－21
D－25住　84－22
D－25住　84－23

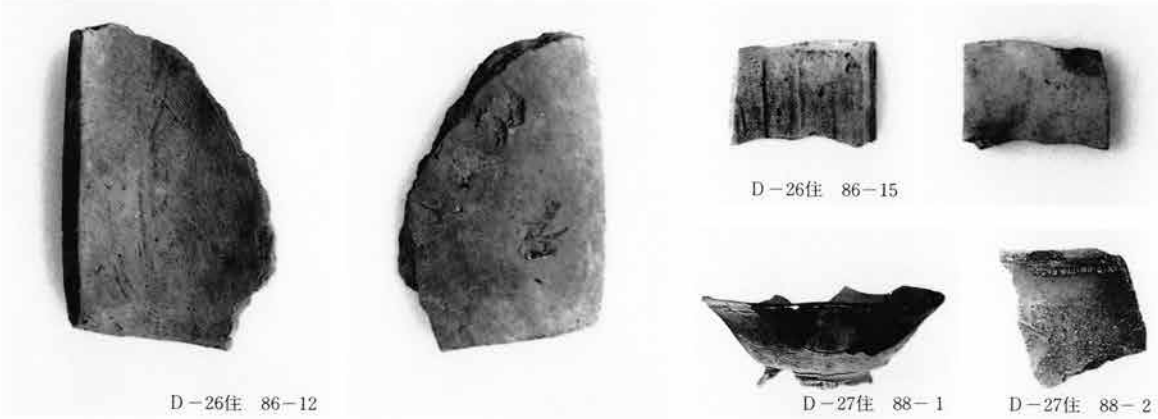
第74図版



D－26住　86－1　D－26住　86－2　D－26住　86－3　D－26住　86－4　D－26住　86－8　D－26住　86－9

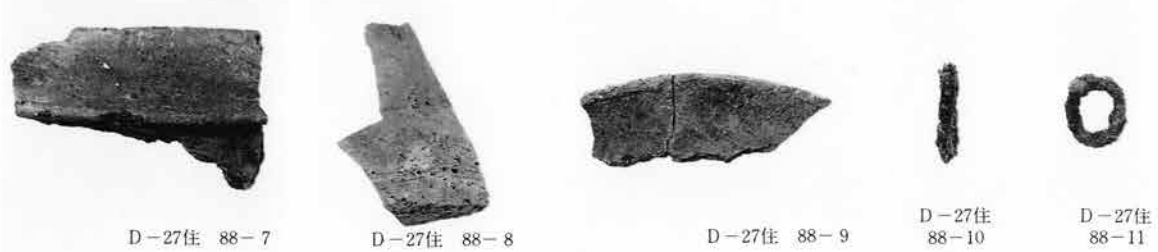


D－26住　86－5　D－26住　86－13　D－26住　86－6　D－26住　86－7　86－10　86－11　D－26住　86－14

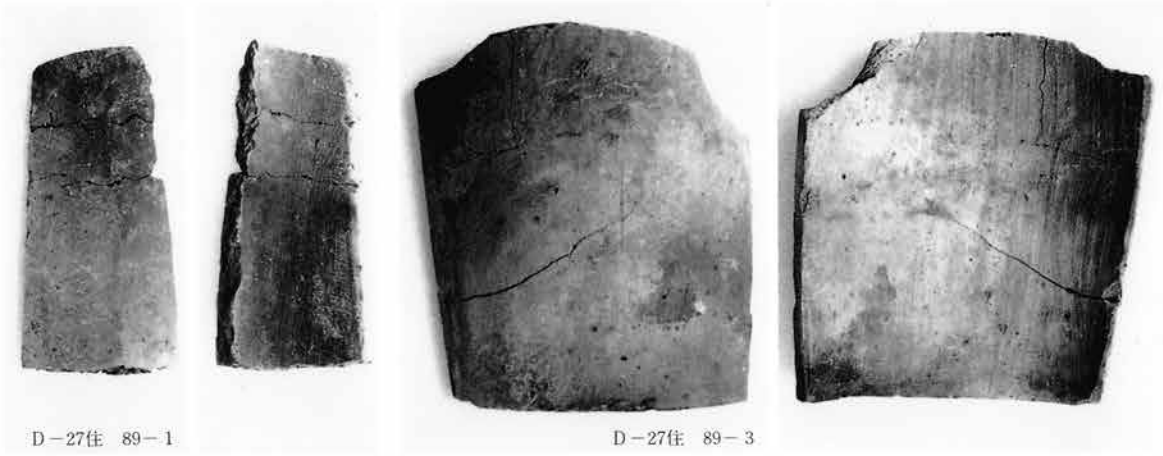


D－26住　86－12　D－26住　86－15　D－27住　88－1　D－27住　88－2

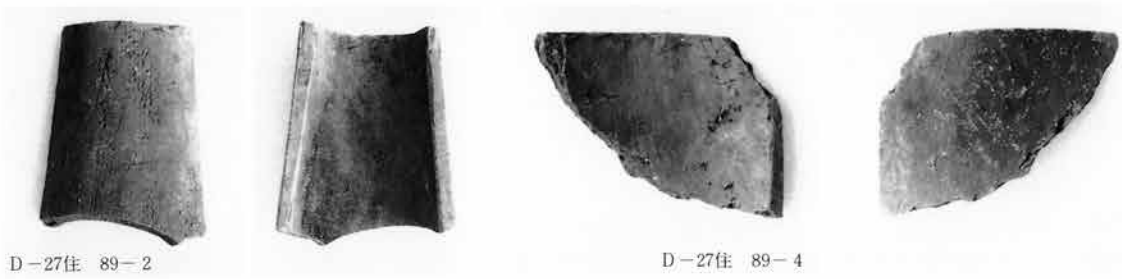
D－27住　88－3　D－27住　88－4　D－27住　88－5　D－27住　88－6



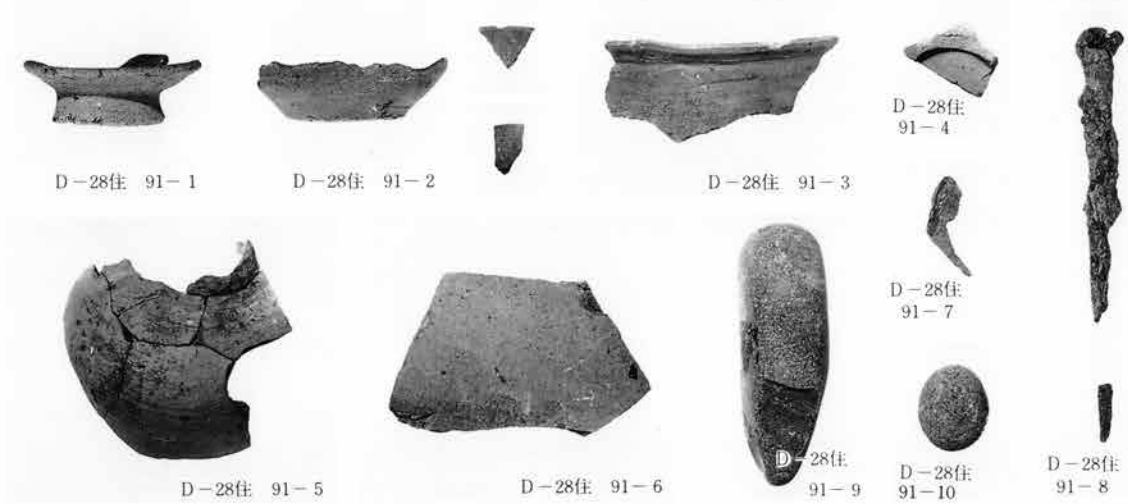
D－27住　88－7　D－27住　88－8　D－27住　88－9　D－27住　88－10　D－27住　88－11



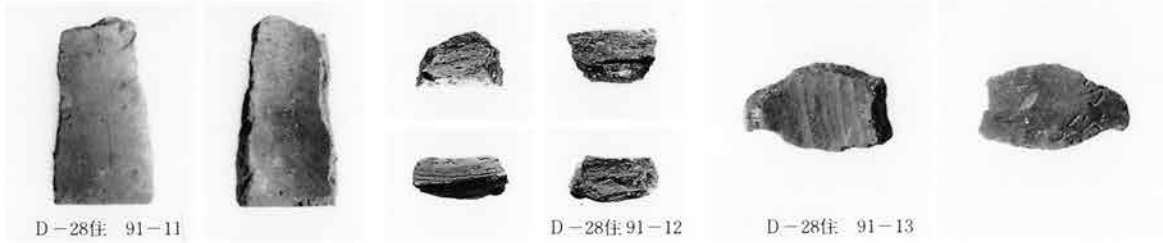
D－27住　89－1　　D－27住　89－3



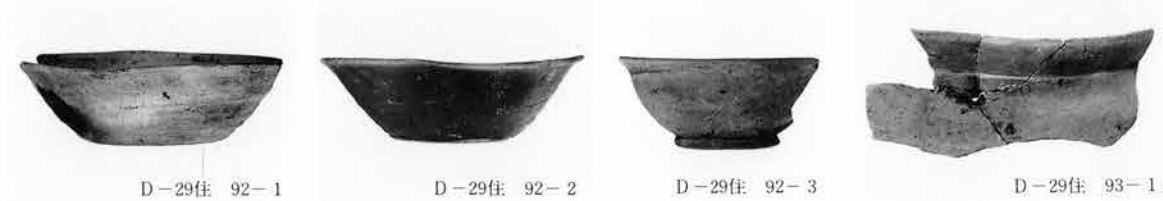
D－27住　89－2　　D－27住　89－4



D－28住　91－1　D－28住　91－2　D－28住　91－3　D－28住 91－4　D－28住 91－7　D－28住 91－5　D－28住 91－6　D－28住 91－9　D－28住 91－10　D－28住 91－8



D－28住　91－11　D－28住 91－12　D－28住　91－13



D－29住　92－1　D－29住　92－2　D－29住　92－3　D－29住　93－1

第76図版

D－29住
93－2

D－29住　93－3

D－29住
93－4

D－29住　93－5

D－29住
93－6

D－29住　94－1

D－30住
95－1

D－30住　95－2

D－30住　95－4

D－30住　95－3

D－30住　95－6

D－30住　95－5

D－31住　96－1

D－31住　96－2

D－31住　96－3

D－31住　97－1

D－31住　96－4

D－31住
96－5

D－31住
96－6

D－31住　96－7

D－31住　97－2

D－31住　97－3

D－31住　97－4

D－31住　98－5

D－31住　98－4

D－31住　98－1

D－36住　100－1

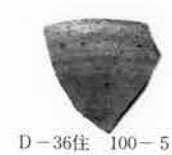
D－36住　100－2

D－36住　100－3

D－31住　98－2

D－36住　100－4

D－31住　98－3



D－36住　100－5

D－36住　100－6

D－36住　100－7

D－36住　100－10

D－36住　100－8

第78図版

D－36住　101－1

D－36住　101－2

D－37住　102－1

D－37住　102－2

D－37住　102－3

D－37住　103－1

D－37住　103－2

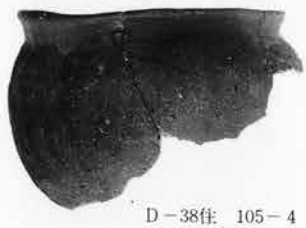
D－37住　103－3

D－38住　105－1

D－38住
105－2

D－37住　103－4

D－38住　105－3


D－38住　105－4

D－38住　105－5

105－6

D－38住　105－7

D－38住　105－9

D－38住　106－4

D－38住　105－11

D－38住　105－12

D－38住　106－5

D－38住　105－8

D－38住　105－10

D－38住　106－3

D－38住　106－2

D－38住　106－1

D－40住　108－1

D－40住　108－2

D－40住　108－3

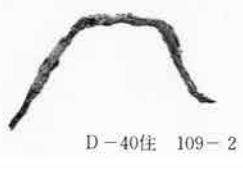
D－40住　108－5

D－40住　109－3

D－40住　108－4

D－40住　108－6

D－40住　109－1



D－40住　109－2

D－40住　109－5

第80図版

D－40住　109－4

D－40住　110－1

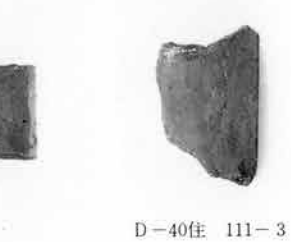
D－40住　110－2

D－40住　111－1

D－40住　110－3

D－40住　111－2

D－40住　109－6



D－40住　111－3

D－40住　112－2

D－40住　112－1

D－40住　112－4

D－40住　112－3

D－40住　113－3

D－40住　113－2

D－40住　113－1

D－41住　114－1

D－41住　114－2

D－44住　116－2

D－46住
117－1

D－46住　117－2

D－44住
116－1

D－44住　116－3

D－46住　117－3

D－46住　117－4

D－43住　115－1

D－44住　116－4

D－46住　117－5

D－46住　118－1

第82図版

D－46住　118－2

D－46住　118－6

D－46住　118－3

D－46住　118－8

D－46住　118－4

D－46住　118－5

D－47住　119－2

C－1住　121－1

D－46住　118－7

C－1住　121－3

C－1住　121－2

D－47住　119－3

D－47住　119－1

C－1住　123－1

D－47住　119－4

C－1住　123－2

C－1住　123－3

C－1住　123－4

C－1住　124－2

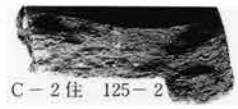
C－1住　124－1

C－1住　124－5

C－1住　124－3

C－1住　124－4

C－2住　125－1


C－2住　125－2

C－2住　126－1

C－2住　125－4

C－2住　125－3

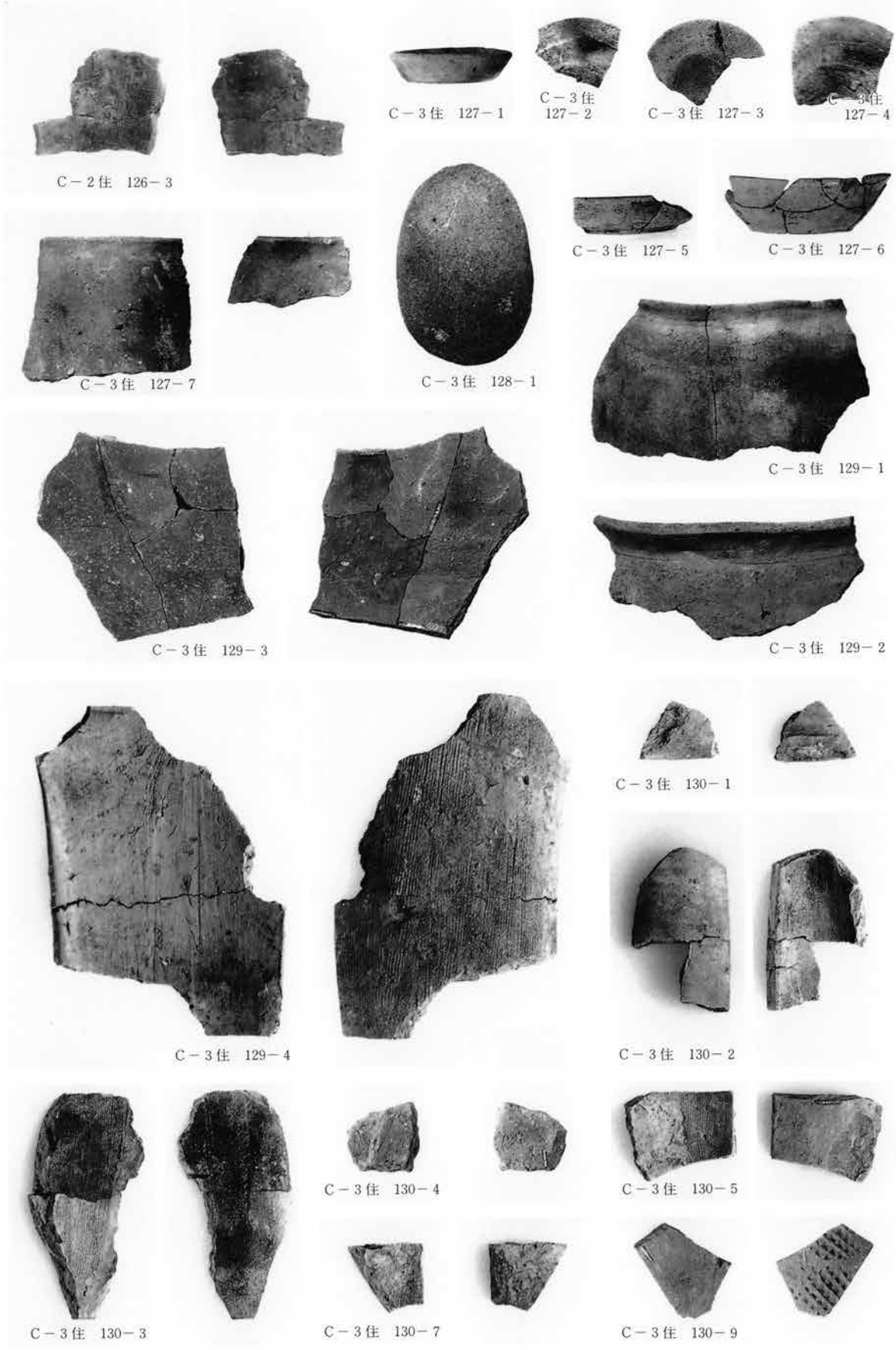
C－2住　126－2

C－2住　125－5

C－2住　126－4

C－2住
126－5

第84図版


C－3住　127－1
C－3住
127－2
C－3住　127－3
C－3住
127－4
C－2住　126－3
C－3住　127－5
C－3住　127－6
C－3住　127－7
C－3住　128－1
C－3住　129－1
C－3住　129－3
C－3住　129－2
C－3住　129－4
C－3住　130－1
C－3住　130－2
C－3住　130－3
C－3住　130－4
C－3住　130－5
C－3住　130－7
C－3住　130－9

C－3住　130－6

C－5住　133－1

C－5住　133－2

C－5住　133－3

C－3住　130－8

C－5住　133－4

C－5住
133－6

C－5住
133－5

C－3住　130－10

C－5住　133－7

C－5住　133－8

C－4住　131－1

C－4住　131－2

C－5住　133－9

C－4住　131－3

C－6住　135－1

C－6住　135－2

C－6住　135－3

C－6住　135－4

C－6住　135－5

C－6住
136－1

C－6住136－3

C－6住
135－6

C－6住
135－7

C－6住　135－8

C－6住　136－2

C－6住　136－4

C－6住　135－9

第86図版

C－7住
138－1

C－7住　138－2

C－7住　138－3

C－7住　139－1

C－7住
138－4

C－7住　138－5

C－7住
139－2

C－7住　140－2

C－7住　139－3

C－7住　140－3

C－7住　140－1

D－1井　142－1

D－1井　142－2

D－1井　142－3

D－1井
142－4

D－1井　142－5

D－1井　142－6

D－1井　142－7

D－1井　142－8

D－1井　142－9

D－1井　142－10

D－1井
142－11

D－1井　142－12

D－1井　142－13

D－1井　142－14

D－1井　142－15

D－1井　142－16

D－1井　142－17

D－1井　142－18

D－1井　143－1

D－1井　143－2

D－1井　143－3

D－1井　143－4

143－5

143－6

143－7

D－1井　143－12

143
－8

143－9

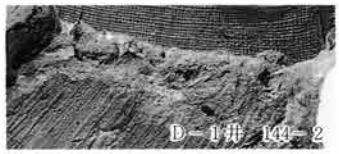
D－1井　143－13

143－11

D－1井　143－10

第88図版

D－1井 144－4



D－1井 145－1

D－1井 144－5

D－1井 145－2

D－1井 145－4

D－1井
145－3

D－1井 145－5

D－1井　145－6

D－1井　146－2

D－1井　146－1

D－1井　146－3

D－1井　146－4

D－1井　146－7

D－1井　146－6

D－1井　146－5

D－1井　147－1

D－1井　147－2

D－1井
147－3

D－1井
147－4

第90図版

D－1井　147－5

D－1井　147－6

D－1井　148－1

D－1井　148－2

D－1井
148－3

D－1井　148－4

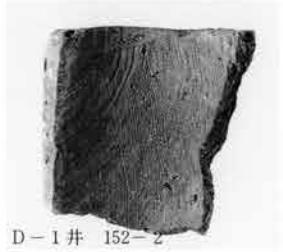
D－1井　149－1

D－1井　149－2

D－1井　149－4

D－1井　149－3

D－1井　149－5


D－1井　152－2

D－1井　150－1

D－1井　152－3

D－1井　150－2

D－1井　153－2

D－1井　150－3

D－1井　150－4

D－1井　153－4

D－1井　151－1

第92図版

D－1井　151－2

D－1井　154－5

D－1井　154－2

D－1井　153－1

D－1井　154－3

D－1井　153－3

D－1井　154－4

D－1井　154－1

D－1井　155－2

D－1井　152－1

D－1井　155－1

D－1井　155－3

第94図版

D－1井　156－1

D－1井　156－2

D－1井　156－3

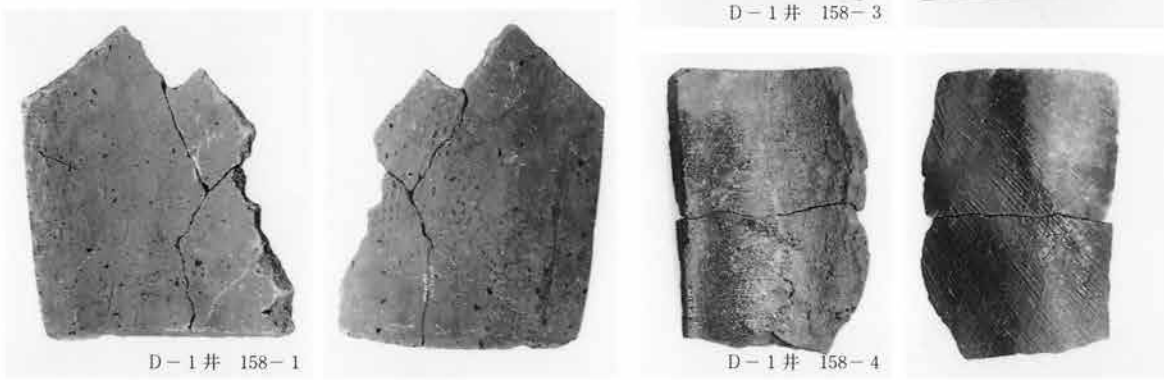
D－1井　157－1

D－1井　157－2

D－1井　158－2

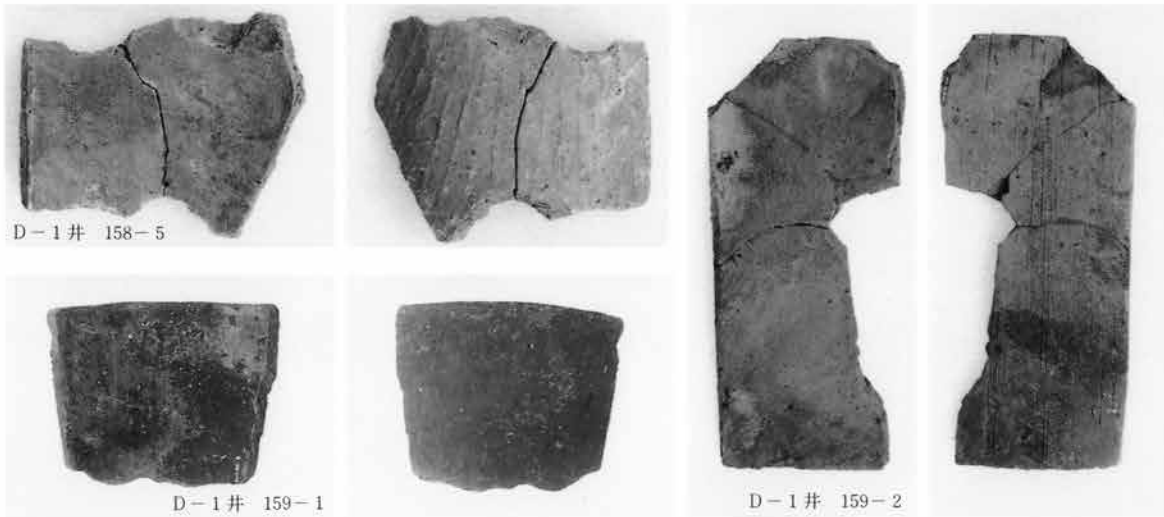
D－1井　157－3

D－1井　158－3



D－1井　158－1

D－1井　158－4



D－1井　158－5

D－1井　159－1

D－1井　159－2

第96図版

D－1井　159－3

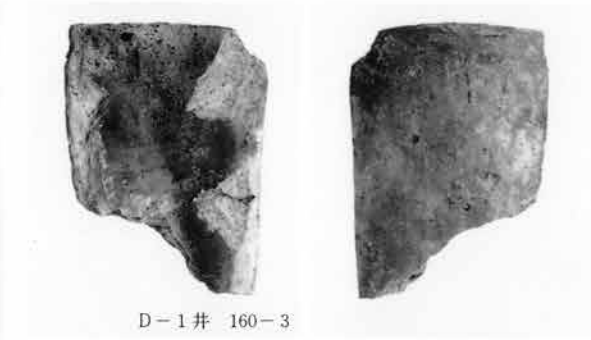
D－1井　159－6

D－1井　159－5

D－1井159－4

D－1井　159－7

D－1井　160－1



D－1井　160－3

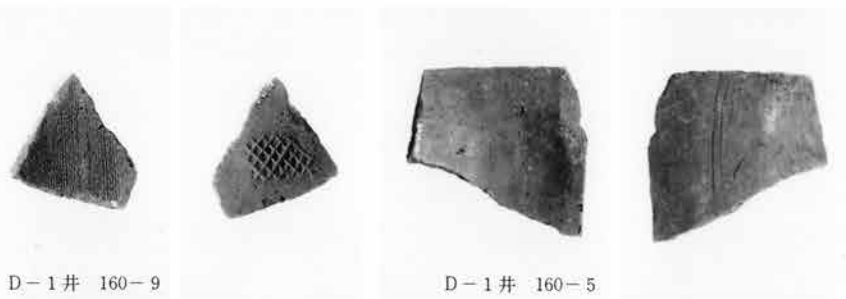
160－2

D－1井　160－6

D－1井　160－4

160－7

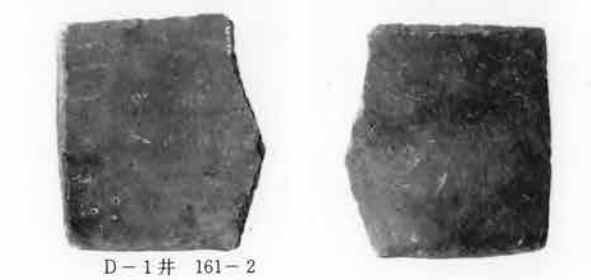
160－8



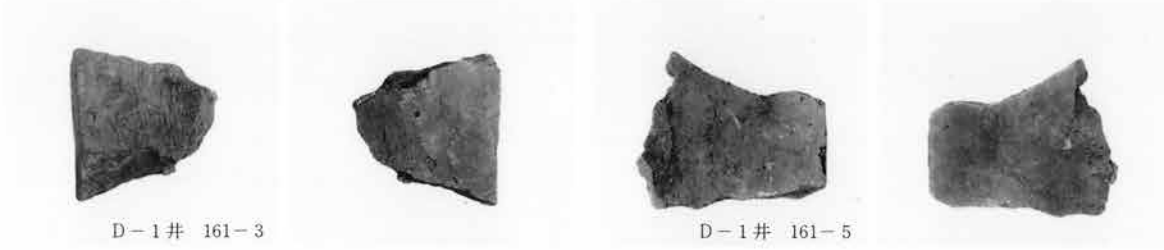
D－1井　160－9

D－1井　160－5

D－1井　161－1

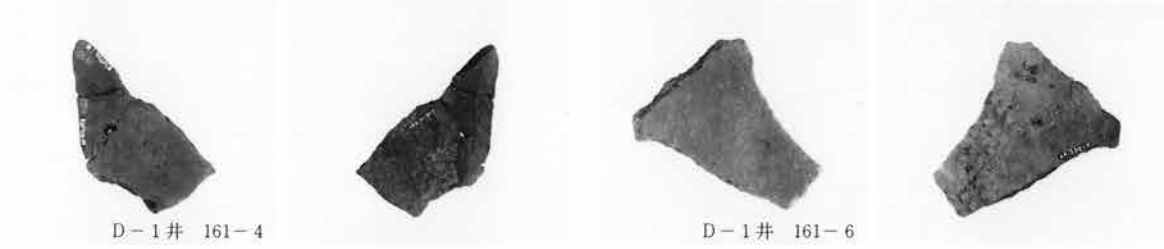


D－1井　161－2



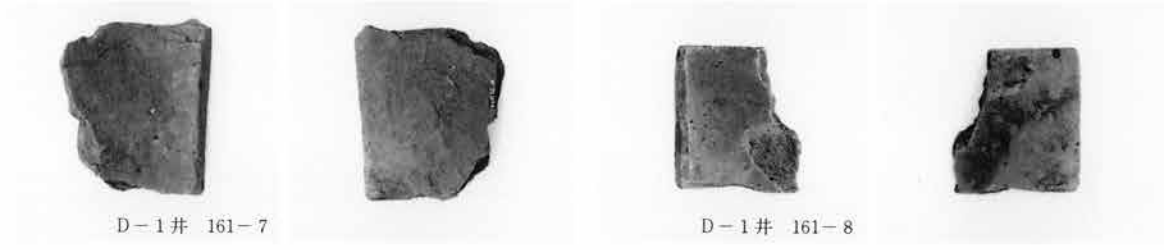
D－1井　161－3

D－1井　161－5



D－1井　161－4

D－1井　161－6



D－1井　161－7

D－1井　161－8

D－3井　164－1

D－3井　164－2

D－3井
164－4

D－3井　164－3

D－3井
165－1

D－3井　164－5

D－3井　164－6

D－3井　165－2

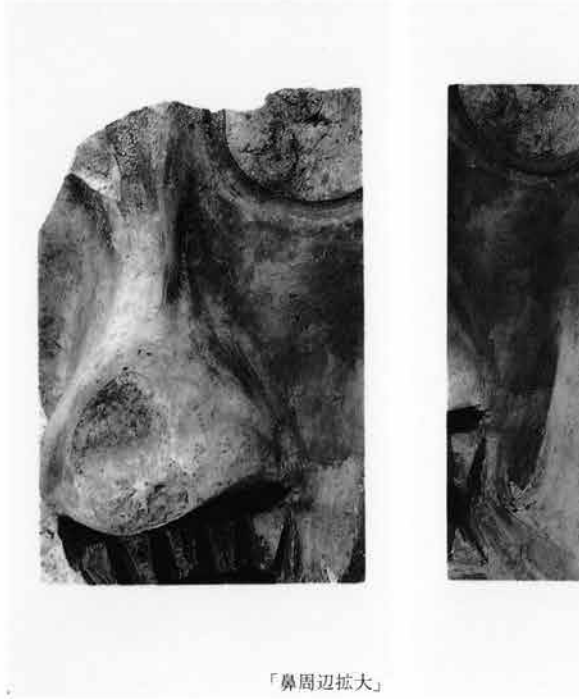
D－3井　165－3

第98図版

D－1井　162－1

「目周辺拡大」

「歯牙周辺拡大」



「鼻周辺拡大」

「頬周辺拡大」

「背面拡大」

D－15坑　169－1

D－27坑　169－4

D－29坑　169－6

D－20坑　169－2

D－20坑　169－3

D－29坑　169－7

D－40坑　169－8

D－27坑　169－5

D－40坑　170－1

D－42坑　170－2

D－63坑　170－5

D－56坑　170－3

D－65坑　170－12

D－65坑　170－9

D－63坑　170－7

D－63坑　170－8

D－63坑　170－6

D－59坑　170－4

D－65坑　170－10

D－67坑　170－13

D－67坑　170－14

D－65坑　170－11

D－75坑　170－22

D－67坑　170－15

D－69坑　170－18

D－75坑
170－20

D－67坑　170－16

D－73坑　170－19

D－75坑　170－21

D－67坑　170－17

第100図版

D－76坑　171－1

D－76坑　171－3

D－76坑　171－4

D－76坑　171－5

D－232坑　171－9

D－76坑　171－2

D－232坑　171－10

D－76坑　171－6

C－6坑
171－12

D－236坑　171－11

D－100坑　171－7

C－6坑　171－14

C－6坑　171－13

D－229坑　171－8

C－17坑　171－16

C－11坑　171－15

C－21坑　172－4

C－17坑 171－17

C－17坑　171－18

C－17坑　171－19

C－17坑　172－1

C－20坑　172－2

C－20坑　172－3

C－27坑
172－5

C－31坑　172－6

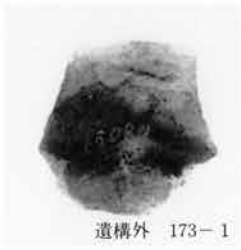
C－48坑　172－7

C－48坑
172－8

C－53坑　172－10

C－21坑　172－9

C－53坑　172－11


遺構外　173－1

遺構外
173－3

遺構外　173－4

遺構外　173－2

遺構外　173－9

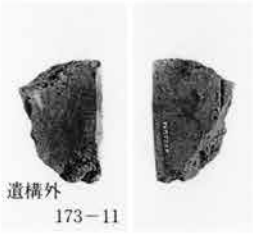
遺構外　173－5

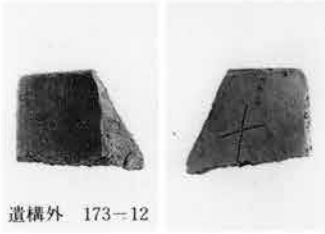
遺構外　173－6

遺構外　173－10

遺構外　173－7

遺構外　173－8


遺構外
173－11


遺構外　173－12

遺構外　173－14

遺構外　173－13

遺構外　173－15

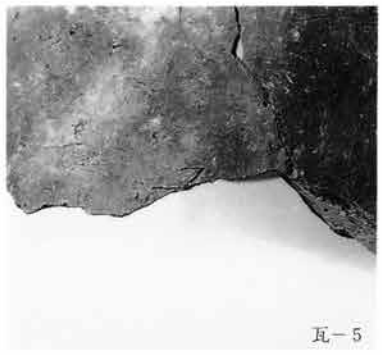
Ⅱ－1

Ⅱ－2

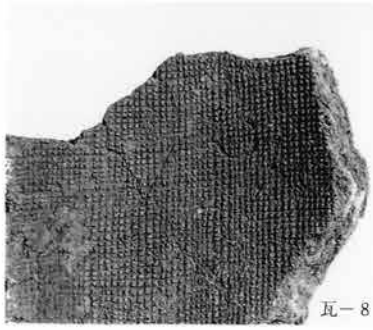
Ⅱ－3

第102図版

瓦－4


瓦－5

瓦－7


瓦－8

瓦－9

瓦－10

瓦－11

瓦－12

瓦－13

瓦－14

瓦－15

瓦－16

瓦－17

瓦－18

瓦－19

瓦－20

瓦－21

瓦－22

瓦－25

瓦－26

瓦－27

瓦－28

瓦－29

瓦－30

瓦－31

瓦－32

瓦－33

瓦－35

瓦－36

第104図版

瓦－34

瓦－37

瓦－38

瓦－40

瓦－39

瓦－41

瓦－44

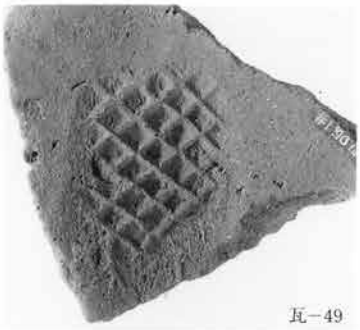
瓦－45

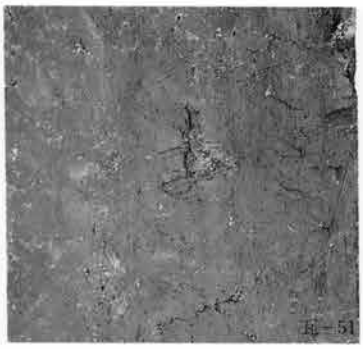
瓦－42

瓦－46

瓦－47

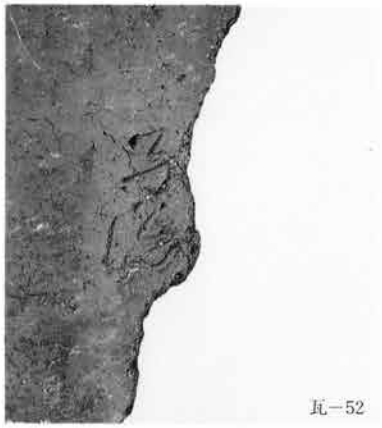
瓦－48


瓦－49


瓦－51

瓦－50

瓦－54


瓦－52

瓦－53

瓦－56

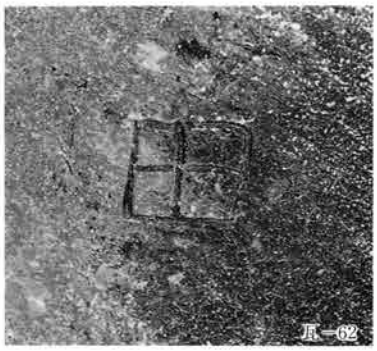
瓦－57

瓦－59

瓦－60

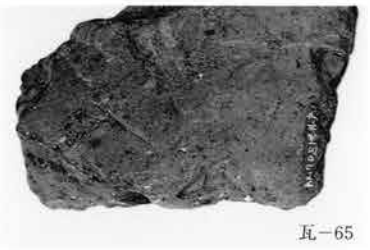
瓦－61

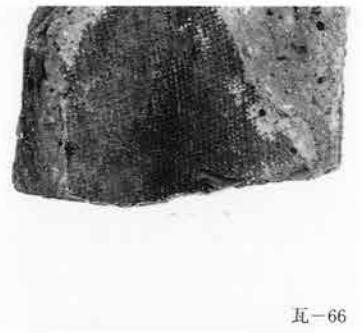
第106図版


瓦－62

瓦－63

瓦－64


瓦－65


瓦－66

瓦－67

瓦－68

瓦－70

瓦－71

瓦－69

瓦－72

瓦－73

瓦－74

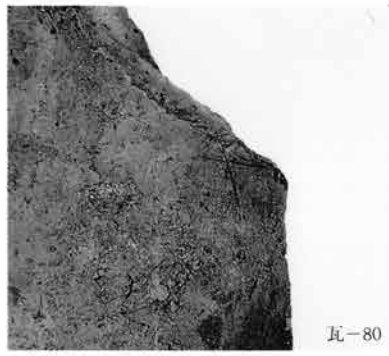
瓦－75

瓦－76

瓦－77

瓦－78

瓦－79

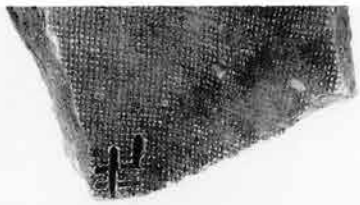

瓦－80

瓦－81

瓦－82

瓦－83

瓦－85


瓦－86

瓦－87

瓦－88

瓦－89

瓦－90

瓦－91

瓦－92

遺構外

D－26住　86－12

D－6住　31－2

第108図版

H－1住　193－2

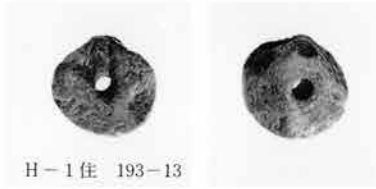
H－1住　193－3

H－1住　193－8

H－1住　193－10

H－1住　193－11

H－1住　193－12



H－1住　193－13

H－2住　195－1

H－2住　195－2

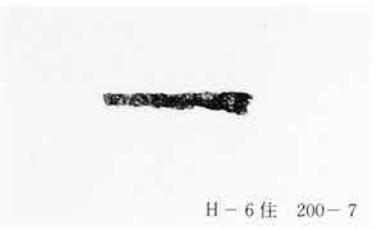
H－2住　195－4

H－2住　195－7

H－2住　195－9

H－4住　197－1

H－6住　199－1



H－6住　200－7

H－6住　200－5

H－8住　203－2

H－38住　203－8

H－9住　206－12

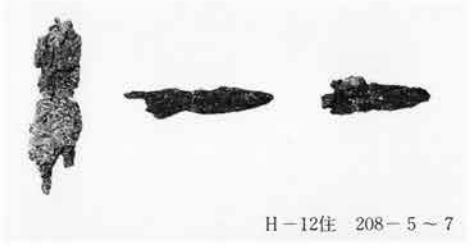
H－9住　206－1

H－9住　206－3

H－9住　207－1

H－12住　208－1

H－9住　206－7



H－12住　208－5～7

H－35住　209－1

H－36住　210－2

H－39住　212－2～4

H－39住　211－5

H－39住　212－5

第110図版

H－39住　211－6

H－39住　211－8

H－39住　212－1

H－41址　213－1

H－41址　213－2

H－43住　216－2

H－44住　218－2

H－43住　216－1

H－46住　220－1

H－44住　217－1

H－46住　221－3

H－46住　221－1

H－46住　220－3

H－46住　222－1

H－47住　224－1

H－47住　224

H－53住　227－2

H－53住　226－3

H－53住　227－3

H－53住　227－4

H－53住　227－5

H－53住　226－1

H－53住　227－1

H－54住　229－10

H－54住　229－11

H－54住　229－12

H－54住　229－9

H－54住　229－15

H－54住　229－5

H－54住　229－3

H－61住　233－1

H－61住　233－2

H－61住　232－1

H－61住　232－2

第112図版

H－61住　232－3

H－61住　233－3･4

H－62住　234－1

H－62住　234－2

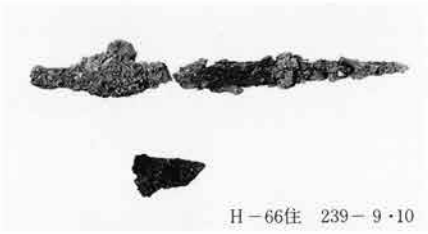
H－62住　235－1

H－65住　237－4

H－66住　239－3

H－66住　238－2

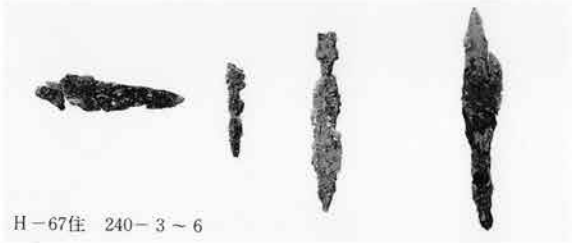
H－66住　239－4


H－66住　239－9･10

H－66住　239－11

H－63住　236－1

H－66住　239－5


H－67住　240－3～6

H－68住　242－2

H－68住　242－3

H－68住　242－5

H－68住　242－7

H－68住　243－2

H－68住　243－3

H－69住　244－1

H－71住　245－1

H－69住　244－4

H－71住　246－3

H－71住　246－1

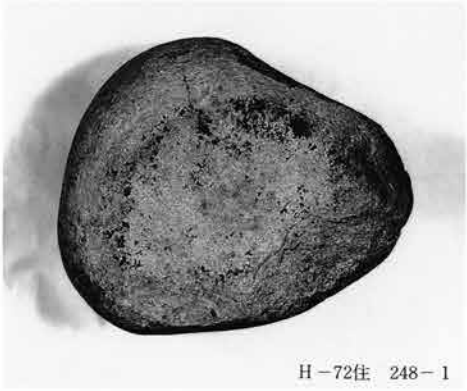
H－72住　247－2

H－73住　249－1

H－72住　247－4

H－72住　247－3

H－92住　254－2


H－72住　248－1

H－72住　248－2

H－92住　254－3

第114図版

H－92住　254－1

H－97住　256－1

H－97住　255－2

H－97住　255－3

H97住　255－5

H－97住　255－4

H－98住　258－1

H－98住　258－2

H－98住　258－5

H－98住　258－3

H－100住　260－1

H－100住　261－6

H－101住　263－7

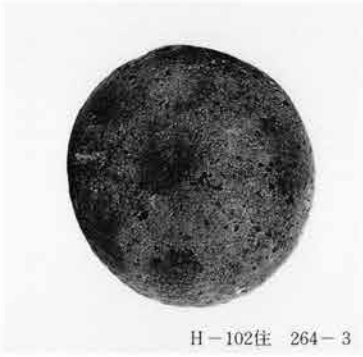
H－101住　263－2

H－100住　260－2

H－100住　260－4

H－100住　261－4・5

H－103住　265－1


H－102住　264－3

H－102住　264－2

H－103住　265－10

H－104住　268－2

H－104住　268－3

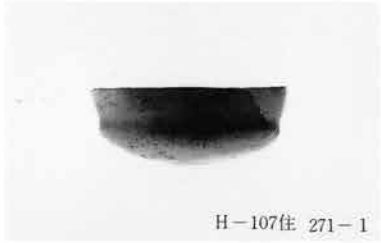
H－104住　268－4

H－104住　268－5

H－104住　267－1

H－106住　270－3

H－105住　269－1


H－107住　271－1

H－109住　273－3

H－112住　275－1

H－108住　272－1

H－112住　275－2

H－112住　275－5

H－112住　275－3

第116図版

H－112住　275－4

H－116住　278－3

H－116住　278－2

H－116住　277－1

H－116住　277－2

H－116住　277－7

H－116住　277－3

H－116住　277－4

H－116住　277－5

H－117住　280－1

H－117住　280－6

H－117住　280－4

H－118住　281－2

H－117住　280－7

H－118住　281－5

H－118住　282－2・3

H－118住　281－3

H－117住　280－8

H－118－住　281－4

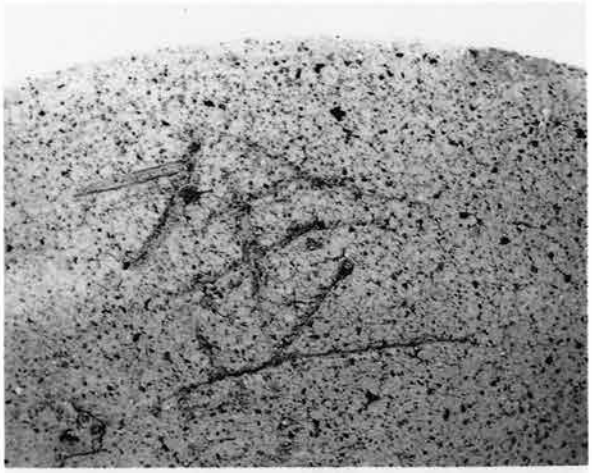
H－118住　282－5

H－118住 282－11

H－118住　282－6

H－118住　282－7

H－118住　282－8


H－118住　281－1

H－118住　282－10

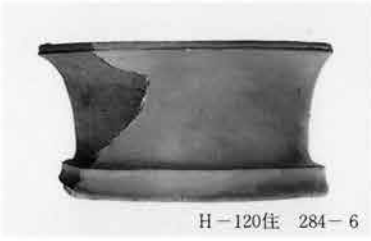
H－118住　282－9

H－120住　284－1

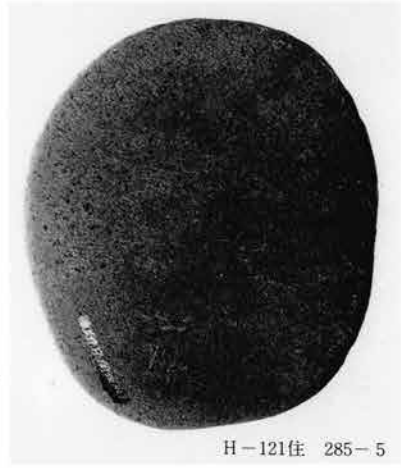
H－120住　284－3

H－120住　284－5

H－120住　284－4


H－120住　284－6

H－121住　285－2


H－121住　285－5

第118図版

H－123住　287－2

H－123住　287－3

H－123住　287－4

H－123住　287－5

H－123住　287－6

H－123住　288－1

H－123住　288－2

H－123住　288－3

H－123住　288－4

H－123住　288－10

H－123住　288－12

H－123住　288－18

H－123住　288－19

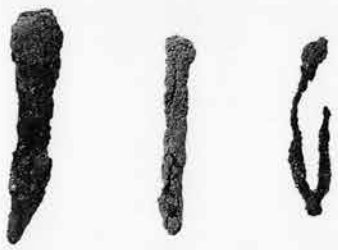
H－123住　288－17

H－123住　289－4

H－123住　289－2

H－123住　289－1

H－123住　289－5



H－123住　289－8～10

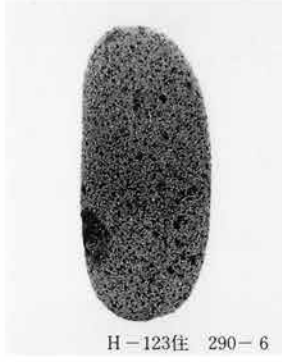
H－123住　290－1

H－123住　290－2

H－123住　290－3

H－123住　290－4

H－123住　290－5


H－123住　290－6

H－123住　290－7

H－123住　290－10

H－123住　290－8

H－123住　290－11

H－123住　290－12

H－123住　290－13

H－123住　290－9

H－149住　292－5

H－127住　296－6

H－127住　296－7

H－127住　294－1

第120図版

H－160住　290－14

H－124住　292－4

H－149住　291－1

H－124住　291－2

H－125住　293－1

H－125住　293－2

H－127住 296－2

H－128住　298－3

H－128住　299－1

H－128住　298－2

H－128住　299－3

H－130住　301－4

H－128住　298－7

H－130住　301－5

H－132住　303－1

H－132住　303－2

H－132住　303－3

H－132住　304－3

H－132住　304－2

H－132住　304－6～9

H－132住 304－10

H－132住　304－12

H－132住　304－11

H－133住　305－3

H－135住　307－11

H－135住
307－8

H－135住　306－2

H－137住　309－1

H－137住　309－3

H－135住　307－7

H－137住　309－6

H－137住　310－9

H－137住　310－14

H－137住　311－14

H－137住　311－9

H－137住　311－11

H－137住　309－4

H－138住　313－3

第122図版

H－137住　310－11

H－137住　310－12

H－137住　310－10

H－137住　311－10

H－137住　311－1

H－137住　311－2

H－137住　311－3

H－137住　311－4

H－137住　311－5

H－137住　311－6

H－137住　311－7

H－137住　311－8

H－137住　310－13

H－137住　311－12

H－137住　311－13

H－138住　314－4

H－138住　314－5

H－138住　314－6

H－138住　314－7

H－138住　313－4

H－138住　313－5

H－137住　311－16

H－138住　313－6

H－138住　313－7

H－140住　316－2

H－140住　316－1

H－140住　316－7

H－140住　317－1

H－140住　317－2

H－140住　317－4

H－140住　317－5

H－140住　317－3

H－140住　317－7

第124図版

H－141住　318－1

H－141住　318－2

H－142住　319－1

H－141住　318－3

H－142住　319－8

H－143住　320－1

H－143住　320－2

H－144住　321－6

H－144住　321－1

H－144住　321－7

H－145住　322－2

H－145住　322－1

H－146住　323－3

H－146住　323－2

H－146住　323－5

H－146住　323－6

H－146住　323－7

H－146住　324－11

H－146住　324－12

H－146住　324－15

H－146住　324－8

H－146住　324－9

H－146住　324－10

H－147住　327－4

H－147住　326－6

H－147住　326－1

H－147住　326－2

H－147住　326－3

H－147住　326－8

H－147住　327－1

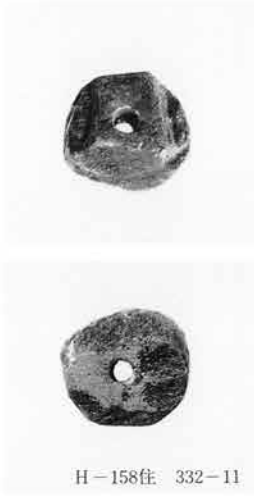
H－147住　326－7

H－147住　327－3

第126図版

H－156住　329－2

H－157住　330－1



H－158住　332－11

H－158住　331－2

H－157住　330－2

H－158住　331－6

H－158住　331－9

H－158住　331－3

H－158住　331－11

H－158住　331－7

H－158住　331－8

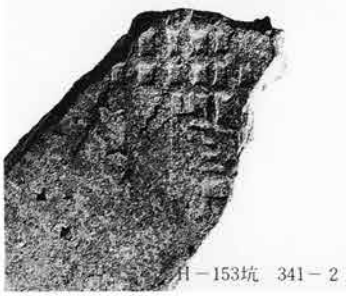
H－158住　332－9

H－159住　333－1

H－158住　332－10

H－132坑　338－1

H－140坑　339－4



H－153坑　341－2

H－140坑　339－5

H－159坑　341－3

H－4 井戸　343－3

H－4 井戸　343－5

H－4 井戸　343－6

H－4 井戸　344－15

H－4 井戸　344－7

H－4 井戸　345－2

H－4 井戸　345－1

H－5 井戸　348－1

H－5 井戸　348－2

H－5 井戸　348－3

H－5 井戸　348－4

H－5 井戸　348－5

H－5 井戸　348－7

H－5 井戸　348－8

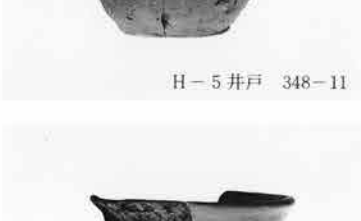
H－5 井戸　348－9

H－5 井戸　348－10

H－5 井戸　348－11

H－5 井戸　348－12

H－5 井戸　348－13


H－5 井戸　348－14

H－5 井戸　348－15

H－5 井戸　348－16

第128図版

H－5 井戸　348－17

H－5 井戸　348－18

H－5 井戸　349－4

H－5 井戸　349－5

H－5 井戸　349－6

H－5 井戸　349－7

H－5 井戸　349－9

H－5 井戸　350－2

H－5 井戸　350－3

H－5 井戸　350－7

H－5 井戸　350－8

H－5 井戸　350－12

H－5 井戸　351－1

H－5 井戸　351－4

H－5 井戸　350－15

H－5 井戸　352－10

H－5 井戸　352－9

H－5 井戸　350－5

H－5 井戸　352－6

H－5 井戸　352－7

H－5 井戸　352－8

H－5井戸　353－1

H－5井戸　353－2

H－5井戸　353－3

H－5井戸　353－4

H－5井戸　353－5

H－5井戸　353－6

H－5井戸　354－2

H－5井戸　353－7

H－5井戸　354－3

H－5井戸　355－1

H－5井戸　354－5

第130図版

H－5 井戸　354－6

H－5 井戸　354－8

H－5 井戸　354－7

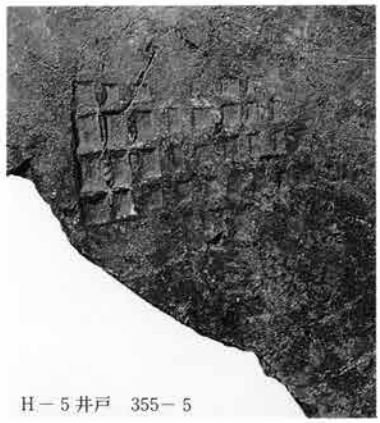
H－5 井戸　354－4

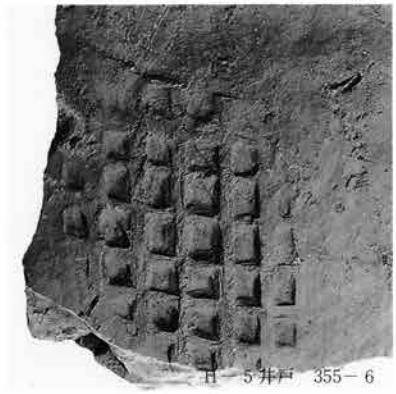
H－5 井戸　355－2

H－5 井戸　355－3

H－5 井戸　355－4

H－5 井戸　355－7


H－5 井戸　355－5


H－5 井戸　355－6

H－5 井戸　356－1

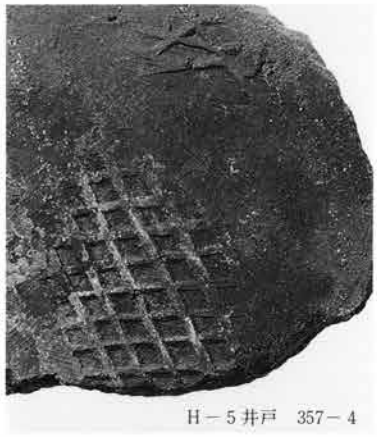
H－5 井戸　356－3

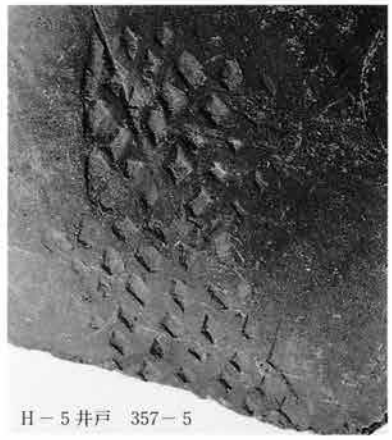
H－5井戸　356－5

H－5井戸　356－6

H－5井戸　357－2

H－5井戸　357－3


H－5井戸　357－4


H－5井戸　357－5

H－5井戸　357－6

H－5井戸　358－1

H－5井戸　358－2

H－5井戸　359－1

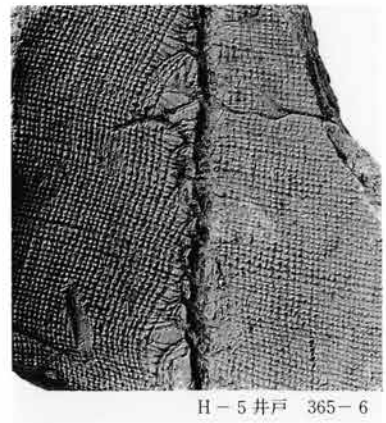
第132図版

H－5井戸　360－9

H－5井戸　362－7

H－5井戸　360－6

H－5井戸　360－4



H－5井戸　365－6

H－5井戸　359－5

H－5井戸　365－1

H－13溝　368－9

H－13溝　368－10

H－13溝　368－12

H－遺構外　370－11

H－13溝　368－16

H－遺構外　370－12

H－遺構外　370－3

H－遺構外　370－1

H－遺構外　371－8

H－遺構外　371－9

H－遺構外　371－13

H－遺構外　371－11

H－遺構外　370－9

H－遺構外　370－5

H－遺構外　372－3

第134図版

H－遺構外　372－4

H－遺構外　372－6

H－遺構外　372－7

H－遺構外　372－8

H－遺構外　372－9

H－遺構外　372－10

H－遺構外　372－11

H－遺構外　372－5

追補　375－1

追補　376－1

追補　376－2

追補　375－2

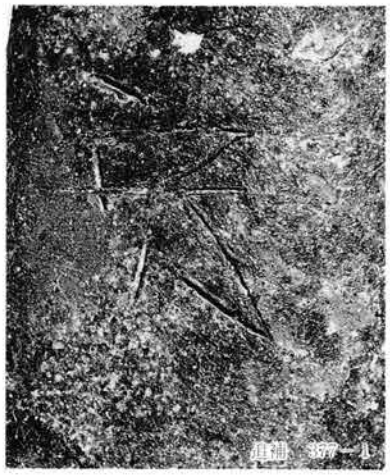
第136図版

追補　376－5

追補　376－3

追補　377－1

追補　376－4



追補　377－1

追補　378－2

追補　378－3

追補　378－4

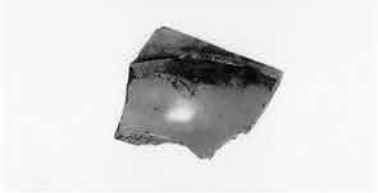
追補　379－1

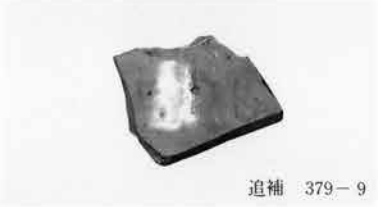
追補　378－1

追補　379－2

追補　379－7

追補　379－8





追補　379－9

追補　379－10

追補　379－11

追補　379－12

追補　379－13

追補　380－2

第138図版

追補　380－1

追補　380－8

追補　380－3

追補　380－5

追補　380－6

追補　380－7

追補　380－4

追補　381－7

追補　380－10

追補　381－1

追補　381－2

追補　381－3

追補　381－4

追補　381－5

追補　381－6

追補　380－9

追補　381－8

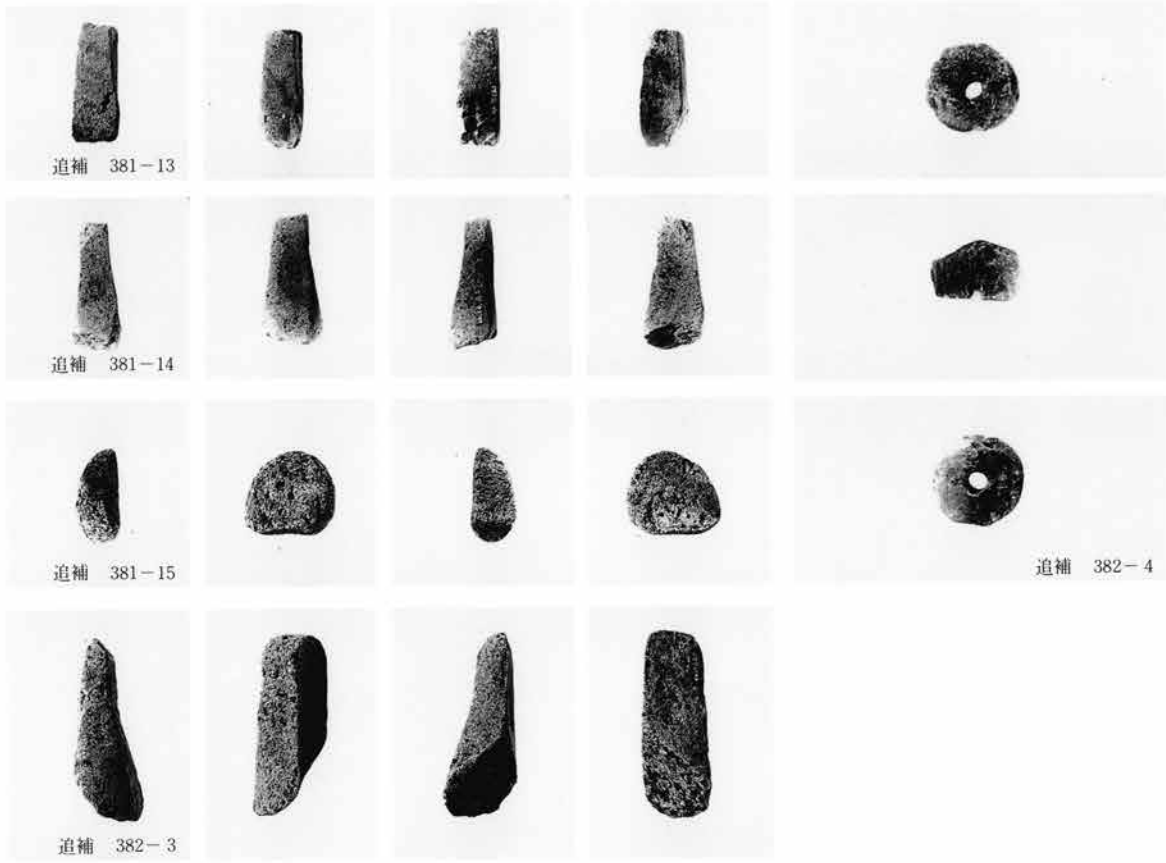
追補　381－9

追補　381－10

追補　381－11

追補　381－12

第140図版



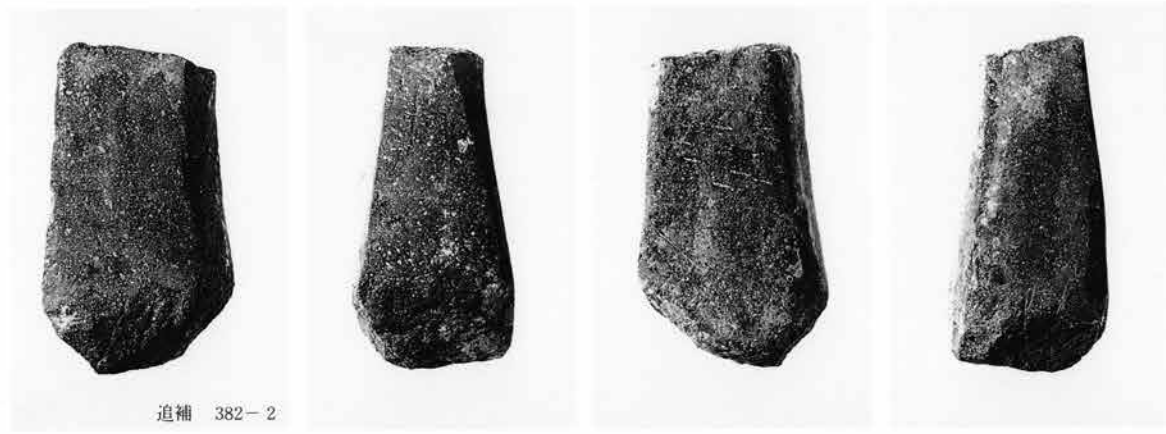
追補　381－13

追補　381－14

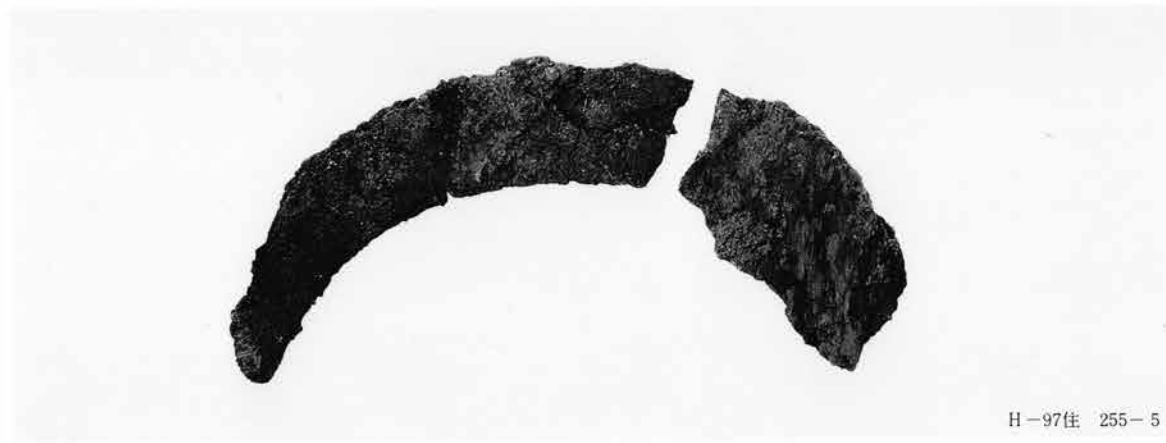
追補　381－15

追補　382－4

追補　382－3



追補　382－2



H－97住　255－5

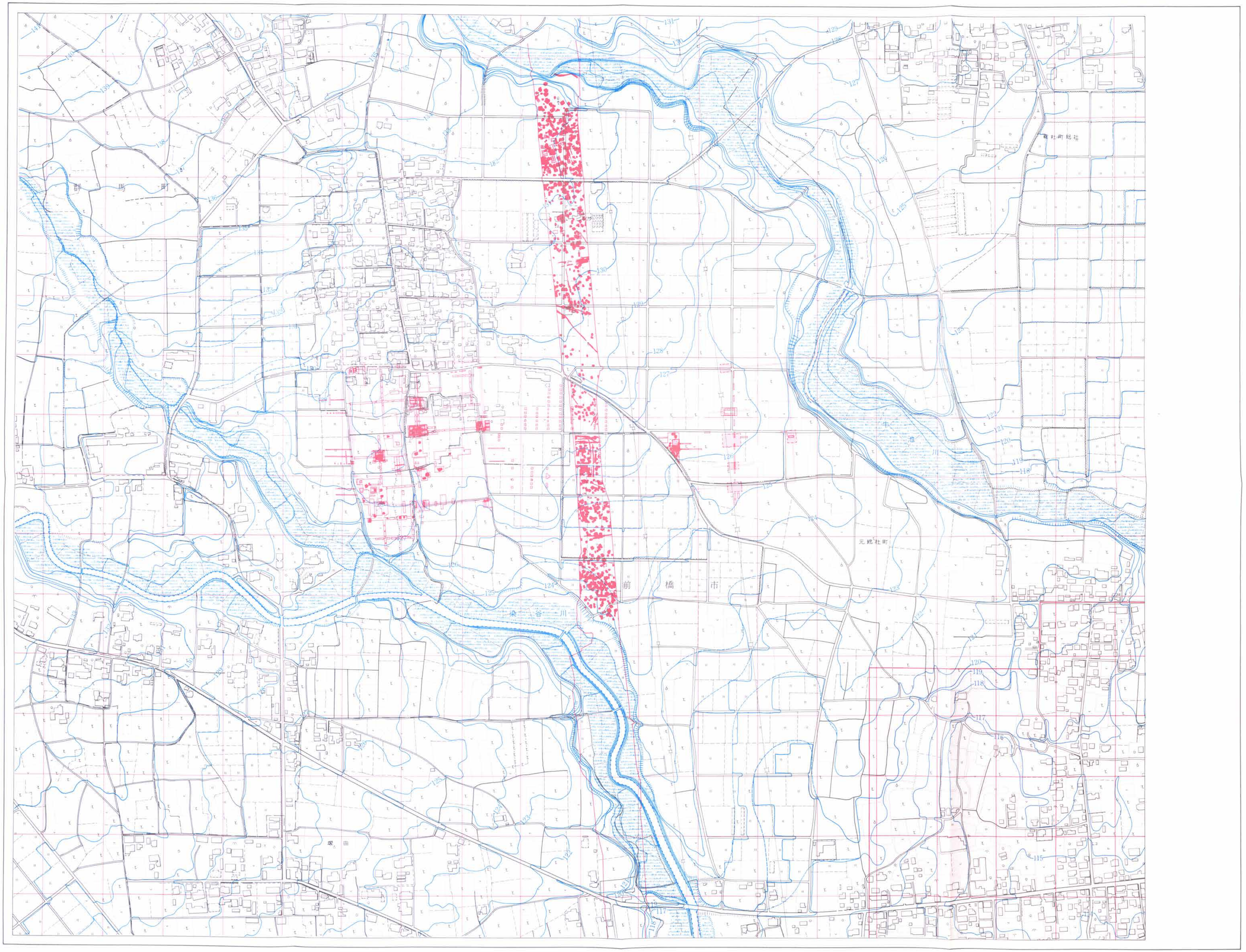
上野国分僧寺・
尼寺中間地域(3)
—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第24集—

平成元年３月25日印刷
平成元年３月31日発行

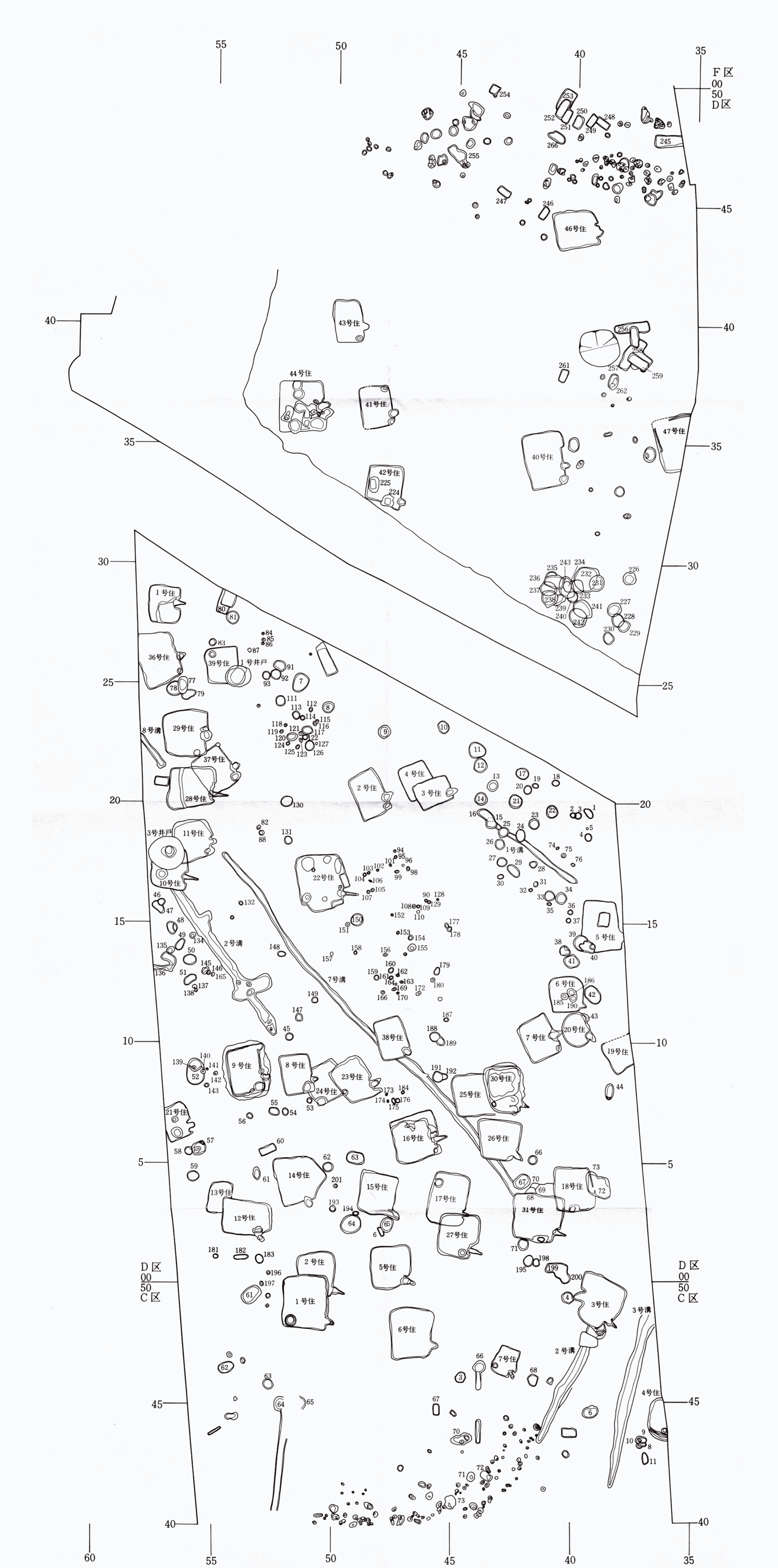
編集／㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橘村下箱田784番地の2
電話(0279)52－２５１１(代表)

発行／群馬県考古資料普及会
勢多郡北橘村下箱田784番地の2
電話(0279)52－２５１１(代表)

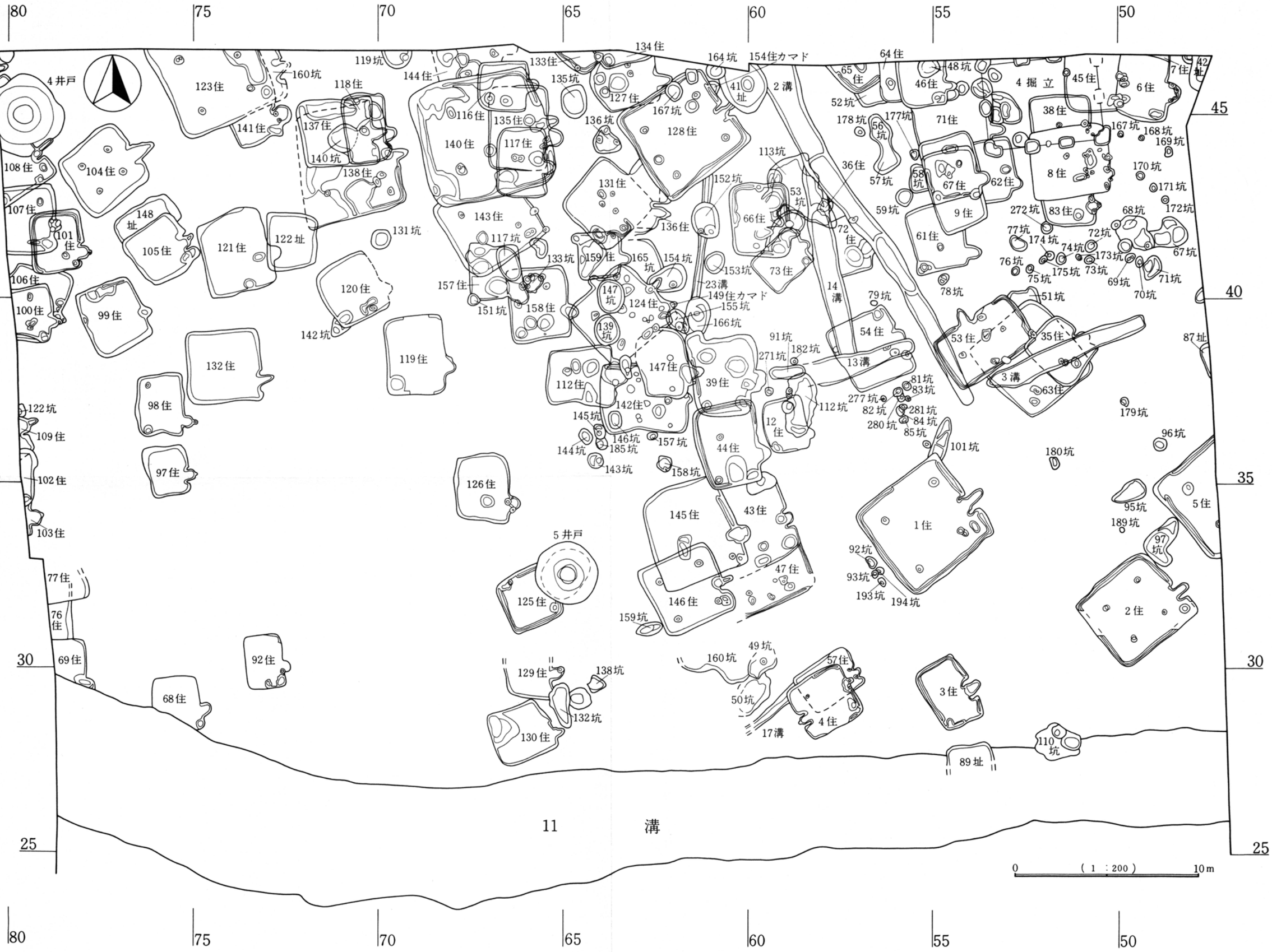
印刷／朝日印刷工業株式会社



付図１　中間地域周辺全体図



付図2　D・C区全体図（1:200）



付図３　H区第11号溝状遺構以北全体図（1:200）